正法眼蔵の現代語訳

法華転法華

【抜粋】

唐の時代の中国の広南東路の韶州の曹谿山の宝林寺の、三十三祖の大鑑禅師の会に、法達と言う僧が来た。
法達は自身を称賛して「私は法華経を既に三千回も読んだ」と話した。
祖師は「たとえ何万回に及んでも、法華経の主旨を会得しないのは、自身の咎(とが)を知るにも及ばない」と話した。
法達は「未だ学ぶべき物が有る人である私は愚鈍で、従来は、ただ、文字に任せて読んでいました。どうして法華経の主旨を明らめる事が私に可能でしょうか？　いいえ！　不可能です！」と話した。
祖師は「あなた、試しに一回、法華経を読んでみなさい。私が、あなたのために法華経を解説しましょう」と話した。
法達は法華経を読んだ。
法華経の方便品に至って、祖師は次のように話した。
「法華経の方便品に留まりなさい。
法華経は本(もと)より、ある『因縁』、『理由』による、この世への諸仏(、神の人)の出現を主旨としている。
法華経では、たとえ多くの例えを説いていても、主旨を超える事は無い。
この世への諸仏(、神の人)の出現の『因縁』、『理由』は、何かと言うと、唯一の一大事のためである。
唯一の一大事とは、仏の知見(、神の知見)である。

唯一の一大事とは、仏の知見(、神の知見)を開かせ、示し、悟らせ、入れさせる事である。
仏の知見(、神の知見)を開き、示されたと気づき、悟り、入る事、自体が、仏の知見(、神の知見)である。
既に仏の知見(、神の知見)を持っている人は、既に仏(、神の人)である。
あなたは今、まさに信じなさい。
仏の知見(、神の知見)とは、ただ、(仏、神の人である、)あなたの自らの心である」

さらに、祖師は詩で次のように話した。
「心が迷えば法華経の主旨に転じられ、心を悟れば法華経の主旨を転じる。
法華経を読む事を久しくしても、自己を明らめなければ、正義に対する敵に成ってしまう。
正義を無意識的に意識する事は正しい。
(いつまでも)正義を意識的に意識する事は誤りである。
意識の有無を共に計らなければ、白い牛の牛車を長く御する事に成ってしまう」

法達は詩を聞いて祖師に次のように尋ねた。
「法華経には『諸々の大いなる声聞と菩薩の段階の人達が皆、思いを尽くして推測しても、仏の知(、神の知)を量る事はできない』と記されています。
今、祖師は、凡人に、ただ自らの心を悟らせるのを仏の知見(、神の知見)と名づけました。
上等な素質の人でなければ疑い、悪口を言う事を避け難いです。
また、法華経で『三つの車』の例えを説いていますが、『大牛車』と『白牛車』には、どのような区別が有るのでしょうか?

どうか和尚様、再び解説してください」
　祖師は次のように話した。
「法華経の意味は明らかである。
あなたは、自ら迷い、背を向けている。
諸々の『三つの乗り物』の段階の人達が仏の知(、神の知)を量る事ができない憂いの原因は度量に有る。
たとえ諸々の『三つの乗り物』の段階の人達が思いを尽くして共に推測しても、遥か遠くの天に懸かっている月のような仏の知(、神の知)には到達できない。
仏(、神の人)は本より凡人の為にのみ説き、仏(、神)の為には説かない。
仏(、神の人)は凡人の為にのみ説いている理を信じる事を否定して退いても、『白牛車』に座りながら更に門の外で『三つの車』を求めるような事であると知らない。
法華経の言葉は明らかに、あなたに向かって『(唯一)無二また無三である』と話している。
あなたは、どうして悟らないのですか?
『三つの車』は仮である。
なぜなら、仏の知見(、神の知見)を持つ前だったからである。
『唯一の乗り物』は実である。
なぜなら、今、仏の知見(、神の知見)を持っているからである。
ただ、あなたは、仮の物を過去の物とし、実に帰りなさい。
実に帰れば、実とは名ではない(、存在するものである)。
知りなさい。
存在するものは皆、珍しい宝であり、全て、あなたの物である。

存在するものは、あなたが受用する物である。
さらに、存在するものは父である仏(、父である神)の物である、と思わなくても良い。
また、存在するものは仏の子(、神の子)の物である、と思わなくても良い。
また、存在するものを受用しようと思わなくても受用している。
そして、『存在するもの』を『法華経』と名づけている。
長い時間である劫から劫へ至っても、昼から夜へ至っても、手で法華経を開かなくても、『法華経』と名づけている『存在するもの』の意味を読み取って念頭に置かなくても良い時は無い」
法達は、啓発を受け、心踊り歓喜し、詩を捧げて称賛して、次のように話した。
「法華経を三千回も読んだが、曹谿山の祖師の一つの詩で忘却した。
この世へ諸仏(、神の人)が出現した主旨を未だ明らめなければ、どうして生を重ねる狂気を止める事ができるであろうか？　いいえ！　できない！
法華経の『羊の車、鹿の車、牛の車』の例えは仮に設けられている。
法華経の『最初も中間も最後も善い』という言葉をかかげる。
法華経の『火事の家』の中は、元より、法の中の王である、と誰が知っているであろうか？」
法達が捧げた詩を聞いて、祖師は「あなたは、今から『法華経の意味を読み取って念頭に置く僧』、『念経僧』と名乗りなさい」と話した。

【全文】

十方の仏土中は法華だけが存在する。

十方の過去、現在、未来の一切の諸仏、無上普遍正覚者達は、法華を転じたり、法華に転じられたりする。

全ての正しい者は本より菩薩の道を行っている、不退転である。

諸仏の知は、甚深無量であり、理解し難く入り難い、安らかな詳らかな三昧である。

文殊師利仏としては、大海である仏土である、仏と仏だけが能く究め尽せる、ありのままの相である。

釈迦牟尼仏としては、私だけが、ありのままの相を知っていて、十方の仏もまた、そうである。そのため、諸仏は一大事のために「この世」に出現する、のである。そして、私および十方の仏は、能く、この事を知っていると、全ての生者に悟りを開かせ示し入れさせたいと欲する、一時である。

普賢菩薩としては、不思議な功徳である法華に転じられる事を成就して、深大久遠である無上普遍正覚をこの世に流布させて、「三草二木」と「大小諸樹」に例えられる修行者を能く生ずる地であり、能く潤す雨である。

法華に転じられる事を、知る事が不能な所で、行い尽くして成就するのみである。

普賢菩薩の流布が未だ終わらないうちに、霊山の大いなる会が来る。

普賢菩薩は往来し、釈迦牟尼仏は普賢菩薩の往来を白毫光相で証する。

釈迦牟尼仏の会が未だ半ばに無いのに、文殊師利仏が思惟し忖度して速やかに弥勒菩薩に、成仏を予言される「授記」を教えた事は、法華に転じられたのである。

普賢菩薩、諸仏、文殊師利仏、大いなる会は共に、最初も中間も最後も善い、法華に転じられている、という知見に到達するべきである。

唯一の一乗だけをもって一大事と為すとして、諸仏は、この世に出現するのである。

諸仏の「この世」への出現は一大事であるので、「仏と仏だけが能く究め尽せる、諸法の実の相」と「法華経」に記されているのである。

諸仏が説く法は必ず一仏乗で、必ず、仏だけが仏だけに究め尽させる事ができるのである。

釈迦牟尼仏以外の、過去七仏を含む諸仏は各々、仏から仏へ究め尽させて、釈迦牟尼仏に成就させているのである。

西のインドから東の中国にいたるまで、十方の仏土の中なのである。

三十三祖の大鑑禅師にいたるまでも、究め尽させる、唯一の仏乗という唯一の一乗の法なのである。

ただ、一大事であるのは、必ず、唯一の仏乗である。

今、諸仏は、この世に出現しているのである。

三十四祖の青原の行思の仏の家風は今にまで伝わり、同じく三十四祖の南嶽の懐譲の法門が世に開演しているのは皆、如来の実のままの知見による物である。

実に、仏と仏だけが能く究め尽せるのであり、正統な仏が仏の正統な悟りを開かせ示し入れさせてくれているのである、と法華に転じられるべきである。

これが、「法華経」、「妙法蓮華経」、「妙なる法の蓮華の経」とも呼ばれている、「教菩薩法」、「菩薩を教える法」である。

これを「諸法」、「全てのもの」と呼んで来たので、法華を国土として、
霊山も有るし、虚空も有るし、大海も有るし、大地も有る。
これが、実の相であり、ありのままなのである。
これが、仏の知見である。
これが、この世の相は常に住んでいる、と言うのである。
これが、実のままなのである。
これが、如来の無限の寿命の量である。
これは、甚深無量である。
これが、(常に法華を転じたり法華に転じられたりするという意味で、)
「諸行無常」、「全てのものは変化する」なのである。
これが、法華の三昧である。
これが、釈迦牟尼仏(の教え)である。
これが、法華を転じる事であり、法華に転じられる事である。
これが、「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼を持ち寂滅した妙なる心を持つ事」なのである。
これが、諸仏が身を現して生者を仏土へ渡し終える事である。
成仏を予言される「授記」による、仏に成る事を、保持させられ任せられる事が有り、住んで保持する事が有る。

唐の時代の中国の広南東路の韶州の曹谿山の宝林寺の、三十三祖の大鑑禅師の会に、法達と言う僧が来た。
法達は自身を称賛して「私は法華経を既に三千回も読んだ」と話した。
祖師は「たとえ何万回に及んでも、法華経の主旨を会得しないのは、自身の咎(とが)を知るにも及ばない」と話した。

法達は「未だ学ぶべき物が有る人である私は愚鈍で、従来は、ただ、文字に任せて読んでいました。どうして法華経の主旨を明らめる事が私に可能でしょうか？　いいえ！　不可能です！」と話した。

祖師は「あなた、試しに一回、法華経を読んでみなさい。私が、あなたのために法華経を解説しましょう」と話した。

法達は法華経を読んだ。

法華経の方便品に至って、祖師は次のように話した。

「法華経の方便品に留まりなさい。

法華経は本(もと)より、ある『因縁』、『理由』による、この世への諸仏（、神の人）の出現を主旨としている。

法華経では、たとえ多くの例えを説いていても、主旨を超える事は無い。

この世への諸仏（、神の人）の出現の『因縁』、『理由』は、何かと言うと、唯一の一大事のためである。

唯一の一大事とは、仏の知見（、神の知見）である。

唯一の一大事とは、仏の知見（、神の知見）を開かせ、示し、悟らせ、入れさせる事である。

仏の知見（、神の知見）を開き、示されたと気づき、悟り、入る事、自体が、仏の知見（、神の知見）である。

既に仏の知見（、神の知見）を持っている人は、既に仏（、神の人）である。

あなたは今、まさに信じなさい。

仏の知見（、神の知見）とは、ただ、（仏、神の人である、）あなたの自らの心である」

さらに、祖師は詩で次のように話した。

「心が迷えば法華経の主旨に転じられ、心を悟れば法華経の主旨を転じる。

法華経を読む事を久しくしても、自己を明らめなければ、正義に対する敵に成ってしまう。
正義を無意識的に意識する事は正しい。
(いつまでも)正義を意識的に意識する事は誤りである。
意識の有無を共に計らなければ、白い牛の牛車を長く御する事に成ってしまう」
　法達は詩を聞いて祖師に次のように尋ねた。
「法華経には『諸々の大いなる声聞と菩薩の段階の人達が皆、思いを尽くして推測しても、仏の知(、神の知)を量る事はできない』と記されています。
今、祖師は、凡人に、ただ自らの心を悟らせるのを仏の知見(、神の知見)と名づけました。
上等な素質の人でなければ疑い、悪口を言う事を避け難いです。
また、法華経で『三つの車』の例えを説いていますが、『大牛車』と『白牛車』には、どのような区別が有るのでしょうか?
どうか和尚様、再び解説してください」
　祖師は次のように話した。
「法華経の意味は明らかである。
あなたは、自ら迷い、背を向けている。
諸々の『三つの乗り物』の段階の人達が仏の知(、神の知)を量る事ができない憂いの原因は度量に有る。
たとえ諸々の『三つの乗り物』の段階の人達が思いを尽くして共に推測しても、遥か遠くの天に懸かっている月のような仏の知(、神の知)には到達できない。
仏(、神の人)は本(もと)より凡人の為にのみ説き、仏(、神)の為には説かない。

仏（神の人）は凡人の為にのみ説いている理を信じる事を否定して退いても、『白牛車』に座りながら更に門の外で『三つの車』を求めるような事であると知らない。

法華経の言葉は明らかに、あなたに向かって『(唯一)無二また無三である』と話している。

あなたは、どうして悟らないのですか？

『三つの車』は仮である。

なぜなら、仏の知見（神の知見）を持つ前だったからである。

『唯一の乗り物』は実である。

なぜなら、今、仏の知見（神の知見）を持っているからである。

ただ、あなたは、仮の物を過去の物とし、実に帰りなさい。

実に帰れば、実とは名ではない（存在するものである）。

知りなさい。

存在するものは皆、珍しい宝であり、全て、あなたの物である。

存在するものは、あなたが受用する物である。

さらに、存在するものは父である仏（父である神）の物である、と思わなくても良い。

また、存在するものは仏の子（神の子）の物である、と思わなくても良い。

また、存在するものを受用しようと思わなくても受用している。

そして、『存在するもの』を『法華経』と名づけている。

長い時間である劫から劫へ至っても、昼から夜へ至っても、手で法華経を開かなくても、『法華経』と名づけている『存在するもの』の意味を読み取って念頭に置かなくても良い時は無い」

法達は、啓発を受け、心踊り歓喜し、詩を捧げて称賛して、次のように話した。

「法華経を三千回も読んだが、曹谿山の祖師の一つの詩で忘却した。

この世へ諸仏(、神の人)が出現した主旨を未だ明らめなければ、どうして生を重ねる狂気を止める事ができるであろうか？　いいえ！　できない！

法華経の『羊の車、鹿の車、牛の車』の例えは仮に設けられている。

法華経の『最初も中間も最後も善い』という言葉をかかげる。

法華経の『火事の家』の中は、元より、法の中の王である、と誰が知っているであろうか？」

法達が捧げた詩を聞いて、祖師は「あなたは、今から『法華経の意味を読み取って念頭に置く僧』、『念経僧』と名乗りなさい」と話した。

法達禅師の曹谿山で悟りに参入した因縁は、この様な物であった。

三十三祖の大鑑禅師以降、法華に転じられる事と法華を転じる事の法華は開演しているのである。

三十三祖の大鑑禅師以前には、聞いた事が無い。

実に、仏の知見を明らめられるのは、必ず、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼を持つ」仏祖だけである。

いたずらに砂や石を数えている様な、霊感が無い文字だけの学者は知る事ができない、という事を、今この法達の従来によっても見る事ができる。

法華の正しい主旨を明らめるには、祖師の開示が唯一の一大事の因縁であると、究め尽くすべきである。

祖師以外の他の者に尋ねようとする事なかれ。

今、法華に転じられる、実の相、実の性質、実体、実の力、実の原因、実の結果が、ありのままである事は、三十三祖の大鑑禅師以前には、中国で未だ聞かない所であるし、未だ存在しない所である。

法華に転じられる、というのは、心の迷いである。
心の迷いは法華に転じられる、のである。
その主旨は、心の迷いが、たとえ(森羅)万象の様に多様でも、迷いという、ありのままの相は、法華に転じられる、のである。
心の迷いが法華に転じられる事は、喜ぶべきではなく、待ち望むべきではない。
法華に転じられる事は、得るのではなく、来るのではない。
けれども、法華に転じられるのは(唯一)無二また無三である。
唯一の仏乗だけが存在するため、ありのままの相の法華なので、能く転じたり転じられている所であったり、といえども、唯一の仏乗であり、一大事である。
全くの真心だけが存在するのである。
だから、心の迷いを恨む事なかれ。
あなた達の行っている所は全て菩薩の道であり、全ての正しい者が本より菩薩の道を行っている、のであり、「諸仏を見る」事なのである。
悟りを開き、示されたと気づき、入る事は皆、各々が法華に転じられた事なのである。
「法華経」の「火事の家」で心に迷いが有り、当の門で心に迷いが有り、門の外で心に迷いが有り、門の前で心に迷いが有り、門の内で心に迷いが有る。

心の迷いによって、門の内と外、ないし、当の門や「火事の家」等が形成されて現れるので、「白牛車」の上でも悟りを開き、示されたと気づき、入る事が有るであろう。

この車上の荘厳として悟りに入る事を承知する時、露地に入っている所であると期待してよいのであろうか？　「火事の家」を出ている所であると認めてよいのであろうか？　当の門は経歴として通過する所であるとだけ究め尽くすべきであろうか？

まさに知るべきである、車の中に「火事の家」を悟りとして開かせ示し入れさせて転じる事も有る。

露地に「火事の家」を悟りとして開かせ示し入れさせて転じる事も有る。

当の門の全門を悟りとして開かせ示し入れさせて転じる事も有る。

普門の一門を悟りとして開かせ示し入れさせて転じる事も有る。

悟りを開かせ示し入れさせる各々で、普門を悟りとして開かせ示し入れさせて転じる事も有る。

門の内を悟りとして開かせ示し入れさせて転じる事も有る。

門の外を悟りとして開かせ示し入れさせて転じる事も有る。

「火事の家」で露地を悟りとして開かせ示し入れさせて転じる事も有る。

このため、「火事の家」も単なる煩悩などとして会得するべきではなく、露地も単なる悟りとして理解するべきではない。

法の輪が転じている三界を誰が車として一乗としてよいであろうか？

悟りを開かせ示し入れさせる事を誰が門であるとして出入りしてよいであろうか？

「火事の家」から外へ車を求める様では、どれだけ輪に転じられてしまうであろうか？

露地から「火事の家」を望めば、とても深遠なだけである。
露地で霊山を安穏(あんのん)とさせていると究め尽くすのであろうか？
霊山で露地は平坦であると修行するのであろうか？
全ての生者が遊び楽しんでいる所(である「火事の家」)を「我が清浄な国土は不壊である」と常に存在していて、よいのであろうか？　をも明確に詳細に疑う事を本(もと)より行うべきである。
一心に仏を見る事を欲する者は、自分であると坐禅に参入して究めるのであろうか？　他者であると坐禅に参入して究めるのであろうか？
分身として悟りという道を成就する時が有り、全身として悟りという道を成就する時が有る。
共に「霊鷲山」、「霊山」に出現できたのは、身の命を自ら惜しまない事によってである。
この説法は常に存在するとして悟りを開かせ示し入れさせる事が有る。
方便として「涅槃」、「寂滅」を現して悟りを開かせ示し入れさせる事が有る。
仏は近くに遍在するといえども見えさせないのである。そのため、誰が、心一つ次第で会得できたり会得できないのであると信じるであろうか？
天人が常に充満している所は、釈迦牟尼仏である毘盧遮那の国土である「常寂光土」である。
自然に「四土」という四種類の世界を備えている我々は、唯一普遍絶対の仏土に居るのである。
微小な塵(ちり)を見ている時に、法界を見ていないわけではない、のである。
法界を証している時に、微小な塵(ちり)を証していないわけではない、のである。

諸仏が法界を証している時に、我々を証に存在させていないわけではない、のである。

諸仏の教えは、最初も中間も最後も善いのである。

そのため、今も証の、ありのままの相である。

（「既に仏の知見を持っている人は、既に仏である」という言葉に）驚き疑いを抱き恐れを成すのも、ありのままなのである。

ただ、それは、仏の知見をもって微小な塵を見るのと、仏の知見無しに微小な塵に坐しているのは、異なるだけなのである。

仏の知見をもって法界に坐している時は広くなく、仏の知見無しに微小な塵に坐している時は狭くない理由は、仏の知見を保持させられ任せられなければ坐しているべきではないからであり、仏の知見を保持させられ任せられれば広かったり狭かったりで驚いたり疑いを抱いたりしないからである。

これは、法華の実体、実力を究め尽くしている事によってなのである。

であれば、我々の今の相と性質では、法界で本より行っているとしてよいのであろうか？　微小な塵で本より行っているとするべきであろうか？驚かず疑いを抱かず恐れを成さず、ただ、法華に転じられる事を本より行っているのは、深遠長遠であるばかりである。

微小な塵を見たり、法界を見たりする時に、作為は無く、思い量りも無いのである。

また、作為するにしても、思い量るにしても、法華の所作を習うべきであり、法華の思い量りを習うべきである。

「悟りを開かせ示し入れる」と聞いたら、「諸仏は全ての生者に悟りを開かせ示し入れたいと欲している」と聞いたとするべきである。

仏の知見を開くためには、また、法華に転じられるためには、諸仏が仏の知見を示した通りに習うべきである。

仏の知見を悟るためには、また、法華に転じられるためには、仏の知見に入った時の様に習うべきである。

仏の知見を示されたと気づくためには、また、法華に転じられるためには、仏の知見を悟った時の様に習うべきである。

悟りを開き、示されたと気づき、入る事は、法華に転じられる事であり、各々、究め尽くすための道が有る。

諸仏、如来の知見に到達する事は、広大深遠な、法華に転じられた事による物なのである。

成仏を予言される「授記」は、自分が仏の知見を開いた事による物なのである。

成仏を予言される「授記」や、仏の知見は、他者が授けたわけではないのであり、法華に転じられたのである。

これが、「心が迷えば法華に転じられる」という言葉の主旨なのである。

「心を悟れば法華を転じる」というのは、「法華を転じる」という事である。

法華が我々を転じる力を究め尽くす時に、逆に、自らを転じる、ありのままの力を形成して出現させるのである。

ありのままの力を形成して出現させる事が、法華を転じる事である。

従来の転じられている状態は今も止まない、といえども、逆に、自ら法華を転じるのである。

驢馬（ロバ）の事が未だ終わらないけれども、馬の事が到来するのである。

諸仏が「この世」に出現している一大事の因縁だけが存在するのである。

「法華経」の「従地涌出品」で、地から涌き出た三千大千世界の菩薩達は、久しき法華の大聖尊であるといえども、自らに転じられて地から涌き出たり、他者に転じられて地から涌き出たりしたのである。

ただし、地からだけ涌き出ると知って、法華を転じるべきではない。

虚空からも涌き出ると知って、法華を転じるべきである。

地と虚空からだけではなく、法華からも涌き出るという仏の知を知るべきである。

法華の時は、必ず「法華経」の「父は若く、子は老年である」のである。

子は子であり、父は父である。

しかし、「父は若く、子は老年である」と習うべきである。

この世の大衆の不信心を見習って驚く事なかれ。

この世の大衆が不信心である時は、法華の時である。

一時、仏が「この世」に住んでいたと知って、法華を転じるべきである。

諸仏が悟りを開かせ示し入れさせて、転じられて、菩薩達は地から涌き出たのであり、仏の知見に転じられて菩薩達は地から涌き出たのである。

法華を転じる時、法華が心を悟る事が有り、悟った心が法華を悟る事が有る。

下方と言うのは、空中の事である。

下と空とは、法華を転じている事による物なのである。

仏の寿命の量は無限である。

仏の無限の寿命、法華、法界、一心は、下とも形成されて出現し、空とも形成されて出現すると知って、法華を転じるべきである。

そのため、下方を空（くう）と言うのは、法華を転じている事により形成されて出現しているのである。

この時、法華を転じて「三草」の修行者に成らせる事が有り、法華を転じて「二木」の修行者に成らせる事も有る。

覚が有るはずである、と待ち望むべきではない。

覚が無い、と怪しむべきではない。

自ら転じて無上普遍正覚を発した時は、南方である。

この仏道の成就は、本（もと）より南方で集会している霊山であり、霊山は必ず法華を転じるのである。

虚空で集会している十方の仏土が有り、これは法華を転じる事の分身である。

十方の仏土であると知って、法華を転じていると、一つも微塵も入るべき所が無い。

「色即是空」が法華を転じる事が有り、如来の実のままの相は「この世」から退いたり「この世」に出現する事は無いのである。

「空即是色」が法華を転じる事が有り、如来の実のままの相には「この世」での生死は無いのである。

「如来(の実体)が、この世に存在する」と言うべきではなく、「如来(の実体)が、この世で滅んだ」と言うべきではない、だけではないのである。

如来が私と親友である時は、私も如来と親友なのである。

如来は、親友への礼に勤める事を忘れていないから、髪の中に宝玉をも隠し与えておき、衣の裏に宝玉をも隠し与えておいた時期が、いつなのか、(「最初」からなのか、)よくよく究め尽くすべきである。

仏の前に宝塔が存在する、法華を転じる事が有る。

宝塔の高さは五百由旬である。

宝塔の中に仏が坐禅している、法華を転じる事が有る。

宝塔の広さの量は二百五十由旬である。

地から涌(わ)き出て空(くう)の中に住んで存在する、法華を転じる事が有り、心でも触れられず、色としても触れられない。

空(くう)から涌(わ)き出て地の中に住んで存在する、法華を転じる事が有り、目にも触れて見えるし、身でも触れられる。

宝塔の中に霊山がある。

霊山に宝塔がある。

宝塔は虚空を宝塔にするし、虚空は宝塔を虚空にする。

宝塔の中の古代の仏は座を霊山の仏に並べ、霊山の仏は証を宝塔の中の仏に証する。

霊山の仏が宝塔の中へ証として入るには、霊山の報いとしての依り所である環境と正体である心と身のまま、法華を転じる事に入るのである。

宝塔の中の仏が霊山に涌(わ)き出るには、古代の仏土のまま、肉体が滅んで久しいまま、涌(わ)き出るのである。

涌(わ)き出る事も、転じる事に入る事も、凡人や「二つの乗り物」の段階の人に習わず、法華を転じる事を学ぶべきである。

肉体が滅んで久しい事は、仏の上に備わっている証の荘厳である。

宝塔の中と仏の前、宝塔と虚空は、霊山ではなく、法界ではなく、半分ではなく、全体ではなく、法の位だけに関わっているのではなく、「非思量」、「思い量れないのでは等(など)と思い量らずに思い量る」だけである。

仏の身を現して人のために法を説いたり、この世での身を現して人のために法を説いたりする、法華を転じる事が有る。

(仏が近くで教えてあげたのに、裏切った邪悪な)提婆達多(デーヴァダッタ)を現在は形成している、法華を転じる事が有る。

法華経を説く前に、退席するのもまた善い連中を現在は形成している、法華を転じる事が有る。

仏が法華経を説くのを合掌し仰ぎ見て聞いて待つ時間は、必ず六十小劫であると思い量る事なかれ。

一心に待つ量を要約して、無量劫と言っていても、仏の知を測り知る事は不可能である。

待っている一心を、どれだけの、仏の知の量とすればよいのであろうか？

法華を転じる事とは、全ての正しい者が本(もと)より菩薩の道を行(おこな)っている事だけであると認める事なかれ。

「法華経」が説かれている一座の所で「今日、如来は大乗を説く」と記されている、法華を転じる功徳が有るのである。

法華が今でも法華である事は、覚できず知る事ができないけれども、理解できていないだけであり、会得できていないだけなのである。

五百塵点の量は毛一つ分ばかりである、法華を転じる事が有り、全くの真心から、仏の寿命の様に無限に、開演されているのである。

中国に「法華経」が伝わり、法華を転じてから、今までの数百年、注釈を作る輩は多いし、「法華経」によって上の人の法を得る者もいるが、今、我々の高祖である、曹谿山の、古代の仏と等しい、三十三祖の大鑑禅師の様に、法華に転じられる事の主旨を得た人はいないし、法華を転じる事の主旨を使った人もいない。

今これを聞き、今これに出会うのは、古代の仏が古代の仏に出会う所に出くわしたのであり、ここは古代の仏の仏土ではないであろうか？

喜ぶべきである。
劫から劫へ至っても法華であり、昼から夜へ至っても法華である。
劫から劫へ至っても法華であるため、昼から夜へ至っても法華なのである。
たとえ、自分の身心が強く成ったり弱く成ったりしても、法華である。
あらゆる、ありのままの存在するものは、珍しい宝であり、光明であり、道場であり、広大深遠であり、深大久遠である。
心が迷えば法華に転じられ、心を悟れば法華を転じるのは、実に、法華が法華を転じるのである。
心が迷えば法華に転じられ、心を悟れば法華を転じる。
ありのままの存在するものを能く究め尽くせば、法華が法華を転じる。
この様に、捧げものを捧げ、恭しく敬い、尊重し、たたえて感心するのは、法華が法華であるのである。

正法眼蔵　法華転法華

千二百四十一年の夏、「正法眼蔵」の「法華転法華」を書いて慧達禅人に授けた。
慧達禅人が出家して仏道を修行している事に喜びを感じたからである。
ただ髭と髪を剃るだけでも、好ましい事である。
髪を剃り、また、髪を剃る者は、真の出家者、仏の子である。
今日の出家は、従来の法華を転じる、ありのままの力による、ありのままの果報である。
今の法華は、必ず、法華(という原因)による、法華という結果が有るであろう。

釈迦牟尼仏の法華ではなく、諸仏の法華ではなく、法華の法華である。
日頃の法華を転じている事は、ありのままの相も、覚できず、知る事ができない。
けれども、今の法華は、理解できていないだけで、会得できていないだけで、あらわれる。
昔の時も呼吸の様な物であり、今の時も呼吸の様な物である。
これを、妙なる、思い難い、法華と保持させられ任せられるべきである。
開山観音導利興聖宝林寺で、かつて宋の時代の中国に入り、仏法を伝えている沙門である道元が記した。

道心

【抜粋】

現在の生を捨てて未だ未来の生に生まれない間、中有と言う事がある。

中有の命は七日間である。

七日間が経過すると中有の命が死んで、また(新しい)中有の身(体)を受けて、七日間ある。

中有は、どんなに長くても七日間を過ぎない。

(新しい)中有の時、どんな物事を見聞きするにも障害が無い事は天眼通のようである。

(新しい)中有を過ぎて、父母のほとりに近づく。

また、現在の生が終わる時は、両眼が、たちまち暗く成るはずである。

【全文】

仏道を求めるには、まず道心を優先するべきである。

道心の在り様を知っている人は稀である。
明らかに知っている人に問うべきである。
世の人が道心が有ると言っても、実は、道心が無い人がいる。
真に道心が有って、人に知られていない人がいる。
この様に、道心の有り無しは知り難い。
大方の人は、愚かな悪しき人の言葉を信じず、聞かない(が、それで良い)。
また、自分の心を優先するなかれ。仏が説いた法を優先するべきである。
よくよく道心の在るべき様を夜も昼も常に心にかけて、この世で(生きているうちに、)どうにかして真の無上普遍正覚が(自分に生じて)在ります様にと願い祈るべきである。
世の末には、(終わりの時代には、)真に道心が有る者は大方いない。
けれども、しばらく心に無常という思いをかけて、世の儚さと、人の命の危うい事を忘れないべきである。
自分は世の儚き事を思っていると自画自賛するべきではない。
心構えをして、法を尊重して、自分の身と命を軽くして、法のためには、身も命も惜しむべきではない。
次に、深く「仏、法、僧」という「三宝」を敬うべきである。
生が変わっても身が変わっても三宝に捧げものを捧げて敬おうと思い願うべきである。
寝ても覚めても三宝の功徳を思うべきである。
寝ても覚めても「南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧」と三宝を唱えるべきである。
(「南無」は「敬礼する」事を意味する。)
現在の生を捨てて未だ未来の生に生まれない間、中有と言う事がある。

中有の命は七日間である。

中有の間も常に声を止めず「南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧」と三宝を唱えようと思うべきである。

七日間が経過すると中有の命が死んで、また(新しい)中有の身(体)を受けて、七日間ある。

中有は、どんなに長くても七日間を過ぎない。

(新しい)中有の時、どんな物事を見聞きするにも障害が無い事は天眼通のようである。

この時、心をはげまして「南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧」と三宝を唱え、唱える事を忘れず、絶え間無く唱えるべきである。

(新しい)中有を過ぎて、父母のほとりに近づく時も、心構えをして、正しい知を持ったまま胎児として母胎に宿ろうと思いなさい。

母胎内にいても、「南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧」と三宝を唱えるべきである。

生まれ落ちる時も、「南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧」と三宝を唱える事を怠(おこた)らないと思おう。

「五感と意識」という「六根」を経由して、三宝に捧げものを捧げて、「南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧」と三宝を唱え帰依すると深く願うべきである。

また、現在の生が終わる時は、両眼が、たちまち暗く成るはずである。

その時、すでに生が終わったと知って、はげんで「南無帰依仏」と唱えるべきである。

この時、十方の諸仏は憐(あわれ)みを垂(た)れてくれる。

縁が有って、悪い場所へおもむくべきである罪が有っても、諸仏が変転させてくれて、天上に生まれ、仏の前に生まれて、仏を拝見して、仏が説いてくれる法を聞く事ができる。

両眼の前の視界に闇が来た後は、(肉体の死後は、)たゆまず、はげんで三帰依を唱える事を、中有までも、未来の生までも、怠るべきではない。

この様にして、生から生へ、世から世へを尽くして唱えるべきである。

仏という結果、無上普遍正覚に至るまでも、怠るべきではない。

これが、諸仏、菩薩が行わせている道である。

これをする事を、「深く法を悟る」とも言うし、「仏道が身に備わる」とも言うのである。

その他の事や、その他の思いを交えないと思い願うべきである。

また、一生のうちに、(仏像といった)仏を創造しようと営むべきである。

仏を創造したら、三種類の捧げ物を捧げるべきである。

三種類の捧げ物とは、草座といった座具、氷砂糖を溶かした水、ロウソクといった明かりである。

三種類の捧げ物を仏に捧げるべきである。

また、現在の生のうちに、法華経を作るべきである。

法華経を書いたり、刷って写したりして、保持するべきである。

常に、敬って頭上に高くかかげ、礼拝し、華、香、明かり、飲み物と食べ物、紙の書物の衣である覆い(ブック・カバー)を捧げるべきである。

常に、頭頂を清くして、敬って頭上に高くかかげるべきである。

また、常に、袈裟をかけて坐禅するべきである。

袈裟は、「第三の生で道を得た」という古代の行跡が有る。

袈裟は、すでに過去、現在、未来の諸仏の衣であり、功徳は計り知れない。

坐禅は、三界の法ではなく、仏祖の法である。

正法眼蔵　道心

葛藤

【抜粋】

おおよそ諸々の聖者は共に葛藤の根源を裁断する学に参入する趣(おもむ)きに向かうといえども、
葛藤をもって葛藤を切る事を裁断と言う、という学に参入せず、
(聖職者、大衆は、)
葛藤をもって葛藤に巻きつく、事を知らず、
葛藤をもって葛藤に嗣(つ)ぎ続ける、事を言うまでも無く、どうして知っているであろうか？　いいえ！　知らない！
(五十祖の如浄より前に、)法を嗣(つ)ぐ事は葛藤する事である、と知る事ができた者は稀(まれ)であり、
聞く事ができた者はいないし、
言い表せた者は未だいないし、
証し表せた者は、多いであろうか？　いいえ！　多くない！

古代の仏と等しい、道元の亡き師である、五十祖の如浄は「夕顔(ユウガオ)の蔓(つる)が(葛)藤のように夕顔(ユウガオ)に巻きつく」と話した。

【全文】

釈迦牟尼仏が「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」と無上普遍正覚を証して伝えたのは、霊山の会では初祖の迦葉だけである。

正統に代々、二十八代、正しく証して行って、二十八祖の達磨に至った。

二十八祖の達磨は、自ら、（中国に行き、）祖師の事を行（おこな）って「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」と無上普遍正覚を慧可に付属させ嘱託して二十九祖とした。

二十八祖の達磨は、初めて中国で祖師の儀式を行（おこな）って「中国の初祖」を自称し、二十九祖の慧可を「中国の二祖」と呼んだ。

これが、東の地の中国の俗習と成った。

二十八祖の達磨は、かつて二十七祖の般若多羅の御元で、仏の教訓と仏道の「骨髄」、「精髄」を目の当たりにして証し伝えて来た。

そのため、二十八祖の達磨は、根源をもって根源を証し理解して来て、枝葉の本（もと）とした。

おおよそ諸々の聖者は共に葛藤の根源を裁断する学に参入する趣（おもむ）きに向かうといえども、

（聖職者、大衆は、）

葛藤をもって葛藤を切る事を裁断と言う、という学に参入せず、

葛藤をもって葛藤に巻きつく、事を知らず、

葛藤をもって葛藤に嗣（つ）ぎ続ける、事を言うまでも無く、どうして知っているであろうか？　いいえ！　知らない！

（五十祖の如浄より前に、）法を嗣（つ）ぐ事は葛藤する事である、と知る事ができた者は稀（まれ）であり、

聞く事ができた者はいないし、
言い表せた者は未だいないし、
証し表せた者は、多いであろうか？　いいえ！　多くない！

古代の仏と等しい、道元の亡き師である、五十祖の如浄は「夕顔(ユウガオ)の蔓(つる)が(葛)藤のように夕顔(ユウガオ)に巻きつく」と話した。

葛藤が大衆に示されたのは、かって古今の諸方で見聞きした事が無い所である。

初めて五十祖の如浄、独りだけが葛藤を言い表した。
「夕顔(ユウガオ)の蔓(つる)が(葛)藤のように夕顔(ユウガオ)に巻きつく」とは、仏が仏に参入して仏を究めて行き、仏が仏を証し仏の心に適(かな)ったのである。
例えれば、これは、以心伝心なのである。

二十八祖の達磨は門人達に「時が、まさに至ろうとしている。あなた達は、なぜ、会得した所を言わないのか？」と言った。
門人の道副は「私の今の所見は、文字だけに執着しないが、文字を離れずに、文字を話すのに用いる」と言った。
祖師は「道副、あなたは私の皮を得た」と言っ(て、ほめ)た。
女性の出家者の総持は「私が理解している所は、喜んで阿閦仏国を見たが、一度、見たら更に再び見ない様な物である」と言った。
祖師は「総持、あなたは私の肉を得た」と言っ(て、ほめ)た。

道育は「四大(元素)は本より空であり、『色受想行識』という『五蘊』、『五陰』は存在の実体ではない。そのため、私の見た所では一つの法も得られ無かった」と言った。

祖師は「道育、あなたは私の骨を得た」と言っ(て、ほめ)た。

最後に、後の二十九祖の慧可は、二十八祖の達磨を三回、礼拝した後、自分の位置、居場所に戻って立った。

祖師は「慧可、あなたは私の髄を得た」と言っ(て、ほめ)た。

後に、二十八祖の達磨は、慧可を二十九祖として、法を伝え、袈裟を伝えた。

今、学に参入するべきである。

二十八祖の達磨は「あなた達は私の皮肉骨髄を得た」と言ったが、全ての祖師が言ったのである。

門人の四人は、共に、会得した所が有り、聞いて明らかに知っていた物が有ったのである。

門人の四人が、聞いて明らかに知っていた物、会得した所は、共に、身心の解脱への跳躍のための皮肉骨髄であり、(古い)身心を脱ぎ落とすための皮肉骨髄である。

半端な知見や理解や会得によってでは、二十八祖の達磨の皮肉骨髄の言葉を見聞きするべきではないし、あの部分やこの部分といった全体を十全に形成して現せない。

なのに、正しく伝えられなかった輩は、誤って「四人が各々理解した所は真髄に近かったり遠かったりしたため、二十八祖の達磨の言葉の『皮肉骨髄』も真髄に近かったり遠かったりしたのである。骨髄は皮肉よりも真髄に

近い。後の二十九祖の慧可の見解が最も優れていたので、『真髄を得た』という印を得たのである」と思ってしまって言ってしまっている。

誤って、この様に言ってしまう者は、未だかつて仏祖の学への参入が無く、二十八祖の達磨の言葉を正しく伝えられた事が無いのである。

知るべきである。

二十八祖の達磨の言葉の「皮肉骨髄」は真髄に近い遠いではない。たとえ見解に優劣が有っても、二十八祖の達磨は「私を得た」(、「私の考えを会得した」)とばかり言ったのである。

その主旨は、二十八祖の達磨が「私の髄を得た」と言ったのも「私の骨を得た」等と言ったのも、共に、「人の為(ため)に何かするには人と接する必要が有るし、草をひねって取るためには草の生えている地に降りる必要が有る」事と全く同じである。

例えば、「拈華瞬目」で、釈迦牟尼仏が華をひねった様に。

例えば、法を伝える時に、袈裟を伝える様に。

四人のために、二十八祖の達磨が言い表した所は、初めから(終わりまで)同一である。

二十八祖の達磨の言葉は同一である、といえども、四人の理解は必ずしも同一ではない。

たとえ四人の理解が不完全でも、二十八祖の達磨の言葉は、ただ、達磨の言葉のまま、ありのまま、存在する通りである。

おおよそ、言い表したものと、見解は、必ずしも一致しない。

例えば、二十八祖の達磨は、四人の門人に示すために、「あなたは私の皮を得た」等、「皮肉骨髄」という四つの言葉を選び取ったのである。

もし、二十九祖以降、百人、千人の門人がいる場合は、百通りの言葉、千通りの言葉による言い表し方が有るべきである。

際限は無いであろう。

二十八祖の達磨は、門人が四人だけだったので、「皮肉骨髄」という四つの言葉を選び取ったが、選び取らなかった言葉は未だに残っているし、選び取るべきであった言葉は多い。

知るべきである。

二十八祖の達磨は、慧可のために、(言動の順番次第では、)「あなたは私の皮を得た」と言ったかもしれなかった。

二十八祖の達磨は、慧可に「あなたは私の皮を得た」と言った場合でも、慧可を二十九祖として「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を伝え付属し嘱託したであろう。

二十九祖が慧可であるのは、得た皮や髄の優劣によるのではないのである。

また、二十八祖の達磨は、道副、総持、道育、その他の人のために、(言動の順番次第では、)「あなたは私の髄を得た」と言ったかもしれなかった。

(くり返しに成るが、)二十八祖の達磨は、慧可に「あなたは私の皮を得た」と言った場合でも、慧可を二十九祖として法を伝えたであろう。

二十八祖の達磨の身心のうち、皮肉骨髄は全て二十八祖の達磨の身である。

髄は近くて皮は遠いわけが無い。

今、学へ参入する、正しくものを見る眼を備えて、「あなたは私の皮を得た」という印を得たら、二十八祖の達磨といった祖師(の考え)を会得するために学に参入して究めるべきである。

身を通して、全身が皮である祖師もいる。

身を通して、全身が肉である祖師もいる。

身を通して、全身が骨である祖師もいる。
身を通して、全身が髄である祖師もいる。
身を通して、全身が心である祖師もいる。
身を通して、全身が身である祖師もいる。
心を通して、全心が心である祖師もいる。
祖師を通して、全祖師が祖師である祖師もいる。
身を通して、全身が私とあなた達を得た祖師もいる。
これらの祖師達が並んで形成されて現れて、百人の門人、千人の門人のために、「あなたは私の皮を得た」と言い表すのである。
たとえ、百人の門人、千人の門人のために、「皮肉骨髄」という四つの言葉しか利用しなかったとしても、無関係な見物人は、「皮肉骨髄」という四つの言葉で言い表した事について間違った形で、いたずらに思いを巡らしてしまうであろう。
もし、祖師の会に六、七人の門人がいたら、祖師は、
「あなたは私の心を得た」、
「あなたは私の身を得た」、
「あなたは私の仏を得た」、
「あなたは私の『眼睛』、『見る眼』を得た」、
「あなたは私の証を得た」
等と言い表すであろう。
つまり、あなたは祖師である時があり、(後に祖師と成った弟子の)慧可である時が有る。
「得た」(、「会得した」)という道理に参入して明確に詳細に究めるべきである。

知るべきである。
「あなたは私を得た」のであり、「私は、あなたを得た」のである。
「私と、(私の中に、)あなたを得た」のであり、「あなたと、(あなたの中に、)私を得た」のである。
祖師の身心を見て、誤って「内外は唯一普遍絶対ではない」、「渾身は『通身』、『全身』ではない」と言ってしまえば、(あなたの知は、)仏祖が形成して現している国土ではない。
(仏の知、神の知が「仏土」、「神の王国」と成る。)
皮を得た人は、肉骨髄も得ているのである。
肉骨髄を得た人は、皮や「面目」、「有様(ありよう)」も得ているのである。
ただ、これは尽十方界の真実の体であると明らかに了知するだけではなく、これは更に皮肉骨髄なのである。
そのため、「私の袈裟を得た」のであり、「あなたは法を得た」のである。
このため、言い表し方も解脱への個々の跳躍であり、師弟は同じく学に参入する。
聞いて知る方法も解脱への個々の跳躍であり、師弟は同じく学に参入する。
師弟が同じく学に参入して究めて行く事は、仏祖の葛藤なのである。
仏祖の葛藤は、皮肉骨髄の命なのである。
釈迦牟尼仏が「拈華瞬目」、「華をひねって目を瞬(また)かせた」のは、葛藤である。
(「拈華瞬目」の後に、)初祖の迦葉が「破顔微笑」したのは、皮肉骨髄である。
さらに学に参入して究めるべきである。
(古い)体を脱ぐ力量が有る事が、葛藤の種と成るのである。

葛藤にまといつく枝、葉、華、果実が有って、相互関係が有ったり無かったりするので、仏祖が形成されて現れ、「公案」、「修行者の手がかりとしての仏祖の言動」が形成されて現れるのである。

趙州真際大師は「初祖の迦葉は二祖の阿難に法をあずけて伝えた。それでは、二十八祖の達磨は、どんな人に法をあずけて伝えたのか？　言いなさい」と会の僧達に言った。

ある僧が「二十九祖の慧可が『髄を得た』と言われているのは、そうなのではないのですか？」と質問した。

師は「二十九祖の慧可をそしる事なかれ」と言った。

また、師は、「二十八祖の達磨は『外にいる者は皮を得るし、内にいる者は骨を得る』と言ったが、さらに内にいる者は何を得るのか？　言いなさい」と言った。

ある僧が「『髄を得た』の究極の道理とは何ですか？」と質問した。

師は「ただ皮を理解するべきである。(実は、)老僧である私の内にも髄なんて無いんだよ」と言った。

僧は「髄とは何ですか？」と質問した。

師は「そんな様では、皮も未だ探れずに知らないであろう」と言った。

知るべきである。

「皮も未だ探れずに知らない」時は、「髄も未だ探れずに知らない」のである。

皮を探り会得した時は、髄も会得しているのである。

「そんな様では、皮も未だ探れずに知らないであろう」道理を鍛錬(して熟考)するべきである。

「『髄を得た』の究極の道理とは何ですか？」と質問したら、「ただ皮を理解するべきである。(実は、)老僧である私の内にも髄なんて無いんだよ」という言葉が形成されて現れた。

「皮を理解するべきである」所で「髄なんて無い」事を、真の、「髄を得た」究極の道理としている。

このため、「二十九祖の慧可が『髄を得た』と言われているのは、そうなのではないのですか？」という質問が形成され現れる。

初祖の迦葉が二祖の阿難に法をあずけ伝えた時をまさに見ると、迦葉の中で阿難は身を持っていたし、阿難の中で迦葉は身を持っていた。

法をあずけ伝える中で見える時には、「面目(まみ)」、「有様(ありよう)」や「皮肉骨髄」、「理解」を交換する行程が不可避なのである。

このため、趙州真際大師は「二十八祖の達磨は、どんな人に法をあずけて伝えたのか？　言いなさい」と言ったのである。

二十八祖の達磨が二十九祖の慧可に法をあずけ伝えた時は、達磨は達磨であるが、慧可は「達磨の髄を得た」(、「達磨を会得していた」)ので達磨であったのである。

この道理に参入して究めて行く事によって、仏の法は今日に至るまで(祖師の法でもなく弟子の法でもなく)仏の法なのである。

もし、そうでなければ、仏の法は今日にまで至る事は無かったであろう。

この道理に静かに参入して鍛錬して究めて行って、自分が理解して言い表せる様に成ったり、他人に教えて理解させて言い表せる様に成らせたりするべきである。

「外にいる者は皮を得るし、内にいる者は骨を得る」、「さらに内にいる者は何を得るのか？　言いなさい」。

今、言っている、内外の主旨は最も端的である。

外を論ずる時、皮肉骨髄は共に全て(心にとって)外にある。

内を論ずるとき、皮肉骨髄は共に全て(身体として)内にある。

皮肉骨髄の四人の達磨の弟子という達磨は共に、百人、千人、万人の皮肉骨髄の向上に個々に参入して究め尽くしている。

誤って「髄よりも向上は無い」と思う事なかれ。

(例えば皮には皮以外の肉骨髄の)三枚の向上が有ったり、(皮肉骨髄以外の)五枚の向上が有ったりするのである。

古代の仏と等しい趙州真際大師の言葉は仏道である。

趙州真際大師の言葉は、臨済、徳山、大潙、雲門などには、及ぶ事ができない所であり、未だ夢見る事ができない所であり、まして、理解できない所であり、言い表せない所である。

近頃の杜撰(ずさん)な長老などは、趙州真際大師の言葉が存在する事すらも知らない所である。

近頃の杜撰(ずさん)な長老などに、趙州真際大師の言葉を説けば、恐れを成すであろう。

明覚大師と呼ばれる雪竇重顕は「趙州(真際大師)と睦州は古代の仏と等しい」と言った。

であれば、古代の仏と等しい趙州真際大師の言葉は、仏法の証拠であり、自己が、かつて理解し言い表せた物である。

真覚大師と呼ばれる雪峰義存は「趙州(真際大師)は古代の仏と等しい」と言った。

先の仏祖の雪竇重顕も「古代の仏と等しい」という言葉で趙州真際大師をほめているし、後の仏祖の雪峰義存も「古代の仏と等しい」という言葉で趙州真際大師をほめている。

趙州真際大師は、古今の向上を超越した古代の仏と等しい祖師であるという事を知る事ができる。

そのため、趙州真際大師が皮肉骨髄で葛藤させて探求させる道理は、古代の仏と等しい二十八祖の達磨の「あなたは私を得た」(、「あなたは私を会得した」)という言葉の基準と成る。この基準への学に参入して鍛錬して究めて行くべきである。

ところで、誤って「二十八祖の達磨は西のインドに帰った」と言われているが、私、道元は「そうではない」と学んでいる。

「二十八祖の達磨は西のインドに帰った」という宋雲の所見が必ずしも事実ではないであろう。

どうして宋雲が二十八祖の達磨の去就を見る事ができたであろうか? いいえ! できない!

二十八祖の達磨は死後、肉体の遺体が熊耳山に納められたと習い知るのを、正しく学んだとする。

正法眼蔵　葛藤

その時、千二百四十三年、京都府の宇治郡の観音導利興聖宝林寺にいて僧達に示した。

弁道話

諸仏、如来は、共に、妙なる法を単一に伝えて無上普遍正覚を証している。
無上普遍正覚を証するには、最上の無為の妙なる術が有る。
最上の無為の妙なる術とは、ただ仏だけが仏だけに授けて邪(よこしま)である事が無い、自受用三昧という標準である。
この自受用三昧で遊戯するには、正しく坐禅して禅に参入する事が正門である。
この法は、人々の分け前である才能に豊かに備わっている、といえども、未だ修行していない時には表れず、証していない時には得る事が無い。
それは、放てば手に満ち、唯一や多数という「際(きわ)」、「境(さかい)」を超越している。
語れば口(くち)に満ち、縦横無尽である。
諸仏は常に、この中に住んで保持しているが、各方面に知覚できる物を残さない。
全ての生者は永久に、この中で使用しているが、各々の知覚に側面として表れない。
今、教えている鍛錬して道をわきまえる事は、証の上に「万法」、「全てのもの」を存在させ、解脱への活路として唯一普遍絶対の真理を行わせる。
その関を超えて古いものを脱ぎ落とす時、この節目に関わらないか？　いや！　関わる！
私、道元は悟りを求める事を思い立って心して法を求めた時から今まで、我が国、日本の遍く方々(ほうぼう)に知識をたずねた。

その際に、建仁寺の「明全」公に見えた。従い、秋の霜から春の華までの年間は、速やかに、九年間を経た。

わずかに臨済の家風を聞いた。

「明全」公は祖師「栄西」和尚の高弟として独り無上の仏法を正しく伝えている。

我々が「明全」公に並ぶ事は全くできない。

私、道元は、重ねて、宋の時代の中国に赴き、両浙で善知識を持つ人々を訪ね、「法眼宗、潙仰宗、曹洞宗、雲門宗、臨済宗」という「五門」の家風を聞いた。

ついに大白峰の五十祖の如浄の所に行って、一生を賭けて学に参入する大事が、ここに終わった。

それより後、中国の宋の「紹定」時代の初め千二百二十八年頃に故郷に帰り、なお重い負担を肩に置いている様に、法を弘めて全ての生者を救う事を思いとしている。

そうではあるが、激しく揚げられる時を待つために、仏教を弘め通じさせる心を置いておき、しばらく雲の様に漂い浮草の様に立ち寄って、まさに先人の賢人の様に家風を聞かせようとしている。

ただし、自ら名声や利益には関わらず、仏道を念じ求める心を優先させる学への真実の参入者がいるであろうか？

学への真実の参入者がいたとしても、いたずらに無駄に、邪悪な偽の師に惑わされて、妄りに正しい理解という眼を覆い隠してしまい、むなしく自分の狂気に酔って、久しく迷いの境地に沈むであろう。

何によって知の正しい種を成長させて道を得る時を得るであろうか？　いいえ！　得られないであろう！

道の修行に乏しく貧しい未熟な私、道元とはいえ、今、雲の様に漂い浮草の様に立ち寄る事を事としていては、学への真実の参入者は、いずれの山や川を訪ねれば良いのであろうか？

これを憐れんで、宋の時代の中国で禅の寺の風習と規律を目の当たりに見聞きして、善知識を持つ人々の奥深い主旨を受持したのを記し集めて、学への参入という、歩く人が少数である閑道を歩む人に残して、仏教という家の正しい法を知らせようとしている。

これは真の秘訣かもしれない。

口伝によると、釈迦牟尼仏は霊山の会で法を初祖の迦葉につけ、祖師から祖師へ正しく伝えて、二十八祖の達磨に至った。

二十八祖の達磨は自ら中国に赴き、法を二十九祖の慧可につけた。

これが東の地の中国の仏法伝来の初めである。

この様に単一に伝えて、自ずと三十三祖の大鑑禅師に至った。

この時、真実の仏法が、まさに東の中国に流通して、細目に関わらない主旨が表れた。

時に、三十三祖の大鑑禅師に二人の高弟がいた。

三十四祖の南嶽の懐譲と、三十四祖の青原の行思である。

共に、仏の印を伝持して、同じく、人と天人の導師である。

その二派が流通して、五門が開けた。

五門とは、法眼宗、潙仰宗、曹洞宗、雲門宗、臨済宗である。

現在、宋の時代の中国には臨済宗のみが天下に遍く広まっている。

「法眼宗、潙仰宗、曹洞宗、雲門宗、臨済宗」という「五家」は異なるが、唯一の一仏の心の印である。

中国も後漢から今まで、教えの書籍が跡を垂(た)れて唯一の天下に敷(し)かれている、といえども、雌雄(しゆう)は未だ定められていなかった。
二十八祖の達磨が中国へ来た「祖師西来」の後、直々に葛藤の根源を切り、純粋な唯一の仏法が広まった。

我が国、日本も、そう成る事を請い願うべきである。

口伝によると、仏法に住んで保持してきた諸々の祖師、並びに、諸仏は共に、自受用三昧に正しく坐禅して従う事を、悟りを開く正しき道としている。
西のインドから東の地の中国まで、悟りを得た人は、その家風に従ってきた。

これは、師弟が「密(ひそ)かに」、「意味を込めて」妙なる術を正しく伝えて真の秘訣を受持してきた事によってである。

宗門の正しい口伝によると、「この単一に伝えられている正直な仏法は、最上の中の最上であり、善知識を持つ人々の所へ行って見(まみ)えた初めより、さらに焼香、礼拝、念仏、懺悔の修行、経を看(み)る事を用いず、ただ打ち坐って(古い)身心を脱ぎ落とす事を得よ」と言われている。

もし人が一時といえども、身口意の三業に仏の印を表して三昧に正しく坐禅する時、遍(あまね)く法の世界は皆、仏の印と成り、虚空のことごとくが悟りと成る。

そのため、諸仏、如来としては本質の法の楽を増し、覚への道の荘厳を新たにする。

及び、十方の法界、三途六道の全ての者は皆、共に、一時に身心を明るく清浄にして、大いなる解脱の本質を証して、本来の「面目」、「有様(ありよう)」が現れる時、諸法のものは皆、正しい覚を証し会得して、万物は、共に、仏身を

使用して、速やかに証し会得する辺際を一超して、菩提樹に正しく坐禅して、一時に無双の大いなる法輪を転じて、究極の無為の深い知を開演する。

これらの普遍正覚、さらに却って、親しく、目に見えない助けの道が通うので、この坐禅している人は確りとして(古い)身心を脱ぎ落とし、従来の雑な汚れた知見思量を裁断して、天の真の仏法を証し会得して、遍く微塵際のいくつかの諸仏、如来の道場ごとに仏事を助け発して、広く仏の向上の機会を被らせて、よく仏の向上の法を激しく揚げる。

この時、十方の法界の土地、草木、牆壁、瓦礫は皆、仏事をなすのをもって、その起こす所の風と水の利益にあずかる仲間は皆、甚妙な不可思議な仏の化の目に見えない助けに助けられて、近き悟りを表す。

この水と火を受用する類のものは皆、元より証している仏の化を周りに斡旋するので、これらの類のものと共に住んで語り合う者も、また、ことごとく相互いに無窮の仏の徳が備わり、展開し転じ広く作して、無尽、無間断、不可思議、不可称量の仏法を、遍く法界の内外に流通する物である。

そうではあるけれども、この諸々の当人の知覚が暗い事は、静かな中で無造作であり、直に証するのを待っているのである。

もし凡人の思いの様に、修行と証が両断されているのであれば、各々、(別の物として)覚知できるはずである。

もし覚知に交わるのであれば、証の様式ではない。

証の様式には心情が迷っている人は及べないからである。

また、心と、知覚の対象は共に、静かな中で、証と悟りに出入りは有るが、自受用の境界であるのをもって、塵を一つも動かさず、相を一つも破らず、広大な仏事、甚深の微妙な仏の化をなす。

この仏の化の導きの及ぶ所の草木と土地は共に、大いなる光明を放ち、深い妙なる法を説く事は無限である。

草木、牆壁は、よく凡人、聖者、霊を含有する全てのもののために宣言して揚げ、凡人、聖者、霊を含有する全てのものは却(かえ)って草木、牆壁のために広く説く。

自覚する事と、他の者を覚らせる事の境界は元より証の様相を備えて欠ける事無く、証の様式は行われて怠(おこた)られる時を無くさせる。

これをもって、わずかに一人の一時の坐禅である、といえども、諸法と目に見えない助けで助け合い、諸々の時と円(まど)かに通じるため、無尽の法界の中に、過去、未来、現在に恒常の仏の化の導きの事をなすのである。

あのものも、このものも、共に、唯一普遍絶対の同じ修行であり、同じ証である。

ただ坐禅上の修行のみではなく、空(くう)を打って響きを成す事であり、鐘を突く前後で妙なる声が綿々と連続している物である。

坐禅の際のみに限るであろうか？　いいえ！　限らない！

「百頭」、「全ての者」は皆、本来の「面目」、「有様(ありよう)」に本来の修行を備えて、量ろうと図るべきではない。

知るべきである、たとえ十方の無量恒河沙の数の諸仏が共に力をはげまして仏の知慧をもって一人の坐禅の功徳を量り知り究めようとしても、辺(ほとり)を得る事も全く無い。

今、この、坐禅の功徳が高大である事を聞き終わって、愚かな人は疑って言うであろう。

Q.

仏法には多くの門が有り、何をもって、単（ひとえ）に坐禅をすすめるのか？

A.

坐禅は仏法の正門である事をもってである。

Q.

なぜ、坐禅を単独で正門とするのか？

A.

釈迦牟尼仏は道を得る妙なる術を正しく伝え、また、過去、現在、未来の如来は共に坐禅により道を得ている。

このため、坐禅は正門である事を伝えたのである。

それだけではなく、西のインドから東の地の中国まで、諸々の祖師は皆、坐禅により道を得ているのである。

そのために、今、坐禅という正門を人と天人に示す。

Q.

如来の妙なる術を正しく伝えられる事や、祖師の跡をたずねる事は、実に、凡人の思慮の及ぶ所ではない。

けれども、経を読み念仏を唱える事は自ずと悟りの因縁と成るはずである。

ただ、むなしく坐禅しても為（な）す所は無い。

何によって悟りを得るたよりと成るのであろうか？

A.

あなたは今、諸仏の三昧、無上の大いなる法を、むなしく坐禅して為す所は無いと思った様だが、この様な考えの人を大乗の悪口を言う人とする。

あなたの惑いは非常に深くて、大海の中に居ながら水無しと言う様な物である。

すでに、かたじけない事に、諸仏は自受用三昧に安らかに坐禅している。

これは、広大の功徳を為しているのではないか？　はい！　為している！

心の眼が未だ開かず、なお心が酔いにある事を憐れむべきである。

おおよそ、諸仏の境界は不可思議である。

心識は諸仏に及ぶ事ができない。

まして、不信心で知が劣っている人が知る事ができ得るであろうか？　いいえ！　でき得ない！

ただ正しい信心の大いなる素質が有る人のみ、入る事ができ得るのである。

不信の人には、たとえ教えても受け入れさせる事は難しい。

「法華経」でも、霊山の会には、なお、「退亦佳矣」、「退席するのもまた善い」類の者どもがいた。

おおよそ、心に正しい信心が起これば修行して学に参入するべきである。

そうでなければ、しばらく止まるべきである。

昔から法の潤いが無い事を恨みなさい。

また、経を読み念仏を唱える等に努めて得る所の功徳をあなたは知っているのか？

ただ舌を動かして声を上げる事を、仏事、功徳と思う様では、とても、はかない。

ただ舌を動かして声を上げる事を、仏法と見なそうとしても、うたた遠く、いよいよ遥かである。

また、経書を開くのは、仏が修行の遅い速いの様式を教えておいている事を明らめて知り、教えの様に修行すれば必ず証を取れるからである。いたずらに無駄に、思い量り念じ計る事に費やして、無上普遍正覚を得る功徳にしようとしているのではないのである。

愚かに千万回も読む口(くち)の業(わざ)をしきりにして仏道に至ろうとするのは、進む方向を決める長柄(ながえ)を北にして南の国の越に向かおうと思う様な物である。

また、円の穴に正方形の木を入れようとするのと同じである。

仏教の文書を見ながら修行する道に暗いのは、医術の方法を見る人が薬の調合方法を忘れる様な物であり、何の益が有るであろうか？

口からの発声を絶え間無くするのは、春の田のカエルが昼も夜も鳴く様な物であり、結局、益は無い。

まして、深く名声と利益に惑(まど)わされている輩には名声と利益を捨てるのは難しい。

利益を貪(むさぼ)る心は、はなはだ深いからである。

昔は利益を貪(むさぼ)る人が多数いた、今の世には利益を貪(むさぼ)る人はいないであろうか？　いいえ！　今の世にも利益を貪(むさぼ)る人は多数いる！

利益を貪(むさぼ)る人は最も憐れである。

ただ、まさに、知るべきである、釈迦牟尼仏を含む過去七仏の妙なる法は、道を得て心を明らめた達道者に、心が仏道に適(かな)う証を会得した学ぶ人が従って正しく伝えられれば、的を射た主旨が表れて受持されるのである。

霊感が無く文字だけを習い学ぶ似非(えせ)学者は知り及ぶ事ができない。

であれば、この疑いと迷いを止めて、正しい師の教えにより、坐禅して道をわきまえて諸仏の自受用三昧の証を得るべきである。

Q.

今、我が国、日本に伝わっている所の法華宗、華厳宗は共に大乗の究極である。

まして、真言宗は毘盧遮那如来が親しく金剛薩埵に伝えているので、師弟関係は、みだりではない。

話している主旨は「即心是仏」、「是心作仏」と言って、多劫の修行を経る事無く、一度の坐禅で五仏の正覚を得られると言うのであるから、仏法の極妙と言うべきである。

であるのに、今、言う所の修行を、どんな優れている事が有って、彼らをさしおいて、単(ひとえ)に、すすめるのであろうか?

A.

知るべきである、仏教という家では教えの優劣を論争する事は無く、法の浅い深いを選ばない。

ただし、修行の真偽を知るべきである。

草花、山水にひかれて仏道に流入する事が有り、土石、砂礫を握って仏の印を受持する事が有る。

まして、膨大な文字が(森羅)万象には余るほど豊かに隠されているのであり、転じる大いなる法という輪も塵(ちり)一つに収まっている。

であれば、「即心即仏」の言葉は、水の中に映る月の様な物である。

「即坐成仏」の旨は、鏡の中の影の様な物である。

言葉の巧みさに関わるべきではない。
今、直に証を得られる無上普遍正覚の修行をすすめるのに、仏祖が単一に伝えている妙なる道を示しているのは、真実の道の人と成らせるためである。
また、仏法を伝授する事は、必ず、証が仏道に適(かな)う人を宗(むね)とする師とするべきである。
霊感が無く文字を数えるだけの学者は、導師とするには不足である。
霊感が無く文字を数えるだけの学者を導師とするのは、一人の盲人が盲人の大衆を引く様な物である。
今この、仏祖が正しく伝えている門下では皆、道を得て証が仏道に適(かな)う賢者、達道者を敬う事で仏法に住まわせられ保持させられている。
そのため、冥界や「この世」の天人も来て帰依し、証の成果を得た羅漢も来て法を質問して、各々に、心の境地を開き明らかにする手段を授けないという事が無い。
仏教以外の、他の宗教では未だ聞いた事が無い所である。
ただ、仏の弟子は仏法を習うべきである。
また、知るべきである、我らは元より無上普遍正覚が欠けているのではなく、永久に受用している、といえども、継承して会得する事ができ得ないために、みだりに知見を起こす事を習いとして、これを概念的な物と思う事によって、大いなる道をいたずらに無駄に間違える。
この知見によって、「空華」は、まちまちである。
あるいは、無上普遍正覚を十二輪転や二十五有の境界と思い、三乗、五乗、仏性の有無の意見を作る事が無い。
この知見を習って、仏法の修行の正道と思うべきではない。

今は、仏の印によって万事を放り下ろして、一心に坐禅する時、迷いや悟りや感情や思い量りの辺を超越して、凡人や聖者の道に関わらず、速やかに枠外に逍遙して、大いなる無上普遍正覚を受用するのである。人をとらえる罠に関わる文字だけの学者が肩を並べて及ぶ事ができるであろうか？　いいえ！　できない！

Q.

「三学」の中に「定学」が有り、「六度」の中に「禅度」が有る。「定学」と「禅度」は共に、一切の菩薩が初心より学ぶ所であり、利発と愚鈍を分けずに修行する。今の「坐禅」も「定学」か「禅度」のどちらか一つの事であるのであろう。何によって、「坐禅」の中に如来の正しい法を集めたと言うのであろうか？

A.

今この如来の一大事の「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼を持つ事」、無上の大いなる法を、「禅宗」と名づけてしまったために、この様な質問が来てしまった。

知るべきである、この「禅宗」という称号は、中国以東に起こり、インドでは聞かない。

二十八祖の達磨は、初め、嵩山の少林寺にて「九年面壁」、「九年間、壁に向かって坐禅」している間に、仏道に入った人も俗人も、未だ仏の正しい法を知らず、坐禅を宗とするバラモンと名づけてしまった。後、代々の諸々の祖師は皆、常に坐禅を専らした。

これを見た愚かな俗人は、真実を知らずに、混同して「坐禅宗」と言いだしてしまった。

今の世では、「坐」という言葉を簡略して、ただ「禅宗」と言ってしまうのである。

その理由は諸々の祖師が広く語っている事で明らかである。

「六度」及び「三学」の「禅定」に「坐禅」を並べて言うべきではない。

坐禅には仏法の代々伝わる正統な意味が有る事は一代に隠れも無い事実である。

釈迦如来が昔、霊山の会で「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼を持ち寂滅した妙なる心を持つ事」、無上の大いなる法を独り初祖の迦葉にのみ付法した儀式は、現在でも上界、天にいる天人達には目の当たりに見た者が存在しているので、疑うべきではない。

おおよそ、仏法は、この天人達が永久に護り保持している物であり、その功徳は未だ古く成っていない。

まさに知るべきである、坐禅は仏法の道の全てであり、並べて言える物など無い。

Q.

仏教という家は、何によって、「行住坐臥」という「四儀」の中で、ただ「坐」にのみ全てを負わせ、禅定をすすめて、証に入る様に言うのであろうか？

A.

昔から、諸仏が相継ぎ修行して証に入る道は、究め知り難い。

理由を尋ねれば、ただ仏教という家が用いている所を理由と知るべきであろう。

この他に尋ねるべきではない。

ただし、祖師が、ほめて言う所によると、「坐禅は安楽の法門である」と言う。

量り知れない。

坐が「四儀」の中で安楽であるからであろうか？

また、坐禅は、一人の仏や二人の仏の修行の道であるだけではない。

諸仏、諸々の祖師は皆、坐禅を道としている。

Q.

この坐禅の修行では、未だ仏法を証し会得していない者は、坐禅して道をわきまえて証をとるべきである。

しかし、すでに仏の正しい法を明らめ得た人は坐禅をして何の待つ所が有るのであろうか？

A.

愚者を前にして夢を説かない。

山暮らしの木こりなどの手には船の棹(さお)を与えづらい、といえども、さらに教訓を垂(た)れよう。

修行と証は一つではないと思うのは外道の意見である。

仏法では修行と証は唯一普遍絶対である。

今も証の上で修行するべき時であるので、初心の時に道をわきまえたのは本来の証の全体である。

そのため、修行の用心を授ける時にも、修行の他に証を待ち望む思いなかれと教える。

直々の指導も本来の証であるからである。

すでに修行の証であるので証に際（きわ）など無く、証の修行であるので修行に初めなど無い。

ここをもって釈迦如来と初祖の迦葉は共に証の上での修行を受用し、二十八祖の達磨と、高祖の三十三祖の大鑑禅師は同じく証の上での修行に引かれて転じられている。

仏法に住んで保持する行跡とは皆、この様な物なのである。

すでに証を離れぬ修行が有るので、我らは幸いにも一分の妙なる修行を単一に伝えられて、初心の時に道をわきまえた事は一分の本来の証を無為の境地で得るのである。

知るべきである、修行を離れない証を汚染させないために、仏祖は、しきりに修行を緩（ゆる）くするべきではないと教えている。

妙なる修行を放（ほう）り下（お）ろせば本来の証が手の中に満ち、本証を出身すれば妙なる修行が身を通して行われる。

また、宋の時代の中国で目の当たりに見たのは、諸方の禅の寺院では皆、坐禅のための堂を構えて、五百、六百および千、二千の僧を安らかにさせて日夜、坐禅をすすめていた。

禅の寺の席次の主である、仏の心の印を伝える達道者に仏法の大いなる意味を尋ねたならば、「修行と証が両断されてはいない」旨を聞いた。

このため、門下の学に参入している人のみだけではなく、法を求める一流の人々、仏法の中に真実を願い求める人、初心者や後進の者を選ばず、凡人

と聖人を論じずに、仏祖の教えにより、達道者の道を追って、坐禅して道をわきまえるべきであるとすすめている。

聞いた事が無いであろうか？

祖師の言う所によると、「修行と証が無いわけではないが、汚染するのは駄目である」と言う。

また、祖師の言う所によると、「道を見た者は道を修行する」と言う。

道を得た後でも修行するべきである、という事を知るべきである。

Q.

我が国、日本の先の世で教えを広めた諸々の師は共に唐の時代の中国に入って法を伝えた時、なぜ、この旨をさしおいて、ただ教えだけを伝えたのであろうか？

A.

昔の人の師が、この法を伝えなかったのは、時が未だ至っていなかったからである。

Q.

あの昔の師は、この法を会得していたのであろうか？

A.

会得していれば通じているであろう。

Q.

ある人によると、

「生死を嘆く事なかれ、生死を出離するのに、とても速(すみ)やかな道が有る。

心の性質が常に住んでいる理を知るのである。

その旨は、この身体は既に生あれば必ず滅に移されて行く事が有っても、この心の性質は滅する事は全く無い。

生と滅に移されない心の性質が我が身に有る事を知れば、心の性質を本来の性質とするので、身は仮の姿であり、この世で死んで、あの世で生まれる定めが無い。

心は常に住んでいて、過去、未来、現在で変わらない。

この様である事を知るのを、生死を離れた、と言うのである。

この旨を知る者は従来の生死が永く絶えて、身が終わる時に『性海』に入る。

『性海』に流入する時に諸仏、如来の様な妙なる徳が備わる。

たとえ今は知るといえども、前世の妄(みだ)りな業で形成されている身であるので、諸々の聖者と等しく無いのである。

未だ、この旨を知らない者は、久しく生死を巡る事に成ってしまう。

なので、ただ、急いで心の性質が常に住んでいる旨を了知するべきである。

いたずらに無駄に無為に坐禅して一生を過ごして、どんな、待ち望める所が有るであろうか？　いいえ！　無い！」

この様に言う旨は真に諸仏、諸々の祖師の道に適(かな)うであろうか？　どうであろう？

A.

今、言う所の意見は全く仏法ではない。

先尼(セーニャ)という外道と同じ誤った意見である。

先尼（セーニャ）という外道の誤った意見によると、

「我が身の内に一つの霊知が有り、霊知は縁（えん）に会う所で、よく好悪をわきまえ、是非をわきまえる。

痛痒を知り、苦楽を知る事ができるのは皆この霊知の力である。

霊知という霊性は、この身が滅する時に脱して『性海』に生まれるので、この世では滅したと見えるけれども、『性海』での生が有るので、永く滅しないで常に住んでいる、と言うのである」

先尼（セーニャ）という外道の誤った意見は、この様な代物である。

先尼（セーニャ）の誤った意見を習って仏法にしようとするのは、瓦礫（がれき）をにぎって黄金の宝と思うよりも、愚かである。

先尼（セーニャ）の誤った意見に愚かに迷う事を恥ずべきである事は、例えられるものが無いほどである。

唐の時代の中国の三十三祖の大鑑禅師の弟子である南陽慧忠も深く戒めている。

今、「心常相滅」、「心は常に存在し肉体という相は滅する」という邪悪な意見を計画して、誤って諸仏の妙なる法と等しく見なして、生死の本来の因を起こして、生死を離れたりと思うのは、愚かではないか？　はい！　愚かである！

最も憐れむべきである。

これは外道の邪悪な意見である、と知り、耳に触れさせるべきではない。

止むを得ず、今、憐れみを垂（た）れて、あなたの邪悪なものの見方を救おう。

知るべきである、仏法では元から身と心は唯一普遍絶対であり、性質と相は唯一普遍絶対で不二である、と話している事は、西のインドから東の地の中国まで同じく知られている所であり、疑うべきではない。

まして、常に住んでいる事を話している門では、万法は皆、常に住んでいて、身と心を分ける事が無い。

寂滅を話している門では、諸法は皆、寂滅であり、性質と相を分ける事が無い。

それなのに、なぜ、「身滅心常」と言うのであろうか？　正しい理に背いていないか？　はい！　背いている！

それだけではなく、生死は「涅槃」、「寂滅」であると覚了するべきである。

未だ生死の他において「涅槃」、「寂滅」を話す事は無い。

まして、心は身を離れて常に住んでいると領解する事をもって、生死を離れた仏の知（、神の知）にしようと妄りに計画しても、この領解智覚の心は生滅して全く常に住んでいない。

この領解智覚の心は、はかなくないか？　はい！　はかない！

熟考するべきである。

身と心は唯一普遍絶対である旨は仏法が常に話している所である。

なのに、なぜ、この身が生滅する時、心が独り身を離れて生滅するであろうか？　いいえ！

もし唯一普遍絶対である時が有り、唯一普遍絶対ではない時が有れば、仏の説く事は自ずと虚しく妄りな代物に成ってしまうではないか！

また、生死は除くべき法だと思ってしまうのは、仏法を厭う罪と成る。

慎しめないのであろうか？

知るべきである、仏法で、心と性質は大いなる総ての相の法門である、と言うのは、一大法界を込めて、性質と相を分けず、生滅を言う事は無い。

無上普遍正覚の「涅槃」、「寂滅」に及ぶまで心の性質ではない事は無い。

一切の諸法と森羅万象は共に、唯一の心であり、込めない事、兼ねない事は無い。

この諸々の法門は皆、唯一普遍絶対の心である。

諸々の法門に差異や違いは全く無い、と話す事は仏教という家の心の性質を知っている様子である。

なのに、この唯一の法において、身と心を分別し、生死と「涅槃」、「寂滅」を分ける事が有るであろうか？　いいえ！　無い！

あなたたちは既に仏の子（、神の子）である。

外道の誤った意見をかたる狂人の舌の響きを耳に触れさせる事なかれ。

Q.

坐禅を専（もっぱ）らする人は必ず戒律を厳守して清浄にするべきか？

A.

戒を保ち清浄の行を行う事は禅門の規準であり、仏祖の家風である。

未だ戒を受けず、また、戒を破る者には僧の資格（、祭司の資格）は無い。

Q.

坐禅に努めている人が、さらに真言止観の行（ぎょう）を兼ね合わせて修行する事は妨（さまた）げが有るであろうか？

A.

中国に在留していた時、達道者に真の秘訣を聞いた時に、西のインドから東の地の中国で、古今で、仏の印を正しく伝えている諸々の祖師のいずれも

未だ真言止観の行を兼ね合わせて修行した、と聞いた事が無い、と言っておこう。

実に、一つの事を大事にしなければ、一つの知にも達する事は無い。

Q.

坐禅という行は世俗にいる男女も努むべきであろうか？

出家者だけが坐禅して修行するのか？

A.

師の言う所によると、「仏法を会得するのに、男女や貴賤を選ぶなかれ」と聞いている。

Q.

出家者は、わずらわしさを速やかに離れて坐禅して道をわきまえる事に障害は無い。

しかし、世俗にいる人は繁務では、どうして、一心に修行して無為の仏道に適うであろうか？

A.

仏祖は、憐みの余り、広大な慈悲の門を開いて置いてくれている。

それは、一切の生者を証に入れるためである。

人と天人で、誰か、入れない者がいるであろうか？　いいえ！　いない！

ここで、昔と今を尋ねると、その証拠は多い。

しばらく、代宗と順宗は、帝位にいて、全ての機会で、とても忙しかった時に、坐禅して道をわきまえて仏祖の大道を会得して通じる様に成った。

李相国と防相国は共に輔佐の臣位にいて、一天下の腹心であったが、坐禅して道をわきまえて仏祖の大道の証に入った。

志の有無による物であろう。

身の在家、出家には無関係である。

深く事の優劣をわきまえる人は自ずと信じる事が有る。

まして、世俗の繁務は仏法を遮ると思う者は、ただ、世俗の中に仏法は無いとだけ知っていて、仏の中に世俗の法は無い事を未だ知らないのである。

近頃、宋の時代の中国に馮相公と言う人がいた。

祖師の道に長じた大官であった。

後に、詩を作って自らの事を言う所によると、

「公事の合間に坐禅を好み、かつて、脇を寝床に触れさせて眠る事は少なかった。しかも、宰官の相を出現させているが、長老としての名は四海に伝わっている」

これは、官務で暇が無い身でも、仏道への志が深ければ、道を得るという事である。

他人をもって自分を省み、昔をもって今を鑑みるべきである。

宋の時代の中国でも、国王と大臣、士官と民、男と女は共に心を祖師の道に留めないという事が無い。

武門と文官の家は、いずれも禅に参入して道を学ぶ事を志している。

志す者は必ず心の境地を開き明らかにする事が多い。

これによって、世俗の繁務が仏法を妨げない事は自ずと知られている。

国家に真実の仏法が弘(ひろ)まり流通すれば、諸仏、諸々の天人は絶え間無く護衛するので、王の化は太平である。

聖者の化が太平であれば、仏法は仏法の力を得る物である。

また、釈迦牟尼仏が在世の時には、反逆者や邪悪な意見が道を得ていた。

祖師の会の下では、猟師や木こりも悟りを開いている。

まして、その他の人も悟りを開いているのは言うまでも無い。

ただ、正しい師の道をたずねるべきである。

Q.

この行(ぎょう)を、今の末法の世、悪の世でも、修行すれば証を得られるのであろうか？

A.

教える事を家業としている学者は名前や相を大事にしているが、大乗の実の教えでは、正法の世、像法の世、末法の世を分ける事が無い。

「修行すれば皆、道を得る」と言っている。

まして、単一に伝えられている正しい法では、法に入る時と解脱する時に同じく自分の家の珍しい財宝を受用するのである。

証を得られた、得られていないは、修行している者が自ら知っている事は、水を用いている人が冷暖を自ら、わきまえている様な物である。

Q.

ある人の言う所によると、

「仏法では、『即心是仏』の旨を了達した人は、口(くち)で経典を読まず、身体で仏道を行わずとも、仏法に欠けた所は全く無い。
ただ、仏法は元より自己にあると知る、これを道を得た全円とする。
この他に更に他人に向かって求めるべきではない。
まして、坐禅して道をわきまえる事をわずらわしくするであろうか？　いいえ！　しない！」

A.

この言葉は、最も、はかない。
もし、あなたが言う様であれば、心有る者は、誰が、「即心是仏」の旨を教えて仏法を知る事が無いであろうか？
知るべきである、仏法は、まさに自分や他人の意見を止めて学ぶ物なのである。
もし「自己即仏」と知る事をもって道を得たとできるならば、釈迦牟尼仏は昔、化で導く事にわずらわなかったであろう。
古の妙なる様式をもって、これを証明しよう。

昔、則公監院と言う人が、法眼禅師の会の中にいた。
法眼禅師は「則監寺、あなたは、我が会にいて、いくつの時を経たのか？」と質問した。
則公は「私は、師の会にいて既に三年を経ました」と言った。
禅師は「あなたは後輩である。なぜ、常に私に仏法を問わないのか？」と言った。

則公は「私は、和尚様をあざむいていない。かつて、青峰禅師の所にいた時に、仏法において安楽の所を了達している」と言った。

禅師は「あなたは、いかなる言葉によって、安楽の所に入る事を得たのか？」と言った。

則公は「私は、かつて青峰に『いかなるものが、学ぶ人の自己であるのか？』と質問しました。青峰は『丙童子と丁童子が来て火を求める』と言いました」と言った。

法眼は「良い言葉です。ただし、恐らく、あなたは会得していないのでしょう」と言った。

則公は「丙と丁は火に属します。火をもって更に火を求めるのは、自己をもって自己を求めるのに似ている、と会得しました」と言った。

禅師は「実に、あなたが会得していない、と知りました。もし仏法が、その様な代物であるならば、今日まで伝わらなかったでしょう」と言った。

ここで、則公は焦燥（しょうそう）し煩悶（はんもん）して席を立ってしまった。しかし、道の途中に至って、「禅師は、天下の善知識を持つ人であり、また、五百人の大導師である。私の非を諫（いさ）めてくれた。長所が有るに違いない」と思って、禅師の御元に帰って懺悔し謝礼して「いかなる物が、学ぶ人の自己であるのか？」と質問した。

禅師は「丙童子と丁童子は来て火を求める」と言った。

則公は、この言葉の下に、大いに仏法を悟った。

「自己即仏」の領解をもって仏法を知った、とは言えない、という事を明らかに知る事ができる。

もし「自己即仏」の領解を仏法としてしまったら、禅師は先の言葉をもって導かないであろうし、また、この様に戒めないであろう。

ただ、まさに、初め善知識を持つ人に見えてから、修行の儀則を質問して、一心に坐禅して道をわきまえて、一つの知や半端な理解を心に留める事なかれ。

仏法の妙なる術は、むなしくない。

Q.

インドと中国の古今を聞くと、石が竹に当たった音を聞いて道を悟った者(である香厳の智閑)がいるし、桃の花の色形を見て心を明らめた者(である霊雲志勤)がいる。

まして、釈迦牟尼仏は明けの明星を見た時に道を証し、阿難は門前の竿が倒れた所に法を明らめ、それだけではなく、三十三祖の大鑑禅師より後に、五家の間で一言半句の下に心の境地を明らめた者も多い。

彼らは必ずしも、かつて坐禅して道をわきまえていた者だけではないでしょう?

A.

古今に、色を見て心を明らめた人や、音声を聞いて道を悟った人は共に、道をわきまえる事に、疑義を抱かず、量らず、抜群の第一人者であった事を知るべきである。

Q.

西のインド人および中国人は元より性質が正直である。

アジアの中核地なので、仏法で教化すると、とても早く会得して入る。
我が国、日本は昔から人に「仁智」、「思いやりと知」が少なくて、正しさの種が積もり難い。
未開の地である事を恨まずにはいられない。
また、この国、日本の出家者は、中国の在家者にも劣っている。
世の全てを挙げて、愚かで、心が狭量である。
深く有為の功に執着して、事相の善を好む。(外聞、外見が良い善だけを好む。)
この様な輩でも、坐禅すれば、たちまち仏法の証を得るのでしょうか?

A.
言う通りである。
我が国、日本の人には未だ思いやりと知が遍(あまね)く行きわたっておらず、人間が、ねじ曲がっている。
たとえ正直の法を示しても、法という甘露が、かえって毒と成ってしまうであろう。
名声と利益には趣(おもむ)きやすく、惑(まど)いや執着が解け難い。
けれども、仏法の証に入るために、必ずしも人や天人の「この世の知」をもって世を出る「船出」、「出航」とするわけではない。
釈迦牟尼仏の在世でも、手毬(てまり)によって四果を証した人や、袈裟を肩に掛けて大道を明らめた人は共に、暗愚な輩、狂愚な動物的人間の類(たぐい)である。
ただし、正しい信心の助ける所によって、惑(まど)いを離れる道が有る。

また、愚かな老いた出家者が黙って坐禅していたのを見て食べ物を捧げた在家者の女性が悟りを開いたのは、知によらず、文書によらず、言葉を待たず、語られるのを待たず、ただ、正しい信心に助けられたのである。

また、釈迦牟尼仏の教えが三千界に広まっているのは、わずか二千余年間の前後である。

国土は多様であり、必ずしも思いやりと知の国ばかりではない。

諸国の人も、また、必ずしも利発な知が有る聡明な人ばかりではない。

けれども、如来の正しい法は元より不思議な大いなる功徳の力を備えていて、時が至れば、その国土に広まる。

人は、まさに、正しく信じて修行すれば、利発と愚鈍を分けず、等しく道を得る。

我が国、日本は思いやりと知の国ではないが、日本人の知力や理解力が愚かであるからと言って、日本人は仏法を会得できないと思う事なかれ。

ましてや、人は皆、知の正しい種が豊かである。

ただ、継承して会得する事は稀(まれ)であり、受用する事が未だなのである。

先述では、問答形式で問答を行き来し、客観と主観が交互する事が、妄(みだ)りっぽかった。

しかし、いくらかは華無き空に華を添えられたであろう。

さて、この国、日本は、坐禅して道をわきまえる事において、未だ、その宗旨が伝わっておらず、知ろうと志す者は悲しむべきである。

そのため、わずかではあるが、異国の見聞を集め、明らかな師の真の秘訣を記し留めて、学への参入を願い求めている人に聞かせられたらと思う。

この他、禅の寺の規範および寺院の格式は、今は、示す暇（ひま）が無いし、また早々に粗末に示すべきではない。

おおよそ、我が国、日本は、日本海以東の所にあって、煙の雲は遥かであるけれども、欽明天皇や用明天皇の時代の前後から西方の仏法が東に進んで広まったのは、人々にとって幸いである。

それなのに、名相事縁が繁（しげ）って乱れて、修行の所にわずらう。

今は破れた粗末な僧衣と乞食用の器を生涯として、青巌白石の辺に茅を結んで正しく坐禅して修練していたら、仏の向上の事が、たちまち、あらわれて、一生を賭けて学に参入する大事は速（すみ）やかに究極に到達したのである。

これは「龍牙の誡勅」、「釈迦牟尼仏の霊山の誡勅」であり、初祖の迦葉が鶏足山で死んで遺（のこ）した家風である。

坐禅の儀則は、私、道元が過去に嘉禄の頃に撰集した「普勧坐禅儀」によって行うべきである。

仏法を国中に弘（ひろ）め通じさせるには、王の勅を待つべきである、といえども、再び釈迦牟尼仏が霊山で遺（のこ）し嘱託した仏法を思えば、今、百万億の国土に出現している王公貴族や宰相や大臣や将軍は皆、共に、かたじけない事に、仏の勅を受けて、前の生で仏法を護り保持するという平素からの願いを忘れず、生まれて来た者なのである。

仏の化を敷（し）く境（さかい）は、いずれの所も仏の国土ではない事は無い。

このため、仏祖の道を流通させるのに、必ずしも所を選ばず、縁（えん）を待つべきではなく、ただ、今日を初めと思おう。

なので、仏法を集め記して、仏法を願い求める達道者と併（あわ）せて、道をたずねて雲の様に漂（ただよ）い浮草の様に立ち寄っている学へ参入したい真の一流の修行者に残す。

時に、千二百三十一年の秋に、かつて宋の時代の中国に入り、仏法を伝えている沙門である道元が記した。

弁道話

摩訶般若波羅蜜

観自在菩薩が知への到達を深く行った時、「色受想行識」という「五蘊」は皆、空であると渾身で照らして見た。

「五蘊」は、「色受想行識」であり、五枚の知である。

照らして見る事は、知である。

この主旨を開演して言葉を形成して現して言うと、「色即是空」、「色は空である」し、「空即是色」、「空は色である」し、色は色であるし、空は空であるし、門の内外で摘める百草であるし、(森羅)万象である。

「眼耳鼻舌身意」という「五感と意識」と、「色声香味触法」という「五感覚と法」の、十二枚の知への到達は、十二の入である。

また、「眼耳鼻舌身意」という「五感と意識」と、「色声香味触法」という「五感覚と法」と、「眼(識)耳(識)鼻(識)舌(識)身(識)意識」という「五感と意識への理解」は、十八枚の知である。

また、「苦集滅道」という「この世は苦であり、執着が苦を招き集めており、執着を滅する事ができ、執着を滅する道が有る事を知る」のは、四枚の知である。

また、布施、浄戒、安忍(または忍辱)、精進、静慮、知は、六枚の知である。

また、今、形成されて現れている、無上普遍正覚は、一枚の知への到達である。

また、過去、現在、未来は、三枚の知への到達である。

また、「地水火風空識」という「四大元素と空と理解」は、六枚の知である。

また、世で常に行われている、「行住坐臥」という「歩いて動く、止まる、坐る、横たわる」は、四枚の知である。

釈迦牟尼仏の会の中で、ある男性の出家者が密かに次の様に思った。

私は、「般若心経」、「摩訶般若波羅蜜多心経」、「大いなる知へ到達した心の経」の、とても深い知への到達を敬礼するべきである。

「摩訶般若波羅蜜多心経」の中には「諸法」、「全てのもの」の生から滅までの全ての事は書かれていないけれども、

「摩訶般若波羅蜜多心経」によって、

戒蘊、定蘊、慧蘊、解脱蘊、知見蘊を確立でき、

預流果、一来果、不還果、阿羅漢果を確立でき、

独覚を確立でき、

無上普遍正覚を確立でき、

「仏法僧」という「三宝」を確立でき、

妙なる法の輪を転じて、情が有る全ての生者を仏土へ渡し終える事ができる。

釈迦牟尼仏は、その出家者の密かな思いを知って、その出家者に「その通り、その通り、『摩訶般若波羅蜜多心経』の、とても深い知への到達は、微細な細部まで絶妙なので、測り知り難い」と告げた。

ある出家者の密(ひそ)かな思いにおいて、(大衆が)全てのものを敬礼する所で、「摩訶般若波羅蜜多心経」の中には「全てのものの生から滅までの全ての事は書かれていない」と知ったのが敬礼である。

「摩訶般若波羅蜜多心経」の中には「全てのものの生から滅までの全ての事は書かれていない」と知っても、まさに正しく「摩訶般若波羅蜜多心経」を敬礼した時に、確立できる知が形成されて現れた。

正しく「摩訶般若波羅蜜多心経」を敬礼した時に、「摩訶般若波羅蜜多心経」によって、

戒蘊、定蘊、慧蘊、解脱蘊、解脱知見蘊を確立でき、

預流果、一来果、不還果、阿羅漢果を確立でき、

独覚を確立でき、

無上普遍正覚を確立でき、

「仏法僧」という「三宝」を確立でき、

妙なる法の輪を転じて、情が有る全ての生者を仏土へ渡し終える事ができる、

という知が形成されて現れたのである。

「五蘊皆空」、「『色受想行識』という『五蘊』はみな空(くう)である」や、「色即是空」、「色は空(くう)である」といった「摩訶般若波羅蜜多心経」による知とは、「無」と呼ばれるものの知である。

この様に、「摩訶般若波羅蜜多心経」によって、無を確立できる。

「摩訶般若波羅蜜多心経」によって無を確立できるのは、微細な細部まで絶妙なので測り知り難い知への到達である。

憍尸迦とも呼ばれるインドラである帝釈天は、空(くう)の理解の第一人者である釈迦牟尼仏の十大弟子の須菩提(スブーティ)に「高徳の須菩提(スブーティ)よ、もし『菩薩摩訶薩』、

『無上普遍正覚を求める大いなる修行者』が、とても深い『摩訶般若波羅蜜多心経』を学びたいと欲したら、どの様にして学ぶべきでしょうか？」と質問した。

須菩提（スブーティ）は「帝釈天よ、もし無上普遍正覚を求める大いなる修行者が、とても深い『摩訶般若波羅蜜多心経』を学びたいと欲したら、虚空であるかの様に学ぶべきである」と答えた。

そのため、知を学ぶと虚空に成り、虚空に成るには知を学ぶのである。
（神の知を学ぶと普遍の無に成り、普遍の無に成るには神の知を学ぶのである。）

また、帝釈天は釈迦牟尼仏に「釈迦牟尼仏よ、もし善い男子達や善い女の人達が、所説の、とても深い『摩訶般若波羅蜜多心経』を受持したり、読んだり、理の通りに思惟（しゆい）したり、他人の為に演説したりする時に、私、帝釈天は、どの様に守護するべきでしょうか？　お願いします、釈迦牟尼仏よ、哀れみを垂れて教示してください」と言った。

その時、須菩提（スブーティ）は帝釈天に「帝釈天よ、あなたは、法には守護するべき弱点が有る様に見えますか？」と言った。

帝釈天は「いいえ、高徳の須菩提（スブーティ）よ、私には法に守護するべき弱点が有る様には見えません」と言った。

須菩提（スブーティ）は「帝釈天よ、もし善い男子達や善い女の人達が、『摩訶般若波羅蜜多心経』に説かれている様に修行すれば、とても深く到達している知自体が守護してくれるのである。

もし善い男子達や善い女の人達が、『摩訶般若波羅蜜多心経』に説かれている様に修行すれば、とても深く到達している知は常に遠く離れたりはしない。

まさに知るべきである。

(悪)人や、(悪人の霊といった、生きている)人ではない者が、修行者の痕跡や隙(すき)を伺(うかが)い求めて損害を与えたいと欲しても、結局、痕跡や隙(すき)を得る事は不可能なのである。

帝釈天よ、もし守護したいと欲するならば、虚空であるかの様に守護しなさい。

とても深い『摩訶般若波羅蜜多心経』を守護する事と、とても深い知を守護する事と、諸々の『菩薩』、『無上普遍正覚を求める修行者』を守護する事は、虚空を守護する事と全く同じである」と言った。

知るべきである。

受持したり、読んだり、理の通りに思惟(しゆい)したりする事は、知を守護する事に成る。

知を守護したいと欲するのであれば、知や知のものを受持したり、知の文書を読んだり、知の理の通りに思惟(しゆい)したり等するべきである。

古代の仏と等しい、道元の亡き師である、五十祖の如浄は「渾身は口に似ていて虚空にかかっている。

東西南北の風を問わずに、唯一普遍に他人の為に知を話している。

ティティントゥリン ティティティントゥ」と言った。

これは、仏祖の正統な代々の知についての話である。

渾身は知であり、他人の為の渾身は知であり、渾身の自省は知であり、渾身で東西南北に知をたずねるのは知である。

釈迦牟尼仏は「舎利子(シャーリプトラ)よ、諸々の情が有る生者は、到達している知に、まるで釈迦牟尼仏が住んでいるかの様に、知に捧げものを捧げて敬礼しなさい。
知への到達を思惟(しゆい)するには、釈迦牟尼仏に捧げものを捧げて敬礼するかの様に思惟(しゆい)しなさい。
なぜなら、到達している知は、釈迦牟尼仏である(と言える)。
釈迦牟尼仏は、到達している知である(と言える)。
なぜなら、舎利子(シャーリプトラ)よ、一切の『如来』、『応正等覚』、『無上普遍正覚に相応しい者』は皆、知への到達によって出現する事ができるからである。
舎利子(シャーリプトラ)よ、一切の菩薩摩訶薩、独覚、阿羅漢、不還、一来、預流などは皆、到達している知によって出現する事ができるからである。
舎利子(シャーリプトラ)よ、一切の世間の十善業道、四静慮、四無色定、五神通は皆、到達している知によって出現する事ができるからである」と言った。

そのため、釈迦牟尼仏は、到達している知である(と言える)。

到達している知は、諸法である(と言える)。

諸法は、空の相であり、「不生不滅」、「生じる事も無いし消滅も無い」し、「不垢不浄」、「汚いも無いし綺麗も無い」し、「不増不減」、「増減しないしさせられない」。
(人力では法則や、普遍といった概念を増減させたりする事ができない。)

到達している知が形成されて現れるとは、釈迦牟尼仏が形成されて現れる事である。

質問して理解するべきである。

理解できる様に学に参入するべきである。

知に捧げものを捧げて敬礼する事は、釈迦牟尼仏を見聞きする事である。

釈迦牟尼仏や知を見聞きする事は、釈迦牟尼仏に成る事である。

正法眼蔵　摩訶般若波羅蜜(大いなる知への到達)(「摩訶」は「大いなる」を意味する。「般若」は「知」を意味する。「波羅蜜」は「この世から仏土という彼岸への到達」などを意味する。)

その時、千二百三十三年、夏、観音導利院にいて僧達に示した。

神通

(思いやりを伴う)「理解」という意味での「神通」、「神に通じる事」、「仏の心に通じる事」は、仏教という家では日常茶飯事であり、諸仏は飽きて怠る事が未だに無い。

「神通」には、六神通、一神通、無神通、最上神通が有る。

三十三祖の慧能が朝に三千回、夕暮れに八百回、指導されたのが、(「理解」という意味での)「神通」の時の様子である。

(各、仏の「神通」、「理解」は、)仏と共に生じるといえども仏に知られず、仏と共に滅ぶといえども仏を破らない。

(天のうち、)上位の天でも同上であり、下位の天でも同上であり、修行でも同上であり、証の会得でも同上である。

雪山や、木や石と同様である。

過去の諸仏は、釈迦牟尼仏の弟子であり、袈裟を捧げて来たり、塔を捧げて来た。

この時、釈迦牟尼仏は「諸仏の神通は不可思議である」と言った。

であれば、現在でも未来でも同様である、と知る事ができる。

大潙禅師は、釈迦如来の直系の三十七祖であり、百丈の懐海から法を嗣いだ。

十方に出て寺を興してきた多くの仏祖は、大潙の法の子孫である。

ある時、大潙が横たわっていると、(思いやりから、大潙を起こしに、)仰山の慧寂が来た。

(思いやりから、慧寂が起こしに来るのが遅かったと思わせないために、)大潙は、向きを変えて、壁を向いて横たわっ(て、寝ていたふりをし)た。

慧寂は「慧寂は和尚様の弟子です。壁を向いて寝ていたふりをしなくても、私、慧寂は気にしませんよ」と言った。

大潙は気後れした(ので、慧寂に洗面の用意を整えて欲しいと頼む事ができなかった)。

(思いやりから、大潙は慧寂に「神通」、「理解」について教えようと、)慧寂が部屋を出ると、大潙は「慧寂」と呼んだ。

慧寂が戻ると、大潙は「老僧である私、大潙は、見た夢を話すので聞きなさい」と言った。

(大潙は寝ていたふりをしていたので夢を見たはずが無いが、思いやりから、とりあえず、)慧寂は頭を垂れて聴く姿勢に成った。

大潙は「私のために、夢の原因を辿(たど)ってみてくれないか?」と言った。

(大潙が寝ぼけた事をわざと言ったので、慧寂は大潙が洗面して気持ちを目覚めさせたいのだなと理解して、思いやりから、)慧寂は、水を入れた一つの盆と一枚の手を拭く布を取って来た。

大潙は洗面した。

大潙が洗面し終わって坐して、わずかな時間をおいてから、(思いやりから、わずかな時間をおいて、隣の部屋から、)香厳の智閑が来た。

大潙は智閑に「まさに今、私、大潙と慧寂は、(思いやりを伴う、)一つ上の『神通』、『理解』を行った。矮小な『神通』、『理解』、『超常現象』とは違う」と言った。

智閑は「智閑は隣の部屋にいたので、その『神通』、『理解』を理解していますよ」と言った。

大潙は「では、智閑よ、試しに理解した事を言ってみなさい」と言った。

(沈黙して、)智閑は一杯の茶を淹(い)れて来た。

大潙は「慧寂と智閑の『神通と知』、『理解と機知』は、釈迦牟尼仏の十大弟子のうち、神通力の第一人者の目犍連(モッガラーナ)と、知の第一人者の鶖鷺子(シャーリプトラ)よりも、遥かに優れている」とほめた。

仏教という家の神通を知ろうと思うならば、大潙の言葉と理解の学に参入するべきである。

「矮小な『神通』、『理解』とは違う」ので、真の「神通」、「理解」を学ぶ事を「仏学」、「仏を学ぶ」と呼び、そうでなければ、そう呼ばないのである。

正統な代々伝わる、(思いやりを伴う)「神通」、「理解」と知なのである。

西のインドの外道の神通、「二つの乗り物」の段階の人の神通、霊感が無い文字だけの経典の似非学者の所説や学説を学ぶ事なかれ。

大潙の神通を学んだ時、真の「神通」、「理解」は、無上であり、(矮小な「神通」、「理解」よりも)一つ上であると見聞きできる。

大潙は、横たわっていてから、(思いやりから、慧寂が起こしに来るのが遅かったと思わせないために、)壁を向いて横たわり(寝ていたふりをし)、(思いやりから、慧寂が起こしたら、パッと)起きる用意をしていて、(思いやり

から、大潙は慧寂に「神通」、「理解」について教えようと、)慧寂を呼んで夢の話をし、洗面を終え坐した。
(思いやりから、隣の部屋から、)わずかな時間をおいてから智閑が来た。
慧寂は、(大潙は寝ていたふりをしていたので夢を見たはずが無いが、思いやりから、とりあえず)頭を低くして大潙の夢の話を聴き、(思いやりから、)水を入れた一つの盆と一枚の手を拭く布を取って来た。
大潙は、それを「まさに今、私、大潙と慧寂は、一つ上の『神通』、『理解』を行った」と言った。
この(思いやりと)「神通」、「理解」を学ぶべきである。
前記の様に、仏法を正しく伝えられた祖師の大潙が(「思いやりを伴う理解が神通である」と)言っているのである。
洗面の夢を暗黙に話した、と(理解して)言えない様ではいけない。
(思いやりを伴う理解は、)一つ上の神通であると確信するべきである。
大潙が「矮小な『神通』、『理解』、『超常現象』とは違う」と既に言っているから、「二つの乗り物」の段階の人の矮小な思い量りや見解と同じであるべきではない。
「十聖三賢」の未熟な菩薩の段階の人などと同じであるべきではない。
彼らは皆、矮小な「神通」、「理解」、「超常現象」を習い、矮小な身(心)に相応しい量(の「神通」、「理解」、「超常現象」)しか会得できない。
仏祖の(思いやりを伴う)「大神通」、「大いなる理解」には及ばない。
仏祖の神通は、(思いやりを伴う)「仏神通」(、「神の理解」)であり、「仏向上神通」(、「神や神の人の向上の理解」)である。
仏祖の神通を習おうとする人は、「魔」、「仏敵」(、「神への敵対者」)や、外道に心を動かされるべきではない。

仏祖の神通は、霊感が無い文字だけの経典の似非学者には、未だ聞かせてもらえない所であり、聞いても信じて受け入れ難い物である。
「二つの乗り物」の段階の人、外道、霊感が無い文字だけの経典の似非学者は、矮小な「神通」、「理解」、「超常現象」を習い、(思いやりを伴う)「大神通」、「大いなる理解」を習わない。
諸仏は、(思いやりを伴う)「大神通」、「大いなる理解」に住んで保持し、伝えている。
これは、「仏神通」(、「神の理解」)による物である。
(思いやりを伴う)「仏神通」(、「神の理解」)でなければ、慧寂は水を入れた一つの盆と一枚の手を拭く布を取って来ないし、大潙は向きを変えて壁を向いて横たわらないし(寝ていたふりをしないし)、わずかな時間をおいてから智閑は来ない。
(思いやりを伴う)「大神通」、「大いなる理解」に包含されて、「小神通」、「奇跡」も存在するのである。
(思いやりを伴う)「大神通」、「大いなる理解」は「小神通」、「奇跡」を包含しているが、「小神通」、「奇跡」だけからでは「大神通」、「大いなる理解」を知る事ができない。
「小神通」、「奇跡」とは、毛で巨大な海を飲み込み、芥子(からし)の種に須弥山を納める事である。
「小神通」、「奇跡」とは、身体の上に水を出し、身体の下に火を出す事などである。
五神通と六神通は皆、「小神通」、「奇跡」である。
「小神通」、「超常現象」にとらわれている輩は、「仏神通」(、「神の理解」)は夢にも未だ見聞きしないのである。

「五神通と六神通が『小神通』、『奇跡』である」と言うのは、「五神通と六神通」、「奇跡」は修行と証(の向上または堕落や怠惰)によっては(左右されて)汚染され、時と場所によっては(左右されて)中断されてしまう。

「五神通と六神通」、「奇跡」は、(奇跡を起こす者の)存命中は存在するが、(奇跡を起こす者の肉体の)死後には「この世」に出現しない。

(五神通と六神通の能力が有る人は、)五神通と六神通の能力は自分には存在するが、他者には存在させられない。

「五神通と六神通」、「奇跡」は、(信心深い人がいる場所等、)ある場所では現れても、他の場所では現れない。

「五神通と六神通」、「奇跡」は、(信心深い人が多数いた)過去には現れても、(信心深い人が少数である末法の世の)現在には現れ得ない。

諸仏の教え、行い、証は全て、(思いやりを伴う)「神通」、「理解」によって形成されて現れるのである。

(思いやりを伴う)「大神通」、「大いなる理解」は、そうではない。

諸仏の辺(ほとり)に入った時だけではなく、仏が向上していく時にも、諸仏の教え、行い、証は全て、(思いやりを伴う)「神通」、「理解」によって形成されて現れるのである。

神通が有る仏の化の流儀は、実に、不思議である。

「身体」、「肉体」を持つよりも先に「神通」(、「神性」)は現れるので、この世の過去、現在、未来という時間とは無関係なのである。

「仏神通」(、「神の理解」)でなければ、諸仏が、悟りを求める事を思い立って心したり、修行したり、無上普遍正覚を証したり、寂滅した心を持ったりする事はできないのである。

「この世」という「無尽法界」という海が常に不変であるのは全て、「仏神通」（、「神の理解」）による物なのである。

毛で巨大な海を飲み込むだけではなく、毛に巨大な海を保持させ任せ、毛によって巨大な海が現され、毛で巨大な海を出し、毛で巨大な海を使うのである。

一つの毛で尽法界を飲み込んだり出したりできる時、唯一の尽法界が飲み込まれたら、もう尽法界は無いのであると誤って学ぶ事なかれ。

芥子（からし）の種に須弥山を納めたら、もう須弥山は無いのであると誤って学ぶ事なかれ。

芥子（からし）の種が須弥山を出す事が有るし、法界が無尽蔵の海の様でも、芥子（からし）の種が法界を出現させる事が有る。

毛が巨大な海を出す際に、芥子（からし）の種が巨大な海を出す際に、一瞬でも出せるし、万劫にも無限にも出せる。

何ものが、毛や芥子（からし）の種に、万劫でも無限でも、一瞬でも、巨大な海や須弥山を出す事を可能とさせているのか？

「神通」、「理解」が、毛や芥子（からし）の種に、万劫でも無限でも、一瞬でも、巨大な海や須弥山を出す事を可能とさせている。

可能とさせる事が、「神通」、「理解」である。

そのため、「神通」、「理解」は、「神通」、「理解」を生じ出させるばかりである。

さらに、「神通」、「理解」は、この世の過去、現在、未来の中で存在したり滅んだりしないと学ぶべきである。

諸仏は「神通」、「理解」にのみ遊戯する。

蘊公と呼ばれる龐居士は、祖師の会の偉人である。
龐居士は、三十五祖の石頭希遷の会と、江西の三十五祖の馬祖道一の会の両方に参入して学んだだけではなく、多数の、正道に適った達道者に見えたり出会ったりした。

ある時、龐居士は、「神通の並行での妙なる使用とは、水の運搬や、柴の薪の運搬である」と言った。

この道理の学によく参入して究めるべきである。
水の運搬とは、水を載せて運ぶ事である。
自分で作為的に行う事も有るし、他人に教えて行わせる事も有るが、水を載せて運ぶのである。
これは神通が有る仏である。
知る事には存在や時間が関わるが、神通は神通である。
人々が知らなくても、「神通は神通である」という法は、廃止されず、滅びない。
人々が知らなくても、法は法である。
「水の運搬は神通である」と知らなくても、「神通は水の運搬である」事は退けられない。
柴の薪の運搬とは、薪を運ぶ事である。
例えば、三十三祖の慧能が昔に受けた指導の様な物である。
三十三祖の慧能は、朝に三千回指導されても「神通」、「理解」とは知らず、夕暮れに八百回指導されても「神通」、「理解」とは自覚しなかったが、「神通」、「理解」は形成されて現れた。

実に、諸仏如来の神通の妙なる使用を見聞きする人は、必ず正道を会得できるし、必ず言い得る様に成る。

このため、一切の諸仏が正道を会得できたり言い得たりできる様に成る事は、必ず「神通力」、「理解力」によって成就したのである。

そのため、今、「二つの乗り物」の段階の人は、「水を出現させる事が神通である」と言っていないで、「水の運搬は大神通である」事を学ぶべきである。

「水や柴の薪の運搬」、「水や燃料の運搬」は、未だ廃れないし、人々は、ないがしろにしない。

このため、昔から今にまで及び、あちこちに伝わっている。

少しの間も退転しないのは、神通の妙なる使用である。

これは、大神通であり、矮小な神通とは違う。

その昔、三十八祖の洞山良价が三十七祖の雲巌曇晟のそばで仕えていた時に、三十七祖の雲巌曇晟は「洞山良价は、神通の妙なる使用とは、どの様な物であると考えているのか？」と質問した。

三十八祖の洞山良价は、手前で両手の全ての指を交差させて握って立った。

また、三十七祖の雲巌曇晟は「(洞山良价は、)神通の妙なる使用とは、どの様な物であると考えているのか？」と質問した。

三十八祖の洞山良价は、敬礼してから退席した。

この「因縁」、「出来事」は、実に、神通によって、言葉を承って主旨を会得した事による物である。

神通による事が存在して箱と蓋(ふた)が適合したのである。

知るべきである。
神通の妙なる使用では、不退転である法の子孫がいて、無上の高みの祖師がいる。
いたずらに外道、「二つの乗り物」の段階の人と等しいと思うなかれ。
仏道には、身体の上に水を出し、身体の下に火を出す、神の奇跡、神通が有る。
尽十方界は、「沙門」、「修行者」の唯一の真実の実体である。
須弥山の周囲の九山八海や、「性海」や、「一切知」、「一切の存在についての知」という海の水は、身体の上中下に水を出させ、身体の上中下以外の所に水を出させる。
知などの海が、火を出させるのも、水を出させるのと同様である。
知などの海は、地水火風の四大元素などだけではなく、身体の上に仏を出し、身体の下に仏を出す。
知などの海は、身体の上に祖師を出し、身体の下に祖師を出す。
知などの海は、身体の上に無量阿僧祇劫を出し、身体の下に無量阿僧祇劫を出す。
知などの海は、身体の上に法界という海を出し、身体の下に法界という海を出す、だけではない。
知などの海は、世界という国土を七つ八つ出し、二つ三つ飲み込む。
四大元素、五大、六大、諸大、無量大は全て、出現したり滅びたりする、出したり飲み込んだりする、この世での神通である。
大地、虚空の一つ一つは、出したり飲み込んだりする、この世での神通である。

芥子(からし)の種に転じられる事を力量とし、毛という口(くち)が覆いかかって飲み込まれる事を力量とする。

人の理解や人知の及ばない所より共に生じて、人の理解や人知の及ばない事に住んで保持し、人の理解や人知の及ばない実体に帰る。

実に、長短とは無関係である、仏の神通の変化する相は、一心に推測と思い量りの全力を挙げても、例える事しかできない。

昔、五通仙人が釈迦牟尼仏に奉仕していた時に、五つの神通力を得た五通仙人は「仏には六つの神通力が有ります。私には五つの神通力が有ります。残りの一つの神通力とは、どんな物なのですか?」と釈迦牟尼仏に質問した。

釈迦牟尼仏は「五通仙人」と呼んだ。

五通仙人は「はい」と答えた。

釈迦牟尼仏は「何でも一つの神通力を私、釈迦牟尼仏に質問しなさい」と言った。

(

「六神通」とは、無限の数の神通力を六種類に分類できる事、理解の数が六である事、「神通」が「神に通じる事」、「神を理解する事」、「神と理解し合う事」を意味する。

五通仙人は「六神通」を神通力の数が六つしか無い事と誤解していたので、仏は、五通仙人に考えさせる言い方で、五通仙人の誤解を指摘した。

)

この「因縁」、「出来事」をよく学に参入して究めるべきである。

仏ではない五通仙人が、どうして、仏には六神通が有る、と知る事ができるであろうか？　いいえ！　知る事はできない！

仏には無限の量の神通と知が有るのである。

ただ六つの神通しか無い訳が無い。

仮に、たとえ六つの神通だけを見ても、仏ではない五通仙人には六つの神通でさえも極める事はできない。

まして、他の七つ以上の無限の神通を、仏ではない五通仙人は、夢にも見る事もできない。

しばらく自問自答しよう。

五通仙人は、たとえ釈迦牟尼仏を肉眼で見ても、「見仏」、「仏の心の理解」は未だできていなかったのであろう。

五通仙人は、たとえ「見仏しても」、「釈迦牟尼仏を肉眼で見ても」、「釈迦牟尼仏を見る事」、「釈迦牟尼仏の心の理解」は未だできていなかったのであろう。

五通仙人は、たとえ釈迦牟尼仏を肉眼で見ても、たとえ仏を肉眼で見ても、「自分の心を見る事」、「自分の心の理解」を未だ、できていなかったのであろう、と自問自答して明らかに知るべきである。

この自問自答で、葛藤の仕方を学ぶべきであり、葛藤を断つ事を学ぶべきである。

まして、「仏には六つの神通力が有ります」と言うのは、隣人の珍しい宝を数えるよりも、劣っている。矮小である。

釈迦牟尼仏が「何でも一つの神通力を私、釈迦牟尼仏に質問しなさい」と言った意味は、どうであろうか？　理解したであろうか？

五通仙人に、六つ目の神通は有るとも、無いとも、言わなかった。

仮に、六つ目の神通の有無をたとえ説いても、五通仙人は、どうして、「何でも一つの神通力」に通じる事ができるであろうか？　いいえ！　できない！

なぜなら、五通仙人には五つの神通力が有るが、（「神の理解」という意味で）仏が有している「六神通」の中の「五神通」ではない。

「仏通」、「仏の理解」は含有している仙人への理解によって「仙人通」、「仙人による理解」を見通す事ができるが、どうして、「仙通」、「仙人による理解」によって「仏通」、「仏の理解」に通じて理解する事ができ得ようか？　いいえ！　できない！

もし五通仙人が仏の一通でも通じて理解する事が有れば、その一通によって仏を「神通」、「理解」するべきである。

仙人の外見は「仏通」、「仏の理解」に似てはいるが、仙人は仏ではない。仏の流儀の外見は「仙通」、「仙人の理解」に似てはいるのが仏の流儀であるといえども、「仙通」、「仙人の理解」は「仏神通」、「仏の理解」ではないと知るべきである。

仏の心に通じなければ、五通仙人が得た五つの神通力は全て、仏の五つの神通力とは違うのである。

五通仙人は軽率にも「残りの一つの神通力」を質問したが、得ていない神通力を聞いて、何の用が有ったのか。

釈迦牟尼仏の言葉の意味は文字通り「何でも一つの神通力を私に質問しなさい」なのである。

釈迦牟尼仏の言葉の意味は、五通仙人が得ている五つの神通力を一つでも二つでも釈迦牟尼仏に質問しなさい、五通仙人が得ている五つの神通力のう

ち一つの神通力でさえも五通仙人は理解できていないからである、という事なのである。

そのため、仏の神通と、仏ではない他の者の神通は、「神通」という名前は同じだけれども、「神通」という名前が持つ意味は遥かに異なっている。

三十八祖の臨済義玄は「古代の人が言うには、この世の如来の全身の姿は世間に順応する為の物である。

人々が『断見』、『肉体が死ぬと全て滅びるという誤った見解』を生まない様に、仮に『三十二相』や『八十種好相』と言っているのである。

この世の身体は無上普遍正覚の実体ではなく、この世の肉眼では見えない姿が如来の真の姿である。

あなたは『仏に六神通が有るのは不思議である』と言うが、一切の諸々の、天人、神通力を得た仙人、阿修羅、強い霊にも神通力は有るが、一切の諸々の、天人、神通力を得た仙人、阿修羅、強い霊は仏であろうか？　いいえ！

仏ではない！

仏道の人達よ、誤る事なかれ。

阿修羅は、帝釈天と戦い、負けて、八万四千の眷属と共に蓮根の穴の中に入ったが、これは神聖な事であろうか？　いいえ！　神聖ではない！

私が話題に挙げた阿修羅が蓮根の穴に入る様な神通力は全て、業に通じてしまう代物であり、何ものかに通じてしまい左右されてしまう代物である。

仏の六神通は、そんな物ではない。

色の領域で色に惑わされず、

音声の領域で音声に惑わされず、

香りの領域で香りに惑わされず、

味覚の領域で味覚に惑わされず、
触感の領域で触感に惑わされず、
法の領域で法に惑わされない。
そのため、『色声香味触法』という『五感と法』は空の相であると到達すれば、とらわれなく成る。
これが、何ものにも左右されない仏道の人である。
この仏道の人は、『色受想行識』という『五蘊』において漏れが有る性質が残っているといえども、地上で神通を行う。
仏道の人達よ、真の仏の実体は、この世の肉眼で見える形や相ではない。
あなたは、ただ、幻の上に模様を作っているだけなのである。
たとえ仏の肉体が『この世』の肉眼で見えても、『この世の肉眼で仏の本質が見える』と言うのは、人をだますと言われる『野狐の精霊』の様な者の誤った見解であり、真の仏の教えではなく、外道の見解である」と言った。

そのため、諸仏の六神通は、一切の諸々の、天人や、鬼神や、「二つの乗り物」の段階の人などが及ぶ事ができない物であり、測り知る事ができない物である。
仏道の六神通は、仏の弟子だけが単一に伝えてもらえる。
仏道の六神通(、神の六神通)は、仏の弟子(、神の弟子)以外は伝える事ができない物である。
(「理解」という意味での)仏の六神通は仏道で単一に伝えられている。
(「理解」という意味での)六神通を単一に伝えられていない者は、仏の六神通を知らない。

（「理解」という意味での)仏の六神通を単一に伝えられていない者は、仏道の人ではないという学に参入するべきである。

三十六祖の百丈の懐海は「眼耳鼻舌の各々で一切の『この世』に有ったり無かったりする諸法に汚染されず貪らない事を、真理の四句の詩を受けて保持していると言い、『四果』を得たと言う。
五感と意識に入ってくるものが後を引かない事を、六神通と言う。
一切の『この世』に有ったり無かったりする諸法に妨げられず、人知と人の理解に左右されない事を、神通と言う。
神通を守る意識が不要な事を、無神通と言う。
無神通の『菩薩』、『修行者』は、跡を調べる事ができず、仏の向上の人であり、最も不可思議な人であり、自身が天である人である」と言った。

これが、仏から仏へ、祖師から祖師へ、伝えている神通である。
諸仏の神通を持つ人は、仏の向上の人であり、最も不可思議な人であり、自身が天である人であり、無神通の「菩薩」、「修行者」である。
一切の「この世」に有ったり無かったりする諸法に妨げられず、人知と人の理解に左右されず、神通を守る意識が不要な事を、無神通と言うのである。
仏道には六神通が有り、諸仏は久しく伝え保持してきた。
六神通を伝えられず保持していない仏は一人もいない。
六神通を伝えられず保持していない人は、諸仏ではない。
六神通とは、五感と意識に入ってくるものが後を引かず、五感と意識に入ってくるものを明らめる事である。

「後を引かない」と言うのは、「六神通の普遍の使用は空であったり空でなかったりする。一つの円の光は内外ではない」という古代の人の言葉である。

内外ではない事が、後を引かない事である。

後を引かない事の、修行を行い、学に参入し、証に入るには、五感と意識に入ってくるものに動かされ過ぎない事である。

「動かされ過ぎない」と言うのは、動かされ過ぎる者は三十回分、棒で指導されるのである。

この様に、六神通の学に参入して究めるべきである。

仏教という家の法を嗣いだ正統な子孫でなければ、誰が、六神通の理が有る事さえも聞けるであろうか？　いいえ！　聞けない！

仏教という家の法を嗣いだ正統な子孫でなければ、いたずらに外へ向かって走りまわる事を家に帰っていると誤って思うだけである。

また、「四果」は、仏道の日常の手段であるが、正しく伝えている経典の学者はいない。

砂や石を数える様な、霊感が無い文字だけの学者の類が、どうして、「四果」という果実を得る事が有るであろうか？　いいえ！　霊感が無い文字だけの学者が「四果」を得る事は無い！

矮小なものを得て満足している類の者で、六神通の学に参入して究める事に到達した者は未だいない。

六神通は、仏から仏へ伝承している物である。

「四果」とは、真理の四句の詩を受けて保持する事である。

「真理の四句の詩を受けて保持する」と言うのは、「眼耳鼻舌の各々で一切の『この世』に有ったり無かったりする諸法に汚染されず貪らない事」である。

汚染されず貪らない事は、汚染されない事である。

汚染されない事とは、平常心であり、「私は常に、ここ(、汚染されない事)を大切にする」事である。

これが、仏道で正しく伝えられている、六神通と「四果」である。

これと異なる見解は、仏法ではない、と知るべきである。

そのため、仏道には、必ず、「神通」、「理解」によって到達するのである。

正しい理解によって到達した人は、水の滴(しずく)が巨大な海を飲み込み、微塵が高山をひねり放つ事を、誰が明らかに疑い得るであろうか？　いいえ！　疑い得ない！

神通力を疑わない事が、「神通」、「理解」であるだけである。

正法眼蔵　神通

その時、千二百四十一年、観音導利興聖宝林寺にいて僧達に示した。

坐禅箴

【抜粋】

三十六祖の薬山惟儼が坐禅していると、ある僧が「こつこつ地道に、何を思考しているのですか？」と質問した。

祖師は「かの不思量の奥底を思量している」、「今は思考できない思考を思考しようとしている」と言った。

ある僧は「不思量の奥底なんて、どうしたら思考できるのですか？」、「思考できないものなんて、どうしたら思考できるのですか？」と言った。

祖師は「非思量」、「思考できるであろうか等と思考しないで、とにかく思考するのである」、「できるか心配せずに、とにかく行うのである」と言った。

三十五祖の馬祖道一は、三十四祖の南嶽の懐譲の学に参入して心の印を密(ひそ)かに受けてから、常に坐禅していた。

南嶽の懐譲は、馬祖道一の所に行って「高徳な馬祖道一よ、坐禅は、何を意図しているのか？」と質問した。

馬祖道一は「仏に成ろうと意図しています」と言った。

南嶽の懐譲は一つの瓦(かわら)を取って石の上に当てて磨(と)ぎ始めた。

馬祖道一は「師よ、何をしているのですか？」と質問した。

南嶽の懐譲は「瓦(かわら)を磨(と)いで鏡にするつもりである」と言った。

馬祖道一は「どうして、瓦(かわら)を磨(と)いで鏡にでき得ようか？　いいえ！　できない！」と言った。

南嶽の懐譲は「どうして、仏に成ろうという意図で坐禅して、仏に成る事ができ得ようか？　いいえ！　できない！」と言った。

馬祖道一は「どうすれば仏に成れますか？」と言った。

南嶽の懐譲は「人が牛車に乗っている時に、もし牛車が進まなければ、車を軽く打って進む様に合図するのが良いか？　牛を軽く打って進む様に合図するのが良いか？」(、「坐禅ではなく、仏に成ろうという意図が間違っている」)と言った。

(馬祖道一は、あえて何も応えなかった。)

また、南嶽の懐譲は「(正しく)坐禅を学べば、坐禅している仏を学ぶ事に成る」と言っている。

また、南嶽の懐譲は「もし坐禅を学べば、禅とは坐る事や横たわる事ではない」と言っている。

また、南嶽の懐譲は「もし坐禅している仏を学べば、仏は坐禅という一定の姿勢だけでいるわけではない」と言っている。

また、南嶽の懐譲は「もし坐禅している仏を学べば、殺したかの様に、仏という意識を無くす事に成る」と言っている。

また、南嶽の懐譲は「もし坐禅している姿に執着すれば、坐禅の理に到達できない」と言っている。

【全文】

三十六祖の薬山惟儼が坐禅していると、ある僧が「こつこつ地道に、何を思考しているのですか?」と質問した。

祖師は「かの不思量の奥底を思量している」、「今は思考できない思考を思考しようとしている」と言った。

ある僧は「不思量の奥底なんて、どうしたら思考できるのですか?」、「思考できないものなんて、どうしたら思考できるのですか?」と言った。

祖師は「非思量」、「思考できるであろうか等と思考しないで、とにかく思考するのである」、「できるか心配せずに、とにかく行うのである」と言った。

「非思量」、「思考できるであろうか等と思考しないで、とにかく思考するのである」、「できるか心配せずに、とにかく行うのである」という三十六祖の薬山惟儼の言葉を証明して、こつこつ坐禅する学に参入するべきである。

「非思量」、「思考できるであろうか等と思考しないで、とにかく思考するのである」、「できるか心配せずに、とにかく行うのである」として、こつこつ坐禅する事を正しく伝えるべきであり、それが、こつこつ坐禅する事が仏道に伝わっている学に参入して究める事に成る。

こつこつと地道に思考した人は一人だけではないが、三十六祖の薬山惟儼の言葉は、こつこつと地道に思考する事の説明の第一である。

「かの不思量の奥底を思量している」、「今は思考できない思考を思考しようとしている」。
「思量の皮肉骨髄」、「思考の会得」である。
「不思量の皮肉骨髄」、「今は思考できない思考の会得」である。
ある僧は「不思量の奥底なんて、どうしたら思考できるのですか？」、「思考できないものなんて、どうしたら思考できるのですか？」と言った。
実に、「不思量底」、「不思量の奥底」、「思考できないもの」は、古くから言われているが、「どうしたら思考できるのか？」なのである。
こつこつと地道に坐禅している時に、思考は無いのであろうか？　思考停止するのであろうか？　いいえ！　思考する！
こつこつと地道な向上が、どうして通じないであろうか？　いいえ！　通じる！　理解できる！
下品な卑近で高尚ではない愚かでなければ、こつこつと地道な事を質問して明らかに知る事ができる力量が有るべきである。
思考が有るべきである。
三十六祖の薬山惟儼は「非思量」、「思考できるであろうか等と思考しないで、とにかく思考するのである」、「できるか心配せずに、とにかく行うのである」と言った。
「非思量」、「思考できるであろうか等と思考しないで、とにかく思考するのである」、「できるか心配せずに、とにかく行うのである」という言葉の使用は美しい。
「不思量の奥底を思量する」には、「今は思考できない思考を思考しようとする」には、必ず、「非思量」、「思考できるであろうか等と思考しない

で、とにかく思考する」事、「できるか心配せずに、とにかく行う」事を用いるのである。

「非思量」の時に、「思考できるであろうか等と思考しないで、とにかく思考する」時に、「できるか心配せずに、とにかく行う」時に、自分以外の誰がいるであろうか？　誰が自分に保持させて任せてくれるというのか？　いいえ！　自分だけである！

こつこつと地道に行うのは自分だけれども、(自分以外のものを)思考する、だけではなく、こつこつと地道な行いが(思考の)頭をもたげさせてくれるのである。

「こつこつと地道な行い」は「こつこつと地道な行い」に過ぎないが、「こつこつと地道な行い」をしても、どの様にしたら「こつこつと地道な行い」を思い量る事ができるというのであろうか？　いいえ！　できない！

そのため、「こつこつと地道な行い」は仏に成って行く量には成らないし、法を知った量には成らないし、悟った量には成らないし、会得した量には成らない。

この様に、薬山惟儼は、単一に伝えている、釈迦牟尼仏の直系の三十六祖である。

薬山惟儼から向上して行くと、釈迦牟尼仏は三十六祖であると言える。

この様に、正しく伝える事自体が既に「かの不思量の奥底を思量している」事、「今は思考できない思考を思考しようとしている」事なのである。

それにもかかわらず、近年の愚かな杜撰な似非信者は誤って「坐禅の鍛錬は、(思考停止して、)心中が平穏無事に成れば終わる。(思考停止して)心中が平穏無事に成る事が心の平穏なのである」と言ってしまう。

この誤った見解は、「二つの乗り物」の段階の似非学者よりも劣るし、声聞よりも劣る人乗と天乗の者よりも劣る。

この様な誤った見解を持つ人が、どうして仏法を学んだ人であると言えるであろうか？　いいえ！　仏法を学んだ人ではない！

宋の時代の中国には、この様な誤った見解により誤った鍛錬をしている人が多い。

祖師の道の荒廃を悲しむべきである。

別の類の人もいて、誤って「坐禅して道をわきまえる事は初心者や後進の者にとって重要なのであり、坐禅は必ずしも仏祖の日常の行為ではない。歩いて動く事も禅であり、もちろん坐る事も禅であり、話しても沈黙しても動いても静止しても体を安らかにしていれば良いのである」と言ってしまう。

この様な誤った鍛錬だけには関わるなかれ。

三十八祖の臨済義玄の臨済宗の分派を騙る輩の多くは、この様な誤った見解を教えてしまっている。

仏法の正しい行いを伝えてもらえなかったので、この様に誤った言葉を言ってしまうのである。

初心とは何か？　(仏ではない人の)誰が初心ではないのか？　初心をどの段階であると定義するのか？

知るべきである。

道を学ぶ事に参入して究めるには必ず、坐禅して道をわきまえるのである。

坐禅して道をわきまえる見本の主旨は、仏に成る事を求めずに仏の行いを模倣するのである。

（

仏は、自分らしく存在しようとは思考するかもしれないが、仏に成ろうとは思考しない。

生物学的に、人が人に成ろうとは思考しない様に。
仏の思考の基礎は思いやりである。
）
仏の行いを模倣するのは、仏に成るためではないので、過去の仏祖の言動を見て模倣して成就させるのである。
（仏の行いを模倣するのは、人を思いやるためである。）
「即身是仏」も、仏に成るためではないのである。
仏に成ろうと思ってしまう鳥かごを打破すれば、坐禅している仏の（思考の）模倣とは、仏に成るためではないのである。
昔から、人には、本より、（向上して）仏に成る力と、（堕落して）「魔」、「仏敵」（、「神への敵対者」）に成る力が有る。
（実は、思考の鍛錬という意味では、）進歩しても退化しても、溝や谷を埋める様に、思考の鍛錬の積み重ねという量と成るのである。

三十五祖の馬祖道一は、三十四祖の南嶽の懐譲の学に参入して心の印を密かに受けてから、常に坐禅していた。
南嶽の懐譲は、馬祖道一の所に行って「高徳な馬祖道一よ、坐禅は、何を意図しているのか？」と質問した。

この質問で静かに鍛錬して学に参入するべきである。
坐禅より向上するべき意図が有るのか？
坐禅より規格外に意図するべき道が未だ有るのか？

全く意図するべきではないのか？
坐禅している時に、どんな意図が形成されて現れているのか、自問自答して明らかに知るべきであるか？
明確に詳細に鍛錬するべきである。
彫刻の竜を愛するより、進んで、真の竜を愛するべきである。
(中国で、竜の彫刻の名人が、真の竜を見て、自分の彫刻との違いに驚いた、と言われている。)
彫刻の竜にも、真の竜にも、雲を呼び雨を降らす能力が有る事を学ぶべきである。
遠さを貴ぶなかれ、遠さを見下すなかれ、遠さに慣熟するべきである。
近さを貴ぶなかれ、近さを見下すなかれ、近さに慣熟するべきである。
目を尊重するなかれ、目を軽んじるなかれ、
耳を尊重するなかれ、耳を軽んじるなかれ、耳と目において聡明であるべきである。

馬祖道一は「仏に成ろうと意図しています」と言った。

この言葉を明らめて、到達するべきである。
「仏に成る」という言葉を、どの様に理解するべきか？
「仏に成る」という言葉は「仏が仏にしてくれる」事と取るのか？
「作仏」、「仏に成る」という言葉は「仏を作る」事と取るのか？
「仏に成る」という言葉は「仏の面を一つ、二つ出す」事と取るのか？
仏に成ろうという意図を脱ぎ落として、古い身心を脱ぎ落とす事を意図して仏に成るのか？

「仏に成ろうと意図している」という言葉は、仏に成る方法は多様でも仏に成ろうという意図によって葛藤して行く事と取るのか？

知るべきである。

「仏に成ろうと意図している」という馬祖道一の言葉は「坐禅では必ず仏に成ろうと意図している。

坐禅には必ず仏に成ろうという意図が有るはずである。

仏になろうという意図は、仏に成る前にする物であるし、仏に成った後もしているであろうし、仏に成る瞬間もしているであろう」という誤った意味である。

仏に成ろうという意図では、どれだけ仏に成ろうと葛藤するであろう？

仏に成ろうという葛藤は、他の葛藤を纏うであろう。

仏に成ろうと尽力する個々の葛藤は、必ず、仏に成ろうという尽力を明らかに表し、全て、個々の意図である。

仏に成ろうという意図を回避するべきではない。

仏に成ろうという意図を回避すると、身の命を喪失してしまうであろう。

仏に成ろうと意図して葛藤する時も、身の命を喪失する事に成る。

南嶽の懐譲は一つの瓦を取って石の上に当てて磨ぎ始めた。

馬祖道一は「師よ、何をしているのですか？」と質問した。

実に、誰が瓦を磨いでいる行動であると見ないであろうか？　誰が本当に普通に瓦を磨いでいるだけであると見るであろうか？

そのため、「何をしているのですか？」という言葉で、瓦を磨ぐ意図が質問されたのである。

「何をしているのか？」と言うと、行動自体は、瓦を磨いでいるのである。
現代日本と古代中国は異なるが、瓦を磨ぐ意図が有るのである。
馬祖道一は、南嶽の懐譲が瓦を磨いでいる様に見えたが、自分の所見だけが正しいと決めつけず、祖師の全ての行為に学として参入するべき意図が有ると一考したのである。
知るべきである。
仏を見るには、仏を理解するには、仏を知らないかの様に、仏を理解していないかの様に、水を見ても水を知らないかの様に、山を見ても山を知らないかの様にするべきである。
目の前のものに、真理への通路が無いと軽率に考える事は、仏の学び方ではない。

南嶽の懐譲は「瓦を磨いで鏡にするつもりである」と言った。
「瓦を磨いで鏡にするつもりである」という言葉の意味を明らめるべきである。
「瓦を磨いで鏡にするつもりである」のは道理が必ず有る。
「瓦を磨いで鏡にするつもりである」という祖師の言葉が形成されて現れているのであり、虚しく設けられたわけではない。
瓦は瓦であり、鏡は鏡であるが、磨ぐ道理を究めるのに多数の手本が有る事を知るべきである。
（人は人であり、仏は仏であるが、神は神であるが、人は仏に到達できる、人は神に到達できる、と言う道理を究めるのに多数の手本が有る事を知るべきである。）

「古鏡」、「古くから鏡としているもの」や明鏡に例えられる古代の祖師、明らかな祖師も、瓦(かわら)を磨(と)いで鏡にする様に、人の心を磨いて仏に到達したのである。

もし「諸々の鏡に例えられる諸々の祖師は、瓦(かわら)を磨(と)いで鏡にする様に、人の心を磨いて仏に到達したのである」という事を知らなければ、仏祖として道を会得していないし、仏祖として何も言い得ないし、仏祖として口を開けないし、仏祖の出す気を見聞きできていない。

馬祖道一は「どうして、瓦(かわら)を磨(と)いで鏡にでき得ようか？　いいえ！　できない！」と言った。

瓦(かわら)を磨(と)いで鏡にする様に、人の心を磨いて仏に到達した、鉄の様に意思が堅固な者は、他者の力量を借りなくても、人の心を磨く事は仏に到達するためではなく、人の心を磨く事と仏への到達は別物であっても、速(すみ)やかに人の心を磨いて仏に到達するであろう。

南嶽の懐譲は「どうして、仏に成ろうという意図で坐禅して、仏に成る事ができ得ようか？　いいえ！　できない！」と言った。

仏に成れる事を期待して坐禅するわけではない道理が有る事と、仏に成ろうという意図による坐禅では仏に成れないという隠れもない意味を、明らかに知る事ができる。

馬祖道一は「どうすれば仏に成れますか？」と言った。

「どうすれば仏に成れますか？」という馬祖道一の言葉の意味は、一筋に明らかに質問した様に見えるが、仏に成る方法を明らかに質問している。

例えば、「法華経」の例え話の様に、親友である人が、親友である仏祖と見える機会を知ったのである。

人である私にとって親友である仏祖にとって、私は親友である。

「どうすれば仏に成れますか？」と馬祖道一が質問した時とは、仏祖が姿を出現させる時なのである。

南嶽の懐譲は「人が牛車に乗っている時に、もし牛車が進まなければ、車を軽く打って進む様に合図するのが良いか？　牛を軽く打って進む様に合図するのが良いか？」（、「坐禅ではなく、仏に成ろうという意図が間違っている」）と言った。

(馬祖道一は、あえて何も応えなかった。)

自問自答しなさい。

「もし牛車が進まなければ」と例えて言っているが、「牛車が進む」とは、どの様な状態であるのか？

「牛車が進まない」とは、どの様な状態であるのか？

例えば「水が流れる」様な状態は「牛車が進む」様な状態であるのか？

「水が流れない」様な状態は「牛車が進まない」様な状態であるのか？

「水が流れる」様な状態は「水が進まない」様な状態であると言うべきである。

「水が進む」様な状態は「水が流れる」様な状態ではない事も有る。

「もし牛車が進まなければ」という言葉を学ぶ事に参入して究める時には、「進まない」状態が有ると学ぶ事に参入するべきであるし、「進まない」状態が無いと学ぶ事に参入するべきである。

なぜなら、その時、その状態、その場合の話だからである。

「もし牛車が進まなければ」という言葉を、単なる「進まない」という言葉として理解したわけではないのである。

「車を軽く打って進むのが良いか？　牛を軽く打って進む様に合図するのが良いか？」と言っているが、「車を軽く打って進む」、「仏に成ろうと意図して坐禅して仏に成る」事も有るのであろうか？

「牛を軽く打って進む」、「仏に成ろうと意図せず坐禅して仏に成る」事も有るのであろうか？

「仏に成ろうと意図して坐禅して仏に成る」事と「仏に成ろうと意図せず坐禅して仏に成る」事は、同じか？　違うか？

世間や凡人には「仏に成ろうと意図して坐禅して仏に成る」法は無くても、仏道には「仏に成ろうと意図して坐禅して仏に成る」法が有る事を知っている者は、学に参入している、正しくものを見る眼が有る者である。

ただし、「仏に成ろうと意図して坐禅して仏に成る」法が有る事を学んでも、「仏に成ろうと意図せず坐禅して仏に成る」法と同じではない。

「仏に成ろうと意図せず坐禅して仏に成る」法が世界には常に存在するが、仏道における「仏に成ろうと意図せず坐禅して仏に成る」事を更に尋ねて学に参入するべきである。

明確に詳細に鍛錬するべきである。

「神の使いである牛、水牛の様に、神の使いの様な修行者が、仏に成ろうと意図せず坐禅して仏に成る」のか？

「鉄の牛の様に、意思が堅固な修行者が、仏に成ろうと意図せず坐禅して仏に成る」のか？

「泥の牛の様に、煩悩が有る修行者が、仏に成ろうと意図せず坐禅して仏に成る」のか？

(泥は煩悩の例えである。)

(修行者は自分を)鞭打つべきであるのか？

尽世界を打つべきであるのか？

心の尽くを打つべきであるのか？

迸る髄を打つべきであるのか？

手のひらではなく、手の甲で裏拳で打つべきであるのか？

打つ拳で打つ拳を打つべきである。

牛で牛を打つ様に、修行者で修行者を打つべきである。

あえて馬祖道一が答えなかった事を、誤って「恥ずかしくて答えられなかったんだ」と、いたずらに間違えるべきではない。

馬祖道一は、瓦を投げ打って宝玉を引き寄せたのであり、頭と顔の向きを変えたのである。

あえて答えずに馬祖道一が会得した物を、奪う事はできないのである。

また、南嶽の懐譲は「(正しく)坐禅を学べば、坐禅している仏を学ぶ事に成る」と言っている。

「(正しく)坐禅を学べば、坐禅している仏を学ぶ事に成る」という言葉の意味を学ぶ事に参入して究めて、祖師が大事としている重要な知をわきまえて理解するべきである。

「坐禅を学ぶ」事の意味を明らかには知らなかったが、「坐禅を学ぶ」事とは「坐禅している仏を学ぶ」事である、と知る事ができる。
正統な、仏の子(、神の子)、法の子孫でなければ、どうして、「坐禅を学ぶ事とは、坐禅している仏を学ぶ事である」という言葉を理解できるであろうか？　いいえ！　できない！
実に、知るべきである。
正しい人であるが初心者の坐禅は最初の坐禅であり、仏の最初の坐禅と成るのである。

また、南嶽の懐譲は「もし坐禅を学べば、禅とは坐る事や横たわる事ではない」と言っている。

「もし坐禅を学べば、禅とは坐る事や横たわる事ではない」という言葉の意味は「坐禅は坐禅であり、坐禅は坐る事や横たわる事ではない」のである。
「坐禅は坐る事や横たわる事ではない」と単一に伝えられた時から今まで、無限の「坐る事や横たわる事」は自分の物である。
自分の物である「坐る事や横たわる事」が、仏の命に近いか遠いかを、どうして尋ねるであろうか？　いいえ！　自分の物なので尋ねない！
迷いであるか悟りであるかを、どうして論じるであろうか？　いいえ！　自分の物なので論じない！
知によって断たれる事を、誰が求めるであろうか？　いいえ！　求めない！

また、南嶽の懐譲は「もし坐禅している仏を学べば、仏は坐禅という一定の姿勢だけでいるわけではない」と言っている。

坐禅している仏が一人、二人の他の仏と同様である事は、仏が一定の姿勢だけでいない事を「荘厳」、「栄光」としているからである。

「仏は坐禅という一定の姿勢だけでいるわけではない」という言葉を理解する者は、「仏の姿」という言葉を理解している。

「仏は坐禅という一定の姿勢だけでいるわけではない」ので、「坐禅している仏」を不可避なのである。

そのため、「仏が一定の姿勢だけでいない事を『荘厳』、『栄光』としている」ので、「もし坐禅を学べば、坐禅している仏を学ぶ事に成る」のである。

「無住法の」、「全てのものへの固定観念が無い」人は、「これは仏ではない」とか「これは仏である」とか取捨選択するであろうか？　いいえ！　取捨選択しない！

「これは仏ではない」とか「これは仏である」という取捨選択を先に脱ぎ落とす事によって、坐禅している仏を学ぶ事に成る。

また、南嶽の懐譲は「もし坐禅している仏を学べば、殺したかの様に、仏という意識を無くす事に成る」と言っている。

更に坐禅している仏を学ぶ事に参入して究めると、殺したかの様に、仏という意識を無くす功徳が有る。

坐禅している仏には、殺したかの様に、自分は仏であるという意識が無い。

殺したかの様に、仏という意識を無くすための姿と光明、手がかりを尋ねると、必ず、坐禅している仏が答えと成る。

「殺した」という言葉は、凡人の言葉と同様ではあるが、単なる凡人と同じ意味ではない。

「坐禅している仏には、殺したかの様に、自分は仏であるという意識が無い」とは、どの様な状態であるか？　と学ぶ事に参入して究めるべきである。

仏は功徳によって既に「殺したかの様に、自分は仏であるという意識が無い」という事をひねり挙げて、人は「殺したかの様に、自分は人であるという意識が無いか？　それとも、未だ意識が有るか？」をも学ぶ事に参入するべきである。

また、南嶽の懐譲は「もし坐禅している姿に執着すれば、坐禅の理に到達できない」と言っている。

「坐禅している姿に執着している」とは、坐禅を捨ててしまい、坐禅している姿に触感などから心が侵されているのである。

既に仏に成って坐禅している時は、坐禅している姿に執着しない様にという意識すら有り得ないのが道理である。

既に仏に成って坐禅している時は、坐禅している姿に執着しない様にという意識すら有り得ないので、坐禅している姿に執着するのは、たとえ美しくても、坐禅の理に到達できないのである。

前記の様に、鍛錬する事を「(古い)身心を脱ぎ落とす」というのである。

未だかつて坐禅した事が無い者には、「(古い)身心を脱ぎ落とした」という言葉は言えないのである。

「(古い)身心を脱ぎ落とした」という言葉は、打ち坐った時に言えるし、打ち坐った人は言えるし、打ち坐った仏は言えるし、坐禅している仏を学んだ時に言えるのである。

ただ普通に座ったり横たわったりしている人は、打ち坐った仏には成れない。

坐禅している人は自然と、坐禅している仏に似るが、人が仏に成る事が有る様な物である。

仏に成った人がいても、一切の人が仏に成るわけではないし、仏は一切の人ではない。

また、一切の仏は一切の人とは限らないので、人は必ず仏に成るわけではないし、仏は必ず人であったわけではない。坐禅している仏も必ず人であったわけではない。

前記の様に、南嶽の懐譲と馬祖道一は、師も優れていて弟子も優れていた。馬祖道一は、坐禅している仏が仏に成る事を証明した。

南嶽の懐譲は、仏に成るための坐禅している仏をあらわした。

前記の様に、南嶽の懐譲の会には鍛錬が有り、薬山惟儼の会には従来の「かの不思量の奥底」という言葉の理解が有った。

仏祖達が重要としているのは、坐禅している仏である、という事を知るべきである。

仏祖に成った者は、坐禅している仏を使用したのである。

未熟な人は未だ夢にも見ない所であるばかりである。

西のインドから東の地の中国に仏法が伝わるというのは、必ず坐禅している仏が伝わるのである。

坐禅している仏が重要だからである。

仏法が伝わらなければ、坐禅は伝わらない。

正統に代々継承されているのは、坐禅の主旨だけである。

坐禅の主旨を未だ単一に伝えられていない人は、仏ではない。

坐禅という一つの法を明らめなければ、全ての法を明らめられず、全ての修行を明らめられない。

坐禅という一つの法から他の法へ明らめない人を「明らかに正しくものを見る眼が有る人である」と言うべきではないし、道を会得していない人であるし、どうして古今の仏祖の弟子である祖師に成れるであろうか？　いいえ！　祖師に成れない！

そのため、仏祖は必ず坐禅を単一に伝えると唯一に思い定めるべきである。

「仏祖の光明に照らされるのに臨んだ」と言うのは、坐禅を鍛錬して学ぶ事に参入して究める事である。

愚かな輩は、仏の光明を、誤って、太陽や月の光明の様な、真珠などの光輝の様な物であると思ってしまう。

太陽や月の光輝は、六道輪廻の業における姿であり、仏の光明とは比べ物に成らない。

仏の光明というのは、真理の詩の一句を受けて保持したり聴聞したりし、一つの法を保持させせられ任せられたり保護したりし、坐禅を単一に伝えられる事である。

仏の光明に照らされなければ、坐禅の意味を、保持させせられ任せられる事も無いし、信じて受け入れる事も無い。

そのため、古来から坐禅の意味は伝えられて来ているが、坐禅の意味を知っている人は少ない。

宋の時代の中国の諸山で寺の主人にある者で、坐禅の意味を知らず、坐禅の意味を学んでいない人は多い。

明らかに知っている人はいるが、少ない。

諸々の寺では本(もと)より坐禅の時間が定められている。

寺の指導者を含む、諸々の僧は坐禅をする事を本分としている。

仏教を学びたい者にも坐禅を勧める。

けれども、寺の指導者ですら、坐禅の意味を知っている人は稀(まれ)なのである。

このため、古来から近代に至るまで、坐禅をたたえる「坐禅銘」を記した老僧が一人二人いるし、坐禅のし方が記された「坐禅儀」を記した老僧が一人二人いるし、坐禅の意味を戒めて教える「坐禅箴」を記した老僧が一人二人いるが、「坐禅銘」は全て理解するべき所が無く、「坐禅儀」は坐禅のし方に未だ暗い。

「景徳伝燈録」の「坐禅箴」と「嘉泰普燈録」の「坐禅銘」などは、坐禅の意味を知らず、坐禅を単一に伝えてもらえなかった輩が記した物である。

十方の寺を渡り歩いて一生を過ごしても、坐禅という一つの法の鍛錬が無い事を、憐れむべきである。

打ち坐っている時に自分の身が入っておらず、鍛錬が自身と相互に見(まみ)えない事を、憐れむべきである。

これは、坐禅が自分の身心に合っていないからではなく、真の鍛錬を志さず、軽率に迷いに酔わされるからである。

坐禅の意味を知らない人たちが寄せ集めた代物は、ただ自分を見つめ直すだけの様子であり、いたずらに思考を停止して目覚めたまま気絶する様な状態を営ませる代物である。

これでは、未熟な修行者の見解にも及ばない。

どうして仏祖の坐禅を単一に伝えられるであろうか？　いいえ！　伝えられない！

宋の時代の中国の記録者は、誤って記録しているのである。

現在と未来の修行者は、捨て去り、見るべきではない。

宋の時代の中国の慶元府の太白名山の天童景徳寺の、宏智正覚が記した坐禅箴だけが、仏祖の物であり、真の坐禅箴であり、坐禅の意味を言い得ている物であり、法界の表裏の唯一の光明であり、古今の仏祖の弟子である仏祖の物である。

過去の仏も未来の仏も、宏智正覚が記した坐禅箴に戒められて保持して行き、古今の祖師は、宏智正覚が記した坐禅箴によって形成されて現れたのである。

後記は、宏智正覚が記した坐禅箴である。

「(宏智正覚が記した)坐禅箴」

仏達が重要としている事と、祖師達が重要としている事は、物事に触れなくても知り、縁(えん)に出会わなくても照らす事である。
物事に触れなくても知る、知は細かく複雑である。
縁(えん)に出会わなくても照らす、光は絶妙である。
知が細かく複雑であるのは、(区別はするが、)裁く思い、差別しようとする思い、先入観が全く無いからである。
光が絶妙であるのは、少しも全く期待しないからである。
(区別はするが、)裁く思い、差別しようとする思い、先入観が全く無いので、ありふれているが不思議である。
少しも全く期待しないので、取る事が無く了解する。
水が清らかなので底まで透き通っていて、魚はゆっくりと進んでいる。
空が果てしなく広く、鳥は微かに見えるほど遠くを飛んでいる。

坐禅箴の戒めは、大いなる作用が自由に目の前に現れているし、声や色などの向上の規律であるし、父と母から生まれる前の普遍の細目(さいもく)であるし、仏の悪口を言わなければ良いという事であるし、身の命の喪失は不可避であるという事であるし、頭でっかちな人に行動させる事である。

「仏達が重要としている事」

仏達は必ず仏達を重要としていて、それが形成されて現れたのが、坐禅である。

「祖師達が重要としている事」

亡き師は、この言葉を言わなかった。
亡き師が、この言葉を言わなかった道理は、祖師と祖師だったからであり、袈裟を伝える事によって法を伝えているからである。
頭と顔の向きを変える様に悟らせる事が、「仏達が重要としている事」であり、「祖師達が重要としている事」である。

「物事に触れなくても知る」

知は知覚ではない。この世の知覚は「小量である」、「拙(つたな)い」、「劣っている」。
知は認知ではない。認知は作為的である。
そのため、知は物事に触れず、物事に触れないのは知である。
ただし、知は仏の普遍の知だけであると思い量るべきではない。
知は自分の物なので自分で分かると思い量るべきではない。

物事に触れないというのは、「明頭来明頭打、暗頭来暗頭打」、「利発な頭の者が来たら、それに合わせて軽く打って指導し、愚鈍な頭の者が来たら、それに合わせて軽く打って指導する」事であり、母が生んだ皮を坐禅して破る事である。

「縁に出会わなくても照らす」

「縁に出会わなくても照らす」の「照らす」とは、明らかに理解させる事ではなく、霊的な物ではない。
「縁に出会わなくても与える」事が「照らす」事なのである。
「照らす」事を縁に変えるわけではないのが「照らす」事なのである。
「出会わない」のに認知しているのは、遍界は「最初」から隠していないからである。遍界を破して認知しているわけではないのである。
絶妙である。
相互関係は有るが、自立しているのである。

「知が細かく複雑であるのは、(区別はするが、)裁く思い、差別しようとする思い、先入観が全く無いからである」

思いが知に成るのに、必ずしも他の力を借りない。
知は形と成る。
形は山河と成る。
山河は細かく複雑であり、山河の細かさ複雑さは絶妙であり、使用すると魚の様に活発である。

魚が竜に成るのに、「禹門」、「竜の門」の内外は無関係である。
(魚が海中の「禹門」、「竜の門」を通ると竜に成れるという例え話が存在する。)

一つの知をわずかに使用できるのは、尽界、山河をひねって来て尽力して知ったからである。

山河が親切でも、知が無ければ、一つだけの事を知ったり半端に理解したりする事すらできない。

分別、思慮は遅く到来すると嘆くべきではない。

かつて、裁く思い、差別しようとする思い、先入観が有った仏達が既に形成されて現れて来た。

「全く無い」とは「かつて有った」のである。

「かつて有った」ものは、形成されて現れている。

そのため、「(区別はするが、)裁く思い、差別しようとする思い、先入観が全く無い」人は、一人にも会わないのである。

「光が絶妙であるのは、少しも全く期待しないからである」

「少し」というのは尽界である。

「少し」というのは尽界であるにもかかわらず、「全く期待しない」ので「絶妙」であり、「照らす光」である。

そのため、近い未来に来るが、未だ来ない様な物である。

目を疑う事なかれ、耳を信じる事なかれ、

「すぐに直訳の外に真意を明らめるべきであり、文字通りに受け取って規則とする事が無い」のは、「照らす光」であり、ありふれている。

ありふれているので、「取る事が無い」のである。
「ありふれているが、不思議である」と住んで保持して来たし、「了解である」と保持させられて任されて来たのに、かえって私は疑って明らかに知ったのである。

「水が清らかなので底まで透き通っていて、魚はゆっくりと進んでいる」
「清らかな水」と言っているが、雲という空にかかっている水は清らかではあるが底まで透き通っていない。
まして、器である世界の、深く澄んでいる水は、「清らかな水」ではないのである。
果てが無い水を、「底まで透き通っている清らかな水」としているのである。
魚が、もし果てが無い水を進むと、進まないわけではない。
幾万となく距離を進んでも、測れず、終わりが無い。
測る岸が無く、雲が浮かぶ空も無く、沈む底も無いので、誰も測れない。
測ろうと論じようとしても、「底まで透き通っている清らかな水」しかない。
坐禅の功徳は、果てが無い水を進む魚の様な物である。
幾千、幾万の距離を進んでも、誰が測れるであろうか？　いいえ！　測れない！
「底まで透き通っている清らかな水」を進む経路は、体を挙げて鳥の道である空を行かない、のである。

「空が果てしなく広く、鳥は微かに見えるほど遠くを飛んでいる」

「果てしなく広い空」と言っているのは、天にかかっている空の事ではない。

天にかかっている空は「果てしなく広い空」ではない。

まして、あちこちに普遍的に存在するものは「果てしなく広い空」ではない。

(仏の様に)隠れても現れても表裏が無いものを「果てしなく広い空」と言っているのである。

飛空という唯一の法によってのみ、鳥は「果てしなく広い空」を飛べる。

飛空という行為は、測る事ができない。

飛空は尽界である。尽界は飛空であるからである。

どれだけ飛ぶのか知らないといえども、測る以外の言葉を選ぶと、「微かに見えるほど遠く」という言葉を選べるのである。

すぐに足下の糸の様な跡は消え去る。

空が飛び去る時は、鳥も飛び去るのである。

鳥が飛び去る時は、空も飛び去るのである。

「飛び去る」事を学ぶ事に参入して究めるための言葉を選ぶと、「ただ、ここに在る」のである。

「ただ、ここに在る」のは、こつこつと地道に坐禅するための戒めである。

幾万の距離か、「ただ、ここに在る」と勢い良く言うのである。

前記が、宏智正覚の坐禅箴である。

宏智正覚の坐禅箴の様な坐禅箴は、全ての時代の老僧の坐禅箴の中で、未だに無い。

諸方の「臭皮袋」、「臭い気体が詰まった皮袋である俗人」に、宏智正覚の坐禅箴を理解させようとしても、一生の力を尽くしても、一生の力の二倍の力を尽くしても、理解できないであろう。

現在、諸方で見る事はできないが、坐禅の意味を戒めて教える物は宏智正覚の坐禅箴だけである。

道元の亡き師である、五十祖の如浄は、法堂に上って法を説く時に、当たり前の事の様に「宏智正覚は古代の仏と等しい」と言った。

宏智正覚以外の人を「古代の仏と等しい」と言う事は全く無かった。

人を知る目が有る時、仏祖をも良く知るのである。

実に、三十八祖の洞山良价の系譜に仏祖がいる事を知る事ができる。

千二百四十二年は、宏智正覚が死んだ千百五十七年の八十五年後であるが、宏智正覚の坐禅箴を見て、後記の坐禅箴を記した。

千二百四十二年から宏智正覚が死んだ千百五十七年まで八十五年間である。

後記は、千二百四十二年に記した坐禅箴である。

「(道元による)坐禅箴」

仏達が重要としている事と、祖師達が重要としている事は、「不思量」、「今は思考できない思考」であるが現れ、自立しているが成就する。
「不思量」、「今は思考できない思考」であるが現れるのは、親しく近い。
自立しているが成就するのは、証である。
「不思量」、「今は思考できない思考」であるが現れるのが親しく近いのは、汚染が全く無いからである。
自立しているが成就するのが証であるのは、偏(かたよ)りが全く無いからである。
汚染が全く無い、親しさ近さは、委(ゆだ)ねずに、脱ぎ落とす。
偏(かたよ)りが全く無い、証は、意図せず、鍛錬と成る。
水が清らかなので地まで透き通っていて、魚は進んで、魚に似ている。
空が広く天まで透き通っていて、鳥は飛んで、鳥の様である。

宏智正覚の坐禅箴の言葉は未完成ではないが、前記の様に、更に言葉を理解するべきである。

仏祖の子(、神の子)、法の子孫は、必ず坐禅が一大事であると学ぶ事に参入するべきである。
坐禅が一大事であると学ぶ事に参入する事が、単一に伝えられている正しさの印である。

正法眼蔵　坐禅箴

千二百四十二年、興聖宝林寺で記した。

千二百四十三年、冬、越州の吉田県の吉峰精舎にいて僧達に示した。

坐禅儀

禅の学に参入するとは坐禅する事である。

坐禅には静かな所が良い。

坐る敷物は厚く敷くべきである。

(坐る場所に)風、霞(かすみ)を入れるなかれ。

(坐る場所の屋根から)雨、露(つゆ)が漏れるなかれ。

身を落ち着かせる場所を護り保持するべきである。

かつて(釈迦牟尼仏が)金剛石(ダイアモンド)の様に硬い「金剛座」の上に坐り、(ある者が)盤石(ばんじゃく)な大きな岩の上に坐った行跡が有るが、彼らは皆、草を厚く敷いて坐ったのである。

坐る所は明るいべきである。昼夜、暗くてはいけない。

冬は暖かく夏は涼しい事を(坐禅の)作法としている。

(坐る時は、)諸々の縁(えん)を放(ほう)り捨て、万事を休息するべきである。

善は、「不思量」、「今は思考できない思考」である。

悪は、「不思量」、「今は思考できない思考」である。

(「不思量を思量する」、「今は思考できない思考を思考しようとする」とは)「心、意、識」、「心、意識、理解」ではない。

(「不思量を思量する」、「今は思考できない思考を思考しようとする」とは)「念、想、観」、「記憶、想像、観察」ではない。

仏に成る事を意図するなかれ。

坐る事と横たわる事への執着を脱ぎ落とすべきである。

飲み物と食べ物の量を節制するべきである。

時間を惜しむべきである。

頭の燃えている火を払う様に坐禅を好むべきである。

黄梅の山の三十二祖の弘忍は、坐禅以外を営まず、ただ坐禅を務めるのみであった。

坐禅の時は、袈裟を着るべきである。

(坐禅の時は、)座布団を敷くべきである。

座布団は尻と足の下に敷くわけではない。

(座布団は)尻の下に敷くのである。

そうすれば、重ねている両脚の下は敷物に当たり、背骨の下の尻は座布団の上に成るのである。

これが仏から仏へ、祖師から祖師へ伝わる坐禅の時の坐り方の法である。

(坐禅は)半跏趺坐するか、結跏趺坐する。

結跏趺坐は、右足を左の腿の上に置き、左足を右の腿の上に置く。

足の先は各々、腿と同じ方向に揃えるべきである。不揃いであってはならない。

半跏趺坐は、ただ左の足を右の腿の上に置くだけである。

(坐禅をする時は、)服装を、(体に)ゆったりとかけるが、整えるべきである。

右手を左足の上に置く。

左手を右手の上に置く。

二つの親指の先を支え合わせる。

両手をこの様にして身に近づけて置くのである。

二つの親指の支え合わせている先をへそに対して前に置くべきである。

身の姿勢を正して、正しく坐禅するべきである。

左が高く成ったり、右へ傾いたり、前に屈(かが)んだり、後ろへ仰向く事なかれ。
必ず肩に対して耳が上にあり、へそに対して鼻が上にあるべきである。
舌は上顎(うわあご)にかけるべきである。
息は鼻でするべきである。
唇と歯を付け合うべきである。
目は開くべきである。見開き過ぎず、目を細め過ぎないべきである。
この様に身心を整えて、息を長く吐き出して呼吸を整えるべきである。

こつこつと坐禅して定(じょう)に入って、「かの不思量の奥底を思量する」、「今は思考できない思考を思考しようとする」のである。
「不思量の奥底なんて、どうしたら思考できるのか？」、「思考できないものなんて、どうしたら思考できるのか？」、
「非思量」、「思考できるであろうか等と思考しないで、とにかく思考するのである」、「できるか心配せずに、とにかく行うのである」。

これが坐禅のやり方(かた)である。

坐禅は、「習禅」、「色々な観念を習う事」ではない。
(坐禅は、)大いなる安楽な法への門である。
(坐禅は、)汚染されないための、修行と証(が一つに成っている物)である。

正法眼蔵　坐禅儀

その時、千二百四十三年、冬、越州の吉田県の吉峰精舎にいて僧達に示した。

深信因果

三十六祖の百丈の懐海の全ての集まりに一人の老人がいて常に大衆の後について来て説法を聴いていた。
大衆が退けば老人も退いた。
しかし、突然ある日、一日、退かなかった。
ついに、祖師は「目の前に立っている、あなたは、何者か?」と質問した。
それに対して老人は「私は人ではありません。
過去、釈迦牟尼仏の前の迦葉仏の時代に、この百丈山に人として住んでいました。
ある時、仏道を学んでいる人が『大いなる修行を奥底までした人も、また因果に落ちるか否か?』と質問してきたため、私は『因果に落ちない』と(誤って)答えてしまったので、以後、五百回目の生まで野狐の身に堕ちているのです。
今、祖師に正しい答えを私の代わりに答えて欲しいのです。
そして、願わくば野狐の身を脱したいのです」と言った。
野狐の老人は祖師に「大いなる修行を奥底までした人も、また因果に落ちるか否か?」と質問した。
祖師は「(大いなる修行を奥底までした人は、)因果に暗くない」と答えた。
野狐の老人は祖師の言葉の下で大いに悟り、敬礼して、「もう私は野狐の身を脱する事ができました。(野狐の身の死体は)山の裏にあります。もし、よろしければ、僧が亡くなった時の事例によって(野狐の身の死体の)葬式をあげてください」と言った。

祖師は、僧の雑事を指導する維那の役職の者に命じて白槌を打たせてから僧達に「食後に亡くなった僧を葬送しなければいけない」と告げた。

僧達は「僧達は皆、元気である。『涅槃堂』にも病人はいない。なぜ、『亡くなった僧を葬送する』という話に成るのか？」と話し合った。

食後に祖師は僧達を連れて山の裏の岩の下に至って杖をもって一体の野狐の死体を指し示したのを僧達は見る事に成った。

そして、(野狐の死体を)法によって火葬した。

三十六祖の百丈の懐海は晩に堂に上って野狐との事を話した。

三十七祖の黄檗希運は「昔の人は誤って答えて五百回目の生まで野狐の身に堕ちました。では、転々と(常に)誤らない者は何者に成るのか？」と質問した。

百丈の懐海は「近くに来なさい。あなたのために話してあげよう」と言った。

黄檗希運は百丈の懐海に近づいて(、百丈の懐海の話が、でたらめな作り話だと理解したので、また、誤らない人などいないので、「何を寝ぼけた事を言っているのです！　目覚めなさい！」という意味で、)軽く手のひらで叩いた。

百丈の懐海は拍手して笑って「『胡』の髭は赤いと思っていたら、赤い髭の『胡』がいた」(、「でたらめで野蛮な作り話で因果について教えようと思っていたら、因果について教える野蛮な人である黄檗希運がいた」)と言った。

（「胡」には「ひげの長い未開の地の野蛮な人」という意味と「でたらめ」という意味が有る。）

この話は「天聖広灯録」、「天聖広燈録」に記されている。

それなのに、学に参入しているはずの輩が、因果の道理を明らめず、いたずらに、因果を否定し信じない誤りを犯している。
憐れむべきである。
千二百年に、末法の世に成り始めて祖師の道が衰退しているのである。
「因果に落ちない」と話す事は、まさしく因果を否定し信じない誤りを犯す事である。
「因果に落ちない」と話す事によって、悪い場所に趣（おもむ）き堕ちるのである。
「因果に暗くない」と話す事は、明らかに「因果を深く信じている」のである。
「因果に暗くない」という言葉を聞くものが、趣（おもむ）き堕ちていた悪い場所から脱する事は、疑うべきではない。
近年の禅に参入して道を学んでいると詐称している輩の多くは、因果を否定し信じない誤りを犯している。
何によって、因果を否定し信じない誤りを犯している、と知っているのかと言うと、「因果に落ちない」事と「因果に暗くない」事を誤って同じであると思っているからである。

十九祖の鳩摩羅多は「善悪の報いが訪れる時期には『三時』、『この生の時、第二の生の時、第三の生以降の時』という三つの時期が有る。

大体の人は、思いやり深い人が早死にし、乱暴者が長生きし、悪逆な人が幸運であり、正義の人が不運であるのを見て、因果を否定し信じない誤りを犯し、罪も報いも無いと誤って思ってしまう。

影響は人の後を完全についていく事を(大衆は)知らない。

また、(罪と罪の報いは)百、千、万の無数の劫を経ても磨滅する事は無い(のを大衆は知らない)」と話している。

過去の祖師も因果を深く信じている事を明らかに知る事ができる。

今の後進の僧が、祖師の思いやり深い教えを未だ明らめていないのは、稽古(けいこ)がおろそかだからである。

稽古(けいこ)がおろそかなのに妄(みだ)りに人や天人を教える善知識を持つ者を自称、詐称する者は、人や天人にとっての大いなる賊であり、学者の敵である。

人や天人にとっての大いなる賊であり、学者の敵である輩は、因果を否定し信じない趣(おもむ)きをもって後学の者、後進の者に話す事なかれ。

因果を否定し信じないのは邪説であり、仏や祖師の法ではない。

因果を否定し信じない人は、学ぶ事がおろそかなので、因果を否定し信じない邪見に堕落したのである。

千二百年の中国の僧どもは誤って「私達が人の身を受けて仏法に会っても、なお、一、二回目の生の事を知らないが、三十六祖の百丈の懐海の話の野狐の老人は五百回分の生の事を知っていたので、誤った業の報いによる墜落、堕落ではない。『金属の鎖で玄関は閉まっているけれども留まらず、人とは異なる類(たぐい)の者の身中へ行って、しばらく輪廻転生する』のであろう」と話している。

大いなる善知識を持つ者を詐称する輩の誤った見解とは、この様な代物である。

この誤った見解は、(仏教という)仏の家の中に置き難い代物である。

人、狐、その他の者の中に、生まれながらに、しばらくの間、「宿命通」、「過去を知る能力」を得ている輩がいる。

けれども、仏道を明らめ悟るための種としてではなく、悪い業の所感として「宿命通」、「過去を知る能力」を得てしまっているのである。

悪い業の所感として「宿命通」、「過去を知る能力」を得てしまう事が有る道理を釈迦牟尼仏は人や天人のために広く演説している。

それを知らないのは、学ぶ事がおろそかである至りなのである。

憐れむべきである。

たとえ一千回分の生、一万回分の生を知っても、必ずしも仏法を知っているわけではない。

道から外れた外道が八万劫分の生を知っても、未だ、仏法を知っている人とはしない。

わずか五百回分の生を知った所で、それほどの能力でもない。

近年の、千二百年の中国の、禅に参入していると詐称している輩の知が最も暗い所は、「因果に落ちない」と話す事が邪道の説であると知らない所に有る。

憐れむべきである。

釈迦牟尼仏、如来の正しい法が流通している所で、祖師から祖師へ正しく伝えている仏教に会いながら、因果を否定し信じない邪悪な党派者と成っている。

学に参入している仲間は正に急いで因果の道理を明らめるべきである。
今、三十六祖の百丈の懐海の「因果に暗くない」という道理は、「大いなる修行を奥底までした人は、因果に暗くない」という意味である。
であれば、「修因感果」、「修行という原因は悟りを感得するという結果をもたらす」、「修行をすれば悟りを得られる」という主旨は明らかである。
修行をすれば悟りを得られるというのは、仏から仏へ、祖師から祖師への道である。

仏法を未だ明らめる事ができない時は、濫(みだ)りに人や天人のために演説する事なかれ。

龍樹祖師は「道から外れた外道の人の様に、世間の因果を破ってしまうと、今の生も後の生も台無しにしてしまう。
仏が大衆に仏の知見を開かせ示し悟らせ入れさせるために『この世』に出現するという因果を破ってしまうと、『仏法僧』という『三宝』、『苦集滅道』という『この世は苦であり執着が苦を招き集めており執着を滅する事ができ執着を滅する道が有る事を知る事ができる』という『四諦』、『四果』を失ってしまう」と話している。

世間の因果を破る人、仏が大衆に仏の知見を開かせ示し悟らせ入れさせるために「この世」に出現するという因果を破る人は道から外れた外道である、と明らかに知る事ができる。

「この世は存在しない」と誤って言う人、「形は『この世』に存在するが、『性』は永遠に悟りに既に帰っている。『性』とは心である。心は身体と異なるからである」と誤解している人は、道から外れた外道である。

「人は死ぬと必ず『性海』に帰る。仏法を習って修行しなくても自然に『覚海』に帰るので更に生死の輪廻転生は無い。このため、後の生は存在しない」と誤って言う人は、「断見」、「死ぬと身体が断滅するので因果や善悪の言動の報いは無いという誤った邪見」を持つ、道から外れた外道である。

たとえ姿形が出家者に似ていても、この様な邪悪な見解を持つ輩は仏の弟子ではない。まさしく道から外れた外道である。

因果を否定し信じないので、今の生も後の生も存在しないと誤るのである。因果を否定し信じないのは、真の善知識の学に参入していないからである。真の善知識の学に長く参入している人には、因果を否定し信じない等の邪悪な見解は無い。

龍樹祖師の思いやり深い教えを深く信じ頂戴するべきである。

真覚大師と呼ばれる永嘉の玄覚は、曹谿山の宝林寺の三十三祖の大鑑禅師の高弟である。

永嘉の玄覚は、元は中国の天台法華宗を習い学んでいて、左渓玄朗と同室であった。

永嘉の玄覚が涅槃経を見ていると、黄金の光が部屋に満ちて、永嘉の玄覚は深く「無生」、「生滅を超えた真理の悟り」を得た。

永嘉の玄覚は進んで曹谿山の宝林寺の三十三祖の大鑑禅師の所に至り、証をもって三十三祖の大鑑禅師に告げると、三十三祖の大鑑禅師は永嘉の玄覚が悟りを開いている事を認めた。

後に永嘉の玄覚は「証道歌」という詩を作った。

「証道歌」には「こだわらず思いのままに振る舞う空（くう）は、因果を否定し信じず、広く大きく災いを招いてしまう」と記されている。

因果を否定し信じないのは災いを招くと明らかに知る事ができる。

古代の高徳の僧は共に因果を明らめていた。

しかし、近世は後進の者は皆、因果に迷っている。

今の世でも、無上普遍正覚を求める心を大胆にして、仏法のために仏法を習おう、学ぼうと思う仲間は、古代の高徳の僧の様に因果を明らめるべきである。

「原因など存在しない」、「結果など存在しない」と言う人は道から外れた外道である。

古代の仏と等しい宏智正覚は「頌古」で、三十六祖の百丈の懐海の話の事を「一尺、約三十センチメートルの水で一丈、約三メートルの十倍の波が起きる様な物である。

五百回前の生の事なんか、どうにもできないではないか！

『因果に落ちない』事と『因果に暗くない』事を考えても、依然として葛藤の巣を突き進む事に成る。

『アッハッハッ』。あなたは会得できたのか？

もし、あなたが、とらわれないのであれば、私の『ドゥワッドゥワッハッハッ』という笑いを止める事はできない。
神を祭る社の歌と舞は自然と曲を成し、その歌の合間で拍手し『リラ』という調子を取る言葉を言おう」と話している。

「『因果に落ちない』事と『因果に暗くない』事を考えても、依然として葛藤の巣を突き進む事に成る」という言葉は、「因果に落ちない」事と「因果に暗くない」事は同じであると正しい意味で言うのである。
「因果に落ちない」事と「因果に暗くない」事と、その理は未だ知り尽くされていないのである。
なぜなら、野狐の身を脱する事は目の前に現れているが、野狐の身を脱した後、人間に生まれたとは言っていないし、天上に生まれたとも言っていないし、その他の者の身中に趣いて生まれたとも言っていない。
人が疑うべき所である。
野狐の身を脱して、善き場所に趣いて生まれるのであれば天上か人間に生まれるであろうし、悪い場所に趣いて生まれるのであれば「地獄、餓鬼、畜生、修羅」という「四悪趣」などに生まれるであろう。
野狐の身を脱して後、むなしく生まれる場所が無いはずが無い。

もし、全ての生者は死ぬと、「性海」に帰ると言ったり、「大我」に帰ると言ったりしたら、共に、道から外れた外道の誤った見解である。

夾山の圜悟克勤は「頌古」で「魚が泳げば水が濁り、鳥が飛べば毛が落ちる。

至高の鏡からは逃れ難く、虚空は空虚で広大である。
一回目の生を行っただけで(言っただけで)遥か遠く五百回目の生まで行く羽目に成ってしまった。
ただ因果の大いなる修行によってである。
突然の雷が山を破り、風が海を震わせる。
百回も練(ね)った純金の色は改善されない」と話している。

圜悟克勤の詩は、なお因果を否定し信じない趣(おもむ)きが有り、更に「常見」、「死後も人の自我は不滅であるという誤った見解」の趣(おもむ)きが有る。

杭州の径山寺の大慧宗杲は詩で「『因果に落ちない』事と『因果に暗くない』事は、石と土の塊(かたまり)である。
道で知らない人に出会って、銀山が粉砕する。
わずかな間、拍手して『ハハ』と笑う。
明州に、あの無邪気な布袋(ほてい)がいた」と話している。

圜悟克勤の詩と大慧宗杲の詩を千二百年の中国の輩は祖師の詩であると誤って思っている。
しかし、大慧宗杲の見解は未だ仏法の力が有る主旨に及ばず、ややもすれば、「自然(じねん)」、「原因が無く自然と物事は成るという誤った見解」の趣(おもむ)きが有る。

三十六祖の百丈の懐海の話の事に対して、詩を作ったり批評したりした輩は三十人余りいるが、一人として「因果に落ちない」と話す事は因果を否定し信じない事であると疑う者はいない。
憐れむべきである。
これらの輩は因果を明らめず、いたずらに乱れの中で一生をむなしく過ごすのである。

仏法を学ぶ事に参入するには、第一に、因果を明らめるのである。
因果を否定し信じない様な人は、恐らくは激しい邪悪な見解を起こして、善良に成るための根を断絶してしまうであろう。
因果の道理は歴然としていて公平である。
完全に、悪事を行う人は堕ち、善行を積む人は天に昇るのである。

もし因果が無く、むなしい代物であれば、諸仏の「この世」への出現は無く成ってしまい、二十八祖の達磨が中国へ来た「祖師西来」も無く成ってしまい、全ての生者が仏法を見聞きする事も無く成ってしまうであろう。
因果の道理は、孔子、老子などが明らめる事ができる所ではない。
因果の道理は、仏から仏へ、祖師から祖師へのみ明らめて伝える事ができる所である。
末法の世の学者は薄幸で正しい師に会えず、正しい法を聞けないので、因果を明らめる事ができないのである。
因果を否定し信じなければ、その罪、咎（とが）によって、広く大きく災いを招いて受けてしまうのである。

因果を否定し信じない悪事の他に、他の悪事を行わなくても、因果を否定し信じない誤った見解の毒は、はなはだしいのである。

そのため、仏法を学ぶ事に参入する仲間は、「菩提心」、「悟りを求める心」を優先して、仏と祖師からの大いなる恩へ報いるために、速やかに諸々の因果を明らめるべきである。

正法眼蔵　深信因果

大修行

(洪州の百丈山の、大智禅師と呼ばれる三十六祖の百丈の懐海は、三十五祖の馬祖道一から法を嗣いだ。)

三十六祖の百丈の懐海の全ての集まりに一人の老人がいて常に大衆の後について来て説法を聴いていた。
大衆が退けば老人も退いた。
しかし、突然ある日、一日、退かなかった。
ついに、祖師は「目の前に立っている、あなたは、何者か?」と質問した。
それに対して老人は「私は人ではありません。
過去、釈迦牟尼仏の前の迦葉仏の時代に、この百丈山に人として住んでいました。
ある時、仏道を学んでいる人が『大いなる修行を奥底までした人も、また因果に落ちるか否か?』と質問してきたため、私は『因果に落ちない』と(誤って)答えてしまったので、以後、五百回目の生まで野狐の身に堕ちているのです。
今、祖師に正しい答えを私の代わりに答えて欲しいのです。
そして、願わくば野狐の身を脱したいのです」と言った。
野狐の老人は祖師に「大いなる修行を奥底までした人も、また因果に落ちるか否か?」と質問した。
祖師は「(大いなる修行を奥底までした人は、)因果に暗くない」と答えた。

野狐の老人は祖師の言葉の下で大いに悟り、敬礼して、「もう私は野狐の身を脱する事ができました。(野狐の身の死体は)山の裏にあります。もし、よろしければ、僧が亡くなった時の事例によって(野狐の身の死体の)葬式をあげてください」と言った。

祖師は、僧の雑事を指導する維那の役職の者に命じて白槌を打たせてから僧達に「食後に亡くなった僧を葬送しなければいけない」と告げた。

僧達は「僧達は皆、元気である。『涅槃堂』にも病人はいない。なぜ、『亡くなった僧を葬送する』という話に成るのか？」と話し合った。

食後に祖師は僧達を連れて山の裏の岩の下に至って杖をもって一体の野狐の死体を指し示したのを僧達は見る事に成った。

そして、(野狐の死体を)法によって火葬した。

三十六祖の百丈の懐海は晩に堂に上って野狐との事を話した。

三十七祖の黄檗希運は「昔の人は誤って答えて五百回目の生まで野狐の身に堕ちました。では、転々と(常に)誤らない者は何者に成るのか？」と質問した。

百丈の懐海は「近くに来なさい。あなたのために話してあげよう」と言った。

黄檗希運は百丈の懐海に近づいて(、百丈の懐海の話が、でたらめな作り話だと理解したので、また、誤らない人などいないので、「何を寝ぼけた事を言っているのです！　目覚めなさい！」という意味で、)軽く手のひらで叩いた。

百丈の懐海は拍手して笑って「『胡』の髭(ひげ)は赤いと思っていたら、赤い髭(ひげ)の『胡』がいた」(、「でたらめで野蛮な作り話で因果について教えようと思っていたら、因果について教える野蛮な人である黄檗希運がいた」)と言った。

(「胡」には「ひげの長い未開の地の野蛮な人」という意味と「でたらめ」という意味が有る。)

三十六祖の百丈の懐海の野狐の話は、形成されて現された「公案」、「考えさせるための問題」であり、大いなる修行である。

野狐の老人の言葉は「過去、(釈迦牟尼仏の前の)迦葉仏の時代に、洪州の百丈山に人として住んでいた」である。

「現在、釈迦牟尼仏の時代に、洪州の百丈山に野狐として住んでいる」のである。

これは、形成されて現された、心を一転させる言葉である。

けれども、過去の迦葉仏の時代の百丈山と、現在の釈迦牟尼仏の時代の百丈山は、一つではなく、異なるわけでもない。

「前三三後三三」というわけではない。

(「前三三後三三」は意味が諸説有る。)

過去の百丈山が来て今の百丈山と成っているわけではない。

今の百丈山が、時間の順序が先に成った物が、迦葉仏の時代の百丈山ではない。

けれども、「過去、釈迦牟尼仏の前の迦葉仏の時代に、百丈山に人として住んでいた」という「公案」、「考えさせるための問題」が有る。

仏道を学んでいる人へのための言葉は、百丈の懐海から野狐の老人へのための「(大いなる修行を奥底までした人は、)因果に暗くない」という言葉の通りである。

ある時の、仏道を学んでいる人からの質問は、今の野狐の老人からの「大いなる修行を奥底までした人も、また因果に落ちるか否か？」という質問の通りである。

「一を挙げれば、二を挙げ得ず、(一と二を)一緒に手放してしまうと、(第一から、劣っている)第二へ陥ってしまう」、これが全てであり、これを全て無視してしまうと、劣っている状態へ陥ってしまう。

過去、仏道を学んでいる人は、過去の百丈山で、「大いなる修行を奥底までした人も、また因果に落ちるか否か？」と質問した。

この質問は、実に、軽率に単純に誤解するべきではない。

なぜなら、五十八年から七十五年までの後漢の永平の時代の間に仏法が東へ伝わった後、五百二十年から五百二十七年までの中国の南北朝時代の梁の「普通」時代に二十八祖の達磨が中国に来た後、初めて、野狐の老人の言葉によって、過去の、仏道を学んでいる人の「大いなる修行を奥底までした人も、また因果に落ちるか否か？」という質問を聞けたのである。

以前には聞く事ができなかったのである。

そのため、稀少にも聞く事ができた、と言うべきである。

大いなる修行を「把握」、「会得」するに、大いなる修行とは大いなる因果である。

修行という因果では、必ず、修行という原因が円満に悟りという結果をもたらすので、未だかつて因果に落ちる、落ちない、という議論など無く、因果に暗い、暗くない、という言葉は無い。

「因果に落ちない」事が、もし誤りならば、「因果に暗くない」事も誤りに成るであろう。

(修行という因果によって悪行による因果から救われる事を「因果に落ちない」と表現する事が可能である。)

「因果に落ちない」という誤りに「因果に暗くない」という誤りを重ねている、といえども、野狐の身に堕ちたり、野狐の身を脱したりした。

「因果に落ちない」という言葉は、たとえ迦葉仏の時代には誤りでも、釈迦牟尼仏の時代には誤りではない道理も有る。

「因果に暗くない」という言葉は、たとえ現在の釈迦牟尼仏の時代には野狐の身を脱する事ができても、迦葉仏の時代には、そうはできない道理も形成されて現されるべきである。

野狐の老人の言葉は「以後、五百回目の生まで野狐の身に堕ちている」であるが、「野狐の身に堕ちている」とは何であろうか?

先に野狐がいて百丈山の老人を招き堕とさせているわけではない。

百丈山の老人が本(もと)より野狐であったわけではない。

「百丈山の老人の魂が出(い)でて野狐という皮袋に突入した」と言ってしまうのは道から外れた外道である。

野狐が来て百丈山の老人を飲み込んだわけではない。

もし「百丈山の老人が野狐に成った」と言うならば、まず先に百丈山の老人の身が有って、後に野狐の身に堕ちたはずである。

百丈山の老人の身を野狐の身と交換したわけではない。

どうして、因果的に、そう成るであろうか？　いいえ！　因果的に、そう成るはずが無い！

因果の本質ではない。

因果が発生させる様な物ではない。

「因果にいたずらが有って人を待つ」事は無い。

たとえ「因果に落ちない」という答えが誤りでも、必ず野狐の身に堕ちるわけではない。

仏道を学んでいる人が表した質問に誤って答えてしまった悪業が原因で野狐の身に堕ちる事が必然であれば、

近頃いた、「臨済の喝」で有名な、悟らせるために弟子を怒鳴った臨済義玄、

「徳山の棒」で有名な、悟らせるために弟子を棒で叩いた徳山宣鑑、および、

その門人達は、幾千万枚もの野狐の皮袋に堕ちているはずではないか？

その他、九百年頃から現在までの杜撰（ずさん）な老僧等は、たくさんの野狐に成っているはずではないか？

けれども、野狐の身に堕ちているとは聞いた事が無い。

多ければ見聞きせずにはいられないはずである。

「誤らなかったのであろう」と言うかもしれないが、「因果に落ちない」という誤った答えよりも、はなはだしい胡乱（うろん）な疑わしい答えばかりが多い。

「仏法の辺（ほとり）」、「仏法の近く」に置くべきではない答えも多い。

学に参入できる、見る眼が有って知る事ができる。

見る眼が未だ備わっていない人は見分ける事ができないであろう。

そのため、「悪い答えによって野狐の身と成り、善い答えによって野狐の身と成らない」と言うわけではない、と知る事ができる。
三十六祖の百丈の懐海は、野狐の話の中で、野狐の身の後、どうなったかは言わなかった。
必ず、野狐という皮袋に包まれた真珠が有るはずである。
(三十六祖の百丈の懐海の、野狐の話には隠された知が有るはずである。)
それなのに、全く未だ仏法を見聞きできない輩は誤って「野狐の身を脱し終わったならば、本来の覚性という『性海』に帰るのである。迷妄によって、しばらくの間、野狐の身に堕ちて生まれた、といえども、大いに悟れば、野狐の身は既に本性に帰るのである」と言ってしまう。
これは外道の「本来の自我に帰る」という意味である。これは、仏法ではない。
「野狐は本性ではない。野狐に本来の『覚性』、『仏性』は無い」と言ってしまうのは、仏法ではない。
「大いに悟れば野狐の身を離れる、捨てる」と言ってしまうのは、野狐の老人が大いに悟った内容ではなく、なおざりな野狐と言える外道の言葉であろう。この様に言ってしまうべきではないのである。
三十六祖の百丈の懐海の、心を一転させる言葉によって、百丈山の五百回分の生の野狐の老人は、たちまち野狐の身を脱したと言う。この道理を明らめるべきである。
「傍観者は、心を一転させる言葉を話せば、野狐の身を脱する事ができる」と言ってしまうと、従来の間、山や河や大地に心を一転させる言葉は幾つと無く存在し、多くの、心を一転させる言葉がしきりに存在していた。

けれども、従来、未だ野狐の身を脱せなかった。

三十六祖の百丈の懐海の、心を一転させる言葉によって野狐の身を脱せた。

これを、古代の先人は疑うのである。

「山や河や大地は未だ、心を一転させる言葉を話さない」と言ってしまえば、三十六祖の百丈の懐海も口を開く事が無かったであろう。

また往々にして古代の僧の多くは「『因果に落ちない』という言葉と『因果に暗くない』という言葉が同じく正しい事を言っている」という事を競って言っている。

けれども、未だ「因果に落ちない」という言葉と「因果に暗くない」という言葉の繋がりに通達していない。

そのため、「野狐の身に堕ちる」事の皮肉骨髄の会得に参入せず、「野狐の身を脱する」事の皮肉骨髄の会得に参入しない。

頭が正しくないので尾も未だ正しくない。

野狐の老人は「以後、五百回目の生まで野狐の身に堕ちている」と言っているが、何が堕としているのか？　何が堕とされているのか？

正に当の野狐の身に堕ちている時、従来の尽界は今、どの様な形状の段階に有るのか？

「因果に落ちない」という「因果」という言葉と「落ちない」という言葉の繋がりが、なぜ五百回分の生に成るのか？

山の裏の岩の下の野狐の一条の皮は、どこから得て来た物であるとするのであろうか？

「因果に落ちない」と言うのは野狐の身に堕ち、「因果に暗くない」と聞くのは野狐の身を脱する。

堕ちる事も有れば、脱する事も有る、といえども、なお、これは野狐の因果である。

それなのに、古来から「因果に落ちない」という言葉は因果を否定し信じない誤りに似た言葉であるので野狐の身に堕ちてしまったと言う。

「『因果に落ちない』という言葉は因果を否定し信じない誤りに似た言葉であるので野狐の身に堕ちてしまった」という言葉は、因果を否定し信じない誤りという主旨が無く、因果に暗い人の言葉である。

たとえ百丈山の野狐の老人が因縁が有って「因果に落ちない」という言葉を選び取ったとしても、大いなる修行は他の者に隠し得ない物であり、因果を否定し信じない事には成らない。

また、「『因果に暗くない』というのは、大いなる修行は超越している脱している因果であるので、『野狐の身を脱した』と言うのである」と言う。

実に、このものの見方は、八、九割の未熟な、学に参入している者のものの見方である。

けれども、迦葉仏の時代に、かつて、この百丈山に人として住んでいて、釈迦牟尼仏の時代に、今、この百丈山に野狐として住んでいるのである。

かつての人の身と今の野狐の身は、長寿の「日面仏」と一日一夜の短命の「月面仏」であり、「野狐の精霊」を隠したり現したりするのである。

野狐が、どうして五百回分の生を知るであろうか？

もし「野狐の知を用いて五百回分の生を知る」と言っても、野狐の知は未だ一生の事を知り尽くしていない。野狐の知は一生でも未だ野狐の皮に突入していない。

「野狐は必ず五百回分の生の堕落を知り理解している」という「公案」、「考えさせるための問題」が形成されて現されているのである。

一生を知り尽くしていないが、知っている事も有り、知らない事も有る。

もし(野狐の)身と(野狐としての)知が共に生じて滅びなければ、五百回分の生を数えられない。

五百回分の生を数えられなければ、「五百回分の生を知っている」という言葉は、虚偽の作り話の説話である。

もし「野狐としての知ではない知を用いて五百回分の生を知っている」と言うならば、野狐自体が知っているわけではなく成り、誰が、どの人が五百回分の生を野狐のために代わりに知っているとするのか？

知らない事を知る「通路」、「方法」が全く無ければ、「野狐の身に堕ちている」と言えないはずである。

野狐の身に堕ちなければ、野狐の身を脱する事も無いはずである。

堕ちる事も脱する事も共に無ければ、百丈山の野狐の老人は存在しないはずである。

百丈山の野狐の老人が存在しなければ、三十六祖の百丈の懐海も存在しないはずである。

妄(みだ)りに見過ごす事を許すなかれ。

前記の様に詳細に学に参入するべきである。

前記の主旨をひねって挙げて、五百二年の梁から、陳、隋、唐、宋の千二百四十四年までの間に、時間が経つにつれて聞こえてくる誤っている説を全て見破るべきである。

また、人ではない野狐の老人は三十六祖の百丈の懐海に「もし、よろしければ、僧が亡くなった時の事例によって(野狐の身の死体の)葬式をあげてください」と告げた。

この言葉の通りにするべきではない。

三十六祖の百丈の懐海より今まで、何人もの善知識を持つ者がいたが、この言葉を明らかに疑わず、驚かない。

その主旨とは、死んだ野狐が、どうして亡くなった僧であろうか？　という事である。

戒を得ておらず、出家後の年数を経ておらず、僧としての作法が無く、僧として宗(むね)としている事が無い。

この様な類(たぐい)の者を妄(みだ)りに僧が亡くなった時の事例によって葬式をあげてしまっていては、

未出家者の何人の死でも僧が亡くなった時の事例に準じて葬式をあげるべきである事に成ってしまうではないか？！

死んだ在家者の男女も、もし要請すれば、死んだ野狐の様に、僧が亡くなった時の事例によって葬式をあげるべきである事に成ってしまうではないか？！

在家者を出家者として葬式をあげた前例を探し求めたが、前例は無く、前例を聞かない。

仏道では、在家者を出家者として葬式をあげた事例を正しく、伝えていない。

行おうと思っても、叶うべきではない。

「三十六祖の百丈の懐海は(野狐の死体を)法によって火葬した」と言うが、明らかな証拠は無い。恐らくは誤りである。

知るべきである。

僧が亡くなった時の事例は、涅槃堂に入ってからの鍛錬から、菩提園に至るまでの道をわきまえる事まで、全て、事例が有って、妄りではない。

たとえ岩の下で死んでいた野狐が百丈山の修行者を自称していても、どうして大いなる僧としての行跡が有るであろうか？　仏祖の骨髄の会得が有るであろうか？

誰が百丈山の修行者であった事を証明するのか？

いたずらに野狐の変わった怪しい話を実話であるとして、仏祖の法、儀礼を高慢にも軽視するべきではない。

仏の子、祖師の法の子孫としては、仏祖の法、儀礼を尊重するべきである。

三十六祖の百丈の懐海の様に、要請されたまま行う事なかれ。

仏祖の一つの事例、一つの法にも出会うのは難しいのである。

世俗にひかれ流されるべきではないし、人情にひかれ流されるべきではない。

この日本国の様な国は、仏祖の儀礼に出会うのは難しく、聞くのも難しいのである。

しかし、今、稀少にも仏祖の儀礼を聞いたり見たりする事が有れば、髪の中に隠された宝玉よりも深く重く尊重するべきである。

不幸な輩は、尊重する信心が厚く無いので、憐れむべきである。

事の軽重を未だ知らないからである。
五百年の知が無く、一千年の知が無いからである。
それにもかかわらず、自己をはげますべきである。他人に勧めるべきである。
一つの礼拝であっても、一つの正しい坐禅であっても、仏祖より正しく伝えられる事が有れば、出会うのが難しい事に出会えたと、深く大いに喜ぶべきである。功徳による大いなる幸福を喜ぶべきである。
この心が無い輩は、千の無数の仏の「この世」への出現に出会っても、一つの功徳も積まないであろうし、一つの益も得る事ができないであろう。
いたずらに仏法の付法から外れた外道と成るであろう。
口先で仏法を学ぶ人に似せても、仏法を口（くち）で説けるだけの証、実が無いであろう。
さて、そのため、たとえ国王や大臣であっても、たとえ梵天や帝釈天であっても、未だ僧と成っていない輩が来て、僧が亡くなった時の事例によって葬式をあげる様に要請しても、聴き入れて許す事なかれ。
「出家して戒を受け、大いなる僧と成ってから来なさい」と答えるべきである。
三界の業の報いを愛着し惜しみながら「仏法僧」という「三宝」の尊い位階を願い求める輩は、たとえ千枚の死んだ皮袋をひねって持ち出して来て、僧が亡くなった時の事例を汚し破っても、はなはだ、おかしく、功徳とは成らない。
もし仏法の功徳と良い縁（えん）を結びたいと思うならば、速（すみ）やかに仏法によって出家し、戒を受け、大いなる僧と成るべきである。

「三十六祖の百丈の懐海は晩に堂に上って野狐との事を話した」

この話の奥底の道理は、最も、未だ詳細ではなく明らかではなく善悪が分からない。

何の話であろうか？

「野狐の老人は、五百回分の生の終わりに、従来の身を脱した」と言う様な物である。

五百回分の生という数は人間の様に数えて理解するべきか？　野狐の老人の言葉の様に数えて理解するべきか？　仏道の様に数えて理解するべきか？

まして、野狐の老人のものを見る眼が、どうして三十六祖の百丈の懐海をうかがい見て一部でも理解する事ができようか？　いいえ！　できない！

野狐のものを見る眼に、うかがい見られる者は野狐の精霊である。

三十六祖の百丈の懐海のものを見る眼に、うかがい見られる者は仏祖である。

このため、枯木禅師と呼ばれる浄因の法成は詩で「三十六祖の百丈の懐海は親しく野狐を見た。

彼、野狐に要請されて、はなはだ心が離れた。

さて、今、あえて諸々の学に参入した者に質問する。

『狐は涎(よだれ)、唾(つば)を吐き尽くす事を得たか否か？』」と話している。

(眉に唾をつけると野狐の精霊に幻惑されないという口伝から「眉唾」、「まゆつば」という言葉が存在する。)

そのため、野狐は三十六祖の百丈の懐海が親しくものを見る眼である。

狐が吐き尽くす事を得た涎、唾が、たとえ半分であっても、百丈の懐海は、仏の「広長舌」を出して、野狐の代わりに心を一転させる言葉を話した。
百丈の懐海が心を一転させる言葉を話した時に、野狐の身を脱し、百丈山の人の身を脱し、人ではない老人の身を脱し、尽界の身を脱したのである。

三十七祖の黄檗希運は「昔の人は誤って答えて五百回目の生まで野狐の身に堕ちました。では、転々と(常に)誤らない者は何者に成るのか？」と質問した。

この質問に、仏祖の道が形成されて現されているのである。
三十四祖の南嶽の懐譲の法の子孫の高徳の長老の中に、三十七祖の黄檗希運の様な人は、後にも先にも未だいない。
けれども、野狐の老人は「仏道を学んでいる人に誤って答えてしまった」と未だ(、はっきりとは)言っていない。
三十六祖の百丈の懐海も「仏道を学んでいる人に誤って答えてしまった」と未だ(、はっきりとは)言っていない。
なぜ、黄檗希運は妄りに「昔の人は誤って答えてしまった」と言うのか？
もし「誤って答えてしまったので、以後、五百回目の生まで野狐の身に堕ちている」と言うならば、黄檗希運は、百丈の懐海の大意を未だ得ていない。
黄檗希運は、仏祖の道の誤った答えと正しい答えに未だ参入して究め尽くせていない様である。
百丈の懐海の野狐の話で、百丈山の野狐の老人も「誤って答えてしまった」と(、はっきりとは)言っていないし、百丈の懐海も「誤って答えてしまった」と(、はっきりとは)言っていないと学に参入するべきである。

けれども、野狐の皮、五百枚、厚さ三寸であるのをもって、かつて、この百丈山に人として住んでいて、仏道を学んでいる人のために答えたのである。

（「三寸」は「薄い」事の例えの場合が有る。）

野狐の皮に脱ぎ落とす尖毛が有るので、百丈の懐海も一枚の臭い皮袋である。

思い量るに、野狐の皮を半分脱いで来ているし、転々と(常に)誤らない堕落と脱出が有り、転々と(常に)野狐の老人の代わりに百丈の懐海が答えた因果が有り、歴然とした大いなる修行である。

黄檗希運が来て「転々と(常に)誤らなければ、かの人は何者に成るのか？」という質問を表したら、「また、堕落して野狐の身と成る」と言うべきである。

黄檗希運が「なぜ、そう成るのか？」と言ったら、「この野狐の精霊め」と言うべきである。

前記の様だとしても、誤った、誤らなかった、という話ではないのである。

黄檗希運の「昔の人は誤って答えて五百回目の生まで野狐の身に堕ちました。では、転々と(常に)誤らない者は何者に成るのか？」という質問を正しいとして許す事なかれ。

また、黄檗希運が「転々と(常に)誤らなければ、かの人は何者に成るのか？」という質問を表したら、「面(つら)の皮を手探りで会得したか否か？」と言うべきであり、「あなたは野狐の身を脱したか否か？」と言うべきであり、「あなたは他の仏道を学んでいる人に『因果に落ちない』と答えたか否か？」と言うべきである。

けれども、三十六祖の百丈の懐海は「近くに来なさい。あなたのために話してあげよう」と言ったのは、「あれは、こうなのである」と既に言っているのである。

黄檗希運は、百丈の懐海に近づいて、前後を忘れ、軽く手のひらで叩いた。どれだけの野狐に変わったのであろうか？

百丈の懐海は拍手して笑って「『胡』の髭（ひげ）は赤いと思っていたら、赤い髭（ひげ）の『胡』がいた」と言った。

この言葉を選び取ったのは、未だ完全な意気ではなく、わずかに八、九割の未熟さである。

たとえ八、九割の未熟さを許すとしても、未だ八、九割の未熟さではない。完全を許すとしても、八、九割の未熟さも無い。

けれども、「百丈の懐海の言葉は、通じる所は有る、といえども、野狐の窟（あな）を未だ出ていない。

黄檗希運の足の踵（かかと）は地についている、といえども、なお蟷螂（カマキリ）の道で滞っている。

黄檗希運が軽く手のひらで叩いた事と、百丈の懐海の拍手は、唯一無二である。

赤い髭（ひげ）の『胡』であり、『胡』の髭（ひげ）は赤い」と言うべきであろう。

正法眼蔵　大修行

その時、千二百四十四年、越宇の吉峰古精舎にいて僧達に話した。

行持

仏祖の大いなる道には必ず無上の修行の保持が有る。

道は環に成っていて、断絶しない。

心する事、修行、覚、心の寂滅の間には少しの隙間（すきま）も無い。

修行の保持の道は環に成っている。

このため、自らの強引な行いではない。

他からの強引な行いではない。

心を汚染させないための修行の保持である。

修行の保持の功徳は、自分に保持させ任せるし、他者に保持させ任せる。

その主旨は、自分の修行の保持は功徳を天地の全てに被（こうむ）らせる。

他者も知らずに、自分も知らずに、自分の修行の保持は功徳を天地の全てに被（こうむ）らせる。

このため、諸々の仏祖の修行の保持によって、私達の修行の保持が形成されて現されて、私達は大いなる道に通達するのである。

また、私達の修行の保持によって、諸仏の修行の保持が形成されて現されて、諸仏は大いなる道に通達するのである。

私達の修行の保持によって、修行の保持の道は環に成っている功徳が有る。

私達の修行の保持の道は環に成っている功徳によって、仏から仏へ、祖師から祖師へ、仏は存在し、仏ではない仮の姿をとり、思いやり、仏に成り、断絶しないのである。

修行の保持によって、太陽と月と星々は存在し、大地と虚空は存在し、身体が依り所とする環境としての報いである「この世」と過去の行いの正に報

いである身心は存在し、「地水火風」という「四大(元素)」と「色受想行識」という「五蘊」は存在する。

修行の保持は世の人が愛し好む所の物ではないが、諸々の人が充実して帰る所の物である。

過去、現在、未来の諸仏の修行の保持によって、過去、現在、未来の諸仏は形成されて現されるのである。

修行の保持の功徳は時には隠れないので、心し、修行する。

修行の保持の功徳は時には現れないので、見聞きしたり、覚知できない。

「修行の保持の功徳は、現れなくても、隠れない」と学に参入するべきである。

修行の保持の功徳は見え隠れや生死によって汚染されないので、私を形成して現す私の修行の保持が今は隠れている時に、(私の修行の保持の功徳を現すのを含む)全てのものを起こさせる、どんな因縁が有って私は修行を保持するのか会得できなくても、私が修行の保持を会得するには更に新しい特別なものは不要である。

「全てのものを起こさせる因縁とは修行の保持である。(修行の保持以外のものによって)修行の保持は起こさせられないからである」と明確に詳細に鍛錬して学に参入するべきである。

他者の過去の修行の保持を形成して現している修行の保持とは、私達の今の修行の保持である。

修行の保持を今、形成して現しているが、自分が本より存在させているわけではなく、自分に元より住んで存在しているわけではない。

修行の保持を今、形成して現しているが、(修行の保持が、)自分に去来しているわけではなく、自分に出入りしているわけではない。

「今」という言葉は修行の保持より先には存在しない。
修行の保持が形成されて現されているのを「今」と言う。
そのため、一日間の修行の保持は、諸仏の種であり、諸仏の修行の保持に成るのである。

一日間の修行の保持によって諸仏は形成されて現され修行を保持させられるのに、修行を保持しないのは、諸仏を嫌い、諸仏に捧げものを捧げず、修行の保持を嫌い、諸仏と共に生き死にせず、諸仏と共に学に参入しない事に成ってしまう。

今、華が開き、葉が落ちるのは、修行の保持が形成して現しているのである。

三日月などに月が欠けるのは、修行の保持が形成して現しているのである。
(原文の様に、三日月を「磨鏡」と呼ぶ場合が有る。「破鏡」は「月が欠ける」事を意味する場合が有る。)

このため、修行の保持を差し置こうと思考するのは修行の保持を逃れようとする邪心を隠すためであり、「修行の保持を差し置くのも修行の保持である」と嘘をついて修行の保持に代えようとするのは、修行の保持を志すのに似ているけれども、真の父の家の故郷に財宝を投げ捨てて他国の地を踏み従う貧窮の子と成ってしまう。

(
原文の「跉」は「踏む」などを意味する。
原文の「跰」は「従う」などを意味する。
)

他国の地を踏み従っている時の風や水が、たとえ身体(、肉体)の命を喪失させないといえども、真の父の財宝を投げ捨てるべきではない。

真の父の法という財宝は、なおさら、誤って失われてしまう事が有る。
このため、修行の保持は少しの間も飽(あ)きて怠(おこた)らない事が法である。

思いやり深い父である、大いなる師である、釈迦牟尼仏は、十九歳から奥深くの山で修行を保持して三十歳に至って大地と情の有る全ての生者と共に同時に仏に成った、という修行の保持が有る。

八十歳の(肉体の)寿命に至るまで、なお山や林で修行を保持し、寺で修行を保持した。

王宮に帰らず、国の利益を自分の物にせず、「布僧伽梨」という僧の三つの衣のうち一つの大衣を着る事を保持して存命中に一着だけで変えず、一つの器だけで存命中に変えず、(他人を救うために)一時も一日も独りに成らなかった。

(縁を結ぶために)人や天人からの、どんな捧げものも断らず、道から外れた外道から悪口を言われる辱めを耐え忍んだ。

一つの仏の化の導きは修行の保持であり、(縁を結ぶために)衣服や食べ物をもらう事も修行の保持である。

初祖の摩訶迦葉は、釈迦牟尼仏の正統な後継者である。

生前、専(もっぱ)ら、十二頭陀の修行を保持して怠(おこた)らなかった。

十二頭陀というのは、次の十二の修行である。

(一)人の招(まね)きを受けず、日々食べ物を乞う修行を行う。また、出家者の一食分の金銭を受け取らない。

(二)山上で寝泊まりし、人の家、都市、村に泊まらない。
(三)人によって衣服を乞わず、また、人が与えようとする衣服を受け取らず、墓地の死んだ人の物であった廃棄された衣服を直した物だけを着る。
(四)野畑の中や樹の下で寝泊まりする。
(五)一日に一食だけ食べる。「僧迦僧泥」とも呼ばれている修行である。
(六)昼も夜も横に成らず、坐って睡眠し、歩く。「僧泥沙者傴」とも呼ばれている修行である。
(七)三つの衣だけを所持し、余分な衣を所持しない。また、布団の中で横に成らない。
(八)墓地に住み、寺の中に住まない。また、人の居る所に住まない。死んだ人の骸骨を目で視て、坐禅して道を探求する。
(九)独りに成る事を欲(ほっ)して、人に見(まみ)えようと欲(ほっ)しない。また、人と共に横に成ろうと欲(ほっ)しない。
(十)先に草木の果実を食べてから、他の食べ物を食べる。他の食べ物を食べ終わってから草木の果実を再び食べない。
(十一)露地での野宿だけを欲(ほっ)し、樹の下の家で寝泊まりしない。
(十二)肉を食べず、無上の美味と言われる現代では謎の乳製品の醍醐(だいご)を食べない。油を身体に塗らない。

これを十二頭陀と言う。

初祖の摩訶迦葉は能(よ)く一生で不退転に十二頭陀の修行をした。

初祖の摩訶迦葉は如来、釈迦牟尼仏から「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を正式に伝えられても、この十二頭陀から退く事が無かった。

ある時、釈迦牟尼仏は初祖の摩訶迦葉に「あなたは既に年老いている。他の僧が乞うて貰って来て分け与え合う食べ物を食べるべきである」と言った。

初祖の摩訶迦葉は「私は、もし如来、釈迦牟尼仏の『この世』への出現に出会えなければ、独覚と成っていたでしょうし、存命中は山や林に居た事でしょう。幸いにも、如来、釈迦牟尼仏の『この世』への出現に出会え、法の潤いを受けましたが、他の僧が乞うて貰って来て分け与え合う食べ物を食べるべきではないと思ってしまうのです」と言った。

如来、釈迦牟尼仏は初祖の摩訶迦葉をほめたたえた。

また、初祖の摩訶迦葉は十二頭陀の修行を保持していたため、姿形が痩せ衰えていたので、軽視する僧達もいたほどであった。

時に、如来、釈迦牟尼仏は丁重に初祖の摩訶迦葉を呼んで座る場所の半分を譲ったので、初祖の摩訶迦葉は如来、釈迦牟尼仏の座に坐った。

知るべきである。

初祖の摩訶迦葉は釈迦牟尼仏の会の上座である。

初祖の摩訶迦葉の生前の修行の保持について全てを挙げる事ができないほど多数の修行の保持が有った。

十祖の波栗湿縛は、一生、脇を床につけて横に成らなかった。

八十歳に年老いてから道をわきまえ始めたが、速やかに(三年で)大いなる法を単一に伝えられた。

時間をいたずらに無駄に漏らさなかったので、わずかに三年の鍛錬でも、正覚の正しくものを見る眼を単一に伝えられた。

十祖の波栗湿縛は、母の胎内に六十年間いて、母の胎内から出た時には(零歳で)白髪であった。

十祖の波栗湿縛は、死体の様に横に成らないと誓って実行したので、「脇尊者」と呼ばれている。

十祖の波栗湿縛は、暗い中で手から光明を放って経を取った。

これらは生まれながらに得た不思議な徴(しるし)である。

十祖の波栗湿縛は、八十歳で、家を捨て袈裟を着(て出家し)た。

城下町の少年等は十祖の波栗湿縛を非難して「波栗湿縛は、老いて衰えている愚かな男であり、(出家するとは、)ただ、ただ、何と浅はかな考えであろうか?!

出家者は二つの業(わざ)を修行する必要が有る。

一つには『定』を習い、二つには経を読み解くのである。

しかし、波栗湿縛は、老衰していて、進歩は無いだろう。

濫(みだ)りに法という清流を汚し、いたずらに飽食するだけであろう」と言った。

時に、十祖の波栗湿縛は、人からの悪口を聞いても(逆に)感謝して、自ら誓って「私は、もし、『経、律、論』という『三蔵』に分けられる経典の理(ことわり)に通じず理解できず、三界の欲を断てず、六神通を得られず、八解脱を備えられなければ、脇を床につけて横に成らない」と言った。

それより後、十祖の波栗湿縛は、ただの一日も怠(おこた)らずに、歩いては坐禅し、留まって立っては思い量った。

十祖の波栗湿縛は、昼は教えの理(ことわり)を習って研究し、夜は静かに思慮し精神を凝(こ)らした。

三年が経って、十祖の波栗湿縛は、「経、律、論」という「三蔵」に分けられる経典の学に通じて理解し、三界の欲を断ち、三明六神通の知を得た。

当時の人は、十祖の波栗湿縛を敬って「脇尊者」と呼んだ。

十祖の波栗湿縛は、母の胎内に六十年いてから出た。

十祖の波栗湿縛は、母の胎内で鍛錬が無かったであろうか？

十祖の波栗湿縛は、母の胎内を出てから(八十年)後、八十歳に成ろうとする時に、初めて出家して道を学ぶ事を求めた。

母の胎内に宿ってから百四十年後である。

実に、十祖の波栗湿縛は、比類無く、誰よりも老衰していた。

十祖の波栗湿縛は、母の胎内で年老い、母の胎内を出て年老いてから出家した。

けれども、十祖の波栗湿縛は、人の悪口を無視して、誓い、願って、一心に不退転だったので、わずか三年を経てから、道をわきまえる事が形成されて現されたのである。

誰が「賢者を見て、同じく、賢者のように成りたいという思い」を緩(ゆる)めるであろうか？　いいえ！　誰もが「賢者を見て、同じく賢者に成りたいという思い」を緩(ゆる)めない！

老衰を恨む事なかれ。

この世の生は知り難い。

生なのか？　生ではないのか？

老いなのか？　老いではないのか？

「人、魚、天人、餓鬼の見方は異なる」という「四見」自体が既に異なっており、諸々の種類の者の見方は異なる。

ただ強い意思で専(もっぱ)らに修行して、道をわきまえる鍛錬をするべきである。

道をわきまえて生死を見ると、生死は類似している、として学に参入するべきである。

生死をわきまえて道をわきまえるわけではない。

現代人が五十歳、六十歳、七十歳、八十歳に及んでも道をわきまえる事を差し置こうとするのは最悪の愚かさである。

生まれて来てから、どれだけの年月が経ったと覚知しても、それは一時の人の精神の手段であり、道を学ぶ事情とは成らない。

老衰を振り返る事なかれ。

一心に道をわきまえる事を学び究めるべきである。

十祖の波栗湿縛のように成るべきである。

墓地に一つ積もるだけの土の塵(ちり)と成る肉体を惜しむ事なかれ。肉体を振り返る事なかれ。

一心に道を会得しなければ、あなたを誰が憐れむであろうか？　いいえ！

一心に道を会得しなければ、あなたを誰も憐れまない！

主(である魂)の無い形骸化した骸骨をいたずらに野に散らす時、正しくものを見る眼を作るように正しくものを見るべきである。

三十三祖の大鑑禅師は、中国の新州の木こりであって、知識が有ったとは言い難かった。

幼くして父を亡くし、老いた母に育てられて成長した。

木こりの仕事を、養ってくれている母の生活の手段とした。

十字路の街頭で経の一句を聞いた後、すぐに老いた母を(泣く泣く)置いて大いなる法をたずねた。

これは世にも稀(まれ)な大いなる器の人であり、抜群の、道をわきまえた人である。

二十九祖の慧可の様に腕を切るのが、たとえ簡単だとしても、愛している人を置いて行くのは大いに難しいし、母の恩を置いて行き道に入るのは軽い事ではない。

三十三祖の大鑑禅師は、黄梅の三十二祖の弘忍の会に身を投じて八か月間、眠らず、休まず、昼も夜も(他の僧のために)米をついた。

三十三祖の大鑑禅師は、夜中に三十二祖の弘忍から衣と器を正式に伝えられた。

既に法を会得した後も、なお八年間、(他の僧のために)石臼(いしうす)を負って歩いて米をついた。

寺の長(おさ)の僧と成って、人を仏土へ渡して救うために法を説いている時でも、(他の僧のために)石臼(いしうす)によって米をつくのを差し置かなかったのは、世にも稀(まれ)な修行の保持である。

江西の三十五祖の馬祖道一は、坐禅する事、二十年に及んで、三十四祖の南嶽の懐譲からの心の印を密(ひそ)かに受けたのである。

三十五祖の馬祖道一は、法を伝えて人を救済する時、「坐禅を差し置く」とは言わなかった。

(三十五祖の馬祖道一は、法を伝えて人を救済する時、坐禅をする様に必ず言った。)

学に参入した人が初めて至った時には、必ず心の印を密(ひそ)かに受けさせた。
生活に必要な農作業や清掃といった作業場所には必ず先に赴(おもむ)き、老いても飽(あ)きて怠(おこた)らなかった。
今の臨済宗は、江西の三十五祖の馬祖道一の流れを汲(く)んでいる。

三十七祖の雲巌曇晟は、道悟円智と、同じく、三十六祖の薬山惟儼の所で学に参入して、共に誓いを立てて、四十年、脇を床につけて横に成らず、一心に学に参入して究めた。
三十七祖の雲巌曇晟は、悟本大師と呼ばれる三十八祖の洞山良价に法を伝えた。

三十八祖の洞山良价は、「私は、一片のわずかな者にでも打ち成りたいと欲(ほっ)して坐禅して道をわきまえる事すでに二十年に成る」と言った。
今、この言葉は、遍(あまね)く伝わっている。

弘覚大師と呼ばれる三十九祖の雲居道膺は、昔、三峰庵に住んでいた時、天人に食べ物を捧げられていた。
三十九祖の雲居道膺は、ある時、三十八祖の洞山良价の所に参って大いなる道を選び取り決意してから、三峰庵に帰った。
天使と言える天人は食べ物を捧げるために祖師を探したが、三日経っても祖師を見る事ができなかった。

三十九祖の雲居道膺は、天人からの食べ物を待ち望む事が無く、大いなる道を宗（むね）としていた。
大いなる道をわきまえて請け負う、三十九祖の雲居道膺の強い意思を想像するべきである。

三十六祖の百丈の懐海は、昔、三十五祖の馬祖道一のそばで仕える侍者であった時から、死という夕べに至るまで、一日も他人のための奉仕に勤めない日は無かった。
恐れ多い「一日、作業をさせてもらえなかったので、一日、食べずに抗議した」行跡を残したというのは、
三十六祖の百丈の懐海は、年老いてもなお、生活に必要な農作業や清掃といった作業で若い人と同じように励（はげ）んでいたため、僧達は心を痛め、人々は憐れんでいたが、祖師は止めなかったので、ついに作業の時に作業の道具を隠して祖師に与えなかったら、祖師は、その日一日食べず、僧達の作業に加われなかった事を不満に思う意思を表明した。
これを三十六祖の百丈の懐海の「一日、作業をさせてもらえなかったので、一日、食べずに抗議した」行跡と言う。
千二百四十二年の中国に伝わり流れている臨済宗の奥深い家風ならびに諸方の禅寺の多くは、三十六祖の百丈の懐海の奥深い家風、修行を保持しているのである。

鏡清の道忟が、寺院に住んでいた時、「土地神」と呼ばれる霊は祖師の顔を見る事ができなかった。

(雑念といった)手がかりを得る事ができなかったからである。

三平山の義忠は、昔、天人に食べ物を捧げられていた。

三平山の義忠が師の大巓に見え(まみ)た後に、天人は三平山の義忠を探し求めたが、見る事ができなかった。

(雑念といった手がかりを得る事ができなかったからである。)

潙山の霊祐の兄弟弟子である、後大潙と呼ばれる長慶大安は、「私は二十年、潙山の霊祐の所に居て、潙山の霊祐の食べ物を食べ、潙山の霊祐の排泄物を排泄したが、潙山の霊祐の道に参入しなかった。ただ一頭の神の使いである牛、水牛を放し飼いにし得て、終日、外を回るのである」と言った。

知るべきである。

一頭の神の使いである牛、水牛(の様に、神の使いの様な長慶大安)は、二十年、潙山の霊祐の所に居る修行の保持によって放し飼いにし得たのである。長慶大安は、かつて、百丈の懐海の会の下で学に参入して来ているのである。

静かに二十年間の様子を想像するべきである。

忘れる時なかれ。

たとえ潙山の霊祐の道に参入する人がいても、潙山の霊祐の道に参入しない修行の保持は稀である。

観音院の趙州真際大師は、歳が六十一歳に成った時に、初めて、心して道の探求を志した。

趙州真際大師は、水瓶と錫杖を携えて行脚し諸方を遍歴している時に、常に自ら「七歳の児童であっても、もし私よりも優れていれば質問する。百歳の老人であっても、もし私に及ばなければ教える」と言った。

趙州真際大師は、「七歳の児童であっても、もし私よりも優れていれば質問する。百歳の老人であっても、もし私に及ばなければ教える」様にして南泉普願の道を学び会得する鍛錬は二十年に及んだのである。

趙州真際大師は、歳が八十歳に至った時、初めて趙州の城東の観音院に住んで、四十年来、人と天人を化して導いた。

趙州真際大師は、未だかつて、一包みの書をもって布施を求めなかった。

趙州真際大師の観音院の堂は大きくなく、坐禅する場所である「前架」が無く、洗面器などを置く場所である「後架」が無かった。

ある時、椅子（イス）の脚が折れたが、趙州真際大師は一つの焼き切れた焼き残りの木を縄によって椅子（イス）に結びつけて幾年月も経歴して修行していたので、寺で事務を司る「知事」の僧が椅子（イス）を新しい物に換えようとしたが、趙州真際大師は許さなかった。

古代の仏と等しい趙州真際大師の家風を聴くべきである。

趙州真際大師が趙州に住んだのは八十歳より後であり、法を伝えられてからである。

趙州真際大師は、正しい法を正しく伝えられた。

人々は趙州真際大師を「古代の仏と等しい」と言った。

未だ正しい法を正しく伝えられていない人は、趙州真際大師よりも(尊重できず)軽い。

未だ八十歳に至らない人は、趙州真際大師よりも強く健康であろう。

壮年で(尊重できず)軽い私達が、どうして老年の尊重できる趙州真際大師といった人に及ぶであろうか？　いいえ！　壮年で(尊重できず)軽い私達は、老年の尊重できる趙州真際大師といった人に及ばない！

はげんで道をわきまえて修行を保持するべきである。

趙州真際大師は、四十年間、俗世の財産を蓄えず、米といった穀物無しで常に過ごしていた。

趙州真際大師は、栗(クリ)の実と椎(シイ)の実を拾って食べ物に当てたり、今日の分の食べ物を我慢して食べないで翌日食べたりした。

実に、古代の、竜や象(ゾウ)の様な高徳の僧の家風であり、恋慕するべき常日頃の行いである。

ある時、趙州真際大師は、僧達に「あなたが、もし一生、寺や林を離れず(坐禅して)、五年間、十年間、話さなければ、あなたが『話せない人』であると人々は呼ぶ事ができず、諸仏も、あなたをどうにもできない」と言った。

「あなたが、もし一生、寺や林を離れず(坐禅して)、五年間、十年間、話さなければ、あなたが『話せない人』であると人々は呼ぶ事ができず、諸仏も、あなたをどうにもできない」とは修行の保持を示しているのである。

知るべきである。

(坐禅して)五年間、十年間、話さない事は、愚かである事に似ているといえども、(坐禅して)寺や林を離れない鍛錬によって、話さないといえども、話せない人ではない。

仏道とは、そういう物である。

仏道の「声」、「言葉」を聞かない人には、話さないが話せない人ではない道理が有る訳が無い。

そのため、修行の保持の無上に妙なる事は、(坐禅して)寺や林を離れない事である。

(坐禅して)寺や林を離れない事は、(古い心身を)脱ぎ落とす事であり、全てが言葉である。

無上に愚かな自分は、話せない人ではない事を知らず、話せない人ではない事を知らせない。

無上に愚かな自分は、誰も遮(さえぎ)って邪魔しなくても、話せない人ではない事を知らせないのである。

話せない人ではない人に成るのを、どのように会得できるか、聞かず、知らないのは、憐れむべき自己を持つ人である。

(坐禅して)寺や林を離れない修行を静かに保持するべきである。

(この世という)東西の風に流されて左右される事なかれ。

五年間、十年間の年月には、知る事ができなくても、音声や色形といった物を透過して脱ぎ落とす道が有る。

音声や色形といった物を透過して脱ぎ落とす道の感得は、自分では知る事ができず、自分では理解する事ができない。

修行を保持できる、わずかな時間を惜しんで修行を保持するべきである、と学に参入するべきである。

話さない事を、空(むな)しいと疑う事なかれ。
(仏教の門の)出入りは、一つの、(坐禅して)寺や林を離れない事である。
鳥の道(に例えられる坐禅)は、一つの、(坐禅して)寺や林を離れない事である。
遍(あまね)く世界は、一つの、(坐禅して)寺や林を離れない事である。

大梅山は中国の慶元府に有り、大梅山に護聖寺が建てられたのは、法常禅師が大梅山で修行を保持したからである。
法常禅師は、中国の襄陽の人である。
法常禅師は、かつて三十五祖の馬祖道一の会に参入して「仏とは、どのようなものでしょうか?」と質問した。
馬祖道一は「即心是仏」、「正しい心が仏である」と言った。
法常禅師は、「即心是仏」、「正しい心が仏である」という言葉の下で大いに悟った。
そして、法常禅師は、大梅山の頂上に昇って、人と交流せず、草の屋根の小さな質素な庵(いおり)に独りで暮らした。
法常禅師は、松の実を食べ、蓮(ハス)の葉を衣にした。
大梅山には小さな池が有り、大梅山の池には蓮(ハス)が多かった。
法常禅師が坐禅して道をわきまえたのは三十年余りに及んだ。
法常禅師は、人の社会の事は全く見聞きせず、修行を保持した年数を全く覚えず、四方の山が緑色に成ったり黄色に成ったりするのをだけ見た。
法常禅師が修行を保持した年月は、想像するに、気の毒に思うほど厳しい年月である。

法常禅師は、坐禅では、八寸、約二十四センチの鉄塔一基を宝の冠を載せる様に頭の上に置いた。
頭の上の鉄塔を地に落とさない様に鍛錬すれば、眠らないからである。
法常禅師の鉄塔は、千二百四十二年現在、大梅山に有り、蔵の帳簿に記されている。
法常禅師は、眠らない様に鉄塔を頭の上に載せて坐禅して、道をわきまえ、死に至るまで飽(あ)きて怠(おこた)らなかった。
法常禅師が大梅山で眠らない様に鉄塔を頭の上に載せて坐禅して年月を経ていると、塩官斉安の会より一人の僧が大梅山に来て、大梅山に入って良い杖を探し求めていると、山の道に迷って、図らずも、法常禅師の庵(いおり)の有る所に至った。
塩官斉安の会の僧は、期せずして、法常禅師に見(まみ)えて、「和尚様、法常禅師様、大梅山に住んでから今まで、どれだけの時が経ちましたか？」と質問した。
法常禅師は、「ただ、四方の山が緑色に成ったり黄色に成ったりするのを見るのみです(。覚えていません)」と言った。
塩官斉安の会の僧は、「山を出る道へは、どちらの方向に向かって行けば良いでしょうか？」と質問した。
法常禅師は、「流れに従って行きなさい」と言った。
塩官斉安の会の僧が、法常禅師を不思議に思い、帰って塩官斉安に話すと、塩官斉安は「その昔、江西の馬祖道一の会に居た時に、一人の僧をかつて見たが、その時より後、消息を知らない。消息不明の僧は大梅山の僧ではないであろうか？」と言った。

ついに、塩官斉安は塩官斉安の会の僧に命じて法常禅師を招いたが、法常禅師は、大梅山を出ず、詩を作って、「(私、法常禅師という)砕けた枯木が寒い林に有る。
木こりは、(私、法常禅師は、)幾度か春に逢ったが、心を変えなかった。
大工が、どうして、苦しんで、(私、法常禅師という)砕けた枯木に遭遇しても顧みない。
(私、法常禅師は、)(私、法常禅師という)砕けた枯木を追い求める事をでき得ようか？　いいえ！　しない！」と答えて、ついに、塩官斉安の会に赴(おもむ)かなかった。

そして、法常禅師は、これより後、なお、山奥へ入ろうとして、詩を作って、「一つの池の蓮(ハス)の葉による衣は尽きる事が無い。
数本の樹の松の実は食べても余る。
世の人に、(私、法常禅師の)住んでいる所を知られてしまった。
更に、草の屋根の小さな質素な庵(いおり)を移して、(大梅山の)深い所に入る」と言って、ついに、庵(いおり)を山奥に移した。

ある時、馬祖道一は、特別に、僧を大梅山の法常禅師の所に派遣して、「和尚様、法常禅師様、その昔、馬祖道一の会に参入して、馬祖道一に見(まみ)えて、どんな道理を会得して大梅山に住んでいるのか？」と質問した。

法常禅師は、「馬祖道一は、私、法常禅師に向かって『即心是仏』、『正しい心が仏である』と言ってくれました。そして、大梅山に住んでいます」と言った。

馬祖道一の会の僧は、「近頃の、馬祖道一の仏法は、(『即心是仏』とは、)違います」と言った。

法常禅師は、「(近頃の、馬祖道一の仏法は、『即心是仏』とは、)どの様に違うのですか？」と言った。

馬祖道一の会の僧は、「(近頃、)馬祖道一は、『非心非仏』、『仏とは、心でもないし、仏でもない』と言っています」と言った。

法常禅師は、「あの老人(、馬祖道一)は、(思考させるために)他人を惑わして思考を乱す事を理解しなければいけない。

そのため、あの人(、馬祖道一)は、『非心非仏』、『仏とは、心でもないし、仏でもない』し、私、法常禅師は、ただ、ひたすらに、『即心是仏』、『正しい心が仏である』(。あの人は、あの人のやり方で他人を悟らせれば良いし、私は私のやり方で悟れば良い)」と言った。

馬祖道一の会の僧が、法常禅師の言葉を馬祖道一に話すと、馬祖道一は、「梅の実が熟した(。法常禅師は熟達した)」と言った。

この法常禅師の話は、人も天人も皆、知っている。

天龍は、法常禅師の高弟である。

倶胝は、(天龍の弟子であり、)法常禅師の法の子孫である。

高麗の迦智は、法常禅師の法を伝えられて保持して、(三十七祖、)高麗の初祖と成った。

高麗の諸々の祖師は、法常禅師の法の遠い子孫である。

法常禅師の生前には、一頭の虎と一頭の象が、法常禅師に常にそばに仕えて、争わなかった。

法常禅師の円満の死後、虎と象は、石を運び、泥を運んで、法常禅師の塔を造った。

虎と象が造った法常禅師の塔は、千二百四十二年現在、大梅山の護聖寺に現存している。

法常禅師の修行の保持は、古今の知識が有る人は皆、同じく、ほめる所である。

智慧が劣っている者は、法常禅師の修行の保持をほめるべきであると知らない。

名声と利益を貪(むさぼ)って愛着する者の中に仏法者がいると強引に作為的に誤って思い量って見なすのは、思い量りの矮小な愚かな見解である。

五祖山の法演禅師は、次の様に言った。

(私、法演禅師の)師の師である、楊岐方会が、初めて楊岐山(の普明院)に住んだ時、屋根と、屋根の支えが老朽化していて、風や雨の弊害がはなはだしかった。

冬の終わりの時には、殿堂は、ことごとく、古いために損壊した。

中でも「僧堂」、「坐禅堂」が特に破損し、雪や霰(あられ)が床に満ちていて、坐る所が無いほどであった。

高齢の高徳の長老ですら、雪除(ゆきよ)けし、憂(うれ)いが有るかの様に眉間(みけん)に皺(しわ)が寄るほどであった。

そのため、僧達は坐禅する事が困難であった。

そこで、僧達が(坐禅堂の雪に)降参して(坐禅堂の)修繕を楊岐方会に請い願ったら、楊岐方会は却下して次の様に言った。

釈迦牟尼仏は次の様に言った事が有る。

時は「減劫」、「正しい心などが減衰する時代」に当たるし、高い岸や深い谷ですら変遷して常には存在しない。

どうして円満に思い通りに自らが満足できる事を求め得ようか？　いいえ！　円満に思い通りに自らが満足できる事を求める事はできない！

古来から、聖者の多くは、樹の下や露地で、坐禅し、坐禅の合間に歩いた。
古来の優れた行跡であり、空を履行する奥深い家風である。
あなた達は出家して道を学んでいる最中で手足の所作も未だ穏やかではなく、わずかに四、五十歳である。
それなのに、どうして、いたずらに暇が有ったりして満ち足りた家屋を務めとするのか？

ついに、楊岐方会は、僧達に従わなかった。
翌日、楊岐方会は、堂に上って、僧達に次の様に言った。

(私、楊岐方会は、)初めて楊岐山(の普明院)に住んだが、屋根や壁に隙間が有り、床は全て雪が散らばっている。
(寒さに、)うなじを縮めて、密かに嘆くが、翻って(考え直して、)古代人(の聖者の多く)は、(屋根や壁が無くて寒い)樹の下に居た事を思い出す。

ついに、楊岐方会は、僧達に(坐禅堂の)修繕を許さなかった。
けれども、世界の、雲や霞の様に諸方を訪ねる僧達は、楊岐方会の会に参入するのを願った。
仏道に夢中に成る人が多い事を喜ぶべきである。
楊岐方会の言葉を心に染み込ませるべきである。
楊岐方会の言葉を身に刻むべきである。

ある時、法演禅師は、「行いは思いを超えない。思いは行いを超えない」と言った。

法演禅師の「行いは思いを超えない。思いは行いを超えない」という言葉を重んじるべきである。

日夜、「行いは思いを超えない。思いは行いを超えない」と思い、朝夕、「行いは思いを超えない。思いは行いを超えない」として行うべきである。

いたずらに、(この世という)東西南北の風に吹かれるままに成っているべきではない。

まして、この日本国は、王や大臣の宮殿は木や瓦の屋根ではなく、草の屋根である。

どうして、出家して道を学んでいる僧が木や瓦の屋根の家に住めるだろうか?

もし出家者が木や瓦の屋根の家を得たら、生き方が誤っていて、清浄である事は稀である。

元から木や瓦の屋根の家が有る出家者は論じるまでも無い。

出家者は更に木や瓦の屋根の家を経営する事なかれ。

草の屋根の家は、古代の聖者が住んでいた所であり、古代の聖者が好んでいた所である。

後進の学徒は、古代の聖者を慕(した)い、学に参入するべきであり、誤る事なかれ。

黄帝、堯、舜などの中国の古代の皇帝は、俗世の人といえども、草の屋根の家に住んでいたのは、世界の優れた行跡である。

「尸子」には次の様に記されている。

黄帝の行いを観察しようと欲(ほっ)するならば、「合宮」で黄帝の行いを観察するべきである。

堯と舜の行いを観察しようと欲(ほっ)するならば、「総章」で堯と舜の行いを観察するべきである。

黄帝が政治を行った宮殿は、屋根が草であり、「合宮」と名づけられた。

(堯と)舜が政治を行った宮殿は、屋根が草であり、「総章」と名づけられた。

知るべきである。

黄帝、堯、舜が政治を行った宮殿は、屋根が草である。

黄帝、堯、舜を現代人と比較したら、天と地の差以上の差が有る。

黄帝、堯、舜ですら草の屋根の宮殿で政治を行い、俗世の人ですら草の屋根の家に住んでいるのに、どうして出家者が景観が優れた(草の屋根ではない)立派な家屋に住めるであろうか?

草の屋根ではない立派な家屋に住んでいる出家者は反省し恥じるべきである。

古代人(の在家者や出家者)は、樹の下に居たり、林の中に住んでいたりしたが、(古代人の)在家者と出家者が共に好んで住んでいた所なのである。

黄帝は、崆峒山の仙人の広成子の弟子である。
広成子は「崆峒」と言う崆峒山の岩穴の中に住んでいた。
千二百四十二年の中国の国王や大臣の多くは、広成子の奥深い家風を伝えている。

俗世という塵（ちり）の中で労苦している人ですら岩穴に住んでいたのである。
出家者が、どうして俗世という塵（ちり）の中で労苦している人より劣悪で善いであろうか？　濁って汚れていて善いであろうか？

従来の仏祖の中に、天人の捧げものを受けた祖師は多い。
けれども、祖師が道を会得した時、(天人の)天眼通は力が祖師に及ばなく成り、鬼神は祖師を知る手がかりを失くす。
祖師が道を会得すると天人や鬼神が祖師を知る手がかりを失くす主旨を明らめるべきである。
もし天人や鬼神が仏祖の行いを踏襲（とうしゅう）する時は、仏祖に近づく道が有る。
仏祖が天人や鬼神を超越した証に入ると、天人や鬼神には、仏祖を遥かに見上げる手がかりすら無く成り、仏祖の辺（ほとり）に近づく事は困難に成る。

南泉普願は、「老僧である私、南泉普願は、修行の力が無くて鬼神に見られてしまう」と言った。

知るべきである。

修行をしていない鬼神に見られるのは、修行の力が無いのである。

太白名山の宏智正覚の会で、寺の守護神は、「私は、『宏智正覚が、太白名山に住んで十年余りに成る』と聞いたが、常に、寺の長の僧が住んでいる『寝堂』に行って、宏智正覚を見ようとしたが、前に進む事が不能に成り、前に進む事が不能に成る事を未だに理解できないのです」と言った。

実に、仏道に適っている先人の行跡に会うのである。

「太白名山」、「天童山」の寺院は、元は小さな寺院であった。

宏智正覚が太白名山に住んでいる時に、宏智正覚は、道教の寺院、尼寺、教院などを整理して景徳寺と成した。

宏智正覚の死後、左朝奉、大夫、侍御史の王伯庠が宏智正覚の行業記を記していると、ある人が「道教の寺院、尼寺、教寺を奪って太白名山の景徳寺と成した事を記すべきである」と言ったが、王伯庠は「できません。道教の寺院、尼寺、教寺を整理して景徳寺と成した事は、僧としての徳行ではない」と言い、当時の人の多くは王伯庠をほめた。

知るべきである。

道教の寺院、尼寺、教寺を整理して景徳寺と成した事は、俗世にいる人としての行動であり、僧としての徳行ではない。

仏道に入って登る最初から、遥かに三界の人と天人を超越しているのである。

三界の人と天人が使用している所とは異なるし、三界の人と天人が見ている所とは異なる事を明確に詳細に自問自答するべきである。

身口意および報いによる環境と身によって鍛錬して学に参入して究めるべきである。

仏祖の修行の保持の功徳は、元より人と天人を仏土へ渡す巨大な益が有るが、人と天人は仏祖の修行の保持に助けられていると覚知できないのである。

今、仏祖の大いなる道である修行の保持をするには、大いなる真の隠者と矮小な未熟な隠者を論ずる事なかれ。聡明な人を好み愚鈍な人を嫌う事なかれ。

ただ、永遠に名声と利益を投げ捨てて、諸々の縁(えん)に縛られて繋がれる事なかれ。

時間を無駄に過ごさず、頭が燃えているのを払うかの様に修行するべきである。

大いなる悟りを待ち望む事なかれ。大いなる悟りは仏教という家の日常茶飯事である。

悟らない心を願う事なかれ。悟らない心は「法華経」の髪の中に隠された宝玉である。

ただ、正に(仏教のために)、家が有る人は家を離れ、恩愛が有る人は(泣く泣く)恩愛を離れ、名声が有る人は名声を逃れ、利益が有る人は利益を逃れ、田畑が有る人は田畑を逃れ、親族が有る人は親族を離れるべきである。

名声や利益などが無い人も(新たに名声や利益などを得ようとせずに)名声や利益などを離れるべきである。

既に有るものを離れるのだから、無いものをも離れるべきである道理は明らかである。

名声や利益などを離れるのは、修行の保持の一つである。

生前に名声や利益を投げ捨てて、一つの修行を保持するのは、(仏と成れば、)無限の仏の寿命の永遠の修行の保持に成る。

今、この修行の保持は、必ず、他の修行の保持によって修行を保持させてもらっているのである。

この修行を保持している身心を、自らも、愛するべきであるし、敬うべきである。

大慈寰中は、「一丈、三メートルの説明をでき得ても、十分の一の、一尺、三十センチの行いを取れるのには及ばない。

一尺、三十センチの説明をでき得ても、十分の一の、一寸、三センチの、わずかな行いを取れるのには及ばない」と言った。

大慈寰中の言葉は、現代人が修行の保持をおろそかにして仏道への通達を忘れている様を戒めているのに似ているが、一丈、三メートルの説明が正しくないというわけではなく、十分の一の、一尺、三十センチの行いは、十倍の、一丈、三メートルの説明よりも功徳が大きいと言っているのである。

どうして、十倍の一丈と十分の一の一尺という長さの差しかないであろうか？　いいえ！

須弥山と芥子(からし)の種の遥かな差によって功徳を論じる事も有るべきである。

ただし、須弥山という完全な量が有り、芥子の種という完全な量が有る。
修行の保持の大事さは、山と芥子の種の差ぐらい有るのである。
大慈寰中が言い得たのは、大慈寰中が自ら作為的に言葉と為したからではなく、大慈寰中が自ら言葉を行為で実践してきたからである。

三十八祖の洞山良价は、「行い得ない奥底は、説明によって、理解して取り、
説明し得ない奥底は、行って、理解して取る」と言った。
三十八祖の洞山良价という高徳の祖師の言葉である。
三十八祖の洞山良价の言葉の主旨は、「行いは説明に通じる道を明らめている」という事と、「説明は行いに通じる道が有る」という事である。
そのため、「終日、説明している事を、終日、行う」のである。
「終日、説明している事を、終日、行う」という言葉の主旨は、「行い得ない奥底を、(あえて)行って、理解して取り、
説明し得ない奥底を、(あえて)説明して、理解して取る」のである。

三十九祖の雲居道膺は、三十八祖の洞山良价の「行い得ない奥底は、説明によって、理解して取り、説明し得ない奥底は、行って、理解して取る」という言葉を七と八に通達して、「説明している時は、(行っているので、更に)行う道は無いし、行っている時は、(説明しているので、更に)説明する道は無い」と言った。

三十九祖の雲居道膺の「説明している時は、(行っているので、更に)行う道は無いし、行（おこな）っている時は、(説明しているので、更に)説明する道は無い」という言葉を会得すれば、行いと説明が無いというわけではない(事を理解するであろう)。

説明している時は、一生、(坐禅して)寺や林を離れないのである。

行（おこな）っている時は、無言で頭を洗って来て雪峰義存の前に現れるのである。

(「正法眼蔵」の「道得」には、雪峰義存が、山中で頭を剃る時間も惜しんで修行していた弟子に、「真理を言い得たならば、あなたの頭を剃らない」と言ったら、弟子は無言で頭を洗って来て雪峰義存の前に現れたので、雪峰義存は弟子の頭を剃ってあげた、という逸話が記されている。)

「説明している時は、(行っているので、更に)行う道は無いし、行（おこな）っている時は、(説明しているので、更に)説明する道は無い」という事を差し置くべきではない。乱すべきではない。

古くから仏祖は「もし人が百歳まで生きる事ができても、諸仏の大事な心を会得しなければ、未だ一日しか生きていなくても諸仏の大事な心を決定的に理解した人には及ばない」と言っている。一人や二人の仏だけが言っているのではない。諸仏が言い得て理解して来た事である。諸仏が行い得て理解して来た事である。

百、千、万の無数の劫の、生死がくり返されている中で、修行を保持した一日は、髪の中に隠された光輝く宝玉であり、十八祖の伽耶舎多の鏡といっ

た生死を共にする「古鏡」、「古くから鏡としているもの」であり、喜ぶべき一日である。

（「古鏡」、「古くから鏡としているもの」については「正法眼蔵」の「古鏡」を参照してください。）

修行を保持する力は自らが喜ぶ事ができるのである。

修行を保持する力に未だ至らない人、仏祖の「骨髄」、「理解」を受けていない様な人は、仏祖の身心を惜しまず、仏祖の「面目」、「有様（ありよう）」を喜ばないのである。

仏祖の「骨髄」、「理解」と「面目」、「有様（ありよう）」は、消え去らず、消え去る物に似ているが、如来の様に無敵であり、来なくても既に遍在している、といえども、必ず一日の修行の保持によって受け取る事ができるのである。

そのため、一日を重んじるべきなのである。

いたずらに無駄に百歳まで生きるのは、恨むべき年月であり、悲しむべき「形骸」、「中身が無く外見だけ上辺（うわべ）だけの物」なのである。

たとえ百歳までの年月を音声や色形の奴隷として奔走しても、その中の一日でも修行を保持する行いをして理解して取れば、一生の百歳を行（おこな）って理解して取るだけではなく、来世の他の生をも仏土へ渡して取るのである。

一日の身体の命は、尊重するべきである。尊重するべき「形骸」、「外形」である。

そのため、一日しか生きていなくても、諸仏の大事な心を会得すれば、一日を長い劫の中の多くの生よりも優れた物とするのである。

このため、諸仏の大事な心を未だ決定的に理解していない時は、一日を無駄に使う事なかれ。

一日は惜しむべき貴重な宝である。

（わずかな時間よりも劣る）一尺、三十センチの直径の宝石の価値を、わずかな時間以上の物であると誤って見なすべきではない。

時間を、命がけで獲得する必要が有る黒竜の宝玉と交換する事なかれ。

古代の賢者を惜しむ事は、身体の命を惜しむよりも大事である。

静かに思うべきである。

命がけで獲得する必要が有る黒竜の宝玉は求めて得られるかもしれないし、（わずかな時間よりも劣る）一尺、三十センチの直径の宝石は得る事も有るかもしれない。

しかし、一生の百歳までのうちの一日は、一度、失ったら、再び得る事は無い。

どんな巧みな手段が有れば、過ぎた一日を再び得る事ができるのか？　いいえ！　過ぎた一日を再び得る手段は無い！

「過ぎた一日を得た」なんて、歴史書にも記されていない。

もし一日をいたずらに無駄に過ごさなければ、年月を皮袋である肉体に包含して漏(も)らさない。

古代の聖者や賢者は、年月、時間を、眼よりも惜しみ、国土よりも惜しんだ。

一日をいたずらに無駄にするのは、名声と利益の浮世に汚染され惑(まど)わされ乱されて行く事に成る。

一日をいたずらに無駄にしないのは、既に仏道にいるが、仏道のためにするのである。

すでに諸仏の大事な心を決定的に会得したならば、会得した後も、一日をいたずらに無駄にしないべきである。

ひとえに、仏道のために行って理解して取るべきであるし、仏道のために説明して理解して取るべきである。

このため、古くから仏祖は、いたずらに一日の鍛錬を浪費しない、事を知る事ができる。この世で常に想像して観察するべきである。

のどかに華が咲く日中も、明るい窓辺で坐禅して思うべきである。

寂しく雨が降る夜も、草の屋根の質素な家で坐禅して忘れる事なかれ。

どうして時間が私の鍛錬を盗むであろうか？　いいえ！　時間は私の鍛錬を盗まない！

私が、私の一日を盗む、だけではなく、私の多くの劫の功徳を盗むのである。

どうして時間が私の敵であろうか？　いいえ！　時間は私の敵ではない！

私が私の敵である！

私が修行しない事が、私の一日を盗み、私の多くの劫の功徳を盗み、私の敵と成る事を恨むべきである。

(修行しない)私は私と親しくない。

(修行しない)私は私を恨むのである。

仏祖も恩愛が無いわけではない。けれども、投げ捨てて来たのである。

仏祖も諸々の「縁」、「つながり」が無いわけではない。けれども、投げ捨てて来たのである。

たとえ惜しくても、自分や他人の因縁を惜しむべきではないからである。

もし私が恩愛を投げ捨てなくても、恩愛している人が私を投げ捨てる言動をする事が有るのである。

恩愛している人を憐れむならば、恩愛を憐れむべきである。「恩愛を憐れむ」というのは、恩愛を投げ捨てる事である。

三十四祖の南嶽の懐譲は、曹谿山の三十三祖の大鑑禅師の会に参入して、十五年間、三十三祖の大鑑禅師のそばで仕えた。

そうして、南嶽の懐譲は、大鑑禅師から仏道を伝えられ業(わざ)を授けられて、(大鑑禅師という)一つの器から、水を、(南嶽の懐譲という)一つの器に移す事をでき得たのである。

南嶽の懐譲という古代の先人の行跡を最も慕(した)うべきである。

南嶽の懐譲は、十五年間という年月で、自身を煩(わずら)わせる事も多かったであろう。(南嶽の懐譲は、十五年間という年月で、わずらう事も多かったであろう。)

けれども、南嶽の懐譲は、純粋に一途(いちず)に道をわきまえて究めたのである。

南嶽の懐譲の行跡は、後進への見本である。

南嶽の懐譲は、寒い炉には燃やす炭が無く、人の居ない部屋で独りで寝た。

南嶽の懐譲は、涼しい夜に、明かり無しに、月明かりを頼りに窓辺で独りで坐禅した。

たとえ、一つの知や半(なか)ばな理解が無くても、無為な自然な、学ぶ必要が絶(た)えて無く成った境地である。

南嶽の懐譲の行跡は、修行の保持である。

密(ひそ)かに名声や利益への貪欲や愛着を投げ捨てて来れば、日々、修行の保持の功徳を積むばかりと成る。

密かに名声や利益への愛着を捨てれば、修行の保持と成る主旨を忘れる事なかれ。

南嶽の懐譲の「ある物を似ている物によって説明しても、言い当てられない」という言葉は、八年間の修行の保持によって言い得た真理である。

南嶽の懐譲の「ある物を似ている物によって説明しても、言い当てられない」という言葉は、古今の人々が稀少な言葉であるとしている。

南嶽の懐譲の修行の保持は、賢者も愚者も共に求めるべき修行の保持である。

香厳の智閑は、三十七祖の潙山霊祐の所で仏道を修行した時に、一句の真理の言葉を言い得ようとしたが、数回の後、ついに真理の言葉を言い得る事ができなかった。

香厳の智閑は、真理の言葉を言い得る事ができなかった事を悲しんで、書籍を火で焼いて、他の僧の食べ物を用意する務めだけして年月を経て行った。

後に、香厳の智閑は、武当山に入山して、三十三祖の大鑑禅師の弟子である大証禅師と呼ばれる南陽慧忠の古代の行跡を模倣して、草を結びつけて草の屋根の小さな質素な庵と成して、俗世を離れて静かに暮らした。

香厳の智閑は、ある日、少し道を平らにするために掃いて清掃していると、小石が飛んで竹に当たり音が鳴って突然、仏道を悟った。

その後、香厳の智閑は、香厳寺に住んで、一つの器と一つの袈裟だけで一生、新しい物に交換しなかった。

そして、香厳の智閑は、珍しい形の岩と清らかな泉を占拠して、一生、安住して、俗世を離れて静かに暮らした。

香厳の智閑の行跡の多くは、香厳寺の有る山に残っている。
香厳の智閑は、一生、山を出なかった、と言われている。

慧照禅師と呼ばれる臨済義玄は、黄檗希運から正統に法を嗣いだ。
臨済義玄は、黄檗希運の会に三年いた。
臨済義玄は、純粋に一途に道をわきまえ、兄弟弟子である睦州の陳尊宿の教訓によって仏法の重大な意味を黄檗希運に三回、質問して、黄檗希運に合計六十回も棒で軽く叩かれた。
しかし、臨済義玄の悟りへ励む志は弛む事が無かった。
臨済義玄は、高安大愚の所に至って大いに悟ったのも、黄檗希運と陳尊宿の教訓によってである。
祖師達の中で英雄は、臨済義玄と徳山宣鑑と言われている。
（「臨済の喝」という悟らせるために弟子を怒鳴った臨済義玄と、「徳山の棒」という悟らせるために弟子を棒で軽く叩いた徳山宣鑑は、有名である。）
けれども、どうして徳山宣鑑が臨済義玄に及ぶであろうか？　いいえ！
徳山宣鑑は臨済義玄に及ばない！
実に、臨済義玄は、抜群の人である。
しかも、臨済義玄が抜きんでていた時代の人達は、近代の抜群の人達よりも抜群であったのである。
臨済義玄の行いと業は、純粋で一途で、臨済義玄の修行の保持は抜群であった、と言われている。
臨済義玄の修行の保持は、どれだけの数の、どれだけの種類の、修行の保持であったのか？　と想像しても、的中しないであろう物である。

臨済義玄が、黄檗希運の所に居た時で、黄檗希運と共に杉と松を植えていた時に、黄檗希運は臨済義玄に「奥深くの山の中に、多数の樹を植えて、どうするのか?」と質問した。

臨済義玄は、「一つには、山の寺の門との境と成すし、二つには、後（のち）の人のために目印と成すのです」と言って、鍬（くわ）を地に二回、振り下ろして打った。

黄檗希運は、杖をひねって起こして、「そうだとしても、あなたは既に私に三十回も棒で軽く叩かれている」と言った。

臨済義玄は、(黄檗希運の言葉にとらわれず無視して、)フーと息を吐いた。

黄檗希運は、「私の宗教、仏教は、あなたに至って、この世で大いに盛んに成るであろう」と言った。

そのため、道を会得した後も、杉や松を植える時に、手ずから自ら鍬（くわ）の柄（つか）を持つのである、と知るべきである。

黄檗希運が「私の宗教、仏教は、あなたに至って、この世で大いに盛んに成るであろう」と言ったのは、手ずから自ら鍬（くわ）の柄（つか）を持った事による物である。

「栽松道者」と呼ばれる三十二祖の弘忍の古代の行跡が、正に、単一に伝えられ直接的に指し示されてきたのである。

黄檗希運も臨済義玄も共に植樹したのである。

昔、黄檗希運には、周囲の僧達を振り切って、大安寺の労務をしている僧達に混じって、殿堂を清掃したという修行の保持が有る。

黄檗希運は、仏殿を清掃し法堂を清掃したが、「心を清掃した」として「修行を保持できた」と期待しなかったし、「(仏の栄光という)光を清掃した」として「修行を保持できた」と期待しなかった。
黄檗希運と宰相の裴相国が出会ったのは、この頃である。

唐の時代の中国の皇帝の宣宗は、憲宗の第十三番目の子である。
(原文の「第二の子」は誤りだと思われる。)
宣宗は、若い時から明敏で賢かった。
宣宗は、常日頃、結跏趺坐を好んだ。
宣宗は、宮殿にいても常に坐禅した。

穆宗は、宣宗の兄である。
穆宗が皇帝の時、早朝の政務の終了時に、宣宗は、戯(たわむ)れに、竜に例えられる「天子」、「皇帝」の段に上って、大臣達に謙(へりくだ)って敬礼した。
大臣は、宣宗が大臣達に謙(へりくだ)って敬礼したので、宣宗には(大臣達の上に立つ皇帝に成る可能性が有る者として)精神的に問題が有るとして、穆宗に報告した。
穆宗は、見て、宣宗を撫(な)でて、「私の弟は、私の一族、王族の英雄、頭である」と言った。
その時、宣宗は、十三歳に成ったばかりであったのである。

皇帝の穆宗は、八百二十四年に亡くなった。
穆宗には、敬宗、文宗、武宗という三人の子がいた。

敬宗は、父である穆宗の皇帝の位を継いだが、三年後に(暗殺されて)亡くなった。

文宗は、皇帝の位を継いだが、一年後に、宦官の謀略で実権を奪われた。

武宗が皇帝の位を継いだ時に、宣宗は、未だ皇帝の位を継げず、甥である武宗の国にいた。

武宗は、常に宣宗を「馬鹿な叔父」と呼んだ。

武宗は、「会昌の廃仏」を行った「天子」、「皇帝」である。

武宗は、仏法を廃した人である。

ある時、武宗は、宣宗を呼んで、昔、宣宗が皇帝の段に上った事を罰して、宣宗を殴り殺して、皇帝の私的な園である「後華園」の中に置いて、尿をかけたら、宣宗は復活した。

ついに、宣宗は、国を離れて、密かに、香厳の智閑の会に参入して、頭の髪を剃って、未成年の、戒を受ける前の出家者見習いと成った。

宣宗は、未だ戒を備えていなかったのである。

灌渓志閑を友として諸方を訪ねていると、盧山に至った。

その時、灌渓志閑は、盧山の滝を題材にして、詩で「崖を穿って貫き、石を貫き通して、労苦を止めない。遠い地で、まさに、出所の高き事を知る事ができる」と言った。

灌渓志閑は、二句の詩によって、宣宗を引っかけて、宣宗が、どういう人なのか、見ようとしたのである。

宣宗は、灌渓志閑に続いて、詩で「どうして、谷の川を留める事ができ得ようか？　いいえ！　谷の川を留める事はできない！　谷の川は、終には、大海に帰って、大波と成る」と言った。

灌渓志閑は、宣宗の二句の詩を聴いて、宣宗は普通の人ではない、と知った。

後に、宣宗が杭州の塩官斉安の会に至って書記に成った時、黄檗希運が塩官斉安の会の首位の「首座」であった。

そのため、宣宗は、黄檗希運と隣人であった。

黄檗希運が仏殿に来て仏像へ敬礼した時、宣宗が来て「仏を愛着せず求めず、

法を愛着せず求めず、

僧を愛着せず求めず、

長老である黄檗希運よ、

敬礼を用いて、何をするのか？」と質問した。

黄檗希運は、宣宗を軽く叩いて、「仏を愛着せず求めず、

法を愛着せず求めず、

僧を愛着せず求めず、

常に、この様に、敬礼するのである」と言って、また、宣宗を軽く叩いた。

宣宗は、「大雑把で粗い」と言った。

黄檗希運は、「ここが、どこだと思って、更に、『粗い』とか『細かい』とか説くのか？」と言って、また、宣宗を軽く叩いた。

宣宗は、無言で去った。

武宗の後、ついに、宣宗は、還俗して皇帝の位に就いた。

宣宗は、武宗の廃仏法を廃止して、仏法を中興した。

宣宗は、皇帝の位に在位の間、常に坐禅を好んだ。

宣宗は、皇帝の位に未だ就く前の時は、国を離れて、遠地の谷など諸方を訪ねた時、純粋に一途に、道をわきまえた。

宣宗は、皇帝の位に就いた後の時は、昼も夜も坐禅した、と言われている。

実に、宣宗は、父が亡くなり、兄も亡くなり、甥に殴り殺され、憐れむべき貧窮の子に似ていた。

けれども、宣宗は、仏法に励む志が変わらず、道をわきまえる鍛錬をした。

宣宗の行跡は、世にも稀な優れた行跡であり、自然な純真な修行の保持である。

真覚大師と呼ばれる雪峰義存は、かつて仏道に心してから、寺や林に立ち寄った時、および、行程の途中で宿を提供する施しを受けた時、目的地まで道のりが遥かであるといえども、場所を選ばずに、いつもの坐禅を怠る事が無かった。

雪峰義存は、雪峰山に寺を建てて、仏法を堂々と表すに至っても、怠らず坐禅して、坐禅と共に死んだ。

雪峰義存は、昔、法をたずねていた時は、三十八祖の洞山良价の山に九回上り、投子大同の山に三回至ったが、世にも稀な道のわきまえ方である。

清らかな厳しい修行の保持を勧める時には、千二百四十二年の人々の多くは、「雪峰義存の様な高い修行を行う様に」言う。

雪峰義存の愚かさは他人と同じであったが、雪峰義存の賢さには他人は及べない。

雪峰義存の賢さに他人が及べないのは、修行の保持によってである。

今、道を学んでいる人は、必ず雪峰義存の身心の清め方を学ぶべきである。

静かに、雪峰義存が諸方を訪ねて学に参入した労力を顧みれば、実に、内に秘めていた気骨による功徳である。

千二百四十二年に、道に適った達道者の会に臨んで、真実を願い求めて参入しようとする時、手がかりをわきまえるのが最も難しいのである。

二十人、三十人の皮袋と言える僧ではなく、百人、千人の面々の僧がいて、各々、実に帰る事を求めているのである。

(僧の数が多過ぎるので、)教えを授けるために手を差し伸べても日が暮れてしまうし、春に牛を打って耕し始める様に僧の心を開発して行っても夜が明けて次の日に成ってしまう。

また、師が弟子達に遍く教えを説く時、自身に「聞く耳」や「見る眼」が無くては、いたずらに無駄に見聞きを遮ってしまう。

「聞く耳」や「見る眼」を備えた時には、師は説き終わって(見逃したり聞き逃したりして)しまっている。

錐の先が使い古されて丸く成る様に円熟した長老が手を叩いて「ハハ」と笑っている時、新たに戒を受けたばかりの後進の僧は会の末席として触れる手がかりすら稀な有様である。

秘奥に入る人と、秘奥に入れない人がいる。

師の秘訣を聞き入れる事ができる人と、師の秘訣を聞き入れる事ができない人がいる。

時間は飛んでいる矢よりも速く過ぎ去ってしまう。

身体の命は露(つゆ)よりも脆(もろ)い。

師はいても学に参入でき得ない自身への恨みが有り、学に参入しようとする時に師を得られない悲しみが有る事を、私、道元は、目の当たりに見聞きしたのである。

大いなる善知識に到達できる人には必ず人を知る徳が有るが、道を耕し鍛錬している時には、親しく近づく事ができる良い縁(えん)は稀(まれ)な物である。

雪峰義存は、昔、三十八祖の洞山良价の山に九回上った時にも、投子大同の山に三回上った時にも、きっと、煩(わずら)わしさを感じたが忍耐したのであろう。

雪峰義存の、修行の保持における、「法への操(みさお)」、「法への意思の堅固さ」を憐れむべきである。

学に参入しない事は悲しむべき事である。

二十八祖の達磨が、西のインドから東の中国へ来たのは、二十七祖の般若多羅の言葉による物である。

三年間の航海の、風や雪といった苦難は痛ましいだけではないであろうし、雲の様な霞(かすみ)が幾つも重なり激しい大波に成ったであろう。

(古代は航海が非常に危険であった。)

未知の国に入ろうとするのは、身体の命を惜しむ凡人には思いもよらないであろう。

達磨が未知の国に入ったのは、ひとえに、法を伝えて心が迷っている人を救うという、「大いなる慈愛」、「大いなる思いやり」による修行の保持である。

法を伝えられたのは、自己であるので、達磨は法を中国に伝えたのである。

法を伝えられたのは、遍（あまね）く世界であるので、達磨は法を中国に伝えたのである。

十方の世界のことごとくは、真実の道であるので、達磨は法を中国に伝えたのである。

十方の世界のことごとくは、自己であるので、達磨は法を中国に伝えたのである。

十方の世界のことごとくは、十方の世界のことごとくであるので、達磨は法を中国に伝えたのである。

結果として、どこへ生まれても王宮ではない事があるだろうか？　いいえ！　結果として、どこへ生まれても王宮なのである！

どの王宮が道場として差し障りが有るのだろうか？　いいえ！　どの王宮も道場なのである！

（

正しい人は王者である。

正しい人にとって世界は王宮である。

）

そのため、達磨は西のインドから中国へ来たのである。

心が迷っていたのを救われたのは、自己であるので、達磨は、驚き疑う事無く、恐れが無かった。

心が迷っていたのを救われたのは、遍(あまね)く世界であるので、達磨は、驚き疑う事無く、恐れが無かった。

達磨は、永遠にインドの父の王の国土を去って、大船に乗って、南海を経て、中国の広州に着いた。

(達磨は、王子であった。)

達磨が乗った船を使った人は多かったであろうし、達磨の弟子も数が多かったであろうが、歴史家達は記録を失ってしまった。

達磨が中国の港に着岸してからを知る人もいない。

五百二十七年、中国の広州の長官の蕭昂と言う人は、賓客を迎えるための人達で飾って、達磨を出迎えた。そして、蕭昂は、梁の武帝への文書を書いたので、達磨の話は梁の武帝にまで聞こえた。

蕭昂は、職務に真面目に務めたのである。

その年、五百二十七年、梁の武帝は、蕭昂からの文書を閲覧して、喜んで、使いの者に文書をもたせて、達磨を招いて迎えた。

達磨が「金陵」、「南京」に至って梁の武帝と会った時に、梁の武帝は「私が即位してから今まで、寺を造り、写経し、出家の許可を出して出家者の労役を免除したのは、記す事ができないほど多い。どんな功徳が有るだろうか?」と質問した。

達磨は、「全て、功徳は無い」と言った。

梁の武帝は、「なぜ功徳が無いのか?」と言った。

達磨は、「寺の建造や写経などは、ただ、人や天人の小さな結果であり、煩悩の原因に成ってしまう場合が有る。影が形に従う様に、功徳は有るが真の実の功徳ではない」と言った。

梁の武帝は、「どのような物が真の功徳なのか？」と言った。

達磨は、「清浄な智が絶妙に円熟し、実体が自ら空（くう）であり寂滅であるのが、真の功徳である。しかし、この様な真の功徳を世の人は求めない」と言った。

また、梁の武帝は、「どのような物が神聖な真理、第一の真理、無上の真理なのか？」と質問した。

達磨は、「(知ると、)心が広々と澄みわたり、自分は正しいという意識が無く成るのが、神聖な真理、第一の真理、無上の真理である」と言った。

梁の武帝は、「私と相対している者は誰か？」(、「あなたは何者か？」、「あなたは、どういった者か？」)と言った。

達磨は、「私は『こういった者である』と意識していない」と言った。

梁の武帝は、悟りを得なかった。

達磨は、梁の武帝の素質が真の法に適（かな）わない事を知った。

そのため、この年、五百二十七年、達磨は、密（ひそ）かに江北へ行った。

その年、五百二十七年、洛陽に至った。

嵩山の少林寺に一時的に留まって、壁に向かって坐禅し、終日、沈黙した。

けれども、魏の主も愚かだったので達磨を知らず、恥じるべき理（ことわり）も知らなかった。

達磨は、南インドのクシャトリヤであり、インドの大国の王子である。

達磨は、大国の王宮で、大国の法に久しく慣熟していた。

小国の風俗は大国の王者に見られて恥ずかしい所が有るが、達磨には動かす様な心は無かった。

達磨は、中国という国を見捨てず、人を見捨てなかった。

達磨は、時々、菩提流支に悪口を言われたが、菩提流支の誤りを指摘せず、菩提流支を憎まなかった。

達磨は、光統律師と呼ばれる慧光の邪悪な心を恨まず、慧光の悪口を聞かなかった。

達磨には、この様な功徳が多く有ったが、東の地の中国の人々が、ただ、普通の経典の学者の様に思ったのは、最悪に愚かである。矮小な人々であったからである。

また、誤って「達磨は禅宗として坐禅専門の法門を開演したが、他の経典の学者の所説も、達磨の正しい法も、同じである」と思った中国人は、仏法を濫りに汚す矮小な動物的人間であった。

達磨は、釈迦牟尼仏より二十八代目の、正統な法を嗣いだ人である。

達磨は、インドの父の王の大国を離れて、東の地の中国の生者達を救済した。誰が達磨に肩を並べる事ができようか？　いいえ！　誰も達磨に及ばない！

もし達磨が西のインドから中国へ来なかったら、どうして東の地の中国の生者達は仏の正しい法を見聞きできたであろうか？　いいえ！　もし達磨が西のインドから中国へ来なかったら、東の地の中国の生者達は仏の正しい法を見聞きできなかったであろう！

もし達磨が西のインドから中国へ来なかったら、中国の人々は、いたずらに無駄に名前や「相」、「形」の砂や石を数える事に煩(わずら)っていただけで終わったであろう。

達磨のおかげで、千二百四十二年の日本人の様な、僻地(へきち)、遠方の、毛を纏(まと)い角をかぶった人までも正しい法を聞く事ができ得る。

達磨のおかげで、千二百四十二年の農民、田舎の老人、村の児童まで正しい法を見聞きする。

達磨の航海という修行の保持によって、今の人々は救われているのである。

(古代は航海が非常に危険であった。)

西のインドと中国では、風俗には遥かな優劣が有り、風俗での善悪も遥かに違いが有る。

大いなる忍耐力の「大いなる慈愛」、「大いなる思いやり」が無ければ、中国は、法を伝えられ保持している大いなる聖者である達磨が向かうべき場所ではない。

中国には、達磨が住む道場も無かったし、(正しい)人を知る事ができる人も稀(まれ)であった。

達磨は、九年間という少しの間、蒿山に留まった。

人々は、達磨を、壁に向かって(坐禅して)いる、バラモンと誤って呼んだ。

歴史家達は、達磨を「習禅者達」、「色々な観念を習う者達」の一人として誤って編集しているが、達磨は「習禅者」、「色々な観念を習う者」ではない。

仏から仏へ正統に伝えている「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼を持つ」のは、独り、達磨だけであった。

石門の慧洪の「林間録」には次の様に記されている。

達磨は、梁から魏へ行った。

達磨は、蒿山の麓(ふもと)まで歩き、少林寺に留まった。

達磨は、壁に向かって坐禅するだけであった。

(達磨の坐禅は、)「習禅」、「色々な観念を習う事」ではない。

しかし、久しく人々は達磨の坐禅の理由を推測できなかった。
そのため、達磨の坐禅を「習禅」、「色々な観念を習う事」と誤って見なした。
「禅那」、「習禅」、「色々な観念を習う事」は諸々の修行のうちの一つでしかない。
どうして「禅那」、「習禅」、「色々な観念を習う事」によって達磨といった聖者を完全に表し尽すのに足りるであろうか？　いいえ！　「禅那」、「習禅」、「色々な観念を習う事」では達磨といった聖者を表し尽すには不足である！
しかし、当時の人々は、「禅那者」、「習禅者」、「色々な観念を習う者」として達磨を誤って表現した。
また、歴史家達も、世論に従って、達磨を「習禅者達」、「色々な観念を習う者達」の一人に誤って並べてしまい、「枯木死灰」、「枯木や火が消えて冷えた灰の様な無欲」の段階の徒と誤って同一視した。
しかし、聖者は「禅那」、「習禅」、「色々な観念を習う」だけではない。ただし、聖者は「禅那」、「習禅」、「色々な観念を習う事」をしないわけではない。
易の八卦は、陰と陽から出て来るが、陰と陽ではなく成る訳ではない様に。
梁の武帝は、初めて達磨と会った時に、「どのような物が神聖な真理、第一の真理、無上の真理なのか？」と質問した。
達磨は、「(知ると、)心が広々と澄みわたり、自分は正しいという意識が無く成るのが、神聖な真理、第一の真理、無上の真理である」と答えた。
進んで、梁の武帝は、「私と相対している者は誰か？」(、「あなたは何者か？」、「あなたは、どういった者か？」)と言った。

達磨は、「私は『こういった者である』と意識していない」と言った。
達磨が中国の言語に通じていなかったら、どうして、梁の武帝と話した時に、この様に話す事が可能であったであろうか？　達磨は中国の言語に通じていたので、梁の武帝と話した時に、この様に話す事が可能であった！

慧洪の「林間録」によって、達磨が梁から魏へ行った事は明らかである。
達磨は、嵩山まで歩いて少林寺に留まった。
達磨は壁に向かって坐禅したが、達磨の坐禅は「習禅」、「色々な観念を習う事」ではない。
達磨は、一巻も経典を持って来なかったが、正しい法を伝えに来た主である。
それなのに、歴史家達が、真実を明らめる事ができず、達磨を誤って「習禅者達」、「色々な観念を習う者達」の一人として並べたのは、最悪に愚かである。
悲しむべきである。
達磨が嵩山まで歩いて行くと、菩提流支と、光統律師と呼ばれる慧光という犬の様な者達がいて、堯の様に聖者である達磨を(罵倒して)吠えた。
憐れむべきである。
達磨の悪口を言うのは、最悪に愚かである。
心が有る人の誰が達磨の「慈愛」、「思いやり」による恩を軽んじるであろうか？　いいえ！　心が有る人は、達磨の「慈愛」、「思いやり」による恩を重んじる！
心が有る人の誰が達磨の恩に報いようと思わないであろうか？　いいえ！心が有る人は、達磨の恩に報いようと思う！

俗世の恩を忘れず重んじる人は多い。
俗世の恩を忘れず重んじる人を「人」と言う。
達磨の大いなる恩は、父母の恩よりも優れている。
達磨の「慈愛」、「思いやり」は、親子の思いやりと比べる事もできない
(ほど優れている)。

私達、日本人の低劣さを思えば、驚き恐れるべきである。
中央の土地を見ず、中国に生まれず、聖者を知らず、賢者を見ず、天上に
上った人が未だおらず、人心は、ひとえに愚かである。
建国から今まで俗世を化して導いた人がおらず、国が清らかに澄んだ時を
聞かない。

どの様な状態が清いのか？　どの様な状態が汚れているのか？　知らない
事による物である。
王の賞罰を与える権利や、天と地と人の、軽重に暗い事による物である。
まして、木、火、土、金、水の五行の盛衰を知っているであろうか？　い
いえ！　木、火、土、金、水の五行の盛衰を知らない！
（
中国では五芒星に木、火、土、金、水を当てはめて五行と呼んだ。
西洋では五芒星に精神と四大元素を当てはめる。
）
この様な愚かさは、眼前の色や音声に暗い事による物である。
色形や音声に暗いのは、経典を知らない事による物である。
経典を知らないのは、経典についての師がいない事による物である。

「経典についての師がいない」と言うのは、経典の何十巻もの意味を知らず、経の何百句、何千語もの意味を知らず、ただ経典の文字の語感だけを読む事である。

経の何千句、何万語もの意味を知らないのである。

古代の経の意味を知り、古代の神聖な書物を読み解く人には、古代の聖者を慕(した)う心が有るのである。

古代の聖者を慕(した)う心が有れば、古代の経が来て目の前に現れるのである。

漢の劉邦と魏の曹操は、天体の現象という詩を明らめ、地形の言葉を伝えた皇帝である。

天体の現象という詩や、地形の言葉の書物を明らめた時、少しだけ天と地と人を明らめられた。

聖王の化の導きに未だ会わない国民達は、王に仕えるには、どうすれば良いのか？　親に仕えるには、どうすれば良いのか？　習わず知らないので、家臣としても憐れむべき者であり、子どもとしても憐れむべき者である。

聖王の導きに未だ会わない国民達は、家臣と成っても、子どもとしても、一尺、三十センチの宝玉をいたずらに見過ごし、わずかな時間をいたずらに過ごしてしまうのである。

この様な家門に生まれては、国土の重職を授かる人はおらず、軽い官位すら惜しまれて授かれない。

国が汚れている時ですら官位を授かれず、国が清らかに澄んでいる時に官位を授かるのは見聞きも稀(まれ)であろう。

日本という、このような僻地(へきち)、このような低劣な身の上の命を持ちながら、如来、釈迦牟尼仏の正しい法を聞けた道の上で、どうして低劣な身の上の命

を惜しむ心が有って善いであろうか？　いいえ！　釈迦牟尼仏の正しい法を聞けた道の上で、低劣な身の上の命を惜しむ心が有ってはいけない！

低劣な身の命を惜しんで、後で何もののために捨てるというのか？

重職で賢い人ですら法のために身の命を惜しむべきではない。

まして、法のために低劣な身の命を惜しむべきではない。

たとえ低劣といえども、道のために、法のために、身の命を惜しまず捨てる事が有れば、上位の天の天人よりも高貴であるし、転輪聖王よりも高貴であるし、天と地の天人、三界の生者よりも高貴である。

しかも、達磨は南インドの大国の香至王の第三王子であり、既にインドの大国の王族であり、王子である。

達磨の様な高貴で敬うべき人に対して、東の地の僻地（へきち）の国は、仕えて保護する礼儀も未だ知らなかったのである。

達磨に対して、香も無く、華も無く、座る敷物も粗末であり、座らされた宮殿の段も劣悪であった。

まして、我が国、日本は、遠方の険しい岸である。

どうして日本が達磨という大国の王者を敬う礼儀作法を知っているであろうか？　いいえ！　日本は達磨という大国の王者を敬う礼儀作法を知らない！

たとえ日本が礼儀作法を習ってみても、遠回りして、わきまえる事ができないであろう。

諸侯と皇族では礼儀作法も異なるであろうし、礼儀作法にも軽重が有るが、わきまえず知らないであろう。

自己の貴賤を知らなければ、自己を保持して任される事ができない。

自己を保持して任される事ができないのであれば、自己の貴賤を最も明らめるべきである。

達磨は、釈迦牟尼仏から二十八代目の、法を付属された祖師である。

達磨は、道に存在してから今まで、いよいよ重要に成って行っている。（達磨は、道に存在してから今まで、いよいよ向上して行っている。）

向上して行く、大いなる神聖な無上の尊い者である達磨が、師の二十七祖の般若多羅の言葉によって身の命を惜しまなかったのは、法を伝えるためであり、生者を救うためである。

中国では、達磨が西のインドから来るより先に、法を正統に単一に伝えられた仏の子を見なかったし、正統に面と向かって直接に授けられた仏祖としての「面目」、「有様（ありよう）」や「ものの見方」を面と向かって直接に授けられた人はいなかったし、「仏を見た人」、「仏のものの見方で世界を見た人」は未だいなかった。

達磨の後も、達磨の法の遠い子孫の他は西のインドから中国などへ来ていない。

三千年に一度咲く優曇華の出現には会いやすい。年月を待って数えれば良いのである。

しかし、達磨の西のインドからの来臨は二度と無いのである。

それなのに、達磨の法の遠い子孫を詐称する輩は、春秋戦国時代の中国の楚という国の「和氏の璧」という宝石の原石を無価値な石と誤って判定した鑑定士の最悪の愚かさに酔って、未だ宝玉と石の違いをわきまえず、霊感が無い文字を数えるだけの経典の似非（えせ）学者と肩を並べるべきだと誤って思っている。

達磨の法の遠い子孫を詐称する輩は、聞く耳を持っておらず理解が生半可なので、真の仏法者と、霊感が無い文字を数えるだけの経典の似非(えせ)学者の違いが分からないのである。

「前世」に善行して植えた知の種が無い輩は、祖師の道の遠い子孫と成れず、いたずらに名前や「相」、「形」の邪悪な道に従って歩いてしまう。(悟る前までの今世の人生を「前世」と言う場合が有る。)

憐れむべきである。

達磨が西のインドから中国へ来た五百二十七年以降、なお、西のインドへ行く者がいるが、何のためなのか?

最悪の愚かさのはなはだしさである。

悪業にひかれて他国に従い歩くのである。

一歩一歩、法の悪口を言う邪悪な道へ赴(おもむ)く事に成る。

一歩一歩、父の家、父の郷から逃げて行く事に成る。

(父の国から外れて行く事に成る。)

あなたたち、西のインドに行って何を得られるというのか?

ただ、山と川に辛く苦しい思いをするだけである。

西のインドのものが東の中国へ来ている主旨を学ばない人は、仏法が東に伝わっている事を明らめないので、いたずらに無駄に西のインドで道に迷うのである。

「法を求める」という名目が有っても、法を求める、道を求める心が無いので、西のインドでも正しい師に会えず、いたずらに霊感が無い文字を数えるだけの似非(えせ)学者に会うだけなのである。

なぜなら、正しい法を求める正しい心が無いので、正しい法は、あなたたちの手に入らないのである。

西のインドに行って正しい師に会ったと自称する誰かが存在するか？　西のインドに行って正しい師に会ったと自称する人の話を未だ聞いた事が無いのである。

もし西のインドで正しい師に会えば、いくつかのインドの正しい師の名前や称号を自称するであろう。

五百二十七年以降のインドの正しい師の名前や称号を聞いた事が無いので、五百二十七年以降のインドに行って正しい師に会ったと自称する人の話を未だ聞いた事が無い。

また、中国でも、達磨が西のインドから来た五百二十七年以降、経典頼りで、経典の文字の理解だけで、正しい法をたずねない僧が多い。

経典を見ても、経典の意味に暗いからである。

この「黒業」、「悪業」は、今日の業の力だけではなく、「前世」の悪業の力による物である。

（悟る前までの今世の人生を「前世」と言う場合が有る。）

今の生で、ついに、如来、釈迦牟尼仏の真の秘訣を聞けず、釈迦牟尼仏の正しい法を見ず、釈迦牟尼仏から面と向かって直接に授けられてきた仏祖としての「面目」、「有様（ありよう）」や「ものの見方」に照らされず、釈迦牟尼仏の心を使用せず、諸仏の家風を聞けないのは、悲しむべき一生である。

中国の、五百八十一年の隋から、唐、宋までの全ての時代で、このような類（たぐい）の似非（えせ）僧侶が多い。

ただ、「前世」に善行して植えた知の種が有る人が、期せずして入門しても、霊感が無く砂を数えるだけの業から解脱したりして、達磨の法の遠い子孫と成れたのは、全て、利発な素質の人であり、無上の素質の人であり、正しい人に成るための正しい種が有る人である。(悟る前までの今世の人生を「前世」と言う場合が有る。)

無知蒙昧の輩は、久しく、霊感が無い文字を数えるだけの似非学者のお粗末な家に留まるだけである。

険しい困難が有る場所である中国を恐れず、嫌わず、達磨が西のインドから来臨した奥深い家風を今なお仰げるのに、私達は、私達の臭い皮袋である肉体を惜しんで、最終的に、何に成るのか？　険しい困難が有る場所である中国を恐れず、嫌わず、達磨が西のインドから来臨した奥深い家風を今なお仰げるのに、私達は、私達の臭い皮袋である肉体を惜しんでも、最終的に、何にも成らない！

香厳の智閑は次の様に言った。

「百、千、万の計画は、ただ、自身の身体、肉体のためである。
しかし、身体、肉体は墓の中の塵に成る事を知らない。
『白髪には言語が無い(ので、白髪は話せない)』と言う事なかれ。
白髪(、老い)は(『死が近づいている』という)冥界の言葉を伝えて語る人であると言える」

そのため、たとえ百、千、万の計画によって肉体を惜しんでも、終には、肉体は墓の中の一盛りの塵と化す物である。

まして、いたずらに小国の王や家臣や民に使われて、東西を奔走している間に、千、万の辛い苦しみが、どれだけ身心を苦しめる事か！
人は、「義」、「公共の利益」のために身の命を軽んじる。
殉死者への礼を忘れない様に。
しかし、恩に使われる人の前途には、ただ、無知蒙昧の暗雲、暗い霧（きり）しかない。
矮小な家臣につかわれて、民間で身の命を捨てる者は昔から多い。
しかし、惜しむべき人の身である。
なぜなら、道の器と成れたかもしれないからである。
今の、正しい法に会える人々は、百、千、恒河沙の数の身の命を捨ててもいたずらに矮小な人と、広大な深遠な法の、どちらのために身の命を捨てるべきであろうか？　広大な深遠な法のために身の命を捨てるべきである！
正しい法の学に参入するべきである。
賢者も愚者も共に進退に悩むべきではない事である。

静かに想像するべきである。
正しい法が世に流布していない時は、身の命を正しい法のために投じようと願っても正しい法に会えない。
正しい法に会える今日の私達は、身の命を正しい法のために投じようと願うべきである。
正しい法に会えても身の命を捨てない私達を恥じる。
恥じるべきものを知る人は、この道理によって恥じるべきである。
達磨の大いなる恩に報い感謝する事は、一日の修行の保持と成る。

自己の身の命を顧みる事なかれ。（自己の身の命を振り返る事なかれ。）

動物的人間よりも愚かである、恩への愛着を惜しんで捨てない事なかれ。

たとえ恩を愛着して惜しんでも、恩人は長年の友と成る事ができない。

滓の様な家門に頼って留まる事なかれ。

たとえ家門に留まっても、静かな「終の棲家」、「死を迎えるまで住める家」ではない。

古代から、仏祖は賢いので、皆、「七宝」、「七種類の宝」や千の様な多数の子を投げ捨てたし、宝玉で飾られた宮殿と「朱楼」、「富者の家」を速やかに捨てた。

仏祖は富を、涙や鼻水や唾の様に見たし、排泄物、排泄物で汚れた土の様に見た。

富を排泄物の様に見るのは、古くからの、仏祖が仏祖の恩に報い感謝してきた、恩を知って恩に報いる手本、作法である。

楊宝が助けた黄雀ですら恩を忘れず、（楊宝の子孫が四代に渡って清らかな人だったので、）黄雀の生まれ変わりは恩に報いて感謝して楊宝の子孫を四代に渡って三公の位に就かせたという中国の逸話が有る。

孔愉が漁夫から買って川に逃がして助けた亀ですら恩を忘れず、四回、左を振り返って川に去った亀は恩に報いて感謝して孔愉を余不亭の長官にした（ので、孔愉は亀の事を思い出して亀の印鑑を作らせたが、四回、作らせても、左を振り返る亀の姿の印鑑が納入された）という中国の逸話が有る。

人の面をしながら、（恩に報いず感謝せず、）動物よりも愚劣である事を悲しむべきである。

今、法を見聞きできるのは、仏祖が各々、修行を保持してきた「慈悲」、「思いやり」による「恩恵」、「恵み」による物である。

もし仏祖が仏法を単一に伝えなければ、どうして仏法が今日にまで至れたであろうか？

仏法の一句を伝えた恩ですら報いて感謝するべきである。

仏法の一つの法を伝えた恩ですら報いて感謝するべきである。

まして、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼を持たせる」、無上の大いなる法を伝えた大いなる恩に報いて感謝しないのか？

仏法のために、一日でも、無量恒河沙の数の身の命を捨てようと願うべきである。

仏法のために捨てられた屍（しかばね）を、世から世へ、私達は、礼拝し供養するべきである。

仏法のために捨てられた屍（しかばね）は、諸々の天人と竜が、共に恭（うやうや）しく敬い尊重し、守護し、感心してたたえる物である。

仏法のために捨てられた屍（しかばね）をたたえる道理とは、仏法のために捨てられた屍（しかばね）をたたえるのは必然だからである。

久しく、西のインドでは、人の頭蓋骨を売買するバラモンの法が有ると耳にする。

なぜなら、仏法を聞く耳が有った人の頭蓋骨や骸骨の功徳は大きい事を尊重するからである。

今、仏道のために身の命を捨てなければ、「仏法を聞く耳が有った」という功徳には到達できない。

身の命を顧（かえり）みないほど仏法を聞く耳が有った人は、聞き入れた法が成熟するのである。

身の命を顧（かえり）みないほど仏法を聞く耳が有った人の頭蓋骨は、尊重するべきである。

今、私達、仏道のために身の命を捨てなかった人の頭蓋骨は、将来、晒されて野外に捨てられても、誰が礼拝するであろうか？　誰が売買するほど尊重するであろうか？

仏法のために身の命を捨てない今日の精神を反省して恨むべきである。

生前の悪行のせいで天へ昇れなかった霊が自身の生前の骨を叩いて後悔したという話が有るし、天人が天人と成って天へ昇れた事を喜んで自身の生前の骨を礼拝したという話が有る。

いたずらに肉体が死んで土の塵に化する時を想像すれば、肉体への今の愛着による惜しむ思いは無く成るし、肉体の死後への憐れみを催される。

催されるのは、死後の自身の肉体を見た人の涙の様であろう。

いたずらに土の塵に化して人に嫌われる頭蓋骨を内に持つ肉体によって、善く、幸いに、仏の正しい法と修行を保持するべきである。

このため、寒さによる苦しみを恐れる事なかれ。

寒さによる苦しみは、未だ人を破った事が無いし、未だ仏道を破った事が無い。

ただ、修行をしない事を恐れるべきである。

修行をしない事は、人を破るし、道を破る。

暑さを恐れる事なかれ。

暑さは、未だ人を破った事が無いし、未だ仏道を破った事が無い。

修行をしない事は、よく、人を破るし、道を破る。

「阿耆多王の馬麦」、「釈迦牟尼仏達が辱めを耐え忍んで阿耆多王から馬用の麦を受けた事」は仏道の人の優れた行跡であるし、伯夷と叔斉が殷の紂

王という暴君の暴力を暴力で滅ぼした武王に抗議して山で隠者と成って蕨（ワラビ）などを採取して食べていたが餓死したのは俗人の優れた行跡である。

血を求めて乳を求めて動物的人間に習うべきではない。

ただ、正に、修行を保持した一日は、諸仏の日常の行跡なのである。

中国人初の祖師である正宗普覚大師と呼ばれる二十九祖の慧可は、天人と霊が共に慕（した）う、仏道の人と俗人が同じく尊重する高徳の師であり、心の広い人である。

慧可は、伊水と洛水の辺りに久しく居て、多くの書物を広く読んだ、中国でも稀（まれ）な人であり、会い難い人である。

慧可は法について の知と徳行を高く重ねたので、神の者が突然あらわれて慧可に次の様に言った。

「まさに果報を受けたいと欲（ほっ）するならば、どうして、ここに留まっているのか？　大いなる道は遠くない。あなたは『南』へ行くべきである」

（「南」は中国より南のインドから来た達磨を意味するのかもしれない。）

翌日、突然、慧可は刺す様な頭痛がした。

慧可の師である洛陽の龍門の香山宝静が慧可の頭痛を治そうとした時、空中から声がして次の様に言った。

「慧可の頭痛は骨を換えている事による物であり、通常の頭痛ではない」

ついに、慧可は神の者を見た事を香山宝静に話した。

香山宝静が慧可の頭頂骨を視ると、達磨がいる嵩山を含む「五嶽」が抜き ん出ている様に視えた。

そのため、香山宝静は慧可に次の様に言った。
「あなたの骨相は幸福な吉兆である。『証』、『悟り』を得られるはずである。神の者が、あなたは『南』へ行くべきである、と言ったのは、嵩山の少林寺の達磨の事であり、必ず達磨は、あなたの師に成るであろう」
香山宝静の言葉を聞いて、慧可は嵩山の少室峰の少林寺へ行った。
慧可が見た神の者とは、慧可の久遠の仏道修行を守る仏道修行の守護神である。

慧可が達磨の所へ行った時は、年末の冬が窮（きわ）まった寒い冬の時であった。
天候が大雨や大雪ではなくても、山の奥深く、山の高い場所の冬の夜は、想像するに、人が窓の前に立つべきではないほどであろう。
竹ですら破裂する、恐れるべき寒さの時期の気候である。
しかも、大雪が地を包囲して山を埋没させていた。
慧可は、雪をかき分けて、仏道を求めた。
どれほど険しく困難であった事か！
ついに、慧可は達磨の部屋へと着くが入室を許されず、達磨は振り向いてくれない様であった。
その夜、慧可は、眠らず、座らず、休まなかった。
慧可が堅固に不動で立ったまま夜が明けるのを待っていると、夜、雪が無情にも降り注いだ。
雪が積もって、慧可の腰まで埋まる間に、慧可の目から落ちた涙の一滴、一滴が凍った。
慧可は、凍った涙を見て、更に涙を流した。
慧可は、自身を省（かえり）みる事をくり返した。

慧可は、自ら、次の様に思考した。

「昔の人が道を求めた時は、
常啼菩薩は、自身の骨を叩いて髄を取って、自身の髄を法涌菩薩に捧げたし、
慈力王は、自身を刺して、血を、飢えた夜叉という悪霊に施したし、
釈迦牟尼仏は、前世で、燃灯仏のために、髪を敷いて泥を覆ったし、
釈迦牟尼仏は、薩埵王子であった前世で、『捨身飼虎』、『崖から身を投げて自殺して自身の死体を飢えた虎の親子に施した』。
古代人ですら道のために自身の肉体を惜しまなかった。
自身の肉体を惜しむなんて、私は何者か！」

この様に思考して、道を求める強い意思をいよいよ励(はげ)ました。

「古代人ですら道のために自身の肉体を惜しまなかった。自身の肉体を惜しむなんて、私は何者か！」というのを後進の人達も忘れないべきである。

少しでも「古代人ですら道のために自身の肉体を惜しまなかった。自身の肉体を惜しむなんて、私は何者か！」という精神を忘れた時は、永劫に沈み溺れる事に成ってしまうのである。

慧可は、「古代人ですら道のために自身の肉体を惜しまなかった。自身の肉体を惜しむなんて、私は何者か！」と自ら思考して、法を求める、道を求める、強い意思だけを募らせて行った。

雪を払い除ける「操(みさお)」、「意思の堅固さ」を当たり前の事とする事によって、寒さによる苦しみの中でも、法を求める、道を求める、強い意思だけを募らせて行けたのであろう。

寒さが極まる、夜明け前の夜の状況を推測するに、勇気も砕かれるほどであろう。身の毛もよだつほど冷たく恐怖させられるばかりである。

達磨は、憐れんで、夜明けの薄暗い時に「あなたは久しく雪の中に立ち、まさに、何事を求めるのか？」と質問した。

達磨が、こう聞くと、慧可は悲しく成って涙をますます落として次の様に言った。

「ただ願わくは、和尚、慈悲によって、『中国の伝説の、天が降らす甘い露（つゆ）』、『インド神話の不死をもたらす飲み物アムリタ』に例えられる、知への門を開き、広く多数の者を仏土へ渡してください」

慧可が、この様に言うと、達磨は次の様に言った。

「諸仏の無上の妙なる道は、長い年月、休まず努力して、行い難い事を能（よ）く行い、普通は忍耐しない忍耐し難い事を能く忍耐するのである。どうして、矮小な徳行、矮小な智慧、軽率な心、慢心によって、真の知、真の教えを求めて得られるであろうか？　いいえ！

矮小な徳行、矮小な智慧、軽率な心、慢心によって、真の知、真の教えを求めても得られない！　無駄に労苦するだけである」

この時、慧可は、達磨の教えを聞いて、いよいよ心を励（はげ）ました。

そして、慧可が密かに鋭利な刀を取って自らの左腕を断（た）って達磨の前に置くと、達磨は慧可が仏法を与える事ができる器であると知った。

達磨は、次の様に言った。

「諸仏が最初に道を求める時は、法のために、なりふり構わない。あなたは今、腕を私の前で断（た）った。あなたが法を求める事も、また、善い」

それから、慧可は、秘奥に参入した。

慧可は、八年間、達磨のそばで仕え、千も万も努力して労苦した。

実に、慧可は、人と天人が大いに頼りにする者であり、人と天人の大いなる導師である。

慧可の様な努力と労苦は、西のインドでも聞いた事が無く、東の地の中国でも初めてである。

古代に、(釈迦牟尼仏が「拈華瞬目」、「華をひねって目を瞬かせた」時に、)初祖の迦葉は「破顔微笑」して初祖と成ったと聞いた。

「(達磨という仏祖の)髄を得た」のは、「仏祖の髄の会得」は、二十九祖の慧可に学んだ。

静かに想像して観ると、達磨が何千回、何万回、西のインドから中国へ来ても、もし慧可が修行を保持しなければ、今日、貧しい学徒は豊かに学べなかったであろう。

今日、私達が正しい法を見聞きする仲間と成れた、慧可の恩には必ず報いて感謝するべきである。

仏法以外の法によってでは慧可の恩に報いて感謝した事には当たらない。

慧可の恩に報いて感謝するには、身体の命でも不足であるし、一国一城でも不足である。

一国一城は、他人に奪われてしまう事が有るし、親子に譲ってしまう事も有る。

身体の命は、「無常」、「変化」に委ねてしまう事も有るし、主君に委ねてしまう事も有るし、邪道に委ねてしまう事も有る。

そのため、身体の命と一国一城を捧げて、慧可の恩に報いて感謝しようとしても、道に反してしまう。

ただ、正に、日々、修行を保持する事だけが、慧可の恩に報いて感謝する正しい道である。

慧可の恩に報いて感謝する道理、正しい道筋とは、「日々の生命をなおざりにせず、私用に浪費しない」として修行を保持する事である。

なぜなら、自身の生命は、古くからの修行の保持による恩恵の余波であり、修行の保持による大いなる恩恵である。

急いで、過去の仏祖が修行を保持してくれた恩に報いて感謝するべきである。

仏祖の修行の保持による功徳の分け前により生成されている「形」、「肉体」を、いたずらな妻子の下僕と成し、妻子による翻弄に委ねて、堕落を惜しまない事は、悲しむべきであるし、恥じるべきである。

邪悪で狂愚な人は、身体の命を、名声や利益という羅刹という悪霊の食い物にさせてしまう。

名声や利益は一人の大いなる賊(、盗人、殺人者)である。

名声や利益を重んじるならば、名声や利益を憐れむべきである。

「名声や利益を憐れむ」というのは、仏祖と成るべき身体の命を、名声や利益に委ねて破損させない事である。

妻子や親族を憐れもうとするならば、仏祖と成るべき身体の命を、妻子や親族に委ねて破損させない事である。

「名声や利益は『夢幻』や『空華』、『目がかすんだ人が見た空中の華』である」と学ぶ事なかれ。

名声や利益を、大衆の様に学ぶべきである。

名声や利益を憐れまないで、(肉体を名声や利益に委ねて破損させて、)罪の報いの罰を積む事なかれ。

この様に、学に参入した正しくものを見る眼で「諸法」、「全てのもの」を遍（あまね）く見るべきである。

この世の人の、情が有る人ですら、金銀財宝の恩恵を蒙（こうむ）ったら報いて感謝する。

心が有る人は皆、好（この）ましい善い真理の言葉や美辞麗句に報いて感謝しようという感情で励（はげ）む。

如来、釈迦牟尼仏の無上の正しい法を見聞きする大いなる恩恵をどの人が忘れて善い時が有ろうか？　いいえ！　釈迦牟尼仏の無上の正しい法を見聞きする大いなる恩恵を人が忘れて善い時は無い！

釈迦牟尼仏の無上の正しい法を見聞きする大いなる恩恵を忘れない事が、一生の貴重な宝と成る。

釈迦牟尼仏の無上の正しい法を見聞きする大いなる恩恵を忘れないという修行の保持に不退転であった人の肉体や頭蓋骨といった骸骨には、生きている時も、死んでいる時も、同じく、「七宝」、「七種類の宝」で造られている塔に納めて、一切の人と天人が皆、捧げものを捧げるに相応（ふさわ）しい功徳が有る。

慧可といった仏祖の修行の保持による大いなる恩が有ると知ったならば、必ず、草の上の露（つゆ）の様に儚（はかな）い命をいたずらに無駄に零（こぼ）して落とさず、山の様な徳に丁重に報いるべきである。

慧可といった仏祖の修行の保持による大いなる恩に報いるとは、修行を保持する事である。

慧可といった仏祖の修行の保持による大いなる恩に報いるための、修行の保持の功徳では、仏祖として修行を保持している私が存在しているのである。

二十八祖の達磨と二十九祖の慧可は、「精舎」、「寺院」を建てず、雑草を刈るという忙しい務めが無かった。
鑑智禅師と呼ばれる三十祖の僧璨と、大医禅師と呼ばれる三十一祖の道信も、「精舎」、「寺院」を建てず、雑草を刈るという忙しい務めが無かった。

三十二祖の弘忍と三十三祖の大鑑禅師は、寺院を自らは建てなかった。
三十四祖の青原の行思と南嶽の懐譲も、寺院を自らは建てなかった。

三十五祖の石頭希遷は、草の屋根の小さな質素な庵（いおり）を大岩の上に建てて、岩の上で坐禅した。
石頭希遷は、昼も夜も眠らなかったし、坐禅しない日が無かった。
石頭希遷は、多くの務めを欠かさなかったが、日々の坐禅には必ず務めた。
三十四祖の青原の行思の流れが、天下の世界に流通しているのと、人と天人に益をもたらして潤（うるお）しているのは、三十五祖の石頭希遷の大いなる力による堅固な修行の保持による物である。
今、雲門宗や法眼宗で心を明らめる所が有る人は、皆、三十五祖の石頭希遷の法の子孫である。

三十一祖の道信は、十四歳の時に、三十祖の僧璨に見え（まみえ）てから、九年間、労に服した。

そして、道信は、仏祖の家風を嗣いでから、六十年間近く、脇を床につけないで、寝ないで坐禅した。

道信は、化の導きを敵対者にも親近者にも被らさせたし、徳を人と天人に遍く及ぼした。

三十一祖の道信は中国の四祖である。

六百四十三年、中国の唐の二代目の皇帝の太宗は、三十一祖の道信の仏道の風味を受けて、三十一祖の道信の風体を見ようとして、三十一祖の道信に首都の長安へ来るよう命令した。

道信は、三度、文書で謙遜し謝って辞退し、ついに、病気を理由に辞退した。

太宗は、四度目に、使者に「もし結果として道信が来ないならば、(殺して、)道信の首を取って来い」と命令した。

使者は、道信の山に至って、太宗の命令を道信に話して説得した。

道信は、首を伸ばして、使者が持っていた剣の刃に首をつけた。

道信の顔色は堂々としていた。

使者は、三十一祖の道信の様子が尋常ではないと思い、長安に帰って、三十一祖の道信の様子を太宗に聞かせた。

太宗は、いよいよ三十一祖の道信に感心して慕い、貴重な絹を三十一祖の道信に与えて、皇帝という権力者に会う事を辞退するという三十一祖の道信の志を遂げさせた。

三十一祖の道信は、「身体の命を(魂の真の)身体の命とせず、王や大臣に親近しない」として修行を保持した。

「身体の命を(魂の真の)身体の命とせず、王や大臣に親近しない」という修行の保持には、千年に一度、会えるかどうかである。

太宗は、正義感が有る、国の主であり、会うのは心が進まないという事は無いけれども、王などに親近しない先達の修行の保持が有ったと、学に参入するべきである。

中国人の主である太宗は、首を伸ばして剣の刃に首をつけて身体の命を惜しまない人物である三十一祖の道信に感心し慕(した)うのである。

道信が肉体の命を惜しまなかったのは、いたずらな事ではなく、時間を惜しんで修行の保持を第一の事として専念したからである。

道信が王に会うのを三回も辞退したのは、世にも稀(まれ)な例である。

現在の軽薄な終わりの時代には、自分から求めて権力者に会おうと願う人ばかりである。

六百五十一年、道信は、突然、門人を戒めて「『一切諸法悉皆解脱』、『全てのものは解脱である』。

あなた達は各自『全てのものは解脱である』と心に護(まも)って思うべきである。『全てのものは解脱である』と未来に伝えて化して導くべきである」と言い終わると、坐ったまま亡くなった。

七十二歳であった。

破頭山に、道信の塔が建てられた。

翌年、六百五十二年、道信の塔の戸が(物理的な)原因無しに自ら開いた。まるで生きている人が戸を開けた様であった。

そのため、その後、門人は、あえて道信の塔の戸を閉じなかった。

知るべきである。

「一切諸法悉皆解脱」、「全てのものは解脱である」。

「諸法」、「全てのもの」が空に成る訳ではない。

また、「諸法が諸法ではなく成る訳ではない」、「全てのものが、もの自体ではなく成る訳ではない」。

しかし、「全てのものは解脱である」のである。

六百五十二年に道信の霊が塔の戸を開けたが、三十一祖の道信は、生前にも塔に入る前にも修行を保持したし、死後にも既に塔にいる時にも修行を保持したのである。

生者は必ず滅ぶと誤って見聞きするのは、法の見方が矮小である。

死者は思考や感覚が無いという知見に誤って至るのは、法の聞き方が矮小である。

道を学ぶには、誤って「生者は必ず滅ぶ」とか「死者は思考や感覚が無い」という矮小な見聞きのし方を習う事なかれ。

生者が滅ばない事も有るし、死者が思考や感覚を持っている事も有るのである。

宗一大師と呼ばれる玄沙師備は、福州の閩県の人であった。「謝」家の人であった。

玄沙師備は、幼い頃から釣りを好んだ。

玄沙師備は、小船を南台江に浮かべて、諸々の魚の漁師に成った。
八百六十四年、玄沙師備は、三十歳に成り、突然、俗世という塵(ちり)を出る、出家を願った。
そして、玄沙師備は、釣り船を捨てて、芙蓉の霊訓の所に身を投じて髪を剃(そ)り落とし、江西省の開元寺の道玄律師から出家者が守る大戒を受けた。
玄沙師備は、布の袈裟を纏(まと)い、芒(ススキ)の履物(はきもの)を履(は)き、わずかに気力をつなげるだけの食べ物を食べ、常に終日、坐禅した。
他の僧達は、「玄沙師備の修行の保持は尋常ではない」とした。
玄沙師備は、雪峰義存とは、本(もと)は、同じ法門の兄弟弟子であった。
しかし、玄沙師備は、雪峰義存の弟子であるかの様に、雪峰義存に親近した。
雪峰義存は、玄沙師備の苦行を「頭陀」と呼んだ。
ある日、雪峰義存は、「玄沙師備よ、『頭陀を行う僧』よ、あなたは何者か?」と質問した。
玄沙師備は、「私は、終(つい)に、あえて、人をだまさない」と答えた。
別の日に、雪峰義存は、玄沙師備を呼んで、「玄沙師備よ、『頭陀を行う僧』よ、なぜ、法を尋ねるために、諸方を訪ねるために、去らないのか?」と質問した。
玄沙師備は、「(中国へ来るために)二十八祖の達磨は東の地の中国へ来た訳ではない。
(法を伝えるために達磨は中国へ来た。)
(法を伝えられた)二十九祖の慧可は西のインドへ行かなかった」と答えた。
雪峰義存は、玄沙師備の言葉を肯定した。

ついに、玄沙師備は、雪峰義存が象骨山、雪峰山に昇った時に、雪峰義存と協力して寺を結び構えると、学の深い学徒が集まった。
朝夕、変わる事無く、雪峰義存は、玄沙師備の部屋に入室して、質問し、結論に至っていた。
諸方からの学の深い学徒の中で、結論に未だ至っていない事が有る人は必ず雪峰義存に教えを請い願ったが、雪峰義存は「玄沙師備に、『頭陀を行う僧』に質問しなさい」と言った。
玄沙師備は、孔子の「論語」の「仁に当たっては、師にも譲るな」、「思いやる事では、師にも譲るな」、「慈善行為では、師にも譲るな」という言葉の通りにして、学徒へ教える事に努めた。
玄沙師備の抜群の修行の保持が無ければ、雪峰義存が教育を玄沙師備に譲る行跡は無かったであろう。
終日、坐禅するという修行の保持は、稀(まれ)である修行の保持である。いたずらに人は色形や音声に奔走する事が多いが、終日の坐禅に努める人は稀(まれ)である。
今、後進の者としては、人生の残りの時間が少ない事を(正しく)恐れて、終日の坐禅に努めるべきである。
長慶の慧稜は、雪峰義存の弟子の高徳の長老である。
長慶の慧稜は、二十九年近く、雪峰義存と玄沙師備の間を行き来して学に参入した。

長慶の慧稜は、二十九年近くの年月で、座布団、二十枚を坐禅して摩耗させて破った。

千二百四十二年の人で、坐禅を愛する心が有る人は、長慶の慧稜の二十枚の座布団を坐禅して摩耗させて破った逸話を挙げて、古代人を慕う優れた行跡とする。

長慶の慧稜を慕う人は多いが、長慶の慧稜に及ぶ人は少ない。

そのため、長慶の慧稜の約三十年間の鍛錬は空しくは無く、ある時、長慶の慧稜は、夏用の簾を巻き上げた時に突然に大いに悟った。

長慶の慧稜は、約三十年間、郷土に帰らず、親族の所に向かわず、隣人と談笑せず、修行の保持を第一の事として専念して鍛錬した。

長慶の慧稜の修行の保持は約三十年間である。

長慶の慧稜は、約三十年間、疑って滞った事を疑って滞った。

長慶の慧稜は、差し置く事ができない利発な素質の人であると言うべきである。大いなる素質の人であると言うべきである。

修行の保持に励む志が堅固な人について、伝え聞く事ができるのは経典によって等であるが、

願うべき事を願い、恥じるべき事を恥とする人は、(経典の中で、)長慶の慧稜に会えるであろう。

実を言えば、大衆は、ただ道心が無く、常日頃の行いが劣悪なので、いたずらに無駄に名声や利益に繋がれ縛られてしまうのである。

大円禅師と呼ばれる大潙禅師と呼ばれる三十七祖の潙山霊祐は、三十六祖の百丈の懐海からの「授記」、「成仏の予言」を授かってから、直ぐに高く

険（けわ）しい潙山に行って、鳥や獣に交ざって、草の屋根の小さな質素な庵（いおり）を建てて、修練した。

潙山霊祐は、風や雪といった困難による労苦によって断念する事が無かった。

潙山霊祐は、橡（とち）の木の実であるドングリや栗（くり）の実を食べ物に充（あ）てた。

潙山霊祐は、寺といった大きな建物が無く、定住しなかった。

けれども、潙山霊祐は、四十年間、修行を保持して形成して現した。

後に、潙山には、天下の高名な聖地として、竜や象（ゾウ）の様な高徳の僧達が諸方から集まった。

寺が形成されて現される事を願っても、人々について思いを巡らす事なかれ。法の修行の保持を堅固にするべきである。

修練していても、寺といった大きな建物が無いのが、古代の仏の道場である。

古代の仏祖が露地で野宿し樹の下の家で寝泊まりしなかった家風は、遠く時代を超えて、聞こえている。

潙山霊祐がいた所、潙山は、長い間、「結界」、「僧のための領域」と成った。

まさに、一人が修行を保持すれば、諸仏の道場に伝わるのである。

終わりの時代の愚者よ、いたずらに寺の建築に労苦する事なかれ。

仏祖は未だ寺を願った事が無い。

自己の「ものを見る眼」を未だ明らめずに、いたずらに寺を建築する人は、寺を諸仏に捧げようとしているのでは全く無く、自分の名声や利益のための巣窟にしようとしているのである。

古代の潙山の修行の保持を静かに想像するべきである。

「想像する」というのは、自分が今、潙山に住んでいるかの様に想像する事である。

深夜の雨の音は、苔（コケ）を穿（うが）つだけではなく、岩石を穿（うが）つ威力の音だっただろう。

冬の雪の夜は、出歩く鳥や獣がいないほどだっただろう。

まして、人々が自分を知る事が有ろうか？　いいえ！　人々が自分を知る事は無い！

命を軽んじて、法を重んじる修行を保持するのでなければ、不可能な生活である。

草刈りも速（すみ）やかにできないほど雑草が繁殖している。

土木を営まず、ただ修行の保持を修練して、道をわきまえる鍛錬をするだけである。

憐れむべきである。

正しい法を伝えられて保持している正統な祖師である三十七祖の潙山霊祐は、どれだけ山中の険（けわ）しさに煩（わずら）わされたであろうか？！

潙山について伝え聞く所では、池が有り、川が有り、氷が重なり、霧が深く重なるそうである。

普通の人が忍耐できる棲家（すみか）ではないけれども、道と秘奥が化して導く事は明らかである。

潙山霊祐の様な人が修行を保持してきた道の会得の仕方を見聞きする時に、気軽な身心で聞くべきではないけれども、修行の保持の労苦に勤めるべきである、仏祖からの恩へ報いるべきである事や仏祖からの恩へ感謝するべき事を知らなければ、気軽な身心で聞くのかもしれないが、心が有る後進の者が、

潙山霊祐の古代の修行の保持を目前の現在の事の様に想像して、どうして潙山霊祐を憐れまない事が有るだろうか？　いいえ！　潙山霊祐を憐れむ！
潙山霊祐の修行の保持の道の力の化す導く功徳によって、世界を支えている「風輪」は不動であり、世界は破壊されず、天人達の宮殿は穏やかであり、人の国土も保持されるのである。
私、道元は潙山霊祐の法の遠い子孫ではないが、潙山霊祐は仏教の中興の祖師である。

後に、仰山慧寂は、潙山に来て、三十七祖の潙山霊祐のそばで仕えた。
仰山慧寂は、本(もと)は、三十六祖の百丈の懐海の所で、十の質問に百の答えができる、釈迦牟尼仏の十大弟子のうち知の第一人者の鶖鷺子(シャーリプトラ)の様な人であったが、さらに、潙山霊祐のそばで仕えて、潙山霊祐という牛を三年間も看る(み)鍛錬をした。
仰山慧寂の修行の保持は、近頃は、断絶し、見聞きする事が無い修行の保持である。
仰山慧寂が潙山霊祐という牛を三年間も看た(み)修行の保持について、何かを言い得る事を人に求めても不可能である。
芙蓉山の四十五祖の芙蓉道楷は、専ら(もっぱ)修行の保持を形成して現した本源である。

中国の皇帝が定照禅師という称号と紫色の衣を与えようとしたが、芙蓉道楷は受け取らずに皇帝へ文書を記して辞退した。

中国の皇帝は、とがめたが、終に、芙蓉道楷は受け取らなかった。

芙蓉道楷の、薄い粥という法の味が伝わっている。

芙蓉道楷が芙蓉山にいると、百人近くの出家者と在家者が川の様に集まった。

しかし、一日の食べ物が薄い粥が一杯だけだったので、多くの人が去ってしまった。

また、芙蓉道楷は、誓って、食べ物を求めて在家者の家に赴かなかった。

ある時、芙蓉道楷は、僧達に次の様に言った。

「出家とは、塵の様な俗世の徒労を嫌うために出家するのである。

生死を脱け出す事を求めて、心や雑念を休息し、縁にすがりつく事を断絶するので、出家と呼ばれるのである。

どうして、なおざりに私腹を肥やして生に没頭して善いだろうか？　いいえ！　私腹を肥やして生に没頭するなかれ！

直ぐに、両極端を手放し、中間も放り下ろしなさい。

音声に出会っても、色形に出会っても、石の上に華を植えたかの様に、根づかない様にしなさい。

利益を見ても、名声を見ても、名声や利益は眼の中についた屑に似ているかの様に、洗い落としなさい。

まして、遠い過去から今まで、全ての物を経験しなかった訳(わけ)ではないし、また、全ての物の成り行きを知らない訳(わけ)ではない。

全ての物について、頭を変えて尾と成しているに過ぎない。

この様な物である、全ての物を、どうして、しきりに愛着して貪(むさぼ)って善いだろうか？　いいえ！　全ての物について愛着して貪(むさぼ)るなかれ！

今、全ての物への愛着を止めなければ、いつ止めるのか？

そのため、古代の聖者は、人を教える時に、ただ、必ず、今という時間に全ての力を尽くさせて、全ての物への愛着を止めさせる。

今という時間で全ての力を尽くして全ての物への愛着を止めれば、心中には何事も無く成る。

もし心中で無事を得れば、仏祖への意識も敵と成る様な物である。

全ての物への愛着を止めれば、一切の俗世の物事に対して自然と冷淡と成り、初めて、あの、仏の心に相応(ふさわ)しく成る。

あなたは見聞きしなかったか？

三十五祖の馬祖道一の弟子である、山で隠者と成ったので隠山と呼ばれる潭州龍山は、死に至るまで、あえて、人に会わなかった。

趙州真際大師は、死に至るまで、あえて、人に真理を告げなかった。

匾担は、橡(とち)の木の実であるドングリや栗(くり)の実を拾って食べ物とした。

大梅山の法常禅師は、蓮(ハス)の葉を衣にした。

『紙衣道者』と呼ばれる克符は、ただ紙の衣を頭からかぶっていた。

玄太上座は、ただ、布を衣として纏(まと)っていた。

石霜山の慶諸は、枯木で寺を建て、他の僧達と共に坐禅し、寝た。

ただ、自身の(悪い)心が死に果てる事を求めたのである。

投子大同は、米の処理は他の僧にしてもらったが、他の僧達と共に米を煮て食べた。

私事を省略する事を求めたのである。

この様に、諸々の聖者の手本が有る。

もし諸々の聖者の手本の苦行に長所が無ければ、どうして諸々の聖者は苦行に甘んじて取り組んだのか？　諸々の聖者の手本の苦行には長所が有る！

あなた達は、もし諸々の聖者の手本の苦行によって仏の心を体得すれば、欠点が無い人、完全な人と成れるであろう。

もし諸々の聖者の手本の苦行によって仏の心を体得しなければ、恐らくは、今後、力を深く浪費するだけであろう。

私、芙蓉道楷は、修行において、取り柄（とえ）、長所が無いのに、忝（かたじけな）くも、寺の主である。

どうして、日々を浪費しながら古代の聖者から付属された法を忘れる事ができようか？　いいえ！　日々を浪費しながら古代の聖者から付属された法を忘れる事はできない！

今は、古代の聖者が法に住み保持していた具体例を学ぼうとしている。

諸々の人と相談して、山を下りない事、食べ物を求めて在家者の家に赴（おもむ）かない事、人々に布施を求めない事を決定した。

ただ、寺の荘園に課した一年分の所得を、三百六十等分して、一日に一日分を取って用い、人数によって増減させない。

一日分の米で人数分の御飯を用意できれば、米を御飯にする。

米を御飯にすると不足するならば、米を粥（かゆ）にする。

米を普通の粥（かゆ）にすると不足するならば、米を薄い粥（かゆ）にする。

新たに山に到達した僧と見（まみ）える時は、御茶だけである。

しかも、御茶を淹（い）れず、茶室を一つだけ用意して、自分で、茶室に行って御茶を淹（い）れて飲んでもらう。

重要な事だけに務めて、他の諸々の関係を省略して、道をわきまえる事を第一の事として専念する。

寺は、生活については足りていて、風景は粗末ではない。

華は咲いて微笑む事を理解している。

鳥は鳴いて歌う事を理解している。

木は馬の様に音を鳴らす。

石は牛の様に善く動く。

遠くの緑の山は、霞（かす）んで、色が淡い。

耳元では、泉の音が無音に成る。

山上で猿（サル）が鳴く。

露（つゆ）は中天の月を湿（しめ）らせる。

林で鶴（ツル）が鳴く。

風は、清らかな『暁（あかつき）』、『夜明け』に、松を巡る。

春風が起こる時、『枯木龍吟』、『枯木が竜の様に歌う』。

秋に、木の葉は凋（しぼ）んで落ちる。

寒い林の木は花を散らす。

階段は苔（コケ）の紋様を敷く。

人も顔に霞（かすみ）を帯びる。

山では騒音も静かである。

山では動静は自然のままである。

大海の味が普遍に同一である様に、周囲の風景は物寂しくて、思考するべき事は無い。

私、芙蓉道楷は、今日、諸々の人達の面前で、仏教という家門を説いたが、上手く無かった。

しかし、どうして、堂に上ったり入室したりして、槌をひねって、害虫を払うための毛がついた棒である払子を立てて、怒鳴ったり棒で軽く叩いたりして、眉を吊り上げ目を怒らせて、発作を起こしたかの様に成るべきであろうか？　ただ、自分より上の人達を貶めてしまう、だけではなく、古代の聖者達の期待に背いて失望させてしまう！

あなたは見聞きしなかったか？

二十八祖の達磨は、西のインドから中国へ来て、『少室山』、『嵩山』の麓に到達して、九年、壁に向かって坐禅した。

二十九祖の慧可は、雪の中で立ち続け、腕を断つに至った。

慧可は辛い困難を受けた、と言うべきである。

けれども、慧可が腕を断つまで、達磨は何もしなかったし、慧可は一言も質問しなかった。

しかし、達磨は『人の為に何もしない人』である、と言えるだろうか？　慧可は『師を求めなかった人』である、と言えるだろうか？　いいえ！

私、芙蓉道楷は、古代の聖者達の行跡を説いて明らかにするたびに、地上に身を置く事ができないという感覚を覚えてしまう。

後世の人が軟弱である事を恥じる。

後世の人は、多数の珍味を仏に捧げてから自分の物にして、『私は、衣服、飲食物、寝具、薬という四事が足りてから、仏道に心する』と言う。

恐らく、後世の人は、手足の所作を変えられずに、一生、道から離れて去ってしまう。

時間は飛んでいる矢の様に速く過ぎ去ってしまう。

深く時間を惜しむべきである。
けれども、他人の長所に従って他人を仏土へ渡すのである。
私、芙蓉道楷が、あなたに強制的に教える事はでき得ないのである。
あなた達は、次の様な古代人の詩を見聞きしなかったか？

山の田の殻を取っただけで精白していない玄米の御飯という質素な食べ物。
野菜の淡い黄色の塩漬けという質素な食べ物。
食べるかは、あなたに委ねる。
食べなければ、あなたは身を『迷い』である『この世』に委ねる事に成る。

思いますに、同志達よ、各自、努力してください。
ご自愛ください」

これが、代々の仏祖が単一に伝えてきた「骨髄」、「理解」である。
高祖である四十五祖の芙蓉道楷の修行の保持は多いが、この一つの知を挙げる。
今、私達は後進の者である。
芙蓉道楷が、芙蓉山で修練した修行の保持を慕(した)い、学に参入するべきである。
これは、祇園精舎での釈迦牟尼仏の正しい手本でもある。

洪州の江西の開元寺の大寂禅師と呼ばれる三十五祖の馬祖道一は、漢州什邡県の人である。

三十五祖の馬祖道一は、十年余り、三十四祖の南嶽の懐譲のそばで仕えた。
ある時、馬祖道一は、郷里に帰ろうとして途中まで至った。
馬祖道一は途中で帰って南嶽の懐譲に焼香して礼拝すると、南嶽の懐譲は詩を作って馬祖道一に次の様に言った。
「君、馬祖道一に勧める。郷に帰る事なかれ。郷に帰れば、道が行われない。隣人の老婦人は、あなた、馬祖道一が俗世にいた時の名前を言うであろう」
馬祖道一は、南嶽の懐譲の法の言葉をもらって、敬い、「私は、いつまでも、故郷に行きません」と誓って言って、故郷に向かって一歩も歩まなかった。
馬祖道一は、江西にだけ住んで、十方の者達を来させた。
馬祖道一は、わずかに「即心是仏」を言い得た他は、一つの言葉も人の為に言わなかった。
けれども、馬祖道一は、南嶽の懐譲の正統な後継者であり、人と天人にとって命である。

「郷に帰る事なかれ」という言葉は何か？
「郷に帰る事なかれ」とは、どうあるべきか？
東西南北へ、郷に帰るのは、ただ、自己への反逆である。
実に、「郷に帰れば、道が行われない」のである。
「道が行われない」のは「『郷に帰れば』なのか？」と修行を保持する。
「道が行われない」のは「『郷に帰れば』ではないのか？」と修行を保持する。
「郷に帰れば」、なぜ、「道が行われない」のか？

道を行わない事が、道を遮る、とするのか？

自己が、道を遮る、とするのか？

「『隣人の老婦人』は、『あなた、馬祖道一が俗世にいた時の名前を言う者である』」とは言わなかった。

「隣人の老婦人は、あなた、馬祖道一が俗世にいた時の名前を言うであろう」という、言葉の会得である。

南嶽の懐譲は、どうして、言い得たのか？

馬祖道一は、どの様にして、南嶽の懐譲の法の言葉を受け入れたのか？

その道理とは、自身が南に向かって行く時は、大地も同じ南に向かって行くのである。

自身が南以外の方向に向かって行く時も、大地も同じ方向に向かって行くのである。

須弥山や大海を量として「そんなはずは無い」と疑い危ぶんだり、太陽と月と星々を量って疑い滞るのは、矮小なものの見方である。

大満禅師と呼ばれる三十二祖の弘忍は、黄梅県の人である。

弘忍は、「周」家の人である。弘忍は、母の家名を名乗った。弘忍は、生まれた時には父がいなかったからである。例えば、老子が「李」家の人であると名乗った様に。

弘忍が、七歳で法を伝えられてから七十四歳に至るまで、仏祖の「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」に住んで保持し、密かに袈裟と法を三十三祖の大鑑禅師に付属したのは、抜群の修行の保持である。

弘忍が袈裟と法を神秀に知らせず三十三祖の大鑑禅師に付属したので、正しい法の寿命が不断なのである。

道元の亡き師である、天童山の五十祖の如浄は、中国の越の近くの人である。

如浄は、十九歳で仏教学を捨てて学に参入すると七十歳に及んでも、なお不退であった。

中国の皇帝の寧宗は、紫色の衣と称号を如浄に与えようとしたが、如浄は皇帝へ文書を記して辞退した。

そのため、十方の僧達は、共に、如浄を敬い尊重した。

また、遠近の、学が有る者達は、共に、如浄の修行の保持を喜んだ。

そして、却（かえ）って、寧宗は、如浄の修行の保持を大いに喜んで、御茶を如浄に与えるに留めた。

如浄の修行の保持を知っている者は、世にも稀（まれ）な事だと、たたえた。

実に、如浄の修行の保持は、真実の修行の保持である。

なぜなら、名声を愛着する事は、禁を犯すよりも悪い。

禁を犯すのは、一時の誤りである。

しかし、名声への愛着は、一生、重ねてしまう。くり返してしまう。

愚かさによって、名声への愛着を捨てない事なかれ。

学に暗くて、名声を受け入れる事なかれ。

名声を受け入れないのは、修行の保持に成る。
名声への愛着を捨てるのは、修行の保持に成る。
六代の祖師などの各々に称号が有るのは、皆、死後に与えられた称号である。
祖師の称号は、祖師が存命中に愛着した名声ではない。
そのため、速(すみ)やかに生死する名声への愛着を捨てて、仏祖の修行を保持できる様に願い求めるべきである。
名声を貪欲に愛着して、動物的人間に等しく成る事なかれ。
重んじるべきではない自分を貪欲に愛着する思いは、動物にも有る。
重んじるべきではない自分を貪欲に愛着する思いは、動物的人間にも有る。
名声や利益を捨てる事は、人や天人でも稀(まれ)であるが、仏祖で未だ捨てなかった人はいない。
ある人は、誤って「全ての生者に益をもたらすため、名声や利益を貪欲に愛着する」と言うが、大いなる邪悪である。法に付きまとおうとする外道である。正しい法の悪口を言う「魔」、「仏敵」の党派者である。
仏敵の党派者の言葉通りであれば、名声や利益を貪(むさぼ)らない仏祖は、生者に益をもたらさないのか？
仏敵の党派者を笑うべきである。笑うべきである。
また、貪(むさぼ)らない事によって生者に益をもたらす事が有る。どうだ？！
生者に益をもたらす手段が、どれだけ有るか学ばずに、生者に益をもたらさない事を「生者に益をもたらす事である」と嘘をつく人は、「魔」、「仏敵」の類(たぐい)である。
仏敵の党派者のおかげで利益を貪(むさぼ)れた生者は、地獄に堕ちる類(たぐい)の人である。

仏敵の党派者は、一生が暗い事を悲しむべきである。
無知蒙昧な事を「生者に益をもたらす事である」と嘘をつくなかれ。
そのため、皇帝からの称号の授与を皇帝へ文書を記して辞退するのは、古代からの優れた行跡である。
後進は学に参入して究めるべきである。
道元は、目の当たりに、亡き師である、如浄を見たが、真の人に出会えたのである。
如浄は、十九歳から郷を離れて師を訪ね、道をわきまえる鍛錬に六十五歳に至っても不退転であった。
如浄は、最高権力者に親近せず、最高権力者に会わず、権力者に親近せず、役人に親近しなかった。
如浄は、紫色の衣と称号を辞退しただけではなかった。
如浄は、一生、まだら模様の袈裟を纏(まと)わず、常日頃、堂に上ったり入室したりする時は、全て、黒い袈裟や黒い裰子を着た。
如浄は、僧達に教訓として次の様に言った。
「坐禅と仏道の学に参入するには、道心を持つ事を第一とする。
道心を持つ事は、道を学び始める第一歩と成る。
二百年前の、千年頃から、祖師の道は廃(すた)れている。
悲しむべきである。
まして、真理の一句の言葉を会得した皮袋である人は少ない。
私、如浄が、昔、径山に留まっていた時、光仏照が当時の寺の長の僧であった。
光仏照は、堂に上って、次の様に誤って言った。

『法、坐禅、道では、必ずしも他人の真理の言葉を求める訳ではない。ただ、各自、理を会得しなさい』

光仏照は、この様に誤って言って、寺の中を全く監督せず、また、僧達、兄弟弟子を全く監督せず、ただ、客と会う事を追い求めるばかりであった。

光仏照は、特に、法の重要な点を知らず、ひとえに、名声や利益を貪欲に愛着するばかりであった。

もし法が各自で理を会得する代物であれば、どうして、師と道をたずねる、錐の先が使い古されて丸く成る様に円熟した長老がいるのか？

真に、光仏照は、禅に参入した事が無いのである。

今、諸方の、道心が無い老僧どもは、光仏照の弟子である。

どうして法が如浄以外の人の手中に有り得ようか？

残念、残念」

　如浄は光仏照を非難し、光仏照の弟子どものうち、如浄による光仏照への非難を耳にした者は、多かったが、恨まなかった。

　また、如浄は、次の様に言った。

「禅に参入するとは、(古い)身心を脱ぎ落とす事である。

焼香、礼拝、念仏、懺悔の修行、経を看る事を用いず、ひたすらに坐禅して初めて得られる」

　実に、千二百四十二年に、中国の諸方で、禅に参入したと名乗り、祖師の法の遠い子孫を名乗る皮袋である僧は、百人や二百人だけではないが、稲、麻、竹、葦の様に多数いても、打ち坐る人を打ち坐る事に勧誘する人は、絶えて、風の噂にも聞かない。

　打ち坐る人を打ち坐る事に勧誘する人は、天下世界の中で、天童山の如浄だけである。

諸方の僧達は同じく如浄をほめるが、如浄は諸方の僧達をほめなかった。

また、如浄について全く知らない寺の主もいた。

千二百四十二年に如浄について知らない人は、中国に生まれたといえども、動物的人間の類(たぐい)である。参入するべき人に参入せず、いたずらに時間を無駄にするからである。

憐れむべきである。

如浄について知らない輩は、疑わしい道についての説を騒がしくするのを仏祖の家風と誤認している。

如浄は、日頃、次の様に、普遍に説いていた。

「私、如浄は、十九歳から千二百二十七年の今まで、遍(あまね)く諸方の寺を訪ねたが、人の為(ため)の師はいない。

十九歳から千二百二十七年の今まで、一日一夜も、座布団を離れて坐禅しなかった日夜は無い。

寺に住む前から今まで、故郷の人と語ったりした事は無い。

時間が惜しいからである。

寺に留まっても、寺の中、寮舎に全て入って見て回る事はしない。

まして、風景を遊んで愛(め)でる事に鍛錬を浪費した事は無い。

僧堂という正式な場所での坐禅の他に、建物の上や、仕切りや垣根で囲まれた様な隠れ場所を求めて、独りで行って、穏やかな場所で坐禅する。

常に袖(そで)の中に小さな座布団を携帯して、岩の下でも坐禅する。

常に、釈迦牟尼仏が坐禅した金剛石(ダイアモンド)の様に硬い『金剛座』を摩耗させて破るくらい坐禅しよう、と思っている。

これが目標である。

臀部(でんぶ)の肉が爛(ただ)れてしまう事も時々有るが、逆に、いよいよ坐禅を好んだ。

今年、千二百二十七年で、六十五歳に成る。
老いて頭も衰え、坐禅を完全には会得できていないが、十方の『兄弟』、『同胞』を憐れんで、山の寺の主と成り、諸方から来る人を諭(さと)し教え、生者の為(ため)に道を伝えている。
諸方の老僧どもには、どこに、どんな似非(えせ)仏法が有るか、わかった物ではないからである」

この様に、如浄は、堂に上って普遍に説いた。

また、如浄は、諸方から来た僧達から土産を受け取らなかった。

趙提挙は、中国の皇帝の寧宗の子孫である。
趙提挙は、明州軍を率いる明州の知事であり、管内の勧農使でもある。
趙提挙は、如浄を招いて、明州の役所で、法を説いてもらい、銀貨一万錠を布施しようとした。

如浄は、法を説いた後に、趙提挙に向かって、次の様に言って、布施を断わった。

「私、如浄は、いつもの様に、山を出て、法を説き、『正法眼蔵涅槃妙心』、『正しくものを見る眼と寂滅した妙なる心』を開演しました。
謹(つつし)んで、趙提挙の亡き父の御冥福をお祈りいたします。
ただ、銀貨は、あえて、受け取りません。
僧は、この様な物を必要としません。
たくさんの布施は、今まで通り、御返しします」

趙提挙は、次の様に言った。

「如浄様。私、趙提挙は、忝(かたじけな)くも、皇帝陛下の親族なので、至る所で貴ばれて、財宝をもらう事が多いのです。

今日は、父が亡くなった日なので、亡き父の冥福に役立てたいと欲したのです。

如浄様、どうして納めてくれないのですか？

今日は、ありがとうございました。

『大いなる慈悲』、『大いなる思いやり』によって、小さな布施を手元に留めてください」

如浄は、次の様に言った。

「趙提挙様の命令は厳守する必要が有るので、あえて謙遜して謝って辞退している訳ではないのです。

道理が有るのです。

私、如浄は法を説きましたが、趙提挙様は法を悟って法を聴いて法を会得できたかどうか」

趙提挙は、「私、趙提挙は、如浄様から法を聞けて嬉しかったです」と言った。

如浄は、次の様に言った。

「趙提挙様は、聡明で、私、如浄の言葉を聞いて下さいました。

恐縮です。

望むのは、趙提挙様の亡き父の御来臨と御冥福です。

さて、私、如浄は、法を説いた時、どんな法を説く事ができ得ましたか？

試しに、言ってみてください。

もし言い得たら、銀貨一万錠を受け取ります。

もし言い得なかったら、銀貨を返すので、趙提挙様は受け取ってください」

趙提挙は、立って、如浄に向かって、「思いますに、如浄様の法の様子は、所作が、ありがたい物でした」と言った。

如浄は、次の様に言った。
「趙提挙様の、その言葉は、私、如浄が法を説いて挙げて来た奥底です。では、趙提挙様が、聴いて会得した奥底とは、どんな物ですか？」
趙提挙は、とまどった。
如浄は、「趙提挙様の亡き父への冥福の祈りは円満に成就して終わりました。布施については、少しの間、趙提挙様の亡き父の判断を待ちましょう」と言って、去る事を趙提挙に請い願った。
趙提挙は、「如浄様が布施を受け取らない事を恨みません。如浄様に会えて嬉しかったです」と言って、如浄を送った。
浙東と浙西の仏道の人と俗人の多くが、たたえた。

この事は、平侍者の日記に記されている。
平侍者は「如浄の様な人は、得難い人である。どこで、容易に、見る事ができ得ようか？」と言っている。

諸方で、銀貨一万鋌を受け取らない人が、誰かいるだろうか？

古代人の仏祖は、「金銀、宝玉を見る時は、排泄物、排泄物で汚れた土の様に見るべきである」と言っている。
たとえ、金銀を金銀として見てしまっても、金銀を受け取らないのは、「僧の家風」、「仏教の家風」である。
如浄には、銀貨を受け取らない仏教の家風が有った。
千二百四十二年の僧達には、金銀財宝を受け取らない仏教の家風が無い。
如浄は、次の様に、常に言っていた。

「三百年前の、九百年から千二百年の今まで、私、如浄の様な善知識を持つ者は未だ出現していない。
諸々の人達よ、明確に詳細に道をわきまえる鍛錬をしなさい」

如浄の会にいた、西蜀の綿州の人である、道昇という人は、道教の人であるが、仲間の五人と共に、誓って、「私達は一生の間に仏の大いなる道をわきまえて理解しよう。郷土に帰らない様にしよう」と言った。
如浄が、道昇達の善言と善行を喜んで、歩く時も、道の業を修行する時も、道昇達を僧達と共に一緒にさせ、道昇達を女性の出家者の下に置いたのは、世にも稀(まれ)な優れた行跡である。

福州の僧の善如は、誓って、「私は一生、南に向かって一歩も移動しない。専(もっぱ)ら仏祖の大いなる道の学に参入しよう」と言った。

如浄の会には、この様な正しい人達が多数いて、道元は目の当たりに見た。如浄以外の所には正しい人はいなかったが、これが、千二百四十二年の中国人の僧が宗(むね)としている修行の保持である。
私達、日本人には、この心構えが無い。
悲しむべきである。
仏法に出会っても、なお、日本人には心構えが無いのである。
仏法に出会っていない時の身心は、恥じ足りない。

静かに想像するべきである。
一生は長くは無い。
たとえ、「『三三両両』でも」、「わずかでも」、仏祖の言葉を会得したら、仏祖の道を会得した事に成る。
なぜなら、仏祖は身心が唯一である。
仏祖の言葉は、一言目も二言目も、全てが、仏祖の暖かい身心である。
仏祖の身心が来て、私の身心を理解する。
まさに、私が道を理解した時は、私の理解が来て、私の身心を理解する。
今のこの生で、生を重ねてきた身心を理解するべきである。
そのため、仏祖と成った時に、仏祖を超越するのである。
修行で保持している、「三三両両の」、「わずかな」真理の言葉は、仏祖の身心である。
いたずらな、無駄に成る、色形や音声に過ぎない、名声や利益のために奔走する事なかれ。
名声や利益のために奔走しなければ、仏祖が単一に伝えている修行の保持と成る。
大いなる真の隠者にも矮小な未熟な隠者にも勧(すす)めると、一つだけでも、半端でも、万事を投げ捨てて、万の多数の縁(えん)を投げ捨てて、修行を保持して、仏祖の修行を保持しなさい。

正法眼蔵　行持(修行の保持)

千二百四十二年、観音導利興聖宝林寺で書いた。

道得

【抜粋】

真覚大師と呼ばれる雪峰義存の会に一人の僧がいて、山の辺（ほとり）に行って、草を結んで、草の屋根の小さな質素な庵（いおり）を建てた。

庵（いおり）の僧は、年月を重ねたが、髪を剃らなかった。

庵（いおり）の僧は、自ら一つの木の杓（しゃく）を作って、谷の辺（ほとり）に行って川から水を汲（く）んで飲んだ。

月日が経つにつれて、庵（いおり）の僧の家風は密かに漏れ出た。そのため、ある時、別の僧が来て、庵（いおり）の僧に「『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図は、どういう物であろうか？」と質問した。

庵（いおり）の僧は、「谷が深いので、谷の川の水を汲（く）む杓（しゃく）の柄（え）も長く成る様な物である」と言った。

質問した僧は臆して、庵（いおり）の僧に礼拝せず、庵（いおり）の僧に教えを請わず、山に昇って庵（いおり）の僧の事を雪峰義存に話した。

雪峰義存は、庵（いおり）の僧の話を聞いて、「とても不思議な人である。しかし、老いた僧である私、雪峰義存が、自ら庵（いおり）の僧の所に行って、見抜いて、初めて納得するべきである」と言った。

ある日、雪峰義存は、突然、そばに仕えている侍者の僧に剃刀（カミソリ）を持たせて庵（いおり）の僧の所に引き連れて行った。

直（す）ぐに庵（いおり）に至った。

雪峰義存は、庵の僧に会うとすぐに、「道である真理を会得していて言い得たならば、あなたの頭を剃らない」と言った。

庵の僧は、（無言で、）頭を洗って来て、雪峰義存の前に来た。

雪峰義存は、庵の僧の髪を剃ってあげた。

【全文】

諸々の仏祖は、道を会得して言い得るのである。

このため、仏祖が仏祖を選ぶには、必ず、「道を会得して言い得るか、それとも未だなのか？」と質問して理解して取るのである。

「道を会得して言い得るか、それとも未だなのか？」と質問して理解して取るのは、

心でも、質問して理解して取るし、

身でも、質問して理解して取るし、

杖や害虫を払うための毛がついた棒である払子でも、質問して理解して取るし、

柱や灯籠でも、質問して理解して取る。

仏祖でなければ、質問して理解して取れないし、道を会得して言い得ない。

なぜなら、仏祖でなければ、理解、会得が無いからである。

道を会得して言い得る事は、他人によって得る訳ではないし、自分の力の技能によって得る訳ではないが、ただ、正に、仏祖をわきまえて究めていけば、仏祖の道を会得して言い得るのである。

仏祖の道を会得して言い得る中で、昔も修行して証して究めていき、今も鍛錬して道をわきまえる。

仏祖が仏祖を鍛錬して、仏祖が言い得た言葉をわきまえて聞き入れる時、仏祖の道の会得は自然と三年、八年、三十年、四十年の鍛錬と成って、尽力して仏祖の道を会得して言い得るのである。

（

三十年、二十年は、皆、道を会得して言い得る様に成れるまでの年月である。

道を会得して言い得る様に成れるまでの年月が、力を合わせて、道を会得して言い得る様にさせてくれるのである。

）

鍛錬の三十年、四十年は、何十年間も、道の会得に、時間の隙間が無かったのである。

そのため、証して究めた時に、見て会得した真理は、真実である。

そのため、今、道を会得して言い得る事は、疑えない、間違い無い。

そのため、今、道を会得して言い得る真理は、証して究めた時に、見て会得した真理を備えているし、

証して究めた時に、見て会得した真理は、今、道を会得して言い得る真理を備えている。

そのため、今、道を会得して言い得る真理が有るし、今、見て会得した真理が有る。

今、道を会得して言い得る真理と、証して究めた時に、見て会得した真理は、一つであるし、永遠に鍛錬して行く道である。

今の鍛錬は、道を会得して言い得る真理と、見て会得した真理に、鍛錬させられて行くのである。

鍛錬での、全ての誤った考えの否定は、年月が深く多く重なって、更に従来の年月の鍛錬を脱ぎ落とす。

鍛錬を脱ぎ落とす時、「皮肉骨髄」、「理解」も、(古い理解を)脱ぎ落とす事をわきまえて受け入れるし、国土も、山河も、(古いものを)脱ぎ落とす事をわきまえて受け入れる。

鍛錬を脱ぎ落とす時、鍛錬を脱ぎ落とす事を究極の「宝が存在する所」、「悟り」として至ろうと思考して行くが、究極の悟りである、鍛錬を脱ぎ落とす事に至ろうという思考が、出現しているので、まさに、鍛錬を脱ぎ落とした時に、期せずして、道を会得して言い得る真理が形成されて現されるのである。

心の力ではないし、身の力ではないが、自然と、道を会得して言い得る真理が存在するのである。

すでに、道を会得して言い得ると、道を会得して言い得る事を珍しく思わないし、不思議に思わない。

けれども、会得している道を言い得る時には、言い得ない真理を言わないのである。

(真理を理解して言い表せる様に成った時、厳密には真理は言い表せないので、言い表せない真理を言わなく成る。)

言い得る様に道を会得していると認め得ても、言い得ない真理の奥底を徹底して言い得ないと未だ証して究めないのは、仏祖の「面目」、「有様（ありよう）」ではないし、仏祖の「骨髄」、「理解」ではない。

そのため、二十八祖の達磨と門人達と二十九祖の慧可の「皮肉骨髄」の話で、慧可が無言で三回礼拝して戻った時に会得していた道である真理の奥底が、どうして、「皮肉骨髄」で門人達が無言ではなかった時に会得していた真理の奥底と同じだろうか？　いいえ！　「皮肉骨髄」の話で、慧可が無言であった時に会得していた真理の奥底と、門人達が無言ではなかった時に会得していた真理の奥底は、異なる！

「皮肉骨髄」の話で、門人達が無言ではなかった時に会得していた道である真理の奥底は、慧可が無言で三回礼拝して戻った時に会得していた真理の奥底と接していないし、慧可が無言で三回礼拝して戻った時に会得していた真理の奥底を備えていない。

今、私が、他の人達と、色々な手段で悟りへ導こうと、見えて（まみ）いる時は、今、他の人が、私達と、色々な手段で悟りへ導こうと、見えて（まみ）いるのである。私には、言い得る道である真理の奥底が有るし、言い得ない道である真理の奥底が有るし、他人にも、言い得る道である真理の奥底が有るし、言い得ない道である真理の奥底が有る。

言っている道である真理の奥底には、私や他人が存在する、と言えるし、言っていない道である真理の奥底には、私や他人が存在する、と言える。

趙州真際大師は、僧達に示して「あなたが、もし一生、寺や林を離れず、こつこつと坐禅して、五年間、十年間、無言でも、あなたが『言えない人』

であると人々は呼ぶ事ができないし、諸仏も、あなたをどうにもできない」と言った。

そのため、五年間、十年間、寺や林にいて坐禅して秋の霜から春の華までの一年間を何度も経験して、一生、寺や林を離れず坐禅して鍛錬して道をわきまえる事を想像すると、坐禅し切っている、こつこつと坐禅している人は、いくらかの道を会得して言い得ているのである。

寺や林を離れず坐禅し坐禅の合間に歩く人は、人々が「言えない人」であると呼ぶ事ができない人にいくらか成っているのである。

人は厳密には「一生の従来の所」、「今まで」、「前世」を知らないが、人が一生、寺や林を離れず坐禅すれば、一生は寺や林を離れない坐禅と成る。

一生には、寺や林の坐禅には、どんな天へ通じる道が有るのか？

ただ、こつこつと坐禅する事をわきまえて受け入れるべきである。

言わない事を嫌う事なかれ。

言わない事は、道を会得して言い得る事による、最初から最後まで正しい事なのである。

こつこつと坐禅する事は、今世の一生と、来世の二生に成る。一時、二時ではない。

こつこつと坐禅して言わない五年間、十年間があれば、諸仏も、あなたをないがしろにする事は無い。

なぜなら、実に、こつこつと坐禅して言わない人を、仏の眼でも見れず、仏の力でも牽引できず、諸仏も、どうにもできない。

趙州真際大師の言葉の真意は、こつこつと坐禅して言わない人が選び取っている道である真理によって、諸仏も「(真理を)言えない人」であると呼ぶ

事ができないし、(言い表せないとしている人なので)諸仏も「言える人」であると呼ぶ事ができない。

そのため、一生、寺や林を離れず坐禅するとは、一生、会得している道を離れず坐禅する事である。

こつこつと坐禅して言わない五年間、十年間とは、道を会得している五年間、十年間なのであるし、

こつこつと坐禅して言わない五年間、十年間とは、一生、言い得ない道である真理を離れない事であるし、

こつこつと坐禅して言わない五年間、十年間とは、言い得ない道である真理による五年間、十年間であるし、

こつこつと坐禅して言わない五年間、十年間とは、百、千の諸仏を坐禅し切る事であるし、

こつこつと坐禅して言わない五年間、十年間とは、百、千の諸仏が、あなたを坐禅し切る事である。

そのため、仏祖の会得している道である真理の奥底とは、一生、寺や林を離れず坐禅する事である。

たとえ「(真理を今は)言えない人」でも、(一生、寺や林を離れず坐禅する人には、)会得している道である真理の奥底が存在する。

「(真理を今は)言えない人」には会得している道である真理は無い、と学ぶ事なかれ。

道を会得して言い得る人が、「(言い得ない真理を)言えない人」に成る場合が有る。

「一生、寺や林を離れず坐禅しているが真理を今は言えない人」、「言い得ない真理を言えない人」には会得している道である真理がある。

「一生、寺や林を離れず坐禅しているが真理を今は言えない人」、「言い得ない真理を言えない人」の言葉は、聞く事ができるし、聞くべきである。

「一生、寺や林を離れず坐禅しているが真理を今は言えない人」、「言い得ない真理を言えない人」でなければ、「一生、寺や林を離れず坐禅しているが真理を今は言えない人」、「言い得ない真理を言えない人」と、どうして真の意味で出会えるであろうか？　どうして話し合えるであろうか？

「一生、寺や林を離れず坐禅しているが真理を今は言えない人」、「言い得ない真理を言えない人」と、真の意味で出会えた人、話し合えた人は、既に、「一生、寺や林を離れず坐禅しているが真理を今は言えない人」、「言い得ない真理を言えない人」である。

「一生、寺や林を離れず坐禅しているが真理を今は言えない人」、「言い得ない真理を言えない人」と、「どの様にしたら真の意味で出会えるか？」、「どの様にしたら話し合えるか？」と思考して、学に参入して、「一生、寺や林を離れず坐禅しているが真理を今は言えない人」、「言い得ない真理を言えない人」をわきまえて究めるべきである。

真覚大師と呼ばれる雪峰義存の会に一人の僧がいて、山の辺に行って、草を結んで、草の屋根の小さな質素な庵を建てた。

庵の僧は、年月を重ねたが、髪を剃らなかった。

庵の僧の草の屋根の小さな質素な庵での生活を誰が知るであろうか？

庵の僧の山の中での動静は静かである。

庵の僧は、自ら一つの木の杓を作って、谷の辺に行って川から水を汲んで飲んだ。

実に、庵の僧は、「飲溪」、「谷で川から水を飲む人」の種類の人である。月日が経つにつれて、庵の僧の家風は密かに漏れ出た。そのため、ある時、別の僧が来て、庵の僧に「『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図は、どういう物であろうか？」と質問した。

庵の僧は、「谷が深いので、谷の川の水を汲む杓の柄も長く成る様な物である」と言った。

質問した僧は臆して、庵の僧に礼拝せず、庵の僧に教えを請わず、山に昇って庵の僧の事を雪峰義存に話した。

雪峰義存は、庵の僧の話を聞いて、「とても不思議な人である。しかし、老いた僧である私、雪峰義存が、自ら庵の僧の所に行って、見抜いて、初めて納得するべきである」と言った。

雪峰義存の言葉の真意は、「庵の僧の言葉の善さは、不思議なほどに善い。けれども、老いた僧である私、雪峰義存が、自ら庵の僧の所に行って、考えてみるべきである」という事である。

ある日、雪峰義存は、突然、そばに仕えている侍者の僧に剃刀を持たせて庵の僧の所に引き連れて行った。

直ぐに庵に至った。

雪峰義存は、庵の僧に会うとすぐに、「道である真理を会得していて言い得たならば、あなたの頭を剃らない」と言った。

雪峰義存の言葉を理解するべきである。

「道である真理を会得していて言い得たならば、あなたの頭を剃らない」という言葉は、「頭を剃っていない人は、道である真理を会得していて言い得る」と誤って聞こえてしまう。

どうだ？

「道である真理を会得していて言い得たならば、あなたの頭を剃らない」という言葉を「頭を剃っていない人は、道である真理を会得していて言い得る」と誤って会得してしまって言い得てしまった人の頭は、最終的に、剃ってもらえない。

雪峰義存の「道である真理を会得していて言い得たならば、あなたの頭を剃らない」という言葉を会得するには、「聞く耳を持つ」力が有る人が聞くべきである。

雪峰義存の「道である真理を会得していて言い得たならば、あなたの頭を剃らない」という言葉は、「聞ける耳を持つ」力が有る者のために開演するべきである。

庵の僧は、(無言で、)頭を洗って来て、雪峰義存の前に来た。

庵の僧は、道である真理を会得していて言い得るから、(厳密には真理は言い表せないので、言い表せない真理を言わないために、)無言で頭を洗って来たのか？　道である真理を会得していなくて言い得ないから、無言で頭を洗って来たのか？

雪峰義存は、庵の僧の髪を剃ってあげた。

この雪峰義存の逸話は、実に、優曇華が三千年に一度、現れる様な物である。出会い難いだけではなく、聞く事が難しいであろう。

七聖や十聖の未熟な境界ではないし、三賢や七賢の未熟な見解ではない。

霊感が無い文字だけの経典の似非学者の輩や、超常現象を起こせるだけの輩には、どう考えても、思い量る事ができない。

「仏の『この世』への出現に出会う」と言うのは、この雪峰義存の逸話の様な話を聞く事を言うのである。

少し考えて欲しい。雪峰義存の「道である真理を会得していて言い得たならば、あなたの頭を剃らない」という言葉は、どういう事だろうか？

雪峰義存の「道である真理を会得していて言い得たならば、あなたの頭を剃らない」という言葉を、道である真理を未だ会得していない人が聞くと、力が有る人は驚き疑うであろうし、力が無い人は茫然と成るであろう。

雪峰義存は、仏について明らかに質問せず、道である真理について詳細に質問せず、「三昧」、「定」について明らかに質問せず、「陀羅尼」、「真理の保持」について詳細に質問せず、「道である真理を会得していて言い得たならば、あなたの頭を剃らない」と明らかに質問した。

雪峰義存の「道である真理を会得していて言い得たならば、あなたの頭を剃らない」という言葉は、質問している様ではあるが、教えている様でもある。

明確に詳細に学に参入するべきである。

庵の僧は、真の心が有るので、会得している道である真理に助けられて茫然と成らなかった。

庵の僧は、家風が隠れず、頭を洗って来た。

庵の僧が頭を洗って来たのは、仏、自らの智慧も、辺を得る事ができない、法である。

庵の僧が頭を洗って来たのは、仏が身を「この世」に出現させる事であるし、法を説く事に成るし、生者を仏土に渡す事に成るし、頭を洗って来る事自体である。

庵の僧が頭を洗って来た時、もし雪峰義存が仏祖でなければ、剃刀を放り下ろして「ハハ」と大笑いするであろう。

しかし、雪峰義存には真理を見抜く力が有り、雪峰義存は仏祖であるので、雪峰義存は、庵の僧の髪を剃ってあげた。

実に、雪峰義存と庵の僧が、仏と仏でなければ、こう成らなかった。

雪峰義存と庵の僧が、一つの仏でなければ、二人の仏でなければ、こう成らなかった。

雪峰義存と庵の僧が、竜の様な高徳の僧と高徳の僧でなければ、こう成らなかった。

黒竜の宝玉は、黒竜の惜しむ心が飽きて怠らないといえども、自然と、黒竜の宝玉を収める事ができる理解が有る人の手に入るのである。

知るべきである。

雪峰義存は庵の僧を見抜き、庵の僧は雪峰義存を見た。

言い得ない道である真理を会得しているので、庵の僧は髪を剃ってもらったし、雪峰義存は髪を剃ってあげたのである。

雪峰義存という、道を会得している良き友は、期せずして、訪ねてくる、道である真理が存在する。

庵の僧という、言い得ない道である真理を会得している良き友は、期せずして、自己を知る所が有ったのである。

自己を知る学に参入していれば、道である真理の会得が形成されて現れるのである。

正法眼蔵　道得(道である真理を会得して言い得る事)(「道」には「言う」という意味が有る。)

千二百四十二年、観音導利興聖宝林寺で書いて僧達に話した。

心不可得

「金剛般若波羅蜜経」で、釈迦牟尼仏は、「過去の心を得る事は不可能であるし、
現在の心を得る事は不可能であるし、
未来の心を得る事は不可能である」と言っている。

「過去、現在、未来の心を得る事は不可能である」のは、仏祖が心に参入して究めている事である。

「過去、現在、未来の心を得る事は不可能である」と知るまでの間に、過去、現在、未来という岩穴に籠っているものをえぐって来ている。

けれども、自分という一時の宿を用いている。

「自分」というのは、「得る事は不可能である心」である。

今この瞬間にしている「思い量り」、「善悪の判断」、「思考」は、「得る事は不可能である心」である。

常に使う事ができ得る渾身(の心)は、「得る事は不可能である心」である。

仏祖から法を伝えられてから今まで、「得る事は不可能である心」を会得して取っている。

未だ仏祖から法を伝えられていなければ、「得る事は不可能である心」を質問して理解して取らないし、言い表さないし、真の意味で見聞きできない。

霊感が無い文字だけの経典の似非学者の輩や、信じているが知が未だ無い声聞の類の人や、仏祖の法の言葉を聞けていない独覚の類の人は、「得る事は不可能である心」について、夢にも未だ見ないのである。

知が未だ無い声聞の類の人が、「得る事は不可能である心」について、夢にも未だ見ない証拠は、身近に有る。

徳山宣鑑は、昔、「金剛般若(波羅蜜)経」を明らめたと自称したり、「周金剛王」、「金剛般若波羅蜜経を周知している王者」と自称したりした。

徳山宣鑑は、特に、長安の青龍寺で書かれたので「青龍疏」と呼ばれる道氤の「金剛般若波羅蜜経」の注釈書を得意としていると自称した。

徳山宣鑑は、「金剛般若波羅蜜経」の注釈書を抜粋して「十二担」という量の書籍にまとめて、肩を並べる事ができる講者がいないかの様であったが、霊感が無い文字だけの似非学者の一人に過ぎなかった。

ある時、徳山宣鑑は、南方に、正統に代々伝わる無上の仏法が有ると聞いて、不満を我慢できず、「金剛般若波羅蜜経」の注釈書を持って山や川を渡って行った。

そして、徳山宣鑑は、龍潭崇信の会に出会った。

徳山宣鑑は、龍潭崇信の会に身を投じようと赴き、途中で休息した。

そうしていると、老婦人が来て、道の傍らで休息した。

そこで、徳山宣鑑は、「あなたは、何をされている人なんですか?」と質問した。

老婦人は、「私は餅を売っております」と言った。

徳山宣鑑は、「私に餅を売ってください」と言った。

老婦人は、「和尚様、餅を買って、どうするのですか?」と言った。

徳山宣鑑は、「餅を買って『点心』、『軽食』にします」と言った。

老婦人は、「和尚様が、たくさん持っている物は何ですか?」と言った。

徳山宣鑑は、「あなたは聞いた事がありませんか?

私は『周金剛王』、『金剛般若波羅蜜経を周知している王者』なのです。
私は『金剛般若波羅蜜経』が得意で通達していない所がありません。
私が今、持っているのは、『金剛般若波羅蜜経』の解釈書です」と言った。
老婦人は、徳山宣鑑の言葉を聞いて、「私には一つ質問が有ります。和尚様、質問を許してくれますか？　駄目ですか？」と言った。
徳山宣鑑は、「許しますとも。心に任せて質問してください」と言った。
老婦人は、「私が昔、『金剛般若波羅蜜経』を聞いた時に、『金剛般若波羅蜜経』で釈迦牟尼仏は『過去の心を得る事は不可能であるし、
現在の心を得る事は不可能であるし、
未来の心を得る事は不可能である』と言っていました。
今、どの心をどの様にして餅で点じようとしているのですか？
もし和尚様が言い得たら、餅を売ります。
もし和尚様が言い得なかったら、餅を売りません」と言った。
その時は、徳山宣鑑は、茫然として、答えを思いつかなかった。
老婦人は、袖(そで)を振って出発した。
結局、老婦人は、餅を徳山宣鑑に売らなかった。

数百巻の注釈書の主であり、数十年の講者である、徳山宣鑑は、自身が、疲れて休息していた老婦人のたった一つの質問を受けただけで、突然、言い負かされる立場に堕ちて、答える事ができない事を恨むべきである。
正しい師を見た人、正しい師から教えを受けた人、正しい法を聞けた人と、未だ正しい法を見聞きできない人は、遥かに異なるので、昔の徳山宣鑑は逸話の様に成ってしまった。

この時、徳山宣鑑は、初めて、「絵に描いた餅は、飢えを止める事ができない」と言った。

今は、徳山宣鑑は、龍潭崇信から法を嗣いだと言っている。

よくよく、徳山宣鑑が老婦人と出会った逸話を思えば、徳山宣鑑が昔は真理を明らめていなかった事は、今、聞いた通りである。

徳山宣鑑は、龍潭崇信を見た後でも、なお、老婦人を恐れていたであろう。

徳山宣鑑は、学への参入の後進の人であり、証を超越した古代の仏と等しい人ではない。

老婦人は、徳山宣鑑を沈黙させたが、本当に達道者であるか、未だに判定が困難である。

なぜなら、老婦人は、「金剛般若波羅蜜経」の「心を得る事は不可能である」という言葉を聞いて、「心は得られないので、心は存在しない」とだけ思い込んで、「どの心をどの様にして点じようとしているのか」と質問した。

もし徳山宣鑑が達道者であったならば、老婦人を見抜く力が有っただろう。

もし徳山宣鑑が老婦人を見抜いていたら、老婦人が本当に達道者であったかどうかの道理も現れただろう。

徳山宣鑑が未だ徳山宣鑑自体に成っていなかったので、老婦人が本当に達道者であったかどうかも現れなかった。

千二百四十一年の中国の僧達が、いたずらに徳山宣鑑が答えられなかった事を笑いものにして、老婦人が利口であった事をほめるのは、非常に儚いし、愚かである。

なぜなら、老婦人が明らかに疑わしいからである。

（老婦人が達道者であったならば、）徳山宣鑑が言い得なかった時に、なぜ老婦人は、徳山宣鑑に向かって「和尚様は今は言い得ない様ですね。では、私に質問してください。

逆に、私が和尚様のために言いましょう」と言わなかったのか？

もし老婦人が、このように言って、徳山宣鑑の質問を得て、徳山宣鑑に向かって正しい言葉を言ったならば、老婦人が本当に達道者である事が現れる。

老婦人は、たとえ質問を表せても、未だ言えた真理の言葉が無い。

昔から、未だ真理を一言も言い表せない人を達道者と呼んだ事は無い。

いたずらに自称に終始しても益が無い事は、昔の徳山宣鑑によって見聞きできる。

未だ言えた真理の言葉が無い者を達道者と呼ぶ事は許されない事は、老婦人によって知る事ができる。

試しに、徳山宣鑑に代わって言ってみよう。

老婦人が、「私が昔、『金剛般若波羅蜜経』を聞いた時に、『金剛般若波羅蜜経』で釈迦牟尼仏は『過去の心を得る事は不可能であるし、現在の心を得る事は不可能であるし、未来の心を得る事は不可能である』と言っていました。今、どの心をどの様にして餅で点じようとしているのですか？ もし和尚様が言い得たら、餅を売ります。もし和尚様が言い得なかったら、餅を売りません」と質問を表したら、徳山宣鑑は、老婦人に向かって、「あなたが『心は得られないので、心は存在しない』と誤解しているならば、私に餅を売る事なかれ」と言うべきである。

もし徳山宣鑑が、このように言っていたならば、学に参入した利発な人であっただろう。

老婦人は、徳山宣鑑に「『過去の心を得る事は不可能であるし、現在の心を得る事は不可能であるし、未来の心を得る事は不可能である』。今、餅で、どの心を点じようとしているのか？」と質問して、(徳山宣鑑が沈黙してしまったら、)徳山宣鑑に向かって「和尚様は、ただ、餅は心を点じる事はできない事だけを知っていて、心は餅を点じる事を知らないし、心は心を点じる事を知らない」と言うべきであった。

そう言われたら、必ず、徳山宣鑑は思いを巡らすであろう。

まさに徳山宣鑑が思考している時に、老婦人は、(過去、現在、未来の象徴である)三枚の餅をひねってから、三枚の餅を徳山宣鑑に渡して与えるべきであった。

徳山宣鑑が取ろうと思考した時に、老婦人は、「過去の心を得る事は不可能であるし、現在の心を得る事は不可能であるし、未来の心を得る事は不可能である」と言うべきであった。

もし徳山宣鑑が手を伸ばして取ろうと思わない様であれば、(自分、心の象徴である)一枚の餅をひねって、徳山宣鑑を軽く叩いて、「魂、心の無い屍よ、茫然とするなかれ」と言うべきであった。

老婦人が、このように言って、徳山宣鑑が何か言えば善いし、徳山宣鑑が何も言えない時には、老婦人は、徳山宣鑑のために更に何か言うべきであった。

しかし、実際は、老婦人は、ただ、袖(そで)を振って去ってしまった。

老婦人の袖(そで)の中に蜂がいたとも思えない。

徳山宣鑑も、「私は何も言う事ができない。老婦人よ、私のために何か言ってください」とも言わなかった。

つまり、老婦人は言うべき事を言わなかった、だけではなく、徳山宣鑑も質問するべき事を質問しなかった。

憐れむべきである。

徳山宣鑑と老婦人。

過去の心と未来の心。

質問を表す事と、真理を言い表す事。

未来の心は、徳山宣鑑と老婦人、過去の心と未来の心、質問を表す事と真理を言い表す事を得る事は不可能であるばかりである。

徳山宣鑑は、以降も、さしたる悟りが有ったとも見えない。

徳山宣鑑は、ただ、荒々しい一時的な思考をするばかりであった。

久しく龍潭崇信にたずねれば、頭の角に触れて折る様な事も無ければいけないし、黒竜の顎(あご)の下の宝玉の様な真理を正しく伝えられる機会にも出会わなければいけない。

しかし、龍潭崇信が紙の蝋燭(ロウソク)の明かりの火を吹き消して見せた時に徳山宣鑑が何かを悟った、という逸話を見聞きするだけである。

徳山宣鑑は、仏法という灯を伝えるには力不足である。

学に参入した僧は、必ず、学ぶ事に努めて労苦するべきである。

楽に学んでしまうのは、正しくない。

学ぶ事に努めて労苦する人は、仏祖である。

「得る事は不可能である心」とは、絵に描いた一枚の餅を買うのをいじくりまわす様に学び、一口（ひとくち）でかぶりついて口（くち）に入れる様に学び、味わい尽す様に学ぶ心を言うのである。

正法眼蔵　心不可得(得る事は不可能である心)

その時、千二百四十一年、夏、雍州の宇治郡の観音導利興聖宝林寺で僧達に話した。

心不可得

「得る事は不可能である心」とは、諸仏である。

諸仏は、「得る事は不可能である心」が無上普遍正覚である、と自らに保持させせ任せてきている。

「金剛般若波羅蜜経」で、釈迦牟尼仏は、「過去の心を得る事は不可能であるし、現在の心を得る事は不可能であるし、未来の心を得る事は不可能である」と言っているが、諸仏である「得る事は不可能である心」が自らに保持させ任せてきている物を形成して現しているのである。

三界は「得る事は不可能である心」であるし、「諸法」、「全てのもの」は「得る事は不可能である心」であると、諸仏は自らに保持させせ任せてきているのである。

「得る事は不可能である心」を明らめて自らに保持させせ任せる事は、諸仏に習わなければ証を取れず、諸々の祖師に習わなければ正しく伝えてもらえないのである。

諸仏に習うというのは、仏の「三十二相」の一丈六尺、四メートル八十センチの身に習い、「一茎草」、「一本の草」に習う事である。

(僧達と歩いている時に、釈迦牟尼仏が手で地を指して「ここに寺を建てると善い」と言ったので、帝釈天が「一茎草」、「一本の草」を移して植えて「寺を建て終わりました」と言うと、釈迦牟尼仏は微笑んだ、という話が有る。)

諸々の祖師に習うというのは、「皮肉骨髄」、「理解」に習い、(釈迦牟尼仏の「拈華瞬目」、「華をひねる事と目の瞬き」に対する)初祖の迦葉の「破顔微笑」に習う事である。

その主旨は、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を明らかに正しく伝えられてきている祖師を訪ねて習えば、仏から仏へ、祖師から祖師への心の印を直接的に指し示されてきて正統に代々、単一に伝えられている祖師を訪ねて習えば、必ず、仏祖の「骨髄」、「理解」と「面目」、「有様（ありよう）」を伝えられて、仏祖の「身体髪膚」、「実体」を受ける事に成る。

仏道を習わず、祖師から法を伝えられていない人は、見聞きできず、会得して取れず、質問して理解して取れた法に及ぶ事ができず、真理の言葉を選び取る事ができる分際であるとは夢にも未だ見れない所である。

徳山宣鑑は、昔、達道者ではなかった時に、「金剛般若(波羅蜜)経」を得意としていた。

当時の人々は、徳山宣鑑を「周金剛王」、「金剛般若波羅蜜経を周知している王者」と呼んだ。

なぜなら、徳山宣鑑は、八百人余りの「金剛般若波羅蜜経」の専門家の中の王者だった。

徳山宣鑑は、特に、長安の青龍寺で書かれたので「青龍疏」と呼ばれる道氤の「金剛般若波羅蜜経」の注釈書を得意としていただけではなく、「金剛般若波羅蜜経」の注釈書を抜粋して「十二担」という量の書籍にまとめた。

徳山宣鑑に肩を並べる事ができる講者はいなかった。

ある時、徳山宣鑑は、南方に、正統に代々伝わる無上の仏道が有ると聞いて、(不満を我慢できず、)「金剛般若波羅蜜経」の注釈書を持って山や川を渡って行った。

徳山宣鑑が龍潭崇信の所へ至る道の左側で休息していると、老婦人が来た。

徳山宣鑑は、「あなたは、何をされている人なんですか?」と質問した。

老婦人は、「私は餅を売っております」と言った。

徳山宣鑑は、「私に餅を売ってください」と言った。

老婦人は、「和尚様、餅を買って、どうするのですか?」と言った。

徳山宣鑑は、「餅を買って『点心』、『軽食』にします」と言った。

老婦人は、「和尚様が、たくさん持っている物は何ですか?」と言った。

徳山宣鑑は、「あなたは聞いた事がありませんか?

私は『周金剛王』、『金剛般若波羅蜜経を周知している王者』なのです。

私は『金剛般若波羅蜜経』が得意で通達していない所がありません。

私が持っているのは、『金剛般若波羅蜜経』の解釈書です」と言った。

老婦人は、徳山宣鑑の言葉を聞いて、「私には一つ質問が有ります。和尚様、質問を許してくれますか? 駄目ですか?」と言った。

徳山宣鑑は、「許しますとも。心に任せて質問してください」と言った。

老婦人は、「私が昔、『金剛般若波羅蜜経』を聞いた時に、『金剛般若波羅蜜経』で釈迦牟尼仏は『過去の心を得る事は不可能であるし、

現在の心を得る事は不可能であるし、

未来の心を得る事は不可能である』と言っていました。

今、餅で、どの心を点じようとしているのですか?

もし和尚様が言い得たら、餅を売ります。

もし和尚様が言い得なかったら、餅を売りません」と言った。

その時は、徳山宣鑑は、茫然として、答える事ができなかった。
老婦人は、袖(そで)を振って出発した。
結局、老婦人は、餅を徳山宣鑑に売らなかった。

数百巻の注釈書の主であり、数十年の講者である、徳山宣鑑は、自身が、疲れて休息していた老婦人のたった一つの質問を受けただけで、速やかに言い負かされる立場に堕ちた事を恨むべきである。

師から教えを受けた事が有る人と無い人、正しい師から法を伝えられた事が有る人と無い人は、遥かに異なるので、こう成ってしまった。

「心を得る事は不可能である」という言葉を聞いて、徳山宣鑑と老婦人は共に同じく、「心を得る事はできない(ので、心は存在しない)」とだけ誤解したために、活路が無い。

また、「心を得る事は不可能である」と言うのは、「本(もと)から備わっているから」言っている、と誤って思う人もいるが、全く的外れである。

この時、初めて、徳山宣鑑は、「絵に描いた餅は、飢えを止める事ができない」と知った。

また、徳山宣鑑は、仏道を修行するには、必ず、達道者に会うべきである、と思い知った。

また、徳山宣鑑は、いたずらに経典にだけ関わっても、真の力を得る事ができない、と思い知った。

最終的に、徳山宣鑑は、龍潭崇信の所へ行って、師弟の道が形成されて現れたので、正に、達道者に成った。

今は、徳山宣鑑は、雲門宗と法眼宗の高祖である、だけではなく、この世と天上での導師である。

徳山宣鑑の逸話を考えると、昔は徳山宣鑑が真理を明らめていなかった事は、徳山宣鑑の逸話を見聞きした通りである。

老婦人は徳山宣鑑を沈黙させたが、老婦人が達道者であるかは判定が困難である。

老婦人は、「金剛般若波羅蜜経」での釈迦牟尼仏の「心を得る事は不可能である」という言葉を聞いて、誤って「心は存在しない」とだけ思い込んで、徳山宣鑑に質問したと思われる。

徳山宣鑑が達道者であれば、考える力が有ったであろう。

徳山宣鑑に達道者としての考える力があれば、老婦人が達道者であったかどうかも見聞きできたが、徳山宣鑑自体ではなかった時だったので、老婦人が達道者であったかどうかも知る事ができず、見聞きできない。

また、「老婦人は達道者ではない」と明らかに疑うのは、理由が無い訳(わけ)ではない。

(老婦人が達道者であったならば、)徳山宣鑑が言い得なかった時に、なぜ老婦人は、徳山宣鑑に向かって「和尚様は今は言い得ない様ですね。では、私に質問してください。逆に、私が和尚様のために言いましょう」と言わなかったのか？

そうして、徳山宣鑑の質問を得て、徳山宣鑑に向かって真理を言う事が有れば、老婦人が真の達道者である力も現れたであろう。

この様に、古代人の達道者の「骨髄」、「理解」、古代人の達道者の「面目」、「有様(ありよう)」、古代の仏の光明、古代の仏が現す喜ばしい徴には同一の師に参入する鍛錬が有って、達道者は徳山宣鑑、老婦人、「得る事は不可能で

あるもの」、「得る事は可能であるもの」、餅、心をつかむのにも放すのにも煩(わずら)わされない。

仏の心は、過去、現在、未来である。

心と過去、現在、未来は、少しも離れていないと言えるが、離れている事を論じると、「十万八千里」を超える深遠が有る。

「過去の心とは、どの様な物であるか?」と言う人には、「過去の心とは、得る事は不可能な物である」と言いなさい。

「現在の心とは、どの様な物であるか?」と言う人には、「現在の心とは、得る事は不可能な物である」と言いなさい。

「未来の心とは、どの様な物であるか?」と言う人には、「未来の心とは、得る事は不可能な物である」と言いなさい。

「心とは、得る事は不可能な物である」という言葉の意味は、「暫定的に、得る事が不可能な物を心と呼んでいる」と言っている訳(わけ)ではなく、「暫定的に、心は、得る事は不可能な物である」と言っているのである。

「心は、得る事が不可能である」とは言わず、ひとえに、「心は、得る事は不可能である」と言うのである。

「心は、得る事が可能である」とは言わず、ひとえに、「心は、得る事は不可能である」と言うのである。

また、「『過去の心は、得る事は不可能な物である』とは、どういう事であるか?」と言われたら、「生死は、去ったり来たりする」と言いなさい。

「『現在の心は、得る事は不可能な物である』とは、どういう事であるか?」と言われたら、「生死は、去ったり来たりする」と言いなさい。

「『未来の心は、得る事は不可能な物である』とは、どういう事であるか？」と言われたら、「生死は、去ったり来たりする」と言いなさい。
牆壁や瓦礫である仏の心が存在する。
過去、現在、未来の諸仏は、共に、「牆壁や瓦礫である仏の心は、得る事は不可能な物である」と証する。
仏の心である牆壁や瓦礫だけが存在する。
仏の心である牆壁や瓦礫は、「仏の心である牆壁や瓦礫は、(真の意味で)得る事は不可能な物である」と過去、現在、未来の諸仏に証する。
まして、仏の心は山河や大地である。
山河や大地は、(真の意味で)得る事は不可能な物自体である。
草木や風や水である「(真の意味で)得る事は不可能な物」とは、心である。
また、「住んではいないが、心を生じるもの」は、「得る事は不可能な物」である。
また、十方の諸仏は一代で八万の法の門を説く。
得る事は不可能である心は、十方の諸仏が一代で八万の法の門を説く様な事である。

三十三祖の大鑑禅師の弟子である大証国師と呼ばれる南陽慧忠がいた時、大耳三蔵という人が、遥かな西のインドから中国の首都へ来て、他心通を会得していると自称した。
唐の時代の中国の皇帝の粛宗は、南陽慧忠に命じて大耳三蔵を試させた。
大耳三蔵は、南陽慧忠に会うと、速やかに、南陽慧忠を礼拝して右に立った。

南陽慧忠は、「あなたは他心通を会得していますか？　どうですか？」と質問した。
大耳三蔵は、「あえて言うまでも無く、他心通を会得している」と言った。
南陽慧忠は、「今、私(の心)が、どこに存在するのか、言ってください」と言った。
大耳三蔵は、「和尚様は一国の師であるのに、西川へ行って、競って渡っている船を見ている」と言った。
南陽慧忠は、少ししてから、「今、私(の心)が、どこに存在するのか、言ってください」と再び質問した。
大耳三蔵は、「和尚様は一国の師であるのに、天津橋の上へ行って、猿の芸を見ている」と言った。
南陽慧忠は、「今、私(の心)が、どこに存在するのか、言ってください」と再び質問した。
大耳三蔵は、少ししても、知る事ができず、何も見えなかった。
南陽慧忠は、「この『野狐の精霊』め、あなたの他心通は、どこに存在するのか？」と叱った。
大耳三蔵は、また、答える事ができなかった。

南陽慧忠の逸話は、知らないのはいけないし、聞かないのは御粗末である。
仏祖(である南陽慧忠)と大耳三蔵は、等しくなく、天と地ほど、かけ離れている。
仏祖(である南陽慧忠)は仏法を明らめており、大耳三蔵は仏法を未だ明らめていない。

実に、「三蔵」、「経典の学者」には在俗の人も成る事ができる。例えば、文明の華やかな所で経典の学者の地位を得た人がいた様に。

そのため、大耳三蔵は、インドや中国の言語を広く明らめているだけではなく他心通までも修得しているといえども、仏道の身心については夢にも未だ見なかったので、仏祖の位を証している南陽慧忠に見(まみ)えたら、南陽慧忠に見抜かれたのである。

仏道で心を習うと、「万法即心」、「全てのものは心である」。

「三界唯心」、「三界は唯一の心である」。

唯一の心とは唯一の心である。

「是仏即心」、「仏とは(正しい)心である」。

たとえ自分の心でも、たとえ他者の心でも、仏道の心を誤らないべきである。

いたずらに、西川に流れ落ちるべきではないし、天津橋に思いを走らせるべきではない。

仏道の身心を保持して任せられるには、仏道の「智通」、「知と理解」を学ぶべきである。

仏道では、地の全ては心である。

発生と消滅で、心は改まらない。

全ての法、全てのものは心である。

「心を尽くす事が『智通』、『知と理解』である」とも学ぶべきである。

大耳三蔵は、心を見る事ができなかった。

大耳三蔵は、「野狐の精霊」でしかない。

そのため、大耳三蔵は、西川と天津橋という最初の二度の答えの時も、南陽慧忠の心を見る事はできていなかったし、他心通で南陽慧忠の心に通じていなかった。

大耳三蔵は、いたずらに西川と天津橋、競っている渡っている船と猿の芸だけと戯れている「野狐の精霊」の子である。

どうして大耳三蔵が南陽慧忠の心を見る事ができるだろうか？　いいえ！大耳三蔵は、南陽慧忠の心を見る事ができない！

また、南陽慧忠の心が、どこに存在するのか、大耳三蔵は見る事ができない道理は明らかである。

南陽慧忠が「今、私(の心)が、どこに存在するのか？」と三度も質問しても、大耳三蔵は南陽慧忠の言葉を聞いて理解できていなかった。

もし大耳三蔵が南陽慧忠の「今、私(の心)が、どこに存在するのか？」という言葉を聞いて理解できていたら、尋ねたはずである。訊(き)かなければ誤るからである。

もし大耳三蔵が仏法を習った事が有れば、南陽慧忠の「今、私(の心)が、どこに存在するのか？」という言葉を聞いて理解して南陽慧忠の身心を見る事ができたかもしれない。

日頃、仏法を習わないために、「この世」に生まれて「この世」の人と天上の天人の導師に会っても、いたずらに通り過ぎてしまうのである。憐れむべきである。悲しむべきである。

霊感が無い文字だけの経典の似非学者が、どうして仏祖の(心の)有様(ありよう)を知る事ができるだろうか？　どうして(仏祖である)南陽慧忠の心の境地を知る事ができるであろうか？　いいえ！　できない！

まして、西のインドの経典の似非学者は絶対に(仏祖である)南陽慧忠の(心の)有様を知る事ができない。

霊感が無い文字だけの経典の似非学者が知る事ができる事は、帝釈天も知る事ができるし、真の経典の学者も知る事ができる。

真の経典の学者と帝釈天が知る事ができる事は、来世で仏に成れる修行者の知力は知る事ができるし、未熟な修行者も知る事ができる。

しかし、(仏祖である)南陽慧忠の身心は、帝釈天も知る事ができないし、来世で仏に成れる修行者も未だ明らめる事ができないのである。

仏の家で身心を論じると、仏祖の身心は、帝釈天も、来世で仏に成れる修行者も知る事ができない。

知るべきである。

信じるべきである。

私、道元の大いなる師である釈迦牟尼仏の法は、独覚の法、声聞の法、外道等の「野狐の精霊」の法とは異なる。

さて、南陽慧忠の逸話について、古くから諸々の代の長老は各々、参入して究めていて、話が残されている。

ある僧が、趙州真際大師に「大耳三蔵は、なぜ、三度目で、南陽慧忠(の心)が、どこに存在するのか見る事ができなかったのか?」と質問した。

趙州真際大師は、「南陽慧忠が大耳三蔵の鼻の孔の上にいたので、大耳三蔵は南陽慧忠(の心)を見る事ができなかった」と言った。

ある僧が、玄沙師備に「南陽慧忠が大耳三蔵の鼻の孔(あな)の上にいたのに、なぜ大耳三蔵は南陽慧忠(の心)を見る事ができなかったのか?」と質問した。

玄沙師備は、「近過ぎたからである」と言った。

海会寺の白雲守端は、「もし南陽慧忠が大耳三蔵の鼻の孔(あな)の上にいたならば、どうして見難い事が有るだろうか?　いいえ!　ただ、大耳三蔵は南陽慧忠(の心)が大耳三蔵の『見る眼』の中にいる事を知らなかったのである」と言った。

また、玄沙師備は、大耳三蔵を非難して、「大耳三蔵は、一度目と二度目も南陽慧忠(の心)を見る事ができていたのか?　いいえ!」と言った。

雪竇重顕は、「(大耳三蔵は、一度目も南陽慧忠に)敗(やぶ)れているし、(二度目も南陽慧忠に)敗(やぶ)れている」と言った。

ある僧が、仰山慧寂に「なぜ、大耳三蔵は、三度目は、少ししても、南陽慧忠(の心)が、どこに存在するのか見る事ができなかったのか?」と質問した。

仰山慧寂は、「大耳三蔵は、一度目と二度目は『渉境心』を見た。三度目は南陽慧忠(の心)が『自受用三昧』に入ったので見る事ができなかった」と言った。

趙州真際大師、玄沙師備、白雲守端、雪竇重顕、仰山慧寂という五人の長老は、『諦当』、『真理を探り当てた人』ではあるが、南陽慧忠(の心)の有様(ありよう)は見過ごしている。

「大耳三蔵は、三度目だけ、南陽慧忠(の心)を知る事ができなかった」とだけ論じていて、「大耳三蔵は、一度目と二度目は、南陽慧忠(の心)を知る事ができた」と許しているのに似ている。古代の先人の誤りである。後進の者が知っておくべき所である。

私、道元が今、五人の長老の言葉を明らかに疑っている理由は二つ有る。

一つ目は、南陽慧忠が大耳三蔵を試した意味を知らない事である。

二つ目は、南陽慧忠の身心を知らない事である。

南陽慧忠が大耳三蔵を試した意味を知らないと言うのは、一度目に南陽慧忠が「今、私(の心)が、どこに存在するのか、言ってください」と言った事である。

南陽慧忠の「今、私(の心)が、どこに存在するのか、言ってください」という言葉の意味は、もし大耳三蔵に「仏法を知っているか? 未だ知らないのか?」と試して質問した時、もし大耳三蔵が仏法を聞いた事があれば、南陽慧忠の「今、私(の心)が、どこに存在するのか?」という言葉を聞いて、仏法に習うべきであった、という事である。

仏法に習うというのは、南陽慧忠の「今、私(の心)が、どこに存在するのか?」という言葉が、

「この辺に存在するのか?」、

「あの辺に存在するのか?」、

「無上の覚に存在するのか?」、

「知の到達に存在するのか？」、

「空に懸(か)かっているのか？」、

「地に立っているのか？」、

「草の屋根の小さな質素な庵(いおり)に存在するのか？」、

「『宝が存在する所』、『悟り』に存在するのか？」と質問する事である。

大耳三蔵は、南陽慧忠の「今、私(の心)が、どこに存在するのか？」という言葉の意味を知らず、いたずらに凡人、仏ではない人としての見解を言った。

南陽慧忠は、「今、私(の心)が、どこに存在するのか？」と、くり返し質問した。

ここでも、大耳三蔵は、更に、いたずらな言葉を言った。

南陽慧忠は、「今、私(の心)が、どこに存在するのか？」と、くり返し質問した。

この時、大耳三蔵は、少ししても、物を言えず、茫然とした心地に成った。

その時、南陽慧忠は、「この『野狐の精霊』め、あなたの他心通は、どこに存在するのか？」と大耳三蔵を叱った。

この様に言われても、大耳三蔵は、なお、言う事ができなかった。

よくよく、南陽慧忠の逸話を考えると、古代の先人は、共に、誤って「大耳三蔵は一度目と二度目は南陽慧忠の(心の)存在する場所を知る事ができたが、三度目は知る事ができなかったので、南陽慧忠は大耳三蔵を叱った」と思っている。

しかし、そうではない。

南陽慧忠は、大耳三蔵が「野狐の精霊」の分際で仏法は夢にも未だ見た事が無いのを叱ったのである。

南陽慧忠は、「大耳三蔵が一度目と二度目は南陽慧忠の(心の)存在する場所を知る事ができたが、三度目は知る事ができなかった」とは言っていない。

南陽慧忠が叱ったのは、大耳三蔵の一度目、二度目、三度目の全てを叱ったのである。

南陽慧忠の心は、まず仏法を他心通と言う事が有るか否かとも思ったであろう。

たとえ仏法を他心通と言うとしても、

「他」も、仏道で習った「他」を挙げて言うべきであるし、

「心」も、仏道で習った「心」を挙げて言うべきであるし、

「通」も、仏道で習った「通」を挙げて言うべきであるのに、

大耳三蔵が言った言葉は、かつて仏道で習った物ではないので、南陽慧忠は、「どうして大耳三蔵の言葉は仏法であると言えようか？　いいえ！　大耳三蔵の言葉は仏法であると言えない！」と思ったであろう。

「南陽慧忠は、大耳三蔵を試した」と言うのは、たとえ三度目に大耳三蔵が何か言ったとしても、一度目と二度目と同様であれば、大耳三蔵の言葉は仏法の道理ではないため、大耳三蔵の言葉は南陽慧忠の本意ではないので、南陽慧忠は大耳三蔵を叱ったのである。

南陽慧忠が三度も明らかに質問したのは、南陽慧忠は「もしかしたら大耳三蔵は私の言葉を聞く耳を持つ事が有るかもしれない」と思って三度もくり返し明らかに質問したのである。

「道元が五人の長老の言葉を疑っている理由の二つ目が、南陽慧忠の身心を知らない事である」と言うのは、「南陽慧忠の身心は、大耳三蔵は知る事ができず通じて理解する事ができない物であるし、未熟な修行者も知る事ができないし、来世で仏に成れる修行者や最高の修行者も明らめる事ができないので、どうして凡人の大耳三蔵が知る事ができるだろうか？　いいえ　知る事ができない！」という事である。

大耳三蔵が南陽慧忠の身心を知る事ができない道理を明らかに決定的に確信するべきである。

誤って「大耳三蔵は南陽慧忠の身心を知る事ができる」と思考する人は、自らが既に南陽慧忠の身心を知らないからである。

誤って「他心通を得た輩は南陽慧忠の身心を知る事ができる」と言うならば、「独覚と声聞は(仏祖である)南陽慧忠の身心を知る事ができる」とも思っているのか？

独覚と声聞は、(仏祖である)南陽慧忠の身心を知る事ができない。

独覚と声聞は、絶対に(仏祖である)南陽慧忠の(心の)境地を知る事ができない。

「法華経」などの「大乗経」を読む独覚と声聞は多いが、独覚と声聞は(仏祖である)南陽慧忠の身心を知る事ができない。

独覚と声聞は、仏法の身心を夢にも見る事ができない。

たとえ「法華経」などの「大乗経」を朗読している様でも、「独覚と声聞は全く仏ではない」と明らかに知るべきである。

(仏祖である)南陽慧忠の身心は、神通を修行して神通という証を得た輩が知る事ができない物である。

(仏祖である)南陽慧忠の身心は、(仏祖である)南陽慧忠ですら測り難いであろう。

なぜなら、(仏祖である)南陽慧忠の(心の)有様は、久しく仏に成る事を意図していないので、仏の眼も見る事ができないからである。

また、(仏祖である)南陽慧忠の(心の)動きは、遥かに悪の巣窟を脱ぎ落としているし、鳥かごにとらわれないからである。

今、五人の長老の言葉を、共に見抜こう。

趙州真際大師は、「南陽慧忠が大耳三蔵の鼻の孔の上にいたので、大耳三蔵は南陽慧忠(の心)を見る事ができなかった」と言った。

この趙州真際大師の話は何を言っているのか?

重要な物を明らめずに些細な物を言うと、この様に誤るのである。

どうして南陽慧忠が大耳三蔵の鼻の孔の上にいるだろうか？　いいえ！いない！

なぜなら、大耳三蔵には(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔が無い。

また、南陽慧忠と大耳三蔵は、見合う手段が有る様でも、近づく道が無い。

明らかな「見る眼」を持つ人は、正に、わきまえて受け入れなさい。

玄沙師備は、「近過ぎたからである」と言った。

実に、近過ぎたら、そういう事も有るが、この場合は当たってはいない。

どういう事を「近過ぎる」と言うのか？

なぜ「近過ぎる」という言葉を挙げたのか？
玄沙師備は、「近過ぎる」という事を未だ知らず、「近過ぎる」という事に参入していない。
玄沙師備は、仏法については、遠過ぎる。

仰山慧寂は、「大耳三蔵は、一度目と二度目は『渉境心』を見た。三度目は南陽慧忠(の心)が『自受用三昧』に入ったので見る事ができなかった」と言った。

仰山慧寂は、「小釈迦」という称号が西方にまで高く響いているが、この仰山慧寂の言葉は正しくない。
「『渉境心』という手段で必ず心を見るのである」と言ってしまっては、仏祖が見る手段が無くなってしまう様な物である。
成仏の予言を授かる功徳を習っていない様である。
「大耳三蔵は、一度目と二度目は、南陽慧忠(の心)が存在する場所を知る事ができた」と言う人は、南陽慧忠の功徳を少しも知らない人である、と言える。

また、玄沙師備は、大耳三蔵を非難して、「大耳三蔵は、一度目と二度目も南陽慧忠(の心)を見る事ができていたのか？　いいえ！」と言った。
この玄沙師備の言葉は、言うべき事を言っている様ではあるが、「見えていても見えていない様であった」と言おうとしているので、正しくない。

この玄沙師備の言葉を聞いて、雪竇重顕は、「(大耳三蔵は、一度目も南陽慧忠に)敗(やぶ)れているし、(二度目も南陽慧忠に)敗(やぶ)れている」と言った。

この雪竇重顕の言葉は、この玄沙師備の言葉が正しい時には言うべきであるが、この玄沙師備の言葉が正しくない時は言うべきではない。

白雲守端は、「もし南陽慧忠が大耳三蔵の鼻の孔(あな)の上にいたならば、どうして見難い事が有るだろうか？　いいえ！　ただ、大耳三蔵は南陽慧忠(の心)が大耳三蔵の『見る眼』の中にいる事を知らなかったのである」と言った。

白雲守端の言葉も、「三度目に、大耳三蔵は、南陽慧忠の心を見る事ができなかった」と論じている。

「一度目も二度目も、大耳三蔵は、南陽慧忠の心を見る事ができなかった」事を叱るべきなのに叱っていない。

また、仮に南陽慧忠が大耳三蔵の鼻の孔(あな)の上にいても、大耳三蔵の「見る眼」の中にいても、どうして大耳三蔵が知る事ができようか？　いいえ！　知る事はできない！

五人の長老は、いずれも南陽慧忠の功徳に暗く、仏法の道をわきまえる力が無い様に思われてしまう。

知るべきである。

南陽慧忠は、一代の仏であり、仏の「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を明らかに正しく伝えられている。

大耳三蔵といった仏ではない経典の似非学者が(仏である)南陽慧忠の心の境地を知らないのは、更なる、南陽慧忠が仏である証である。

仏ではない人が言っている「他心通」、「心を読む神通力」の様な代物は、「他念通」、「雑念を読む神通力」と言うべきである。

大耳三蔵といった仏ではない人の「他心通」、「他念通」の力は、(仏である)南陽慧忠を一端でも半端でも知る事ができると思うのは誤りである。

大耳三蔵といった仏ではない人は全て「他心通」、「他念通」で(仏である)南陽慧忠の功徳が存在する場所を見る事ができない、と、ひたすら習うべきである。

たとえ、もし大耳三蔵が一度目と二度目は南陽慧忠(の心)が存在する場所を知り、三度目は知らなかったならば、大耳三蔵には三分の二の能力が有るので、南陽慧忠は大耳三蔵を叱るべきではない。たとえ、大耳三蔵を叱っても、大耳三蔵には仏の心が全く欠けているわけではない。それなのに大耳三蔵を叱ったら、誰が南陽慧忠を信じるであろうか？

南陽慧忠が大耳三蔵を叱った意味は、大耳三蔵には全く未だ仏法の身心が無い事を叱ったのである。

五人の長老は、全く南陽慧忠の器を知らないので、この様に誤ってしまった。

このため、今、私、道元は、仏道の「得る事は不可能である心」を聞かせているのである。

「心は得る事は不可能である」という一つの法に通じて理解する事ができ得ない輩が、「他の法に通じて理解している」と言っても信じ難い。しかし、「古代の先人も、この様に、誤りに誤りを重ねていた」と知るべきである。

ある時、僧が、「古代の仏の心とは、どの様な物ですか？」と南陽慧忠に質問した。

南陽慧忠は、「(古代の仏の心とは、)牆壁や瓦礫である」と言った。

「古代の仏の心とは、牆壁や瓦礫である」という言葉も「心は得る事は不可能である」事を意味している。

ある時、僧が、「諸仏が常に住んでいる心とは、どの様な物ですか？」と南陽慧忠に質問した。

南陽慧忠は、「(諸仏が常に住んでいる心とは、)幸いにも老僧である私、南陽慧忠、仏が(俗世の)宮中に参上するのに出会う様な物である」と言った。

「諸仏が常に住んでいる心とは、幸いにも老僧である私、南陽慧忠、仏が(俗世の)宮中に参上するのに出会う様な物である」という言葉も「得る事は不可能である心」に参入して究めているのである。

ある時、帝釈天は、「どの様にしたら『有為』、『この世』を解脱できますか？」と南陽慧忠に質問した。

南陽慧忠は、「天人(である帝釈天)よ、道を修行して『有為』、『この世』を解脱しなさい」と言った。

帝釈天は、「道とは、どの様な物ですか？」と更に質問した。

南陽慧忠は、「一時的な心(、一時的な思い)が道である」と言った。

帝釈天は、「一時的な心(、一時的な思い)とは、どの様な物ですか?」と質問した。
南陽慧忠は、指で指しながら、「これは『般若台』である」、「あれは『真珠網』である」と言った。
(「これは『般若台』である」という言葉を聞いた時に、一時的な心、一時的な思いが生じる。
心自体は心自体のままだけでは得る事は不可能であるが、心が放つ思いによって心を類推する事は可能である。)
帝釈天は、礼拝した。

仏道で身心について話す事は、仏祖達の会で多い。
仏祖達の会と共に、凡人、賢者、聖者の思慮、知覚によって、仏道の身心の学に参入する訳(わけ)ではない。
「得る事は不可能である心」に参入して究めるべきである。

正法眼蔵　心不可得(得る事は不可能である心)

千二百四十一年、夏、興聖宝林寺で書いた。

古鏡

諸々の仏祖が受けて保持し単一に伝えるのは、「古鏡」、「古くから鏡としているもの」である。

「古くから鏡としているもの」は、同一の面を現すし、同一のものを象(かたど)り鋳造(の様に複製)するし、同一の参入を証する。

「古くから鏡としているもの」が、未開の人が来れば、未開の人を現すのは、「十万八千里」である。

「古くから鏡としているもの」が、中国人といった文明人が来れば、中国人といった文明人を現すのは、「一念万年」である。

「古くから鏡としているもの」は、古いものが来れば、古いものを現すし、
「古くから鏡としているもの」は、今のものが来れば、今のものを現すし、
「古くから鏡としているもの」は、仏が来れば、仏を現すし、
「古くから鏡としているもの」は、祖師が来れば、祖師を現す。

十八祖の伽耶舎多は、中国の西方の摩提国の人である。姓は鬱頭藍、父の名は天蓋、母の名は方聖である。

伽耶舎多の母は夢見で「一人の大神が大きな鏡を持って鏡に向かっている」のを見た時に懐胎し七日して伽耶舎多を産んだ。

伽耶舎多は、生まれた時、体の肌が磨いた瑠璃の様であり、入浴させて洗浄していなかったにもかかわらず自然と良い香りがして清潔であった。
伽耶舎多は、幼い時から閑静を好み、言う事が普通の幼子とは異なった。
伽耶舎多が生まれた時に一つの清浄な明るい「円鏡」、「円形の鏡」が自然と、共に生じた。伽耶舎多は生まれた時から円鏡と共に生きた。世にも稀な事である。
「伽耶舎多が生まれた時に円鏡が共に生じた」と言うのは、伽耶舎多の母が円鏡も産んだという事ではなく、伽耶舎多が母の胎内から生まれ出たと同時に円鏡が来て、円鏡が自然に純真に伽耶舎多の近くで目の前に現れて、円鏡が伽耶舎多の常日頃の「調度品」、「日常の道具」の様に成ったのである。

伽耶舎多の円鏡についての事柄は普通ではなかった。
幼子の伽耶舎多が向かって来る時は、伽耶舎多が円鏡を両手で捧げて来ているかの様に円鏡は動くけれども、円鏡には伽耶舎多の顔が隠れないで映っていた。
幼子の伽耶舎多が去って行く時は、伽耶舎多が(鏡面を後ろに向けて)円鏡を背負って去って行くかの様に円鏡は動くけれども、円鏡には幼子の伽耶舎多の身体が隠れないで映っていた。
幼子の伽耶舎多が眠っている時は、円鏡は伽耶舎多の上で伽耶舎多を覆った。例えば、「華蓋」の様に。
幼子の伽耶舎多が正しく坐っている時は、円鏡は伽耶舎多の面前に存在した。
伽耶舎多の円鏡は、伽耶舎多の動静に従って動いたのである。

それだけではなく、古来からの仏事と今の仏事のことごとくを伽耶舎多の円鏡に面と向かって見る事ができ得た。

また、天上と、（「この世」の）人の間の、全ての事、「諸法」、「全てのもの」は皆、伽耶舎多の円鏡に浮かんで曇る事が無かった。

例えば、経典に向かって古今に照らして知を得るよりも、伽耶舎多の円鏡によって見るのは明らかであった。

しかし、伽耶舎多が出家して戒を受けた時から、伽耶舎多の円鏡は目の前に現れなく成った。

このため、近隣と遠方の人々は、同じく、「不思議で霊妙である」とほめた。

実に、「娑婆」、「苦しみを耐え忍ぶ場所」である「この世」で、伽耶舎多の円鏡に比類する不思議なものは少ないが、かの国インドに、人族に、伽耶舎多の様な人がいた事を疑うなかれ。

深く考慮するべきである。

正に、知るべきである。

樹や石に記された経典が有るし、田畑や集落に流布する知識が有る。

樹や石に記された経典も、田畑や集落に流布する知識も、伽耶舎多の円鏡である。

今の経典も、伽耶舎多の円鏡である。

「伽耶舎多の円鏡は、十八祖の伽耶舎多だけの稀な事物である」と誰が思うであろうか？　いいえ！　伽耶舎多の円鏡は、十八祖の伽耶舎多だけの稀な事物ではない！

ある時、十八祖の伽耶舎多は、外出して、十七祖の僧伽難提に出会って、直ぐに進んで僧伽難提の前に至った。

僧伽難提は「あなたの手中に有るのは、正に、何の表れか？」と質問した。

「僧伽難提の『何の表れか？』という言葉は単純に表した単純な質問ではない」と聞いて学に参入するべきである。

十八祖の伽耶舎多は、「諸仏の大いなる円鏡は内外に瑕も翳りも無い。二人は同じく見る事ができ得る。皆の心と眼は似ている」と言った。

諸仏の大いなる円鏡は、なぜ伽耶舎多と共に生じて共に生きたのか？

それは、伽耶舎多が生まれてから今までは、大いなる円鏡が明かしている物だからである。

諸仏は、大いなる円鏡に同じく参入して、大いなる円鏡で同じく見るのである。

諸仏は、大いなる円鏡の鋳造による(複製による鏡)像である。

大いなる円鏡は、知ではないし、理ではないし、性質ではないし、相ではない。

未熟な修行者などの法の中にも「大円鏡智」、「大いなる円鏡の知」という名前は有るが、諸仏の大いなる円鏡ではない。

必ずしも諸仏は知ではないので、諸仏には知が有り、知を諸仏としているわけではない(、と言える)。

学に参入した人は知るべきである。

知を説き表すのは、未だ仏道の究極の説ではないのである。

たとえ「『諸仏の大いなる円鏡は私と共に生きている』と見聞きした」と言ったとしても、道理が有る。

諸仏の大いなる円鏡は、今の生に接しないし、他の生に接しない。

諸仏の大いなる円鏡は、「玉鏡」、「宝玉の鏡」ではないし、銅鏡ではない。

諸仏の大いなる円鏡は、「肉」の鏡ではないし、「髄」の鏡ではない。

(諸仏の大いなる円鏡は、「皮肉骨髄」、「理解」の鏡ではない。)

「諸仏の大いなる円鏡は内外に瑕(きず)も翳(かげ)りも無い。二人は同じく見る事ができ得る。皆の心と眼は似ている」という言葉は、円鏡の言葉なのか? 幼子の伽耶舎多の説なのか?

幼子の伽耶舎多が説いたとしても、かつて人に学んで習った(受け売りの)言葉ではないし、かつての経典による言葉ではないし、かつての善知識を持つ祖師といった人々による(受け売りの)言葉ではない。

幼子の伽耶舎多は、円鏡を捧げて、「諸仏の大いなる円鏡は内外に瑕(きず)も翳(かげ)りも無い。二人は同じく見る事ができ得る。皆の心と眼は似ている」と説いたのである。

十八祖の伽耶舎多は、幼い時から、円鏡に向かうのを常としていただけである。

伽耶舎多には、生まれながらの知による、わきまえた知が有った様である。

大いなる円鏡が幼子の伽耶舎多と共に生じて共に生きてきたのか？　幼子の伽耶舎多が大いなる円鏡と共に生じて共に生きてきたのか？　正に、前後の生も有るであろう。

大いなる円鏡は、諸仏の功徳である。

「諸仏の大いなる円鏡は内外に曇（くも）りが無い」と言うのは、外に対して内があるわけではないからである。内に曇（くも）らされる外があるわけではないからである。

諸仏の大いなる円鏡は、裏表が無い。表も裏も同じく見る事ができ得る。

「心と眼は似ている」

「似ている」と言うのは、人が人に会うのである。

たとえ諸仏の大いなる円鏡の「内」の形といえども、心と眼があり、同じく見る事ができ得る。

たとえ諸仏の大いなる円鏡の「外」の形といえども、心と眼があり、同じく見る事ができ得る。

今、目の前に現れている、心と身が依り所とする環境としての報いである「この世」と、過去の行いの正に報いである心と身は、共に、内と似ている。外と似ている。

私ではないし、誰でもない。
これは、二人が見ているのである。二人が似ているのである。
彼も私だと言うし、私も彼と成る。

「皆の心と眼は似ている」と言うのは、
「心と心は似ている」のであるし、
「眼と眼は似ている」のであるし、
「似ているのは心と眼である」のである。
例えば、「各々の心と眼は似ている」と言う様な物である。

「心と心は似ている」とは、どのようなものか？
三十祖の僧璨と三十三祖の大鑑禅師である。

「眼と眼は似ている」とは、どのようなものか？
「道を見る眼は見る眼に遮られる」のである。

前記の様な事が、十八祖の伽耶舎多が会得して言い得た主旨である。
十八祖の伽耶舎多が初めて十七祖の僧伽難提に見（まみ）えた本当の理由である。

「諸仏の大いなる円鏡は内外に瑕（きず）も翳（かげ）りも無い。二人は同じく見る事ができ得る。皆の心と眼は似ている」という、十八祖の伽耶舎多が会得して言い得た主旨をひねって挙げて、大いなる円鏡の仏祖の「面」、「有様（ありよう）」の学に参入するべきである。

大いなる円鏡の仏祖の有様(ありよう)の学に参入した者は、「古くから鏡としているもの」の眷属である。

三十三祖の大鑑禅師は、かつて黄梅の山の三十二祖の弘忍の会で鍛錬していた時、次の様な詩を壁に書いて三十二祖の弘忍に示した。
「『菩提』、『覚』には本より(『菩提樹』といった)樹など無い(、と言える)。
また、『明鏡』、『曇(くも)りの無い鏡』は『台(うてな)』、『仏が坐(すわ)る蓮華の台座』ではない。
本来、無一物である。
どこに『塵(ちり)と埃(ほこり)』、『汚れたもの』は有るのか?」

三十三祖の大鑑禅師が理解して取って選び取った、この「道」、「真理」の言葉を学んで理解して取るべきである。

世の人々は「高祖である三十三祖の大鑑禅師は古代の仏と等しい」と言う。
圜悟克勤は「真に古代の仏と等しい曹谿山の三十三祖の大鑑禅師を敬礼する」と言った。
そのため、知るべきである。

高祖である三十三祖の大鑑禅師は「曇りの無い鏡」を示して「本来、無一物である。どこに『塵と埃』、『汚れたもの』は有るのか？」と示したのである。

「『曇りの無い鏡』は『仏が坐る蓮華の台座』ではない」

「『曇りの無い鏡』は『仏が坐る蓮華の台座』ではない」という言葉には命がある。

「『曇りの無い鏡』は『仏が坐る蓮華の台座』ではない」という言葉について鍛錬するべきである。

明々に明らかなものは皆、「明鏡」、「曇りの無い鏡」である。

そのため、「明頭来明頭打」、「利発な頭の者が来たら、それに合わせて軽く打って指導する」と言うのである。

どこにも無ければ、「どこ」という所は無いのである。

まして、鏡ではない一つの塵が尽十方界に残っているであろうか？　いいえ！　尽十方界の、一つの塵に至るまで鏡なのである！

鏡ではない一つの塵が鏡に残っているであろうか？　いいえ！　鏡の一つの塵に至るまで鏡なのである！

知るべきである。

尽界は「塵刹」、「塵の様に無数の国土が有る俗世」ではない。そのため、尽界は「古くから鏡としているもの」の鏡面なのである。

大慧禅師と呼ばれる三十四祖の南嶽の懐譲の会で、ある僧が「鏡が像を鋳造の様に（複製）する時、光は、どこに帰るのか？」と質問した。

南嶽の懐譲は「僧である、あなたが未だ出家していなかった時の容貌（ようぼう）は、どこに向かって去ったというのか？」と言った。

ある僧は「鏡は、像を成した後、どうして照らさないのか？」と言った。

南嶽の懐譲は「鏡は、照らさないといえども、他を一点も、だます事は有り得ない」と言った。

今、「この森羅万象は何ものである」と明らめていない時に、「森羅万象は何ものか？」と尋ねれば、「森羅万象は鏡に像を鋳造（の様に複製）させて形成させるものである」という証明は、南嶽の懐譲の言葉に有る。

「鏡は、黄金ではないし、宝玉ではないし、光明ではないし、像ではない、といえども、たちまちに像を鋳造（の様に複製）する」と、わきまえる事は、実に鏡をわきまえ究める事である。

ある僧が、「光は、どこに帰るのか？」と言ったのは、「鏡が像を鋳造の様に（複製）する」事を「鏡が像を鋳造の様に（複製）する」と理解して取って言ったのである。

例えば、「像は像の所に帰る」のであり、「像を鋳造の様に（複製）する事は、鏡を鋳造の様に（複製）できた」のである。

南嶽の懐譲が「僧である、あなたが未だ出家していなかった時の容貌（ようぼう）は、どこに向かって去ったというのか？」と言ったのは、鏡を捧げて「面」、「有様（ありよう）」を照らしたのである。

鏡が有様を照らした時、どの有様が自己の有様であるのか？

南嶽の懐譲が「鏡は、照らさないといえども、他を一点も、だます事は有り得ない」と言ったのは、「鏡は照らし得ない」のであり、「鏡は他をだます事は有り得ない」のである。

「海は枯れても底を露わにするに到らない」という学に参入するべきである。

「打破するなかれ。激しく動揺するなかれ」なのである。ではあるが、さらに学に参入するべきである。

「像をひねって鏡を鋳造(の様に複製)する」道理が有る。

まさに「像をひねって鏡を鋳造(の様に複製)する」時は、百千万の無数の鏡が照らして点々と他をだますのである。

真覚大師と呼ばれる雪峰義存は、ある時、僧達に示して「『この事』を会得しようと求めれば、私の、この中は、一つの『古鏡』、『古くから鏡としているもの』の様なものに似ているのである。未開の人が来れば、未開の人を現すし、中国人といった文明人が来れば、中国人といった文明人を現す」と言った。

その時、玄沙師備は前に出て「突然、『明鏡』、『曇りの無い鏡』が『来る』のに出会った時は、どうなるのですか？」と質問した。

雪峰義存は「未開の人も中国人といった文明人も共に隠れる」と言った。

玄沙師備は「私は『そうではない』と思います」と言った。

雪峰義存は「あなたは、どう思うのか？」と言った。
玄沙師備は「お願いします、和尚様、雪峰義存様、質問してください」と言った。
雪峰義存は「突然、『曇り(くも)の無い鏡』が『来る』のに出会った時は、どうなるのか？」と言った。
玄沙師備は「全てのものが木っ端微塵(こっぱみじん)に成る」と言った。

「雪峰義存の言葉の『この事』と言うのは何の事か？」と考えて学に参入するべきである。

また、雪峰義存の「古くから鏡としているもの」を習ってみるべきである。

「一つの『古くから鏡としているもの』の様なもの」という雪峰義存の言葉の「一つ」とは、永遠に限界が無くて(無限で)、内と外が無いのであり、「一つの珠(たま)が盤上を走る」自己である。

「未開の人が来れば、未開の人を現す」とは、一方の赤髭(あかひげ)である。

「中国人といった文明人が来れば、中国人といった文明人を現す」という言葉の「中国人」の神話では、盤古(ばんこ)が混沌で天と地を押し分けて「天と地と人」という「三才」と「木、火、土、金、水」の「五才」、「五行」が形成されて現されている、と言っている。
（
中国では五芒星に木、火、土、金、水を当てはめて五才、五行と呼んだ。

西洋では五芒星に精神と四大元素を当てはめる。

）

雪峰義存の言葉では、「古くから鏡としているもの」の功徳が「(中国人といった文明人が来れば、)中国人といった文明人を現す」のである。

「文明人」は(先天的に)「文明人」ではないので、「(中国人といった文明人が来れば、)中国人といった文明人を現す」のである。

雪峰義存の「未開の人も中国人といった文明人も共に隠れる」という言葉に言い足すと、「古鏡と明鏡といった鏡も自ら隠れる」。

玄沙師備の「全てのものが木っ端微塵に成る」という言葉は、「言えば、当然、そう言う事に成る」のではあるが、この時、玄沙師備、あなたを責める、「私に破片を返してくれ」と、また、「なぜ私に『曇りの無い鏡』を返してくれないのか？」と。

黄帝の時に、十二の鏡が有った。

黄帝の十二の鏡は、家訓では「天から授かった」と言われている。また、「崆峒山で、黄帝の師である崆峒山の仙人の広成子から与えられて授かった」とも言われている。

黄帝の十二の鏡の用い方は、一日を十二に分けた各時刻に一つの鏡を用いる。また、一年の各月に一つの鏡を用いる。十二年周期の各年に一つの鏡を用いる。

「鏡は広成子の経典である」と言われている。

広成子は、十二の鏡を黄帝に伝授する時に、「一日などは鏡である。鏡によって古今を照らして見るのである」と言った。

もし一日などが鏡でなかったら、どうして「昔」を照らして見る事ができようか？
もし一日などが鏡でなかったら、どうして「今」を照らして見る事ができようか？
一日を十二に分けた各時刻は十二の面であり、十二の面は十二の鏡である。
古今は、一日が使われている所である。
広成子は十二の鏡によって黄帝に、この様な道理を指示したのである。
これは、在俗者が理解して取った道の言葉であるといえども、「(中国人といった文明人が来れば、)中国人といった文明人を現す」一日の中の物である。

軒轅と呼ばれる黄帝は、(広成子を敬って、)ひざまずいて崆峒山へ進んで、「道」、「真理」を広成子に質問した。
その時、広成子は次の様に言った。
「『鏡』は、陰陽の本(もと)である。
身を長く久しく統治するには、自然と、天と地と人という三つの鏡が有る。
天と地と人という三つの鏡は、視えないし、聴こえない。
精神を抱(いだ)いて静めれば、形も自然と正しく成ろうとする。
必ず、精神を静めれば、精神を清めれば、あなたは、形を労する事無く、精神を動揺させる事無く、長生きできる」

昔は、天と地と人という三つの鏡をもって、天下を統治し、真理という大いなる道を統治した。

真理という大いなる道に明らかな人を天地の主とするのである。

「唐の太宗は、人を鏡とした。安全か危険か、世が治まっているか乱れているか、人という鏡によって照らして見て、ことごとく知った」と俗に言われている。

唐の太宗は、天と地と人という三つの鏡のうちの一つを用いたのである。

「人を鏡とする」と聞いて、誤って「広く見聞きしている人に古今を質問すれば、聖者や賢者の用いたものや捨てたものを知る事ができる。例えば、唐の太宗が、広く見聞きしている人として、魏徴を得ていた様に。房玄齢を得ていたように」と思う。

「人を鏡とする」事をこの様に誤解して取るのは、唐の太宗が「人を鏡とする」と会得した「道」、「真理」、「道理」ではないのである。

「人を鏡とする」と言うのは、「鏡を鏡とする」のである。

「自己を鏡とする」のである。

「『木、火、土、金、水』の『五行』を鏡とする」のである。

「『仁、義、礼、智、信』の『五常』を鏡とする」のである。

「人物の去来を見ると『来る時に跡が無いし、去る時に行方(ゆくえ)が分からない』と知って用心する」のが「人を鏡とする」道理であると言う。

賢愚が万物に有るのは、「天象」、「天体の現象」や「空模様」に似ていて、実に込み入っている。

人の面、鏡の鏡面、日面、月面(は実に込み入っているの)である。

「五嶽」、「中国の五つの山」の精霊や「四瀆」、「中国の四大河」の精霊は、時を経て、「四海」、「世界」を澄まして清めるのは、鏡の慣習である。

人物を明らめて、込み入っている事情を量(はか)るのを唐の太宗の「道」、「真理」と言うのである。

広く見聞きしている人を鏡と言うわけではないのである。

日本国には神代から三つの鏡、三つの八咫鏡が有る。

八咫鏡は、三種の神器として、八尺瓊勾玉と、草薙剣と呼ばれる天叢雲剣と共に、伝えられて来て今に至る。

三つの八咫鏡のうち、一つは伊勢の大神宮に在る。一つは紀伊国の日前社に在る。一つは「内裏」、「皇居」の内侍所に在る。

そのため、国家は皆、鏡を伝えられ保持している事は明らかである。

鏡を得たのは国を得た事に成る。

人は「三つの八咫鏡は、神の位と共に、天の神から、伝えられて来ている」と伝えている。

そのため、「百錬」、「何度も精錬」した銅の鏡も、陰陽が変化して形成している鏡なのである。
「今が来れば、今を現す」し、「昔が来れば、昔を現す」のである。
古今を照らすものは、「古くから鏡としているもの」である。

雪峰義存の「未開の人が来れば未開の人を現すし、中国人といった文明人が来れば中国人といった文明人を現す」という言葉の主旨は、「新羅の人が来れば新羅の人を現すし、日本人が来れば日本人を現す」とも言える。
「天人が来れば天人を現すし、人が来れば人を現す」とも言える。
「来れば現す」事をこの様な物として学に参入するといえども、この「現す」事は今の私達の最初から最後までを知っているわけではない。ただ、「現す」のを見るのみである。
必ずしも「『来れば現す』事は『知』である」とか「『来れば現す』事は『会得』、『理解』である」と学ぶべきではないのである。
「必ずしも『来れば現す』事は『知』や『会得』、『理解』であると学ぶべきではない」という言葉の主旨は、「『未開の人が来る』と、『未開の人を現す』事に成るというのか？　いいえ！」である。
「未開の人が来る」事は、一つの「未開の人が来る」事であるし、「未開の人を現す」事は、一つの「未開の人を現す」事である。
「現す」ために「来る」わけではない。
「古くから鏡としているもの」が、たとえ「古くから鏡としているもの」でも、この学に参入するべきである。

玄沙師備は前に出て「突然、『曇りの無い鏡』が『来る』のに出会った時は、どうなるのですか？」と質問した。

玄沙師備が選び取った言葉を尋ねて明らめるべきである。

玄沙師備は「明鏡」、「曇りの無い鏡」の「明」、「曇りが無い」という言葉で、どれだけ言い得たのか？

玄沙師備の言葉は、「『来る』のは必ずしも『未開の人』や『中国人といった文明人』ではない」という事を「曇りの無い鏡」という言葉で表現したのである。

さらに、玄沙師備は、「『未開の人』や『中国人といった文明人』を形成して現しているわけではない」と、「曇りの無い鏡」という言葉を選び取ったのである。

「『曇りの無い鏡』が『来る』」のは、たとえ「『曇りの無い鏡』が『来る』」のであっても、「曇りの無い鏡」が二つに成るわけではないのである。たとえ二つに成らなくても、「古くから鏡としているもの」は「古くから鏡としているもの」であるし、「曇りの無い鏡」は「曇りの無い鏡」である。

「古鏡」、「古くから鏡としているもの」があり、「明鏡」、「曇りの無い鏡」がある証拠は、雪峰義存と玄沙師備が選び取った言葉である。

これを仏道の性質と相とするべきである。

玄沙師備の「『曇りの無い鏡』が『来る』」という言葉、話が、「七と八に通達している」と知るべきであるし、どの面も曇りが無い事を知るべきである。

人に会うには出るべきであるし、出れば彼の人と接する事ができるであろう。

そのため、「明鏡」、「曇りの無い鏡」の「明」、「曇りが無い」事と、「古鏡」、「古くから鏡としているもの」の「古」、「古くから」とは、同じものを意味しているとするのか？　異なるものを意味しているとするのか？

「明鏡」、「曇りの無い鏡」に「古」、「古くから」の道理は有るのか？無いのか？

「古鏡」、「古くから鏡としているもの」に「明」、「曇りが無い」道理は有るのか？　無いのか？

「古鏡」（の「鏡」）という言葉によって「曇りが無いであろう」と学ぶ事なかれ。

主旨は、「私もまた、その様である」し、「あなたもまた、その様である」。

「西のインドの諸祖もまた、その様である」道理を早く鍛錬して磨くべきである。

祖師の言い得た言葉によって「古鏡は磨く事が有る」という「道」、「真理」を理解して取る事ができる。

「明鏡も磨く事が有る」のか？　どうか？

まさに、広く諸々の仏と祖師の言葉に渡る学への参入が有るべきである。

雪峰義存の「未開の人も中国人といった文明人も共に隠れる」という言葉は、「未開の人も中国人といった文明人も、『曇りの無い鏡』が『来る時』は共に隠れる」という意味である。

「共に隠れる」道理とは、どういう事か？

「未開の人も中国人といった文明人も来れば現す」ので、「古くから鏡としているもの」を遮らないのに、なぜ「共に隠れる」のか？

「古くから鏡としているもの」は、たとえ「未開の人が来れば未開の人を現すし、中国人といった文明人が来れば中国人といった文明人を現す」としても、「『曇りの無い鏡』が『来る』」事は自然と「『曇りの無い鏡』が『来る』」事なので、「古くから鏡としているもの」が「現す」未開の人も中国人といった文明人も共に隠れるのである。

そのため、雪峰義存の言葉にも「古くから鏡としているもの」が一つ有るし、「曇りの無い鏡」も一つ有るのである。

まさに、「曇りの無い鏡」が「来る」時、「古くから鏡としているもの」が「現す」未開の人と中国人といった文明人を遮らない道理を決定的に明らめるべきである。

雪峰義存が選び取った言葉である「古鏡」、「古くから鏡としているもの」は「未開の人が来れば未開の人を現すし、中国人といった文明人が来れば中国人といった文明人を現す」では、

古鏡の上に「来れば現す」とは言っていないし、

古鏡の内に「来れば現す」とは言っていないし、

古鏡の外に「来れば現す」とは言っていないし、

古鏡と共に「来れば現す」とは言っていない。

この言葉を聴き取って理解するべきである。

未開の人と中国人といった文明人を「来れば現す」時は、「古鏡の、未開の人と中国人といった文明人」を「来れば現す」のである。

「未開の人も中国人といった文明人も共に隠れる」時も、「鏡は存在するべきである」と雪峰義存の言葉を誤って会得している者は、「現す」事に暗く、「来る」事に、おろそかである。錯乱と言うだけでは済まない者である。

その時、玄沙師備は「私は『そうではない』と思います」と言った。

雪峰義存は「あなたは、どう思うのか？」と言った。

玄沙師備は「お願いします、和尚様、雪峰義存様、質問してください」と言った。

玄沙師備の「和尚様、雪峰義存様、質問してください」という言葉をいたずらに見過ごすべきではない。

和尚、雪峰義存が質問して「来る」事、玄沙師備が「和尚様、雪峰義存様、質問してください」とお願いする事は、父と子(と言える師と弟子)の気が合わなければ、どうして、こう成るであろうか？

「お願いします、和尚様、雪峰義存様、質問してください」と言う時は、その人は必ず質問されているものを会得している。

質問されるという雷が鳴ると、回避できないのである。

雪峰義存は「突然、『曇(くも)りの無い鏡』が『来る』のに出会った時は、どうなるのか？」と言った。

「突然、『曇(くも)りの無い鏡』が『来る』のに出会った時は、どうなるのか？」という質問は、父と子(と言える師と弟子)が共に参入して究める一つの「古くから鏡としているもの」である。

玄沙師備は「全てのものが木っ端微塵に成る」と言った。

「全てのものが木っ端微塵に成る」という言葉を理解して取ると、「百千万に無数に木っ端微塵に成る」と成る。

「突然、『曇りの無い鏡』が『来る』のに出会った時」は「全てのものが木っ端微塵に成る」のである。

「全てのものが木っ端微塵に成る」のに参入して会得したものは、「曇りの無い鏡」に成るであろう。

なぜなら、「曇りの無い鏡」という「道」、「真理」を会得させると、「全てのものが木っ端微塵に成る」からである。

「木っ端微塵に成る」ものは、「曇りの無い鏡」である。

「先に『木っ端微塵に成る』前の時が有り、後に別に『木っ端微塵に成らない』時が有る」と狭いものの見方で見る事なかれ。

ただ「全てのものが木っ端微塵に成る」のである。

「全てのものが木っ端微塵に成る」事との対面は、孤高の高く険しい一である。

「全てのものが木っ端微塵に成る」という言葉は、「古くから鏡としているもの」の事であると理解して取るのか？　「曇りの無い鏡」の事であると理解して取るのか？

更に心を一転させる言葉を求めるべきである。

「全てのものが木っ端微塵に成る」という言葉は、「古くから鏡としているもの」を選び取った物ではないし、「曇りの無い鏡」を選び取った物ではない。

「古鏡」と「明鏡」は、たとえ「質問が来る」時が有り得ても、玄沙師備の選び取った言葉を疑う時、砂礫、牆壁だけ目の前に現す言い方と成って、「全てのものが木っ端微塵（こっぱみじん）に成る」のであろうか？
「砕ける」ものが「来る」時の形、様子は、どの様か？　遥か古くから、青々とした深い淵である、空の世界の月である。

真覚大師と呼ばれる雪峰義存と三聖慧然は、歩いている時に、一群の「獼猴」という大猿を見た。
その時、雪峰義存は、「大猿達は各々一つの『古鏡』、『古くから鏡としているもの』を背（せ）にしている」と言った。

「大猿達は各々一つの『古くから鏡としているもの』を背（せ）にしている」という言葉の学によくよく参入するべきである。
「獼猴」と言うのは(大)猿である。
「雪峰義存が見た大猿とは、どの様な者か？」と自問自答して理解して取って更に鍛錬するべきである。長い時間を経ている事を顧みる事なかれ。
「各々一つの『古くから鏡としているもの』を背（せ）にしている」とは、「古くから鏡としているもの」が諸々の仏祖の「面」、「有様（ありよう）」であっても、「古くから鏡としているもの」は向上においても「古くから鏡としているもの」である。

「大猿達は各々一つの『古鏡』、『古くから鏡としているもの』を背にしている」と言うのは、各々の鏡に大小、優劣は無く、一つの「古鏡」、「古くから鏡としているもの」なのである。

「背にしている」と言うのは、例えば、「絵や像の仏の『裏』をあえて作る」のを「背にしている」と言うのである。

大猿の「背」を「背にする」のに、「古くから鏡としているもの」で「背にする」のである。

どの様な糊を使い得て「来る」のか？

試しに言ってみると、「猿の『裏』は『古くから鏡としているもの』で『背にする』べきであるが、『古くから鏡としているもの』の『裏』は大猿で『背にする』のか？」。

「古くから鏡としているもの」の「裏」を「古くから鏡としているもの」で「背にする」のである。

猿の「裏」を猿で「背にする」のである。

「各々一つの『古くから鏡としているもの』を背にしている」という言葉を虚しく設けたわけではない。

会得した道を正しく言い得たのである。

であれば、究極的に、会得した、言い得た、「道」、「真理」とは、どの様な物か？　「大猿」(という言葉で言い得た真理)か？　「古くから鏡としているもの」(という言葉で言い得た真理)か？

私達、人が「大猿」なのか？　「大猿」ではないのか？

誰に質問して理解して取るのか？

「自分が『大猿』であるか？」は、自分が自分を自分によって知る物ではないし、他人が自分を知る物、自分を他人によって知る物ではない。
「自分が自分であるか？」は、模索に及ぶ事ができない。

三聖慧然は、「長い時間の経過には名前が無い。なぜ長い時間の経過を表して『古くから鏡としているもの』とするのか？」と言った。

「長い時間の経過には名前が無い。なぜ長い時間の経過を表して『古くから鏡としているもの』とするのか？」という言葉は、三聖慧然が「古くから鏡としているもの」を証明している一面の一つである。
「長い時間の経過」と言うのは、「一心、一念が萌芽する以前」であり、「『長い時間』の中で現れない事」である。
「名前が無い」と言うのは、「長い時間」の日面、月面、「古鏡」の鏡面であるし、「明鏡」の鏡面である。
「名前が無い」のが真に「名前が無い」ならば、「長い時間の経過」も未だ「長い時間の経過」ではない。
「長い時間の経過」が「長い時間の経過」でなければ、三聖慧然が言い得た言葉は道を得ていない。
そうではあるけれども、「一念が萌芽する以前」と言うのは今日である。
今日を無駄にせず鍛錬して磨くべきである。
実に、「長い時間の経過には名前が無い」の「名前」は高名に聞こえている。
何を表して「古くから鏡としているもの」とするのか？　「龍頭蛇尾」、「最初は勢いが有るが、最後は勢いが無い」。

この時、雪峰義存は三聖慧然に向かって「『古くから鏡としているもの』は『古くから鏡としているもの』である」と言うべきである。

しかし、雪峰義存は「『古くから鏡としているもの』は『古くから鏡としているもの』である」と言わなかった。

(雪峰義存は「『瑕』、『きず』が生じた」と言った。)

雪峰義存が「瑕が生じた」と言ったのは、「瑕が出来た」のである。

「どうして『古鏡』に瑕が生じたのか?」と思うけれども、雪峰義存が「『古鏡』に瑕が生じた」と言ったのは、三聖慧然が「長い時間の経過には名前が無い」と言ったのを「瑕」としているのである。

「『古鏡』に瑕が生じた」とは、「全ての『古鏡』に瑕が生じた」のである。

三聖慧然は未だ「『古鏡』に瑕が生じた」という穴を出ていないので、「来られた」言葉に参入して究めるには「『古鏡』に瑕が生じた」という言葉に一任するのである。

「『古鏡』にも瑕が生じる」のであるし「瑕が生じるのも『古鏡』である」という学に参入する事は、「古鏡」の学に参入する事に成る。

三聖慧然は「どんな自棄が有ったのか?　話が理解できない」と言った。

「どんな自棄が有ったのか?　話が理解できない」という言葉の主旨は、「なぜ自棄に成ったのか?」である。

「自棄（やけ）に成った」のは、今日か？　明日か？　自己か？　他者か？　尽十方界か？　中国の中か？　明確に詳細に鍛錬して学に参入するべきである。

「話が理解できない」の「話」と言うのは、「来た」言葉である話が有るし、未だ会得していない「道」、「真理」の話が有るし、既に言い終えた話が有る。

今は話である道理が形成されて現されているのである。

例えば、話も「(釈迦牟尼仏と共に、)大地と情の有る全ての生者と共に同時に仏に成った」のか？

錦（にしき）を更に再現したわけではないのである。

そのため、「(話が)理解できない」のである。

梁の武帝は二十八祖の達磨に「私と相対している者は誰か？」(、「あなたは何者か？」、「あなたは、どういった者か？」)と言った。達磨は、「私は『こういった者である』と意識していない」と言った。

対面しているものを「理解できない」のである。

話は無いわけではないが、ただ「理解できない」のである。

「理解できない」(と言う)のは、個々の真心である。

また、「理解できない」(と言う)のは、明々に明らかに見えないのである。

雪峰義存は、「老僧である私、雪峰義存の罪、過（あやま）ちである」と言った。

この言葉は、言い方が悪かった時にも、こう言う事も有るけれども、そうは心得るなかれ。

「老僧」と言うのは、「家」の中の主人の老人の男性である。

「老僧」は、他の学に参入せず、ひとえに「老僧」の学に参入するのである。

千万に無数に変化しても、神の頭に鬼の面が有っても、「老僧」は、ただ「老僧」一つを明らめる学に参入するのである。

仏が来ても、祖師が来ても、「一念万年」が有っても、「老僧」は、ただ「老僧」一つを明らめる学に参入するのである。

「罪、過ち」とは、寺の長の僧、「老僧」が多忙だったからである。

考えてみると、雪峰義存は、徳山宣鑑の弟子である一角の人物である。

三聖慧然は、臨済義玄の高弟である。

雪峰義存と三聖慧然は、系譜が高貴である。

雪峰義存は、三十四祖の青原の行思の法の遠い子孫である。

三聖慧然は、三十四祖の南嶽の懐譲の法の遠い子孫である。

この様に、「古くから鏡としているもの」に住んで保持してきたのである。

後進の人の「鏡」、「見本」である。

雪峰義存は、僧達に示して次の様に言った。

「世界の広さが一丈であれば、『古くから鏡としているもの』の広さも一丈である。

世界の広さが一尺であれば、『古くから鏡としているもの』の広さも一尺である」

（一丈は約三メートル。一尺は約三十センチメートル。）

その時、玄沙師備は炉を指して「では、言ってください。炉の広さは、どれくらいですか？」と言った。

雪峰義存は、「『古くから鏡としているもの』の広さに似ている」と言った。

玄沙師備は「老和尚の踵（かかと）は未だ地についていない」と言った。

一丈を世界と言う。

世界は一丈なのである。

一尺を世界と言う。

世界は一尺なのである。

今、言っている一丈、一尺は、普通の一丈、一尺と異なるわけではないのである。

この事の学に参入すると、「世界の広さは、量（はか）り知れない、果てしない、三千の『大千世界』または無尽法界と言われている」と普通は思うが、ただ狭量な自己による思いであり、隣の村の彼方（かなた）を少し指す様な物である。

この世界をひねって一丈とするのである。

そのため、雪峰義存は、「『古くから鏡としているもの』の広さは一丈である」、「世界の広さは一丈である」と言ったのである。

この「一丈」を学ぶには、世界の広さの一端を見て取るべきである。

また、「古鏡」、「古くから鏡としているもの」という言葉を聞き取って「一枚の薄い氷の様な物」という見解を成すかもしれないが、そうではないのである。

「一丈の広さ」は、「世界の広さ一丈」に同じく参入しても、「形、例えが必ずしも『世界に端（はし）が無い』事に肩を並べるか？　同じく参入するか？」と(考えて)鍛錬するべきである。

「古鏡」、「古くから鏡としているもの」は「一顆珠」、「一粒の宝玉」の様ではない。

明暗を見て理解する事なかれ。

角ばっているか丸いかを見て理解して取る事なかれ。

尽十方界が、たとえ「一顆明珠」、「一粒の光明に輝く宝玉」であっても、「古鏡」、「古くから鏡としているもの」に等しいはずが無い。

「古くから鏡としているもの」は「未開の人や中国人といった文明人が来れば現す」事とは無関係に、縦横に自由に宝玉の様に光明に輝く個々である。

「古くから鏡としているもの」は多さではないし、大きさではない。

「一丈」、「一尺」といった広さは「古くから鏡としているもの」の量を挙げたのであり、広さを言ったのではない。

「古くから鏡としているもの」の広さというのは、普通に二寸、三寸と言い七個、八個と数える様な物である。（一寸は約三センチメートル。）

仏道の数え方では、大いなる悟りと悟っていないのを数えるのに二両、三両と明らめるし、仏から仏へ祖師から祖師へを数えるのに五枚、十枚と形成して現す。

一丈は「古くから鏡としているもの」の広さである。

「古くから鏡としているもの」の広さは一枚である。

玄沙師備の「炉の広さは、どれくらいですか？」という言葉は、隠れない、会得した「道」、「真理」である。

千万の遥か古くからのものによって、玄沙師備の学に参入するべきである。

炉を見る時、誰と成って炉を見るのか？　どの様な人と成って炉を見るのか？

炉を見ると、七尺ではないし、八尺ではない。
これは、執着している心を動揺させる時の話ではない。
新しい特別なものを形成して現しているのである。
例えば、「何ものかが、どの様にかして来ている」なのである。
「広さは、どれくらいですか？」という言葉が来たならば、従来の「どれくらい」は「どれくらい」ではない。
炉という、この場所を解脱している道理を疑わないべきである。
炉の諸々の相や量ではない主旨は、玄沙師備の言葉を聴くべきである。
目の前の一つの団子(だんご)をいたずらに地に落とす事なかれ。打破するべきである。これが、鍛錬である。

雪峰義存は、「『古くから鏡としているもの』の広さの様である」と言った。

雪峰義存が選び取った言葉を静かに照らして顧みるべきである。
「炉の広さは一丈である」と言うべきではないので、「『古くから鏡としているもの』の広さの様である」という言葉を選び取ったのである。
「『古くから鏡としているもの』の広さは一丈である」と言うのは正しく言い得ていて「『古くから鏡としているもの』の広さの様である」と言うのは正しく言い得ていない、わけではない。
「『古くから鏡としているもの』の広さの様である」行為を「鏡」、「見本」に照らして考えるべきである。
多くの人は誤って「『炉の広さは一丈である』と言わないのは正しく言い得ていない」と思っている。

「広さ」の独立をも(考えて)鍛錬するべきである。
「古鏡」の一欠片(ひとかけら)をも「鏡」、「見本」に照らして考えるべきである。
あるがままの鳥かごをも見過ごさせないべきである。
「振る舞(ふま)いを古くからの道にまで高く上げて、悄然(しょうぜん)とした心に堕ちない」べきである。

玄沙師備は「老人の男の踵(かかと)は未だ地についていない」と言った。

言葉の意味は、「老人の男」と言ったり「老和尚」と言ったりしても、必ず雪峰義存の事であるわけではない。
しかし、雪峰義存は「老人の男」であるので、「『踵(かかと)』と言うのは、どこの場所の事を言っているのか？」質問するべきである。「『踵(かかと)』と言うのは、何の事を言っているのか？」と参入して究めるべきである。
「参入して究めるべきである」と言うのは、「踵(かかと)」とは、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を言うのか？
「踵(かかと)」とは、虚空を言うのか？
「踵(かかと)」とは、尽地を言うのか？
「踵(かかと)」とは、命を言うのか？
「踵(かかと)」とは、何個有る物なのか？
一個有るのか？　半分有るのか？　百千万の無数個有るのか？
この様な事を学ぶのに勤めるべきである。
「未だ地についていない」という言葉の「地」と言うのは、どの様な物であるのか？

「大地」と言う「地」は、ある一つの種類の者達の所見に従って、「地」と言う。
更に、諸々の種類の者達は、また、「地」を不思議な解脱の法の門であると見る事が有る。
「地」を諸仏の諸々の行いの道であると見る、ある一つの種類の者達がいる。
そのため、「踵がつくべき『地』」という言葉は、何ものを「地」としているのか？
「地」は真実の存在であるのか？　真実の無であるのか？
また、「地」と言うものは、大いなる道の中に、一寸ばかりも、少しも無いのか？
質問して行き来すべきである。
他者に質問を言ったり自己に質問を言ったりするべきである。
「踵」は「地につける」のが正しいのか？　「地につけない」のが正しいのか？
どうして「踵が未だ地についていない」という言葉を選び取ったのか？
大地に一寸の土も無い時は、「踵」を「地につける」も「地につけない」も無く成る。
そのため、「老人の男の踵は未だ地についていない」とは、「老人の男」の消息であるし、「踵」の一時的な事である。
ある時、ある僧が、婺州の金華山の国泰院の弘瑫に「『古鏡』が未だ磨かれていない時は、どの様なものであるのですか？」と質問した。

弘瑫は、「『古鏡』である」と言った。
ある僧は、「『古鏡』が磨かれた後は、どの様なものであるのですか？」と言った。
弘瑫は、「『古鏡』である」と言った。

知るべきである。
「古鏡」は、磨かれている時が有っても、未だ磨かれていない時が有っても、磨かれた後が有っても、一つの「古鏡」である。
そのため、磨いている時は、「古鏡」のうち全ての「古鏡」を磨いている事に成る。
「古鏡」ではない水銀などを混ぜ合わせて磨くのではない。
「古鏡」が自分を磨くわけではないし、自分が「古鏡」を磨くわけではないけれども、「古鏡」を磨く事に成る。
未だ磨かれていない時も「古鏡」は「暗い」、「曇(くも)りが有る」わけではない。
「暗い」、「曇(くも)りが有る」という言葉を選び取っても、「暗い」、「曇(くも)りが有る」わけではない。
活きている「古鏡」なのである。

鏡を磨いて鏡と成す。
瓦(かわら)を磨いて鏡と成す。
瓦(かわら)を磨いて瓦(かわら)と成す。
鏡を磨いて瓦(かわら)と成す。

磨いて成さない事が有る。成る事が有るけれども磨き得ない事が有る。同じく仏祖の家業である。

江西の三十五祖の馬祖道一が三十四祖の南嶽の懐譲の学に参入した時に、南嶽の懐譲は心の印を馬祖道一に密かに受けさせた。

瓦（かわら）を磨く最初の最初である。

馬祖道一は、伝法院に住んで、十何年、常に坐禅した。

雨の夜の、草の屋根の小さな質素な庵（いおり）を想像するべきである。
雪に閉ざされた季節の寒い床でも坐禅を怠ったとは言われていない。

南嶽の懐譲は、ある時、馬祖道一の、草の屋根の小さな質素な庵（いおり）に行った。
馬祖道一は、南嶽の懐譲のそばに仕えて立った。
南嶽の懐譲は「あなたは、近頃は、何をしているのか？」と質問した。
馬祖道一は「近頃は、私、馬祖道一は、ただ、ひたすらに、打ち坐っているばかりです」と言った。
南嶽の懐譲は「坐禅は、何を意図しているのか？」と質問した。
馬祖道一は「坐禅は、仏に成ろうと意図しています」と言った。
南嶽の懐譲は、一欠片（ひとかけら）の瓦（かわら）を持って、馬祖道一の、草の屋根の小さな質素な庵（いおり）の近くの石の上に当てて磨（と）ぎ始めた。
馬祖道一は、これを見て「和尚様、何をしているのですか？」と質問した。

南嶽の懐譲は「瓦を磨いでいる」と言った。
馬祖道一は「瓦を磨いで何にするのですか？」と言った。
南嶽の懐譲は「瓦を磨いで鏡にするつもりである」と言った。
馬祖道一は「どうして、瓦を磨いで鏡にでき得ようか？　いいえ！　できない！」と言った。
南嶽の懐譲は「どうして、仏に成ろうという意図で坐禅して、仏に成る事ができ得ようか？　いいえ！　できない！」と言った。

（
馬祖道一は「どうすれば仏に成れますか？」と言った。
南嶽の懐譲は「人が牛車に乗っている時に、もし牛車が進まなければ、車を軽く打って進む様に合図するのが良いか？　牛を軽く打って進む様に合図するのが良いか？」と言った。
馬祖道一は、あえて何も応えなかった。
）

この一段落の一大事を、昔から数百年の間、多くの人は誤って「南嶽の懐譲は、単に馬祖道一を励ました」と思った。
必ずしも、そうではない。
大いなる聖者の行為は、遥かに凡人の境地を出て離れているばかりである。
大いなる聖者に、もし「瓦を磨いで鏡にする」法が無ければ、どうして人の為の手段が有るであろうか？
人の為の力は、仏祖の「骨髄」である。
たとえ構え得たとしても、人の為の力は、家具である。

「家具」や「調度品」、「日常の道具」でなければ、仏の家(である仏教)に伝われていないのである。

まして、既に、三十五祖の馬祖道一と速やかに接したのである。

仏祖が正しく伝えている功徳とは、直接的に指し示す事である、と量り知る事ができる。

実に、知る事ができる。

「瓦を磨いで鏡にした」時、馬祖道一も仏に成る。

馬祖道一が仏に成る時、馬祖道一は速やかに馬祖道一と成る。

馬祖道一が馬祖道一と成る時、坐禅は速やかに坐禅と成る。

そのため、「瓦を磨いで鏡にする」事は、古代の仏の「骨髄」に住まわさせられ保持させせられてきた。

瓦が成った「古鏡」が有り、「古鏡」を磨いてきた時、従来も未だ汚染されていないのである。

瓦の「塵」、「汚れ」が有るわけではなく、ただ瓦であるものを磨ぐのである。

瓦を磨ぐ所に、鏡と成す功徳が形成されて現されるのは、仏祖の鍛錬である。

「瓦を磨ぐ」事が、もし鏡とできないのであれば、鏡を磨いても鏡にできないのである。

「瓦を磨いで鏡を作る」事に、仏を作る事が有るし、鏡を作る事が有る事を誰が思い量る事があろうか？

また、疑って知っているのは、「『古鏡』を磨いた時、誤って瓦へと磨いて成す事が有るであろうか？」という事である。

磨いた時の消息は、他の時によって量る事はできない。

そうではあるけれども、南嶽の懐譲の言葉は、正に、言い得る事を言い得る事ができたので、究極的に、「瓦(かわら)を磨(と)いで鏡にする」事である。

今の人も今の瓦(かわら)をひねって磨(と)いで試みるべきである。必ず鏡と成るであろう。

もし瓦(かわら)が鏡と成らなければ、人は仏に成る事ができない。

瓦(かわら)を泥の塊(かたまり)であると軽んじれば、人も泥の塊(かたまり)であると軽く成ってしまうであろう。

もし人に心が有れば、瓦(かわら)にも心が有るはずである。

「瓦(かわら)が来れば、瓦(かわら)を現す鏡が有る」事を誰が知るであろうか？

また、「鏡が来れば、鏡を現す鏡が有る」事を誰が知るであろうか？

正法眼蔵　古鏡(古くから鏡としているもの)

千二百四十一年、観音導利興聖宝林寺にいて僧達に話した。

一顆明珠

玄沙師備は、「娑婆」、「苦しみを耐え忍ぶ場所」である「この世」の唐の時代の中国の福州の玄沙山の玄沙院に住み、宗一大師と呼ばれ、在俗の時の姓は「謝」である。

玄沙師備は、在家の時、魚釣りを愛し、船を南台江に浮かべて、諸々の釣り人に習った。

玄沙師備は、「釣らなくても自ら上がる金鱗の美しい魚を待たなくても有ったのであろう」。唐の「咸通」時代の初めの頃、突然、俗世という塵を出る出家を願った。

玄沙師備は、船を捨てて山に入った。

玄沙師備は、出家した時、三十歳に成っていた。

玄沙師備は、浮世が危うい事を悟り、仏道の高貴を知った。

玄沙師備は、ついに雪峰山に登って、真覚大師と呼ばれる雪峰義存の所に行って、昼夜、道をわきまえた。

玄沙師備は、ある時、遍く諸方(で真理)をたずねるために、袋を携えて山を出たが、足の指を石に激しく突いて流血し痛みに苦しんだ際、突然に猛省して「この身は(真の)存在ではない。どこから痛みは来るのであろうか？」と言って雪峰山に帰った。

ある日、雪峰義存は、「玄沙師備よ、『頭陀を行う僧』よ、あなたは何者か？」と質問した。

玄沙師備は、「私は、終に、あえて、人をだまさない」と答えた。

雪峰義存は、この玄沙師備の言葉を特に愛して「誰が、この言葉を持っていないであろうか？（いいえ！　誰でも、この言葉を選べる！　しかし、）誰が、この言葉の『道』、『真理』を会得して言い得るであろうか？（この言葉の『道』、『真理』を会得して言い得るのは難しい！）」と言った。

さらに、別の日に、雪峰義存は、「玄沙師備よ、『頭陀を行う僧』よ、なぜ遍く諸方(で真理)をたずねないのか？」と質問した。

玄沙師備が「(中国へ来るために)二十八祖の達磨は東の地の中国へ来た訳ではない。
(真理を伝えるために達磨は中国へ来た。)
(真理を伝えられた)二十九祖の慧可は西のインドへ行かなかった」と言うと、
雪峰義存は特に、ほめた。

玄沙師備は、出家する前は、日頃、釣りをしていた人なので、諸々の経典をかつては夢にも未だ見た事が無かったけれども、真理を求める志の深さを優先すれば、傍らの人々を超える意気が表れたのである。

雪峰義存も、「僧達の中で玄沙師備が優れている」と思い、「玄沙師備は、門下で抜き出た人である」とほめた。

玄沙師備は、外衣、上着には布を用い、一つの上着で換えなかったので、継ぎ接ぎだらけであった。

玄沙師備は、肌着、下着には紙を用い、艾で出来た物をも着た。

玄沙師備は、雪峰義存の所に行った他は、その他の善知識を持つ人の所を訪ねなかった。

けれども、玄沙師備は、師である雪峰義存の法を嗣ぐ力をわきまえ取った。

玄沙師備は、ついに「道」、「真理」を会得した後、真理を人に示して「十方世界の尽くは、『一顆明珠』、『一粒の光明に輝く宝玉』である」と言った。

ある時、ある僧が「和尚様、玄沙師備様は、『十方世界の尽くは、一粒の光明に輝く宝玉である』と言った事が有ると聞きました。未だ学ぶべき物が有る人である私は、どの様に『会得』、『理解』したら良いのでしょうか？」と質問した。

玄沙師備は「十方世界の尽くは、一粒の光明に輝く宝玉である。それを『会得』、『理解』して、どうするのか？」と言った。

玄沙師備は、翌日、ある僧に「十方世界の尽くは、一粒の光明に輝く宝玉である。あなたは、どの様に『会得』、『理解』しているのか？」と逆に質問した。

ある僧は「十方世界の尽くは、一粒の光明に輝く宝玉です。それを『会得』、『理解』して、どうします？」と言った。

玄沙師備は、「あなたが、黒山や霊の穴の中に向かって無意味な努力をしている事を知った」と言った。

（

原文の直訳は「玄沙師備は『知った、あなたが黒山、鬼の穴の中に向かって活計をなす事を』」である。

「鬼家活計」は「無意味な努力」を意味する。

「鬼家」は「霊の冥界」を意味する。

「黒山」は「忌まれる未開の山」を意味するという説が有る。

）

玄沙師備が、初めて「十方世界の尽くは、一粒の光明に輝く宝玉である」という言葉を選び取った。

「十方世界の尽くは、一粒の光明に輝く宝玉である」という言葉の主旨は、

「十方世界の尽く」は、広大でもないし微小でもないし、角ばってもいないし丸くもないし、偏らないで正しくもないし、魚の様に活発ではないし(牛の様に)外を回っているわけではない、という事である。

さらに、「十方世界の尽く」は、生死の来たり去ったりではないので、生死の来たり去ったりなのである。このため、「十方世界の尽く」は、「昔は、ここを去る」のであり、「今は、ここから来る」のである。

「十方世界の尽く」をわきまえ究めると、「十方世界の尽く」は「全てである」と誰が見通すであろうか？　「十方世界の尽く」は「不動である」と誰がとらえるであろうか？

「十方の尽く」と言うのは、「物を追いかけて己と為し、己を追いかけて物と為す」、「対象を追いかけて自己と為し、自己を追いかけて対象と為す」のを未だ休まないのである。

「情生智隔」、「情が生じると知が遠く成る」のを「隔」、「遠くなる」と会得して理解して取るのは、頭と顔の向きを変えるのであり、「『展事』、『投機』」、「事を展開して広げ、機会に投じる」のである。

「己（おのれ）を追いかけて物と為（な）す」、「自己を追いかけて対象と為（な）す」ので未だ休まない「十方の尽（ことごと）く」なのである。

「機先」、「機会が訪れる直前」の道理なので、要点を統治するのに余裕が有る。

「一粒の宝玉である」とは未だ(「道」、「真理」の)名前ではないけれども言い得ているのであり、「一粒の宝玉」を(「道」、「真理」の)名前と認めてきているのである。

「一粒の宝玉」は、すぐに直（じき）に、当然に必然的に、「万年」である。昔に渡る事が終わらないのに、今に渡って到来するのである。

身に今が有るし、心に今が有る、といえども、「光明に輝く宝玉」なのである。

あちこちの草木ではなく、天地の山や河ではなく、「光明に輝く宝玉」なのである。

「未だ学ぶべき物が有る人である私は、どの様に『会得』、『理解』したら良いのでしょうか?」という言葉を選び取ったのは、たとえ、「ある僧」が無明であるため業（ごう）で理解を弄（もてあそ）んだのに似ていても、大事な作用が目の前に現れるのは大いなる規則による物なのである。

進んで一尺の水に一尺の波を立たせるべきである。言ってみると、一丈の宝玉に一丈の光明を輝かせるのである。

（一尺は約三十センチメートル。一丈は約三メートル。）

「未だ学ぶべき物が有る人である私は、どの様に『会得』、『理解』したら良いのでしょうか？」という「ある僧」が言い得た言葉を理解して取って玄沙師備は「十方世界の尽く（ことごとく）は、一粒の光明に輝く宝玉である。それを『会得』、『理解』して、どうするのか？」と言った。

玄沙師備が「十方世界の尽く（ことごとく）は、一粒の光明に輝く宝玉である。それを『会得』、『理解』して、どうするのか？」という言葉を選び取ったのは、仏は仏に嗣（つ）ぐ、祖師は祖師に嗣（つ）ぐ、玄沙師備は玄沙師備に嗣（つ）ぐ「道」、「真理」の「会得」、「理解」である。

嗣（つ）がない様に回避しようとしても、回避できる所が無いわけではないが、少しの間だけ明らかに回避できても、「十方世界の尽く（ことごとく）は、一粒の光明に輝く宝玉である。それを『会得』、『理解』して、どうするのか？」という言葉を選び取るのが生じる、のは時間的に目前なのである。

玄沙師備は、翌日、ある僧に「十方世界の尽く（ことごとく）は、一粒の光明に輝く宝玉である。あなたは、どの様に『会得』、『理解』しているのか？」と質問した。

これは、昨日説いた「決まり文句」である言葉を選び取ったのである。

今日は、「十方世界の尽く（ことごとく）は、一粒の光明に輝く宝玉である」と「あなたは、どの様に『会得』、『理解』しているのか？」という二つの言葉を(昨日から)借りて吐き出したのである。

今日は、お決まりのやり方ではないのである。
昨日、「ある僧」が、うなずいて笑ったのを、玄沙師備は押し倒したのである。

ある僧は「十方世界の尽（ことごと）くは、一粒の光明に輝く宝玉です。それを『会得』、『理解』して、どうします？」と言った。
「賊の馬に騎乗して賊を追いかけている」と言うべきである。（受け売りであるし、「賊」に成ってしまっている。）

古代の仏は、あなたの為（ため）に説く時は、色々な種類の手段を用いるし、俗世の中へ降りて行くのである。
光明を照らし返すべきである。
「それを『会得』、『理解』して、どうするのか？」という言葉の意味は、いくつ有るであろうか？
試しに言ってみると、（修行者は、）「乳餅」が七枚だけであるし「菜餅」が五枚だけであるといえども、「南北」の「どこでも」、仏の教え通りに修行するのである。

玄沙師備は、「あなたが、黒山や霊の穴の中に向かって無意味な努力をしている事を知った」と言った。
知るべきである。
日面、月面は、古くから不変である。
日面は、日面として、月面と共に出る。
なぜなら、月面は、月面として、日面と共に出る、からである。

もし六月が正に「私は時である」と言えても「私の性質は熱い」と言えないのである。

「一粒の光明に輝く宝玉」には、始まりが無いのは、端が無いのである。

「十方世界の尽くは、一粒の光明に輝く宝玉である」なのであり、「一粒」であるとか「三粒」であると言わなかった。(「十方世界の尽くは、『唯一』の一粒の光明に輝く宝玉である」。)

全身は、唯一の単眼の「正法眼」、「正しくものを見る眼」なのである。

全身は、真の実体なのである。

全身は、唯一の一つの言葉なのである。

全身は、光明なのである。

全身は、全身なのである。

全身の時、全身による妨げは無い。

円は、円いのである。

回転は、回転音を出すのである。

「光明に輝く宝玉」の功徳は、この様に形成されて現されるので、今の色を見たり音や声を聞いたりしている観音と弥勒がいるし、この世に身を現して法を説く古代の仏と新しい仏がいる。

正に、この時、虚空にかかるのは、衣の裏の中にかかるのは、(黒竜の顎といった)顎の下に収められるのは、髪の中に収められるのは、皆、「十方世界の尽く」である「『唯一』の一粒の光明に輝く宝玉」なのである。

衣の裏の中にかかっているのを様子としているのであり、衣の表の外にかけようとして誤って「道」、「真理」を理解して取る事なかれ。

髪の中や顎の下にかかっているのを様子としているのであり、髪の外や顎の外にかけようとする事なかれ。
酒に酔っている時に宝玉を与えてくれる親友(である仏)がいる。
(神から見れば人は酩酊している様に狂愚である。)
(仏は)親友には必ず宝玉を与える。
宝玉をかけられる時は、必ず酒に酔っているのである。
既に、この様な物であるのが、「十方世界の尽く」である「『唯一』の一粒の光明に輝く宝玉」なのである。
そのため、転じると転じない時の面を変えて行くのに似ているけれども、「光明に輝く宝玉」なのである。
まさに、「宝玉」が、この様な物であると知る事は、「光明に輝く宝玉」なのである。
「光明に輝く宝玉」には、この様に聞こえる音や声が有るし、この様に見える色が有る。
既に、この様な物であると会得した時には、「私は『光明に輝く宝玉』ではない」という思考を辿ってしまう者は、「私は『光明に輝く宝玉』ではない」と疑わないべきである。
思考を辿ったり疑ったりする、取捨する、作為も無作為も、狭量な見解であるし、狭量な者に似させるだけである。
愛せないであろうか?!
「光明に輝く宝玉」の、この様な美しく彩られた光は無限である。
「光明に輝く宝玉」の美しく彩られた光の一つ一つは、「十方世界の尽く」の功徳である。
誰が、これを奪えるか？　いいえ！　誰も、これを奪えない！

(「光明に輝く宝玉」の)市場に瓦を投げて殺そうとしてくる人はいない。地獄、餓鬼、修羅、畜生、人間、天という六道の「因果に落ちない」とか「因果に落ちる」と煩い悩む事なかれ。

「本来に暗くない」(、「因果に暗くない」)、「頭が正しいので尾も正しい」、「光明に輝く宝玉」は、「面目」、「有様」であるし、「眼睛」、「見る眼」である。

そうではあるが、私も、あなたも、「『光明に輝く宝玉』は、どの様なものであるか?」、「どの様なものが『光明に輝く宝玉』ではないのか?」と知らないので、百回も、何度も、思考したり思考を放棄したりしては、明々に明らかな牛などが食べる草を結んできたけれども、玄沙師備の法の言葉によって「光明に輝く宝玉」である身心の様子を聞き知って明らめれば、「心とは私ではない。生じたり滅んだりするものを誰であるとして『光明に輝く宝玉である』とか『光明に輝く宝玉ではない』とするのか?」と取捨に煩い悩まないであろう。

たとえ、思考を辿り煩い悩んでも「光明に輝く宝玉」なのであるし、「光明に輝く宝玉」ではないものが有って起こさせられた修行でもないし思念でもないので、ただ、まさに、「黒山、鬼の穴」への進歩も後退も「一粒の光明に輝く宝玉」であるだけなのである。

正法眼蔵　一顆明珠(一粒の光明に輝く宝玉)

その時、千二百三十八年、雍州の宇治県の観音導利興聖宝林寺にいて僧達に話した。

生死

「生死の中に仏が存在すれば、生死は存在しない」
また、「生死の中に仏が存在しなければ、生死に惑(まど)わない」と言える。
二つの言葉の意味は、定山と、夾山の圜悟克勤という、二人の禅師の言葉である。

（

定山は「生死の中に仏が存在しなければ、生死ではない」と言った。
夾山の圜悟克勤は「生死の中に仏が存在すれば、生死に迷わない」と言った。

）

「道」、「真理」を会得した人達である、定山と、夾山の圜悟克勤の言葉なので、決して虚しく設(もう)けられた言葉ではない。
生死を離れようと思う人は、まさに、この二つの言葉の主旨を明らめるべきである。
もし人が生死の外に仏を求めれば、進む方向を決める長柄(ながえ)を北にして南の国の越に向かおうと思う様な物であるし、顔を南に向けて北の北斗七星を見ようとする様な物である。かえって、ますます生死の原因を集めてしまうし、さらに、解脱の道を失ってしまう。
ただ、「生死は『涅槃』、『煩悩を寂滅する事』である」と心得るべきである。

そして、「生死は『涅槃』、『煩悩の寂滅』ではない生死である」として嫌うべきではないし、「生死は『涅槃』、『煩悩の寂滅』である」として願い求めるべきではない。
こうした時、初めて、生死を離れる可能性が生じる。

「生から死へ移る」と心得るのは、誤りである。
(肉体は生きている一方で徐々に死んでいっている。)
生は一時の位であり、既に前の生が存在するし、後の生が存在する。
このため、仏法の中では、「生即不生」、「生とは生じる事ではない」と言う。
(生とは変化である。)
死も一時の位であり、既に前の死が存在するし、後の死が存在する。
このため、仏法の中では、「滅即不滅」、「死とは消滅ではない」と言う。
(死とは変化である。)

生きている時には生きるより他に無いし、死ぬ時には死ぬより他に無い。
このため、生まれたら生と向き合うべきであるし、死が来たら死と向き合うべきである。
生死に仕えるべきであると言う事なかれ。願い求める事なかれ。

生死は仏の命である。
(
神は大事な理由が有って人、生死、この世を創造している。
人には、生死で煩悩を寂滅する、神からの使命である大いなる務めが有る。

）

生死を嫌い捨てようとすれば、仏の命を失おうとしてしまう事に成ってしまうのである。

生死に留まって生死に執着すれば、仏の命を失ってしまうのである。

仏の有様（ありよう）を心に留めるのである。

生死を嫌う事が無いし、慕う事が無い時、初めて、仏の心に入る。

ただし、仏を心で思い量（はか）る事なかれ。仏を言葉で言い表す事なかれ。

ただ、自分の身心をも放り忘れて仏の家である仏教に投げ入れて、仏の方（ほう）から働きかけが行われて、仏の導きに従って行く時、力をも入れずに、心をも費やさずに、生死を離れ、仏と成る。

そのため、人の誰が自分の心に停滞しているべきであろうか？　いいえ！

仏と成るのに、とても簡単な道が有る。

諸々の悪を作らないし、生死に執着する心が無いし、一切の全ての生者のために思いやりを深くするし、(知と徳が自分より)上の者を敬うし下の者を思いやるし、全てを嫌う心が無いし、全てを願い求める心が無いし、心に「思う所が無い」し憂（うれ）う事が無い者を仏と呼ぶ。

この他に仏をたずね求める事なかれ。

正法眼蔵　生死

現成公案

全ての物が仏法である時は、迷いと悟りが有るし、生死が有るし、諸仏と全ての生者がいるし、修行が有る。

全ての物が私には無い時は、迷いと悟りが無いし、生死が無いし、諸仏と全ての生者がいない。

仏道は本(もと)から物の多い少ないを超越しているので、迷いと悟りが有るし、生死が有るし、諸仏と全ての生者がいる。

しかも、同様だとしても、花は愛されて惜(お)しまれて散り、草は嫌われて見捨てられて生(お)い茂(しげ)るばかりである。

自己を運んで全てのものを修行して証するのを迷いとする。

全てのものが進んで自己を修行して証するのは悟りである。

迷いを大いに悟るのは諸仏である。

悟りに大いに迷うのは全ての生者である。

悟りの上に更に悟りを得る者がいる。

迷いの中で更に迷う者がいる。

諸仏が正(まさ)しく諸仏である時は、「自己は諸仏である」という認知を用いなくても、諸仏を証しているのであるし、諸仏を証していく。

身心を挙げて色を見て取ったり音や声を聴いて取ったりしても、親しく会得して取っても、鏡に形を映す様にはできないし、水に月を映す様にはできない。一方を証する時は一方は暗い。

仏道を習うとは、自己を習うのである。
自己を習うとは、自己を忘れるのである。
自己を忘れるとは、全てのものに証されるのである。
全てのものに証されるとは、自己の身心と他者の身心を脱ぎ落とさせるのであるし、悟りの跡である休みなのであるし、休みである悟りの跡を長々と出させる。

人が初めて法を求める時、遥かに法という果てを離れて後退している。
法が己（おのれ）に正しく伝える時、速やかに本来の人に成る。

人は船に乗って行って目を巡らして岸を見れば「岸が移動する」と誤ってしまうが、親しく船に目をつければ「船が進む」のを知る様に、身心を乱して妄想して全てのものを弁（わきま）え承知しようとすると「自分の心や自分の性質は常に不変では？」と誤ってしまう。
もし旅を親しくして旅の中に帰れば、全てのものが私には無い道理は明らかである。

薪（たきぎ）は灰と成る。
灰が逆行して薪（たきぎ）と成る事はできない。
しかし、「灰は後である。薪は前である」と見て理解して取るべきではない。
知るべきである。
薪は薪の法の位に住んで、前が有るし、後が有る。

前後が有るといえども、前後の境目は断絶している。

灰は灰の法の位に有って、前が有るし、後が有る。

薪が灰と成った後に逆行して薪と成らない様に、人は死んだ後に逆行して生きたりはしない。

そのため、「生は死に成る」と言わないのは仏法に定められている習いである。

このため、「生とは『不生』である」、「生とは生じる事ではない」(、「生とは変化である」)と言う。

死が逆行して生に成らないのは、法の輪に定められている仏の転じ方である。仏の法の説き方である。

このため、「死とは『不滅』である」、「死とは消滅ではない」(、「死とは変化である」)と言う。

生も一時の位であるし、死も一時の位である。

例えば、春と冬の様な物である。

(

春は生の例えである。

冬は死の例えである。

)

「冬が春と成る」とは思わないし、「春が夏と成る」とは言わない。

人が悟りを得るのは、水に月が映る様な物である。月は濡れないし、(月によって)水は破れない。

月などの光は広大な光であるが一尺や一寸のわずかな水に映るし、月の全ても満天も草の露にも映るし一滴の水にも映る。

（一尺は約三十センチメートル。一丈は約三メートル。）
悟りが人を破らないのは、月が水を穿って突き破らない様な物である。
人が悟りを遮らないのは、一滴の露が月も天も遮らない様な物である。
深さは、高さの物差しに成る。
時間の長短では、水の大小を点検して詳細に調べて、月や天の広さ狭さをわきまえて理解して取る事ができる。

法が身心に充足して来ない時には、「法は既に足りている」と思う。
もし法が身心に充足すれば、「ある面では足りない」と思うのである。
例えば、船に乗って山も(陸も)無い海だけの中に出て四方を見ると、ただ円くだけ見え、更に異なる見え方が見える事は無い。
けれども、この大海は、円くないし、正方形ではないし、残りの海の「徳」、「力」を表し尽くす事はできていないのである。
宮殿の様に。
「瓔珞」、「宝玉などを紐で繋いだ首飾りや腕輪といった飾り」の様に。
ただ、自分の目の届く範囲の所が暫定的に仮に円く見えるだけである。
全てのものも同様である。
俗世という塵の中や、俗世という枠の外は、多くの様子を帯びているといえども、学に参入している「見る眼」の力が及ぶ範囲のものだけを見て取り会得して取っているのである。
全てのものの家風を聞く時には、「正方形や円である」と見えている他に、「残りの海や山の『徳』、『力』は多いし、無限である」事と「四方の周囲の世界が有る」事を知るべきである。
「傍らだけ、横並びのものだけ、同様である」のではない。

「直下の大きさのものも、一滴の大きさのものも、同様である」と知るべきである。

魚が水を泳いでも水は果てしないし、鳥が空を飛んでも空は果てしない。

けれども、魚と鳥は昔から水と空を未だ離れない。

ただ、大きく用いる時は大きく使うし、小さく必要な時は小さく使う。

同様に、先々で、所々で、限界を尽くすといえども、もし魚が水を出れば即死するし、もし鳥が空を出れば即死する。

「水を命と為す」事を知るべきである。

「空を命と為す」事を知るべきである。

「魚を命と為す」事が有るし、

「鳥を命と為す」事が有る。

「命を魚と為す」事が有るべきであるし、

「命を鳥と為す」事が有るべきである。

この他に更に進歩が有るべきである。

「修行と証が有るし、その寿命が有る」のも、同様である。

なのに、水を究め空を究めた後で水と空を行こうと思考する魚や鳥がいても、水にも空にも「道」、「真理」や「所」、「物」を得る事ができない。

「道」、「真理」や「所」、「物」を得れば、そこまでの旅に従って「公案」、「手がかり」が形成されて現される。

「道」、「真理」や「所」、「物」は、大小ではないし、自分の物や他者の物ではないし、前から有るわけではないし、今、現れたわけではないので、「道」、「真理」や「所」、「物」を得れば、そこまでの旅に従って手がかりが形成されて現される。

同様に、もし人が仏道を修行したり証したりする時は、「一つの修行に出会えば一つの修行を修行する」のであるし、「一つの法を会得すれば一つの法に通じる」のである。

修行や証に「所」、「物」が有るし「真理」という「道」が通じている達しているので、「知る事ができる限界を知る事ができない」のは、「知る事ができる限界を知る」事は仏法を究め尽す事と共に生じるし共に参入するからである。

「『得た所』、『得た物』は必ず自己の知見と成って思考で知られる様に成る」と習う事なかれ。

「証し究めた所」、「証し究めたもの」は速やかに形成されて現されるといえども、「密有」、「存在の意味」、「存在の概念」、「存在の理解」、「ものの意味」、「ものの概念」、「ものの理解」、「理解」は必ずしも形成されて現されない。どうして形成されて現される必要が有るだろうか？いいえ！　形成されて現される必要は無い！

麻谷(山)の宝徹が扇を使って風を起こしている時に、ある僧が来て「『風の性質は常に不変であるし、遍く、行き渡らない所が無い』。なぜ、和尚様、麻谷の宝徹様は、扇を使うのですか？」と質問した。

麻谷の宝徹は、「あなたは、ただ、『風の性質は常に不変である』のを知っていても、『風の性質、空気の性質は、遍く、行き渡らない所が無い(。風の性質、空気の性質は遍在している)』道理を未だ知らない」と言った。

(ある僧は、「風の性質、空気の性質ではなく風が遍在している」と誤解していた。)

ある僧は、「『風の性質は、遍く、奥底まで、行き渡らない所が無い』道理とは、どの様な物ですか？」と言った。
その時、麻谷の宝徹は、扇を使うだけ(で無言で動作で答えるだけ)であった。
(「風の性質、空気の性質は遍在している」ので、扇を使うと、風の性質、空気の性質で風が起きる。)
ある僧は、(理解したのか否か、)礼拝した。

仏法の証拠、仏法が正しく伝えている「活路」、「生きるための道」とは、この様な物なのである。
「『風の性質は常に不変である』ので、扇を使うべきではない」とか「『風の性質は常に不変である』ので、扇を使わない時も風の音を聞くべきである」と言う人は、「風の性質は常に不変である」事をも知らないし、「風の性質」をも知らないのである。
「風の性質は常に不変である」ので、仏の家の風は、「大地が黄金である」のを形成させて現させるし、「長江の『酪』と『蘇』という『乳製品』」を熟達させる。

正法眼蔵　現成公案(形成されて現される手がかり)

「現成公案」は、千二百三十三年の十月の中秋の頃に書いて、鎮西の「俗弟子」、「在俗者の弟子」である楊光秀に与えた。
千二百五十二年に「現成公案」を「正法眼蔵」に収録した。

即心是仏

仏から仏へ、祖師から祖師へ、未だ免れずに、保持して任してきているのは、即心是仏だけである。

西のインドには「即心是仏」という言葉は無い。

中国で初めて聞く様に成った。

学者の多くは誤って、誤りを誤りとしない。

誤りを誤りとしないので、学者の多くは外道に落ちぶれた。

「即心是仏」の話を聞いて、愚者は誤って「全ての生者の慮知念覚の、未だ悟りを求めようと心していないのを仏とする」と思っている。

「即心是仏」への誤解は、かつて正しい師に会わない事によるのである。

外道の類（たぐい）と成るとは、先尼（セーニャ）の様な誤った見解をする事である。

西のインドに先尼（セーニャ）という外道がいた。

次の様に、先尼（セーニャ）は、誤った見解を言った。

「霊知という大いなる道は私達の今の身に有る。

霊知の様子は、簡単に知る事ができる。

霊知は、苦しみと快楽をわきまえるし、冷たさと暖かさを自分で知るし、苦痛を了知する。

霊知は、万物に遮られないし、諸々の知覚の対象と無関係である。

物は来たり去ったりするし、知覚の対象は生じたり滅んだりするけれども、

霊知は、常に有るし、不変である。

霊知は、遍在している。

凡人、聖者、霊を含有する全てのもので、霊知に隔(へだ)たりや差異は無い。

霊知の中に一時的に『法』、『物』を妄(みだ)りにした事による『空華』が有るといえども、一念に相応(ふさわ)しい知が現れたら、物も知覚の対象も無くなれば、霊知という本性だけが明らかな鎮(しず)まっている常に不変な物である。

たとえ身という外見は破れても、霊知は破れないで身を出るのである。

例えば、人の家が過失の火事で焼かれると、家の主は家を出て去る様な物である。

明らかであるし霊的である霊知を覚者、知者の性質と呼ぶし、仏とも呼ぶし、悟りとも呼ぶ。

自分も他者も同じく霊知を十分に備えていて、迷いと悟りに共に通達している。

全ての物と諸々の知覚の対象が、どの様であれ、霊知は、物とも知覚の対象とも同様には変化したり無くなったりせず、長い時間が経過しても常に不変である。

今、現に存在する知覚の対象も、霊知の作用による物であれば、真実であると言える。

霊知という本性、原因が起こしている結果なので、真実の物であると言える。

たとえ知覚の対象が本性によって真実の物であると言えても、知覚の対象は常に不変ではないため生じたり滅んだりするので、また、知覚の対象が生じたり滅んだりするという明暗とは無関係に本性は霊知するので、本性を霊知と呼ぶ。

また、霊知を『真我』、『真の自分』と呼ぶし、『覚元』、『悟りの元』と呼ぶし、本性と呼ぶし、本体と呼ぶ。

この様な本性を悟るのを『常に不変なものに帰る』と呼ぶし、この様な本性を悟った人を『真実に帰った大いなる士』と呼ぶ。

霊知という本性を悟った後は、生死に流されて運ばれず、生じたり滅んだりしない性海を証して性海に入るのである。

霊知以外は真実ではない。

霊知という性質を現さなければ現さないほど、三界と、『地獄、餓鬼、修羅、畜生、人間、天』という『六道』は、競う様に生じてしまう」

　これが、先尼（セーニャ）外道の誤った見解である。

唐の時代の中国の、大証禅師と呼ばれる南陽慧忠は、ある僧に「どこから来ましたか?」と質問した。

ある僧は、「南方から来ました」と言った。

南陽慧忠は、「南方には、どの様な善知識を持つ人がいますか?」と言った。

ある僧は、「善知識を持つ人々が、とても多くいます」と言った。

南陽慧忠は、「南方の善知識を持つ人々は、どの様に真理を人に示しているのですか?」と言った。

次の様に、ある僧は言った。

「南方の善知識を持つ人々は、直（す）ぐに、未だ学ぶべき物が有る人に、『即心是仏』と示します。

『仏』は『覚(者)』を意味するが、あなたは、今、見聞きしたり覚知したりする性質をことごとく備えている。

人が見聞きしたり覚知したりする性質は、釈迦牟尼仏の『拈華瞬目』である『揚眉瞬目』をよくできるし、過去と未来をよく運用できる。

人が見聞きしたり覚知したりする性質は、身中に遍在していて、頭に触れれば頭を知るし、脚に触れれば脚を知る。
そのため、人が見聞きしたり覚知したりする性質を正遍知と呼ぶ。
正遍知以外の仏は無い。
身は生じたり滅んだりするが、心の性質は果てしない昔から未だかつて生じたり滅んだりしない。
心の性質から見れば、身が生じたり滅んだりするのは、竜が骨を換える様な物であるし、蛇が脱皮するのに似ているし、人が古い家を出るのに似ている。
身は変化する。
心の性質は常に不変である。
南方の所説は、おおよそ、この様な物です」

　次の様に、南陽慧忠は言った。

「もし、その通りであれば、あの先尼（セーニャ）外道と違いが無い。
先尼（セーニャ）外道は、『自分の身中には、ある神性が有る。
神性は、痛（いた）みと痒（かゆ）みを知る事ができる。
神性は、身が壊れた時、身を出て去る。
家が焼かれれば、家の主は出て去る様な物である。
身という家は変化する。
神性という家の主は常に不変である』と言っていた。
明らかにすると、先尼（セーニャ）外道の様な説は、善悪をわきまえていない。
誰が先尼（セーニャ）外道の様な説を正しいとするのか？　いいえ！　先尼（セーニャ）外道の様な説は正しくない！
私が近頃、諸方を訪ねた時、先尼（セーニャ）外道の様な説を多く見聞きした。
先尼（セーニャ）外道の様な説は、最近も盛んである。

三百人、五百人の群衆を集めて、雲の様な群衆を見ながら、先尼外道の様な説を『南方の仏教の教義である』と言う。

先尼外道の様な説は、三十三祖の大鑑禅師の『六祖壇経』を改竄して取り、劣悪な作り話を付け足し、三十三祖の大鑑禅師という聖者の考えを削除して、後世の学徒の心を惑わし乱している。

どうして先尼外道の様な説が、仏の言葉、仏の教えであろうか？　いいえ！

先尼外道の様な説は、仏の言葉、仏の教えではない！

苦しい。私の宗教、仏教は滅びてしまったのか。

もし見聞きしたり覚知したりする性質を誤って仏の性質としてしまえば、維摩は『(仏)法は見聞きと覚知を離れている。

もし見聞きしたり覚知したりすれば、見聞きしたり覚知したりしたのであり、法を求めていない』と言わなかったであろう」

大証禅師と呼ばれる南陽慧忠は、曹谿山の、古代の仏と等しい三十三祖の大鑑禅師の高弟である。

南陽慧忠は、天上の天人と人にとっての、大いなる善知識を持つ人である。

南陽慧忠が話した主旨を明らめて、学に参入する「鏡」、「見本」とするべきである。

先尼外道の様な説を知って従う事なかれ。

宋の時代の中国の山の主人にいる輩に、南陽慧忠の様な人はいない。

昔から、未だかつて、南陽慧忠に等しい善知識を持つ人は、この世に出現していない。

なのに、世の人々は、誤って「臨済義玄も徳山宣鑑も南陽慧忠に等しい」と思っている。

この様な輩(やから)ばかりが多い。

明らかに「見る眼」が有る師がいない事を憐れむべきである。

仏祖が保持して任している即心是仏は、外道と「二つの乗り物」の段階の人が夢にも見ない物である。

ただ、仏祖と仏祖だけが、即心是仏してきた、究め尽してきた、聞き知ってきたものが有るし、行って理解して取ってきたものが有るし、証して知ってきたものが有る。

仏は、百草をひねって引いてきたり、打ち無くしたりしてきた。

けれども、仏は、「丈六」の「金身」である「仏身」によって説かなかった。

「即公案」が有って、「現成公案」、「手がかりが形成されて現される」のを待たないし、敗壊を回避しない。

「是三界」が有って、退出ではないし、「唯心」、「唯一の心」ではない。

「心牆壁」、「心は牆壁である」が有って、未だ泥水を捏(こ)ねないし、未だ造作をしない。

即心是仏に参入して究めたり、

心即仏是に参入して究めたり、

仏即是心に参入して究めたり、

即心仏是に参入して究めたり、

是仏心即に参入して究めたりする。

この様に参入して究めるのは、正しく即心是仏であるし、この様に参入して究め挙げて、即心是仏として正しく伝えるのである。

この様に正しく伝えて、即心是仏は、今日までに至っている。

正しく伝えてきている「即心是仏」の「心」とは、「一心は一切の法、物である」、「一切の法、物は一心である」という事である。

そのため、古代の人は「もし人が心を会得して理解すれば、大地には、わずかな土地も無い」と言った。

知るべきである。

心を会得して理解すれば、天という蓋（ふた）は落とされるし、遍（あまね）く地は裂かれ破られる。

または、心を会得して理解すれば、大地は厚さをわずかに増す。

古代の高徳の僧は「妙なる清浄な明るい心とは、どの様な物であるか？妙なる清浄な明るい心とは、山や河や大地であるし、太陽や月や星々である」と言った。

明らかに知る事ができる。

心とは、山や河や大地であるし、太陽や月や星々である。

けれども、「心とは、山や河や大地であるし、太陽や月や星々である」という言葉を理解して取る際に、進めば不足が有るし、退けば余る。

山や河や大地である心とは、山や河や大地だけである。更に、波は無いし、風と霞は無い。

太陽や月や星々である心とは、太陽や月や星々だけである。更に、霧は無いし、霞は無い。

生死が来たり去ったりする心とは、生死が来たり去ったりするだけである。更に、迷いは無いし、悟りは無い。

牆壁や瓦礫である心とは、牆壁や瓦礫だけである。更に、泥は無いし、水は無い。

地水火風という四大(元素)と、色受想行識という「五蘊」の心とは、四大(元素)と「五蘊」だけである。更に、馬はいないし、猿はいない。

椅子や、害虫を払うための毛がついた棒である払子である心とは、椅子や払子だけである。更に、竹は無いし、木は無い。

このため、即心是仏は、汚染させない即心是仏なのである。

諸仏は、汚染させない諸仏なのである。

そのため、即心是仏とは、「発心、修行、菩提、涅槃」、「心する事、修行、覚、寂滅」する諸仏である。

「発心、修行、菩提、涅槃」、「心する事、修行、覚、寂滅」を未だしない心は、即心是仏ではない。

たとえ、一刹那に、心して修行して証する心も、即心是仏であるし、

たとえ、一つの極微の中に、心して修行して証する心も、即心是仏であるし、

たとえ、無量劫に、心して修行して証する心も、即心是仏であるし、

たとえ、一念の中に、心して修行して証する心も、即心是仏であるし、

たとえ、半分の拳の中に、心して修行して証する心も、即心是仏である。

なのに、「長い時間、修行して仏に成るのは、即心是仏ではない」と言う人は、即心是仏を未だ見ていないし、未だ知らないし、未だ学んでいないのである。

「長時間、修行して仏に成るのは、即心是仏ではない」と言う人は、即心是仏を開演する正しい師に出会っていないのである。

諸仏とは、釈迦牟尼仏である。釈迦牟尼仏は、即心是仏である。過去、現在、未来の諸仏は共に、仏と成る時は、必ず釈迦牟尼仏と成るのである。

「過去、現在、未来の諸仏は共に、仏と成る時は、必ず釈迦牟尼仏と成る」のが、即心是仏である。

正法眼蔵　即心是仏

その時、千二百三十九年、雍州の宇治郡の観音導利興聖宝林寺にいて僧達に話した。

洗浄

仏祖が護って保持してきている修行と証が(一つに成った物が)有る。
仏祖が護って保持してきている修行と証(が一つに成った物)とは、汚染されない事である。

ある時、三十三祖の大鑑禅師は、南嶽山の観音院の大慧禅師と呼ばれる三十四祖の南嶽の懐譲に「また修行と証を借りるか否か？」と質問した。
南嶽の懐譲は、「修行と証が無いわけではないが、汚染するのは駄目である」と言った。
大鑑禅師は、「ただ、諸仏は汚染されない事を護ろうと念頭に置いているのである。
あなたもまた、そうである。
私も、またそうである。
西のインドの祖師達もまた、そうである」と言った。

「大比丘三千威儀経」には「身を洗浄するとは、大便と小便を洗い、十本の指の爪を切る事である」と記されている。
身心が汚染されなくても、身を洗浄する法が有るし、心を洗浄する法が有る。
ただ、身心を洗浄するだけではなく、国土や樹の下をも洗浄するのである。

国土に未だかつて塵、汚れが無くても、国土を洗浄するのを、諸仏は護ろうと念頭に置いているのである。
諸仏は、仏という結果に到達してもなお、洗浄を後退させないし、洗浄を廃止しない。
洗浄の主旨を量り尽すのは難しい。
作法とは主旨である。
「道」、「真理」の会得とは作法である。

「華厳経」の「浄行品」には、「大便と小便をする時は、全ての生者が、汚れを除いて、『貪欲と怒りと愚かさ』という『三毒』を無くしますます様にと願うべきである。
水に触れた時は、全ての生者が、無上の道へ向かい、この世を解脱する法を会得しますます様にと願うべきである。
水で汚れを洗浄する時は、全ての生者が、清浄な忍辱を十分に備えて、最終的に汚れを無くしますます様にと願うべきである」と記されている。

水は、必ずしも、本来、清浄でもないし不浄でもない。
身は、必ずしも、本来、清浄でもないし不浄でもない。
「諸法」、「全ての物」は、必ずしも、本来、清浄でもないし不浄でもない。
水は、未だ、情が有るわけでもないし情が無いわけでもない。
身は、未だ、情が有るわけでもないし情が無いわけでもない。
「諸法」、「全ての物」は、未だ、情が有るわけでもないし情が無いわけでもない。

釈迦牟尼仏が説かれた事は、この様な事である。
けれども、水によって身を清めるのではない。
仏法によって仏法を保持し任すと身を清めるのである。
仏法によって仏法を保持し任すと身を清めるのを洗浄と呼ぶ。

洗浄は、仏祖の一つの身心を親しく正しく伝えてもらっているのである。
洗浄は、仏祖の一つの言葉を近くで見聞きしているのである。
洗浄は、仏祖の一つの光明に明らかに住んでいるし、仏祖の一つの光明を保持しているのである。
洗浄は、無量、無限の功徳を形成させて現させるのである。

修行を身心に身につけさせた時、久しく長い、本からの行いを十分に備えて円満に成就する。
このため、修行している身心を本から現すのである。

十本の指の爪を切るべきである。
十本の指の爪とは、左右の両手の指の爪である。
足の指の爪も同じく切るべきである。

経には「爪の長さが、もし一粒の麦くらいの大きさに成れば罪を得てしまうのである」と記されている。
そのため、爪を長くしてはいけない。

爪が長いのは、自然と外道の先例と成ってしまう。

特に、爪を切るべきである。

それなのに、宋の時代の中国の僧の中で、学に参入する「見る眼」が備(そな)わらない輩(やから)の多くが爪を長くしている。

一寸、二寸、三寸、四寸も爪が長い輩もいる。

(一寸は約三センチメートル。)

爪が長いのは、仏法に反している。

爪を長くする身心は、仏法の身心ではない。

仏の家である仏教を習わない事によって、爪を長くするのである。

道に適(かな)っている徳が有る長老の僧は、爪を長くしない。

髪を長くしている輩もいる。

僧が髪が長いのも、仏法に反している。

爪や髪が長いのは、中国という大国の僧の身のこなしであるとして「正しい法であろう」と誤る事なかれ。

道元の亡き師である、古代の仏と等しい五十祖の如浄は、「髪を剃(そ)る事を理解しない人は、俗人でもなく、僧でもなく、『畜生』、『動物的人間』である。

古くからの仏祖のうち、誰か髪を剃(そ)らない者がいたか？　いいえ！　古くから仏祖は皆、髪を剃(そ)ってきている！

今、髪を剃る事を理解しない人は、真の『畜生』、『動物的人間』である」という深い戒めの言葉を天下の僧のうち髪や爪が長い輩に言った。

この言葉を如浄が僧達に話すと、長年、髪を剃らないでいた輩の多くが髪を剃った。

また、如浄は、堂に上って法を説く時も、普段、法を説く時も、髪や爪が長い輩を、指を弾いて鳴らして口うるさく叱責した。

また、如浄が、普段、法を説く時に、「どういう道理か知らずに、乱雑に長い髪や長い爪なのである。
『南閻浮提』、『この世』の身心を『道』から外れさせている事を憐れむべきである。
九百年頃や千年頃から祖師の道が廃れてきているので、髪や爪が長い輩が多い。
髪や爪が長い輩が、寺院の主人と成ってしまい、国家が高徳の僧へ与える称号を僭称して、全ての生者の為という外見を偽装するのは、人や天人にとっての不幸である。
今、天下の諸々の山の寺に、道心が有る者は全くいないし、『道』、『真理』を会得した者は久しく絶えて、いないし、ならずものしかいない集団ばかりである」と説くと、諸方の妄りに長老を名乗る輩は恨まなかったし何も言わなかった。

知るべきである。

僧が長い髪なのは、仏祖が戒める物であるし、長い爪は、外道の身のこなしなのである。

仏祖の法の子孫である僧は、髪や爪を長くするという仏法に反する事を好んではいけない。

仏祖の法の子孫は、身心を清めるべきである。

仏祖の法の子孫である僧は、髪を剃(そ)るべきであるし、爪を切るべきである。

小便と大便の洗浄を怠る事なかれ。

舎利弗(シャーリプトラ)は、小便と大便の洗浄の法によって外道を降伏させた事が有った。

外道が本(もと)から期待していなくても、身子(シャーリプトラ)が平素から願いを懐(ふところ)に抱(いだ)いていなくても、仏祖が身につけている物が形成されて現されると、誤った教えに従っていた人は自然と降伏するのである。

樹の下や露地で修行して習う時は、便所が無い。そのため、適切な谷などの河で、土で小便と大便を洗浄するのである。

土で小便と大便を洗浄する時には、灰ではなく、十四丸の土を用いる。

十四丸の土を用いる法とは、まず、法衣を脱いで畳(たた)んで置いた後、黒くない黄色の土を取って、一丸当たり大きい大豆くらいの大きさに分けて、石の上や適切な所に、七丸を一列に並べて置いて、十四丸を二列に並べて置く。

その後、手を土と共に磨(す)る石を用意する。

その後、排泄する。

排泄後、木のへらや紙を使う。

その後、水辺に行って土で洗浄する。
まず、三丸の土を携(たずさ)えて洗浄する。
一丸の土を手のひらに取って、少しばかりの水を入れて、一丸の土を水に合わせて溶(と)いて、泥よりも薄い液状に完全にして、まず小便を洗浄する。
次に、別の一丸の土で、同様にして大便を洗浄する。
次に、別の一丸の土で、同様にして汚れを除いて触れた手を洗浄する。

寺に僧が住む様に成ってからは、便所を建てている。
便所を東司と呼ぶ。ある時は圊と呼ぶ。厠と呼ぶ時も有る。
僧が住む所に必ず有るべき施設である。

便所に行く法とは、必ず手拭(てふ)きを持つ。
便所に行く法とは、手拭きを二つに折って、左の肘(ひじ)の上の辺りで衣服の袖(そで)の上に掛(か)ける。

便所に着いたら、清浄な竿(さお)に手拭きを掛けるべきである。
清浄な竿(さお)に手拭きを掛ける法とは、肘(ひじ)にかける様に、手拭きを二つに折って掛ける。
「大衣」の「九条袈裟」、「上衣」の「七条袈裟」を着ていたならば、手拭きに並べて、清浄な竿に掛けるべきである。
落ちない様に並べて、竿に掛けるべきである。
慌てて投げて、竿に掛ける事なかれ。
よくよく「記号」するべきである。

「記号」とは、竿に名称を書いたり、名称を白い紙に書いて月の輪の様に円にして竿に付けて並べたりしておき、どの名称の竿に自分の衣を置いたか忘れないし他人を混乱させないのを「記号」と言うのである。
人が多く来ても、自分や他人の竿の位置を乱してはいけない。

この間、多数の人が来て並んだら、自分の両手を合わせて会釈(えしゃく)するべきである。

会釈する時には、必ずしも向かい合って身をかがめない。
ただ、合わせた自分の両手を胸の前に当てて、会釈の様子を表すのである。
便所では、上半身を覆う法衣を来ていない時にも、来た人に会釈の様子を表すのである。
もし両手が共に未だ汚物に触れておらず、両手に物を持っていない時には、自分の両手を合わせて会釈するべきである。
もし既に一方の手を汚物に触れさせていて、他方の手に物を持っていない時は、他方の手だけで片手で会釈するべきである。
片手で会釈するには、片手を仰向(あおむ)けにして指先を少し曲げて水を掬(すく)う様にして、頭をわずかに下げる様にして会釈するのである。
他人が片手で会釈してくれれば、自分も片手で会釈するべきである。
自分が片手で会釈すれば、他人も片手で会釈してくるべきである。

上半身を覆う法衣や下半身を覆う法衣を手拭きの傍(かたわ)らに掛ける。

上半身を覆う法衣を手拭きの傍(かたわ)らに掛ける法は、上半身を覆う法衣は、脱いで、二つの袖(そで)を後ろへ合わせて、二つの脇(わき)の下を取って合わせて引き上げれば、二つの袖(そで)は重なる。

この時、左手で首のうなじの裏の本（もと）を取り右手で脇を引き上げれば、二つの袖（そで）の下の膨（ふく）らみと左右の両襟（りょうえり）が重なる。

両袖（りょうそで）と両襟（りょうえり）を重ねて縦に半分に折って、上半身を覆う法衣の首のうなじの辺りを清浄な竿（さお）の奥へ投げ越す。すると、裾（すそ）や袖口（そでぐち）などは竿の手前に掛かる。例えば、上半身を覆う法衣の合わされた腰の辺りが清浄な竿に掛かる。

次に、竿に掛けていた手拭きの両端を引き、互い違いにして、上半身を覆う法衣を超えて引いて、手拭きの掛かっていない方で再び互い違いにして結び留める。二、三周も互い違いにして結んで、上半身を覆う法衣を清浄な竿から地に落とさない様にするのである。

そして、上半身を覆う法衣に向かって手を合わせる。

次に、襷（たすき）を取って両肘（りょうひじ）に掛ける。

次に、桶（おけ）の台に行って、清浄な桶（おけ）に水を入れて、右手に持って便所の中に上がる。

桶に水を入れる法は、満杯に満たす事なかれ。九分目を限度とする。

(九十パーセント以下に水位を抑える。)

便所の戸の前で履物（はきもの）を換えるべきである。

便所用の履物を履（は）いて、自分の履物を便所の戸の前で脱ぐのである。

これを「換鞋」と呼ぶ。

「禅苑清規(寺の規範)」には「便所には、あらかじめ行っておくべきである。

便意を催して、逼迫して、慌てる事なかれ。

袈裟を畳んで、寮の机の上か清浄な竿の上に置くべきである」と記されている。

便所の中に入って、左手で戸を閉める。

次に、桶を正面の桶を置く場所に置く。

次に、桶の水を少しばかり便器の中に移す。

次に、立ったまま便器に向かって、三回、右手の指を弾いて鳴らすべきである。

右手の指を弾いて鳴らす時、左手は握って左腰に付けておく。

次に、下半身を覆う法衣の裾を短くして、便所の戸の方を向いて、便器にまたがり、かがんで、排泄する。

便器の外を汚す事なかれ。

排泄している間は黙っているべきである。

壁を隔てて他人と話して笑ったり、独りで声を上げて歌ったりする事なかれ。

涙や鼻水や唾（つば）などで汚す事なかれ。

力み過ぎる事なかれ。

便所の壁に字を書いてはいけない。

木のへらで地面に線を描く事なかれ。

排泄後、木のへらを使うべきである。また、紙を使う法も有る。

使用済みの紙を用いてはいけない。

字が書かれた紙を用いてはいけない。

未使用の木のへらと使用済みの木のへらを区別するべきである。

木のへらは八寸の長さで三角に作る。

（一寸は約三センチメートル。）

太さは手の親指の大きさである。

漆（うるし）を塗った物も有るし、塗っていない物も有る。

使用済みの木のへらは、使用済みの木のへら用のごみ箱に投げ捨てておく。

未使用の木のへらは、未使用の木のへらを置く台に有る。

未使用の木のへらを置く台は、便器よりも最も手前の辺りに置かれている。

木のへらや紙を使った後、洗浄する法は、右手に桶（おけ）を持って左手をよく濡（ぬ）らした後、左手で水を掬（すく）う形を作って水を受けて、まず、三回、左手で小便を洗浄する。次に、左手で大便を洗う。

洗浄の法の通りにして清らかに清潔にするべきである。

水で左手で洗浄している間、手荒く桶（おけ）を傾けて水を手以外にこぼして水を早く失う事なかれ。

水による洗浄が終わったら、桶（おけ）を正面の桶を置く場所に置いて、木のへらを取って左手で拭（ぬぐ）って乾かす。または、木のへらを紙で拭（ふ）いて乾かすべきである。

左手か紙で、二つの排泄器官をよく拭（ふ）いて乾かすべきである。

次に、右手で下半身を覆う法衣の裾（すそ）を引いて整えて、右手で桶（おけ）を持って、便所を出て、便所用の履物（はきもの）を脱いで自分の履物を履（は）く。

次に、桶（おけ）の台に行って、桶（おけ）を本の場所に置く。

次に、手を洗浄する。

右手で灰用の匙(さじ)を取って、灰を掬(すく)って瓦(かわら)か石の上に置き、右手で水をしたたらせて、汚物に触れた左手を洗浄する。左手を瓦(かわら)か石に当てて磨(と)いで洗うのである。例えば、錆(さび)が有る刀を砥石に当てて磨(と)ぐ様に。

この様にして、灰で三回、左手を洗うべきである。

次に、瓦(かわら)か石の上に土を置き、右手で水をしたたらせて、三回、左手を洗うべきである。

次に、右手で、石鹸(せっけん)の代わりと成る皂莢(サイカチ)の莢(さや)を取って小さな桶(おけ)の水に入れて浸(ひた)して、両手を合わせて、もみ洗う。腕に至るまでも、よく洗うのである。

心を込めて丁寧に洗うべきである。

灰で三回、土で三回、石鹸(せっけん)の代わりと成る皂莢(サイカチ)の莢(さや)と水で一回、洗うのである。

(手の皮膚が荒れない様に、)合わせて七回を限度とする。

次に、大きな桶(おけ)で両手を洗う。

大きな桶(おけ)で両手を洗う時、灰や土や薬を用いず、ただ水か湯で洗うのである。

一回、洗って、その水を小さな桶(おけ)に移して、新しい水を大きな桶(おけ)に入れて両手を洗う。

「華厳経」には、「水で手を洗う時は、全ての生者が、すぐれた手を得て、仏法を受けて保持しますようにと願うべきである」と記されている。

水を掬(すく)う杓(しゃく)を取るのは、必ず右手でするべきである。

水を掬(すく)っている間、桶(おけ)と杓(しゃく)で音を鳴らし、うるさくする事なかれ。

水をまき散らしたり、皂莢(サイカチ)の莢(さや)をまき散らしたり、桶(おけ)の台の周辺を濡(ぬ)らしたりして、慌てる事なかれ。汚す事なかれ。

次に、公共用の手拭(てふ)きで手を拭く。または、自分の手拭きで手を拭く。

手を拭き終わったら、清浄な竿(さお)の下、上半身を覆う法衣の前に行って、襷(たすき)を竿に掛ける。

次に、手を合わせた後、結んでいた手拭きを解き、上半身を覆う法衣を取って着る。

次に、手拭きを左肘(ひだりひじ)に掛けて香を塗る。

公共用に塗る香が有る。香木を瓶(びん)の形にしている。その大きさは親指大である。長さは指四本分くらいに作られている。一尺余りの細い縄を瓶(びん)の両端に貫通させている。これを清浄な竿に掛けておいてある。

これを両手の手のひらを合わせて、もみ合わせれば、香気が自然と両手に香る。

襷(たすき)を竿に掛ける時は、襷(たすき)同士が重なって乱雑に成る事なかれ。

この様にするのは、皆、仏の国土を清めるためであるし、仏の国の荘厳を輝かせるためである。

明確に詳細にするべきである。

慌てて洗浄するべきではない。

「急いで終わらせて帰ろう」と思って洗浄する事なかれ。

密かに、「便所では仏法を説かない」、「便所での洗浄は仏法であるので、便所では別に仏法を説かない」道理を思い量(はか)るべきである。

人が来る方面をしきりに気にする事なかれ。

「便所の洗浄には冷水が良い」。熱湯は腸炎などを引き起こすと言われている。

手を洗うのに温かい湯を用いるのは妨げが無い。

釜(かま)を一つ置くのは、湯を沸かして手を洗うためである。

「禅苑清規(寺の規範)」には「晩の後は、湯を沸かして、油を乗せ、常に湯を温かくし続け、僧達を動揺させる事なかれ」と記されている。

そのため、水と共に湯を用いる事を知る事ができる。

もし便所の中に、汚物が触れる事が有れば、戸を閉めて、「触」という札(ふだ)を戸に掛けるべきである。

もし便所の中で、誤って桶(おけ)を落とす事が有れば、戸を閉めて、「落桶」という札(ふだ)を戸に掛けるべきである。

「触」や「落桶」の札(ふだ)が掛かっている便所に入る事なかれ。

もし、先に便所に入っていても、外で他の人が指を弾(はじ)いて鳴らしたら、可能な限り短時間で済ませて出るべきである。

「禅苑清規(寺の規範)」には「もし洗浄しなければ、床の上で坐禅したり、仏法僧の三宝を礼拝したりする事なかれ。また、人からの礼拝を受ける事なかれ」と記されている。

「大比丘三千威儀経」には「もし大便や小便を洗わなければ、軽い罪に成る。

また、もし大便や小便を洗わなければ、僧の清浄な坐具の上に座ったり、仏法僧の三宝を礼拝したりする事なかれ。

もし大便や小便を洗わなければ、仏法僧の三宝を礼拝しても、福徳は無い」と記されている。

そのため、道をわきまえる鍛錬をする道場では、洗浄を優先するべきである。

どうして僧が仏法僧の三宝を礼拝しない事が有るだろうか？　いいえ！
どうして僧が人からの礼拝を受けない事が有るだろうか？　いいえ！
どうして僧が人を礼拝しない事が有るだろうか？　いいえ！

仏祖の道場では、必ず洗浄を身につけさせる。
仏祖の道場の中の人は、必ず洗浄を十分に身につける。

洗浄は、自己が強(し)いて為(な)す物なのではない。身につけたものによる言行なのである。

洗浄は、諸仏の常の作法である。
洗浄は、諸祖の日常茶飯事である。
洗浄は、この世の諸仏だけではなく、十方の仏の作法である。
洗浄は、浄土と、「穢土」、「この世」の、仏の作法である。

学の無い輩(やから)は、「諸仏は便所での洗浄を身につけていない。『娑婆(しゃば)』、『苦しみを耐え忍ぶ場所』である『この世』の諸仏が身につけている物は、浄土の諸仏と同様ではない」と思ってしまう。
「この世の諸仏が身につけている物は、浄土の諸仏と同様ではない」と思ってしまう輩(やから)は、仏道を学んでいない。

知るべきである。

清浄と汚れは、この世を離れた人から滴り落ちている「血」、「労苦」である。

諸仏は便所での洗浄を身につけていると知るべきである。

「血」、「労苦」は、ある時は暖かいし、ある時は凄まじい。

(神には免疫、自浄能力が有る。)

「十誦律」の「第十四」には「釈迦牟尼仏の息子である羅睺羅は、出家をしたが戒を受ける前の時に、(寝る場所が無くて、)釈迦牟尼仏の便所で寝た。釈迦牟尼仏は、起きると、右手で羅睺羅の頭をなでて、『あなたが出家したのは、貧窮したためではなく、富貴を失ったためではなく、ただ道、真理を求めるためである。出家では苦しみを忍耐するべきである』という言葉を詩で言った」と記されている。

そのため、仏の道場に便所は有るし、仏の便所の中で身につけさせるのは洗浄なのである。

祖師から祖師へ伝えられてきている作法が今もなお残っているのは、古代を慕う人にとっての喜びである。

出会い難い物に出会えたのである。

まして、如来、釈迦牟尼仏は、申し訳なくも便所の中で、羅睺羅のために法を説いた。

便所は、仏が法の輪を転じた、仏が法を説いた、一つの場所なのである。

便所という道場での進退を、仏祖は正しく伝えている。

「摩訶僧祇律」の「第三十四」には、「便所は家などの東や北に建てたりする事なかれ。便所は家などの西や南に建てたりするべきである。小便所も同様である」と記されている。

「摩訶僧祇律」の「第三十四」に従うべきである。

「摩訶僧祇律」の「第三十四」の便所の配置は、西のインドの諸々の寺の便所の配置である。

如来、釈迦牟尼仏が現実に存在した時の便所を建てる時の配置である。

知るべきである。

一人の仏だけの作法ではなく、釈迦牟尼仏を含む七仏の道場である。七仏の寺である。

諸仏が始めたわけではなく、諸仏が身につけている物なのである。

洗浄について明らめていなければ、寺院を建てても、仏法を修行しても、誤りが多いし、仏が身につけている物が備わらないし、仏の「菩提」、「覚」は目の前に現れない。

もし道場を建てるならば、寺院を建てるならば、仏祖が正しく伝えている法の作法に従うべきである。

もし道場を建てるならば、寺院を建てるならば、正統に正しく伝えられている法の作法に従うべきである。

正統に正しく伝えられている法の作法は、正統に正しく伝えられているので、功徳を集め重ねている。

仏祖が正しく伝えている正統な仏祖の法の子孫でなければ、仏法の身心を知らない。

仏法の身心を知らなければ、仏の家業を明らめていない。

今、大いなる師である釈迦牟尼仏の仏法が遍(あまね)く十方に伝わっているのは、仏の身心が形成されて現されているのである。

仏の身心が形成されて現されている時は、仏法が遍(あまね)く十方に伝わっているのである。

正法眼蔵　洗浄

その時、千二百三十九年、冬、雍州の宇治県の観音導利興聖宝林寺において僧達に話した。

礼拝得髄

無上普遍正覚を修行する時には、導師を得る事が最も難しい。

無上普遍正覚の導師は、男性や女性などの外見で選ぶのではなく、優(すぐ)れた無上普遍正覚者を選ぶべきである。

無上普遍正覚の導師は、古今、人ではない場合が有ったし、「野狐の精霊」だが善知識を持つものである場合が有るだろう。

これが、「(師の)髄を得る」、「師を得る」時の様子であるし、良い導師なのである。

これが、「因果に暗くない」事であるし、「爾我渠」、「あなたは私の頭である」なのである。

導師に出会ったら、全ての縁(えん)を投げ捨てて、わずかな時間をも無駄に過ごさず精進して道をわきまえるべきである。

心が有っても修行するべきであるし、心が無くても修行するべきであるし、半端な心でも修行するべきである。

頭の燃えている火を払う様に、実現が近いのをつま先で立って待つ様に、学ぶべきである。

こうすれば、悪口を言う「魔党」、「仏敵ども」、「悪党」に侵(おか)されない。

こうすれば、「断臂得髄の祖(の様な者)」、「二十九祖の慧可(の様な者)」や「(古い)身心を脱ぎ落とす師」に、他でもない自分が既に成っている。

「(師の)髄を得る」、「師の理解を会得する」のは、「法を伝えてもらう」のは、必ず、真心によるのであるし、信心によるのである。

真心は、外から来たという跡など無いし、内から出た様子など無い。
真心は、ただ、まさに、法を重んじて身を軽んじるのであるし、俗世を逃れて「道」、「真理」を住み家（すみか）とするのである。
わずかでも法よりも身を顧（かえり）みる事を重んじると、法が伝わってこないし、「道」、「真理」を会得する事は無い。

法を重んじる志は、一つだけではない。
他の教訓を待たずに、法を重んじる志の例を一つ、二つ、ひねって挙げてみよう。

「法を重んじる」とは、たとえ、寺の円柱でも、灯籠でも、諸仏でも、野干（ジャッカル）でも、鬼神でも、男性でも女性でも、大いなる法を保持させられ任されたものであれば、「私の髄をあなたは会得した」と導師から言われたものであれば、「身心を牀座施して」、「自分の身心を譲（ゆず）って捧げて」、無量の時間でも仕えるのである。
身心を得る事は簡単である。身心は世界に稲（いね）、麻（あさ）、竹、葦（あし）の様に多数存在する。
法に出会う事は稀（まれ）である。
釈迦牟尼仏は「無上普遍正覚を説き明かす師に出会うには、素性を見る事なかれ。

容貌を見る事なかれ。
欠点を嫌う事なかれ。
行いを考える事なかれ。
ただ知を尊重するがゆえに、日々、百両、千両の多数の金で食わせるべきである。
天の食を捧げるべきである。
『天華』、『天の華』をまき散らして捧げるべきである。
日々、『朝と日中と日没後』という『三時』に礼拝し恭(うやうや)しく敬って、悩ませる事なかれ。
この様にすれば、『菩提』、『覚』への道は必ず得られる。
私、釈迦牟尼仏は、悟る事を思い立って心してから、この様に修行して、今、無上普遍正覚を得ているのである」と言った。

そのため、樹や石にも法を説いてくださいと願うべきであるし、田畑や集落にも法を説いてくださいと求めるべきである。
寺の円柱に法について質問するべきであるし、牆壁にも参入して究めるべきである。

昔、帝釈天は、井戸に落ちた野干(ジャッカル)を師として礼拝して法について質問した事が有り、井戸に落ちていた野干(ジャッカル)を大いなる菩薩と呼んだと伝えられていて、「天にいる」という尊い環境にいる帝釈天は「井戸に落ちていた」という「依業」、「過去の行いの報いによる環境」の卑しさを無視して井戸に落ちていた野干(ジャッカル)を師とした。

それなのに、仏法の学が無い愚者の類の似非僧侶は、誤って、「私は、(長年修行している)大いなる出家者なので、法を会得している若い人を拝むべきではない」と思ってしまうし、

「私は、長年修行しているので、法を会得している後輩を拝むべきではない」と思ってしまうし、

「私は、称号が有るので、法を会得している称号が無い人を拝むべきではない」と思ってしまうし、

「私は、『法務司』なので、法を会得している他の僧を拝むべきではない」と思ってしまうし、

「私は、『僧正司』なので、法を会得している在俗の男性と在俗の女性を拝むべきではない」と思ってしまうし、

「私は、『三賢十聖』なので、法を会得している女性の出家者などを拝むべきではない」と思ってしまうし、

「私は、王族なので、法を会得している家臣を拝むべきではない」と言ってしまう。

このような愚者は、「いたずらに父の国を離れて他国の道を踏み従う」ので、仏道の学が無いのである。

唐の時代の中国の、趙州真際大師は、(六十一歳の時、)悟りを求める事を思い立って心して、旅立って諸方を旅した時に、「七歳の児童であっても、もし私よりも優れていれば質問する。百歳の老人であっても、もし私に及ばなければ教える」と言った。

七歳の児童に法について質問する時、老人でも七歳の児童を礼拝するべきである。

趙州真際大師の志は、不思議な変わった志である。

趙州真際大師の志は、古代の仏の心の術である。

「道」、「真理」、「法」を会得した女性の出家者が、この世に出現した時、法を求めて学に参入した男性の出家者が、法を会得した女性の出家者の会に身を投じて礼拝して法について質問するのは、学に参入した者の優れた行跡である。

例えば、喉(のど)が渇(かわ)いている時に水に出会ったかの様に成るべきである。

中国の、灌渓志閑は、臨済義玄の弟子である、高徳の長老である。

ある時、臨済義玄が灌渓志閑の来るのを見て灌渓志閑を取り抑えて引き留めると、灌渓志閑は「わかりました」と言ったので、臨済義玄は灌渓志閑を解放して「では、解放するので、あなたは、しばらく留まりなさい」と言った。

この時から、灌渓志閑は、臨済義玄の弟子と成った。

灌渓志閑が、臨済義玄を離れて、末山尼了然の所へ行くと、末山尼了然は「どんな所を離れて、近づいたのか？」と質問した。

灌渓志閑は、「分かれ道です」と言った。

末山尼了然は、「あなたは、なぜ塞(ふさ)いで来なかったのか？」と言った。

灌渓志閑は、無言で礼拝して師弟の礼を設(もう)けた。

灌渓志閑は、「末山(尼了然)とは、どの様なものですか?」と末山尼了然に逆に質問した。

末山尼了然は、「頭を出さない」と言った。

灌渓志閑は、「末山(尼了然)の中の人とは、どの様な者ですか?」と言った。

末山尼了然は、「男性や女性などの外見ではない」と言った。

灌渓志閑は、「(末山尼了然よ、)あなたは、なぜ変身しないのですか?」と言った。

末山尼了然は、「私は『野狐の精霊』ではない。何を変身させるというのか?」と言った。

灌渓志閑は、(無言で)礼拝した。

ついに、灌渓志閑は、「発心して」、「心して」、三年間、園頭を務めた。

灌渓志閑は、後に住持に成った時、「私は、仏法の父である臨済義玄の所で半分の水を得て、仏法の母である末山尼了然の所で半分の水を得た。合わせて一つの水を作って飲み終わって、今に至ってなお、糧としている」と僧達に話した。

(
水は知の例えである。
知は魂の糧である。
)

今、灌渓志閑の言葉を聞いて古代を慕(した)うと、末山尼了然は、高安大愚の高弟である。

末山尼了然には命の力が有って、灌渓志閑の仏法の母と成った。

臨済義玄は、黄檗希運の法の正統な子孫、正統な弟子である。

臨済義玄には鍛錬の力が有って、灌渓志閑の仏法の父と成った。

原文の「爺」とは「父」という意味である。

原文の「嬢」とは「母」という意味である。

灌渓志閑が末山尼了然を礼拝して法を求めたのは、志による優れた行跡である。後進にとっての慣れるべき志である。「遮(さえぎ)る入口である関(せき)と固定観念を撃破した」と言うべきである。

妙信尼は、仰山慧寂の弟子である。

仰山慧寂は、「廨院主」を選ぶ時に、知事や侍者や蔵主の退職者である「勤旧」や、維那や典座などを三回務めた退職者である「前資」などに、「誰が、廨院主に相応(ふさわ)しい人だろうか？」と質問した。

問答のやり取りをして、ついに、仰山慧寂は、「妙信尼は、女性だが、優れた志が有り、まさに、廨院主を務める事ができる」と言った。

「勤旧」や「前資」といった僧達は皆、認めた。

ついに、妙信尼は、廨院主を務めた。

その時、仰山慧寂の会にいた竜や象(ゾウ)の様な高徳の僧は、恨(うら)まなかった。

実に、廨院主は重職なので、廨院主の選考を担当した人は自分としては自重し(て用心して選考し)たであろう。

妙信尼が廨院主の職を務めて廨院にいた時、蜀という国の僧が十七人いて、十七人の僧達は集団を結成して師を訪ね道を尋ねていて、仰山慧寂のいる仰山に登ろうとして夕暮れに廨院に泊まった。

十七人の僧達は休息している時の夜話で、風が幡（はた）を扇（あお）いでいるのを見て「風が動いている」と言う僧と「幡（はた）が動いている」と言う僧が理に適（かな）わない問答をしていたので曹谿山の三十三祖の大鑑禅師が「風が動いているのでもなく、幡（はた）が動いているのでもなく、あなた達の心が動いているだけである」と言った話を挙（あ）げた。

十七人の僧達は各々、大鑑禅師の言葉について正しくない事を言った。

その時、廨院主であった妙信尼は、壁の外にいて、十七人の僧達の大鑑禅師の言葉についての話を聞いて、「十七人の僧達は、十七頭の盲目の驢馬（ロバ）であると言える。惜しむべきである。師を訪ね道を尋ねて、どれだけの靴（くつ）を費やしたのか？　仏法を未だ夢にも見ていないのである」と言った。

その時、寺の雑務を行う在俗者である「行者（あんじゃ）」もいて、廨院主であった妙信尼が十七人の僧達の大鑑禅師の言葉についての話を否定しているのを聞いて十七人の僧達に話したが、十七人の僧達は共に妙信尼が否定したのを恨まないどころか、己（おのれ）が正しくない事を言ったのを恥じて、身なりを十分に整えてから、焼香して礼拝して妙信尼に尋ねた。

妙信尼は、「近くに来なさい」と言った。

十七人の僧達の近づく歩みが未だ終わらない時に、妙信尼は「風は動かないし、幡（はた）は動かないし、心は動かない」と言った。

妙信尼が、この様な手段を取ると、十七人の僧達は共に、省（かえり）みる所が有り、礼を言って感謝して師弟の作法を取り、速やかに西の蜀に帰り、ついに仰山に登らなかった。

実に、これは、未熟な修行者の及べる所ではなく、仏祖が正統に代々伝えている「道」、「真理」による業（わざ）なのである。

そのため、今でも、「住持」や「半座」の職が空（あ）いている時は、法を会得している女性の出家者に「住持」や「半座」を頼むべきである。
男性の出家者が高齢であっても経験豊富な老人であっても、法を会得していない人は必要ではない！
僧達といった全ての生者の為（ため）の主人には、必ず、真理を明らかに見通す見る眼が有る人を選ぶべきである。

それなのに、身心にとらわれている道理に暗い人は、頑迷なので、世俗でも笑うべき事が多い。
まして、仏法では、身心にとらわれている道理に暗い人は、頑迷なので、笑うべき事が多いのは、言うまでも無い。
また、夫の姉などの女性の、法を伝えられて師に成った僧を、礼拝する事に同意しない人もいる。
法を伝えられた女性の僧を礼拝しない人は、知る事が無い上に、学んでいないので、「畜生」、「動物的人間」に近いし、仏祖には遠い。
ひたすらに仏法に身心を投じようと深く心に蓄える人には、仏法は必ず憐れんでくれる。
愚かな人や天人にすら真心を感じる思いが有る。
諸仏の正しい法には真心を感じて応（こた）える憐れみが有る！
土や石や砂礫にも真心を感じる精神は有る。

宋の時代の中国の寺では、寺にいる女性の出家者が、もし「法を会得している」という声が有れば、国家から尼寺の住持に任命する皇帝の命令をもらう。

そして、法を会得した女性の出家者は寺で堂に上って法を説くが、寺の住持以下、僧達は皆、堂に来て立って、法を会得した女性の出家者が説く法を聴く。

問答も法を会得した女性の出家者と行う。

これが古くからの見本である。

法を会得したものは、一人の真の古代の仏と等しいものなので、「昔の誰々である」として見(まみ)えてはいけない。

法を会得したものは、私を見る時に、特別に、新しい人として接する。

私は、法を会得したものを見る時に、今日出会ったばかりの方(かた)として接する。

例えば、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を伝えられて保持している女性の出家者は、四果の声聞と独覚や三賢十聖の菩薩が来て礼拝して法について質問したら、礼拝を受けるべきである。

肉体が男性である人は、何によって高貴なのであろうか？　肉体が男性であるだけでは高貴ではない！

虚空は虚空であるし、地水火風の四大(元素)は四大(元素)であるし、色受想行識の「五蘊」は「五蘊」である。

肉体が女性である人は、何によって高貴なのであろうか？　肉体が女性であるだけでは高貴ではない！

「道」、「真理」を会得する人は、肉体が男性でも女性でも「道」、「真理」を会得する。

ただし、肉体が男性でも女性でも、法を会得した事だけを敬い重んじるべきである。肉体が男性や女性である事を論じる事なかれ。

これが、仏道の極めて絶妙である法則である。

また、宋の時代の中国で、居士と呼ばれるものは、未出家の修行者である。

居士は、草の屋根の小さな質素な庵（いおり）に住んで、夫や妻を持つものもいるし、孤独で潔白なものもいる。

居士は、なお、「俗世という『塵（ちり）』、『汚れ』に在俗して労苦し」、「煩悩に労苦し」、「在俗しているせいで、林が生（お）い茂（しげ）る様に、煩悩という雑草が蔓延している」と言えるであろう。

けれども、居士が真理を明らめる所が有ると、雲や霞（かすみ）の様に諸方を訪ねる僧達が集まって礼拝して教えを請うのは、出家者の達道者と同じである。

たとえ、女性でも、「畜生」、「人以外の動物」でも、真理を明らめる所が有ると、雲や霞（かすみ）の様に諸方を訪ねる僧達が集まって礼拝して教えを請うのは、出家者の達道者と同じである。

仏法の道理を未だ夢にも見ていない人は、たとえ百歳の老練な出家者でも、法を会得した在俗の男性や女性に及ばない。

仏法の道理を未だ夢にも見ていない人は、たとえ百歳の老練な出家者でも、敬うべきではない。

仏法の道理を未だ夢にも見ていない人には、たとえ百歳の老練な出家者でも、ただ客と主人の礼儀だけである。

仏法を修行し、仏法の道を会得して理解して取ったものは、たとえ七歳の女性でも、「男性の出家者、女性の出家者、男性の在家信者、女性の在家信者」の「四衆」の導師であるし、全ての生者の思いやり深い父である。

例えば、「法華経」の「提婆達多品」の「龍女成仏」の様に。

（「法華経」の「提婆達多品」で、娑竭羅竜王の八歳の娘は男性に成ってから仏に成った。）

仏法を修行し、仏法の道を会得して理解して取ったものを、たとえ七歳の女性でも、捧げものをして恭（うやうや）しく敬うのは、諸仏、如来と等しくであるべきである。

これは、仏道の古くからの見本である。

これを、知らず、単一に伝えてもらえない人は、憐れむべき人である。

また、日本と中国の古今で、帝位の女性の人がいる。

国土は皆、女帝、女王の領土である。

国土に住む人は皆、女帝、女王の家臣と成る。

これは、人を敬うのではなく、位を敬うのである。

女性の出家者も、人(、肉体)を敬う事は、昔から無い。ひとえに法を会得した事を敬うのである。

また、阿羅漢と成った女性の出家者がいたら、四果に伴う功徳は皆、来る。

阿羅漢と成った女性の出家者は四果の功徳を伴うのである。

人や天人の、誰が四果の功徳よりも優れているであろうか？　いいえ！人や天人よりも四果の功徳は優れている！

三界の諸々の天人は皆、四果の功徳に及ばない。

要するに、家を捨てる者と成った人、出家者を、諸々の天人は皆、敬う。

まして、如来の正しい法を伝えられて、無上普遍正覚を求める修行者が大いなる心を起こしたら、敬わない者が誰かいるであろうか？　いいえ！　敬う！　敬わない人がおかしいのである。

無上普遍正覚を敬わない人は、「法」、「真理」の悪口を言う愚者である。

また、我が国、日本では、天皇の娘や大臣の娘が皇后に準じたり、皇后が院号を受けたりするが、髪を剃(そ)った人もいれば、髪を剃(そ)らない人もいる。

それなのに、名声や利益を貪(むさぼ)り愛着する、出家者に似た似非僧侶(えせそうりょ)は、高位の家系の女性の所へ走り、頭を下げて頭を履物(はきもの)に打たないと言う事が無い。

日本の似非僧侶(えせそうりょ)は、主従関係の従者よりも劣悪である。

まして、日本の似非僧侶(えせそうりょ)には、高位の家系の女性の下僕(げぼく)と成って年を経る人も多い。

日本の似非僧侶(えせそうりょ)が、日本という小国、僻地(へきち)に生まれて、高位の家系の女性の下僕(げぼく)に成る事が邪悪な風習であるとも知らない事は、憐れである。

千二百四十年頃のインドや中国では似非僧侶(えせそうりょ)が高位の家系の女性の下僕(げぼく)に成る事は未だ無い。

我が国、日本だけ、似非僧侶(えせそうりょ)が高位の家系の女性の下僕(げぼく)に成る事が有る。

悲しむべきである。

無闇に無思慮に髭(ひげ)と髪を剃(そ)って如来の正しい法を破るのは、深く重い罪の業(わざ)であると言える。

ひとえに「この世を渡り歩く道は空華といった夢幻である」のを忘れる事による物である。

女性の下僕として縛られている事は、悲しむべきである。

無益である、この世を渡り歩く道のために、日本の似非僧侶は、女性の下僕と成る。

無上普遍正覚のため、法を会得した敬うべき人を、なぜ敬わないのか？法を重んじる志が浅いので、法を求める志に漏れが有るからである。

日本の似非僧侶は、既に財宝を貪っている時、「女性の財宝だから獲得できる」と思っている。

法を求める時は、志が、日本の似非僧侶の法を求める志よりも優れているべきである。

もし、法を求める志が、日本の似非僧侶よりも優れていれば、草木や牆壁も正しい法を施してくれるし、天地の万物も正しい法を与えてくれる。

必ず知るべき道理である。

真の善知識を持つ人に出会っても、未だ真の志を立てて法を求めていない時は、法という水の潤いを被れない。

明確に詳細に鍛錬するべきである。

また、最も愚かな人は、「女性は(男性の)性欲の対象とされる」と思う心を改めず女性を見る。

仏の子は、「女性は男性の性欲の対象とされる」と思う心を改めず女性を見てはいけない。

「女性は男性の性欲の対象とされる」として女性を忌むならば、「男性は女性の性欲の対象とされる」ので、一切の全ての男性も忌むべきか？　いいえ！

「汚染の原因と成る」という意味では、男性も誤った知覚の対象と成るし、女性も誤った知覚の対象と成るし、男性でも女性でもないものも誤った知覚の対象と成るし、空華といった夢幻も誤った知覚の対象と成る。

水に映った形を間接的な原因として性行為する人がいたし、太陽の光や熱を間接的な原因として性行為する人がいた。

天人も誤った知覚の対象と成るし、霊も誤った知覚の対象と成る。

誤った知覚の対象と成る間接的な原因は数え尽す事ができない。

「八万四千の知覚の対象が有る」と言われているが、皆、捨てるべきか？　見てはいけないのか？　いいえ！

「律」には「男性の出家者は口（くち）と排泄器官といった二箇所の穴で性行為をしたら、女性の出家者は口（くち）と性器と排泄器官といった三箇所の穴で性行為をしたら、『波羅夷罪』、『最も重い重罪』と成るので、僧達の集団から永久追放する」と記されている。

そのため、「女性は男性の性欲の対象とされる」として女性を嫌ってしまえば、一切の全ての男性と女性は互いに嫌い合う事に成ってしまって、男性も女性も出家の機会を逃すかもしれない。

この道理を詳細に点検して調べるべきである。

外道にも妻がいない人もいる。
妻がいなくても、仏法に入らなければ邪悪な見解を持つ外道である。

仏の弟子も、男性の在家信者には妻がいる人もいるし、女性の在家信者には夫がいる人もいる。
夫や妻がいても、仏の弟子であれば、人の中でも天上でも、仏の弟子以外で肩を並べられる者はいない。

また、唐の時代の中国にも愚かな僧がいて、誤った願いと志を立てて、「いくつもの生や時代を超えて永遠に女性を見ない」と言った。

この願いは、どんな法による物なのか？　この世の法による物なのか？
仏法による物なのか？　外道の法による物なのか？　「天魔」、「魔」、「仏敵」、「神の敵」による物なのか？
女性に、どんな咎（とが）が有ると言うのか？
男性に、どんな徳が有ると言うのか？

男性でも悪人はいる。
女性でも善人はいる。

仏法を聞く事を願い、迷いを離れる事を求めるのは、男性だけでもないし、女性だけでもない。
迷いを断てない時は、男性でも女性でも迷いを断てない。
迷いを断って真理を証して悟った時、男性と女性で差異は無い。

また、「永遠に女性を見ない」と願ってしまったならば、全ての仏と菩薩が立てる「四弘誓願」のうち「衆生無辺誓願度」、「無限の全ての生者を仏土に渡す誓願」を立てる時に、女性を捨ててしまうのか？

女性を捨ててしまうものは、菩薩ではない。

女性を捨ててしまう心は、仏の「慈悲」、「思いやり」とは言えない！

「永遠に女性を見ない」という誤った言葉は、迷いという酒に深く酔って狂った声聞による言葉である。

人と天人は「永遠に女性を見るべきではない」という誤った言葉を真理であると信じてはいけない。

また、「女性が原因で、昔、犯罪が有った」として女性を嫌ってしまえば、一切の全ての菩薩をも嫌ってしまう事に成る。

もし、「女性が原因で、後に、犯罪が起きるであろう」として女性を嫌ってしまえば、悟りを求める事を思い立って心している、一切の全ての菩薩をも嫌ってしまう事に成る。

全ての菩薩を嫌ってしまえば、一切の全てを捨てる事に成ってしまう。それでは、何によって仏法が形成されて現されるのか？

「永遠に女性を見ない」という誤った言葉は、仏法を知らない愚者の理に反した狂った言葉である。

悲しむべきである。

もし「永遠に女性を見ない」のが正しいのであれば、釈迦牟尼仏や存命中の諸々の菩薩は皆、「女性を見る」という犯罪を犯していると言うのか？

また、もし「永遠に女性を見ない」のが正しいのであれば、釈迦牟尼仏や存命中の諸々の菩薩は、「永遠に女性を見ない」あなたよりも無上普遍正覚を求める心が浅いと言うのか？

静かに(考えて心の中で考えを)観察するべきである。

仏法を伝えられて保持した祖師や釈迦牟尼仏が存命中の菩薩は、「永遠に女性を見ない」という言葉が無かったので、仏法に未だ学ぶべき物が有ったのか？　未熟だったのか？　と誤った仮定をして考えて学に参入するべきである。

もし「永遠に女性を見ない」のが正しいのであれば、全ての女性を仏土に渡さないだけではなく、法を会得した女性が「この世」に出現して人や天人のために法を説く時も、来て聴いてはいけないのか？

法を会得した女性が「この世」に出現して人や天人のために法を説く時、来て聴かない人は、菩薩ではなく、外道である。

宋の時代の中国を見ると、久しく修行している僧に似ている、似非僧侶(えせそうりょ)が、いたずらに無駄に海の砂を数えて、生死という海をさまよっている。

しかし、女性であるが、善知識を持つ人の所に行って尋ね、道をわきまえる鍛錬をして、人や天人の導師に成る人もいる。

徳山宣鑑に餅(もち)を売らず捨てた老婦人などがいる。

男性は、出家者でも、いたずらに無駄に教えという海の砂を数えて、仏法は夢にも未だ見ない事を憐れむべきである。

知覚の対象を見たら、明らめる事を習うべきである。

知覚の対象を恐れて逃げる事だけを習うのは、「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の声聞の教えと行いである。

東を捨てて西に隠れようとしても、西にも東と西の境界は有る。

（

「境」、「境界」には「知覚の対象」という意味が有る。

女性を見なくても、想像の中で女性を見る事ができる。

）

たとえ知覚の対象から逃げたと思っても、明らめなければ、遠くても知覚の対象と成る。

(女性を見なくても、想像の中で女性を見る事ができる。）

たとえ知覚の対象から逃げても、明らめなければ、解脱の可能性は無い。

遠くに有る知覚の対象への欲求はますます深く成る。

(満たされない欲求は強く成ってしまう。）

また、日本には、一つの笑い事が有る。「結界の境地」とか「大乗の道場」とか言って、女性の出家者といった女性を入って来させないのである。

邪悪な風習が長く伝えられて、人は善悪をわきまえない。

修行者は改めないし、博識な学者も考える事をしない。

「化身の行いが理由である」とか「古代の先人が遺した風習である」とか言って、更に論じようとしないのは、笑うと腸が耐えられないほどの笑い事である。

何者の化身の行いが理由であると言うのか？　賢者か？　聖者か？　天人か？　霊か？　十聖か？　三賢か？　等覚か？　妙覚か？

また、古い物事を改めてはいけないのであれば、迷いの生死のくり返しを捨ててはいけないのか？

大いなる師である釈迦牟尼仏は、無上普遍正覚者である。

釈迦牟尼仏は、明らめるべき物事を、ことごとく明らめている。

釈迦牟尼仏は、行うべき物事を、ことごとく行っている。

釈迦牟尼仏は、解脱するべき物事を、皆、解脱している。

今の誰も釈迦牟尼仏の足元にも及ばない！

存命中の釈迦牟尼仏の会には、「男性の出家者、女性の出家者、男性の在家信者、女性の在家信者」という「四衆」がいたし、竜を含む「八部衆」がいたし、「三十七部」がいたし、「八万四千部」がいた。

釈迦牟尼仏の会は、新しい「仏界」、「仏土」を結成している「四衆」や「八部衆」といった仏達の集まりである(と言える)。

どの仏の会に女性の出家者や女性や竜女といった「八部衆」がいないと言うのか？　いいえ！

「如来、釈迦牟尼仏が存命中の釈迦牟尼仏の会よりも清浄である」と(誤って)言われている「女性の出家者を入れない結界」を私達は願うべきではない。

なぜなら、「女性の出家者を入れない結界」は「天魔界」、「魔界」、「仏敵界」である(と言える)。

仏の会の「法」、「作法」は、この世でも、仏土でも、過去、現在、未来の諸仏の仏土でも、同一である。

「釈迦牟尼仏の会と違う『法』、『作法』が有る会は、仏の会ではない」と知るべきである。

四果は究極の位である。なぜなら、大乗でも小乗でも究極の位である四果の功徳を区別しない。
四果を証した女性の出家者は多い。
四果を証した女性の出家者は、三界でも、十方の仏土でも、どの世界にも至る事ができる！

誰が、四果を証した女性の出家者の行動を遮(さえぎ)る事ができるであろうか？

また、仏に成った妙覚は無上の位である。
女性が仏に成ったら、諸方の全てのものを究め尽す。
誰も、仏に成った女性を遮(さえぎ)って到達できない様にできない！
仏に成った女性には遍(あまね)く十方を照らす功徳が有る。境界では、どうにもできない！

また、天女を遮(さえぎ)って仏土に到達させないのか？
聖女を遮(さえぎ)って仏土に到達させないのか？(原文は「神女」である。)
天女も聖女も、未だ迷いを断って悟っていない時は、生死をくりかえす生者である。
天女も聖女も、罪を犯す時は犯すし、罪を犯さない時は犯さない。
人の女性も動物の女性も、罪を犯す時は犯すし、罪を犯さない時は犯さない。
天への道、神への道を遮(さえぎ)ろうとする人は誰か？

女性は、過去、現在、未来の仏の会に行くし、「仏所」、「仏土」で学に参入する。

誰が、仏土と仏の会の法と異なる悪法を仏法として誤って信じて受け入れるであろうか？　いいえ！

仏土と仏の会の法と異なる悪法を教える人は、世間の人をだまし惑わす最悪の愚者である。

仏土と仏の会の法と異なる悪法を教える人は、野干（ジャッカル）が穴を人に奪われたくないと惜しむよりも愚かである。

また、仏の弟子の位は、菩薩であれ、たとえ声聞であれ、第一位が男性の出家者、第二位が女性の出家者、第三位が男性の在家信者、第四位が女性の在家信者である。

仏の弟子の位は、天上でも人の間でも知られている。

仏の弟子の位は、長く知られている。

仏の弟子の第二位である女性の出家者は、転輪聖王よりも優れているし、帝釈天よりも優れている。

女性の出家者が入れない場所が有るべきではない。

女性の出家者の位は、日本という小国、僻地（へきち）の国王や大臣の位と並べるべきではない。

それなのに、今、「女性の出家者が入ってはいけない」と（誤って）言われている道場を見ると、農夫といった俗人、学が無い人、木こりといった俗人も乱入しているし、国王、大臣、役人、宰相も入っている。

農夫などの俗人たちと、女性の出家者を、仏道の修行という観点で比較したり、得ている位という観点で比較したら、優劣は、どう成るであろうか？

女性の出家者は俗人たちよりも優れている！

たとえ、この世の法で論じたとしても、仏法で論じたとしても、女性の出家者が入れない場所が有ったとしたら、農夫などの俗人たちと学が無い人も入るべきではない。

日本という小国は、女性の出家者が入ってはいけない場所を作るという非常に錯乱している行跡を初めて残してしまった。

三界の父、思いやり深い父である釈迦牟尼仏の長女である、女性の出家者が、日本という小国に来たら、入る事を妨害される場所が有る事を憐れむべきである。

また、「女性の出家者を入れない『結界』」と言われる所に住んでいる輩（やから）は、十悪業を犯す事を恐れないし、十重禁戒をあれもこれも犯す。

罪を造る界として、罪を造らない人である女性の出家者を嫌うのか？

僧の集団の和を破壊する「逆罪」は重罪である。

「女性の出家者を入れない『結界の地』」に住んでいる者は、僧の集団の和を破壊する「逆罪」も造っている。

「女性の出家者を入れない結界」という「魔界」は、正に、破るべきである。

仏の化の導きを学ぶべきである。

「仏界」、「仏土」に入るべきである。

「女性の出家者を入れない結界」を破る事と、「仏土」に入る事は、正に、仏からの恩に報いる事である。

「女性の出家者を入れない結界」をねつ造した古代の先人とやらは真の「結界」の意味を知っていたのか否か？
「女性の出家者を入れない結界」は誰から伝承してもらったのか？
誰が印を「女性の出家者を入れない結界」をねつ造した人に与えたのか？

諸仏が結んでいる場所である「大界」、「大いなる世界」にいるものは、諸仏も全ての生者も、大地も虚空も、迷いという束縛を解脱して諸仏の妙なる法という源に帰るのである。
この世界を一度踏んだ全ての生者は、仏の功徳を被るのである。
仏法に違反しない功徳が有る。
清浄を獲得する功徳が有る。
一方を結んでも、法界を全て結ぶ事に成る。
一つだけを結んでも、法界を全て結ぶ事に成る。
水で結界を結ぶ事が有るし、心で結界を結ぶ事が有るし、空で結界を結ぶ事が有る。
真の「結界」には、必ず伝承が有るので、知るべきである。
真の「結界」を結ぶ時は、「甘露」を注いだ後、仏法僧の三宝への帰依の敬礼をして、土地を清める等してから、「この土地は、遍く法界と自然と結ばれて清められる」という言葉を唱える。
「この土地は、遍く法界と自然と結ばれて清められる」という真の「結界」を結ぶ時に唱える言葉の主旨を、今、日頃、「結界」という言葉を口にする老人は知っているのか否か？
私、道元が思うに、あなたたちは、「結界」の「結」という言葉の中に「遍く法界と自然と結ばれている」という意味が有る事を知らないのである。

あなたが声聞の酒に酔って小さな土地を大いなる世界と思い込んでいる、と知る事ができる。

願わくば、日頃の迷いという酔いが速やかに醒(さ)めて、諸仏の大いなる世界である遍(あまね)く世界に違反しないべきである。

全ての生者を仏土へ渡し終える、全ての生者を受け入れる、諸仏の化の導きを一切の全ての生者に与える、諸仏の功徳を礼拝して恭(うやうや)しく敬うべきである。

諸仏の功徳を礼拝して恭(うやうや)しく敬うのを、「仏道の髄を得る」、「仏道を会得する」と言うのである。

正法眼蔵　礼拝得髄(礼拝して会得する)

千二百四十年、「清明日」、観音導利興聖宝林寺で記した。

谿声山色

無上普遍正覚では、「道」、「真理」による業(わざ)で伝授される仏祖が多い。(常啼菩薩が自身の骨を砕いて髄を法涌菩薩に捧げた、といった)粉骨砕身の先例が有る。

二十九祖の慧可の「断臂得髄」の主旨を学ぶべきである。

釈迦牟尼仏が前世で燃灯仏のために髪を敷いて泥を覆った主旨も間違える事なかれ。

各々が殻(から)を脱ぐ時、従来の知見や理解にとらわれず、長い年月で未だ明らめていなかった事が、すぐに目の前に現れる。

各々が殻(から)を脱ぐ時は、自分も知らないし、誰も理解していないし、自分も予期できないし、仏の眼も見張っていない。

どうして各々が殻(から)を脱ぐ時を人の思考で推測できるであろうか？　いいえ！　各々が殻(から)を脱ぐ時は人の思考で推測できない！

宋の時代の中国に、東坡居士と呼ばれる蘇軾がいた。蘇軾の字(あざな)は、子瞻と言う。

蘇軾は、詩人の真の竜である。

蘇軾は、仏の海の、竜や象(ゾウ)の様な高徳の僧に学んだ。

蘇軾は、仏の海の、深い淵(ふち)も泳いだ。

蘇軾は、「層雲」、「霧雲」も昇り降りした。

蘇軾は、ある時、廬山に行った夜に、谷川が流れている音を聞いて「道」、「真理」を悟った。

蘇軾は、詩を作って、東林の常総に示して、「谷川の音という声は、仏の『広長舌』である。

山の色形は、『清浄身』、『清浄である仏の身体』である。

夜に成って、(仏の『広長舌』である谷川の音という声などは、)『八万四千』の詩(を話す)。

後日、どの様に例えたら他人に伝える事ができるだろうか?」と言った。

蘇軾が詩を東林の常総に示すと、東林の常総は詩を肯定した。

東林の常総は、照覚と呼ばれる。

東林の常総は、黄龍慧南の法の子孫、黄龍慧南の弟子である。

黄龍慧南は、慈明と呼ばれる石霜楚円の法の子孫、石霜楚円の弟子である。

ある時、蘇軾が仏印了元に見(まみ)えると、仏印了元は法衣と仏戒などを授けた。

そのため、蘇軾は、常に法衣を着て修行した。

蘇軾は、価値をつけられないほど貴重な宝玉で飾られた帯を仏印了元に捧げた。

当時の人々は「凡人、俗人が及べない事である」と言った。

蘇軾が谷川の音という声を聞いて「道」、「真理」を悟った出来事には、後進の人を潤(うるお)す有益さが有る!

(法輪の)何回転か、「(谷川や山という)現身説法」、「仏は(谷川や山といった)色々な形で法を説く事」の化の導きに漏(も)れている様に成っている事を憐れむべきである。
(「説法」、「法を説く事」を「法輪を転じる」と言う場合が有る。)
さらに、どうすれば、山の色形を見て、谷川の音という声を聞いて、「一句である」とか「半句である」とか「八万四千の詩である」とできるのか?
山と川に隠れている色形や音声が有る事を恨みたく成ってしまう。
また、山と川には「現れる」時と理由が有る事を喜ぶべきである。
仏の「広長舌相」である谷川は流れて、飽(あ)きて怠(おこた)る事が無い。
仏の身体という山の色形には生死が無い。
けれども、山と川が「現れる」時を「近い」と習うのか？　山と川が「隠れている」時を「近い」と習うのか？
「一枚である」とするのか？　「半分である」とするのか？
(蘇軾の話を聞くまでの)従来の年月では山と川を見聞きしていなかった。
夜に成った時に山と川を見聞きする事はわずかである。
今、仏道を学び修行している「菩薩」、「無上普遍正覚を求める修行者」も、「山は流れる。水は流れない」という言葉によって、学び入るための門を開くべきである。

蘇軾は、「道」、「真理」を悟った夜の前日に、東林の常総と「無情説法」、「石や草木といった情の無いものが法を説いている」話に参入して質問していた。
蘇軾は、東林の常総の言葉で迷いを転じて悟る事は未だできなかったが、谷川の音という声を聞いて「逆流の波が高く天を打つ」様に悟った。

そのため、谷川の音という声が蘇軾を悟らせたが、谷川の音という声だけが蘇軾を悟らせたのか？　東林の常総の「無情説法」話という川が注いだ谷川の音という声が蘇軾を悟らせたのか？

恐らく、東林の常総の「無情説法」話の響きが未だ止(や)まず、密かに谷川の夜の音声に乱入したのだろう。

誰が「東林の常総の『無情説法』話という水の量は一升である」と納得するのか？

（一升は約一・八リットル。）

誰が「一つの海である」として川を海に合流させるのか？

究極的に言えば、蘇軾が「道」、「真理」を悟ったのか？　山と川が「道」、「真理」を悟ったのか？

誰が、真理を明らかに見通す見る眼が有って、仏の「広長舌相」と「清浄身」、「清浄である仏の身体」を突然に明らかに見るのであろうか？

また、かつて香厳の智閑が三十七祖の潙山霊祐の会で仏道を学び修行していた時、潙山霊祐は「あなたは、聡明で博学である。経典の注釈書の中から記憶に保持した(受け売りの真理の)言葉ではなく、父と母から生まれる以前から、私のために(真理の)言葉を一句、理解して取って来なさい」と言った。

香厳の智閑は、(真理の言葉を)言おうと数回したが、言い得る事ができなかった。

香厳の智閑は、深く身心を恨(うら)み、長年に渡って蓄えてきた書籍を開いて(真理の言葉を)探したが、それでもなお呆然とした。

香厳の智閑は、ついに火で長年に渡って集めてきた書籍を焼いて、「絵に描いた餅(もち)は、飢えを止める事ができない。
私は誓う。
この生で仏法を会得する事を望まない。
ただ『行粥飯僧』、『他の僧の食べ物を用意する僧』と成ろう」と言って、他の僧の食べ物を用意する務めだけして年月を経て行った。

「行粥飯僧」と言う者は、他の僧達に食べ物を用意する。日本の「給仕」の様な者である。

こうして、香厳の智閑は、潙山霊祐に「香厳の智閑は、身心が真理に暗くて愚かで、『道』、『真理』を会得できず言い得ない。和尚様、潙山霊祐様、私のために、真理の言葉を言ってください」と言った。
潙山霊祐は「私は、あなたのために言う事を辞さないつもりは有るが、(言ってしまったら)恐らくは後に、あなたは私を恨(うら)んでしまうであろう(。だから、言わない)」と言った。

かくして、香厳の智閑は、年月が経つと、南陽慧忠の行跡を訪ねて武当山に入山して、南陽慧忠の草の屋根の庵(いおり)の跡で、草を結びつけて庵(いおり)と成して暮らした。
香厳の智閑は、竹を植えて友としていた。
香厳の智閑は、ある時、道を平らにするために掃(は)いて清掃していると、小石が飛んで竹に当たり音が鳴ったのを聞いて突然、真理を大いに悟った。

香厳の智閑は、体を水で洗浄し飲食などを節制して身心を清めてから、潙山霊祐に向かって、焼香し礼拝して、「和尚様、潙山霊祐様が、昔、私のために真理を説いていたら、どうして今、真理を悟る事ができたでしょうか？　いいえ！　真理を悟れなかったであろう！　潙山霊祐様からの恩の深さは、父と母よりも優れている」と言った。

香厳の智閑は、ついに詩を作って「竹の音は一撃で私が知っていた物を忘れさせた。

更に私は自ら手を加えない。

振(ふ)る舞(ま)いを古くからの道にまで高く上げて、悄然(しょうぜん)とした心に堕ちない。

(真理は)どこにも跡は無い。

(真理は)音声や色形以外で身につける物である。

諸方の達道者は皆、上々の心を持つ者である、と言おう」と言って潙山霊祐に示した。

潙山霊祐は「この子は(真理に)通じた」と言った。

また、霊雲志勤は、三十年、「道」、「真理」をわきまえていた。

霊雲志勤は、ある時、気晴らしに山を見て歩き、山の麓(ふもと)で休息して、遥か遠くに有る人里を眺めた。その時は春であった。

霊雲志勤は、桃の花が花盛りであるのを見て、突然、「道」、「真理」を悟った。

霊雲志勤は、詩を作って潙山霊祐に示して「三十年、知の剣の達人に尋ねて、何回か葉が落ち枝が伸びた。桃の花を一見した後、直(す)ぐに、今に至るまでも、(私の心は)更に疑う事が無い(ので真理を悟ったのである)」と言った。

潙山霊祐は「仏縁によって真理に入った者は、永遠に、初心を失ったり堕落したりしない」と言って、仏法が霊雲志勤に伝わっている事を認めた。

仏縁によらないで真理に入る者はいない！
真理に入った者で初心を失ったり堕落したりする者はいない！
そのため、潙山霊祐の「仏縁によって真理に入った者は、永遠に、初心を失ったり堕落したりしない」という言葉は、霊雲志勤、独りだけの事を言っているのではない。

霊雲志勤は、ついに潙山霊祐から仏法を嗣ぐ事ができた。
もし山の色形が「清浄身」、「清浄である仏の身体」でなかったら、どうして霊雲志勤は潙山霊祐から仏法を嗣ぐ事ができたであろうか？　山の色形は「清浄身」、「清浄である仏の身体」であるので、霊雲志勤は潙山霊祐から仏法を嗣ぐ事ができた！

ある僧が長沙景岑に「どの様にしたら、山河大地を転じて自己に帰す事ができますか？」と質問した。
長沙景岑は「どの様にしたら、自己を転じて山河大地に帰す事ができるのか？」と言った。

長沙景岑が「どの様にしたら、自己を転じて山河大地に帰す事ができるのか？」という言葉を選び取ったのは、「自己は自然に自己である。たとえ、

自己が山河大地である、といえども、更に、帰す事に、こだわるべきではない」という意味である。

広照大師と呼ばれる琅邪の慧覚は、三十四祖の南嶽の懐譲の法の遠い子孫である。

ある時、華厳宗の講師の長水子璿が「清浄であるのが本来の自然のままの姿である。どうして突然に山河大地を生じるのか?」と質問した。

琅邪の慧覚は「清浄であるのが本来の自然のままの姿である。(あなたは、)どうして突然に(別の普通の)山河大地を生じるのか?」と示して言った。

清浄である本来の自然のままである真の山河大地を、普通の山河大地と誤ってはいけない、と琅邪の慧覚の言葉によって知る事ができる。

それなのに、霊感が無い文字だけの経典の似非学者である長水子璿は、清浄である本来の自然のままである真の山河大地をかつて夢にも聞いた事が無いので、真の山河大地を真の山河大地であると知らないのである。

知るべきである。

山の色形と谷川の音という声が仏の物でなければ、釈迦牟尼仏は「拈華瞬目」を開演しなかったであろうし、二十八祖の達磨が「(あなたは私の)髄を得た」と言ってほめた二十九祖の慧可は達磨を三回礼拝した後に自分の位置に戻って立つ事もしなかったであろう。

山の色形と谷川の音という声の功徳によって、大地と情の有る全ての生者と共に同時に仏に成った、明けの明星を見た時に道を悟った、釈迦牟尼仏といった諸仏がいるのである。

蘇軾、香厳の智閑、霊雲志勤といった皮袋である人達は、仏法を求める志が非常に深かった先人の賢人である。

蘇軾、香厳の智閑、霊雲志勤といった先人の行跡に、今の人は必ず参入して理解して取るべきである。

今も、名声や利益と無関係でいる真実の学への参入者は、蘇軾、香厳の智閑、霊雲志勤の様な志を立てるべきである。

遠方である日本では、千二百四十年頃から、真に仏法を求める人は稀（まれ）である。いないわけではないが、出会うのは困難である。

偶々（たまたま）、似非（えせ）出家者と成り、世俗から離れた真の出家者に似ていても、仏道を名声や利益への架（か）け橋とする人ばかりが多い。

憐れむべきである。

悲しむべきである。

速やかに過ぎ去ってしまう、この時間を惜しまず、この時間を虚しく「黒暗業」、「悪業」に換えてしまう。

何時（いつ）が、迷いから出て離れて「道」、「真理」を会得する機会であろうか？　今が、迷いから出て離れて「道」、「真理」を会得する機会である！

似非（えせ）出家者は、たとえ正しい師に出会っても、真の竜である正しい師を愛さないであろう。

似非（えせ）出家者の類（たぐい）を、過去の仏祖は「憐れむべき者である」と言った。

似非出家者は、前世に悪い原因が有るので、悪い結果に成るのである。
(未だ悟らない時の生を「前世」と言う場合が有る。)
似非出家者は、生まれても、法のために法を求める志が無いので、真の法の師に見えても真の竜である真の法の師を疑うのであるし、正しい法に出会っても正しい法に嫌われるのである。
似非出家者は、身心骨肉を、かつて法によって生じさせていないので、法と結びつかないのであるし、法を受用できないのである。

仏祖が宗としている事を師から弟子へ伝承してきたが、久しく成ってしまった。
「菩提心」、「悟りを求める心」は、昔の夢を説く様な物に成ってしまった。
財宝の山に生まれながら、財宝を知らない事を、財宝を見ない事を、更に、財宝を得られない事を、憐れむべきである。

もし「菩提心」、「悟りを求める心」を起こした後で、「六趣四生で」、「六道四生で」、「『地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上』の『六道』に『胎生、卵生、湿生、化生』の『四生』で生まれて」、輪廻転生しても、輪廻転生した因縁は皆、「菩提」、「悟り」への修行と誓願と成るのである。
そのため、従来、今まで、たとえ時間を虚しく過ごしていても、今の生が未だ過ぎない間に、急いで悟りを求める心を起こすべきである。
「願わくば、私と一切の全ての生者は、今の生から、いくつもの生を超えても、正しい法を聞く事が有ります様に。
正しい法を聞く事が有った時、正しい法を激しく疑いません様に。

正しい法を信じない事が有りません様に。
まさに、正しい法に出会った時、この世の法を捨てて仏法を受けて保持できます様に。
ついには、(釈迦牟尼仏の様に、)大地と情の有る全ての生者と共に同時に仏に成る事ができ得ます様に」といった悟りを求める心を起こせば、自然と、正しい、悟りを求める事を思い立って心する因縁と成るであろう。
　この心の術(すべ)を飽きて怠る事なかれ。

　また、この日本国は、海外の遠方であり、人の心は最悪に愚かである。
昔から、未だに、聖者は生まれないし、生まれながらの(真の)知者は生まれないし、更には、本当に仏道を学び修行する者は稀(まれ)である。
道心を知らない輩に道心を教えても、「論語」で孔子が言う様に「忠言は耳に逆らう」、「忠告は素直に聞き入れ難い」ので、自己を反省せず、(道心を教えて忠告した)他人を恨んでくる。
　「菩提心」、「悟りを求める心」を修行し誓願している時には、「菩提心」、「悟りを求める心」の有無や、仏道修行の有無を、「世の人々に知られよう」と思ってはいけない。「知られない様にしよう」と思って修行するべきである。まして、自称するべきではない。
　今の人が、真実を求める事は稀(まれ)である。
　そのため、例えば、身で修行する事が無くても、心に悟りが無くても、他人がほめた事が有る、「修行と理解を結びつけた」と自称する偽の人を、今の人は求める。
　「迷いの中で更に迷う」とは、偽の師を求める事である。

他人がほめた偽の師を求める邪念を速やかに投げ捨てるべきである。

仏道を学んで修行する時に、見聞きする事が難しいのは、正しい法の心の術である。

正しい法の心の術は、仏から仏へ伝えて来ている物である。

正しい法の心の術を、仏の光明として、仏の心として、伝えて来ているのである。

如来、釈迦牟尼仏が存命していた時から今日に至るまで、名声や利益を求めるのを仏道を学んで修行する用心としている様な輩が多いが、正しい師の教えに出会って、心を翻して正しい法を求めれば、自然と、道を会得している。

今、仏道を学んで修行する時にも、正しい法の心の術を見聞きする事が難しい憂いが有るだろう、と知るべきである。

例えば、初心の学び始めた時でも、長年修行している時でも、「道」、「真理」を伝授してもらえる機会を得る事も有るし、得られない事も有る。

古代を慕って習う優れた素質の人もいるであろうし、悪口を言って習わない仏敵もいるであろうが、両者共、愛するべきではないし、恨むべきではない。

どうして、(自分は劣悪な素質の人である、といった物事への)憂いが無いであろうか？　いいえ！　憂いが有る！

どうして、優れた素質の人や、仏敵なのに改心したからといって真理を伝授してもらった人を、恨まないであろうか？　いいえ！　恨んでしまう！

「貪欲と怒りや恨みと愚かさ」という「三毒」を「自分の心の、この思いは『三毒』である」と知っている輩（やから）は稀（まれ）であるので、（自分を戒めて、用心して、）恨まない様にするのである。

初めて仏道を求めた時の志を忘れないべきである。

初めて仏道を求める事を思い立って心した時は、他人を目的として仏法を求めず、名声や利益を投げ捨ててきた。

名声や利益を求めず、ただ一途（いちず）に「道」、「真理」の会得を志した。

国王や大臣が恭（うやうや）しく敬ってきたり捧げものをしてきたりする事を待ち望まないものである。

国王や大臣が恭（うやうや）しく敬ってきたり捧げものをしてきたりする事が有っても、本（もと）から待ち望んでいないし、求めてはいない。

人や天人に心が縛られる事を待ち望まない。

それなのに、愚かな人は、たとえ道心が有っても本（もと）からの志を早くも忘れて、誤って、人や天人からの捧げものを待ち望んでしまうし、人や天人から捧げものをされると仏法の功徳に至ったと喜んでしまう。

愚かな人は、国王や大臣の帰依が多ければ、自分の「道」、「真理」が形成されて現されたと思ってしまう。

人や天人からの捧げものや帰依は、仏道を学んで修行する上で、一つの「魔」、「仏敵」、「障害」と成る物である。

人や天人を思いやる心を忘れるべきではないが、人や天人からの捧げものや帰依を喜ぶ事なかれ。

「法華経」の「法師品」で釈迦牟尼仏は「(法華経には、)如来(、釈迦牟尼仏)がいる現在ですらなお、怨(うら)みや嫉(ねた)みが多い」と言った金言が有る事を見聞きした事が無いか？

愚者が真の賢者を知らず、矮小な劣悪な動物的人間が大いなる聖者を恨む理(ことわり)とは、この様な物である。

また、西のインドの祖師の多くは、外道、「二つの乗り物」の段階の人、国王などに害されたが、外道達が優れていたからではないし、祖師達に深慮遠謀が無かったからではない。

二十八祖の達磨は、西のインドから中国へ来た後、嵩山に留まったが、梁の武帝も知らなかったし、魏の主も知らなかった。

その時、菩提流支と、光統律師と呼ばれる慧光という(達磨の悪口を言って吠えた)二人の「犬」(、「動物的人間」)がいた。

菩提流支と、光統律師と呼ばれる慧光は、虚しい名声と邪悪に得ていた利益が、達磨という正しい人に遮(さえぎ)られる事を恐れて、天を仰いで天の太陽を見えなくしようとした。

達磨が存命していた時の菩提流支と、光統律師と呼ばれる慧光は、釈迦牟尼仏が存命していた時の提婆達多(デーヴァダッタ)よりもなお、ひどい。

憐れむべきである。

あなたたちが深く愛着する名声や利益を、達磨といった祖師は排泄物といった汚れたものよりも嫌うのである。

名声や利益を排泄物といった汚れたものよりも嫌う道理は、仏法の力量をきわめていない者には無いのである。

善人の悪口を言って吠える「犬」（、「動物的人間」）がいる、と知るべきである。

善人の悪口を言って吠える「犬」（、「動物的人間」）に悩む事なかれ。恨む事なかれ。

人々が導かれて仏道に引き入れられる様に祈るべきである。

「あなたは『畜生』、『動物的人間』である。『菩提心』、『悟りを求める心』を起こしなさい」と施(ほどこ)し設(もう)けるべきである。

先人の賢人は「この人は『人の顔をした畜生』、『動物的人間』である」と言った。

また、帰依し捧げものをしてくる「魔」、「仏敵」の類(たぐい)もいるであろう。

過去の仏祖は「国王、王子、大臣、役人の長(おさ)、バラモン、在俗の修行者に親近するな」と言っている。

実に、仏道を学び習おうとする人が忘れてはいけない行動の見本であるし、そうすれば、学び始めた、無上普遍正覚を求める修行者の功徳は進むに従って積み重なるであろう。

また、昔から、帝釈天が来て修行者の志を試したり、「魔波旬」、「仏敵」が来て修行者の修行を妨(さまた)げたりする事が有る。

天人からの試練や仏敵からの妨害は全て、名声や利益を求める心を離れない時に起きる。

大いに思いやり深く、全ての生者を広く仏土へ渡す願いが長年である時には、天人からの試練や仏敵からの妨害といった障害は無いのである。

修行の力量が、自然に国土を獲得する事が有るし、この世の運による栄達を迎える様な事が有る。

このような時も、更に、修行者をわきまえるべきである。

修行者の欠点に目をつぶる事なかれ。

愚かな人は、この世での成功を喜ぶ。例えば、愚かな犬が枯れた骨をしゃぶる様に。

賢者や聖者は、この世での成功を嫌う。例えば、世の人々が排泄物といった汚れたものを恐れる様に。

初心者の思い量り（はか）では、仏道を計る（はか）事は不可能である。計っても当たらない。

仏道は、初心者では計れないが、究極が無いわけではない。

仏道の究極的な奥義は、初心者による浅い理解とは異なる。

ただ、まさに、先人の聖者の行跡による道を踏み辿ろう（たど）として行動するべきである。

この時、師を訪ね「道」、「真理」を尋ねるのに、険しい（けわ）山を登ったり危険な航海をしたりするのである。

導師を尋ね、善知識を求めるには、「天から降下したり、地から湧き出たりする」のである。

導師と接する所で、情の有る者に言わせて、情の無いものに言わせて、身で聴き、心で聴く。

声を耳で聴くのは日常茶飯事だが、声を眼で聴くのは、仏法では必ずしも無いわけではない。

仏を見るのにも、自分の仏と他の仏をも見、大きい仏と小さい仏を見る。

大きい仏にも驚き恐れる事なかれ。小さい仏にも疑い悩む事なかれ。

大きい仏と小さい仏を暫定的に仮に山の色形と谷川の音という声であると認めるのである。

山の色形と谷川の音という声に、仏の「広長舌」が有って、「八万四千」の詩が有る。

遠く隔てた離れたものを挙げて示すのである。

独り抜き出たものを見通すのである。

このため、俗に言うと、「論語」の「仰ぎ見れば、いよいよ高く、切り込めば、いよいよ堅い」なのである。

過去の仏祖は「天に満ち、全て統治している」と言った。

春でも松は常緑であるという志を変えない操（みさお）が有り、秋には菊の花が最も秀でて美しいのは、「正しい」ばかりなのである。

善知識を持つ人が、この境地に至った時、人や天人の大いなる師と成る。

この境地に未だ至らずに、妄りに、人の為（ため）に成る事を知っていると思う人は、人や天人にとっての大いなる賊である。

春でも松は常緑であるという志を変えない操（みさお）を知らず、秋には菊の花が最も秀でて美しいのを見れない人に、どんな、牛などが食べる草が有るというのか？　どの様にして根源を裁断するというのか？

（牛は修行者の例えである。）

また、心でも肉でも飽きて怠る事が有ったり信じない事が有ったりしたら、真心で集中して過去の仏に「懺悔（ざんげ）するべきである」、「罪を告白して悔い改め許してもらうべきである」。

こうした時、過去の仏に懺悔(ざんげ)した功徳の力が、自身を救ってくれて清めてくれる。

過去の仏に懺悔(ざんげ)した功徳は、障害に止められない、清らかな信心と精進を生じさせて成長させる。

清らかな信心が一度(ひとたび)現される時、自分も他のものも同じく転じられる。

清らかな信心が一度(ひとたび)現された事による利益は、遍(あまね)く、情の有る者と情の無いものにもたらされる。

懺悔(ざんげ)の大意を言うと、「願わくば、たとえ私に過去の悪業が多く積み重なってしまい仏道での障害と成ってしまう因縁が有っても、仏道によって仏道を会得した諸々の仏祖が、私を憐れんで、私を悪業の積み重なりから解脱させて、仏道を学んで修行する障害を無くさせて、仏道の功徳の法の門を遍(あまね)く無尽法界に充満させて全て統治させて、憐れみを私に分けてください」と成る。

仏祖の過去は私達である(、と言える)。

私達は未来は仏祖と成るであろう(かもしれない)。

仏祖を仰ぎ見れば一人の仏祖である。

悟りを求める事を思い立って心した想いを観ても一つの想いである。

仏祖は憐れみを「七と八に通達」させているが、私達は機会を得たり落としてしまったりしているのである。

このため、龍牙居遁は「過去の生で未だ(真理を)了解していなければ、今、(真理を)了解するべきである。この生で、生を重ねてきた身を仏土に渡すの

である。古代の仏も、未だ悟っていない時は、今の人と同じであったのである。今の人も、悟れば、古代の仏なのである」と言った。

静かに(考えて)、龍牙居遁の言葉の理由に参入して究めるべきである。
証している仏を会得して継承するのである。

過去の仏に懺悔すれば、必ず、仏祖の目に見えない助けが有る。
心の念や、身の振る舞いのうち、隠していた事を露わに表して、過去の仏に告白して懺悔するべきである。
隠していた事を露わに表す力は、罪の根を消滅させる。
懺悔は、一途な、正しい修行であるし、正しい信心であるし、正しい「信身」、「身で信じる事」である。
正しく修行している時、谷川の音という声も色形も、山の色形も音という声も、共に、「八万四千」の詩を惜しまない。
もし自己が名声や利益や身心を捨てて惜しまなければ、谷川と山も「八万四千」の詩を惜しまないのである。
たとえ、谷川の音という声と山の色形が「八万四千」の詩を形成させて現させても、現させなくても、夜に成っても、真の谷川と山を真の谷川と山であると挙げて示す力を未だ尽していなければ、「あなたの自己は、谷川の音という声と山の色形である」と誰が見聞きするであろうか？　いいえ！　見聞きしない！

その時、千二百四十年、観音導利興聖宝林寺にいて僧達に話した。

諸悪莫作

「七仏通誡偈」で古代の仏達は「諸々の悪をなすなかれ。
(仏の教えを受け入れて、)諸々の善を行いなさい。
自ら自分の心を清めなさい。
これは、諸仏の(共通の)教えである」と言っている。

「七仏通誡偈」を、釈迦牟尼仏を含む七仏と祖師達が宗としている共通の戒めとして、前の仏から後の仏へ正しく伝えているし、後の仏は前の仏から嗣いでいる。

「七仏通誡偈」は、七仏だけではなく、「これは、諸仏の(共通の)教えである」。

「七仏通誡偈」の道理に鍛錬して参入して究めるべきである。

「七仏通誡偈」という七仏の法の真理は、必ず、七仏が法の真理としていた通りの物である。

「伝えるし、嗣ぐ」のは、「七仏通誡偈」の中の共通の消息である。

「七仏通誡偈」は、「これは、諸仏の(共通の)教えである」ので、百、千、万の無数の仏が「七仏通誡偈」の教え通りに修行して悟りを会得して証している。

「七仏通誡偈」の「諸々の悪」とは、「善性、悪性、無記性」という「三性」の中の「悪性」である。

（「無記」、「無記性」は「善悪に分け難いもの」である。）

「悪性」は「無生」、「生じないもの」、「空であるもの」である。

「善性」と「無記性」なども「無生」、「生じないもの」、「空であるもの」である。

「悪性」などは、（「空」、「くう」であるので、）「無漏」、「（『煩悩が無い』または）『認識しても煩悩を増やさない』」。

「悪性」などは、（「空」、「くう」であるので、）「実相」、「実の相」、「実の見え方」である。

けれども、「悪性」を含む「三性」の中に多数の種類の法が有る。

「七仏通誡偈」では「諸々の悪」と言うが、この世界の悪と、（地獄といった）他の世界の悪は、同じ場合が有るし、異なる場合が有るし、先の時代の悪と、後の時代の悪は、同じ場合が有るし、異なる場合が有るし、天上の悪と、人間の悪は、同じ場合が有るし、異なる場合が有る。

まして、仏道の悪と、世間の悪は、悪と言っても、善と言っても、無記と言っても、遥かに差異が有る。

善悪は時である。時は善でもないし悪でもない（、と言える）。

善悪は法である。法は善でもないし悪でもない（、と言える）。

法が等しければ、悪も等しく成る。（法が同じならば、悪も同じに成る。）

法が等しければ、善も等しく成る。（法が同じならば、善も同じに成る。）

無上普遍正覚を学んで、仏の教えを聞き、修行し、悟りという結果を証すると、深遠であるし、絶妙である。
無上普遍正覚を、善知識を持つ人々によって聞いたり、経典によって聞いたりする。
最初は、「諸々の悪をなすなかれ」と聞こえる。
「諸々の悪をなすなかれ」と聞こえないものは、仏の正しい法ではないし、「魔」、「仏敵」の説である。
知るべきである。
「諸々の悪をなすなかれ」と聞こえるものは、仏の正しい法である。
「諸々の悪をなすなかれ」というのは、凡人が「諸々の悪をなすなかれ」と作為的に聴こうとして初めて「諸々の悪をなすなかれ」と聴けるわけではない。
無上普遍正覚が説かれている仏の教えを聞くと、「諸々の悪をなすなかれ」と聞こえるのである。
「諸々の悪をなすなかれ」と聞こえるのは、無上普遍正覚についての言葉である道理の表れである。
無上普遍正覚についての話であるので、無上普遍正覚を話すのである。
「諸々の悪をなすなかれ」という言葉が、無上普遍正覚を説き表した物と成って、聞かれると、知られると、(無上普遍正覚を求める修行者は、)転じられて、「諸々の悪をなすなかれ」と願い、「諸々の悪をなすなかれ」と行(おこな)っていく。
諸々の悪をなさなく成って行くと、修行の力は突然に形成されて現される。

修行の力が形成されて現される時は、地の尽く、世界の尽く、時の尽く、法の尽くを量として形成されて現されるのである。

修行の力が形成されて現される時の量は、「なすなかれ」を量とする。

修行の力が形成されて現された時の修行者は、諸々の悪を作りそうな所に住んでも、諸々の悪を作りそうな所を行き来しても、諸々の悪を作りそうな縁に出会っても、諸々の悪を作る友に交わるようでも、諸々の悪を更に作らないのである。

なぜなら、「なすなかれ」の力量が形成されて現されるからである。

諸々の悪は自ら「諸々の悪である」と言い表さない。諸々の悪には決まった道具など無い。

(諸々の悪には決まった目印など無い。)

「一拈一放」、「ひねって取ったり手放したりする」という道理が有る。

「ひねって取ったり手放したりする」時、悪(という概念)が人を侵さない道理が知られるし、人が悪(という概念)を破らない道理が明らめられる。

自分の心を挙げて心を修行させる時、自分の身を挙げて身を修行させる時、身心を修行させるより先に八、九割、修行は成っているし、「脳後」、「心身後」の「なすなかれ」が有る。

あなたの心身をひねって取って来て修行したり、誰かの心身をひねって理解して取って来て修行したりすると、四大(元素)と五蘊によって修行する力が突然に形成されて現されるので、四大(元素)と五蘊が自分を汚染せず、今日の四大(元素)と五蘊までも修行されていく。

（
四大元素は土、水、火、風である。
五蘊は色、受、想、行、識である。
）

今、修行されていく四大(元素)と五蘊の力は、過去の四大(元素)と五蘊を修行させる。

山と河と大地、太陽と月と星々までも修行させると、山と河と大地、太陽と月と星々が逆に私達を修行させる。

一時の「見る眼」ではなく、諸々の時の「真理を見通す見識」である。

「見る眼」が「真理を見通す見識」に成る諸々の時であるので、諸々の仏祖を、修行させ、仏の教えを聞かせ、悟りという結果を証させる。

諸々の仏祖は、かつて、「仏の教えと修行と証」を汚染した事が無いので、「仏の教えと修行と証」は諸々の仏祖を妨(さまた)げる事が無い。

このため、仏祖を修行させると、過去、現在、未来の前後で回避する仏祖はいない。

全ての生者が仏祖と成る時、常日頃、存在している仏祖を遮(さえぎ)らずに仏祖と成る道理を、一日の中の日常の行動で、よくよく思考するべきである。

全ての生者が仏祖に成っても、全ての生者を破らないし、奪わないし、失わない。

けれども、(全ての生者は仏祖に成ると古い心身を)脱ぎ落としてきている。

善悪、因果を修行させる。

因果を動かすわけではない。

因果を作るわけではない。

因果は、ある時は、私達を修行させる。
因果の本来の「面目」、「有様」は、明らかである。
因果の本来の有様は、「なすなかれ」であるし、
因果の本来の有様は、「無生」、「生じないもの」、「空であるもの」であるし、
因果の本来の有様は、「無常である」、「変化する」し、
因果の本来の有様は、「(因果に)暗くない事」であるし、
因果の本来の有様は、「(因果に)落ちない事」である。
なぜなら、(因果を)脱ぎ落とすからである。
因果に参入し究めると、「諸々の悪」は、一つの、「かつて、『なすなかれ』であった」と形成されて現される。
「『諸々の悪』は、一つの、『かつて、『なすなかれ』であった』」と形成されて現される事に助け起こされて、「諸々の悪をなすなかれ」であると、見通す事ができ得るし、煩悩を断つ事ができ得る。
「諸々の悪をなすなかれ」であると、見通した時、煩悩を断った時、「最初も中間も最後も『諸々の悪をなすなかれ』である」と形成されて現されるので、「諸々の悪」は、「因縁によって生じている」のではなく、ただ「なすなかれ」でしかないのである。
「諸々の悪」は、「因縁によって滅ぶ」のではなく、ただ「なすなかれ」でしかないのである。
もし「諸々の悪」が等しければ、「諸法」、「全てのもの」も等しいのである。
「諸々の悪」は「因縁によって生じている」と思い込んで、「諸々の悪」の因縁が自己と「なすなかれ」であるのを見ない人は、憐れむべき輩である。

「仏の種は縁によって生じる」のであれば、「縁は仏の種によって生じる」のである。

「諸々の悪」は無いわけではない。「諸々の悪」は「なすなかれ」でしかないのである。

「諸々の悪」は存在するわけではない。「諸々の悪」は「なすなかれ」でしかないのである。

「諸々の悪」は「空」ではない。「諸々の悪」は「なすなかれ」でしかないのである。

「諸々の悪」は「色」ではない。「諸々の悪」は「なすなかれ」でしかないのである。

「諸々の悪」は「なすなかれ」ではない。「諸々の悪」は「なすなかれ」でしかないのである。

例えば、春でも常緑である松は、無ではないし、存在ではないし、(人が)作っていないのである。

秋に最も美しい菊の花は、無ではないし、存在ではないし、(人が)作っていないのである。

諸仏は、無ではないし、存在ではないし、「なすなかれ」なのである。

寺の円柱、灯籠、害虫を払うための毛がついた棒である払子、杖などは、無ではないし、存在ではないし、「なすなかれ」なのである。

自己は、無ではないし、存在ではないし、「なすなかれ」なのである。

善悪の学への参入は、形成させて現させた手がかりであるし、手がかりが形成されて現されているのである。

主観的に鍛錬するし、客観的に鍛錬する。

このため、作られていなかった「諸々の悪」を作っていたと悔(くや)しむのも、必然的に、「なすなかれ」による鍛錬の力による物なのである。

そのため、「『諸々の悪』は『なすなかれ』であるならば、『諸々の悪』を作らない」と思うのは、北に歩いて南の国の越に着くのを待つ様な物である。

「諸々の悪をなすなかれ」は、(「驢覰井」、驢馬、ロバが井戸の水を見ると、)「井覰驢」、「井戸の水が驢馬(ロバ)を見る」だけではない。

井戸の水が井戸の水を見るのである。

驢馬(ロバ)が驢馬(ロバ)を見るのである。

人が人を見るのである。

山が山を見るのである。

「説箇応底道理」、「この『応じる』奥底の道理を説く」というのが有るので、「諸々の悪をなすなかれ」なのである。

「仏真法身、猶若虚空。応物現形、如水中月」、「仏の真の『法身』は、なお虚空のようである。物に応じて形を現わすのは、水の中に映る月のようである」なのである。

「物に応じて」、「なすなかれ」であるので、「形を表す」、「なすなかれ」が有る。

「なお虚空のようである」のは、「左拍右拍」、「左で打つし右で打つ」である。

「水の中に映る月のようである」のは、「水と月に遮(さえぎ)られる」のである。

これらの「なすなかれ」は、更に疑うべきではない、形成されて現されている物である。

「(仏の教えを受け入れて、)諸々の善を行いなさい」

「七仏通誡偈」の「諸々の善」とは、「善性、悪性、無記性」という「三性」の中の「善性」である。

善性の中に「諸々の善」は有るが、行う前から形成されて現されて、行う人を待つ「諸々の善」は未だ無い。

善をなした時、来ない「諸々の善」は無い。

全ての善には形が無いが、善をなした所に重なり合うのは磁石が鉄を引き寄せるよりも速い。

善が重なり合う力は、世界の最初と最後に吹く大暴風である「毘嵐風」よりも強い。

大地、山河、世界、国土、業が「増上する」、「増長する」力ですら、善の重なり合いを妨げる事は不可能である。

世界によって善の認識が異なる道理は、同じ認識を善としているからである。

過去、現在、未来の諸仏の法の説き方のように。

「同じ」と言うのは、釈迦牟尼仏が存命していた時に説いた法は、ただ「時」、「機会」による物である。寿命、身量も「時」、「機会」に一任してきたので、「無分別」、「区別しない」法なのである。

そのため、仏の法を信じて行う愚鈍な人の善と、「仏の法」、「真理」を知って行う利発な人の善は、遥かに異なるが、仏の法は同じであるような物である。

例えば、声聞が戒を守るのは菩薩が戒を破るような物である。

「諸々の善」は、「因縁によって生じる」のではないし、「因縁によって滅ぶ」のではない。

「諸々の善」は「諸法」、「全てのもの」であるが、「諸法」、「全てのもの」は「諸々の善」ではない。

「因縁」と「生じたり滅んだりする事」と「諸々の善」は同じく、頭が正しければ、尾も正しい。

「諸々の善」は「(仏の教えを受け入れて、)行う事」であるが、自分ではないし、自分に知られない。

他の者ではないし、他の者に知られない。

自分や他の者の知見は、知には自分の物が有るし他の者の物が有るし、見る者が自分である場合が有るし他の者である場合が有るので、各々の「活眼睛」、「真理を見通す見識が有る、見る眼」は太陽にも有るし月にも有る。

「活眼睛」、「真理を見通す見識が有る、見る眼」とは、「(仏の教えを受け入れて、)行う事」である。

「(仏の教えを受け入れて、)行う」時に、形成されて現される仏祖の言動が有っても、仏祖の言動が初めて成ったわけではないし、仏祖の言動が長く留まっているわけではないし、本(もと)からの行いであると言うであろうか？

「善をなす」である「(仏の教えを受け入れて、)行う」であるが、推測するべきではない。

「(仏の教えを受け入れて、)行う」のは、「活眼睛」、「真理を見通す見識が有る、見る眼」であるが、推測ではない。
法を推測するために形成させて現させているわけではない。

「活眼睛」、「真理を見通す見識が有る、見る眼」による推測は、他の推測とは異なる。

「諸々の善」は、存在、無、色、空(くう)などではない。

「諸々の善」は、「(仏の教えを受け入れて、)行う事」でしかないのである。

「諸々の善」は、どの場所に形成されて現されても、どの時に形成されて現されても、必ず、「(仏の教えを受け入れて、)行う事」なのである。

「(仏の教えを受け入れて、)行う」時に、必ず、「諸々の善」は形成されて現される。

「(仏の教えを受け入れて、)行う事」が形成されて現されるのは、仏祖の言動であるが、生じたり滅びたりしないし、因縁ではない。

「(仏の教えを受け入れて、)行う事」の「入住出」なども、生じたり滅びたりしないし、因縁ではない。

「諸々の善」の中の一つの善を「(仏の教えを受け入れて、)行う」時に、「尽法」、「全身」、「真実」、「地」なども共に「(仏の教えを受け入れて、)行われる」のである。

「(仏の教えを受け入れて、)行う」一つの善の因果は、他の善と同じく、「(仏の教えを受け入れて、)行う事」の形成されて現される手がかりである。
原因は先で結果は後ではないが、原因は円満し結果も円満する。
原因が等しければ、法も等しい。(原因が同じであれば、法も同じである。)
結果が等しければ、法も等しい。(結果が同じであれば、法も同じである。)
原因に待たれて結果を感じるが、前後ではない。前後が等しい道が有るので。

「七仏通誡偈」の「自ら自分の心を清めなさい」と言うのは、「(諸々の悪を)なすなかれ」であるのは「自ら」なのであるし、「(諸々の悪を)なすなかれ」とは「清める事」なのである。
「自ら」が「自分(を清める)」なのであるし、「自分」とは「心」なのである。
「(仏の教えを受け入れて、)行う」、「心」であるし、
「(仏の教えを受け入れて、)行う事」は「清める事」であるし、
「(仏の教えを受け入れて、)行う」のは、「自分」であるし、
「(仏の教えを受け入れて、)行う」のは、「自ら」である。
このため、「七仏通誡偈」では「これは、諸仏の(共通の)教えである」と言うのである。

「七仏通誡偈」の「諸仏」は、自在天に似ている。諸仏は自在天と似ていたり異なっていたりするが、一切の全ての自在天は諸仏ではない。

「諸仏」は、転輪聖王に似ている。けれども、一切の全ての転輪聖王は諸仏ではない。

この道理の学に鍛錬して参入するべきである。

「諸仏とは、どの様な者であるか？」とも学ばず、いたずらに無駄に労苦する人は、諸仏に似ていても、苦しみを受けている生者であるし、仏道を修行しているわけではない。

「なすなかれ」と「(仏の教えを受け入れて、)行う事」は、「ロバの事が未だ終わらないけれども、馬の事が到来する」なのである。

唐の時代の中国の詩人の白居易は、仏光如満の「俗弟子」、「在俗者の弟子」である。

仏光如満は、三十五祖の馬祖道一の弟子である。

白居易は、杭州の刺史であった時、鳥窠道林の所へ行って「仏法の要点とは、どの様な物ですか？」と質問した。

鳥窠道林は「諸々の悪をなすなかれ。(仏の教えを受け入れて、)諸々の善を行いなさい」と、七仏通誡偈の前半を言った。

(白居易と鳥窠道林の「七仏通誡偈」の問答は史実ではないと言われている。)

白居易は「もし、そうならば、(かえって、)三歳の幼子でも言う事ができ得る」と言った。

鳥窠道林が「たとえ、三歳の幼子でも言う事ができ得るが、八十歳の老人でも行う事はでき得ない」と言うと、白居易は感謝して去った。

実に、白居易は、白起将軍の末裔であるが、世にも稀な詩の天才である。

白居易は「二十四生の文学」である、と人は伝えている。

白居易には、文殊の称号も有るし、弥勒の称号も有る。

白居易の風情は聞こえない事が無い。

詩人が白居易を目指さない事が無い。

けれども、白居易は、仏道では初心者であったし、後進であった。

まして、白居易は、七仏通誡偈の「諸々の悪をなすなかれ。(仏の教えを受け入れて、)諸々の善を行いなさい」という言葉の主旨を夢にも未だ見ないようであった。

白居易は、「鳥窠道林が執着心の趣きを認めて『諸々の悪をなすなかれ。(仏の教えを受け入れて、)諸々の善を行いなさい』と言ったのだろう」と思ってしまい、仏道には永遠の「諸々の悪をなすなかれ。(仏の教えを受け入れて、)諸々の善を行いなさい」が過去から現在まである道理を知らず聞かず、仏法の修行を積まず仏法の力が無いので、「三歳の幼子でも言う事ができ得る」と言ってしまったのである。

たとえ、作った「諸々の悪」を戒め、作った「諸々の善」を勧めても、形成されて現される「なすなかれ」である。

仏法は、善知識を持つものの近くで初めて聞いた物と究極の結果の上は等しいのである。

これを「頭が正しければ、尾も正しい」と言うし、「妙因妙果」、「原因が絶妙であれば結果も絶妙である」と言うし、「仏因仏果」、「原因が仏であれば結果も仏である」と言う。

仏道の因果は、「異熟」、「善性や悪性の原因が無記の結果を生じる事」や「等流」、「結果が原因と同じ性質を持つ事」等の論理ではないので、仏という原因でなければ仏という結果を感得できない。

鳥窠道林は、「仏という原因でなければ仏という結果を感得できない」道理を言葉として選び取ったので、仏法が有るのである。

たとえ「諸々の悪」が何重もの尽界を全て統治し、何重もの尽法を飲み込んでも、「なすなかれ」による解脱と成る。

「諸々の善」は「最初も中間も最後も善い」ので、「(仏の教えを受け入れて、)行う」性質、相、本体、力などを「最初も中間も最後も善い」ようにするのである。

白居易は、かつて、この行跡を踏まえなかったので、「三歳の幼子でも言う事ができ得る」と言ってしまったのである。

白居易は、まさしく、言い得る「道」、「真理」を会得する力が無くて、「三歳の幼子でも言う事ができ得る」と言ってしまったのである。

憐れむべきである。

白居易よ、あなたは何を言っているのか？

仏の家の家風を未だ聞かないのに、「三歳の幼子」を知っているのか否か？

幼子が才能を持って生まれる道理を知っているのか否か？

「三歳の幼子」を(真の意味で)知っている者は、過去、現在、未来の諸仏をも知っている。

過去、現在、未来の諸仏を未だ知らない者が、どうして「三歳の幼子」を知っているだろうか？

「対面したものは知っている」と思う事なかれ。

「対面しなければ知らない」と思う事なかれ。

一つの塵（ちり）を知る者は世界の尽（ことごと）くを知るし、一つの法に通じている者は全ての法に通じる。

全ての法に通じていない者は一つの法にも通じていない。

「通」、「理解」を学んだ者が「徹底的に完全に理解した」時、全ての法をも見るし、一つの法をも見るので、一つの塵（ちり）を学んでいる者は不可避的に世界の尽（ことごと）くを学んでいるのである。

「『三歳の幼子』は仏法を言う事ができない」と思ってしまったり、「『三歳の幼子』が言う事は簡単にできる」と思ってしまったりするのは最悪の愚かさである。

なぜなら、生を明らめ死を明らめるのは仏の家が一大事とする「因縁」、「理由」である。

古代の高徳の僧は「あなたが初めて生まれた時、『獅子吼』、『獅子（ライオン）が吼（ほ）えるように法を説く』才能が有った」と言った。

「獅子吼」、「獅子(ライオン)が吼(ほ)えるように法を説く」才能とは、如来、釈迦牟尼仏が法輪を転じるように法を説いた功徳であるし、法輪を転じるように法を説く事である。

また、古代の高徳の僧は「生死が去ったり来たりするのは、真実の人の体である」と言った。

そのため、真の実体を明らめ、「獅子吼」、「獅子(ライオン)が吼(ほ)えるように法を説く」功徳が有るのは、実に、一大事である。簡単ではない。

このため、「三歳の幼子」の因縁の日常の行動を明らめようとすると、更に、大いなる因縁が有る。

なぜなら、過去、現在、未来の諸仏の日常の行動の因縁と似ていたり異なっていたりするからである。

白居易は、愚かにも、「『三歳の幼子』が仏法を言い得る」事をかつて聞かなかったので、「『三歳の幼子』が仏法を言い得るだろうか？」と明らかに疑わず、「三歳の幼子でも言う事ができ得る」という言葉を選び取ってしまったのである。

白居易は、雷よりも明らかに現れている鳥窠道林の話す声を聴かず、「かえって、三歳の幼子でも言う事ができ得る」と言ってしまった。

白居易は、「幼子」の「獅子吼」、「獅子(ライオン)が吼(ほ)えるように説く法」をも聴かなかったし、鳥窠道林が説く法をも見過ごしてしまった。

鳥窠道林は、憐れみを止める事ができず、「たとえ、三歳の幼子でも言う事ができ得るが、八十歳の老人でも行う事はでき得ない」と重ねて言ったのである。

鳥窠道林の言葉の意味は、「『三歳の幼子』に言い得る言葉が有る」。「『三歳の幼子』に言い得る言葉」に、よくよく参入して究めるべきである。

「八十歳の老人に行う事ができ得ない『道』、『真理』が有る」。「八十歳の老人に行う事ができ得ない真理」をよくよく鍛錬するべきである。

「幼子が言い得る言葉は、あなたに一任する。けれども、幼子に一任しない。老人が行う事ができ得ない真理は、あなたに一任する。けれども、老人に一任しない」と言っているのである。

仏法は、この様に、わきまえて理解して取るし、説明して理解して取るし、宗として理解して取るのを道理としている。

正法眼蔵　諸悪莫作(諸々の悪をなすなかれ)

その時、千二百四十年、興聖宝林寺にいて僧達に話した。

有時

古代の仏は次の様に言った。
「有時」、「存在している、ある時」は、高々と山頂に立つし、
「有時」、「存在している、ある時」は、深々と海底を行くし、
「有時」、「存在している、ある時」は、「三頭八臂」、「三つの頭と八本の腕」であるし、
「有時」、「存在している、ある時」は、「『丈六』と『八尺』」、「釈迦牟尼仏の一丈六尺の立像と八尺の坐像」であるし、
「有時」、「存在している、ある時」は、杖、害虫を払うための毛がついた棒である払子であるし、
「有時」、「存在している、ある時」は、寺の円柱、灯籠であるし、
「有時」、「存在している、ある時」は、「張三李四」、「ありふれた人」であるし、
「有時」、「存在している、ある時」は、大地、虚空である。

「有時」、「存在している、ある時」と言うが、時は存在である。
存在は全て、時である。

「丈六」の「金身」である「仏身」は、時である。
「丈六」の「金身」である「仏身」は、時であるので、時の荘厳、光明が有る。

今の一日に習って学ぶべきである。

「三頭八臂」、「三つの頭と八本の腕」は、時である。

「三頭八臂」、「三つの頭と八本の腕」は、時であるので、今の一日と唯一普遍絶対である。

一日の長短は、未だ量(はか)ってはいないが、一日を一日と言う。

一日が去ったり来たりする行方の跡は明らかなので、人は一日を明確には疑わないが、人は一日を知っているわけではない。

全ての生者が本(もと)から知らない物事の各々を疑うのは一定ではないので、疑う未来は今の疑いに必ずしも符号しない。

ただ、疑う事は暫定的に時でしかないのである。

私を時に並べて尽界とする。

「尽界の人々や物々は時々である」と見るべきである。

物と物が妨(さまた)げ合わないのは、時と時が妨(さまた)げ合わないような物である。

このため、「同時に悟りを求めて心する事」が有るし、「同じ心で悟りを求める時」が有る。

また、修行して仏に成る事も同様である。

私を時に並べて、私は人、物、時を見るのである。

自己が時である道理とは、この様な物である。

この様な道理であるので、「尽地に百草や万象が有り、一つの草や一つの事象の各々が尽地である」という学に参入するべきである。

この様な行き来は、修行の始まりである。

この境地に到達した「時」は、一つの草や一つの事象であるし、草を会得できたり会得できなかったりであるし、事象を会得できたり会得できなかったりである。

これは時でしかないので、「有時」、「存在している、ある時」は全て時の尽くであるし、「有草」、「存在している、ある草」や「有象」、「存在している、ある事象」は共に時である。

時々の時に「尽有」、「存在の尽く」や「尽界」、「世界の尽く」が有るのである。

少し、「今の時に漏れている『尽有』、『存在の尽く』や『尽界』、『世界の尽く』が有るのか無いのか?」と想像して観るべきである。

それなのに、仏法を習わない凡人の時のあらゆる見解は、「有時」という言葉を聞くと、「ある時は『三頭八臂』、『三つの頭と八本の腕』と成ったし、ある時は『丈六と八尺』、『釈迦牟尼仏の一丈六尺の立像と八尺の坐像』と成った。例えば、河を過ぎ、山を過ぎた様な物である」と思ってしまう。

「今は、過ぎ去った山と河は有るかもしれないが、私は過ぎて来ていて、宝玉で飾られた宮殿や『朱楼』、『富者の家』にいる。山河と私は、天と地である」と思ってしまう。

けれども、道理は、この一つだけではない。

山を上ったり河を渡ったりした「時」に私が存在していた。私に時が有るのである。

私は既に存在しているし、時は去らない。

もし時が去ったり来たりする「相」、「見え方」でなければ、山を上った時は「有時」、「存在している、ある時」の今である。

もし時が去ったり来たりする「相」、「見え方」を私に保持させて任せれば、私に「有時」、「存在している、ある時」の今が有る。これが「有時」、「存在している、ある時」である。

過去の山を上ったり河を渡ったりした「時」は、今の宝玉で飾られた宮殿や「朱楼」、「富者の家」にいる「時」を飲み込まないであろうか？　出さないであろうか？

「三頭八臂」、「三つの頭と八本の腕」は昨日の時であるし、「『丈六』と『八尺』」、「釈迦牟尼仏の一丈六尺の立像と八尺の坐像」は今日の時である。

けれども、その昨日、今日の道理は、ただ、山の中に直ちに入って千、万の無数の山々を見渡す時であるし、過ぎたわけではない。

「三頭八臂」、「三つの頭と八本の腕」も私の「有時」、「存在している、ある時」で、一つの経験として経ている。

彼方に有るのに似ているが今である。

「『丈六』と『八尺』」、「釈迦牟尼仏の一丈六尺の立像と八尺の坐像」も私の「有時」、「存在している、ある時」で、一つの経験として経ている。

彼方に有るのに似ているが今である。

そのため、松も時であるし、竹も時である。

「時は飛び去る」とだけ理解するべきではない。

「飛び去るのが時の能力である」とだけ学ぶべきではない。

もし「時は飛び去る」とだけ一任してしまうと、間隙が有る。

「有時」、「存在している、ある時」という言葉を経験して聞かないのは、「時は過ぎ去る」とだけ学んでいる事による物である。

要約すれば、「尽界」、「世界の尽く(ことごと)」のあらゆる「尽有」、「存在の尽く(ことごと)」は、連続している時々である。

「有時」、「存在している、ある時」なので、私は「有時」、「存在している、ある時」なのである。

「有時」、「存在している、ある時」には経歴の功徳が有る。

今日から明日へ経歴するし、

今日から昨日へ経歴するし、

昨日から今日へ経歴するし、

今日から今日へ経歴するし、

明日から明日へ経歴する。

経歴は時の功徳であるので。

古今の時が重なるわけではないし、並び積もるわけではないが、三十四祖の青原の行思も時であるし、三十七祖の黄檗希運も時であるし、江西の三十五祖の馬祖道一も三十五祖の石頭希遷も時である。

自分も他のものも時であるので、修行と証は時である。

泥に入り水に入るのも同じく時である。

（

泥は煩悩の象徴である。

水は知の象徴である。

）

今の凡人の見解と見解の理由は、凡人が見る所ではあるが、凡人の法ではない。法が暫定的に凡人を理由としているだけである。

「この『時』、この『有』、『存在』は、『法』ではない」と学んだために「『丈六』の『金身』である『仏身』は自身ではない」と認めるのである。

「自身は『丈六』の『金身』である『仏身』ではない」と逃れようとするのは、「有時」、「存在している、ある時」の断片であるし、「未証拠者看看」、「未だ証していない者は看よ！　看よ！」である。

今、世界に並べられている十二支の午、未を存在させているのも、法の位に住んでいる「時」の昇降、上下である。

十二支の子も時であるし、十二支の寅も時であるし、生も時であるし、仏も時である。

この「時」は、「三頭八臂」、「三つの頭と八本の腕」で尽界を証するし、この「時」は、「丈六」の「金身」である「仏身」で尽界を証する。

世界の尽くによって、世界の尽くを、尽くの世界にするのを、「究め尽くす」と言うのである。

「丈六」の「金身」である「仏身」によって、「仏身」にするのを、「発心、修行、菩提、涅槃」、「心する事、修行、覚、寂滅」と形成されて現されるのは、「有」、「存在」であるし、「時」である。
「時の尽くは、存在の尽くである」と究め尽すだけである。さらに、余剰の法は無い。余剰の法は余剰の法であるので。
たとえ半端な究め尽す事の「有時」、「存在している、ある時」でも、半端な「有時」、「存在している、ある時」の究め尽す事である。
たとえ「誤っている」と見える様子も「有」、「存在」である。更に存在に任せれば、誤りが形成されて現される前後ながら、「有時」、「存在している、ある時」が住んでいる法の位である。
法の位に住んでいるのが魚の様に活発であるのは、「有時」、「存在している、ある時」である。

「無である」と動揺するべきではない。
「存在である」と強引に為すべきではない。

「時は、ひたすらに過ぎ去る」とだけ功能を計って、「時は、未到達である」と理解しない。
理解は時であるが、他に引かれる「縁」、「繋がり」は無い。
「時は、去ったり来たりする」と認めて、「時は、法の位に住んでいる、『有時』、『存在している、ある時』である」と見通す、皮袋である人はいない。
まして、遮る関を透過する時が有るだろうか？

たとえ、「時は、法の位に住んでいる」と認めても、誰が、既に得ている、保持させられ任されている、「時は、法の位に住んでいる」という「道」、「真理」を会得しているだろうか？

たとえ、「時は、法の位に住んでいる」という「道」、「真理」を会得して長くても、未だ「面目」、「有様（ありよう）」を目の前に現そうと模索している。

凡人が「有時」、「存在している、ある時」である事に一任すると、「菩提」、「覚」と「涅槃」、「寂滅」も、わずかに去ったり来たりする「相」、「見え方」でしかなく成ってしまう「有時」、「存在している、ある時」である。

鳥かごに留まらず、「有時」、「存在している、ある時」は形成されて現される。

今、右の世界に形成されて現され、左の方（ほう）に形成されて現される、天人の王と天人達は、今も私が尽力する「有時」、「存在している、ある時」である。

その他に有る水や陸の者達の「有時」、「存在している、ある時」は、私が今、尽力して形成させて現させているのである。

目に見えなかったり目に見えたりする「有時」、「存在している、ある時」である諸々の類（たぐい）、諸々の者は皆、私の尽力が形成させて現させているのであるし、私の尽力の経歴である。

私の今の尽力の経歴でなければ、「一つの法も一つの物も形成されて現される事は無い」し「一つの法も一つの物も経歴する事は無い」として学に参入するべきである。

「『経歴』と言う物は、風や雨が東西に行き来するような物である」と学ぶべきではない。
尽界は、変化するし、進退するし、経歴である。
例えば、経歴は、春の様な物である。
春には多くの種類の様子が有る。
春には多くの種類の様子が有るような物を経歴と言う。
「他の物が無くても経歴する」として学に参入するべきである。
例えば、春の経歴は、必ず、春を経歴するのである。
経歴は春ではないが、春の経歴であるので、経歴は今、春の時に仏道を成就する。
明確に詳細に、行き来して参入するべきである。

経歴を言う時に、「知覚の対象は他のものであって、経歴が可能である『法』、『もの』は東に向かって百、千の無数の世界を過ぎて、百、千の無数の時間を経る」と思う人は、仏道の学への参入を第一の事として専念していない。

　弘道大師と呼ばれる三十六祖の薬山惟儼は、ある時、無際大師と呼ばれる三十五祖の石頭希遷の指示で、江西の大寂禅師と呼ばれる三十五祖の馬祖道

一の所へ行って「私は、三乗十二分教の主旨をほぼ明らめています。『祖師西来』、『二十八祖の達磨が西のインドから中国へ来た』意図とは、どういった様な物でしょうか？」と質問した。

馬祖道一は「『有時』、『存在している、ある時』は、彼に教えて眉（まゆ）を揚（あ）げさせ目を瞬（またた）かせる。

『有時』、『存在している、ある時』は、彼に教えて眉（まゆ）を揚（あ）げさせ目を瞬（またた）かせない。

『有時』、『存在している、ある時』は、彼に教えて眉（まゆ）を揚（あ）げさせ目を瞬（またた）かせるのは、正しいとする。

『有時』、『存在している、ある時』は、彼に教えて眉（まゆ）を揚（あ）げさせ目を瞬（またた）かせるのは、正しくないとする」と言った。

薬山惟儼は、馬祖道一の言葉を聞いて大いに悟り、馬祖道一に「私は、かつて石頭(希遷の所)にいた時は、蚊が鉄の牛に上（のぼ）っていたようなものでした」と言った。

馬祖道一が選び取った言葉は、他の者と同じではない。

眉（まゆ）と目は山と海であり、山と海は眉（まゆ）と目であるので。

「彼に教えて眉（まゆ）を揚（あ）げさせる」とは山を見るのである。

「彼に教えて目を瞬（またた）かせる」とは海を宗とするのである。

「正しい」とは「彼」に慣れさせ習わせているのである。

「彼」は「教え」に誘引される。

「正しくない」とは「彼ではない」わけではない。「彼ではない」のは「正しくない」わけではない。これらは共に「有時」、「存在している、ある時」なのである。

山も時であるし、海も時である。
山と海が時でなければ、山と海は存在しないだろう。
「山と海の今に時は無い」とするべきではない。
もし時が壊れれば、山と海も壊れる。
もし時が不壊であれば、山と海も不壊である。
山と海が時である道理によって、明けの明星は出現するし、如来はこの世へ出現するし、「眼睛」、「見る眼」は出現するし、釈迦牟尼仏の「拈華瞬目」が出現する。
この様な物が、時である。
時でなければ、この様には成らない。

葉県の帰省は、三十八祖の臨済義玄の法の子孫であり、首山省念の法を正統に嗣いだ弟子である。
葉県の帰省は、ある時、僧達に示して「『有時』、『存在している、ある時』は、意に到達して、言葉に到達しない。
『有時』、『存在している、ある時』は、言葉に到達して、意に到達しない。
『有時』、『存在している、ある時』は、意と言葉の両方に共に到達する。
『有時』、『存在している、ある時』は、意と言葉に共に到達しない」と言った。

「意」と「言葉」は、共に、「有時」、「存在している、ある時」である。

「到達する」と「到達しない」は、共に、「有時」、「存在している、ある時」である。

「到達する」時が未だ終わらないけれども、「到達しない」時が到来するのである。

(「ロバの事が未だ終わらないけれども、馬の事が到来するのである」という言葉が有る。)

「意」はロバである。「言葉」は馬である。

馬を「言葉」とし、ロバを「意」とする。

「到達する」は到来ではないし、「到達しない」は未だ終わらないわけではない。

「有時」、「存在している、ある時」とは、この様な物である。

「到達する」は、「到達する」に遮られて、「到達しない」には遮られない。

「到達しない」は、「到達しない」に遮られて、「到達する」には遮られない。

「意」は「意」を遮って「意」を見る。

「言葉」は「言葉」を遮って「言葉」を見る。

「遮る」は「遮る」を遮って「遮る」を見る。

「遮る」は「遮る」を遮るのである。

「遮る」は「遮る」を遮るのが、時である。

「遮（さえぎ）る」は他のものに使われ得るが、他のものを遮（さえぎ）る「遮（さえぎ）る」は未だ無いのである。

私は人に出会うのであるし、人は人に出会うのであるし、私は私に出会うのであるし、出会いは出会いに出会うのである。

もし、これらが時を得なかったら、この様には成らないのである。

また、「意」は形成されて現される手がかりの「時」である。

「言葉」は向上する「関楔」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」の「時」である。

「到達する」は「脱体」、「そのままの、そのもの」の「時」である。

「到達しない」は「即此離此」の「時」、「これに即しているがこれを離れている」、「時」である。

この様に、わきまえ受け入れるべきである。「有時」するべきである、「存在し『時』する」べきである。

今までの高徳の長老の僧が共に、この様に言ったとしても、さらに選び取るべき言葉は無いだろうか？

こう言うべきである。

「意」と「言葉」が半ばに到達するのも、また、「有時」、「存在している、ある時」である。

「意」と「言葉」が半ばに到達しないのも、また、「有時」、「存在している、ある時」である。

このような学へ参入して究める事が有るべきである。

彼に教えて眉(まゆ)を揚(あ)げさせ目を瞬(また)かせるのも、また、半ばの「有時」、「存在している、ある時」である。

彼に教えて眉(まゆ)を揚(あ)げさせ目を瞬(また)かせるのも、また、誤りの「有時」、「存在している、ある時」である。

彼に教えて眉(まゆ)を揚(あ)げさせ目を瞬(また)かせないのも、また、誤りの誤りの「有時」、「存在している、ある時」である。

この様に、行き来して参入したり、到達したり到達しなかったりに参入したりする「有時」、「存在している、ある時」の「時」である。

正法眼蔵　有時(存在している、ある時)

千二百四十年、冬の初め、興聖宝林寺で書いた。

山水経

今の山と水は、古代の仏の「道」、「真理」が形成されて現されているのである。

山と水は共に、法の位に住んでいて、究め尽す功徳を成就している。

山と水の消息は創世前の無である長い時間である「空劫」以前からなので、山と水は今も生きている。

山と水は、前兆が未だ萌芽する前の自己であるので、形成されて現される「透脱」、「透体脱落」、「煩悩を透過して脱ぎ落とす事」である。

山の諸々の功徳は高く広いので、「乗雲」、「飛竜乗雲」、「雲に乗る様に時の流れに乗って『この世』に出現する、竜の様な高徳の僧」は、必ず、山によって、道徳に通達する。

順風の霊妙な功徳は、必ず、山によって、高徳の僧を「透脱させる」、「透体脱落させる」、「煩悩を透過させて脱ぎ落とさせる」。

大陽山の四十五祖の芙蓉道楷は、僧達に示して、「緑の山は常に歩む。不妊の女性は夜に子を産む」と言った。

山は、備わるべき功徳が欠けていない。

このため、山は、常に安住するし、常に歩む。
まさに、明確に詳細に、山が歩む功徳の学に参入するべきである。
「山の歩(あゆ)みとは、人の歩(あゆ)みのようなのであろう。なのに、山の歩(あゆ)みは人の歩行と同じようには見えない」と言って山の歩(あゆ)みを疑う事なかれ。
今、四十五祖の芙蓉道楷という仏祖が説いた言葉は、山の歩みを指し示している。
四十五祖の芙蓉道楷といった仏祖は、山の歩みの本(もと)を得ているのである。
「緑の山は常に歩む」と僧達に示した事をわきまえ究めるべきである。
「歩み」なので「常」なのである。
緑の山の歩みは、速さが、風の様なものよりも速(すみ)やかであるが、山中の人は覚知しないのである。山中とは、世界の中で「華開」、「華開世界起」、「華が開いて世界が起こる」なのである。
山の外の人は覚知しないのである。山を見る眼が無い人は、覚知しないし見聞きしないのが道理である。
もし人が山の歩みを激しく疑ったら、自己の歩みをも未だ知らないのである。
自己の歩みは、存在するが、未だ知らないのであるし、明らめていないのである。
自己の歩みを知っている人は、まさに、緑の山の歩みをも知っている。
緑の山は、情の有る者ではないし、情の無いものではない。
自己は、既に、情の有る者ではないし、情の無いものではない。
今、緑の山の歩みを疑う事は有り得てはいけない。
どれだけの法界を量として、緑の山を神の様に照らして明らかに見るべきであるか分からない。

緑の山の歩みと自己の歩みを明らかに点検して詳細に調べるべきである。

後退と、後退という歩みを、共に点検して詳細に調べるべきである。

前兆が未だ無い時、釈迦牟尼仏よりも過去の仏である「空王仏」の辺りの時代から、進歩と後退で、「歩み」が一時も止まっていない事を点検して詳細に調べるべきである。

もし「歩み」が休止してしまう事があれば、仏祖は、この世に出現しないだろう。

もし「歩み」が窮(きわ)まってしまう事があれば、仏法は、今日まで到らなかっただろう。

進歩は未だ止まない。

後退は未だ止まない。

進歩の時は、後退の方向へ向かって逆行しない。

後退の時は、進歩を背(そむ)かせない。

進歩が後退の方向へ向かわないし後退が進歩を背かせない功徳を「山は流れる」とするし、「流れる山」とする。

緑の山の歩みに参入して究めるし、「東の山が水上を行く」学に参入するので、進歩と後退の学への参入は山の学への参入と成る。

山の身心を変えず、山の「面目」、「有様(ありよう)」のまま回り道をして学に参入してきたのである。

「緑の山は歩む事ができ得ない」とか「東の山は水上を行く事ができ得ない」と言って山の悪口を言う事なかれ。

低劣な下劣な見解が卑しいので、「緑の山は歩む」という言葉を疑うのである。

学の無さという拙さによって、「流れる山」という言葉に驚くのである。

今、「流れる水」という言葉にも七と八に通達しないで、矮小な劣悪な見解と学の無さに溺れているだけなのである。

そのため、積んでいる功徳を挙げる事を言葉としているし、命としている。積んでいる功徳を挙げる事に、「歩み」が有るし、「流れて行く事」が有る。

山が山という子を産む時が有るし、山が仏祖と成る道理が有るので、仏祖は、これまでの様に出現しているのである。

たとえ、草木、土石、牆壁が形成されて現される「眼睛」、「見る眼」がある時でも、激しく疑ってはいけないし、動揺してはいけない。なぜなら、全てが形成されて現されるわけではない。

たとえ、「七宝」、「七種類の宝」が荘厳であると見えて理解して取れる時が形成されて現されても、実へ帰ったわけではない。

たとえ、「諸仏の仏道修行の境地である」という見解が形成されて現されても、決して、愛するべき境地ではない。

たとえ、「諸仏の不思議の功徳である」という見解が形成されて現される頂上を得ても、事実のままではあるが、それだけではない。

各々に形成されて現されるのは各々の「心と身が依り所とする環境として の報いである『この世』と、過去の行いの正に報いである心と身」である。

「心と身が依り所とする環境としての報いである『この世』と、過去の行いの正に報いである心と身」を仏祖の道の業(わざ)とするわけではないし、一隅の狭い見解である。

知覚の対象を転じ心を転じるのを、大いなる聖者は叱(しか)る。

心を説き性質を説くのを、仏祖は承知しない。なぜなら、心への誤った見解、性質への誤った見解は、外道の手口である。

「滞言滞句」、「文字にこだわり真理を理解しない」のは、解脱を言葉で表した物ではない。

このような境地を「透脱している」、「透体脱落している」、「透過して脱ぎ落としている」のが、「緑の山は常に歩む」という言葉であるし、「東の山は水上を行く」という言葉である。

明確に詳細に参入して究めるべきである。

「不妊の女性は夜に子を産む」と言うが、「不妊の女性が子を産む」時を「夜」と言っている。

「男石」、「陽石」(、インドの「リンガム」)という男性の石が有るし、「女石」、「陰石」(、インドの「ヨーニ」)という女性の石が有るし、(「夫婦岩」以外である)男性でも女性でもない石が有る。

石は、天を補う事が可能であるし、地を補う事が可能である。

天の石が有るし、地の石が有る。

これらが俗に言われてはいるが、(真の意味で)知っている人は稀(まれ)である。

「子を産む」道理を知るべきである。
「子を産む」時は、親が親に子が子に並行して変化するのか？
「子の親と成るのは、『子を産む』事が形成されて現された」として学に参入するだけであろうか？
「親の子と成る時は、『子を産む』事が形成されて現された修行と証である」として学に参入するべきであるし、究め徹(とお)すべきである。

匡真大師と呼ばれる雲門文偃は「東の山は水上を行く」と言った。

「東の山は水上を行く」という言葉を形成して現している主旨は、諸々の山は「東の山」である。
一切の全ての「東の山」は、「水上を行く」のである。
(諸々の山は、「水上を行く」のである。)
このため、須弥山(スメール)を含む九の山などが、形成されて現されるし、修行し証している。
これを「東の山」と言う。
けれども、雲門文偃は、どの様に、「東の山」の「皮肉骨髄」、「理解」と「修行と証の手段」に「透脱している」、「透体脱落している」、「透過して脱ぎ落としている」のだろうか？

千二百四十年の中国に、(「無理会話」をかたる)杜撰な輩が一種類いて群れを成している。

少数の真実の言葉では(「無理会話」という多数の嘘の言葉を)撃破不能である。

(「無理会話」をかたる)彼らは、誤って「『東の山は水上を行く』という話や『南泉鎌子』という『公案』、『修行者に考えさせるための話』といった物は『無理会話』、『会得、理解が無理な話』である。

『無理会話』の主旨は、諸々の思考できる話は、仏祖の禅の話ではない。

『無理会話』、『会得、理解が無理な話』が、仏祖の禅の話なのである。

このため、三十七祖の黄檗希運の棒や臨済義玄の『臨済の喝』を、理解できない、思考できない、前兆が未だ萌芽する前の、大いなる悟りとするのである。

『高徳な先人は、手段として、葛藤を断つ言葉を多く用いた』と言うのは『無理会話』、『会得、理解が無理な話』の事である」と言う。

この様に言う輩は、かつて未だ正しい師に見えず、学に参入するための見る眼が無い。取るに足りない矮小な劣悪な愚者である。

中国では、千年頃や千百年頃から今まで、「無理会話」をかたる、「魔の子」、「仏敵の子」である、釈迦牟尼仏の存命時の「六群禿子」、「六群比丘」の様な似非僧侶が多い。

憐れむべきである。

仏祖の大いなる道が廃れてきているのである。

「無理会話」をかたる似非僧侶の所見、見解は、「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の声聞にもなお及ばないし、外道よりも愚かである。

「無理会話」をかたる似非僧侶は、在俗者ではないし、(真の)僧ではないし、人ではない(「人でなし」である)し、天人ではない。

「無理会話」をかたる似非僧侶は、仏道を学んでいる「畜生」、「動物的人間」よりも愚かである。

似非僧侶が言う「無理会話」は、似非僧侶にとってのみ理解が無理なのである。仏祖は理解できる。

あなたに理解できないからといって、仏祖の理解できる「道」、「真理」の学に参入しないのは、いけない。

最終的に理解が無理なのであれば、あなたの「思考では理解が無理であるが、理解できる」という言葉も当たっていない。

「無理会話」をかたる似非僧侶の類は、宋の時代の中国の諸方に多い。私、道元は目の当たりにして見聞きした。

憐れむべきである。

「無理会話」をかたる似非僧侶は、言葉で思考する事を知らないし、言葉通りの文字通りの思考を「透脱する」、「透体脱落する」、「透過して脱ぎ落とす」事を知らない。

私、道元は、宋の時代の中国にいた時に、「無理会話」をかたる似非僧侶を笑ったが、「無理会話」をかたる似非僧侶は何も言えず無言に成ってしまっただけであった。

似非僧侶の「無理会話」は邪悪な策でしかない。

誰が「無理会話」を似非僧侶に教えたのか？　似非僧侶は、自然に純真に師がいなくても、自然に外道の子と成るのである。

知るべきである。

「東の山は水上を行く」のは仏祖の「骨髄」、「理解」である。

諸々の水は、「東の山」の脚の下に形成されて現される。

このため、諸々の山は雲に乗り、天を歩む。

諸々の水の頂上は、諸々の山である。

山の向上する歩行と真っ直ぐに降りる歩行は共に水上である。

諸々の山の「つま先」は、諸々の水を歩行できるし、諸々の水を出させる。

そのため、諸々の山の歩みは、七と八に縦横無尽であるし、「修行と証が無いわけではない(が、汚染するのは駄目である)」。

「水」は、強弱ではないし、湿っている乾いているではないし、動静ではないし、冷たい暖かいではないし、存在や無ではないし、迷いや悟りではない。

「水」は、凝固すると金剛石よりも堅い。誰が凝固した「水」を破れるだろうか？

「水」は、融解すると液体の乳よりも柔らかい。誰が融解した「水」を破れるだろうか？

そのため、「水」の形成されて現される存在する功徳を疑う事は不可能である。

少し、十方の「水」を十方において着眼して看るべき時に「水」の学に参入するべきである。

人や天人が「水」を見る時だけの「水」の学への参入ではない。

「水」が「水」を見る時の「水」の学への参入が有る。「水」が「水」を修行して証するので。

「水」が「水」を言い表す事に参入して究める事が有る。

自己が自己に出会う通路を形成させて現させるべきである。

他のものが他のものに参入し徹(とお)す活路で進退するべきであるし、超越するべきである。

山と水を見る事は、種類に従って違いが有る。

水を見るのに「瓔珞」、「宝玉などを紐(ひも)で繋(つな)いだ首飾りや腕輪といった飾り」として見る者がいる。

けれども、「瓔珞」、「宝玉などを紐(ひも)で繋(つな)いだ首飾りや腕輪といった飾り」を水として見るわけではない。

私達が「何々である」と見る形を、他の者は水として見るのである。

他の者が「瓔珞」、「宝玉などを紐(ひも)で繋(つな)いだ首飾りや腕輪といった飾り」として見る物を私は水として見る。

水を妙なる華として見る者がいる。

けれども、華を水として用いるわけではない。

霊は、水を猛火として見るし、膿(うみ)と血として見る。

「龍魚」、「竜に成る魚」は、水を宮殿として見るし、「楼台」、「高い建物」として見る。

水を「七宝」、「七種類の宝」や「摩尼珠」、「宝玉」として見る事が有るし、

水を樹林や牆壁として見る事が有るし、

水を清浄な解脱の法の性質として見る事が有るし、

水を真実の人の体として見る事が有るし、
水を身の相や心の性質として見る事が有る。
人は水を水と見るが、殺す事と活かす事の「因縁」、「理由」と成る。
類（たぐい）の者に従って所見は違うが、明らかに疑うべきである。
一つの知覚の対象を見て、諸々の見解は色々であるとするのか？
森羅万象を一つの知覚の対象であると誤っているとするのか？
鍛錬の頂上で更に鍛錬するべきである。
修行や証する事や道をわきまえる事も一種類だけではないし、二種類だけではない。
究極の境地も千、万の無数の種類が有る。
更に、この主旨を推測して想像すると、たとえ、諸々の類（たぐい）の者にとっての水の種類が多いといえども、本（もと）の水が無いような物であるし、諸々の種類の水が無いような物である。
けれども、諸々の類（たぐい）の者にとっての水は、心による物ではないし、身による物ではないし、業（ごう）によって生じないし、自分による物ではないし、他のものによる物ではない。
水による「透脱」、「透体脱落」、「煩悩を透過して脱ぎ落とす事」が有る。
そのため、「水」は、地水火風空識などの四大元素の水ではないし、黄赤白黒などの色ではないし、色声香味触法などではないが、地水火風空識などの四大元素の水は自然に形成されて現される。
このため、今の国土や宮殿は、何ものが形成しているのか、何ものを形成しているのか、明らめて言う事は難しい。

「今の国土や宮殿は、世界を支えている『空輪』と『風輪』に支えられている」と言い表しても、私による真実ではないし、他のものによる真実ではない。視野の狭い見方による推測をためらうのである。

「今の国土や宮殿は、世界を支えている『空輪』と『風輪』に支えられていなければ、存在していないだろう」と思うので、「今の国土や宮殿は、世界を支えている『空輪』と『風輪』に支えられている」と言い表すのである。

仏は「一切の『諸法』、『全てのもの』は、最終的に解脱である。住む所は無い」と言った。

知るべきである。

解脱であって束縛無しといえども、「諸法」、「全てのもの」は法の位に住んでいる。

人は、水を見て、ひたすら、「流れ注いで留まらない」としか見ない。

水の流れには多くの種類が有って、人が見るのは一端に過ぎない。

水は、地を流れて通るし、空を流れて通るし、上方に流れて通るし、下方に流れて通る。

水は、一隅にも流れるし、深淵にも流れる。

水は、昇って雲を形成するし、降りて淵を形成する。

道教の書「文子」には「水の道は、天に上って雨や露(つゆ)を形成するし、地に下りて長江や黄河を形成する」と記されている。

道教の俗の説ですら、なお、この様なのである。

仏祖の法の子孫と自称する輩が、道教の俗人よりも暗いのは、最も恥じるべきである。

「水の道」を水は知覚しないが、水は、よく現に行う。

水は、知覚しても、よく現に行う。

知るべきである。

「天に上って雨や露(つゆ)を形成する」と言うのは、水は、何世界も天上、上方へ上って、雨や露(つゆ)を形成するのである。

雨や露(つゆ)は、世界に従って色々である。

「水が到達しない所が有る」と言うのは、「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の声聞の教えであるか、外道の邪悪な教えである。

水は、火炎の中にも到達するし、思考の中にも到達するし、覚、知、仏の性質(、神性)の中にも到達する。

「地に下りて長江や黄河を形成する」。

知るべきである。

水が地に下りる時は長江や黄河を形成するのである。

長江の精霊や黄河の精霊は、よく賢人と成る。

今、凡庸な人、愚者は「水は、必ず、長江や黄河や海や川に有る」と思ってしまうが、そうではない。
水は水の中に長江といった川や海を形成するのである。
そのため、長江といった川や海ではない所にも水は有り、水が地に下りる時は長江といった川や海の功を成すだけなのである。

また、「水が長江といった川や海を形成した水中には世界は無いし、仏土は無い」と学ぶべきではない。
一滴の水の中にも無量の仏の国土が形成されて現されるのである。
そのため、仏土の中に水が有るわけではないし、水の中に仏土が有るわけではない。
水の所在は、「過去、現在、未来」の「三際」と無関係であるし、法界と無関係である。
しかも、この様ではあるが、水が形成されて現されるのは「公案」、「仏祖の言動」である。
仏祖が到達する所に水は必ず到達する。
水が到達する所に仏祖は必ず形成されて現される。
これによって、仏祖は、必ず、水をひねって身心とするし、思量とする。
このため、「水は上に上らない」と言う言葉は仏教の内外の書籍には無い。
水の道は、上下に縦横に通達している。

仏教の経典の中では、火と風は上に上り、土と水は下に下る。(西洋の四大元素の考えと同じである。)

四大(元素)の上下の学には参入するべき所が有る。

仏道の上下の学に参入するのである。

土と水の行き先を「下」とするのである。

下を土と水の行き先とするわけではない。

火と風の行き先は「上」である。

法界は、上下と、「天の四隅である北東、北西、南東、南西」という「四維」の量とは必ずしも無関係ではあるが、四大(元素)と空(くう)と「識」、「理解」の行き先によって暫定的に上下の二方向と天の四隅に法界を建てているだけなのである。

「無想天」、「有頂天」を「上」、「阿鼻地獄」を「下」とするわけではない。

「阿鼻地獄」も尽法界であるし、「有頂天」も尽法界である。

「龍魚」、「竜に成る魚」が水を宮殿として見る時、人が宮殿を見るのと同様であり、「流れて行く」と思うべきではない。

もし傍観者が「龍魚」、「竜に成る魚」に「あなたの宮殿は流れる水である」と言ったら、私達、人が「山は流れる」という言葉を聞いた時と同様に、「龍魚」、「竜に成る魚」は驚き疑うであろう。

更に、「宮殿楼閣の手すり、階段、円柱も流れる水である」という説明が有ると保持させられ任せられる事も有るだろう。

これらの言葉の処理を、静かに思考してきたり思考していったりするべきである。

この辺りの表立った所で「透脱」、「透体脱落」、「煩悩を透過して脱ぎ落とす事」を学んでいなければ、凡人である身心を解脱していない事に成るし、仏の国土を究め尽していない事に成る。
ただし、凡人の国土を究め尽すわけではないし、凡人の宮殿を究め尽すわけではない。

今、人間では、海の心、長江の心を深く水として知見したといえども、「龍魚」、「竜に成る魚」などが、どの様なものを水として知見して使用しているか、未だ知らない。
愚かにも、「自分が水として知見しているものを、どの類の者も水として用いている」と認める事なかれ。
今、仏教を学んでいる仲間は、「水」を習う時、人間にとっての「水」だけを習う事に停滞するべきではない。
進んで、仏道の「水」の学に参入するべきである。
「仏祖が『水』として用いているものを、私達は何ものであると見ているのか？」と学に参入するべきである。
「仏祖の家の中に『水』が有るのか？　無いのか？」と学に参入するべきである。

山は、古今を超越している「時」から、大いなる聖者のいる所である。
賢者と聖者は共に、山を奥義としているし、山を身心としている。
賢者や聖者によって、山は形成されて現されるのである。

「山には何人もの大いなる賢者や聖者が入って集まっている」と思われるが、山に入ってから今まで、一人の人にも出会った人が一人もいないのである。

ただ、山という手段が形成されて現されるだけなのである。

更に、山に入って来た跡すら残らない。

世間で山を臨む時と、山中で山に出会う時は、「頂上を見る眼」が遥かに異なる。

「山は流れない」という推測と想像と知見は、「龍魚」、「竜に成る魚」の知見と違う。

人や天人が自分の世界で場所を得ている事を、他の類の者は、激しく疑うか、疑う事すらできない。

「山は流れる」という言葉を仏祖に学ぶべきである。驚き疑ったままではいけない。

一つの言葉をひねって取ると「山は流れる」のであるし、別の一つの言葉をひねって取ると「山は流れない」のである。

ある時は「山は流れる」のであるし、別の時は「山は流れない」のである。

「山は流れる」という言葉と「山は流れない」という言葉に参入して究めていない説明は、如来の正しい「法輪」、「説かれている法」ではない。

古代の仏は「『無間業』、『無間地獄に堕ちる悪業』を招く事をし得ない事を欲するならば、如来の正しい『法輪』、『説かれている法』の悪口を言う事なかれ」と言った。

この言葉を「皮肉骨髄」、「理解」に銘じるべきであるし、身心、「心と身が依り所とする環境としての報いである『この世』と、過去の行いの正に報いである心と身」に銘じるべきであるし、空(くう)に銘じるべきであるし、色に銘じるべきである。

この言葉は、経典として、樹や石に記されているし、田畑や集落に広まっている。

山は、国や世界の物ではあるが、山を愛する人の物と成る。

山は主人を必ず愛し求めるが、山が主人を愛し求めると、聖者や賢者や高徳の者は山に入るのである。

聖者や賢者が山に住むと、山は聖者や賢者の物と成るので、樹は青々と茂り、石は増え、鳥や獣は霊妙に成る。山が賢者や聖者の徳を被(こうむ)らせるからである。

知るべきである。

山は、賢者を好む事実が有るし、聖者を好む事実が有る。

多くの王者が山に行って賢者を拝み、大いなる聖者を拝みに訪問するのは、古今の優れた行跡である。

この時、王者は賢者や聖者を師として礼拝して敬う。民間の法に従う事は無い。

皇帝や王などの「聖化」、「徳の化」が及ぶ所でも、山の賢者に強引に何かを為(な)す事は全く無い。山が人間を離れている事を知るべきである。

「崆峒華封」の時、黄帝は、崆峒山の仙人の広成子を拝むために、ひざまずいて進んで、ひれ伏して、「道」、「真理」を広成子に質問した。

釈迦牟尼仏は、かつて父の王宮を出て山に入った。
けれども、釈迦牟尼仏の父の王は、山を恨まなかったし、山にいて王子である釈迦牟尼仏を教える者達を疑わなかった。
釈迦牟尼仏は、十二年の修行の多くで、山にいた。
「法王」、「釈迦牟尼仏」が(仏という)運を啓(ひら)いたのも、山にいた時である。

実に、転輪聖王ですら山にいる仏に強引に何かを為(な)す事が無い。

知るべきである。
山は、人間の場所ではないし、天上の場所ではない。
人の思考の推測によって山を知見するべきではない。
もし山が人間の「流れる」を超越していなかったら、誰が「山は流れる」とか「山は流れない」などの言葉で激しく疑うであろうか?

また、昔から、賢者や聖者は自然に水に住む事も有る。

聖者や賢者が水に住む時、魚を釣る事も有るし、人を釣る事も有るし、「道」、「真理」を釣る事も有る。

聖者や賢者が魚や人や真理を釣るのは共に、古くからの水中での風流である。

更に、進んで、自己を釣る事も有るし、釣る事を釣る事も有るし、釣る事に釣られる事も有るし、「道」、「真理」に釣られる事も有る。

昔、華亭の徳誠は、突然、三十六祖の薬山惟儼から離れて華亭江という川の中に住んだ時、夾山善会といった華亭江の賢者や聖者を得た。

華亭の徳誠は、魚を釣らなかったであろうか？　いいえ！　華亭の徳誠は、魚を釣った。

華亭の徳誠は、人を釣らなかったであろうか？　いいえ！　華亭の徳誠は、人を釣った。

華亭の徳誠は、水を釣らなかったであろうか？　いいえ！　華亭の徳誠は、水を釣った。

華亭の徳誠は、自らを釣らなかったであろうか？　いいえ！　華亭の徳誠は、自らを釣った。

華亭の徳誠を「見る」事ができ得た人は、華亭の徳誠に成るのである。

華亭の徳誠が人を接する方法は、人に会うのである。

世界に水が有る、というだけではない。

水という世界に世界が有る。

水中にだけ世界が有るわけではない。

雲の中にも情が有る者の世界が有るし、
風の中にも情が有る者の世界が有るし、
火の中にも情が有る者の世界が有るし、
土の中にも情が有る者の世界が有るし、
法界の中にも情が有る者の世界が有るし、
一茎の草の中にも情が有る者の世界が有るし、
一つの杖の中にも情が有る者の世界が有る。

情が有る者の世界が有る場所には必ず仏祖の世界が有る。
「情が有る者の世界が有る場所には必ず仏祖の世界が有る」道理の学によくよく参入するべきである。

水は真の竜の宮殿である。
水は流れ落ちるのではない。
「水は流れるだけである」と認めるのは、「流れる」という言葉と水の悪口を言う事に成る。例えば、「水は流れない」と強引に為す可能性が有るので。

水は水のありのままの実の相だけである。
水とは水の功徳である。

水とは流れる物ではない。
一つの水の、流れる事に参入して究め、流れない事に参入して究めると、
全てのものを究め尽す事が突然に形成されて現されるのである。

山にも、宝に隠れている山が有るし、沢に隠れている山が有るし、空に隠
れている山が有るし、山に隠れている山が有る。
内への所持に山を内に所持する学への参入が有る。

古代の仏は「山は(真の)山である。水は(真の)水である」と言った。

この言葉は、「山は普通の山である」と言っているわけではない。
この言葉は、「山は真の山である」と言っているのである。
そのため、真の山に参入して究めるべきである。
真の山に参入して究めれば、真の山で鍛錬する事に成る。

真の山と水は、自然に、賢者を形成するし、聖者を形成する。

正法眼蔵　山水経

その時、千二百四十年、冬、観音導利興聖宝林寺にいて僧達に話した。

仏祖

仏祖を形成させて現すには、仏祖をひねって挙げて見るのである。
過去、現在、未来だけではなく、仏の向上よりも向上するべきである。
まさに、仏祖の「面目」、「有様（ありよう）」を保持させせられ任せられるのをひねって、礼拝して見る。
仏祖の功徳を現に挙げて、住んで保持してきているし、体で証してきている。

毘婆尸仏　（「広説」と言う。）　（過去七仏）
尸棄仏　（「火」と言う。）　（過去七仏）
毘舎浮仏　（名前を訳すと「一切慈」と言う。）　（過去七仏）
拘留孫仏　（「金仙人」と言う。）　（過去七仏）
拘那含牟尼仏　（名前を訳すと「金色仙」と言う。）　（過去七仏）
迦葉仏　（名前を訳すと「飲光」と言う。）　（過去七仏）
釈迦牟尼仏　（「能忍」、「寂黙」と言う。）
摩訶迦葉　（一祖）（迦葉）（インドの初祖）
阿難陀　（二祖）
商那和修　（三祖）
優婆毱多　（四祖）
提多迦　（五祖）
弥遮迦　（六祖）

婆須蜜多　（七祖）
仏陀難提　（八祖）
伏駄蜜多　（九祖）
波栗湿縛　（十祖）
富那夜奢　（十一祖）
馬鳴　（十二祖）
迦毘摩羅　（十三祖）
那伽閼刺樹那（ナーガールジュナ）　（十四祖）（龍樹）（龍勝）（龍猛）
伽那提婆　（十五祖）
羅睺羅多　（十六祖）
僧伽難提　（十七祖）
伽耶舎多　（十八祖）
鳩摩羅多　（十九祖）
闍夜多　（二十祖）
婆修盤頭　（二十一祖）
摩拏羅　（二十二祖）
鶴勒那　（二十三祖）
獅子　（二十四祖）
婆舎斯多　（二十五祖）
不如蜜多　（二十六祖）
般若多羅　（二十七祖）
菩提達磨　（二十八祖）（達磨）（インドから中国へ来た祖師）
慧可　（二十九祖）（中国人の祖師）
僧璨　（三十祖）

道信（三十一祖）

弘忍（三十二祖）

慧能（三十三祖）（大鑑禅師）

行思（三十四祖）（青原の行思）

希遷（三十五祖）（石頭希遷）

惟儼（三十六祖）（薬山惟儼）

曇晟（三十七祖）（雲巌曇晟）

良价（三十八祖）（洞山良价）

道膺（三十九祖）（雲居道膺）

道丕（四十祖）

観志（四十一祖）

縁観（四十二祖）

警玄（四十三祖）

義青（四十四祖）

道楷（四十五祖）（芙蓉道楷）

子淳（四十六祖）

清了（四十七祖）

宗珏（四十八祖）

智鑑（四十九祖）

如浄（五十祖）

道元は、中国で、千二百二十五年の夏に、道元の亡き師である、天童山の、古代の仏と等しい、如浄の所へ行って、そばに仕えて、如浄という仏祖を礼拝して頂戴する事を究め尽した。

（「法華経」の）「仏と仏だけ(が能く究め尽せる)」なのである。

正法眼蔵　仏祖

その時、千二百四十一年、日本国の雍州の宇治県の観音導利興聖宝林寺で書いて僧達に示した。

嗣書

仏から仏へ、必ず仏から仏へ、法を嗣ぐし、祖師から祖師へ、必ず祖師から祖師へ、法を嗣ぐ。

仏祖から仏祖へ法を嗣ぐ事は、証が仏法に適っているのであるし、単一に伝える事である。

このため、(無上普遍正覚は、)無上普遍正覚なのである。

仏でなければ、仏を証明する事は不可能である。

仏の証明を得なければ、仏と成れない。

仏でなければ、誰が、この者を最も尊い者であるとするのか？　無上の者であると印を残すであろうか？

仏の証明を得る時は、師がいなくても独りで悟るし、自分が知らなくても独りで悟る。

このため、「仏から仏へ証を嗣ぎ、祖師から祖師へ証が仏法に適っている」と言うのである。

この道理の主旨は、仏と仏でなければ、明らめる事ができない。

まして、未熟な修行者が、この道理を量る事ができるだろうか？　いいえ！　未熟な修行者は、この道理を量る事ができない！

まして、どうして、霊感が無い文字だけの経典の似非学者が、この道理を推測できるだろうか？　いいえ！　霊感が無い文字だけの経典の似非学者は、この道理を推測できない！

たとえ、霊感が無い文字だけの経典の似非学者の為に説いても、霊感が無い文字だけの経典の似非学者は、聞く事ができない。

仏から仏へ嗣ぐため、仏道は「仏と仏だけが能く究め尽せる」ので、仏道は仏から仏への道ではない時が無い。

例えば、石は石に嗣ぐ事が有るし、宝玉は宝玉に嗣ぐ事が有る。秋に最も美しい菊も嗣ぐし、常緑である松も証明するので、皆、前の菊も後の菊も、ありのままであるし、前の松も後の松も、ありのままであるような物である。

この様である事を明らめていない輩は、仏から仏へ正しく伝えている道に出会っても、「どの様な『道』、『真理』を会得したのか?」と疑う事すらできない。

この様である事を明らめていない輩は、「仏から仏へ嗣ぎ、祖師から祖師へ証が仏法に適っている」という事を納得して見えてくる事ができない。仏の種族に似ていても、仏の子ではない事を、子の仏ではない事を、憐れむべきである。

曹谿山の大鑑禅師と呼ばれる三十三祖の慧能は、ある時、僧達に示して「過去七仏から三十三祖の慧能へ至るまでに四十人の仏がいる(。過去七仏と全ての祖師は仏である)。三十三祖の慧能から過去七仏へ至るまでに四十人の祖師がいる(。過去七仏と全ての祖師は祖師である)」と言った。

三十三祖の慧能の言葉の道理は、明らかに、仏祖が正しく嗣(つ)いでいる主旨である。

過去七仏には、過去の「荘厳劫」に「この世」に出現した者もいるし、現在の「賢劫」に「この世」に出現した者もいる。

過去七仏を、四十人の祖師の一部として「面授」、「言い表せないものを顔と顔を合わせて授(さず)かる事」に連(つら)ねるのは、仏道であるし、仏を嗣(つ)いでいるのである。

そのため、三十三祖から上へ向かって過去七仏にまで至れば、四十人の祖師達が仏を嗣(つ)いでいる。

過去七仏から下へ向かって三十三祖にまで至れば、四十人の仏達が仏を嗣(つ)いでいる。

仏祖の道とは、この様な物なのである。

証が仏法に適(かな)っていなくて仏祖でなければ、仏の智慧は無いし、祖師を究め尽していない。

仏の智慧が無ければ、仏を信じて受け入れていない。

祖師を究め尽していなければ、祖師は「証が仏法に適(かな)っている」と、あなたを認めない。

暫定的に「四十人の祖師達」と言ったが、近いものを取りあえず挙げたのである。

仏から仏へ嗣いでいるのは、深遠であって、不退転であるし、断絶しない。

その主旨とは、釈迦牟尼仏は、過去七仏以前に仏に成っていたが、長く、迦葉仏の法を嗣いだのである。

釈迦牟尼仏は、この世に降臨して生まれて、三十歳に成った年の十二月八日に仏に成ったが、過去七仏以前に仏に成っていたのである。

諸々の仏は肩を並べて同時に仏に成るのである。

釈迦牟尼仏は、諸々の仏以前に仏に成ったのである。

釈迦牟尼仏は、一切の諸々の仏よりも後に、末の上で、最後の仏として、仏に成ったのである。

さらに、「迦葉仏は釈迦牟尼仏の法を嗣いだ」として参入して究める道理が有る。

この道理を知らない人は、仏道を明らめていない。

仏道を明らめていなければ、仏を嗣いでいない。

「仏を嗣ぐ」と言うのは、「仏の子と成る」と言う事である。

釈迦牟尼仏は、ある時、阿難陀に質問させた。

「過去の諸々の仏は、誰の弟子ですか？」

釈迦牟尼仏は「過去の諸々の仏は、釈迦牟尼仏の弟子である」と言った。

諸々の仏の「仏の事」とは、この様な物なのである。

この諸々の仏を見て、仏を嗣いで成就するのが、仏から仏への仏の道である。

この仏の道では、法を嗣(つ)ぐ時に、必ず、「嗣書」、「師弟の系譜の書を嗣(つ)ぐ事」が有る。

もし法を嗣(つ)いでいなければ、自然に外道と成る。

もし法を嗣(つ)ぐ事が必ず無ければ、仏の道は、どうして今日にまで至るだろうか？

このため、仏から仏へには、必ず、仏が仏を嗣(つ)ぐ「嗣書」、「師弟の系譜の書を嗣(つ)ぐ事」が有るし、仏が仏を嗣(つ)ぐ「嗣書」、「師弟の系譜の書」を得る。

「嗣書」、「師弟の系譜の書を嗣(つ)ぐ事」の有様(ありよう)とは、太陽と月と星々を明らめて法を嗣(つ)ぐし、

「皮肉骨髄」、「理解」を得させて法を嗣(つ)がせるし、

「袈裟(けさ)」、「法衣」を嗣(つ)ぐし、

杖を嗣(つ)ぐし、

松の枝を嗣(つ)ぐし、

害虫を払うための毛がついた棒である払子を嗣(つ)ぐし、

優曇華を嗣(つ)ぐし、

「金襴衣」、「金糸で模様を織り入れた法衣」を嗣(つ)ぐし、

履物(はきもの)を嗣(つ)ぐし、

修行者を打って戒める竹の細長い板である竹篦(しっぺ)を嗣(つ)ぐ。

これらの法の嗣(つ)ぎ方で嗣(つ)ぐ時に、指の血で「師弟の系譜の書」を書いたり、舌の血で「師弟の系譜の書」を書いたり、油や乳で「師弟の系譜の書」を書

いたりして法を嗣ぐが、共に、「嗣書」、「師弟の系譜の書を嗣ぐ事」である。

「嗣書」、「師弟の系譜の書」を嗣いだ者や得た者は共に、仏を嗣いだのである。

実に、仏祖として形成されて現される時、法を嗣ぐ事が必ず形成されて現される。

法を嗣ぐ事が形成されて現される時、待ち望んでいなかったが来たり、求めていなかったが法を嗣いだりした仏祖が多い。

必ず、法を嗣ぐ事が有るのが、仏から仏へであるし、祖師から祖師へである。

二十八祖の達磨が西のインドから中国へ来てから、仏の道に、法を嗣ぐ事が有る主旨を、東の地である中国でも正しく聞く事ができるのである。

達磨が中国へ来る以前は、中国で、法を嗣ぐ事をかつて未だ聞かなかったのである。

西のインドの霊感が無い文字だけの経典の似非学者は、法を嗣ぐ事ができないし、知らない。

未熟な修行者の境地では、法を嗣ぐ事ができないし、経典による呪術師などは、「法を嗣ぐ事が有るかもしれない」と疑う事もできない。

経典の似非学者、未熟な修行者、経典による呪術師などは、「道」、「真理」を受容可能な器である人の身で生を受けながら、教えという網に無駄に絡まって、「透脱する」、「透体脱落する」、「煩悩を透過して脱ぎ落とす」法を知らないし、超越の機会を予定しない事を、悲しむべきである。

このため、仏道の学びと修行を明確に詳細にするべきである。

仏道の学に参入して究める志を専らにするべきである。

道元は、宋の時代の中国にいた時、「嗣書」、「師弟の系譜の書」を見て礼拝する事ができたが、多種多様な「嗣書」、「師弟の系譜の書」が有った。

「嗣書」、「師弟の系譜の書」を道元に見せてくれた人のうち、惟一西堂が、天童山の寺に留まっていたのは、超越的な人の業である。

惟一西堂は、広福寺の前の「住持」、「堂頭」である。

惟一西堂は、道元の亡き師である如浄と同郷の人である。

道元の亡き師である如浄は、常に「国情については惟一西堂に質問するべきである」と言った。

惟一西堂は、ある時、道元に「高徳の僧が書いた古い書物を見る事ができるのは、人にとっての宝です。どれだけ見て来ましたか？」と言った。

道元は、「見て来た経験は少ないです」と言った。

惟一西堂が、その時、「私の所に一軸の、高徳の僧が書いた古い書物が有ります。どういう物かは言えませんが、あなたのために見せてあげましょう」と言って持って来た物を見れば、「嗣書」、「師弟の系譜の書」であった。

惟一西堂が見せてくれた「嗣書」、「師弟の系譜の書」は、法眼宗の「嗣書」、「師弟の系譜の書」であった。

惟一西堂が見せてくれた「嗣書」、「師弟の系譜の書」は、高徳の長老の僧の遺品の中から得ていた。

惟一西堂が見せてくれた「嗣書」、「師弟の系譜の書」は、惟一西堂の「嗣書」、「師弟の系譜の書」ではなかった。

惟一西堂が見せてくれた「嗣書」、「師弟の系譜の書」には、「初祖、摩訶迦葉は、釈迦牟尼仏に悟る。釈迦牟尼仏は、迦葉仏に悟る」と記されていた。

道元は、これを見て、正統な法の子孫が正統な法の子孫に法を嗣ぐ事が有る事を決定的に信じて受け入れた。

未だかつて見た事が無かった法であった。

仏祖が目に見えないものを感じて、法の子孫である道元を保護してくれた時であった。

感激に勝てなかった。

宗月という長老の僧が、天童山の寺の「首座」に成った時に、「雲門宗の嗣書です」と言って道元に見せてくれた「嗣書」、「師弟の系譜の書」は、「嗣書」、「師弟の系譜の書」を得た人の師と、西のインドと中国の仏祖が並べ連ねられていて、その次に「嗣書」、「師弟の系譜の書」を得た人の名前が有った。

雲門宗の「嗣書」、「師弟の系譜の書」では、諸々の仏祖から「嗣書」、「師弟の系譜の書」を得て新しい祖師と成った人までの名前を連ねていたのである。

そのため、雲門宗の「嗣書」、「師弟の系譜の書」では、如来、釈迦牟尼仏から数えて四十代余りの仏祖の名前が共に、新しく法を嗣いだ人の名前へと記されて来ていた。

例えるならば、諸々の仏祖が各々、「師弟の系譜の書」を得た新しい祖師に法を授けたように見える。

雲門宗の「嗣書」、「師弟の系譜の書」には、摩訶迦葉や阿難陀などの祖師の名前が、雲門宗以外の「嗣書」、「師弟の系譜の書」と同様に並べ連ねられていた。

道元は、その時、宗月に「和尚様。

法眼宗、潙仰宗、曹洞宗、雲門宗、臨済宗の五家の『嗣書』、『師弟の系譜の書』では名前の連ね方が少し違います。

名前の連ね方の違いの意味は何でしょうか？

西のインドから、正統に代々、嗣がれてきているならば、なぜ違いが有るのでしょうか？」と質問した。

宗月は「たとえ、名前の連ね方の違いが大きくても、『雲門山の雲門文偃という仏は、この様に名前を連ねた』と学ぶべきである。

釈迦牟尼仏は、何によって他のものを尊重したのか？『道』、『真理』を悟った事によって他のものを尊重したのである！

雲門文偃は、何によって他のものを尊重したのか？『道』、『真理』を悟った事によって他のものを尊重したのである！」と言った。

道元は、宗月の言葉を聞いて、少し、納得して見えてきたものが有った。

千二百四十一年の、江蘇と浙江で、大きい寺の主の多くは、臨済義玄、雲門文偃、三十八祖の洞山良价などから法を嗣いでいる。

それなのに、臨済義玄の法の遠い子孫を自称する輩には、悪い心のままに悪い企てをする悪行が有る。

臨済義玄の法の遠い子孫を自称する輩（やから）は、善知識を持つ人の会に行って、高徳の僧の肖像画を一枚、「法」、「真理」について説かれた言葉が記された書物を一軸、熱心に頼んで受け取ると、法を嗣（つ）いだ偽の証拠にしてしまう。

さらに、一種類の「犬」、「動物的人間」、「似非（えせ）僧侶」がいる。

ある似非（えせ）僧侶どもは、高徳の長老の僧に近づいて、高徳の僧の肖像画や、「法」、「真理」について説かれた言葉が記された書物などを熱心に頼んで受け取る手口で、多数、隠して蓄えると、晩年に国へ賄賂（わいろ）の金銭と共に渡す代わりに一つの寺をねだる。

ある似非（えせ）僧侶どもは、寺の主に成る時、高徳の僧の肖像画や、「法」、「真理」について説かれた言葉が記された書物などの、高徳の僧から法を嗣（つ）いだとは言わず、当時の名声が有る輩や、王や大臣と親しい長老の僧から法を嗣（つ）いだと嘘をつく。

ある似非（えせ）僧侶どもは、法を会得する事を求めず、名声を貪（むさぼ）る事しか求めていない。

末法、悪の時代、この様な邪悪な風習が有る事を悲しむべきである。

この様な輩（やから）の中に、未だかつて一人も、仏祖の道を夢にも見聞きした者はいない。

高徳の僧の肖像画や、「法」、「真理」について説かれた言葉が記された書物などを、他の系譜の講師や在家信者にも与えるし、寺の雑務を行う在俗者である「行者（あんじゃ）」や商人にも与えるのは、法眼宗、潙仰宗、曹洞宗、雲門宗、臨済宗の五家の記録から明らかである。

また、法を嗣いでいない人が妄りに法を嗣いだ証拠を望んで一軸の書物を求めた時、仏道に適っている人は心を痛めつつも、あえて書く事が有る。この様な時は、「嗣書」、「師弟の系譜の書」の古くからの書き方ではなく、わずかに「私を嗣いだ」とだけ書く。

千二百四十一年頃の風習では、ただ、師の会で力を得れば、「会の師を師として法を嗣いだ」としてしまう。

かつて師から法を嗣いだ印を得なくても、ただ、師の部屋に入室したり師が堂に上る時に来て、「長連牀」、「坐禅する場所」にいただけの輩が、ある寺の主として寺に住む時、「師から法を伝承された」と嘘をつくのは、例を挙げるときりがないし、たとえ悟るという一大事を打開できても、師、独りだけを師とする事が多い。

伝蔵主は、龍門の仏眼清遠の法の遠い子孫である。

伝蔵主は、「嗣書」、「師弟の系譜の書」を持っていた。

伝蔵主は、千二百十五年に、隆禅という人が日本人であるが伝蔵主が病気の時に良く看病して多く勤労してくれたので、隆禅の看病の労を感謝するために、「嗣書」、「師弟の系譜の書」を取り出して隆禅に見せて礼拝させてあげた。

伝蔵主は、「『嗣書』、『師弟の系譜の書』は、見るのが難しい物である。あなたのために見せて礼拝させてあげましょう」と言った。

道元が、その八年後、千二百二十三年の秋の頃、初めて天童山の寺で泊まり番をした時に、隆禅は丁寧に伝蔵主にお願いしたため、伝蔵主は「嗣書」、「師弟の系譜の書」を道元に見せてくれた。

伝蔵主の「嗣書」、「師弟の系譜の書」の様式では、過去七仏から三十八祖の臨済義玄まで四十五人の祖師の名前が連ねて書かれていて、三十八祖の臨済義玄より後の祖師は一つの円を形成するように名前と署名を写し書きされていて、新しく法を嗣いだ人の名前は最後に年月の下に書かれていた。

「伝蔵主という臨済宗の高徳の長老の僧の『嗣書』、『師弟の系譜の書』には、この様な違いが有った」と知るべきである。

道元の亡き師である五十祖の如浄は、人が妄りに「法を嗣いだ」と自称する事を深く戒めた。

実に、如浄の会は、古代の仏の会であると言えるし、坐禅の寺の中興である。

如浄は、自らも、多様な色の袈裟を着なかった。

如浄には芙蓉山の四十五祖の芙蓉道楷の多様な色の「衲袈裟」が伝わっていたが、如浄は、堂に上る時にも高座に上る時にも用いなかった。

如浄は、寺の長として多様な色の法衣を一生、着なかった。

心ある者も、物を知らない者も、共に、如浄をほめ、如浄を真の善知識を持つ人であると尊重した。

道元の亡き師である、古代の仏と等しい、如浄は、堂に上ると常に諸方の僧を戒めて「近頃、多い、祖師の道に名前を借りる輩（やから）は、妄りに法衣を着、長髪を好み、称号を得るのを出世の船出としてしまっている。

憐れむべきである。

誰が、この人たちを救うのか？

諸方の長老の僧が、『道』、『真理』を求める心が無くて、仏道を学んで修行しない事を残念に思う。

『嗣書』、『師弟の系譜の書を嗣（つ）ぐ事』と法を嗣（つ）ぐ事を見聞きした事が有る者は、なお、稀（まれ）である。

百人、千人の中にも一人もいない。

祖師の道が衰退してきてしまっている」と言った。

　この様に、如浄は常に戒めたが、諸方の長老は恨（うら）まなかった。

　そのため、真心で道をわきまえる事があれば、「嗣書」、「師弟の系譜の書を嗣（つ）ぐ事」を見聞きするであろう。

「嗣書」、「師弟の系譜の書を嗣（つ）ぐ事」を見聞きする事が有れば、仏道を学んで修行している事に成るであろう。

　臨済宗の「嗣書」、「師弟の系譜の書」では、まず、「嗣書」、「師弟の系譜の書」を得た人の名前を書く。

　「誰々が私の所に来た」とも書くし、

「誰々が私の会に来た」とも書くし、

「誰々は私の奥義に入った」とも書くし、
「誰々は私の法を嗣いだ」とも書く。
次に、師の師を書き連ねていくが、言い伝えられている法訓が有る。
法訓の主旨は、「法を嗣ぐ事は、終わりから初めまでとは無関係に、ただ、
真の善知識を持つ者の善知識を見る」という明らかで正しい主旨である。

臨済宗には、次の様に書かれている「嗣書」、「師弟の系譜の書」も有る。
道元は目の当たりに見たので記す。
「『蔵主』の(無際)了派は、威武の人である。今は、私(、拙庵徳光)の法の
子である。
(拙庵)徳光は、径山寺の大慧宗杲の所に行って、そばに仕えた。
径山寺の大慧宗杲は、夾山の圜悟克勤の法を嗣いだ。
夾山の圜悟克勤は、五祖山の法演禅師の法を嗣いだ。
五祖山の法演禅師は、海会寺の白雲守端の法を嗣いだ。
海会寺の白雲守端は、楊岐方会の法を嗣いだ。
楊岐方会は、慈明禅師と呼ばれる石霜楚円の法を嗣いだ。
慈明禅師と呼ばれる石霜楚円は、汾陽善昭の法を嗣いだ。
汾陽善昭は、首山省念の法を嗣いだ。
首山省念は、風穴延沼の法を嗣いだ。
風穴延沼は、南院慧顒の法を嗣いだ。
南院慧顒は、興化存奨の法を嗣いだ。
興化存奨は、臨済義玄の正統な法の長子である」

この「嗣書」、「師弟の系譜の書」は、阿育王山の仏照禅師と呼ばれる拙庵徳光が書いて無際了派に与えたのを、無際了派が天童山の「住持」に成った時に、戒を受けてから十年未満の若い僧である「小師僧」の智庾が無際了派の指示で密(ひそ)かに持って来て「了然寮」で道元に見せてくれた物である。

千二百二十四年に、初めて、無際了派の「嗣書」、「師弟の系譜の書」を見たが、どれだけ喜びを感じた事か！

仏祖が目に見えないものを感じて道元に「嗣書」、「師弟の系譜の書」を見せてくれたのである。

焼香し礼拝して無際了派の「嗣書」、「師弟の系譜の書」を開いて見た。

「嗣書」、「師弟の系譜の書」を無際了派に頼んで出してもらった経緯は、千二百二十三年に、「都監寺」の師広が密(ひそ)かに「寂光堂」で「嗣書」、「師弟の系譜の書」について道元に語ってくれた。

道元は、その時、師広に「今は、誰が、『嗣書』、『師弟の系譜の書』を持っているのでしょうか？」と質問した。

師広は、「『住持』の無際了派の所に『嗣書』、『師弟の系譜の書』の様な物が有りました。後で、出してくれるように、丁寧に頼めば、必ず見せてくれるでしょう」と言った。

道元は、師広の言葉を聞いてから、日夜休まず、「嗣書」、「師弟の系譜の書」を心の中で求めた。

このため、千二百二十四年に、丁寧に、智庾を仲介にして、無際了派に頼み、真心を投じて得たのである。

無際了派の「嗣書」、「師弟の系譜の書」は、白い絹に紙を貼った物に書かれていた。

無際了派の「嗣書」、「師弟の系譜の書」の表紙は、赤い錦であった。

無際了派の「嗣書」、「師弟の系譜の書」の軸は、宝玉であった。
無際了派の「嗣書」、「師弟の系譜の書」の、長さは九寸くらい、広さは七尺余りであった。（一寸は三センチ。一尺は三十センチ。）
無際了派の「嗣書」、「師弟の系譜の書」は、不注意な人には見せない。
道元は、智庾に感謝した。
道元は、すぐに、無際了派の所に行って、焼香して礼拝して無際了派に感謝した。
無際了派は、その時に、「『嗣書』、『師弟の系譜の書』を見て知る事ができ得る者は少ない。今、あなたが『嗣書』、『師弟の系譜の書』を見て知る事ができ得たのは、仏道を学んで修行して実へ帰る事ができたからである」と言った。
道元は、この時、喜びを感じる事に勝てなかった。

道元は、中国の「宝慶」の頃、台山や雁山などを雲の様に訪ねたついでに、「平田」の万年寺に行った。
万年寺の当時の「住持」は福州の元鼒であった。
宗鑑という長老が「住持」を退いて隠居した後、元鼒が「住持」に成って、寺を盛り上げていた。
人の話のついでに、昔からの仏祖の家風を話していて、三十七祖の大潙禅師と呼ばれる潙山霊祐と仰山慧寂の令嗣話を挙げると、元鼒は、「私の所の『嗣書』、『師弟の系譜の書』をかつて見た事が有りますか？」と言った。
道元は、「どうして見た事が有るでしょうか？　いいえ！」と言った。

元鼒は、自ら立ち上がって行って、「嗣書」、「師弟の系譜の書」を捧げて、「この『嗣書』、『師弟の系譜の書』は、たとえ、親しい人でも、長年そばに仕えてくれた僧でも、見せませんでしたが、仏祖の法訓に従って見せませんでした。

しかし、私、元鼒は、常日頃、城に行って『知府』に見える(まみ)ために城にいた時、ある夢を見たのです。

夢の中で、大梅山の法常禅師と思われる高徳な僧がいて、梅の華が咲いた枝を一枝かかげて、『もし、海を越えて来た真実の人がいたら、華を惜しむ事なかれ』と言って、梅の華を私、元鼒に与えたのです。

私、元鼒は思わず夢の中で詩で『未だ海を越えていなくても良いです。三十回、棒で軽く打ってあげますから』と言った。

夢を見てから五日も経たずに、あなた、道元と見え(まみ)ました。

あなた、道元は海を越えて来ました。

この『嗣書』、『師弟の系譜の書』は、梅の華の模様に書かれています。

大梅山の法常禅師が『梅の華』で教えたのは、この『嗣書』、『師弟の系譜の書』でしょう。

夢と符号するので、この『嗣書』、『師弟の系譜の書』を取り出したのです。

もしかして、あなた、道元は、私、元鼒の法を嗣(つ)ぐ事を求めますか？

たとえ、もし、あなた、道元が私、元鼒の法を嗣(つ)ぐ事を求めても、私、元鼒は惜しむべきではないのです」と言った。

道元は、元鼒の夢の話を信じ、感じ入った。

道元は、「嗣書」、「師弟の系譜の書を嗣(つ)ぐ事」と法を嗣(つ)ぐ事を求めるべきであったが、ただ、「嗣書」、「師弟の系譜の書」を焼香して礼拝して恭(うやうや)しく敬い供養するだけであった。

その時、焼香で、そばに仕えていた僧である、法寧という僧がいたが、
「初めて『嗣書』、『師弟の系譜の書』を見ました」と言った。

道元は、密(ひそ)かに思った。

元鼒の「嗣書」、「師弟の系譜の書」は、実に、仏祖の目に見えない助けが無ければ、見聞きする事は難しかった。

道元は、日本という僻地(へきち)の愚者であるが、何の幸いが有ったのか、数回、「嗣書」、「師弟の系譜の書」を見た。

感涙で袖を濡らしてしまった。

その時、維摩室や大舎堂などは静かで無人であった。

元鼒の「嗣書」、「師弟の系譜の書」は、地に落ちている梅の華の模様の白い紙に書かれていた。

元鼒の「嗣書」、「師弟の系譜の書」の、長さは九寸余り、広さは一尋余りであった。

元鼒の「嗣書」、「師弟の系譜の書」の軸は、黄玉(トパーズ)であった。

元鼒の「嗣書」、「師弟の系譜の書」の表紙は錦であった。

道元が台山から天童山へ帰る途中で大梅山の護聖寺の宿泊所に泊まると、大梅山の法常禅師が来て開花している一枝の梅の華を授けてくれるという神仏による不思議な夢を見た。

大梅山の法常禅師という祖師が、道元を照らして見てくれていて、道元の夢に降臨してくれたのである。

神仏による不思議な夢の、一枝の梅の華の縦横は、一尺余りであった。

梅の華は、どうして優曇華ではないか？

梅の華が、優曇華であると言えるのは、神仏による不思議な夢の中でも、目が覚めている現実の中でも、同じく真実であろう。

道元は、神仏による不思議な夢を、宋の時代の中国にいた間も、帰国した後も、未だ人には語っていなかった。

道元の、三十八祖の洞山良价の法の子孫の「嗣書」、「師弟の系譜の書」の書き方は、臨済義玄などの法の子孫の「嗣書」、「師弟の系譜の書」の書き方とは異なる。

仏祖の衣の裏に書かれていたのを、三十四祖の青原の行思が三十三祖の大鑑禅師の机の前で手の指より清らかな血を出して書き正しく伝えられたのである。

「青原の行思の指の血に、大鑑禅師の指の血を合わせて、書き伝えられた」と伝えられている。

「二十八祖の達磨と二十九祖の慧可の時にも、血を合わせる事は行われた」と伝えられている。

「誰々は私の法の子である」とか「誰々が私の所に来た」などとは書かず、過去七仏と諸仏を書き伝える「嗣書」、「師弟の系譜」の書き方である。

そのため、知るべきである。

大鑑禅師の血の気は、かたじけなくも青原の行思の清らかな血と和合し、青原の行思の清らかな血は親しく大鑑禅師の親しい血と和合して、目の当たりに法を嗣いだ証明を得たのは、青原の行思、独りだけである。

南嶽の懐譲といった他の祖師が及ぶ所ではない。

この事を知っている仲間は、「仏法は三十四祖の青原の行思だけに正しく伝えられた」という「道」、「真理」を理解して取る。

道元の亡き師である、古代の仏と等しい、五十祖の如浄は、示して、「諸仏には、必ず、法を嗣ぐ事が有る。
釈迦牟尼仏は、迦葉仏の法を嗣いだ。
迦葉仏は、拘那含牟尼仏の法を嗣いだ。
拘那含牟尼仏は、拘留孫仏の法を嗣いだ。
この様に、『仏から仏へ法を嗣いで今に至る』と信じて受け入れるべきである。
『仏から仏へ法を嗣いで今に至る』と信じて受け入れる事が、仏を学ぶ道である」と言った。

道元は、その時、「迦葉仏の肉体が死んだ後で、釈迦牟尼仏は初めて『この世』に出現して仏に成りました。
また、現在の『賢劫』の諸仏が、どうして過去の『荘厳劫』の諸仏の法を嗣ぐ事ができますでしょうか?
この道理とは、どの様な物ですか?」と質問した。

如浄は、「あなたが言った事は、教えを聴いただけの段階の理解であるし、
未熟な修行者の言葉であるし、仏祖の正統な代々の言葉ではない。
私の、仏から仏へ伝えられている言葉は、そうではない。
『釈迦牟尼仏は、まさしく、迦葉仏の法を嗣いだ』と習ってきているのである。

『釈迦牟尼仏が法を嗣いだ後に、迦葉仏の肉体は死んだ』として学に参入するのである。

もし釈迦牟尼仏が迦葉仏の法を嗣いでいなければ、自然に外道と同様に成ってしまうだろう。

誰が釈迦牟尼仏を信じるだろうか？

この様に、仏から仏へ法を嗣いで今に至るので、個々の仏は共に、正しく法を嗣いでいるのである。

諸仏は、連続しているわけではないし、集まっているわけではない。

まさに、この様に、『仏から仏へ法を嗣いでいる』と学ぶのである。

『阿笈摩教』、『小乗』、『矮小な乗り物』、『劣悪な段階』の者が言う『劫の量』、『寿命の量』とは無関係である。

もし、『釈迦牟尼仏だけから仏教が起こった』と言えば、わずかに二千年余りであり古いわけではないし、法を嗣ぐのも、わずかに四十代余りであり新しいと言える。

この様に、仏を嗣ぐ事を学ぶわけではない。

『釈迦牟尼仏は、迦葉仏の法を嗣いだ』と学ぶし、『迦葉仏は、釈迦牟尼仏の法を嗣いだ』と学ぶのである。

この様に学んだ時、まさに、諸々の仏祖の法を嗣ぐ事を学んだのである」と言った。

　道元は、この時、初めて、「仏祖には法を嗣ぐ事が有る」という教えを受けただけではなく、従来の古巣を脱ぎ落としたのである。

時に、千二百四十一年、観音導利興聖宝林寺で、かつて宋の時代の中国に入り、仏法を伝えている沙門である道元が記した。

千二百四十三年、越前の吉田県の吉峰古寺草庵に滞在した。

（道元の署名）

看経

無上普遍正覚の修行と証では、善知識を持つ人々の善知識を用いたり、経を用いたりする。

「善知識を持つ人々」と言うのは、自己の全てによる仏祖である。

「経」と言うのは、自己の全てによる経である。

仏祖の全てによる自己、経の全てによる自己なので、この様に成る。

「自己」と呼んでいるが、「私」や「あなた」にとらわれている訳ではない。

「自己」と呼んでいるのは、「活眼睛」、「真理を見通す見識が有る、見る眼」であるし、「活拳頭」、「活きている拳」である。

「念経」、「経の意味を読み取って念頭に置く事」や、
「看経」、「経を見る事」や、
「誦経」、「経を声を出して読む事」や、
「書経」、「経を書く事」や、
「受経」、「経を受け取る事」や、
「持経」、「経を保持する事」が有って、共に、仏祖の修行と証である。

仏の経に出会う事は簡単ではない。

「無量の国の中で、名前さえ聞く事ができ得ない」のであるし、
「仏祖の中にいて、名前さえ聞く事ができ得ない」のであるし、
「命の最中にいて、名前さえ聞く事ができ得ない」のである。

仏祖でなければ、経を見聞きしたり、読んだり、意味を理解したりできない。

仏祖の学に参入してから、やっとの事で、経の学に参入するのである。

経の学に参入する時、耳で、眼で、舌で、鼻で、身心という塵(ちり)で、至る所で、聞く際に、話す際に、経を聞いたり、保持したり、受け取ったり、説いたりする事などが形成されて現される。

名声を求めるために外道の説を説く輩は、仏の経を修行する事ができない。

経は、樹や石に記されて伝えられ保持されているし、田畑や集落に流布しているし、「塵刹」、「塵の様に無数の国土が有る俗世」で演出されているし、虚空で開講されている。

弘道大師と呼ばれる三十六祖の薬山惟儼が、長く、堂に上って法を説かなかった事が有った。

「院主」の僧は、薬山惟儼に、「僧達は、長らく、和尚様、薬山惟儼様の思いやり深い教えが欲しいと思っております」と言った。

薬山惟儼は、「鐘を打ち鳴らし(て、僧達を集め)てください」と言った。

「院主」が鐘を打ち鳴らすと、僧達は、すぐに集まった。

薬山惟儼は、堂に上ったが、しばらく経つと、下って、自分の部屋に帰った。

「院主」は、薬山惟儼の後に従って、「和尚様、薬山惟儼様は、来て、僧達の為に法を説いて欲しいという願いを聞き入れてくださったのに、どうして一言も話してくださらないのですか？」と言った。

薬山惟儼は、「経には、経の学者がいるではないか。どうして老僧である私、薬山惟儼が話さない事を怪しむのか？」と言った。

薬山惟儼の思いやり深い教えとは、「拳頭」、「拳」には、「拳頭の師」、「拳を教えてくれる師」がいるし、「眼睛」、「見る眼」には、「眼睛の師」、「見る眼を教えてくれる師」がいる、という事なのである。

けれども、薬山惟儼に「老僧である薬山惟儼様が話さない事を怪しむ理由が有ります。和尚様、薬山惟儼様は何の師なのですか？」と質問するべきである。

韶州の曹谿山の、三十三祖の大鑑禅師の会に、法華経を読んでいる、法達と言う僧が来た。

大鑑禅師は、法達のために詩で「心が迷えば法華経の主旨に転じられ、心を悟れば法華経の主旨を転じる。

法華経を読む事を久しくしても、自己を明らめなければ、正義に対する敵に成ってしまう。

正義を無意識的に意識する事は正しい。
(いつまでも)正義を意識的に意識する事は誤りである。
意識の有無を共に計らなければ、白い牛の牛車を長く御する事に成ってしまう」と言った。

そのため、心が迷えば法華経の主旨に転じられ、心を悟れば法華経の主旨を転じる。
さらに、迷いと悟りを超越する時は、法華が法華を転じるのである。

法達は、大鑑禅師の詩を聞いて、心踊り歓喜し、詩を捧げて称賛して、次のように話した。
「法華経を三千回も読んだが、曹谿山の祖師の一つの詩で忘却した。
この世へ諸仏(、神の人)が出現した主旨を未だ明らめなければ、どうして生を重ねる狂気を止める事ができるであろうか？　いいえ！　できない！
法華経の『羊の車、鹿の車、牛の車』の例えは仮に設けられている。
法華経の『最初も中間も最後も善い』という言葉をかかげる。
法華経の『火事の家』の中は、元より、法の中の王である、と誰が知っているであろうか？」
その時、大鑑禅師は「あなたは、今から『法華経の意味を読み取って念頭に置く僧』、『念経僧』と名乗りなさい」と話した。

仏の道には「経の意味を読み取って念頭に置く僧」、「念経僧」がいる事を知るべきである。

古代の仏と等しい、大鑑禅師が、直接的に指し示したのである。

「念経僧」の「念」は、「意識」、「無意識」などではない。

「念経僧」の「念」は、「意識の有無を共に計る事」である。

「長い時間である劫から劫へ至っても、昼から夜へ至っても、手で経を開かなくても、『経』と名づけている『存在するもの』の意味を読み取って念頭に置かなくても良い時は無い」だけなのである。

「経から経へ至っても、経ではないものは無い」だけなのである。

東インドの、二十七祖の般若多羅は、ある時、東インドの国王に、招かれて食べ物を捧げられた際に、「諸々の人々の尽(ことごと)くが経を読むのに、般若多羅様だけは経を読みませんが、どうしてですか?」と質問された。

般若多羅は、「私は、吐く息が全ての縁(えん)に従わないし、吸う息が『色受想行識』という『五蘊』による世界にいませんし、常に、『ありのまま』という経、百、千、万、億の無数の経を読んでいます。たった一つの経や二つの経ではないのです」と言った。

般若多羅は、東インドで、「修行者」という「草」を植えた。

二十七祖の般若多羅は、一祖の迦葉から数えて二十七代目の正統な法の子孫である。

般若多羅は、仏の家の「調度品」、「日常の道具」を尽く正しく伝えられている。

般若多羅は、仏の「頂上」や、
仏の「眼睛」、「見る眼」や、
仏の「拳頭」、「拳」や、
仏の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」や、
仏の「杖」や、
仏の「器」や、
仏の「衣と法」や、
仏の「骨髄」、「理解」などに住んで保持していた。

般若多羅は、私達の法の先祖である。
私達は、般若多羅の法の、雲の様に遠い子孫である。

般若多羅の力を揮った言葉とは、「吐く息が全ての縁に従わない」だけではなく「全ての縁も吐く息に従わない」のである。

全ての縁は、たとえ、「頂上」や「眼睛」、「見る眼」であっても、渾身であっても、渾心であっても、「担って来て、担って去り、また、担って来る」、全ての縁に従わないだけなのである。
「従わない」とは「揮って従う」のである。
このため、「築著磕著」、「突き当たり、ぶつかり当たる」のである。

「吐く息」は「全ての縁」である。しかし、「吐く息」は「全ての縁に従わない」のである。

無量の劫の昔から、「呼吸」の消息を未だ知らなかったが、今まさに初めて知る事ができる時が来たので、「『色受想行識』という『五蘊』による世界にいない」事を聞くし、「全ての縁に従わない」事を聞く。

「全ての縁」によって初めて「吸う息」などに参入して究める時である。

「呼吸」に参入する時は、以前には無かったし、以後には無いだろうし、今だけ有るのである。

「『色受想行識』という『五蘊』による世界」と言うのは、「五蘊」である。

「五蘊」とは、「色受想行識」を言うのである。

「五蘊にいない」のは、「五蘊」が未だ来ない世界だからである。

この「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」をひねるので、「常に、『ありのまま』という経、百、千、万、億の無数の経を読んでいるのである。たった一つの経や二つの経ではないのである」。

「百、千、万、億の無数の経」は、暫定的に多い事の一端を挙げているが、量が多い事を表すだけではない。

「一つの吐いた息」が「『色受想行識』という『五蘊』による世界にいない」のを「百、千、万、億の無数の経」という量としている。

けれども、「有漏智」、「煩悩に汚染されている知」や「無漏智」、「煩悩が無い汚染されていない知」による推測ではないし、

「有漏法」、「煩悩に汚染されている法」や「無漏法」、「煩悩が無い汚染されていない仏法」による世界ではない。

このため、知が有る人の知による推測ではないし、
知が有る人の知による判断ではないし、
知が無い人の知による推測ではないし、
知が無い人の知による到達ではない。

仏から仏へ、祖師から祖師への修行と証や、
「皮肉骨髄」、「理解」や、
「眼睛」、「見る眼」や、
「拳頭」、「拳」や、
「頂上」や、
「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」や、
「杖」や、
「害虫を払うための毛がついた棒である払子」や、
「超越の一時」である。

ある老婦人がいて、ある時、観音院の趙州真際大師に、浄財を施して、「大蔵経」を読むのをお願いした。
趙州真際大師は、坐禅する床を下って一周、回り、老婦人の使者に向かって、「『大蔵経』を読むのは終わりました」と言った。
老婦人の使者が老婦人に趙州真際大師の言葉を挙げると、老婦人は、「最近、『大蔵経』を一回、読むのを趙州真際大師様にお願いしたが、どうして、和尚様、趙州真際大師様は、半分しか『大蔵経』を読まなかったのか？」と言った。

明らかに知る事ができる。

「大蔵経」を一回、読む事や、「大蔵経」を半分、読む事は、老婦人の三つの経である。

「『大蔵経』を読むのは終わりました」とは、趙州真際大師の一回の「大蔵経」という経である。

「大蔵経」を読む有様(ありよう)とは、坐禅する床を回る趙州真際大師がいるし、坐禅する床が有って趙州真際大師を回る。

趙州真際大師を回る趙州真際大師がいるし、坐禅する床を回る坐禅する床が有る。

けれども、一切の全ての「大蔵経」を読む事は、坐禅する床を回るだけではないし、坐禅する床が回るだけではない。

益州の、神照大師と呼ばれる大隋山の法真は、後大潙と呼ばれる長慶大安の法を嗣(つ)いだ。

ある老婦人がいて、ある時、大隋山の法真に、浄財を施して、「大蔵経」を読むのをお願いした。

大隋山の法真は、坐禅する床を下って一周して、老婦人の使者に向かって、「『大蔵経』を読むのは終わりました」と言った。

老婦人の使者が老婦人に大隋山の法真の言葉を挙げると、老婦人は、「最近、『大蔵経』を一回、読むのを大隋山の法真様にお願いしたが、どうして、和尚様、大隋山の法真様は、半分しか『大蔵経』を読まなかったのか?」と言った。

今、「大隋山の法真が坐禅する床を回った」と学ぶ事なかれ。
「坐禅する床が大隋山の法真を回った」と学ぶ事なかれ。
「拳頭」、「拳」と「眼睛」、「見る眼」の団欒だけではないし、「一円相」、「悟りの象徴としての円」を、作って、打っているのである。
けれども、老婦人は「見る眼」が有るのか？　「見る眼」を備えているのか？
老婦人は、「半分しか『大蔵経』を読まなかった」という言葉を、「拳頭」、「拳」によって正しく伝えられたのかもしれない。
そのため、さらに、老婦人は、「最近、『大蔵経』を読むのを大隋山の法真様にお願いしたが、どうして、和尚様、大隋山の法真様は、精魂を弄(ろう)しただけなのか？」と言うべきであった。
誤っても、この様な言葉を選び取れば、「眼睛」、「見る眼」を備えている老婦人であろう。

ある役人がいて、ある時、悟本大師と呼ばれる三十八祖の洞山良价に、食べ物を捧げ、浄財を施して、「大蔵経」を読むのをお願いした。
洞山良价は、坐禅する床を下って、役人に向かって敬礼した。
役人は、洞山良价に敬礼した。
洞山良价は、役人を引いて共に坐禅する床の周りを一周、回って、役人に向かって敬礼した。

洞山良价は、少し時間を置いてから、役人に向かって、「理解できましたか？」と言った。

役人は、「理解できませんでした」と言った。

洞山良价は、「私は、あなたと、『大蔵経』を読みました。どうして理解できないのですか？」と言った。

「私が、あなたと、『大蔵経』を読んだ」のは、明らかである。

「坐禅する床の周りを回る事」が「『大蔵経』を読む事」であると学ぶわけではない。

「『大蔵経』を読む事」とは「坐禅する床の周りを回る事」であると理解するわけではないのである。

洞山良价の思いやり深い教えを聴いて理解して取るべきである。

道元の亡き師である、古代の仏と等しい、五十祖の如浄は、天童山に住んでいた時、高麗国の人が山に入って浄財を施したので僧達が経を読んでから、高座に上った際に、洞山良价と役人の出来事を挙げて話した。

如浄は、洞山良价と役人の出来事を話し終わると、払子で大きい「円相」、「一円相」、「悟りの象徴としての円」を空中に描いて、「如浄は、今日、あなたと、『大蔵経』を読みました」と言った。

如浄は、払子を投げる様に下して、高座を下った。

今、道元の亡き師である如浄の言葉を読み取って理解するべきである。

如浄の言葉を、他の者の言葉と比べるべきではない。

けれども、「『大蔵経』を読む事」には、一つの単眼を用いるとするのか？　半分の単眼を用いるとするのか？

洞山良价の言葉と、如浄の言葉は、どれだけの「眼睛」、「見る眼」を用いているのか？　どれだけの「舌先」、「言葉」を用いているのか？

わきまえ究めて見なさい。

弘道大師と呼ばれる三十六祖の薬山惟儼は、普段、他人に経を見る事を許さなかった。

薬山惟儼は、ある日、経を見ていた。

ある僧は、その時、「和尚様、薬山惟儼様は、普段、他人に経を見る事を許しません。どうして御自分は経を見ているのですか？」と質問した。

薬山惟儼は、「私は、ただ、眼を遮る事を必要としただけです」と言った。

ある僧は、「私も、和尚様、薬山惟儼様に学んで、模倣して、経を見ても良いですか？」と言った。

薬山惟儼は、「もし、あなたが経を見れば、牛の皮にも穴を穿ってしまうだろう」と言った。

「私は眼を遮る事を必要とする」という言葉は、「眼を遮る事」自体を言っているのである。

「眼を遮る事」は、「眼睛」、「見る眼」を「無くす」事であるし、経を「無くす」事であるし、揮(ふる)って眼が遮る事であるし、揮(ふる)って眼を遮る事である。

「眼を遮る事」は、遮っている中で「開眼する」、「悟る」事であるし、遮っている中で「活眼」、「真理を見通す見識が有る事」であるし、「まぶた」の上に更に一枚の「まぶた」を加える事であるし、遮っている中で眼をひねる事であるし、眼自体が遮る事をひねるのである。

そのため、「眼睛」、「見る眼」という経でなければ、眼を遮る功徳が未だ無いのである。

「牛の皮にも穴を穿(うが)つ」と言うのは、全ての牛の皮であるし、全ての皮の牛であるし、牛をひねって皮となすのである。

このため、「皮肉骨髄」、「理解」や「頭の角」や「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」を「牛」、「牝牛(めうし)」の手段とする。

「和尚を学ぶ、模倣する」時、「牛」が「眼睛」、「見る眼」と成るのを「眼を遮る」とするし、「眼睛」、「見る眼」が「牛」と成るのである。

冶父道川は、「億、千の無数の仏に捧げものをすれば、福徳は果てしなく成る。
しかし、常に古代の仏の教えの経を見る事には及ばない。
ただし、経は、白紙の上に墨(すみ)などで黒い文字を書いただけの物である。
あなたが『開眼して』、『悟って』、目の前の事であるかの様に見る事を願う」と言った。

知るべきである。
古代の仏の教えの経を見る事は、古代の仏に捧げものをする事と、福徳が、肩を並べるし、超過する。
古代の仏の教えの経は、白紙の上に墨(すみ)などで黒い文字を書いただけの物である。
誰が、白紙の上に黒い文字を書いただけの物を、「古代の仏の教えの経である」と知るのだろうか？
この道理に参入して究めるべきである。

ある僧が、ある時、自室の中で経を読んでいると、弘覚大師と呼ばれる三十九祖の雲居道膺が窓を隔(へだ)てて「あなたが奥底まで読み取っている経(の意味)とは、どの様な物なのですか？」と質問した。
ある僧は、「『維摩経』です」と答えた。

雲居道膺は、「『維摩経』(という経の名前)を質問したのではありません。奥底まで読み取っている経(の意味)とは、どの様な物なのですか？」と言った。

ある僧は、雲居道膺の言葉によって、悟りに入る事ができ得た。

「奥底まで読み取っている経(の意味)とは、どの様な物なのか？」という雲居道膺の言葉は、一つの奥底まで読み取っている事であるが、年代が深遠であるし、「読み取っている事を似ている物によって説明しようとは欲しない」のである。

道で死んだ蛇に出会う。このため、「経(の意味)とは、どの様な物なのか？」という明らかな質問が形成されて現された。

人に出会っては誤りを挙げない。このため、「『維摩経』である」なのである。

経を見るとは、尽(ことごと)くの全ての仏祖をとらえて、ひねって、集め、「眼睛」、「見る眼」として経を見るのである。

この様に、経を見る時、突然に、仏祖は、仏に成り、法を説き、仏を説き、仏を行うのである。

この様に、経を見る時でなければ、仏祖の「頂上」や、「面目」、「有様(ありよう)」は未だ無いのである。

千二百四十一年、現在、仏祖の会で、経を読む儀式には多くの種類が有る。
布施をする人が山に入って僧達に経を読む事をお願いする事が有るし、
布施をする人が僧達に経を常に読む事をお願いする事が有るし、
僧達が自ら思い立って心して経を読む事などが有る。
　この他には、僧達が亡くなった僧のために経を読む事が有る。

　布施をする人が山に入って僧達に経を読む事をお願いした場合は、経を読む日の朝食の時から、「堂司」である僧は、事前に、「看経」、「経を読む」という札を堂の前と僧達の寮にかけておく。
朝食後に、礼拝時の席とする敷物を仏像の前に敷（し）く。
経を読む時が来ると、「僧堂」の前の鐘を三回か一回、打つ。
「住持」である僧の指示に従う。
鐘を鳴らした後に、「首座」である僧と僧達が袈裟を来て「雲堂」、「僧堂」に入り、自分の位置、席について、正面を向いて坐る。
次に、「住持」が堂に入り、仏像に向かって合掌して頭を下げ、焼香後に、自分の位置、席に坐る。
次に、戒を未だ受けていない出家者である「童行（どうあん）」に僧達の経を運ばせる。
僧達の経は、以前から「庫院」で整えており、手配して、時が来ると僧達の各々に供給するのである。
僧達の経は、経用の箱に入れて運ぶか、盆に載せて運ぶ。
僧達は、経を求め、経を開いて読む。
この時、「知客」である僧が、布施をした人を引いて「雲堂」、「僧堂」に入る。

布施をした人は、「雲堂」、「僧堂」の前で、手で持つ香炉を取り、手で持つ香炉を捧げ持って「雲堂」、「僧堂」に入る。

手で持つ香炉は、寺の公共の場所に有る。

寺の雑務を行う在俗者である「行者（あんじゃ）」は、手で持つ香炉に事前に香を装填して、「雲堂」、「僧堂」の前に置き、布施をした人が「雲堂」、「僧堂」に入ろうとする時に、「知客」の指示で、布施をした人に渡す。

布施をした人は、「雲堂」、「僧堂」に入る時は、「知客」の後をついて、「雲堂」、「僧堂」の前門を南側から入る。

布施をした人は、仏像の前に行って、一片の香を焼香して、三回、礼拝する。

布施をした人は、礼拝する間、手で持つ香炉を持ちながら礼拝する。

布施をした人が礼拝する間、「知客」は、布施をした人の席の北に、南を向いて、少し布施をした人の方向を向いて、両手を胸の前で重ねて立つ。

布施をした人は、礼拝が終わったら、体の向きを右に変えて、「住持」に向かって、手で持つ香炉を捧げ持って、身をかがめて敬礼する。

「住持」は、椅子（いす）に座ったまま、経を捧げ持って合掌して敬礼を受ける。

次に、布施をした人は、北に向かって敬礼する。

布施をした人は、敬礼が終わると、「首座」の前から堂を回る。

布施をした人が堂を回る間、「知客」が先行する。

堂を一周、回って、仏像の前に行って、仏像に向かって、手で持つ香炉を捧げ持って、敬礼する。

この時、「知客」は、「雲堂」、「僧堂」の門の近くで、布施をした人の席の南に、北を向いて、両手を胸の前で重ねて立つ。

布施をした人は、仏像を敬礼し終わったら、「知客」の後をついて、「雲堂」、「僧堂」の前に出て、「雲堂」、「僧堂」の前を一周、回って、また、「雲堂」、「僧堂」の中に入って、仏像に向かって三回、礼拝する。
布施をした人は、礼拝が終わると、折りたたみ式の椅子（いす）に座って、経が読まれた証人に成る。
折りたたみ式の椅子（いす）は、仏像の左の柱の近くに南へ向けて立てるか、南の柱の近くに北へ向けて立てる。
布施をした人が座ると、「知客」は、布施をした人に向かって敬礼した後、自分の位置、席につく。

布施をした人が「雲堂」、「僧堂」を回る間、音楽を演奏する事が有る。
音楽の演奏者の席は、仏像の右か左で、都合に合わせる。

手で持つ香炉には、沈香と浅香の名香を差し挿（はさ）み焚（た）く。
沈香と浅香の名香は、布施をした人が自ら準備する。

布施をした人が「雲堂」、「僧堂」を回っている時は、僧達は合掌する。

次に、経を読んだ代価を配る。
経を読んだ代価の多い少ないは、布施をした人の心に従う。
綿や扇などの物を経を読んだ代価として配る事が有る。
布施をした人か、「知事」である僧か、「行者（あんじゃ）」が、経を読んだ代価を配る。
経を読んだ代価を配る法は、僧の前に置き、僧の手の中には入れない。

僧達は、経を読んだ代価が前に配られた時、各々、合掌して受ける。
また、経を読んだ日の昼食時に、経を読んだ代価を配る場合が有る。
昼食時に経を読んだ代価を配る場合は、「首座」が、昼食後、槌(つち)を一回、打ち下ろしてから、配る。

布施をした人は、「回向」、「布施などの功徳を分け与える相手」といった主旨を紙片に書いて、仏像の右の柱に貼る。

「雲堂」、「僧堂」の中で、経を読む時は、大声で読まず低い声で読むか、経を開いて文字を見るだけにする。
声を出して読まず経を見るだけの場合が有る。
この様に経を読む場合の多くは、「金剛般若波羅蜜経」、「法華経」の「観世音菩薩普門品」や「安楽行品」、「金光明経」などであり、何百巻、何千巻と常に用意しておく。
各僧が一巻を読む。

経を読むのが終わったら、元の盆や箱を持って席の前を通り過ぎる時に、僧達は各々、経を置く。

経を取る時も置く時も共に合掌する。
経を取る時は、合掌した後に経を取る。
経を置く時は、経を置いた後に合掌する。
その後、僧達は各々、合掌して、低い声で「回向する」、「布施などの功徳を分け与える相手について祈る」。

公共の場所で経を読む場合も、「都監寺」である僧、焼香、礼拝、堂を回る事、経を読んだ代価は皆、同様にする。

手で持つ香炉を捧げ持つ事も、同様にする。

僧が布施をした人と成った場合も、在俗者の布施をした人と同様にするし、焼香、礼拝、堂を回る事、経を読んだ代価なども同様にするし、「知客」が引く事も、在俗者の布施をした人と同様にする。

「聖節」、「皇帝などの誕生日」に経を読む事が有る。

今の皇帝などの誕生日が、仮に一月十五日であれば、一か月前の十二月十五日から経を読むのが始まる。

当日には、堂に上って法を説く事が無い。

「仏殿」の釈迦牟尼仏像の前に、長椅子を二列、置く。

長椅子を東西に向かって、各々、南北に置く。

東と西の長椅子の間に台を置く。

台の上に経を置く。

経は、「金剛般若波羅蜜経」、「仁王経」、「法華経」、「金光明最勝王経」、「金光明経」などである。

堂の中の僧を一日に何人と決めて呼んで昼食前に軽食を食べるか、一椀の麺と一杯のスープを全ての僧に食べさせるか、六、七個の饅頭と少しのスープを全ての僧に食べさせる。

饅頭も椀に盛り、箸（はし）を添えないし、粥（かゆ）を添えない。

軽食を食べる時は、経を読む席についたまま、席を動かず軽食を食べる。

軽食は、経を置く台に手配する。更にテーブルを持って来る事は無い。
軽食を食べている間、経は台に置く。
軽食を食べ終わったら、僧は各々、席を立って、口(くち)の中を水でうがいして洗って帰って、席につく。
そして、経を読む。
朝食後から昼食まで経を読む。
昼食時の太鼓が鳴ったら、席を立つ。
当日の経を読むのは、昼食時までとする。

経を読み始めた日から、「建祝聖道場」という札を、「仏殿」の正面の東の庇(ひさし)の先にかける。黄色い札である。
「聖節」、「皇帝などの誕生日」を祝う主旨を障子の様な木と紙の札に書いて、仏殿の中の正面の東の柱にかける。黄色い札である。
「住持」の名前は、赤い紙か白い紙に書く。「住持」の名前の二文字を小さい紙片に書いて、札の表の年月日の下に貼る。

この様に、経を読んで、「聖節」、「皇帝などの誕生日」が来たら、「住持」は堂に上って祝うのである。
これが、古くからの先例である。千二百四十一年の今でも古くない。

僧が自ら思い立って心して経を読む事が有る。
寺院には本(もと)から公共用の経を読むための「看経堂」が有る。
「看経堂」で経を読むのである。
「看経堂」で経を読む時の規則は、「清規」、「(寺の)規範」通りである。

弘道大師と呼ばれる三十六祖の薬山惟儼は、高沙弥に「あなたは、経を見る事によって真理を会得したのか？　師の教えによって真理を会得したのか？」と質問した。

高沙弥は、「経を見る事によって真理を会得したわけではないし、師の教えによって真理を会得したわけではない」と言った。

薬山惟儼は、「多くの人も、経を見ないし、師の教えを請わないが、なぜ真理を会得しないのか？」と言った。

高沙弥は、「他の多くの人も真理を会得しないとは言いません。他の多くの人は真理を受け入れて会得する事を承知しないだけなのです」と言った。

仏祖の家の中に、真理を受け入れて会得する人もいるし、真理を受け入れず会得しない人もいるが、経を見る事と、師の教えを請う事は、日常の道具である。

正法眼蔵　看経(経を見る、経を読む)

その時、千二百四十一年の秋、雍州の宇治県の興聖宝林寺にいて僧達に話した。

仏性

釈迦牟尼仏は、「一切の全ての生者には、ことごとく仏に成れる性質が有る。如来は、常に不変で住んでいて、変化しない」と言った。

この言葉は、私達の大いなる師である釈迦牟尼仏の「獅子吼」、「獅子(ライオン)が吼(ほ)えるように説かれた法」である「転じた法輪」、「説かれた法」であるが、一切の全ての諸仏、一切の全ての祖師の「頂上」であるし、「眼睛」、「見る眼」である。

学に参入してきて既に(釈迦牟尼仏の肉体が死んだ紀元前九百四十九年から千二百四十一年までの)二千百九十年間である。正統な法の子孫は、わずかに(道元の亡き師である五十祖の如浄までの)五十代である。

西のインドの二十八代の祖師達は、代々、住んで保持してきた。東の地の中国の二十三人の祖師達は、代々、住んで保持してきた。十方の仏祖は、共に、住んで保持してきた。

「一切の全ての生者には、ことごとく仏に成れる性質が有る」という釈迦牟尼仏の言葉の主旨は、どの様な物であるのか？

「何ものかが、どの様にかして来ている」という「言葉」であるし、「転じられた法輪」、「説かれた法」である。

「衆生」、「全ての生者」と言ったりするし、情の有る者と言ったりするし、「群生」、「全ての生者」と言ったりするし、「群類」、「全ての生者」と言ったりする。

「ことごとく有る」と言われたものは、「衆生」、「群有」、「全ての生者」である。

「ことごとく有る」のは、仏に成れる性質である。「ことごとく有る」もののうち一つを「衆生」、「全ての生者」と言うのである。

この時、全ての生者の内外には、仏に成れる性質がことごとく有るのである。

単一に伝えられている「皮肉骨髄」、「理解」だけではなく、「あなたは私の『皮肉骨髄』を得た」(、「あなたは私を得た」)ので。

知るべきである。

仏に成れる性質によって、ことごとく有らしめられている「有」とは、「有無」、「存在か無」の「有」、「存在」ではない。

「ことごとく有る」とは、仏の言葉であるし、
仏の舌であるし、
仏祖の「眼睛」、「見る眼」であるし、
法衣を着た僧の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔（あな）」である。

「ことごとく有る」という言葉は、「始有」、「『最初』から有る」ではないし、
「本有」、「本（もと）から有る」ではないし、
「妙有」、「真理自体が永遠に存在する」等ではないし、
まして、「縁有」、「縁（えん）が存在する」、「繋（つな）がりが存在する」や「妄有」、「妄（みだ）りに存在する」ではない！

「ことごとく有る」という言葉は、心、知覚の対象、性質、相などとは無関係である。

「全ての生者に、ことごとく有る」、心と身が依り所とする環境としての報いである「この世」と、過去の行いの正に報いである心と身は、業が「増上する」、「増長する」力ではないし、
妄（みだ）りに因縁によって生じたのではないし、
「法爾」、「ありのまま」ではないし、
「神通」、「理解」と修行と証ではない。

もし「全ての生者に、ことごとく有るもの」が、業が「増上する」、「増長する」力であったり、因縁によって生じたり、「法爾」、「ありのまま」などであったりしたら、諸々の聖者の「証道」、「修行による証」、「悟り」や、諸々の仏の無上普遍正覚や、仏祖の「眼睛」、「見る眼」も、業が「増上する」、「増長する」力であったり、因縁によって生じたり、「法爾」、「ありのまま」などであったりしてしまうだろう。

　しかし、そうではない。

尽界は全て、「客塵」、「外から来る煩悩」ではない。
直(す)ぐ下に第二の人などはいない(、あなただけである)。
「直々に根源を切るのを人は未だ理解しておらず、『業識』、『業(ごう)によって生じた(誤った)理解』で多忙にしていて、いつに成ったら止むのか?」なので。

妄(みだ)りに因縁によって生じた存在ではない。
遍界は「最初」から隠していないので。

「遍界は『最初』から隠していない」と言うのは、必ずしも「世界に満ちているものは存在である」と言う訳ではないのである。

「遍界は私の所有物である」と言うのは、外道の邪悪な見解である。

「本有」、「本(もと)から有る」、存在ではない。
古今に渡っているので。

「『最初』から有る」、存在ではない。
一つの「塵（ちり）」、「汚れ」、「煩悩」をも受け入れないので。

突然の存在ではない。
結合しているので。

「最初」が無い存在ではない。
「何ものかが、どの様にかして来ている」ので。

初めて生じた存在ではない。
「平常心は『道』、『真理』である」ので。

まさに、知るべきである。
「ことごとく有る」中でさえも、全ての生者は、快速の船便によってでも出会い難いのである。

この様に、「ことごとく有る」という言葉を理解して取れば、「ことごとく有る」とは「透体脱落」、「煩悩を透過して脱ぎ落とす事」である。

「仏に成れる性質」という言葉を聞いて、多くの学者は、先尼（セーニャ）外道の「我」、「真我」、「霊知」の様に誤解している。

誤解しているのは、人に出会わないし、自己に出会わないし、師に見(まみ)えないからである。

いたずらに、「『四大(元素)』の『火』や『風』の様に動揺する心の意識」を「仏に成れる性質の『覚知覚了』、『自覚』」であると誤解している。

「仏に成れる性質には『覚知覚了』、『自覚』が有る」と誰が言ったのか？

たとえ「覚者」、「知者」が諸々の仏であっても、仏に成れる性質は「覚知覚了」、「自覚」ではない。

諸仏を「覚者」、「知者」と言う時の「覚」、「知」は、あなたたちが色々言っている誤解とは異なるし、「四大(元素)」の「火」や「風」の様な動揺ではない。

一人や二人の個々の仏祖の「面目」、「有様(ありよう)」が、諸仏を「覚者」、「知者」と言う時の「覚」、「知」なのである。

西のインドに行って帰還したり、人や天人を化して導いたりした、長老の僧や先人の高徳の僧は、中国で漢の時代から宋の時代まで、稲(いね)、麻(あさ)、竹、葦(あし)の様に多数存在するが、往々にして、多くの僧侶は、「『四大(元素)』の『火』や『風』の様に動揺する心の意識」を「仏に成れる性質の『覚知覚了』、『自覚』」であると誤解している。

憐れむべきである。

仏道を学び修行する事が、うたた、ひどく、おろそかなので、この様に誤解するのである。

今の仏道の後進の者や初心者は、そうであってはいけない。

たとえ「覚知覚了」、「自覚」を学んだとしても、「覚知覚了」、「自覚」は「動揺する意識」ではない。

たとえ「動揺する意識」を学んだとしても、「動揺する意識」は「仏に成れる性質」ではない。

もし真の「動揺する意識」を会得して理解して取る事があれば、真の「覚知覚了」、「自覚」を会得して理解して取るべきである。

「仏と性質は、あちこちに到達している」のである。

必ず「仏に成れる性質は、ことごとく有る」のである。

「ことごとく有るものが、仏に成れる性質である」ので。

「ことごとく有る」とは、「全てのものが木っ端微塵に成っている物から形成されている事」ではない。

「ことごとく有る」とは、一個の鉄ではない。

「拳頭」、「拳」をひねっているので、大小ではない。

既に「仏に成れる性質」と言っているので、諸々の聖者と肩を並べていないし、仏の性質と肩を並ばせるべきではない。

ある一種類の人々は、誤って「仏に成れる性質は、草木の種のような物である。法の雨の潤いが、しきりに潤す時、芽や茎が生じて成長し、枝や葉や花や果実を茂らす事が有る。果実は、新しい種を内包している」と思ってしまう。

この様な見解は、凡人の情による推測である。
たとえ、この様な見解を抱いたとしても、「種や花や果実は共に個々の真心である」として学に参入して究めるべきである。
果実の中に種が有り、種は見えなくても根や茎などを生じる。集めなくても、いくつもの枝に大きく囲まれる。
内外の論理ではない。
古今の時で、空（むな）しくない。
たとえ、凡人の見解に一任しても、根や茎や枝や葉は皆、同じく生まれて生き、同じく死に、同じく「ことごとく有る仏に成れる性質である」。

釈迦牟尼仏は「仏に成れる性質の意味を知ろうと思うならば、時の因縁をまさに観察するべきである。もし時が来れば、仏に成れる性質は目の前に現れる」と言った。

「仏に成れる性質の意味を知ろうと思うならば」と言うのは、ただ知るだけではなく、「修行しようと思うならば」、「証しようと思うならば」、「説こうと思うならば」、「忘れないと思うならば」とも言えるのである。
修行も、証も、説く事も、忘れない事も、誤る事も、誤らない事も、時の因縁による物である。
時の因縁を観察するには、時の因縁によって観察するし、害虫を払うための毛がついた棒である払子、杖などによって観察する。

「有漏智」、「煩悩に汚染されている知」や、
「無漏智」、「煩悩が無い汚染されていない知」や、
「本覚」、「本からの覚」や、
「始覚」、「思い立って心して、修行して、初めて迷いから覚めて悟りを開く事」や、
「無覚」、「覚などを離れる事」や、
「正覚」、「正しい覚」などの知によってでは、時の因縁を観察できない。

「まさに観察する」と言うのは、「観察する」や「観察される」とは無関係であり、
正しい観察や誤った観察などに従うべきではなく、
「まさに観察する」のである。

「まさに観察する」ので、「自分を観察するわけではない」のであるし、
「他のものを観察するわけではない」のであるし、
時の因縁であるし、
因縁の超越であるし、
仏に成れる性質であるし、
仏に成れる性質を脱ぎ落とす事であるし、
仏から仏へであるし、
性質から性質へである。

「もし時が来れば」という言葉を、往々にして、古今の輩(やから)は、誤って「仏に成れる性質が目の前に現れる時が、未来に有るのを待つのである」と思ってしまう。

「仏に成れる性質が目の前に現れる時が、未来に有るのを待って、修行していくと、自然に仏に成れる性質が目の前に現れる時に出会える」と誤って思ってしまう。

「仏に成れる性質が目の前に現れる時が来なければ、師の所に行って『法』、『真理』について質問しても、道をわきまえる鍛錬をしても、仏に成れる性質は目の前に現れない」と誤って言ってしまう。

この様に誤って見て取って、いたずらに無駄に、俗世という赤い土色の塵(ちり)に帰ってしまい、虚しく空(そら)を見守る様に呆然としている類(たぐい)の人は、恐らくは、自然に外道の類(たぐい)と成ってしまう。

「仏に成れる性質の意味を知ろうと思うならば」と言うのは、「仏に成れる性質の意味をまさに知るべきである」と言う事である。

「時の因縁をまさに観察するべきである」と言うのは、「時の因縁をまさに知るべきである」と言う事である。

つまり、仏に成れる性質を知ろうと思うならば、知るべきである、時の因縁が仏に成れる性質である。

「もし時が来れば」と言うのは、「既に時は来ているので、何を激しく疑うのか？」と言う事である。

時を激しく疑うならば、それはそれで仕方がない、「私に仏に成れる性質よ返って来なさい」である。

知るべきである。

「もし時が来れば」と言うのは、一日の間を空しく過ごさない事である。
「もし来れば」と言うのは、「既に来ている」と言うような物である。
「もし時が来れば」と待っていたら、仏に成れる性質は来ないのである。
つまり、「時が既に来ているので、仏に成れる性質は目の前に現れている」のである。
「時が既に来ているので、仏に成れる性質は目の前に現れている」という理は明らかである。
なぜなら、「来ないかもしれない時は無い」し、「目の前に現れない仏に成れる性質は無い」のである。
（「仏に成れる性質は、ことごとく有る」ので。）

十二祖の馬鳴は、十三祖の迦毘摩羅のために仏に成れる性質の海を説いて、「山河や大地は皆、仏に成れる性質の海によって建てられている。三昧や六神通は、仏に成れる性質の海によって発現する」と言った。

そのため、山河や大地は皆、仏に成れる性質の海である。
「皆、仏に成れる性質の海によって建てられている」と言うのは、建てられている時、山河や大地なのである。
既に「皆、仏に成れる性質の海によって建てられている」と言う。
知るべきである。
仏に成れる性質の海の形は、山河や大地なのである。
内や外や中間に関わるべきではない。

「仏に成れる性質の海の形は、山河や大地なのである」ならば、山河を見る事は仏に成れる性質を見る事に成るし、仏に成れる性質を見る事はロバの鰓（えら）や馬の嘴（くちばし）を見る事である。

「皆、仏に成れる性質の海によって建てられている」とは、「全ての物は、仏に成れる性質の海によって建てられている」のであるし、「全ての物は、全てのものによって建てられている」のであると会得して理解して取るし、理解できないものとするのである。

「三昧や六神通は、仏に成れる性質の海によって発現する」。

知るべきである。

「諸々の三昧が発現したり、来て現れる」のは、同じく、「皆、仏に成れる性質の海によって」なのである。

六神通の全ては、仏に成れる性質による物も、直接的には仏に成れる性質によらない物も、共に、「皆、仏に成れる性質の海によって」なのである。

「六神通」とは、「阿笈摩教」、「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の者が言う「六神通」ではない。

「六」と言うのは、「前三三後三三」を「六通波羅蜜」、「六神通波羅蜜」、「布施、浄戒、忍辱、精進、静慮、知」という「六波羅蜜」と言うのである。

そのため、「『六神通』は、『明明百草頭、明明仏祖意』である」、「『六神通』は『明らかな百草、森羅万象は、明らかに仏祖の心である』」として参入して究める事なかれ。

「六神通」に停滞させる、といえども、仏に成れる性質の海に流れ込むのを遮（さえぎ）ってしまう事にも成ってしまう。

大満禅師と呼ばれる三十二祖の弘忍は、蘄州の黄梅県の人である。

前世の弘忍は、父を亡くしてから生まれ、幼子の時に「道」、「真理」を会得して「栽松道者」と成った。

前世の弘忍は、初めて蘄州の西山にいて松を植えていた時に、外出していた、大医禅師と呼ばれる三十一祖の道信と出会った。

道信は、前世の弘忍に、「私は、あなたに仏法を伝えたいと思うが、あなたは既に歳を取り過ぎている。もし、あなたが再び『この世』に来るならば、私は、あなたを待ちます」と告げた。

前世の弘忍は、引き受けた。

弘忍は、ついに、「周」家の女性の所に行って、「周」家の女性の息子として生まれ変わった。

弘忍は、ある時、港の濁(にご)っている水の中に捨てられてしまったが、神の者に守られて七日間、無傷で無事であったので、拾い直されて養われた。

弘忍は、七歳の幼子に成った時に、黄梅の道の上で、道信と再び出会った。

道信は、弘忍を見て「骨相が不思議に秀でていて、普通の幼子とは異なる」と思ったので、弘忍に「あなたの姓は、何と言いますか？」と質問した。

弘忍は、「私の姓は『有』、『存在』です。私の姓は普通の姓ではありません」と答えた。

道信は、「存在とは、どの様な物であるか？」と言った。

弘忍は、「存在とは、仏に成れる性質です」と言った。

道信は、「(あなたは仏ではないので、)あなたに仏の性質は無い」と言った。

弘忍は、「仏に成れる性質は空であるので、無と言う」と言った。
道信は、弘忍が仏法を受容できる器であると理解して、弘忍をそばに仕えさせて、後に、弘忍に「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を付属した。
弘忍は、黄梅の東山にいて、奥深い家風を大いに振るった。

祖師が選び取った言葉に参入して究めると、道信の「あなたの姓は、何と言うのか？」という言葉には意味が有る。
昔は、「何々国人の何々姓」という物が有ったので、「あなたの姓は、何と言うのか？」と言ったのである。
例えば、「私もまた、その様である」し、「あなたもまた、その様である」と言うような物である。

弘忍は、「私の姓は『有』、『存在』である。私の姓は普通の姓ではない」と言った。
「『存在』という姓は普通の姓ではない」し、「普通の姓が『存在』では正しくない」。
（「存在」という概念は大き過ぎて、特定の家の姓として使用するには適さない。）

道信の「存在とは、どの様な物であるか？」という言葉は、「どの様な物」とは「存在」である。
「存在」を「どの様な物」としてきたのが、「姓」である。
「どの様な物」と成らせるのは、「存在」のおかげである。

「存在」と成らせるのは、「どの様な物であるか？」の功能である。
姓は、「存在」であるし、「どの様な物であるか？」なのである。
これを蒿湯(ヨモギ)にも点じるし、茶湯にも点じるし、日常茶飯事ともするのである。
弘忍は、「存在とは、仏に成れる性質である」と言った。
「存在とは、仏に成れる性質である」という言葉の意味は、「存在は仏に成れる性質である」と成る。
「どの様な物であるか？」のおかげで、「存在は仏である」と成る。
「存在」は「どの様な物であるか？」だけで究めて理解して取れるだろうか？
「存在が既に正しくない時は仏に成れる性質なのである」。
「存在」とは「どの様な物であるか？」、「存在は仏である」といえども、脱ぎ落とすと、「透脱する」、「透体脱落する」、「煩悩を透過して脱ぎ落とす」と、必ず、「存在は姓である」し、「姓は『周』家である」なのである。
けれども、(厳密に言うと、)「存在」を父から受けた訳ではないし、「存在」を道信といった祖師から受けた訳ではないし、「存在」が母と似ていないし、「存在」は傍観者に肩を並べるだろうか？　いいえ！
道信は、「(あなたは仏ではないので、)あなたに仏の性質は無い」と言った。

「(あなたは仏ではないので、)あなたに仏の性質は無い」という言葉を理解して取ると、「あなたは誰々ではないので、あなたに一任するが、あなたに仏の性質は無い」と開演しているのである。

知るべきである。

学ぶべきである。

どの様な時に仏の性質が無いのか？

仏の頭には仏の性質が無いのか？

仏は向上するので仏の性質が無いのか？

七と八に通達する事を、八方塞(はっぽうふさ)がりにする事なかれ。

七と八に通達する事を、模索する事なかれ。

「仏の性質とは、仏と成った時、仏の性質は無く成るのか？」、「仏の性質とは、思い立って心した時は、仏の性質は無いのか？」と質問して理解するべきであるし、言葉を理解して取るべきである。

「仏の性質が無いのは一時の三昧である」と修行する事も有る。

寺の円柱にも質問させるべきであるし、寺の円柱にも質問して理解して取るべきであるし、仏に成れる性質にも質問させるべきである。

そのため、「(あなたは仏ではないので、)あなたに仏の性質は無い」という言葉は、遥かな道信の部屋から聞こえている物なのである。黄梅の弘忍に見聞きできるし、趙州真際大師に流通しているし、三十七祖の大潙禅師と呼ばれる潙山霊祐に声を上げている。

「(あなたは仏ではないので、)あなたに仏の性質は無い」という言葉について必ず精進するべきである。ためらう事なかれ。

「(あなたは仏ではないので、)あなたに仏の性質は無い」という言葉を辿(たど)るべきであり、

「どの様な物であるか？」という目安が有るし、
「あなた」という「時」、「機会」が有るし、
「存在」という「投機」、「機会に投じる事」が有るし、
「周」家という同じ姓が有るし、
「直趣である」、「一途（いちず）である」。

弘忍は、「仏に成れる性質は空（くう）であるので、無と言う」と言った。

「空（くう）とは虚無ではない」として明らかに「仏に成れる性質は空（くう）であるので、無と言う」という言葉を理解して取れる。

「仏に成れる性質は空（くう）である」という言葉を選び取って、半斤と言わず、八両と言わず、「無」という言葉を選び取った。

（一斤は十六両。半斤は八両。）

空（くう）であるので空（くう）と言わず、無であるので無と言わず、仏に成れる性質は空（くう）であるので無と言った。

そのため、無という断片は空（くう）という言葉を理解して取るために掲げられた印であるし、空（くう）は無という言葉を理解して取る力量である。

「仏に成れる性質は空（くう）である」の「空（くう）」は、「色即是空」の「空（くう）」ではない。

「色即是空」と言うのは、色を強引に空（くう）としている訳ではないし、空（くう）を分けて色を作っている訳ではない。

「仏に成れる性質は空（くう）である」の「空（くう）」は、「空（くう）は空（くう）である」の「空（くう）」である。

「空（くう）は空（くう）である」の「空（くう）」と言うのは、空の中の一欠片の石である。

そのため、「仏に成れる性質は無である」と、「仏に成れる性質は空である」と、「仏に成れる性質は存在である」と、道信と弘忍の言葉によって、質問して理解して取り、言葉を理解して取るべきである。

昔、曹谿山の三十三祖の大鑑禅師が黄梅山の三十二祖の弘忍の所に初めて行った時、弘忍は大鑑禅師に「あなたは、どこから来ましたか?」と質問した。

大鑑禅師は、「嶺南の人です」と言った。

弘忍は、「来て、何を求めているのですか?」と言った。

大鑑禅師は、「仏に成る事を求めています」と言った。

弘忍は、「嶺南の人には仏の性質が(未だ)無い。どの様にしたら仏に成れるだろうか?」と言った。

「嶺南の人には仏の性質が(未だ)無い」と言うのは、「嶺南の人には仏に成れる性質が無い」と言う訳ではないし、

「嶺南の人には仏の性質が有る」と言う訳ではないし、

「嶺南の人には仏の性質が(未だ)無い」のである。

「どの様にしたら仏に成れるだろうか?」と言うのは、「どの様に仏に成る事を望むのか?」と言うのである。

仏の性質の道理を明らめている先人は少ない。

諸々の「阿笈摩教」、「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の者や、霊感が無い文字だけの経典の似非学者は、仏の性質を知る事はできない。

仏の性質は、仏祖の法の子孫にだけ伝えられているのである。

仏の性質の道理では、仏の性質は仏に成るよりも前に十分に備わるのではなく、仏の性質は仏に成った後で十分に備わるのである。

仏の性質には、必ず、仏に成るのと共に参入するのである。

この道理に、よくよく参入して究めて鍛錬するべきである。

二十年でも三十年でも鍛錬して学に参入するべきである。

仏の性質は、未熟な修行者が明らめる事ができる物ではない。

「全ての生者には仏に成れる性質が有る」、「全ての生者には仏の性質が(未だ)無い」という言葉を選び取られているのは、この道理なのである。

「仏の性質は、仏に成って以降に十分に備わるのが法である」として学に参入するのは正しく的を射ている。

この様に学ばないのは、仏法ではない。

この様に学ばなければ、仏法は今日にまで至らなかっただろう。

もし、この道理を明らめなければ、仏に成る事を明らめていないし、仏を見聞きしていないのである。

このため、弘忍は、大鑑禅師に向かって言う時に、「嶺南の人には仏の性質が(未だ)無い」と言う方法を取ったのである。

仏法を見聞きする最初に、聞く機会を得るのが難しいのは、「全ての生者には仏の性質が(未だ)無い」という言葉である。

善知識を持つ人々によってか、経典によって、聞く事を喜ぶべきなのは、「全ての生者には仏の性質が(未だ)無い」という言葉である。

「一切の全ての生者には仏の性質が(未だ)無い」という言葉を見聞きしたり覚知したりして参入していない者は、仏の性質を未だ見聞きしたり覚知したりしていないのである。

大鑑禅師が専ら仏に成る事を求めるために、弘忍が大鑑禅師を仏に成らせるために、他の言葉を選び取れず、巧(たく)みに善へ導く事ができず、ただ、「嶺南の人には仏の性質が(未だ)無い」と言った。

「『仏の性質が(未だ)無い』という言葉を選び取り、聞いて理解して取るのは、仏に成るための最短の道である」という事を知るべきである。

そのため、「仏の性質が(未だ)無い」事を理解した時こそ、仏に成る時である。

「仏の性質が(未だ)無い」という言葉を未だ見聞きせず、理解して取れない人は、未だ仏に成っていないのである。

大鑑禅師は、「人に南北は有っても、仏に成れる性質に南北は無い」と言った。

大鑑禅師の言葉を理解して取って理解を挙げて、大鑑禅師の言葉の中の意味を鍛錬するべきである。

大鑑禅師の南北の言葉は、まさに、真心で照らして顧(かえり)みて良く調べるべきである。

大鑑禅師が言い得た言葉には意味が有る。

大鑑禅師の言葉には、「人は仏に成っても、仏に成れる性質は仏に成らない」という一隅の考えて得た物が有る。

大鑑禅師は「人は仏に成っても、仏に成れる性質は仏に成らない」事を知っていたのか否か？

道信と弘忍が選び取った言葉である「仏の性質は無い」と「仏に成れる性質は無である」という言葉を会得、理解した人は、遥かに遮る力量の有る「人は仏に成っても、仏に成れる性質は仏に成らない」という一隅を受けて、迦葉仏や釈迦牟尼仏などの諸仏が仏と成って「法輪を転じる」、「法を説く」と、「ことごとく仏に成れる性質が有る」という言葉を理解して取る力量が有るのである。

「ことごとく有る」の「有」、「存在」は、どうして「無い」と「無である」の「無」の法を嗣いでいるだろうか？　いいえ！

そのため、「仏の性質は無い」と「仏に成れる性質は無である」という言葉は、遥かな三十一祖の道信と三十二祖の弘忍の部屋から聞こえているのである。

大鑑禅師が三十三祖であるならば、三十一祖の道信と三十二祖の弘忍の「仏の性質は無い」と「仏に成れる性質は無である」という言葉を鍛錬するべきなのである。

「有無」、「存在か無」の「無」は暫く置いておき、「仏に成れる性質とは、どの様な物であるか？」と質問して理解して取るべきであるし、「仏に成れる性質とは、何ものであるか？」とたずねるべきである。

今の人でも、「仏に成れる性質」と聞いたら「仏に成れる性質とは、どの様な物であるか？」と質問して理解して取らず、仏に成れる性質の有無などの意味を言うような人は、軽率である。

そのため、「諸々の無」の「無」は、「仏の性質は無い」と「仏に成れる性質は無である」の「無」に学ぶべきである。

大鑑禅師が選び取った「人に南北は有っても、仏に成れる性質に南北は無い」という言葉を長く再三、掬い取って濾すべきである。まさに、水中の生物を掬い取る道具に力量が有るべきである。

大鑑禅師が選び取った「人に南北は有っても、仏に成れる性質に南北は無い」という言葉を静かに、ひねって取ったり手放したりするべきである。

愚者は、誤って「『質礙』、『同一空間に複数は共存できないもの』なので、人には南北が有るが、『虚融』、『心に滞る所が無い』ので、仏に成れる性質は南北を議論できないので、大鑑禅師は『人に南北は有っても、仏に成れる性質に南北は無い』という言葉を選び取ったのか？」と推測してしまうが、無分別で愚かである。この間違った見解を捨て去って、学ぶ事に勤めるべきである。

三十三祖の大鑑禅師は、門人の行昌に示して、「『無常』、『変化する』とは、仏に成れる性質である。『有常』、『不変』とは、善悪を一切諸法を分別する心である」と言った。

大鑑禅師の「無常」という言葉は、外道や「二つの乗り物」の段階の人が推測している物ではない。

外道や「二つの乗り物」の段階の人の始祖と末裔が「無常である」と言っても、彼らは窮め尽す事ができないのである。

無常であるものが自ら無常を説いて表し、行って表し、証して表したら、皆、無常である。

「今、自身を現して仏土に渡すべき者には、自身を現して、その者のために法を説く」のである。

「今、自身を現して仏土に渡すべき者には、自身を現して、その者のために法を説く」のが、仏に成れる性質である。

さらに、「長い法身を現したり、短い法身を現したりする」のである。

常に聖者である者も「無常である」、「変化している」。

(常に聖者である者は、聖者であろうとしている。)

常に凡人である者も「無常である」、「変化している」。

聖者と凡人が「有常」、「不変」なのは、仏に成れる性質ではない。

「聖者と凡人が不変である」というのは狭量の愚かな見解であるし、推測による狭い見識である。

「仏とは、狭量の身であるし、性(質)とは、狭量の作用である」。

このため、大鑑禅師は、「『無常』、『変化する』とは、仏に成れる性質である」という言葉を選び取ったのである。

「有常」は「未転」である。

「未転」とは、たとえ、「煩悩を断った」と変化しても、「煩悩が断たれた」と変化しても、過去や未来の行跡と関係が必ずしも有る訳ではない事である。

そのため、「未転」は「有常」である。

そのため、草木や林や寺が「無常である」、「変化する」のは、仏に成れる性質である。

人や物や身や心が「無常である」、「変化する」のは、仏に成れる性質である。

国土や山河が「無常である」、「変化する」のは、仏に成れる性質である。

無上普遍正覚は仏に成れる性質なので、「無常である」、「変化する」。

「大般涅槃」、「大円寂」、「釈迦牟尼仏の『涅槃』、『寂滅』」は「無常である」、「変化する」ので、仏に成れる性質である。

諸々の、狭量な「二つの乗り物」の段階の人や霊感が無い文字だけの似非(えせ)学者などは、大鑑禅師の言葉を驚き疑い、恐れるべきである。

驚き疑わない人は、「魔」、「仏敵」や外道の類(たぐい)である。

十四祖の龍樹は、サンスクリット語の発音では「ナーガールジュナ」と言う。

中国では、十四祖は、「龍樹」、「龍勝」、「龍猛」と言う。

龍樹は、西のインドの人である。

龍樹が南インドに行くと、南インドの国の人々の多くは「福業」、「福を招く行為」を信じていた。

龍樹が南インドの国の人々のために妙なる法を説くと、聞いた者達は互いに「人にとって『福業』、『福を招く行為』が世間で第一の物である。いたずらに無駄に仏に成れる性質を言っても、誰が仏に成れる性質を見る事ができるのか？　いいえ！　誰も仏に成れる性質を見る事ができない！」と言い合った。

龍樹は、「あなたが仏に成れる性質を見ようと欲するならば、まず、自分の慢心を除くべきである」と言った。

ある南インドの国の人は、「仏に成れる性質とは大きいのか？　小さいのか？」と言った。

龍樹は、「仏に成れる性質は、大小ではないし、広い狭いではないし、福も報いも無いし、生じたり滅んだりしない」と言った。

南インドの国の人々は、仏に成れる性質の理（ことわり）が優れている事を聞いて、ことごとく、最初に抱いていた思いを改めた。

龍樹は、座の上に、満月のような自在身を現した。

一切の全ての集まっていた大衆は、龍樹が法を説く声しか聞こえず、龍樹の人の姿を見れなかった。

大衆の中に、長者の子である十五祖の「迦那提婆」、「伽那提婆」がいて、集まっていた大衆に「満月のような『相』の意味、満月のように見える意味を理解できましたか？　理解できませんか？」と言った。

集まっていた大衆は、「今、私達は、目で未だ見た事が無いし、耳で聞いた事が無いし、心で理解できた事が無いし、身が満月のように成って住んだ事が無い」と言った。

伽那提婆は、「龍樹様は、仏に成れる性質の『相』、『見え方』を現して、私達に示しているのです。『何によって、そう知ったのか？』と言うと、

『形が満月のようである』と言われている『無相三昧』によってです。仏に成れる性質の意味を知ると、心が広々と澄みわたり、とらわれなく成る」と言った。

伽那提婆が言い終わると、龍樹は、満月のような「相」、「見え方」を隠して、座に戻り、詩で「身で円（まる）い月の『相』、『見え方』を現して、諸仏の実体を表現した。説いている法には形が無いので、音声や色形ではないもので用が足りる」と言った。

知るべきである。

音声や色形を現さなくても、真に、用が足りるのである。

真の説法には形が無いのである。

龍樹が、かつて、広く、仏に成れる性質を人のために説いた数は、数える事が不可能な量である。

今は、暫定的に、一隅を略して挙げているのである。

「あなたが仏に成れる性質を見ようと欲するならば、まず、自分の慢心を除くべきである」。

人の為（ため）に説かれている「あなたが仏に成れる性質を見ようと欲するならば、まず、自分の慢心を除くべきである」という言葉の意味を、見過ごさずに、わきまえて受け入れるべきである。

仏に成れる性質は見る事ができるが、仏に成れる性質を見るには自分の慢心を除く必要が有るのである。

自分と思っている物も一つではないし、慢心も多種多様であるし、自分の慢心を除く方法も万の無数に異なるだろう。

けれども、自分の慢心を除けば、仏に成れる性質を見るのである。

「見る眼」で見る事、肉眼で見る事に習うべきである。

「仏に成れる性質は、大小ではない」という言葉の理解は、この世の普通の凡人や「二つの乗り物」の段階の人の諸々の例に習う事なかれ。

なぜなら、偏って融通が利かずに、「仏に成れる性質は広大であろう」とだけ思ってしまう邪念を蓄えて来ているからである。

仏に成れる性質が大小ではない時の言葉に遮(さえぎ)られない道理を、今、聴いて理解して取るように思量するべきである。思量である聴いて理解して取る事を使い得るので。

龍樹の言い表した詩の言葉を聞いて理解して取るべきである。

「身で円(まる)い月の『相』、『見え方』を現して、諸仏の実体を表現した」のである。

諸仏の実体を表現している身の現し方なので、円(まる)い月の「相」、「見え方」なのである。

そのため、一切の長い短い、角ばっている円(まる)いを、円(まる)い月の「相」、「見え方」という身の現し方に学ぶべきである。

身と現す事に、うたた、ひどく、おろそかであるのは、円(まる)い月の「相」、「見え方」に暗いだけではなく、諸仏の実体を知らないのである。

愚者が、誤って「龍樹が仮に化身を現したのを円い月の『相』、『見え方』と言う」と思ってしまうのは、仏道を継承していない類の仲間の邪念である。

どこに、いつ、龍樹は身ではない物を他に現したのか？　いいえ！

まさに、知るべきである。

円い月の「相」、「見え方」を現した時、龍樹は、高座にいただけなのである。

身の現し方は、今の誰もが坐っているようにしていたのである。

この身が、円い月の「相」、「見え方」の現れなのである。

身を現す事は、角ばっている円いではなく、有無ではなく、隠れている現れているではなく、「八万四千の蘊」ではなく、ただ、身を現す事なのである。

円い月の「相」、「見え方」とは、黄檗希運から宣宗への「ここが、どこだと思って、更に、『粗い』とか『細かい』とか説くのか？」という言葉である。

身を現すには「まず、自分の慢心を除くべきである」ので、龍樹の身を現したのではなく、諸仏の実体を表現したのである。

表現であるので、諸仏の実体を「透脱している」、「透体脱落している」、「透過して脱ぎ落としている」。

そのため、「仏辺」、「仏の側」とは無関係である。

仏に成れる性質が満月のような形である、「心が広々と澄みわたり、とらわれなく成る事」が有っても、円い月の「相」、「見え方」を仏に成れる性質に並べている訳ではない。

まして、音声や色形を現さなくても用が足りるし、色形の身を現した訳ではないし、「蘊処界」、「五蘊と十二処と十八界」、「色受想行識と、眼耳鼻舌身意と色声香味触法と、眼耳鼻舌身意と色声香味触法と眼(識)耳(識)鼻(識)舌(識)身(識)意識」ではない。

「蘊処界」、「五蘊と十二処と十八界」、「色受想行識と、眼耳鼻舌身意と色声香味触法と、眼耳鼻舌身意と色声香味触法と眼(識)耳(識)鼻(識)舌(識)身(識)意識」のようではあるが、表現であり、諸仏の実体である。

「説法蘊」である。

「説いている法には形が無い」のである。

「説いている法には形が無い」し、さらに「無相三昧」である時、身を現すのである。

大衆が今、円(まる)い月の「相」、「見え方」を遠くから眺めても、「目で未だ見た事が無い」のは、「説法蘊」の転機であるし、「自在身を現した」が、「音声や色形ではない」のである。

隠れたり現れたりしたのは、満月のような「相」、「見え方」による進歩と後退である。

「龍樹が座の上に満月のような自在身を現した」時は、「一切の全ての集まっていた大衆は、龍樹が法を説く声しか聞こえず、龍樹の人の姿を見れなかった」のである。

十四祖の龍樹の正統な法の子である、十五祖の伽那提婆は、明らかに、満月のような「相」、「見え方」を理解し、円(まる)い月の「相」、「見え方」を理解し、身を現す事を理解し、諸々の仏に成れる性質を理解し、諸仏の実体を理解している。

「入室した」、「師から法を嗣いだ」、「瀉瓶した」、「ある器から別の器へ水を移す様に師から法を嗣いだ」者達が、たとえ、多いといえども、十五祖の伽那提婆に肩を並べる事はできないだろう。

十五祖の伽那提婆は、十四祖の龍樹に座を半分、譲られた尊い人であるし、僧達の会の導師であるし、全ての座の僧のうち一部を分担した座にいたのである。

霊山で初祖の摩訶迦葉が「座元」、「首座」であったかの様に、十五祖の伽那提婆は「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」と無上の大いなる法を正しく伝えられた。

龍樹は、出家前、外道のバラモンであった時、弟子が多かったが、皆、断って去らせた。

龍樹は、仏と成って以降は、独り、十五祖の伽那提婆だけを、法を付属した正統な法の子として、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」と無上の大いなる法を正しく伝えた。

龍樹は、十五祖の伽那提婆だけに、無上の仏の道を単一に伝えたのである。

それなのに、分不相応な事をする邪悪な者どもは、勝手に「私たちも龍樹の法を嗣いだ者である」と自称した。

「龍樹の法を嗣いだ」と勝手に自称する人たちは、論を作り教義を集めたが、多くは龍樹の手を借りた自説であるし、龍樹が造った物ではない。昔、龍樹に捨てられたバラモンの弟子どもによる、人や天人の心を惑わし乱すための物である。

仏の弟子は、一途に、「十五祖の伽那提婆が伝えていない言葉は、龍樹の言葉ではない」と知るべきである。

「十五祖の伽那提婆が伝えていない言葉は、龍樹の言葉ではない」と信じる人は、正しい信心を得たのである。
それなのに、偽物と知りながら受け入れる者が多い。
大いなる知の悪口を言う生者の愚かさを憐れみ悲しむべきである。

十五祖の伽那提婆は、龍樹が満月のような自在身を現したのを指して、集まった大衆に「龍樹様は、仏に成れる性質の『相』、『見え方』を現して、私達に示しているのです。『何によって、そう知ったのか？』と言うと、『形が満月のようである』と言われている『無相三昧』によってです。仏に成れる性質の意味を知ると、心が広々と澄みわたり、とらわれなく成る」と言った。

今、天上や人間で、大千法界に流布している仏法を見聞きしている前後の時間の皮袋である人のうち、誰が「身で現した『相』、『見え方』は仏に成れる性質である」という言葉を選び取れたのか？
大千世界では十五祖の伽那提婆だけが「身で現した『相』、『見え方』は仏に成れる性質である」という言葉を選び取れたのである。
他の者は、「目で未だ見た事が無いし、耳で聞いた事が無いし、心で理解できた事が無い、など」という言葉だけを選び取ったのである。
「身で現す事は仏に成れる性質である」と知らないので、「身で現す事は仏に成れる性質である」という言葉を選び取れないのである。
祖師は教えを惜しんではいないが、「見る眼」と「聞く耳」が塞がれていて見聞きできなかったのである。
身による理解が未だ起こらないので、了解して分別する事ができなかったのである。

「無相三昧」の「形が満月のようである」のを遠くから眺めて礼拝しても、「目で未だ見た事が無い」のである。

「仏に成れる性質の意味を知ると、心が広々と澄みわたり、とらわれなく成る」。

そのため、身で現して説いた仏に成れる性質とは、「心が広々と澄みわたり、とらわれなく成る事」である。

説いている仏に成れる性質を身で現すと、諸仏の実体の表現と成るのである。

全ての仏が、表現によって諸仏の実体を表すのである！

諸仏の実体とは、身で現す事である。

身で現す仏に成れる性質が有る。

「土、水、火、風」という「四大(元素)」や「色受想行識」という「五蘊」という言葉を選び取って、会得、理解して取った仏祖の量も、逆に、身で現す一時である。

諸仏の実体とは、「蘊処界」、「五蘊と十二処と十八界」、「色受想行識と、眼耳鼻舌身意と色声香味触法と、眼耳鼻舌身意と色声香味触法と眼(識)耳(識)鼻(識)舌(識)身(識)意識」の、身で現す事なのである。

一切の功徳は、身で現す功徳である。

仏の功徳は、身で現す事を究め尽して、袋の口(くち)を括(くく)る様に含んで理解する事なのである。

一切の全ての、無量、果てしない、功徳の行き来は、身で現す一時である。

それなのに、龍樹と伽那提婆の師弟よりも後で、インド、中国、日本の三国の諸方で、過去から現在まで、仏教を学んだ人達は、未だに龍樹と伽那提婆のような言葉を選び取れていない。

どれだけの経典の学者などが、仏の道を見過ごした事か！

中国では昔から龍樹が満月のような自在身を現した出来事を描こうとしたが、身に描いたり、心に描いたり、空に描いたり、壁に描いたりできず、いたずらに筆先で描いて、法座の上に鏡のような一つの輪の形を描いて、今、龍樹が身で現した円い月の「相」、「見え方」としてしまっている。

既に数百年の年月が経って、人の眼にとっての金属の屑をなそうとしているけれども、「誤っている」と言う人はいない。

憐れむべきである。

この様に、万事が誤っているのである。

もし誤って「身で現した円い月の『相』、『見え方』は、一つの輪の形である」と会得、理解してしまえば、真の一枚の絵に描いた餅に成ってしまう。他人を愚弄しているし、笑うべき物であるし、笑い過ぎて死にそうに成る。

中国という一国の在家信者も出家者も、一人も、十四祖の龍樹の言葉を聞いた事が無いし知らないし、十五祖の伽那提婆の言葉に通じて理解していないし見た事が無い事を悲しむべきである。

まして、身で現す事に近づいただろうか？　いいえ！

円い月に暗いし、満月に欠けている。

これは、学がおろそかであるからであるし、古代を慕う事が至らないからである。

古代の仏と等しい人、新しい仏は、真の身で現す事に出会う事によって、絵に描いた餅を尊重する事なかれ。

知るべきである。

身で円(まる)い月の相を表している場面を描くには、法座の上で身で現している姿が有るべきである。

絵では、釈迦牟尼仏の「拈華瞬目」である「揚眉瞬目」が、端正であるべきである。

絵では、「皮肉骨髄」、「理解」と「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」においては、必ず、じっと坐るべきである。

絵では、初祖の摩訶迦葉の「破顔微笑」が伝わるべきである。仏祖に成るので。

この様に描いた絵が未だ月に見えなければ、月の様な形は無いし、法を説かないし、音声や色形が無いし、用が足りていないのである。

もし、身で現す事を求めるならば、円(まる)い月の「相」、「見え方」を描くべきである。

円(まる)い月の「相」、「見え方」を描くのであれば、円(まる)い月の「相」、「見え方」を描くべきである。龍樹は、身で円(まる)い月の「相」、「見え方」を現したので。

円(まる)い月の「相」、「見え方」を描く時、満月の「相」、「見え方」を描くべきであるし、満月の「相」、「見え方」を現すべきである。

それなのに、身で現す事を描かず、「円(まる)い月」を描かず、満月の「相」、「見え方」を描かず、諸仏の実体を描かず、表現を体現せず、法を説く事を描かず、いたずらに無駄に、絵に描いた餅を一枚、描くが、「用いて何をするのか？」。

絵に描いた餅を急いで見ても、誰が飢えを止められるだろうか？
月は円形である。
円は身で現す事である。
円を学ぶのに、一枚の円形の硬貨のように学ぶ事なかれ。一枚の餅に似せる事なかれ。
「身の『相』、『見え方』は、円い月の身である」。
「形は、満月のような形である」。
一枚の円形の硬貨や、一枚の餅は、円に学ぶべきである。

私、道元は、雲の様に漂っていた昔、宋の時代の中国に行き、千二百二十三年、秋の頃、初めて、阿育王山の広利禅寺に行った。
道元は、広利禅寺の西の廊下の柱と柱の間の壁に、西のインドと東の中国の三十三人の祖師の変身した「相」、「見え方」が描かれているのを見た。
道元は、この時、真理を了承していて見ていた訳ではなかった。
道元は、後に、千二百二十五年の夏に、再び広利禅寺に行って、西蜀の成桂という「知客」と西の廊下を歩いている時に、成桂に「あの壁の絵は、どの祖師が何に変身した『相』、『見え方』ですか？」と質問した。
成桂は、「龍樹が身で円い月の『相』、『見え方』を現した時の絵です」と言った。
道元が、成桂の言葉を聞いて取って、絵を見ると、絵の龍樹の顔には鼻の孔が描かれていないし、絵の中に言葉が書かれていなかった。
私、道元は、「真に、この龍樹の絵は、一枚の絵に描いた餅に似ている」と言った。

成桂は、その時、大笑いしたが、「笑いの中に知という刀が無いし、『絵に描いた餅』を破る事ができ得ていなかった」。

私、道元は成桂と舎利殿や六殊勝地などに行っている間に数回、龍樹の絵の話を挙げたが、成桂は激しく疑う事もできなかった。

自分から龍樹の絵を批評する僧侶もいたが、多くは完全に正しくなかった。

私、道元は、「『堂頭』、『住持』の僧に質問しましょう」と言った。

当時の「堂頭」、「住持」は、大光であった。

成桂は、「大光には、(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)が無いので、答える事ができ得ないだろう。大光は、どうして知る事ができ得るだろうか？　いいえ！」と言ったため、大光には質問しなかった。

成桂は、この様に言ったけれども、成桂も会得、理解できていなかった。

話を聞いていた皮袋である僧侶達も何も言い得なかった。

過去から現在までの「粥飯頭」、「住持」達も、龍樹の絵を見て疑わず、絵を改め直さなかった。

描く事ができ得ない法は全て、描くべきではない。

法を描くならば、正しく描くべきである。

そのため、龍樹が身で円(まる)い月の「相」、「見え方」を現した時の絵は、かつて描かれなかったのである。

「仏に成れる性質は、今の慮知念覚だろう」という誤った見解から目覚めない事によって、「仏に成れる性質は有る」という言葉にも、「仏の性質は無い」という言葉にも、通達する手がかりを失っているようである。

「仏に成れる性質を言い表すべきである」と学習する者も稀(まれ)である。

知るべきである。
僧達が、仏に成れる性質について、おろそかで怠けているのは、仏教が廃れてきているからである。
諸方の「粥飯頭」、「住持」達には、仏に成れる性質を言い表す事を、一生、言わないで、やめてしまう者もいる。
誤って「教えを聴くだけの下の段階の輩は仏に成れる性質について話してしまうが、禅に参入している上の段階の僧は仏に成れる性質について言うべきではない」と話す輩は、真に、「畜生」、「動物的人間」、「似非僧侶」である。
なんという「魔」、「仏敵」の仲間が私達の釈迦牟尼仏、如来の道に交わって汚そうとしているのか！
「教えを聴くだけの下の段階」という言葉が仏道に有るか？
「禅に参入している上の段階」という言葉が仏道に有るか？
未だ「教えを聴くだけの下の段階」や「禅に参入している上の段階」という言葉は、仏道には無いと知るべきである。

杭州の塩官斉安は、三十五祖の馬祖道一の弟子である、高徳の長老の僧である。
塩官斉安は、ある時、僧達に示して、「一切の全ての生者には、仏に成れる性質が有る」と言った。
「一切の全ての生者」という言葉に速やかに参入して究めるべきである。

「一切の全ての生者」は、「業道」や「心と身が依り所とする環境としての報いである『この世』と、過去の行いの正に報いである心と身」が一つだけではないし、見解も個々で異なっている。

凡人、外道、三乗、五乗などは、各々異なっている。

今、仏道で言う「一切の全ての生者」は、心有る者である。

心有る者は皆、「生者」である。「心は生者である」ので。

心無い者も、同じく、「生者」だろう。「生者は心である」ので。

そのため、「心は皆、生者である」。

「生者には、皆、仏に成れる性質が有る」。

草木、国土は、心であり、心であるため「生者」であり、「生者」であるので「仏に成れる性質が有る」。

太陽と月と星々は、心であり、心であるため「生者」であり、「生者」であるので「仏に成れる性質が有る」。

塩官斉安が言う「仏に成れる性質が有る」とは、この様な物である。

もし、この様でなければ、仏道で言う「仏に成れる性質が有る」ではない。

今、塩官斉安の言葉の意味は、「一切の全ての生者には、仏に成れる性質が有る」だけである。

さらに、「生者」でなければ、仏に成れる性質は無いだろう。

塩官斉安に「一切の全ての諸仏には、仏に成れる性質が有るのか？　無いのか？」と質問するべきである。

この様に質問して理解して取り、試すべきである。

「『一切の全ての生者は仏に成れる性質である』とは言わずに『一切の全ての生者には仏に成れる性質が有る』と言う」として学に参入するべきである。

「仏に成れる性質が有る」の「有」をまさに脱ぎ落とすべきである。

脱ぎ落とす事は、一個の鉄である。一個の鉄は、鳥の道である。

そのため、「一切の全ての仏に成れる性質には生者が存在する」。

「一切の全ての仏に成れる性質には生者が存在する」という道理は、「生者」を説き透(とお)すだけではなく、仏に成れる性質をも説き透(とお)すのである。

塩官斉安が、たとえ、会得、理解を言葉に伝えなくても、伝えられる機会が無い訳ではない。

今日の言葉は、無意味ではない。

自己が備えている道理は、未だ必ずしも自ら会得、理解していなくても、「土、水、火、風」という「四大(元素)」や「色受想行識」という「五蘊」も有るし、「皮肉骨髄」、「理解」も有る。

この様に、言葉を理解して取る事にも、一生の内に言葉を理解して取る事も有るし、言葉を理解して取る事に、いくつもの生がかかる事も有る。

大円禅師と呼ばれる大潙禅師と呼ばれる三十七祖の潙山霊祐は、ある時、僧達に示して、「一切の全ての生者には、仏の性質が無い」と言った。

潙山霊祐の言葉を聞いた人や天人の中に、喜んだ大いなる素質を持つ者もいたし、驚き疑う類（たぐい）の者もいた。

釈迦牟尼仏の言葉は「一切の全ての生者には、ことごとく仏に成れる性質が有る」であり、潙山霊祐の言葉は「一切の全ての生者には、仏の性質が無い」である。

有無の言葉の理（ことわり）は、遥かに異なる。

言葉を会得して理解して取る事の当たる、当たらないが有る事は疑い無い。

けれども、「一切の全ての生者には、仏の性質が無い」という言葉だけが仏道では優れている。

塩官斉安の「一切の全ての生者には、仏に成れる性質が有る」という言葉は、たとえ、古代の仏と共に一方の手を出すのに似ていても、「一本の杖を二人で担（かつ）いでいる」のである。

今、潙山霊祐の「一切の全ての生者には、仏の性質が無い」という言葉は、「一本の杖が二人を飲み込んでいる」。

塩官斉安は三十五祖の馬祖道一の法の子であり、潙山霊祐は馬祖道一の法の孫である。

けれども、法の孫は法の祖父の道に老熟しており、法の子は法の父の道に未熟で若い。

潙山霊祐の言葉の道理と一致した主旨は、「一切の全ての生者には、仏の性質が無い」という言葉を道理と一致した主旨としている。

未だ広大で規格外とは言わない。

自分の家の中の経典をこのように受け取って保持している。

さらに模索するべきである。

「どうして一切の全ての生者は仏の性質であるだろうか？　いいえ！」。

「どうして一切の全ての生者には仏の性質が有るだろうか？　いいえ！」。

もし「生者」に仏の性質が有れば、「魔」、「仏敵」の仲間だろう。魔の子、一人をもたらして「一切の全ての生者」に混ぜようとするような物である。

仏の性質は仏の性質なので、「生者」は「生者」である。

「生者」は本から仏の性質を全く備えていない。

たとえ、「生者」が仏の性質を備えようと求めても、仏の性質が求めて初めて来る事ができない意味が有る。

「ある人が酒を飲むと別の人が酔う」と言う事なかれ。

もし自然に仏の性質が有る者は、「生者」ではない。

既に「生者」である者には、仏の性質は無い。

このため、三十六祖の百丈の懐海は「『生者には仏の性質が有る』と説くのは、仏法僧の悪口を言う事にも成ってしまう。『生者には仏に成れる性質が無い』と説くのも、仏法僧の悪口を言う事にも成ってしまう」と言った。

そのため、「生者には仏の性質が有る」と言う事も、「生者には仏に成れる性質が無い」と言う事も、共に、悪口と成ってしまう。

悪口と成ってしまうが、言葉を理解して取らないのはいけない。

「潙山霊祐、百丈の懐海よ、あなた達に質問するので聞いてください。
悪口と成ってしまうが、仏に成れる性質か、仏の性質を説く事ができ得たのか？　未だでき得なかったのか？
たとえ、仏に成れる性質か、仏の性質を説く事ができ得たとしても、説明が仏に成る事を妨げてしまう。
仏に成れる性質か、仏の性質を説明できていたら、聞いた者と共に、仏に参入しているはず、仏に成っているはずである。
また、潙山霊祐に向かって言います。
たとえ『一切の全ての生者には、仏の性質が無い』と言い得ても、『一切の仏の性質には、生者がいない』と言わなかったし、『一切の仏に成れる性質には、仏の性質が無い』と言わなかったし、まして、『一切の諸仏には、仏に成れる性質が無い』とは夢にも未だ見なかった。
言い得るのであれば、試しに挙げてみなさい」

百丈山の、大智禅師と呼ばれる百丈の懐海は、僧達に示して、「仏は、無上の存在である。
仏には、無上の知が有る。
仏は、仏の道として、仏という人を立てている。
仏には、仏の性質が有る。
仏は、導師である。
仏は、『遮（さえぎ）られない風』を使う事ができ得る。
『遮（さえぎ）られない風』とは、『遮（さえぎ）られない知』である。
仏の知によって初めて、因果を使う事ができ得るし、福の知が自由と成る。

仏の知を車となして、因果を載せて運ぶのである。

仏の知によって、生きている際に生に留められないし、死に際して死に遮(さえぎ)られないし、『色受想行識』という『五蘊』、『五陰』の際に門が開くかの様に『五蘊』に遮(さえぎ)られないし、去ったり住んだりするのが自由であるし、難無く出入りできる。

もし、この様にできれば、上下関係や優劣を論じないし、身が蟻(アリ)でも世界の尽(ことごと)くが清浄な妙なる国土と成るし不可思議な物と成る」と言った。

百丈の懐海の仏の性質についての言葉である。

「五蘊」と言っているのは、今の不壊の身である。

今の一時は、「門が開くかの様に『五蘊』に遮(さえぎ)られない」。

生を使う事ができ得るが、生に留められないし、

死を使う事ができ得るが、死に遮(さえぎ)られない。

いたずらに無駄に、生を愛着する事なかれ。

妄(みだ)りに死を恐れる事なかれ。

生死には、既に、仏の性質が存在する。

生死に動揺して嫌って捨てるのは外道である。

目の前の、諸々の縁(えん)と認めていた物は、「使う事ができ得る、『遮(さえぎ)られない風』、『遮(さえぎ)られない知』である」。

この様な者が、無上者である仏である。

仏が存在する所は、「清浄な妙なる国土と成る」。

黄檗希運は、南泉普願の茶室の中にいて坐っていた。
南泉普願は、黄檗希運に「『定と知を等しく学べば、明らかに仏の性質を見る』という理(ことわり)は、どの様な物ですか？」と質問した。
黄檗希運は、「一日中、何物にも依存しなくて初めて、仏の性質を見る事ができ得る」と言った。
南泉普願は、「他の長老の僧の見解では無いでしょうね？」と言った。
黄檗希運は、「あえて否定はしません」と言った。
南泉普願は、「食事代は、さておき、履物代は誰かさんに返してもらいましょう」と言った。
黄檗希運は、(無言で)休んだ。

「定と知を等しく学ぶ」という言葉の意味は、「『定学』が『慧学』を遮(さえぎ)らないので、等しく学ぶと、明らかに仏の性質を見る事が有る」という意味ではなく、「明らかに仏の性質を見る時に、定と知を等しく学んでいる学が有る」という意味である。
「明らかに仏の性質を見る時に、定と知を等しく学んでいる学が有る」、「という理(ことわり)は、どの様な物であるのか？」と言っているのである。
例えば、「明らかに仏の性質を見るのは、誰が行っているのか？」という言葉と意味が同じである。
「『仏と性質を等しく学べば、明らかに仏の性質を見る』という理(ことわり)は、どの様な物であるのか？」とも言う事ができ得る。

黄檗希運の「一日中、何物にも依存しなくて初めて、仏の性質を見る事ができ得る」という言葉の意味は、たとえ、「一日中」が一日の中に存在していても、「依存しない」のである。

「何物にも依存しない」のは、「一日」であるので、仏の性質が明らかに見るのである。

「一日中」は、いつ到来するとするのか？　どの国土であるとするのか？

「一日」は、人間の一日であるのか？　他のどの中の一日であるのか？　白銀世界の一日が暫定的に来たのか？

たとえ、この土地、この世界であっても、他の世界であっても、「依存しない」のである。

既に「一日中」であるので、「依存しない」べきである。

「他の長老の僧の見解では無いでしょうね？」と言うのは、「『一日中、何物にも依存しなくて初めて、仏の性質を見る事ができ得る』のを見解とは言わないでしょうね？」と言うような物である。

「他の長老の僧の見解ですか？」と言われても、「自己の見解である」と頭の向きを変えるべきではない。

自己を直接的に言い当てていても、黄檗希運の考えではない。

黄檗希運の考えは、必ずしも自己の考えだけではない。他の長老の僧の見解は、「外を回る」ので。

黄檗希運は、「あえて否定はしません」と言った。

黄檗希運の「あえて否定はしません」という言葉は、中国では、自己に有る能力を質問された時に、可能な事を可能であると言う場合に、「あえて否定はしません」と言うからである。

そのため、「あえて否定はしません」という言葉は、あえて否定している訳ではないのである。

「一日中、何物にも依存しなくて初めて、仏の性質を見る事ができ得る」という、黄檗希運が言い得た言葉が、他の長老の僧の言葉から選び取ったかどうか考えるべきではない。

見解が、たとえ、他の長老の僧の見解であっても、黄檗希運の見解であっても、「あえて否定はしません」と言うべきである。

「一頭の神の使いである牛、水牛が出て来て、『吽（ウーン）、吽（ウーン）』と言う」のである。

（「吽」は「牛が鳴く」を意味する場合が有る。）

このように言葉を理解して取るのが、言葉を理解して取る事なのである。

言葉にする意味や、言葉を理解して取っている言葉を、試みに言ってみるべきである。

南泉普願は、「食事代は、さておき、履物代は誰かさんに返してもらう」と言った。

「食事の価値は、さておき、履物の価値は誰かさんに返してもらう」と言っているのである。

この言葉の意味に、長く、いくつもの生を尽くして、参入して究めるべきである。

「食事代は、どうして取らないのか?」と心に留めて学ぶ事に勤めるべきである。

「履物代は、どうして取るのか?」。

「悟りを求めて諸方をたずねて歩きまわった年月で、どれだけの履物を踏み破ってきたのか?」。

今、「もし代価を返さなければ、未だ履物を履きません」と言うべきである。

また、「二足、三足の履物である」と言うべきである。

この様に言い得るべきである。

この様な主旨であるべきである。

黄檗希運は、(無言で)休んだ。

黄檗希運は、休んだのである。

南泉普願に同意されなかったので(無言で)休んだ訳ではないし、黄檗希運が同意しなかったので(無言で)休んだ訳ではない。

本来の僧は、そうではない。

知るべきである。

「(無言で)休んだ姿の裏で雄弁に語っている」のは、「笑いの中に知という刀が有る」ような物である。

仏の性質が明らかに見る、「粥足飯足」、「朝食に満足するし昼食に満足する事」である。

潙山霊祐は、黄檗希運と南泉普願の話を挙げて、仰山慧寂に「黄檗希運は、南泉普願に応対する事ができ得なかったのではないか？」と質問した。
仰山慧寂は、「そうでは、ありません。黄檗希運には虎を陥(おとしい)れる素質が有る事を知るべきです」と言った。
潙山霊祐は、「あなたの見解は、これについて優れている」と言った。

潙山霊祐は、「昔、黄檗希運は、南泉普願に応対でき得なかったのか？」と言っているのである。
仰山慧寂は、「黄檗希運には虎を陥(おとしい)れる素質が有る」と言った。
既に虎を陥(おとしい)れたのであれば、虎の頭を取ったのである。
「虎を陥(おとしい)れるのも、虎を取るのも、仏が生者を救うために俗世の中へ降りて行く事である。
仏の性質を明らかに見るのは、単眼を開く。
仏の性質が明らかに見るのは、単眼を失う。
速(すみ)やかに言いなさい。
速(すみ)やかに言いなさい。
仏の性質が見ると、何について優れているのか？」
このため、半端な物にも、全ての物にも、「依存しない」のである。
百、千の無数の物にも、「依存しない」のである。
百、千の無数の時にも、「依存しない」のである。
このため、「籠(かご)は一枚であるし、時の中は一日である。依存するも、依存しないも、葛藤が樹に依存するような物である。天の中も、天全体も、最終的に、未だ言葉が無い」。

ある僧が、趙州真際大師に「犬には仏の性質が有りますか？　無いですか？」と質問した。

「犬には仏の性質が有るか？　無いのか？」という質問の意味を明らめるべきである。

原文の「狗子」とは「犬」である。

「犬には仏の性質が有るか？」と質問した訳でもなく、「犬には仏の性質が無いのか？」と質問した訳でもなく、「鉄のように意思が堅固な修行者は仏道を学び修行するのか？」と質問しているのである。

誤って辛辣な手段に出会った恨みは深いが、三十年かかって半分の聖者を見る風流である。

趙州真際大師は、「犬には仏の性質は無い」と言った。

「犬には仏の性質は無い」という言葉を聞いて、学ぶべき方向への道が有る。

仏の性質から見て言っても「犬には仏の性質は無い」し、犬から見て言っても「犬には仏の性質は無い」し、傍観者から見て言っても「犬には仏の性質は無い」。

「犬には仏の性質は無い」事が、石を消す日も有るだろう。

ある僧は、「一切の全ての生者には皆、仏に成れる性質が有ります。どうして犬には仏の性質が無いのですか？」と言った。

この言葉の意味は、「一切の全ての生者には仏の性質が無いのであれば、仏の性質も無いだろうし、犬も無いだろう」という意味であり、「どうですか？」と質問しているのである。

「犬には仏に成れる性質が有る」ので、どうして「犬には仏の性質は無い」という言葉を期待していただろうか？

趙州真際大師は、「業による理解が、他に有るからである」と言った。

この言葉の意味は、「『犬には仏の性質は無い』のは『他に理由が有るからである』、『他に有る理由』とは『業による理解』である」という意味である。

「業による理解」が有っても、「他に理由」が有っても、「『犬には無い』、『仏の性質は無い』」のである。

「業による理解」は未だ犬に出会っていないのに、どうして犬は仏の性質に出会えるだろうか？

「双放双収」しても、「双方共に手放しても、双方共に手中に収めても」、初めから終わりまで全て「業による理解」である。

別の、ある僧が、趙州真際大師に「犬には仏に成れる性質が有りますか？無いですか？」と質問した。

この質問は、この僧が趙州真際大師に応対し得た道理による物なのだろう。そのため、仏に成れる性質か、仏の性質を言ったり質問したりするのは、仏祖の日常茶飯事なのである。

趙州真際大師は、「犬には仏に成れる性質が有る」と言った。

「犬には仏に成れる性質が有る」様子は、他の宗派の経典の似非学者の「有」、「存在」ではないし、「有部」派が論じている「有」、「存在」ではない。

進んで、仏の「有」、「存在」を学ぶべきである。
仏の「有」、「存在」とは、趙州真際大師の「有」、「存在」である。
趙州真際大師の「有」、「存在」とは、犬の「有」、「存在」である。
犬の「有」、「存在」とは、仏に成れる性質の「有」、「存在」である。

ある僧は、「既に、仏に成れる性質が有るならば、どうして、再び、この肉体という皮袋に突入するのですか？」と言った。

この僧の言葉の意味は、「仏に成れる性質は、今、有るのか？　昔から有るのか？　既に有るのか？」と質問している。
「既に有る」のは「諸々に有る」に似ているが、「既に有る」は単独で明らかである。
「仏に成れる性質が、既に有る」者は、肉体に突入するべきか？　突入するべきではないか？
「この肉体という皮袋に突入する」様子を、いたずらに無駄に見過ごす鍛錬をしてはいけない。

趙州真際大師は、「知っていても犯すからである」と言った。

「知っていても犯すからである」という言葉は、世俗の言葉として長く途中に流布しているが、今は趙州真際大師の言葉なのである。
「知っていても犯すからである」という言葉の意味は、「知っても犯す」という意味である。
「知っていても犯すからである」という言葉を激しく疑う人が多いだろう。

「肉体という皮袋に『入る』」事も明らめ難いが、「入る」事も用い得ないのである。

まして、「肉体という庵（いおり）の中の不死の人を理解しようと欲するならば、どうして今のこの肉体という皮袋を離れようか？　いいえ！　離れない！」なのである。

不死の人が何ものであっても、いつか肉体という皮袋を離れるのである。

「知っていても犯す」とは、必ずしも「肉体という皮袋に入る」事ではない。

「この肉体という皮袋に突入する」事は、必ずしも「知っていても犯す」事ではない。

「知っている」ので「知っていても犯してしまう」のである。

知るべきである。

「知っていても犯す」事は、「脱体」、「そのままの、そのもの」の様子を心に秘めているだろう。

これを「突入する」と説明しているのである。

「脱体」、「そのままの、そのもの」の様子は、心に秘めている時、自己の心にも秘めているし、他人の心にも秘めている。

この様であっても、「未だ逃れない」と言う事なかれ。

「驢前馬後漢」、「驢馬（ロバ）が先で、馬が後である、と言う男」である。

まして、三十九祖の雲居道膺は、「たとえ、仏法の辺りの事を学び得たとしても、速（すみ）やかに、誤って心を用い終わったという事である」と言っている。

そのため、半端に仏法の辺りの事を学ぶと、長く誤って来ている事は月日が経つにつれて深く成ってしまうが、これは、「この肉体という皮袋に突入する犬」である。

「知っていても犯す」としても、仏に成れる性質は有るのである。

長沙景岑の会で、竺尚書が「ミミズが斬れて二つに成ると、両方の頭が共に動きます。仏に成れる性質は、どちらの頭に存在するのでしょうか？」と質問した。

長沙景岑は、「妄想する事なかれ」と言った。

竺尚書は、「どうして動くのですか？」と言った。

長沙景岑は、「四大(元素)の『火』と『風』が未だ散らないだけである」と言った。

今、竺尚書は、「ミミズが斬れて二つに成る」と言うが、ミミズが斬れていない時は一つであると決めつけて良いのか？

仏祖の日常では、そうではない。

ミミズは、本(もと)から一つではないし、斬れても二つではない。

「一つ」、「二つ」という言葉を理解して取る事を鍛錬して学に参入するべきである。

「両方の頭が共に動く」と言うが、斬れる以前は一つの頭であったとするのか？　仏の向上を一つの頭とするのか？

「両方の頭が共に動く」という話は、竺尚書の理解とは無関係に、見過ごす事なかれ。

斬れている二つのミミズには、一つの頭と、別に一つの頭が有るのか？

「共に動く」と言うが、「定動智抜」、「定で動かし知で抜く」のも「共に動く」事である。

「仏に成れる性質は、どちらの頭に存在するのか？」。

「仏に成れる性質は斬れて二つに成る。ミミズは、どちらの頭に存在するのか？」と言っているのだろう。

この言葉の会得、理解は、明確に詳細にするべきである。

「両方の頭が共に動く。仏に成れる性質は、どちらの頭に存在するのか？」と言うが、「両方の頭が共に動く」ならば、「仏に成れる性質は存在できない」と言うのか？

「両方の頭が共に動く」ならば、「共に動いている」が、「仏に成れる性質は、どちらかの頭にしか存在しない」と言うのか？

長沙景岑は、「妄想する事なかれ」と言った。

この言葉の意味は、どうか？

「妄想する事なかれ」と言うのである。

「『両方の頭が共に動く』とまで考えるのは妄想ではない」と言っているのか？

「仏に成れる性質には、妄想は無い」と言っているのか？

「『両方の頭が共に動く』とまで考えず、『仏に成れる性質は、どちらの頭に存在するのか？』とまで考えず、ただ『妄想する事なかれ』と言っているのか？」とも考えて参入して究めるべきである。

「どうして動くのか？」と言っているが、「両方の頭が共に動けば、仏に成れる性質が一つ増えるべきである」と言っているのか？

「両方の頭が共に動けば、仏に成れる性質が無いだろう」と言っているのか？

「四大(元素)の『火』と『風』が未だ散らない」という言葉は、仏に成れる性質を出現させている。

「両方の頭を動かしているのは、仏に成れる性質である」とするのか？

「両方の頭を動かしているのは、『火』と『風』である」とするのか？

「仏に成れる性質と、『火』と『風』は、共に、出て散る」と言うべきではない。

「仏に成れる性質と、『火』と『風』は、一方は出て散り、他方は出ないで散らない」と言うべきではない。

「『火』と『風』は、仏に成れる性質である」と言うべきではない。

なので、長沙景岑は、「ミミズには、仏に成れる性質が有る」と言わなかったし、「ミミズには、仏の性質が無い」と言わなかった。

長沙景岑は、ただ「妄想する事なかれ」と言ったし、「四大(元素)の『火』と『風』が未だ散らない」と言った。

仏に成れる性質への手がかりは、長沙景岑の言葉を考えるべきである。

「四大(元素)の『火』と『風』が未だ散らない」という言葉を静かに考えて鍛錬するべきである。

「四大(元素)の『火』と『風』が未だ散らない」という言葉には、どのような道理が有るのか？

「火」と「風」が集まっていたものが散る時期が未だであるのを言うために「未だ散らない」と言っているのか？

そうではない。

「火」と「風」が未だ散らないのは、仏が法を説く。

「火」と「風」を未だ散らさないのは、法が仏を説く。

例えば、「一音」、「多種多様に解釈されるが真意は唯一」の法を説く時が到来したのである。

法が「一音」、「多種多様に解釈されるが真意は唯一」である、到来の時である。

法は、「一音」、「多種多様に解釈されるが真意は唯一」である。「一音」、「多種多様に解釈されるが真意は唯一」の法であるので。

また、「仏に成れる性質は、生きている時だけ有って、死んでいる時は無く成るだろう」と思う人は、最悪の学が無い理解していない人である。

生きている時も、仏に成れる性質は有るが、仏の性質は無い。

死んでいる時も、仏に成れる性質は有るが、仏の性質は無い。

「火」と「風」の散る、散らないを論じるならば、仏に成れる性質か、仏の性質の散る、散らないを論じるべきである。

たとえ、「火」と「風」が散る時も、仏に成れる性質は有るが、仏の性質は無い。

たとえ、「火」と「風」が散らない時も、仏に成れる性質は有るが、仏の性質は無い。

それなのに、「仏に成れる性質か、仏の性質は、動く動かないによって存在したり不在したりするし、理解している理解していないによって精神であったり精神でなかったりするし、知っている知っていないによって性質であったり性質でなかったりする」と誤って、とらわれる人は、外道である。

果てしない昔から、多くの愚者が、理解を仏に成れる性質とし本来の人としているが、笑い過ぎて死にそうに成る。

さらに、「仏に成れる性質か、仏の性質」を言うと、「拕泥帯水」、「人を救うために泥水にまみれる」わけではないが、「牆壁、瓦礫である」。

向上において言う時、「仏の性質とは、どの様な物であるか？」。

「『三頭八臂』、『三つの頭と八本の腕』である仏に、逆に、ことごとく委ねましょうか」。

正法眼蔵　仏性(仏に成れる性質か、仏の性質)

その時、千二百四十一年、雍州の観音導利興聖宝林寺にいて僧達に話した。

行仏威儀

諸仏は、必ず身のこなしを行い足らせる。
身のこなしを行い足らせる諸仏は、行(おこな)っている仏である。

行(おこな)っている仏は、「報仏」、「報身仏」、「報いによる仏」ではないし、
「化仏」、「応身仏」、「仏の化身」ではないし、
「自性身仏」、「法身仏」、「真理の実体である仏」ではないし、
「他性身仏」ではないし、
「始覚」、「思い立って心して、修行して、初めて迷いから覚めて悟りを開く事」による仏ではないし、
「本覚」、「本(もと)からの覚」による仏ではないし、
「性覚」による仏ではないし、
「無覚」、「覚などを離れる事」による仏ではない。
この様なもの等による仏は、決して、行(おこな)っている仏に肩を並べる事はでき得ない。

知るべきである。
諸仏が仏道に存在する様子とは、覚を待たないのである。
仏の向上の道に行為を通達しているのは、行(おこな)っている仏だけである。
「自性身仏」などは、夢にも未だ見た事が無い所なのである。
行(おこな)っている仏は、各々で身のこなしが形成されて現されるので、身の前に身のこなしが形成されて現されるし、言葉の前に化す導く心が漏(も)れるのは、

諸々の時に行き渡るし、諸方に行き渡るし、諸仏に行き渡るし、諸々の行いに行き渡る。

行っている仏でなければ、「仏にとらわれてしまう事」や「法縛」、「法にとらわれてしまう事」から未だ解脱しておらず、「仏縛」や「法縛」による「魔」、「仏敵」に分類されてしまう。

「仏縛」と言うのは、「菩提」、「覚」を「覚」として知見したり理解したりして、その知見や理解にとらわれてしまう事である。

「仏縛」に成ると、一心に年月を経てもなお未だ解脱の機会を待ち望めずに、いたずらに無駄に誤解してしまう。

「『菩提』、『覚』は『覚』である」という見解を抱くのは、「菩提」、「覚」に相応の知見かもしれないし、「誰も『邪見である』と言わない！」と思うが、「無縄自縛」、「縄も無いのに自ら縛られて、とらわれてしまう事」に成ってしまう。

「仏縛」に成ると、縛られて、とらわれて、長く続いて絶えず、樹が倒れて藤が枯れるだけではなく、いたずらに無駄に仏の近くの巣窟で生きるだけに成ってしまう。

「仏縛」に成る者は、「法身仏」、「真理の実体である仏」が(気を)病む事を知らないし、「報身仏」、「報いによる仏」が(自ら)窮まる事を知らない。

仏道を遠くで聞いている、他の宗派の経典の学者ですらなお「即於法性、起法性見、即是無明」、「『法性』、『法の本性』において、『法の本性である』という見解を起こすのは、『無明』、『邪見などにとらわれて真理に暗い無知』である」と言う。

他の宗派の経典の学者が、この言葉で、「法性」、「法の本性」で「法の本性である」という見解を起こす事を「法性の縛」と言わず、「無明の縛」に重ねているのは、「法性の縛」が有る事を知らないからである。

憐れむべきではあるが、他の宗派の経典の学者が、「無明の縛」に重なるのを知っているのは、「菩提」、「悟り」を求めて思い立って心する種、きっかけと成るかもしれない。

行っている仏は、かつて、「仏縛」、「法縛」、「法性の縛」などに縛られていない、とらわれていないのである。

このため、「法華経」の「如来寿量品」の「我本行菩薩道、所成寿命、今猶未尽、復倍上数」、「私は本より菩薩の道を行っていて、成している所による寿命は今なお未だ尽きないし、また、先の数の倍である」。

知るべきである。

菩薩の寿命が今も長く連続して絶えないのではないし、仏の寿命が過去へ遍く行き渡っているのではない。

「上数」、「先の数」とは、「所成」、「成している所」の全てである。

「今猶」、「今なお」とは、「寿命」の全てである。

「我本行」、「私は本より行っている」のが、たとえ万里の大きさの一個の鉄であっても、「百年抛却任縦横」、「百年、無数の年月を捨て去って、縦横無尽に任せる」のである。

そのため、修行と証は、無ではないし、「有」、「存在」ではないし、汚染ではない。

「無仏無人」、「仏も人も無い」行為が百、千、万の無数に有っても、行っている仏を汚染しない。

行っている仏は、修行と証に汚染されないのである。
修行と証が汚染されないからではない。
行っている仏が汚染されないのは、「不無」、「無ではない」からである。

曹谿山の三十三祖の大鑑禅師は、南嶽の懐譲に「ただ、諸仏は汚染されない事を護ろうと念頭に置いているのである。
あなたもまた、そうである。
私も、またそうである。
西のインドの祖師達もまた、そうである」と言った。

そのため、「あなたもまた、そうである」ので、諸仏である。
「私も、またそうである」ので、諸仏である。
実に、私だけではなく、あなただけではなく、私が私であるように、諸仏は汚染されない事を護ろうと念頭に置いているのが、行っている仏の身のこなしなのである。
あなたがあなたであるように、諸仏は汚染されない事を護ろうと念頭に置いているのが、行っている仏の身のこなしなのである。
私もなので師も優れているし、あなたもなので弟子も優れているのである。
師も優れているし弟子も優れているのが、行っている仏が「明行足」、「三明の知と身口意の三業の行いを十分に備えている事」なのである。
知るべきである。

諸仏は汚染されない事を護ろうと念頭に置いているので、私も、また、汚染されない事を護ろうと念頭に置いているし、あなたも、また、汚染されない事を護ろうと念頭に置いているのである。
古代の仏と等しい大鑑禅師が会得した「道」、「真理」は、たとえ私には無くても、あなたには有るのではないか？

行っている仏は、汚染されない事を護ろうと念頭に置いているし、汚染されない事に通達している。
このため、「修行と証は、性質や、相や、『本末』、『どちらが重要か、という事』ではない」と知る事ができる。
行っている仏の進退は、結果として、仏を行わせるので、仏は行わせる。

法のために身を捨てる事が有るし、身のために法を捨てる事が有る。
身の命を惜しまない事が有るし、ただ身の命を惜しむ事が有る。
法のために法を捨てるだけではなく、心のために法を捨てる身のこなしが有る。

捨てるのは無量である事を忘れるべきではない。
仏の量をひねって取って来て大いなる道を測量し推測するべきではない。
仏の量は一隅であり、例えば、「華開」、「華開世界起」、「華が開いて世界が起こる」ような物である。
心の量を挙げて来て身のこなしを模索するべきではない。思いめぐらすべきではない。
心の量は一面であり、例えば、世界のような物である。
一茎の草の量は、明らかに仏祖の心の量である。

一茎の草の量は、行っている仏の行跡を認める一欠片である。

たとえ一心の量が無量の仏の量を包含すると見通しても、行っている仏の身のこなしや有様を量ろうとするには本より過分な様子である。

過分な様子なので、当たらないし、使う事ができ得ないし、量る事ができない。

行っている仏の身のこなしには、一つの究めるべき物が有る。

「『仏とは自らである』とは、どの様な物であるのか?」と来ているので、「私も、またそうである」し「あなたもまた、そうである」身のこなしは「ただ私は能く知っている」に関わっているが、「十方の仏も、またそうである」を脱ぎ落とすのは同一ではない。

このため、古代の仏と等しい人は、「あの辺りの事を体で理解して取って、この中に帰って来て、行いなさい」と言った。

既に、この様に保持させられ任せられると、「諸法」、「全てのもの」や「諸々の身」や「諸行」、「全ての事」や諸仏は、身近である。

「諸法」、「全てのもの」や「諸々の身」や「諸行」、「全ての事」や諸仏は、各々、受け入れて会得するのに障害があるだけなのである。

受け入れて会得するのに障害が有るので、受け入れて会得するには脱ぎ落とすだけなのである。

「見る眼」を遮（さえぎ）る「明明百草頭」、「明らかな百草」、「森羅万象」によって、「一つの法も見えない」とか「一つのものも見えない」と動揺する事なかれ。

ある法に至ったり、別の法に至ったりできる。

「ひねって取って来たり、ひねって取って去ったりして、同じ門を出入りする」ように行うと、遍界は「最初」から隠していないので、釈迦牟尼仏の「密語」、「意味が込められた言葉」や「密証」や「密行」や「密附」などが有るのである。

「門を出れば草が有り、門を入っても草が有り、万里に草が長く伸びている」のである。

「『入る』という一言も、『出る』という一言も、『門』には不要である」のである。

今の把握は、通過するが、「夢幻（ゆめまぼろし）」、「空華」である。

誰が今の把握という誤りを誤りとするだろうか？

進むのも誤りであるし、後退するのも誤りであるし、一歩も誤りであるし、二歩も誤りであるので、誤りに誤りを重ねる事に成る。

「天と地は、かけ離れている」ので、「道に到達するのは難しくない」のである。

「威儀、儀威」、「身のこなしと、身」によって、「大道体寛」、「大いなる道の実体は寛大なものである」と究めるべきである。

「出生合道出」、「生じて出る時も道に合った形で出る」のであるし、「入死合道入」、「死に入る時も道に合った形で入る」のである、と知るべきである。

「頭が正しいので尾も正しい」様に、「球が回転する」様に、身のこなしが目の前に現れるのである。

仏の身のこなしの一隅を「遺有」、「存在させる」のは、「乾坤」、「天地」や「大地」の尽くであるし、

生死が来たり去ったりする尽くなのであるし、

「塵刹」、「塵の様に無数の国土が有る俗世」であるし、

「蓮華」である。

「塵刹」、「塵の様に無数の国土が有る俗世」や「蓮華」の各々が、仏の身のこなしの一隅なのである。

未だ学ぶべき物が有る人の多くは、誤って「『乾坤、天地の尽く』と言うのは、『南瞻部洲』、『南閻浮提』、『この世』を言っているのだろう」と思ってしまうし、

また、誤って「『乾坤、天地の尽く』と言うのは、『南瞻部洲』、『南閻浮提』、『この世』といった、『四大洲』のうち一つを言っているのだろう」と思ってしまうし、

また、誤って「『乾坤、天地の尽く』と言うのは、中国一国を言っているのだろう」と思ってしまうし、

誤って「『乾坤、天地の尽く』と言うのは、日本一国を言っているのだろう」と思ってしまう様である。

また、誤って「『大地の尽く』と言うのは、『三千大千世界』を言っているのだろう」と思ってしまう様であるし、

誤って「『大地の尽く』と言うのは、わずかに、『四大洲』のうち一つや、一つの県を言っているのだろう」と思ってしまう様である。

「『乾坤』、『天地』や『大地』の尽く」という言葉の学に参入するには、三回でも五回でも考えるべきであるし、「広さを言っているのだろう」として考える事を止めるなかれ。

「『乾坤』、『天地』や『大地』の尽く」という言葉を会得、理解すると、極大は極小と同様であるし、極小は極大と同様である、仏祖の超越なのである。

「『有』、『存在』の『大小』、『優劣』ではない」と言うと激しく疑うかもしれないが、「『有』、『存在』の『大小』、『優劣』ではない」のが身のこなしである、行っている仏なのである。

仏から仏へ、祖師から祖師へ、言われている「『乾坤』、『天地』や『大地』の尽く」という言葉の意味である、身のこなしを「最初」から隠していないのが遍界である、として学に参入するべきである。

遍界は、「『最初』から隠していない」だけではない。

これが、行っている仏の一座の身のこなしである。

仏道を説明する時に、胎生や化生などは仏道の日常であるが、未だ湿生や卵生などの言葉を理解して取らない。

まして、「胎卵湿化」という「四生」の他にも生が有る事は夢にも未だ見ないのである。

まして、どうして、「胎卵湿化」とは別の「胎卵湿化」が有る事を見聞きしたり覚知したりするだろうか？　いいえ！

仏から仏へ、祖師から祖師への大いなる道では、「胎卵湿化」とは別の「胎卵湿化」が有る事を、「最初」から隠していないで正しく伝えているし、親しく意味を込めて正しく伝えている。

「『胎卵湿化』とは別の『胎卵湿化』が有る」という言葉の会得、理解を、聞かなかったり、習わなかったり、知らなかったり、明らめなかったりする人は、何の仲間であるとするのか？

既に「胎卵湿化」という「四生」は聞いているが、死は何種類あるのか？「胎卵湿化」という「四生」には「四死」が有るべきなのか？　二死、三死、五死、六死、千、万の無数の種類の死が有るべきなのか？

「死は何種類あるのか？」という道理をわずかにでも疑う人は、学に参入する素質が有る。

鍛錬するべきである。

「胎卵湿化」という「四生」の者達の中に、生まれるが死なない者はいるのか？

死ぬ事だけが単一に伝えられていて、生まれる事を単一に伝えられていない者はいるのか？

生まれる事だけが単一に伝えられている類（たぐい）の者や、死ぬ事だけが単一に伝えられている類（たぐい）の者の、有無の学に必ず参入するべきである。

わずかに「無生」、「生じない」という言葉を聞くだけで明らめる事が無い、身心の鍛錬を置いておくような者がいるが、とても愚鈍な者であるし、「信機」、「信じるしかない素質の者」か「法機」、「仏法を聞いて修行できる優れた素質の者」かや、「頓漸」、「修行が遅いか速いか」を論じる事もできない、「畜類」、「動物的人間」と言うべき者である。

なぜならば、たとえ「無生」、「生じない」という言葉を聞いても、言葉の意味が、どの様な物か、知らないからである。

さらに、「無仏」、「無道」、「無心」、「無滅」だろうか？　「無無生」だろうか？　「無法界」、「無法性」だろうか？　「無死」だろうか？と鍛錬しないで、いたずらに無駄に「水と草」、「飲食物」の事だけを思っているからである。

知るべきである。

生死は仏道の日常である。

生死は仏の家の日常の道具である。

生死は、使えば使えるし、明らめれば明らめる事ができ得る。

そのため、諸仏は、生死に通じる事と通じない事に明々に明らかであるし、生死を思い通りに使える。

生死の時に暗くて知らない人を、誰が「あなたは、あなたである」と言うだろうか？　誰が「あなたは生死を悟った人である」と言うだろうか？　いいえ！

「生死に沈んでいる」と聞くべきではないし、

「生死に存在する」と考えるべきではないし、

「生死を生死である」と信じて受け入れるべきではないし、

生死を会得、理解しないのはいけないし、

生死を知らないのはいけない。

誤って「諸仏は『人道』、『この世』だけに出現する」と言う人は、誤って「諸仏は他の世界には出現しない」と思ってしまう。

それならば、仏が存在する場所は全て「人道」、「この世」なのか？　いいえ！

これは、人と成った仏である釈迦牟尼仏の「唯我独尊」、「ただ私、独りだけが尊い」という言葉への誤解による物である。

天の仏もいるし、仏の仏もいる。

「諸仏は『人間世界』、『この世』だけに出現する」と言う人は、仏祖の奥義に入門していない。

祖師達は、「釈迦牟尼仏は、迦葉仏の仏土で正しい法を伝えてから、『兜率天』へ行って、『兜率天』を化して導き、今も存在する」と言っている。

実に、知るべきである。

人間の釈迦牟尼仏は肉体が死ぬ事を現す化の導きを敷いたが、天上の釈迦牟尼仏は今も存在して天を化して導いているのである。

学徒は知るべきである。

人間での釈迦牟尼仏による千、万の無数の変化する言葉や行いや説明が有ったのは、人間での一隅での光を放つ喜ばしい徴に過ぎなかった。

天上の釈迦牟尼仏の化の導きは更に千、万の無数である事を、愚かにも知らないのはいけない。

仏から仏へ正しく伝えている大いなる道が、断絶を超越し、始まりと終わりが無いのを脱ぎ落としている意味は、仏道だけに正しく伝えられている。

仏教以外の諸々の類の者は知らないし聞けない功徳である。

行っている仏が化の導きを設けている場所には、「胎卵湿化」という「四生」ではない「生者」がいるし、天上や人間や法界などではない場所が有る。

行っている仏の身のこなしを見る時は、天上や人間での眼を用いる事なかれ。天上や人間での量を用いるべきではない。天上や人間での量を挙げて測量しようと思う事なかれ。

行っている仏の身のこなしは、未熟な修行者ですら知らないし明らめていない。まして天上や人中での測量が及ぶ事が有るだろうか？　いいえ！

人の度量が短小である人は理解や知も短小である。

寿命が短い人は思慮も短い。

どうして行っている仏の身のこなしを測量できるだろうか？　いいえ！

そのため、人間での物事を挙げて仏法としてしまったり、人の法を挙げて仏法を限ろうとしてしまったりする宗派の人を全て「仏の子」として許し認める事なかれ。悪業の報いを受ける生者に過ぎないので。未だ身心によって法を聞かないし、未だ仏道修行する身心が無いので。

法に従って生きていない、法に従って死なない、法に従って見ない、法に従って聞かない、法に従って日常の行いをしない類の仲間には、かつて法の潤いが無いのである。

行っている仏は、「本覚」、「本からの覚」に愛着しないし、

「始覚」、「思い立って心して、修行して、初めて迷いから覚めて悟りを開く事」に愛着しないし、

「無覚」、「覚などを離れる事」に愛着しないし、

「有覚」、「覚が有る事」に愛着しない、と言うのは、この道理からである。

凡人が手段としている、「有念」、「意識する事」や、
「無念」、「無意識である事」や、
「本覚」、「本からの覚」や、
「始覚」、「思い立って心して、修行して、初めて迷いから覚めて悟りを開く事」や、
「無覚」、「覚などを離れる事」や、
「有覚」、「覚が有る事」などは、凡人の手段に過ぎず、仏から仏へ伝承している物ではない。

凡人の「有念」、「意識」と、諸仏の「有念」、「意識」は、遥かに異なるし、比較する事なかれ。
凡人が「本覚」、「本からの覚」を手段としているのと、諸仏が「本覚」、「本からの覚」を証しているのは、天と地ほど、かけ離れているし、比較などできない。
未熟な修行者の行いですら、諸仏の言葉に及ばない。
いたずらに無駄に、砂を数えている凡人が、どうして量る事ができるだろうか？　いいえ！
それなのに、凡人や外道の本末転倒の邪悪な見解をわずかに行って、誤って「諸仏の境地である」と思ってしまう輩が多い。
諸仏は、「この輩の罪悪は深く重い。憐れむべき者である」と言っている。

深く重い罪悪は、果てが無いのに、この輩（やから）は深く重く担（かつ）いでしまっているのである。

罪悪を深く重く担いでしまっている輩を、通過して、見守るしかない。

深く重い罪悪を把握して自己を遮（さえぎ）ってみても何も始まらない。

行（おこな）っている仏の身のこなしが、とらわれないのは、仏に遮（さえぎ）られても、「拕泥帯水」、「人を救うために泥水にまみれる」活路に通達しているので、とらわれないのである。

行（おこな）っている仏の身のこなしは、天上では天を化して導くし、人間では人を化して導く。

行（おこな）っている仏の身のこなしには、「華開世界起」、「華が開いて世界が起こる」功徳が有る。

行（おこな）っている仏の身のこなしには、かつて間隙が無い。

このため、行（おこな）っている仏は、「自己」や「他者」を超越して脱ぎ落とし、往来に抜き出ている。

行（おこな）っている仏は、「兜率天」へ行ける者であるし、「兜率天」から来れる者であるし、「兜率天」自体のような者である。

行（おこな）っている仏は、「安楽浄土」へ行ける者であるし、「安楽浄土」から来れる者であるし、「安楽浄土」自体のような者である。

行（おこな）っている仏は、「兜率天」を超越して脱ぎ落としている者であるし、「安楽浄土」を超越して脱ぎ落としている者である。

行っている仏は、「兜率天」と「安楽浄土」の全てのものを木っ端微塵に打ち破るし、「兜率天」と「安楽浄土」を把握したり通過したりするし、一口で飲み込み尽す。

知るべきである。

「兜率天」や「安楽浄土」といった所と、他の浄土や天上は、共に、輪廻転生の行き先という意味では「この世」などと同様である。

日常の行いを行うのであれば、浄土や天上でも同様に、日常の行いを行うのである。

大いに悟るのであれば、浄土や天上でも同様に、大いに悟るのである。

大いに迷うのであれば、浄土や天上でも同様に、大いに迷うのである。

日常の行いや、大いに悟る事や、大いに迷う事は、行っている仏が履物の中で指を動かす事である。

日常の行いや、大いに悟る事や、大いに迷う事は、ある時は、行っている仏の、一音の腸のガスの排気音であるし、排泄物臭である。

「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」が有る者は嗅ぎ分ける事ができ得るし、耳や身や日常の行いが有る者は聴いて理解して取る事ができ得る。

行っている仏は、「私の皮肉骨髄を得た」(、「私を得た」)時が有り、行っても、さらに他から得ないのである。

行っている仏は、生死を悟る大いなる道に、既に、とらわれないので、「大いなる聖者は、生死を心に任せるし、生死を身に任せるし、生死を道に任せるし、生死を生死に任せる」と古くから言われている。

この言葉の意味が現れると、古今の時ではなくても、行っている仏の身のこなしは、突然に、行い尽すのである。

道は環に成っていて、この言葉の意味を速やかに、わきまえ受け入れるのである。

行い尽すし、明らめ尽すが、強引な行いではない。

「迷頭認影」、「些細な事に気を取られて、本当に大切な事を見失う事」に大いに似ているが、「回光返照」、「夕日の照り返し」、「日没直前に一時、空が明るく成る事」、「滅びる直前に一時的に勢いを取り戻す事」、「自分の本来の姿を振り返り、反省して、修行する事」と唯一普遍絶対である。

「回光返照」、「自分の本来の姿を振り返り、反省して、修行する事」による、明らめている上に更に明らめるのは、行っている仏が全て統治している。

これは、行って理解して取る事に一任しているのである。

行って理解して取る事に一任している道理によって、心に参入して究めるべきである。

心に参入して究める「兀爾」、「一心の努力」は、万回のどの回も心を明白にする事である。

「三界とは、ただ、心の大いなる隔たりである」と知るし、会得、理解して取る。

「三界とは、心の大いなる隔たりである」という知と理解は、さらに「万法」、「全てのもの」に及ぶ。

しかし、「三界とは、心の大いなる隔たりである」という知と理解は、自己の家を行って理解して取るし、当人の生活である。

そのため、言葉の中の意味を言葉に則って理解して取り、言外の意味を巧みに求め、再三、掬い取って濾す時、把握に余る把握が有るし、通過に余る通過が有る。

その鍛錬とは、生とは、どの様な物であるのか？
死とは、どの様な物であるのか？
身心とは、どの様な物であるのか？
与えたり奪ったりするとは、どの様な物であるのか？
任せられたり背いたりするとは、どの様な物であるのか？
同一の門を出入りしても出会わないのか？
「一著落在」、「一つのものとして表れていると、とらわれている」時に、身を隠しても角を現しているのか？
「大慮而解」、「大いに思慮して理解できる」のか？
「老思而知」、「思慮を老熟させて知る」のか？
「一顆明珠」、「一粒の光明に輝く宝玉」なのか？
一つの「大蔵経」なのか？
一つの杖なのか？
一つの「面目」、「有様」なのか？
三十年後なのか？
「一念万年」なのか？　なのである。

点検して詳細に調べるべきであるし、点検を点検して詳細に調べるべきである。

点検を点検して詳細に調べるにあたって、「満眼聞声、満耳見色」、「眼の全てで声を聞くし、耳の全てで色形を見る」。

さらに、「沙門」、「修行者」の単眼が開いて明らかにすると、目の前の法だけではなく、目の前の事だけではなく、ゆったりとした静かな「破顔」が有るし、「瞬目」が有る。

これが、行っている仏の身のこなしの一時である。

物に引かれないし、物を引かないのである。

「縁起」による「無生」、「生じない」、「生じる等を超越した悟り」や「無作」、「何もしない」、「何も生じない」、「自然なまま」ではなく、「本性」、「本からの性質」や「法性」、「法の本性」ではなく、法の位に住んでいるわけではなく、「本有然」、「本からの、ありのまま」ではなく、ありのままを正しいとするだけではなく、ただ、身のこなしは、行っている仏の物であるだけなのである。

そのため、法のために、身のために、何かを捨てる事情は、よく心に任せる。

生死を解脱する身のこなしは、暫定的に、仏に一任している。

このため、「万法唯心」、「全てのものは唯一の心である」や「三界唯心」、「三界は唯一の心である」という言葉を理解して取る事ができる。

さらに、向上して「道」、「真理」を会得するので、「唯心、牆壁、瓦礫」、「唯一の心は牆壁、瓦礫である」という「道」、「真理」を会得する。

「唯一の心ではないので、牆壁、瓦礫だけではない」のである。

「唯一の心ではないので、牆壁、瓦礫だけではない」のは、行っている仏の身のこなしである、生死などを心に任せたり法に任せたりする、法のために身のために何かを捨てる、道理である。

「始覚」、「思い立って心して、修行して、初めて迷いから覚めて悟りを開く事」の段階の人や、「本覚」、「本からの覚」の段階の人が及べる所ではない。

まして、外道や「二つの乗り物」の段階の人や未熟な修行者が及べる所ではない！

行っている仏の身のこなしは、面々の理解できない物であるし、一枚一枚の理解できない物である。

行っている仏の身のこなしは、たとえ魚の様に活発であっても個々なのである。

行っている仏の身のこなしは、一個の鉄なのか？　「二つに成ったミミズの両方の頭が共に動く事」なのか？

一個の鉄は長短ではない。

「二つに成ったミミズの両方の頭が共に動く事」は自分や他のものではない。

この「『展事』、『投機』」、「事を展開して広げ、機会に投じる」力は、鍛錬を得ると、「威掩万法」、「威徳で全てのものを覆う」し、「眼高一世」、「一生を見抜く能力が高い」。

「僧堂、仏殿、廚庫、三門」は、「収放」、「手中に収めたり、手放したりする」のを遮らない光明である。

「僧堂、仏殿、廚庫、三門」は、「収放」、「手中に収めたり、手放したりする」ではない光明である。

さらに、十方に通じる眼が有るし、大地を全て収める眼が有る。

心の前が有るし、心の後ろが有る。

この様な眼耳鼻舌身意は、光明の功徳が燃える様に盛んであるので、存在を知らないで保持させせられ任せられている過去、現在、未来の諸仏がいるし、却って存在を知って「投機」、「機会に投じる」、野生の猫や牛がいる。

(原文の「狸奴」は「野生の猫」を意味する。)

この「巴鼻」、「要点の把握」が有るし、この「眼睛」、「見る眼」が有る者は、法を行っている仏を説くし、法を行っている仏を聴くのである。

(原文の「ゆるす」は「聴す」と解釈できる。)

雪峰山の、真覚大師と呼ばれる雪峰義存は、僧達に示して、「過去、現在、未来の諸仏は、『火』の中にいて、『大いなる法輪を転じる』、『大いなる法を説く』」と言った。

宗一大師と呼ばれる玄沙師備は、「『火』は過去、現在、未来の諸仏のために法を説く。過去、現在、未来の諸仏は地に立って聴く」と言った。

圜悟克勤は、「ある者は猿は白いと言うし、別の者は猿は黒いと言う。『互換』、『どちらも当てはまる』し、『投機』、『機会に投じる』。神出

鬼没である。激しい『火』が天に行き渡ると、仏は法を説く。天に行き渡っているのが激しい『火』であると、法が仏を説く。風が当たって、葛藤の巣を切断する。一言で、維摩を明らかにする」と言った。

過去、現在、未来の諸仏とは、一切の全ての諸仏である。
行っている仏とは、過去、現在、未来の諸仏である。
十方の諸仏とは、同時に、過去、現在、未来の諸仏である。
仏道では、過去、現在、未来を説く時に、この様に、説き尽すのである。
「行っている仏とは何者であるか？」と尋ねると、「行っている仏とは、過去、現在、未来の諸仏である」。
たとえ、存在を知っていても、存在を知らなくても、必ず、「行っている仏とは、過去、現在、未来の諸仏である」。

三人の古代の仏と等しい人達は、同じ「過去、現在、未来の諸仏」を言った時に、この様に言ったのである。

雪峰義存の「過去、現在、未来の諸仏は、『火』の中にいて、『大いなる法輪を転じる』、『大いなる法を説く』」という言葉の道理を習うべきである。
過去、現在、未来の諸仏が「法輪を転じる」、「法を説く」道場は、必ず、「火」の中なのである。
「火」の中は、必ず、仏の道場なのである。

経典の似非（えせ）学者は聞く事ができないし、外道や「二つの乗り物」の段階の人は知る事ができない。

知るべきである。

諸仏の「火」は、諸々の種類の火ではない。

(仏の「火」は、普通の火ではない。)

また、「諸々の種類のものには、『火』が有るのか？　無いのか？」とも照らして見て顧（かえり）みるべきである。

「過去、現在、未来の諸仏が『火』の中にいる」という化の導きの事を習うべきである。

「火」の中にいる時、「火」と諸仏は近いのか？　遠いのか？

身体が依り所とする環境としての報いである「この世」と過去の行いの正に報いである身心は、存在するのか？　唯一普遍絶対であるのか？　同一なのか？　違うのか？

「大いなる法輪を転じる」、「大いなる法を説く」時は、自己を転じるし、転じる機会が有るし、「『展事』、『投機』」、「事を展開して広げ、機会に投じる」し、法を転じるし、法によって転じられる。

「法輪を転じる」、「法を説く」と言うが、たとえ大地の尽（ことごと）くが尽（ことごと）くの「火」であっても、「火輪」を転じる「法輪」、「法」が有るし、

諸仏を転じる「法輪」、「法」が有るし、

「法輪を転じる法輪」、「法を説く法」が有るし、

過去、現在、未来を転じる「法輪」、「法」が有る。

そのため、「火」は、諸仏が「大いなる法輪を転じる」、「大いなる法を説く」大いなる道場である。

「火」や「法輪を転じる事」、「法を説く事」を世界の量、時の量、人の量、凡人や聖者の量などで測量しても当たらない。

世界の量、時の量、人の量、凡人や聖者の量などで量れないので、「過去、現在、未来の諸仏は、『火』の中にいて、『大いなる法輪を転じる』、『大いなる法を説く』」のである。

「過去、現在、未来の諸仏」と言うのは、量を超越しているのである。過去、現在、未来の諸仏が「法輪を転じる」、「法を説く」道場なので、「火」が有るのである。

「火」が有るので、諸仏の道場なのである。

玄沙師備は、「『火』は過去、現在、未来の諸仏のために法を説く。過去、現在、未来の諸仏は地に立って聴く」と言った。

この言葉を聞いて、「玄沙師備の言葉は、雪峰義存の言葉よりも、道、真理を会得していて正しい」と言う人がいるが、必ずしも、そうではない。

知るべきである。

雪峰義存の言葉は、玄沙師備の言葉とは別である。

雪峰義存は過去、現在、未来の諸仏が「大いなる法輪を転じる」、「大いなる法を説く」場所を言っているし、玄沙師備は過去、現在、未来の諸仏が法を聴く事を言っている。

雪峰義存の言葉は「法を転じる」、「法を説く」事を言っているが、「法を転じる」、「法を説く」場所では、必ずしも、法を聴く、聴かないを論じていない。

そのため、雪峰義存の言葉は「『法を転じる』、『法を説く』と必ず法を聴く者がいる」とは聞こえない。

また、雪峰義存は、「過去、現在、未来の諸仏は、『火』のために、法を説く」と言わなかったし、

「過去、現在、未来の諸仏は、過去、現在、未来の諸仏のために、『大いなる法輪を転じる』、『大いなる法を説く』」と言わなかったし、

「『火』は、『火』のために、『大いなる法輪を転じる』、『大いなる法を説く』」と言わなかった意味が有る。

「法輪を転じる」と言ったり、「大いなる法輪を転じる」と言ったりしているが、違いは有るのか？

「法輪を転じる」とは「法を説く」だけではない。

「法を説く」のは必ずしも他のもののためではない。

そのため、雪峰義存の言葉は、言うべき言葉を言い尽している。

雪峰義存の「『火』の中にいて、『大いなる法輪を転じる』、『大いなる法を説く』」という言葉によって、必ず詳細に学に参入するべきである。

玄沙師備の言葉によって混乱する事なかれ。

雪峰義存の言葉に「通じる」、「理解する」事は、仏の身のこなしを身につける事に成る。

「火」が過去、現在、未来の諸仏を中に存在させるのは、一つや二つの無尽法界という範囲だけではないし、一つや二つの微小な塵(ちり)に通達しているだけではない。

「大いなる法輪を転じる」を量として、大小や広い狭いの量にする事なかれ。

「大いなる法輪を転じる」のは、自己のためでも他のもののためでもないし、説くためでも聴くためでもない。

玄沙師備は、「『火』は過去、現在、未来の諸仏のために法を説く。過去、現在、未来の諸仏は地に立って聴く」と言った。

たとえ「火」は過去、現在、未来の諸仏のために法を説いても、未だ「法輪を転じる」とは言わなかった。

また、「過去、現在、未来の諸仏は『法輪を転じる』」とは言わなかった。過去、現在、未来の諸仏が地に立って聴いても、どうして、過去、現在、未来の諸仏の法輪が「火」を転じるだろうか？

過去、現在、未来の諸仏のために法を説く「火」は、「大いなる法輪を転じる」のか否か？

玄沙師備は、「『法輪を転じる』のは、この時である」と未だ言っていない。

玄沙師備は、「『法輪を転じる事』は無い」と言わなかった。

けれども、推測するに、玄沙師備は愚かにも「『法輪を転じる』とは『法を説く事』だけである」と誤解したのか？

もし、そうであれば、玄沙師備は未だ雪峰義存の言葉に暗いのである。

玄沙師備は、「『火』が過去、現在、未来の諸仏のために法を説く時、過去、現在、未来の諸仏は地に立って聴く」とは知っていたが、「『火』が『法輪を転じる』所で『火』は地に立って法を聴く」と知らなかったのである。

玄沙師備は、「『火』が『法輪を転じる』所で『火』は同じ『法輪を転じる』」と言わなかった。

過去、現在、未来の諸仏が聴くのは、諸仏の法であり、他から被るのではない。

「火」を法と認める事なかれ。

「火」を仏と認める事なかれ。

「火」を普通の火と認める事なかれ。

実に、雪峰義存と玄沙師備、師弟の言葉をなおざりにするべきではない。

「赤い髭の『胡』」だけであろうか？　いいえ！　さらに、これは、「『胡』の髭は赤い」なのである。

（「胡」には「ひげの長い未開の地の野蛮な人」という意味が有る。）

玄沙師備の言葉は、この様であるといえども、学に参入する力量とするべき所が有る。

経典の似非学者の「大乗」と「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の度量の性質や相とは無関係である、仏から仏へ、祖師から祖師へ正しく伝えられている性質と相の学に参入するべきである。

「仏から仏へ、祖師から祖師へ正しく伝えられている性質と相」とは、「過去、現在、未来の諸仏が法を聴く事」である。

「過去、現在、未来の諸仏が法を聴く」のは、「大乗」と「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の性質や相ではない。

人々は、「諸仏には、『機縁』、『教えを求める素質が、教えを説いてもらえる、きっかけと成る事』による説法が有る」とだけ知っていて、「諸仏は法を聴く」と言わないし、「諸仏は修行する」と言わないし、「諸仏は仏に成る」と言わない。

玄沙師備は、「過去、現在、未来の諸仏は地に立って法を聴く」と言ったが、「諸仏が法を聴く」性質と相が有るのである。

「法を説く者は優れていて、法を聴く者は劣っている」と必ずしも言う事なかれ。

法を説く者が尊ければ、法を聴く者も尊いのである。

釈迦牟尼仏は、「もし、この(法華)経を説けば、私を見ると為す」、「一人の為に説くのは、難しいと為す」と言った。

そのため、法を説く事は、釈迦牟尼仏を見る事に成るのである。

「私を見ると為す」のは、釈迦牟尼仏であるので。

また、釈迦牟尼仏は、「私の肉体が滅んだ後において、この(法華)経を聴いて受け入れ、その意味を質問するのは、難しいと為す」と言った。

知るべきである。

「(法を)聴いて受け入れる」のも、(法を説くのと)同じく、釈迦牟尼仏は「難しいと為す」。

(法を説く事と法を聴く事の)優劣は無いのである。

最も尊い者である諸仏であるといえども、「地に立って法を聴く事」は有るべきなのである。「過去、現在、未来の諸仏は地に立って法を聴く」ので。

諸仏は結果の上にいるので、原因の中の「法を聴く事」を言っているわけではない。「過去、現在、未来の諸仏」と既に言われているので。

知るべきである。

「過去、現在、未来の諸仏」とは、「火」が説く法を地に立って聴いて諸仏と成るのである。

一途な化の導きを辿るべきではない。

辿ろうとすると、「箭鋒相拄」、「矢と刃が衝突する」。

「火」は、必ず、過去、現在、未来の諸仏のために法を説く。

全くの真心として、「鉄樹華開世界香」、「鉄の樹の華が開いて世界が香る」のである。

さらに言うと、「火」が説く法を地に立って聴いていくと、最終的に何を形成して現すのか？「智勝于師」、「知が師よりも優れる」のであるし、「智等于師」、「知が師に等しく成る」のである。さらに、師弟の奥義に参入して究めて過去、現在、未来の諸仏と成るのである。

圜悟克勤の言葉の「ある者は猿は白いと言う」のが「別の者は猿は黒いと言う」のを遮らないで「互換」、「どちらも当てはまる」し「投機」、「機会に投じる」のは、「神出鬼没」である。

圜悟克勤の言葉は玄沙師備の言葉と同一に出るけれども、同一には入らない一つの道も有るといえども、「火」の諸仏であるのか？ 諸仏を「火」とするのか？

黒と白が「互換」、「どちらも当てはまる」心が、玄沙師備の「神鬼」に出没するといえども、雪峰義存の声色は未だ黒と白の際に残らない。

しかも、この様ではあるが、玄沙師備の言葉に正しい所も有るし、正しくない所も有るし、雪峰義存にひねって取った言葉が有るし、手放した言葉が有る事を知るべきである。

さらに、圜悟克勤には、玄沙師備と異なるし、雪峰義存と異なる、「激しい『火』が天に行き渡ると、仏は法を説く。天に行き渡っているのが激しい『火』であると、法が仏を説く」という言葉が有る。

「激しい『火』が天に行き渡ると、仏は法を説く。天に行き渡っているのが激しい『火』であると、法が仏を説く」という言葉は、真に後進の者にとっての光明である。

たとえ、「激しい『火』」に暗くても、天に行き渡って覆われれば、私に、その分け前が有るし、他のものに、この分け前が有る。

天に行き渡って覆う所の物は、既に、「激しい『火』」である。

これを嫌って、あちらを用いるのは、「どうであろう？」というしかない。

喜ぶべきである。

皮袋である日本人は、生まれた場所は聖者達から遠く離れているし、生きている今は聖者達の時代から遠く離れているといえども、天に行き渡っている化の導きが、なお聞こえるのに出会った。

仏が法を説く事は聞いた事が有るが、法が仏を説く事は何重もの無知を患(わずら)って来て知らなかった事か！

そのため、過去、現在、未来の諸仏は、過去、現在、未来で、法によって説かれているし、過去、現在、未来の諸法は、過去、現在、未来で、仏によって説かれている。

葛藤の巣に風を当てて切断する、天に行き渡っているものだけが有る。

一言は、隠れる事無く、維摩も、維摩ではないものも、明らかにしてきている。

そのため、法が仏を説くし、

法が仏を行うし、

法が仏を証するし、

仏が法を説くし、

仏が仏を行うし、

仏が仏と成る。

この様に成るのは、共に、行って(おこな)いる仏の身のこなしによる物なのである。

天地に渡っても、古今に渡っても、得た者は軽んじられないし、明らめた者は低い位の者として用いられない。

正法眼蔵　行仏威儀(行っている仏の身のこなし)

千二百四十一年、観音導利興聖宝林寺で沙門である道元が記した。

仏教

諸仏の言葉が形成されて現されたのが、仏の教えである。

仏の教えは、仏祖が仏祖のために教えているので、教えが教えのために正しく伝えているのである。

仏の教えとは、「法輪を転じる」、「法を説く」事である。

「法輪」、「説かれる法」の「眼睛」、「見る眼」の中に、諸々の仏祖を形成させて現させるし、諸々の仏祖を「般涅槃」、「完全な涅槃」、「完全な寂滅」にさせる。

諸々の仏祖には、必ず、一つの塵（ちり）の出現が有るし、

一つの塵（ちり）の「涅槃」、「寂滅」が有るし、

尽界の出現が有るし、

尽界の「涅槃」、「寂滅」が有るし、

「一須臾」、「一瞬」の出現が有るし、

「多劫海」、「極めて長い年月の海」の出現が有る。

けれども、一つの塵（ちり）や「一須臾」、「一瞬」の出現で、諸々の仏祖は、功徳を十分に備えているし、

尽界や「多劫海」、「極めて長い年月の海」の出現で、諸々の仏祖は、何も欠けていない。

このため、「朝に『成道して』、『悟って』、夕方に『涅槃する』、『肉体が死ぬ』諸仏には功徳が欠けている」と未だに言わない。

もし「一日では功徳が少ない」と言うならば、人間の八十年も長くは無い。

人間の八十年を十劫や二十劫と比べると、一日と八十年を比べたように成るだろう。

各々の仏の功徳をわきまえるのは難しい。

長い劫の寿命の量である仏が所有している功徳と、八十年の寿命の量の仏の功徳を挙げて量を比べても、激しく疑う事はできない。

このため、仏の教えとは、教えている仏なのである。仏祖が究め尽している功徳なのである。

「諸仏は『高広』、『広大』で、法の教えは狭くて小さい」というわけではない。

実に、知るべきである。

仏が大きければ教えも大きいし、仏が小さければ教えも小さい。

(仏が優れていれば教えも優れているし、仏が劣っていれば教えも劣っている。)

このため、知るべきである。

仏と教えは、「大小の量」、「優劣」ではないし、

「善性」や「悪性」や「無記性」、「善悪に分け難いもの」などの性質ではないし、

自己のためではないし、他のもののためではない。

ある人は、誤って「釈迦牟尼仏は、かつて、一代で教えの経典を説いた他に、より優れた無上の一心の法を初祖の摩訶迦葉に正しく伝えて、正統に代々伝承してきている。

そのため、教えは『赴機』、『素質に応じている』無価値な言論である。

心は『理性(りしょう)』、『法性』、『法の本性』の真実である。

正しく伝えられている一心を『教えの外の特別な奥義の心』という意味で『教外別伝』と言う。
一心は、三乗十二分教で話されている事と同じではない。
一心は無上であるので、『直指人心、見性成仏』、『(教えの経典によってではなく、)人の心を直接に指し示して、人の心の本性を見させ、仏に成らせる』と言う」と言った。

この誤った言葉は、未だ仏法の家の業ではない。

この誤った言葉には、解脱の活路が無いし、「通身」、「全身」による身のこなしが無い。

この様な言葉を言う人が、たとえ数百年後、数千年後に、「先人の達道者である」と呼ばれても、この様な言葉を言っているならば、「仏法、仏道を明らめていないし、『通じていない』、『理解していない』」と知るべきである。

なぜならば、この様な言葉を言う人は、仏、教え、心、内、外を知らないからである。

仏、教え、心、内、外を知らない理由は、かつて仏法を聞く事ができていないからである。

「諸仏」と言ってはいるが、「『本末』、『どちらが重要か、という事』が、どのような物であるか?」を知らない人や、過去から未来までの全てを学ばない人は、「仏の弟子である」と自称する事はできない。

誤って「一心だけを正しく伝えていて、仏の教えは正しく伝える必要が無い」と言う人は、仏法を知らないのである。

似非(えせ)僧侶は、仏の教えの一心を知らないし、一心の仏の教えを聞く事ができない。

誤って「一心の他に仏の教えが有る」と言う、あなたの一心は、未だ真の一心ではない。

誤って「仏の教えの他に一心が有る」と言う、あなたの仏の教えは、未だ真の仏の教えではない。

「『教外別伝』とは『教えの外の特別な奥義の心』である」という誤った説をあなたが伝えていても、あなたは未だ仏の教えの内も外も知らないので、言葉と論理が符号していない。

仏の「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を単一に伝えている仏祖は、仏の教えを単一に伝えている！

釈迦牟尼仏は、仏の家の家業で有るべきである教えと法を施(ほどこ)し設(もう)けている！

釈迦牟尼仏は、既に、単一に伝えるべき教えと法を存在させている。

全ての仏祖も、釈迦牟尼仏の単一に伝えるべき教えと法を存在させている！

このため、「無上の一心」と言うのは、三乗十二分教であるし、「小蔵と大蔵」、「声聞と独覚のための小乗の声聞蔵と、菩薩のための大乗の菩薩蔵」、「仏教の経典を二つに分けた物」、「経典」である。

知るべきである。

仏の心とは、仏の「眼睛」、「見る眼」であるし、

破れた木の柄杓(ひしゃく)であるし、

「諸法」、「全てのもの」であるし、

三界であるので、山と海と、国土と、太陽と月と星々である。

仏の教えとは、森羅万象である。

「外」とは、「這裏」、「この中」であり、「這裏来」、「この中から来る」のである。
「正しく伝えている」とは、自己から自己へ正しく伝えているので、正しく伝えている中に自己が有るのである。
一心から一心へ正しく伝えているので、正しく伝えている中に一心が有る。
無上の一心とは、土石、砂礫である。
土石、砂礫は一心であるので、土石、砂礫とは、土石、砂礫である。
もし「無上の一心を正しく伝えている」と言うならば、この様であるべきである。

けれども、「『教外別伝』とは『教えの外の特別な奥義の心』である」という誤った説を言う人は、未だ、この様な意味を知らない。
このため、「『教外別伝』とは『教えの外の特別な奥義の心』である」という誤った説を信じて、仏の教えを誤解する事なかれ。
もし、あなたが言う通り「『教外別伝』とは『教えの外の特別な奥義の心』である」ならば、「『仏の教え』とは『心外別伝』、『奥義の心の外の、別に伝えられている物』である」とでも言うのだろうか？
もし「『仏の教え』とは『心外別伝』、『奥義の心の外の、別に伝えられている物』である」と言ってしまったら、一句も半分の詩も仏の教えは伝えられなかっただろう。
もし「『仏の教え』とは『心外別伝』、『奥義の心の外の、別に伝えられている物』である」と言えないならば、「『教外別伝』とは『教えの外の特別な奥義の心』である」と言うべきではない。

初祖の摩訶迦葉は、既に釈迦牟尼仏の正統な法の子として「法蔵」、「仏の教え」、「経典」の「教主」、「祖師」である。

初祖の摩訶迦葉は、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を正しく伝えて仏道の「住持」のような者である。

それなのに、誤って「仏の教えは正しく伝えるべきではない」と言うのは、仏道を学ぶのにおける、偏(かたよ)った誤った説である。

知るべきである。

仏の教えの一句を正しく伝えれば、一つの法が正しく伝えられるのである。

仏の教えの一句を正しく伝えれば、「山」と「水」が伝えてくれる事が有る。

「不能離却這裏」、「この中を離れる事など不可能である」のである。

釈迦牟尼仏の「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」と「無上普遍正覚」は、初祖の摩訶迦葉だけに正しく伝えられたのである。

釈迦牟尼仏は、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」と「無上普遍正覚」を初祖の摩訶迦葉以外の弟子には正しく伝えていない。

釈迦牟尼仏の「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」と「無上普遍正覚」を正しく伝えている者は、初祖の摩訶迦葉だけなのである。

このため、古今の仏法の真実を学ぶ者達は、共に皆、従来の教えの中から、どれを学ぶか判断して選ぶ時には、必ず、仏祖に参入して究めるのである。

「決」、「判断」を仏祖以外には、たずねない。

もし仏祖の「正決」、「正しい判断」を得ていなければ、未だ「正決」、「正しい判断」ではないのである。

「どの教えに依るべきか？」の正しい、正しくないを判断しようと思うならば、仏祖で判断するべきである。

なぜなら、尽くの「法輪」、「説かれた法」の本からの主は仏祖であるので。

「有」、「存在」の言葉と「無」の言葉、色の言葉と空の言葉を、仏祖だけが明らめ、正しく伝えて来て、古今の仏と成っている。

ある僧は、ある時、巴陵顥鑑に「『祖意』、『祖師の心』と『教意』、『仏の教えの心』は同じでしょうか？　別でしょうか？」と質問した。

巴陵顥鑑は、「鶏は寒いと樹に上る。鴨は寒いと水に入る」と言った。

巴陵顥鑑の言葉の学に参入して、仏道の代々の祖師達に見え、仏道の教えと法を見聞きするべきである。

「『祖意』、『祖師の心』と『教意』、『仏の教えの心』は同じなのか？　別なのか？」と質問する事は、「『祖意』、『祖師の心』と『祖意』、『祖師の心』は同じなのか？　別なのか？」と質問する事に成る。

「鶏は寒いと樹に上る。鴨は寒いと水に入る」という言葉は、「同じなのか？　別なのか？」を言っていると言えるが、「同じなのか？　別なのか？」を見聞きする人に一任しているわけではない。

そのため、「同じなのか？　別なのか？　別なのか？」を論じているわけではないので、「同じなのか？　別なのか？」を「鶏は寒いと樹に上る。鴨は寒いと水に入る」という言葉から理解して取るべきである。

このため、「鶏は寒いと樹に上る。鴨は寒いと水に入る」という言葉は、「『同じなのか？　別なのか？』と質問するべきではない」と言っているような物である。

ある僧が、ある時、玄沙師備に「三乗十二分教は不要です。『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図は、どういう物でしょうか？」と質問した。

玄沙師備は、「(三乗十二分教は『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図であるので、仮に三乗十二分教が不要であるならば、)三乗十二分教は全て不要に成ってしまうだろう」と言った。

ある僧の質問の「三乗十二分教は不要です。『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図は、どういう物だろうか？」というのは、普通の人が思うように、「三乗十二分教は個々の岐路である。その他に、『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図が有るでしょう？」と質問しているのである。

ある僧は、「三乗十二分教は、『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図である」と認めていない。

まして、ある僧は、「八万四千の法の門である蘊は、『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図である」と知らない！
「どうして、三乗十二分教は全て不要に成ってしまうのか？」という学に参入して究めるべきである。
もし三乗十二分教が必要な時は、どの様な基準が存在するのか？
三乗十二分教が全て不要である所で、「祖師西来」、「達磨が西のインドから中国へ来た事」の意図の学への参入は形成されて現されるのか？
いたずらに無駄に、この質問が出現しているわけではない。
玄沙師備の「(三乗十二分教は『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図であるので、仮に三乗十二分教が不要であるならば、)三乗十二分教は全て不要に成ってしまうだろう」という言葉は、「法輪」、「説かれた法」である。
この「法輪を転じる」、「法を説く」所で、仏の教えは仏の教えに存在する事に参入して究めるべきである。
その意味とは、三乗十二分教は、仏祖の「法輪」、「説かれた法」であり、仏祖が存在する時と場所でも転じるし、仏祖がいない時と場所でも転じるし、前の祖師でも後の祖師でも同じく転じるし、さらに仏祖を転じる功徳が有る。
「祖師西来」、「達磨が西のインドから中国へ来た事」の意図が実現している時は、三乗十二分教という「法輪」、「説かれた法」は全て不要であると言える。
「三乗十二分教は全て不要であると言える」と言うのは、三乗十二分教を用いないわけではないし、三乗十二分教を破るわけではない。

「祖師西来」、「達磨が西のインドから中国へ来た事」の意図が実現している時は、三乗十二分教という「法輪」、「説かれた法」は、「全て不要であると言える」という「法輪」を転じるだけなのである。

「三乗十二分教が無い」とは言っていないのである。

「三乗十二分教は全て不要であると言える」時を見るべきである。

「『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図が実現している時は、三乗十二分教は全て不要であると言える」ので、三乗十二分教なのである。そのため、三乗十二分教というだけではないのである。

このため、玄沙師備は「(三乗十二分教は『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図であるので、仮に三乗十二分教が不要であるならば、)三乗十二分教は全て不要に成ってしまうだろう」と言ったのである。

三乗十二分教の、いくつか有る中の一隅を挙げると、次の様に成る。

三乗

(一)声聞乗

「四諦」、「四聖諦」、「四つの聖なる真理」によって「道」、「真理」を会得する。

「四諦」とは、「苦諦と集諦と滅諦と道諦」、「苦集滅道」、「この世は苦であり、執着が苦を招き集めており、執着を滅する事ができ、執着を滅する道が有る事を知る事ができる」である。

「四諦」を聞いて、「四諦」を修行すると、生老病死から解脱して、「般涅槃」、「完全な涅槃」、「完全な寂滅」を究める。

「四諦」、「苦集滅道」を修行する時に、「『苦』と『集』は劣悪な俗の物であり、『滅』と『道』は第一の真理、無上の真理である」と言うのは、経典の似非(えせ)学者の誤った見解である。

もし仏法によって修行すれば、「四諦」、「苦集滅道」は共に「仏と仏だけが能く究め尽せる、諸法の実の相」である。

「四諦」、「苦集滅道」は共に、法に住んでいる、法の位である。

「四諦」、「苦集滅道」は共に、真実の相である。

「四諦」、「苦集滅道」は共に、仏に成れる性質である。

このため、「無性」、「仏の性質が無い事」や「無作」、「ありのままである事」などを論じるには及ばない。

「四諦」、「苦集滅道」は共に、「(『四諦』は『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図であるので、仮に『四諦』が不要であるならば、)『四諦』は全て不要に成ってしまうだろう」と成るので。

(二)縁覚乗(または独覚乗)

「十二因縁」によって「般涅槃」、「完全な涅槃」、「完全な寂滅」を究める。

「十二因縁」とは、

(一)無明
(二)行
(三)識
(四)名色
(五)六入
(六)触
(七)受
(八)愛
(九)取
(十)有
(十一)生
(十二)老死
である。

「十二因縁」を修行するのに、過去、現在、未来で、「十二因縁」を各因縁に分けて、観察する、観察されるを論じるが、「十二因縁」の一つ一つの因縁を挙げて参入して究めると、「(『十二因縁』は『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図であるので、仮に『十二因縁』が不要であるならば、)『十二因縁』は全て不要に成ってしまうだろう」という「法輪が転じられる」、「法が説かれる」し「因縁」である。

知るべきである。
「十二因縁」の「無明」が一心であれば、「行」や「識」などの「十二因縁」も一心なのである。
「十二因縁」の「無明」が滅であれば、「行」や「識」などの「十二因縁」も滅なのである。
「十二因縁」の「無明」が「涅槃」、「寂滅」であれば、「行」や「識」などの「十二因縁」も「涅槃」、「寂滅」なのである。
「生も滅である」、「この世の生も死である」ので、この様に言うのである。
「十二因縁」の「無明」も言い表した一句なのであり、「識」や「名色」などの「十二因縁」も言い表した一句なのである。

知るべきである。
「無明」や「行」などの「十二因縁」は、「私には、この斧が有るので、あなたと共に山に住もう」なのである。
「無明」や「行」や「識」などの「十二因縁」は、「出発する時に和尚様に斧の許しを被り(こうむ)、斧を受け取る」なのである。

(三)菩薩乗

「六波羅蜜」で、仏の教えに従って修行して証して、無上普遍正覚を成就する。

「無上普遍正覚を成就する」とは、「造作」、「作る事」ではなく、
「無作」、「ありのままである事」ではなく、
「始起」、「始める事」ではなく、
「新成」、「新しく形成される事」ではなく、
「久成」、「久遠実成」、「果てしない昔から悟りを開いている事」ではなく、
「本行」、「本より行っている」ではなく、
「無為」、「自然のままである事」、「人為的に作られていない事」、「消滅しない不変の絶対の真理」ではなく、
ただ「無上普遍正覚を成就する」のである。

「六波羅蜜」、「六つの到達」とは、「檀(那)波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禅那波羅蜜、般若波羅蜜」、「布施の到達、持戒の到達、忍辱の到達、精進の到達、静慮の到達、知の到達」、「布施、持戒、忍辱、精進、静慮、知」である。
「布施、持戒、忍辱、精進、静慮、知」は共に、無上普遍正覚である。
「無生」、「生じない事」や「無作」、「ありのままである事」といった論理ではない。

必ずしも、布施を最初とし知を最後としない。

ある経には、「利発な菩薩は、知を最初とし布施を最後とする。愚鈍な菩薩は、布施を最初とし知を最後とする」と記されている。

けれども、忍辱も最初であるべきであるし、静慮も最初であるべきである。
「六波羅蜜」による三十六通りが形成されて現されるべきである。
鳥かごから鳥かごを得るのである。

「波羅蜜」とは「(この世から仏土という)彼岸への到達」などを意味する。
「(仏土という)彼岸」は古くからの様子や行跡ではないが、「到達」は形成されて現されるし、手がかりである。
「修行が(仏土という)彼岸へ至(って修行は不要に成)るだろう」と思う事なかれ。
(仏土という)彼岸に修行が有るので、修行すれば(仏土という)彼岸へ到達するのである。
修行は、必ず、遍界が形成されて現される力量を十分に備えているので。

十二分教または十二部経

(一)修多羅または契経
如来、釈迦牟尼仏が、生者の為に直接的に「陰界入」、「『五陰』、『五蘊』と十八界と十二入」、「色受想行識と、眼耳鼻舌身意と色声香味触法と眼(識)耳(識)鼻(識)舌(識)身(識)意識と、眼耳鼻舌身意と色声香味触法」など

の「仮」、「実体が無い『この世』のもの」と「実」、「実体」の法を説いたのを、修多羅と名づける。

(二)祇夜または重頌
四、五、六、七、八、九の言葉の詩で、くり返し、世界と「陰」、「五陰」、「五蘊」と「入」、「十二入」などの事を説いたのを、祇夜と名づける。

(三)和伽羅那または授記
直接的に全ての生者の未来の事を記したり、鳩（はと）や雀が仏に成る事を記したりしたのを、和伽羅那と名づける。

(四)伽陀または諷頌
「孤起偈」、「散文を伴わない韻文での教え」で、世界と「陰」、「五陰」、「五蘊」と「入」、「十二入」などの事を説いたのを、伽陀と名づける。

(五)優陀那または無問自説
人から質問される事無しに、自ら世界の事を説いたのを、優陀那と名づける。

(六)尼陀那または因縁
世界の善くない事を要約して禁戒を結論したのを、尼陀那と名づける。

(七)阿波陀那または譬喩

例えで世界の事を説いたのを、阿波陀那と名づける。

(八)伊帝曰多伽または本事

「本の昔」、「前世」の世界の事を説いたのを、伊帝曰多伽と名づける。

(九)闍陀伽または本生

「本の昔」、「前世」の生を釈迦牟尼仏が受けた時の事を説いたのを、闍陀伽と名づける。

(十)毘仏略または方広

世界が広大である事を説いたのを、毘仏略と名づける。

(十一)阿浮陀達磨または未曾有

世界の未曾有の事を説いたのを、阿浮陀達磨と名づける。

(十二)優婆提舎または論議

世界の事を問い詰めるのを、優婆提舎と名づける。

十二分教または十二部経は、「世界悉檀」、「生者が聞こうと欲するのに応じて、分別して、正しい因縁による世界の法を説いて、世界の正しい見方を得させる事」である。

生者を喜ばせるために、十二分教または十二部経を起こしたのである。

十二分教または十二部経という名前を聞く事ができるのは稀である。

仏法が世の中に広まっている時に、十二分教または十二部経という名前を聞く事ができる。

仏法が既に滅んだ時には、十二分教または十二部経という名前を聞く事ができない。

仏法が未だ広まっていない時も、十二分教または十二部経という名前を聞く事ができない。

長く善の種を植えて仏を見る事ができる者は、十二分教または十二部経という名前を聞く事ができる。

十二分教または十二部経という名前を既に聞いた者は、遠からず、無上普遍正覚を得る事ができる。

十二分教または十二部経の各々は経と呼ばれる。

十二分教とも言うし、十二部経とも言うのである。

十二分教の各々は十二分教を十分に備えているので、百四十四分教であると言える。

十二分教の各々は十二分教を共有して含んでいるので、一分教だけであると言える。

けれども、億の前後といった数量ではない。

十二分教または十二部経は皆、仏祖の「眼睛」、「見る眼」であるし、

仏祖の「骨髄」、「理解」であるし、

仏祖の家業であるし、

仏祖の光明であるし、

仏祖の荘厳であるし、
仏祖の国土である。
十二分教または十二部経を見る事は、仏祖を見る事である。
仏祖の「道」、「真理」を理解して取る事は、十二分教または十二部経の「道」、「真理」を理解して取る事である。

そのため、三十四祖の青原の行思が「垂一足」、「片足を垂らした事」は、三乗十二分教である。
三十四祖の南嶽の懐譲の「ある物を似ている物によって説明しても、言い当てられない」という言葉は、三乗十二分教である。

玄沙師備の「(三乗十二分教は『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図であるので、仮に三乗十二分教が不要であるならば、)三乗十二分教は全て不要に成ってしまうだろう」という言葉の意味とは、この様な物なのである。
この主旨を挙げて、ひねって取ると、仏祖だけなのである。さらに半分の人もいないし、一つの物も無いし、一つの事も未だ起こらないのである。
この時、どうするのか？
「(三乗十二分教は『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図であるので、仮に三乗十二分教が不要であるならば、)三乗十二分教は全て不要に成ってしまうだろう」と言うべきである。

また、九部経という分類が有る。九分教とも言うべきである。

九部経または九分教

(一)修多羅または契経
如来、釈迦牟尼仏が、人の為に直接的に「陰界入」、「『五陰』、『五蘊』と十八界と十二入」、「色受想行識と、眼耳鼻舌身意と色声香味触法と眼(識)耳(識)鼻(識)舌(識)身(識)意識と、眼耳鼻舌身意と色声香味触法」などの「仮」、「実体が無い『この世』のもの」と「実」、「実体」の法を説いたのを、修多羅と名づける。

(二)伽陀または諷頌
「孤起偈」、「散文を伴わない韻文での教え」で、世界と「陰」、「五陰」、「五蘊」と「入」、「十二入」などの事を説いたのを、伽陀と名づける。

(三)伊帝曰多伽または本事
「本(もと)の昔」、「前世」の世界の事を説いたのを、伊帝曰多伽と名づける。

(四)闍陀伽または本生

「本の昔」、「前世」の生を釈迦牟尼仏が受けた時の事を説いたのを、闍陀伽と名づける。

(五)阿浮陀達磨または未曾有

世界の未曾有の事を説いたのを、阿浮陀達磨と名づける。

(六)尼陀那または因縁

世界の善くない事を要約して禁戒を結論したのを、尼陀那と名づける。

(七)阿波陀那または譬喩

例えで世界の事を説いたのを、阿波陀那と名づける。

(八)祇夜または重頌

四、五、六、七、八、九の言葉の詩で、くり返し、世界と「陰」、「五陰」、「五蘊」と「入」、「十二入」などの事を説いたのを、祇夜と名づける。

(九)優婆提舎または論議

世界の事を問い詰めるのを、優婆提舎と名づける。

九部経の各々は九部経を十分に備えているので、八十一部経であると言える。

九部経の各々は一部経を十分に備えているので、九部経である。

一部経へ帰る功徳が無ければ、九部経ではない。
一部経へ帰る功徳が有るので、一部経は一部経へ帰るのである。
このため、八十一部経であると言える。

九部経は、「『これ』の部経」であるし、
「私の部経」であるし、
「害虫を払うための毛がついた棒である払子の部経」であるし、
「杖の部経」であるし、
「正法眼蔵の部経」、「正しくものを見る眼の部経」である。

釈迦牟尼仏は、「私は、この九部経の法を、生者に応じて説く。九部経の法は、大乗に入る本（もと）である。そのため、この九部経を説く」と言った。

知るべきである。

「私（、釈迦牟尼仏）の、これ（、九部経）」は、如来、釈迦牟尼仏であり、釈迦牟尼仏の「面目」、「有様（ありよう）」と身心が現れて来ている。

「私（、釈迦牟尼仏）の、これ」とは、九部経の法であるし、
九部経の法とは、「私（、釈迦牟尼仏）の、これ」である。

今の一句や一つの詩は、九部経の法である。

「私（、釈迦牟尼仏）の、これ（、九部経）」であるので、「生者に応じる」のである。

そのため、一切の全ての生者の生が「この中」で生じるのは、「この九部経を説く」事である。

死が「この中」で死ぬのは、「この九部経を説く」事である。

一時の振る舞いは、「この九部経を説く」事である。

一切の全ての生者を化して導き、皆、仏道に入らせるのは、「この九部経を説く」事である。

この全ての生者とは、「私が、この九部経の法を、応じて」説く相手である。

「応じる」とは、「他のものに応じて去る」事であるし、

「自己に応じて去る」事であるし、

「生者に応じて去る」事であるし、

「生に応じて去る」事であるし、

「私に応じて去る」事であるし、

「これに応じて去る」事である。

その全ての生者とは、必ず、「私(、釈迦牟尼仏)の、これ(、九部経)」であるので、九部経の法の個々なのである。

「九部経の法は、大乗に入る本である」と言う事は、「九部経の法は、大乗を証する」と言う事であるし、

「九部経の法は、大乗を修行する」と言う事であるし、

「九部経の法は、大乗を聞く」と言う事であるし、

「九部経の法は、大乗を説く」と言う事である。

そのため、「生者は天然のまま『道』、『真理』を会得している」と言うわけではない。

九部経の法は、「道」、「真理」を会得するための一端、手がかりなのである。

「入る」のは「本」へである。

「本」とは、「頭が正しいので尾も正しい」なのである。

仏は法を説く。

法は仏を説く。

法は仏によって説かれる。

仏は法によって説かれる。

「火」は、仏を説くし、法を説く。

仏は、「火」を説くし、法は、「火」を説く。

「この九部経」を「説くため」の良い理由が有るし、「そのため説く」良い理由が有る。

「この九部経」を説かないと思っても、説かない事は不可能である。

このため、「そのため、この九部経を説く」と言うのである。

「そのため説く」とは、「天に行き渡る」事である。

「天に行き渡る」とは、「そのため説く」事である。

各々の仏は共に、「この九部経」と単一に呼ぶし、自分の世界も他の世界も共に、「この九部経」を「そのため説く」。

このため、「この九部経を説く」のであるし、「この九部経」は、仏の教えである。

知るべきである。

「恒沙」、「恒河沙」、「無数」の仏の教えは、修行者を打って戒める竹の細長い板である竹箆や害虫を払うための毛がついた棒である払子である。

仏の教えが「恒沙」、「恒河沙」、「無数」であるのは、杖や「拳頭」、「拳」である。

知るべきである。

三乗十二分教などは、仏祖の「眼睛」、「見る眼」である。

仏祖の「眼睛」、「見る眼」を開眼していない者が、どうして、仏祖の法の子孫であろうか？　いいえ！

仏祖の「眼睛」、「見る眼」をひねって取って来ない者が、どうして、仏祖の「正眼」、「正しい見識」を単一に伝えられているだろうか？　いいえ！

「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を体得していない者は、過去七仏の法を嗣いでいる者ではない。

正法眼蔵　仏教

時に、千二百四十一年、雍州の興聖精舎にいて僧達に話した。

大悟

仏から仏への大いなる道は、伝えられて、綿密である。

祖師から祖師への「功業」、「功績」は、現れて、平坦で広々としている。

このため、「大悟」、「大いなる悟り」は形成されて現されるし、

「不悟」、「知らずに」、道に至るし、

「省悟」、「反省して悪い所や不十分な所を悟る」し、「弄悟」、悟りを弄(ろう)するし、

「失悟」、「悟りを離れて」、通過する。

これが、仏祖の日常である。

悟りを挙げて、ひねって取って、使う事ができ得る一日が有るし、

悟りを離れて、使われる一日が有る。

さらに、悟りという「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」を超越する、泥の塊(かたまり)を弄(ろう)する事も有るし、精魂を弄(ろう)する事も有る。

（「泥の塊」は「無価値なもの」や「人の肉体」を意味する場合が有る。）

「大いなる悟りによって、仏祖は、必ず、この様に形成されて現される」という学への参入を究めるが、大いなる悟りを揮(ふる)って、仏祖としている訳ではないし、

仏祖が仏祖を揮(ふる)っているのを、大いなる悟りを揮(ふる)っている、としている訳ではない。

仏祖は、大いなる悟りという(暫定的な)限界を超越しているし、

大いなる悟りとは、仏祖という(暫定的な)限界を向上して超越している「面目」、「有様(ありよう)」なのである。

人の素質には多くの種類が有る。

(一)「生知」(、「生まれながらにして知っている」人)

「生まれながらにして知っている」人は、生まれながらにして生を「透脱している」、「透体脱落している」、「煩悩を透過して脱ぎ落としている」。

生の最初も中間も最後も体得して究めるのである。

(二)「学而知」(、「学んで知る」人)

「学んで知る」人は、学んで自己を究める。

学の「皮肉骨髄」、「理解」を体得して究めるのである。

(三)「仏知者」

「仏知者」は、「生まれながらにして知っている」人でもないし、「学んで知る」人でもない。

自分や他のものという限界を超越して、「この中」で端(はし)が無く、自分や他のものの知に、とらわれないのである。

(四)「無師知者」

「無師知者」は、善知識を持つ人々の善知識によらず、経典によらず、性質によらず、相によらず、自己を動かさず転じず、他のものとの相互関係によらず、堂々と現れるのである。

これら、人の素質の数種類のうち、ある種類の者を利発と認め、別の種類の者を愚鈍と認める、訳ではないのである。

人の素質の多くの種類は、共に、多くの種類の「功業」、「功績」を形成して現すのである。

そのため、どの、情の有る者も、情が無いものも、「生知」、「生まれながらにして知っている」ものである、として学に参入するべきである。

「生知」、「生まれながらにして知っている」事が有れば、「生悟」、「生まれながらにして悟っている」事が有るし、「生証明」、「生まれながらにして証明している」事が有るし、「生修行」、「生まれながらにして修行している」事が有る。

そのため、仏祖が既に「調御丈夫」、「生者を素質などに応じて悟らせる者」であるのを「生悟」、「生まれながらにして悟っている」と呼んで来ている。

仏祖の生は悟りをひねって取って来ている生であるので、仏祖を「生悟」、「生まれながらにして悟っている」と呼ぶのである。

仏祖は、大いなる悟りを十分に会得している、「生悟」、「生まれながらにして悟っている」者なのである。

悟りをひねって学んでいるので、仏祖は、大いなる悟りを十分に会得しているのである。

このため、仏祖は、三界をひねって大いに悟るし、百草をひねって大いに悟るし、(地水火風という)四大(元素)をひねって大いに悟るし、仏祖をひねって大いに悟るし、「公案」、「修行者に考えさせるための話」をひねって大いに悟る。

仏祖は皆、共に、大いなる悟りをひねって取って来て、さらに大いに悟るのである。
大いに悟る時は、今なのである。

慧照大師と呼ばれる臨済義玄は、「中国の中で、一人の『悟らない者』、『悟る事ができない者』を探し求めても得るのは難しいのである」と言った。

臨済義玄の言葉は、正統に伝えられて来ている「皮肉骨髄」、「理解」であり、正しい。
「中国の中」と言うのは、自己の「眼睛」、「見る眼」の中であるし、尽界とは無関係であるし、
「塵刹」、「塵の様に無数の国土が有る俗世」に留まらない。
「『この中』で、一人の悟る事ができない者を探し求めても得るのは難しいのである」。
自己の昨日の自己も悟る事ができない者ではないし、他人の今日の自己も悟る事ができない者ではない。
「山」の人や「水」の人が、古今に、悟る事ができない者を探し求めても未だ得る事ができない。
この様に、臨済義玄の言葉の学に参入する学徒は、虚しく時間を過ごすべきではない。
さらに、代々の祖師達の考えの学に参入するべきである。
次の様に、臨済義玄に質問するべきである。

「悟る事ができない者を得るのは難しい事だけを知っていて、悟っている者を得るのは難しい事を知らないのは、正しいとするには未だ不足が有るし、悟る事ができない者を得るのは難しい事に参入して究めているとは言い難い。たとえ一人の悟る事ができない者を探し求めても得るのは難しくても、半人前の悟っていない者がいて、『面目』、『有様(ありよう)』がゆったりとして静かであり、堂々としているのを見た事が有るのか？　未だ無いのか？」

「中国の中で、一人の悟る事ができない者を探し求めても得るのは難しい」事を究極とする事なかれ。

一人の悟る事ができない者や半人前の悟っていない者の中に、二、三個の中国を探し求めるのを試みるべきである。得るのは難しいか否か？

この「眼目」、「見る眼」を備えた時、「十分に会得している仏祖である」と認めるべきである。

ある僧が、ある時、(三十八祖の洞山良价の法を嗣(つ)いだ)京兆の華厳寺の宝智大師と呼ばれる華厳の休静に、「奥底まで大いに悟った人が、逆に迷った時は、どう成るのでしょうか？」と質問した。

華厳の休静は、「破れた鏡が元に戻って元の様に照らす事は無いし、散り落ちた華が元に戻って樹に上る事は無い」と言った。

華厳の休静達の問答は、問答だが、僧達に示して話すのに似ている。

華厳の休静の会でなければ開演しなかった。

華厳の休静が三十八祖の洞山良价の正統な法の子でなければ、授ける事ができなかった。

実に、華厳の休静の会は、十分に会得している仏祖の会である。

「奥底まで大いに悟った人」は、「本(もと)から大いに悟っている」のではないし、「自分の外で大いに悟って蓄えている」のではない。

大いなる悟りは、公共の物であるのを、最後の老年に見え(まみ)る、という物ではない。

自己から強引に引き出して来るわけではないが、(大いに悟る者は)必ず大いに悟るのである。

迷わない事を大いなる悟りとするわけではない。

大いなる悟りの種を撒(ま)くために迷っている者に成ろうとするべきではない。

大いに悟っている人が更に大いに悟る事が有るし、

大いに迷っている人が大いに悟る事が有る。

大いに悟っている人がいる様に、

大いに悟っている仏がいるし、

大いに悟っている地水火風と空(くう)が有るし、

大いに悟っている寺の円柱と灯籠が有る。

ある僧は華厳の休静に「奥底まで大いに悟った人」について質問した。

「奥底まで大いに悟った人が、逆に迷った時は、どう成るのか?」という質問は、実に、質問するべき事を質問したのである。

華厳の休静が嫌わずに寺で古代を慕って答えたのは、仏祖の「勲業」、「功業」、「功績」である。

鍛錬するべきである。

「奥底まで大いに悟った人が、逆に迷った時は」、奥底まで悟っていない人と同じだろうか？
「奥底まで大いに悟った人が、逆に迷った時は」、大いなる悟りをひねって取ってきて迷いを作ったのか？
他のどこかの中から迷いをひねって取って来て、大いなる悟りを覆って、「逆に迷った」のか？
一人の「奥底まで大いに悟った人が」、大いなる悟りは破らないで、別に、「逆に迷った」のか？
「奥底まで大いに悟った人が、逆に迷った」と言うのは、更に一枚の大いなる悟りをひねって取って来る事を「逆に迷った」としているのか？
この様に、あれこれと参入して究めるべきである。
また、大いなる悟りは一方の手であり、「逆に迷う」のは他方の手であるのか？
ともかく、「奥底まで大いに悟った人が逆に迷う事が有る」と聴いて理解して取る事が、徹底的に参入して究めて来ている事である、と知るべきである。
「逆に迷う」のを近づける大いなる悟りが有る、と知るべきである。
そのため、賊を認めて子となすのを「逆に迷う」とするわけではないし、子を認めて賊となすのを「逆に迷う」とするわけではない。
賊を認めて賊となすのが大いなる悟りである。
子を認めて子となすのが「逆に迷う」事である。
多い所に少し付け加えるのを「大いなる悟り」とする。
少ない所から少し減らすのが「逆に迷う」事である。

このため、「逆に迷う」者を探り当てて、とらえると、「奥底まで大いに悟った人」に出会う。

今の自己が、「逆に迷っている」のか？　迷っていないのか？　点検して詳細に調べるべきである。

「今の自己が、『逆に迷っている』のか？　迷っていないのか？」調べる事を、仏祖の所に行って仏祖に見(まみ)える事とする。

華厳の休静は、「破れた鏡が元に戻って元の様に照らす事は無いし、散り落ちた華が元に戻って樹に上る事は無い」と言った。

「破れた鏡が元に戻って元の様に照らす事は無いし、散り落ちた華が元に戻って樹に上る事は無い」という言葉は、鏡が破れた時を言っているのである。

それなのに、鏡が未だ破れていない時を想像して「破れた鏡が元に戻って元の様に照らす事は無い」という言葉の学に参入するのは正しくない。どういう事かと言うと、

華厳の休静の「破れた鏡が元に戻って元の様に照らす事は無いし、散り落ちた華が元に戻って樹に上る事は無い」という言葉の意味は、「奥底まで大いに悟った人は、破れた鏡が元に戻らないように、散り落ちた華が元に戻らないように、元の迷いに戻る事は無い」、「奥底まで大いに悟った人が逆に迷う事は無い」という意味であると誤解してしまうかもしれない。

けれども、この様な誤った意味であるとして、学に参入してはいけない。

もし人が誤解した通りならば、「奥底まで大いに悟った人の日常とは、どの様な物か？」と質問するべきであったし、「逆に迷う時が有る」と答えただろう。

しかし、この話は、そうではないのである。

「奥底まで大いに悟った人が、逆に迷った時は、どう成るのか？」と質問しているので、「逆に迷った時」を質問しているのである。

「逆に迷った時」の言葉が形成されて現されたのが、「破れた鏡が元に戻って元の様に照らす事は無いし、散り落ちた華が元に戻って樹に上る事は無い」なのである。

華が散り落ちた時は、「百尺の竿の先」、「極致」に昇っても、散り落ちた華である。

鏡が破れた時なので、いくつかの手段が形成されて現されても、元に戻って元の様に照らす事は無い。

「破れた鏡」と言ったり、「散り落ちた華」と言ったりしている意味をひねって取って来て、「奥底まで大いに悟った人が、逆に迷った時」の学に参入して理解して取るべきである。

誤って「大いに悟るとは仏に成るような物であるし、『逆に迷う』とは仏ではない生者のような物であるし、『仏は、この世に帰還して仏ではない生者と成る』と言うし、『従本垂迹』、『本地垂迹』、『仏は、この世に化身を現す』と言う」といったように学ぶべきではない。

「仏は大いなる覚を破って仏ではない生者と成る」といったように誤って言う人がいる。しかし、

華厳の休静達は、「大いなる悟りが破られる」と言わなかったし、「大いなる悟りが失われた」と言わなかったし、「迷いが来た」と言わなかった。

華厳の休静達を「仏は大いなる覚を破って仏ではない生者と成る」といったように誤って言う人と同一視してはいけない。

実に、「大いなる悟り」は端が無いし、「逆に迷う」事は端が無い。

（「大いなる悟り」は始まりも終わりも無いし、「逆に迷う」事は始まりも終わりも無い。）

大いなる悟りを遮る迷いは無い。

大いなる悟りを三枚ひねって取って来て、矮小な迷いを半枚つくるのである。

これによって、雪山は雪山のために大いに悟る事が有るし、

木や石は、木や石を借りて大いに悟る。

諸仏の大いなる悟りは全ての生者のために大いに悟る。

全ての生者の大いなる悟りは諸仏の大いなる悟りを大いに悟る。

前後は無関係である。

今の大いなる悟りは、自己の物ではないし、

他の者の物ではないし、

来たわけではないが、「溝を埋めて塞ぐ」のであるし、

去るわけではないが、「他のものに従って探し求める事を切に忌み嫌う」のである。どうして、そうなのか？　「他のものに従って去る」からである。

京兆米胡は、ある僧に仰山の慧寂に「今の人も、また悟りを借りるか否か？」と質問させた。
仰山の慧寂は、「悟りは、無いわけではないが、一つ下の位に落ちるのをどうしようか？」と言った。
僧が帰って京兆米胡に仰山の慧寂の言葉を挙げると、京兆米胡は、深く、うなずいた。

「今」とは、人々の今である。
「私に過去、現在、未来を記憶させても」、私に過去、現在、未来を思わせるのが何千万回であっても、「今」であるし、今である。
人の分け前は、必ず、「今」なのである。
「眼睛」、「見る眼」を「今」とする事が有るし、
「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔（あな）」を「今」とする事が有る。

「また悟りを借りるか否か？」。
「また悟りを借りるか否か？」という言葉に静かに参入して究めて、心にも換えるべきであるし、「頂上」にも換えるべきである。
千二百四十年頃の中国の似非（えせ）僧侶などは「『道』、『真理』を悟るのを本（もと）から待ち望んでいる」と言って、いたずらに無駄に、悟りを待ち望んでしまう。

悟りを待ち望んでしまうのは、仏祖の光明に照らされていないような物である。

悟りを待ち望んでしまう人は、ただ、真の善知識を持つ人の所に行って理解して取るべきであるのを、怠惰に見過ごしてしまう。

悟りを待ち望んでしまう人は、古代の仏が「この世」に出現しても、解脱できない。

「また悟りを借りるか否か？」という言葉は、「悟りは無い」と言っておらず、

「悟りは有る」と言っておらず、

「悟りが来た」と言っておらず、

「悟りを借りるか否か？」と言っている。

「今の人が悟る時は、どの様にして悟るのか？」と言うような物である。

例えば、「悟りを得た」と言ってしまうと、「日頃は、悟りは無かったのか？」と思ってしまう。

「悟りが来た」と言ってしまうと、「日頃は、悟りは、どこに有ったのか？」と思ってしまう。

「悟りに成った」と言ってしまうと、「悟りには始まりが有る」と思ってしまう。

この様には言わないし、この様には成らない。

悟りの有様（ありよう）を言う時には、「悟りを借りるか？」と言うのである。

それにもかかわらず、「悟りが、一つ下の位に落ちるのをどうしようか？」と言っているのは、「『一つ下の位』も悟りである」と言っているのである。

「『一つ下の位』も悟りである」と言うのは、「悟りに成った」と言っているのか？　「悟りを得た」と言っているのか？

「悟りが来た」と言っているような物であるし、「『悟りに成った』と言うのも、『悟りが来た』と言うのも、悟りである」と言っているのである。

そのため、「悟りが、一つ下の位に落ちる」事を嘆き悲しみながらも、「一つ下の位」を無くすような物である。

「悟りが成った『一つ下の位』もまた、真に、『一つ下の位』の悟りである」とも思われる。

このため、たとえ「一つ下の位」であっても、百、千の無数の下の位であっても、悟りである。

「一つ下の位」が有っても、「一つ上の位」が有った事を残せるわけではない。

例えば、昨日の私を私として、昨日の私が今日の私を「一つ下の位の人」と言うような物に成ってしまう。

「今の悟りが昨日は無かった」と言わない。なぜなら、「悟りを今、始めた」わけではないからである。

この様に、悟りの学に参入して理解して取るのである。

そのため、大いなる悟りという「位」は黒かったり白かったりする。

正法眼蔵　大悟

その時、千二百四十二年、観音導利院興聖宝林寺に住んでいて僧達に示した。

千二百四十四年、越宇の吉峰古寺に滞在して書き、人や天人や僧達に示した。

仏向上事

筠州の洞山の悟本大師と呼ばれる三十八祖の洞山良价は、潭州の雲巌山の無住大師と呼ばれる三十七祖の雲巌曇晟の親しい正統な弟子である。如来、釈迦牟尼仏から(三十八祖の洞山良价までは)三十八人の祖師達の向上である。

自己から向上の三十八人の祖師達である。

洞山良价は、ある時、僧達に示して、「仏の向上の事を体得して、少し話が有る」と言った。

ある僧が、「話とは、どの様な物でしょうか？」と質問した。

洞山良价は、「話す時、あなたは、聞かない」と言った。

ある僧は、「和尚様、洞山良价様は、聞くのですか？」と言った。

洞山良价は、「私が話さない時を待って聞く」と言った。

「仏の向上の事」という言葉は、洞山良价が初めて言った。

他の仏祖は、洞山良价の言葉の学に参入して来て仏の向上の事を体得するのである。

実に、知るべきである。

仏の向上の事とは、「在因」、「修行中」の事ではないし、「果満」、「修行の結果としての悟りの完成」ではない。

けれども、「話す時は、聞かない」事を体得して徹底的に参入する事が有るのである。

仏の向上に到達しなければ、仏の向上を体得する事は無い。

話さなければ、仏の向上の事を体得できない。

話す事は、仏の向上の事を現すわけではないし、隠すわけではないし、与えるわけではないし、奪うわけではない。

このため、話が形成されて現された時、話とは、仏の向上の事なのである。

仏の向上の事が形成されて現された時、「あなたは、聞かない」のである。

「あなたは、聞かない」と言うのは、仏の向上の事が自ら聞かないのである。

既に、「話す時、あなたは、聞かない」のである。

知るべきである。

話は、聞かれても汚染されないし、聞かれなくても汚染されない。

このため、話は、聞かれる事や聞かれない事とは無関係なのである。

聞かない中に、あなたがいるのである。

話す中に、あなたがいても、「人に出会っても人に出会わない」し、「これは、これではない」のである。

あなたが話す時、あなたは、聞かないのである。

「聞かない」という言葉の主旨は、舌骨に遮（さえぎ）られて聞かないのであるし、耳の中に遮（さえぎ）られて聞かないのであるし、「眼睛」、「見る眼」に照らされて見通されて聞かないのであるし、身心に塞（ふさ）がれて聞かないのである。

この様であるので聞かないのである。

これらをひねって更に話とするべきではない。

聞かないと、話と成らない。
話す時は、聞かないだけなのである。
洞山良价の「話す時、あなたは、聞かない」という言葉は、話の頭を言ったり尾を言ったりする事が、(葛)藤の様に(葛)藤に寄りかかっていても、話が話にまといつくだろうし、話に遮(さえぎ)られる。

ある僧は、「和尚、洞山良价は、聞くのですか?」と言った。
「和尚、洞山良价は、聞くのか?」という言葉は、和尚、洞山良价を挙げて「和尚、洞山良价が話を聞く」と思っているわけではないし、「聞く」のを挙げて「和尚、洞山良价が話を聞く」と思っているわけではない。話ではないので。
ある僧は、「『話す時に聞く』学に参入するべきか否か?」と洞山良价に質問しているのである。
例えば、「『話』とは話であるのか?」と聞いて理解して取ろうと思っているし、「『聞く』とは聞く事であるのか?」と聞いて理解して取ろうと思っているのである。
しかも、この様に言っていても、あなたの「舌先」、「言葉」ではない。

洞山良价の「私が話さない時を待って聞く」という言葉に明らかに参入して究めるべきである。
「話す時」は、「聞く」わけではない。
「聞く」のが形成されて現されるのは、「話さない時」なのである。
いたずらに無駄に、「話さない時」を差し置いて、「話さない」のを待ち望むわけではないのである。

「聞く」時、「話」を無関係な物とするわけではない。「聞く」時、「話」を無関係な物としてしまうと、「話」は、真に無関係な物と成ってしまうので。

「聞く」時、「話」を離れて、反対の、どこかの中に存在して、聞いて取るわけではない。

「話す時」、「聞く」事は、親しく話の「眼睛」、「見る眼」の中に身を隠していて、雷鳴の様に突然に現れるわけではない。

そのため、たとえ、あなたでも、「話す時」は「聞かない」のである。

たとえ、私でも、「話さない時」は「聞く」のである。

これが、「少し話が有る」なのである。

これが、「仏の向上の事を体得した」なのである。

例えば、「『話す時、聞く』のを体得した」のである。

このため、「私が話さない時を待って聞く」なのである。

けれども、仏の向上の事とは、過去七仏以前の事ではなく、過去七仏の向上の事なのである。

洞山良价は、僧達に示して、「仏の向上の人がいる事を知るべきである」と言った。

ある僧は、その時、「仏の向上の人とは、どの様な者なのですか？」と質問した。

洞山良价は、「仏ではない」と言った。

雲門文偃は、「名づける事ができ得ないし、様子を説明でき得ないので、(洞山良价は)『仏ではない』と言ったのである」と言った。

保福従展は、「仏非」、「(仏の向上の人とは、)仏が仏ではない仮の姿をとった者である」と言った。

大法眼禅師と呼ばれる清涼文益は、「(仏の向上の人を)方便で仏と呼んで仏となしている」と言った。

仏祖を向上している仏祖であるのは、三十八祖の洞山良价である。なぜなら、その他の仏祖の面々は多いが、「仏の向上」という言葉は未だ夢にも見ていないからである。

徳山宣鑑や臨済義玄などのために説いても受け継いで会得できない。巌頭全奯や雪峰義存などは身が粉砕しても拳をくらって目覚める事ができない。

洞山良价の「仏の向上の事を体得して、少し話が有る」や「仏の向上の人がいる事を知るべきである」といった言葉は、一、二、三、四、五の「三阿僧祇劫」と「百大劫」の修行と証だけでは、証し究める事ができない。(仏に成るには「三阿僧祇劫」と「百大劫」という長い年月がかかると言う場合が有る。)

まさに、奥深い道の学に参入している者は、洞山良价の「仏の向上の事を体得して、少し話が有る」や「仏の向上の人がいる事を知るべきである」といった言葉を証する素質が有る。

仏の向上の人がいると知るべきである。

「仏の向上の人がいると知るべきである」と言うのは、精魂を弄(ろう)する手段なのである。

けれども、古代の仏を挙げて、(仏の向上の人を)知るし、「拳頭」、「拳」をかかげて、(仏の向上の人を)知る。

既に、この様に、「見得」、「会得」するような者は、仏の向上の人がいる事を知るし、(人と仏の身心を脱ぎ落としているので)仏の向上の人がいない(と言える)事を知る。

洞山良价が僧達に示して言った「仏の向上の人がいる事を知るべきである」という言葉の意味は、「仏の向上の人に成るべきである」という訳ではなく、

「仏の向上の人に見(まみ)えるべきである」という訳ではなく、

「ただ、暫(しばら)く、仏の向上の人がいると知るべきである」という意味なのである。

「仏の向上の人がいると知るべきである」という「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」を使う事ができ得るような者は、(人と仏の身心を脱ぎ落としているので、)仏の向上の人がいる事を知らない(と言える)し、仏の向上の人がいない事を知らない(と言える)。

仏の向上の人とは、仏ではない。

「どうして、仏の向上の人とは、仏ではないのか?」と激しく疑う時は、思い量(はか)るべきである。

「仏の向上の人とは、仏より前の者であるので、仏ではない」と言う訳ではなく、
「仏の向上の人とは、仏より後の者であるので、仏ではない」と言う訳ではなく、
「仏の向上の人とは、仏を超越するので、仏ではない」と言う訳ではなく、
ただ、ひとえに、「仏の向上の人とは、仏の向上であるので、仏ではない」のである。
「仏の向上の人とは、仏ではない」と言うのは、「仏の向上の人とは、仏の『面目』、『有様（ありよう）』を脱ぎ落としているので、仏ではない」と言うのであるし、「仏の向上の人とは、仏の身心を脱ぎ落としているので、仏ではない」と言うのである。

東京（トンキン）の、(四十五祖の芙蓉道楷の法を嗣いだ、)枯木禅師と呼ばれる浄因の法成は、僧達に示して、「仏祖の向上の事が有る事を知ったので、話が有る。
皆、『仏祖の向上の事とは、どの様な物なのか？』、言いなさい。
ある家に幼子が一人いて、『眼耳鼻舌身意』という『六根』を備えていないし、『第七識』も不全であるし、大いに『一闡提』、『仏法を信じない者』であるし、仏と成る種である性質が無い。
仏に出会っても、殺したかの様に、仏であるという意識が無いし、祖師に出会っても、殺したかの様に、祖師であるという意識が無い。
天上も収める事ができ得ないし、地獄も収める門が無い。
あなた達は、このような人を理解できるか？」と言って、少ししてから、
「あなた達が、対面しているのは、『仙陀婆』ではない。

私は、たくさん眠って、寝言が多かったようである」と言った。
(「仙陀婆」という言葉には「塩」、「器」、「水」、「馬」という四つの意味が有り、どの意味で相手が「仙陀婆」という言葉を使っているか理解する必要が有った。)

「『眼耳鼻舌身意』という『六根』を備えていない」と言うのは、「眼睛被人換却木槵子了也」、「人によって『眼睛』が木槵子に換えられた」し、
(木槵子の果実の種は数珠に用いられる。)
「鼻孔被人換却竹筒了也」、「人によって『(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)』が竹の筒(つつ)に換えられた」し、
「髑髏被人借作屎杓了也」、「人によって頭蓋骨が排泄物を汲(く)み取る柄杓(ひしゃく)と為(な)された」が、
「作麼生是換却底道理」、「『換えられた』、『為(な)された』奥底の道理とは、どの様な物か?」。
このため、「『眼耳鼻舌身意』という『六根』を備えていない」のである。
備えていないのが「眼耳鼻舌身意」という「六根」であるので、鞴(ふいご)の中を透過して金属の仏像と成るし、
大海の中を透過して泥の仏像と成るし、
火の中を透過して木の仏像と成る。

「『第七識』も不全である」と言うのは、破れた木の柄杓(ひしゃく)である。
殺したかの様に、仏であるという意識が無いが、仏に出会う。
仏に出会ったので、殺したかの様に、仏であるという意識が無い。

天上に入ろうと思えば、天上が崩壊するし、地獄に向かえば、地獄が突然に破裂する。

このため、浄因の法成は対面すれば破顔(微笑)し、さらに「仙陀婆」は無い。

（「仙陀婆」という言葉には「塩」、「器」、「水」、「馬」という四つの意味が有り、どの意味で相手が「仙陀婆」という言葉を使っているか理解する必要が有った。）

浄因の法成は、たくさん眠っていてもなお、寝言が多かった。知るべきである。

この道理は、「挙山市地両知己」、「全ての山と、遍く地は、両方共、自己を知っている」し、「玉石全身百雑砕」、「宝玉も石も、全身が、『全てのものが木っ端微塵に成る』」のである。

浄因の法成の言葉に静かに参入して究める鍛錬をするべきである。軽率にする事なかれ。

雲居山の弘覚大師と呼ばれる三十九祖の雲居道膺は、三十八祖の洞山良价の所に行った。

洞山良价は、「あなたの名前は何ですか?」と質問した。

雲居道膺は、「雲居道膺です」と言った。

洞山良价は、「向上して更に言いなさい」と質問した。

雲居道膺は、「向上して言えば、雲居道膺と名づけない」と言った。

洞山良价は、「私、洞山良价が三十七祖の雲巌曇晟の所にいた時に答えた答えと同じである」と言った。

洞山良价と雲居道膺、師弟の言葉を、必ず、明確に詳細にするべきである。
「向上して雲居道膺と名づけない」とは、雲居道膺の向上なのである。
向上した時の雲居道膺には、「向上して雲居道膺と名づけない」物が有る事の学に参入するべきである。
「向上して雲居道膺と名づけない」道理が形成されて現されてからが、真の雲居道膺なのである。
けれども、「向上しても雲居道膺である」と言う事なかれ。
洞山良价の「向上して更に言いなさい」という言葉を聞いた時、話についての理解を表すために、たとえ「向上して更に雲居道膺と名づける」と言い表したとしても、向上の言葉なのである。
なぜ、「たとえ『向上して更に雲居道膺と名づける』と言ったとしても、向上の言葉なのである」と言うのか？
雲居道膺が突然に頂上に飛び込んで身を隠すからである。
ただし、雲居道膺は身を隠しても影を現しているのである。

曹山本寂は、三十八祖の洞山良价の所に行った。
洞山良价は、「あなたの名前は何ですか？」と質問した。
曹山本寂は、「曹山本寂です」と言った。
洞山良价は、「向上して更に言いなさい」と質問した。

曹山本寂は、「言いません」と言った。
洞山良价は、「なぜ言わないのですか？」と言った。
曹山本寂は、「曹山本寂と名づけないからです」と言った。
洞山良价は、うなずいた。

向上に言葉が無いわけではないが、言わないのである。
なぜ言わないのか？　例えば、曹山本寂と名づけないからである。
そのため、向上の言葉は言わないのであるし、向上を言わないのは名づけないからである。
例えば、「曹山本寂と名づけない」のは、向上の言葉なのである。
このため、曹山本寂は名づけないのである。
そのため、曹山本寂ではないものがあるし、名づけないのを脱ぎ落とす事が有るし、曹山本寂を脱ぎ落とす事が有る。

盤山宝積は、「向上の一路は、諸々の聖者は伝えない」と言った。

「向上の一路」とは、盤山宝積だけの言葉である。
盤山宝積は、「向上の事」と言わず、「向上の人」と言わず、「向上の一路」と言うのである。
「向上の一路は、諸々の聖者は伝えない」という言葉の主旨は、「諸々の聖者は、競って現れても、向上の一路は伝えない」という意味なのである。

「伝えない」と言うのは、諸々の聖者は「伝える事ができない」分を保護しているのである。

この様にも学ぶべきである。

さらに、言うべき所が有る。

諸々の聖者や賢者がいないわけではないが、たとえ聖者や賢者であっても、向上の一路は聖者や賢者の範囲に留まらない。

ある僧が、ある時、智門山の、智門の光祚に「仏の向上の事とは、どの様な物なのですか？」と質問した。

智門の光祚は、「（仏の向上の事とは、）杖の頭上に太陽と月をかかげる（ような物である）」と言った。

杖が太陽と月に遮（さえぎ）られるようなのが、仏の向上の事なのである。

太陽と月が杖の学に参入する時、「乾坤」、「天地」の尽（ことごと）くが暗く成るようなのが、仏の向上の事なのである。

太陽と月が杖であるという訳ではない。

杖の頭上とは、全ての杖の上である。

天皇寺の、天皇道悟は、無際大師と呼ばれる三十五祖の石頭希遷の会で、「仏法の大意とは、どの様な物なのですか？」と質問した。

石頭希遷は、「不得、不知」、「(仏法の大意とは、厳密には、)『会得』、『理解』できない物であるし、『知る』事はできない物である」と言った。

天皇道悟は、「向上には更に(心を)転じる所が有りますか？　無いですか？」と言った。

石頭希遷は、「大空は白い雲が飛ぶのを妨(さまた)げない」と言った。

三十五祖の石頭希遷は、三十三祖の大鑑禅師の法の孫である。

天皇道悟は、三十六祖の薬山惟儼の兄弟弟子である。

天皇道悟は、ある時、「仏法の大意とは、どの様な物なのか？」と質問した。

「仏法の大意とは、どの様な物なのか？」という質問は、初心者や後進の者は耐える事ができない質問である。

仏法の大意を聞けば会得できる時に、「仏法の大意とは、どの様な物なのか？」と言うのである。

石頭希遷は、「不得、不知」、「(仏法の大意とは、厳密には、)『会得』、『理解』できない物であるし、『知る』事はできない物である」と言った。

知るべきである。

仏法は、最初の一念にも大意が有るし、究極の位にも大意が有る。

仏法の大意は、「不得」、「(厳密には、)理解できない物である」。

「発心、修行、取得」、「思い立って心する事、修行、証の取得」が無いわけではないが、「不得」、「(厳密には、)理解できない物である」。

仏法の大意は、「不知」、「(厳密には、)『知る』事はできない物である」。

修行と証は、無ではなく、「有」、「存在」ではなく、「不知」、「(厳密には、)『知る』事はできない物である」し、「不得」、「(厳密には、)理解できない物である」。

仏法の大意は、「不得、不知」、「(厳密には、)理解できない物であるし、『知る』事はできない物である」。

「聖諦」、「神聖な真理」と、修行と証が無いわけではないが、「不得、不知」、「(厳密には、)理解できない物であるし、『知る』事はできない物である」。

「聖諦」、「神聖な真理」と、修行と証は、有るだけではなく、「不得、不知」、「(厳密には、)理解できない物であるし、『知る』事はできない物である」。

天皇道悟は、「向上には更に(心を)転じる所が有るのか？　無いのか？」と言った。

もし(心を)転じる所が形成されて現される事があれば、向上が形成されて現される。

(心を)転じる所とは「方便」、「手段」であり、「方便」、「手段」とは諸仏であるし諸々の祖師である。

これを言葉にすると、「更に有るのか？」と成る。

たとえ、更に有っても、更に無い事を漏らすべきではない。言葉にできるべきである。

「大空は白い雲が飛ぶのを妨げない」と言うのは、石頭希遷の言葉である。
大空は更に大空を妨げない。
大空は大空が飛ぶのを妨げないが、更に白い雲は自ら白い雲を妨げない。
白い雲が飛ぶのが妨げない。
白い雲が飛ぶのが大空が飛ぶのを妨げない。

他のものを妨げないものは自らをも妨げない。
各々が妨げない事を必要とするわけではない。
各々が妨げない事を保持しているわけではない。
このため、妨げないのである。

「大空は白い雲が飛ぶのを妨げない」性質と相を挙げて、ひねっているのである。
「大空は白い雲が飛ぶのを妨げない」性質と相を挙げて、ひねっている時、「大空は白い雲が飛ぶのを妨げない」学に参入する眼の眉を揚げて、仏が来るのをも見るし、祖師が来るのをも見るし、自己が来るのをも見るし、他のものが来るのをも見る。
これを一つを質問されて十を答える道理とする。
一つを質問されて十を答える時、一つを質問されるのも、達道者であるし、十を答えるのも、達道者である。

黄檗希運は、「出家した人には、『従上来事』、『仏から仏へ、祖師から祖師へ、正しく伝えられて来ている、従来の事』の分が有る事を知るべきで

ある。三十一祖の道信の弟子の牛頭法融は、縦横無尽に説いたけれども、向上の『関梙』、『ぜんまい』、『からくり仕掛け』、『原動力』をなお未だ知らない。向上の眼と脳が有って初めて、善悪の主と仲間をわきまえる事ができ得る」と言った。

黄檗希運の言葉の「従上来事」とは、「従来、仏から仏へ、祖師から祖師へ、正しく伝えられて来ている事」である。

「従来、仏から仏へ、祖師から祖師へ、正しく伝えられて来ている事」を「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼を持ち寂滅した妙なる心を持つ事」と言う。

「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼を持ち寂滅した妙なる心を持つ事」は、自己に有っても知るべきであるし、自己に有ってもなお未だ知らないのである。

「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼を持ち寂滅した妙なる心を持つ事」は、仏から仏へ正しく伝えられていなければ、夢にも未だ見る事ができなかったのである。

黄檗希運は、百丈の懐海の法の子として百丈の懐海よりも優れているし、馬祖道一の法の孫として馬祖道一よりも優れている。

代々の祖師達のうち、三、四代の間、黄檗希運に肩を並べる祖師はいない。黄檗希運だけが、牛頭(法融)に角が無い事を明らめたのである。他の仏祖は未だ知らないのである。

牛頭山の牛頭法融は、三十一祖の道信の弟子である、高徳の長老の僧である。

牛頭法融は、縦横無尽に説いた事、実に、西のインドから東の地の中国の、経典の似非（えせ）学者どもと比べる事はできないが、残念ながら、向上の「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」を未だ知らなかったし、言葉にできなかった。

もし「従上来」、「従来、仏から仏へ、祖師から祖師へ、正しく伝えられて来ている事」の「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」を知らなければ、どうして仏法の善悪をわきまえ会得する事ができるだろうか？　いいえ！

もし「従上来」、「従来、仏から仏へ、祖師から祖師へ、正しく伝えられて来ている事」の「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」を知らなければ、ただ、言語を学んでいる人と成ってしまうだけである。

そのため、向上の「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」を知る事、修行する事、証する事は、凡人が及（およ）べる所ではない。

真の鍛錬が有る所では、必ず、向上が形成されて現されるのである。

「仏の向上の事」とは、仏に到達して、進んで更に仏を見る事なのである。生者が仏を見るのと同様であるが、仏を見る事が、生者が仏を見る事と全く同じであれば、仏を見る事ではないのである。

仏を見る事が、生者が仏を見る事と全く同じであれば、仏を見る事を誤っているのである。

まして、仏を見る事が、生者が仏を見る事と全く同じであれば、仏の向上の事であると言えるだろうか？　いいえ！

知るべきである。

黄檗希運の言葉の「向上」の事は、今の杜撰(ずさん)な輩は理解して見通す事などできない。

仏法の教えの理解が牛頭法融に及(およ)ばない者がいたり、仏法の教えの理解が牛頭法融に等しい者がいたりしても、牛頭法融の法の兄弟でしかなく、どうして向上の「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」を知っているだろうか？　いいえ！

他の、未熟な修行者なども向上の「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」を全く知らないのである。

まして、向上の「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」を開閉できるだろうか？　いいえ！

向上の主旨は、学への参入の眼目である。

向上の「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」を知る人を、仏の向上の人とするのである。

向上の「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」を知る人は、仏の向上の事を体得しているのである。

その時、千二百四十二年、観音導利興聖宝林寺にいて僧達に示した。

恁麼

雲居山の弘覚大師と呼ばれる三十九祖の雲居道膺は、三十八祖の洞山良价の正統な弟子である。

三十九祖の雲居道膺は、釈迦牟尼仏から三十九代目の法の子孫である。

雲居道膺は、洞山良价の流れを汲(く)む正統な祖師である。

雲居道膺は、ある日、僧達に示して、「恁麼の事を会得したいと欲する人は、恁麼の人なのである。既に恁麼の人であるので、どうして恁麼の事を憂(うれ)うだろうか？　いいえ！」、「無上普遍正覚を一途に会得したいと欲する人は、無上普遍正覚に一途な人なのである。既に無上普遍正覚に一途な人であるので、どうして無上普遍正覚が無い事を憂(うれ)うだろうか？　いいえ！」と言った。

「恁麼の事を会得したいと思う人は、恁麼の人なのである。既に恁麼の人であるので、どうして恁麼の事を憂(うれ)うだろうか？　いいえ！」という言葉の主旨は、無上普遍正覚に一途である事を暫定的に「恁麼」と言っているのである。

無上普遍正覚の有様(ありよう)とは、尽十方界も無上普遍正覚にとっては少しの物でしかないのである。

無上普遍正覚は尽界よりも余り有る。

私達は、尽十方界の中に有る日常の器具である。

何によって無上普遍正覚が有ると知るのか？

身と心が共に尽界に現れて、自分の物ではないから、無上普遍正覚が有ると知るのである。

身は既に自分の物ではない。

命は時間に移されて一時も留める事ができない。

若い血色の良い顔は、どこかへか去ってしまい、探そうとしても跡が無い。

よくよく観察すると、過去と同様の事には再び巡り会えない事が多い。

真心も留まらず、途切れ途切れに行き来する。

たとえ真実が有っても、私の近くに留まる物ではない。

この様であるのに、きっかけが無くても無上普遍正覚を求める事を思い立って心する者がいる。

無上普遍正覚を求める心が起こってから、従来、弄(もてあそ)んでいたものを投げ捨てて、未だ聞いていない物を聞きたいと願い、未だ証していない物を証したいと求めるのは、ひとえに、自分が原因であるだけではない。

知るべきである。

無上普遍正覚に一途な人であるので、そう成るのである。

何によって無上普遍正覚に一途な人であると知るのか？

無上普遍正覚を一途に会得したいと思う事によって、無上普遍正覚に一途な人であると知るのである。

既に無上普遍正覚に一途な人である「面目」、「有様(ありよう)」が有るので、今、無上普遍正覚が無い事を憂(うれ)うべきではない。

無上普遍正覚が無い事を憂うのも無上普遍正覚に一途な事であるので、憂いではないのである。

また、無上普遍正覚に一途な事とは、無上普遍正覚が無い事を憂う事であるのも驚くべきではない。

たとえ驚き疑う事ができる無上普遍正覚への一途が有っても、無上普遍正覚への一途なのである。

驚くべきではないと言われる無上普遍正覚への一途が有るのである。

無上普遍正覚への一途は、仏の量で量る事ができないし、

心の量で量る事ができないし、

法界の量で量る事ができないし、

尽界の量で量る事ができない。

ただ、まさに、「既に無上普遍正覚に一途な人であるので、どうして無上普遍正覚が無い事を憂うだろうか？　いいえ！」なのである。

このため、音声や色形による無上普遍正覚への一途は無上普遍正覚への一途であるし、

身心による無上普遍正覚への一途は無上普遍正覚への一途であるし、

諸仏の無上普遍正覚への一途は無上普遍正覚への一途である。

例えば、「ある者が地によって倒れた時」を無上普遍正覚への一途であると「会得」、「理解」すると、「必ず地によって起きる」のが無上普遍正覚への一途である時、「地によって倒れる」事を疑わないのである。

昔から言われて来ている、西のインドから言われて来ている、天上から言われて来ている言葉が有る。

「もし地によって倒れた時は、また地によって起きる。地を離れて起きようと求める者には、終に、この理が無いであろう」

「もし地によって倒れた時は、また地によって起きる。地を離れて起きようと求める者には、終に、この理が無いであろう」という言葉の意味は、「地によって倒れる者は必ず地によって起きる。地によらずに起きようと求める者は起きる事ができ得ない」と成る。

この言葉を挙げて、ひねって、大いなる悟りを会得する橋とするし、身心をも脱ぎ落とす道とする。

このため、もし「諸仏が仏と成る事ができた道理とは、どの様な物であるのか？」と質問されたら、「地によって倒れた者は、地によって起きるような物である」と言う。

この言葉に参入して究めて、従来をも「透脱する」、「透体脱落する」、「煩悩を透過して脱ぎ落とす」べきであるし、最後をも「透脱する」、「透体脱落する」、「煩悩を透過して脱ぎ落とす」べきであるし、今をも「透脱する」、「透体脱落する」、「煩悩を透過して脱ぎ落とす」べきである。

大いに悟っても悟らなくても、迷っても迷わなくても、悟りに妨げられても迷いに妨げられても、共に、地によって倒れる者は地によって起きるのが、道理なのである。

これが、天上と天下の「道」、「真理」の「会得」、「理解」であるし、

西のインドと東の地である中国の「道」、「真理」の「会得」、「理解」であるし、

古今の「道」、「真理」の「会得」、「理解」であるし、

古代の仏と新しい仏の「道」、「真理」の「会得」、「理解」である。

この「道」、「真理」の「会得」、「理解」には、未だ尽していない物は無いし、欠けている物は無い。

けれども、この様にだけ理解して、更に他の様に理解しないのは、「もし地によって倒れた時は、また地によって起きる。地を離れて起きようと求める者には、終に、この理が無いであろう」という言葉に参入して究めていないような物である。

たとえ古代の仏が言い得た「もし地によって倒れた時は、また地によって起きる。地を離れて起きようと求める者には、終に、この理が無いであろう」という言葉が、この様に伝わっていても、更に古代の仏と等しい者として古代の仏の言葉を聞いた時に、向上して聞く事が有るべきである。

未だ、西のインドで言われていなくても、天上で言われていなくても、更に言い表すべき道理が有るのである。

「地によって倒れた者が、もし地によって起きようと求めたら、無量劫を経ても、起きる事ができない」

ある活路によって起きる事ができ得るのである。

「地によって倒れる者は、必ず、空によって起きるし、空によって倒れる者は、必ず、地によって起きる」

もし、この様でなければ、終(つい)に起きる事はできない。

諸仏、諸々の祖師は、皆、この様であったのである。

もし、ある人が「地と空は、どれだけ離れているのか？」と質問したら、

「地と空は、『十万八千里』離れている」と言うべきである。

「もし地によって倒れた時は、必ず、空によって起きる。

空を離れて起きようと求める者には、終(つい)に、この理が無いであろう。

もし空によって倒れた時は、必ず、地によって起きる。

地を離れて起きようと求める者には、終(つい)に、この理が無いであろう」

もし、未だ、この様に「道」、「真理」を理解して取っていない者は、仏道での地と空の量を未だ知らないし、未だ見ていないのである。

十七祖の僧伽難提は、ある時、建物に掛けてある鐘状の鈴が風に吹かれて鳴るのを聞いて、後の十八祖の伽耶舎多に「風が鳴るとするのか？　鈴が鳴るとするのか？」と質問した。

伽耶舎多は、「風が鳴るのではなく、鈴が鳴るのではなく、自分の心が鳴るのである」と言った。

僧伽難提は、「心とは何か？」と言った。

伽耶舎多は、「(全てのものは)共に、『寂静』、『涅槃』、『寂滅』であるので(、心は『寂静』、『涅槃』、『寂滅』である)」と言った。

僧伽難提は、「善きかな、善きかな。私の道を継ぐ事ができるのは、あなた、伽耶舎多だけである！」と言った。

終(つい)に、僧伽難提は、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を伽耶舎多に伝えて付属させた。

これは、風が鳴るのではない所で、自分の心が鳴るのを学ぶのであるし、鈴の成るのではない時に、自分の心が鳴るのを学ぶのである。

たとえ、この様であっても、自分の心が鳴るのは、全てのものと共に「寂静」、「涅槃」、「寂滅」である。

西のインドから東の地の中国に伝わり、古代から今日に至るまで、僧伽難提と伽耶舎多の話を仏道を学び修行する手本としているが、誤る輩が多い。

「伽耶舎多の言葉の『風が鳴るのではなく、鈴が鳴るのではなく、自分の心が鳴るのである』と言うのは、鳴っているのを聞いた時に、『鳴っている

のを聞いた』という思いが起こるが、『鳴っているのを聞いた』という思いを『心』と言っているのである。
もし『鳴っているのを聞いた』という思い、『心』が無ければ、どうして『鳴っている』という結果が起きただろうか？　『鳴っているのを聞いた』という思い、『心』が有るので、『鳴っている』という結果が起きた！『聞いた』という思いによって、『聞く』事が成就するため、『聞く』事の根本と言えるので、伽耶舎多は『心が鳴るのである』と言ったのである」というのは誤った理解である。

正しい師の力を会得していないので、この様に誤って理解するのである。例えば、サンスクリット語の複合語の解釈である「六合釈」の「依主釈」や「隣近釈」を論じる経典の似非（えせ）学者の誤った解釈のような物である。

この様な誤った理解は、仏道の奥深い学ではない。

仏道の正統な法の子孫に学んで来ていると、「無上普遍正覚」や「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を、「寂静」、「涅槃」、「寂滅」と言うし、「無為」、「自然のままである事」、「人為的に作られていない事」、「消滅しない不変の絶対の真理」と言うし、
「三昧」、「定」、「静慮」と言うし、
「陀羅尼」、「真理の保持」と言う道理は、わずかに、一つの法が「寂静」、「涅槃」、「寂滅」であれば、「万法」、「全てのもの」も共に「寂静」、「涅槃」、「寂滅」であるからである。

風が吹くのが「寂静」、「涅槃」、「寂滅」であれば、鈴が鳴るのも「寂静」、「涅槃」、「寂滅」であるのである。

このため、伽耶舎多は、「(全てのものは)共に、『寂静』、『涅槃』、『寂滅』であるので(、心は『寂静』、『涅槃』、『寂滅』である)」と言ったのである。

「心が鳴るのは風が鳴るからではないし、心が鳴るのは鈴が鳴るからではないし、心が鳴るのは心が鳴るからではない」と「道」、「真理」を理解して取るのである。

身近な物が、この様であるのをわきまえ究めるよりは、更に、ただ、「風が鳴っているのであるし、鈴が鳴っているのであるし、鳴っている物が鳴っている」とも言うべきである。

「どうして恁麼の事を憂うだろうか？　いいえ！」であるので、「風が鳴っているのであるし、鈴が鳴っているのである」と言うべきであるのではなく、「どうして恁麼の事に関わるだろうか？　いいえ！」であるので、「風が鳴っているのであるし、鈴が鳴っているのである」と言うべきであるのである。

三十三祖の大鑑禅師が未だ出家していない時に広州の法性寺に泊まっていた際に、二人の僧が(風が幡を動かしているのを見て)議論していた。

ある僧は、「幡が動いている」と言った。

別の僧は、「風が動いている」と言った。

この様に、二人の僧の議論が平行して止まらなかった。その時、大鑑禅師は、「風が動いているのでもなく、幡が動いているのでもなく、あなた達の心が動いているだけである」と言った。

二人の僧は、大鑑禅師の言葉を聞いて速やかに信じて受け入れた。
二人の僧は、西のインドから来ていた。

誤って「大鑑禅師が『風が動いているのでもなく、幡が動いているのでもなく、あなた達の心が動いているだけである』と言い表したのは、大鑑禅師が『風も、幡も、動いているのも、共に、心によってである』と『道』、『真理』を理解して取ったからである」と言う人は、大鑑禅師の言葉を聞いても、大鑑禅師の言葉の意味を知らないのである。まして大鑑禅師の会得した「道」、「真理」を理解して取る事ができ得るだろうか？　いいえ！

私、道元は、どうして、この様に言うのか？

なぜなら、「あなた達の心が動いているだけである」という言葉を聞いて、「あなた達の心が動いているだけである」という意味として「あなた達の心が動いているだけである」という言葉を理解して取る人は、大鑑禅師を見ていないし、知らないし、大鑑禅師の法の子孫ではない。

大鑑禅師の法の子孫として、大鑑禅師の「道」、「真理」を理解して取るためには、大鑑禅師の身体髪膚を会得して理解して取るためには、次の様に言うべきである。

「あなた達の心が動いているだけであるし、さらに、あなた達が動いている」と言うべきである。

どうして、この様に言うのか？

なぜなら、「動いている者が動いているので、あなた達は、あなた達である」からである。

既に、この様な人であるので、この様に言うのである。

三十三祖の大鑑禅師は、昔は、新州の木こりであり、山をも究めていたし、水をも究めていた。

大鑑禅師は、昔は、たとえ生い茂っている松の下で鍛錬して根源を裁断したとしても、どうして、明るい窓辺で落ち着いて、心を照らす古代の教えが有ると知ったのだろうか？

大鑑禅師は、雪を払い除ける操(みさお)、意思の堅固さを、誰に習ったのか？

大鑑禅師は、市場で経を聞いたが、自ら待ち望んだわけでもないし、他人が勧(すす)めたわけでもない。

大鑑禅師は、幼い時に父を亡くし、成長してからは母を養っていた。

大鑑禅師は、自分の「衣の裏に掛けられていた一粒の宝玉」が「乾坤」、「天地」を照らし破る事を知らなかった。

大鑑禅師が(市場で経を聞いて)突然に悟り、老いた母を(泣く泣く)捨てて善知識を持つ人をたずねたのは、「人の世」、「この世」で稀(まれ)な事である。

誰にとっても恩愛は軽くない！

大鑑禅師は、法を重んじるがゆえに恩愛を(泣く泣く)軽んじて恩を(泣く泣く)捨てたのである。

大鑑禅師の話は、「法華経」の「薬草喩品」の「有智若聞、即能信解」、「知が有る者は、もし(法の要を)聞けば、能(よ)く信じて理解する」という道理なのである。

知は、他人に学ぶ物ではないし、自ら(新たに)起こす物ではない。

知は能く知に伝わるし、知が知をたずねるのである。

(経の朗読を聞いていたために焼け死んだが人に生まれ変わった)「五百の蝙蝠」は、知自体が身を作った。

(知のほかに、)さらに身は無いし、心は無い。

(水が干上がって死にかけていた時に経を聞いて三十三天に生まれ変わる事ができた)「金光明最勝王経」の「長者子流水品」の「十千魚」、「無数の魚」は、知が親しく身に有るので、縁が無くても、原因が無くても、仏法を聞いて理解したのである。

知は、来るわけではないし、入ってくるわけではない。

例えば、「東君」、「春」が春に出会うような物である。

知は「有念」、「意識」ではない。

知は「無念」、「無意識」ではない。

知は「有心」、「心」ではない。

知は「無心」ではない。

まして、知は「大小」、「優劣」と無関係である！

まして、知は迷いや悟りの論理ではない！

なぜなら、「仏法は、どう在る事か？」と知らなくて、仏法を以前から聞いて理解して取っていなくて、慕わなくても、願わなくても、仏法を聞くと、恩を(泣く泣く)軽んじ身を惜しむのを忘れるのは、知が有る身心が既に自分の物ではないので、そうさせるのである。これを「即能信解」、「能く信じて理解する」と言うのである。

知を持ちながら、いたずらである無駄である煩悩の中で、何周の生死をまわったのか知らない。

石が宝玉を内包しているが、宝玉も石に内包されていると知らないし、石も宝玉を内包していると知らないような物である。

人が、宝玉を内包している石を知り、取るのは、宝玉も石も待ち望んでいたわけではないし、宝玉の思量による物ではないし、石の知見による物ではない。

人と知が互いに知らなくても、知は必ず「道」、「真理」を聞くような物である。

「無智疑怪、即為永失」、「知が無い者は、(法の要を)疑い怪しむために、長く失う」という言葉が有る。

知は、必ずしも、「有」、「存在」ではないし、無ではないが、一時の、春でも松は常緑であるという志を変えない操(みさお)が有る「有」、「存在」が有るし、秋には菊の花が最も秀でて美しい無が有る。

一時の無知の時、無上普遍正覚を皆、疑い怪しんでしまうし、尽諸法を皆、疑い怪しんでしまう。

この時、「疑い怪しむために、長く失う」のである。

聞くべき仏道も、証するべき仏法も、疑い怪しんでしまうのである。

自分の物ではないが、遍界は「最初」から隠れていない。

誰の物でもないが、万里は一個の鉄である。

たとえ疑い怪しんで枝を伸ばしても、「十方の仏土の中には、ただ一乗の法だけが有る」。

たとえ疑い怪しんで葉を落としても、「この法は法の位に住んでいて、世間の相は常に不変で住んでいる」。

既に、この様な事であるので、知が有る事と、知が無い事は、日面と月面である。

この様な人であるので、三十三祖の大鑑禅師も悟ったのである。

後の三十三祖の大鑑禅師は、黄梅山に行って、大満禅師と呼ばれる三十二祖の弘忍を礼拝すると、寺の雑務を行う在俗者である「行者(あんじゃ)」として身を投じた。

大鑑禅師が昼夜、米をついて、わずか八か月を経た時の、ある夜更けに、弘忍は、自ら密(ひそ)かに米つき場に行って、大鑑禅師に「米は白く成りましたか？　未だですか？」と質問した。

大鑑禅師は「米は白く成りましたが、未だ篩(ふるい)にかけていません」と言った。

弘忍が杖で臼(うす)を三回たたくと、大鑑禅師は穀物から殻(から)やゴミを篩(ふる)い分ける農具である「箕」に米を入れて三回、篩(ふる)い分けた。

この時、弘忍と大鑑禅師、師弟は仏道に適ったと言われている。

自らも知らなくても、他の者も理解できなくても、この時、弘忍から大鑑禅師へ仏法が伝えられたのである。

三十六祖の薬山惟儼は、ある時、南嶽山の無際大師と呼ばれる三十五祖の石頭希遷に「私、薬山惟儼は、三乗十二分教を粗方(あらかた)、知っています。かつて聞いた南方の『直指人心、見性成仏』、『人の心を直接に指し示して、人の心の本性を見させ、仏に成らせる』事については未だ明らめていません。伏

して願わくば、和尚様、石頭希遷様、慈悲をもって指し示してください」と質問した。

これが薬山惟儼の質問である。
薬山惟儼は本(もと)は講者であった。
薬山惟儼は、三乗十二分教には良く通じていた。
そのため、薬山惟儼は、仏法には暗くなかったようである。
昔は仏教は宗派に分かれておらず、ただ三乗十二分教を明らめるのを仏教の教義と学の家風としていた。
今の人の多くは最悪に愚鈍で各宗派の主旨を立てて仏法を量(はか)るが、仏道の法ではない。

石頭希遷は「(『直指人心、見性成仏』、『人の心を直接に指し示して、人の心の本性を見させ、仏に成らせる』なんて、)そんな物など会得できない。(そんな事を言うようでは、三乗十二分教という、)そうではない物も会得できていないのです。(『直指人心、見性成仏』も、三乗十二分教も、)そんな物も、そうではない物も全て会得できていないのです。あなた、薬山惟儼は、どう思いますか?」と言った。

これが、石頭希遷による薬山惟儼のためにした言葉である。

実に「(『直指人心、見性成仏』も、三乗十二分教も、)そんな物も、そうではない物も会得できていない」ので、(「直指人心、見性成仏」、「人の心を直接に指し示して、人の心の本性を見させ、仏に成らせる」なんて、)そんな物など会得できないし、(三乗十二分教という、)そうではない物も会得できていないのである。

原文の「恁麼」は「直指人心、見性成仏」、「人の心を直接に指し示して、人の心の本性を見させ、仏に成らせる」事を言っているのである。

「恁麼」を、有限の物を言うのに用いるだけではないし、無限の物を言うのに用いるわけではない。

「直指人心、見性成仏」、「人の心を直接に指し示して、人の心の本性を見させ、仏に成らせる」なんて「会得できない」として学に参入するべきである。

「直指人心、見性成仏」、「人の心を直接に指し示して、人の心の本性を見させ、仏に成らせる」事に「会得できないのは、なぜか？」質問するべきである。

「直指人心、見性成仏」、「人の心を直接に指し示して、人の心の本性を見させ、仏に成らせる」なんて「会得できない」のは、仏の量とは無関係である。

「直指人心、見性成仏」、「人の心を直接に指し示して、人の心の本性を見させ、仏に成らせる」なんて「会得できない」し「悟れない」のである。

曹谿山の三十三祖の大鑑禅師は、ある時、大慧禅師と呼ばれる三十四祖の南嶽の懐譲に示して、「何ものかが、どの様にかして来ている」と言った。

「どの様にかして来ている」のは疑う事ができないのである。理解できないため。「何ものか」であるので。

実に、必ず、万物は「何ものか」であるとして学に参入して究めるべきである。

実に、必ず、一つの物は「何ものか」であるとして学に参入して究めるべきである。

「何ものか」は激しく疑う事ができないのである。「どの様にかして来ている」のである。

正法眼蔵　恁麼

その時、千二百四十二年、観音導利興聖宝林寺にいて僧達に示した。

海印三昧

諸々の仏祖が諸々の仏祖として存在するのは、必ず、海印三昧によってである。

海印三昧という海を泳ぐ時には、説いている時が有るし、証している時が有るし、行（おこな）っている時が有る。

海印三昧という海の上を行く功徳には、徹底して行く事が有る。

徹底して行く事を、深々と海底を行くのであるとして、海印三昧という海の上を行くのである。

「生死を流浪するのを源に帰還させようと願い求める」というような心の動きだけではない。

従来の「遮（さえぎ）る入口である関（せき）を透過し、固定観念を破る」のが、諸々の仏祖の面々であるが、海印三昧という海に合流する事による物である。

仏は、「ただ全ての物によって、この身は合成されている。
この身が起こる時は、ただ法が起こるのである。
この身が滅ぶ時は、ただ法が滅ぶのである。
この法が起こる時、私が起こるとは言わない。
この法が滅ぶ時、私が滅ぶとは言わない。
前の念と後の念は、無関係である。
前の法と後の法は、無関係である。
これを海印三昧と名づける」と言った。

この仏の言葉の学に詳しく参入して鍛錬するべきである。

道を会得して証に入るには、必ずしも、多く聞く事によらないし、多くの言葉によらないのである。

多く聞き広く学んでいた人が一つの詩によって道を会得する事が有るし、恒河沙のように無数に遍（あまね）く学んでいた人が詩の一句によって証に入る事が有る。

まして、この仏の言葉は、「本覚」、「本（もと）からの覚」を前提条件として求めないし、「始覚」、「思い立って心して、修行して、初めて迷いから覚めて悟りを開く事」を証の中で、ひねって取って来ない。

「本覚」などを形成させて現させるのは仏祖の功徳であるが、「本覚」や「始覚」などの諸々の覚を仏祖とするわけではない。

海印三昧の時は、「ただ全ての物による」時であるし、「ただ全ての物による」道の会得である。

海印三昧の時、「この身は合成されている」と言うのである。

「全ての物」が「合成している」、一つの合わさった相が、「この身」なのである。

「この身」が一つの合わさった相としているわけではない。「全ての物」が「(この身を)合成している」のである。

「『合成されている、この身』が『この身』である」と道を会得しているのである。

「この身が起こる時は、ただ法が起こるのである」。
「この法が起こる時」、「起こる事」を残していない。
このため、「起こる事」は知覚できないし、知見できない。
「起こる事」は知覚できないし、知見できないのを「(この法が起こる時、)私が起こるとは言わない」と言うのである。
「(この法が起こる時、)私が起こるとは言わない」時に、別の人は「この法が起こる」と見聞きしたり覚知したり思量分別したりできるわけではない。

さらに向上して見る時、まさに、見る事を脱ぎ落とす機会が有るのである。

「起こる」のには必ず時が到来するのである。時は「起こる事」なので。
「起こる」とは何か？
「起こる」とは「起こる事」である。
「起こる」とは、既に時である「起こる事」なのであり、「皮肉骨髄」、「理解」を独(ひと)りでに現す。
「起こる」とは、「合成されて、起こる」ので、「この身が起こる」である、「私が起こる」である、「ただ全ての物による物」なのである。
音声や色形として見聞きできるだけではなく、「私が起こる、全ての物」であるし、「言わない、私が起こる」のである。
「言わない」とは「言えない」のではない。会得、理解した「道」、「真理」は「言う事ができ得る」(、「言い表せる」)わけではないので。
「起こる時」とは、「この法」であり、一日だけではない。
「この法」とは、「起こる時」であり、三界が競って起こるだけではない。

古代の仏は「突然に火が起こる」と言った。

無関係に「起こる」事を「(突然に)火が起こる」と言っているのである。

古代の仏と等しい人は「起こる事と滅ぶ事が止まない時は、どうするのか？」と言った。

そのため、「起こる事と滅ぶ事」は、私の「私が起こる事」であるし、私の「私が滅ぶ事」であるのに、「止まない」のである。

「起こる事と滅ぶ事」が「止まない」道を理解して取るには、「起こる事と滅ぶ事」に一任して、わきまえ受け入れるべきである。

「起こる事と滅ぶ事が止まない時」を仏祖の命として断続させるのである。

「『起こる事と滅ぶ事が止まない時』は、誰が起こったり滅んだりするのか？」なのである。

「『起こる事と滅ぶ事が止まない時』は、誰が起こったり滅んだりするのか？」と言えば、

「応に、この身によって『得度するべき』、『(仏土へ)渡すべき』者には、この身を現して、その者の為に法を説く」のであるし、

「過去心不可得」、「過去の心を得る事は不可能」であるし、

「あなたは私の髄を得た」、「あなたは私の骨を得た」(、「あなたは私を会得した」)である。

「『起こる事と滅ぶ事が止まない時』は、誰が起こったり滅んだりするのか？」なので。

「この法が滅ぶ時、私が滅ぶとは言わない」。

「私が滅ぶとは言わない」時は、「この法が滅ぶ時」である。

滅ぶとは法が滅ぶのである。

滅ぶといえども、法なのである。

滅ぶとは、法であるので、「客塵」、「外から来る煩悩」ではない。

滅ぶとは、「客塵」、「外から来る煩悩」ではないので、汚染されない。

汚染されない者が、諸々の仏祖なのである。

「(ただ、諸仏は汚染されない事を護ろうと念頭に置いているのである。)あなたもまた、そうである」と言われているが、「あなた」と言われていない者が誰かいるであろうか？　いいえ！

「前の念と後の念」が有る者は皆、「(ただ、諸仏は汚染されない事を護ろうと念頭に置いているのである。)あなたもまた、そうである」と言われている者なのである。

「(ただ、諸仏は汚染されない事を護ろうと念頭に置いているのである。)私も、またそうである」と言われているが、「私」と言われていない者が誰かいるであろうか？　いいえ！

「前の念と後の念」は皆、「私」の物であるので。

滅ぶ事に、多くの種類の、千手観音の眼が有る手を荘厳している。

滅ぶ事とは、無上の大いなる「涅槃」、「寂滅」であるし、
「死と呼ばれる物」であるし、
「執為断」、「執着しても断たれる事」であるし、
「住む所と為す事」なのである。

この様な多くの種類の、千手観音の眼が有る手は、しかしながら、滅ぶ事の功徳なのである。

滅ぶのが私である時に「(私が滅ぶとは)言わない事」と、起こるのが私である時に「(私が起こるとは)言わない事」は、「言わない事」が同じく生じても、同じく死ぬ事を「言わない」わけではない。

既に、「前の法」が滅ぶのであるし、「後の法」が滅ぶのである。
法の「前の念」であるし、法の「後の念」である。
法と為す前後の法であるし、法と為す前後の念である。
「無関係である」のは法と為すのであるし、「無関係である」のは法が為すのである。

「無関係」にさせるのは、八、九割の未熟な、道の会得である。

滅ぶ事の「四大(元素)」と「『色受想行識』という『五蘊』」を、千手観音の眼が有る手とする、ひねって取ったり手中に収めたりする事が有る。
滅ぶ事の「四大(元素)」と「『色受想行識』という『五蘊』」を、行程とする、進歩したり見えたりする事が有る。

この時、「(千手観音は、)『通身』、『全身』が、千手観音の眼が有る手なのである」と言っても「また、不足である」なのであるし、
「(千手観音は、)『遍身』、『体中』が、千手観音の眼が有る手なのである」と言っても「また、不足である」なのである。

滅ぶ事は仏祖の功徳なのである。

「無関係である」と言うが、知るべきである、「無関係である」と言うのは、「起きている」のが「最初も中間も最後も」、「起きている」事なのである。

「官には針も容れないが、私には車や馬を通す」、「公的には針も容れないが、私的には車や馬を通す」なのである。

「滅ぶ事」は、「最初も中間も最後も」、「無関係」である。

従来、滅ぶ所で、突然に法が起こっても、滅ぶ事が起きたわけではなく、法が起きたのである。法が起きたので、無関係なのである。

また、ある滅びと別の滅びは無関係である。

滅んでいる時も「最初も中間も最後も」滅んでいるのである。

「相逢不拈出、挙意便知有」、「出会っていても、ひねり出せないが、心に挙げれば、有る事を知る」のである。

従来、起きている所で、突然に滅んでも、起きていた事が滅んだわけではなく、法が滅んだのである。法が滅んだので、無関係なのである。

たとえ起こる事や滅ぶ事が無関係であっても、全ての物を海印三昧と名づけるのである。

無関係である事の修行と証は無いわけではないが、汚染されない事を海印三昧と名づけるのである。

三昧とは、形成されて現される物であるし、

「道」、「真理」の会得なのであるし、

背中で手で枕（まくら）を模索する夜間なのである。

三昧として夜間に背中で手で枕を模索するが、枕の模索は、億や億万の無数の劫だけではなく、「私は海中で、ただ常に妙なる法華経を説く」なのである。

「私が起こるとは言わない」ので、「私は海中で法華経を説く」のである。

「前面」も「一つの波が、わずかに動けば、万の無数の波が従う」ように「ただ常に説く」のであるし、

「後面」も「万の無数の波が、わずかに動けば、一つの波が従う」ような「妙なる法華経」なのである。

たとえ千、万の無数の尺の糸、釣り糸や帯のような王の言葉を進退させても、直下に垂れている事を残念に思う。

「前面」や「後面」とは、「私が海面において」なのである。

「頭の前」や「頭の後ろ」と言うような物である。

「頭の前」や「頭の後ろ」とは、「頭の上に頭を置く」、「頭が有るのに別の頭を置こうとする」事なのである。

「海中」には、人はいない。

「私が、海において」は、この世の人が住む所ではないし、聖者が好む所ではない。

「私は、(海に)おいて」、独り「海中」にいる。

これが、「ただ常に説く」事なのである。

「海中」は、中間に属さず、内外に属さず、「鎮常在説法華経」、「安らかに常に存在して法華経を説く」のである。

東西南北にいないが、「満船空載月明帰」、「船全体は空虚に月明かりを載せて帰る」のである。

この様に、実へ帰る事は、帰って来た事(、戻った事)に成るのである。

これを、誰が「停滞した水の様子である」と言うだろうか？　いいえ！
ただ、仏道が「剤限」、「整え限る事」によって形成されて現されるだけなのである。

これを、水を象徴する「印」、「象徴」とする。
さらに言うと、空(そら)を象徴する印である。
さらに言うと、泥を象徴する印である。
水を象徴する印は、必ずしも海を象徴する印ではないが、向上すれば海を象徴する印と成る。
これを「海印」、「海の印」と言うし、水の印と言うし、泥の印と言うし、心の印と言う。
心の印を単一に伝えて、水を表すし、泥を表すし、空(そら)を表す。

ある僧が、ある時、曹山本寂に「『大海は死体を留めない』と仏の教えで言われているのを聞いた事が有ります。『海』とは、どの様な物なのですか？」と質問した。
曹山本寂は、「(『海』とは、)全ての存在を包含している(ものである)」と言った。
ある僧は、「どうして『(大海は)死体を留めない』のですか？」と言った。
曹山本寂は、「気が絶えたものは表れない」と言った。
ある僧は、「(『海』は)全ての存在を包含している(ものな)のに、どうして、『気が絶えたものは表れない』のですか？」と言った。
曹山本寂は、「万有非其功絶気」、「全ての存在は存在の功能として『気が絶えない』からである」と言った。

曹山本寂は、三十九祖の雲居道膺と兄弟弟子である。
三十八祖の洞山良价の主旨が、曹山本寂の言葉に「正的」、「正しく表れている」。

「仏の教えで言われているのを聞いた事が有る」と言うのは、仏祖の正しい教えの事であり、凡人や聖者の教えではないし、仏法に誤って付け加えられた矮小な劣悪な教えではない。

「大海は死体を留めない」。
「大海」とは、内海や外海などではないし、須弥山の周囲の「八海」などではない。
「大海」が普通の海ではない事を、学徒は疑っていない。
海ではないものを「海」と認めるだけではなく、海も「海」と認めているのである。
たとえ「海」であると強引に為して(な)いても、「大海」とは言えないのである。
「大海」は、必ずしも「八功徳水」、「甘、冷、軟、軽、清浄、不臭、飲時不損喉、飲已不傷腸の八つの功徳を備えている仏土などの水」の深淵ではないし、必ずしも塩水などの深淵ではない。
全ての物は合成されている。
「大海」は、必ずしも深淵だけであろうか？　いいえ！

このため、「『海』とは、どの様な物なのか？」と質問するのは、「大海」が未だ人や天人に知られていないので「大海」を言い表すのである。

「海」を質問する人は、「海」への執着を動揺させようとしているのである。

「(大海は)死体を留めない」と言うが、「留めない」とは、「明頭来明頭打、暗頭来暗頭打」、「利発な頭の者が来たら、それに合わせて軽く打って指導し、愚鈍な頭の者が来たら、それに合わせて軽く打って指導する」事である。

「死体」とは、「死灰」、「火が消えて冷えた灰」のような物であるし、「幾度か春に逢ったが、心を変えなかった」事である。

「死体」とは、全ての人々が未だ見た事が無い物の事なのである。

このため、知らないのである。

曹山本寂の「(『海』とは)全ての存在を包含している(ものである)」という言葉は、「海」を言い表しているのである。

主旨の「道」、「真理」を理解すると、「何か一つのものが全ての存在を包含している」と言う意味ではなく「(『海』とは)全ての存在を包含している(ものである)」と言っているのであり、「『大海』が全ての存在を包含している」と言っているわけではない。

「全ての存在を包含している」のを言い表せるのは、「大海」という言葉だけなのである。

「何ものか？」と知っているわけではないけれども、暫定的に「全ての存在(を包含しているもの)」なのである。

仏祖の面々（まみ）と見える事も、暫定的に「全ての存在」と認めるのである。

「包含されている」時は、たとえ山であっても高々と山の頂に立つだけではないし、たとえ水であっても深々と海底を行くだけではない。

「手中に収める」とは「包含している」事であるし、「手放す」とは「包含している」事なのである。

「仏性海」、「仏に成れる性質の海」と言う物も、「毘盧蔵海」、「毘盧遮那仏を包含している海」と言う物も、ただ、「全ての存在(を包含しているもの)」なのである。

海面は見えなくても、泳ぐ様子を激しく疑う事は無い。

例えば、杭州多福は、「一群の竹」という言葉を選び取って、「一、二本の竹は曲がっているし、三、四本の竹は斜めである」と言ったが、「全ての存在(を包含しているもの)」を失わせるための振る舞いであったとしても、どうして「千、万に無数に曲がっている」と未だ言わなかったのか？ どうして「千、万の無数の群れ」と言わなかったのか？

杭州多福の「一群の竹」が「全ての存在(を包含しているもの)」である道理を忘れないべきである。

曹山本寂が「全ての存在を包含している(もの)」と言い表したものは、「全ての存在(を包含しているもの)」である。

ある僧の「どうして『気が絶えたものは表れない』のか？」という言葉は、誤って激しく疑う「面目」、「有様」ではあるが、このような心の動きなのである。

従来このものを激しく疑っている時は、従来このものを激しく疑っている事に出くわすだけである。

「どのような場所に、どうして『気が絶えたものは表れない』のか？」。

「どうして『(大海は)死体を留めない』のか？」。

これが、「(『海』は)全ての存在を包含している(ものな)のに、どうして『気が絶えたものは表れない』のか？」なのである。

知るべきである。

「包含」は、「表す」わけではないし、「留めない」。

たとえ「全ての存在」が「死体」であっても、「留めない」のは万年と成る。

「(気が絶えたものは)表れない」という言葉は、曹山本寂の「一著子」、「一手」なのである。

曹山本寂は、「万有非其功絶気」、「全ての存在は存在の功能として『気が絶えない』からである」と言った。

全ての存在は、たとえ気が絶えていても、たとえ気が絶えていなくても、「表れない」のである。

死体は、たとえ死体であっても、全ての存在に同じく参入する様子が有るようなものは包含されるし、包含されている。

全ての存在である前後には存在の功能が有り、全ての存在は「気が絶えない」。

「一盲引衆盲」、「一人の盲人が多くの盲人を導く」ような物である。

「一盲引衆盲」、「一人の盲人が多くの盲人を導く」道理は、さらに、「一盲引一盲」、「一人の盲人が一人の盲人を導く」事が有るし、「衆盲引衆盲」、「多くの盲人が多くの盲人を導く」事が有る。

「衆盲引衆盲」、「多くの盲人が多くの盲人を導く」時、「全ての存在を包含している(もの)」は「全ての存在を包含している(もの)」において包含しているのである。

さらに、どれだけの大いなる道でも全ての存在ではないように、未だ、その鍛錬が形成されて現されていないのが、海印三昧なのである。

正法眼蔵　海印三昧

千二百四十二年、観音導利興聖宝林寺で記した。

授記

仏祖が単一に伝えている大いなる道は、「授記」、「成仏の予言」である。
授記を、仏祖の学への参入が無い者は、夢にも未だ見た事が無いのである。
「授記する時」、「成仏を予言する時」は、未だ悟りを求める心を起こしていない者にも授記する。
仏の性質が無い者に(も)授記する。
仏に成れる性質が有る者に授記する。
「有身」、「肉体が有る者」にも授記するし、「無身」、「肉体が無い者」にも授記する。
諸仏に授記する。
諸仏は諸仏の授記を保持し任せられるのである。
「授記を得た後に仏と成る」として学に参入するべきではないし、「仏と成った後に授記を得る」として学に参入するべきではない。
授記された時に仏と成る事が有るし、
授記された時に修行している事が有る。
このため、諸仏に授記が有るし、
仏の向上で授記が有る。
自己に授記する。
身心に授記する。
授記について「飽学措大」、「学ぶ一大事を十分に終える」時、仏道については「飽学措大」、「学ぶ一大事を十分に終える」事に成る。
身の前に授記が有るし、身の後に授記が有る。

自己に知られる授記が有るし、自己に知られない授記が有る。

他の者に知らしめる授記が有るし、他の者に知らしめない授記が有る。

実に、知るべきである。

授記は自己を形成させて現す。

授記は形成されて現される自己なのである。

このため、仏から仏へ、祖師から祖師へ、正統に代々伝承しているのは、授記だけなのである。

さらに、一つも、授記ではない法は無い。

まして、授記ではない、山や河や大地や須弥山や「巨海」、「大海」が存在するだろうか？　いいえ！

さらに、授記ではない、一人前や半人前の、ありふれた人はいないのである。

このように参入して究める、授記は、一句の言葉の「道」、「真理」を会得する事であるし、一句の言葉を聞いて会得する事である。

授記の言葉の一句を会得できない事が有るし、授記の言葉の一句を会得して理解して取る事が有る。

授記の言葉の一句を行って理解して取ったり、説明によって理解して取ったりする。

授記の言葉の一句は、後退を「教令」、「教示」するし、進歩を「教令」、「教示」する。

今、坐禅を得たり法衣を纏ったりできるのは、古くからの、授記を得る事によって、形成されて現されているのである！

今、坐禅を得たり法衣を纏ったりできるのは、授記を合掌して頂戴して得て来ている事による物なので、形成されて現される物は、授記なのである。

仏は、「授記には、多くの種類が有るが、要約すると、八種類が有る。

(一)自己は知っているが、他の全ての人々は知らない。
(二)他の全ての人々は尽く知っているが、自己は知らない。
(三)自己も他の全ての人々も共に知っている。
(四)自己も他の全ての人々も共に知らない。
(五)近くの者は気づいているが、遠くの者は気づいていない。
(六)遠くの者は気づいているが、近くの者は気づいていない。
(七)近くの者も遠くの者も共に気づいている。
(八)近くの者も遠くの者も共に気づいていない」と言った。

このような授記が有る。

そのため、「今、臭い皮袋である人の精魂に気づかれないのは授記が無い」と判断する手段とする事なかれ。

「未だ悟っていない人には、たやすく授記するべきではない」と言う事なかれ。

普通の人は誤って「修行の功徳が満ちて仏と成る事が決定した時に授記する」と思ってしまうし、学んできているが、仏道は、そうではない。

善知識を持つ人々によって一句の真理の言葉を聞いて理解したり、経典によって一句の真理の言葉を聞いて理解したりする事が有るのは、授記を得たのである。

これが、諸仏の本よりの行いであるので。

これが、「百草」、「森羅万象」の善の根本であるので。

もし授記を言うと、「授記を得た人は皆、究極の人である」。

知るべきである。

一つの塵（ちり）ですら無上なのである。

一つの塵（ちり）ですら向上なのである。

一つの塵（ちり）ですら授記である！

一つの法ですら授記である！

授記は、「全ての法」、「全てのもの」である！

授記は、修行と証である！

授記は、仏祖である！

授記は、鍛錬して道をわきまえる事である！

授記は、大いに悟る事であるし、大いに迷う事である！

授記は、黄檗希運から臨済義玄への言葉である「私の宗教、仏教は、あなたに至って、この世で大いに盛んに成るであろう」である。

授記は、大鑑禅師から南嶽の懐譲への言葉である「(ただ、諸仏は汚染されない事を護ろうと念頭に置いているのである。)あなたもまた、そうである。私も、またそうである。(西のインドの祖師達もまた、そうである)」なのである。

授記は、掲げて示された印である。

授記(を知る事)は、必ずしも必要ではない(、と言える)。

授記は、初祖の迦葉の「破顔微笑」である。

授記は、生と死が来たり去ったりする事である。

授記は、尽十方界である。

授記を、遍界は「最初」から隠していない。

宗一大師と呼ばれる玄沙師備が雪峰義存のそばに仕えて歩いていた時、雪峰義存は、目の前の地を指して、「あの、わずかな土地は、僧の墓である『無縫塔』を造るのに良い」と言った。

玄沙師備は、「高さは、どれくらいですか？」と言った。

雪峰義存は、上と下を見た。

玄沙師備は、「人間や天上における幸福の報いは無いわけではないが、和尚様、雪峰義存様は(釈迦牟尼仏による)霊山の授記を夢にも未だ見ていない」と言った。

雪峰義存は、「あなたは、高さが、どれくらいだと思うのか？」と言った。

玄沙師備は、「七尺、八尺」と言った。

玄沙師備は「和尚、雪峰義存は霊山の授記を夢にも未だ見ていない」と言ったが、「雪峰義存には霊山の授記が無い」と言ったわけではなく、

「雪峰義存には霊山の授記が有る」と言ったわけではなく、

「和尚、雪峰義存は霊山の授記を夢にも未だ見ていない」と言ったのである。

霊山の授記は、「高著眼」、「高着眼」、「高みに眼をつけさせている」、

「高みを狙(ねら)わせている」のであるし、

「私、釈迦牟尼仏には『正法眼蔵、涅槃妙心』、『正しくものを見る眼、寂滅した妙なる心』が有り、摩訶迦葉に付属させる」なのである。

知るべきである。

三十四祖の青原の行思が三十五祖の石頭希遷に授記した時の諸々の仏祖が同じく参入する有様では、初祖の摩訶迦葉も三十四祖の青原の行思の授記を受けたのであるし、三十四祖の青原の行思も釈迦牟尼仏の授記を授けたので、仏から仏へ、祖師から祖師への面々には「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」の付属が有って存在している事は明らかなのである。

このため、三十三祖の大鑑禅師が三十四祖の青原の行思に授記した時、三十四祖の青原の行思が三十三祖の大鑑禅師の授記を受けた時、授記によって保持され任せられている三十四祖の青原の行思と成ったのである。

この時、三十三祖の大鑑禅師といった諸々の祖師達の学への参入は、正しく真っ直ぐに、三十四祖の青原の行思の授記によって行われて理解して取られて来ているのである。

これを「明明百草頭、明明仏祖意」、「明らかな百草、森羅万象は、明らかに仏祖の心である」と言うのである。

そのため、どの仏祖も「百草」、「森羅万象」である！

私も、あなたも、「百草」、「森羅万象」である！

最悪の愚かさで誤って「自らに十分に備わっている法は、自らは必ず知る事ができるし、見る事ができる」と思う事なかれ。そうではないのである。

自己が知っている法は、必ずしも自己が所有しているわけではない。自己が知っているものは、必ずしも自己が所有しているわけではない。

自己が所有しているものは、必ずしも自己が知る事ができるわけではないし、自己が見る事ができるわけではない。

そのため、「今の知見や思量の能力では知る事が不能なものは自己には無い」と激しく疑う事なかれ。

まして、「霊山の授記」とは、釈迦牟尼仏による授記である。

「霊山の授記」は、釈迦牟尼仏が釈迦牟尼仏に授記してきている物である(、と言える)。

授記が未だ合わない者には授記しないのが道理である。

「授記が未だ合わない者には授記しないのが道理である」という言葉の主旨は、「既に授記が有る者に授記するのに障害は無いし、授記が無い者に授記するのに仏法以外の法を授けないのが道理である」という事である。

仏法が欠けておらず、仏法以外の法ではないのが、諸々の仏祖が諸々の仏祖に授記してきている道理なのである。

このため、古代の仏と等しい人は「古今、害虫を払うための毛がついた棒である払子を挙げて東西を示す。(仏法の)『大意』、『要点』は微(かす)かで、承知して参入する事は難しい！　この理を、もし師からの教授が無ければ、どんな見識によって、(仏法の)奥深い話を語ろうと欲するのか？」と言った。

玄沙師備の言葉の主旨に参入して究めるために、僧の墓である「無縫塔」の「高さは、どれくらいか？」を量(はか)るために、「高さは、どれくらいか？」の「道」、「真理」の会得が有るべきである。

さらに、高さは、五百由旬ではないし、八万由旬ではない。

このため、上と下を見るのを嫌っているわけではない。

ただ、「人間や天上における幸福の報いは無いわけではないが」、僧の墓である「無縫塔」の高さを見るのは、釈迦牟尼仏による授記ではないだけなのである。

釈迦牟尼仏による授記を得ていれば、「七尺、八尺」の「道」、「真理」の会得が有るのである。

真の、釈迦牟尼仏による授記を点検して詳細に調べる時には、「七尺、八尺」の「道」、「真理」の会得によって点検して詳細に調べるべきである。

そのため、「七尺、八尺」と言った事の是非は暫定的に置いておき、授記には、必ず、雪峰義存による授記が有るし、玄沙師備による授記が有る。

まして、授記を挙げて、僧の墓である「無縫塔」の「高さは、どれくらいか？」の「道」、「真理」を会得するべきである。

授記ではないものを挙げて仏法を言うのは「道」、「真理」を会得していない。

自己の真に自己であるものを会得して理解して取ったり、聞いて理解して取ったりして言えば、必ず、授記が形成されて現される手がかりが有るのである。

授記の時に、授記と同じく参入する鍛錬が来るのである。

授記を究めるために、多くの仏祖は無上普遍正覚を形成させて現してきた。

授記を鍛錬する力は、諸仏をこの世に出現させる。

このため、「諸仏は唯一の一大事の『因縁』、『理由』のために『この世』に出現する」と言うのである。

授記の主旨は、向上では、自己ではないものによる者は、必ず、自己ではないものによる授記を得るのである。

このため、諸仏は諸仏による授記を得るのである。

授記では、一つの手を挙げたり、両手を挙げたり、千の「千手観音の眼が有る手」を挙げたりして、授記したり、授記されたりする。

優曇華を挙げて授記するし、「金襴衣」、「金糸で模様を織り入れた法衣」をひねって授記するが、共に、強引に為(な)しているわけではなく、授記による「云為」、「言動」、「業(わざ)」である。

内から得る授記が有るし、外から得る授記が有る。
内外に参入して究めようとする者は、道理は、授記に学んで参入するべきである。
授記によって仏道を学び修行する事は、万里の一個の鉄である。
授記によって坐り続ける事は、一念が万年である。

古代の仏は「『相継得成仏』、『転次而授記』」、「相継いで仏と成る事を得て、転々と次々と授記する」と言った。

仏と成る事は、必ず、相継ぐのである。
相継いでいる少しのものを仏と成すのである。
成仏の予言を授記するのを転々と次々とするのである。
「転次」とは、「転々とし得る事」であるし、「次々とし得る事」である。
例えば、「転次」、「転々」、「次々」とは、「一時」である。
「一時」とは、「行為」である。
「一時」の「行為」とは、限られた身を造る事ではないし、限られた知覚の対象を造る事ではないし、推測をつくる事ではないし、心を造る事ではない。
知覚の対象を造る事も造らない事も、共に、「転々と次々と授記する」道理に一任して、わきまえ究めるべきである。
推測をつくる事もつくらない事も、共に、「転々と次々と授記する」道理に一任して、わきまえ究めるべきである。

諸々の仏祖が形成されて現されるのは、「行為」によって「転々と次々と」されているのである。

五と六の仏祖が西のインドから来た「行為」によって「転々と次々と」されているのである。

まして、水の運搬や、柴の薪の運搬は、「転々と次々と」してきているのである。

「即心是仏」、「正しい心が仏である事」が現在の生を生きるのは、「転々と次々と」なのである。

「即心是仏」、「正しい心が仏である事」は「滅度」、「涅槃」、「寂滅」するが、一つや二つの「寂滅」は珍しくなく、多くの「寂滅」を「寂滅」するし、多くの「仏道の成就」を「成就」するし、多くの「相好」、「三十二相八十種好」、「仏の肉体の特徴」を「特徴」する。

これが、「相継（あいつ）いで仏と成る事を得る事」であるし、
「相継（あいつ）いで『寂滅』などを得る事」であるし、
「相継（あいつ）いで授記を得る事」であるし、
「相継（あいつ）いで『転々と次々と』得る事」である。

「転々と次々とする事」は、本来、備わっている物ではなく、ただ、七と八に通達するだけなのである。

仏祖の面々が、仏祖の面々に、見え（まみえ）たり出会ったりするのは、「相継（あいつ）ぐ事」なのである。

仏祖が授記を「転々と次々とする」有様（ありよう）では、回避する場所や隙間（すきま）が無いのである。

古代の仏と等しい人は、「我今従仏聞、授記荘厳事、及転次受決、身心遍歓喜」、「私は、今、仏、釈迦牟尼仏によって、授記と(仏土の)荘厳の事および転々と次々と成仏の決定を受ける事を聞いて、身心が遍く歓喜している」と言った。

「授記と(仏土の)荘厳の事」を、必ず、「私は、今、仏によって、聞く」のである。

「転々と次々と成仏の決定を受ける事」を「私は、今、仏によって、聞く」とは、「身心が遍く歓喜している」事なのである。

「転々と次々と」とは、「私の、今」なのである。

過去、現在、未来の自分や他のものに関わらず、「仏によって聞く」のである。

仏ではない他のものによって聞くわけではない。

迷いや悟りの事を聞くわけではないし、全ての生者の事を聞くわけではないし、草木や国土の事を聞くわけではない。

「授記と(仏土の)荘厳の事および転々と次々と成仏の決定を受ける事」を「仏によって聞く」のである。

「転々と次々とする」道理は、一時も一隅に停滞する事が無い。

「身心が遍く歓喜」して行くのである。

「歓喜」である「転々と次々と成仏の決定を受ける事」は、必ず、身と共に参入して遍く巡るし、心と共に参入して遍く巡る。

さらに、また、身は必ず心に遍く行き渡るし、心は必ず身に遍く行き渡るので、「身心が遍く歓喜している」と言ったのである。

「身心が遍く歓喜している」とは、遍く世界が、遍く諸方が、遍く身が、遍く心が「歓喜している」のである。

「身心を遍く歓喜させているもの」とは、特別な「歓喜」なのである。

「身心を遍く歓喜させているもの」は、明らかに、眠っている者と目覚めている者を歓喜させるし、迷っている者と悟っている者を歓喜させるが、各々と近いが、各々と汚染されない。

このため、「転々と次々と成仏の決定を受ける事」である「授記と(仏土の)荘厳の事」なのである。

釈迦牟尼仏は、薬王菩薩によって、八万の「大士」、「(菩薩)摩訶薩」に、次のように告げた。

「薬王菩薩よ、あなたには、この大衆の中の、無量の(無数の)諸々の、天、龍王、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽、人と人ではない者、および、男性の出家者、女性の出家者、男性の在家信者、女性の在家信者、声聞を求める者、独覚を求める者、仏道を求める者が見えているが、このような者で、仏の前において、妙なる法華経の一つの詩や詩の一句を聞いて一瞬でも喜んだ者には、ことごとく、皆、私(、釈迦牟尼仏)は、授記を与える。(授記を与えられた者は)必ず無上普遍正覚を得る(であろう)」

そのため、「無量の(無数の)大衆」、天王と龍王達、「男性の出家者、女性の出家者、男性の在家信者、女性の在家信者」という「四部衆」達、「天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽」という「八部衆」

達は、求める物や理解は異なるが、誰もが妙なる法の一つの詩や詩の一句だけを「聞く」のである！　また、仏法ではない他の法を一瞬も歓喜しない！

「(声聞を求める者、独覚を求める者、仏道を求める者といった、)このような者」とは、「法華の者」なのである。

「仏の前において、(妙なる法華経の一つの詩や詩の一句を聞いて一瞬でも喜んだ者には、)ことごとく」とは、「仏の中において、(妙なる法華経の一つの詩や詩の一句を聞いて一瞬でも喜んだ者には、)ことごとく」なのである。

「人と人ではない者」という万の無数の姿を認められても、「百草」、「森羅万象」に信心の種を撒(ま)かれた者であっても、「(声聞を求める者、独覚を求める者、仏道を求める者といった、)このような者」なのである。

「(声聞を求める者、独覚を求める者、仏道を求める者といった、)このような者には、皆、私(、釈迦牟尼仏)は、授記を与える」のである。

「(声聞を求める者、独覚を求める者、仏道を求める者といった、このような者には、)皆、私(、釈迦牟尼仏)は、授記を与える」事と「(授記を与えられた者は)必ず無上普遍正覚を得る(であろう)」事は「頭が正しいので尾も正しい」。

釈迦牟尼仏は、薬王菩薩に、「また、如来(、釈迦牟尼仏)の肉体の死後、もし人がいて、妙なる法華経の一つの詩や詩の一句を聞いて一瞬でも喜んだら、私(、釈迦牟尼仏)は、また、無上普遍正覚の授記を与える」と告げた。

「如来(、釈迦牟尼仏)の肉体の死後」とは、いつ到来したのか？

(釈迦牟尼仏が三十一歳で無上普遍正覚を得てから)四十九年後であるのか？
(釈迦牟尼仏の肉体の寿命である)八十年間の中であるのか？
暫定的に、「如来(、釈迦牟尼仏)の肉体の死後」とは、(釈迦牟尼仏の肉体の寿命である)八十年間の中の事である。(「如来、釈迦牟尼仏の肉体の死後」とは、釈迦牟尼仏の命の中の事である。)

「もし人がいて妙なる法華経の一つの詩や詩の一句を聞いて一瞬でも喜んだら」と言うのは、知が有る者が聞いた場合だけであるのか？　知が無い者が聞いた場合もであるのか？
誤って聞いた場合は、どうであるのか？　正しく聞いた場合だけか？
他の者の為(ため)に言えば、「もし人がいれば聞く」であろう。
さらに、「知が有る者が聞いた場合だけである」とか「知が無い者が聞いた場合もである」とか等(など)とする事なかれ。

「法華経を聞く時は、たとえ、とても奥深い諸仏の知であっても、『聞く』のは必ず法華経の詩の一句であるし、『聞く』のは必ず法華経の一つの詩であるし、『聞く』と必ず一瞬でも喜ぶのである」と言うべきである。
「法華経を『聞いて』一瞬でも喜んだ時」、「私(、釈迦牟尼仏)は、また、無上普遍正覚の授記を与える」のである。
「皆、授記を与える」事が有るし、「また、(無上普遍正覚の)授記を与える」事が有る。
見過ごしてしまう、ありふれた人に一任させる事なかれ。

明確な詳細な鍛錬に同じく参入するべきである。

「法華経の詩の一句や一つの詩」によって「喜ぶ」のを「もし人がいれば聞く」のである。

「皮肉骨髄」、「理解」を「頭の上に頭を置く」、「頭が有るのに別の頭を置こうとする」ようにすると暇(いとま)が無いのである。

「法華経」の「授学無学人記品」の「見授阿耨多羅三藐三菩提記」、「(もし釈迦牟尼仏が)無上普遍正覚の授記を授けたら」、「我願既満」、「私の願いは既に満ちる」。このような皮袋である人であるべきであるし、「衆望亦足」、「全ての望みもまた満ち足りる」。このように「もし人がいれば聞く」のである。

松の枝をひねって授記する事が有るし、優曇華をひねって授記する事が有るし、「(拈華)瞬目」をひねって授記する事が有るし、「破顔(微笑)」をひねって授記する事が有る。

履物を転じて授記した行跡が有る。

授記の法は思量分別が理解可能な物ではない。

「私の身は何々である」という授記が有るし、「あなたの身は何々である」という授記が有る。

「私の身は何々である」や「あなたの身は何々である」という道理は、よく、過去、現在、未来を授記するのである。

授記の中の過去、現在、未来であるので、自らの授記に形成されて現されるし、他の授記に形成されて現されるのである。

維摩は、弥勒菩薩に、次のように言った。
「弥勒菩薩よ。釈迦牟尼仏は、あなた、弥勒菩薩に、授記を授けて、『一生で、無上普遍正覚を得る』と言いましたが、弥勒菩薩は、どの生を用いて授記を得るとするのか？
過去であるのか？　未来であるのか？　現在であるのか？
もし『過去の生である』と言うならば、過去の生は既に滅んでいる。
もし『未来の生である』と言うならば、未来の生は未だ到来していない。
もし『現在の生である』と言うならば、現在の生は不変に住んで留まる事が無い。
釈迦牟尼仏が説く通りであれば、弥勒菩薩よ、あなたの今の時とは、『生か、老いか、死か』なのである。
もし『無生、生じる事を超越して授記を得る』と言うならば、『無生』、『生じる事の超越』とは『正位』、『悟っている位』なのである。
『正位』、『悟っている位』の中においては、また授記を得る事は無いし、また無上普遍正覚を得る事は無い。
弥勒菩薩が一生での授記を受けたとは、どういう事であるのか？
『如』、『真如』、『真理』の生によって授記を得るとするのか？
『如』、『真如』、『真理』の死によって授記を得るとするのか？
もし『如、真如、真理の生によって授記を得る』と言うならば、『如』、『真如』、『真理』には(『この世』の)生は無い。
もし『如、真如、真理の死によって授記を得る』と言うならば、『如』、『真如』、『真理』には死は無い。

一切の全ての生者は皆、『如』、『真如』、『真理』である。
『一切の全ての法』、『全てのもの』もまた、『如』、『真如』、『真理』である。
諸々の聖者や賢者もまた、『如』、『真如』、『真理』である。
弥勒菩薩に至るまでもまた、『如』、『真如』、『真理』である。
もし弥勒菩薩が授記を得るならば、一切の全ての生者もまた授記を得る。
なぜなら、『如』、『真如』、『真理』は『唯一』である。
もし弥勒菩薩が無上普遍正覚を得るならば、一切の全ての生者もまた皆、無上普遍正覚を得る。
なぜなら、一切の全ての生者は、無上普遍正覚の相なのである」

維摩の言葉を、如来、釈迦牟尼仏は「正しくない」とは言わなかった。
弥勒菩薩は授記を得ていた。このため、一切の全ての生者は授記を得ている。
全ての生者の授記が無ければ、弥勒菩薩の授記も無かったであろう。
「一切の全ての生者は、無上普遍正覚の相なのである」。
無上普遍正覚の相である全ての生者は、無上普遍正覚の授記を得ているのである。
授記とは今日の命なのである。
一切の全ての生者は、弥勒菩薩と、同じく無上普遍正覚を求める事を思い立って心するので、同じく授記を受けて、同じく仏道を成就して無上普遍正覚を得るのである。

ただし、維摩の「『正位』、『悟っている位』の中においては、また授記を得る事は無い」という言葉によると、維摩は、「正位」、「悟っている位」が授記である事を知らないようであるし、「正位」、「悟っている位」が無上普遍正覚である事を知らなくて言う事ができなかったようである。

また、維摩は「過去の生は既に滅んでいる。未来の生は未だ到来していない。現在の生は不変に住んで留まる事が無い」と言ってしまった。

しかし、過去は必ずしも既に滅んでいるわけではないし、未来は必ずしも未だ到来していないわけではないし、現在は必ずしも不変に住んで留まる事が無いわけではない。

「既に滅んでいる物、不変に住んで留まる事が無い物、未だ到来していない物などが、過去、現在、未来である」と学ぶといえども、「未だ到来していない物が、過去、現在、未来である」という「道理」、「道」、「真理」を必ず理解して取るべきである。

そのため、生と死が共に授記を得る道理が有るし、生と死が共に無上普遍正覚を得る道理が有るのである。

一切の全ての生者が授記を得る時、弥勒菩薩も授記を得るのである。

「あなた、維摩に質問する。

弥勒菩薩は全ての生者と同じであるのか？

弥勒菩薩は全ての生者と異なるのか？

試しに言ってみなさい。

『もし弥勒菩薩が授記を得るならば、一切の全ての生者もまた授記を得る』と言っているが、『弥勒菩薩は全ての生者ではない』と言うならば、生者は生者ではなく成ってしまうし、弥勒菩薩も弥勒菩薩ではなく成ってしまうであろう。

どうだろうか？

『弥勒菩薩は全ての生者ではない』と言う時、維摩もまた維摩ではなく成ってしまうであろう。

維摩が維摩ではなく成ってしまえば、維摩の言葉を用いて授記を得られなく成ってしまうであろう」

そのため、「授記が一切の全ての生者を存在させる時、一切の全ての生者や弥勒菩薩は存在するのである」と言える。

授記は能（よ）く一切を存在させる。

正法眼蔵　授記

千二百四十二年、観音導利興聖宝林寺で記した。

観音

無住大師と呼ばれる三十七祖の雲巌曇晟は、兄弟子である修一大師と呼ばれる道吾円智に「『大悲菩薩』、『千手観音』は、多数の『眼が有る手』を用いて、どうするのでしょうか？」と質問した。

道吾円智は、「人が夜間に背で手で枕（まくら）を模索するような物です」と言った。

雲巌曇晟は、「私は理解しました。私は理解しました」と言った。

道吾円智は、「あなたは、どんな理解をしたのですか？」と言った。

雲巌曇晟は、「(千手観音は、)『遍身』、『体中』が、『眼が有る手』なのです」と言った。

道吾円智は、「(雲巌曇晟の)言葉は大分（だいぶ）言い得ています。八、九割、言い得ています」と言った。

雲巌曇晟は、「私は、ただ、このように、理解しました。師兄は、どのように理解しているのですか？」と言った。

道吾円智は、「(千手観音は、)『通身』、『全身』が、『眼が有る手』なのです」と言った。

道吾円智と雲巌曇晟、兄弟子の前や後で観音について話す人を多く聞くが、道吾円智と雲巌曇晟、兄弟子のように観音を言い得ている人はいない。

観音の学に参入しようと思うならば、道吾円智と雲巌曇晟、兄弟子の言葉に参入して究めるべきである。

「大悲菩薩」と言うのは「観世音菩薩」である。「観自在菩薩」とも言う。
「観音は諸仏の父や母である」とも学んで学に参入する。
「観音は菩薩なので、諸仏よりも『道』、『真理』を未だ会得していない」と学ぶ事なかれ。

観音は過去は正法明如来である。

雲巌曇晟の「『大悲菩薩』、『千手観音』は、多数の『眼が有る手』を用いて、どうするのか？」という言葉を挙げて、ひねって観音の学に参入して究めるべきである。

観音を保持させ任せる「家門」、「家筋」が有るし、観音を夢にも未だ見ない「家門」、「家筋」が有る。
三十七祖の雲巌曇晟に観音が有り、兄弟子である道吾円智と観音に同じく参入した。
一人、二人の観音だけではなく、百人、千人の無数の観音が三十七祖の雲巌曇晟に同じく参入している。
観音を真に観音に成らせるのは、三十七祖の雲巌曇晟の会だけである。
なぜなら、三十七祖の雲巌曇晟は観音を言い得ているが、他の仏道者は観音を言い得ていない。
他の仏道者が言う観音は、ただ、十二面であるが、三十七祖の雲巌曇晟は、そうではない。
他の仏道者が言う観音は、わずかに千手の「眼が有る手」であるが、三十七祖の雲巌曇晟は、そうではない。

他の仏道者が言う観音は、仮に、八万四千本の「眼が有る手」であるが、三十七祖の雲巌曇晟は、そうではない。

何によって、このようであると知るのか？

雲巌曇晟の「『大悲菩薩』、『千手観音』は、多数の『眼が有る手』を用いて、どうするのか？」の「多数」という言葉の意味は、ただ八万四千本の「眼が有る手」だけではないし、まして、十二や三十二、三といった数種類だけではないからである！

雲巌曇晟の「多数」という言葉は、数が多い事を言い表しているだけなのである。

雲巌曇晟の「多数」という言葉は、種類が限られていない。

雲巌曇晟の「多数」という言葉は、種類が限られていないので、無限という数にも限るべきではない。

このように、雲巌曇晟の「多数」という言葉の意味の学に参入するべきである。

雲巌曇晟の「多数」という言葉は、無数、無限という数を超越しているのである。

雲巌曇晟は「千手観音の多数の『眼が有る手』」という言葉をひねって来たが、道吾円智が「不明瞭な事を言っている」と言わなかったのは意味が有る。

道吾円智と雲巌曇晟が三十六祖の薬山惟儼に同じく参入して肩を並べてから四十年、同じく修行した古今の因縁を推測すると、道吾円智は雲巌曇晟の正しくない部分は削り取ったし、正しい部分は証明してあげたはずである。

道吾円智は雲巌曇晟の正しくない部分は削り取り、正しい部分は証明してあげてきたが、

雲巌曇晟が「千手観音の多数の『眼が有る手』」と言うと、道吾円智は証明してあげた。

知るべきである。

道吾円智と雲巌曇晟という二人の古代の仏と等しい人達は同じく「千手観音の多数の『眼が有る手』」という言葉を理解して取ったのである。

道吾円智と雲巌曇晟は、明らかに、「千手観音の多数の『眼が有る手』」に同じく参入したのである。

雲巌曇晟は道吾円智に「千手観音は多数の『眼が有る手』を用いて、どうするのか?」と質問した。

この質問を、経典の似非(えせ)学者や未熟な修行者の質問と同じであるとみなすなかれ。

この質問は、言葉を挙げて来ている。千手観音の「眼が有る手」を挙げて来ている。

雲巌曇晟は道吾円智に「千手観音は多数の『眼が有る手』を用いて、どうするのか?」と言ったが、この功績を力として仏と成る古代の仏や新しい仏がいる。

「千手観音は多数の『眼が有る手』に何をさせるのか?」とも言えるし、

「千手観音は多数の『眼が有る手』をどうするのか?」とも言えるし、

「千手観音は多数の『眼が有る手』を動かして、どうするのか?」とも言えるし、

「千手観音は多数の『眼が有る手』について話して、どうするのか?」とも言える。

道吾円智は、「人が夜間に背で手で枕を模索するような物である」と言った。

この言葉の意味は、「例えば、人が夜間に手を後ろにして枕を模索するような物である」という意味である。

「模索する」と言うのは、「探り求める」事である。

「夜間」とは「暗い」事を言っているのである。

「日陰で山を看る」と言うような物である。

「『眼が有る手』を用いる事」は、「人が夜間に背で手で枕を模索するような事」なのである。

「人が夜間に背で手で枕を模索するような物である」という言葉によって、「『眼が有る手』を用いる事」を学ぶべきである。

日陰から夜間を想像する事と、実際に夜間である時を、点検して詳細に調べるべきである。

昼でも夜でもない時を、点検して詳細に調べるべきである。

たとえ「人が枕を模索する」事が「観音が『眼が有る手』を用いるような事」であると理解できなくても、「人が枕を模索する」事が「観音が『眼が有る手』を用いるような物である」道理から逃れる事はできないし、逃げるべきではない。

「人が夜間に背で手で枕を模索するような物である」という言葉の「人」とは、単なる例えなのだろうか？　仏道の平常の人であり、俗世の平常の人ではないのか？

もし仏道の平常の人であると学んで、単なる例えでなければ、「枕を模索する」事に学ぶべき所が有る。

「枕」という言葉についても質問するべき何らかの様子が有る。

「夜間」という言葉も人間や天上の昼夜の夜間だけではないだろう。知るべきである。

「枕を模索する」と言うのは、「枕を取る」事ではないし、「枕を引く」事ではないし、「枕を出現させる」事ではない。

「夜間に背で手で枕を模索する」と言う道吾円智の言葉の奥底を点検して詳細に調べると、眼は夜間を得たが、(手は)見る事ができるようである。見過ごす事なかれ。

手が枕を探る事は未だ「剤限」、「整え限る事」に着手していない。

「背で手で枕を模索する」時に重要であるのは、「背眼」、「目が届かない場所」であるのが重要なのか？

「夜間」という言葉を明らめるべきである。千手観音の「眼が有る手」の世界の事なのだろうか？

人には千手観音の「眼が有る手」が有るのか？

千手観音の「眼が有る手」だけが雷鳴を飛ばして轟くのか？

「頭が正しいので尾も正しい」のである千手観音の「眼が有る手」が一、二本、有るのか？

もし、このような道理を点検して詳細に調べれば、たとえ「多数の『眼が有る手』を用いる」事があっても、誰が「『夜間に背で手で枕を模索するような者』は『大悲菩薩』、『千手観音』である」とするだろうか？

「『眼が有る手』は菩薩である」とだけ聞こえるかのようである。

「『眼が有る手』は菩薩である」と言うならば、「『眼が有る手』という菩薩は、多数の『大悲菩薩』、『千手観音』を用いて、どうするのか？」と質問するべきである。

知るべきである。

たとえ「眼が有る手」が遮(さえぎ)らなくても、「用いて、どうするのか？」と言うと、「『眼が有る手』によって、用いる」のであるし「『眼が有る手』を用いる」のである。

このように「道」、「真理」を会得するような者は、遍(あまね)く「眼が有る手」が「最初」から隠していなくても、「遍(あまね)く『眼が有る手』」という「道」、「真理」を会得する機会を待たない。

あれこれと「最初」から隠していない「眼が有る手」が有っても、「眼が有る手」は、自己には無いし、

「眼が有る手」は、山や海には無いし、

「眼が有る手」のあれこれは、日面や月面ではないし、

「即心是仏」、「正しい心が仏である事」ではない(ので、正しい心が仏であっても、千手観音の「眼が有る手」は無い)。

雲巌曇晟の「私は理解した。私は理解した」という言葉は、「道吾円智の言葉を私は理解した」と言っているわけではない。

「千手観音の『眼が有る手』をどのように用いるか？」を言葉で言い表すと、「私は理解した。私は理解した」と成るのである。

「無端用這裏」、「手がかり無く、この中を用いる」のである。

「無端須入今日」、「手がかり無く、今日に入らなければならない」のである。

道吾円智の「あなたは、どんな理解をしたのか？」という言葉は、雲巌曇晟の「私は理解した」という言葉による物である。

雲巌曇晟の「私は理解した」という言葉を遮るわけではないが、道吾円智は「あなたは、どんな理解をしたのか？」と言ったのである。

「私は理解しているし、あなたは(何かを)理解した」なのであり、「眼が理解しているから、手も理解している」事が無いであろうか？

形成されて現されている理解であるのか？　未だ形成されて現されていない理解であるのか？

「私は理解した」という言葉の「理解している」者を「私」であるとしても、「あなたは、どんな理解をしたのか？」という言葉に「あなた」という言葉が有る事を鍛錬するべきである。

雲巌曇晟の「(千手観音は、)『遍身』、『体中』が、『眼が有る手』なのである」という言葉だけが世に現れているのは、道吾円智が「人が夜間に背で手で枕を模索するような物である」と言ったら、雲巌曇晟は「(千手)観音は、『遍身』、『体中』が、『眼が有る手』なのである」と言った、として学に参入する人だけが多いからである。

「遍身」、「体中」が「眼が有る手」である観音は、観音であるとしても、「道」、「真理」を未だ会得していない観音である。

雲巌曇晟は「(千手観音は、)『遍身』、『体中』が、『眼が有る手』なのである」と言ったが、「(千手観音は、)『眼が有る手』が、身に遍く行き渡っている」と言っているわけではない。

千手観音の「眼が有る手」が遍く行き渡っているのが、たとえ世界に遍く行き渡っていても、千手観音の身や「眼が有る手」に遍く行き渡っていない。

たとえ千手観音の身や「眼が有る手」に遍く行き渡る功徳が有っても、「攙奪行市」、「市場を奪う」ような「眼が有る手」ではない。

千手観音の「眼が有る手」の功徳は、見て理解して取ったり、行って理解して取ったり、説明して理解して取ったりして、正しいと認める事ができない。

千手観音の「眼が有る手」は「多数」であると言われているので、千を超越しているし、万を超越しているし、八万四千を超越しているし、無数、無限を超越している。

千手観音の「遍身」、「体中」の「眼が有る手」だけが無数、無限を超越しているわけではない。

「度生説法」、「生者を仏土へ渡す法を説く事」も無数、無限を超越している。

「国土放光」、「仏国土を照らす仏が放つ光」も無数、無限を超越している。

このため、雲巌曇晟は「(千手観音は、)『遍身』、『体中』が、『眼が有る手』なのである」と言ったが、「千手観音の『眼が有る手』を千手観音の『遍身』、『体中』としているわけではない」として学に参入するべきである。

雲巌曇晟が「(千手観音は、)『遍身』、『体中』が、『眼が有る手』なのである」という言葉を使用していても、動静としていても、動揺する事なかれ。

道吾円智は、「(雲巌曇晟の)言葉は大分言い得ている。八、九割、言い得ている」と言った。

道吾円智の言葉の主旨は、「(雲巌曇晟の)言葉は大分言い得ている」なのである。

「大分言い得ている」と言うのは、「言い当てているし、言い表しているし、未だ言い得ていない残りは無い」と言っているのである。

未だ言っていない事についても、言い得ていない残りが無いのを言う時は「八、九割、言い得ている」と言うのである。

道吾円智の言葉の意味の学への参入が、たとえ十割であっても、未だ言い尽くせない(、言い表せない)力量であるならば、参入して究めたとは言えないのである。

「道」、「真理」の会得、理解は八、九割であっても、八、九割、言い表せる場合と、十割、言い表せる場合が有る。

この時、百、千、万の無数に言い表せるのを、力量が絶妙であるので、少しの力量を挙げて、わずかに八、九割に言い表す場合が有る。

例えば、尽十方界を百、千、万の多量の力で、ひねって来る事は、ひねって来ない事より優れているが、一つの力だけで、ひねって来る事は普通の力量ではない。

道吾円智の「八、九割、言い得ている」という言葉の意味は、そういう意味である。

それなのに、仏祖の道吾円智の「八、九割、言い得ている」という言葉を聞いて、「言い得ていれば十割であるべきなので、言い得ていないので道吾円智は『八、九割』と言った」と誤って解釈してしまう。

もし仏法が、そのような物であるならば、今日にまで至る事ができなかったであろう。

道吾円智の「八、九割、言い得ている」という言葉は、「百、千に無数に言い得ている」と言うような物であるし、「多数、言い得ている」と言うような物である、として学に参入するべきである。

道吾円智が「八、九割、言い得ている」と言ったのは、「八、九割に限る事ができない」という意味で言っているのである。

このように、仏祖の言葉の学に参入するのである。

雲巌曇晟が「私は、ただ、このように理解した。師兄は、どのように理解しているのか？」と言ったのは、

道吾円智が「八、九割、言い得ている」という言葉を言ったので、雲巌曇晟は「ただ、このように理解した」と言ったのである。

これは、「不留朕迹」、「自分の跡を残さない」が、「臂長衫袖短」、「腕が長くて袖が短い」(のであ表れてしまう)のである。

自分の言葉が未だ言い尽くせていないまま置いておくのを「私は、ただ、このように理解した」と言い表したわけではないのである。

道吾円智は、「(千手観音は、)『通身』、『全身』が、『眼が有る手』なのである」と言った。

道吾円智の言葉は、「千手観音は、『通身』、『全身』が、『眼が有る手』で合成されている」と言っているわけではなく、「千手観音は、『通身』、『全身』に、『眼が有る手』の功徳、力が有る」のを「(千手観音は、)『通身』、『全身』が、『眼が有る手』なのである」と言っているのである。

そのため、「千手観音は、身が、『眼が有る手』なのである」と言っているわけではない。

「多数の『眼が有る手』を用いる」とは、「手と眼を用いる事が多数である」から、「千手観音は、『通身』、『全身』に、『眼が有る手』の功徳、力が有る」のである。

「多数の身心を用いて、どうするのか？」と質問されたら、「『通身』、『全身』とは、どのような物であるか？」と言い得る事も有るべきである。

まして、雲巌曇晟の「遍身」、「体中」という言葉も、道吾円智の「通身」、「全身」という言葉も、言い表し尽しているわけでも、言い表し尽していないわけでもないのである。

雲巌曇晟の「遍身」、「体中」という言葉と、道吾円智の「通身」、「全身」という言葉は、量を比べて論じているわけではなく、両方共、「多数の『眼が有る手』」を言い表している。

そのため、釈迦牟尼仏が言い表した観音は、わずかに、千手の「眼が有る手」であるし、十二面であるし、三十三身への変身であるし、八万四千本の手である。

道吾円智と雲巌曇晟、兄弟弟子が言い表した観音は、「多数の『眼が有る手』」である。

けれども、数の多い少ないを言っているわけではない。

道吾円智と雲巌曇晟、兄弟弟子が言い表した「多数の『眼が有る手』」の観音の学に参入する時、一切の全ての諸仏は観音の三昧を「八、九割」成就するのである。

正法眼蔵　観音

その時、千二百四十二年、僧達に示した。

仏法が西のインドから伝わって来てから今まで、多くの仏祖が観音について話してきたが、道吾円智と雲巌曇晟、兄弟弟子に及ばないので、道吾円智と雲巌曇晟、兄弟弟子の観音だけについて話した。

真覚大師と呼ばれる永嘉の玄覚は、「一つの法も見ない者を如来と名づける。まさに、観自在と名づけ、為(な)す事ができ得る」と言った。

永嘉の玄覚の言葉は、如来は如来の身を現すし、観音は観音の身を現すといえども、如来と観音は実体が別ではなく一つである証明である。

麻谷の宝徹は、臨済義玄に、「大悲菩薩」、「千手観音」の千手の「眼が有る手」のうち「どれが『正眼』なのか?」、「どれが正面から見ているのか?」と見(まみ)えた事が有る。

麻谷の宝徹の言葉は、「多数」の一つ一つである。

雲門文偃は、「(香厳の智閑のように、石が竹に当たる音といった)音声を聞いて道を悟ったり、(霊雲志勤のように、桃の花の色形といった)色形を見て心を明らめたりするのは、観世音である」と言った。

どの音声と色形も見聞きする観世音菩薩がいる!

百丈の懐海は「観音が理(ことわり)に入る門」と言った。
「(首)楞厳経」には「円通」する観世音菩薩が記されている。
「法華経」の「観世音菩薩普門品」には、「観世音菩薩品の普門示現の神通力」と記されている。

百丈の懐海の観音も、「(首)楞厳経」の観音も、「法華経」の観音も皆、仏と同じく参入し、山河や大地と同じく参入するといえども、なお、これは、「多数の『眼が有る手』」の一つや二つなのである。

阿羅漢

「諸々の『漏』、『煩悩』は既に尽き、また煩悩(を起こす事)が無く、己にとって(真の)利益と成る事をとらえて会得して、諸々の存在する『結』、『輪廻転生に結びつけ束縛する煩悩』を(無くし)尽くし、心が自在である事を得ている」

これが大いなる阿羅漢である。
これが仏法を学ぶ者の究極の結果である。
これを第四果と名づける。
これが仏の阿羅漢である。

「諸々の『漏』、『煩悩』」とは、柄が無い、破れた木の柄杓である。
多くの時間、用いて来たが、「既に尽くす」とは、木の柄杓の渾身の超越である。

「己にとって(真の)利益と成る事をとらえて会得する」とは、頂上に出入りする事である。

「諸々の存在する『結』、『輪廻転生に結びつけ束縛する煩悩』を(無くし)尽くす」とは、尽十方界は「最初」から隠していない事である。

「心が自在である事を得ている」様子を、「高い場所では自ずと高く安んじるし、低い場所では自ずと低く安んじる」として、参入して究める。
このため、牆壁、瓦礫が有る。
「自在」と言うのは、「心也全機現」、「心の全ての機関が現れている」。

「また煩悩(を起こす事)が無い」とは、煩悩を未だ生じない事であり、煩悩が煩悩によって遮られる事を言う。

阿羅漢の「神通」、「理解」や、知や、禅定や、説法や、化して導く事や、光を放つ事などは、外道や「天魔」、「魔」、「仏敵」などの論理と同じわけが無い。
阿羅漢の、百仏世界を見る等の論理も、凡人の見解に従うべきではない。
「『胡』の髭は赤いと思っていたら、赤い髭の『胡』がいた」道理である。
「入涅槃」、「寂滅に入る事」は、阿羅漢の「拳頭」、「拳」の中に入る行いである。
このため、「涅槃妙心」、「寂滅した妙なる心を持つ事」であり、回避する場所が無いのである。
「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」に入る阿羅漢を真の阿羅漢とする。
未だ「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」に出入りしない者は、阿羅漢ではない。

古代の「法華経」の「信解品」を意訳すると、「我等今日、真阿羅漢。以仏道声、令一切聞」、「私達は今、真の阿羅漢と成った。仏道の声をもって、一切のものに聞かせる」と記されている。

「一切のものに聞かせる」という言葉の意味は、「一切の『諸法』、『全てのもの』に仏の声を聞かせる」という意味である。

どうして、諸仏と仏の弟子だけを挙げてひねっているだろうか？　いいえ！　諸仏と仏の弟子以外にも仏の声を聞かせるのである！

「有識」、「有情」、「情の有るもの」や、知が有るものや、「皮肉骨髄」、「理解」が有るものである仲間に皆、聞かせるのを「一切のものに聞かせる」と言っているのである。

「有識」、「有情」、「情の有るもの」や、知が有るものとは、国土、草木、牆壁、瓦礫である。

「揺落」、「秋に草木の葉が風に揺れて落ちる事」や、栄枯盛衰や、生と死が来たり去ったりする事は皆、仏の声を聞いて表しているのである。

「仏道の声をもって、一切のものに聞かせる」由来は、世界を揮(ふる)って耳であるとして学に参入するだけではないのである。

「法華経」の「方便品」で、釈迦牟尼仏は、「もし私、釈迦牟尼仏の弟子が、自ら『阿羅漢である』とか『独覚である』とか言っておきながら、諸々の仏、如来は、ただ菩薩だけを教化する事を聞かないし知らなければ、この人は、仏の弟子でもないし、阿羅漢でもないし、独覚でもない」と言った。

釈迦牟尼仏の言葉の「ただ菩薩だけを教化する事」とは、「私、釈迦牟尼仏と十方の仏は、能く、この事を知っている」のであるし、「仏と仏だけが能く究め尽せる諸法の実の相」であるし、無上普遍正覚である。

菩薩と諸仏が自ら「阿羅漢である」とか「独覚である」とか言うのも、仏の弟子が自ら「阿羅漢である」とか「独覚である」とか言うのと、同じである。

なぜなら、自ら「阿羅漢である」とか「独覚である」とか言う者は、諸々の仏、如来は、ただ菩薩だけを教化する事を聞いているし知っているはずであるからである。

古代の仏教書には「『声聞経』の中には、阿羅漢を称して、名づけて『仏地』(、『仏の境地』、『仏の地位』)と為す」と記されている。

「『声聞経』の中には、阿羅漢を称して、名づけて『仏地』(、『仏の境地』、『仏の地位』)と為す」という言葉は、仏道による証明である。経典の学者の(個人的な)胸中の思いだけではなく、仏道の「通軌」、「共通の規範」である。

阿羅漢を称して「仏地」、「仏の境地」、「仏の地位」とする道理の学にも参入するべきである。

「仏地」、「仏の境地」、「仏の地位」を称して阿羅漢とする道理の学にも参入するべきである。

阿羅漢果の他に、一つも微塵（みじん）も、一つの法も、他の法は無い。まして、無上普遍正覚も無い！

無上普遍正覚の他に、さらに、一つも微塵（みじん）も、一つの法も、他の法は無い。まして、阿羅漢果を含む「四向四果」も無い！

阿羅漢が「諸法」、「全てのもの」を担（にな）って来る時、「諸法」、「全てのもの」は、実に、八両でも半斤でもなく、心でも仏でも物でもなく、「仏眼也覰不見」、「仏の眼が見ても見えない」のである。

（一斤は十六両。半斤は八両。）

「八万劫」の前後を論ずるべきではない。

「眼睛」、「見る眼」を抉（えぐ）り出す力量の学に参入するべきである。

「剰法は渾法剰である」、「残りの法は、法を揮（ふる）って残った物である」。

「法華経」の「方便品」で、釈迦牟尼仏は、「この諸々の男性の出家者と女性の出家者で、自ら『既に阿羅漢を得た。これ（、阿羅漢）は、最後の身であり、究極の涅槃（、寂滅）である』と言って、再び無上普遍正覚を志（こころざ）して求めなければ、『この輩は皆、増上慢の人（、悟っていないのに悟ったと思い上がっている人）である』と、まさに知るべきである。なぜなら、もし出家者がいて実に阿羅漢を得ていれば、『この法』、『法華経』、『仏法』を信じないのは論理的に有り得ないからである」と言った。

「法華経」の「方便品」の釈迦牟尼仏の言葉は、「無上普遍正覚を能く信じる者が阿羅漢である」と証している。

「この法」、「法華経」、「仏法」を必ず信じる事は、「この法」、「法華経」、「仏法」を付属する事であるし、

「この法」、「法華経」、「仏法」を単一に伝える事であるし、

「この法」、「法華経」、「仏法」を修行するし証する事である。

実に阿羅漢を得ていれば、「これ」、「阿羅漢」は、最後の身ではないし、究極の「涅槃」、「寂滅」ではない。阿羅漢は、無上普遍正覚を志して求めるので。

無上普遍正覚を志して求める事は、「眼睛」、「見る眼」を弄する事であるし、

(二十八祖の達磨のように、)壁に向かって坐禅して打ち坐る事であるし、

「面壁開眼」、「壁に向かって開眼する」事であるし、

遍く世界といえども、神出鬼没であるし、

諸々の時に行き渡るといえども、「互換」、「どちらも当てはまる」し、

「投機」、「機会に投じる」。

このようであるのを、「無上普遍正覚を志して求める」と言う。

このため、(「無上普遍正覚を志して求める」とは、)「阿羅漢を志して求める」事である。

「阿羅漢を志して求める」とは、「粥足飯足」、「朝食に満足するし昼食に満足する事」である。

夾山の圜悟克勤は、「古代の人は、(仏法の)要旨を会得した後は、深い山や草の屋根の家や岩穴へ行って、脚の折れた鍋で御飯を煮て食べて、十年、二十年、大いに人の世を忘れて、永遠に『塵寰』、『塵界』、『俗世』を離れ去る。

今時の人は、あえて、このような事(、古代の人のような事)を望まない。ただただ、名を隠し、跡を晦まして、本分を守り、一人の『骨律錐』の老僧と成って、自ら証している所に適うようにし、己の力量に従って受用する。

前世の悪業を消し除き、前世の悪習を消し除く。

また、余力が有れば、考えてから、他人に及ぼし、知という縁を結び、自己の足を錬磨して純熟する。

例えるならば、荒れている雑草の中から一人前や半人前(の『草』、『修行者』)を選び取るような物である。

同じく存在している事を知り、共に生死を解脱し、転じて未来の利益と成る事をして仏祖の深い恩に報いる。

やむをえなければ、霜や露のように儚くても結果が熟したら、考えてから、俗世に出現して、縁に応じて、相手に合わせて、人や天人を開いて托して、終に、心を欲求にとらわれない。

まして、どうして、権力者に依存したり、俗人の似非僧侶と成ったり、凡人を欺き聖者をないがしろにする振る舞いをしたり、名声と利益を求めたり、無間地獄落ちの悪業をなしたりするだろうか? いいえ!

たとえ、『機縁』、『仏教を求める素質や仏教を教えてもらう縁』が無くても、ただ、このように、世を渡って、悪業の結果を生じなければ、真の出家者、阿羅漢であろう」と言った。

今で言う所の「本来の僧」が、「真の出家者、阿羅漢」なのである。
夾山の圜悟克勤の言葉によって、阿羅漢の性質と相を知るべきである。
西のインドの経典の似非(えせ)学者などの言葉を妄りに認める事なかれ。
東の地の中国の、夾山の圜悟克勤は、仏法を正統に正しく伝えられた仏祖なのである。

洪州の百丈山の、大智禅師と呼ばれる三十六祖の百丈の懐海は「眼耳鼻舌(身意)の各々で一切の『この世』に有ったり無かったりする諸法に汚染されず貪らない事を、真理の四句の詩を受けて保持していると言い、『四果』を得たと言う」と言った。

今の自己や他のものとは無関係である眼耳鼻舌身意と、その「頭が正しいので尾も正しい」事は、はかり究める事ができない。
このため、渾身は自(おの)ずから「汚染されず貪らない」のである。
「渾一切の『この世』に有ったり無かったりする諸法に汚染されず貪らない」のである。
「真理の四句の詩を受けて保持している」事が自(おの)ずから渾渾(こんこん)と尽きない事を「汚染されず貪らない」と言うし、「『四果』を得たと言う」。
「四果」とは「阿羅漢」である。
そのため、今、形成されて現されている眼耳鼻舌身意は、阿羅漢なのである。

「構本宗末」、「本を構え、末も宗とする事」は、自ずから「透脱」、「透体脱落」、「煩悩を透過して脱ぎ落とす事」である。
「始到牢関」、「初めて要衝の地である『虎牢関』に到達した」のは、「真理の四句の詩を受けて保持した」時であり、「『四果』を得た」時である。
「透頂透底、全体現成」、「頂上まで奥底まで、透過して脱ぎ落とし、全体が形成されて現される」と、さらに、わずかな残り漏れも無いのである。

最終的に、阿羅漢について言おう。
どう言おうか?
「阿羅漢が凡人であった時は、『諸法』、『全てのもの』が妨げていた。阿羅漢が聖者に成った時は、『諸法』、『全てのもの』が解脱させてくれると知るべきである。
阿羅漢と『諸法』、『全てのもの』は(阿羅漢果に)同時に参入したのである。既に阿羅漢を証した(、と言った)ら、阿羅漢に妨げられる。
そのため、釈迦牟尼仏よりも過去の仏である『空王仏』以前からの老いたる『拳頭』、『拳』なのである」

正法眼蔵　阿羅漢

その時、千二百四十二年、雍州の宇治郡の観音導利興聖宝林寺に住んでいて僧達に示した。

栢樹子

趙州真際大師は、釈迦如来、釈迦牟尼仏から三十七代目である、三十七祖である。

趙州真際大師は、六十一歳で、初めて、悟りを求める事を思い立って心して、出家して仏道を学び修行した。

趙州真際大師は、この時、「七歳の児童であっても、もし私よりも優れていれば質問する。百歳の老人であっても、もし私に及ばなければ教える」と言って、誓って、南方へ雲のように漂って旅した。

趙州真際大師は、仏道をたずねていった時に、南泉山に至って、南泉普願を礼拝した。

南泉普願は、その時、部屋の中で横に成っていて、趙州真際大師が来ると、「どこから来ましたか？」と質問した。

趙州真際大師は、「瑞像院です」と言った。

南泉普願は、「『瑞像』、『仏像といった、めでたい像』を見ましたか？」と言った。

趙州真際大師は、「『瑞像』、『仏像といった、めでたい像』は見ませんでしたが、(今、)横に成った如来(である南泉普願)を見ています」と言った。

南泉普願は、その時、起きて、「あなたは師がいる出家者ですか？　師がいない出家者ですか？」と質問した。

趙州真際大師は、「師がいる出家者です」と答えた。

南泉普願は、「あなたの師は誰ですか？」と言った。

趙州真際大師は、「初春はまだ寒いです。和尚様、南泉普願様の御体の様子が健康そうであるのは喜ばしい、と切に思います」と言った。

南泉普願は、庶務を司る「維那」の僧を呼んで、「この出家者について、僧が修行のために留まる場所である『別所』における手配をしなさい」と言った。

趙州真際大師は、このようにして、南泉普願の所に留まり、さらに他の場所へ行かなかった。

趙州真際大師は、三十年、道をわきまえる鍛錬をした。

趙州真際大師は、わずかな時間も虚(むな)しく過ごさず雑用に浪費しなかった。

趙州真際大師は、終(つい)に仏道を伝えられ業(わざ)を授けられた後、さらに三十年、趙州の観音院に住んだ。

趙州真際大師の、観音院という寺の主としての様子は、普通の諸方の寺の主の様子とは異なっていた。

趙州真際大師は、ある時、「(食べ物が無くて、)四方の隣人達が食べ物を煮炊きして起こす煙と火をいたずらに無駄に眺める。
饅頭や、餅類や団子類は、去年から口にできていない。
今日、(食べ物や、饅頭や、餅類や団子類を)思い出して、空しく唾を飲む。
禅定に専念する事は少なく、嘆く事はしきりにする。
周囲の百軒の家の人の中には善人はいない。
来る者と言えば、『茶を飲みたい』と言う者だけであり、茶を出しても食べ物が無くて食べさせる事ができなければ去る上に怒る」と言った。

憐れむべきである。
趙州真際大師は、(食べ物が無くて、)食べ物を煮炊きする煙と火を起こす事は稀であり、一品の副食物を食べる事すら少なかった。
趙州真際大師は、饅頭や、餅類や団子類は、去年から口にできていないほどであった。
周囲の百軒の家の人が来ても茶を求めるだけであった。茶を求めない者は来る事すらなかった。
茶を持ってくる人は、周囲の百軒の家の人ではないだろう。趙州真際大師という賢者を見に来た僧であろう。
趙州真際大師という賢者を見に来た僧はいても、趙州真際大師と同じように厳しい修行をしようと思う竜や象の様な高徳の僧はいなかったのだろう。

また、趙州真際大師は、ある時、「天下世界の出家者を考えても、私に似た、寺の主である僧が、どれだけいるだろうか？
土の寝台と、破れた葦(アシ)の簾(すだれ)と竹の敷物。楡(ニレ)の老木の枕には全く覆いが無い。
仏像のために安息香を焼く事もできない。
炉の灰の中には牛の排泄物の臭いだけがする」と言った。
(乾燥させた牛の排泄物を燃料に利用する場合が有る。)

これらの言葉によって、趙州真際大師の寺の潔白さを知る事ができる。
今、趙州真際大師の行跡を学び習うべきである。
「趙州真際大師の寺は、僧が多くなく、二十人に満たない」というのは、
(厳しい修行を)能(よ)くするのが難しい事による物である。
趙州真際大師の寺は、僧堂が大きくなく、棚が無かった。
趙州真際大師の寺は、夜間は明かりが無く、冬は炭火による暖房が無かった。
憐れむべき老後の生涯と言えるだろう。
古代の仏と等しい趙州真際大師の常日頃の行いとは、このような物であった。

ある時、椅子(イス)の脚が折れたが、趙州真際大師は一つの焼き切れた焼き残りの木を縄によって椅子(イス)に結びつけて幾年月も経歴して修行していたので、寺で事務を司る「知事」の僧が椅子(イス)を新しい物に換えようとしたが、趙州真際大師は許さなかった。
世にも稀(まれ)な優れた行跡である。

趙州真際大師は、常日頃、「解斎」しても米の粒が全く見えない薄い粥を食べ、空しく静かな窓と隙間の塵に対峙したのである。

また、趙州真際大師は、木の実を拾って、自身と僧達の、常日頃の食事として、毎日、使用して生活した。

今の後進の者は、趙州真際大師の常日頃の行いをたたえて、趙州真際大師の常日頃の行いに及ばないけれども、古代の趙州真際大師を慕うのを心の術としているのである。

趙州真際大師は、ある時、僧達に示して、「私、趙州真際大師は、南方に三十年いたが、一筋に坐禅した。あなた達、皆、(悟るという)一大事を会得しようと思うならば、真理を究めるために坐禅してみるべきである。三年、五年、二十年、三十年、坐禅して、『道』、『真理』を会得できなければ、老僧である私の『頭』、『首』をとって、柄杓を作って、小便を汲みなさい」と言って、誓ってあげた。

実に、坐禅して「道」、「真理」をわきまえるのは、仏道の近道である。真理を究めるために坐禅してみるべきである。

後に、人々は、「趙州真際大師は、古代の仏と等しい(人である)」と言った。

ある僧が、ある時、趙州真際大師に「『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図は、どういう物でしょうか？」と質問した。
趙州真際大師は、「庭先の栢樹(子)である」と言った。
ある僧は、「和尚様、趙州真際大師様、知覚の対象によって人に示す事なかれ」と言った。
趙州真際大師は、「私は、知覚の対象によって人に示さない」と言った。
ある僧は、(再び、)「『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図は、どういう物でしょうか？」と言った。
趙州真際大師は、(再び、)「庭先の栢樹(子)である」と言った。

この一つの「公案」、「修行者の手がかりとしての仏祖の言動」は、趙州真際大師が起こしたが、極論すると、諸仏の渾身によって作り出されて来た物であるので、誰か一人の仏祖だけが主である言動とは言えない。

知るべきである道理は、「庭先の栢樹(子)が、知覚の対象というだけではない」という主旨である。
「『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図が、知覚の対象というだけではない」という主旨である。
「栢樹(子)が、自己(の心を意味している)というだけではない」という主旨である。
「和尚、趙州真際大師よ、知覚の対象によって人に示す事なかれ」であるので。

また、「私は、知覚の対象によって人に示さない」ので。

どの和尚が和尚自身によって遮られるだろうか？

遮られなければ、自分である。

どの自分が自分自身によって遮られるだろうか？

たとえ遮られても、人である。

どの知覚の対象が「祖師西来」、「達磨が西のインドから中国へ来た事」の意図に遮られるだろうか？　いいえ！　知覚の対象は必ず「祖師西来」、「達磨が西のインドから中国へ来た事」の意図であるので。

けれども、「祖師西来」、「達磨が西のインドから中国へ来た事」の意図は、知覚の対象と関連して存在しているわけではない。

「祖師西来」、「達磨が西のインドから中国へ来た事」の意図は、必ずしも、「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼を持ち寂滅した妙なる心を持つ事」ではない。

「祖師西来」、「達磨が西のインドから中国へ来た事」の意図は、心ではないし、仏ではないし、物ではない。

ある僧が「『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図は、どういう物であるのか？」と言ったが、ある僧が質問しただけではないが、ある僧と趙州真際大師の二人が同じく見る事ができ得たわけではない。

「『祖師西来』、『達磨が西のインドから中国へ来た事』の意図は、どういう物であるのか？」と質問された時、一人も未だ見る事ができていないし、どれくらい自己も能く会得できているだろうか？

さらに言うと、相手が正しくないわけではない。

このため、錯綜（さくそう）するのである。

錯綜（さくそう）するので、誤りを誤りとするのである。

虚（うつ）ろを受けて響きを接（つ）ぎ合わせている！

広い心の持ち主は背を向けないので、「庭先の栢樹(子)」なのである。

知覚の対象でなければ、栢樹(子)であるはずがない。

(栢樹子は知覚の対象である。)

たとえ知覚の対象であっても、「私は、知覚の対象によって人に示さない」なのであるし、「和尚、知覚の対象によって人に示す事なかれ」なのである。

古くから有る祠（ほこら）(の栢樹子)ではない。

古くから有る祠（ほこら）(の栢樹子)ではないので、埋没していくのである。

埋没していくので、相変わらず私の鍛錬が起こるのである。

相変わらず私の鍛錬が起こるので、「私は、知覚の対象によって人に示さない」なのである。

さらに、何によって人に示すのか？

「私もまた、その様である」なのである。

ある僧が、趙州真際大師に、「栢樹に、仏と成れる性質は有るのか？　無いのか？」と質問した。

趙州真際大師は、「(栢樹に、仏と成れる性質は、)有る」と言った。

ある僧は、「栢樹は、いつ仏と成るのか？」と言った。

趙州真際大師は、「虚空が地に落ちる(時)を待って(、栢樹は仏と成るの)である」と言った。

ある僧は、「虚空は、いつ地に落ちるのか？」と言った。

趙州真際大師は、「栢樹(子)が仏に成る(時)を待って(、虚空は地に落ちるの)である」と言った。

趙州真際大師の言葉を聴いて理解して取るべきであるし、ある僧の質問を捨てないべきである。

趙州真際大師は、「虚空が地に落ちる時」と「栢樹が仏と成る時」と言ったが、「栢樹と虚空は、相互に関連して存在している」と言っているわけではない。

ある僧は、栢樹について質問したし、仏と成れる性質について質問した。

ある僧は、仏と成る事について質問したし、仏と成る時について質問した。

ある僧は、虚空について質問したし、虚空が地に落ちる事について質問した。

趙州真際大師は、ある僧に向かって「有る」と言ったが、「栢樹に、仏と成れる性質は、有る」と言ったのである。

「栢樹に、仏と成れる性質は、有る」という言葉に通達して、仏祖の命に滞(とどこお)りなく円滑に通達するべきである。

「栢樹に、仏と成れる性質は、有る」と言うのは、普通は言う事ができ得ないし、未だかつて言われた事が無い。

「栢樹に、仏と成れる性質は、有る」のであり、その有様（ありよう）を明らめるべきである。

「栢樹に、仏と成れる性質は、有る」のだが、栢樹の地位は、高いのか？　低いのか？　どうだろうか？

栢樹の寿命や身の量の長短を尋ねるべきである。

栢樹の血筋や一族を訊（き）くべきである。

さらに、百、千の無数の栢樹は皆、同じ血筋であるのか？　別の血筋であるのか？

仏と成った栢樹がいたり、修行している栢樹がいたり、悟りを求める事を思い立って心した栢樹がいたりするのだろうか？

栢樹は仏と成るが、修行や、悟りを求める事を思い立って心する事などを十分に備える必要が無いのか？

栢樹と虚空には、どんな因縁が有るのか？

栢樹が仏と成る時は必ず虚空が地に落ちる時を待つのは、栢樹が樹立した功徳は必ず虚空であるからなのか？

栢樹の地位は、虚空の、「初地」、「菩薩の最初の地位」であるのか？　「果位」、「仏果位」、「無上の仏の地位」であるのか？　明確に詳細に鍛錬して参入して究めるべきである。

私、道元は、「あなた、趙州真際大師もまた、一本の栢樹の枯木であるので、栢樹の様子、消息に通じているのか？」と質問する。

「栢樹に、仏と成れる性質は、有る」というのは、外道や「二つの乗り物」の段階などの人々の境地ではないし、経典の似非(えせ)学者が実際に見聞きできる物ではない。

「枯木死灰」、「枯木や火が消えて冷えた灰の様に心が死んでいる人」の言葉の華によって「栢樹に、仏と成れる性質は、有る」という言葉が開演されるだろうか？　いいえ！

ただ趙州真際大師のような種類の者達だけが「栢樹に、仏と成れる性質は、有る」という学に参入して究める事ができるのである。

趙州真際大師は「栢樹に、仏と成れる性質は、有る」と言ったが、栢樹は栢樹によって遮(さえぎ)られるのか否か？　仏と成れる性質は仏と成れる性質によって遮(さえぎ)られるのか否か？

「栢樹に、仏と成れる性質は、有る」という言葉は、未だ一人や二人の仏だけが究め尽している物ではない。(諸仏が究め尽している物である。)

仏の面が有る者が必ずしも「栢樹に、仏と成れる性質は、有る」という言葉を究め尽す事ができ得るわけではない。

たとえ諸仏の中でも、言う諸仏もいるし、言わない諸仏もいる。

「虚空が地に落ちる(時)を待って(、栢樹は仏と成るの)である」と言うのは、有り得ない事を言っているわけではない。

栢樹(子)が仏と成るたびに毎度、虚空は地に落ちるのである。

虚空が地に落ちた響きは隠れておらず、百、千の無数の雷を超越している。

「栢樹(子)が仏に成る時」(、「虚空が地に落ちる時」)とは、暫定的に一日の中であるが、さらに別に、一日を超越している。

地に落ちる虚空とは、凡人や聖者の所見の虚空だけではない。凡人の所見などの虚空の他に、一欠片の虚空が有り、他の人には見えない物であるが、趙州真際大師、独りだけが見るのである。

虚空が落ちる先の地とは、凡人や聖者が所有する地だけではない。凡人などが所有する地とは別に更に、一欠片の地が有り、月と太陽といった陰陽は到達できないが、趙州真際大師、独りだけが到達するのである。

「虚空が地に落ちる時」を、たとえ太陽や月や山や河であっても、「待って仏と成るのである」。

誰が「仏と成れる性質は必ず仏と成る」と言う事ができるのか？仏の性質とは、仏と成った後、以降の荘厳なのである。

さらに、仏と成った時に、同じく生じるし、同じく参入する、仏の性質も有る。

そのため、栢樹と、仏に成れる性質は、「異音同調」、「音は異なるが意味は同じである」わけではない。

人々の為(ため)に言うと、「(栢樹は仏と成るのに虚空が地に落ちる時を待つ必要は、)必ずしも必要ではないが、どうだろうか？」として参入して究めるべきである。

正法眼蔵　栢樹子

千二百四十二年、雍州の宇治郡の観音導利院にいて僧達に示した。

光明

唐の時代の中国の湖南の、招賢大師と呼ばれる長沙景岑は、堂に上って、僧達に示して、「尽十方界は、『沙門』(、『修行者』である自己)の眼である。
尽十方界は、『沙門』(、『修行者』である自己)の日常の言葉である。
尽十方界は、『沙門』(、『修行者』である自己)の全身である。
尽十方界は、自己の光明である。
尽十方界は、自己の光明の中に在る。
尽十方界が自己ではない者は一人もいない」と言った。

仏道の学に参入している者は必ず長沙景岑の言葉を学ぶ事に勤めるべきである。
長沙景岑の言葉の学に、うたた、ひどく、疎遠(そえん)であるべきではない。
長沙景岑の言葉の学に疎遠(そえん)なので、光明を学んで会得した者は稀(まれ)なのである。

後漢の時代の中国の、明帝、孝明皇帝は、帝諱が荘であり、廟号は顕宗と言う。
光武帝の第四子である。

明帝の時代の、六十八年に、迦葉摩騰と竺法蘭が後漢の時代の中国に初めて仏教を伝来した。
焚経台の前で、道教の道士の邪悪な輩を降伏して、諸仏の神の力を表した。
（焚経台で道教の書物と仏教の経典を燃やしたら、道教の書物は燃えたが、仏教の経典は燃えなかった、という逸話が有る。）

その後、梁の武帝の時代の、五百二十七年頃、二十八祖の達磨が自ら西のインドから南海を経て中国の広州へ渡航した。
達磨は、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を正しく伝える正統な後継者であり、釈迦牟尼仏から二十八代目である、二十八祖である、釈迦牟尼仏の法の子孫である。
五百二十七年に、達磨は、嵩山の少室峰の少林寺に一時的に滞在した。
二十八祖の達磨は、法を二十九祖の慧可に正しく伝えた。
二十八祖の達磨が法を二十九祖の慧可に伝えたのが、仏祖の光明が、かつて、親しく成った時である。
二十八祖の達磨が法を二十九祖の慧可に伝える以前は、仏祖の光明を見聞きする事ができなかった。
まして、自己の光明を知る事が有ったであろうか？　いいえ！
たとえ自己の光明を頂上から担（にな）って来て出会っても、自己の「眼睛」、「見る眼」の学に参入できなかった。
このため、光明の長短や角（かく）ばっている丸いを明らめる事ができなかったし、光明の進退や手中に収めたり手放したりするのを明らめる事ができなかった。
（
原文の「巻舒」は「進退」などを意味する。

原文の「斂」は「収める」などを意味する。

光明との出会いを嫌って捨ててしまっていたので、光明と光明は、うたた、
）
ひどく、疎遠であった。

光明と光明の疎遠が、たとえ光明であっても、疎遠によって遮られてしまうのである。

光明と、うたた、ひどく、疎遠である臭い皮袋である人は、誤って「仏の光も、自己の光明も、赤、白、青、黄といった色の(普通の)光であり、火の光や水の光のような物であろうし、宝玉の光のような物であろうし、天や龍の光のような物であろうし、太陽や月の光のような物であろう」という見解を思ってしまう。

善知識を持つ人々によって見聞きしたり、経典によって見聞きしたりしても、「光明」という言葉による仏祖の教えを聞くと、誤って「蛍の光のような物であろう」と思ってしまう人は、「眼睛」、「見る眼」や「頂上」の学に参入していない。

漢の時代から、隋、唐、宋の時代を経て、今に至るまで、このような類の者だけが多い。

霊感が無い文字だけの経典の似非学者に習い学ぶ事なかれ。

似非僧侶の、いかがわしい説を聞くべきではない。

仏祖の光明とは、尽十方界であるし、

尽仏祖であるし、
「仏と仏だけ(が能く究め尽せる、諸法の実の相)」であるし、
仏の光であるし、
光の仏である。

仏祖は仏祖を光明としている。
仏祖の光明を修行して証して、仏と成るし、坐禅している仏として坐禅するし、仏を証する。

このため、「法華経」の「序品」には「(釈迦牟尼仏の)光は、東方の一万八千の仏土を照らした」と記されている。

「(釈迦牟尼仏の)光は、東方の一万八千の仏土を照らした」という話自体が光である。
「東方の一万八千の仏土を照らした」光とは、仏の光、釈迦牟尼仏の光である。

東方を照らしたのは、東方が照らすからである。
(東方は太陽が昇る。)
東方は、あれこれの俗の論理とは無関係であり、法界の中心であるし、
「拳頭」、「拳」の中央である。
東方を遮(さえぎ)っても、光明の八両である。

（一斤は十六両。半斤は八両。）

この地に東方が有るし、他の地に東方が有るし、東方に東方が有る主旨の学に参入するべきである。

「一万八千」と記されているが、「一万」は「拳頭」、「拳」の半分であるし、「即心(是仏)」の半分であり、必ずしも千の十倍ではないし、一万の一万倍や百万などではない。

仏土とは、「眼睛」、「見る眼」の中である。

「東方を照らした」という言葉を見聞きして、一筋の白い練り絹を東方へ行き渡らせるような光景を推測して想像するのは、仏道を学んでいない。尽十方界は東方だけなのであり、「東方」を「尽十方界」と言っているのである。

このため、尽十方界は在るのである。

「尽十方界」と開演する話を、「(東方の)一万八千の仏土」という言葉として聞くのである。

唐の時代の中国の、憲宗皇帝は、穆宗と宣宗、両皇帝の父であり、敬宗、文宗、武宗、三皇帝の祖父である。

憲宗が、(八百十八年に、法門寺の、)釈迦牟尼仏の遺骨である「仏舎利」を(長安の)宮中に迎え入れて供養した夜、何かが光明を放つ事が有った。

憲宗は大いに喜んだ。
早朝、群臣は皆、「憲宗様の神聖な徳を神聖な者が感心した(事による光明な)のである」という祝いの言葉を憲宗に述べた。

その時、一人の臣下、文公と呼ばれる韓愈がいた。
韓愈は、字は退之と言う。
韓愈は、かつて、仏祖の会の末席として学に参入していた。
韓愈は、独りだけ、祝いの言葉を憲宗に述べなかった。

憲宗は、「群臣は皆、祝いの言葉を述べてくれたのに、韓愈は、なぜ祝いの言葉を述べてくれないのか？」と質問した。
韓愈は、「私が、かつて仏教の書物を見た時、『仏の光は、青、黄、赤、白の(普通の)光ではない』と記されていたからです。今回の光明は、(仏の光ではなく、)龍神が護衛している事による光明です」と答えた。
憲宗は、「仏の光とは、どういった物であるのか？」と質問した。
韓愈は、答え(られ)なかった。

韓愈は、在俗者であるが、一人前の志が有る。
韓愈は、天地を回転させるような才能の持ち主であると言える。
「仏の光は、青、黄、赤、白の(普通の)光ではない」として学に参入するのが、仏道を学ぶ初心なのである。
「仏の光は、青、黄、赤、白の(普通の)光ではない」として学ばないのは、道を外れている。

たとえ経典の講義をして天の華を降らしても、「仏の光は、青、黄、赤、白の(普通の)光ではない」という道理に未だ到達しないのは、いたずらな無駄な鍛錬なのである。

たとえ未熟な修行者であっても、韓愈と同様に話せる、仏の「広長舌」を保持させられ任せられた時は、悟りを求める事を思い立って心しているのであるし、修行して証しているのである。

けれども、韓愈には、なお、仏教の書物を見聞きしていない所が有った。韓愈は、「仏の光は、青、黄、赤、白の(普通の)光ではない」と言ったが、仏の光とは、どういった物である、と学んできたのか？

もし憲宗が仏祖であったら、「韓愈よ、もし青、黄、赤、白の(普通の)光を見て、『仏の光ではない』と学に参入する力が有るならば、さらに、仏の光を見て、『青、黄、赤、白の(普通の)光である』とする事なかれ」という質問が有るだろう。

明らかな光明は「百草」、「森羅万象」である。

「百草」、「森羅万象」の光明は、既に根、茎、枝、葉、華、果実、光、色であり、未だ与えたり奪ったりしていない。

「地獄、餓鬼、畜生、人間、天」という「五道」の光明が有るし、「地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天」という「六道」の光明が有る。

これらの中は、どんな場所なので、光明を説くのか？

どうして山や河や大地は生じるのか？　なのである。

長沙景岑の「尽十方界は、自己の光明である」という言葉の学に明確に詳細に参入するべきである。
光明、自己、尽十方界の学に参入するべきである。

生と死が来たり去ったりするのは、光明が来たり去ったりするからである。

凡人や聖者を超越するのは、光明の青、赤である。
仏祖と成るのは、光明の黒、黄である。
修行と証は無いわけではないが、光明を汚染するのは駄目である。
草木や、牆壁や、「皮肉骨髄」、「理解」は、光明の赤、白である。
煙と霞（かすみ）がかかったように霞（かす）む自然の景色や、「水石」、「山水の情景を見せて楽しませる物」や、鳥が行き来する道や、奥深い仏道は、光明の循環である。
自己の光明を見聞きするのは、仏に出会った証拠であるし、仏を見た証拠である。
尽十方界は自己であるし、自己は尽十方界であるので、回避する余地は無い。
たとえ回避する余地が有っても、それは「出身」、「解脱」の活路である。
今の「髑髏七尺」は尽十方界の形である。
（
「髑髏」とは「頭蓋骨」である。
一尺は約三十センチメートル。
）

仏道を修行し証する尽十方界は、髑髏と形骸や、「皮肉骨髄」、「理解」である。

雲門山の、大慈雲匡真大師と呼ばれる雲門文偃は、如来、釈迦牟尼仏の法の子孫である。

(原文は「雲門山、大慈雲匡真大師は、如来、世尊より三十九世の児孫なり」。)

雲門文偃は、真覚大師と呼ばれる雪峰義存の法を嗣いだ。

雲門文偃は、仏(祖)達の後進の者であるが、祖師達の中の英雄である。

誰が「雲門山には、光明の仏が未だかつて世に出現した事が無い」と言うだろうか？　いいえ！

雲門文偃は、ある時、堂に上って、僧達に示して、「人々には尽く光明の存在が有る。(しかし、光明の存在を)見る時は、暗くて昏昏として、見えない。『諸々の人々の光明の存在』とは、どういったものであるのか？」と言った。

僧達は、答えなかった。

雲門文偃は、自ら、代わりに、「(『諸々の人々の光明の存在』とは、)僧堂、仏殿、廚庫、三門である」と言った。

雲門文偃は「人々には尽く光明の存在が有る」と言ったが、「後に出現する」とは言わなかったし、「過去世に有った」とは言わなかったし、「無関係に形成されて現される」とは言わなかった。

「人々には光明の存在が自ら有る」と言っている事を明らかに聞いて保持するべきである。

百、千の無数の僧を集めて同じく参入させて、声をそろえて「人々には光明の存在が自ら有る」という同じ言葉を言わせるのである。

「人々には尽く光明の存在が有る」とは、雲門文偃の自作ではなく、人々の光明が自ら光をひねって人々の為に言っているのである。

「人々には尽く光明が有る」とは、「全ての人には自ら光明が存在する」という事である。

光明とは人々である。

光明をひねって会得して、身体が依り所とする環境としての報いである「この世」と過去の行いの正に報いである身心としている。

「光明には尽く人々の存在が有る」し、

「光明には自ら人々が存在する」し、

「人々には人々の存在が自ら有る」し、

「光々には光々の存在が自ら有る」、「光達には光達の存在が自ら有る」し、

「有有と、尽く、有有とした存在が有る」し、

「尽尽、尽尽の存在が、有有としている」。

そのため、知るべきである。

人々に尽く有る光明とは、形成されて現されている人々なのである。

光々とは、尽く有る人々なのである。光達とは、尽く有る人々なのである。

道元は、雲門文偃に、「あなたは、何ものを『人々』と呼んで人々としているのか？　何ものを『光明』と呼んで光明としているのか？」と質問する。

雲門文偃は、自ら、「『(諸々の人々の)光明の存在』とは、どういったものであるのか？」と言った。

雲門文偃の、この質問は、話を疑う光明と成る。

けれども、このように言ったために、「人々とは光々である」、「人々とは光達である」、「人とは光である」と成る。

雲門文偃が質問した時、僧達は、答えなかった。

たとえ、百、千に無数に、「道」、「真理」を会得して言い表す事ができても、無言の答えをひねって言い表すのである。

これが、仏祖が正しく伝えている「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼と寂滅した妙なる心」なのである。

雲門文偃は、自ら、代わりに、「(『諸々の人々の光明の存在』とは、)僧堂、仏殿、廚庫、三門である」と言った。

「雲門文偃は、自ら、代わりに、言った」とは、「雲門文偃は、自ら、雲門文偃に代わって、言った」のであるし、

「雲門文偃は、自ら、僧達に代わって、言った」のであるし、

「雲門文偃は、自ら、光明に代わって、言った」のであるし、

「雲門文偃は、自ら、『僧堂、仏殿、廚庫、三門』に代わって、言った」のである。

けれども、雲門文偃は、何ものを「僧堂、仏殿、廚庫、三門」と呼んで、僧堂、仏殿、廚庫、三門とするのか？

僧達や人々を「僧堂、仏殿、廚庫、三門」と呼んで、僧堂、仏殿、廚庫、三門とする事はできない。

どれほどの僧堂、仏殿、廚庫、三門が有るのか？

僧堂、仏殿、廚庫、三門とは、雲門文偃である、とするのか？

僧堂、仏殿、廚庫、三門とは、過去七仏である、とするのか？

僧堂、仏殿、廚庫、三門とは、二十八祖の達磨である、とするのか？

(原文は「四七なりとやせん」。)

僧堂、仏殿、廚庫、三門とは、三十三祖の大鑑禅師である、とするのか？

(原文は「二三なりとやせん」。)

僧堂、仏殿、廚庫、三門とは、「拳頭」、「拳」である、とするのか？

僧堂、仏殿、廚庫、三門とは、「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」である、とするのか？

たとえ、僧堂、仏殿、廚庫、三門が、どの仏祖であっても、人々を免れない者である。

このため、僧堂、仏殿、廚庫、三門とは、人々ではない。

僧堂、仏殿、廚庫、三門とは人々ではない時から今まで、仏殿は有るが仏はいない場合が有るし、仏殿も無いし仏もいない場合が有る。

光が有る仏がいるし、光が無い仏がいる。

仏がいない光が有るし、仏がいる光が有る。

真覚大師と呼ばれる雪峰義存は、僧達に示して、「僧堂の前で、諸々の人々と見（まみ）えた」と言った。

「僧堂の前で、諸々の人と見（まみ）えた」とは、雪峰義存の「通身」、「全身」が「眼睛」、「見る眼」である時であるし、
雪峰義存が雪峰義存を見た時であるし、
僧堂が僧堂と見（まみ）えたのである。

保福従展は、雪峰義存の言葉を挙げて、鵝湖智孚に、「『僧堂の前』は、一時、置いておく。『望州亭と烏石嶺で見（まみ）えた』とは、どこで見（まみ）えたのであろうか？」と質問した。

鵝湖智孚は、速歩きで部屋に帰った。

保福従展は、僧堂に入った。

鵝湖智孚が部屋に帰り、保福従展が僧堂に入ったのは、話の「出身」、
「解脱」であるし、
奥底まで見（まみ）えた道理であるし、
僧堂と見（まみ）えたのである。

地蔵院の、真応大師と呼ばれる羅漢桂琛は、「食事を司る『典座』の僧は、寺の台所である『庫堂』に入った」と言った。

この話は、過去七仏以前の事なのである。

正法眼蔵　光明

千二百四十二年、夜、観音導利興聖宝林寺で僧達に示した。
その時、梅雨はしとしとと何日も降っていて、庇(ひさし)の先から点々と滴(したた)っている。
「光明の存在」とは、どういったものであろうか？
皆、雲門文偃の言葉に見破られる事を未だ免れる事ができない。

身心学道

仏道は、道を外れると、会得できないし、学ばないと、うたた、ひどく、遠く成ってしまう。

大慧禅師と呼ばれる三十四祖の南嶽の懐譲は、「修行と証が無いわけではないが、汚染するのは駄目である」と言った。

仏道を学ばなければ、外道や、「一闡提」、「仏法を信じない者」などの邪道に堕ちてしまう。

このため、前の仏も、後の仏も、必ず、仏道を修行するのである。

仏道を学び修行するのに、暫定的に二つ有る。
心によって仏道を学び修行し、身によって仏道を学び修行するのである。

「心によって仏道を学び修行する」とは、あらゆる諸々の心によって学ぶのである。

あらゆる諸々の心とは、

「質多心」(、「慮知心」)や、(「質多」はサンスクリット語で「心」を意味する。)

「汗栗駄心」(、「草木心」)や、(「汗栗駄」はサンスクリット語で「心臓」を意味する。)

「矣栗駄心」(、「積聚精要心」)などである。

(「正法眼蔵」の「発菩提心」に「おほよそ、心三種あり。一者、質多心、此方称、慮知心。二者、汗栗多心、此方称、草木心。三者、矣栗多心、此方称、積聚精要心」と記されている。)

また、「感応道交」、「通じ合う事」をして、「菩提心」、「悟りを求める心」を起こした後、仏祖の大いなる道に帰依し、「発菩提心」、「発心」、「悟りを求める事を思い立って心する事」の旅を習い学ぶのである。

たとえ未だ真実の「菩提心」、「悟りを求める心」が起こらなくても、先に「菩提心」、「悟りを求める心」を起こした仏祖の法を習うべきである。

これが、「発菩提心」、「発心」、「悟りを求める事を思い立って心する事」であるし、

全くの真心であるし、

古代の仏の心であるし、

平常心であるし、

「三界一心」(、「三界唯心」、「三界唯一心」)である。

これらの心を放り下ろして仏道を学び修行する者がいるし、

これらの心をひねって挙げて仏道を学び修行する者がいる。

この時、思量して仏道を学び修行するし、

「不思量(を思量)して」、「今は思考できない思考を思考しようとして」、仏道を学び修行する。

また、「金襴衣」、「金糸で模様を織り入れた法衣」を正しく伝え、「金襴衣」を受ける。

(釈迦牟尼仏が法と共に金襴衣を初祖の摩訶迦葉に伝えた、という逸話が有る。)

また、二十八祖の達磨は二十九祖の慧可に「あなたは私の髄を得た」と言ったし、二十九祖の慧可は二十八祖の達磨を三回、礼拝した後、自分の位置、居場所に戻って立った。

三十三祖の大鑑禅師が米をつき、三十二祖の弘忍が三十三祖の大鑑禅師に衣(と器)を伝えたのは、心によって心を学んだのである。

「剃髪染衣」、「髪を剃(そ)り法衣を着る事」、「出家する事」は、「回心」、「改心」であるし、心を明らめる事である。

「踰城し」、「出家踰城し」、「王子であった釈迦牟尼仏が家である城を出て」、山に入ったが、「(三界)一心」を出て「(三界)一心」に入ったのである。

出家者が山に入るのは、「かの不思量の奥底を思量している」、「今は思考できない思考を思考しようとしている」のである。

出家者が俗世を捨てるのは、「非思量」、「思考できるであろうか等と思考しないで、とにかく思考するのである」、「できるか心配せずに、とにかく行うのである」。

これを二、三斛の「眼睛」、「見る眼」に円(まる)くまとめてきたし、

これを「千万端」、「千緒万端」、「千、万のきっかけ」において業(ごう)で理解を弄(もてあそ)んできた。

(一斛は約百八十リットル。)

このように仏道を学び修行すると、「功」、「鍛錬」が有る者に「賞」、「成果」は自(おの)ずと来るし、

「賞が有る」、「成果が出る」までに「功」、「鍛錬」が未だ至らなくても、密(ひそ)かに仏祖の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」を借りて息を吐かせて、驢馬(ロバ)の脚の蹄(ひづめ)をひねって印を証させるのは、非常に古くからの手本である。

暫定的に、山と河と大地と、太陽と月と星々は、心である。

この時、どういった保持させられ任せられたものが目の前に現れるのか?

山と河と大地と言うが、山と河は、例えば、「山」と「水」である。

大地は、この世だけではない。

山も多い。

大いなる須弥山と小さな須弥山が有る。

身を横に置くものもあるし、身を縦に置くものもある。

三千界が有る。

無量の国が有る。

色にかかるものもあるし、空(くう)にかかるものもある。

河も、さらに、多い。

天の河が有るし、地の河が有るし、「中国の四大河」が有るし、阿耨達龍王が住む「無熱池」、「阿耨達池」が有る。

須弥山の北の北倶盧洲には、四つの、阿耨達龍王が住む「無熱池」、「阿耨達池」が有るし、海が有るし、池が有る。

地は必ずしも土ではないし、土は必ずしも地ではない。
土による地も有るし、心による地も有るし、宝による地も有る。
全てのものといえども、地が有る。（全てのものの各々による地が有る。）
空（くう）を地とする世界も有る。

太陽と月と星々は、人が太陽と月と星々として見ている物と、天人が太陽と月と星々として見ているものは、異なる。
諸々の種類の者が太陽と月と星々として見ているものは異なる。

このため、「(三界)一心」が見るものだけが唯一普遍なのである。
山と河と大地と、太陽と月と星々は、既に、「(三界一)心」なのである。

「三界一心」は、内である、とするのか？
外である、とするのか？
来る、とするのか？
去る、とするのか？

生まれた時は、ものを一点、増やすのか？　増やさないのか？
死んだ時は、一つの塵（ちり）のようなものが去るのか？　去らないのか？
生死や生死の見解をどこに置こうとしているのか？

従来とは、心の一つや二つの思いに過ぎないのである。
一つや二つの思いとは、一つや二つの、山と河と大地なのである。
山と河と大地などは、存在している、無い、ではないし、

「大小」、「優劣」ではないし、
会得した、会得していない、ではないし、
理解した、理解していない、ではないし、
通じている、通じていない、ではないし、
悟っている、悟っていない、によって変わらない。

　このような心によって自ら仏道を学び修行する事を慣習とするのを、「心によって仏道を学ぶ」と言うと決定的に信じて受け入れるべきである。

　この信じて受け入れた事は、「大小」、「優劣」ではないし、存在している、無い、ではない。

　「知家非家、捨家出家」、「家が真の家ではないと知って、家を捨てて出家する事」による仏道を学び修行する事は、「大小」、「優劣」の量ではないし、
遠近の量ではないし、
始祖から末裔までに余るし、
「向上」、「進歩」や、「後退」に余る。

　「展事」、「事を展開して広げる事」が有り、「七尺、八尺」である。

　「投機」、「機会に投じる事」が有り、自他の為（ため）である。

　このようであるのが、仏道を学び修行する事である。

　仏道を学び修行する事は、このようであるので、「牆壁、瓦礫は心である」。

心は、さらに「三界唯心」ではなく「法界唯心」ではなく、「牆壁、瓦礫」である。

咸通年前に作り、咸通年後に破るのは、「拕泥帯水」、「人を救うために泥水にまみれる」なのであるし、「無縄自縛」、「縄(なわ)も無いのに自ら縛られて、とらわれてしまう事」なのである。

(咸通は八百六十年十一月から八百七十四年十一月までの中国の唐の時代の年号である。)

宝玉を引く力が有るし、水に入る能力が有る。

溶ける日が有るし、砕ける時が有るし、「極微」、「極小」に極まる時が有る。

寺の円柱と同じく参入しないし、灯籠と肩を並べない。

このようであるので、「素足で走るように」、「隠し事が無いように」、仏道を学び修行するのである。

誰が見守るだろうか?

「翻筋斗(もんどり)を打(う)って」、「空中で一回転して」、仏道を学び修行するのである。

各々、「他のものに従って去る」事が有る。

この時、壁が崩落すると十方を学ばせるし、門が無くなると「四面」、「四方」を学ばせる。

「発菩提心」、「発心」、「悟りを求める事を思い立って心する事」は、

生死によって、「発菩提心」を得る事が有るし、

「涅槃」、「寂滅」によって、「発菩提心」を得る事が有るし、

生死や「涅槃」、「寂滅」以外によって、「発菩提心」を得る事が有る。

「発菩提心」は、生死や「涅槃」、「寂滅」といった場所を待つわけではないし、

生死や「涅槃」、「寂滅」といった場所によって遮(さえぎ)られない。

「発菩提心」は、知覚の対象によって起こるわけではなく、

知によって起こるわけではなく、

「菩提心」、「悟りを求める心」によって起こるのである。

「発菩提心」なのである。

「発菩提心」は、存在している、無い、ではないし、

善い、悪い、ではないし、

「無記」、「無記性」、「善悪に分け難いもの」ではない。

過去の善行の報いとしての境地によって、「菩提心」を起こすわけではない。

天人といった天の情の有る者は、「菩提心」を必ず得る事ができないわけではない。

ただ、まさに時と共に、「発菩提心する」のである。

「発菩提心」は、身体が依り所とする環境としての報いである「この世」とは無関係であるので。

「発菩提心した」時には、法界は尽(ことごと)く「発菩提心」なのである。

「発菩提心」は、身体が依り所とする環境としての報いである「この世」を転じるようではあるが、「この世」に知られるわけではない。

「発菩提心」は、「共出一隻手」、「仏と共に一方の手を出す」のであるし、

「自出一隻手」、「自然と一方の手を出す」のであるし、

仏が生者を救うために俗世の中へ降りて行く事なのである。

地獄、餓鬼、畜生、修羅などの世界の中でも「発菩提心する」事ができるのである。

「全くの真心」と言うが、全心は皆、真心である。
一欠片や二欠片ではなく、全てなのである。
蓮(ハス)の葉が丸々と円(まる)くまとまっているのは鏡に似ている。
菱(ヒシ)の実が角々しく角ばっているのは錐(きり)に似ている。
鏡に似ているが、全てなのである。
錐(きり)に似ているが、全てなのである。

「古代の仏の心」と言うのは、
昔、ある僧が、大証国師と呼ばれる南陽慧忠に、「古代の仏の心とは、どの様な物ですか?」と質問した。
その時、南陽慧忠は、「(古代の仏の心とは、)牆壁や瓦礫である」と言った。

そのため、知るべきである。
「古代の仏の心は牆壁や瓦礫である」というわけではない。
牆壁や瓦礫を「古代の仏の心」と言っているわけではない。
「古代の仏の心」は、このように学ぶのである、という事である。
平常心と言うのは、この世や他の世界を問わない平常心なのである。

昔は、ここから去り、今日は、ここから来る。
去る時は満天が去り、来る時は地の尽（ことごと）くが来る。
これが平常心である。
平常心は、この家の中で開閉する。千、万の無数の家が一時（いっとき）に開閉するので、平常なのである。
今、仏法が天地を覆（おお）っているのは、気づかない言葉のような物であるし、
「噴地」、「地に噴く」一声（ひとこえ）のような物であるし、
言葉に等（ひと）しいし、
心に等（ひと）しいし、
法に等（ひと）しい。
寿命や、「行」、「全てのもの」が生じたり滅んだりするのは、刹那に生じたり滅んだりしているが、最後の身から先は、かつて知らなかった。
知らなくても、「発心すれば」、「悟りを求める事を思い立って心すれば」、必ず悟りの道に進むのである。
既に、こうなのであり、さらに疑うべきではない。
既に、疑っている事が、平常なのである。

「身によって仏道を学び修行する」と言うのは、身によって仏道を学び修行するのである。
「赤い肉の塊（かたまり）」、「肉体」によって仏道を学び修行するのである。
身は、仏道を学び修行する事によって来るのである。
仏道を学び修行する事によって来る物は共に、身なのである。
尽十方界は一個の真実の人の体なのである。

生と死が来たり去ったりするのが真実の人の体なのである。
この身体を動かしまわして、十悪業を離れ、「八戒」、「八斎戒」を保持し、「仏法僧」という「三宝」に帰依して、家を捨て出家するのが、真実の、仏道を学び修行する事なのである。
このため、「真実の人の体」と言うのである。
後進の学徒は、必ず、「自然のままでも何もしなくても悟っている」という「自然見」の外道に同意する事なかれ。

大智禅師と呼ばれる三十六祖の百丈の懐海は、「もし、『本から清浄であるので、本から解脱しているので、(人は)自然と仏であるし、(人は)自然と坐禅の仏道を理解している』という見解に執着する者は、『自然のままでも何もしなくても悟っている』という『自然外道』に属する」と言った。

これらの「身によって仏道を学び修行する事」についての言葉は、空き家の壊れた家具ではなく、
仏道を学び修行した事によって積み重ねた功徳による物であるし、
超越して、「八面」、「四方八方」に、宝玉のように美しいし、
脱ぎ落として、(葛)藤のように樹に寄りかかる。

「(まさに、この身によって)『得度するべき』、『(仏土へ)渡すべき』者には、この身を現して、その者の為に法を説く」のであるし、

「(まさに、他の身によって)『得度するべき』、『(仏土へ)渡すべき』者には、他の身を現して、その者の為に法を説く」のであるし、
「『得度するべき』、『(仏土へ)渡すべき』者には、この身を現さないで、その者の為に法を説く」のであるし、
「『得度するべき』、『(仏土へ)渡すべき』者には、他の身を現さないで、その者の為に法を説く」のであるし、
「誰かの為にではなく、法を説く」のである。

けれども、身を放棄して、声を揚げて響きを止める事が有るし、命を捨てて、二十九祖の慧可のように「断臂得髄」する事が有る。

たとえ威音王仏より先に「発足」、「出発」して仏道を学び修行してもなお、「自分は威音王仏の法の子孫である」として成長するのである。

尽十方世界とは、十方面が共に尽界なのである。
東西南北と、「四維」、「四隅」と、上下を十方と言っている。

十方の裏表を縦横無尽に究め尽した時を思量するべきである。
この思量とは、「人の体は、たとえ自他に遮られても、尽十方である」と明らめて見て、決定する事である。
これは、未だかつて聞いた事が無い事を聞く事なのである。方向に等しいので。世界に等しいので。

人の体は、四大(元素)と、「色受想行識」という「五蘊」で出来ている。

「大」、「四大元素」と、「塵」、「六塵」、「色声香味触法」は共に、凡人が究め尽す事ができる物ではなく、聖者が学に参入して究める物である。

また、一つの塵によって十方を明らめて見るべきである。

ただし、十方を一つの塵に包括するわけではない。

また、一つの塵に僧堂や仏殿を建てたり、僧堂や仏殿に尽界を建てたりする。

一つの塵によって僧堂や仏殿を建てたり、僧堂や仏殿によって尽界を建てたりする。

(そうすると、)建てられた僧堂や仏殿が一つの塵によって形成されていたり、建てられた尽界が僧堂や仏殿によって形成されていたりする。

このような道理が、「尽十方界は真実の人の体である」なのである。

「自然のままでも何もしなくても悟っている」という「自然外道」の邪悪な見解を習うべきではない。

世界の量ではないので、広い、狭い、ではない。

尽十方界は、八万四千の「説法蘊」であるし、八万四千の三昧であるし、八万四千の「陀羅尼」、「真理の保持」である。

「尽十方界は、八万四千の『説法蘊』である」とは、尽十方界は「法輪を転じる事」、「説法」であるので。

「法輪を転じる」、「法を説く」所は、諸世界に行き渡るし、諸々の時に行き渡る。

地方が無いわけではないが、地方も真実の人の体である。

今のあなたも、今の私も、「尽十方界は真実の人の体である」の「人」なのである。

これらを見過ごす事無く、仏道を学び修行するのである。

たとえ三大阿僧祇劫、十三大阿僧祇劫、無量阿僧祇劫までも、身を捨てたり身を受けたりして行く事は、必ず、仏道を学び修行する時には、仏道を学び修行する事の進歩や後退と成るのである。

(善知識を持つ人を)礼拝して仏法を質問するのは、(仏道を学び修行する、)振(ふ)る舞(ま)い、身のこなしなのである。

枯木を絵図に描き、「死灰」、「火が消えて冷えた灰」を瓦(かわら)を磨くようにするのは、一時の間断も無い。

月日の経過は速いが、仏道を学び修行する事は奥深くまである。

家を捨てて出家する風流が、たとえ寂しくても、木こりと混同する事なかれ。

たとえ手段が競うように頭を出しても、農耕者と一緒ではない。

迷っている、悟っている、の論理や、善悪の論理と比べる事なかれ。

正誤や真偽の境地に留まる事なかれ。

「生と死が来たり去ったりするのが、真実の人の体である」と言うのは、
生死は、凡人による輪廻であるが、大いなる聖者が解脱する所でもある。
凡人や聖者を超越するのを真の実体とするだけではない。
生死には「二種生死」や「七種生死」という分類が有るが、究め尽すと、
各々、皆、生死であるので、恐怖するべきではない。
なぜなら、未だ生を捨てていないが、今、既に死を見る。
未だ死を捨てていないが、今、既に生を見る。
生は死を遮(さえぎ)るわけではない。
死は生を遮(さえぎ)るわけではない。
生死は共に、凡人が知る事ができる物ではない。
生は栢樹(子)のような物である。
死は鉄の人のような物である。
たとえ栢樹が栢樹に遮(さえぎ)られても、生は未だ死に遮(さえぎ)られないので、仏道を
学び修行するのである。
生は一枚ではない。
死は二疋ではない。
(疋は長さや枚数などの単位。)
死は生と無関係である。
生は死と無関係である。

圜悟克勤は、「『生也全機現』、『生の全ての機関が現れている』。
『死也全機現』、『死の全ての機関が現れている』。
大いなる虚空に満ちている。

真心は常に心の全てである」と言った。

圜悟克勤の言葉を静かに鍛錬して点検して詳細に調べるべきである。

圜悟克勤は、かつて、こう言ったが、なお未だ、生と死が全ての機関に余る事を知らない。

去ったり来たりする事の学に参入すると、去る時に生と死が有るし、来る時に生と死が有るし、

生に来る時と去る時が有るし、

死に来る時と去る時が有る。

去ったり来たりする事は、尽十方界を、二、三の翼として飛び去ったり飛んで来たりするし、三本や五本の足として進歩したり後退したりするのである。

生と死を頭と尾として、「尽十方界は、真実の人の体である」事は、よく身と脳を翻(ひるがえ)すのである。

身と脳を翻(ひるがえ)すと、一枚の硬貨の大きさのようであるし、

微塵の中に似ているし、

平坦な坦々とした地では、壁が千仞に高くそびえ立つのであるし、

壁が千仭に高くそびえ立つ所は、平坦な坦々とした地である。

このため、「南閻浮洲」、「南閻浮提」、「この世」や、「北倶盧洲」の「面目」、「有様(ありよう)」が有り、これを調べて、仏道を学び修行する。

「非想非非想天」、「有頂天」の「骨髄」、「理解」が有り、これに抗(あらが)って、仏道を学び修行するだけなのである。

正法眼蔵　身心学道

その時、千二百四十二年、宝林寺にいて僧達に示した。

夢中説夢

諸々の仏祖が「この世」に出現する道は、ものが生じる兆しすら無い創世以前からの物であるので、旧来、論じられてきた所の物ではない。

諸々の仏祖が「この世」に出現する道によって、仏祖の境地、仏の向上などの功徳が有る。

諸々の仏祖が「この世」に出現する道は、時とは無関係であるので、寿命の長短とも無関係である。

諸々の仏祖が「この世」に出現する道は、凡人の推測とは遥かに異なる。

また、「法輪を転じる事」、「法を説く事」も、ものが生じる兆しすら無い創世以前からの規則による物である。

このため、法を説く事は、「大功不賞、千古榜様」、「功績が大きくて報いる事ができない、非常に古くからの手本である」。

これを夢の中で夢として説くのである。

証の中で証を見るので、夢の中で夢を説くのである。

夢の中で夢を説く場所は、仏祖の国であるし、仏祖の会である。

仏の国、仏の会、祖師の会では、証の上で証するし、夢の中で夢を説くのである。

夢の中で夢を説く、言葉、説明に出会いながら「仏の会ではない」とするべきではない。

夢の中で夢を説くのは、仏が「法輪を転じている」、「法を説いている」のである。

夢の中で夢を説くという「法輪」、「説法」は十方、八面であるので、大海や、須弥山や、国土や、「諸法」、「全てのもの」が形成されて現される。

説法は、諸々の夢以前の、夢の中で夢を説く事なのである。

遍く世界の全てが現れるのは、夢なのである。

遍く世界の全てが現れる夢は、明らかな「百草」、「森羅万象」なのである。

激しく疑うのは、正しい。

複雑であるのは、正しい。

この時、夢の中で「百草」、「森羅万象」を説く等なのである。

夢の中で「百草」、「森羅万象」を説く等の学に参入すると、根、茎、枝、葉、華、果実、光、色は共に、大いなる夢なのである。

「森羅万象は夢のように儚い」と誤るべきではない。

仏道を習おうとしない人は、「夢の中で夢を説く事」に出会っても、いたずらに無駄に、あってはならない誤りで「夢の『百草』、『森羅万象』とは、あり得ないのを存在させる事を言うのであろう」と思ってしまうし、「迷いに迷いを重ねるような物であろう」と思ってしまう。

しかし、そうではない。

たとえ「迷いの中で更に迷う」と言う事が有っても、「迷いの上の迷い」と言われている言葉による天に通じる道によって、まさに鍛錬して学に参入するべきである。

夢の中で夢を説くとは、諸仏である。

諸仏は、風や雨や、水や火である。

諸仏は、あれこれの名称を受けて保持している。

夢の中で夢を説くとは、古代の仏である。

この宝の乗り物に乗って、直ぐに道場に至るのである。

直ぐに道場に至るのは、この宝の乗り物に乗っている中なのである。

「夢曲夢直、把定放行、逞風流」、「夢が曲がっていたり夢が正直であったり、留めたり通過させたりする事は、風流をたくましくする」のである。

また、この「法輪」、「説法」が大いなる法輪の世界を転じる事は、無量、無限である。

また、一微塵でも転じ、塵の中での動静は休まないのである。

この道理によって、

どの無上普遍正覚の事の法を転じても、敵は笑って頷くのである。

どの所でも、無上普遍正覚の事の法を転じるので、風流を転じるのである。

このため、尽地は皆、突然の、きっかけが無い、「法輪」、「説法」なのである。

遍く世界は皆、暗くない因果であるし、諸仏の無上(普遍正覚)である。

知るべきである。

諸仏の化の導きや「説法蘊」は共に、きっかけが無く建化し、きっかけが無く法の位に住んでいる。

来たり去ったりする、きっかけを求める事なかれ。

「尽従這裏去」、「尽く、この中に従って去る」のである。

「尽従這裏来」、「尽く、この中に従って来る」のである。

このため、葛藤を植えて葛藤を纏うのは、無上普遍正覚の性質と相なのである。

無上普遍正覚が、きっかけが無いように、全ての生者は、きっかけが無いし、無上(普遍正覚)である。

鳥かごが、きっかけが無くても、解脱は、きっかけが無い。
「公案」、「修行者の手がかりとしての仏祖の言動」が形成されて現れているのが、「あなたに三十回、棒を放つ」なのであるが、これは形成されて現されている「夢の中で夢を説く事」なのである。
「無根樹、不陰陽地、喚不響谷」、「根が無い樹、太陽と月といった陰陽が無い地、叫んでも響かない谷」は、形成されて現されている「夢の中で夢を説く事」なのである。
夢の中で夢を説く事は、人や天人の境地ではないし、凡人の推測ではない。夢が「菩提」、「覚」、「無上普遍正覚」である事を誰が激しく疑うであろうか？
激しく疑う範囲の物ではないので、明らかに認める者が誰かいるであろうか？　明らかに認めて転じる物ではないので。
夢である無上普遍正覚は無上普遍正覚であるので、夢を夢と言うのである。夢の中の夢が有るし、夢が説く事が有るし、夢を説く事が有るし、夢の中が有るのである。
夢の中でなければ夢を説く事は無い。
夢を説く事が無ければ夢の中は無い。
夢を説く事が無ければ諸仏はいない。
夢の中でなければ諸仏が「この世」に出現し妙なる「法輪を転じる」、「法を説く」事は無い。
「法輪」、「説法」とは、「仏と仏だけ(が能く究め尽せる、諸法の実の相)」であるし、夢の中で夢を説く事である。
夢の中で夢を説く事に、無上普遍正覚者達の諸々の仏祖がいるだけなのである。

「法身」、「真の実体」の向上の事とは、夢の中で夢を説く事なのである。

夢の中で夢を説く事に、仏と仏だけが見える事が有る。

頭、眼、髄、脳、身、肉、手、足を愛して惜しむ事ができないし、愛されて惜しまれないので、「黄金を売る人は黄金を買う人であるはずである」のを、奥の奥と言うし、「妙なるものの妙なるもの」と言うし、証の証と言うし、「頭の上に頭を置く」、「頭が有るのに別の頭を置こうとする」とも言うのである。

「頭の上に頭を置く」、「頭が有るのに別の頭を置こうとする」とは、仏祖の日常の行為である。

(未熟な人は、)「頭の上に頭を置く」、「頭が有るのに別の頭を置こうとする」事の学に参入しても、「頭とは、人の頂上である」と思うだけである。

さらに、「頭とは、毘盧遮那如来の頂上である」と思わない。

まして、「頭とは、明らかな『百草』、『森羅万象』である」と思うであろうか？　いいえ！

頭を知らないのである。

昔から「頭の上に頭を置く」、「頭が有るのに別の頭を置こうとする」という一句の言葉は伝わって来ている。

愚かな人は「頭の上に頭を置く」、「頭が有るのに別の頭を置こうとする」という言葉を聞いて、誤って「余計なものを戒める言葉である」と思ってしまう。

「有り得ない」と言おうとして「どうして頭の上に頭を置く事が有るだろうか？」と言うのを俗世の普通の習慣としてしまっている。

実に、それは、誤っていないか？　はい！　誤っている！

夢の中で夢を説くと形成されて現されているが、凡人も聖者も共に用いるのに相違は無い。
このため、凡人も聖者も共に、夢の中で夢を説くのは、昨日でも生じているし、今日でも成長している。
知るべきである。
昨日、夢の中で夢を説いたのは、「夢の中で夢を説いた」事は「夢の中で夢を説いた」事であると認めて来ている。
今、夢の中で夢を説くのは、「夢の中で夢を説く」事は「夢の中で夢を説く」事であるとして参入している。
これは、仏に出会う喜びなのである。

悲しむべきである。
仏祖の明らかな「百草」、「森羅万象」の夢が明らかである事は、百、千の無数の月日よりも明らかであるが、生まれながらの盲人は見ない事を憐れむべきである。

「頭の上に頭を置く」、「頭が有るのに別の頭を置こうとする」という言葉の「頭」とは、「百草」、「森羅万象」であるし、
千の無数の種類の頭であるし、
全てのものの頭であるし、
「通身」、「全身」である頭であるし、
全ての世界は「最初」から隠していない頭であるし、
尽十方界の頭であるし、

当てはまる一句の言葉であるし、
「百尺の竿の先」、「極致」である。
置くのも、上であるのも、これらの頭であると参入するべきであるし、究めるべきである。
そのため、「一切の全ての諸仏や、諸仏の無上普遍正覚は、皆、この経によって出現する」のも、「頭の上に頭を置いて来た」、「頭が有るのに別の頭を置こうとして来た」、夢の中で夢を説く事なのである。
「この経」によって夢の中で夢を説くと無上普遍正覚の諸仏をこの世に出現させる。
無上普遍正覚の諸仏が更に「この経」を説くと、必ず、夢の中で夢を説く事に成る。
夢である原因に暗くなければ、夢である結果に暗くないのである。
ただ、まさに、槌の一打は千、万に無数に当たるが、槌の千、万の無数の乱打は一つ当たるか半端に当たるのである。
このため、無上普遍正覚の事である、夢の中で夢を説く事が有るし、
無上普遍正覚者である、夢の中で夢を説く事が有るし、
無上普遍正覚の事ではない、夢の中で夢を説く事が有るし、
無上普遍正覚者ではない、夢の中で夢を説く事が有る、と知るべきである。
知られて来ている道理は明らかなのである。
知られて来ている道理とは、一日中の、夢の中で夢を説く事が、夢の中で夢を説く事なのである。

このため、古代の仏と等しい人は、「私は今あなたの為(ため)に夢の中で夢を説く。過去、現在、未来の諸仏もまた夢の中で夢を説く。二十八祖の達磨から三十三祖の大鑑禅師までの六人の祖師達もまた夢の中で夢を説く」と言った。

この言葉を明らめて学ぶべきである。

釈迦牟尼仏の「拈華瞬目」は、夢の中で夢を説く事なのである。

「礼拝得髄」、「礼拝して会得する事」は、夢の中で夢を説く事なのである。

一句の言葉の「道」、「真理」を会得したり、会得できなかったり理解できなかったりするのは、夢の中で夢を説く事なのである。

「『千手千眼観音』、『千手観音』は、多数の『眼が有る手』を用いて、どうするのか？」なので、色形や音声を見聞きする功徳を十分に備えている。

仏が「この世」に出現する事である、夢の中で夢を説く事が有る。

「説夢説法蘊」である、夢の中で夢を説く事が有る。

とらえたり放ったりする、夢の中で夢を説く事が有る。

直接的に指し示す事は、夢を説く事なのである。

「的当」、「言い当てる事」、「直接的に指し示す事」は、夢を説く事なのである。

とらえても、放っても、平常の天秤を学ぶべきである。

学んで会得すると、必ず「目銖機金兩」、「目方の重り」が現れて、夢の中で夢を説き出すのである。（「金兩」は一文字の漢字として見てください。）

「鉄金兩」、「重り」を論ぜず、「平衡」、「つり合い」に至らなければ、「平衡」、「つり合い」が形成されて現される事は無い。（「金兩」は一文字の漢字として見てください。）

「平衡」、「つり合い」を得るには、「平衡」、「つり合い」を見るのである。

「平衡」、「つり合い」を得ると、物に依存していないし、天秤に依存していないし、機関に依存していない。

空にかかっているといえども、「平衡」、「つり合い」を得なければ、「平衡」、「つり合い」を見ていない、と参入して究めるべきである。

自ら空にかかっているように、物と接して取って、空に遊戯させる、夢の中で夢を説く事が有る。

空の中で「平衡」、「つり合い」をこの世に出現する。

「平衡」、「つり合い」は天秤の大いなる道なのである。

空をかけ、物をかけ、たとえ空であっても、たとえ色であっても、「平衡」、「つり合い」に合う、夢の中で夢を説く事が有る。

解脱する事は、夢の中で夢を説く事である！

夢は尽大地である。

尽大地は「平衡」、「つり合い」である。

このため、頭と脳を回転する事の無限は、夢の中で夢を証する、信じて受け入れる事と、(仏の教えを受け入れて)行う事なのである。

釈迦牟尼仏は、「諸仏は、身が金色であり、百の無数の福の相が荘厳である。

諸仏の法を聞いて、人々の為(ため)に説くと、常に、このような好ましい夢が有った。

また、夢で国王と成ったが、宮殿、眷属、および、上等で絶妙な『色声香味触』への『五欲』を捨てて、道場に行った。

菩提樹の下にいて、獅子に例えられる仏のように坐し、道を求め、七日を過ぎて、諸仏の知を得た。

無上の道を成就し終わって、立って、『法輪を転じた』、『法を説いた』。

『男性の出家者、女性の出家者、男性の在家信者、女性の在家信者』という『四衆』の為(ため)に法を説いて、千万億劫を経て、『漏』、『煩悩』を無くす妙なる法を説いて、無数の生者を仏土へ渡した。

後に、『涅槃』、『肉体の死』に入る様子は、煙が尽きて灯が消滅するようであろう。

もし、後の、悪い世の中で、この第一の法を説けば、この人が大いなる利益を得る様子は、前述の諸々の功徳のようであろう」と言った。

この釈迦牟尼仏の説いた教えの学に参入して、諸仏の会を究め尽すべきである。

これは例え話ではない。

諸仏の妙なる法は「仏と仏だけ(が能く究め尽せる、諸法の実の相)」であるので、夢と「覚」、「夢の外」の「諸法」、「全てのもの」は共に実の相なのである。

「覚」、「夢の外」の中の「発心、修行、菩提、涅槃」、「心する事、修行、覚、寂滅」が有る。

夢の中の「発心、修行、菩提、涅槃」、「心する事、修行、覚、寂滅」が有る。

「発心、修行、菩提、涅槃」、「心する事、修行、覚、寂滅」は、夢と「覚」、「夢の外」における、各々、実の相なのであり、大小、優劣は無い。

それなのに、「また、夢で国王と成った」等の前後の言葉を見聞きした、古今の人は、誤って「『この第一の法を説く』事による力によって、夜、夢が、このように成る」と誤解している。

このように誤解する人は、未だ釈迦牟尼仏の説いた教えを明らめて理解していないのである。

夢と「覚」、「夢の外」は本(もと)から唯一普遍絶対なのであるし、実の相なのである。

仏法は、たとえ例え話であっても、実の「相」、「見え方」なのである。

既に例え話ではなく、夢で成るのは、仏法の真実なのである。

釈迦牟尼仏といった一切の全ての諸々の仏祖は皆、夢の中で心して修行して、無上普遍正覚を成就しているのである。

そのため、今の「娑婆(しゃば)」、「苦しみを耐え忍ぶ場所」である「この世」の釈迦牟尼仏の一つの化の導きによる仏道は、夢で成っている事なのである。

「七日」と言うのは、仏の知を得る量なのである。

「『法輪を転じて』、『法を説いて』」、「生者を仏土へ渡して」、既に「千万億劫を経た」と言う。

夢の中の動静は辿る事ができない。

「諸仏は、身が金色であり、百の無数の福の相が荘厳である。諸仏の法を聞いて、人々の為に説くと、常に、このような好ましい夢が有った」と言う。明らかに知る事ができる。

「『好ましい夢』とは諸仏の事なのである」と証明されているのである。

「常に、このような好ましい夢が有った」と言う如来、釈迦牟尼仏の言葉が有り、百年の夢だけではないのである。

「人々の為に説く」とは、釈迦牟尼仏が「この世」に出現した事なのである。

「諸仏の法を聞いて」とは、眼で声を聞く事であるし、心で声を聞く事であるし、古巣で声を聞く事であるし、創世前の無である長い時間である「空劫」以前から声を聞く事である。

「諸仏は、身が金色であり、百の無数の福の相が荘厳である」と言う。

「『好ましい夢』とは諸仏の身である」という事は、今更、疑えない。

「覚」、「夢の外」の中で仏の化の導きは止まない道理が有るといえども、仏祖が形成されて現される道理は、必ず、夢で為す事であるし、夢の中での事なのである。

「仏法の悪口を言う事なかれ」の学に参入するべきである。

「仏法の悪口を言う事なかれ」の学に参入する時、如来、釈迦牟尼仏の、

この言葉が、すぐに形成されて現されるのである。

正法眼蔵　夢中説夢

その時、千二百四十二年、秋、雍州の宇治郡の観音導利興聖宝林寺にいて

僧達に示した。

画餅

諸々の仏は証であるので、諸々の物は証である。

けれども、仏と物は、同一の性質のものではないし、同一の心のものではない。

仏と物は、同一の性質のものではないし、同一の心のものではないが、証の時、証と証は妨（さまた）げず形成されて現されるのである。

形成されて現される時、現されるものと現されるものは接する事無く形成されて現される。

これが、代々の祖師達の要点なのである。

「同一か？　異なるか？」という推測を挙げて学に参入する力量とする事なかれ。

このため、「わずかに一つのものに通じれば、全てのものに通じる」と言われている。

「一つのものに通じる」とは、一つのものの従来の「面目」、「有様（ありよう）」を奪い去るわけではないし、

一つのものを相対（あいたい）させるわけではないし、

一つのものについて対（つい）を成させないわけではない。

対（つい）を成させないのは、妨（さまた）げる事に成る。

通じる妨（さまた）げを無くさせると、一つに通じる事は全てに通じる事に成る。

一つに通じるとは、一つのものに通じる事である。

一つのものに通じる事は全てのものに通じる事に成る。

古代の仏は、「絵に描いた餅は、飢えを満たす事ができない」と言った。

この言葉の学に参入する多くの修行僧達は、十方より遍歴して来ていて、菩薩か声聞かのどちらか一つに限る事はできないほどであり、「神頭鬼面の皮肉」、「天人や霊のような面々の理解」は厚かったり薄かったりしている。

古今の仏は仏道を学び修行するが、樹の下や、草の屋根の小さな質素な庵（いおり）で生活するのである。

誤って「仏教という仏の家の業を正しく伝える時に、経論を学ぶという業（わざ）は、真の知を、香の香りを衣に染み込ませるように修行させないので、古代の仏は『絵に描いた餅は、飢えを満たす事ができない』と言ったのである」と言ったり、

誤って「『三乗や一乗の教義や学問は、無上普遍正覚の道ではない』と言おうとして、古代の仏は『絵に描いた餅は、飢えを満たす事ができない』と言ったのである」という見解を抱いたり、

誤って「『仮に立てられている法は、真（まこと）には不要である』のを言おうとして、古代の仏は『絵に描いた餅は、飢えを満たす事ができない』と言ったのである」という見解を抱いたりするのは、大きな誤りである。

代々の祖師達の功績を正しく伝えられていない人であるし、仏祖の言葉に暗い人である。

「絵に描いた餅は、飢えを満たす事ができない」という一言を明らめる事ができない人が、他の仏の言葉に参入して究めている、と誰が許すであろうか？　いいえ！　誰も許さない！

「絵に描いた餅は、飢えを満たす事ができない」と言うのは、例えば、

「諸々の悪をなすなかれ。(仏の教えを受け入れて、)諸々の善を行いなさい」と言うような物であるし、

「何ものかが、どの様にかして来ている」と言うような物であるし、

「私は常に、ここにおいて、切(なる思い)である」と言うような物である。

暫定的に、このように学に参入するべきである。

「絵に描いた餅」という言葉をかつて現した仲間は少ないし、知るに及んだ者は全くいない。

「なぜ、このように知っているのか？」(と言うと、)

今まで、一人、二人と、臭い皮袋である人を見破ると、激しく疑う事もできず、親しく見(まみ)える事もできず、隣人の話に耳を澄(す)まさず無関心であるようだからである。

知るべきである。

「絵に描いた餅」と言うのは、父母から生まれた以降の「面目」、「有様(ありよう)」が有るし、

父母から未だ生まれる前からの「面目」、「有様(ありよう)」が有る。

米の麺を用いる作り方をする餅は、必ずしも、生じる、生じない、ではないが、「絵に描いた餅」という言葉の成就が形成されて現される時なのである。

来たり去ったりする見聞きしたものに引かれる、として学に参入するべきではない。

餅を描く「色」は、「山」と「水」を描く「色」と同じである。

（

原文の「丹臒」は「丹砂と青臒」、「丹青」である。

丹砂は赤い絵の具の材料の石である。青臒は青い絵の具の材料の土である。

「丹青」は「赤と青」、「絵の具」、「色」、「絵」、「絵を描く事」などを意味する。

）

「山」と「水」を描くには「色」を用いる。

(原文の「青丹」は「丹青」である。）

「絵に描いた餅」を描くには「米の麺」を用いる。

このため、用いる物は同じであるし、鍛錬も同じである。

そのため、今、言い表している「絵に描いた餅」と言うのは、一切の全ての糊餅、菜餅、乳餅、焼餅、糍餅などは皆、「絵」によって形成されて現されているのである。

知るべきである。

「絵」に等しいし、

「餅」に等しいし、

「法」、「もの」に等しいのである。

このため、今、形成されて現されている諸々の餅は共に、「絵に描いた餅」なのである。

今、形成されて現されている餅以外に「絵に描いた餅」を求めても、終(つい)に未だ出会えないし、未だひねり出す事ができないのである。

ある時は現れているが、ある時は現れていないのである。けれども、老いている、若い、といった相ではないし、来たり去ったりする跡ではないのである。

そうである、これに、「絵に描いた餅」の国土が現れ、成立するのである。

「飢えを満たす事ができない」と言うのは、飢えは一日が使わすわけではないが、「絵に描いた餅」に見(まみ)える機会が無い。

「絵に描いた餅」を食べても、終(つい)に飢えを止める功能が無い。

飢えが関連する餅は無い。

餅が関連する飢えは無いので、手段が伝わっておらず、家風も伝わっていない。

(原文の「餅に相待せらるる餅あらさるかゆえに」は「餅に相待せらるる飢あらさるかゆえに」の誤りであると思われる。)

飢えも一本の杖であり、横に担(にな)ったり、縦に担(にな)ったり、千、万に無数に変化するのである。

餅も一つの身心の現れであり、青であったり、黄であったり、赤であったり、白であったり、長かったり、短かったり、角ばっていたり、丸かったりするのである。

今、「山」と「水」を描くには、「色」を用い、不思議な形の岩石を用い、「七宝」、「七種類の宝」や、「金、銀、瑠璃（るり）、水晶」という「四宝」、「四種類の宝」を用いる。

「餅」を描く営みも同様である。

「人」を「描く」には、四大(元素)と、「色受想行識」という「五蘊」を用いる。

仏を「描く」には、泥の仏壇と土の塊（かたまり）の仏像を用いるだけではなく、三十二相を用い、一茎の草を用い、「三祇百劫」、「『三阿僧祇劫』と『百大劫』」の、香の香りを衣に染み込ませるような修行を用いる。

(仏に成るには「三阿僧祇劫」と「百大劫」という長い年月がかかると言う場合が有る。)

このようにして、一枚の「絵に描いた仏」を描いて来たので、一切の全ての諸仏は皆、「絵に描いた仏」なのである。

一切の全ての「絵に描いた仏」は皆、諸仏なのである。

「絵に描いた仏」と「絵に描いた餅」を点検して詳細に調べるべきである。

いずれが石の亀か？　いずれが鉄の杖であるのか？

いずれが色(形)の物であるのか？　いずれが心の物であるのか？　と明確に詳細に鍛錬して参入して究めるべきである。

このように鍛錬する時、生と死が来たり去ったりするのは尽（ことごと）く「絵」なのである。

無上普遍正覚は「絵」なのである。

法界も虚空も、いずれも「絵」なのである！

古代の仏と等しい人は、「道成、白雪千扁去。画得、青山数軸来」、「仏道が成就すると、白雪の千の無数の欠片は去る。描く事ができ得ると、緑の山の数枚の絵が来たる」と言った。

これは、大いなる悟りの話なのである。
道をわきまえる鍛錬が形成させて現した道の奥底なのである。
そのため、道を会得した時は、「緑の山」と「白雪」を数枚と名づけて描いて来るのである。
しかし、一つの動静すら絵なのである！
私達の今の鍛錬は、絵だけから得たのである。
「十号」、「仏の十の称号」や、三明は、一枚の絵なのである。
「信根、精進根、念根、定根、慧根」という「(五)根」や、
「信力、精進力、念力、定力、慧力」という「(五)力」や、
「択法覚支、精進覚支、喜覚支、除覚支、捨覚支、定覚支、念覚支」という「(七等)覚(支)」や、
「正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定」という「(八聖)道」といった、
三十七品菩提分法は、一枚の絵なのである。
もし「絵は実ではない」と言うならば、全てのものは実ではない。
全てのものが実ではなければ、仏法も実ではない。
もし仏法が実であるならば、「絵に描いた餅」は実である。

ある僧が、ある時、匡真大師と呼ばれる雲門文偃に、「仏祖を超越する話とは、どういった物でしょうか?」と質問した。
雲門文偃は、「(仏祖を超越する話とは、)糊餅である」と言った。

この言葉について静かに鍛錬するべきである。
糊餅が既に形成されて現されたからには、仏祖を超越する話を説明する祖師がいるし、
聞いても知る事ができない鉄の人がいるし、
聴いて会得する学徒がいるであろうし、
形成されて現される説明が有る。
糊餅の「『展事』、『投機』」、「事を展開して広げ、機会に投じる事」は必ず二、三枚の「絵に描いた餅」なのである。
仏祖を超越する話が有り、仏にも「魔」、「仏敵」にも入る事ができる分が有る。

道元の亡き師である五十祖の如浄は、「長竹と芭蕉は絵に入る」と言った。

この言葉は、長短を超越している物が共に絵の学に参入している言葉なのである。

原文の「修竹」とは「長竹」である。

(長竹は)陰陽が運んだ事による物であるが、陰陽を運ばせる物には長竹の年月が有る。
その年月や陰陽は量(はか)る事ができないのである。
大いなる聖者は、陰陽を見るが、陰陽を量(はか)る事はできない。
陰陽は共に、法に等しいし、量(はか)りに等しいし、「道」、「真理」に等しいので。
今の話は、外道や「二つの乗り物」の段階の人の心と目に関係する陰陽ではない。
これは、長竹の陰陽なのであるし、長竹の歩暦なのであるし、長竹の世界なのである。
長竹の眷属として十方の諸仏はいる。
知るべきである。
天地、乾坤は、長竹の根、茎、枝、葉なのである。
このため、長竹は、天地、乾坤を長く成らせている。
長竹は、大海、須弥山、尽十方界を堅牢に成らせている。
長竹は、杖、修行者を打って戒める竹の細長い板である竹篦(しっぺ)を老練に成らせたり不老に成らせたりしている。
芭蕉は、地水火風と空(くう)、心、意識、知を根、茎、枝、葉、華、果実、光、色としているので、秋風を帯びて秋風に破れる。一つの塵(ちり)も残らず、清浄、清潔と言える。
眼の中に筋骨は無く、色の中に膠月离は無い。(「膠」は接着剤の「にかわ」である。「月离」は一文字の漢字として見てください。)
当所の解脱が有る。

なお速さに引かれないので、「須臾」、「一瞬」や、刹那などを論じるのに及ばない。
この力量を挙げて、地水火風を活かし、心、意識、知において己を捨て欲を捨て仏道に身を捧げさせる。
このため、この家業において春夏秋冬を日常の道具として業の教えを受けて来ている。

長竹と芭蕉の全ての動静は、「絵」なのである。
これによって、竹の音を聞いて大いに悟った者は、蛇でも竜でも共に絵なのである。

（
蛇は竜に成る。
蛇＜竜であると言える。
）

「凡人や聖者による情による思量である」と激しく疑うべきではない。
「どうして、あの竿は、この長さを得ているのか？」なのであるし、「どうして、この竿は、この短さを得ているのか？」なのである。
「どうして、この竿は、この長さを得ているのか？」なのであるし、「どうして、あの竿は、この短さを得ているのか？」なのである。
これらは皆、「絵」であるので、長短の「絵図」は必ず符号するのである。
長い絵が有れば、短い絵が無いわけではない。
この道理に明らかに参入して究めるべきである。
ただ、まさに、尽界、尽法は「絵」であるので、人などのものは「絵」によって現れ、仏祖は「絵」から形成されるのである。

そのため、「絵に描いた餅」でなければ「飢えを満たす事ができる」薬効は無い。

「絵に描いた飢え」でなければ人には出会えない。

「絵で満たす事ができる」のでなければ力量が無いのである。

飢えを満たす事ができ、飢えていないのを満たす事ができ、飢えを満たさず、飢えていないのを満たさない事は、「絵に描いた飢え」でなければ、でき得ないし、言う事ができないのである。

暫定的に、これらができるのは、「絵に描いた餅」である事の学に参入するべきである。

この主旨の学に参入する時、少し、物を転じたり、物によって転じられたりする功徳を身心で究め尽すのである。

物を転じたり、物によって転じられたりする功徳が未だ目の前に現れていないような人は、仏道を学び修行する力量が未だ形成されて現されていないのである。

物を転じたり、物によって転じられたりする功徳を形成させて現させるには、「絵」を証して形成させて現させるのである。

正法眼蔵　画餅

その時、千二百四十二年、観音導利興聖宝林寺にいて僧達に示した。

全機

諸仏の大いなる道で、究め尽すのは、「透脱」、「透体脱落」、「煩悩を透過して脱ぎ落とす事」であるし、形成されて現される事である。

「煩悩を透過して脱ぎ落とす」とは、生も生を透過して脱ぎ落とすし、死も死を透過して脱ぎ落とすのである。

このため、生と死を出る事が有り、生と死に入る事が有り、共に、究め尽す大いなる道なのである。

生と死を捨てる事が有り、生と死を(仏土へ)渡す事が有り、共に、究め尽す大いなる道なのである。

形成されて現される事とは、生である。

生とは、形成されて現される事である。

形成されて現されている時、生が全て形成されて現されているし、死が全て形成されて現されている！

この機関は、能(よ)く生に成らせるし、能(よ)く死に成らせる。

この機関が形成されて現されている時、必ずしも「大小」、「優劣」ではないし、

遍(あまね)く世界ではないし、限られた量ではないし、

長時間ではないし、短時間ではない。

今の生は、この機関に有るし、この機関は、今の生に有る。

生は来るわけではないし、
生は去るわけではないし、
生は現れるわけではないし、
生は形成されるわけではない。
けれども、生は全ての機関が現れているし、死は全ての機関が現れている。

知るべきである。

自己に無量の法が有る中に、生が有るし、死が有る。
静かに思量するべきである。

今この生では、生と共に生じている全てのものは、生に伴うとするのか？
生に伴わないとするのか？
一時も一つのものも生に伴う事は無いし、一つの事も一つの心も生に伴う事は無い。

例えば、生とは、人が船に乗っている時のような物である。
生という船では、私が帆（ほ）を使い舵（かじ）を取る。
私が棹（さお）を差すが、生という船は私を乗せて、生という船の他に私はいない。
私は生という船に乗って、生という船をも船に成らせる。
この時の学に鍛錬して参入するべきである。
この時、生という船は世界なのである！
天も水も岸も皆、生という船の時と成る。さらに、生という船ではない時と同じではない。

このため、私が生を生じさせているのであるし、生は私を私に成らせているのである。

生という船に乗っている時には、身が依り所とする環境としての報いである「この世」と過去の行いの正に報いである身心は共に、生という船の機関なのである。

大地の尽くと、虚空の尽くは共に、生という船の機関なのである。

生である私と、私である生とは、このような物なのである。

圜悟克勤は、「『生也全機現』、『生の全ての機関が現れている』。

『死也全機現』、『死の全ての機関が現れている』」と言った。

圜悟克勤の言葉を明らめて参入して究めるべきである。

「圜悟克勤の言葉に参入して究める」とは、生の全ての機関が現れる道理は、最初や最後とは無関係に、大地の尽くと、虚空の尽くであるが、(他の)生の全ての機関が現れる事を妨げないだけではなく、死の全ての機関が現れる事を妨げないのである。

死の全ての機関が現れる時は、大地の尽くと、虚空の尽くであるが、(他の)死の全ての機関が現れる事を妨げないだけではなく、生の全ての機関が現れる事を妨げないのである。

このため、生は死を妨げないし、死は生を妨げないのである。

大地の尽くと、虚空の尽くは共に、生にも有るし、死にも有る。

けれども、同一の尽くの大地や、同一の尽くの虚空を、生でも死でも全ての機関とするわけではない。

唯一ではないが異なるわけではない。

異なるわけではないが同一ではない。

同一ではないが多数ではない。

このため、生でも全ての機関が現れる全てのものが有るし、死でも全ての機関が現れる全てのものが有る。

生でもなく死でもなくても全ての機関が現れる事が有る。

全ての機関が現れる時に、生が有るし、死が有る。

このため、生と死の全ての機関は、壮年の男性が肘を曲げたり伸ばしたりするようでもあるだろうし、「人が夜間に背で手で枕を模索するような物」でもあるだろう。

生と死の全ての機関に多数の神通と光明が有って形成されて現されるのである。

形成されて現される時は、形成されて現される事によって全ての機関とされるので、誤って「形成されて現されるより前には形成されて現される事は無い」という見解を抱いてしまうのである。

けれども、ある形成されて現されるより前には、(他の)前のものの全ての機関が現れているのである。

(他の)前のものの全ての機関が現れていても、今の全ての機関が現れるのを妨げない。

このため、「形成されて現されるより前には形成されて現される事は無い」という誤った見解が競って形成されて現されるのである。

その時、千二百四十二年、雍州の六波羅蜜寺のそばの雲州刺史の所にいて僧達に示した。

都機

諸々の月が円満に成就するのは、「前三三」だけではないし、「後三三」だけではない。
（「前三三後三三」は意味が諸説有る。）
円満に成就するのが諸々の月であるのは、「前三三」だけではないし、「後三三」だけではない。

このため、釈迦牟尼仏は、「仏真法身、猶若虚空。応物現形、如水中月」、「仏の真の『法身』は、なお虚空のようである。物に応じて形を現わすのは、水の中に映る月のようである」と言った。

「水の中に映る月のようである」ものは、「水の中に映る月のようである」し、
水のようであるし、
月のようであるし、
中に映るようである、中であるし、
中に映るようである。

「似ている」のを「ようである」と言っているわけではなく、「ようである」とは「同じである」事なのである。

仏の真の「法身」は、なお虚空のようなのである。

虚空は、なお仏の真の「法身」のようなのである。

(虚空は)仏の真の「法身」であるので、地の尽く、世界の尽く、ものの尽く、現れているものの尽くは自ずと虚空なのである。

形成されて現されている「百草」、「森羅万象」は、なお仏の真の「法身」のようなのであるし、なお水の中に映る月のようなのである。

月の時は必ずしも夜ではないし、夜は必ずしも暗くない。

単に、人間の狭量さに関わる事なかれ。

太陽と月が無い所にも昼と夜は有る。

太陽と月は昼と夜のために存在するわけではない(、と言える)。

太陽と、月は、共に、ありのままであるので、一つや二つの月ではないし、千、万の無数の月ではない。

たとえ月の自己が「一つや二つの月」という見解を保持し任しても月の見解なのであり、必ずしも仏道の「道」、「真理」の理解の取り方ではないし、仏道の知見ではない。

そのため、たとえ昨夜に月が存在しても今夜の月は昨夜の月ではない。

「今夜の月は最初も中間も最後も共に今夜の月なのである」として参入して究めるべきである。

月は月に嗣ぐので、月が存在しても、新しい、古い、ではない。

盤山宝積は、「心月孤円。光呑万象。光非照境。境亦非存。光境倶亡。復是何物」、「心の月は単独で円(まる)い。心の月の光は森羅万象を飲み込む。心の月の光は知覚の対象を照らすわけではない。また、知覚の対象は存在するわけではない。心の月の光も、知覚の対象も、共に、無い。では、心の月の光や、知覚の対象は、どういった物であるのか？」と言った。

盤山宝積の言葉の意味によると、
仏祖や、仏の子には、必ず、心の月が有る。月を心としているので。
月ではなければ心ではない。
心ではない月は無い。

「単独で円(まる)い」と言うのは、欠けていない事なのである。

「両三」ではないのを「森羅万象」と言う。
「森羅万象」は、「心の月の光」であるので、「森羅万象ではない」と言える。
このため、「心の月の光は森羅万象を飲み込む」のである。
森羅万象は自ら月の光を飲み込み尽すので、光が光を飲み込むのを「心の月の光は森羅万象を飲み込む」と言っているのである。
例えば、月が月を飲み込むのであるし、光が月を飲み込むのである。
このため、「心の月の光は知覚の対象を照らすわけではない。また、知覚の対象は存在するわけではない」と言っているのである。

このように会得するので、「応に、仏の身によって『得度するべき』、『(仏土へ)渡すべき』者には、仏の身を現して、その者の為に法を説く」のであるし、

「応に、『普現色身』、『仏や菩薩が全ての生者を仏土へ渡して救うために相手に応じて現す色々な姿』によって『得度するべき』、『(仏土へ)渡すべき』者には、『普現色身』、『仏や菩薩が全ての生者を仏土へ渡して救うために相手に応じて現す色々な姿』を現して、その者の為に法を説く」のである。

これは、(心の)月の中で「法輪を転じる事」、「法を説く事」なのである！

たとえ「陽精」、「太陽」と「陰精」、「月」が光輝く場所や、「火珠」、「火に包まれた宝玉を象った物」と「水珠」が形成する場所でも、形成されて現されるものを現すのである。

このような心が月なのであるし、このような月が自ずと心なのである。

このように、仏祖や、仏の子は、心の理や物事を究める。

古代の仏は、「一心一切法。一切法一心」、「唯一の心は一切の全てのものである。一切の全てのものは唯一の心である」と言った。

そのため、心は一切の全てのものなのであるし、一切の全てのものは心なのである。

心は月であるので、月は月なのである。

心である一切の全てのものは尽く月であるので、遍く世界は遍く月なのであるし、「通身」、「全身」の尽くは、「通月」、「全月」なのである。

たとえ、すぐに直に、当然に必然的に、「万年」である「前後三三」でも、いずれが月ではないだろうか？　いいえ！　いずれも月である！

今の、身が依り所とする環境としての報いである「この世」と過去の行いの正に報いである身心である、日面仏と月面仏は、同じく月の中なのである。

生と死が来たり去ったりするのは共に月に有る。

尽十方界は、月の中の上下左右なのである。

今の日用品は、月の中の「明らかな『百草』、『森羅万象』」なのであり、月の中の「明らかに祖師の心であるもの」なのである。

ある僧が、ある時、舒州の投子山の慈済大師と呼ばれる投子大同に、「月が未だ円くない時は、どうなのでしょうか？」と質問した。

投子大同は、「三個、四個を飲み込む」と言った。

ある僧は、「月が円く成った後は、どうなのでしょうか？」と言った。

投子大同は、「七個、八個を吐き出す」と言った。

参入して究めている、「月が未だ円くない時」と「月が円く成った後」は共に、月の一時である。

月に「三個、四個」有る中に「月が未だ円くない時」が一つ有る。

月に「七個、八個」有る中に「月が円く成った後」が一つ有る。

「飲み込む」のは「三個、四個」なのであり、この時、「月が未だ円くない時」が形成されて現される。
「吐き出す」のは「七個、八個」なのであり、この時、「月が円く成った後」が形成されて現される。

月が月を飲み込むと、「三個、四個」なのである。
「飲み込む」事に月が有って形成されて現される。
月は「飲み込む」事が形成されているのである。

月が月を吐き出すと、「七個、八個」有る。
「吐き出す」事に月が有って形成されて現される。
月は「吐き出す」事が形成されているのである。

このため、飲み込み尽すのであるし、吐き出し尽すのである。
天と地を覆って飲み込むのであるし、天と地の尽くを吐き出すのである。
自他を飲み込むし、自他を吐き出す。

釈迦牟尼仏は、金剛蔵菩薩に告げて、「例えば、目を動かすと、湛えられた水を能く揺るがすように見える事であるし、
また、眼を固定すると、火が回転するように見えるような物である。
雲が走るように動けば、月が運ばれるように動くように見えるし、
船が進むと、岸が移動するように見えるのもまた同様である」と言った。

釈迦牟尼仏が説いている「雲が走るように動けば、月が運ばれるように動くように見えるし、船が進むと、岸が移動するように見える」という言葉を明らめて参入して究めるべきである。

軽率に学ぶべきではない。

凡人の情による見解に従うべきではない。

この釈迦牟尼仏の言葉を、釈迦牟尼仏の言葉の真意の通りに見聞きしている者は稀（まれ）なのである。

もし、この釈迦牟尼仏の言葉をよく釈迦牟尼仏の言葉の真意の通りに学習していれば、「円覚」、「仏の円満な完全な悟り」とは、必ずしも、身心ではないし、「菩提」、「覚」や「涅槃」、「寂滅」ではないし、「菩提」、「覚」や「涅槃」、「寂滅」とは、必ずしも、「円覚」、「仏の円満な完全な悟り」ではないし、身心ではない。

釈迦牟尼仏の「雲が走るように動けば、月が運ばれるように動くように見えるし、船が進むと、岸が移動するように見える」という言葉の意味は、雲が走るように動く時、月が運ばれるように動くように見えるのであるし、船が進む時、岸が移動するように見えるのである。

釈迦牟尼仏の「雲が走るように動けば、月が運ばれるように動くように見えるし、船が進むと、岸が移動するように見える」という言葉の主旨は、雲

と月は、同時に同行して、同じく歩みを運び、最初と最後は無く、前後しない。

船と岸は、同時に同行して、同じく歩みを運び、最初と最後は無く、転じたりしない。

たとえ人の修行を学んでも、人の修行は最初と最後ではないし、最初と最後の修行は人には無いのである。

最初と最後をあげて、人の修行と、量を比べる事なかれ。

雲が走るように動くのも、月が運ばれるように動くように見えるのも、船が進むのも、岸が移動するように見えるのも、皆、人の修行と同様である。

愚かにも、狭量な見解に限る事なかれ。

雲が走るように動くのは東西南北を問わず(唯一普遍であるし)、月が運ばれるように動くように見えるのは昼夜でも古今でも休息しない主旨を忘れないべきである。

船が進むのと、岸が移動するように見えるのは共に、過去、現在、未来とは無関係であるが、よく過去、現在、未来を使用する物なのである。

このため、「直至如今飽不飢」、「直ぐ(す)に今に至って飽きて飢えない」のである。

それなのに、愚かな人は誤って「雲が走るように動くので、動かない月が動くように見えるし、船が進むので、移動しない岸が移動するように見える(、という錯覚について釈迦牟尼仏は話しているだけなのである)」という見解を抱いてしまう。

もし愚かな人の言う通りであれば、どうして如来、釈迦牟尼仏が、わざわざ言うであろうか?

仏法の主旨は、人や天人の狭量さでは理解できない。

ただ、量(はか)る事が不可能でも、「随機」、「素質に応じて」、修行あるのみなのである。

誰が船と岸を再三、掬(すく)い取って漉(こ)さないだろうか？　いいえ！　再三、掬(すく)い取って漉(こ)す！

誰が雲と月を急いで見守らないだろうか？　いいえ！　急いで見守る！

知るべきである。

如来、釈迦牟尼仏の「雲が走るように動けば、月が運ばれるように動くように見えるし、船が進むと、岸が移動するように見える」という言葉では、雲と月や、船と岸を、錯覚の例えとしていない道理を静かに鍛錬して参入して究めるべきである。

月の一歩は、如来、釈迦牟尼仏の「円覚」、「仏の円満な完全な悟り」であるし、

如来、釈迦牟尼仏の「円覚」、「仏の円満な完全な悟り」とは、月が運ばれるように動くように見える事なのである。

月が運ばれるように動くように見える事は、動静ではないし、進退ではない。

既(すで)に、月が運ばれるように動くように見える事は、例えではなく、「(心の月が)単独で円(まる)い」事の性質と「相」、「見え方」なのである。

知るべきである。

月が運ばれるように動くように見える事は、たとえ走るように動いても、最初も中間も最後も無いのである。

このため、第一の月、第二の月が有るのである。

第一の月も、第二の月も、同一の月なのである。

「正好修行」、「正に修行するのに好ましい」とは、月なのである。

「正好供養」、「正に、ものを捧げるのに好ましい」とは、月なのである。

「払袖便行」、「袖を払って行ってしまう」とは、月なのである。

(「正法眼蔵」の「心不可得」の話で「老婦人は袖を振って去ってしまった」。)

円い、尖っている、は、来たり去ったりする「輪転」、「輪の回転」ではない。

来たり去ったりする「輪転」、「輪の回転」を使用したり、使用しなかったり、見過ごしたり、とらえたり、風流を逞しくするので、このような諸々の月なのである。

正法眼蔵　都機(「都機」は「つき」、「月」とも読める。「都」には「全て」という意味が有る。)

千二百四十三年、観音導利興聖宝林寺で書いた。

沙門である道元。

空華

二十八祖の達磨は、「一華開五葉、結果自然成」、「一つの華が、五つの花びらを開き、実を結ぶのは、自然に成る」と言った。

「華開」、「華が開く」時と、華の光明と色と相の、学に参入するべきである。

一つの華は五つの花びらが重なっているのであり、五つの花びらが開くのは一つの華なのである。

一つの華の道理が通じるのは、「吾本来此土、伝法救迷情」、「私(、達磨)が、本より、この土地に来たのは、法を伝えて心が迷っている人を救うためである」からである。

光と色を尋ねるのは、達磨の学への参入であるべきなのである。

「結果任儞結果」、「実を結ぶのは、あなたが実を結ぶのに任せる」。「実を結ぶのは、あなたが実を結ぶのに任せる」とは、「自然に成る」のを言うのである。

「自然に成る」とは、「修因感果」、「修行という原因は悟りを感得するという結果をもたらす事」、「修行をすれば悟りを得られる事」なのである。

公共の原因が有るし、公共の結果が有る。

公共の因果を修行し、公共の因果を感じるのである。

「自」とは、自己である。

自己とは、必ず、あなたの事なのである。
あなたの自己とは、四大(元素)と、「色受想行識」という「五蘊」を言うのである。
「使得無位真人」、「位の無い真の人を使う事ができ得る」ので、私ではないし、誰でもない。
このため、必要ではないのを「自」と言うのである。
「然」とは、聞き入れる事なのである。
「自然に成る」とは、「華が開き実を結ぶ」時なのであるし、「法を伝えて心が迷っている人を救う」時なのである。
例えば、優鉢羅華が開く時と場所は、火の時、火の中であるような物である。
摩擦で発火させた火といった火は皆、優鉢羅華が一面に開く時と場所なのである。
もし優鉢羅華が開く時と場所でなければ、一つの小さな火が生じ出る事は無いし、一つの小さな火が活きる事は無いのである。
知るべきである。
一つの小さな火には百、千の無数の花の優鉢羅華が有って、空(くう)に一面に開くし、地に一面に開くのであるし、過去に一面に開くし、現在に一面に開くのである。
火が現れる時と場所を見聞きするのは、優鉢羅華を見聞きする事に成るのである。
優鉢羅華の時と場所を見過ごさず、見聞きするべきなのである。

古代の先人は、「優鉢羅華は火の中で開く」と言った。

そのため、優鉢羅華は必ず火の中で一面に開くのである。

火の中を知ろうと思うならば、優鉢羅華が一面に開く場所なのである。

人や天人の見解に執着して、火の中を習わない事なかれ。

激しく疑うのであれば、水の中で蓮華が生じる事も激しく疑うべきである。

樹の枝に諸々の華が有る事をも激しく疑うべきである。

また、激しく疑うべきなのは、「器世間」、「器としての世界」が「安立」、「安心立命」、「心が安らぎ不動である事」も激しく疑うべきである。

けれども、激しく疑う事をしない物である。

仏祖でなければ、「華開世界起」、「華が開いて世界が起こる事」を知らない。

華が開くとは、「前三三後三三」なのである。

（「前三三後三三」は意味が諸説有る。）

この数を十分に備えるために、森羅万象を集めて多くするのである。

この道理を到来させて、春と秋をはかり知るべきである。

春と秋だけに華や果実が有るわけではない。

「有時」、「存在している、ある時」は必ず華や果実が有るのである。

華と果実は共に時を保持し任している。

時は共に華や果実を保持し任している。

このため、百草には皆、華と果実が有るし、諸々の樹は皆、華と果実が有る。

金、銀、銅、鉄、珊瑚（サンゴ）、水晶という樹などには皆、華と果実が有る。

地水火風と空という樹には皆、華と果実が有る。
人という樹には華が有るし、人という華には華が有る。
「枯木」には華が有る。

このようである中で、釈迦牟尼仏が話した、虚空華が有るのである。

しかし、学の無い輩は、空華の彩り、光、葉、華が、どのようであるか知らず、わずかに「空華」と聞くだけなのである。
知るべきである。
仏道には、空華についての話が有る。
外道は、空華についての話を知らないし、まして、悟らない！
ただし、諸々の仏祖だけが、空華と地華が開く事と散り落ちる事を知っているし、世界華などが開く事と散り落ちる事を知っているし、「空華や地華や世界華などは経典である」と知っている。
これが、仏を学ぶ時の基準なのである。
仏祖が乗っているのは空華であるので、仏の世界と諸仏の仏法は空華なのである。

それなのに、如来、釈迦牟尼仏の「眼がかすんでいる人が空中に華を見るような物である」という言葉を伝え聞いて、凡人の愚者は、誤って「『眼がかすんでいる』と言うのは、『生者の転倒している見る眼』を言うのである」と思ってしまう。

凡人の愚者は、誤って「病んでいる見る眼は既に転倒しているので、清浄な虚空に空華を見聞きするのである」と思ってしまう。

凡人の愚者は、この誤った言葉の理解に執着するので、誤って「三界、『地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上』という『六道』、仏の有無は皆、『存在しないものを存在している』と誤って妄(みだ)りに見解を抱いている」と思ってしまう。

凡人の愚者は、誤って「もし妄(みだ)りに迷っている見る眼のかすみが止(や)めば、空華は見えなく成る。このため、『空(くう)には本(もと)は華は無い』と言っているのである」と思ってしまう。

憐れむべきである。

このような輩は、如来、釈迦牟尼仏の言葉の、空華の時の全てを知らないのである。

諸仏の言葉の、「眼がかすんでいる人が空中に華を見るような物である」道理は、未だ凡人や外道の所見とは異なるのである。

諸仏、如来は、空華を修行して、「衣座室」、「『柔和と忍辱の心』という『如来の衣』、『一切の全てのものは空(くう)である』という『如来の座』、『一切の全ての生者の中の大いなる慈悲の心』という『如来の室』」を得るのであるし、「道」、「真理」を会得したり修行の結果を得たりするのである。

釈迦牟尼仏が「拈華瞬目」、「華をひねったり、目を瞬(また)かせたりした事」は皆、「眼がかすんでいる人が空中に華を見るような物である事」が形成されて現されている「公案」、「修行者の手がかりとしての仏祖の言動」なのである。

「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼を持ち寂滅した妙なる心を持つ事」が今に正しく伝えられて断絶していないのを「眼がかすんでいる人が空中に華を見るような物である」と言っているのである。

「菩提」、「覚」や、「涅槃」、「寂滅」や、「法身」、「真の実体」や、「自性」、「自体の本来の性質」などは、空華が開いている五つの花びらのうち二、三枚の花びらなのである。

釈迦牟尼仏は、「また、眼がかすんでいる人が空中に華を見るような物である。もし眼がかすむ病気が除かれれば、華は空において滅ぶ」と言った。

この釈迦牟尼仏の言葉を明らめる事ができた似非（えせ）学者は未だいない。

空（くう）を知らないので空華を知らないし、空華を知らないので「眼がかすんでいる人」を知らないし、見ないし、「眼がかすんでいる人」と出会わないし、「眼がかすんでいる人」ではないのである。

「眼がかすんでいる人」と見（まみ）えて、空華をも知るべきであるし、空華をも見るべきである。

空華を見た後に、「華が空において滅ぶ」のをも見るべきなのである。

誤って「一度、空華が止（や）めば更に存在する事ができない」と思ってしまうのは、「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の見解なのである。

空華が見えない時は、どのようであるのだろうか？
誤って「空華は捨てられたのだろう」とだけ思ってしまい、空華の後(のち)の大事さを知らないし、空華による「種熟脱」、「心に種を撒(ま)き熟させ解脱させる事」を知らない物なのである。

凡人の学者の多くは、「陽の気が住んで(潜在して)いる場所が空であろう」と思っているし、
「太陽と月と星々がかかっている場所が空であろう」と思っているので、
「例えば、空華とは清浄な大気の中の浮雲のようであって、風に吹かれて飛び散る花びらが東西に飛んだり昇降したりするような彩色が出来るのを空華と言う」と思っている。

特に、「造ったり造られたりする四大(元素)や、『器世間』、『器としての世界』の『諸法』、『全てのもの』や、『本覚』、『本(もと)からの覚』や、『本性』、『本(もと)からの性質』などを空華と言う」とは知らないのである。
また、「『諸法』、『全てのもの』によって、造る四大(元素)などが存在する」と知らないし、
「『諸法』、『全てのもの』によって、『器世間』、『器としての世界』は法の位に住んでいる」と知らない。
「『器世間』、『器としての世界』によって、『諸法』、『全てのもの』は存在する」とだけ知見するのである。
「眼がかすんでいるので、空華が存在する」としか知らず、
「空華が眼のかすみを存在させている」道理を知らないのである。

知るべきである。

釈迦牟尼仏の言葉の「眼がかすんでいる人」とは、「本覚の人」、「本から悟っている人」であるし、

仏に成った妙覚の人であるし、

諸仏である人であるし、

三界の人であるし、

仏の向上の人である。

愚かにも「眼のかすみを妄りな物である」として、誤って「眼のかすみによるものの他に、真のものが存在する」と学ぶ事なかれ。

このような見解は狭量な見解なのである。

もし(「眼のかすみによる華」を含む)花々が妄りなものであれば、「(『眼のかすみによる華』を含む)花々は妄りなものである」と誤って執着したり、とらわれる事は皆、妄りなものと成るのである。

共に妄りであるようならば、道理は成立できない。

成立する道理が無いので、「眼のかすみによる華」は妄りなものではないのである。

悟りが「眼のかすみ」による物である時には、悟りの全てのものは共に、「眼のかすみ」による荘厳によるものなのである。

迷いが「眼のかすみ」による物である時には、迷いの全てのものは共に、「眼のかすみ」による荘厳によるものなのである。

暫定的に言うと、「眼のかすみ」が普遍であれば、空華も普遍なのである。

「眼のかすみ」が「無生」、「生じる事の超越」であれば、空華も「無生」、「生じる事の超越」なのである。
全てのものが実の相であれば、「眼のかすみによる華」も実の相なのである。

過去、現在、未来を論じるべきではない。
最初とも中間とも最後とも無関係である。
生じたり滅んだりする事によって遮(さえぎ)られないので、能(よ)く生じたり滅んだりする事を生じさせたり滅ぼさせたりさせるのである。
空中に生じ、空中に滅ぶ。
「眼のかすみ」の中に生じ、「眼のかすみ」の中に滅ぶ。
華の中に生じ、華の中に滅ぶ。
また、諸々の他の時と場所でもまた同様である。

空華を学ぶには、まさに、諸々の種類が有る。
「かすんでいる眼」による所見が有るし、
明らかに見通す「見る眼」による所見が有るし、
仏の眼による所見が有るし、
祖師の眼による所見が有るし、
仏道の眼による所見が有るし、
盲目による所見が有るし、
三千年による所見が有るし、
八百年による所見が有るし、
百劫による所見が有るし、
無量の劫による所見が有る。

これらは共に皆、空華を見るが、空（くう）は既に色々であるし、華もまた重ね重ね色々である。

まさに知るべきである。

空（くう）は一つの草であり、空（くう）には必ず華が咲くのは、「百草」、「森羅万象」に華が咲くのと同様である。

この道理を言うために、如来、釈迦牟尼仏は「空（くう）には本（もと）は華は無い」と言っているのである。

「本（もと）は華は無い」が、今、華が存在するのは、桃も李（スモモ）も同様であるし、梅も柳（ヤナギ）も同様である。

「梅が、昨日は華が無かったが、春は華が有る」と言うような物である。

時が到来すれば華が咲く。

華の時なのであるし、華が到来するのである。

華が到来する時が妄（みだ）りである事は未だ無い。

梅と柳（ヤナギ）の華は必ず梅と柳（ヤナギ）に咲く。

華を見て梅と柳（ヤナギ）を知るし、梅と柳（ヤナギ）を見て華をわきまえる。

桃と李（スモモ）の華が梅と柳（ヤナギ）に咲く事は未だ無い。

桃と李（スモモ）の華は桃と李（スモモ）に咲き、梅と柳（ヤナギ）の華は梅と柳（ヤナギ）に咲くのである。

空華が空（くう）に咲くのもまた同様である。

さらに、空華は他の草に咲かないし、他の樹に咲かないのである。

空華の諸々の色を見て空（くう）の果実が無限であるのを測量するのである。

空華が咲くのと散り落ちるのを見て空華の春と秋を学ぶべきなのである。

空華の春と、他の華の春は、同様である。

空華が色々であるように、春も多様である。
このため、古今の春と秋は存在するのである。

「空華は実ではない。他の華は実である」と学ぶ者は、仏教を(正しく)見聞きしていない者なのである。

「空は本は華は無い」という言葉を聞いて、「本から存在しない空華が今、存在する」と学ぶ者は、思考が浅はかであるし学が無いのである。
進歩して、深慮遠謀が有るべきである。

祖師は、「華もまた、かつて生じない」と言った。

この言葉の主旨が形成されて現されると、例えば、華もまた、かつて生じないし、華もまた、かつて滅びない、なのである。
華もまた、かつて華ではないし、空もまた、かつて空ではない、道理なのである。

華の時の前後を乱雑にして、有無についての無益な議論をするべきではない。

華は必ず諸々の色に染まるような物である。
しかし、諸々の色は必ずしも華だけに限らない。
諸々の時にもまた青、黄、赤、白などの色が有るのである。

春は華を引くし、華は春を引く物なのである。

張拙秀才は、石霜慶諸の在俗者の弟子である。

張拙秀才は、悟道についての詩を作って、「光明寂照遍河沙」、「光明は静かに照らして恒河沙のような無数のものに遍在する」などと言った。

光明は、新たに「僧堂、仏殿、厨庫、三門」を形成させて現している。恒河沙のような無数のものでの遍在は、光明が形成されて現されているのであるし、形成されて現されているものの光明なのである。

また、張拙秀才は、悟道についての詩で、「凡人、聖者、霊を含有する全てのものは共に、私の家にいる」と言った。

凡人や、賢者や聖者がいないわけではない。

しかし、これによって、凡人や、賢者や聖者をそしる事なかれ。

また、張拙秀才は、悟道についての詩で、「一念不生全体現」、「一つの思いは、生じる事を超越していて、全体が現れる」と言った。

「念念一一」、「思いと思いは、それぞれなのである」し、生じる事を超越しているのであり、全体が全て現れるのである。

このため、「一つの思いは、生じる事を超越している」と言っているのである。

また、張拙秀才は、悟道についての詩で、「『眼耳鼻舌身意』という『六根』がわずかに動けば、雲によって遮(さえぎ)られる」と言った。

六根は、たとえ眼耳鼻舌身意であっても、必ずしも六ではなく、「前後三三」なのである。

「動く」のは、須弥山のようにであるし、
大地のようにであるし、
「眼耳鼻舌身意」という「六根」のようにであるし、
わずかに動くようになのである。

「動く」のは既に須弥山のようにであるので、動かないのもまた須弥山のようになのである。

例えば、雲を成すし、水を成すのである。

また、張拙秀才は、悟道についての詩で、「煩悩を断って除くと、病を重ねて増す」と言った。

従来、病む事が無いわけではない。

仏祖という病が有る。

「智断」、「知という徳と、煩悩を断つという徳」は、病を重ねて増してしまう。

煩悩を断って除く時、必ず、煩悩を断って除こうという思考自体が煩悩と成っている。

煩悩と、煩悩を断って除こうという煩悩は、同時であったり、同時ではなかったりするが、煩悩は必ず、煩悩を断って除こうという煩悩を付帯させるのである。

また、張拙秀才は、悟道についての詩で、「『真如』、『真理』への趣(おもむ)き、意向もまた邪(よこしま)、いけないのである」と言った。

「真如」、「真理」に背(そむ)くのは、邪(よこしま)、誤りなのである。

「真如」、「真理」に(、いつまでも)向かおうとするのは、邪(よこしま)、いけないのである。

「真如」、「真理」とは、従ったり背(そむ)いたりする事なのである。

従ったり背(そむ)いたりする事の各々は「真如」、「真理」なのである。

「『真如』、『真理』に(、いつまでも)向かおうとする邪(よこしま)、いけない事もまた『真如』、『真理』なのである」と誰が知っているだろうか？

また、張拙秀才は、悟道についての詩で、「俗世における縁(えん)、俗世における関係に従って妨(さまた)げが無い」と言った。

俗世における関係と、俗世における関係は、従い合い、従う事と、従う事は、俗世における関係と成る。

これを「妨(さまた)げが無い」と言っているのである。

妨(さまた)げる、妨(さまた)げない、は、眼によって妨(さまた)げられている事に慣れるべきなのである。

また、張拙秀才は、悟道についての詩で、「『涅槃』、『寂滅』と生死は空華なのである」と言った。

「涅槃」、「寂滅」と言うのは、無上普遍正覚なのである。

仏祖や、仏祖の弟子が住んでいるのは、「涅槃」、「寂滅」であるし、無上普遍正覚である。

生死は真実の人の体なのである。

「涅槃」、「寂滅」と生死は、その物なのであるが、空華なのである。

空華の根、茎、枝、葉、華、果実、光、色は共に、空華の「華開」、「華が開く事」なのである。

空華は必ず空(くう)の果実という実を結ぶし、空(くう)の種を撒(ま)くのである。

今、見聞きしている三界は、空華が開いている五つの花びらであるので、「不如三界、見於三界」、「(如来が見ている三界は、)三界における凡人が、三界を見るようではない」のである。

(「不如三界、見於三界」は意味が諸説有る。)

空華は、「諸法の実の相」、「全てのものの実の相」なのであるし、諸々の法華の相なのである。

また、「測り知れない諸々のものも共に、空華や空(くう)の果実であり、桃と李(スモモ)と、梅と柳(ヤナギ)と同様なのである」として学に参入するべきである。

唐の時代の中国の、福州の芙蓉山の、芙蓉の霊訓は、帰宗寺の、至真禅師と呼ばれる帰宗の智常の所に初めて行って、「仏とは、どういった者なのでしょうか?」と質問した。

帰宗の智常は、「私が、あなたに向かって言っても、あなたは信じるかどうか……」と言った。

芙蓉の霊訓は、「和尚様、帰宗の智常様の真心からの言葉をどうして、あえて信じない事が有るでしょうか?　いいえ!　信じる!」と言った。

帰宗の智常は、「あなたは仏なのである」と言った。

芙蓉の霊訓は、「どのように保持させせられ任されるのでしょうか？」と言った。

帰宗の智常は、「一つのかすみが眼に有れば、空華は乱れ散り落ちる」と言った。

帰宗の智常の「一つのかすみが眼に有れば、空華は乱れ散り落ちる」という言葉は、仏を保持させ任せる言葉なのである。

そのため、知るべきである。

眼のかすみによって空華が乱れ散り落ちるのは、諸仏が形成されて現されているのである。

眼の空（くう）の華と果実は、諸仏が保持させ任せているのである。

かすみによって、眼を形成させて現すし、眼の中に空華を形成させて現すし、空華の中に眼を形成させて現す。

「空華が眼に有れば、一つの眼のかすみが乱れ散り落ちる」し、「一つの眼が空（くう）に有れば、諸々の眼のかすみが乱れ散り落ちる」のである。

ここに、眼のかすみの全ての機関が現れているし、
眼の全ての機関が現れているし、
空（くう）の全ての機関が現れているし、
華の全ての機関が現れているのである。
乱れ散り落ちるのは、千眼なのであるし、「通身」、「全身」の眼なのである。

一つの眼が存在する時と場所には必ず、空華が有るし、眼の華が有るのである。

眼の華を空華とは言うのである。
眼の華の言葉は必ず「開明」、「知によって開かれていて明らかなのである」。

　このため、広照大師と呼ばれる琅邪の慧覚は、「不思議であるのは、十方の仏は元から眼の中の華である。
眼の中の華を理解しようと欲(ほっ)したら、眼の中の華は元から十方の仏なのである。
十方の仏を理解しようと欲(ほっ)したら、十方の仏は眼の中の華ではない(、と言える)。
眼の中の華を理解しようと欲(ほっ)したら、眼の中の華は十方の仏ではない(、と言える)。
ここで、明らめる事ができ得たら、既に十方の仏に存在するのである。
もし明らめる事が未だでき得ないならば、声聞の段階の者は舞うし、独覚の段階の者は顔を作る」と言った。

　知るべきである。
十方の仏は、実在し、元から眼の中の華なのである。
十方の諸仏が位に住んでいる場所は、眼の中なのである。
眼の中ではなければ、諸仏が住んでいる場所ではない。
眼の中の華は、無ではなく、存在ではなく、空(くう)ではなく、実ではなく、自然に、十方の仏なのである。

今、単に、十方の諸仏を理解しようと欲したら、十方の諸仏は眼の中の華ではない(、と言える)し、

単に、眼の中の華を理解しようと欲したら、眼の中の華は十方の諸仏ではない(、と言える)。

このため、明らめる事ができ得ても、明らめる事が未だでき得なくても、共に、眼の中の華なのであるし、十方の仏なのである。

「理解しようと欲する事」と「そうではない(、と言える)事」は、形成されて現されている「不思議である」なのであるし、大いなる不思議なのである。

仏から仏へ、祖師から祖師へ、言われている、「空華」と「地の華」という言葉の主旨は、このように風流をたくましくするのである。

空華の名前は経典の似非学者もなお聞き及んでいても、地の華の命は仏祖でなければ見聞きできる因縁が無いのである。

地の華の命を知り及んでいる仏祖の言葉が有る。

宋の時代の中国の石門山の、石門の慧徹は、梁山縁観の会の高徳の長老である。

ある僧が、ある時、石門の慧徹に、「山中の宝とは、どういった物なのでしょうか?」と質問した。

この質問の主旨は、例えば、「仏とは、どういった者なのでしょうか?」と質問するのと同じであるし、

「『道』、『真理』とは、どういった物なのでしょうか？」と質問するような物なのである。

石門の慧徹は、「空華従地発、蓋国買無門」、「地によって空華は開くが、国の全てをあげて買おうとしても窓口が無い」と言った。

この言葉は、単に自他の言葉を基準にして思考するべきではない。

普通の諸方の僧達は、空華によって空華を論じる時には、「空で生じて、更に、空で滅ぶ」としか言わない。

「空によって空華が開く」と知っている人すらなお未だいない。

まして、（人々は、）「地によって空華が開く」と知っているだろうか？いいえ！

石門の慧徹ただ独りが、「地によって空華が開く」と知っていた。

「地によって空華が開く」とは、「最初も中間も最後も地によって空華が開く」のである。

原文の「発」とは「開く」なのである。

「地によって空華が開く」時、「大地の尽くによって空華が開く」のである。

「国の全てをあげて買おうとしても窓口が無い」とは、「国の全てをあげて買おうとする事」が無いわけではないが、「買おうとしても窓口が無い」のである。

地によって開く空華が有るし、華が開く事によって開く地の尽(ことごと)くが有る。

そのため、知るべきである。

空華とは、空(くう)と地を共に開発させる主旨なのである。

正法眼蔵　空華

時に、千二百四十三年、観音導利興聖宝林寺にいて僧達に示した。

古仏心

代々の祖師達が法を嗣いで、過去七仏から曹谿山の三十三祖の大鑑禅師まで四十人の祖師達なのであるし、

三十三祖の大鑑禅師から過去七仏まで四十人の仏達なのである。

過去七仏には共に、上下へ向上する功徳が有るので、三十三祖の大鑑禅師にまで至るし、過去七仏にまで至る。

三十三祖の大鑑禅師には上下へ向上する功徳が有るので、過去七仏から正しく伝えられ、三十三祖の大鑑禅師から正しく伝えられ、後の仏に正しく伝えられている。

前後だけではなく、釈迦牟尼仏の時は十方の諸仏がいたし、

三十四祖の青原の行思の時は三十四祖の南嶽の懐譲がいたし、三十四祖の南嶽の懐譲の時は三十四祖の青原の行思がいたし、

三十五祖の石頭希遷の時は江西の三十五祖の馬祖道一がいた。

遮らないのは、遮る事ができないわけではないのである。

(原文は「あひ罣礙せさるは不礙にあらさるへし」。)

このような功徳が有る事に参入して究めるべきである。

従来の(過去七仏から三十三祖の大鑑禅師までの)四十人の仏祖達は共に、古代の仏であるが、(各々の、)心が有るし、身が有るし、光明が有るし、国土が有るし、(肉体は)過ぎ去って久しいし、未だかつて過ぎ去っていない。

たとえ、(肉体は)過ぎ去って久しくても、未だかつて過ぎ去っていなくても、同じく、古代の仏の功徳が有るのである。

古代の仏の「道」、「真理」の学に参入するのは、古代の仏の「道」、「真理」を証する事に成るのであるし、代々の古代の仏と成る事に成るのである。

古代の仏とは、新しい仏と古代の仏のうち古代の仏なのであるが、古今を超越している、けれども、古今に正直なのである。

道元の亡き師、五十祖の如浄は、「古代の仏と等しい宏智正覚と見(まみ)えた」と言った。

天童山の、五十祖の如浄の家の中に古代の仏がいるし、古代の仏の家の中に五十祖の如浄がいる事を測り知る事ができる。

圜悟克勤は「真に古代の仏と等しい曹谿山の三十三祖の大鑑禅師を敬礼する」と言った。

知るべきである。

「釈迦牟尼仏から三十三代目である、三十三祖の大鑑禅師は古代の仏と等しい」として敬礼するべきなのである。

圜悟克勤には古代の仏の荘厳と光明が有るので、古代の仏と等しい人と見(まみ)えると、このように礼拝できるのである。

そのため、曹谿山の三十三祖の大鑑禅師の「頭が正しいので尾も正しい」のを餌にして、「古代の仏とは、このようなのである」と牛の鼻の孔を把握できる事を知るべきである。

このような牛の鼻の孔の把握が有る者は、このような古代の仏と等しい人なのである。

疎山匡仁は、「大庾嶺の頂上に古代の仏と等しい人がいて、光を放射して、この部屋にまで到達している」と言った。

「疎山匡仁は既に古代の仏と等しい人と見えた」事を知るべきである。

他の人の所に行って(仏法を)尋ねるべきではない。

古代の仏と等しい人がいる所は大庾嶺の頂上なのである。

古代の仏と等しい人ではない自己では、古代の仏と等しい人が出た所を知る事ができない。

古代の仏と等しい人がいる所を知る人は、古代の仏と等しい人であるだろう。

雪峰義存は「趙州(真際大師)は古代の仏と等しい」と言った。

知るべきである。

たとえ趙州真際大師が古代の仏と等しくても、もし雪峰義存が古代の仏と等しい力量を分かち合っていなければ、古代の仏と等しい人を見る「骨(こつ)」、「要領」を了解するのが困難であっただろう。

今の日常は、古代の仏と等しい人の加護による物である。

古代の仏と等しい人の学に参入するには、「不答話」、「言葉で言い表せない」鍛錬が有る。

言わば、雪峰義存は一人前なのである。

古代の仏と等しい人の家風と身のこなしは、古代の仏と等しい人でなければ、似ないし、同一ではないのである。

そのため、趙州真際大師の「最初も中間も最後も善い」学に参入して、古代の仏と等しい人の寿命の量の学に参入するべきである。

長安の光宅寺の、大証国師と呼ばれる南陽慧忠は、曹谿山の三十三祖の大鑑禅師の法を嗣(つ)ぐ弟子である。

人の皇帝も、天人の天帝である帝釈天も、同じく、南陽慧忠を恭(うやうや)しく敬い尊重したが、実に、中国でも見聞きするのは稀(まれ)な事なのである。

南陽慧忠は四代も皇帝の師であっただけではなく、皇帝が自分の手で自ら車を引いて南陽慧忠を宮中に入らせた。

また、南陽慧忠は、帝釈天の求めを受けて、遥かな天に上って、天人達の中で、帝釈天のために法を説いた。

ある僧が、ある時、南陽慧忠に、「古代の仏の心とは、どの様な物ですか？」と質問した。

南陽慧忠は、「(古代の仏の心とは、)牆壁や瓦礫である」と言った。

「古代の仏の心とは、どの様な物であるのか？」という質問は、「これは、このように会得した」と言うような物なのであるし、「あれは、このように会得した」と言うような物なのである。

このような言葉を挙げて、質問としているのである。

「古代の仏の心とは、どの様な物であるのか？」という質問は、広く古今の言葉と成っている。

「華開」、「華が開く」万の無数の木と百草、森羅万象は、古代の仏の言葉なのであるし、古代の仏の質問なのである。

「(華開)世界起」、「華が開いて世界が起こる」、須弥山の周囲の九山八海は、古代の仏の日面と月面なのであるし、古代の仏の「皮肉骨髄」、「理解」なのである。

また、古代の仏が仏を行う事が有るし、

古代の仏が仏を証する事が有るし、

古代の仏が仏と成る事が有るし、

仏の古さが心を為(な)す事が有る。

(原文は「仏古の為心なるあるへし」。)

古くからの心とは、心の古さであるので。

心の仏は必ず古くからであるので、古くからの心とは「椅子(イス)」や「竹や木」なのである。

（「椅子」と「竹や木」については「正法眼蔵」の「三界唯心」を参照してください。）

「大地の尽（ことごと）くで、一人でも仏法を会得している人を求めても、得る事は不可能である」し、

「和尚は、これを何と呼んで何となすのか？」なのである。

今の、時や、因縁や、「塵刹」、「塵の様に無数の国土が有る俗世」や、

虚空は共に、古くからの心である！

古くからの心を保持させせられ任せられるのも、古代の仏を保持させせられ任せられるのも、同一の「面目」、「有様（ありよう）」であって、同一の「面目」、「有様（ありよう）」の両面を保持させせられ任せられているのであるし、同一の「面目」、「有様（ありよう）」の両面の絵図なのである。

(原文は「両頭保任なり、両頭画図なり」。)

南陽慧忠は、「(古代の仏の心とは、)牆壁や瓦礫である」と言った。

この言葉の主旨は、牆壁や瓦礫に向かって言う一進が有り、「牆壁や瓦礫である」なのであるし、

言い出す「一途（いっと）」、「一つの道（もと）」が有るし、

牆壁や瓦礫を牆壁や瓦礫の下の中で言い表す一退が有る。

　これらの言葉が形成されて現されて円満に十分に成就すると、壁が千仞に万仞に高くそびえ立つし、

天地に遍（あまね）く「牆」、「囲い」が立つし、

一片の瓦（かわら）や半端な瓦（かわら）に覆われるし、

大小の「礫」、「小石」の尖（とが）った先端が有る。

このようであるのは、心だけではなく、身でもあるし、心と身が依り所とする環境としての報いである「この世」と、過去の行いの正に報いである心と身でもある。

そのため、「牆壁や瓦礫とは、どの様な物であるのか？」と質問するべきであるし、言うべきである。

答える時には、「(牆壁や瓦礫とは、)古代の仏の心である」と答えるべきである。

このように保持させられ任せられて、さらに参入して究めるべきである。

牆壁とは、どの様な物であるのか？　何を「牆壁」と言っているのか？

牆壁は今どの様な形状を備えているのか？　と明確に詳細に参入して究めるべきである。

創造によって牆壁を出現させるのか？

(原文は「造作より牆壁を出現せしむるか」。)

牆壁によって創造を出現させるのか？

牆壁は、創造であるのか？　創造ではないのか？

牆壁は、情が有るものである、とするのか？　情が無い物である、とするのか？

牆壁は、目の前に現れているのか？　目の前に現れていないのか？

このように鍛錬して学に参入すると、たとえ、天上や人間でも、この世や他の世界への出現であっても、「古代の仏の心とは、牆壁や瓦礫である」。

さらに、一つの塵(ちり)が来て古代の仏の心を汚染する事は未だ無いのである。

ある僧が、ある時、漸源仲興に、「古代の仏の心とは、どの様な物ですか？」と質問した。
漸源仲興は、「世界が崩壊する」と言った。
ある僧は、「どうして世界が崩壊するのですか？」と言った。
漸源仲興は、「どうして私の身が無く成る事が有るだろうか？　いいえ！　私の身は無く成らない！」と言った。

世界について言うと、十方は皆、仏の世界なのである。
仏の世界ではない物は未だ無いのである。
世界の崩壊の様子は、十方の世界の尽（ことごと）くによって学に参入するべきである。
世界の崩壊の様子は、自己によって学ぶ事なかれ。
自己によって学に参入しないので、世界が崩壊する時は、一個、二個、三、四、五個であるので、無限個なのであるが、その個々は「どうして私の身が無く成る事が有るだろうか？　いいえ！　私の身は無く成らない！」なのである。
「私の身は、どうして無であるだろうか？　いいえ！　私の身は無ではない！」なのである。
今を自ら惜しんで、自分の身を古代の仏の心に成らせない事なかれ。
実に、過去七仏以前に、古代の仏の心は、壁として立っていた。
過去七仏以後に、古代の仏の心は、才能を持って生まれた。
諸仏以前に、古代の仏の心は、華開いた。
諸仏以後に、古代の仏の心は、実を結んだ。

古代の仏の心以前に、古代の仏の心は、古代の仏の心を脱ぎ落としたのである。

正法眼蔵　古仏心

その時、千二百四十三年、六波羅蜜寺にいて僧達に示した。

菩提薩埵四摂法

「菩提薩埵四摂法」、「菩薩が生者を救うために生者を引きつける四つの方法」とは、

(一)布施

(二)「愛語」、「慈愛の言葉」

(三)「利行」、「利益をもたらす行い」

(四)「同事」、「同じ事をする事」

である。

布施とは、貪(むさぼ)らない事なのである。

原文の「不貪」とは、貪(むさぼ)らない事なのである。

「貪(むさぼ)らない」とは、世間で言う「へつらわない」事なのである。

たとえ「四州」、「須弥山の四方」を統治しても、正しい道の教化を施すには、必ず、貪(むさぼ)らない、のみなのである。

例えば、捨てる宝を知らない人に施すような物である。

遠くの山の華を如来に捧げる。

また、前世による宝を生者に施す。

(言葉を贈る)説法においても、物においても、各々に、布施に相応(ふさわ)しい功徳を本(もと)から備えている。

私の物というわけではないが、布施を妨(さまた)げない道理が有る。

布施をした物の軽さを嫌わず、布施をした功績が実であるのを評価するべきなのである。

道を道に任す時、道を会得する。

道を会得した時は、道は必ず道に任せられていくのである。

財宝が財宝に任せられる時、財宝は必ず布施と成るのである。

自己を自己に施すし、他のものを他のものに施すのである。

布施の因縁の力は、遠く、天上や人間までも通じるし、証果の賢者や聖者にまでも通じるのである。

なぜなら、布施をする者と布施をされる者という関係に成る事で既に縁を結んでいるからである。

仏は「布施をする人が多数の人々の集まりの中に来た時は、(天人といった)諸々の人々は、まず、布施をする人を望み見る」と言った。

「密かに、布施をした心が(天人などに)通じているのである」と知るべきである。

詩の一句の仏法をも、一つの詩の仏法をも(言葉を贈る説法という形で)布施するべきである。この生や他の生での善の種と成る。

一枚の硬貨の財宝をも、一茎の(薬草といった)草の財宝をも布施するべきである。この生や他の生での善の根本が芽生(めば)える。

仏法も財宝なのであるし、財宝も仏法なのである。

願い求められるものを布施するべきなのである。

実に、「髭(ひげ)を施して人の心を整えた」という事が有ったし、「砂を捧げて王位を得た」という事が有ったのである。

ただ相手からの報いや感謝を貪(むさぼ)らず、自らの力を分けたのである。

船を(川に)設置したり、橋を(川に)渡したりするのも布施の到達なのである。

もし、よく布施を学べば、身を受けるのも、身を捨てるのも共に布施なのであるし、生活や労働は本(もと)から布施なのである！

華を風に任せ、鳥を時に任すのも、布施の功績なのである。

「『(晩年、権力を制限されていった)アショーカ王の(最後の布施である)半分のマンゴーが(すり潰されて)能(よ)く数百の僧達に捧げられた』のは広大な供養に成ったのである」と証明する道理をよくよく、布施をする人も、布施をされる人も学ぶべきである。

身の力を励ますだけではなく、(布施をする)機会を見過ごさないべきである。

実に、自らに布施の功徳が本から備わっているので、今の自らを得ているのである。

仏は「(物は)自身においてもなお受用できるのである。まして、能く(物を)父母や妻子に与える、のは言うまでもない」と言った。

そのため、(物を)自らが用いるのも、ちょっとした布施と成るのであるし、(物を)父母や妻子に与えるのも布施なのである。

もし能く布施のために一つの塵(のような、ささいな物)でも捨てた時は、自らの行いであるといえども、静かに喜ぶべきなのである。

なぜなら、諸仏の一つの功徳を既に正しく伝えられて作っている事に成るからであるし、菩薩の一つの法を初めて修行している事に成るからである。

転じ難いのは生者の心なのである。

一つの財宝で心を動かして、生者の心を転じ始め、仏道を会得するに至るまで転じようと思うのである。

生者の心を転じ始めるには、必ず、布施によって生者の心を転じ始めるべきなのである。

このため、「六波羅蜜」、「六つの到達」の最初に「檀(那)波羅蜜」、
「布施の到達」、「布施」が有るのである。
心の「大小」、「優劣」は測る事ができないし、
物の「大小」、「優劣」は測る事ができない。
けれども、心が物を転じる時が有るし、
物が心を転じる布施が有るのである。

「愛語」、「慈愛の言葉」とは、生者を見ると、まず、慈愛の心を起こして、思いやる言葉を施す事なのである。
乱暴な悪い言葉を話す事は無いのである。
世俗には安否(あんぴ)を問う礼儀が有るし、
仏道には自愛、自重を勧(すす)める言葉が有るし、「機嫌(きげん)」、「安否(あんぴ)」を問う挨拶による他人を大切にする行いが有る。
「赤子のように生者を思いやる」思いを蓄えて話すのは「慈愛の言葉」なのである。
徳が有る人は、ほめるべきなのであるし、
徳が無い人は、憐れむべきなのである。
「慈愛の言葉」を好むと、「慈愛の言葉」を増して成長させるのである。
「慈愛の言葉」を好むと、日頃は知らない、気づかない、見えない「慈愛の言葉」も目の前に現れるのである。
現在の身の命が存在する間、好んで「慈愛の言葉」を話すべきである。世から世へ、生から生へ、不退転であるべきである。

敵を降伏させたり、権力者を和解させたりするのは、「慈愛の言葉」を根本とするのである。

面と向かって「慈愛の言葉」を聞くと、顔(といった肉体)が喜ぶし、心が楽しく成る。

面と向かってではなく「慈愛の言葉」を(伝え)聞くと、肝に銘じるし、魂に銘じる。

知るべきである。

「慈愛の言葉」は慈愛の心から起こるのである。慈愛の心は、相手の立場に立って思いやる心を種とするのである。

(原文は「愛語は愛心よりおこる。愛心は慈心を種子とせり」。)

「慈愛の言葉」には能く天を回転させる力が有る事を学ぶべきなのである。

「慈愛の言葉」とは、能力をほめるだけではないのである。

「利行」、「利益をもたらす行い」とは、身分が高くても低くても、全ての生者において、利益をもたらす善い手段を巧(たく)みにめぐらす事である。

例えば、遠い将来と近い将来を見守って利他の手段を営む事である。

困窮している亀を憐れみ、病気の雀(スズメ)を養うべきである。

困窮している亀を見たり、病気の雀(スズメ)を見たりした時、相手からの報いや感謝を求めず、ただ、ひとえに、「利益をもたらす行い」を催(もよお)すのである。

愚かな人は誤って「利他を優先すれば、自分の利益が減る」と思ってしまう。

しかし、そうではないのである。

「利益をもたらす行い」は、一つの法であり、遍(あまね)く自他に利益をもたらすのである。

昔の人、(周公が、面会に来た優れた人材を逃がさないように来客が有ると、)三度も、入浴中でも(入浴を中断して濡れたままの)髪を結び、三度も、食事中でも(食事を中断して)食事を吐き出したのは、ひとえに利他の心なのである。

他国の国民であっても教える物なのである！

敵にも味方にも平等に利益をもたらすべきであるし、
自己にも他のものにも同様に利益をもたらすのである。

もし、このような心を得れば、草や木や風や水にも「利益をもたらす行い」が自然に不退転と成る道理によって、「利益をもたらす行い」をされるのである。

ひとえに、愚かな人でも救おうとして「利益をもたらす行い」を営むべきである。

「同事」、「同じ事をする事」とは、違(たが)えない事なのである。
自己にも違(たが)えない事なのであるし、
他のものにも違(たが)えない事なのである。

例えば、人間の如来は人間と同様にしたような物である。
如来が、人の世界で人と同様にした事によって、他の世界でも他の世界の者と同様にする事を知る事ができる。

「同じ事をする事」を知ると、自己と他のものは(本来は)唯一普遍絶対なのである。

琴と詩と酒では、人を友とするし、天人を友とするし、神を友とする。
人は、琴と詩と酒を友とするし、
琴と詩と酒は、琴と詩と酒を友とするし、
人は、人を友とするし、
天人は、天人を友とするし、
神は、神を友とする理(ことわり)が有る。
このようであるのが、「同じ事をする事」を習い学ぶ事なのである。

例えば、「事」とは、「儀」、「象(かたど)る事」であるし、
「威」、「威徳」であるし、
「態」、「振(ふ)る舞(ま)い」である。

他のものを自己と同様にさせた後に、自己を他のものと同様にする道理が有るのである。
自己と他のものは時に従って無限なのである。

「管子」には、「海は、水を断らないので、能く大きく成る。山は、土を断らないので、能く高く成る。賢明な君主は、人を嫌わないので、能く多数の人々を形成する」と記されている。

知るべきである。

さらに、知るべきである。

海が水を断らないのは、「同じ事をする事」なのである。

水が海を断らない徳も十分に備えているのである。

このため、能く水は集まって海と成るのであるし、能く土は重なって山と成るのである。

密かに知る事ができる。

海は、海を断らないので、海を形成し、大きく成る。

山は、山を断らないので、山を形成し、高く成る。

賢明な君主は、人を嫌わないので、多数の人々を形成する。

「多数の人々」とは国なのである。

原文の「明主」とは、「賢明な君主」を言うのである。

賢明な君主は人を嫌わないのである。

賢明な君主は、人を嫌わないが、報いたり罰したりする事が無いわけではないのである。

賢明な君主は、報いたり罰したりするが、人を嫌わないのである。

昔、人が素直であった時は、国に報賞や罰が無かったのである。

昔の時の報賞や罰は、今とは異なっていたからなのである。

今も報賞を待たずに仏道を求める人もいるであろうが、愚かな人の思慮は及ぶ事ができない。

賢明な君主は、賢明であるので、人を嫌わない。人は、必ず国を形成し、賢明な君主を求める心が有るが、賢明な君主が賢明な君主である道理を尽(ことごと)く知っている事は稀(まれ)であるので、「賢明な君主に嫌われていない」とばかり喜んで、「自分が賢明な君主を嫌っていない」とは知らない、気づかないのである。

このため、賢明な君主にも、暗愚な人にも、「同じ事をする」道理が有るので、「同じ事をする事」は「薩埵」、「菩提薩埵」、「菩薩」の行いと願いなのである。

ただ、まさに、柔和な顔つきによって、一切のものに面と向かうべきである。

これら菩提薩埵四摂法は、各々、菩提薩埵四摂法を十分に備えているので、菩提薩埵十六摂法であると言える。

正法眼蔵　菩提薩埵四摂法

千二百四十三年、宋の時代の中国に入り、仏法を伝えている沙門である道元が記した。

三界唯心

釈迦牟尼仏は「三界唯一心。
心外無別法。
心仏及衆生、是三無差別」、
「三界は唯一の心である。三界は唯一の心で出来ている。
心の外(ほか)に別の法は無い。
心、仏、および、生者は、三つの全く異なる別のものではない」と言った。

この一句の言葉は、釈迦牟尼仏の一代の力を挙げた物である。
釈迦牟尼仏の一代の力を挙げた物とは、釈迦牟尼仏の力を尽くして全てを挙げた物である。
たとえ強引な行いであっても、行う事ができる行いなのである。
(原文は「たとひ強為の為なりとも、云為の為なるへし」。)
このため、如来、釈迦牟尼仏の「三界唯心」、「三界は唯一の心で出来ている」という言葉は、如来の全てが全て形成されて現されているのである。
釈迦牟尼仏の一代の力の全てが、全て、この一句に表されているのである。
(原文は「全一代は全一句なり」。)
三界とは、全ての世界なのである。
「三界のそのままが心その物なのである」と言っているわけではない。

なぜなら、三界は、「八面」、「四方八方」に、どれだけ宝玉のように美しくても、なお三界なのである。

三界を「三界ではない」と誤って表しても、全く表す事ができていないのである。

三界の、内外と中間や、最初と中間と最後は皆、三界なのである。

三界は、三界を見たままのような物なのである。

三界についての、三界ではないかのような所見は、三界を正しく見ていないのである。

三界では、三界の所見を古巣とするし、三界の所見を新しい物とする。

古巣も三界の所見であるし、新しい物も三界の所見である。

このため、釈迦牟尼仏は「不如三界、見於三界」、「(釈迦牟尼仏が見ている三界は、)三界における凡人が、三界を見るようではない」と言った。

(「不如三界、見於三界」は意味が諸説有る。)

この(仏が)見たままであるのが、三界なのである。

この三界は、見たままのような物なのである。

三界は「本有」、「本から有る物」ではないし、

三界は「今有」、「今だけ有る物」ではないし、

三界は「新成」、「新しく形成されている物」ではないし、

三界は「因縁生」、「因縁によって生じている物」ではないし、

三界は「初中後」、「最初であり中間であり最後である物」ではない。

「出離三界」、「(火事の家のように苦に満ちている)三界を出て離れる事」が有るし、

「法華経」の「譬喩品」の「今此三界(、皆是我有、其中衆生、悉是吾子)」、「今この三界(は皆、私、釈迦牟尼仏が所有していて、三界の中の生者は、ことごとく私、釈迦牟尼仏の子である事)」が有るが、

これは機関が機関と見(まみ)えたのであるし、

葛藤が葛藤を生じさせ成長させているのである。

「今この三界(は皆、私、釈迦牟尼仏が所有していて、三界の中の生者は、ことごとく私、釈迦牟尼仏の子である)」とは、釈迦牟尼仏の三界についての所見なのである。

釈迦牟尼仏の三界についての所見とは、「釈迦牟尼仏が見ている三界は、三界における凡人が、三界を見るようではない」のである。

「釈迦牟尼仏が見ている三界は、三界における凡人が、三界を見るようではない」とは、三界を形成させて現す事であるし、三界が形成されて現される事であるし、「公案」、「手がかり」を形成させて現す事である。

能(よ)く三界を「発心、修行、菩提、涅槃」、「心する事、修行、覚、寂滅」に成らせる。

これが、「(今この三界は)皆、私、釈迦牟尼仏が所有してい(て、三界の中の生者は、ことごとく私、釈迦牟尼仏の子であ)る」なのである。

「法華経」の「譬喩品」で釈迦牟尼仏は「今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子」、「今この三界は皆、私、釈迦牟尼仏が所有していて、三界の中の生者は、ことごとく私、釈迦牟尼仏の子である」と言った。

「今この三界」は、「私、如来、釈迦牟尼仏が所有している」ので、尽(ことごと)くの世界は皆、三界なのである。
三界とは尽(ことごと)くの世界であるので、「今この三界」とは過去、現在、未来なのである。
過去、現在、未来が形成されて現されている事は、「今この三界」を遮(さえぎ)らない。
「今この三界」が形成されて現されている事は、過去、現在、未来を遮(さえぎ)らない。
(原文の「罣礙するなり」は誤りだと思われる。)

「今この三界は皆、私、釈迦牟尼仏が所有している」とは、「尽十方界は真実の人の体である」事なのであるし、「尽十方界は『沙門』、『僧』の一つの単眼である」事なのである。

「三界の中の生者」とは、「尽十方界は真の実体である」事なのである。
各々の生者は生の集まりであるので生者なのである。
(原文は「一一衆生の生衆なるゆえに衆生なり」。)

「三界の中の生者は、ことごとく私、釈迦牟尼仏の子である」とは、(仏の)子の全ての機関が現れている道理なのである。

ただし、「私、釈迦牟尼仏の子」は必ず身体髪膚を、慈悲深い父(である仏)によって受け、破壊せず、欠損させないのを、「(仏の)子として形成されて現されている」とする。

今は、父が前で子が後ではなく、子が先で父が後ではなく、父と子を並べないのを「私、釈迦牟尼仏の子」の道理と言うのである。

与えられるわけではないが(仏の)子としての身体髪膚を受けるるし、奪うわけではないが(仏の)子としての身体髪膚を得る。

過去や未来の相ではなく、大小の量ではなく、老いている、若い、の論理ではなく、老いている、若いを仏祖の「法華経」の「従地涌出品」の「父少而子老」、「父は若く、子は老いている」のように保持し任せるべきである。

父は若く、子は老いている事が有るし、

父は老い、子は若い事が有るし、

父も老い、子も老いている事が有るし、

父も若く、子も若い事が有る。

父の老いを学ぶのは(仏の)子ではない。

子の若さを経ていないのは父(である仏)ではない。

子の老いている、若いと、父の老いている、若いを必ず明確に詳細に鍛錬して参入して究めるべきである。軽率であるべきではない。

同時に生じて現れる父と子がいる。

同時に現れて滅ぶ父と子がいる。

同時にではなく生じて現れる父と子がいる。

同時にではなく現れて滅ぶ父と子がいる。

慈悲深い父(である仏)を遮らず「私、釈迦牟尼仏の子」として形成されて現される。

「私、釈迦牟尼仏の子」を遮らず慈悲深い父(である仏)は形成されて現される。

心ある生者がいるし、心無い生者がいる。

心ある「私、釈迦牟尼仏の子」がいるし、心無い「私、釈迦牟尼仏の子」がいる。

このように、「私、釈迦牟尼仏の子」、「釈迦牟尼仏の子である私」は尽く釈迦牟尼仏という慈悲深い父の後継者である。

十方の尽くの世界の、あらゆる過去、現在、未来の諸々の生者は、十方の尽くの世界の過去、現在、未来の諸仏なのである。

「私、諸仏の子」は生者なのである。

生者の慈悲深い父は諸仏なのである。

そのため、「百草」、「森羅万象」の華と果実は「私、諸仏が所有している」のである。

大小の岩石は「私、諸仏が所有している」のである。

諸仏が「安らぐ場所」は「森林と野原」なのであるし、

諸仏は森林と野原を「既に離れている」のである。

(

「法華経」の「譬喩品」には「安所林野」、「如来は、森林と野原を安らぐ場所としている」と記されている。

「法華経」の「譬喩品」には「如来已離、三界火宅」、「如来は三界という火事の家を既に離れている」と記されている。

)

しかも、このようであっても、如来、釈迦牟尼仏の言葉の主旨は「(三界の中の生者は、ことごとく)私、釈迦牟尼仏の子である」という言葉のみなのであり、父である釈迦牟尼仏についての言葉は未だ無いのである、と参入して究めるべきである。

釈迦牟尼仏は「諸仏、応、化、法身、亦不出三界。
三界外無衆生。
仏何所化？
是故我言、『三界外別有一衆生界蔵者、外道大有経中説、非七仏之所説』」、
「諸仏の法身、応身、化身もまた三界を出ない。
三界の外に生者はいない。
仏は何を化して導くのか？　仏は生者を化して導くのである！
このため、私、釈迦牟尼仏は『三界の外に別に生者を内蔵する一つの世界が有る、と言ってしまうのは、外道の大有経の中の説であり、過去七仏の所説ではない』と言う」と言った。

明らかに参入して究めるべきである。
諸仏の法身、応身、化身は皆、三界なのである。
三界は外に無いのである。
例えば、如来、釈迦牟尼仏が外にいないような物であるし、牆壁が外に無いような物である。
三界が外に無いように、生者は外にいないのである。

生者がいない場所で、「仏は何を化して導くのか？」。
仏が化して導くのは必ず生者なのである。
知るべきである。

三界の外（ほか）に生者を内蔵する一つの世界が有る、と言ってしまうのは、外道の大有経であり、過去七仏の経ではないのである。

「唯心」、「唯一の心」とは、一つや二つの心ではないし、
(そのまま、)三界ではないし、
三界を出ているものではないし、
誤りが無いし、
慮知念覚が有る事が有るし、慮知念覚が無い事が有るし、(原文は「有慮知念覚なり、無慮知念覚なり」。)
牆壁や瓦礫であるし、
山や河や大地である。

心とは「皮肉骨髄」、「理解」であるし、
心とは釈迦牟尼仏の「拈華瞬目」と初祖の摩訶迦葉の「破顔微笑」であるし、
心ある事が有るし、心無い事が有るし、(原文は「有心あり、無心あり」。)
身が有る心が有るし、身が無い心が有るし、
身より先の心が有るし、身より後の心が有る。

身を生じるのに胎卵湿化といった種類が有るし、心を生じるのにも胎卵湿化といった種類が有る。

青、黄、赤、白は心である。
長短や、角ばっている、丸い、は心である。

生と死が来たり去ったりするのは心なのである。

年月、日時は心である。

夢幻、空華は心である。

水しぶき、泡、「火」は心である。

春花秋月は心である。

一時は心である。

けれども、心は破壊できない。

このため、諸法の実の相である心なのであるし、「仏と仏だけ(が能く究め尽せる、諸法の実の相)」である心なのである。

宗一大師と呼ばれる玄沙師備は、地蔵院の、真応大師と呼ばれる羅漢桂琛に、「『三界唯心』、『三界は唯一の心で出来ている』という釈迦牟尼仏の言葉をあなたは、どのように理解しているのですか？」と質問した。

羅漢桂琛は、椅子を指して、「和尚様、玄沙師備様は、これを何と呼んで何と為しますか？」と言った。

玄沙師備は、「『椅子』と呼んで『椅子』と為します」と言った。

羅漢桂琛は、「和尚様、玄沙師備様は、『三界唯心』、『三界は唯一の心で出来ている』という釈迦牟尼仏の言葉を理解していません」と言った。

玄沙師備は、「(『椅子』は『竹や木』で出来ているので、)私は、これを『竹や木』と呼んで『竹や木』と為します。あなたは何と呼んで何と為しますか？」と言った。

羅漢桂琛は、「羅漢桂琛もまた、これを『竹や木』と呼んで『竹や木』と為します」と言った。

玄沙師備は、「尽大地で一人の仏法を理解している人を求めても得る事は不可能である」と言った。

玄沙師備の「『三界は唯一の心で出来ている』という釈迦牟尼仏の言葉をあなたは、どのように理解しているのか？」という質問では、どのように理解していても、どのようにも未だ理解していなくても、同じく、「三界唯心」なのである。

このため、未だ「三界唯心」ではないのである。

このため、羅漢桂琛は、椅子（イス）を指して、「和尚、玄沙師備は、これを何と呼んで何と為（な）すのか？」と言った。

知るべきである。

「『三界唯心』、『三界は唯一の心で出来ている』という釈迦牟尼仏の言葉をあなたは、どのように理解しているのか？」という質問は、「これを何と呼んで何と為（な）すのか？」という質問に成るのである。

玄沙師備は、「『椅子（イス）』と呼んで『椅子（イス）』と為（な）す」と言ったが、三界を理解して言っているのか？

三界を理解しないで言っているのか？

三界を言っているのか？

三界そのままではない唯一の心を言っているのか？

椅子（イス）を言っているのか？

玄沙師備の心を言っているのか？

このように試しに言ってみて言葉を究めるべきである。
試しに理解しようとしてみる、理解して取る方法が有るし、試しに参入してみる、参入して究める方法が有る。

羅漢桂琛は、「和尚、玄沙師備は、『三界唯心』、『三界は唯一の心で出来ている』という釈迦牟尼仏の言葉を理解していない」と言った。
この言葉は、例えば、趙州真際大師に言った言葉の中の「東門」や「南門」が有っても、さらに「西門」や「北門」が有る。
(原文は「たとへは道趙州するなかの東門、南門なりといへとも、さらに西門、北門あるへし」。)
さらに、東の趙州真際大師や、南の趙州真際大師がいる。
たとえ「三界は唯一の心で出来ている」についての理解が有っても、さらに「三界は唯一の心で出来ている」について理解していない所に参入して究めるべきである。
さらに、また、理解している、理解していない、ではない「三界唯心」が有る。

玄沙師備は、「私は、これを『竹や木』と呼んで『竹や木』と為す」と言った。
この言葉は、必ず、言葉に成る前を照らし、言葉に成った後を絶つ、「節目」、「区切り」に参入し徹すべきである。
(原文は「この道取かならす声前句後に光前絶後の節目を参徹すへし」。
「声前句後」は「声に成る前と句に成った後」を意味する。

「光前絶後」は「前を照らし後を絶つ」を意味する。
）

「私は、これを『竹や木』と呼んで『竹や木』と為(な)す」と言うが、今「竹や木」と呼んで「竹や木」と為(な)すより前は、どういった物であると呼んで、どういった物であると為(な)していたのか？

従来の、「八面」、「四方八方」に、宝玉のように美しい、「最初も中間も最後も」竹や木であるとするのか？

今「『竹や木』と呼んで『竹や木』と為(な)す」と言っているのは、「三界は唯一の心で出来ている」と言っている、とするのか？「三界は唯一の心で出来ている」とは言っていない、とするのか？

知るべきである。

朝に「三界は唯一の心で出来ている」と言った時には、たとえ「椅子(イス)」であっても、たとえ「唯心」、「唯一の心」であっても、たとえ「三界」であっても、夕暮れに「三界は唯一の心で出来ている」と言う時には、「私は、これを『竹や木』と呼んで『竹や木』と為(な)す」と言う事ができるのである。

羅漢桂琛は、「羅漢桂琛もまた、これを『竹や木』と呼んで『竹や木』と為(な)す」と言った。

知るべきである。

玄沙師備と羅漢桂琛、師弟が対面して言っているのであるが、釈迦牟尼仏の「三界唯心」という言葉に同じく参入した事による「頭が正しいので尾も正しい」なのである。

ただし、玄沙師備の「私は、これを『竹や木』と呼んで『竹や木』と為(な)す」という言葉と、羅漢桂琛の「羅漢桂琛もまた、これを『竹や木』と呼ん

で『竹や木』と為す」という言葉は、同じであるのか？　異なるのか？　正しいのか？　正しくないのか？　と参入して究めるべきである。

玄沙師備は、「尽大地で一人の仏法を理解している人を求めても得る事は不可能である」と言った。

この言葉をも明確に詳細に、わきまえて受け入れるべきである。

知るべきである。

玄沙師備も「『竹や木』と呼んで『竹や木』と為す」だけなのであるし、羅漢桂琛も「『竹や木』と呼んで『竹や木』と為す」だけなのである。

さらに釈迦牟尼仏の「三界唯心」という言葉を理解して取らなかったが、釈迦牟尼仏の「三界唯心」という言葉を理解して取らなかったわけではない。

さらに釈迦牟尼仏の「三界唯心」という言葉について言わなかったが、釈迦牟尼仏の「三界唯心」という言葉について言わなかったわけではない。

次のように、玄沙師備に質問するべきである。

「『尽大地で一人の仏法を理解している人を求めても得る事は不可能である』と言ったが、試しに言ってみてください。何を『尽大地』と呼んで何を『尽大地』と為すのか？」

このように参入して究めて鍛錬するべきである。

正法眼蔵　三界唯心

その時、千二百四十三年、越宇の禅師峰の頂上にいて僧達に示した。

説心説性

悟本大師と呼ばれる三十八祖の洞山良价は、神山僧密と歩いている時に、そばの寺院を指して、「裏面有人説心説性」、「内面に人がいて心と心の性質を説いている」と言った。

神山僧密は、「それは誰の事ですか？」と言った。

洞山良价は、「神山僧密様に一つの質問をされて、直ぐ（す）に十分に死去する事を得た」と言った。

神山僧密は、「奥底まで心と心の性質を説いているのは誰ですか？」と言った。

洞山良价は、「死中に活を得たり」、「九死（きゅうし）に一生（いっしょう）を得た」と言った。

心と心の性質を説くのは仏道の大本（おおもと）なのであり、これによって仏から仏へ、祖師から祖師へを形成させせて現させるのである。

心と心の性質を説かなければ、「妙なる法輪を転じる」、「妙なる法を説く」事は無いし、

悟りを求める事を思い立って心したり修行したりする事は無いし、

釈迦牟尼仏のように、大地と情の有る全ての生者と共に同時に仏に成る事は無いし、

「一切の全ての生者には仏の性質が無い」と知る事は無い。

釈迦牟尼仏の「拈華瞬目」は、心と心の性質を説く事であるし、

初祖の摩訶迦葉の「破顔微笑」は、心と心の性質を説く事であるし、

二十九祖の慧可が二十八祖の達磨を三回、礼拝した後、自分の位置、居場所に戻って立ったのは、心と心の性質を説く事であるし、

「祖師入梁」、「祖師西来」、「二十八祖の達磨が西のインドから中国へ来た」のは、心と心の性質を説く事であるし、

「夜半伝衣」、「夜中に三十二祖の弘忍が衣を三十三祖の大鑑禅師に伝えた」のは、心と心の性質を説く事であるし、

杖をひねるのは、心と心の性質を説く事であるし、

害虫を払うための毛がついた棒である払子を横にするのは、心と心の性質を説く事である。

仏から仏へ、祖師から祖師への、あらゆる功徳はことごとく心と心の性質を説く事なのである。

「平常」と言う心と心の性質を説く事が有るし、「牆壁や瓦礫」と言う心と心の性質を説く事が有る。

「心が生じれば、種々のものも生じる」道理が形成されて現されるし、「心が滅すれば、種々のものも滅する」道理が形成されて現されるが、心を説く時なのであるし、心の性質を説く時なのである。

それなのに、心と心の性質に通達していない凡庸な人は、心と心の性質に暗くて知らないし、奥深い話や妙なる話を知らないし、心と心の性質を説く事や奥深い話や妙なる話を誤って「仏祖の道ではない」と言ってしまうし、誤って「仏祖の道ではない」と教えてしまう。

心と心の性質を説く事を、心と心の性質を説く事であると知らないので、心と心の性質を説く事を、誤った心と心の性質を説く事と思ってしまうのである。

これは、特に、大いなる道が通じたり塞がったりする事を批判できない事による物なのである。

後世の、径山の大慧宗杲は、誤って「今の僧達は心と心の性質を説く事を好み、奥深い話や妙なる話を好むので、道の会得が遅い。ただ、まさに、心と心の性質を二つ共、投げ捨てて来て、奥深い話と妙なる話を共に忘れ去って来て、『二相』、『二つの相』が生じない時、証に適うのである」と言ってしまった。

このような言葉を言ってしまう大慧宗杲は、未だ仏祖の書を知らないし、仏祖による罪の戒めを見聞きしていないのである。

このため、大慧宗杲は、「心とは慮知念覚である」としか思わず、「慮知念覚も心の一つである」と学ばないので、このように言ってしまったのである。

大慧宗杲は、「心の性質は澄んでいて寂静である」とだけ妄りに思い計って、仏と成れる性質や仏の性質や、「法性」、「法の本性」の有無を知らないし、「如是性」、「ありのままの性質」を夢にも未だ見ないので、このように仏法に偏見が有るのである。

仏祖が言葉にしている心とは、「皮肉骨髄」、「理解」なのであるし、
仏祖が保持させ任せている心の性質とは、修行者を打って戒める竹の細長い板である竹篦や、杖なのであるし、
仏祖の証に適っている奥深いものとは、寺の円柱や、灯籠なのであるし、
仏祖が挙げて、ひねっている妙なるものとは、知見や、理解なのである。

仏祖が真実に仏祖であるのは、初めから、この心と心の性質を聴いて理解して取り、説明によって理解して取り、行って理解して取り、証して理解して取っているからなのであるし、
この奥深いものや妙なるものを保持し任せられて理解して取り、学に参入して理解して取っているからなのである。

このようである人を仏祖を学ぶ仏祖の法の子孫と言う。

このようでなければ、仏道を学び修行していない。

このため、言う事ができ得る時に言う事ができ得ないし、言う事ができ得ない時に言わないままでいないのである。

(原文は「このゆえに得道のとき得道せす、不得道のとき不得道ならさるなり」。)

言う事ができ得る時と、言う事ができ得ない時に共に誤るのである。

大慧宗杲が言うような「心と心の性質を二つ共、忘れ去る」と言うのも、百、千、万、億分の少しの分だけ心を説いている事に成る。

大慧宗杲が言うような「奥深い話と妙なる話を共に投げ捨てて来る」と言うのも、幾分か奥深い話を話している事に成る。

この「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」を学ばず、愚かにも「忘れ去る」と言ってしまえば、誤って「手を離れる」と思ってしまい、誤って「身から逃れる」と思ってしまう人は、未だ「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の限界を理解していないし、どうして大乗の奥深い所に及ぶ事ができるだろうか？　いいえ！　大乗の奥深い所に及ぶ事ができない！

まして、どうして向上の「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」を知っているだろうか？　いいえ！　向上の「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」を知らない！

「仏祖の茶と飯を食べている」とは言い難い。

（知は心の糧である。）

「参師勤恪」、「祖師の所へ行って勤める」とは、ただ心と心の性質を身心を受けている時に体で究める事なのであるし、身を受ける前と身を捨てた後に参入して究める事なのである。さらに、「二、三の異なる事は無い」、「唯一無二である」。

時に、二十八祖の達磨は、二十九祖の慧可に、「あなたは、ただ、外の諸縁を止め、内心に喘（あえ）ぐ事無く、心を牆壁のようにして仏道に入るべきです」と言った。

慧可は、種々に心と心の性質を説く事を試みたが諸共に、証に適（かな）わなかった。

慧可は、ある日、突然に、省（かえり）みて、道を会得した。

結果、慧可は、達磨に、「弟子である私、慧可は、初めて、諸縁を止めました」と言った。

達磨は、「慧可が既に悟った」と知って更に突き詰めず、ただ、「断絶する事は無いですか？」と言った。

慧可は、「無いです」と言った。

達磨は、「あなたの心は、どういった感じですか？」と言った。

慧可は、「明らかに常に知っています。そのため、言い表せません」と言った。

達磨は、「それが今まで諸々の仏祖が伝えている心の実体なのである。あなたは今、既に会得しているのである。善く自ら護り保持しなさい」と言った。

この話を激しく疑う者もいるし、挙げて、ひねる者もいる。

慧可が達磨の所に行って仕えた話の中の一つの話とは、このような物であった。

慧可は、しきりに心と心の性質を説く事を試みたが、初めは証に適（かな）わなかった。

慧可は、ようやく功徳を積み重ねて、終（つい）に達磨の言葉の仏道を会得した。

凡庸な人や愚かな人は、誤って「慧可が初めに心と心の性質を説く事を試みた時は証に適（かな）わなかったが、その『咎（とが）』、『誤り』は心と心の性質を説いた事に有る。慧可は後に心と心の性質を説く事を捨てて証に適（かな）った」と思ってしまう。

達磨の「心を牆壁のようにして仏道に入るべきである」という言葉に参入し徹（とお）さないので、このように誤って言ってしまうのである。

特に、仏道を学び修行する区別に暗い。

なぜなら、「菩提心」、「悟りを求める心」を起こし、仏道の修行に赴(おもむ)いた後、行うのが難しい修行を心を込めて行う時、百回、行っても、一回も当たらない。

けれども、善知識を持つ人々の善知識によって、または、経典によって、(行って、)ようやく当てる事ができ得るのである。

今、一回、当てる事ができ得たのは、昔、百回、当たらなかった時の鍛錬の力による物なのである。

百回、当たらなかった時の鍛錬という一つの老熟なのである。

仏教を聞く時も、仏道を修行する時も、証を会得する時も皆、同様なのである。

昨日の心と心の性質を説く試みが百回、当たらなくても、その鍛錬は突然に今日の一回、当たる事と成るのである。

仏道の修行の初心の時、鍛錬が未熟で通達できないからと言って仏道を捨てて外(ほか)の道を経由しても仏道を会得する事は無い。

仏道の修行の終始に到達していない輩は、この通じる事と塞(ふさ)がる事が道理である事を明らめるのが難しい。

仏道は、初めて悟りを求める事を思い立って心した時も仏道なのであるし、正覚を成就した時も仏道なのであるし、最初も中間も最後も仏道なのである。

例えば、万里を行く者の、一歩も千里の内なのであるし、千歩も千里の内なのである。最初の一歩と千歩目は異なるが、千里の内なのであるのは同じである、ような物である。

それなのに、最悪に愚かな輩は誤って「仏道を学び修行している時は仏道に到達していなくて、仏と成ったという結果の上にいる時だけが仏道である」と思ってしまう。

仏道の全ては仏道を説く事であると知らないし、(原文の「挙道行道をしらす」は「挙道説道をしらす」の誤りである。)
仏道の全ては仏道を行う事であると知らないし、
仏道の全ては仏道を証する事であると知らないので、このように誤ってしまうのである。

「迷っている人は仏道を修行して大いに悟る」とだけ学んでしまい、「迷っていない人も仏道を修行して大いに悟る」と知らないし、見聞きしない輩は、このように誤って言ってしまうのである。

証に適うより前の、心と心の性質を説く試みも仏道なのではあるが、心と心の性質を説く試みによって証に適うのである。

迷っている人が初めて大いに悟る事だけを「証に適う」と言うと学に参入するべきではない。

なぜなら、迷っている者も大いに悟るし、
悟っている者も大いに悟るし、
悟っていない者も大いに悟るし、
迷っていない者も大いに悟るし、
証に適っている者も証に適う時が有るのである。

そのため、心と心の性質を説く事は仏道の正直な道なのである。

大慧宗杲は、この道理に到達できないで、誤って「心と心の性質を説くべきではない」と言ってしまったが、仏法の道理ではない。
宋の時代の中国には、大慧宗杲に及ぶ僧すらもいない。

洞山良价は独り、諸祖の中の尊い祖師として、心と心の性質を説く事の真の道理に通達している。

未だ通達していない諸方の祖師には、洞山良价と神山僧密の話のような言葉は無い。

洞山良价は、神山僧密と歩いている時に、そばの寺院を指して、「裏面有人説心説性」、「内面に人がいて心と心の性質を説いている」と言った。

この言葉は、洞山良价が「この世」に出現してから今まで、洞山良价の法の子孫は必ず洞山良价という祖師の家風を正しく伝えていて、他の宗派の者は夢にも見聞きしない。まして、夢にも理解の方法を知るだろうか？　いいえ！

洞山良价の正統な法の子孫である者だけが正しく伝えている。

もし、この道理を正しく伝えられていなければ、どうして仏道の大本（おおもと）に到達できるだろうか？　いいえ！

道理とは、中にも、面（おもて）にも、人がいて、ある人がいて、心と心の性質を説いているのである。

中も面（おもて）も心と心の性質を説いているのである。

これに参入して究めて鍛錬するべきである。

心の性質ではない説明は今までに無いし、説明ではない心は未だ無い。

仏に成れる性質とは、一切の全ての説明なのである。

「仏の性質が無い」とは、一切の全ての説明なのである。

仏に成れる性質や仏の性質が心の性質である事の学に参入しても、「仏に成れる性質が有る」という学に参入していない者は仏道を学んで修行してい

ないし、「仏の性質が無い」という学に参入していない者は全ての学に参入していない。
説明が心の性質である事の学に参入する者は、仏祖の正統な法の子孫である。
心の性質は説明である事を信じて受け入れる者は、正統な法の子孫である仏祖である。

誤って「心は疎(おろそ)かにも動き、心の性質は静かである」と言ってしまうのは外道の見解なのである。
誤って「心の性質は明らかで、『相』、『形』は移り変わる」と言ってしまうのは外道の見解なのである。
仏道の心と心の性質の学は、そうではない。
仏道の心と心の性質の修行は、外道とは異なる。
仏道の心と心の性質の明らめは、外道は少しも明らめる事ができない。

仏道には、人がいて心と心の性質を説く事が有るし、
人がいなくても心と心の性質が説かれる事が有る。
人がいて心と心の性質を説かない事が有るし、
人がいなくても心と心の性質が説かれない事が有る。
　心を説く事が有るし、
心を未だ説かない事が有るし、
心の性質を説く事が有るし、
心の性質を未だ説かない事が有る。

人がいない時の心が説かれる事を学ばなければ、心を説く事は境地に未だ到達していないのである。

人がいる時の心を説く事を学ばなければ、心を説く事は境地に未だ到達していないのである。

心が説かれても人がいない事を学び、

人がいなくても心が説かれる事を学び、

心を説く事は人である事を学び、

人である事は心を説く事を学ぶのである。

臨済義玄は力を尽くして、わずかに「位の無い真の人」と言ったが、「位の有る真の人」は未だ言われていない。

残りの学への参入、残りの言葉は未だ形成されて現されていなくて、「参入し徹(とお)した境地に未だ到達していない」と言える。

心と心の性質を説く事は仏祖を説く事であるので、耳で見(まみ)えるべきであるし、眼で見(まみ)えるべきである。

時に、神山僧密は、「それは誰の事か？」と言った。

この言葉を形成させて現させて、神山僧密は、先にも、この言葉に乗じる事ができたし、後にも、この言葉に乗じる事ができた。

「それは誰の事か？」とは、「どこの中で心と心の性質が説かれているのか？」なのである。

そのため、「それは誰の事か？」と言われた時や、「それは誰の事か？」と思量されて理解して取られた時は、心と心の性質を説く事と成るのである。

この、心と心の性質を説く事は、他の輩は未だかつて知らないのである。子を忘れて賊とするので、賊を認めて子とするのである。

洞山良价は、「神山僧密に一つの質問をされて、直ぐに十分に死去する事を得た」と言った。

この言葉を聞いた学に参入している凡庸な人の多くは、「心と心の性質を説く人がいて、『それは誰の事か？』と言われて、直ぐに十分に死去する事を得た。なぜなら、『それは誰の事か？』という言葉は、出会っても理解していないような物であるし、全く所見が無いので、死んでいる言葉だからである」と思っている。

しかし、必ずしも、そうではない。

この、心と心の性質を説く事は、徹底した者は稀である。

「十分な死去」は「十二分な死去」ではない。このため、「十分な死去」なのである。

「それは誰の事か？」と質問された時、誰が、この質問を「天を遮り地を覆っていない」とするのか？

「照古也際断」、「昔を照らすのは間を断つ事」に成る。

「照今也際断」、「今を照らすのは間を断つ事」に成る。

「照来也際断」、「未来を照らすのは間を断つ事」に成る。

「照正当恁麼時也際断」、「この時を照らすのは間を断つ事」に成る。

神山僧密は、「奥底まで心と心の性質を説いているのは誰か？」と言った。

先の「それは誰の事か?」と今の「(奥底まで心と心の性質を説いているのは)誰か?」は、ありふれた質問のように見えても、質問するべき事を質問しているのである。

(

原文は「さきの是誰と、いまの是誰と、その名は張三なりとも、その人は李四なり」。

「張三李四」は「ありふれた人」を意味する。

)

洞山良价は、「死中に活を得たり」、「九死に一生を得た」と言った。

この「死中」は、「直ぐに死去する事を得た」を直接指すと思ってはいけないし、「奥底まで心と心の性質を説いているもの」を直接指して「(奥底まで心と心の性質を説いているのは)誰か?」を妄りに言っているわけではない。

「(奥底まで心と心の性質を説いているのは)誰か?」は「心と心の性質を説いている人」を指していて、必ずしも「十分な死去」を期していないと学に参入するべきである。

洞山良价の「死中に活を得たり」、「九死に一生を得た」という言葉は、「人がいて心と心の性質を説いている」音声や色形が目の前に現れているのである。

また、さらに、「十分な死去」の中の一両分なのである。

「活」は、たとえ全て活きても、死が変化して「活」として現れるわけではない。

「活を得たり」、「一生を得た」の「頭が正しいので尾も正しい」によって脱ぎ落とすのみなのである。

仏祖の言葉には、このような、心と心の性質を説く事が有って、参入されて究められているのである。
また、その時は、十分の死を死んで、「活を得たり」、「一生(いっしょう)を得た」の手段を形成して現すのである。
知るべきである。
唐の時代から今日に至るまで、心と心の性質を説く事が仏道である事を明らめず、仏の教えに従って修行して証する心と心の性質を説く事に暗くて、でたらめを言う、憐れむべき者が多い。
身を受ける前と身を捨てた後でも救うべきである。
人々の為(ため)に言うと、
心と心の性質を説く事は過去七仏や祖師が重要としている事なのである。

正法眼蔵　説心説性

その時、千二百四十三年、日本の越州の吉田県の吉峰寺にいて僧達に示した。

仏道

曹谿山の、古代の仏と等しい、三十三祖の大鑑禅師と呼ばれる慧能は、ある時、僧達に示して、「慧能から過去七仏まで四十人の祖師達がいる」と言った。

この言葉に参入して究めると、過去七仏から三十三祖の慧能まで四十人の仏達がいる。

仏から仏へ、祖師から祖師へ数えるには、このように数えるのである。

このように数えれば、過去七仏は七人の祖師達であるし、初祖から三十三祖までの三十三人の祖師達は三十三人の仏達である。

曹谿山の、三十三祖の大鑑禅師の言葉の主旨は、このような物なのである。

これは、正統な仏法の後継者である仏の教えなのである。

正しく伝えられている正統な仏法の後継者だけが、このような数え方の仏法を正しく伝えられている。

釈迦牟尼仏から三十三祖の大鑑禅師まで三十四人の祖師達がいる。

この、仏祖の伝承では、初祖の迦葉が如来、釈迦牟尼仏に見(まみ)えたように伝承しているし、如来、釈迦牟尼仏が初祖の迦葉を得たように伝承している。

釈迦牟尼仏が迦葉仏の学に参入したような師弟関係は千二百四十三年の今も存在している。

このため、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を目の当たりに正統に代々伝えられて来ている。

仏法の正しい命とは、「正しくものを見る眼」を正しく伝えていく事だけなのである。

仏法は、このように「正しくものを見る眼」を正しく伝えているので、釈迦牟尼仏が付属した正統な代々なのである。

そのため、仏道は、功徳や、重要としている事を漏らさず全て備えている。

仏教は、西のインドから東の地の中国へ伝えられて、「十万八千里」なのである。

仏教は、釈迦牟尼仏の存命中から今日まで伝えられて二千年余りなのである。

この道理の学に参入していない輩は、仏祖が正しく伝えている「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼を持ち寂滅した妙なる心を持つ事」を妄りに誤って「禅宗」と呼んでしまっているし、

祖師を誤って「禅祖」と呼んでしまっているし、

学徒を誤って「禅子」や「禅和子」と呼んでしまっているし、

誤って「禅家流」を自称する事が有る。

これらは皆、偏見を根本としている枝葉なのである。

西のインドから東の地の中国まで、古くから今に至るまで、（仏祖が）「禅宗」と呼んだ事は無い。

「禅宗」と妄りに自称する人は、仏道を破る「魔」、「仏敵」なのであるし、仏祖の招かざる敵なのである。

石門の慧洪の「林間録」には次の様に記されている。

達磨は、梁から魏へ行った。
達磨は、嵩山の麓まで歩き、少林寺に留まった。
達磨は、壁に向かって坐禅するだけであった。
(達磨の坐禅は、)「習禅」、「色々な観念を習う事」ではない。
しかし、久しく人々は達磨の坐禅の理由を推測できなかった。
そのため、達磨の坐禅を「習禅」、「色々な観念を習う事」と誤って見なした。
「禅那」、「習禅」、「色々な観念を習う事」は諸々の修行のうちの一つでしかない。
どうして「禅那」、「習禅」、「色々な観念を習う事」によって達磨といった聖者を完全に表し尽すのに足りるであろうか？　いいえ！　「禅那」、「習禅」、「色々な観念を習う事」では達磨といった聖者を表し尽すには不足である！
しかし、当時の人々は、「禅那者」、「習禅者」、「色々な観念を習う者」として達磨を誤って表現した。
また、歴史家達も、世論に従って、達磨を「習禅者達」、「色々な観念を習う者達」の一人に誤って並べてしまい、「枯木死灰」、「枯木や火が消えて冷えた灰の様な無欲」の段階の徒と誤って同一視した。
しかし、聖者は「禅那」、「習禅」、「色々な観念を習う」だけではない。
ただし、聖者は「禅那」、「習禅」、「色々な観念を習う事」をしないわけではない。
易の八卦は、陰と陽から出て来るが、陰と陽ではなく成る訳ではない様に。

達磨を二十八祖と呼ぶが、迦葉を初祖として達磨を二十八祖と呼ぶのである。

二十八祖の達磨は、過去七仏の最初の仏である毘婆尸仏から三十五代目である。

過去七仏と、二十八祖の達磨までの二十八人の代々の祖師達は、必ずしも「禅那」、「習禅」、「色々な観念を習う事」によって仏道を証し尽(つく)さなかった。

このため、古代の先人の、石門の慧洪は「林間録」で「『禅那』、『習禅』、『色々な観念を習う事』は諸々の修行のうちの一つでしかない。どうして『禅那』、『習禅』、『色々な観念を習う事』によって達磨といった聖者を完全に表し尽すのに足りるであろうか？　いいえ！　『禅那』、『習禅』、『色々な観念を習う事』では達磨といった聖者を表し尽すには不足である！」と記している。

古代の先人の、石門の慧洪は、少し祖師達を見て来ていて、代々の祖師達の奥義に入っているので、このような言葉が有るのである。

石門の慧洪のような人は、宋の時代の中国の天下で得難いし、稀少である。

さて、達磨が壁に向かってしていた事が、たとえ「禅那」、「習禅」、「色々な観念を習う事」であっても、「禅宗」と呼ぶべきではない。

まして、「禅那」、「習禅」、「色々な観念を習う事」は未だ仏法の総合や要約ではない。

それなのに、仏から仏へ正しく伝えられている大いなる仏道を故意に「禅宗」と呼ぶ輩は、仏道は夢にも未だ見ていないし、聞いていないし、伝えられていないのである。

「『禅宗』を自称する輩にも仏法が有るだろう」と聞き入れる事なかれ。

誰が「禅宗」という誤った呼び名を呼んで来ているのか？

諸仏も祖師達も「禅宗」と呼んでいる人は未だいない。

知るべきである。

「禅宗」という誤った呼び名は、「魔波旬」、「魔」、「仏敵」が呼んでいるのである。

「魔波旬」、「魔」、「仏敵」による誤った呼び名を呼び続ける者は「魔」、「仏敵」の仲間なのであり、仏祖の法の子孫ではない。

釈迦牟尼仏は、霊山で、百万の僧達の前で、優曇華をひねって目を瞬(またた)かせた。

僧達は皆、(釈迦牟尼仏の「拈華瞬目」の意図を理解できず、)黙り込んでしまった。

ただし、(後の初祖の)迦葉だけが「破顔微笑」した。

釈迦牟尼仏は「私には『正法眼蔵涅槃妙心』、『正しくものを見る眼と寂滅した妙なる心』が有り、『僧伽梨衣』、『大衣』と共に、摩訶迦葉に付属する」と言った。

釈迦牟尼仏が初祖の迦葉に付属したのは、「私、釈迦牟尼仏に有る『正法眼蔵涅槃妙心』、『正しくものを見る眼と寂滅した妙なる心』」なのである。この他に、さらに、釈迦牟尼仏は「私に有る禅宗を迦葉に付属する」とは言わなかった。

釈迦牟尼仏は「大衣と共に付属する」と言ったが、「禅宗と共に付属する」とは言わなかった。

そのため、釈迦牟尼仏が存命中に、「禅宗」という呼び名は全く見聞きできない。

二十八祖の達磨は、時に、二十九祖の慧可に示して、「諸仏の無上の妙なる道は、長い年月、休まず努力して、行い難い事を能く行い、普通は忍耐しない忍耐し難い事を能く忍耐するのである。

どうして、矮小な徳行、矮小な智慧、軽率な心、慢心によって、真の知、真の教えを求めて得られるであろうか？　いいえ！

矮小な徳行、矮小な智慧、軽率な心、慢心によって、真の知、真の教えを求めても得られない！」と言った。

また、二十八祖の達磨は、「諸仏の仏法の印は、人によって得るわけではない」と言った。

また、二十八祖の達磨は、「如来、釈迦牟尼仏は、『正法眼蔵』、『正しくものを見る眼』を初祖の迦葉に付属した」と言った。

二十八祖の達磨が示して言った言葉は、「諸仏の無上の妙なる道」と「諸仏の仏法の印」と「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」なのである。

二十八祖の時も全く「禅宗」と呼んだ事は無いし、「禅宗」と呼ぶ事ができる理由を見聞きできない。

「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」は、釈迦牟尼仏のように「揚眉瞬目」、「拈華瞬目」して「面授して来ている」、「言い表せないものを顔と顔を合わせて授(さず)けて来ている」し、
身心と、「骨髄」、「理解」によって、授けて来ているし、受けて来ているし、
身を受けるより前と身を捨てた後で伝授して来ているし、受けて来ているし、
心の上や心以外で伝授して来ているし、受けて来ているのである。

釈迦牟尼仏の会と、初祖の迦葉の会で、「禅宗」という呼び名は見聞きできないし、
二十八祖の達磨の会と、二十九祖の慧可の会で、「禅宗」という呼び名は見聞きできないし、
三十二祖の弘忍の会と、三十三祖の大鑑禅師の会で、「禅宗」という呼び名は見聞きできないし、
三十四祖の青原の行思の会と、三十四祖の南嶽の懐譲の会で、「禅宗」という呼び名は見聞きできない。

いつから誰が誤って「禅宗」と呼んで来ていると為(な)すのか？

学者の中の、学者に数えられない似非(えせ)学者の、ひそかに仏法を破壊しようとしたり盗用しようとしたりする輩が「禅宗」と呼んだのである。

仏祖が未だ許さない「禅宗」という呼び名を後進の者が妄(みだ)りに自称するのは仏祖の「家門」、「家柄」を損なう。

また、仏から仏へ、祖師から祖師への仏法の他に、さらに「禅宗」と呼ばれる仏法が有るように成ってしまう。

もし仏祖の仏道以外の物が有るとすれば、外道の法であろう。

既に仏祖の法の子孫としては、仏祖の「骨髄」、「理解」や、「面目」、「有様(ありよう)」の学に参入するべきである。

仏祖の法の子孫は、仏祖の仏道に身を投じているのである。

仏祖の仏道の中から逃げ去って、外道の学に参入するべきではない。

人の身心を保持させられ任せられるのは稀(まれ)であり、古くから仏祖達が仏道をわきまえて来ている力による物なのである。

仏祖の恩である力を受けて、人の身心を受けて、誤って外道を助けてしまうのは、仏祖の恩に報いるのではなく、恩を仇(あだ)で返してしまう事に成ってしまう。

宋の時代の天下の凡庸な人々、俗人の多くは、「禅宗」という誤った妄(みだ)りな呼び名を聞いて、仏道を誤って「禅宗」と呼んだり、「達磨宗」と呼んだり、「仏心宗」と呼んだりした。

仏道に対する誤った妄りな呼び名が競って広められて、仏道を乱そうとしている。

「禅宗」などの誤った呼び名は、仏祖の大いなる仏道を未だかつて知らないし、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」が有るとさえも見聞きできないし、信じて受け入れない輩による、誤った妄りな呼び名なのである。

「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を知っている人で、誰が仏道を誤って呼ぶ事が有るだろうか？　いいえ！　「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を知っている人は仏道を誤って呼ぶ事は無い！

南嶽衡山の石の上の庵の、無際大師と呼ばれる三十五祖の石頭希遷は、堂に上って、僧達に示して、「私の『法門』、『仏法』は、先の仏から伝えられて受けた物であり、禅定や精進を論じないで、ただ、仏の知見に到達するのみなのである」と言った。

知るべきである。

過去七仏を含む諸仏から仏法を正しく伝えられている仏祖である三十五祖の石頭希遷は、このように言っているのである。

「私、石頭希遷の『法門』、『仏法』は、先の仏から伝えられて受けた物である」という言葉が形成されて現されている。

「私の禅宗は、先の仏から伝えられて受けた物である」という言葉は形成されて現されていない。

禅定と精進の個々を分けず、仏の知見に到達させるのみなのである。

禅定と精進を嫌わず、仏の知見に到達するのみなのである。

禅定と精進を嫌わず、仏の知見に到達するのを「私、釈迦牟尼仏に有る『正法眼蔵』、『正しくものを見る眼』を付属する」としているのである。

「私、石頭希遷の『法門』、『仏法』」とは、「私、釈迦牟尼仏に有る『正法眼蔵涅槃妙心』、『正しくものを見る眼と寂滅した妙なる心』」なのである。

「法門」、「仏法」とは、「正しい法」なのである。

三十五祖の石頭希遷の仏法、釈迦牟尼仏に有る「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼と寂滅した妙なる心」、二十八祖の達磨の「髄」、「理解」をあなたは会得した、という付属なのである。

三十五祖の石頭希遷は、三十四祖の青原の行思の唯一の正統な法の子であり、独り奥義に到達した。

三十五祖の石頭希遷は、古代の仏と等しい三十三祖の大鑑禅師が髪を剃ってあげた法の子孫なのである。

そのため、石頭希遷にとって、大鑑禅師は師の師であるし、父であると言える。

石頭希遷にとって、青原の行思は師であるし、兄であると言える。

仏道の仏祖の英雄は、独り、石頭希遷だけである(、と言える)。

石頭希遷だけが仏道が正しく伝えている仏の知見に到達している(、と言える)。

石頭希遷の言葉が形成させて現させせている個々の結果は皆、古代の仏の古くない仏の知見であるし、古代の仏が長く今も教えている仏の知見なのである。

石頭希遷の仏の知見を「正法眼蔵の眼睛」、「正しくものを見る眼の、見る眼」とするべきである。
石頭希遷の仏の知見は、自分や他の者の正しくない知見とは比べる事ができない。
三十五祖の石頭希遷を正しく知らない者は、三十五祖の石頭希遷を、江西の大寂禅師と呼ばれる三十五祖の馬祖道一と比べるが、比べる事はできないのである。
知るべきである。
「先の仏から伝えられて受けた」仏道を、三十五祖の石頭希遷は「禅定」と呼んでおらず、まして、「禅宗」という呼び名や議論は無かったのである！

明らかに、知るべきである。
「禅宗」と呼ぶのは、ひどい誤りなのである。
稚拙な輩は、誤って「『有宗』や『空宗』のような物であろう」と思って、「『何々宗』という呼び名を呼べなければ、自分には学が無い」と嘆くのである。
仏道とは、このような物ではない。
「仏祖達は、かつて『禅宗』と呼んだ事は無い」と唯一に定めるべきなのである。
それなのに、宋の時代の凡庸な人々や、愚かで仏教の古くからの様子を知らず、先の仏からの伝授が無い輩は、誤って「仏法は『雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗』という『五宗』、『五門』の家風で別で異なる」と言ってしまう。

人々が誤って「仏法は雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗という宗派で別で異なる」と思ってしまうのは、仏教の自然な衰退なのである。

仏教の衰退を掬（すく）い取って救済する一人前や半人前の人物は未だいなかったが、

道元の亡き師である、天童山の、古代の仏と等しい、五十祖の如浄が、初めて、仏教の衰退を憐れんだのは、人の運命なのであるし、仏法の通達なのである。

道元の亡き師である、古代の仏と等しい、五十祖の如浄は、堂に上って、僧達に示して、「今、人々は、ただひたすらに、『雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗などの家風で仏法は別で異なる』と言うが、仏法として正しくないし、祖師達の言葉ではない」と言った。

このような言葉が形成されて現されるのには千年の間でも出会い難い。

如浄だけが独り言う事ができた。

十方で見聞きし難く、その場に居合わせた者達だけが如浄の言葉を直接聞く事ができた。

千人の遍歴している修行僧達の中で、如浄の言葉を、聞いて知る耳を持つ人はいないし、見て理解して取る「眼睛」、「見る眼」を持つ人はいない。

まして、心を挙げて聞く、遍歴している修行僧がいるだろうか？　いいえ！

まして、身で聞いて知る、遍歴している修行僧がいるだろうか？　いいえ！

たとえ自己の渾身と渾心で聞いて知る人が億、万の無数の劫にいても、如浄の「通身」、「全身」と「通心」、「全心」を、挙げて、ひねって、聞いて知り、証して知り、信じて知り、脱ぎ落として知る人はいない。

憐れむべきである。

宋の時代の中国の十方の人々は共に誤って「如浄は、諸方の長老などと同程度である」と思ってしまっている。

このように誤って思ってしまう輩を「見る眼」を備えているとするのか？「見る眼」を未だ備えていないとするのか？　「見る眼」を備えていない！

また、人々は誤って「如浄は、臨済義玄や徳山宣鑑と同程度である」と思ってしまっている。

このように誤って思ってしまう輩も未だ如浄を「見ていない」、「理解できていない」し、未だ臨済義玄に「出会えていない」、「理解できていない」と言える。

私、道元は、古代の仏と等しい如浄を礼拝する前は、誤って「雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗で別で異なる仏法の奥深い主旨に参入して究めよう」と思ってしまっていた。

如浄を礼拝した後は、「雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗というのは誤った妄(みだ)りな呼び名である」という主旨を明らかに知った。

宋の時代の中国で、仏法が盛んである時は、雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗という呼び名は無かった。

また、雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗という呼び名をあげて、「家風によって仏法は別で異なる」と言う古代の人は未だいなかった。

仏法が衰退してから今まで、妄(みだ)りに雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗という呼び名が有るのである。

人々の学への参入が疎(おろそ)かで、人々が仏道をわきまえるのを切にしないので、仏教を宗派に分けてしまったのである。

(原文の「人の参学おろかにして」は「人の参学おろそかにして」だと思われる。)

遍歴している修行僧が真の学に参入して究める事を求めるならば、決して「雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗」という「五宗」、「五門」、「五家」という妄(みだ)りな呼び名を記憶する事なかれ。

「雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗の家風によって仏法は別で異なる」などと記す事なかれ。

まして、「三玄」や「三要」や「四料簡」や「四照用」や「九帯」などが有るだろうか？　いいえ！　無い！

まして、「三句」や「五位」や「十同真智」が有るだろうか？　いいえ！無い！

釈迦牟尼仏の仏道は、このような矮小な物ではないし、このような物を大いなる物としないし、このような物について言葉を形成させて現した事は無いし、少林寺の二十八祖の達磨も、曹谿山の三十三祖の大鑑禅師も、このような物について言った事は無い。

憐れむべきである。

末法の世の、学が無い似非(えせ)僧侶などが、身心や「眼睛」、「見る眼」が暗くて、このような事を言うのである。

仏祖の法の子孫、仏祖の法の種を育てる者は、このような言葉を言うなかれ。

仏祖である寺の主が、このような誤った言葉をかつて言った事は無い。
後世の似非（えせ）僧侶など、かつて仏法の全ての言葉を見聞きせず、祖師の言葉に全てを委ねる事無く、本分に暗い輩が、わずかに一つや二つの矮小な知識に傲（おご）り高ぶって、このような宗派の呼び名を立ててしまっているのである。
宗派の呼び名が立てられてしまってから今まで、矮小な似非（えせ）僧侶などは、根本を尋ねるべき仏道を学ばないので、いたずらに無駄に、些末なものに従うのである。
似非（えせ）僧侶は、古代を慕う志が無く、世俗と交わる事を日常的に行ってしまう。
世俗ですら世俗に従う事を卑しいとして戒めている。

文王は、太公望に、「あなた、太公望は、つとめて賢者を推挙します。しかし、その効果は得られず、治世は、とても乱れて、存亡の危機にまで至ってしまったのは、なぜですか？」と質問した。
太公望は、「賢者を推挙しても用（もち）いなければ、『賢者を推挙した』という名目だけが有って、賢者を得た実が無いのです」と言った。
文王は、「欠点が、どこに存在したのでしょうか？」と言った。
太公望は、「欠点は、世俗がほめる人を好んで用いる所に存在します。真実の賢者を得ていないのです」と言った。
文王は、「『世俗がほめる人を好んで用いる』とは、どのような事でしょうか？」と言った。
太公望は、「世俗がほめるのを好んで聴いてしまうと、賢者ではない人を『賢者である』としてしまうし、

知者ではない人を『知者である』としてしまうし、

忠義が無い人を『忠義が有る人である』としてしまうし、

信義が無い人を『信義が有る人である』としてしまいます。

あなた、文王は、世俗がほめる者を『賢者や知者である』としてしまい、世俗が悪口を言う者を『賢者や知者ではない』としてしまいます。

そのため、仲間が多い者は前進してしまい、仲間が少ない者は後退してしまいます。

このため、多数派である邪悪な人々は徒党を組んで賢者を覆い隠してしまい、忠臣は罪が無いのに死んでしまい、邪悪な家臣は上辺(うわべ)だけの名声によって爵位を求めてしまいます。

こう成ると、治世は、とても乱れるので、国は存亡の危機を免れなく成ってしまいます」と言った。

在俗者ですら国や道徳が存亡の危機に至る事を嘆くのである。

仏法、仏道が存亡の危機に至ったら、仏の子は必ず嘆くはずである。

道徳や仏道が存亡の危機に至る元は、妄(みだ)りに世俗に従う事に有るのである。

世俗がほめるのを聴いてしまう時、真の賢者を得る事は無い。

真の賢者を得ようと思うならば、古今を照らして見る知略が有るべきである。

世俗がほめるものは、必ずしも、賢明ではないし、神聖ではない。

世俗が悪口を言うものは、必ずしも、賢明ではないし、神聖ではない。

「真の賢者でも悪口を言われるし、偽の賢者でも名声が有る」と「三察」、「熟考」して、真の賢者と偽の賢者を混同するべきではない。

真の賢者を用いないのは国の損失と成る。
偽の賢者を用いるのは国にとっての後悔と成る。

今、雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗という誤った呼び名が立てられてしまっているのは、世俗による混乱なのである。

世俗に従う者は多いが、世俗を世俗であると知っている人は少ない。
世俗を化して導く人を聖者とするべきである。
世俗に従う人は最悪の愚者である。
世俗に従う輩が、どうして仏の正しい法を知っているであろうか？　どうして仏祖と成るであろうか？　いいえ！
仏法は過去七仏から正統に代々伝えられて来ている。
どうして西のインドにいる文字によってだけ意味を解釈する霊感が無い輩が「五部」という五つの宗派を立ててしまったように成るであろうか？　いいえ！　仏教に宗派は無い！
知るべきである。
仏法の正しい命を正しく命として生きている祖師達は、「雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗で仏道は別で異なる」と、かつて言った事は無いのである。
「雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗で仏道は別で異なる」と学ぶ人は、過去七仏の正統な法の後継者ではない。

道元の亡き師、五十祖の如浄は、僧達に示して、「千二百年頃、祖師の仏道が廃(すた)れ、『魔』、『仏敵』の仲間である『畜生』、『動物的人間』が多い。頻繁に『雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗で仏道は別で異なる』と言われてしまう。苦々しい、苦々しい」と言った。

測り知る事ができる。

西のインドの二十八人の祖師達も、(五十祖の如浄までの)東の地の中国の二十二人の祖師達も、雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗で別で異なる仏法など未だ開演していないのである。

祖師として在る祖師は皆、雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗という宗派で異なる仏法など開演していないのである。

雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗という誤った呼び名を立ててしまって、誤って「雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗の各々で別で異なる仏法の主旨が有る」と言ってしまう人は、世間の人をたぶらかし惑わす輩、学が無い理解が無い類(たぐい)の者なのである。

仏道において、宗派の各々が別で異なる仏道を自ら立て(て分裂す)れば、どうして仏道は今日にまで至るであろうか？　いいえ！

もし初祖の迦葉が別で異なる仏道を自ら立ててしまって、二祖の阿難陀も別で異なる仏道を自ら立ててしまって、別で異なる仏道を自ら立ててしまう道理を正しい道理としてしまえば、仏法は早期に西のインドで滅んでしまったであろう。

各々で別で異なる仏道を自ら立ててしまう主旨を正しいとしてしまえば、この古代を誰が慕うであろうか？　いいえ！

各々で別で異なる仏道を自ら立ててしまう主旨を正しいとしてしまえば、誰が善悪を選択して決定できるであろうか？　いいえ！

(善は唯一普遍絶対なので、善悪を選択して決定できる。)

善悪を未だ選択して決定できなければ、誰が、あるものを仏法であるとしたり仏法ではないとしたりできるであろうか？　いいえ！

この道理を明らめない物は、仏道と呼べない。

雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗という呼び名は、各々の系譜の祖師が存命中に立てたわけではない。

雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗の祖師と呼ばれる祖師達の死後、凡庸な弟子、見る眼が未だ明らかではない者、自分の足で未だ歩けない者が、父である祖師に無断で、祖師の意に反して、雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗を立ててしまって呼んで来てしまっているのである。

この主旨は明らかなのである。

どの人も知るべきである。

大円禅師と呼ばれる大潙禅師と呼ばれる三十七祖の潙山霊祐は、大智禅師と呼ばれる三十六祖の百丈の懐海の法の子である。

潙山霊祐は、百丈の懐海と同時に潙山に住んだ。

潙山霊祐は、「仏法を『潙仰宗』と呼びなさい」と未だ言った事は無い。

百丈の懐海も、「潙山霊祐よ、あなたの時から潙山に住んで『潙仰宗』と呼びなさい」と言わなかった。

潙仰宗の始祖と言われる祖師の師と潙仰宗の始祖と言われる祖師である、百丈の懐海と潙山霊祐は「潙仰宗」と自称しなかった。

「『潙仰宗』とは妄(みだ)りな呼び名である」と知るべきである。

たとえ「潙仰宗」という呼び名を欲しいままにしているように思えても、必ずしも仰山の慧寂に責任を求めるべきではない。

自称するべきならば自称しているだろう。

しかし、自称するべきではないため、従来の祖師達も自称していないので、今も自称するべきではない。

曹谿山の三十三祖の大鑑禅師は、「曹谿宗」とは言わなかったし、三十四祖の南嶽の懐譲は、「南嶽宗」とは言わなかったし、江西の三十五祖の馬祖道一は、「江西宗」とは言わなかったし、百丈の懐海は、「百丈宗」と言わなかった。

三十七祖の潙山霊祐に至って、三十三祖の大鑑禅師と仏法が異なる事は有り得ない。

三十七祖の潙山霊祐は、三十三祖の大鑑禅師よりも優れていないし、及ばない。

潙山霊祐の言葉は、必ずしも仰山の慧寂と「一本の杖を二人で担(かつ)いでいる」わけではない。

宗派の呼び名を立てるならば「潙山宗」と言ったり「大潙宗」と言ったりするべきである。

「潙仰宗」と呼ぶべき道理は未だ無い。

「潙仰宗」と呼ぶべきならば、潙山霊祐と仰山の慧寂の二人の高徳の長老は存命中に呼んでいただろう。

潙山霊祐と仰山の慧寂の二人が存命中に呼ぶべきなのを呼んでいなかったのならば、どんな障害によって呼ばなかったと言うのか？

既に潙山霊祐と仰山の慧寂の二人が存命中に呼んでいないのに、父である祖師達の仏道に違反して「潙仰宗」と呼ぶのは、親不孝な法の偽の子孫なのである。

「潙仰宗」と呼ばれるのは、潙山霊祐の本懐ではないし、仰山の慧寂の本懐ではない。

「潙仰宗」などの呼び名は、正しい師による正しい伝統ではなく、邪悪な者どもの邪悪な呼び名である事は明らかである。

「潙仰宗」などの呼び名を尽十方界に広める事なかれ。

慧照大師と呼ばれる三十八祖の臨済義玄は、経典の学者の講義を受けるのを投げ捨てて、三十七祖の黄檗希運の弟子と成った。

臨済義玄は、黄檗希運の棒を三回食らい、合わせて六十回、軽く叩かれた。

臨済義玄は、高安大愚の所に行って省(かえり)みて悟った。

臨済義玄は、鎮州の臨済院に住んだ。

臨済義玄は、黄檗希運の心を究め尽してはいないが、次々と伝えられている仏法を「臨済宗と名づけなさい」と言った事は無いし、拳を縦にしたり害虫を払うための毛がついた棒である払子をひねったりして示した事は無い。

それなのに、弟子の中の凡庸な弟子は、たちまち父である師の業を守らず、仏法を守らず、誤って「臨済宗」という呼び名を立ててしまった。

臨済義玄は存命中に「臨済宗」など組み立てていない。

さらに、先祖である仏祖達の仏道に違反しているので、「臨済宗」という呼び名を立てようとするのは、ためらうべきであった。

臨済義玄は、死にそうな時に、三聖慧然に付属して、「私の死後、私の『正法眼蔵』、『正しくものを見る眼』を滅ぼす事なかれ」と言った。

三聖慧然は、「どうして、あえて和尚様、臨済義玄様の『正法眼蔵』、『正しくものを見る眼』を滅ぼすでしょうか？　いいえ！」と言った。

臨済義玄は、「突然、人が、あなたに質問したら、どのように答えますか？」と言った。

三聖慧然は、喝と怒鳴った。

臨済義玄は、「私の『正法眼蔵』、『正しくものを見る眼』が、この盲目の驢馬（ロバ）である三聖慧然の所に向かって去った事を誰が知るだろうか？」と言った。

このように、臨済義玄と三聖慧然、師弟は言ったのである。

臨済義玄は、「私の禅宗を滅ぼす事なかれ」と言わず、
「私の臨済宗を滅ぼす事なかれ」と言わず、
「私の宗派を滅ぼす事なかれ」と言わず、
「私の『正法眼蔵』、『正しくものを見る眼』を滅ぼす事なかれ」とだけ言った。

仏祖が正しく伝えている大いなる仏道を「禅宗」と呼ぶべきではないし、「臨済宗」などと呼ぶべきではない、という事を明らかに知るべきである。

仏道をさらに「禅宗」と呼び続ける事は、決して、有るべきではない。

たとえ滅ぶのが「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」の理（ことわり）による現象であったとしても、このように付属するのである。

「この盲目の驢馬の所に向かって去る」付属を実に「誰が知るだろうか？」なのである。

臨済義玄が「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を付属した弟子は、弟子の中で、三聖慧然だけなのである。

三聖慧然の法の兄弟である、三聖慧然の兄弟弟子に付属を及ぼしたり同列にさせたりするべきではない。

まさに「明窓下安排」、「月の明かりの下で手配した」のである。

（悟りを心の月に例える場合が有る。）

臨済義玄から三聖慧然へのつながりは、仏祖のつながりなのである。

今の臨済義玄から三聖慧然への付属は、昔の霊山での釈迦牟尼仏から初祖の迦葉への付属なのである。

そのため、「臨済宗」と呼ぶべきではない道理は明らかである。

匡真大師と呼ばれる雲門文偃は、昔は陳尊宿に学んだ、黄檗希運の法の子孫であり、後に雪峰義存の法を嗣いだ。

雲門文偃という祖師もまた「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を「雲門宗と呼びなさい」と言わなかった。

雲門文偃の劣悪な弟子もまた「潙仰宗」や「臨済宗」といった妄りな呼び名を誤っていると知らないで「雲門宗」という呼び名を新しく立ててしまった。

雲門文偃の主旨が、仮に「宗派を立てた」という称号を志していたならば、「雲門文偃は、仏法の身心である」とは許されなかったであろう。

（そのため、雲門文偃の主旨は宗派を立てる事ではない。）

このため、宗派の呼び名を呼ぶのは、例えば、王者を凡人と呼ぶような物である。

清涼院の大法眼禅師と呼ばれる清涼文益は、地蔵院の羅漢桂琛の正統な後継者である。

清涼文益は、玄沙師備の法の子孫である。

清涼文益には、仏法の主旨が有り、誤りは無い。

大法眼禅師とは、清涼文益に贈られた称号である。

清涼文益が、「『大法眼禅師』という称号を『正法眼蔵』、『正しくものを見る眼』の呼び名として、『法眼宗』という呼び名を立てなさい」と言った事は、千、万の無数の言葉の中に一言も無い。

それなのに、清涼文益の劣悪な弟子もまた「法眼宗」という呼び名を立ててしまった。

もし清涼文益が今の世に化生として出現したら、今の世の妄(みだ)りな呼び名である「法眼宗」という言葉を無くしてしまうであろう。

清涼文益の肉体は既に亡くなってしまって、「法眼宗」という呼び名による憂いを救う人はいない。

たとえ千万年後であっても、清涼文益に法の親として親孝行しようという人は、「法眼宗」という呼び名を呼ぶ事なかれ。

「法眼宗」という呼び名を呼ばない事は、本(もと)から清涼文益に法の親として親孝行する事に成るのである。

雲門文偃や清涼文益などは、青原の行思の法の遠い子孫であり、仏道、仏法という「骨髄」、「理解」が伝えられている。

悟本大師と呼ばれる三十八祖の洞山良价は、三十七祖の雲巌曇晟の法を嗣いだ。

三十七祖の雲巌曇晟は、三十六祖の薬山惟儼の正統な後継者である。

三十六祖の薬山惟儼は、三十五祖の石頭希遷の正統な後継者である。

三十五祖の石頭希遷は、三十四祖の青原の行思の唯一の正統な法の子である。

石頭希遷に肩を並べられる者はおらず、石頭希遷は仏道の業を独り正しく伝えられた。

仏道の正しい命が、なお東の地の中国に残っているのは、石頭希遷が漏らさず全てを正しく伝えられた力による物なのである。

三十四祖の青原の行思は、古代の仏と等しい三十三祖の大鑑禅師と同じ時代に生まれ、大鑑禅師の化の導きを受けた。

(原文は「青原高祖は、曹谿古仏の同時に、曹谿の化儀を青原に化儀せり」。)

青原の行思が、青原の行思の存命中に大鑑禅師を「この世」に出現させて、大鑑禅師の「この世」への出現を青原の行思の一代で見聞きしたのは、正統な後継者の中の正統な後継者であるし、祖師の中の祖師である。

(原文は「在世に出世せしめて、出世を一世に見聞するは、正嫡のうへの正嫡なるへし、高祖のなかの高祖なるへし」。)

青原の行思による大鑑禅師の学への参入と、大鑑禅師の「この世」への出現は、優劣ではない。
（原文は「雄、参学、雌、出世にあらす」。）
当時、青原の行思と肩を並べていた大鑑禅師の弟子達は、現在ならば抜群の僧達なのである。
学者は、特に、知るべきである。

古代の仏と等しい三十三祖の大鑑禅師が肉体の死の直前に「般涅槃」、「肉体の死」を現して人や天人を化して導いた時、後の三十五祖の石頭希遷は、末席に進んで、拠り所（よりどころ）とするべき師を教えてくれるように請い願った。
大鑑禅師は、その時、「青原の行思をたずねて行け」と言った。

大鑑禅師は、「南嶽の懐譲をたずねて行け」と言わなかった。
そのため、古代の仏と等しい三十三祖の大鑑禅師の「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」は、独り、青原の行思だけに正しく伝えられていたのである。

たとえ同様に仏道を会得した高弟の存在を許していても、青原の行思は正統な無双の高弟なのである。
大鑑禅師は、既に、青原の行思という自分の法の子を法の子としていた。
青原の行思という法の子の、法の父である大鑑禅師が法の父として在った事により、青原の行思が大鑑禅師の髄を会得していたのは明らかなのである。
青原の行思が、代々の祖師達の正統な後継者である事は明らかなのである。

三十八祖の洞山良价は、まさに三十四祖の青原の行思の四代目の正統な後継者として、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を正しく伝えられ、「涅槃妙心」、「寂滅した妙なる心」に開眼している。

「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼を持ち寂滅した妙なる心を持つ事」の他に更に別の伝承は無いし、別の宗（むね）とする大事な物は無い。

洞山良价は、かつて「曹洞宗と呼びなさい」と言わなかったし、拳や目の瞬（また）きで示す事は無かった。

また、洞山良价の弟子の中に凡庸な人は混じっていなかったので、「洞山宗」と自称する弟子はいなかったし、まして、「曹洞宗」と言う弟子はいなかった！

「曹洞宗」という呼び名は、曹山本寂の名前を加えた物のようであるが、もし、そうであれば、三十九祖の雲居道膺と四十祖の同安道丕の名前をも加えるべきである。

三十九祖の雲居道膺は、人の中と天上の導師であり、曹山本寂よりも尊（とうと）び崇（あが）めるべきである。

測り知る事ができる。

「曹洞宗」という呼び名は、曹山本寂の系譜の劣悪な輩、臭い皮袋である悪人が、洞山良价などに肩を並べようとして「曹洞宗」という呼び名を呼び始めたのである。

実に、曇（くも）りの無い太陽が明らかであっても、浮雲が下を覆ってしまっているような物なのである。

道元の亡き師、五十祖の如浄は、「今、諸方で、『獅子の座』、『仏の座』に上る者が多いし、人や天人の師として存在する者が多いが、仏法の道理を知り得ている者は全くいない」と言った。

競って雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗という宗派を立てて、誤って言葉にとらわれている人は、真に仏祖の敵なのである。

また、黄龍慧南の一派を呼んで「黄龍宗」と呼んで来ているが、その宗派の人は遠からず誤りを知るべきである。

釈迦牟尼仏は存命中に、「仏宗」と言わなかったし、
「霊山宗」と言わなかったし、
「祇園宗」と言わなかったし、
「我心宗」と言わなかったし、
「仏心宗」と言わなかった。
釈迦牟尼仏は、どの言葉の中で「仏宗」と言ったのか？　いいえ！　言わなかった！
現代の人々は、なぜ「仏心宗」と呼ぶのか？
釈迦牟尼仏は、必ずしも、心だけを宗（むね）とする大事な物として呼ばなかった！
宗（むね）とする大事な物は、必ずしも心だけであろうか？　いいえ！

もし「仏心宗」が有るならば、
「仏身宗」も有るべきであるし、
「仏眼宗」も有るべきであるし、
「仏耳宗」も有るべきであるし、
「仏鼻宗」、「仏舌宗」なども有るべきであるし、
「仏骨宗」、「仏髄宗」、「仏脚宗」、「仏国宗」なども有るべきである。
「仏身宗」などは無い。
このため、「『仏心宗』という呼び名は虚偽の呼び名である」と知るべきである。

釈迦牟尼仏は広く「十方の仏土の中の『諸法』、『全てのもの』の実の相」を挙げてひねって「十方の仏土の中」を説く時、「十方の仏土の中に、何々宗を建てた」と説かなかった。
「何々宗」という呼び名が、もし仏祖の仏法であるならば、仏の国にも宗派が存在するはずである。
仏の国に宗派が存在すれば、仏は宗派について説くはずである。
しかし、仏は宗派について説かなかった。
「宗派は仏の国の日常の道具ではない」と知る事ができる。
祖師達は宗派について言わなかった。
「宗派は祖師達の領域の家具ではない」と知る事ができる。
宗派は、人々に笑いものにされるだけではなく、諸仏に禁止されるし、自身も笑いものにするだろう。
慎(つつし)んで、宗派の呼び名を呼ぶ事なかれ。

「仏法には雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗が有って、仏法は別で異なる」と言う事なかれ。

後世に晦巖智昭という矮小な似非僧侶がいて、祖師の一言、二言を拾い集めて、「雲門宗、法眼宗、潙仰宗、臨済宗、曹洞宗という宗派が有る」と言って「人天眼目」という書を記した。

人々は「人天眼目」の誤りをわきまえる事ができず、初心者や後進の輩は誤って「『人天眼目』は真実の正しい書である」と思ってしまい、衣の中に大事に隠し持つ者もいるほどである。

「人天眼目」は、「人や天人にとっての見る眼」ではなく、「人や天人の見る眼を眩ます物」なのである。

どうして「人天眼目」に「瞎却正法眼蔵」、「正しくものを見る眼を一時的に塞いでくれる」功徳が有るだろうか？　いいえ！　「人天眼目」には無い！

「人天眼目」は、晦巖智昭が、千百八十八年に、天台山の万年寺で、編集した。

後世の作品であっても、正しい物であれば許すべきである。

しかし、「人天眼目」は、狂乱の書であり、愚かで暗い書である。

「人天眼目」には、学に参入する見る眼が無いし、遍歴して修行した見る眼が無いし、まして、仏を見た見る眼が無い！

「人天眼目」を用いるべきではない。

晦巖智昭の「智昭」は、「智慧が有って聡明である」を意味するが、「愚かで暗い」を意味する「愚蒙」によって晦巖愚蒙と名乗るべきである。

晦巌智昭は、祖師を知らず、「祖師に出会わない」、「祖師を理解していない」が、祖師の言葉を集めたので、祖師としての祖師の言葉は拾(ひろ)わなかった。

「晦巌智昭は祖師を知らない」と知る事ができる。

中国の似非(えせ)宗教研究家の輩が宗派の呼び名を呼ぶのは、肩を並べる同程度の同業者がいるからである。

(同業者との差別化のために宗派についての知識量を誇ろうとするのである。)

仏祖の「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」は正統に代々付属されていて、混同できるような肩を並べる同程度の同業者などいない。

それなのに、現代の杜撰(ずさん)な老人の似非(えせ)僧侶などが、妄(みだ)りに宗派の呼び名を立てて名声や利益を独占しようと企てるのは、仏道を畏敬していない。

仏道とは、あなたの物ではなく、諸々の仏祖の物であるし、仏道の物なのである。

太公望は、文王に、「天下は、独りの物ではなく、天下の全ての者の物なのである」と言った。

在俗者にすらなお、このような知が有るし、このような言葉が有るのである。

仏祖の家の子は、仏祖の大いなる仏道について、妄りに欲望のままに愚かさや暗さに従って、宗派を立てて自称する事なかれ。

宗派をねつ造する人は、大いに滑稽であるし、仏道の人ではない。

宗派の呼び名を呼ぶべきならば、釈迦牟尼仏は自称したであろう。

しかし、釈迦牟尼仏は自称しなかった。

釈迦牟尼仏の法の子孫として、どうして釈迦牟尼仏の肉体の死後に宗派を自称する事が有るだろうか？　いいえ！　宗派は無い！

どの人が、釈迦牟尼仏よりも巧みに善に導き利益をもたらす事ができるだろうか？　いいえ！

釈迦牟尼仏が巧みに善に導き利益をもたらす事が無ければ、仏教という利益は無かったであろう。

また、もし仏祖の古くからの仏道に違反して背いて宗派をねつ造しても、あなたのねつ造した宗派が真実な正しい物であると認める仏の法の子孫が誰かいるだろうか？　いいえ！　いない！

古今を照らして見て学に参入するべきである。

妄りである事なかれ。

釈迦牟尼仏の存命中と少しも異ならないようにし、釈迦牟尼仏の百千万分の一にすら及ばない事を憂い、及べている部分を喜び、違反しないようにと願うのを遺された釈迦牟尼仏の弟子としての宿願とするだけなのである。

このようにして多くの生で仏に出会い見える事を願うべきである。

このようにして多くの生で仏法を見聞きできる事を願うべきである。

故意に釈迦牟尼仏の存命中の化の導きに背いて宗派を立てる人は、如来、釈迦牟尼仏の弟子ではないし、祖師の法の子孫ではない。

宗派をねつ造する罪は、最も重い罪である五逆罪よりも重い罪である。

如来、釈迦牟尼仏の無上普遍正覚を尊重せず、宗派をねつ造して名声や利益を独占しようとするのは、古くからの仏祖達を軽視する事であるし、古くからの仏祖達に背（そむ）く事である。
宗派をねつ造する人は、「古くからの仏祖達を知らない」と言える。
宗派をねつ造する人は、釈迦牟尼仏の存命中の功徳を信じていないのである。
宗派をねつ造する人の家である、ねつ造した宗派の中に、仏法は無い。
そのため、仏を学び仏道の業（わざ）を正しく伝えてもらうには、宗派の呼び名を見聞きするべきではない。

仏から仏へ、祖師から祖師へ、付属し正しく伝えられている物は、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」と、無上普遍正覚なのである。
仏から仏へ所有している仏法は皆、釈迦牟尼仏が付属して来ている。
仏法以外の法が更に新しく存在する事は無い。
この道理が、仏法、仏道の「骨髄」、「理解」なのである。

正法眼蔵　仏道

その時、千二百四十三年、越州の吉田県の吉峰寺にいて僧達に示した。

諸法実相

仏祖が形成して現すのは、(仏祖が)究め尽した実の相である。

実の相とは、「諸法」、「全てのもの」である。

「諸法」、「全てのもの」とは、

ありのままの相であるし、

ありのままの性質であるし、

ありのままの身であるし、

ありのままの心であるし、

ありのままの世界であるし、

ありのままの、雲と雨であるし、

ありのままの「行住坐臥」、「歩いて動く、止まる、座る、横たわる」であるし、

ありのままの、憂いと喜びや、動静であるし、

ありのままの、杖や、害虫を払うための毛がついた棒である払子であるし、

ありのままの、釈迦牟尼仏の「拈華瞬目」と、初祖の迦葉の「破顔微笑」であるし、

ありのままの、仏法を嗣(つ)ぐ事や、成仏を予言される「授記」であるし、

ありのままの、学への参入や、仏道をわきまえる事であるし、

ありのままの、春でも松は常緑であるという志を変えない操(みさお)と、竹の強い節のような節操である。

「法華経」の「方便品」で、釈迦牟尼仏は、「『諸法』、『全てのもの』の実の相は、仏と仏だけが能く究め尽せる。

『諸法』、『全てのもの』とは、

ありのままの相、

ありのままの性質、

ありのままの実体、

ありのままの力、

ありのままの作用、

ありのままの原因、

ありのままの『縁』、『つながり』、

ありのままの結果、

ありのままの報い、

ありのままの『本末究竟等』、『最初から最後までの全てのものは究極的に唯一普遍である事』である」と言った。

如来、釈迦牟尼仏の言葉の「本末究竟等」、「最初から最後までの全てのものは究極的に唯一普遍である事」とは、「諸法」、「全てのもの」の実の相の自らの言葉であるし、

あなた自らの言葉であるし、

唯一普遍の学への参入である。学への参入は唯一普遍であるので。

仏と仏だけが能く究め尽せるのは、「諸法」、「全てのもの」の実の相である。

「諸法」、「全てのもの」の実の相は、仏と仏だけが能く究め尽せる。
「仏と仏だけ」とは、実の相であるし、「諸法」、「全てのもの」である。

「諸法」、「全てのもの」という言葉を聞いて、唯一であると参入するべきではないし、多数であると参入するべきではない。
「実の相」という言葉を聞いて、虚ではないと学ぶべきではないし、心の性質ではないと学ぶべきではない。

実とは「仏と仏だけ」であるし、相とは「仏と仏だけ」である。

「能く」、「可能である」のは、「仏と仏だけ」であるし、「究め尽せる」のは、「仏と仏だけ」である。

「諸法」、「全てのもの」とは、「仏と仏だけ」であるし、実の相とは、「仏と仏だけ」である。

「諸法」、「全てのもの」が、まさに「全てのもの」であるのを、「仏と仏だけ」であると言うし、
「諸法」、「全てのもの」が今まさに実の相であるのを、「仏と仏だけ」であると言う。

「諸法」、「全てのもの」が自然に「全てのもの」である、ありのままの相が有るし、ありのままの性質が有る。

実の相が、まさしく実の相である、ありのままの相が有るし、ありのままの性質が有る。

「仏と仏だけ」として「この世」に出現するのは、「諸法」、「全てのもの」の実の相を説明して理解して取る事であるし、行って理解して取る事であるし、証して理解して取る事である。

「諸法」、「全てのもの」の実の相を説明して理解して取る事とは、「能く究め尽せる」事なのである。

「究め尽せる」が、「能く」、「可能である」なのである。(究め尽せるが、あくまでも可能なのであり、実際に究め尽す必要が有る。)

最初と中間と最後ではないので、ありのままの相であるし、ありのままの性質である。

このため、「最初も中間も最後も善い」と言うのである。

「能く究め尽せる」のは、「諸法」、「全てのもの」の実の相なのである。

「諸法」、「全てのもの」の実の相とは、ありのままの相なのである。

ありのままの相とは、ありのままの性質を能く究め尽せる事なのである。

ありのままの性質とは、ありのままの実体を能く究め尽せる事なのである。

ありのままの実体とは、ありのままの力を能く究め尽せる事なのである。

ありのままの力とは、ありのままの作用を能く究め尽せる事なのである。

ありのままの作用とは、ありのままの原因を能く究め尽せる事なのである。
ありのままの原因とは、ありのままの「縁」、「つながり」を能く究め尽せる事なのである。
ありのままの「縁」、「つながり」とは、ありのままの結果を能く究め尽せる事なのである。
ありのままの結果とは、ありのままの報いを能く究め尽せる事なのである。
ありのままの報いとは、ありのままの「本末究竟等」、「最初から最後までの全てのものは究極的に唯一普遍である事」を能く究め尽せる事なのである。

「本末究竟等」、「最初から最後までの全てのものは究極的に唯一普遍である事」と言うのは、まさに形成されて現されている、ありのままなのである。

そのため、結果と成った結果は、原因と結果の結果ではなく成ると言えるので、原因と結果の結果は、結果と成った結果と成ると言える。
(原文は「果果の果は因果の果にあらす。このゆえに因果の果は、すなわち果果の果なるへし」。)
原因と結果の結果は、相や性質や実体や力を遮るので、「諸法」、「全てのもの」の相や性質や実体や力などは、どれだけ無量、無限でも実の相なのである。
結果と成った結果は、相や性質や実体や力を遮らないので、「諸法」、「全てのもの」の相や性質や実体や力などは共に、実の相なのである。

「諸法」、「全てのもの」の相や性質や実体や力などを、原因や、「縁」、「つながり」や、結果や、報いなどを遮るように一任する時、八、九割の言葉が有る。
「諸法」、「全てのもの」の相や性質や実体や力などを、原因や、「縁」、「つながり」や、結果や、報いなどを遮らないように一任する時、十全の言葉が有る。

ありのままの相とは、唯一の相ではない。
ありのままの相とは、唯一のありのままではない。
ありのままの相とは、無数、無限、言い表せない、測り知れない、ありのままなのである。

百、千といった量をありのままの量とするべきではない。
「諸法」、「全てのもの」という量をありのままの量とするべきである。
実の相という量をありのままの量とするべきである。

なぜなら、「『諸法』、『全てのもの』の実の相は、仏と仏だけが能く究め尽せる」からである。
「『諸法』、『全てのもの』の実の性質は、仏と仏だけが能く究め尽せる」からである。
「『諸法』、『全てのもの』の実の実体は、仏と仏だけが能く究め尽せる」からである。
「『諸法』、『全てのもの』の実の力は、仏と仏だけが能く究め尽せる」からである。

「『諸法』、『全てのもの』の実の作用は、仏と仏だけが能く究め尽せる」からである。

「『諸法』、『全てのもの』の実の原因は、仏と仏だけが能く究め尽せる」からである。

「『諸法』、『全てのもの』の実の『縁』、『つながり』は、仏と仏だけが能く究め尽せる」からである。

「『諸法』、『全てのもの』の実の結果は、仏と仏だけが能く究め尽せる」からである。

「『諸法』、『全てのもの』の実の報いは、仏と仏だけが能く究め尽せる」からである。

「『諸法』、『全てのもの』の実の『本末究竟等』、『最初から最後までの全てのものは究極的に唯一普遍である事』は、仏と仏だけが能く究め尽せる」からである。

このような道理が有るので、十方の仏土には「仏と仏だけ」であり、さらに一人前や半人前の「仏と仏だけ」なのである。

「だけ」と「と」とは、例えば、実体に実体を備え、相が相を証しているのである。また、性質を実体として性質を存在させるような物である。

このため、「法華経」の「方便品」で、釈迦牟尼仏は、「我及十方仏、乃能知是事」、「私と十方の仏は、能く、この事を知っている」と言った。

そのため、「仏と仏だけが能く究め尽せる」時と、「私と十方の仏は、能く、この事を知っている」時は、同じく、諸仏の面々の「有時」、「存在している、ある時」なのである。

もし「私、釈迦牟尼仏」が「十方の仏」と全くの同一人物であるか不一致の異なる存在であれば、どうして「私と十方の仏は」という言葉を形成させて現させるだろうか？　「私、釈迦牟尼仏」は「十方の仏」と一致する異なる存在である！

「ここ」に十方は無いので、十方は「ここ」と成るのである。

(原文は「這頭に十方なきかゆえに、十方は這頭なり」。)

このため、「実の相が『諸法』、『全てのもの』に見える」とは、春は華に入り、人は春に出会う、ような物であるし、月は月を照らし、人は自己に出会う、ようなものである。

また、「人が水を見る」とは、同様に、奥底まで「見える」道理なのである。

このため、実の相が実の相の学に参入するのを「仏祖が仏祖の法を嗣ぐ」とする。

「仏祖が仏祖の法を嗣ぐ」とは、「諸法」、「全てのもの」が「全てのもの」に「授記する」、「成仏を予言する」のである。

「仏と仏だけ」が「仏と仏だけ」のために仏法を伝え、「仏と仏だけ」が「仏と仏だけ」のために仏法を嗣ぐのである。

このため、生と死が来たり去ったりするし、

「発心、修行、菩提、涅槃」、「心する事、修行、覚、寂滅」が有る。

「発心、修行、菩提、涅槃」、「心する事、修行、覚、寂滅」を挙げて、「生死が去ったり来たりするのは、真実の人の体である」のに参入して究めて受け取って、とらえたり放ったりする。

これを、命として華が開き実を結ぶし、「骨髄」、「理解」として初祖の迦葉や二祖の阿難陀がいる。

風や雨や、水や火のありのままの相は、「仏と仏だけが能く究め尽せる」のである。

青、黄、赤、白のありのままの性質は、「仏と仏だけが能く究め尽せる」のである。

「仏と仏だけが能く究め尽せる」実体と力によって、凡人の心を転じて聖者の心境に入る。

「仏と仏だけが能く究め尽せる」結果と報いによって、仏祖を超越する。

「仏と仏だけが能く究め尽せる」原因と「縁」、「つながり」によって、土を握って黄金と成す事が有る。

「仏と仏だけが能く究め尽せる」結果と報いによって、衣と共に仏法を伝える事が有る。

如来、釈迦牟尼仏は、「人々の為に、実の相の印を説く」と言った。

周知の事を言ったのである。

（原文は「いはゆるをいふへし」。）

人々の為に、実の相の印を行う。
人々の為に、実の性質の印を聴く。
人々の為に、実体の印を証する。

このように参入して究めるべきなのであるし、このように究め尽すべきなのである。

その主旨とは、例えば、「珠」、「碁石」が「碁盤」を走るような物であるし、「碁盤」が「珠」、「碁石」を走るような物である。

日月灯明仏は、「『諸法』、『全てのもの』の実の相の意義は、既に、あなた達の為に説いた」と言った。

この日月灯明仏の言葉の学に参入して、「仏祖は必ず実の相の意義を説く事を一大事としている」と参入して究めるべきである。

仏祖は、「眼耳鼻舌身意と色声香味触法と眼(識)耳(識)鼻(識)舌(識)身(識)意識」という「十八界」で共に、実の相の意義から説き始める。

身心を受けるより前、身心を捨てた後、身心を受けている時に、実の相や性質や実体や力などを説くのである。

実の相を究め尽さず、説かず、理解せず、(厳密には)理解できない物であるとしない者は、仏祖ではないし、「魔」、「仏敵」の仲間であるし、「畜生」、「動物的人間」である。

「法華経」の「法師品」で、釈迦牟尼仏は、「一切の菩薩の無上普遍正覚は皆、この(法華)経に属している。この(法華)経は、方便の門を開き、真の実の相を示す」と言った。

一切の菩薩とは、一切の諸仏である。
諸仏と菩薩は異なる者ではない。
諸仏や菩薩には、老いている、若い、は無い。
諸仏や菩薩には優劣が無い。
ある菩薩と別の菩薩は、二人ではないし、自分と他人ではない。
過去、現在、未来の各個とは無関係であるが、仏と成るのは、菩薩の道を行う事によるのが決まりなのである。
初めて心した時に仏と成るし、仏に成った妙覚地に成った時に仏と成る。
百、千、万、億の無数回、仏と成る菩薩もいる。
誤って「仏に成った後は、修行を止めて更に行う事は無い」と言ってしまう人は、未だ仏祖の仏道を知らない凡人である。

一切の菩薩とは、一切の諸仏の本(もと)の祖であるし、
一切の諸仏とは、一切の菩薩の本(もと)の師である。

たとえ諸仏の無上普遍正覚を、過去に修行して証しても、
現在に修行して証しても、
未来に修行して証しても、
身を受けるより前に修行して証しても、
心を受けた後に修行して証しても、
最初も中間も最後も共に、この法華経に属しているのである。
属するのも、属させられるのも、同じく、この法華経に属しているのである。
この法華経に属している時、この法華経の一切の菩薩を証しているのである。

経は情の有る者ではないし、経は情の無いものではない。

経は「有為」、「人為的に作られている事」、「生じたり滅んだりする変化する『この世』のもの」ではないし、
経は「無為」、「自然のままである事」、「人為的に作られていない事」、「消滅しない不変の絶対の真理」ではない。

けれども、菩薩を証し、人を証し、実の相を証し、この(法華)経を証する時、方便の門を開くのである。
方便の門は、仏という結果の無上の功徳なのである。
方便の門は、法に住んでいる、法の位である。
方便の門は、「この世の相は常に住んでいる」なのである。

方便の門は、一時の技量ではない。
方便の門は、尽十方界の学への参入なのである。
「諸法」、「全てのもの」の実の相をひねって学に参入するのである。
方便の門が現れて、尽十方界を覆っても、一切の菩薩でなければ、この境地に無い。

雪峰義存は、「尽大地は解脱の門である。人を引き寄せても入ってくれない」と言った。

そのため、知るべきである。
地の尽く、世界の尽くが、たとえ門であっても、出入りは簡単ではない。
出入りする個々は多くない。
人を引き寄せても入ってくれないし、出てくれない。
人を引き寄せないと入ってくれないし、出てくれない。
前進する者は誤る。
後退する者は停滞する。
どうすれば良いだろうか？
人を挙げて門に出入りさせようとすれば、いよいよ門と遠ざかってしまう。
門を挙げて人に入れると、出入りする可能性が有る。

「(法華経が、)方便の門を開く」とは、「(法華経が、)真の実の相を示す」事なのである。

「(法華経が、)真の実の相を示す」のは、時を覆っていて、最初も中間も最後も無いのである。

(原文は「示真実相は蓋時にして初中後際断なり」。)

方便の門を開く道理は、尽十方界に方便の門を開くのである。

尽十方界に方便の門を開く時、正しく尽十方界を見ると、未だかつて見た事が無い様子が有るのである。

尽十方界を一枚、二枚、三個、四個、ひねって来て「方便の門を開く事」と成らせるのである。

これによって、唯一普遍に「方便の門を開いた」と見えるが、多数の尽十方界は「方便の門を開いた」利益を少し得て形成されて現される「面目」、「有様(ありよう)」としている、と見えるのである。

このような「風流」、「有様(ありよう)」は、(法華)経に属している力による物なのである。

「真の実の相を示す」とは、「諸法」、「全てのもの」の実の相の言葉を尽界に広める事であるし、

尽界で仏道を成就する事であるし、

実の相が「諸法」、「全てのもの」である道理を尽(ことごと)くの人に理解させる事であるし、

尽(ことごと)くの「法」、「もの」で(実の相を)出現させる事である。

そのため、過去七仏から三十三祖の大鑑禅師までの四十人の仏祖の無上普遍正覚は皆、この(法華)経に属している。

この(法華)経に属しているし、この(法華)経も属している。

座布団と禅板の上の坐禅による無上普遍正覚は皆、この(法華)経に属している。

釈迦牟尼仏の「拈華瞬目」と初祖の迦葉の「破顔微笑」と、礼拝して髄を会得する事は共に皆、この(法華)経に属しているし、

この(法華)経の「同属」、「仲間」なのであるし、

「方便の門を開き、真の実の相を示す」事なのである。

それなのに、宋の時代の中国の杜撰(ずさん)な輩は、「落所」、「思考が落ち着き決着する所」を知らず、「宝の在処(ありか)」を見ず、「実の相」という言葉を空虚な説のように誤って思ってしまい、さらに、老子や荘子の言葉を学んでしまう。

「老子や荘子の言葉は、仏祖の大いなる仏道と等しい」と誤って言ってしまう。

また、「『道教、儒教、仏教』という『三教』は一致する」と誤って言ってしまう。

あるいは、「『道教、儒教、仏教』という『三教』は三脚の器の三脚のような物であり、一つでも無ければ転覆してしまう」と誤って言ってしまう。

とても愚かであり、例える物が無いほどである。

「このように言ってしまう輩も仏法を聞いている」と許すべきではない。

なぜなら、仏法は西のインドを本(もと)としている。

釈迦牟尼仏は、八十年間も存命し、五十年間も法を説いて、盛(さか)んに人や天人を化して導いた。

釈迦牟尼仏は、一切の全ての生者を化して導き、皆、仏道に入れさせたのである。

釈迦牟尼仏から二十八祖の達磨まで、インドでは二十八人の祖師達が仏法を正しく伝えた。

釈迦牟尼仏から二十八祖の達磨まで、インドで、仏法は盛(さか)んであり、仏法は素晴らしく最も尊い物であるとされた。

釈迦牟尼仏から二十八祖の達磨まで、インドでは、諸々の外道や「天魔」、「魔」、「仏敵」は尽(ことごと)く降伏させられた。

釈迦牟尼仏から二十八祖の達磨まで、インドでは、仏祖と成った人や天人は数え切れないほどいた。

「道教と儒教を中国でたずねなければ、仏道だけでは不足が有る」とは未だ言わない。

もし必ず三教一致であるならば、仏法が出現した時、西のインドで道教と儒教も同時に出現したはずである。

仏法は、天上と天下で唯一単独で尊いのである。

釈迦牟尼仏の時や、釈迦牟尼仏から二十八祖の達磨までの時を思うべきであり、忘れて誤るべきではない。

「三教一致」という誤った説は矮小な似非(えせ)僧侶の誤った説にも及ばない。

仏法を壊したい輩が「三教一致」という誤った説を唱えるのである。

「三教一致」という誤った説を言ってしまう輩ばかりが多いのである。

「三教一致」という誤った説を言ってしまう輩が、人や天人の導師と成る様相を現し、帝王の師匠と成ってしまっている。

宋の時代に中国で仏法が衰退しているのである。

道元の亡き師である、古代の仏と等しい、五十祖の如浄は、これらの事を深く戒めていた。

「三教一致」という誤った説を言ってしまう輩は、「二つの乗り物」の段階の人や外道の種のような者なのである。

「三教一致」という誤った説を言ってしまう類(たぐい)の輩は実の相が有る事すらも知らない状態で既に、二、三百年を経ているのである。

仏祖の正しい仏法の学に参入しても、「生と死のくり返しを離れ出るべきである」としか言えない。

また、どのように仏祖の正しい仏法の学に参入するべきかも知らない者が多い。

似非(えせ)僧侶は「寺の主として寺に住む稽古(けいこ)をしている」としか思っていない。

祖師の仏道が廃(すた)れている事を憐れむべきである。

正しい道に適(かな)っている高徳の長老の僧は大いに嘆いている。

このような輩が言い出す言葉を聞くべきではない。

憐れむべきである。

圜悟克勤は、「生死が去ったり来たりするのは、真実の人の体である」と言った。

この言葉をひねって挙げて、自(みずか)らを知り、仏法を考えるべきである。

長沙景岑は、「尽十方界は、真実の人の体である。尽十方界は、自己の光明の中に在る」と言った。

宋の時代の中国の諸方の老人の僧などは、長沙景岑が言ったような言葉の学に参入するべきである道理をなお知らず、まして、学に参入しない！

宋の時代の中国の諸方の老人の僧などは、もし長沙景岑が言ったような言葉を挙げて来られると、ただ赤面して無言に成るしかないのである。

道元の亡き師である、古代の仏と等しい、五十祖の如浄は、「宋の時代の、諸方の老人の僧は、古代を照らしてみる事が無く、今を照らしてみる事が無く、仏法の道理が未だかつて無いのである。『尽十方界』などの言葉をこの人たちに挙げてみても何も知らない！　彼らの中には(『尽十方界』などの言葉を)未だかつて聴いた事が無いような人もいる」と言った。

この如浄の言葉を聞いた後、諸方の老人の僧に質問してみたら、「尽十方界」などの言葉を真に聴いて来ている人は少なかった。

諸方の老人の僧が空虚な説を説いて聖職を汚(けが)している事を憐れむべきである。

応庵曇華は、ある時、徳徽という僧に、誤って「もし(仏道を)会得しやすく求めるならば、一日中、心や思いが動くのに、ただ向かい合いなさい。
(そして、)大いなる虚空のように会得するのは不可能である、と直ぐに了解しなさい。

虚空には形状が無いし、表裏が無く唯一普遍絶対である。
(そのため、)知覚と知覚の対象は双方共に無く成るし、奥深さと理解は共に無く成るし、過去、現在、未来も無く成る。
このような境地に到達した人を、学ぶべき物が絶えて無い、『無為』、『自然』な、『閑静』、『寂静』な仏道者と言う」と言ってしまった。

このような物が応庵曇華が奥底まで力を尽くして言い得た言葉なのである。
これでは、ただ影を背負って休息を知らないような物である。

「表裏が無く唯一普遍絶対である」時は、仏法は有り得ないのか？
(応庵曇華が言っている)「表裏」とは何なのか？

応庵曇華は、「仏祖が『虚空には形状が有る』と言った」としてしまっている。

応庵曇華は、何を「虚空である」としているのか？

思うに、応庵曇華は、未だ虚空を知らないし、
虚空を「見ていない」、「理解していない」し、
虚空を「とらえていない」、「理解していない」し、
虚空を「打っていない」。

(応庵曇華は)「心や思いが動く」と言ってしまっているが、心は未だ動かない道理が有る。
どうして一日の中で心が動く事が有るだろうか?
一日の中に心が来て入る事は有り得ない。
一つの心の中に一日は来ない。
(原文は「十二心中に十二時きたらす」。)
まして、どうして心が動く事が有るだろうか?

「思いが動く」とは、どういった事か?
思いは動いたり動かなかったりするのか?
思いは、動く、動かない、ではないのか?
「動く」とは、どういった事か?
「動かない」とは、どういった事か?
(応庵曇華は)何を「思い」と呼んでいるのか?
思いは一日の中に存在するのか?
思いの中に一日が存在するのか?
思いが一日の中に無いし、思いの中に一日が無い場合が有り得るのか?

(応庵曇華は)「一日中ただ向かい合えば、(仏道を)会得しやすいだろう」と言っているが、何を会得しやすいのだろうか?
もしかして(応庵曇華は)「(一日中ただ向かい合えば、)仏祖の仏道を会得しやすい」と言っているのか?

そうであるとしたら、仏道は、会得しやすい、会得し難い、ではないので、三十四祖の南嶽の懐譲も江西の三十五祖の馬祖道一も長い間、師に従って仏道をわきまえたのである。

(応庵曇華は)「会得するのは不可能である、と直ぐに了解しなさい」と言ってしまっているが、(応庵曇華は)仏祖の仏道を未だ夢にも見ていないのである。

(応庵曇華は、)このような力量で、どうして「(仏道を)会得しやすく求める」事が可能だろうか？　いいえ！

「(応庵曇華は)未だ仏祖の大いなる仏道に参入して究めて来ていない」と知る事ができる。

もし仏法が応庵曇華の言うような代物であったら、どうして今日にまで至るだろうか？

応庵曇華ですらなお、このようなのである。

千二百四十三年現在、諸々の山の寺の老人の僧の中に、応庵曇華のような者を求めても、長い時間をかけても、出会えない。

穴が開くほど見ても、応庵曇華と等しい老人の僧を見る事ができないのである。

応庵曇華の近くの人々の多くは「応庵曇華が仏法を知り及(およ)んでいる」と誤って認めてしまっているが、「応庵曇華が仏法を知り及(およ)んでいる」と許す事はできない。

応庵曇華は僧の中の後進の者であり、普通であると言える。

なぜなら、応庵曇華は人を知る事ができる気力が有るからである。
今の輩は人を知る事ができない。自らを知らないので。
応庵曇華は、仏道には未到達であるが、仏道を学び修行していた。
今の老人の僧は、仏道を学び修行していない。
応庵曇華は、善い言葉を聞いても、耳に入らず、耳で見ず、眼に入らず、眼で聞かないだけなのである。
応庵曇華は、昔は、このようであったが、今は、自ら、悟りが存在するかもしれない。
宋の時代の中国の諸々の山の寺の老人の僧などは、応庵曇華の内外を見ず、応庵曇華の言葉と様子を全て知覚の対象としていないのである。
このような輩は、仏祖が言った「実の相」という言葉が、仏祖の言葉であるのか、仏祖の言葉ではないのか、すらも知る事ができない。
このため、九百年頃や千年頃から、老人の僧といった杜撰(ずさん)な輩は全て、実の相を「見ない」、「理解しない」で話してしまって来ているのである。

道元の亡き師である、古代の仏と等しい、天童山の五十祖の如浄は、ある夜、一丈四方の部屋で説法して、「如浄が今夜、子牛のようにいたら、黄金の釈迦牟尼仏が実の相をひねってくれた。
買おうと求めたが、価値が決められない！
孤雲の上でホトトギスが一声、鳴いた」と言った。

このように、仏道で優れている高徳の長老の僧は実の相を言うのである。

仏法を知らず仏道の学に参入していない人は実の相を言わないのである。

この如浄の言葉が言われた時は、千二百二十六年の春、午前一時に成ろうとする夜間で、上方で太鼓の音が三回、聞こえた。
私、道元が、坐具を取り、袈裟を着て、僧堂の前門から出ると、「入室」、「師への仏法の質問」の札が掛けられていた。
僧達に従って法堂に至った。
法堂の西の壁のそばを経て、寂光堂の西の階段を上った。
寂光堂の西の壁の前を過ぎて、大光明蔵の西の階段を上った。
大光明蔵が一丈四方の部屋であった。
西の「屏風(びょうぶ)」、「仕切り」の南から、香炉を乗せた台の近くに至って、焼香して礼拝した。
「入室した僧達が、ここに列を成しているだろう」と思ったが、一人も見えなかった。
妙高台には簾(すだれ)が下ろされていた。
かすかに如浄の説法の言葉が聞こえる。
その時、西川の祖坤という「維那」を務めている僧が来て、同じく焼香して礼拝し終わって、(一緒に、)妙高台を密(ひそ)かに覗(のぞ)いてみると、僧達で満員であった。
その時、如浄が説法を始めたので、密(ひそ)かに僧達の後ろに立って聴いた。
如浄は、大梅山の法常禅師が山に住んでいた時の話を挙げた。
法常禅師が蓮(ハス)の葉を衣にし松の実を食べていた逸話の所で、僧達の多くは涙を流した。

如浄は、霊山での釈迦牟尼仏の安居の話を詳細に挙げた。聞いている者の多くが涙を流した。

如浄は、「天童山の、この寺も安居が近く有る。今は春であり、寒くないし、暑くないし、坐禅に好ましい時である。兄弟達よ、どうして坐禅しないのか？」と説法してから、「如浄が今夜、子牛のようにいたら、黄金の釈迦牟尼仏が実の相をひねってくれた。買おうと求めたが、価値が決められない！孤雲の上でホトトギスが一声、鳴いた」と詩で言った。

如浄は、言い終わると、右手で椅子(イス)の右の辺りを一回、打って、「入室しなさい」、「私に仏法を質問しなさい」と言った。

如浄は、「ホトトギスが鳴くと、山の竹は裂ける」と言った。

このような如浄の言葉が有った。この他には特別な話は無かった。

多くの僧がいたが、如浄の言葉を批評せず、如浄を畏敬するばかりであった。

このような「入室」、「師への仏法の質問」の仕方は、諸方で未だ無い。

如浄だけが、このような仕方を行った。

如浄が説法する時は、如浄の椅子(イス)と仕切りの周りに僧達は立った。そのまま立ちながら、質問が有る僧は質問し、質問が終わった人は部屋を出た。

残る人達は、立ったまま、質問者の様子や如浄の様子と問答を共に皆、見聞きするのである。

このような仕方は未だに他で、諸方で、無い。

他の老人の僧には、この仕方はでき得ないだろう。

他の仕方での質問では、他人より先に質問しようとしてしまう。

この仕方での質問では、他人よりも後に質問しようとする。
(他人の問答を見聞きするためにである。)
このような、人心の道理の違いを忘れないべきである。
この時、千二百二十六年から千二百四十三年までの十八年間は、速(すみ)やかに風と光の中に過ぎ去っていった。
天童山の寺から、この山の寺まで、いくつの山と河を超えたか覚えていないが、実の相についての如浄の美しい不思議な言葉を身心と「骨髄」、「理解」に深く記憶して来ている。
あの時の如浄の話は、他の多くの僧達も忘れられないだろう、と思う。
あの夜は、三日月がわずかに楼閣からのぞき、ホトトギスがしきりに鳴いていたが、静かな夜であった。

宗一大師と呼ばれる玄沙師備は、集まりの時に(座に上っていて)ツバメの鳴き声を聞いたので、「実の相を深く話しているし、仏法の要を善く説いている」と言ってから、座を下った。
ある僧が、後に、重ねて教えを請い、「私は理解できませんでした」と言った。
玄沙師備は、「去りなさい。他の人は、あなた(の『理解できませんでした』という言葉)を信じない」と言った。
「実の相を深く話している」とは、「ツバメが独り実の相を深く話している」と玄沙師備の言葉は聞こえてしまうだろう。

けれども、そうではないのである。
玄沙師備は集まりの時にツバメの鳴き声を聞いたが、ツバメが実の相を深く話したわけではないし、玄沙師備も実の相を深く話したわけではない。
ツバメも玄沙師備も実の相を深く話したわけではないが、玄沙師備がツバメの鳴き声を聞いたのは、「実の相を深く話している」事と成るのである。

この話に参入して究めるべきである。

玄沙師備の集まりが有り、
玄沙師備がツバメの鳴き声を聞く事が有り、
玄沙師備の「実の相を深く話しているし、仏法の要を善く説いている」という言葉が有り、
玄沙師備が座を下る事が有り、
ある僧が後に重ねて教えを請い「私は理解できなかった」と言う事が有り、
玄沙師備は「去りなさい。他の人は、あなた(の『理解できなかった』という言葉)を信じない」と言う事が有った。

「私は理解できなかった」という言葉は、必ずしも実の相の教えを重ねて請う事には成らなかった。
けれども、「私は理解できなかった」という言葉は、仏祖の命であるし、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」の「骨髄」、「理解」である。

知るべきである。
この僧が、たとえ重ねて教えを請い「私は理解できた」と言おうが、「私は説く事ができた」と言おうが、玄沙師備は必ず「去りなさい。他の人は、

あなた(の『理解できた』または『説く事ができた』という言葉)を信じない」と、この僧の為に言うべきなのである。

この僧が理解しているのを「理解していない」として重ねて教えを請うので玄沙師備は「去りなさい。他の人は、あなた(の『理解できなかった』という言葉)を信じない」と言ったわけではないのである。

実に、この僧ではない「ありふれた人」であっても、全てのものが実の相であっても、仏祖の命が正直に通じている時と場所では、実の相の学への参入は、このように形成されて現されるのである。

青原の行思の系譜の集まりの下で、実の相の学への参入は、既に形成されて現されている。

知るべきである。

実の相は、仏法の正統な代々の伝承が正しい事なのである。

「諸法」、「全てのもの」は、仏と仏だけが参入して究め尽せるもの、仏と仏だけが能く究め尽せるものなのである。

「仏と仏だけが能く究め尽せる、『諸法』、『全てのもの』の実の相」とは、ありのままの仏の相なのである。

正法眼蔵　諸法実相

その時、千二百四十三年、日本の越州の吉峰寺において僧達に示した。

密語

諸仏が護ろうと念頭に置いている大いなる仏道を「公案」、「修行者の手がかりとしての祖師の言葉」として形成して現すと「あなたもまた、そうである。私も、またそうである。善く自ら護って保持しなさい」であり、今も証に適っている。

「尚書」を務める役人が、ある時、捧げ物をおくって、弘覚大師と呼ばれる三十九祖の雲居道膺に、「『釈迦牟尼仏には密語が有り、初祖の迦葉は隠さなかった』(と言われています)。釈迦牟尼仏の『密語』とは、どういった物ですか?」と質問した。

雲居道膺は、「尚書」と呼んだ。

「尚書」を務める役人は、「はい」と返事した。

雲居道膺は、「理解できましたか?」と言った。

「尚書」を務める役人は、「理解できません」と言った。

雲居道膺は、「もし、あなたが理解できなければ、それが釈迦牟尼仏の『密語』なのです。もし、あなたが理解できれば、それが初祖の迦葉は隠さなかった事なのです」と言った。

三十九祖の雲居道膺は、三十四祖の青原の行思から五代目の正統な法の子孫として形成されて現されて、天人と人の師であり、尽十方界で大いなる善知識を持つ者である。

雲居道膺は、情の有る者を化して導いたし、情の無いものも化して導いた。

三十九祖の雲居道膺は、過去七仏から四十六人目の正統な仏として、仏祖のために法を説いた。

(雲居道膺が昔、住んでいた時、)三峰庵の中に、天人が食べ物を捧げた。

雲居道膺は仏法を伝えられて「道」、「真理」を会得した時から食べ物を捧げられる境界を超越した(ため、天人には雲居道膺が見えなく成ったので、天人は食べ物を捧げる事ができなく成った)。

「釈迦牟尼仏には『密語』(、『意味が込められた言葉』、『意味が有る言葉』)が有り、初祖の迦葉は隠さなかった」という言葉は、雲居道膺は四十六人目の仏として、伝えられていたが、雲居道膺は四十六人目の仏の本来の「面目」、「有様」として、人によって得たわけではないし、

外から得たわけではないし、

本から得ていたわけではないし、

未だかつて新しい物ではない。

雲居道膺の話で「密語」(、「意味が有る言葉」)が形成されて現されたが、釈迦牟尼仏にだけ「密語」が有るわけではなく、諸々の仏祖には皆、「密語」が有る。

釈迦牟尼仏は既に仏であるので必ず「密語」が有る。

釈迦牟尼仏に「密語」が有れば、初祖の迦葉は必ず隠さない。

百、千の無数の釈迦牟尼仏がいれば、同じく百、千の無数の迦葉がいる道理を忘れないで学に参入するべきである。

学に参入するには、「一回で会得しよう」と思わず、百回でも千回でも何回でも明確に詳細に鍛錬して、硬い物を切ろうと営むように学に参入するべきである。

「『密語』(、『意味が有る言葉』)を話す人がいれば、すぐに会得できる」と思うべきではない。

雲居道膺は既に仏であるので「密語」(、「意味が有る言葉」)が備わっていて、「密語」を隠さない迦葉に相当する人がいる。

「雲居道膺が『尚書』と呼び、『尚書』を務める役人が『はい』と返事したのが、『密語』である」として学に参入する事なかれ。

雲居道膺は、「尚書」を務める役人に示して、「もし、あなたが理解できなければ、それが釈迦牟尼仏の『密語』である。もし、あなたが理解できれば、それが初祖の迦葉は隠さなかった事なのである」と言った。

この言葉について必ず長い時間、道をわきまえる鍛錬をする志を立てるべきである。

「もし、あなたが理解できなければ、それが釈迦牟尼仏の『密語』である」とは、呆然としているのを「理解できていない」と言っているわけではないし、知らないのを「理解できていない」と言っているわけではない。

「もし、あなたが理解できなければ、それが釈迦牟尼仏の『密語』である」と言う道理の学に静かに参入するべきである。

鍛錬して道をわきまえるべきである。

さらに、また、「もし、あなたが理解できれば、それが初祖の迦葉は隠さなかった事なのである」と言っているが、「今、既に理解できている」というわけではない。

仏法の学に参入するには多くの道が有る。

仏法の学に参入する中には、仏法を理解できたり理解できなかったりする「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」が有る。

正しい師に出会わなければ、有るとすらも知らず、いたずらに無駄に、見聞きできない眼と耳によって、「『密語』、『秘密の言葉』、『秘密の教え』が有る」と誤解してしまう。

あなたが理解できるので、初祖の迦葉は隠さなかった事に成るというわけではない。

「もし、あなたが理解できなければ、それも初祖の迦葉は隠さなかった事なのである」という事も有るのである。

「『初祖の迦葉が隠さなかった事』は、誰でも見聞きして理解できる」と学ぶべきではない。

既に「隠されていない」のである。
「隠されている」時に試みに参入して究めるべきである。

そのため、「自分が知らない境地が『密語』、『秘密の言葉』、『秘密の教え』である」と学に参入して来たわけではないのである。

仏法を理解できない時も、わずかではあるが、ある意味、「密語」(、「意味が有る言葉」)なのである。
釈迦牟尼仏には必ず「密語」が有るし、「密語」には必ず釈迦牟尼仏(の教え)が有る。

しかし、正しい師の教えを聴いて理解していない輩は、たとえ「獅子の座」、「仏の座」の上にいても、この道理を夢にも未だ見ていないのである。

似非僧侶は、妄りに誤って「『釈迦牟尼仏には密語が有る』とは、霊山で百万の者達の前で(無言で)『拈華瞬目』した事なのである。
なぜなら、言葉で仏が説いた教えは浅はかだからである。
言葉とは、名前や『相』、『外見』だからである。
無言で『拈華瞬目』した時が、『密語』を施し設けた時なのである。
百万の者達は理解できなかった。
百万の者達が理解できなかったために『密語』、『秘密の言葉』、『秘密の教え』と成ったのである。

『初祖の迦葉は隠さなかった』とは、釈迦牟尼仏の『拈華瞬目』を、初祖の迦葉は以前から知っていたかのように『破顔微笑』したので、初祖の迦葉によって『隠さなかった』と言うのである。

『密語』、『秘密の言葉』、『秘密の教え』は仏法の真の秘訣（ひけつ）である。

釈迦牟尼仏の『密語』、『秘密の言葉』、『秘密の教え』を祖師達は代々伝えて来ているのである」と言ってしまう。

似非（えせ）僧侶の誤った言葉を聞いて「真実である」と思ってしまった輩は、稲、麻、竹、葦（アシ）の様に多数いて、中国全土の九つの州で林の様に群れをなしている。

憐れむべきである。

仏祖の仏道が廃れる事は、このような事を元にして起こる。

明らかな見る眼を持つ人は、正に、一つ一つ見破るべきである。

もし釈迦牟尼仏の言葉を浅はかとするならば、無言の「拈華瞬目」も浅はかと成るはずである。

釈迦牟尼仏の言葉とは「名前や『相』、『外見』である」とする人は、仏法を学んだ人ではない。

(釈迦牟尼仏の言葉には意味が有る。)

「言葉とは、名前や『相』、『外見』である」と知っても、釈迦牟尼仏は名前や「相」、「外見」にとらわれていない事を未だ知らないのである。

似非（えせ）僧侶は、凡人の情を未だ脱ぎ落としていないのである。

仏祖は、身心で通じた所の物は皆、脱ぎ落としていて、仏法を説き、言葉で仏法を説き、法輪を転じる。

仏祖の言葉を見聞きして利益を得る者は多い。

仏法を信じて行う愚鈍な僧も、「仏法」、「真理」を知って行う利発な僧も、仏祖がいる所では化の導きを受けるし、仏祖がいない所でも(言葉によって)化の導きを受けられるのである。

「百万の者達」は、「拈華瞬目」を「拈華瞬目」として見聞きした！

「百万の者達」は、初祖の迦葉と肩を並べていたし、釈迦牟尼仏と同じ時代に生きていた。

「百万の者達」は、自分以外の「百万の者達」と、同じく参入したし、同じ時代に悟りを求める事を思い立って心した。

仏道は同一であるし、(この世という仏の)国土も同一である。

有知の知によって仏法を見聞きするのであるし、無知の知によって仏法を見聞きするのである。

初めて一人の仏を見てから、進んで、恒河沙のように無数の仏を見るのである。

各々の仏の会には共に「百万の者達」がいるはずである。

諸仏の各々が共に「拈華瞬目」を開演するのが同じ時であるのを見聞きするべきである。

「見る眼」は暗くないし、「聞く耳」は聡明で利発である。

心に「見る眼」が有るし、身に「見る眼」が有る。

心に「聞く耳」が有るし、身に「聞く耳」が有る。

初祖の迦葉の「破顔微笑」をあなたは、どのように理解したのか？　試しに言ってみなさい。

あなた達、似非(えせ)僧侶の言う通りであれば、初祖の迦葉の「破顔微笑」も「密語」、「秘密の言葉」、「秘密の教え」と言えてしまう。

けれども、似非(えせ)僧侶は初祖の迦葉の「破顔微笑」を(「密語」ではなく)「隠さなかった」と言うので、最悪の愚かさを重ねているのである。

釈迦牟尼仏は、後に、「私には『正法眼蔵涅槃妙心』、『正しくものを見る眼と寂滅した妙なる心』が有り、初祖の迦葉に付属する」と言った。

この釈迦牟尼仏の言葉は、言葉であったのか？　無言であったのか？

もし釈迦牟尼仏が言葉を嫌い(無言の)「拈華瞬目」を愛していれば、後にも「拈華瞬目」したであろう。

初祖の迦葉は、釈迦牟尼仏の言葉によって、仏法を理解していた！
釈迦牟尼仏の会の「百万の者達」は、釈迦牟尼仏の言葉によって、仏法を聴いて理解していた！

似非（えせ）僧侶の誤った話を用いるべきではない。

釈迦牟尼仏には、「密語」（、「意味が有る言葉」）が有るし、「密行」（、「意味が有る行い」）が有るし、「密証」（、「意味が有る証」）が有る。

愚かな人は誤って「『密語』などの『密』とは、『他人は知らず、自分は知り、知っている人がいて、知らない人がいる』という意味である」と思ってしまう。

このように誤って思ってしまったり言ってしまったりする人は、西のインドから東の地の中国までで、古今で、未だ仏道の学に参入していないのである。

もし言う通りであれば、在俗者や出家者の、学が無い者には「密」、「秘密」、「謎」は多く、広く学んでいる者には「密」、「秘密」、「謎」は少ないはずである。

広く学び良く知っている僧には「密」、「秘密」、「謎」、「神秘」は有り得ないのか？　いいえ！

まして、誤って「(神通力の)天眼通や天耳通や、菩薩の『法眼』や『法耳』や、仏の眼や耳などを備えた時は、『密語』、『秘密の言葉』や『密意』、『秘密の思い』は全く有り得ない」と言えてしまう。

仏法の「密語」や、「密意」(、「意味が有る思い」)や、「密行」などは、このような道理の物ではない。

人に出会った時、正に「密語」(、「意味が有る言葉」)を聞き、「密語」を解く。

自己を知る時、「密行」(、「意味が有る行い」)を知るのである。
(自己を知った時、行いに意味が有った事を知るのである。)
まして、仏祖は良く前記の「密意」、「密語」をわきまえ究める。
知るべきである。
仏祖である時、正に「密語」、「密行」を競って形成して現すのである。

「密語」などの「密」は、親密の道理なのであるし、
絶え間が無いし、
仏祖を覆っているし、
あなたを覆っているし、自己を覆っているし、
行いを覆っているし、
時代を覆っているし、
功績を覆っているし、
「密」(、「意味」)を覆っている。

「密語」(、「意味が有る言葉」)が「密人」(、「意味が有る人」)に出会うのは、仏の眼でも見えないのである。

「密行」(、「意味が有る行い」)は自分や他人が知る所ではない。

「密我」は独り知る事が可能である。

「密他(者)」の各々は理解できない者である。

「『密語』などの『密』は、かえって逆に、あなたの近くに存在する」ので、全てのものは「密」に依っているし、一つのものや半端なものも「密」に依っている。

このような道理について明らかに鍛錬して学に参入するべきである。

仏祖が人々の為(ため)に仏法を説き、人々が仏法をわきまえて受け入れる、所々や時に、必ず、「意味が有る例え」で例える者が、仏から仏へ、祖師から祖師への正統な後継者である仏祖なのである。

今は「密時」(、「意味が有る時」)であるので、自己にも「密」なのであるし、

他人の自己にも「密」なのであるし、

仏祖にも「密」なのであるし、

人ではない者にも「密」なのである。

このため、「密」の頭の上に新たに「密」が有るのである。

このように、仏の教えに従って修行して証する人は、仏祖であるので、「仏祖密」(、「仏祖の意味」)を透過するのである。

であれば、「密」(、「意味」)を透過するのである。

四十九祖の雪竇智鑑は、僧達に示して、「『釈迦牟尼仏には密語が有り、初祖の迦葉は隠さなかった』。ある夜、雨が降り、華が散り落ちたが、花びらを流している水による華の香りが城下町に満ちた」と言った。

四十九祖の雪竇智鑑の「ある夜、雨が降り、華が散り落ちたが、花びらを流している水による華の香りが城下町に満ちた」という言葉は、「親密」を意味しているのである。

「ある夜、雨が降り、華が散り落ちたが、花びらを流している水による華の香りが城下町に満ちた」という例えによって、仏祖の「眼睛」、「見る眼」と「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」を点検して詳細に調べるべきである。

臨済義玄や徳山宣鑑では及ぶ事ができない。

「眼睛」、「見る眼」の中の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」に参入して開くべきである。

「(聞く)耳」の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻先」を先鋭化して聡明にさせるのである。

まして、「(聞く)耳」や「(真理を嗅ぎ分ける)鼻」や「眼睛」、「見る眼」の中は古くなく、新しくない「渾身」、「渾心」にさせる。

これを「華雨世界起」、「華が雨で散り落ちて世界が起こる」道理とする。

四十九祖の雪竇智鑑の「花びらを流している水による華の香りが城下町に満ちた」という言葉の意味は、「身を隠して(逆に)影は身を隠す前よりも露(あら)わと成る」なのである。

このようであるので、仏祖の家の中の日常では、「釈迦牟尼仏には密語が有り、初祖の迦葉は隠さなかった」という言葉に参入して究めて透過するのである。

釈迦牟尼仏を含む過去七仏や、諸仏は、このように、学に参入する。

釈迦牟尼仏と初祖の迦葉も、同じく、このように、わきまえて究めて来ている。

正法眼蔵　密語(意味が有る言葉)

その時、千二百四十三年、越州の吉田県の吉峰古精舎にいて僧達に示した。

仏経

経の中に、「教菩薩法」、「法華経」が有る。
（「菩薩は諸仏である」と言えるため、経の中に「法華経」、「教菩薩法」が有るので、）「教諸仏法」が有る。

経は、大いなる仏道の「調度品」、「日常の道具」である。

「日常の道具」は使用主に従う。
使用主は「日常の道具」を使う。

経によって、西のインドから東の地の中国までの仏祖は、必ず、善知識を持つ人々によるか経による時、各々、「発意」、「発心」、「悟りを求める事を思い立って心する事」と修行と「証果」、「悟り」の間に、かつて隙間（すきま）が無い物なのである。

「発意」、「発心」、「悟りを求める事を思い立って心する事」も、善知識を持つ人々によるか経によるし、
修行も、善知識を持つ人々によるか経によるし、
「証果」、「悟り」も、善知識を持つ人々によるか経による。

「機先」、「物事が起こる前」も、言葉の後も、同じく、善知識を持つ人々か経に参入する。

物事が起きている途中も、言葉の中も、同じく、善知識を持つ人々か経に参入する。

善知識を持つ人は必ず経に通じて利益を得る。

「経に通じて利益を得る」とは、経を国土とする事であるし、経を身心とする事である。

経を他者の為(ため)に施し設(もう)ける物とするし、

経を、坐ったり横たわったりする坐禅と、坐禅の合間の歩行とする。

経を父と母とするし、経を子孫とする。

経を「修行と理解」とするので、善知識を持つ人は経に参入して究めるのである。

善知識を持つ人が洗面し茶を飲むのは、古くからの経なのである。

「経が善知識を持つ人を生み出す」とは、黄蘗希運の杖の六十打は能(よ)く臨済義玄という法の子孫を生み出して成長させた事であるし、

黄梅山の三十二祖の弘忍の臼(うす)への杖の三打は能(よ)く三十三祖の大鑑禅師に衣と共に仏法を伝えた事である。

さらに、霊雲志勤が桃の花を見て仏道を悟ったのも、

香厳の智閑が竹に当たった響きを聞いて仏道を悟ったのも、

釈迦牟尼仏が明けの明星を見て仏道を悟ったのも、皆、経が善知識を持つ人を生み出して成長させたのである。

見る眼を得て経を得る「皮袋」や「拳頭」、「拳」である「人」もいるし、経を得て見る眼を得る「木の柄杓」や「漆の桶」である「人」もいる。
（「漆桶」、「漆の桶」は真っ黒で見分けられないので「無知な僧」を意味し、派生して、無知の原因である「煩悩」も意味する。）

経とは、尽十方界である。経ではない時や場所は無い。
（経、善知識と成らない世界や時や場所は無い。）

経は、「勝義諦」、「最もすぐれた真理」の文字、言葉を用いるし、
「世俗諦」、「世俗で真理と思われている物」の文字、言葉を用いるし、
天上の文字、言葉を用いるし、
人間の文字、言葉を用いるし、
「畜生道」、「動物的人間」の文字、言葉を用いるし、
修羅道の文字、言葉を用いるし、
「百草」、「森羅万象」の文字、言葉を用いるし、
「万木」、「全ての木」、「全ての、木に例えられる修行者」の文字、言葉を用いる。

このため、尽十方界に森森と生い茂って並んでいる、長いもの、短いもの、角ばっているもの、丸いもの、青いもの、黄色いもの、赤いもの、白いものは、経の文字であるし、経の表面である。

尽十方界を、大いなる仏道の日常の道具としているし、仏教という仏の家の経としている。

尽十方界という経は能く時を覆って広まるし、国を覆って流通する。

経は、人を教える門を開いて、尽地の人を捨てないし、ものを教える門を開いて、尽地のものを救う。

経は、諸仏を教え、菩薩を教えるのに、尽地、尽界と成るのである。

経は、方便の門を開き、位に住んでいる門を開いて、一人前や半人前を捨てないで、真の実の相を示すのである。

経が方便の門を開いて真の実の相を示す時、諸仏や菩薩は、慮知念覚の有無とは無関係に各々の自らの強引な行いではなく経を得るのを、各々の面々の大いなる機会としている。

必ず経を得る時とは古今とは無関係である。古今は経を得られる時であるので。

(古今のいつでも経を得られるので。)

尽十方界が目の前に現れるのは、経を得たからである。

尽十方界という経を読んで「通じて」、「理解して」利益を得ると、「仏智」、「仏の知」や、「自然智」、「自然に得られる知」や、「無師智」、「師がいなくても得られる知」が、心より先に形成されて現されるし、身より先に形成されて現される。

この時、「新しい特別な物である」と疑う事は無い。

私達が経を受け取って保持し読めるのは、経が私達を受け取ったからなのである。

言葉より先や、言葉の外や、言葉の降下や、言葉という節目上の事情は、速（すみ）やかに「散華」、「華をまき散らして捧げる事」や「貫華」なのである。

尽十方界という経を仏法と呼んでいる。

仏法には八万四千の説法蘊が有る。

尽十方界という経の中に、無上普遍正覚を成就している諸仏の文字、言葉が有るし、

現に世間に住んでいる諸仏の文字、言葉が有るし、

「般涅槃に入っている」、「肉体が死んでいる」諸仏の文字、言葉が有る。

「如来如去」、「如来」は、経の中の文字、言葉であるし、仏法の言葉である。

釈迦牟尼仏の「拈華瞬目」と、初祖の迦葉の「破顔微笑」は、過去七仏から正しく伝えられている古くからの経なのである。

二十九祖の慧可が、腰まで雪が積もっても外に立ち、腕を切り、二十八祖の達磨を礼拝して達磨の髄を会得したのは、正しく、師弟で代々伝えられている古くからの経なのである。

三十二祖の弘忍が三十三祖の大鑑禅師へ衣と共に仏法を伝えたのは、経を広く全巻、付属させる時が至ったのである。

弘忍が杖で臼を三回たたくと、大鑑禅師が穀物から殻やゴミを篩い分ける農具である「箕」に米を入れて三回、篩い分けたのは、経が経に手を出させ、経が経の仏法を正しく嗣いだのである。

それだけではない。

「何ものかが、どの様にかして来ている」のは、諸仏を教える千の無数の経なのであるし、菩薩を教える万の無数の経なのである。

三十四祖の南嶽の懐譲の「ある物を似ている物によって説明しても、言い当てられない」という言葉は、能く、八万蘊を説くし、「十二部経」、「十二分教」を説く。

まして、「拳頭」、「拳」や、「かかと」や、杖や、害虫を払うための毛がついた棒である払子は、古くからの経であるし、新しい経であるし、「有」、「存在」についての経であるし、「空」、「無」についての経である。

僧達の中にいて仏道をわきまえる鍛錬をして坐禅するのは、本より、「頭も正しい」仏の経なのであるし、「(頭が正しいので)尾も正しい」仏の経なのである。

菩提葉に経を記すし、虚空の面に経を記す。

仏祖の動静や、とらえたり放ったりする事は、自然に仏の経の進退と成る。

究極が無いのを究極の目安として学に参入するので、「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」によって経を受け取ったり出したりするし、「つま先」によっても経を受け取ったり出したりする。

父と母から生まれる前にも経を受け取ったり出したりする事が有るし、威音王仏以前にも経を受け取ったり出したりする事が有る。

山や河や大地によって経を受け取り、経について説く。

太陽と月と星々によって経を受け取り、経について説く。

創世前の無である長い時間である「空劫」以前の自己によって経を保持し、経を授ける。

「面目」、「有様」以前の身心によって経を保持し、経を授ける。

尽十方界という経は、微塵を破って(微塵を)出現させるのであるし、法界を破って(法界を)出現させるのである。

二十七祖の般若多羅は、「私は、吐く息が全ての縁に従わないし、吸う息が『色受想行識』という『五蘊』による世界にいませんし、常に、『ありのまま』という経、百、千、万、億の無数の経を読んでいます。たった一つの経や二つの経ではないのです」と言った。

般若多羅の言葉を聞いて理解して取って、呼吸で経が読まれるという学に参入するべきである。

「経を読む」事を知る者は、「経が存在する場所」を知る事ができるのである。

「転じる事」と「転じられる事」とは「経を転じる事」、「経を読む事」と「経によって転じられる事」であるので、ことごとく知見と成り得るのである。

道元の亡き師、五十祖の如浄は、普段から、「私、如浄の所では、焼香、礼拝、念仏、懺悔の修行、経を看る事を用いず、ひたすらに打ち坐って、仏道をわきまえる鍛錬をして、(古い)身心を脱ぎ落とす」と言っていた。

如浄の言葉を明らめている仲間の僧は稀なのである。

なぜなら、如浄の「経を看る事」という言葉を読んで、「(見る眼が有って、)経を看る事である」とすれば差しさわりが有るし、「(見る眼が無いのに、)経を看る事である」としなければ如浄の言葉の意図に背く事に成る。言っても言い得ていないし、言わないと言い得ない。速やかに言いなさい。速やかに言いなさい。

この道理の学に参入するべきである。

このような主旨が有るので、古代の人は、「経を看るには、経を看る事ができる『眼』、『見る眼』を持つ必要が有る」と言った。

まさに、知るべきである。

古今に、もし経が無ければ、「経を看るには、経を看る事ができる『眼』、『見る眼』を持つ必要が有る」という言葉は無かったであろう。

(古い身心を)脱ぎ落とす、(見る眼が有って)経を看る事が有るし、用いない、(見る眼が無いのに)経を看る事が有る、と学に参入するべきである。

そのため、学に参入している一人前の者や半人前の者は必ず仏の経を伝えられて保持して仏の子と成るべきである。

いたずらに無駄に、外道の邪悪な所見を学ぶ事なかれ。

今、形成されて現されている「正法眼蔵」とは「正しくものを見る眼」とは仏の経であるので、あらゆる仏の経とは「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」なのである。

経と「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」は、同一ではないが、全く異なる物でもない。

経と「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」は、自分だけの物でもないし、他人の物でもない。

知るべきである。

「正法眼蔵」、「見る眼」が正しく見る事ができるものは多いが、あなた達は尽（ことごと）くを知を開いて知って明らかにできてはいない。けれども、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を開演すると、あなた達は信じる。

仏の経も、そうなのである。

経は多いが、信じて受け入れて行えるのは、一つの言葉だけであろう。

八万の多数の経を理解できないし(自分が)仏の経の達人ではないからといって、妄（みだ）りに「仏の経は仏法ではない」と言う事なかれ。

あなた達が「仏祖の『骨髄』、『理解』を会得した」と自称して名声が聞こえても、正しい見識によって見れば、文字に依存している後進の者なのである。

経の一つの言葉を受けて保持している者に等しいであろうし、経の一つの言葉を受けて保持している者に及ばない事も有るだろう。

浅はかな理解を頼りにして、仏の正しい仏法の悪口を言う事なかれ。

音声や文字といった色形が、仏の経(の意味という心)よりも功徳が有る事は有り得ない。

音声や文字といった色形は、あなたを惑わし乱すが、あなたは、なお求めて貪る。

仏の経(の意味という心)は、あなたを惑わし乱さない。

仏の経を信じないで仏の経の悪口を言う事なかれ。

それなのに、千年頃から、中国の杜撰な臭い皮袋である似非僧侶は、誤って「祖師の言葉ですら心に置くべきではない。

まして、経は、長く見るべきではないし、用いるべきではない。

ただ身心を『枯木死灰のようにさせる』、『枯木や火が消えて冷えた灰のように無欲にさせる』べきである。

身心を『破れた木の柄杓』や『底がぬけた桶』のようにさせるべきである」と言ってしまっている。

このように言ってしまう輩は、いたずらに無駄に、外道や「天魔」、「魔」、「仏敵」の類の仲間と成ってしまう。

「用いるべきではない」と言っているはずの経の文字だけを求めてしまい用いてしまうので、仏祖の仏法(の意味という心)が、虚しく、似非僧侶にとっては、狂った転倒した代物と成ってしまうのである。

憐れむべきである。

悲しむべきである。

破れた木の柄杓(ひしゃく)や、底がぬけた桶(おけ)も、仏祖の古くからの経なのである。

尽十方界という仏祖の経の数を究めている仏祖は稀(まれ)なのである。

誤って「仏の経は仏法ではない」と言ってしまう人は、仏祖が経を用いた時を見ないし、仏祖が経によって出現する時の学に参入しないし、仏祖と仏の経との親密さと疎遠さの量を知らないのである。

このような杜撰(ずさん)な輩が稲、麻、竹、葦(アシ)の様に多く、「獅子の座」、「仏の座」に上り、人や天人の師として、天下に林のように群れを成している。

杜撰(ずさん)な人は杜撰(ずさん)な人に学ぶので、杜撰(ずさん)ではない道理を知らないし、知らないので願い求めない。

杜撰(ずさん)な人は、暗闇に従って暗闇に入るのである。

憐れむべきである。

杜撰(ずさん)な人は、未だかつて仏法の身心が無いので、身のこなしや心構(こころがま)えが、どうあるべきか知らない。

杜撰(ずさん)な似非(えせ)僧侶は、「有」、「存在」と「空(くう)」、「無」の主旨を明らめていないので、もし人から質問されたら、妄(みだ)りに拳を立てる。けれども、拳を立てる主旨に暗い。

杜撰(ずさん)な似非(えせ)僧侶は、善悪の「道」、「真理」を明らめていないので、もし人から質問されたら、害虫を払うための毛がついた棒である払子を上げる。けれども、払子を上げる主旨を明らめていない。

杜撰(ずさん)な似非(えせ)僧侶は、人の為(ため)の手段を授けようとする時には、臨済義玄の「四料簡」や「四照用」や、雲門文偃の「三句」や、洞山良价の「三路」や「五位」などを挙げて仏道を学び修行する手本としてしまう。

道元の亡き師である天童山の五十祖の如浄は、普段から、杜撰(ずさん)な似非(えせ)僧侶を嘲笑して、「仏を学ぶとは、このようにする事ではない！

仏祖が正しく伝えている大いなる仏道は、多くの物を心に被(こうむ)らすし、身に被(こうむ)らす。

この学に参入すると、『参入して究めよう』と思うと、暇(ひま)が無い。

どんな暇(ひま)が有って、後進の似非(えせ)僧侶の言葉を聞き入れようとするのか？

実に、知るべきである。

(今の)諸方の老人の僧には道心が無くて、仏法の身心の学に参入していない事は明らかである」と言っていた。このように、如浄は、僧達に示していた。

実に、臨済義玄は、黄檗希運の会で後進の者である。

臨済義玄は、黄檗希運に杖での六十打を被(こうむ)った後、終(つい)に、高安大愚の所に行った。

臨済義玄は、高安大愚の老婆心による話によって、従来の日常を照らして顧(かえり)みて、さらに黄檗希運の所に帰った。

臨済義玄の話は雷のように聞こえているので、人々は誤って「黄檗希運の仏法が臨済義玄、独りに伝えられている」と思ってしまった。

あまつさえ、人々は誤って「臨済義玄は、黄檗希運よりも優れている」と思ってしまった。

全く、そうではないのである。

臨済義玄が少しだけ黄檗希運の会にいて僧達に習っていた時、陳尊宿が臨済義玄に仏法を黄檗希運へ質問する事を勧めたが、臨済義玄は何を質問するべきか知らなかった、と言われている。
悟るという一大事を未だ明らめていない時、学に参入しているが、学に暗い僧侶として、地に立って法を聴いていて、どうして、このように呆然とする事ができるだろうか？　いいえ！
臨済義玄は、上々の素質の人ではない事を知るべきである。

また、臨済義玄は師よりも優れようとする志が無かったし、臨済義玄には師を超越する言葉が見聞きできない。

黄檗希運には、師よりも優れている言葉が有るし、師を超越する大いなる知が有る。
黄檗希運は、仏が未だ言わなかった言葉を言い得たし、祖師が未だ会得できていなかった法を会得した。
黄檗希運は、古今を超越している、古代の仏と等しい者なのである。
黄檗希運は、百丈の懐海よりも優れているし、馬祖道一よりも優れている。

臨済義玄には、黄檗希運のような秀でた物が無い。
なぜなら、臨済義玄は、古くから未だ言われなかった言葉を夢にも未だ言った事が無い。
臨済義玄は、ただ、多数の物を会得して一つを忘れてしまい、一つの物に到達して多数の物に煩ったようである。

どうして、臨済義玄の「四料簡」などに仏道の良さが有るとして仏法を学ぶ指針とできるだろうか？　いいえ！

雲門文偃は、雪峰義存の弟子である。
雲門文偃は、人や天人の大いなる師の務めに耐えられるが、なお「学地」、「修行が必要な境地」にいると言える。

臨済義玄と雲門文偃によって仏道の根本を得ようとすると、末（すえ）を愁（うれ）う事に成るだろう。

臨済義玄が「この世」に未だ来ないし、雲門文偃が「この世」に未だ出現していなかった時は、仏祖は何を仏道を学び修行する見本としていたか？
経である！
　このため、知るべきである。
臨済義玄と雲門文偃の家の中には、仏教という仏の家の道の業（わざ）が伝わっていないのである。
臨済義玄と雲門文偃は、根拠とするべき物(である経)が無いので、妄（みだ）りに「四料簡」などのような、でたらめな言葉を説くのである。
臨済義玄と雲門文偃のような輩は、妄（みだ）りに仏の経を軽んじてしまう。
人々は経の軽視に従う事なかれ。

もし仏の経を投げ捨てるべきならば、臨済義玄と雲門文偃をも投げ捨てるべきである。

もし仏の経を用いる事ができなければ、飲むべき水が無いような物であるし、水を汲むべき柄杓も無いような物である。

三十八祖の洞山良价の「三路」や「五位」は「細目」、「詳細な項目」であって、杜撰な輩が知る事のできる境地ではない。

主旨は正しく伝えられ、仏の業を直接的に指し示している。

他の師弟の系譜と等しくないのである。

また、杜撰な輩は、誤って「道教、儒教、仏教は共に、その極致は一致する。(三教一致。)入門の違いが有るだけなのである」と言ってしまう。

また、杜撰な輩は、道教、儒教、仏教を三脚の器の三脚に例えてしまう。

三教一致が宋の時代の中国の諸々の似非僧侶が盛んに話している主旨なのである。

三教一致と言ってしまうので、「似非僧侶の上からは仏法は既に地を引き払って姿を消してしまっている」か、「似非僧侶の上には仏法はかつて微塵も来ていない」と言える。

似非(えせ)僧侶は、妄(みだ)りに仏法が通じる事と塞(ふさ)がる事を言おうとして、誤って「仏の経は役に立たない。祖師の教えには別に伝えられている主旨が有る」と言ってしまう。

なぜなら、似非(えせ)僧侶は、素質が矮小なので、仏道の果てを見れないからである。

「仏の経を用いるべきではない」と言うならば、祖師の経が有る時、用いるのか？　用いるべきではないのか？

祖師の言葉には仏の経のような仏法が多いが、用いるのか？　捨てるのか？

もし誤って「仏の言葉の外(ほか)に祖師の言葉が有る」と言ってしまうならば、誰が祖師の言葉を信じるであろうか？　いいえ！

祖師が祖師として存在するのは、仏の言葉を正しく伝えている事による物なのである。

仏の言葉を正しく伝えない祖師を誰が「祖師である」と言うであろうか？

いいえ！

達磨を崇(あが)め敬(うやま)うのは、二十八祖だからである。

誤って「仏の言葉の外(ほか)に祖師の言葉が有る」と言ってしまうならば、十祖、二十祖と立てられないであろう。

祖師を恭(うやうや)しく敬う理由は、仏の言葉を正統に代々伝えているためであり、仏の言葉が重要だからである。

仏の言葉を正しく伝えない祖師は、どんな「面目」、「立場」が有って、人や天人と見(まみ)えるというのか？

まして、仏を慕う深き志を翻して新たに仏の言葉ではない適わない言葉を話したり伝えたりする(偽の)祖師には従えない。
似非僧侶、杜撰な狂人が、いたずらに無駄に、仏の言葉を軽視するのは、仏の言葉に有る仏法を正しく選び取る事ができないからなのである。
道教と儒教を仏教と並べる愚かさは、悲しむべきだけではなく、罪と成る悪業の因縁と成るし、国土が衰弱する。「仏法僧」という「三宝」が衰退するので。

孔子や老子の言葉は、未だ阿羅漢と同じではない。まして、「等覚」の最高の菩薩や、「妙覚」の仏に及ばない！
孔子や老子の言葉では、わずかに聖者の視るものと聴くものを「天地」、「乾坤」という大いなる事象に、わきまえても、仏の因果を一つの生や多くの生で明らめる事は難しい。
孔子や老子の言葉では、わずかに身心の動静を「無為の為に」、「自然に」わきまえても、尽十方界の真実を「無尽際断に」、「無限の時を断って」明らめる事はできない。
孔子の儒教と老子の道教が仏教よりも劣っている事は、「天と地ほど懸け離れている」という言葉でも言い表せないほどなのである。
妄りに誤って「道教、儒教、仏教は一致する」と言ってしまうのは、仏法の悪口を言う事に成ってしまうし、孔子と老子の悪口を言う事にも成ってしまう。

たとえ孔子や老子の教えに詳細さが有っても、近頃の老人の似非僧侶などが、どうして少しの分でも明らめる事ができるだろうか？　いいえ！

まして、似非僧侶に、万の多数の時期に大いなる権力を執る事ができるだろうか？　いいえ！

孔子にも教訓が有るし、鍛錬が有る。

現在の凡庸な人々は政治をたやすくできはしない。

鍛錬して政治を試みる人は、もういない。

ある微小な塵ですら、他の塵と同じではない。

まして、仏道には奥深さが有り、現在の後進の似非僧侶が、どうして、わきまえ受け入れて理解できるだろうか？　いいえ！

似非僧侶は、仏教も、儒教も、二つ共、明らめていないのに、いたずらに無駄に、「三教一致」という、でたらめな言葉を説いているだけなのである。

宋の時代の中国で、似非僧侶は、称号を名乗り、師と成り、古今を照らして見て恥じ入る事無く、愚かにも仏道について妄りに話す。

「宋の時代の中国の似非僧侶には仏法が有る」と聞き入れる事はできない。

老人の似非僧侶などは、あの人も、この人も、誤って「仏の経は仏道の本意ではない。祖師が伝えている言葉が仏道の本意なのである。祖師が伝えている言葉に特別すぐれた奥深い妙なる言葉が伝わっている」と言ってしまう。

このような言葉は、とても最悪に愚かであり、転倒した狂人の言葉である。

祖師が正しく伝えている言葉には、全く一言も、仏の経の言葉とは異なる特別すぐれた言葉は無いのである。

仏の経と祖師の言葉は同じく、釈迦牟尼仏から正しく伝えられて広められて来ているだけなのである。

ただし、祖師が伝えている言葉は、正統に代々伝えられているだけなのである。

けれども、祖師は仏の経を知っているし、明らめているし、読んでいる！

古代の高徳の僧は、「あなたは経に迷うが、経は、あなたを迷わさない」と言った。

古代の高徳の僧達が経を看（み）た話は多い。

杜撰（ずさん）な似非（えせ）僧侶に向かって言いなさい。

「あなたが言う通り、もし仏の経を投げ捨てるべきならば、仏の心も投げ捨てるべきであろうし、仏の身も投げ捨てるべきであろう。

もし仏の身心を投げ捨てるべきならば、仏の子を投げ捨てるべきであろう。

もし仏の子を投げ捨てるべきならば、仏の言葉を投げ捨てるべきであろう。

もし仏の言葉を投げ捨てるべきならば、祖師の言葉を投げ捨てないのか？！

仏の言葉も、祖師の言葉も、共に投げ捨てれば、似非（えせ）僧侶は一人の髪を剃（そ）った庶民に過ぎない。

誰が『あなたは棒を食らってはいけない』、『あなたは暴力や罰を食らってはいけない』と言うだろうか？　いいえ！

ただ、権力者に、こき使われるだけではなく、閻魔大王に責められるはずである」

宋の時代の中国の老人の似非僧侶などは、権力者からの任命書によって寺の主の僧と成ってしまうので、三教一致のような理に反した狂った言葉を言ってしまう。

現在、善悪をわきまえている人はいない(、と言える)。
独り、道元の亡き師である五十祖の如浄だけが、似非僧侶を嘲笑した。
如浄以外の山の寺の老人の僧などは、(「三教一致が誤っている」と)全く知らない。

「異国の僧侶であれば、明らめている『道』、『真理』が必ず有るだろう」と思うべきではないし、
「大国の帝王の師であれば、到達している所が必ず有るだろう」と思うべきではない。

異国の生者は必ずしも僧の務めに耐えられない。
善い生者は善いし、悪い生者は悪い。
(異国でも、善人は善人であるし、悪人は悪人である。)
法界の、どの三界でも、生者の種類は同様であるはずである。
大国の帝王の師には、必ずしも道に適った人は選ばれない。

帝王は道に適った人を知り難い。帝王は、わずかに、家臣の推挙を聞いて登用するだけなのである。

古今には、道に適った帝王の師もいるが、道に適わない帝王の師の方が多い。

濁った悪い時代に登用されるのは、道に適わない人なのである。

濁った悪い世に登用されないのは、道に適った人なのである。

なぜなら、人々が「人を知る事ができる」時が有るし、人々が「人を知る事ができない」時が有るからである。

黄梅山には昔、神秀という僧がいた事を忘れないべきである。

神秀は、帝王の師であった。

神秀は、帝王の簾の前で法を説いた。

それだけではない。

神秀は、七百人の高徳の僧達の上座にいた。

黄梅山には昔、三十三祖の大鑑禅師が「盧行者」としていた事を信じるべきである。

三十三祖の大鑑禅師は、木こりであったが、寺の雑務を行う在俗者である「行者」に成り、柴の薪の運搬をしなく成ったが、米をつくのを職務とした。

三十三祖の大鑑禅師は卑しい身分を恨めしく思ったであろうが、三十三祖の大鑑禅師が俗を出て僧達を超えて仏法を会得して衣と共に仏法を伝えられたのは、未だかつて聞いた事が無い事であったし、西のインドでも聞いた事

が無い事であって、単独で東の地の中国に残っている世にも稀な優れた行跡である。

黄梅山の七百人の高徳の僧達でも、三十三祖の大鑑禅師に肩を並べられなかった。

天下の、竜や象の様な高徳の僧達でも、三十三祖の大鑑禅師の行跡を辿るのは不可能なようである。

大鑑禅師は、三十三祖の位を嗣いで仏の正統な後継者と成った。

三十二祖の弘忍には「人を知る事ができる」知が有ったので、大鑑禅師は三十三祖と成れた！

このような道理を静かに熟考するべきである。軽率に考える事なかれ。

「人を知る事ができる」力を得る事を願い求めるべきである。

「人を知る事ができない」のは自分や他人にとって大いなる憂いであるし、天下の人々にとって大いなる憂いである。

「人を知る」のに、広く学ぶ事ができる優れた才能は不要である。

「人を知る事ができる見る眼」や「人を知る事ができる力量」を急いで求めるべきである。

もし「人を知る事ができる」力が無ければ、長い年月、この世に沈んでしまうであろう。

そのため、仏道には必ず仏の経が有る事を知り、言葉の意味を広く深く世界という仏の経に学んで、仏道をわきまえる見本とするべきである。

正法眼蔵　仏経

その時、千二百四十三年、秋、越州の吉田県の吉峰寺の庵(いおり)に住んでいて僧達に示した。

無情説法

説法について説法するのは、仏祖の付属について仏祖が形成して現す「公案」、「修行者のための手がかり」なのである。
説法についての説法は、法が説くのである。

(仏)法は、情の有る者ではないし、
情の無い物ではないし、
「有為」、「人為的に作られている物」、「生じたり滅んだりする変化する『この世』のもの」ではないし、
「無為」、「自然のままである物」ではないし、
有為や無為の「因縁」、「原因や『縁(えん)』、『つながり』」ではないし、
「縁(えん)」、「つながり」によって起こる物ではない。

けれども、(仏)法は、鳥の道である空を行かないで、仏達の為(ため)に寄与する。

大いなる仏道が十全に成就する時、説法も十全に成就する。
「法蔵」、「仏法」を付属する時、説法も付属する。
釈迦牟尼仏の「拈華瞬目」の時、説法も、ひねっていたのである。
衣と共に仏法を伝える時、説法も伝えているのである。

このため、諸々の仏祖は同じく、威音王仏以前から説法に見(まみ)えて来て、諸仏以前から説法を本(もと)より行って来ているのである。

「説法は仏祖が道理を作って来ている」とだけ学ぶ事なかれ。
仏祖は説法によって道理を作られて来ているのである。

説法は、わずかに八万四千の門の法蘊を開演するだけではない、無数、無限の門の説法蘊が有る。

「前の仏の説法を後の仏は説法する」として学に参入する事なかれ。
前の仏が来て後の仏に成るわけではないように、説法も前の説法を後の説法とするわけではない。

このため、「法華経」の「方便品」で、釈迦牟尼仏は、「(『過去、現在、未来』の)『三世』の諸仏の説法の『儀式』(、『仕方』)のように、私(、釈迦牟尼仏)も今また、このように『無分別法』(、『声聞、独覚、菩薩という三乗に分けない仏法』、『唯一の仏乗という一乗の仏法』)を説く」と言った。

そのため、他の諸仏が説法を使用するように、諸仏は説法を使用するのである。

他の諸仏が説法を正しく伝えるように、諸仏は説法を正しく伝えるので、古代の仏達から釈迦牟尼仏を含む過去七仏へ正しく伝えられ、過去七仏から現在へ正しく伝えられて、情の無いものによる説法が有るのである。
情の無いものによる説法に、諸仏はいるし、諸々の祖師がいるのである。

「私、道元が今、説いている仏法は、正しく伝えられていない新しい物である」と学ぶ事なかれ。
「古くから正しく伝えられている仏法は、古巣の死んだ霊の穴である」と証する事なかれ。

唐の時代の中国で、ある僧が、ある時、長安の光宅寺の大証国師と呼ばれる南陽慧忠に、「情の無いものもまた説法を理解できるのか否か?」と質問した。
南陽慧忠は、「(情の無いものは)燃えるように盛んに常に説法する。(情の無いものによる)説法が止(や)む事は無い」と言った。
ある僧は、「私は、どうして(情の無いものによる説法を)聞く事ができないのですか?」と言った。
南陽慧忠は、「あなた自身は聞く事ができなくても、他の者が聞く事ができるのを妨げる事はできない」と言った。
ある僧は、「一体、どんな人ならば聞く事ができ得るのですか?」と言った。
南陽慧忠は、「諸々の聖者は聞く事ができ得る」と言った。
ある僧は、「和尚様、南陽慧忠様もまた聞く事ができるのですか?」と言った。
南陽慧忠は、「私は聞く事ができない」と言った。
ある僧は、「和尚様、南陽慧忠様は、聞く事ができないならば、どうして情の無いものが説法を理解できる事を知っているのですか?」と言った。

南陽慧忠は、「幸いにも、私は聞く事ができない。もし私が聞く事ができたら、(私は)諸々の聖者と等しい事に成り、あなたは私の説法を聞く事ができなかったであろう」と言った。

ある僧は、「そうであるならば、全ての生者は(、情の無いものによる説法を)分からない事に成ります」と言った。

南陽慧忠は、「私は全ての生者の為に説いている。諸々の聖者の為には説かない」と言った。

ある僧は、「(南陽慧忠様の説法を)全ての生者は聞いた後、どう成りますか？」と言った。

南陽慧忠は、「生者ではなく成る」と言った。

情の無いものによる説法の学に参入しようとする初心者や後進の者は、この南陽慧忠の話を、直ぐに、当然、学ぶ事に勤めるべきである。

「(情の無いものは)燃えるように盛んに常に説法する。(情の無いものによる)説法が止む事は無い」と有り、「常に」とは、諸々の時の、わずかな時である。

「(情の無いものによる)説法が止む事は無い」とは、説法が既に出現しているようであれば必ず「止む事は無い」のである。

「情の無いものによる説法の仕方は、必ず、情の有る者のようであろう」として学に参入するべきではない。

「情の有る者の音声や、情の有る者による説法の仕方のようであるべきなので、情の有る者の世界の音声を奪って、情の無いものの世界の音声としようとする」のは、仏道ではない。

情の無いものによる説法は必ずしも音声という「塵（ちり）」、「汚れ（けが）」ではない。例えば、情の有る者による説法は音声という「塵（ちり）」、「汚れ（けが）」ではないような物なのである。

情の有る者とは、どういった者であるのか？　情の無いものとは、どういったものであるのか？　と自問自答したり他者に質問したりして鍛錬して学に参入するべきである。

そのため、情の無いものによる説法の仕方は、どういった物だろう？　と明確に詳細に心に留めて学に参入するべきである。

愚かな人は想像して誤って「樹の林が枝を鳴らし、葉や華が開いて落ちるのを情の無いものによる説法である」と認めてしまうが、仏法を学んだ人ではない。

もし、そうであれば、誰でも、情の無いものによる説法を知っているであろうし、誰でも、情の無いものによる説法を聞く事ができるであろう！

反省して修行するべきである。

情の無いものの世界には草木や樹の林が有るのか無いのか？

情の無いものの世界は情の有る者の世界に交わっているのか否か？

それなのに、草木や瓦礫を認めて情の無いものとする人は、遍く学んでいないのである。

情の無いものを認めて草木や瓦礫とする人は、十分に会得していないのである。

たとえ今、人間の所見の草木などを認めて情の無いものにしようとしても、草木なども凡人の思慮が測り知る事ができるものではない。

なぜなら、天上の樹の林と、人間の樹の林は遥かに差異が有る。

中国に生えているものと、僻地に生えているものは、同じではない。

海中の草木と、山間の草木は皆、同じではない。

まして、空に生える樹木が有るし、雲に生える樹木が有る。

「風」や「火」などの中に生じて成長する百草や万の無数の樹は、情の有るものと学ぶべきであるものが有り、情の無いものと認められないものが有る。

草木のうち人や動物のようなものが有る。

草木が、情の有る者であるのか？　情の無いものであるのか？　を未だ明らめる事ができないのである。

まして、仙人の世界の樹や石や華や果実や湯や水などは、見ると激しく疑う事ができないが、説明しようとすると難しい！

ただ、わずかに、中国一国の草木を見て、日本一国の草木に慣れて習って、「十方の尽界も同様であるだろう」と推測する事なかれ。

南陽慧忠は、「諸々の聖者は聞く事ができ得る」と言った。

言い換えると、「情の無いものが説法する会では、諸々の聖者は地に立って聴く」のである。

諸々の聖者と、情の無いものは、「聞く事」を形成して現し、「説く事」を形成させて現させる。

情の無いものは既に諸々の聖者のために説法するが、情の無いものは聖者であるのか？　凡人であるのか？

また、情の無いものによる説法の仕方を明らめ終わったならば、「聖者が聞いた物とは、このような物である」と体得して通達するべきである。

体得して通達したら、聖者の境地を測り知るべきである。

さらに、凡人や聖者を超越する、天へ通じる道の様子の学に参入するべきである。

南陽慧忠は、「私は聞く事ができない」と言った。

この言葉も「容易に会得できる」と思う事なかれ。

凡人や聖者を超越しているので「聞く事ができない」のか？

凡人や聖者という巣窟を撃破しているので「聞く事ができない」のか？

このように鍛錬して、この言葉の理解を形成させて現させるべきである。

南陽慧忠は、「幸いにも、私は聞く事ができない。もし私が聞く事ができたら、(私は)諸々の聖者と等しい事に成る」と言った。

この例えは、一つや二つの事を言っているだけではないのである。

「幸いにも、私は凡人や聖者ではない」のか？

「幸いにも、私は仏祖である」のだろうか？

仏祖は、凡人や聖者を超越しているので、聞く物が、諸々の聖者が聞く事ができる物と同一ではない。

南陽慧忠の「あなたは私の説法を聞く事ができなかったであろう」という言葉の道理を修理して、諸々の仏や諸々の聖者の「菩提」、「覚」を料理するべきである。

南陽慧忠の言葉の主旨とは、「情の無いものによる説法は、諸々の聖者は聞く事ができ得る。南陽慧忠の説法は、この、ある僧は聞く事ができ得る」なのである。

この道理の学に参入して鍛錬して長い月日を過ごして行くべきである。(原文は「この道理を参学功夫の日深月久とすへし」。)

南陽慧忠に質問するべきである。

「(南陽慧忠の説法を)全ての生者が聞いた後の事は質問しない。(南陽慧忠の説法を)全ての生者が聞いた時、どう成るのか?」

悟本大師と呼ばれる三十八祖の洞山良价は、三十七祖の雲巌曇晟の所に行って、「情の無いものによる説法は、どんな人が聞く事ができ得るのですか?」と質問した。

雲巌曇晟は、「情の無いものによる説法は、情の無いものは聞く事ができ得る」と言った。

洞山良价は、「和尚様、雲巌曇晟様は聞く事ができ得るのか否か?」と言った。

雲巌曇晟は、「もし私が聞く事ができれば、あなたは私の説法を聞く事ができないであろう」と言った。
洞山良价は、「もし、そうであるならば、私は和尚様、雲巌曇晟様の説法を聞く事ができない」と言った。
雲巌曇晟は、「私の説法ですら、あなたは聞く事ができないならば、まして、情の無いものによる説法も、あなたは聞く事ができない！」と言った。
洞山良价は、詩で、雲巌曇晟に、「これはまた、とても不思議である。これはまた、とても不思議である。情の無いものによる説法は不思議である。もし耳で聴けば、終に理解は難しいであろう。眼で音声を聞いて、まさに、知る事ができ得るであろう」と言った。

洞山良价の「情の無いものによる説法は、どんな人が聞く事ができ得るのか？」という言葉の道理をよく一つの生や多くの生で明確に詳細に鍛錬するべきである。
洞山良价の質問は、さらに、言い表す功徳を備えている。
洞山良价が言い表した言葉には「皮肉骨髄」、「理解」が有り、以心伝心だけではない。
以心伝心は初心者や後進の者の理解なのである。
衣を挙げて正しく伝えるし、仏法をひねって正しく伝える、「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」が有る。
どうして今の人が短い月日の鍛錬によって究める事ができるだろうか？
（原文は「いまの人いかてか三秋四月の功夫に究竟することとあらん」。）

洞山良价は、かつて南陽慧忠の「情の無いものによる説法は、諸々の聖者は聞く事ができ得る」という言葉の主旨を見聞きしているが、今、さらに「情の無いものによる説法は、どんな人が聞く事ができ得るのか？」と質問しているのであるが、南陽慧忠の言葉を肯定しているとするのか？　南陽慧忠の言葉を否定しているとするのか？

洞山良价の言葉は、質問であるとするのか？　言い表しているとするのか？

もし洞山良价が南陽慧忠の言葉を全て否定しているのであれば、どうして洞山良价は、このように言うだろうか？

もし洞山良价が南陽慧忠の言葉を全て肯定しているのであれば、どうして洞山良价は、このように言うのか理解できるだろうか？

雲巌曇晟は、「情の無いものによる説法は、情の無いものは聞く事ができ得る」と言った。

この、「血脈」、「血筋（ちすじ）のように代々伝えられている説法」を正しく伝えられて、(古い)身心を脱ぎ落とす学への参入が有るべきである。

「情の無いものによる説法は、情の無いものは聞く事ができ得る」と言うのは、「諸仏の説法は、諸仏は聞く事ができ得る」事の性質と相なのである。

情の無いものによる説法を聴いて理解して取った者達は、たとえ情の有る者であっても、たとえ情の無いものであっても、たとえ凡人であっても、たとえ賢者や聖者であっても、情の無いものなのである。

この性質と相によって、古今のものの真偽を批判するべきなのである。

たとえ西のインドから来ても、正しく伝えられている真の祖師ではない人は、用いるべきではない。

たとえ千万年前から習い学ぶ事が連綿(れんめん)であっても、正統に代々伝えられていない物は、嗣(つ)ぎ続けるのが難しい。

今、正しく伝えられている仏法が既に東の地の中国に通達している。

そのため、真偽の通じている事と塞(ふさ)がっている事は、わきまえやすい。

たとえ「生者による説法は、生者は聞く事ができ得る」という言葉を聴いても、諸々の仏祖の「骨髄」、「理解」を受けるべきである。

雲巌曇晟の言葉を聞いて理解して取り、南陽慧忠の言葉を聴いて理解して取って、まさに足し引きすれば、「諸々の聖者は聞く事ができ得る」という言葉の「諸々の聖者」は「情の無いもの」なのであるし、

「情の無いものは聞く事ができ得る」という言葉の「情の無いもの」は「諸々の聖者」なのである。

情の無いものが説くのは、情の無いものなのである。情の無いものによる説法は、情の無いものであるので。

そのため、情の無いものが説法するのであるし、

説法は情の無いものなのである。

洞山良价は、「もし、そうであるならば、私は和尚、雲巌曇晟の説法を聞く事ができない」と言った。

洞山良价の「もし、そうであるならば」という言葉は、「情の無いものによる説法は、情の無いものは聞く事ができ得る」という言葉の主旨を挙げて、ひねっているのである。

「情の無いものによる説法は、情の無いものは聞く事ができ得る」という道理によって、「私は和尚、雲巌曇晟の説法を聞く事ができない」のである。

この時、洞山良价は、情の無いものによる説法の末席に接するだけではなく、情の無いものの為(ため)に説法する志が現れて天を突いたのである。

ただ、情の無いものによる説法を体得して通達しただけではなく、情の無いものによる説法を聞く事ができる、聞く事ができないを体得して究めている。

進んで、情の有る者による説法を説く、説かない、過去に説いた、現在に説く、未来に説く事も体得して通達しているのである。

さらに、聞く事ができる説法、聞く事ができない説法の「これは情の有る者による説法である」、「これは情の無いものによる説法である」という道理を明らめ終わっている。

(仏)法を聞くとは、ただ「耳根」、「耳」または「聴覚」や、「耳識」、「耳で聞いた音声の理解」という境地だけではない。

父と母から生まれる前や、威音王仏以前や、「尽未来際」、「未来までの時」と言うより「無尽未来際」、「『無尽』、『無限』の未来までの時」までの、力を挙げて、心を挙げて、体を挙げて、言葉を挙げて、(仏)法を聞くのである。

身を受ける前や、心を受けた後に、(仏)法を聞く事が有るのである。

これらの(仏)法を聞く事は共に、利益を得る事が有る。

「心識に繋(つな)げられなければ、(仏)法を聞く利益は無い」と言う事なかれ。

(原文は「心識に縁せられされは聞法の益あらすといふことなかれ」。)

(古い)心が滅び身が死んで無く成った者も、(仏)法を聞いて利益を得る事ができる。

(古い)心が無いし身が無い者も、(仏)法を聞いて利益を得る事ができる。

諸々の仏祖は、必ず、古い身心が無く成る時を経て、仏祖と成るのである。

(仏)法の力が身心に接するのを、凡人の思慮が、どうして覚知し尽す事ができるだろうか？　いいえ！　覚知できない！

身心の境界線を、自ら明らめ尽す事はでき得ないのである。

(仏)法を聞く功徳は、身心の境地に種を撒くが、朽ちる時は無く、終に時と共に成長して、果実を形成するのは必然な物なのである。

愚かな人が、誤って「たとえ仏法を聞く事を怠らなくても、理解に進歩が無く、記憶に自信が無いのは、利益が無いだろう。

人や天人の身心を挙げて、広く記憶して多く学ぶのが、最重要と成るだろう。

即座に忘れ、説法の場から退席すると呆然としているようでは、どんな利益が有るだろうか？　いいえ！　利益は無い！」と思ってしまい、

誤って「どんな学ぶ功徳が有るだろうか？　いいえ！　学ぶ功徳は無い！」と言ってしまうのは、

正しい師に会わず、正しい師を見ないからである。

「(仏法を)正しく伝えられている『面授』、『言い表せないものを顔と顔を合わせて授かる事』が無いものは正しい師ではない」と言われている。

(仏法を)仏から仏へ正しく伝えられて来ているものが、正しい師なのである。

愚かな人が言う「心識に記憶されて、一時、忘れない」とは、(仏)法を聞く功徳が少し心識を覆っている時なのである。

(仏)法を聞く功徳が心識を覆っている時は、身を覆うし、身を受ける前を覆うし、

心を覆うし、心を受ける前を覆うし、心を受けた後を覆うし、

原因や、「縁(えん)」、「つながり」や、報いや、業(わざ)や、相や、性質や、実体や、

力を覆うし、

仏を覆うし、祖師を覆うし、

自分や他者を覆うし、

「皮肉骨髄」、「理解」などを覆う功徳が有る。

言説を覆うし、「坐臥」、「坐ったり横たわったりする事」などを覆う功徳が形成されて現されて、「天に満ち、全て統治している」のである。

実に、このような(仏)法を聞く功徳は容易には知る事ができないが、仏祖の大いなる集まりに集まって、「皮肉骨髄」、「理解」に参入して究めようとすると、説法の功徳の力が引き寄せない時は無いし、(仏)法を聞く法力を被(こうむ)らない場所は無いのである。

このようにして、「時」、「劫波(カルパ)」、「劫」を進退させて、結果が形成されて現されるのを見るのである。

「広く記憶して多く学ぶ」のを必ずしも投げ捨てるべきではないが、「広く記憶して多く学ぶ」という一隅のみを重要とするわけではないのである。

学に参入している者は、これを知るべきである。
洞山良价は、これを体得して通達していたのである。

雲巌曇晟は、「私の説法ですら、あなたは聞く事ができないならば、まして、情の無いものによる説法も、あなたは聞く事ができない！」と言った。
これは、洞山良价が、たちまち証の上になお証に適う(かな)のを証していく事を形成して現すのを、雲巌曇晟が、その時、心中を打ち明けて、法の父である祖師の「骨髄」、「理解」の印を証しているのである。
雲巌曇晟の「私の説法ですら、あなたは聞く事ができない」という言葉は、凡庸な人が「私の説法ですら、あなたは聞く事ができない」と言うのと同じではない。
「たとえ情の無いものによる説法が色々な手段であっても、情の無いものによる説法の色々な手段の為(ため)に配慮するべきではない」と証明しているのである。
この時の(仏)法の相続は、真に奥義なのである。
凡人や聖者の境地の者では、容易には及ぶ事ができないし、見る事ができない。

洞山良价は、その時、詩に収めて、雲巌曇晟に、「情の無いものによる説法の不思議さは、これはまた、とても不思議である。これはまた、とても不思議である」と言った。
そのため、情の無いものや、情の無いものによる説法は共に、不思議なのである。

洞山良价の言葉の「情の無いもの」とは、「何ものである」とするのか？
「洞山良价の言葉の『情の無いもの』とは、凡人や聖者ではないし、情の有る者や情の無い物ではない」として学に参入するべきである。
凡人や聖者や、情の有る者や情の無い物や、説く、説かないは共に、不思議ではない境地なのである。
洞山良价の言葉の「情の無いものによる説法」は、「不思議であり、これはまた、とても不思議であり、これはまた、とても不思議である」のである。
洞山良价の言葉の「情の無いものによる説法」には、凡人や賢者や聖者の智慧や心識は及ぶ事ができない。
洞山良价の言葉の「情の無いものによる説法」は、天人達や人の数え量る事とは無関係なのである。

「もし耳で聴けば、終（つい）に理解は難しいであろう」とは、
たとえ天耳通であっても、たとえ世界や時に及ぶ菩薩の「法耳」であっても、耳で聴こうとすれば、「終（つい）に理解は難しい」のである。
壁の上に耳が有っても、棒の先に耳があっても、情の無いものによる説法は理解できないのである。
なぜなら、情の無いものによる説法は、音声という「塵（ちり）」、「汚れ（けが）」ではないからである。
耳で聴く場合は無いわけではないが、百、千の無数の劫の鍛錬を費やしても、「終（つい）に理解は難しい」のである。
既に、音声や色形の外の、ある言葉の身のこなしなのである。
凡人や聖者の近くの巣窟ではないのである。

「眼で音声を聞いて、まさに、知る事ができ得るであろう」。

この言葉を個々の人々は誤って「今、人の眼に見える草木や華や鳥の往来を『眼で音声を聞く』と言うのだろう」と思ってしまう。

この所見は更なる誤りである。

全く仏法ではない。

仏法では、このように誤って言ってしまう道理は無い。

洞山良价の「眼で音声を聞く」という言葉の学に参入するには、情の無いものによる説法の音声を聞く所が眼なのである。

情の無いものによる説法の音声が現れる所が眼なのである。

眼をさらに広く参入して究めるべきである。

眼で聞く音声は耳で聞く音声と等しく成り得るので、眼で聞く音声は耳で聞く音声と等しくないのである。

「眼に耳が有る」として学に参入するべきではない。

「眼は耳である」として学に参入するべきではない。

「眼の中に音声が現れる」として学に参入するべきではない。

古代の人は、「尽十方界は、『沙門』、『修行者』の単眼である」と言った。

「『単眼』という『眼』で音声を聞けば、洞山良价の言葉の『眼で音声を聞く』事と成るのだろう」と推測するべきではない。

たとえ古代の人が言う「尽十方界は、単眼である」という言葉を学んでも、「尽十方は、単眼である」なのである。

さらに、千手の頭の眼が有るし、

千の「正法眼」、「正しくものを見る眼」が有るし、

千の耳の眼が有るし、

千の舌先の眼が有るし、

千の心の頭の眼が有るし、

千の「通心」、「全心」の眼が有るし、

千の「通身」、「全身」の眼が有るし、

千の棒の先の眼が有るし、

千の身を受ける前の眼が有るし、

千の心を受ける前の眼が有るし、

千の死中の死の眼が有るし、

千の活中の「活眼」、「真理を見通す見識」が有るし、

千の自己の眼が有るし、

千の他者の眼が有るし、

千眼の頭の眼が有るし、

千の学に参入する見る眼が有るし、

千の縦の眼が有るし、

千の横の眼が有る。

そのため、「尽くの眼が、尽くの世界である」と学んでもなお、眼を体得して究めていないのである。

ただ、情の無いものによる説法を聞く事を眼で参入して究める事を急務とするべきである。

洞山良价の言葉の主旨は「耳では、情の無いものによる説法を理解し難い」なのであり、「眼は音声を聞く」のである。

さらに、「通身」、「全身」は音声を聞く事が有るし、「遍身」、「体中」は音声を聞く事が有る。

たとえ眼で音声を聞く事を体得して究めなくても、雲巌曇晟の言葉である「情の無いものによる説法は、情の無いものは聞く事ができ得る」事を体得して通達するべきであるし、脱ぎ落とすべきである。

雲巌曇晟の道理が伝わっているので、道元の亡き師である、古代の仏と等しい、天童山の、五十祖の如浄は、「夕顔の蔓が(葛)藤のように夕顔に巻きつく」と話した。

如浄の言葉は、三十七祖の雲巌曇晟の「正眼」、「正しくものを見る眼」が伝えているし、「骨髄」、「理解」が伝えている、情の無いものを説法しているのである。

如浄の言葉は、「一切の全ての説法は情の無いものである」道理によって、情の無いものによる説法と成る。

如浄の言葉は、典拠と成る故事なのである。

情の無いものは、情の無いものの為に説法するのである。

何者を「情の無いもの」と呼んで「情の無いもの」と為すのか？

知るべきである。

情の無いものによる説法を聴く者を「情の無いもの」と呼んで「情の無いもの」と為している。

何者を「説法」と呼んで「説法」と為すのか？

知るべきである。

「『私は情の無い者である』と知らない者」を「説法」と呼んで「説法」と為している。

（舒州の投子山の慈済大師と呼ばれる投子大同は、翠微無学の仏法を嗣いだ。）

（明覚大師と呼ばれる雪竇重顕は、「投子大同は、古代の仏と等しい」と言った。）

ある僧が、ある時、投子大同に、「情の無いものによる説法とは、どういった物でしょうか？」と質問した。

投子大同は、「悪口を言うなかれ」と言った。

この投子大同の言葉は、正しく、古代の仏の「法謨」、「計（はか）られている法」であるし、代々の祖師達の「治象」、「治（おさ）まっている形」である。

情の無いものによる説法や、情の無いものについての説法などは、「悪口を言うなかれ」なのである。

知るべきである。

情の無いものによる説法は、仏祖の「総章」、「草の屋根の宮殿」なのである。（堯と舜が政治を行った宮殿は、屋根が草であり、「総章」と名づけられた。）

（情の無いものによる説法は、）臨済義玄や徳山宣鑑の輩は知る事ができない。

（情の無いものによる説法は、）独り仏祖である者だけが参入して究めるのである。

正法眼蔵　無情説法

その時、千二百四十三年、越州の吉田県の吉峰寺にいて僧達に示した。

法性

経典によってか、善知識を持つ人々によって、学に参入すると、師無しで独りで悟るのである。

師無しで独りで悟るのは、「法性」、「法の本性」の仕業（しわざ）なのである。

たとえ生まれながらにして知っていても、必ず師を訪ねて仏道を尋ねるべきである。

たとえ生まれながらにして知っていなくても、必ず鍛錬して仏道をわきまえるべきである。

(多かれ少なかれ、)どの個人も生まれながらに知っている！

仏という結果である悟りに至るまでも、経典によってか、善知識を持つ人々によって、学ぶのである。

知るべきである。

経典か善知識を持つ人々に出会って法性三昧を得る事を「法性三昧に出会って法性三昧を得る生まれながらの知」と言うのである。

「法性三昧に出会って法性三昧を得る生まれながらの知」は、「宿住智」、「宿命智」、「前世の知」を得るし、三明を得るし、無上普遍正覚を証する。

「生まれながらの知」に出会って「生まれながらの知」を習い学ぶのである。

「師がいなくても得られる知」や「自然に得られる知」に出会って「師がいなくても得られる知」や「自然に得られる知」を正しく伝えるのである。

もし生まれながらにして知っていなければ、経典か善知識を持つ人々に出会っても、法性を聞く事ができ得ないのであるし、法性を証する事ができ得ないのである。

大いなる仏道は、人が水を飲んで冷たさと暖かさを自分で知るような道理ではないのである。

一切の全ての諸仏、一切の全ての菩薩、一切の全ての生者は皆、「生まれながらの知」の力によって、一切の全ての法性の大いなる道を明らめるのである。

経典か善知識を持つ人々によって法性の大いなる道を明らめる事を「自ら法性を明らめる」とする。

経典は、法性であるし、自己である。

善知識を持つ人々は、法性であるし、自己である。

法性は、善知識を持つ人々であるし、自己である。

法性は自己であるので、外道や「魔」、「仏敵」の仲間が誤って計っている自己ではないのである。

法性には、外道や「魔」、「仏敵」の仲間はいない。

法性は、ただ、粥（かゆ）を食べるし、御飯を食べるし、茶を点じるだけなのである。

それなのに、二、三十年の長い年月、学んでいると自称する者は、法性についての話を見聞きしても呆然としたまま一生を過ごしてしまう。

寺や林で十分に坐禅していると自称して「『曲木』の『牀』」、「『曲彔』という『椅子』」に上る者は、法性の音声を聞いても、法性の色形を見ても、身心が依り所とする環境としての報いである「この世」と過去の行いの正に報いである身心を、普通に、紛然としている乱雑としている穴として昇降するだけなのである。

そのような、ありさまであるのは、「今、見聞きしている三界、十方が崩落した後で、法性は現れるだろう。法性とは今の森羅万象ではない」と誤って計っているからなのである。

法性の道理とは、そのようではない。

森羅万象と法性は、同じである、異なる、といった論理を遥かに超越しているし、

離れている、離れていない、といった話を超越しているし、

過去、現在、未来ではないし、

「断常」、「断見と常見」、「『死ぬと身体が断滅するので因果や善悪の言動の報いは無いという誤った見解』と『死後も人の自我は不滅であるという誤った見解』」ではないし、

「色受想行識」という「五蘊」ではないので、法性なのである。

洪州の江西の大寂禅師と呼ばれる馬祖道一は、「一切の全ての生者は、無量の劫の昔から、法性三昧を出ていない。全ての生者は、長く法性三昧の中に存在していて、衣を着たり、御飯を食べたり、話したり、応（こた）えたり、『眼耳鼻舌身意』という『六根』を運用したり、一切の全ての行為をするのも、尽（ことごと）く、法性なのである」と言った。

馬祖道一が言っている法性とは、法性が言っている法性なのである。

馬祖道一と同じく法性に参入する事は、法性と同じく法性に参入する事に成る。

既に聞いている事が有るので、言い表す事が有る！

法性は馬祖道一に乗っているのである。

人が御飯を食べる時、御飯も人を食べるのである。

法性から今まで、法性三昧をかつて出ていないのである。

法性より後に、法性を出ていないし、
法性より前に、法性を出ていない。

法性と無量の劫は、法性三昧なのである。

法性を「無量の劫」と言うのである。

そのため、今の「ここ」は、法性なのであるし、
法性は、今の「ここ」なのである。

衣を着たり、御飯を食べたりするのは、法性三昧が、衣を着たり、御飯を食べたりするのである。

衣は、法性が形成して現しているのであるし、
御飯は、法性が形成して現しているのであるし、
食べる事は、法性が形成して現しているのであるし、
着る事は、法性が形成して現しているのである。

もし、衣を着ず、御飯を食べず、話さず、応（こた）えず、「眼耳鼻舌身意」という「六根」を運用せず、一切の全ての行為をしなければ、法性三昧ではないし、法性に入っていないのである。

今の言葉が形成されて現されているのは、諸仏が法性を伝授して釈迦牟尼仏にまで法性が到達し、諸々の祖師達が法性を正しく伝えて馬祖道一にまで法性が到達しているからである。

仏から仏へ、祖師から祖師へ、法性を正しく伝えて授けて、法性三昧に正しく伝えている。

仏から仏へ、祖師から祖師へ、法性に入らないで、法性を魚の様に活発に成らせる。

文字だけの霊感が無い経典の似非学者が、たとえ法性について話しても、馬祖道一の法性ではない。

法性を出ていない全ての生者による、法性に存在しないようにしようとする力は、たとえ得る所が有っても、法性の新たな三、四枚に過ぎないのである。

法性に存在しないようにしようと、話したり、応えたり、「眼耳鼻舌身意」という「六根」を運用したり、一切の全ての行為をするのは、法性なのである。

無量の劫の月日は、法性の経歴なのである。現在と未来もまた同様である。

身心の量を身心の量として、「法性に遠い」と思量する思量は、法性なのである。

身心の量を身心の量とせずに、「法性ではない」と思量する思量は、法性なのである。

思量と、「不思量」、「今は思考できない思考」は共に、法性なのである。

「『性』、『性質』と言うのであれば、水も流れて通う事ができないし、樹も繁栄したり枯れたりできない」と学ぶ人は外道なのである。

「法華経」の「方便品」で、釈迦牟尼仏は、「ありのままの相、ありのままの性質」と言った。

そのため、華が開き、葉が落ちるのは、ありのままの性質なのである。

それなのに、愚かな人は誤って「法性の世界には、華が開き、葉が落ちる事は有り得ない」と思ってしまう。

愚かな人は、一時、自分の疑問を他人に質問するべきではない。

あなたの疑問を、説明を模倣して、説明に変えなさい。

説明に変えた自分の疑問を、他人の説明のように挙げて、三回くり返して、参入して究めるべきである。

そうすれば、自分の疑問から脱出できるだろう。

従来の思量は、誤った思量ではなく、ただ、明らめていない時の思量なのである。

明らめた時、従来の思量を誤りにするわけではない。

華が開き葉が落ちる事は、自然に、華が開き葉が落ちる事なのである。

「法性に華が開き葉が落ちる事は有り得ない」と思量できるのは、法性なのである。

模倣を脱ぎ落として来ている思量なのである。

このため、法性のような思量なのである。

法性についての思量を揮うと、このような「面目」、「有様」に成るのである。

馬祖道一の「尽く、法性なのである」という言葉は真に八、九割の言葉であり、馬祖道一が未だ言わなかった言葉は多い。

馬祖道一は、「一切の全ての法性は、法性を出ていない」と言わなかったし、

「一切の全ての法性は、尽く、法性なのである」と言わなかったし、

「一切の全ての生者は、生者を出ていない」と言わなかったし、

「一切の全ての生者は、法性の少しの部分なのである」と言わなかったし、

「一切の全ての生者は、一切の全ての生者の少しの部分なのである」と言わなかったし、

「一切の全ての法性は、全ての生者の少しの部分なのである」と言わなかったし、
「半人前の生者は、半人前の法性なのである」と言わなかったし、
「全ての生者には無い物が、法性なのである」と言わなかったし、
「法性は、生者ではない」と言わなかったし、
「法性は、法性を脱出する」と言わなかったし、
「生者は、生者を脱ぎ落とす」と言わなかった。

馬祖道一は、「全ての生者は、法性三昧を出ていない」としか言わなかった。

馬祖道一は、「法性は、生者三昧を出ていない」と言わなかったし、
「法性三昧は、生者三昧を出入りする」と言わなかった。

まして、馬祖道一は、「法性は、仏と成る」と言わなかったし、
「生者は、法性を証する」と言わなかったし、
「法性は、法性を証する」と言わなかったし、
「情の無いものは、法性を出ていない」と言わなかった。

馬祖道一に、「何ものを生者と呼んで生者とするのか？」と質問するべきである。

もし法性を生者と呼んで生者とすれば、「何ものかが、どの様にかして来ている」なのである。

もし生者を生者と呼んで生者とすれば、「ある物を似ている物によって説明しても、言い当てられない」なのである。

速やかに言いなさい。速やかに言いなさい。

正法眼蔵　法性

時に、千二百四十三年、冬の初め、越州の吉峰精舎にいて僧達に示した。

陀羅尼

学に参入する見る眼が明らかな人は、「正法眼」、「正しくものを見る眼」も明らかなのである。

「正法眼」、「正しくものを見る眼」が明らかなので、学に参入する見る眼が明らかである事を得るのである。

「学に参入する見る眼の明らかさと、正しくものを見る眼の明らかさの、相互関係」という「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」を正しく伝えられる事は、必然的に、大いなる善知識を持つ人々に見え(まみ)る力に成るのである。

大いなる善知識を持つ人々に見え(まみ)る事は、大いなる「因縁」、「原因と『縁(えん)』、『つながり』」なのであるし、「大陀羅尼」、「大いなる真理の保持」なのである。

「大いなる善知識を持つ人々」とは、仏祖なのである。

必ず仏祖の弟子に成って慎(つつし)んで勤めるべきである。

仏祖である師に、茶を捧げたり、茶を点じたりすると、心の要が形成されて現されるし、「神通」、「理解」が形成されて現される。

（原文は「擎茶来、点茶来、心要現成せり、神通現成せり」。）

仏祖である師に、水を注いだり、水を流したりすると、知覚の対象に動揺しなく成るし、隣の部屋で理解するように成る。

（

原文は「盥水来、瀉水来、不動著境なり、下面了知なり」。

「下面」は「隣の部屋」を意味する。

「正法眼蔵」の「神通」で、香厳の智閑は隣の部屋で理解していた。

）

また、仏祖の心の要の学に参入するだけではなく、仏祖の心の要の中の一、二人の仏祖に出会うのである。

仏祖の「神通」、「理解」を受用するだけではなく、「神通」、「理解」の中の七、八人の仏祖を会得するのである。

そのため、あらゆる仏祖の心の要は、「仏祖である師に弟子として仕える」という一(ひと)ひねりに究め尽される。

あらゆる仏祖の「神通」、「理解」は、「仏祖である師に弟子として仕える」という一束に究め尽される。

このため、仏祖に見(まみ)えるのに、天の華や天の香を捧げるのは、正しくないわけではないが、

「三昧陀羅尼」、「三昧の保持」をひねって、仏祖に見(まみ)えて、何ものかを捧げるのが、仏祖の法の子孫なのである。

ところで、「大陀羅尼」、「大いなる真理の保持」とは、「人事」、「人が可能な事」なのである。

「人事」、「人が可能な事」とは、「大陀羅尼」、「大いなる真理の保持」なのである。

そのため、仏祖に見(まみ)えると、「人事」、「人が可能な事」が形成されて現されるのに出会うのである。

「人事」という言葉は、中国の言葉を本(もと)として、世俗に長く流通しているが、(「人事」という言葉の正しい意味は、)梵天から伝わっておらず、西のインドから伝わっておらず、仏祖が正しく伝えている。

人事とは、音声や色形の境地ではないのであり、威音王仏の前後を論じる事なかれ。

「人事」、「人が可能な事」とは、師に焼香して礼拝する事なのである。

出家の本師か、仏法を伝えてくれた本師がいる。

仏法を伝えてくれた本師が出家の本師でもある事も有る。

出家の本師か、仏法を伝えてくれた本師に、必ず、帰依して留まって見(まみ)える事が、師の所へ行って質問する事の「陀羅尼」、「保持」と成るのである。

その時、その時を虚(むな)しく過ごさず、師のそばで仕えるべきである。

安居の最初と最後に、「冬年」、「冬至と、毎年の最初の日」に、毎月の最初の日に、毎月の十五日に、必ず、師に焼香して礼拝する。

師に焼香して礼拝する作法は、朝食前か朝食後を、師に焼香して礼拝する時としている。

身なりを整えて師の所へ行く。

「身なりを整える」とは、袈裟を着て、坐具を持って、履物と靴下を整えて、一欠片の沈香や浅香などを携帯して、師の所へ行く事である。

師の前へ行って、合掌し低頭し安否を尋ねる。

師のそばに仕えている僧は、その時、香炉を(台に)備えつけ、明かりを立てる。

もし師が椅子(イス)に座っていれば、焼香する。

もし師が帳(とばり)の奥にいれば、焼香する。

師が横たわっている場合か、朝食を食べている場合か、その他の似たような場合は、焼香する。

もし師が地に立っていれば、「和尚様、座ってください」と言って合掌し低頭する。

「和尚様、御自由になさってください」と、お願いする事も有る。

師に椅子(イス)へ座る事をお願いする言葉は多数、有る。

お願いして師を椅子に座らせた後で合掌し低頭し安否を尋ねる。

身をかがめて、作法通りにする。

合掌し低頭し安否を尋ね終わったら、香炉が乗せられている台の前面に歩み寄り、携帯している一欠片の香を香炉に立てる。

香を立てるが、香を衣の襟に差し挟んでいる事も有るし、懐の中に持っている事も有るし、袖の中に携帯している事も有るが、各人の心次第である。

合掌し低頭し安否を尋ねた後、香をひねり出して、もし紙に包んでいたら、右手へ向かって肩を転じて包んでいた紙を解いて下げて、両手で香を捧げて、香を香炉に立てるのである。

香は香炉に真っ直ぐに立てるべきである。傾かせる事なかれ。

香を立て終わったら、両手を胸の前で重ねて立ち、右へまわって歩いて、師の正面へ行き、師に向かい身をかがめて、作法通りにして、合掌し低頭し終わったら、坐具を広げて礼拝するのである。

礼拝は、九回、礼拝するか、十二回、礼拝するのである。

礼拝し終わったら、坐具を撤収して、合掌し低頭する。

一回、坐具を広げて三回、礼拝して、時候の挨拶を述べる事も有る。

九回、礼拝する場合は、時候の挨拶を述べず、一回、坐具を広げて三回、礼拝する事を三回くり返すべきなのである。

礼拝の作法は、遥かな過去七仏から伝わっているのである。

礼拝の主旨も正しく伝わって来ている。

このため、このような作法を用いるのである。

このような礼拝を、礼拝する時を迎えるたびに行い、止める事は無い。

その他には、師から教えを被(こうむ)るたびに礼拝する。
師に話をお願いしようとする時にも礼拝するのである。
二十九祖の慧可が、昔、仏法の会得の所見を二十八祖の達磨に表す時に、
三回、礼拝したのは、これなのである。
(そして、達磨は慧可に「あなたは私の髄を得た」と言った。)
慧可は、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」の有様(ありよう)を開演するために
三回、礼拝した。

知るべきである。
師を礼拝するのは、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」なのである。
「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」とは、「大陀羅尼」、「大いなる
真理の保持」なのである。

師に教えを請う時の礼拝は、千二百四十三年頃は、一回、頭を地につけて
礼拝する事を多く用いる。
古くからの作法では、三回、頭を地につけて礼拝するのである。

師の教えへの感謝の礼拝の回数は、必ずしも、九回や十二回ではない。
三回、頭を地につけて礼拝したり、一回、頭を広げていない坐具につけて
礼拝したり、六回、頭を地につけて礼拝したりする。
全て共に、頭を地につけて礼拝するのである。
西のインドでは、頭を地につける礼拝を「最上の礼拝」と呼んでいる。

頭で地を叩くようにつけるのである。額を地に当てて打つようにつけるのである。血が出るまでする事もあるほどである。

頭を地につけて礼拝する時にも、坐具を広げるのである。

一回の礼拝も、三回の礼拝も、六回の礼拝も共に、額で地を叩くようにつけるのである。

「頭を地につける礼拝」とも呼ばれている。

世俗でも、「頭を地につける礼拝」は有るのである。

世俗には、九種類の礼拝が有る。

また、師から教えてもらえた時は、「不住拝」、「師がいなくても礼拝する事」が有る。

師を礼拝して、(師がいなく成っても、)礼拝が止まらないのである。

礼拝が、百回、千回、無数の回までも至るのである。

全ての礼拝は共に、仏祖の会で用いて来ている礼拝なのである。

全ての礼拝は、ただ、師の指示を守って、作法通りに礼拝するべきである。

礼拝が世界に存在する時、仏法も世界に存在するのである。

もし礼拝が隠れてしまえば、仏法も身を隠してしまうのである。

仏法を伝えてくれた本師を礼拝する場合は、時を選ばないで、場所を論じないで、礼拝するのである。

師が横たわっている時や食べている時でも礼拝するし、

師が大便や小便を行っている時でも礼拝する。

師を牆壁を隔(へだ)てても礼拝するのであるし、山や川を隔(へだ)てても遥か遠くから師を望んで礼拝するのである。

師を「劫波(カルパ)」、「時」を隔(へだ)てても礼拝するし、生と死が来たり去ったりするのを隔(へだ)てても礼拝するし、「覚」や「涅槃」、「寂滅」を隔(へだ)てても礼拝する。

このように、弟子が種々の礼拝をしても、仏法を伝えてくれた本師は礼拝では応じず、ただ合掌するだけである。

師が自ら「奇拝」、「変わった礼拝」を用いる事も有るが、不確かな事には用いなかった。

師を礼拝する時は、必ず、北へ向かって礼拝するのである。

師は、南へ向かって正しく座る。

弟子は師の面前で地に立って、顔を北へ向けて師に向かって師を礼拝するのである。

これが本来の正しい礼拝の作法なのである。

「自ら帰依する正しい信心が起これば、必ず、北へ向かって礼拝する事が最初に行われる」と正しく伝わっている。

このため、釈迦牟尼仏が存命中、釈迦牟尼仏に帰依した人達、天人達、竜達は共に、北へ向かって釈迦牟尼仏を恭(うやうや)しく敬い礼拝したのである。

釈迦牟尼仏が最初に仏法を説いた時には、阿若憍陳如(拘隣)、阿湿卑(阿陛)、摩訶摩南(摩訶拘利)、波提(跋提)、婆敷(十力迦葉)という「五比丘」は、如来、釈迦牟尼仏が仏道を成就した後、無意識に起きて立って、釈迦牟尼仏に向かって北へ向かっての礼拝を捧げた。

外道や「魔」、「仏敵」の仲間も、誤りを捨てて仏に帰依する時は、必ず、自分や他者が計画しなくても、北へ向かって礼拝するのである。

釈迦牟尼仏から今まで、西のインドの二十八人の祖師達、東の地の中国の諸々の祖師達の会に来て正しい仏法に帰った者は皆、自然に北へ向かって礼拝するのである。

北へ向かって礼拝するのは、正しい法が、あえて、そうするのであり、師弟が計画した物、意図した物ではない。

礼拝は、「大陀羅尼」、「大いなる真理の保持」なのである。

「ある『大陀羅尼』が有り、『円覚』、『完全で円満な悟り』と呼ぶ。
ある『大陀羅尼』が有り、『人事』、『人が可能な事』と呼ぶ。
ある『大陀羅尼』が有る。
礼拝を形成して現す事である。
ある『大陀羅尼』が有り、袈裟と呼ぶ。
ある『大陀羅尼』が有り、『正法眼蔵』、『正しくものを見る眼』と呼ぶ」
という「陀羅尼」、「言葉」を唱えて、尽大地を鎮静化して護って来ているし、
尽方界を鎮静化して形成して来ているし、
尽時界を鎮静化して現して来ているし、

尽仏界を鎮静化して成して来ているし、
庵（いおり）の内外を鎮静化して通じて来ている。

「『大陀羅尼』とは、このような物である」として学に参入して究めて、わきまえるべきなのである。

一切の全ての「陀羅尼」、「真理の保持」または「言葉」は、「大陀羅尼」を「字母」、「本（もと）」としている。

「大陀羅尼」の眷属として、一切の全ての「陀羅尼」、「真理の保持」は形成されて現されている。

一切の仏祖は、必ず、「大陀羅尼」という門によって、「発心」、「悟りを求める事を思い立って心する事」や、仏道をわきまえる事や、仏道を成就する事や、「法輪を転じる事」、「法を説く事」が有るのである。

そのため、既に仏の法の子孫なのであるから、「大陀羅尼」に明確に詳細に参入して究めるべきなのである。

釈迦牟尼仏の衣が覆っているものは、十方の一切の仏祖の衣が覆っているものなのである。

釈迦牟尼仏の衣が覆っているものは、袈裟が覆っているものなのである。

袈裟は旗印（はたじるし）としての仏達なのである。

これをわきまえ受け入れる事は、仏に出会い難いような物なのである。

僻地（へきち）の人の身を受けて、愚かであるが、前世で陀羅尼を植えた善の種の力が形成されて現されて、釈迦牟尼仏の仏法に、生まれ、出会った。

たとえ、百草の近くで、自ら成ったり他者によって成ったりした諸々の仏祖を礼拝しても、釈迦牟尼仏の仏道の成就に成るのであるし、釈迦牟尼仏の

仏道をわきまえる鍛錬に成るのである。陀羅尼が神秘的に変化させるのである。

たとえ千、億の無量の劫に古代の仏や今の仏を礼拝しても、釈迦牟尼仏の衣が覆っている時なのである。

ひとたび袈裟で身体を覆うのは、既に、釈迦牟尼仏の身や、肉や、手足や、頭や、目や、髄や、脳や、光明や、「転じている法輪」、「説いている仏法」を得たのである。

このような物を得て袈裟を着るのである。

このような物を得て袈裟を着るのは、袈裟を着る功徳を形成して現す事に成るのである。

袈裟を着る事を保持し任せられ、袈裟を着る事を好み楽しんで、時と共に守護し袈裟を着て釈迦牟尼仏を礼拝して捧げものを捧げるのである。

袈裟を着る中で、「三阿僧祇劫」の修行をも、わきまえ受け入れて究め尽すのである。（仏に成るには「三阿僧祇劫」と「百大劫」という長い年月がかかると言う場合が有る。）

「釈迦牟尼仏を礼拝して捧げものを捧げる」とは、仏法を伝えてくれた本師を礼拝して捧げものを捧げたり、出家の本師を礼拝して捧げものを捧げたりする事なのである。

師を礼拝して捧げものを捧げる事は、釈迦牟尼仏を見て法と陀羅尼を捧げる事なのである。

道元の亡き師である、古代の仏と等しい、天童山の五十祖の如浄は、示して、「(二十九祖の慧可は、)雪の上に来て、(師を)礼拝したし、(三十三祖の大鑑禅師は、)糠の中にいて、(師を)礼拝した。優れた行跡であるし、(私達の)先人の行跡であるし、『大陀羅尼』である」と言った。

正法眼蔵　陀羅尼

その時、千二百四十三年、越宇の吉峰寺にいて僧達に示した。

面授

その時、釈迦牟尼仏は、西のインドの霊山の会で、百万の者達の中で、優曇華をひねって目を瞬かせた。

時に、(摩訶)迦葉は「破顔微笑」した。

釈迦牟尼仏は、「私(、釈迦牟尼仏)には『正法眼蔵涅槃妙心』、『正しくものを見る眼と寂滅した妙なる心』が有り、(摩訶)迦葉に付属する」と言った。

これが、仏から仏へ、祖師から祖師へ、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を「面授する」、「言い表せないものを顔と顔を合わせて授かる」道理なのである。

「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」は、過去七仏が正しく伝えて、初祖の迦葉に至った。

初祖の迦葉から、(初祖の迦葉を含む)二十八人の祖師達が授かって、二十八祖の(菩提)達磨に至った。

二十八祖の(菩提)達磨は、自ら中国に降りて、大いなる祖師である、正宗普覚大師と呼ばれる二十九祖の慧可に面授した。

(二十九祖の慧可を含む)五人の祖師達に伝えられて、曹谿山の、三十三祖の大鑑禅師と呼ばれる慧能に至った。

三十三祖の大鑑禅師から、十七人の祖師達が授かって、道元の亡き師である、古代の仏と等しい、宋の時代の中国の慶元府の、「太白名山」、「天童山」の、五十祖の如浄に至った。

千二百二十五年、宋の時代の中国で、妙高台という部屋で、道元は初めて五十祖の如浄に焼香して礼拝した。
如浄は初めて道元を見た。
その時、如浄は、道元に、自分で直接伝授して、面授して、「仏から仏へ、祖師から祖師への面授の法門が形成されて現された」と言った。

如浄から道元への初めての言葉は、霊山での釈迦牟尼仏の「拈華瞬目」なのであるし、
嵩山での二十八祖の達磨から二十九祖の慧可への「得髄」なのであるし、
黄梅山での三十二祖の弘忍から三十三祖の大鑑禅師への「伝衣」なのであるし、
三十八祖の洞山良价の「面授」なのである。

如浄から道元への初めての言葉は、仏祖の「眼睛」、「見る眼」の面授なのである。

「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」は「私の家の中」だけに有り、他の人は夢にも未だ見聞きした事が無いのである。

面授の道理を、釈迦牟尼仏は、迦葉仏の会の下で目の当たりにして面授し保持し護って来ているので、仏祖の「面」、「有様（ありよう）」なのである。

仏の「面」、「有様（ありよう）」によって面授しなければ、諸仏ではないのである。

釈迦牟尼仏は初祖の迦葉を目の当たりにして見て親しかったのである。

二祖の阿難陀や、釈迦牟尼仏の息子の羅睺羅といえども、初祖の迦葉が釈迦牟尼仏に親しく従った事には及ばない。

諸大菩薩といえども、初祖の迦葉が釈迦牟尼仏に親しく従った事には及ばないし、初祖の迦葉の座に座る事ができ得ない。

釈迦牟尼仏と初祖の迦葉が同じ座に坐り同じ衣を着た事を一代の仏としての振（ふ）る舞（ま）いとしている。

初祖の迦葉は親しく釈迦牟尼仏からの面授を面授したし、心授したし、身授したし、眼授した。

初祖の迦葉は、釈迦牟尼仏に捧げものを捧げ、恭（うやうや）しく敬い、礼拝して見（まみ）えた。

初祖の迦葉の粉骨砕身は幾千、幾万の変化か測り知れない。

初祖の迦葉の自己の「面目」、「有様（ありよう）」は自己の「面目」、「有様（ありよう）」ではなく、如来、釈迦牟尼仏の「面目」、「有様（ありよう）」を面授した。

釈迦牟尼仏は、正しく、初祖の迦葉を見た。

初祖の迦葉は、目の当たりにして、二祖の阿難陀を見た。
二祖の阿難陀は、目の当たりにして、初祖の迦葉の仏の「面」、「有様(ありよう)」を礼拝した。

これが面授なのである。

二祖の阿難陀は、面授に住んで保持して、三祖の商那和修と接して面授した。
三祖の商那和修は、正しく、二祖の阿難陀と見(まみ)えて、「ただ仏と仏だけ」、「ただ『面』、『有様(ありよう)』と『有様(ありよう)』だけ」で、面授し面受した。

このように、正統な代々の祖師達は共に、弟子は師に見(まみ)え、師は弟子を見る事によって面授して来ている。

一人の祖師、一人の師、一人の弟子でも面授しなければ、仏から仏へではないし、祖師から祖師へではない。

例えば、水を合流させて師弟の系譜を成長させたり、灯(ともしび)をともし続けて光明を常に存在させたりして、法が千、万、億、無数であっても、本(もと)と成っている枝は唯一普遍絶対であるような物である。

面授とは、師弟の呼吸が合うのである。

祖師達は、釈迦牟尼仏を目の当たりにして見守って、一生のうちの日夜を積み重ねたのであるし、
仏の「面」、「有様(ありよう)」に見守られて、一代のうちの日夜を積み重ねたのであるが、

それが、どれだけの無量の劫を往来している事に成るのかと知らない。
　静かに想像して喜ぶべきである。

　祖師達の「眼睛」、「見る眼」や、「面目」、「有様（ありよう）」は、釈迦牟尼仏の
仏の「面」、「有様（ありよう）」を礼拝し、
釈迦牟尼仏の仏眼を自分の眼に映し、
自分の眼を仏眼に映した、仏の「眼睛」、「見る眼」なのであるし、仏の
「面目」、「有様（ありよう）」なのである。

　仏の「眼睛」、「見る眼」と「面目」、「有様（ありよう）」を伝えて、今に至るまで
一代も間が途切れる事無く面授して来ているのが面授なのである。

　今までの数十代の正統な代々の祖師の「面」、「有様（ありよう）」は、仏の「面」、
「有様（ありよう）」なのであるし、
本初の釈迦牟尼仏の仏の「面」、「有様（ありよう）」を面受しているのである。

　正しく伝えられている面授を礼拝する事は、正しく、釈迦牟尼仏を含む過
去七仏を礼拝する事に成るのであるし、
初祖の迦葉などの西のインドの二十八人の仏祖達を礼拝して捧げものを捧げ
る事に成るのである。

　仏祖の「面目」、「有様（ありよう）」や「眼睛」、「見る眼」は、仏の「有様（ありよう）」や
「見る眼」の面授なのである。

仏祖に見える事は、釈迦牟尼仏などの過去七仏に見える事に成るのである。

仏祖が親しく自己を面授するのは、仏祖に見えた時なのである。

面授された仏(である仏祖である師)が面授された仏(である弟子)に面授するのである。

(師の)葛藤を(弟子の)葛藤に面授し、さらに断絶しない。

眼を開いて眼に眼授し、眼受する。
面を現して面に面授し、面受する。

面授は面での授受なのである。

心をひねって心に心授し、心受する。
身を現して身を身授するのである。

他方、他国も、面授を本としている。

中国以東では、仏を正しく伝えている家の中でのみ、面授と面受が有る。
面授によって、新たに如来を見る「正眼」、「正しくものを見る眼」を伝えて来ている。

釈迦牟尼仏の「面」、「有様」を礼拝する時、釈迦牟尼仏から五十祖の如浄までの五十一人と、過去七仏の代々の仏達は、並ぶわけではないし、連なるわけではないが、同時の面授が有る。

一代でも、師を見なければ弟子ではないし、弟子を見なければ師ではない。

必ず、見て、見えて、面授して来ている。

代々の祖師達が弟子として師の仏法を嗣いで来ているのは、代々の祖師達が面授しているものである、仏道が形成されて現されているのである。
このため、如来、釈迦牟尼仏の「面」、「有様」の光を直接ひねって来ているのである。

千年、万年、百劫、億劫といえども、面授は釈迦牟尼仏の「面」、「有様」が形成されて現されて授かるのである。

仏祖が形成されて現されるとは、釈迦牟尼仏、初祖の迦葉、釈迦牟尼仏から五十祖の如浄までの五十一人の仏祖と、過去七仏の代々の仏達の、影が形成されて現されるのであるし、
光が形成されて現されるのであるし、
身が形成されて現されるのであるし、
心が形成されて現されるのであるし、
つま先が来るのであるし、
鼻先が来るのである。

一言も未だ理解できず、一句の半分も未だ理解できなくても、師が眼以外を袈裟で覆っていても既に弟子を見、弟子が既に頂上より師を拝んで来ていれば、正しく伝えられた面授なのである。

このような面授を尊重するべきなのである。

面授は、わずかに(師の)心の跡を(弟子の)心に表すようであろう。

必ずしも大いなる尊い貴い物ではないであろう。

「面」、「有様」を新しい物に換えて面授し、頭をめぐらして面授するのは、「面」、「有様」の皮の厚さは三寸と成るであろうし、(三寸は約九センチ。「三寸」は「薄い事」を意味する場合が有る。)

「面」、「有様」の皮の薄さは一丈と成るであろう。(一丈は約三メートル。)

「面」、「有様」の皮とは、諸仏の大いなる円鏡である。

諸仏の大いなる円鏡を「面」、「有様」の皮としているので、内外に瑕も翳りも無いのである。

諸仏の大いなる円鏡が、諸仏の大いなる円鏡を面授して来ているのである。

釈迦牟尼仏を目の当たりにして見る正しい仏法を正しく伝えて来る事は、釈迦牟尼仏、本人よりも釈迦牟尼仏の仏法に親しむ事に成るのである。

鋭い眼によって「前後三三」の釈迦牟尼仏を見て出現させるのである。

このため、釈迦牟尼仏を重んじ、釈迦牟尼仏を恋い慕うには、面授による正しい伝授を重んじ尊び崇め、出会い難い物として敬い重んじ礼拝するべきである。

面授を礼拝する事は、如来、釈迦牟尼仏を礼拝する事に成るのであるし、如来、釈迦牟尼仏によって面授される事に成るのである。

如来、釈迦牟尼仏を新たに面授する、正しく伝えられている学への参入が、古くからのままであるのを拝見する者は、「自己である」と思っている自己であっても、他者であっても、愛して大切にするべきなのであるし、保持して護るべきなのである。

仏教という仏の家の中に正しく伝えられている所によると、「『八塔』、『寺の起源と言われている、最初は八つであった、釈迦牟尼仏の遺骨を安置した塔』を礼拝する者は、『罪障』、『悪業』から解脱し、仏道修行の結果である悟りを感得する」と言われている。

釈迦牟尼仏の遺骨を安置した塔は、釈迦牟尼仏の仏道が形成されて現された所として、釈迦牟尼仏が「この世」に生まれた所に建てられ、釈迦牟尼仏が「法輪を転じた」、「法を説いた」所に建てられ、釈迦牟尼仏が「仏道を成就した所」、「悟った所」に建てられ、釈迦牟尼仏の「涅槃の所」、「肉体が死んだ所」に建てられ、

「曲女城（カナウジ）」の辺（あた）りに残り、
毘舎離城（ヴェーサーリー）外の菴羅林（マンゴー）の番人の養女で比丘尼と成ったアンバパーリーが釈迦牟尼仏に帰依して捧げたマンゴー林に残っている。

釈迦牟尼仏の遺骨を安置した塔は、大地を形成しているし、大空を形成している。

「色声香味触法」の所などに、釈迦牟尼仏の遺骨を安置した塔が形成されるのを礼拝する事によって、仏道修行の結果である悟りを感得する。

最初は八つであった、釈迦牟尼仏の遺骨を安置した塔を礼拝する事を、西のインドでは、遍（あまね）く勤めるべき仏道修行としていて、在家者、出家者、天人達、人達は競って礼拝して捧げものを捧げているのである。

釈迦牟尼仏の遺骨を安置した塔は、一巻の経典なのである。
仏の経とは、釈迦牟尼仏の遺骨を安置した塔なのである。

まして、「三十七品菩提分法」を修行して、仏道修行の結果である悟りを個々の生で成就する事は、釈迦牟尼仏の古今に渡る修行、修治の行跡を、所々の「古路」、「修行の道」に広めて、古今に歴然とさせるので、仏道を成就する。

知るべきである。

最初は八つであった、釈迦牟尼仏の遺骨を安置した塔は、何重にも重なるし、秋の霜（しも）から春の華までの年度は何度か改まる。
風や雨が何度も侵そうとしたが、空（くう）に跡が残っているし、色に跡が残っている功徳を今の人に惜しまないで減少しない。

「信根、精進根、念根、定根、慧根」という「(五)根」や、
「信力、精進力、念力、定力、慧力」という「(五)力」や、
「択法覚支、精進覚支、喜覚支、除覚支、捨覚支、定覚支、念覚支」という「(七等)覚(支)」や、
「正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定」という「(八聖)道」といった、
「三十七品菩提分法」を、今、修行しようとすると煩悩、惑障は有るが、修行して証すると、「三十七品菩提分法」の力はなお今も新しいのである。

釈迦牟尼仏の功徳とは、このような物なのである。

まして、面授は、釈迦牟尼仏の遺骨を安置した塔や「三十七品菩提分法」と比べられないのである。
「三十七品菩提分法」は、面授の、仏の「面」、「有様（ありよう）」や、仏の心や、仏の身や、仏の言葉や、仏の光や、仏の舌などを根元としている。
最初は八つであった、釈迦牟尼仏の遺骨を安置した塔の功徳の積み重ねもまた、面授の、仏の「面」、「有様（ありよう）」などを本（もと）、基（もと）としている。

今、仏法を学び修行する人として、「透脱」、「透体脱落」、「煩悩を透過して脱ぎ落とす」活路で生きるならば、閑静な場所で、昼夜、よくよく思量して鍛錬するべきなのであるし、喜ぶべきなのである。

千二百四十三年の我が国、日本は他国よりも優れていて仏道は単独で無上なのである。

他方には千二百四十三年の日本人のようではない輩が多い。

(他国では仏道が単独で無上ではない輩が多い。)

「千二百四十三年の我が国、日本では仏道が無上で単独で尊い」とは、霊山の者達が遍(あまね)く十方を化して導いているが、少林寺の、釈迦牟尼仏の正統な後継者である二十八祖の達磨の系譜が正しく中国で主と成っていて、曹谿山の三十三祖の大鑑禅師の法の子孫が今にまで面授している事である。

今が、仏法の者が新たに「入泥入水」、「生者を救うために泥や水に入る」好い時なのである。

「今、証果しなければ、いつ証果するのか?」、「今、悟らなければ、いつ悟るのか?」。

今、迷いを断たなければ、いつ迷いを断つのか?

今、仏と成らなければ、いつ仏と成るのか?

今、坐仏として坐らなければ、いつ行仏として行うのか?

明確に詳細に鍛錬するべきである。

釈迦牟尼仏が、かたじけなくも、初祖の迦葉に付属、面授して、「私(、釈迦牟尼仏)には『正法眼蔵涅槃妙心』、『正しくものを見る眼と寂滅した妙なる心』が有り、(摩訶)迦葉に付属する」と言った。

嵩山の二十八祖の達磨の会では、二十八祖の達磨は、正しく、二十九祖の慧可に示して、「あなたは私の髄を得た」(、「私を会得した」)と言った。

測り知る事ができる。

「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を面授でき、「あなたは私の髄を得た」(、「私を会得した」)を面授できるのは、面授だけなのである。

面授の時、あなたが日頃の「骨髄」、「理解」を「透脱」、「透体脱落」、「透過して脱ぎ落とす」時、仏祖の面授が有るのである。

大いなる悟りを面授し、心の印を面授しても、一隅に過ぎないのである。伝え尽していないわけではないが、未だに欠けている悟りの道理に参入して究めていないのである。

仏祖の大いなる仏道は、「面授と面受だけ」、「面受する『面』」、『有様(ありよう)』と、面授する『面』、『有様(ありよう)』だけ」なのである。さらに余計な物は無いし、欠けている物は無いのである。

面授に出会えた自己の「面目」、「有様(ありよう)」をも喜び、信じて受け入れて行(おこな)っていくべきなのである。

道元は、千二百二十五年に、初めて、亡き師である、古代の仏と等しい、天童山の五十祖の如浄を礼拝して面授した。
やや奥義を許された。
わずかに(古い)身心を脱ぎ落として、面授を保持させられ任せられたので、日本に帰った。

正法眼蔵　面授

その時、千二百四十三年、越宇の吉田県の吉峰精舎にいて僧達に示した。

仏道の面授が、このような物である道理をかつて見聞きできず学が無い輩の中に、宋の時代の中国の仁宗皇帝の時代の「景祐」の時に、薦福寺の承古という者がいて、堂に上って、誤って「匡真大師と呼ばれる雲門文偃は、今も現に存在している。
皆もまた見えるかな？
もし見る事ができ得るならば、私と同じく参入している。
見えるかな？
見えるかな？
この事は真理を明らめて初めて得られるのである。
怠るべきではない。
昔、黄檗希運は、百丈の懐海から、馬祖道一が喝を下した話を聞いて、大いに反省した。

百丈の懐海は、黄檗希運に、『あなたは今後、馬祖道一の法を嗣ぐのか否か？』と質問した。

黄檗希運は、『私は馬祖道一を知ってはいますが、見た事はありません。もし私が馬祖道一の法を嗣げば、恐らく、私の法の子孫を失ってしまうでしょう』と言った。

皆、当時は馬祖道一が亡くなってから五年未満であった。

黄檗希運は自ら『見た事が無い』と言っているので、『黄檗希運の所見は円満ではない』と、まさに知れる。

黄檗希運は片目だけを備えていたのである。

私は、そうではない。

私は、雲門文偃を知っているし、雲門文偃を見た。

私は、雲門文偃の仏法を嗣ぐ事ができる。

ただ、雲門文偃が亡くなってから百年余りである。

どうして今、私は奥底まで親しく見た道理を説く事ができるのか？

理解できるかな？

仏法に通達した人は証明できる。

目が不自由な者どもは、心に疑いと悪口を生じる。

見る事ができ得た者は、疑いや悪口を言う事は無い。

未だ見ていない者は、看て理解して取るのか否か？

長らく立たせてしまったが、御自愛ください」と言ってしまった。

　承古が雲門文偃を知っていて雲門文偃を見た事をたとえ許しても、雲門文偃は承古を目の当たりにして見たのか否か？　いいえ！

雲門文偃が承古を見ていなければ、承古は雲門文偃の仏法を嗣ぐ事はできない。

雲門文偃は未だ承古が仏法を嗣ぐ事を許していないので、承古もまた「雲門文偃は私を見た」と言えなかった。

「承古は雲門文偃を未だ見ていない」と知る事ができる。

過去、現在、未来の、過去七仏を含む諸仏のうち、どの仏祖が師弟として見えていないのに仏法を嗣いでいるのか？　いいえ！

承古よ、「黄檗希運の所見は円満ではない」と言う事なかれ。

どうして承古が黄檗希運の有様を測る事ができるだろうか？　いいえ！

どうして承古が黄檗希運の言葉を測る事ができるだろうか？　いいえ！

黄檗希運は古代の仏と等しいし、仏法を嗣ぐ事に参入して究めている。

承古は仏法を嗣ぐ道理をかつて夢にも未だ見聞きしたり参入して学んだりした事が無いのである。

黄檗希運は師の仏法を嗣ぎ、祖師を保持させせられ任せられている。

黄檗希運は師に見え、師を「見た」、「理解した」。

承古は全く師を「見ていない」、「理解していない」し、祖師について知らないし、自己を知らないし、自己を「見ていない」、「理解していない」。

承古を見る師はいないし、承古の師を見る眼は未だ開いていない。

本当は、承古の所見が円満ではないのであるし、承古の仏法の継承が円満ではないのである。

承古は「雲門文偃が黄檗希運の法の子孫である」と知っているのか否か？

どうして承古が百丈の懐海と黄檗希運の言葉を測り知る事ができるだろうか？　承古は雲門文偃の言葉ですらなお測り知る事ができていないのに。

学に参入する力が有る者が、百丈の懐海と黄檗希運の言葉をひねって挙げるのである。

直接的に指し示された「落所」、「思考が落ち着き決着する所」が有る者は百丈の懐海と黄檗希運の言葉を測り知る事ができる。

承古は学への参入が無いし、「落所」、「思考が落ち着き決着する所」が無いので、百丈の懐海と黄檗希運の言葉を測り知る事ができないのである。

承古は誤って「当時、馬祖道一が亡くなってから五年未満であったのに、黄檗希運は馬祖道一の仏法を嗣がなかった」と言っているが、実に、笑っても不足である。

もし見えなくても仏法を嗣ぐ事ができるのであれば、無量の劫の後でも仏法を嗣ぐ事ができる。

もし見えないと仏法を嗣ぐ事ができないのであれば、半日後であっても、一瞬、後であっても、仏法を嗣ぐ事ができない。

承古は全く仏道の日面も月面も「見ていない」、「理解していない」、仏法に暗い愚か者なのである。

承古は誤って「雲門文偃が亡くなってから百年余りであるが、雲門文偃の仏法を嗣いだ」と言っているが、承古には神聖な力が有って雲門文偃の仏法を嗣いだのか？　いいえ！

承古の言葉は三歳の幼子の言葉よりも儚い。

雲門文偃が亡くなってから千年後に雲門文偃の仏法を嗣ぐ者は、承古の十倍の力が有るだろう。

私、道元が承古を救おう。

「公案」、「修行者に考えさせるための仏祖の言動」の学に参入するべきである。

百丈の懐海が言った「あなたは今後、馬祖道一の法を嗣ぐのか否か？」という言葉は、「馬祖道一の法を嗣ぎなさい」と言っているわけではないのである。

承古よ、「獅子奮迅」という話の学に参入するべきであるし、「烏亀倒上樹」という話の学に参入して、進退の活路に参入して究めるべきである。

仏法を嗣ぐと、このような、学に参入する力が有るのである。

黄檗希運が言った「恐らく、私の法の子孫を失ってしまうだろう」という言葉を、全く承古には測り知る事ができていない。

「私」という言葉と、「法の子孫」である人々は、「誰々である」か知っているか？

明確に詳細に学に参入するべきである。

隠れず現れて言葉が形成されて現されている。

それなのに、仏国惟白という者は、仏祖の仏法を嗣ぐ事について暗いので、誤って承古を雲門文偃の仏法の後継者に並べてしまっているが、誤りなのである。

後進の者は、知らないで、誤って「承古にも学への参入が有る」と思ってしまう事なかれ。

承古の言う通り、文字だけによって仏法を嗣ぐ事ができるのであれば、経を見て明らかに悟る者は皆、釈迦牟尼仏から仏法を直接、嗣ぐ事に成るのか？　いいえ！　そうは成らないのである！

経によって明らかに悟る者は、必ず、正しい師による悟りの証明を求めるのである。

承古の言葉通りであれば、承古は雲門文偃の語録をなお未だ「見ていない」、「理解していない」のである。

雲門文偃の言葉を「見た」、「理解した」僧だけが雲門文偃の仏法を嗣いでいる。

承古は、自己の眼によって未だ雲門文偃を「見ていない」、「理解していない」し、
自己の眼によって未だ自己を「見ていない」、「理解していない」し、
雲門文偃の眼によって未だ雲門文偃を「見ていない」、「理解していない」し、
雲門文偃の眼によって未だ自己を「見ていない」、「理解していない」。

このように、承古には未だ参入して究めていない物が多い。

承古は、さらに(新しい)履物を買って来て去って正しい師を求めて、仏法を嗣ぐべきである。

承古は誤って「雲門文偃の仏法を嗣いだ」と言う事なかれ。

もし、こう言ってしまったら、外道の類と成ってしまう。

たとえ百丈の懐海であっても、承古のような事を言ってしまえば、大いなる誤りと成ってしまう。

梅華

道元の亡き師である、古代の仏と等しい、天童山の五十祖の如浄は、宋の時代の中国の慶元府の、「太白名山」、「天童山」の景徳寺の第三十代の「堂上」、「堂頭」、「寺の主の僧」である。

如浄は、堂に上って、僧達に示して、「天童山の冬の半(なか)ばの言葉である。
『槎牙』、『木の枝が、トゲトゲと角ばっていて、ゴツゴツとして入り組んでいる様子』である梅の老木が、たちまち一つの華、二つの華、三つ、四つ、五つの華、無数の華を花開かせる。
梅の華は清らかさを誇(ほこ)らないし、香りを誇(ほこ)らない。
梅の華は散り落ちて春の景色を作り、春風が草木を吹き、華の無い梅の老木は個々の僧の髪を剃(そ)った頭と成る。
たちまち春風と梅の花びらは荒れ狂う激しい風と暴雨に不思議にも変わり、そして、梅の花びらが衣として大地に渡されて雪として広々と果てしなく広がっている。
梅の老木は大いに手がかりが無い。
寒さに凍(こご)えて撫(な)で摩(さす)る。
鼻の孔(あな)が酸(す)っぱい」と言った。

開演されている梅の老木は、「大いに手がかりが無い」のであるし、「たちまち花開く」し、自然に実を結ぶ。

春を成したり、冬を成したりする。

「荒れ狂う激しい風」を成したり、「暴雨」を成したりする。

「僧の頭」に成るし、古代の仏(と等しい如浄)の「眼睛」、「見る眼」に成る。

「草木」に成るし、「清らかさと香り」に成る。

梅の老木の「たちまちの神秘的な不思議な変化」は究める事ができない。

大地と高い天空や、明らかな太陽と清らかに澄んでいる月の功徳は、梅の老木が樹立した功徳によって、樹立されている。

葛藤が葛藤を結ぶのである。

梅の老木が「たちまち花開く」時、「華開世界起」、「華が開いて世界が起こる」のである。

「華が開いて世界が起こる」時、春が到来するのである。

「華が開いて世界が起こる」時に、二十八祖の達磨の言葉の「一華開五葉」、「一つの華が五つの花びらを開く」の「一つの華」が有る。

「一つの華」が有る時、能(よ)く、三つの華、四つの華、五つの華が有るし、百の華、千の華、万の華、億の華が有るし、無数の華が有る。

これらの華が花開くのは皆、梅の老木の一つの枝、二つの枝、無数の枝による物であるが、梅の老木は誇(ほこ)らないのである。

優曇華や優鉢羅華なども同じく、梅の老木の一つの枝、二つの枝による華なのである。

一切の全ての華が花開くのは、梅の老木の恩恵の施しによる物なのである。人の中や天上に梅の老木が有り、梅の老木の中に人間や天上の功徳を樹立している。

百、千の無数の華を「人や天人の華」と呼ぶ。

万、億の無数の華は仏祖の華なのである。

このような時を「諸仏は『この世』に出現する」と呼ぶのであるし、「(二十八祖の達磨という)祖師が本(もと)より、この土地(、中国)に来た(のは、仏法を伝えて心が迷っている人を救うためである)」と呼ぶのである。

如浄は、堂に上って、僧達に示して、「釈迦牟尼仏が眼睛を見えなくする時は、雪の中に梅は一枝の華だけである。梅の枝は、今は至る所に棘(トゲ)を成している。しかし、華が咲き乱れるように春風が吹くのを笑うであろう」と言った。

古代の仏(と等しい如浄)の法輪を尽界の最果てにまで転じる。

一切の人と天人が仏道を会得する時なのである。

雲や雨や、風や水や、草木や昆虫に至るまでも、転じられた法輪の利益を被(こうむ)る!

天地や国土も、法輪によって転じられて魚の様に活発に成る。

「未だかつて聞いた事が無い言葉を聞く」とは、如浄の梅の華についての言葉を聞く事を言うのである。

「未だかつて存在した事が無いものを会得する」とは、如浄の梅の華についての言葉を明らかに会得する事を言うのである。

如浄の梅の華についての言葉は、超常的な福徳でなければ、見聞きできない法輪なのである。

千二百四十三年現在、宋の時代の中国の百八十の州の内外に、山寺が有るし、人里の寺が有って、寺の数は数え切れない。

寺の中には僧が多い。

けれども、如浄を見た事が無い僧は多く、如浄を見た事が有る僧は少ない。

まして、如浄の言葉を見聞きした事が有る僧は少ないのである。

まして、如浄に見(まみ)えて合掌し低頭し安否を尋ねた僧は少ない！

如浄に「堂奥」、「奥義」を許された僧は少ない！

まして、如浄の「皮肉骨髄」、「理解」や、「眼睛」、「見る眼」や、「面目」、「有様(ありよう)」を礼拝する事を許された僧は少ない！

如浄は簡単には僧が如浄の寺に滞在する事を許さなかった。

如浄は普段から「道心が無いのに慣れている者は、私の寺の中には許されない」と言って、道心が無い僧を追い出し、追い出し終わると、「唯一の本分が無い人が何をなすつもりなのか？　このような『犬』(、『動物的人間』)は人騒がせなのである。滞在は許されない」と言った。

道元は、正しく、この現場を見たし、目の当たりにして、この言葉を聞いた。

道元は、「彼らは、どんな罪が有って、この国の人なのに、共に住む事を許されないのか？　私は、何が幸いしてなのか、遠方の外国の人なのに、滞在を許されただけではなく、欲しいままに『堂奥』、『奥義』に出入りして尊いものを礼拝して『法道』、『仏法の道、真理』を聞いているのか？」と密かに思った。

道元は愚かで真理に暗いが、虚しくない良い「縁」、「つながり」を結んだのである。

如浄が宋の時代の中国を化して導いた時ですらなお、真理に参入して会得した人もいたし、参入できず会得できなかった人もいた。

如浄は既に宋の時代の中国を去った。

暗い夜よりも暗いであろう。

なぜなら、如浄の前後に、如浄のような古代の仏と等しい人がいないので、「暗い夜よりも暗いであろう」と言っているのである。

そのため、如浄の言葉、法輪を見聞きした時は、後進の者は、考慮するべきである。

「自分以外の諸方の人や天人も、このような如浄の言葉、法輪を見聞きするであろうし、学に参入するであろう」と思う事なかれ。

「雪の中の梅の華」という如浄の言葉は、三千年に一度咲く優曇華の出現なのである(ので、出会うのが難しい)。

日頃は何回か私の仏、如来の「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を見ていながら、いたずらに無駄に、「(拈華)瞬目」を見過ごして「破顔(微笑)」できなかった。

今すでに、「『雪の中の梅の華』という如浄の言葉は、如来の『眼睛』、『見る眼』なのである」と正しく伝えられて会得している。

「雪の中の梅の華」という如浄の言葉をひねって「頂上」、「頭」の「眼」、「見る眼」とするし、「眼の中の『睛』、『瞳』」、「見る眼の中の見る眼」とする。

さらに、梅の華の中に参入して到達して梅の華を究め尽すと、さらに激しく疑う事ができる「因縁」、「話」は未だ来ない。

「雪の中の梅の華」という如浄の言葉は、既に、「天上天下唯我独尊」、「天上と天下で、ただ私、独りだけが尊い」、釈迦牟尼仏の「眼睛」、「見る眼」であるし、法界の中の中央の尊像なのである。

そのため、天上の天華、人間の天華、天から雨のように降る曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華、十方無尽国土の諸々の華は皆、「雪の中の梅の華」の眷属なのである。

梅の華の恩徳の分け前を受けて「華開」、「花開く」ので、百億の無数の華は、梅の華の眷属なのであり、「小さな梅の華」と言える。

空華、地華、三昧華などは共に、梅の華の大小の眷属の華の群れなのである。

華の中に百億の無数の国を成すし、国土に花開くのは皆、梅の華の恩徳の分け前による物なのである。

梅の華の恩徳の分け前の外(ほか)は、別の恩による雨や露(つゆ)は無いのである。

命は皆、梅の華によって形成されるのである。

「嵩山の少林寺の、雪が広々と果てしなく広がっている地の事である」とだけ学ぶ事なかれ。

如来、釈迦牟尼仏の「眼睛」、「見る眼」なのである。

頭上を照らし、足下を照らす。

「雪山や『雪宮』、『雪寺』の雪の事である」とだけ学ぶ事なかれ。

老人、釈迦牟尼仏の「正法眼睛」、「正しくものを見る眼」なのである。

「肉眼、天眼、慧眼、法眼、仏眼」という「五眼」の「眼睛」、「見る眼」を「雪の中の梅の華」で究め尽している。

（「老人」は梅の「老木」を連想させている。）

千眼の「眼睛」、「見る眼」を「雪の中の梅の華」で円満に成就するべきである。

実に、老人、釈迦牟尼仏の身心や光明は、「諸法」、「全てのもの」の実の相を一微塵まで究め尽している！

人と天人の見え方は別であっても、凡人と聖者の情が隔(へだ)てていて遠くても、「雪が広々と果てしなく広がっている」のは大地なのであるし、大地は「雪が広々と果てしなく広がっている」のである。

雪が広々と果てしなく広がっていなければ、尽界には大地が無いのである。

「雪が広々と果てしなく広がっている」、表と裏の団欒は、釈迦牟尼仏、老人の「眼睛」、「見る眼」なのである。

知るべきである。

華と地は悉く「無生」、「生じる事の超越」なのである。

華は「生じる事の超越」なのである。

華が「生じる事の超越」なので、地も「生じる事の超越」なのである。

華と地は悉く「生じる事の超越」なので、「眼睛」、「見る眼」も「生じる事の超越」なのである。

「無生」、「生じる事の超越」とは、「無上普遍正覚」を言っているのである。

無上普遍正覚の時に見て取る理解とは、「梅は一枝の華だけである」なのである。

無上普遍正覚の時の言葉とは、「雪の中に梅は一枝の華だけである」なのであるし、

「地と華は生き生きとしている」なのであるし、

さらに、「雪が広々と果てしなく広がっている」と言うのは、「全ての表と裏には雪が広々と果てしなく広がっている」のである。

尽界は、「心地」、「心という地」なのである。

尽界は、華の情なのである。

尽界は華の情なので、尽界は梅の華なのである。

尽界は梅の華なので、尽界は釈迦牟尼仏の「眼睛」、「見る眼」なのである。

今の至る所は、山や川や大地なのである。

物事が至れば、時が至れば、皆、二十八祖の達磨の言葉の「吾本来此土、伝法救迷情。一華開五葉、結果自然成」、「私(、達磨)が、本より、この土地(、中国)に来たのは、法を伝えて心が迷っている人を救うためである。一

つの華が、五つの花びらを開き、実を結ぶのは、自然に成る」が至る所で形成されて現されるのである。

二十八祖の達磨の「西来」、「西のインドから中国へ来た事」と、仏教の「東漸」、「徐々に東へ広まる事」が有ったが、梅の華が今の至る所に有る事による物なのである。

このように、今、形成されて現されているのを「(梅の枝は、今は至る所に)棘(トゲ)を成している」と言っているのである。

大枝に古い枝と新しい枝の「今」が有るし、小枝に古い枝と新しい枝が「至る所に」有る。

「至る所」の「所」、「場所」は「至る」事に学ぶべきであるし、「至る」事は「今」に学ぶべきである。

三つ、四つ、五つ、六つの華の中は、無数の華の中なのである。

華は「裏の功徳が深く広い」のを十分に備えているし、「表の功徳が高く大きい」のを開いている。

華の表と裏とは、「一つの華」が花開く事なのである。

「(雪の中に梅は)一枝(の華)だけである」ので、別の枝は無いし、別の種類は無い。

「一枝」が「至る所に」有るのを「今」と呼ぶのが、釈迦牟尼仏、老人なのである。

「(雪の中に梅は)一枝(の華)だけである」ので、正統に代々付属しているのである。

このため、釈迦牟尼仏は「私(、釈迦牟尼仏)には『正法眼蔵(涅槃妙心)』、『正しくものを見る眼(と寂滅した妙なる心)』が有り、(摩訶)迦葉に付属する」と言ったのである。

あなた(、二十九祖の慧可)が得たものは、私(、二十八祖の達磨)の「髄」、「理解」なのである。

このように「至る所」で形成されて現されて、どこでも大いなる尊い貴い物であるので、「(一華)開五葉」、「(一つの華が、)五つの花びらを開く」のであり、「五葉」、「五つの花びら」とは「梅の華」なのである。

このため、過去七仏がいるのであるし、西のインドの二十八人の祖師達、東の地の中国の十九人の祖師達がいる。(原文は「西天二十八祖、東土六祖、および十九祖あり」。)

仏祖は皆、「一枝」の「(一華)開五葉」、「(一つの華が、)五つの花びらを開く」なのであるし、

仏祖は皆、「(一華開)五葉」、「(一つの華が、)五つの花びら(を開く事)」の「一枝」なのである。

「一枝」に参入して究め、「(一華開)五葉」、「(一つの華が、)五つの花びら(を開く事)」に参入して究めて来ていれば、「雪の中の梅の華」を正しく伝えられているのであるし、付属されているのであるし、見えているのである。

「(雪の中に梅は)一枝(の華)だけである」という「語脈」、「言葉と言葉のつながり」の中で身心を転じて来ると、「雲と月は同じであるが、谷の雲と山の雲は別なのであるし、谷の月と山の月は別なのである」。

それなのに、学に参入する見る眼が無い輩は、かつて誤って「『五葉』、『五つの花びら』と言っているが、二十八祖の達磨と、東の地の中国の三十二祖までの四人の祖師達を『一つの華』として、五人の祖師達を横並びに並

べて『古今、前後ではない』(と言える)ので『五つの花びら』と言っている」と言ってしまった。

学に参入する見る眼が無い輩の言葉は、挙げて見破るまでも無いのである。学に参入する見る眼が無い輩は、仏祖に参入している皮袋である人ではない。

憐れむべきなのである。

「一華」や、「五葉」、「五つの花びら」という言葉が意味するものが、どうして、二十八祖から三十二祖までの五人の祖師達だけであろうか？　いいえ！

「一華」や、「五葉」、「五つの花びら」という言葉は、三十三祖以降の祖師達の事は言っていないのか？　いいえ！

学に参入する見る眼が無い輩の話は、幼子の話にも及ばないのである。

学に参入する見る眼が無い輩の話は、断じて、見聞きするべきではない。

如浄は、年の最初の日に、堂に上って、「年の最初の日が年を啓(ひら)いた。万物は皆、新しく成った。慎(つつし)んで考えれば、僧達よ、梅は『早春』、『初春』、『春の初め』に花開く」と言った。

静かに考えれば、過去、現在、未来の、錐(きり)の先が使い古されて丸く成る様に円熟した長老が、たとえ尽十方に「脱体」、「そのままの、そのもの」であっても、「梅は『早春』、『初春』、『春の初め』に花開く」という言葉

が未だ無ければ、あなたを「『道』、『真理』を究め尽して言い尽した者である」と誰が言うであろうか？　いいえ！
独り如浄だけが、「古代の仏と等しい人」の中の「古代の仏と等しい人」なのである。

「梅は『早春』、『初春』、『春の初め』に花開く」という言葉の主旨は、「梅が花開く」事に引かれて全ての春は早いのである。
全ての春は、梅の中の一つ、二つの功徳による物なのである。
一つの春ですらなお、能く、万物を皆、新しく成らせるし、「万法」、「全てのもの」を年の最初の日に成らせる。
「年を啓いた」のは、「眼睛」、「見る眼」の正しさなのである。
「万物」とは、過去、現在、未来のものだけではなく、威音王仏以前のものもなのであるし、無限の未来のものものもなのである。
無量、無尽の過去、現在、未来のことごとくが「新しく成った」と言っているので、この「新しさ」は「新しさ」を脱ぎ落としている。
このため、「慎んで考えれば、僧達よ」なのである。「慎んで考えれば」、「僧達」は、(古い身心といった古いものを)脱ぎ落としているので。

如浄は、堂に上って、僧達に示して、「一言が(仏道に)適えば、『万古』、『永遠』に移り変わらない。『柳眼』、『柳の芽』は新しい枝を出す。梅の華は古い枝に満ちる」と言った。

仏に成るまでの「百大劫」の、仏道をわきまえる事とは、最初から最後まで、一言が(仏道に)適《かな》う事なのである。(仏に成るには「三阿僧祇劫」と「百大劫」という長い年月がかかると言う場合が有る。)

「一念頃」、「一瞬」の鍛錬は、前後と同じく、永遠に移り変わらないのである。

新しい枝を繁栄させて「眼睛」、「見る眼」を明らかにするので、新しい枝であっても「眼睛」、「見る眼」なのである。

「眼睛」、「見る眼」は他には無いのが道理であるが、「眼睛」、「見る眼」を新しい枝として参入して究めるのである。

「新しい枝」の「新しい」は、「万物は皆、新しく成った」という如浄の言葉に学ぶべきである。

「梅の華は古い枝に満ちる」と言っているが、「梅の華は、全ての古い枝なのである」し、「梅の華は、古い枝の全体なのである」。

「古い枝」とは「梅の華」なのである。

例えば、華と枝は同じ枝に参入するのであるし、華と枝は同じ枝に生じるのであるし、華と枝は同じ枝に満ちるのである。

華と枝は同じ枝に満ちるので、「私(、釈迦牟尼仏)には『正法眼蔵(涅槃妙心)』、『正しくものを見る眼(と寂滅した妙なる心)』が有り、(摩訶)迦葉に付属する」なのであるし、面々の顔に「拈華(瞬目)」が満ちるのであるし、華々に「破顔(微笑)」が満ちるのである。

如浄は、堂に上って、僧達に示して、「柳《ヤナギ》は腰の帯を飾る。梅の華は『臂鞲』、『籠手《こて》』に絡《から》みつく」と言った。

「臂韝」、「籠手」は、蜀の宝と言われた「蜀錦」、「蜀江の錦」ではなく、宝石の原石である「和璧」、「和氏の璧」ではなく、梅の華の「華開」、「花開く事」なのである。

梅の華の「華開」、「花開く事」とは、「あなたは私の髄を得た」(、「あなたは私を会得した」)なのである。

波斯匿王は、釈迦牟尼仏の弟子の賓頭盧を招いて食べ物を捧げた時に、「『賓頭盧様は釈迦牟尼仏に親しく見えて来ている』と聞いておりますが、そうなのか否か?」と質問した。

賓頭盧は、手で眉毛を起こして、「釈迦牟尼仏に親しく見えて来ている」事を示した。

如浄は、詩で、「(釈迦牟尼仏の弟子の賓頭盧は、)『かつて釈迦牟尼仏に親しく見えたのは明らかである』と、眉毛を起こして(波斯匿王の)質問に答えた。(賓頭盧は、)今に至るまで四天下で『応供』、『供え物を受けるのに相応しい者』、『阿羅漢』である。春は梅の『梢』、『枝先』(の芽)に存在していて、雪を帯びて寒い(ので、眉毛を起こす)」と言った。

波斯匿王（プラセーナジット）の話は、波斯匿王（プラセーナジット）が、ある時、釈迦牟尼仏の弟子の賓頭盧（ピンドーラ）が「見仏している」、「仏を『見ている』、『理解している』」のか未だなのかを質問したのである。

「見仏している」、「仏を『見ている』、『理解している』」とは、「仏に成っている」という事なのである。

「仏に成っている」とは、「眉毛（まゆげ）を起こしている」事なのである。

もし賓頭盧が、ただ阿羅漢果を証していても、真の阿羅漢でなければ、「見仏できない」、「仏を『見る事ができない』、『理解できない』」。

「見仏できなければ」、「仏を『見る事ができなければ』、『理解できなければ』」、仏に成る事はできない。

仏に成る事ができなければ、仏として眉毛（まゆげ）を起こす事はでき得なかったであろう。

そのため、知るべきである。

釈迦牟尼仏が面授した弟子として既に四果を証して後の仏の「この世」への出現を待つ賓頭盧（ピンドーラ）が釈迦牟尼仏を(肉眼で)見ていないわけがない！

(肉眼で)釈迦牟尼仏を見る事は、「見仏している」、「仏を『見ている』、『理解している』」事ではないのである。

釈迦牟尼仏のように釈迦牟尼仏を見ている事を「見仏している」、「仏を『見ている』、『理解している』」と学んで来ている。

波斯匿王（プラセーナジット）は、学に参入する見る眼を開く事ができ得た所で、賓頭盧（ピンドーラ）の眉毛（まゆげ）を起こすという好い手段に出会ったのである。

「かつて釈迦牟尼仏に親しく見（まみ）えた」という言葉の主旨を静かに学ぶ事ができる見る眼が有るべきである。

「春」は、人間には無く、仏の国だけに限らず、「梅の『梢（こずえ）』、『枝先』（の芽）」に有る。

なぜ、そうであると知っているのか？

雪の寒さが眉毛（まゆげ）を起こすからである。

如浄は「本来の『面目』、『有様（ありよう）』には生死が無い。春は梅の華に存在していて、絵に入る」と言った。

春を描くのに、柳（ヤナギ）、梅、桃、李（スモモ）を描くべきではない。正に、春を描くべきである。

柳（ヤナギ）、梅、桃、李（スモモ）を描くのは、柳（ヤナギ）、梅、桃、李（スモモ）を描いているのであり、未だ春を描いているわけではない。

春は描く事ができないわけではない。

けれども、如浄の他には、西のインドから東の地の中国までの間で、春を描いている人は未だいない。

独り如浄だけが春を描く尖っている筆（ふで）の先なのである。

今の春は、絵の春なのである。「絵に入る」ので。

他の力量を訪ねず、ただ梅の華によって春を遣（つか）わさせるので、「絵に入る」し、木に入るのである。

善い巧みな手段で人を導いているのである。

如浄は、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」が明らかであるので、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を過去、現在、未来の十方に集まっている仏祖に正しく伝えている。

このため、「眼睛」、「見る眼」を究め徹して、梅の華を花開かせて明らかにしている。

正法眼蔵　梅華

その時、千二百四十三年、越州の吉田県の吉嶺寺にいた。

雪が深く三尺も積もっていて大地に広々と果てしなく広がっている。

（三尺は約九十センチ。）

もし自ずから自分という「魔」、「疑惑」が来て、「梅の華は釈迦牟尼仏の『眼睛』、『見る眼』ではない」と思ってしまえば、思量するべきである。

梅の華以外の、どんなものが、梅の華よりも「眼睛」、「見る眼」に成り得るとして挙げて来て「眼睛」、「見る眼」と見る事ができるのか？

梅の華の外に「眼睛」、「見る眼」を求めてしまえば、その時も、いつでも、「対面していても理解できない」のであるし、「出会っていても考えを未だ拈出できない」ので。

今日は、私の今日ではなく、全ての人々の今日なのである。

直に、梅の華と「眼睛」、「見る眼」を開かせて明らかにできるであろう。

外に求める事は止めなさい。

如浄は「明らかである。歴然と明らかである。梅の華の影の中に求める事を止(や)めなさい。古くから、今も、雨を為すし、雲を為す。古今、空(むな)しく、限りが無い」と言った。

そのため、「雨を為し、雲を為す」のは梅の華の仕業(しわざ)なのである。
雨が降り、雲が動くのは、梅の華の千に無数に曲がり万に無数に重なった色なのであるし、千、万の無数の功徳なのである。
古くから、今は、梅の華なのである。
梅の華を「古今」と言っているのである。

昔、五祖山の法演禅師は「北風が雪に加わって谷の林を振るわせる。万物は潜み隠れても恨みは深くは無い。ただ峰の梅だけが存在していて意気が多い。年末の前に寒さが厳しい時の心を吐き出す」と言った。

梅の華の事情に通じないと、「寒さが厳しい時の心」を知り難い。
梅の華は、少しの功徳を北風に加えて雪と成している。
測り知る事ができる。
風を引き寄せ、雪を成し、年月に順序を存在させ、谷の林や万物を存在させているのは皆、梅の華の力なのである。

太原の孚上座は、悟りをたたえて、「思えば、昔、当初、未だ悟っていなかった時は、ある笛の音で悲しく成った。今は、枕(まくら)の上で静かな夢を見る事が無くても、梅の華が(春風を)大小に吹かせるのに一任している」と言った。

太原の孚上座は、元・講者であった。

太原の孚上座は、夾山の、食事を司る「典座」の僧に啓発されて大いに悟った。

梅の華が春風を大小に吹かせるのである。

十方

「拳頭」、「拳」一つが、ただ、この十方なのである。
真心の一欠片が、宝玉のように美しい十方なのである。
骨の中の髄を叩き出し終わっているのである。

「法華経」の「方便品」で、釈迦牟尼仏は、集まっている者達に、「十方の仏土の中には、ただ一乗の法だけが有る」と言った。

仏土を持って来て十方を形成している。
このため、仏土をひねって来なければ、十方は未だ無いのである。
十方は仏土であるので、仏を主と為す(な)のである。
「娑婆(しゃば)」、「苦しみを耐え忍ぶ場所」である国土である「この世」は釈迦牟尼仏の仏土であるような物である。
「娑婆(しゃば)」、「苦しみを耐え忍ぶ場所」である「この世」を挙げてひねって、「八両、半斤」を明らかに記して、十方の仏土が「七尺、八尺」である事の学に参入するべきである。
(一斤は十六両。半斤は八両。)

この十方は、一方に入るし、一人の仏に入る。このため、十方は現されている。

十方の一方は、この方向、自分という方向、今という方向であるので、

「眼睛」、「見る眼」の方向なのであるし、

「拳頭」、「拳」の方向なのであるし、

寺の円柱の方向なのであるし、

灯籠の方向なのである。

十方の仏土の十方の仏には未だ「大小」、「優劣」は無いし、清浄も汚れも無い。

このため、十方の「仏と仏だけ」が、ほめ合うのであるし、さらに、悪口を言い合って長所と短所や好き嫌いを説く事を「法輪を転じる事」、「法を説く事」としない。

諸仏や仏の子として、助け起こして、合掌し低頭し安否を尋ねるのである。

仏祖の仏法を受けるには、このように学に参入するのである。

仏は、外道や「魔」、「仏敵」の仲間のように是非を論じて批評しないのであるし、悪口を言って辱(はずかし)めないのである。

今、中国に伝わっている仏の経を開いて調べて見て、釈迦牟尼仏という一つの化の導きの最初から最後までを見ると、釈迦牟尼仏は未だかつて、「他方の諸仏が劣っている」と説かなかったし、

「他方の諸仏が優れている」と説かなかったし、

「他方の諸仏は諸仏ではない」と説かなかった。

諸仏の是非を論じて批評する釈迦牟尼仏の言葉は、釈迦牟尼仏の一代の説教で全く見る事ができない。

釈迦牟尼仏の是非を論じて批評する仏の言葉も伝わっていない。

このため、「法華経」の「方便品」で、釈迦牟尼仏は、集まっている者達に、「唯我知是相。十方仏亦然」、「ただ私だけが、この相を知っている。十方の仏もまた、そうである」と言った。

知るべきである。「ただ私だけが、この相を知っている」の「相」とは、打っている「円相」、「悟りの象徴としての円」なのである。「円相」、「悟りの象徴としての円」とは、「どうして、この竿は、この長さを得ているのか？」なのであるし、「どうして、あの竿は、この短さを得ているのか？」なのである。

十方の仏の言葉は、「唯我知是相。釈迦牟尼仏亦然」、「ただ私だけが、この相を知っている。釈迦牟尼仏もまた、そうである」という説明なのである。

「唯我証是相。自方仏亦然」、「ただ私だけが、この相を証している。自分という方向の仏もまた、そうである」なのである。

「円相」、「悟りの象徴としての円」とは、私の相、知の相、この相、一切の相、十方の相、「『娑婆』、『苦しみを耐え忍ぶ場所』である国土の相」、釈迦牟尼仏の相なのであり、その主旨は、仏の経なのである。

諸仏と仏土は、二つのものではないし、
情の有る者ではないし、情の無い物ではないし、
迷いと悟りではないし、
善や、悪や、「無記」、「善悪に分け難いもの」などではないし、
清浄でも汚れでもないし、
「成住壊空」という「四劫」ではないし、
「常」、「不変」ではないし、「無常」、「変化する」わけではないし、
「有」、「存在」ではないし、無ではないし、
自分ではないし、他のものではない。

諸仏と仏土は、「肯定、否定、肯定かつ否定、肯定でも否定でもない」という「四句分別」を離れる事なのであるし、「百非」を絶する事なのである。

諸仏と仏土は、ただ十方であるだけなのであるし、仏土であるだけなのである。

そのため、十方は、「頭が有るが尾が無い人」であるだけなのである。

長沙景岑は、僧達に、「尽十方界は、『沙門』(、『修行者』である自己)の単眼である」と言った。

「尽十方界は、『沙門』、『修行者』である自己の単眼である」とは、釈迦牟尼仏、沙門の「眼」、「見る眼」の一つなのである。

釈迦牟尼仏、沙門の「眼」、「見る眼」とは、「私(、釈迦牟尼仏)に有る『正法眼蔵』、『正しくものを見る眼』」なのであり、二祖の阿難陀に付属しても釈迦牟尼仏、沙門の「眼」、「見る眼」なのである。

尽十方界が角ばっている、尖(とが)っているのは、釈迦牟尼仏の眼なのである。

尽十方界は、沙門の「眼」、「見る眼」の中の一つなのであり、向上すると多数の眼が有る。

長沙景岑は、「尽十方界は、『沙門』(、『修行者』である自己)の日常の言葉である」と言った。

「日常」とは、「普通」なのである。日本の俗の言葉では、「世の常」と言う。

「沙門」、「修行者」の「日常の」、「世の常の」、「普通の」言葉は、尽十方界なのであり、端正な言葉なのである。

日常の言葉は尽十方界であるので、「尽十方界は日常の言葉である」という道理に明らかに参入して学ぶべきである。

十方は無尽であるので尽十方なのであり、日常に尽十方界という言葉を用いるのである。

「塩」、「器」、「水」、「馬」を意味する「仙陀婆」を求めるような物であるし、どの意味の「仙陀婆」であるか理解して渡すような物である。

「没量大人」、「量る事ができないほど大いなる人」が尽十方界という「語脈」、「言葉と言葉のつながり」の中で身と脳を転じる事を誰が知っているだろうか？

「語脈」、「言葉と言葉のつながり」の中で言葉を転じるのである。

海の口と山の舌が端正な正直な言葉を話すのは日常なのである。

そのため、口を覆い耳を覆っても、十方の真の日常の言葉なのである。

長沙景岑は、「尽十方界は、『沙門』(、『修行者』である自己)の全身である」と言った。

一方の手で天を指しているのは天なのであるし、もう一方の手で地を指しているのは地なのであるが、「天上天下唯我独尊」、「天上と天下で、ただ私、独りだけが尊い」のである。

一方の手で天を指して、もう一方の手で地を指して、「天上天下唯我独尊」、「天上と天下で、ただ私、独りだけが尊い」とは、「沙門」、「修行者」の全身である十方尽界なのである。

「頂上」、「頭」や、「眼睛」、「見る眼」や、「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」や、「皮肉骨髄」、「理解」の個々は皆、尽十方を透過して脱ぎ落とす「沙門」、「修行者」の身なのである。

尽十方に動揺せず、尽十方を透過して脱ぎ落とすのである。

疑義を抱かず、量らず、尽十方界である「沙門」、「修行者」の身をひねって来て、尽十方界である「沙門」、「修行者」の身を見るのである。

長沙景岑は、「尽十方界は、自己の光明である」と言った。

自己とは、父と母から生まれる前の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」なのである。

「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」が誤って自己の手中に有るのを「尽十方界」と言う。

自己が形成されて現されて、形成されて現された手がかりと成るし、仏殿を開けて仏を「見る」、「理解する」のである。

けれども、「眼睛被別人換却木槵子了也」、「別の人によって『眼睛』が木槵子に換えられた」。

(木槵子の果実の種は数珠に用いられる。)

けれども、正面から向かって来れば、全ての人々と見(まみ)える事ができ得る。

さらに、呼ぶのは簡単であるが、遣(つか)わすのは難しいのであるが、呼んで頭の向きを変える事ができ得れば、自ら頭の向きを変えるが、何の役に立つのか？

「この人」(、「仏」)に付いて行って頭の向きを変えるのである。
御飯は食べてくれる人を待つし、衣は着てくれる人を待つ時、模索しても明らめる事ができなくても、惜しいのである、あなたにはかつて三十回の棒の打撃を与えてある。

長沙景岑は、「尽十方界は、自己の光明の中に在る」と言った。

眼皮一枚を「自己の光明」とする。
突然に打って綻ぶのを「中に在る」とする。
眼が在る事によって見える事を「尽十方界」と言う。
しかも、このようであっても、同じ寝床で眠れば、掛け布団に穴が穿たれている事を知る。

長沙景岑は、「尽十方界が自己ではない者は一人もいない」と言った。

そのため、個々の者、個々の「拳頭」、「拳」が自己ではない十方は一つも無い。
自己であるので、自己達は皆、十方なのである。
自己達の十方は、親しく十方を遮るのである。

自己達の命は共に、自己の手中に有るので、他のものに本分の餌(えさ)を返還するのである。

今、なぜか、二十八祖の達磨の「眼睛」、「見る眼」と、釈迦牟尼仏の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」は、新たに寺の円柱の胎内に有る。

出入りは、十方の十面に一任するのである。

宗一大師と呼ばれる玄沙師備は、「十方世界の尽(ことごと)くは、『一顆明珠』、『一粒の光明に輝く宝玉』である」と言った。

明らかに知る事ができる。

「一顆明珠」、「一粒の光明に輝く宝玉」は、十方世界の尽(ことごと)くなのである。

天人や霊の面々は、「一粒の光明に輝く宝玉」を棲み家(すか)としている。

仏祖の法の子孫は、「一粒の光明に輝く宝玉」を「眼睛」、「見る眼」としている。

人々は、「一粒の光明に輝く宝玉」を「頂上」、「頭」や、「拳頭」、「拳」としている。

初心者や後進の者は、「一粒の光明に輝く宝玉」を衣を着る事や、御飯を食べる事としている。

道元の亡き師、五十祖の如浄は、「一粒の光明に輝く宝玉」を泥の塊(かたまり)として仏祖の法の兄弟を打った。

(「泥の塊」は「無価値なもの」や「人の肉体」を意味する場合が有る。)

これは単一に伝える一手なのであるが、代々の祖師達の「眼睛」、「見る眼」を抉(えぐ)り出して来ている。

代々の祖師達の「眼睛」、「見る眼」を抉(えぐ)り出す時、代々の祖師達は共に一つの手を差し出してくれる。

さらに、「眼睛」、「見る眼」の中で光を放つだけなのである。

ある僧が、ある時、乾峰に、「十方の仏は一路、涅槃の門へ進む。一体、涅槃の門への道は、どこに存在するのでしょうか？」と質問した。

乾峰は、杖で一つの線を描いて、「この中に存在する」と言った。

「この中に存在する」とは、十方の事なのである。

(十方の)仏とは、杖なのである。

杖とは、「この中に存在する」なのである。

「一路」、「涅槃の門への道」とは、十方なのである。

けれども、釈迦牟尼仏の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」の中に杖を隠す事なかれ。

杖の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」の中に杖を隠す事なかれ。

杖の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」の中に杖を突き当たらせる事なかれ。

しかし、「乾峰は既に『十方の仏は一路、涅槃の門へ進む』事を料理している」と認める事なかれ。

乾峰は、ただ「この中に存在する」と言い表しただけなのである。

「この中に存在する」事は無いわけではないが、乾峰が最初から杖によって、だまされていなければ良いのだが。

活きている「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」を十方として学に参入するだけなのである。

正法眼蔵　十方

その時、千二百四十三年、越州の吉峰精舎にいて僧達に示した。

見仏

釈迦牟尼仏は、集まっている者達に、「もし諸々の相と『非相』、『相ではないもの』を見るならば、如来を見るのである」と言った。

「諸々の相を見る事」と「相ではないものを見る事」は、煩悩を透過して脱ぎ落としている体得による通達なのである。
そのため、「如来を見るのである」。

「諸々の相を見る」し「相ではないものを見る」という、仏を見る眼に既に参入して開いている事が形成されて現されている事を「仏を見る事」とする。

仏を見る眼の活路とは、仏の見る眼への参入なのである。

自分の仏を他方に見たり、仏の外に自分の仏を見る時、個々の蔓枝であっても、仏を見る事を学として参入していると、
仏を見る事をわきまえて受け入れると、
仏を見る事を脱ぎ落とすと、
仏を見る事を活として得ると、
仏を見る事を使う事ができ得ると、日面仏が見るのであるし、月面仏が見るのである。

これらの「仏を見る事」は共に、尽きる事が無い「面」、「有様（ありよう）」による「仏を見る事」なのであるし、
尽きる事が無い身による「仏を見る事」なのであるし、
尽きる事が無い心による「仏を見る事」なのであるし、
尽きる事が無い「眼が有る手」による「仏を見る事」なのである。

今、つま先まで振る舞（ふま）っている、悟りを求める事を思い立って心して活動を始めてから今までの、仏道をわきまえる鍛錬や、証が仏道に適（かな）うように究めて徹す事は皆、「仏を見る事」の中に走って入る、活きている「眼睛」、「見る眼」なのであるし、活きている「骨髄」、「理解」なのである。

そのため、自分の尽界も、他のものの尽方も、この頭も、あの頭も、同じく、「仏を見る」鍛錬なのである。

如来、釈迦牟尼仏の言葉の「もし諸々の相と『非相』、『相ではないもの』を見るならば」をひねって来ると、学に参入する見る眼が無い輩は「『諸々の相を相ではないと見るのが、如来を見る事である』と言っている。その趣旨は、『諸々の相を相ではなく如来であると見る』と言っている」と思う。

実に、小量の一辺としては「諸々の相を相ではなく如来であると見る」とも学に参入するべきであるが、釈迦牟尼仏の意図は、言葉に成しているのは、そうではないのである。

知るべきである。

諸々の相を見て理解して取り、「非相」、「相ではないもの」を見て理解して取る事は、如来を見る事なのである。
如来がいるし、「非如来」、「如来ではないもの」がいる。

清涼院の大法眼禅師と呼ばれる清涼文益は、「もし諸々の相は相ではないと見れば、如来を見れない」と言った。

清涼文益の言葉は、「仏を見る」言葉なのである。
「仏を見る」言葉に、清涼文益の言葉が有るし、釈迦牟尼仏の「仏を見る」言葉が有って、言葉の意味を通じさせると、競って頭を出して来るのであるし、共に手を出すのである。
清涼文益の言葉は耳で聞いて知るべきであるし、釈迦牟尼仏の「仏を見る」言葉は眼で声を聞くべきである。

それなのに、「仏を見る」言葉の主旨を学ぶ従来の人々は、誤って「諸々の相は如来の相なのであり、如来の相ではない相は一つの相も混ざっていない。
仮にも相を相ではないとするべきではない。
相を相ではないとすれば、父を捨てて逃げ去るような物なのである。
相は如来の相なので、釈迦牟尼仏は『諸々の相は諸々の相なのである』と言っているのである」と思ってしまっているし、言って来てしまっている。

実は、「仏を見る」言葉は、大乗の究極の話なのであり、諸方の仏祖が証している物なのである。

「『仏を見る』言葉は、大乗の究極の話なのである」と決定的に唯一に思い定めて、信じて受け入れて、参入して受け取るべきである。

さらに東西の風に従う軽い毛のような者である事なかれ。

「諸々の相は、如来の相であり、『相ではないもの』ではない」と参入して究めて、「仏を見て」、決定的に証して信じて、受け取って保持するべきであるし、読んで、通じて利益を得るべきである。

このようにして、自己の目と耳での見聞きを絶え間無くさせるべきであるし、

自己の身心と「骨髄」、「理解」を脱ぎ落とさせるべきであるし、

自己の山や河や尽界を透過して脱ぎ落とさせるべきである。

これが、学に参入している仏祖の旅なのである。

「自己の言動では、自己の『眼睛』、『見る眼』を明らかにできない」と思う事なかれ。

自己の心を一転させる言葉に転じられて、自己の心を一転させる仏祖を見て、(古い心を)脱ぎ落とすのである。

これが、仏祖の日常なのである。

このため、学に参入して理解して取る一個の道が有る。

「諸々の相は『相ではないもの』ではない。

『相ではないもの』は諸々の相に成るのである。

（『相ではないもの』は諸々の相を成すのである。）
『相ではないもの』は諸々の相に成るので、『相ではないもの』は実に『相ではないもの』なのである。
『諸々の相』と呼んでいるものも、『相ではないもの』と呼んでいるものも共に、如来の相なのである」と学に参入するべきである。

学に参入する者の家の中には、二つの見方が有る。
経典を見て学に参入する事と、経典を見ないで学に参入する事である。
これは、活きている「眼睛」、「見る眼」による学に参入する方法なのである。
もし二つの見方に目をつけて未だ学に参入し徹していなければ、学に参入し徹した見る眼を持っていないし、学に参入し徹した見る眼を持っていなければ、「仏を見れない」。

仏を見て学に参入する方法には、諸々の相を見て学に参入する方法と、「相ではないもの」を見て学に参入する方法が有るが、仏を見て学に参入する方法だけでは、「私は仏法を会得できない」のである。
仏を見ないで学に参入する方法には、諸々の相を見ないで学に参入する方法と、「相ではないもの」を見ないで学に参入する方法が有る。
仏を見て学に参入する方法と、仏を見ないで学に参入する方法によって、「仏法を会得している人を得る」のである。
清涼文益の言葉の八、九割は、このような物なのである。

けれども、次のように、仏を見る一大事の話では更に言うべきである。

「もし諸々の相を実の相であると見れば、如来を見る」。

これらの言葉は皆、釈迦牟尼仏の加護の力による物なのである。

釈迦牟尼仏の「面目」、「有様(ありよう)」の「皮肉骨髄」、「理解」なのである！

「法華経」の「法師品」で、釈迦牟尼仏は、その時、霊鷲山にいて、薬王菩薩、集まっている者達に、「もし『法師』(、『仏法の師』)に親近すれば、(速やかに)菩薩の道を得る事に成る。この師に従って学べば、恒沙の(無数の)仏を見る事ができ得る」と言った。

「『法師』、『仏法の師』に親近する」とは、二十九祖の慧可が師である二十八祖の達磨に八年、仕えたような事である。二十八祖の達磨に八年、仕えた後で、二十九祖の慧可は、「全臂得髄」、「全き腕(のような力量)で髄を会得した」のである。

「『法師』、『仏法の師』に親近する」とは、三十四祖の南嶽の懐譲が十五年、仏道をわきまえたような事である。

「師の髄を得る事」、「師の理解を会得する事」を「師に親近する」と言うのである。

「菩薩の道」とは、大鑑禅師から南嶽の懐譲への言葉である「(ただ、諸仏は汚染されない事を護ろうと念頭に置いているのである。)あなたもまた、そうである。私も、またそうである。(西のインドの祖師達もまた、そうである)」なのである。

多数の蔓枝の振る舞い(ふま)を「得る事に成る」のである。「(菩薩の道を)得る事に成る」とは、古くから現れているものを引き寄せて得るわけではなく、未だ生じていないものを起こして得るわけではなく、現在の広々と果てしなく広がっているものを計画して把握するわけではなく、親近して得るのを脱ぎ落とす事を「得る事に成る」と言うのである。

このため、一切の会得は「得る事に成った事」なのである。

「この師に従って学ぶ」とは、「なお、そばに仕える侍者であった」古くからの行跡なのであり、参入して究めるべきである。

「この師に従って学んで」生活した時、「見る事ができ得る事」を受け継ぐ事が有る。

受け継ぐ物は、「恒沙の無数の仏を見る事」なのである。

「恒沙の無数の仏」は、面々が魚の様に活発なのである。

強引に「恒沙の無数の仏を見る事」に走って、へつらう事なかれ。

まず、当然、「師に従って学ぶ事」に励む(はげ)べきである。

「師に従って学べば、仏を見る事ができ得る」のである。

「法華経」の「安楽行品」で、釈迦牟尼仏は、一切の「菩提」、「覚」を証している者達に、「禅定に深く入って、十方の仏を見る」と言った。

尽界は深いのである。十方の仏土の中なので。

尽界は、広いわけではないし、大きいわけではないし、小さいわけではないし、狭いわけではない。

尽界を挙げようとすれば、他のものによって挙げる事ができる。これを「全収」、「全て収まる事ができる」と言う。

尽界は、「七尺、八尺」ではないし、「一丈」ではない。

尽界は「全収」、「全て収まる事ができる」と言う外に無くて、「入る」、「入る事ができる」と言う一言なのである。

尽界に「深く入る」事は、「禅定」なのである。

「禅定に深く入って、十方の仏を見る」のである。

「中に深く入ると、彼を接する人がいない」で存在でき得るので、「十方の仏を見る」のである。

「たとえ来ても、他もまた受ける事ができない」ので、仏は十方に存在するのである。

「深く入る」と「長々と出る事ができ得ない」のである。

「十方の仏を見る」とは、横たわっている如来を見るだけなのである。

「禅定」は、「入ると出る事ができ得ない」のである。

真の竜を不思議に思い恐怖しないのであれば、さらに、仏を見ている今、激しい疑いを投げ捨てる事も無い。
(中国で、竜の彫刻の名人が、真の竜を見て、自分の彫刻との違いに驚いた、と言われている。)
仏を見て更に仏を見るので、禅定から禅定へ深く入って行く。
禅定や、「仏を見る事」や、「深く入る」などの道理は、昔、暇な鍛錬した人がいて作って置いて、今の人に伝授しているわけではない。
今の新しい物ではないが、禅定や、「仏を見る事」や、「深く入る」などの道理は、必然な物なのである。
一切の、仏道を伝える事と、仏の教えを受ける事は、必然な物なのである。
修行という原因は悟りを感得するという結果をもたらす事は、必然な物なのである。

「法華経」の「普賢菩薩勧発品」で、釈迦牟尼仏は、普賢菩薩に、「もし、この法華経を受け取って保持し、読み、正しく記憶し、習って修行し、書き写す人がいれば、まさに知るべきである、この人は釈迦牟尼仏を見て、この経典を仏の口から聞いたような物なのである」と言った。

一切の諸仏は、釈迦牟尼仏を見て、釈迦牟尼仏に成るのを「仏道を成就して仏に成る」と言うのである。
「仏道を成就して仏に成る」という仏の事は、本より、「法華経を受け取って保持する事、読む事、正しく記憶する事、習って修行する事、書き写

す事、釈迦牟尼仏を見る事、釈迦牟尼仏に成る事」という七種類の行いの個々より得るのである。

「法華経を受け取って保持する事、読む事、正しく記憶する事、習って修行する事、書き写す事、釈迦牟尼仏を見る事、釈迦牟尼仏に成る事」という七種類の行いを行う人は、「まさに知るべきである、この人は釈迦牟尼仏を見て、この経典を仏の口(くち)から聞いたような物なのである」の当人なのである。

「釈迦牟尼仏を見た」ので、「この経典を親しく仏の口(くち)から聞いたような物なのである」。

釈迦牟尼仏は、釈迦牟尼仏を見た時のままの釈迦牟尼仏なのである。

このため、釈迦牟尼仏の舌の相は遍(あまね)く三千世界を覆っていて、どの山も海も仏の経なのである！

このため、法華経を書き写す当人は独り釈迦牟尼仏を見るのである。

仏の口(くち)は普通に古くから開いている。

いつでも経典なのである！

このため、法華経を受け取って保持する修行者だけが釈迦牟尼仏を見るのである。

仏の眼、耳、鼻などの功徳も、古くから遍(あまね)く三千世界を覆っているので、いつでも、どこでも、仏の経なのである。

前後左右も、取捨も、一時も、仏によって古くから遍(あまね)く覆われているのである。

今、仏の経典に生まれて出会っているのである。

釈迦牟尼仏を見た事を喜ぶべきである！

生きたまま釈迦牟尼仏に出会ったのである。

身心を励まして、「この法華経を受け取って保持し、読み、正しく記憶し、習って修行し、書き写す人は、釈迦牟尼仏を見る」べきなのである。

「この経典を仏の口から聞いたような物なのである」。誰が仏の経典を競って聞かないであろうか？

仏の経典を聞く事を急がないし、努めない者は、福徳と智慧が貧しいか、福徳と智慧が無い生者なのである。

仏の経典を習って修行する人は、「まさに知るべきである、この人は釈迦牟尼仏を見たのである」。

「法華経」の「分別功徳品」で、釈迦牟尼仏は、集まっている者達に、「もし善い男子達や善い女の人達が、私(、釈迦牟尼仏)の寿命は長いと説くのを聞いて、『深心』、『深い信心』で、信じて理解すれば、仏が『耆闍崛山』、『霊山』に常に存在して大いなる菩薩と諸々の声聞達に囲まれて説法するのを見る。また、『娑婆』、『苦しみを耐え忍ぶ場所』である『この世』は、地が瑠璃で、平坦であるのを見る」と言った。

「深心」、「深い信心」が「娑婆」、「苦しみを耐え忍ぶ場所」である「この世」に成るのである。

「信じて理解する」とは、「回避する場所が無い」のである。

「誠諦」、「真実」である釈迦牟尼仏の言葉を誰が信じて理解しないであろうか？　いいえ！

この経典に出会ったのは、「信じて理解する」機会、縁なのである。

この法華を「深心」、「深い信心」で「信じて理解する」ために、「釈迦牟尼仏の寿命が長い事」を「深心」、「深い信心」で「信じて理解する」ために、「娑婆（しゃば）」、「苦しみを耐え忍ぶ場所」である「この世」に願って生まれて来ているのである。

如来の、神の力、慈悲の力、寿命が長い力について、よく、心をひねって信じて理解させ、
身をひねって信じて理解させ、
尽界をひねって信じて理解させ、
仏祖をひねって信じて理解させ、
「諸法」、「全てのもの」をひねって信じて理解させ、
実の相をひねって信じて理解させ、
「皮肉骨髄」、「理解」をひねって信じて理解させ、
「生と死が来たり去ったりする事」をひねって信じて理解させるのである。
これらの信じて理解する事が、「仏を見る事」なのである。

そのため、知る事ができる。
心の眼が有って、「仏を見る」のであるし、信じて理解する眼を得て、「仏を見る」のである。

「仏を見る」だけではなく、「『耆闍崛山』、『霊山』に常に存在するのを見る」と言っているのは、「『耆闍崛山』、『霊山』が常に存在する事」は如来の寿命と同一だからである。

そのため、「仏が『耆闍崛山』、『霊山』に常に存在するのを見る」とは、前から、如来と「耆闍崛山」、「霊山」は共に常に存在しているのであるし、後々も、如来と「耆闍崛山」、「霊山」は共に常に存在するのである。

菩薩と声聞も、同様に、常に存在しているのである。

説法もまた、同様に、常に存在しているのである。

「『娑婆（しゃば）』、『苦しみを耐え忍ぶ場所』である『この世』は、地が瑠璃（るり）で、平坦であるのを見る」。

「娑婆（しゃば）」、「苦しみを耐え忍ぶ場所」である「この世」を見る事に動揺するべきではない。

高い所は高くて平らなのであるし、低い所は低くて平らなのである。

「この世」の地は、瑠璃（るり）の地なのである。

「『この世』は地が瑠璃（るり）であると見る事」を「平坦であると見る」目を軽んじる事なかれ。

瑠璃を地と為（な）している地は「平坦」なのである。

「この世」の地を「瑠璃ではない」としてしまえば、「耆闍崛山」、「霊山」は「耆闍崛山」、「霊山」ではなく成ってしまうであろうし、釈迦牟尼仏は釈迦牟尼仏ではなく成ってしまうであろう。

「『この世』は地が瑠璃（るり）である事」を信じて理解する事が、深く信じて理解する相なのであるし、「仏を見る事」なのである。

「法華経」の「如来寿量品」で、釈迦牟尼仏は、集まっている者達に、「一心に仏を見たいと欲して、身の命を自ら惜しまなければ、その時、私(、釈迦牟尼仏)と僧達は共に『霊鷲山』に出現してみせるのである」と言った。

「一心に仏を見たいと欲する」の「一心」とは、凡人や「二つの乗り物」の段階の人などが言う「一心」ではない。

仏を見る一心なのである。

仏を見る一心とは、霊鷲山なのであるし、僧達なのである。

今の個々の人が密(ひそ)かに「仏を見たいと欲する」心をもよおすのは、霊鷲山の心を凝(こ)らして「仏を見たいと欲している」のである。

そのため、「一心」は既に霊鷲山なのである。

一身は心に共に出現してみせるのである！

共に一つの身心なのである！

身心は既に共に一つなのである。

寿命もまた既に身心と共に一つなのである。

そのため、身の命を自ら惜しむ事を霊鷲山が無上の仏道を惜しむだけである事に一任する。

このため、「私(、釈迦牟尼仏)と僧達は共に『霊鷲山』に出現してみせる事」を「仏を見る一心」と言う。

「法華経」の「見宝塔品」で、釈迦牟尼仏は、集まっている者達に、「もし、この(法華)経を説けば、私(、釈迦牟尼仏)、多宝如来、諸々の『化仏』、『化身』を見る」と言った。

この(法華)経を説く事には、「法華経」の「如来寿量品」の「私(、釈迦牟尼仏)は『ここ』、『この世』に常に住んでいるが、諸々の神通力によって、(心が)転倒している生者に、近くにいても見えないようにしている」力が有るのである。

表裏一体の神通力の如来に「私(、釈迦牟尼仏)などを見る」功徳が備わっている。

「法華経」の「如来神力品」で、釈迦牟尼仏は、集まっている者達に、「能く、この(法華)経を保持する者は、既に私(、釈迦牟尼仏)を見たのである。また、多宝仏と、諸々の分身の者を見たのである」と言った。

この(法華)経を保持する事は難しいので、如来、釈迦牟尼仏は普段から法華経の保持を勧めた。
もし自ずから、この(法華)経を保持する者がいれば、仏を見たのである。
測り知る事ができる。
仏を見れば、経を保持する。
経を保持する者は、仏を見た者なのである。

そのため、経の一つの詩や詩の一句を聞いて、受け取って保持する者は、
釈迦牟尼仏を見る事ができ得たのであるし、
また、多宝仏を見たのであるし、
諸々の分身の仏を見たのであるし、
「仏法蔵」、「経」を伝えられたのであるし、
仏の「正眼」、「正しくものを見る眼」を得たのであるし、
仏の命を見る事ができ得たのであるし、
仏の向上の眼を得たのであるし、
仏の「頂上」の眼を得たのであるし、
仏の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」を得たのである。

「法華経」の「妙荘厳王本事品」で、雲雷音宿王華智仏は、妙荘厳王に、
「大いなる王よ、まさに知るべきである。善知識を持つ人々は、大いなる因縁と成るのであり、化して導いて、仏を見る事を得させて、『阿耨多羅三藐三菩提』、『無上普遍正覚』を求める心を起こさせるのである」と言った。

今この大いなる集まりは未だ「むしろ」、「敷物の座席」を巻き取っていないのである。
「過去、現在、未来の諸仏」と呼ぶが、凡人の「過去、現在、未来」を基準にするべきではない。
過去は心なのであるし、

現在は「拳頭」、「拳」なのであるし、
未来は「脳後」、「心身後」なのである。
そのため、雲雷音宿王華智仏は、過去である心に形成されて現されている「仏を見る事」なのである。
「仏を見る事」の言葉の意味を通じさせると、このように成る。
「化して導く事」は「仏を見る事」に成るのである。
「仏を見る事」は、「無上普遍正覚を求める心を起こさせるのである」。
「発菩提心」、「発心」、「悟りを求める事を思い立って心する事」は、仏を見る「頭が正しいので尾も正しい」なのである。

「法華経」の「如来寿量品」で、釈迦牟尼仏は、「諸々の功徳を修得して柔和で性質が正直な者は、皆、私(、釈迦牟尼仏)の身が『ここ』、『この世』に存在して法を説くのを見る」と言った。

「諸々の功徳」と言っているのは、「拕泥帯水」、「人を救うために泥水にまみれる事」なのであるし、「随波逐浪」、「相手に従って相手を救う事」なのである。

「諸々の功徳を修得した」者を「(ただ、諸仏は汚染されない事を護ろうと念頭に置いているのである。)あなたもまた、そうである。私も、またそうである。(西のインドの祖師達もまた、そうである)」、「柔和で性質が正直な者」と言うのである。

「柔和で性質が正直な者」として、泥の中で仏を見て来たり、波の中心で仏を見て来たりして、「『ここ』、『この世』に存在して法を説く」事に参与するのである。

それなのに、宋の時代の中国で「禅師」を自称する輩は多いが、仏法の縦横を知らないし、見聞きして学ぶ事が、とても少ない。
わずかに臨済義玄や雲門文偃の二、三の言葉を暗唱して、誤って「仏法を全て言い尽している」と思ってしまっている。
もし仏法が臨済義玄や雲門文偃の二、三の言葉によって言い尽くされていれば、仏法は今日にまで至る事ができなかったであろう。
臨済義玄や雲門文偃は、「仏法の尊い者である」とは言い難い。

まして、現在の似非(えせ)僧侶の輩は、臨済義玄や雲門文偃に及ばない、言うに及ばない輩なのである。
現在の似非(えせ)僧侶の輩は、自分が愚鈍で、仏の経の心を明らめ難いので、妄(みだ)りに仏の経の悪口を言う。
仏の経を放置して修行しない。
外道の類(たぐい)と言える。
仏の法の子孫ではない。
まして、仏を見る境地に及ぶ事などできない！
孔子や老子の主旨にすらなお至る事ができない輩なのである。
仏祖の家の中の子は、「禅師」を自称する似非(えせ)僧侶の輩に会う事なかれ。

仏を見る眼の「眼睛」、「見る眼」だけに参入して究めて体得して通達するべきである。

道元の亡き師である、古代の仏と等しい、天童山の五十祖の如浄は、次の話を挙げた。

波斯匿王(プラセーナジット)は、釈迦牟尼仏の弟子の賓頭盧(ピンドーラ)に、「『賓頭盧(ピンドーラ)様は釈迦牟尼仏に親しく見(まみ)えて来ている』と聞いておりますが、そうなのか否か？」と質問した。

賓頭盧(ピンドーラ)は、手で眉毛(まゆげ)を起こして、「釈迦牟尼仏に親しく見(まみ)えて来ている」事を示した。

如浄は、詩で、「(釈迦牟尼仏の弟子の賓頭盧は、)『かつて釈迦牟尼仏に親しく見(まみ)えたのは明らかである』と、眉毛(まゆげ)を起こして(波斯匿王の)質問に答えた。(賓頭盧は、)今に至るまで四天下で『応供』、『供え物を受けるのに相応(ふさわ)しい者』、『阿羅漢』である。春は梅の『梢(こずえ)』、『枝先』(の芽)に存在していて、雪を帯びて寒い(ので、眉毛を起こす)」と言った。

「仏を見る」とは、自分の仏を見るのではなく、他のものの仏を見るのではなく、仏を見る事なのである。

梅の唯一の枝は、梅の唯一の枝を見るので、花開く事が明らかなのである。

波斯匿王(プラセーナジット)の質問の主旨は、「賓頭盧(ピンドーラ)は、既に仏を見たのか？　仏に成ったのか？」と質問しているのである。

賓頭盧(ピンドーラ)が明らかに眉毛(まゆげ)を起こしたのは、仏を見た証拠なのであり、くらます事ができないのである。

「今に至るまで」未だ休む事が無い。

「応供」、「供え物を受けるのに相応(ふさわ)しい者」、「阿羅漢」は、現れて、隠れる事が無い。

「かつて仏に親しく見(まみ)えた事」は辿(たど)る事ができない。

「『三億』、『三十万』の家の人々は釈迦牟尼仏を見た」、「舎衛の三億」、「仏の説法には出会う事が難しいし聞く事が難しい」と言うのは、本当の意味で「仏を見る事」なのであり、仏の三十二相を見る事ではないのである。

本当の意味で「仏を見る事」が、仏の三十二相を見る事であれば、誰が境界を隔(へだ)てて遮(さえぎ)るだろうか？　いいえ！

本当の意味で「仏を見る」道理を知らない、人や天人や声聞や独覚の類(たぐい)が多い。

例えば、害虫を払うための毛がついた棒である払子を縦に起こす人が多いが、「払子を縦に起こす人は多くない」と言うような物である。

「仏を見る」とは、「仏に見られる」事が形成されて現されるのである。

たとえ自分は「覆い隠そう」と思っても、仏を見る事に先立って漏洩(ろうえい)させられるのである。

「仏に見られる事」、「自分を漏洩(ろうえい)させられる事」が、「仏を見る」道理なのである。

恒河沙のように無数の数量の身心を鍛錬して、明確に詳細に「眉毛(まゆげ)を起こす」、「面目」、「有様(ありよう)」に参入して究めるべきである。

たとえ百、千、万の無数の劫、昼も夜も、常に、釈迦牟尼仏と共に住んでいても、「眉毛(まゆげ)を起こす」力量が未だ無ければ、「仏を見ていない」のである。

たとえ二千年以上前から今まで、十万里以上の遠方にいても、「眉毛(まゆげ)を起こす」力量が親しく形成されて現されれば、釈迦牟尼仏よりも過去の仏である空王仏の時代以前から「釈迦牟尼仏を見ている」のであるし、「梅の唯一の枝を見ている」のであるし、「梅の『梢(こずえ)』、『枝先』(の芽)に存在している春を見ている」のである。

そのため、「かつて釈迦牟尼仏に親しく見(まみ)えた」とは、二十九祖の慧可が、二十八祖の達磨を三回、礼拝した後、自分の位置、居場所に戻って立った事なのであるし、
師に合掌し低頭し安否を尋ねる事なのであるし、
初祖の迦葉の「破顔微笑」なのであるし、
「拳頭」、「拳」が雷鳴を飛ばす事なのであるし、
結跏趺坐した座布団なのである。

賓頭盧(ピンドーラ)は、阿育王(アショーカ)の宮殿の大きな集まりに赴(おもむ)いて食べ物の捧げ物を受け取った。

阿育王(アショーカ)は、焼香用の香を僧に配っている時に、賓頭盧(ピンドーラ)を礼拝して、「『賓頭盧(ピンドーラ)様は釈迦牟尼仏に親しく見(まみ)えて来ている』と聞いておりますが、そうなのか否か？」と質問した。

賓頭盧(ピンドーラ)は、手で眉毛(まゆげ)を開くように、はねて、「理解できましたか？」と言った。

阿育王(アショーカ)は、「理解できませんでした」と言った。

賓頭盧(ピンドーラ)は、「『阿那婆達多龍王』、『阿耨達龍王』が仏達を招いて食べ物を捧げた時、私もまた、その仏達の数の中に入っていた」と言った。

阿育王(アショーカ)の「『賓頭盧(ピンドーラ)は釈迦牟尼仏に親しく見(まみ)えて来ている』と聞いているが、そうなのか否か？」という質問の主旨は、「賓頭盧(ピンドーラ)は既に賓頭盧(ピンドーラ)であるのか？」と質問しているのである。

その時、賓頭盧(ピンドーラ)は、速(すみ)やかに、手で眉毛(まゆげ)を開くように、はねた。

賓頭盧(ピンドーラ)が手で眉毛(まゆげ)を開くように、はねたのは、仏を見る事をこの世に出現させているのであるし、仏に成る事を親しく見させているのである。

賓頭盧(ピンドーラ)は「『阿那婆達多龍王』、『阿耨達龍王』が仏達を招いて食べ物を捧げた時、私もまた、その仏達の数の中に入っていた」と言った。

知るべきである。

仏達を招いた集まりでは、「仏と仏だけ」が、稲、麻、竹、葦(アシ)の様に多数いるのである。

仏達を招いた集まりに、四果や辟支仏は参与する事ができない。
仏達を招いた集まりに、たとえ四果や辟支仏が来ても、四果や辟支仏を挙げて仏達の数に入れる事は無い。

賓頭盧(ピンドーラ)は既に「仏達を招いて食べ物を捧げた時、私もまた、その仏達の数の中に入っていた」と自称している。
手がかり無く来ている、賓頭盧(ピンドーラ)自らの言葉なのである。
仏を見ている道理は明らかなのである。

「仏達を招いた」と言うのは、釈迦牟尼仏を招いただけではなく、無量、無限の、過去、現在、未来の十方の一切の諸仏を招いたのである。
「招かれた諸仏の数の中に入っている」事は、はばかる事が無い、はばからない、「かつて仏に親しく見(まみ)えて来ている」事なのである。
仏を見る事や、師を見る事や、自分を見る事や、あなたを見る事を指し示す事は、このようであるべきなのである。

阿那婆達多龍王とは、阿耨達龍王であり、阿耨達池の龍王なのである。
阿耨達池とは、中国や日本では、無熱悩池と訳す。

保寧仁勇は、詩で、「私の釈迦牟尼仏は、賓頭盧(ピンドーラ)に親しく見(まみ)えた。
賓頭盧(ピンドーラ)は、眉毛(まゆげ)が長いし、髪が短いし、眉毛が粗かった。
阿育王(アショーカ)ですらなお狐(キツネ)のように疑った。
唵(オン) 摩(マ)尼(ニ) 悉哩 蘇嚧(スーリヤ)」と言った。

（
「摩尼」は「宝珠」などを意味する。
「スーリヤ」はサンスクリット語で「太陽」などを意味する。
）

保寧仁勇の言葉は、十全な言葉ではないが、「仏を見る」趣(おもむ)きの学への参入に成るので、ひねって来たのである。

ある僧が、ある時、趙州真際大師に、「『和尚様、趙州真際大師様は南泉普願に親しく見(まみ)えた』と聞いておりますが、そうなのか否か？」と質問した。
趙州真際大師は、「鎮州で大きな大根の頭が出た」と言った。

趙州真際大師の言葉が形成されて現されたのは、「南泉普願に親しく見(まみ)えた」証拠なのである。

趙州真際大師の言葉は、(直接的な理解しやすい)言葉が有ったわけではなく、
言葉が無かったわけではなく、
「下語」、「師から弟子への教訓の言葉」ではなく、
言葉の意味を通じさせたわけではなく、
「眉毛(まゆげ)を起こした」わけではなく、
「眉毛(まゆげ)を開くように、はねた」わけではなく、眉毛に親しく見(まみ)えたのである。

たとえ趙州真際大師が、逸材で独歩であったとしても、親しく見(まみ)えていなければ、このように言う事はできなかったであろう。

「鎮州で大きな大根の頭が出た」という言葉は、趙州真際大師が、鎮州の「寶家園」、「真際院」という寺の主であった時の言葉である。

趙州真際大師は、後に、「真際大師」という称号を捧げられた。

趙州真際大師は、このように、仏を見る眼に参入して開いてから、仏祖の「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を正しく伝えている。

「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を正しく伝えられている時、仏が現している、静かな和らいでいる身のこなしが形成されて現されて、「仏を見る事」は、ここに、山が高くそびえているように堂々と成るのである。

正法眼蔵　見仏

その時、千二百四十三年、冬、禅師峰山にいて僧達に示した。

遍参

仏祖の大いなる仏道は、究極的に、参入し徹す事なのである。

仏祖の大いなる仏道は、足下に糸も残さないで去る事なのであるし、足下に雲を生じる事なのである。

しかも、このようであっても、「華開世界起」、「華が開いて世界が起こる」なのであるし、

「私は常に、ここにおいて、切である」なのである。

このため、「甘い瓜は『へた』まで徹して甘い」のであるし、

「苦い瓜は根まで連綿と苦い」のであるし、

「甘い甜菜は『へた』まで徹して甘い」のである。

このように、学に参入して来ている。

雪峰義存は、ある時、宗一大師と呼ばれる玄沙師備を呼んで、「玄沙師備よ、『頭陀を行う僧』よ、なぜ、『遍参するために』、『仏法を尋ねるために、諸方を訪ねるために』、去らないのか?」と質問した。

玄沙師備は、「(中国へ来るために)二十八祖の達磨は東の地の中国へ来た訳ではない。

（仏法を伝えるために達磨は中国へ来た。）
（仏法を伝えられた）二十九祖の慧可は西のインドへ行かなかった」と答えた。

雪峰義存は、玄沙師備の言葉を深く肯定した。

奥底まで「遍参する」、「仏法を尋ねる」道理は、「翻筋斗（もんどりう）を打って」、「空中で一回転して」、仏法をたずねるのである。
神聖な真理もまた為（ため）に成らないのであるし、「何段階、有るのか？」なのである。（原文は「何階級之有なり」。）

大慧禅師と呼ばれる三十四祖の南嶽の懐譲が初めて古代の仏と等しい曹谿山の三十三祖の大鑑禅師の所へ行った時に、大鑑禅師は、「何ものかが、どの様にかして来ている」と言った。

南嶽の懐譲は、「何ものかが、どの様にかして来ている」という泥の塊（かたまり）を「遍参する」、「仏法として尋ねる」事に終始して八年に成った。
（「泥の塊」は「無価値なもの」や「人の肉体」を意味する場合が有る。）

南嶽の懐譲は、「遍参した」、「仏法を尋ねた」末（すえ）の一手として、大鑑禅師に、「私、南嶽の懐譲が初めて来た時に和尚様、大鑑禅師様が私と接して言った『何ものかが、どの様にかして来ている』という言葉を私は会得できました」と言った。

大鑑禅師は、その時、「あなたは、どのように会得しているのですか？」と言った。

南嶽の懐譲は、「ある物を似ている物によって説明しても、言い当てられない」と言った。

これは、「遍参」、「仏法を尋ねた事」が形成されて現されたのであるし、八年の鍛錬が形成されて現されたのである。

大鑑禅師は、「また修行と証を借りるか否か？」と質問した。

南嶽の懐譲は、「修行と証が無いわけではないが、汚染するのは駄目である」と言った。

大鑑禅師は、「(ただ、諸仏は汚染されない事を護ろうと念頭に置いているのである。)あなたもまた、そうである。私も、またそうである。西のインドの諸々の仏祖達もまた、そうである」と言った。

南嶽の懐譲は、この時から更に八年、「遍参した」、「仏法を尋ねた」。「頭が正しいので尾も正しい」、数えると十五年の「遍参」、「仏法を尋ねる事」なのである。

「(何ものかが、)どの様にかして来ている」とは「遍参」、「仏法を尋ねる事」なのである。

「ある物を似ている物によって説明しても、言い当てられない」ので諸々の仏祖に仏殿を開いて見えるのもまた、ありのままの「遍参」、「仏法を尋ねる事」なのである。

「絵に入る」のを看てから、「六十五百千万億」、身を転じて「遍参している」、「仏法を尋ねている」。

なおざりに一つの寺や林に出入りする事を「遍参」、「仏法を尋ねる事」としているわけではないのである。

「全眼睛」、「見る眼の全て」によって見える事を「遍参」、「仏法を尋ねる事」とする。

「打得徹」、「徹底的に打ち得る事」を「遍参」、「仏法を尋ねる事」とする。

「面皮厚多少を見徹する」、「有様の『皮の厚さ』の多い少ないを見通す」事は「遍参」、「仏法を尋ねる事」なのである。

雪峰義存の「遍参(するために、去らないのか?)」という言葉の意味は、本より、山を出る事を勧めているわけではないし、南北に行き来する事を勧めているわけではない。

玄沙師備の言葉の「(中国へ来るために)二十八祖の達磨は東の地の中国へ来た訳ではない。(仏法を伝えるために達磨は中国へ来た。)(仏法を伝えられた)二十九祖の慧可は西のインドへ行かなかった」という「遍参」、「仏法を尋ねる事」を助け起こすための物なのである。

例えば、「なぜ、『遍参』、『仏法を尋ねる事』に成らないのか?」と言うような物である。

玄沙師備の言葉の「(中国へ来るために)二十八祖の達磨は東の地の中国へ来た訳ではない(。仏法を伝えるために達磨は中国へ来た)」とは、「来たが来なかった」という妄(みだ)りな言葉ではなく、「(もし人が心を会得して理解すれば、)大地には、わずかな土地も無い」という道理なのである。

達磨は命の一端なのである。(原文は「いはゆる達磨は命脈一尖なり」。)

たとえ東の地の中国の全土が突然に涌(わ)き尽くして達磨の所へ行って仕えても、達磨が身を転じた事には成らない。
さらに、「言葉と言葉のつながり」の「身を翻(ひるがえ)す」事ではないのである。

「(中国へ来るために)二十八祖の達磨は東の地の中国へ来た訳ではない(。仏法を伝えるために達磨は中国へ来た)」ので、達磨は「面」、「有様(ありよう)」を東の地の中国で見せたのである。
たとえ東の地の中国が達磨という仏祖の「面」、「有様(ありよう)」に見(まみ)えても、「(中国へ来るために)二十八祖の達磨は東の地の中国へ来た訳ではない(。仏法を伝えるために達磨は中国へ来た)」のである。
「仏祖をひねって会得して、(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)を失くし去った」のである。

地は東西ではない。
東西は地と無関係である。

「(仏法を伝えられた)二十九祖の慧可は西のインドへ行かなかった」のは、「西のインドを遍参する」、「西のインドの仏法を尋ねる」には、西のインドには行かなかったのである。

もし二十九祖の慧可が西のインドへ行けば、「片手落ち」と成ったであろう。

なぜ二十九祖の慧可は西のインドへ行かなかったのか?

二十九祖の慧可は、達磨の碧眼の「眼睛」、「見る眼」の中へ飛び込むために、西のインドへ行かなかったのである。

もし二十九祖の慧可が達磨の碧眼の「眼睛」、「見る眼」の中へ飛び込めなかったら、必ず、西のインドへも行ったであろう。

二十九祖の慧可は、達磨の「眼睛」、「見る眼」を「抉り出す」事を「遍参」、「仏法を尋ねる事」としたのである。

西のインドへ行ったり東の地の中国へ来たりする事は「遍参」、「仏法を尋ねる事」ではない。

中国の天台山や「五嶽」、「中国の五つの山」の一つである「南嶽」に行ったり中国の五台山や天上へ行ったりする事を「遍参」、「仏法を尋ねる事」とするわけではないのである。

もし「五湖四海」、「世界」を透過して脱ぎ落としていなければ、「遍参」、「仏法を尋ねる事」ではないのである。

もし「五湖四海」、「世界」を行き来してしまえば、「五湖四海」、「世界」を「遍参」、「仏法を尋ねる事」にしなく成ってしまうし、道を(摩耗さ

せて)滑らかにさせるだけに成ってしまうし、足下を(摩耗させて)滑らかにさせるだけに成ってしまう。そのため、「遍参」、「仏法を尋ねる事」を見失ってしまう。

「尽十方界は、この真実の人の体である」事に参入し徹す事を「遍参」、「仏法を尋ねる事」とするので、「(中国へ来るために)二十八祖の達磨は東の地の中国へ来た訳ではない。(仏法を伝えるために達磨は中国へ来た。)(仏法を伝えられた)二十九祖の慧可は西のインドへ行かなかった」事に参入して究める事が有るのである。

「遍参」、「仏法を尋ねる事」とは、「石は大きければ大きいし、石は小さければ小さい」なのである。石に動揺せずに大小に参入するのである。
(原文は「遍参は石頭大底大、石頭小底小なり。石頭を動著せしめず、大参小参ならしむるなり」。)

百、千、万の無数個のものを百、千、万の無数個のものとして、その所へ行って見えるのは、未だ「遍参」、「仏法を尋ねる事」ではないのである。

半端な「語脈」、「言葉と言葉のつながり」の中で、百、千、万に無数に身を転じるのを「遍参」、「仏法を尋ねる事」とする。

たとえば、「地を打つのが、ただ地を打つだけである」のが「遍参」、「仏法を尋ねる事」なのである。
(原文は「たとへは打地唯打地は、遍参なり」。)

ある時は地を打ったり、ある時は虚空を打ったり、ある時は四方八方が来るのを打ったりするのは「遍参」、「仏法を尋ねる事」ではないのである。(原文は「一番打地、一番打空、一番打四方八面来は、遍参にあらす」。)

倶胝が、天龍の所へ行って、天龍が一本の指を立てたのを会得して悟ったのが「遍参」、「仏法を尋ねる事」なのである。

天龍によって悟った後、説法で、倶胝が一本の指を立てるだけであったのが「遍参」、「仏法を尋ねる事」なのである。

玄沙師備は、僧達に示して、「私(、玄沙師備)は釈迦牟尼仏と同じく参入した」と言った。

ある僧が、その時、前に出て、「(釈迦牟尼仏と玄沙師備は、)一体、誰に参入したのですか?」と質問した。

玄沙師備は、「漁船の上の『謝三郎』、『謝家の三男である玄沙師備』(に参入したのである)」と言った。

釈迦牟尼仏に奥底まで参入した「頭が正しいので尾も正しい」事は、自然に、「釈迦牟尼仏と同じく参入した」事に成るのである。

玄沙師備に奥底まで参入した「頭が正しいので尾も正しい」事は、自然に、「玄沙師備と同じく参入した」事に成るので、「玄沙師備は釈迦牟尼仏と同じく参入した」事に成るのである。

玄沙師備が釈迦牟尼仏と参入し足りているか参入不足かを究めるのを「遍参」、「仏法を尋ねる事」の道理とする。

釈迦牟尼仏は、玄沙師備と同じく参入しているので、古代の仏なのである。
玄沙師備は、釈迦牟尼仏と同じく参入しているので、法の子孫なのである。
この道理を明確に詳細に「遍参するべきである」、「仏法として尋ねるべきである」。

「漁船の上の『謝三郎』、『謝家の三男である玄沙師備』(に参入したのである)」。

この主旨を明らめて、学に参入するべきである。
玄沙師備が釈迦牟尼仏と同時に同じく参入した時を「遍参して」、「仏法として尋ねて」、鍛錬するのである。

「漁船の上の『謝三郎』、『謝家の三男である玄沙師備』」に参入した玄沙師備がいて、釈迦牟尼仏と同じく参入しているのである。
玄沙山の上の髪を剃(そ)った出家者である玄沙師備に参入した「謝三郎」、「謝家の三男である玄沙師備」がいて、釈迦牟尼仏と同じく参入しているのである。

玄沙師備が釈迦牟尼仏と同じく参入している、同じく参入していない、を自分に鍛錬させるべきであるし、他のものに鍛錬させるべきである。

玄沙師備は釈迦牟尼仏と同じく参入しているし、「遍参している」、「仏法を尋ねている」。

「私（、玄沙師備）」は「謝三郎」、「謝家の三男である玄沙師備」と「誰に参入したのか？」という道理を「遍参するべきである」、「仏法として尋ねるべきである」し、同じく参入するべきである。

「遍参」、「仏法を尋ねる事」の道理が未だ目の前に現れていなければ、自己への参入ができ得ていないし、自己への参入不足なのであるし、他のものへの参入ができ得ていないし、他のものへの参入不足なのであるし、人への参入ができ得ていないし、
「私（、玄沙師備）」への参入ができ得ていないし、
「拳頭」、「拳」への参入ができ得ていないし、
「眼睛」、「見る眼」への参入ができ得ていないし、
自己を釣り上げる事ができ得ていないし、
未だ釣っていない先から釣り上がる事ができ得ていない。

既に「遍参」、「仏法を尋ねる事」を究め尽していれば、「遍参」、「仏法を尋ねる事」を脱ぎ落としているのである。

「海は枯れても底を見せない」のであるし、「人は死んでも心を留めない」のである。

「海が枯れる」とは、「全ての海が全く枯れる」のである。

けれども、もし海が枯れ尽くしても、「底を見せない」のである。

留めない、全く留める、は共に人の心なのである。

人は、死ぬ時、「心を留めない」のである。

死をひねって来るので、「心を留めない」のである。

このため、「全ての人は心なのであるし、全ての心は人なのである」と知るべきである。

このように、一方の表と裏に参入して究めるのである。

ある時、諸方の老人の僧の旧友達が来て集まって、道元の亡き師である、古代の仏と等しい、天童山の五十祖の如浄に堂に上って説法する事を請い願ったので、如浄は、堂に上って、「大いなる仏道は、門が無く、諸方の者の頭の上を超越している。

虚空は、道が無く、清涼寺の(如浄の真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔の中に入って来る。

このように見えたのは、釈迦牟尼仏の種の賊、臨済義玄の『禍胎』、『災いを生じる禍根』なのである。

おや！

皆、転倒して春風に舞う。

驚いて散り落ちた杏の華の花びらが飛び乱れて紅に成った」と言った。

この如浄の上堂の説法は、如浄が建康府の清涼寺の主であった時、諸方の老人の僧が来た時の物である。

如浄と、諸方の老人の僧の旧友達は、寺の主の僧と寺の客の僧の関係であったり、同期の僧であったりした。

如浄には、諸方で、このような旧友が多かった！

この如浄の上堂の説法は、旧友の僧達が集まって堂に上って説法する事を請い願った時の物なのである。

このような話が全く無い老人の僧は如浄と交友関係が有ったとは言えないし、如浄に堂に上って説法する事を請い願った旧友の数に入らない。

如浄が大いなる尊い貴い者であるので、丁重に大事に扱って、如浄に堂に上って説法する事を請い願ったのである。

如浄の遍参は、諸方の僧は究める事ができない。

九百年頃から中国では、如浄のような古代の仏と等しい人はいないのである。

「大いなる仏道は、門が無い」とは、四、五千個の「美しい物の象徴」である「花の紅と柳の緑」の「巷」、「この世」なのであるし、二、三万座席の管楽器と弦楽器を演奏する「楼」、「高い建物」なのである。

渾身で超越すると、他を用いず、「頭の上を超越する」のであるし、「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔の中に入って来る」のである。

「頭の上を超越する」事と「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔の中に入って来る」事は共に、学への参入なのである。

「頭の上を超越する」事が未だ無いし、「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)の中」で身を転じる事が未だ無い人は、学に参入している人ではないし、「遍参している」、「仏法を尋ねている」人ではない。

ただ玄沙師備の言葉によって遍参の主旨の学に参入するべきである。

三十一祖の道信が、かつて三十祖の僧璨の所で九年、学に参入したのが、「遍参」、「仏法を尋ねる事」なのである。

南泉普願が、昔、池陽県の南泉山に住んで、三十数年、南泉山を出なかったのが、「遍参」、「仏法を尋ねる事」なのである。

三十七祖の雲巌曇晟と、雲巌曇晟の兄弟子である道吾円智などが、三十六祖の薬山惟儼の所にいて四十年間、鍛錬して学に参入したのが、「遍参」、「仏法を尋ねる事」なのである。

二十九祖の慧可は、昔、嵩山で八年、学に参入して、二十八祖の達磨の「皮肉骨髄」、「理解」を「遍参し尽した」、「仏法として尋ね尽した」。

「遍参」、「仏法を尋ねる」とは、「ひたすらに打ち坐って、(古い)身心を脱ぎ落とす」事なのである。

今の「去るならば、あの辺りに去り、来るならば、この中に来る」のが隙間(すきま)が無いような物であるのが、「渾体」、「渾身」の「遍参」、「仏法を尋ねる事」なのであるし、大いなる仏道の「渾体」、「渾身」なのである。

毘盧遮那如来の「頂上」、「頭」を(超越して)行く事は、「無諍三昧」、「言い争わない三昧」なのである。(原文は「無情三昧」。)

「無諍三昧」、「言い争わない三昧」を決定的に会得する事は、毘盧遮那如来を(超越して)行く事なのである。(原文は「無情三昧」。)

超越の「遍参を参徹する」、「仏法を尋ね徹す」事は、夕顔(ユウガオ)が夕顔(ユウガオ)を超越し、夕顔(ユウガオ)の「頂上」、「頭」(の超越)を「選仏(道)場」、「修行者の中から仏祖が選ばれる場所」、「僧堂」と長くしている。

命は糸のような物なのである。

夕顔(ユウガオ)は夕顔(ユウガオ)に「遍参する」、「仏法を尋ねる」のである。

「一茎草を建てる」、「一本の草を建てる」事を「遍参」、「仏法を尋ねる事」としているだけなのである。

(僧達と歩いている時に、釈迦牟尼仏が手で地を指して「ここに寺を建てると善い」と言ったので、帝釈天が「一茎草」、「一本の草」を移して植えて「寺を建て終わりました」と言うと、釈迦牟尼仏は微笑んだ、という話が有る。)

正法眼蔵　遍参

その時、千二百四十三年、越宇の禅師峰の麓(ふもと)の草の屋根の庵(いおり)にいて僧達に示した。

眼睛

億千万劫の学への参入をひねって来て団欒させるのは、八万四千の「眼睛」、「見る眼」なのである。

道元の亡き師である、古代の仏と等しい、天童山の五十祖の如浄は、瑞巌寺に住んでいた時、堂に上って僧達に示して、「秋の風は清らかであり、秋の月は明らかである。
大地と山と河は『眼睛』(、『見る眼』)を露わにする。
瑞巌寺の主の如浄は『点睛して』、『点眼して』、『仏像の眼に点を描き入れるように、盲目の眼を開いて』重ねて見える。
棒と喝が入り交じって走って僧を試す」と言った。

「僧を試す」と言うのは、「古代の仏と等しいか？」と試すのである。
「僧を試す」要点は「棒と喝を入り交じって走らせる」のである。

これを「点睛」、「点眼」、「仏像の眼に点を描き入れるように、盲目の眼を開く事」とする。

これが形成して現す手段は「眼睛」、「見る眼」なのである。

「山と河と大地」は、「眼睛」、「見る眼」が露わにする「朕兆不打」、「前兆が無い物」なのである。

「秋の風は清らかである」なのであり、一つの老いなのである。

「秋の月は明らかである」なのであり、一つの不老なのである。

「秋の風は清らかである」のは、須弥山の周囲の「四大海」も比べる事ができない。

「秋の月は明らかである」のは、千の無数の太陽の明らかさよりも明らかなのである。

「清らかであり明らかである」のは、「眼睛」、「見る眼」である山や河や大地なのである。

「僧を試す」の「僧」は仏祖なのである。

大いに悟る事を選ばず、悟らない事を選ばず、前兆の前後を選ばず、「眼睛」、「見る眼」である者は仏祖なのである。

「(僧を)試す」のは、「眼睛」、「見る眼」が露わに成るのであるし、盲目が形成されて現されるし、「活眼睛」、「活きている、見る眼」なのである。

「見える」とは、出会う事なのである。

「見える（まみ）」事、出会う事は、「眼頭尖」、「鼻に近い眼の端の『眼頭（めがしら）』の先端」なのであるし、「眼睛霹靂」、「見る眼の雷鳴」なのである。

「渾身は大きく、渾眼は小さい」と思う事なかれ。

往々にして「老いているほど大きい」と思っても「渾身は大きく、渾眼は小さい」と解釈してしまうが、「眼睛」、「見る眼」が未だ備わっていないからである。

悟本大師と呼ばれる三十八祖の洞山良价は、三十七祖の雲巌曇晟の会にいた時、雲巌曇晟が履物を作っている所に遭遇して、雲巌曇晟に、「和尚様、雲巌曇晟様につき従って『眼睛』、『見る眼』を乞（こ）う」と言った。

雲巌曇晟は、「あなたの物(、あなたの『眼睛』、『見る眼』)は、誰かに与えてしまったのか？」と言った。

洞山良价は、「私には(『眼睛』、『見る眼』が)無いのです」と言った。

雲巌曇晟は、「(あなたには『眼睛』、『見る眼』が)有る。あなたは、どこへ向かって、明らかにしようとしているのか？」と言った。

洞山良价は無言であった。

雲巌曇晟は、「奥底まで『眼睛』、『見る眼』を乞（こ）うのは『眼睛』、『見る眼』ではないか？」と言った。

洞山良价は、「『眼睛』、『見る眼』ではない」と言った。

雲巌曇晟は、洞山良价の言葉を不思議がった。

そのため、全てを明らかにしようとする、学への参入は、「『眼睛』、『見る眼』を乞う」事に成るのである。

「雲堂」、「僧堂」で仏道をわきまえ、説法が行われる「法堂」、「講堂」へ行き、寺の主の部屋である「寝堂」に入室するのは、「『眼睛』、『見る眼』を乞う」事に成るのである。

僧達に従って去ったり、僧達に従って来たりする事は、自然に「『眼睛』、『見る眼』を乞う」事に成るのである。

「眼睛」、「見る眼」は自己だけの物ではないし、他者だけの物ではない道理は明らかなのである。

洞山良价は既に「師につき従って『眼睛』、『見る眼』を乞う」と言って、重ねて教えを請い求めた。

測り知る事ができる。

もし「眼睛」、「見る眼」が自己だけの物であれば、他人から乞い求められるべきではない。

もし「眼睛」、「見る眼」が他者だけの物であれば、他人へ乞い求めるべきではない。

雲巌曇晟は「あなたの物(、あなたの『眼睛』、『見る眼』)は、誰かに与えてしまったのか?」と指し示した。

「眼睛」、「見る眼」は、「あなたの物」である時が有るし、「誰かに与えてしまったのか?」という処分が有る。

洞山良价は「私には(『眼睛』、『見る眼』が)無い」と言った。

これは、「眼睛」、「見る眼」、自らの言葉なのである。

このような言葉が形成されて現される事の道理を静かに究めて学に参入するべきである。

雲巌曇晟は「(あなたには『眼睛』、『見る眼』が)有る。あなたは、どこへ向かって、明らかにしようとしているのか?」と言った。

この「眼睛」、「見る眼」についての言葉は、「『私には(眼睛、見る眼が)無い』と言うが、『無い』と言っている物(、『眼睛』、『見る眼』)は有る。どこへ向かって、明らかにしようとしているのか?」と言っているのである。

「どこかへ向かって、明らかにしようとしている」という事は「(『眼睛』、『見る眼』が)有る」のである。

そのため、このように雲巌曇晟は言っているのである、と学に参入して究めるべきである。

「洞山良价は無言であった」。

洞山良价が無言であったのは、呆然としたからではない。

「業識独豎」、「業による理解を独り立てる」手本なのである。

雲巌曇晟は、洞山良价の為に示して、「奥底まで『眼睛』、『見る眼』を乞うのは『眼睛』、『見る眼』ではないか?」と言った。

この言葉は、「点睛、眼睛」、「点眼、眼睛」、「仏像の眼に点を描き入れるように、盲目の『見る眼』を開く」節目(ふしめ)なのであるし、「活砕眼睛」、「活かしたまま『見る眼』をくだく」事なのである。

「奥底まで『眼睛』、『見る眼』を乞(こ)うのは『眼睛』、『見る眼』ではないか？」という雲巌曇晟の言葉の主旨は「『眼睛』、『見る眼』は『眼睛』、『見る眼』を乞う」という事なのである。

水が水を引き寄せるのであるし、山が山を連(つら)ならせるのである。

「異類中行」、「多様な種類の者達の中を行く事」、「多様な種類の者達を救うために仏が『この世』に身を投じる事」、「多様な種類の手段で導く事」なのであるし、

「同類中生」、「同類の者達の中で生きる事」なのである。

洞山良价は「『眼睛』、『見る眼』ではない」と言った。

「『眼睛』、『見る眼』ではない」と「眼睛」、「見る眼」が自ら挙げて言っているのである。

「眼睛」、「見る眼」ではない身心慮知、形状を、「活眼睛」、「活きている、見る眼」が自ら挙げているのである、として見(まみ)えるべきなのである。

過去、現在、未来の諸仏は、「眼睛」、「見る眼」が転じる大いなる法輪、説いている大いなる法輪を地に立って聴いて来ているのである。

究極的に参入して究める奥義では、「眼睛」、「見る眼」の中に飛び込んで、「発心、修行、証大菩提する」、「悟りを求める事を思い立って心して、修行して、大いなる覚を証する」のである。

「眼睛」、「見る眼」は本より自己だけの物ではないし、他者だけの物ではない。

「眼睛」、「見る眼」には、諸々の妨げが無いので、このような一大事でも妨げが無いのである。

このため、古代の先人である、琅邪の慧覚は、「不思議であるのは、十方の仏は元から眼の中の華である」と言った。

十方の仏とは、「眼睛」、「見る眼」なのである(と言える)。

「眼の中の華」は「十方の仏」なのである。

今の進退や、打ち坐ったり打ち眠ったりする事は、「眼睛」、「見る眼」の自然な力を受け継いで、進退や、打ち坐ったり打ち眠ったりするのである。

「眼睛」、「見る眼」の中での、とらえたり放ったりする事なのである。

五十祖の如浄は、「達磨の『眼睛』、『見る眼』を抉り出して泥の塊を作って人を打つ」と言ってから、声を高くして、「見なさい、徹底的に海が枯れ切って波が天高く打つ」と言った。

この言葉は、如浄が、清涼寺の一丈四方の部屋で、集まっている者達の為に示した物である。

（一丈は約三メートル。）

「人を打つ」とは、「人を作る」と言うような物である。

「打つ」ので、人々は個々の「面目」、「有様」が有るのである。

例えば、「達磨の『眼睛』、『見る眼』によって人々を作っている」と言っているのである。

如浄は人々を作ったのである。

「人を打つ」道理とは、このような物なのである。

「眼睛」、「見る眼」によって打ち坐っている人々であるので、今の「雲堂」、「僧堂」での「人を打つ」、「拳頭」、「拳」や、説法が行われる「法堂」、「講堂」での「人を打つ」杖や、一丈四方の部屋での「人を打つ」、修行者を打って戒める竹の細長い板である竹篦や、害虫を払うための毛がついた棒である払子は、達磨の「眼睛」、「見る眼」なのである。

「達磨の『眼睛』、『見る眼』を抉り出して来て、泥の塊を作って人を打つ」事を、今の人は、「参請、請益」、「参禅請益」、「仏祖の所へ行って重ねて教えを請う事」や、
「朝上、朝参」、「早朝、師の所へ行って、師の説法を聴く事」や、
打ち坐って鍛錬する等と言うのである。

どんな人を打って明らかにするのか?
徹底的に海が枯れて波が天高く打つ人なのである。

如浄は、堂に上って、如来、釈迦牟尼仏の仏道の成就をたたえて、「六年、
『落草した』、『山賊に成った』、野狐の精霊。
超越した渾身は葛藤である。
『眼睛』、『見る眼』を見えなくして、求める所が無い。
人を誘惑して『明けの明星によって悟った』と今にまで言う」と言った。
（
釈迦牟尼仏は六年、山に入って、苦行した。
「落草」は宋の時代の中国語で「山賊に成る」などを意味する。
）
「明けの明星によって悟った」とは、「『眼睛』、『見る眼』を見えなくした」時の客観的な話なのである。
「明けの明星によって悟った」とは、「渾身の葛藤」なのである。そのため、簡単に「超越した」のである。

「求めるべき所を求める」事は、形成されて現されたものをも「求める所が無い」し、未だ形成されて現されていないものにも「求める所が無い」のである。

如浄は、堂に上って、「釈迦牟尼仏が眼睛を見えなくする時は、雪の中に梅は一枝の華だけである。
梅の枝は、今は至る所に棘(トゲ)を成している。
しかし、華が咲き乱れるように春風が吹くのを笑うであろう」と言った。

言ってみれば、釈迦牟尼仏の「眼睛」、「見る眼」は一つ、二つ、三つだけではない。
今、「見えなくする」のは、どの「眼睛」、「見る眼」であるとするのか？
「『眼睛』、『見る眼』を見えなくした」と言う「眼睛」、「見る眼」が有るだろう。
さらに、「『眼睛』、『見る眼』を見えなくした」と言う「眼睛」、「見る眼」が有る中に、「雪の中に梅は一枝の華だけである」、「眼睛」、「見る眼」が有り、春に先立って春の心を漏洩(ろうえい)するのである。

如浄は、堂に上って、「『霖霪』、『長雨』の大雨や、広々と開けている大晴れ。
『ガマガエル』、『ヒキガエル』が鳴くし、ミミズが鳴く。
古代の仏は、かつて過ぎ去らず、金剛の『眼睛』、『見る眼』を発揮する。
なんと！
葛藤、葛藤」と言った。

「金剛の『眼睛』、『見る眼』」とは、「『霖霪』、『長雨』の大雨」なのであるし、
「広々と開けている大晴れ」なのであるし、
「『ガマガエル』、『ヒキガエル』が鳴く」事なのであるし、
「ミミズが鳴く」事なのである。

「かつて過ぎ去らない」ので、「古代の仏」なのである。
たとえ「古代の仏」が「過ぎ去っても」、古代の仏ではない人が過ぎ去る事と同じではない。

如浄は、堂に上って、「(春に)太陽は南で長く成るに至り、『眼睛』、『見る眼』の中で光を放ち、『(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)』の中から息を出す」と言った。

今の綿々としている「一陽」、「冬が去り春が来る事」と「三陽」、「春の三か月」に、太陽と月は長く成るに至り、「連底脱落」、「奥底まで連続を脱ぎ落とす」のである。
これが、「『眼睛』、『見る眼』の中で光を放つ」事なのであるし、「日陰で山を看（み）る」事なのである。
この中での有様（ありよう）や身のこなしは、このような物なのである。

如浄は、ある時、臨安府の浄慈寺で、堂に上って、「今朝、二月、初日の第一日、害虫を払うための毛がついた棒である払子と、『眼睛』、『見る眼』が突出する。
鏡のように明らかであり、漆（うるし）のように黒い。
突然、飛び出して、『乾坤』、『天地』を飲み込んで、一色にする。
私の門下の弟子達はなお牆に突き当たり壁に突き当たる。
最終的に、どうするのか？
情を尽くして、ひねって、『ハハ』と笑い、春風に一任する。
どうしようもない」と言った。

「牆に突き当たり壁に突き当たる」とは、牆を揮（ふる）って突き当たるのであるし、壁を揮（ふる）って突き当たるのである。
この「眼睛」、「見る眼」が有る。

「今朝」や「二月」や「初日の第一日」は共に、個々の「眼睛」、「見る眼」なのであるし、「害虫を払うための毛がついた棒である払子と、『眼睛』、『見る眼』」なのである。

「突然、飛び出す」ので「今朝」なのである。何千万個も「『乾坤』、『天地』を飲み込む」ので「二月」なのである。

「情を尽くして、ひねる」時は「初日の第一日」なのである。

「眼睛」、「見る眼」が形成して現す手段は、このような物なのである。

正法眼蔵　眼睛

時に、千二百四十三年、越州の禅師峰の麓(ふもと)にいて僧達に示した。

家常

仏祖の家の中では、(仏祖の知という)茶と御飯の飲食は「家常」、「日常」なのである。

(知は魂の糧である。)

(仏祖の知という)茶と御飯の飲食の事は長く伝えられていて今も形成されて現されているのである。

このため、仏祖という茶と御飯という手段が来ているのである。

大陽山の四十五祖の芙蓉道楷は、四十四祖の投子義青に、「仏祖の『意句』、『心と言葉』は『家常』、『日常』の茶と御飯の飲食のような物である。これを離れて他にまた人々の為(ため)の言葉は有るのか無いのか?」と質問した。

投子義青は、「あなた、言ってみなさい。『天下』、『国』の中で『天子』、『王』が命令する時に、また堯、舜、禹、殷の湯王の力を借りるか否か?」と言った。

(堯、舜、禹は古代の中国の聖王である。)

芙蓉道楷は口(くち)を開こうとした。

しかし、投子義青は、害虫を払うための毛がついた棒である払子をひねって芙蓉道楷の口(くち)を覆って、「あなたが意思を発してから今まで早くも三十回分、棒で軽く叩くべき事が有る」と言った。

芙蓉道楷は、ここで悟りを開き、投子義青を礼拝して、去ろうとした。

投子義青は、「あなた、来なさい」と言った。

けれども、終に、芙蓉道楷は振り向かなかった。

さらに、投子義青は、「あなたは疑わない境地に到達したのか？」と言った。

だが、芙蓉道楷は手で耳を覆って去った。

そのため、明らかに保持して任せられるべきである。

仏祖の心と言葉は、仏祖の日常の茶と御飯なのである。

日常の粗茶、粗食は、仏祖の心と言葉なのである。

仏祖は、(仏祖の知という)茶と御飯を作る。

(仏祖の知という)茶と御飯は、仏祖を保持させ任せる。

仏祖の茶と御飯以外の茶と御飯の力を借りず、仏祖の茶と御飯の中の仏祖の力を浪費しないだけなのである。

「また堯、舜、禹、殷の湯王の力を借りるか否か？」という言葉が現されて示された事を鍛錬して学に参入するべきなのである。

「これを離れて他にまた人々の為の言葉は有るのか無いのか？」という質問の頂上に参入して超越するべきである。

超越でき得るのか？　超越でき得ないのか？　と試しに参入してみるべきである。

南嶽山の無際大師と呼ばれる三十五祖の石頭希遷は、「私は草の庵を結び、宝は無い。(仏祖の知という)御飯を食べ終われば、ゆったりと落ち着いて、快眠を図る」と言った。

「来た」と言い「去った」と言っているが、「来て去った」と言っている、「(仏祖の知という)御飯を食べ終わる」という言葉は、「仏祖の心と言葉を十分に会得した」という意味なのである。

(仏祖の知という)御飯を未だ食べていない者は、仏祖の心と言葉を未だ十分に会得していないのである。

「(仏祖の知という)御飯を食べ終われば、ゆったりと落ち着く」道理は、(仏祖の知という)御飯を食べようとしている前にも形成されて現されるし、(仏祖の知という)御飯を食べている最中にも形成されて現されるし、(仏祖の知という)御飯を食べた後にも形成されて現される。

(仏祖の知という)御飯を食べ終わった家の中で(初めて)「(仏祖の知という)御飯を食べる事が有る」と誤って認めている者は、学への参入が「四、五升」なのである。

道元の亡き師である、古代の仏と等しい、五十祖の如浄は、僧達に示して、次のように言った。

如浄が記憶し得ている所によると、ある僧が、百丈の懐海に、「特に優れている事とは、どういった事でしょうか？」と質問した。百丈の懐海は、「(例えば、百丈の懐海が)『大雄峰』、『百丈山』に独りで坐っている事である」と言った。

人々も動かす事ができ得ない。
暫(しば)らく、この人(、百丈の懐海)を坐らせておく。

今日、突然、ある人が、「上座」の如浄に、「特に優れている事とは、どういった事でしょうか？」と質問したら、如浄は、彼に向かって、ただ「特に優れている事は無い！」と言うであろう。
最終的に、どうであろうか？
浄慈寺の器が天童山に移って(、如浄が、仏祖の知という)御飯を食べている。(如浄は浄慈寺の主であった。如浄は浄慈寺から天童山へ移った。)

仏祖の日常には必ず「特に優れている事」が有る。
「(例えば、百丈の懐海が)『大雄峰』、『百丈山』に独りで坐っている事である」。

今、「この人(、百丈の懐海)を坐らせておく」事に出会ってもなお、これも「特に優れている事」なのである。

さらに、「この人(、百丈の懐海)」よりも「特に優れている事」が有る。「浄慈寺の器が天童山に移って(、如浄が、仏祖の知という)御飯を食べている」事なのである。

「特に優れている事」とは、個々の面々が皆、「(仏祖の知という)御飯を食べている」事なのである。

そのため、「(例えば、百丈の懐海が)『大雄峰』、『百丈山』に独りで坐っている事」は、「(仏祖の知という)御飯を食べている」事なのである。

「器」は、「(仏祖の知という)御飯を食べる」事に用いるのである。「(仏祖の知という)御飯を食べる」事に用いるのは、「器」なのである。

このため、「浄慈寺の器」なのであるし、「天童山で(、如浄が、仏祖の知という)御飯を食べている」なのである。

十分に会得し終わって、(仏祖の知という)御飯を知る事が有るし、(仏祖の知という)御飯を食べて、十分に会得している事を理解する事が有るし、

知り終わって、(仏祖の知という)御飯を十分に会得する事が有るし、十分に会得し終わって、更に、(仏祖の知という)御飯を食べる事が有る。

「器」とは、どういったものであろうか？
思えば、「器」とは、ただの木ではないし、漆のように黒いだけではない。
「器」とは、ただの石であろうか？
「器」とは、鉄の人であろうか？
「器」には、底が無い。
「器」には、「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」が無い。
「器」は一口で虚空を飲み込み、虚空は合掌して受け入れるのである。

如浄は、ある時、台州の瑞巌寺の一丈四方の部屋で、僧達に示して、「(魂の)飢えが来れば、(仏祖の知という)御飯を食べる。眠気が来れば、打ち眠る。炉と鞴は天に渡る」と言った。

「(魂の)飢えが来る」とは、(仏祖の知という)御飯を食べて来ている人の生活なのである。

(仏祖の知という)御飯を未だかつて食べていない人は、(魂が)飢える事ができ得ないのである。

そのため、知るべきである。

(魂の)飢えが一つの日常である私達は、(仏祖の知という)御飯を食べ終わっている人なのである、と確信するべきである。

「眠気が来る」とは、眠い中で、また眠く成るのである。(「眠い中で、また眠く成る」という言葉は「迷いの中で、また迷う」という言葉を連想させる。)

眠気の頭の上から全て超越して来ている。

このため、渾身の手段によって渾身が全て撥ね転がされる今なのである。

「打ち眠る」とは、仏眼、菩薩の法眼、慧眼、祖師の眼、寺の円柱や灯籠の眼を借りて「打ち眠る」のである。

如浄は、ある時、台州の瑞巌寺から臨安府の浄慈寺へ招かれて赴いて、堂に上って、「半年、(仏祖の知という)御飯を食べて、鞔峰に坐った。千万重の雲に閉ざされた。突然、一音の雷鳴が轟いて、『帝郷』、『ありのまま』の春の色である杏の華は紅なのである」と言った。

釈迦牟尼仏の時代の化の導きを伝えている仏祖の化の導きは皆、「鞔峰に坐って、(仏祖の知という)御飯を食べる」事なのである。

仏の智慧と命を伝え続けるための学への参入と探究は、(仏祖の知という)御飯を食べる生活が形成して現しているのである。

「輓峰に坐った半年」を「(仏祖の知という)御飯を食べる」と言っているのである。

閉ざす雲が何重であるか知らない。

たとえ「一音の雷鳴」が「突然」であっても、杏の華の春の色は紅であるだけなのである。

「帝郷」とは、今の「赤赤条条」、「ありのまま」なのである。

これらが、このようであるのが、「(仏祖の知という)御飯を食べる」事なのである。

「輓峰」とは、台州の瑞巌寺の峰の名前である。

如浄は、ある時、明州の慶元府の瑞巌寺の仏殿で、僧達に示して、「仏の黄金の妙なる相とは、衣を着たり、(仏祖の知という)御飯を食べる事なのである。

そのため、私(、如浄)は、あなたを礼拝する。

早寝遅起きしてください。

おや?

奥深いものを話す事や妙なるものを説く事は大いに手がかりが無い。

『拈華』、『華をひねって』、熟く成って、自らをだます事は、切に避ける必要が有る」と言った。
(明州の瑞巌寺は、台州の瑞巌寺とは別の寺である。)

すぐに透過して担(にな)って来るべきである。

「仏の黄金の妙なる相」とは、「衣を着たり、(仏祖の知という)御飯を食べる事なのである」。
「衣を着たり、(仏祖の知という)御飯を食べる事」は、「仏の黄金の妙なる相」なのである。

さらに、「誰が『衣を着たり、(仏祖の知という)御飯を食べる』のか?」と模索する事なかれ。(あなたが「衣を着たり、仏祖の知という御飯を食べる」のである。)
「誰の『黄金の妙なる相』であるのか?」と言う事なかれ。
衣を着たり、(仏祖の知という)御飯を食べれば、「仏の黄金の妙なる相」と言い表すのである。
「そのため、私(、如浄)は、あなたを礼拝する」のである。
「私が既に(仏祖の知という)御飯を食べたので、あなたは(仏祖の知という)御飯を食べる事を礼拝する」のである。
「『拈華』、『華をひねる事』を切に避ける必要が有る」ので、そうなのである。

福州の、円智禅師と呼ばれる後大潙と呼ばれる長慶大安は、堂に上って、僧達に示して、「私、長慶大安は、潙山に三十年いる。

潙山(の霊祐)の御飯を食べ、潙山(の霊祐)の排泄物を排泄したが、潙山(の霊祐)の禅を学ばず、ただ一頭の神の使いである牛、水牛を看ている。

もし水牛が道を外れて草むらに入れば、水牛を引いて出す。

もし水牛が他人の収穫物を食べる罪を犯せば、水牛を鞭で打って懲らしめる。

長く調教していると、可愛い水牛は、人の言葉を受け入れるように成った。

今、水牛は変身して、あの『法華経』の『露地』の『白牛』に成った。

常に眼の前にいて、終日、外を回るのである。

追い払っても去らないのである」と言った。

明らかに、この言葉を受け取って保持するべきである。

仏祖の会の下で鍛錬した三十年は、(仏祖の知という)御飯を食べる事なのである。

さらに雑多な用心はいらないのである。

(仏祖の知という)御飯を食べる生活が形成されて現されれば、自然に「一頭の神の使いである牛、水牛を看ている」、目標にするべき高い品格が有るのである。

趙州真際大師は、新しく到来した僧に、「かつて『ここ』に到達しているのか否か？」と質問した。
新しく到来した僧は、「かつて到達しています」と言った。
趙州真際大師は、「(仏祖の知という)茶を飲んでいきなさい」と言った。

また、趙州真際大師は、ある僧に、「かつて『ここ』に到達しているのか否か？」と質問した。
ある僧は、「かつて到達していません」と言った。
趙州真際大師は、「(仏祖の知という)茶を飲んでいきなさい」と言った。

「院主」を務める僧は、趙州真際大師に、「なぜ、かつて『ここ』に到達している者にも『茶を飲んでいきなさい』と言い、かつて『ここ』に到達していない者にも『茶を飲んでいきなさい』と言うのですか？」と質問した。
趙州真際大師は、「院主」と呼んだ。
「院主」を務める僧は、「はい」と答えた。
趙州真際大師は、「(仏祖の知という)茶を飲んでいきなさい」と言った。

趙州真際大師が言っている「ここ」とは、「頂上」ではないし、「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」ではないし、趙州(の寺の事)ではない。「ここ」を超越して脱ぎ落としているので、「かつて『ここ』に到達している」のでもあるし、「かつて『ここ』に到達していない」のでもある。「『この中』とは、どこであるのか？　ひたすらに、『かつて到達している』と言ったり、『かつて到達していない』と言ったりする」のである。

このため、如浄は、「誰が、美しく飾られた楼閣や、酒を売っている所にいて、向かい合って趙州真際大師の茶を飲むであろうか?」と言った。

そのため、仏祖の「家常」、「日常」は、(仏祖の知という)茶や御飯を飲食するだけなのである。

正法眼蔵　家常

時に、千二百四十三年、越宇の禅師峰の麓(ふもと)にいて僧達に示した。

龍吟

ある僧が、ある時、舒州の投子山の慈済大師と呼ばれる投子大同に、「枯木の中にもまた『龍吟』、『竜の歌』が有るのか無いのか？」と質問した。
投子大同は、「私に言わせれば、『髑髏』、『頭蓋骨』の中に『獅子吼』、『獅子が吼えるように説かれた法』が有る」と言った。

「枯木死灰」、「枯木や火が消えて冷えた灰の様に心が死んでいる人」の話は本より外道が教えているものである。
けれども、外道が言っている「枯木」、「枯木の様に心が死んでいる人」と、仏祖が言っている「枯木」、「枯木の様な無欲」は、遥かに異なる。
外道は「枯木」、「枯木の様に心が死んでいる人」を話しても「枯木」を知らず、まして、「龍吟」、「竜の歌」を聞かない！
外道は、誤って「『枯木』は『朽木』であろう」と思ってしまい、「春に出会う事ができない」と学んでしまっている。

仏祖が言っている「枯木」、「枯木の様な無欲」は「海が枯れる」学への参入なのである。
「海が枯れる」とは、「木が枯れる」、「木が枯れた様な無欲」なのである。
「木が枯れる」、「木が枯れた様な無欲」は「春に出会う」のである。

「木を動かす事ができない」のは「枯れている」、「枯れている様な無欲」だからなのである。

今の山の木、海の木、空の木などは「枯木」なのである。

「萌芽」、「芽生え」も「枯木龍吟」、「枯木の竜の歌」なのである。

百、千、万の無数の囲み(かこ)の大きさである木も「枯木」の子孫なのである。

「枯れているもの」の相、性質、実体、力は、仏祖の言葉の「枯椿」なのでもあるし、「枯椿ではない」のでもある。

「山や谷の木」が有るし、「田畑や人里の木」が有る。

「山や谷の木」を世の中では「松栢(かしわ)」、「松と栢(かしわ)」、「常緑樹の松と栢(かしわ)の様に操(みさお)を変えない事」と呼ぶ。

「田畑や人里の木」を世の中では「人や天人」と呼ぶ。

「根によって葉が分布する事」を仏祖と呼ぶ。

「本も末も必然的に宗(むね)に帰る」事が学への参入なのである。

このようであるのは、「枯木の長い法身」なのでもあるし、「枯木の短い法身」なのでもある。

もし「枯木」でなければ、未だ「龍吟しない」、「竜の歌を歌わない」。

未だ「枯木」でなければ、「龍吟」、「竜の歌」を失くさない。

「幾度か春に逢ったが、心を変えなかった」とは、「枯れている事」を揮っての「龍吟」、「竜の歌」なのである。

「龍吟」、「竜の歌」は「宮商角徴羽」、「古代中国の五つの基本音階の名称」、「ドレミソラ」の外に有るが、「宮商角徴羽」、「古代中国の五つの基本音階の名称」、「ドレミソラ」は「龍吟」、「竜の歌」の前後の二、三人の弟子なのである。

ある僧が言った「枯木の中にもまた『龍吟』、『竜の歌』が有るのか無いのか？」とは、無量の劫の中で初めて質問として形成されて現されたのであるし、話として形成されて現されたのである。

投子大同が言った「私に言わせれば、『髑髏』、『頭蓋骨』の中に『獅子吼』、『獅子が吼えるように説かれた法』が有る」とは、「覆う所は無い！」のであるし、
「自己を屈して、他人を推して、また、休まない」のであるし、
「『髑髏』、『頭蓋骨』が野に遍く満ちあふれている」のである。

ある僧が、ある時、襲燈大師と呼ばれる香厳の智閑に、「仏道とは、どういった物でしょうか？」と質問した。
香厳の智閑は、「枯木の中の『龍吟』、『竜の歌』である」と言った。

ある僧は、「理解できません」と言った。

香厳の智閑は、「『髑髏』、『頭蓋骨』の中の『眼睛』、『見る眼』である」と言った。

後に、ある僧が、石霜慶諸に、「枯木の中の『龍吟』、『竜の歌』とは、どういった物でしょうか?」と質問した。

石霜慶諸は、「なお喜びを帯びる事がある」と言った。

ある僧は、「『髑髏』、『頭蓋骨』の中の『眼睛』、『見る眼』とは、どういった物でしょうか?」と言った。

石霜慶諸は、「なお理解を帯びる事がある」と言った。

また、ある僧が、曹山本寂に、「枯木の中の『龍吟』、『竜の歌』とは、どういった物でしょうか?」と質問した。

曹山本寂は、「血脈は不断である」と言った。

ある僧は、「『髑髏』、『頭蓋骨』の中の『眼睛』、『見る眼』とは、どういった物でしょうか?」と言った。

曹山本寂は、「乾き尽くしていない」と言った。

ある僧は、「一体、また、聞き得た者はいるのですか?」と言った。

曹山本寂は、「尽大地で聞いていない者は一人もいない」と言った。

ある僧は、「一体、『龍吟』、『竜の歌』は、どんな言葉を歌うのでしょうか?」と言った。

曹山本寂は、「どんな言葉か知らない。聞いた者は皆、喪失する」と言った。

言っている「聞く」や「歌う」は、「歌う竜」の「歌う」とは同じではない。

この曲調は「龍吟」、「竜の歌」なのである。

「枯木の中」や「『髑髏』、『頭蓋骨』の中」とは、内外ではなく、自分や他のものではなく、古今なのである。

「なお喜びを帯びる事がある」とは、さらに頭に角を生やす事なのである。

「なお理解を帯びる事がある」とは、皮膚を脱ぎ落とし尽くす事なのである。

曹山本寂の言葉の「血脈は不断である」とは、言って、はばからないのであるし、言葉と言葉のつながりの中で身を転じているのである。

「乾き尽くしていない」とは、「海は枯れても底が尽きていない」のであるし、「乾き尽くしていない」ので、「乾いた上に、また乾く」のである。

「聞き得た者はいるのか？」と言うのは、「聞き得ていない者はいるのか？」と言うような物である。

「尽大地で聞いていない者は一人もいない」と言うが、さらに質問するべきである。

「『聞いていない者は一人もいない』は一時、置いておく。尽大地が未だ無い時、『龍吟』、『竜の歌』は、どこに存在するのか？　速(すみ)やかに言いなさい。速(すみ)やかに言いなさい」

「一体、『龍吟』、『竜の歌』は、どんな言葉を歌うのか？」は、人々の為(ため)に質問するべきであった。

「歌う竜」は、自(おの)ずから泥の中で声を作って挙げて、ひねっているのであるし、

「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」から出た息なのである。

「どんな言葉か知らない」とは、「言葉の中に竜がいる」のである。

「聞いた者は皆、喪失する」とは、「惜しいのである」。

香厳の智閑、石霜慶諸、曹山本寂などの「龍吟」、「竜の歌」についての話は、雲を成し、水を成す。

「仏道」について言わなかったし、「眼睛」、「見る眼」や「髑髏」、「頭蓋骨」について言わなかった。

ただ「龍吟」、「竜の歌」の千、万の無数の曲なのである。

「なお喜びを帯びる事がある」とは、「『ガマガエル』、『ヒキガエル』が鳴く」のである。

「なお理解を帯びる事がある」とは、「ミミズが鳴く」のである。

このため、「血脈は不断である」のであるし、「夕顔（ユウガオ）が夕顔（ユウガオ）を嗣（つ）ぐ」のである。（葛藤が葛藤を嗣ぐのである。）

「乾き尽くしていない」ので、寺の円柱は懐胎して生むのであるし、灯籠は灯籠と対（つい）を成すのである。

正法眼蔵　龍吟

時に、千二百四十三年、越宇の禅師峰の麓（ふもと）にいて僧達に示した。

春秋

ある僧が、ある時、悟本大師と呼ばれる三十八祖の洞山良价に、「寒さや暑さが到来したら、どうしたら回避できますか？」と質問した。

洞山良价は、「なぜ『寒さや暑さが無い所』へ行かないのか？」と言った。

ある僧は、「『寒さや暑さが無い所』とは、どういった物でしょうか？」と言った。

洞山良价は、「寒い時は、あなたを寒くさせるし、熱い時は、あなたを熱くさせる」と言った。

この洞山良价の話をかつて多くの人が推測して来ている。

今の多くの人も鍛錬するべきである。

この洞山良价の話に、仏祖は必ず参入して来ている。

この洞山良价の話に、参入して来ている者は仏祖なのである。

西のインドから東の地の中国までの古今の仏祖の多くが、この洞山良价の話を形成されて現される「面目」、「有様（ありよう）」としている。

この洞山良价の話の「面目」、「有様（ありよう）」が形成されて現されるのが、仏祖の「公案」、「修行者の手がかりとしての言動」なのである。

ある僧の質問の「寒さや暑さが到来したら、どうしたら回避できますか？」に参入して詳しく看るべきである。

「寒さが到来した」時、「熱さが到来した」時に参入して詳しく看るのである。

「寒さや暑さ」は、「寒さ」を揮って、「暑さ」を揮って、共に、「寒さや暑さ」自体による有様なのである。

「寒さや暑さ」自体による有様なので、到来した時は、「寒さや暑さ」自体による有様の「頭」から到来するのであるし、「寒さや暑さ」自体による有様の「眼睛」、「見る眼」から目の前に現れるのである。

「寒さや暑さ」自体による有様の「頭」の上は、「寒さや暑さが無い所」なのである。

「寒さや暑さ」自体による有様の「眼睛」、「見る眼」の中は、「寒さや暑さが無い所」なのである。

洞山良价の言葉の「寒い時は、あなたを寒くさせるし、熱い時は、あなたを熱くさせる」とは、「寒さや暑さが無い所」へ到達した時の有様なのである。

たとえ「寒い時」は「寒くさせる」と言っていても、「熱い時」は必ずしも「熱くさせる」道理ではない。

「『寒さ』は『へた』まで徹して『寒い』」のであるし、「『熱さ』は『へた』まで徹して『熱い』」のである。（「甘い瓜は『へた』まで徹して甘い」という言葉が有る。）

たとえ万、億の無数の回避に参入し得てもなお「頭と尾を換える」だけなのである。

「寒さ」は、代々の祖師達の「活眼睛」、「活きている、見る眼」なのである。
「暑さ」は、亡き師の「暖皮肉」、「暖かい生身」なのである。

枯木禅師と呼ばれる浄因の法成は、四十五祖の芙蓉道楷の仏法を嗣いだ。

浄因の法成は、「人々の中の、ある人は、誤って推測して『ある僧の(、寒さや暑さが到来したら、どうしたら回避できますか？　という)質問は既に偏りに陥っていた。

洞山良价の(、なぜ寒さや暑さが無い所へ行かないのか？　という)答えは(、ある僧を)正しい位置に帰したのである。

ある僧は言葉の中の音(、調子)を知って逆に正しさに入って来た。

洞山良价は逆に偏りに従って行ったのである』と言ってしまっている。

このように誤って推測してしまう事は、洞山良价という先人の聖者を冒涜してしまうだけではなく、自己を屈折させてしまい沈ませてしまう。

言っている事を見ていないのか？

人々の解釈を聞くと、心中で脚色してしまっている。

目先では美しく見えても、長く積んでいると病と成ってしまう。

遍歴して修行している気高い人は、この事を究めたいならば、まず仏祖の『正法眼蔵』、『正しくものを見る眼』を理解して取るべきである。

その他の仏祖の言葉による教えは、熱い物を御椀に注ぐと音が鳴るような物である。

けれども、あえて皆に質問する。

最終的に、『寒さや暑さが無い所』とは、どういった物であろうか？
理解できましたか？
宝玉で飾られた美しい建物にカワセミが巣くう。
黄金で飾られた美しい建物にオシドリの夫婦が巣くう」と言った。

浄因の法成は、洞山良价の法の遠い子孫である。
浄因の法成は、祖師達の中の英雄である。
浄因の法成は、多くの人々が誤って、偏っている、正しい、という巣窟にいて洞山良价を礼拝しようとする事を明らかに戒めているのである。
もし仏法が、偏っている、正しい、という誤りにとらわれて伝えられてしまえば、どうして今日にまで至るであろうか？　いいえ！
野良猫のような人や田舎者は未だ洞山良价の奥義に参入して究めていない。
かつて仏法の道の敷居を旅していない輩は、誤って「洞山良价には、偏っている、正しい、などの『五位』が有って人を接する」と言ってしまう。これは、でたらめな説であり、見聞きするべきではない。
ただ、正に、仏祖の「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」が有る事に参入して究めるべきである。

慶元府の天童山の、宏智正覚は、丹霞子淳の仏法を嗣いだ。
宏智正覚は、「もし、この事を論じるならば、二人で碁を打つような物なのである。

あなたは私が打った手に応じない。

私は、あなたをだまして行く。

もし、このように体得すれば、初めて、洞山良价の意図が理解できる。

私、宏智正覚は、この脚注を下すのを免れる事ができなかった。

眼以外を袈裟で覆って、看(み)ると、寒さや暑さは無い。

即座に、青く広大な海が滴(したた)って乾けば、私は『巨大な海亀を下を見て拾(ひろ)う事ができる』と言うであろうし、君が砂際で釣(つ)り竿(ざお)を弄(ろう)しているのを笑うであろう」と言った。

「碁(ご)を打つ」事は無いわけではないが、「二人で碁(ご)を打つ」とは、どういった事であろうか？

もし「二人で碁(ご)を打っている」と言うならば、「傍目八目(おかめはちもく)」、「外から見ている傍観者が、打っている当事者達よりも、八手先まで先読みしやすい」であろう。

もし「傍目八目(おかめはちもく)」、「外から見ている傍観者が、打っている当事者達よりも、八手先まで先読みしやすい」のであれば、「(二人で)碁(ご)を打っている」とは言えないのである。

どうであろうか？

言ってみれば、「(自分)一人で碁(ご)を打っていて、(自分という)好敵手に出会うのである」と言う事ができる。

けれども、宏智正覚の「あなたは私が打った手に応じない」という言葉を心に留めて鍛錬するべきであるし、身をめぐらせて参入して究めるべきである。

「あなたは私が打った手に応じない」とは、「あなたは私ではないと言える」と言っているのである。

「私は、あなたをだまして行く」という言葉も見過ごす事なかれ。

泥の中に泥が有るのである。泥を踏んだ者は足を洗い、また、「纓」、「冠の紐」を洗う。

宝玉の中に宝玉が有るのである。光明を放つと、人を照らし、自分を照らすのである。

夾山の圜悟克勤は、五祖山の法演禅師の仏法を嗣いだ。

圜悟克勤は、「『碁盤』が『珠』、『碁石』を走るし、『珠』、『碁石』が『碁盤』を走る。

(洞山良价の『五位』の、)『偏中正』、『偏りの中の正しさ』であるし、『正中偏』、『正しさの中の偏り』である。

カモシカは角を掛けて、跡が無い。

猟犬は林を巡って、空しく踏み歩く」と言った。

(角を木の枝に掛けて足を浮かせて眠るカモシカがいる、と言われている。)

「『碁盤』が『珠』、『碁石』を走る」という言葉は、空前絶後なのであるし、古今でも聞く事は稀なのである。

古くから、ただ「『碁盤』を走る『珠』、『碁石』は一か所に留まる事が無いような物である」とだけ言っていた。

「カモシカは角を空に掛けている」（と言うような物である）。

「林は猟犬を巡る」（と言うような物である）。

慶元府の雪竇山の資聖寺の、明覚大師と呼ばれる雪竇重顕は、北塔の智門光祚の仏法を嗣いだ。

雪竇重顕は、「『垂手』、『両手を下に垂らす事』、『何もしない事』もまた万仭の高さの崖と同じである。

正しい、偏っている、を必ずしも手配する事は無い！

瑠璃の古い宮殿は清く澄んでいる満月を照らす。

足音を忍ばせる俊足の『韓獹』、『名犬』は空しく階段を上る」と言った。

（「韓獹」は、春秋戦国時代の中国の韓の国の名犬の名前であり、「名犬」の代名詞と成った。）

雪竇重顕は、雲門文偃の法の子孫である。

雪竇重顕は、仏法を十分に会得している皮袋である人と言える。

雪竇重顕は、「『垂手』、『両手を下に垂(た)らす事』、『何もしない事』もまた万仞の高さの崖と同じである」と言って、極めて稀(まれ)な、目標にするべき高い品格を現したが、(洞山良价の話は、)必ずしも、そうではないのである。

ある僧が質問して洞山良价が示した話は、必ずしも、「垂手」、「何もしない事」や「不垂手」、「何かする事」ではないし、この世に出現する事や、この世に出現しない事ではない。

まして、「正しい」や「偏(かたよ)っている」という言葉を用いない！

「正しい」や「偏(かたよ)っている」を「見る眼」を用いなければ、洞山良价の話に手を下す場所が無いような物である。

「参請」、「参禅請益」、「仏祖の所へ行って重ねて教えを請う」、「巴鼻」、「とらえ所」が無いようでは、洞山良价の辺りの域にまで至る事ができない。仏法の大家を「見ていない」、「理解していない」事による物である。

さらに、履物をひねって来て「参請」、「参禅請益」、「仏祖の所へ行って重ねて教えを請う」べきである。

妄(みだ)りに誤って「洞山良价の仏法は、正しい、偏(かたよ)っている、などの『五位』なのである」と言ってしまう事をやめなさい。

東京(トンキン)の天寧寺の長霊守卓は、「偏(かたよ)りの中に正しさが有るし、
正しさの中に偏(かたよ)りが有る。
千百年、人の間に流れ落ちている。
幾度か帰ろうと欲して、未だ帰る事ができ得ていない。
門前は依然として古いままで草が茂っている」と言った。

長霊守卓も強引に「偏(かたよ)っている」や「正しい」と言っているが、ひねって来ている。

ひねって来ている事が無いわけではないが、「偏(かたよ)りの中に正しさが有る」とは、どういった物であろうか？

潭州の大潙山の仏性法泰は、圜悟克勤の仏法を嗣(つ)いだ。

仏性法泰は、「『寒さや暑さが無い所』は君の為(ため)に道が通じている。
枯木にまた華が一重咲きに咲く。
船に印を刻んで剣を探し求めるのは笑いをこらえる。
今に至ってもなお、火が消えて冷えた灰の中に在る」と言った。

この言葉には少し「公案」、「修行者の手がかりとしての仏祖の言動」を踏(ふ)み戴(いただ)く力量が有る。

泐潭の湛堂文準は、「寒い時は寒くさせるし、
熱い時は熱くさせる。
寒さや暑さの由来は全て無関係である。
天空の果てを行き尽くして、世俗の事を暗記する。

老君は頭に猪(イノシシ)の皮の冠を戴(いただ)く」と言った。

質問するべきである。

「奥底まで(寒さや暑さの由来は全て)無関係である道理とは、どういった事であるのか？　速(すみ)やかに言いなさい。速(すみ)やかに言いなさい」

湖州の仏燈禅師と呼ばれる何山守珣は、仏鑑禅師と呼ばれる太平慧懃の仏法を嗣(つ)いだ。

何山守珣は、「『寒さや暑さが無い所』とは洞山良价の言葉である。

多少の禅の人々が所々で迷っている。

寒い時は火にあたるし、

熱い時は冷たい物をつける。

一生、寒さや暑さを回避して免れる事ができ得てきた」と言った。

何山守珣は、五祖山の法演禅師の法の子孫であるが、幼子が言っているような事を言っている。

けれども、「一生、寒さや暑さを回避して免れる事ができ得てきた」という言葉は、後に老成する、大成する風格が有る。

「一生」とは「生の尽(ことごと)く」なのである。

「寒さや暑さを回避する」とは「(古い)身心を脱ぎ落とす事」なのである。

諸方の諸々の世代の僧達は、このように、上下の両唇を打ち鳴らす事を専(もっぱ)らにして、古代の「公案」、「修行者の手がかりとしての仏祖の言動」の詩による説明を供給して通達しているが、洞山良价の辺りの事が未だ「見えていない」、「理解できていない」。

仏祖の日常では、寒さや暑さが、どういった物であるか知らないので、いたずらに無駄に、「寒い時は火にあたるし、熱い時は冷たい物をつける」などと言ってしまう。

特に、憐れむべきである。

あなた達は、高徳の長老の僧の近くにいて、何を「寒さや暑さ」と言うと聞いて理解して取ってきたのか？

祖師の仏道が廃(すた)れている事を悲しむべきである。

「寒さや暑さ」の有様(ありよう)を知り、「寒い時や熱い時」を経歴し、「寒さや暑さ」を使い得るように成って来てから、さらに、洞山良价が人々の為(ため)に示した言葉を詩で説明するべきであるし、ひねるべきである。

未だ、そうではない者は、非を知るに越した事は無いだろう。

俗人ですらなお月日を知っているし万物を保持し任せられているが、聖者や賢者では色々な違いが有るし、聖者や賢者と愚者では色々な違いが有る。

仏道の「寒さや暑さ」を「愚者の寒さや暑さと同じであろう」と誤解する事なかれ。

すぐに直(じき)に、当然に必然的に、学ぶ事に勤めるべきである。

正法眼蔵　春秋

その時、千二百四十四年、越宇の山奥にいて再び僧達に示した。

仏事に出会って「仏麟経」を転じた。

祖師は「衆角雖多一麟足矣」、「角を持つ動物は多いが、唯一の麒麟(キリン)で足りる」と言った。

祖師西来意

香厳寺の、襲燈大師と呼ばれる香厳の智閑は、大潙禅師と呼ばれる潙山霊祐の仏法を嗣いだ。

香厳の智閑は、僧達に示して、「人が千尺の切り立った崖の樹に上るような物である。
口で樹の枝をくわえて、脚で樹を踏まず、手で樹の枝をつかまない。
突然、樹の下に人がいて、『祖師西来意、達磨が西のインドから中国へ来た意図とは、どういった物であろうか？』と質問して来る。
この時、もし口を開いて他人に答えたら、身の命を喪失する。
もし他人に答えなければ、他人が質問した心意気に背いてしまう。
この時、どうすれば良いのか？　言ってみなさい」と言った。
（一尺は約三十センチメートル。）

その時、虎頭の照という長老がいて、前に進み出て、「お願いします、和尚様、香厳の智閑様。樹に上っている時は質問せず、樹に上っていない時に質問してください。どうでしょうか？」と言った。

香厳の智閑は、「ハハ」と大笑いした。

この話を、多くの人々が推測して、ひねっているが、「道」、「真理」を会得した人は稀なのである。

恐らくは、全ての人々は呆然としてしまっているようである。

けれども、「不思量」、「今は思考できない思考」をひねって来て思量し、「非思量」、「思考できるであろうか等と思考しないで、とにかく思考する事」、「できるか心配せずに、とにかく行う事」をひねって来て思量すると、自然に、香厳の智閑と同一の座布団の上で、こつこつと坐禅する鍛錬が有るであろう。

既に香厳の智閑と同一の座布団の上で、こつこつと坐禅すれば、香厳の智閑が口（くち）を開く以前に、この話に参入して詳しく見ているはずである。

香厳の智閑の「眼睛」、「見る眼」を(良い意味で)盗んで、この話に参入して詳しく見るだけではない。

釈迦牟尼仏の「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」をひねり出して、この話を見破っているはずである。

「人が千尺の切り立った崖（がけ）の樹に上るような物である」

この言葉に静かに参入して究めるべきである。

何を「人」と言っているのか？

「寺の円柱でなければ、木の杭（くい）である」と言うべきではない。

仏祖の面々が「破顔微笑」であっても、自己や他者が見（まみ）える事を誤るべきではない。

「人が樹に上る」場所は、尽大地ではなく、「百尺の竿（さお）の先」、「極致」ではなく、「千尺の切り立った崖（がけ）」なのである。

たとえ脱ぎ落とし去っても、「千尺の切り立った崖（がけ）」の中なのである。

落ちる時が有るし、上る時が有る。

「人が千尺の切り立った崖の中の樹に上るような物である」と言っているので、「上る時が有る」と知るべきである。

そのため、向上もまた「千尺」なのであるし、後退もまた「千尺」なのであるし、

左もまた「千尺」なのであるし、右もまた「千尺」なのであるし、

この中もまた「千尺」なのであるし、あの中もまた「千尺」なのであるし、

「人のような物である」のもまた「千尺」なのであるし、「樹に上る」のもまた「千尺」なのである。

従来の「千尺」とは、このような物なのである。

「千尺」の量とは、どのくらいであるのか？

「古くからの鏡」の量のような物なのであるし、「炉」の量のような物なのであるし、僧の墓である「無縫塔」の量のような物なのである。

「口で樹の枝をくわえる」

「口」とは、どういった物であるのか？

たとえ「口」の全ての広さや、全ての「口」を知らなくても、「樹の枝」から「枝」へ尋ねて行って、葉を選び取って行って、「口」が存在する場所を知るべきである。

「樹の枝」をとらえて、ひねって、「口」を作る事が有る。

このため、全ての「口」が「枝」なのであるし、全ての「枝」が「口」なのである。

「通身」、「全身」が「口」なのであるし、「通口」、「口全体」が「身」なのである。

「樹、自らが樹を踏む」ので、「脚で樹を踏まない」と言っているのである。
「脚、自らが脚を踏む」ような物なのである。
「枝、自らが枝をつかむ」ので、「手で樹の枝をつかまない」と言っているのである。
「手、自らが手をつかむ」ような物なのである。

けれども、「かかと」ですらなお進歩や後退が有るるし、「手」ですらなお「『拳』を作る」事や、「『拳』を開く」事が有る。

人々は「虚空に掛かっている」と思う。
けれども、「虚空に掛かっている」事は、「樹の枝をくわえる」ような物であろうか？

「突然、樹の下に人がいて、『祖師西来意、達磨が西のインドから中国へ来た意図とは、どういった物であろうか？』と質問して来る」
「突然、樹の下に人がいる」とは、「樹の中に人がいる」と言うような物なのであるし、「人が樹である」ような物なのである。
そのため、「突然、人の下に人がいて、質問して来る」ような物なのである。
このため、「樹が樹に質問する」のであるし、
「人が人に質問する」のであるし、

「樹を挙げて質問を挙げる」のであるし、
「『祖師西来意』、『達磨が西のインドから中国へ来た意図』を挙げて『祖師西来意』、『達磨が西のインドから中国へ来た意図』を質問する」のである。

質問者もまた「口で樹の枝をくわえて質問して来る」のである。

「口で樹の枝をくわえ」なければ、「質問する」事ができないのであるし、「口の中に満ちている音声」が無いのであるし、「言葉に満ちている口」が無いのである。

「祖師西来意」、「達磨が西のインドから中国へ来た意図」を質問する時は、「祖師西来意」、「達磨が西のインドから中国へ来た意図」によって質問するのである。

「もし口を開いて他人に答えたら、身の命を喪失する」
「もし口を開いて他人に答えたら」という言葉に親しむべきである。
「『口を開かないで他人に答える』事も有り得る」と聞こえる。
「もし口を開かないで他人に答えたら、身の命を喪失しない」のである。
たとえ「口を開く」事や「口を開かない」事が有っても、「口で樹の枝をくわえる」事を妨げる事はできない。
開閉は必ずしも「口の全て」ではない。「口」には開閉も有るのである。
そのため、「樹の枝をくわえる」事は「全ての口」の日常なのである。
開閉は「口」を妨げる事はできない。

「口を開いて他人に答える」とは、「樹の枝を開いて他人に答える」事を言うのか？　「『祖師西来意』、『達磨が西のインドから中国へ来た意図』を開いて他人に答える」事を言うのか？

もし「『祖師西来意』、『達磨が西のインドから中国へ来た意図』を開いて他人に答え」なければ、「『祖師西来意』、『達磨が西のインドから中国へ来た意図』を答える」事ではないのである。

既に「他人に答える」事ではないので、「身の命を保全する」のであるし、「身の命を喪失する」とは言えない。

先に「身の命を喪失」すれば、「他人に答える」事は有り得ない。

けれども、香厳の智閑の心は「他人に答える」事を辞さないので、恐らくは、「身の命を喪失する」のみなのである。

知るべきである。

「他人に答えない時は、身の命を保護する」のであるし、「突然、他人に答える時は、身を翻して命を活かす」のである。

測り知る事ができる。

人々の「口の中に満ちているもの」は「言葉」なのである。

「他人に答える」べきであるし、

「自分に答える」べきであるし、

「他人に質問する」べきである。

これが、「口で言葉をくわえる」事なのである。

「口で言葉をくわえる」事を「口で樹の枝をくわえる」と言っているのである。

もし「他人に答える時」は、「口の上に更に単一の口を開く」のである。

「他人に答えない」のは、「他人が質問した心意気に背いてしまう」が、「自分が質問した心意気には背かない」のである。

そのため、知るべきである。

「『祖師西来意』、『達磨が西のインドから中国へ来た意図』を答える」一切の全ての仏祖は皆、「樹に上って、口で樹の枝をくわえている時」に「答えて来る」のである。

「『祖師西来意』、『達磨が西のインドから中国へ来た意図』を質問して来る」一切の全ての仏祖は皆、「樹に上って、口で樹の枝をくわえている時」に「質問して来る」のである。

明覚大師と呼ばれる雪竇重顕は、「『樹に上って言う』のは簡単である。『樹の下で言う』のは難しい。老僧である私、雪竇重顕は『樹に上る』。一つの質問を持って来なさい」と言った。

「一つの質問を持って来なさい」と言うが、たとえ力を尽くして来ても、「質問」は来るのが遅いので、「答え」よりも後に「質問」が来る事が残念である。

遍く古今の、錐の先が使い古されて丸く成る様に円熟した長老に質問する。

「香厳の智閑は、『ハハ』と大笑いした」が、「樹に上って言った」のであろうか？

「樹の下で言った」のであろうか？

「『祖師西来意』、『達磨が西のインドから中国へ来た意図』を答えた」のか？

「『祖師西来意』、『達磨が西のインドから中国へ来た意図』を答えていない」のか？

試しに言ってみなさい。

正法眼蔵　祖師西来意

その時、千二百四十四年、越宇の奥深くの山の中にいて示した。

優曇華

霊山で百万の者達の前で、釈迦牟尼仏は、「拈華瞬目」、「優曇華をひねって目を瞬(またた)かせた」。
(摩訶)迦葉は、その時、「破顔微笑」した。
釈迦牟尼仏は、「私(、釈迦牟尼仏)には『正法眼蔵涅槃妙心』、『正しくものを見る眼と寂滅した妙なる心』が有り、(摩訶)迦葉に付属する」と言った。

過去七仏を含む諸仏は、同じく、「拈華(瞬目)」して来るのである。
これを、向上の「拈華(瞬目)」として修行と証を形成して現しているのであるし、
直下の「拈華(瞬目)」として裂き破って、知を開き明らかにしているのである。

そのため、「拈華(瞬目)」の中の、向上と後退へ向かう事、自分と他人へ向かう事、表と裏へ向かう事などは共に、全ての華が、ひねっているのであるし、華の量、仏の量、心の量、身の量なのである。
どれほどの「拈華(瞬目)」も面々の正統な代々の物なのである。

「有している付属が存在する」のである。

釈迦牟尼仏が「拈華(瞬目)」して来てから、なお放り下ろして捨てる事は未だ無いのである。

「拈華(瞬目)」が釈迦牟尼仏して来てから、時に釈迦牟尼仏の仏法を嗣ぐのである。

「拈華(瞬目)」する時は、時の尽くであるので、釈迦牟尼仏に同じく参入するのであるし、同じく「拈華(瞬目)」するのである。

「拈華」、「華をひねる」とは、華が華をひねるのである。

ひねる華は、梅の華、春の華、雪の華、蓮華などなのである。

梅の華の「五葉」、「五つの花びら」は、釈迦牟尼仏の三百六十回余りの集まりなのであるし、釈迦牟尼仏の五千四十八巻の経なのであるし、三乗十二分教なのであるし、「三賢十聖」なのである。

このため、「三賢十聖」の未熟な菩薩の段階の人は「拈華(瞬目)」に及ぶ事ができないのである。

「大蔵」、「菩薩のための大乗の菩薩蔵」が有り、「特に優れている事」が有り、「華開世界起」、「華が開いて世界が起こる」と言う。

「一華開五葉、結果自然成」、「一つの華が、五つの花びらを開き、実を結ぶのは、自然に成る」とは、「渾身は既に渾身に掛かっている」事なのである。

桃の華を見て「眼睛」、「見る眼」を見えなくし、緑色の竹の音を聞いて耳を現れなくさせるのが、「拈華(瞬目)」の今なのである。(霊雲志勤は桃の華を見て悟った。香厳の智閑は竹の音を聞いて悟った。)

二十九祖の慧可が、腰まで雪が積もっても外に立ち、腕を切り、二十八祖の達磨を礼拝して達磨の髄を会得したのは、華が自ら花開いたのである。

三十三祖の大鑑禅師が石臼(いしうす)で米をついて白くして夜中に三十二祖の弘忍から衣と器を伝えられたのは、華が既にひねっていたのである。

これらは釈迦牟尼仏の手中の命の根本なのである。

「拈華(瞬目)」は、釈迦牟尼仏が仏道を成就する以前から有ったし、釈迦牟尼仏が仏道を成就した時と同時なのであるし、釈迦牟尼仏が仏道を成就した後にも有る。

このため、華が仏道を成就したのである。

「拈華(瞬目)」は、これらの時を遥かに超越している。

諸々の仏祖の「発心」、「悟りを求める事を思い立って心する事」や、「(仏道の上での)発足」、「(仏道の上での)出発」や、修行と証や、保持し任せられる事は共に、「拈華(瞬目)」の春風を、蝶(チョウ)のように舞うのである。

そのため、釈迦牟尼仏は、華の中に身を入れ、空（くう）の中に身を隠しているので、「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔（あな）」を取るべきである。

(「真理を嗅ぎ分ける鼻の孔」を取ると、)空（くう）を取っている。

(空を取っている事を)「拈華(瞬目)」と呼ぶ。

「拈華(瞬目)」は、「眼睛」、「見る眼」で、ひねるのであるし、

心識で、ひねるのであるし、

「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔（あな）」で、ひねるのであるし、

華がひねる事で、ひねるのである。

山や河や大地や、太陽や月や、風や雨や、人や動物や草木が色々と隅々（すみずみ）まで、ひねって来ているのは、優曇華をひねっているのである。

生と死が来たり去ったりするのも、華の色々な色なのであるし、華の光明なのである。

今、私達が、このように学に参入している事は、華をひねって来ている事に成るのである。

釈迦牟尼仏は、「例えば、優曇華のように、一切の者が皆、愛し楽しむ」と言った。

「一切の者」とは、身を現したり身を隠したりする仏祖なのであるし、草木や昆虫には自ら有している光明が存在する事なのである。

「皆、愛し楽しむ」とは、面々の「皮肉骨髄」、「理解」が今、魚の様に活発な事なのである。

そのため、一切は皆、優曇華なのである。

このため、優曇華を「稀(まれ)である」と言うのである。

「瞬目」、「目を瞬(またた)かせる」とは、樹の下で打ち坐って明けの明星と「眼睛」、「見る眼」を換えた時なのである。

「瞬目」の時、(摩訶)迦葉は「破顔微笑」するのである。

「顔容」、「顔の表情」、「面目」、「有様(ありよう)」を速(すみ)やかに破って「拈華顔」、「華をひねる『面目』、『有様(ありよう)』」と換えたのである。

如来、釈迦牟尼仏が「瞬目」した時に、私達の「眼睛」、「見る眼」は速(すみ)やかに見えなく成って来ている。

このような如来、釈迦牟尼仏の「瞬目」が「拈華」なのである。

優曇華の心が自ら花開くのである。

「拈華」の時、一切の釈迦牟尼仏、一切の迦葉、一切の生者、一切の私達が共に、同一の手を差し伸べて、同じく華をひねる事は、今でも未だ止(や)まないのである。

さらに、「手中に身を隠す三昧」が有るので、「四大(元素)と色受想行識の『五陰』、『五蘊』」と言うのである。

「私(、釈迦牟尼仏)に有る」のは「付属」なのである。

「付属」は「私(、釈迦牟尼仏)に有る」のである。

「付属」は必ず「私(、釈迦牟尼仏)に有る」事に遮られるのである。

「私(、釈迦牟尼仏)に有る」のは「頂上」、「頭」なのである。

「頭」の学への参入は、「頂上」、「頭」の量をとらえて「頭」の学に参入するのである。

「私(、釈迦牟尼仏)に有る」のをひねって「付属」と換える時、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を保持し任せられるのである。

「祖師西来」、「達磨が西のインドから中国へ来た」とは、華をひねって来たのである。

「華をひねる」のを「精魂を弄する」と言うのである。

「精魂を弄する」とは、「ひたすらに打ち坐って、(古い)身心を脱ぎ落とす」事なのである。

「仏祖に成る」のを「精魂を弄する」と言うのである。

「(仏祖という)衣を着て、(仏祖の知という)御飯を食べる」のを「精魂を弄する」と言うのである。

（知は魂の糧である。）
仏祖の「極則事」、「究極の、仏の教えの事」とは、必ず、「精魂を弄(ろう)する」事なのである。

仏殿によって見(まみ)えられ、僧堂と見(まみ)える。

華に色々な色が増々(ますます)備わり、色に光が増々(ますます)重なるのである。

さらに、僧堂は今、板を取って雲の中で打つし、
仏殿は今、笙(しょう)という笛(ふえ)を口(くち)にくわえて水の底で吹く。
ここに到達した時、誤って、「梅華引」という梅の華の曲を吹き始める。

道元の亡き師である、古代の仏と等しい、五十祖の如浄は、「釈迦牟尼仏が眼睛を見えなくする時は、雪の中に梅は一枝の華だけである。
梅の枝は、今は至る所に棘(トゲ)を成している。
しかし、華が咲き乱れるように春風が吹くのを笑うであろう」と言った。

今、「如来、釈迦牟尼仏の『眼睛』、『見る眼』」は、誤って、「梅の華」と成っている。
「梅の華」は今、全て統治している「棘(トゲ)を成している」。

「如来、釈迦牟尼仏」は「眼睛」、「見る眼」に身を隠しているし、
「眼睛」、「見る眼」は「梅の華」に身を隠しているし、
「梅の華」は「棘(トゲ)」に身を隠している。

今、「しかし、春風が吹く」。

しかも、このようであっても、「梅華楽」という梅の華の曲を喜ぶ。

如浄は、「霊雲志勤は、桃の華が花開くのを見た。
(霊雲志勤は桃の華を見て悟った。)
天童山の如浄は、桃の華が散り落ちるのを見た」と言った。

知るべきである。

「桃の華が花開いている」のは、霊雲志勤が見た物なのであり、「今に至っても更に疑う事ができない」のである。

「桃の華が散り落ちている」のは、天童山の如浄が見た物なのである。

「桃の華が花開くのは、春の風に誘われてである。桃の華が散り落ちるのは、春の風に憎悪される」

たとえ春風が深く桃の華(が散り落ちるの)を憎悪しても、桃の華は散り落ちて(古い)身心を脱ぎ落とすであろう。

正法眼蔵　優曇華

その時、千二百四十四年、越宇の吉峰精(舎、伽)藍にいて僧達に示した。

発無上心

西の国インドの、始祖である釈迦牟尼仏は、「雪山(ヒマラヤ)を大いなる『涅槃』(、『寂滅』)に例える」と言った。

知るべきである。

例えるべき物を例えたのである。

例えるべき物とは、親しいからであるし、端的だからである。

雪山(ヒマラヤ)をひねって来る者は、雪山(ヒマラヤ)を例えるのである。

大いなる「涅槃」、「寂滅」をひねって来る者は、大いなる「涅槃」、「寂滅」に例えるのである。

中国の初祖である二十八祖の達磨は、「各々の心は木や石のような物である」と言った。

心は、心のようなのであるし、尽大地の心なのである。

このため、自分や他者の心なのである。

尽大地の人や、尽十方界の仏祖や、天人や竜などの各々の心は、「木や石」なのである。

この他に更に心は無いのである。

「木や石」は、自ずから、「有」、「存在」や、無や、空（くう）や、色などの境界の鳥かごにとらわれない。

「木や石の心」によって「発心する」、「悟りを求める事を思い立って心する」し、修行し証するのである。「各々の心は木や石である」からなのである。

「各々の心は木や石である」力によって今の「かの不思量の奥底を思量している」、「今は思考できない思考を思考しようとしている」事は形成されて現されているのである。

「各々の心は木や石である」、「風声」、「話」を見聞きする事によって初めて外道の類（たぐい）を超越するのである。

「各々の心は木や石である」、「風声」、「話」を見聞きする前は仏道ではないのである。

大証国師と呼ばれる南陽慧忠は、「古代の仏の心とは、牆壁や瓦礫である」と言った。

「牆壁や瓦礫」は、どこにあるのか？　と参入して詳しく看る（み）るべきである。

「何ものかが、どの様にかして形成されて現されている」と質問するべきである。

「古代の仏の心」とは、釈迦牟尼仏よりも過去の仏である「空王仏」近辺の時代の過去の物ではなく、「粥足飯足」、「朝食に満足するし昼食に満足する事」なのであるし、「草足水足」、「牛が草と水で満足するように、修行者が悟りにとらわれずに淡々と仏道を実践する事」なのである。

これらのようである「古代の仏の心」をひねって来て、坐禅している仏として坐禅して仏に成る事を「発心」、「悟りを求める事を思い立って心する」と呼ぶ。

「発菩提心」、「発心」、「悟りを求める事を思い立って心する事」の因縁は、他からひねって来る事はできず、「菩提心」、「悟りを求める心」をひねって来て「発心する」、「悟りを求める事を思い立って心する」のである。

「『菩提心』、『悟りを求める心』をひねって来る」とは、一本の草をひねって仏像を造る事であるし、
根が無い樹をひねって経を造る事であるし、
砂を仏に捧げたり、飲み物を仏に捧げる事であるし、
一握りの食べ物を生者に施す事であるし、
五本の華を如来、釈迦牟尼仏に捧げる事である。

他の者からの勧(すす)めによって少しの善行を修行したり、「魔」、「仏敵」に悩(なや)まされて仏を礼拝したりするのもまた「発菩提心」、「発心」、「悟りを求める事を思い立って心する事」なのである。

それだけではなく、（「発心」、「悟りを求める事を思い立って心する事」とは、）「知家非家、捨家出家、入山修道、信行、法行する」、「家が真の家ではないと知って、家を捨てて出家し、山に入って仏道を修行し、仏法を信じて行い、仏法を知って行う」事であるし、
仏像を造ったり、仏塔を造ったりする事であるし、
経を読み、「念仏する」、「仏について思う」、「仏の名前などを唱える」事であるし、
生者の為(ため)に法を説く事であるし、
師を訪ねて仏道を尋ねる事であるし、
結跏趺坐する事であるし、
「仏、法、僧」の「三宝」を一回、礼拝する事であるし、
「南無仏」と一回、唱える事である。（「南無」は「敬礼する」事を意味する。）

このように、「八万」の法蘊の因縁は、必ず、「発心」、「悟りを求める事を思い立って心する事」に成るのである。

夢の中で発心した者が仏道を会得した事が有るし、
酔っている最中に発心した者が仏道を会得した事が有るし、

「飛花落葉」、「花もいつかは散り飛び、葉もいつかは枯れ落ちるように、儚い人生」の中で発心して仏道を会得する事が有るし、
桃の花を見たり緑色の竹の音を聞いたりして発心して仏道を会得する事が有るし、
天上で発心して仏道を会得する事が有るし、
海中で発心して仏道を会得する事が有る。
これらの者は皆、「発菩提心」、「発心」の中で更に「発菩提心する」、「発心する」のである。

身心の中で「発菩提心する」、「発心する」のであるし、
諸仏の身心の中で「発菩提心する」、「発心する」のであるし、
仏祖の「皮肉骨髄」、「理解」の中で「発菩提心する」、「発心する」のである。

そのため、今、仏像を造ったり、仏塔を造ったりする事などは、正しく、「発菩提心」、「発心」なのである。

直に仏に成るに至る発心なのであり、さらに中間で破る事はできない。

発心を「無為の」、「自然のままである」、「人為的に作られていない」、「消滅しない不変の絶対の真理の」功徳とするし、
発心を「無作の」、「ありのままである」功徳とするし、
発心は「真如観」、「真の、ありのままを観る事」なのであるし、
発心は「法性観」、「法の本性を観る事」なのであるし、

発心は「諸仏集三昧」、「諸仏の知や徳を集めた三昧」なのであるし、
発心は「得諸仏陀羅尼」、「諸仏の真理の保持を会得する事」なのであるし、
発心は「阿耨多羅三藐三菩提心」、「無上普遍正覚心」(、「無上心」、「発無上心」)なのであるし、
発心は阿羅漢果に成るのであるし、
発心は仏を形成して現すのである。

発心の他に更に「無為」、「自然のままである事」、「消滅しない不変の絶対の真理」や、「無作」、「ありのままである事」などの「法」、「もの」は無いのである。

それなのに、「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の愚かな人は、誤って「仏像を造ったり、仏塔を造ったりする事は、『有為の』、『人為的に作られている』、『生じたり滅んだりする変化する、この世のものである』功績なのである。
捨てて放置して営むべきではない。
『息慮凝心』、『慮(おもんばか)る事を休息させて心を凝(こ)らす事』が『無為』、『自然のままである事』、『消滅しない不変の絶対の真理』なのであるし、
『無生』、『生じない事』や、『無作』、『何もしない事』が『無為』、『自然のままである事』、『消滅しない不変の絶対の真理』なのであるし、
『法性』、『法の本性』や、『実相』、『実の相』の、『観行』、『観(み)る修行』が『無為』、『自然のままである事』、『消滅しない不変の絶対の真理』なのである」と言ってしまう。

このように誤って言うのを、西のインドから東の地の中国までの古今の習慣や風俗としてしまっている。

このため、重い罪や、最も重い罪である五逆罪を作っても、仏像を造らないし、仏塔を造らないし、煩悩を林のように盛んにして汚染されても、経を読まないし、「念仏しない」、「仏について思わない」、「仏の名前などを唱えない」。

これでは、人や天人の種を損なって壊すだけではなく、如来の仏の性質を否定して信じない輩に成ってしまう。

実に、悲しむべきである。

「仏、法、僧」という「三宝」の時に出会いながら、「三宝」の怨敵に成ってしまっている。

「三宝」の山に上りながら手ぶらで帰り、「三宝」の海に入りながら手ぶらで帰る様では、たとえ千、万の無数の仏祖の「この世」への出現に出会っても、「得度する事」、「仏土へ渡る事」は期待できないし、「発心する」、「悟りを求める事を思い立って心する」方法を失くしてしまう。

これは、経典に従わないし、善知識を持つ人々に従わないので、このように成ってしまうのである。

多くの人々は外道や邪悪な師に従うので、このように成ってしまうのである。

「仏塔を造る事などは『発菩提心』、『発心』ではない」という誤った見解を早く投げ捨てるべきである。

心を洗い、身を洗い、耳を洗い、眼を洗って、見聞きするべきではない。

まさに仏の経に従い、善知識を持つ人々に従って、正しい仏法に帰り、仏法を学ぶべきである。

仏法の大いなる仏道では、一つの塵の中に大千世界の経典が有り、一つの塵の中に無量の諸仏がいる。

一本の草と一本の木は共に、身心なのである。

「万法不生」、「全てのものが生じる事を超越している」のであれば、一つの心も「不生」、「生じる事を超越している」のである。

「諸法実相」、「全てのものが実の相である」ならば、一つの塵も実の相なのである。

そのため、一つの心は「諸法」、「全てのもの」であるし、「諸法」、「全てのもの」は一つの心であるし、全身である。

もし仏塔を造る事などが「有為である」、「人為的に作られている」、「生じたり滅んだりする変化する、この世のものである」時は、「仏果菩提」、「仏という結果である悟り」や、「真如仏性」、「真の、ありのままの仏の性質」もまた「有為である」。

「真如仏性」、「真の、ありのままの仏の性質」は「有為ではない」、「人為的に作られていない」、「生じたり滅んだりする変化する、この世のものではない」ので、仏像を造ったり、仏塔を造ったりする事は「有為ではなく」、「無為の」、「自然のままである」、「消滅しない不変の絶対の真

理である」、「発菩提心」、「発心」なのであるし、「無為」の「無漏の」、「煩悩が無い汚染されていない」功徳なのである。

ただ、正に、「仏像を造ったり、仏塔を造ったりする事などは『発菩提心』、『発心』なのである」と確信して理解するべきなのである。

億の無量の劫の行いと願いは、「仏像を造ったり、仏塔を造ったりする事などは『発菩提心』、『発心』なのである」と確信して理解する事によって生じて成長するのであるし、億、億万の無量の劫、朽ちない「発心」なのである。

「仏像を造ったり、仏塔を造ったりする事などは『発菩提心』、『発心』なのである」と確信して理解する事を「仏に成れる性質を見聞きした」と言うのである。

知るべきである。

木や石を集め、泥や土を重ね、金と銀などの「七宝」、「七種類の宝」を集めて仏像を造ったり、仏塔を造ったりする事は、一つの心を集めて仏像を造ったり、仏塔を造ったりする事に成るのである。

空（くう）は空（くう）を集めて仏に成るのである。
心は心をひねって仏を造るのである。
仏塔は仏塔を重ねて仏塔を造るのである。
仏は仏を形成させて現させて仏を造るのである。

このため、経には、「作是思惟時、十方仏皆現」、「この思惟をなす時、十方の仏は皆、現れる」と記されている。

知るべきである。

一つの思惟により仏に成る時は、十方の思惟による仏は皆、現れるのである。

一つの「法」、「もの」により仏に成る時は、「諸法」、「全てのもの」が仏に成るのである。

釈迦牟尼仏は、「明けの明星が出現した時、私(、釈迦牟尼仏)は、大地と、情の有る全ての生者と(共に)、同時に、仏道を成就し(て、仏に成っ)た」と言った。

そのため、「発心、修行、菩提、涅槃」、「悟りを求める事を思い立って心する事、修行、覚、寂滅」は、同時の「悟りを求める事を思い立って心する事、修行、覚、寂滅」なのである。

仏道の身心とは、草木や瓦礫なのであるし、風や雨や、水や火なのである。

これらを巡らして仏道に成らせる事が、「発心」なのである。

虚空をつまんで、仏像を造ったり、仏塔を造ったりするべきである。
谷川を掬(すく)って、仏像を造ったり、仏塔を造ったりするべきである。
これが、「発阿耨多羅三藐三菩提」、「発無上普遍正覚」なのである。

一つの「発菩提心」、「発心」を百、千、万発、無限発、起こすのである。
修行と証もまた同様である。

それなのに、誤って「『発心』は一発、起こったら更に『発心』しないし、
修行は無量であるが、証する事ができる修行の成果は唯一の証だけである」
としか聞く事ができない人は、仏法を聞く事ができていないし、
仏法を知っていないし、
仏法に出会っていない。

千億発の無限発の「発心」は、必ず、一つの「発心」を起こした事による
物なのである。
千億人の無数人の「発心」は、一つの「発心」を起こした事による物なの
である。
一つの「発心」は千億の無数の「発心」に成るのである。
修行と証と、「転法」、「法を転じる事」、「法を説く事」もまた同様で
ある。

草木などでなければ、どうして身心が存在するであろうか?
身心でなければ、どうして草木が存在するであろうか?

草木でなければ、草木ではないので、このように成るのである。

坐禅して仏道をわきまえる事は、「発菩提心」、「発心」なのである。

「発心」は、(坐禅と、)同一ではないし、全く異なる物でもない。

坐禅は、(「発心」と、)同一ではないし、全く異なる物でもないし、くり返しではないし、完全に分離できる物ではない。

「発心、修行、菩提、涅槃」、「悟りを求める事を思い立って心する事、修行、覚、寂滅」の各々に皆このように参入して究めるべきである。

もし草や木や「七宝」、「七種類の宝」を集めて仏像を造ったり仏塔を造ったりする全てが「有為」、「人為的に作られているもの」、「生じたり滅んだりする変化する、この世のもの」であるので仏道を成就できなければ、三十七品菩提分法も「有為」であろうし、三界の人や天人の身心をひねって修行する事は共に、「有為」であろうし、究極の境地は無い事に成ってしまうであろう。

草や木や瓦礫と、四大(元素)と「色受想行識」という「五蘊」は、同じく、唯一の心なのであるし、(唯一の心で出来ているのであるし、)実の相なのである。

尽十方界と、「真如仏性」、「真の、ありのままの仏の性質」は、同じく、法の位に住んでいる。

「真如仏性」、「真の、ありのままの仏の性質」の中に、どのように、草や木などが存在するのであろうか?

草や木などは、「真如仏性」、「真の、ありのままの仏の性質」である！
「諸法」、「全てのもの」は、「有為」、「人為的に作られているもの」、「生じたり滅んだりする変化する、この世のもの」ではなく、「無為」、「自然のままであるもの」、「消滅しない不変の絶対の真理」ではなく、実の相なのである。

実の相は、ありのままの実の相なのである。
「ありのまま」とは、今の身心なのである。

この身心によって「発心」するべきである。
水を踏み、石を踏む事を嫌う事なかれ。

ただ一本の草をひねって「丈六」の「金身」である「仏身」を造り、一つの微小な塵（ちり）をひねって古代の仏の塔廟を建てる事は、「発菩提心」、「発心」に成るのであるし、
仏を見る事に成るのであるし、
仏を聞く事に成るのであるし、
仏法を見る事に成るのであるし、
仏法を聞く事に成るのであるし、
仏に成る事に成るのであるし、
行（おこな）っている仏を行う事に成るのである。

釈迦牟尼仏は、「男性の在家信者、女性の在家信者、善い男子、善い女の人は、妻子の肉を『仏、法、僧』という『三宝』に捧げているような物であるし、
自身の肉を『三宝』に捧げているような物である。
諸々の出家者は、既に、信者からの布施を受け取っている。
(出家者は、)どうして修行しないでいられようか？　いいえ！　修行しなければならない！」と言った。

そのため、知る事ができる。
飲食物や、衣服や、寝具や、医薬品や、僧が住む僧房や、田畑や、林などを「仏、法、僧」という「三宝」に捧げる事は、自身や妻子などの身の皮肉骨髄を捧げるような物なのである。

既に「三宝」の功徳の海に入っている。「一味」、「仲間」、「同志」なのである。
既に「一味」、「仲間」、「同志」であるので、「仏、法、僧」という「三宝」なのである。
既に「三宝」の功徳が自身や妻子の皮肉骨髄に形成されて現されているのは、精勤的に仏道をわきまえる鍛錬をした事による物なのである。

今、釈迦牟尼仏の性質と相を挙げて、仏道の「皮肉骨髄」、「理解」に参入して理解して取るべきなのである。

今、信者からの布施は「発心」に成るのである。

信者からの布施を受け取る者である出家者は、どうして修行しないでいられようか？　いいえ！　修行しなければならない！

「頭が正しいので尾も正しい」べきなのである。

このため、突然、一つの塵（ちり）を「動かせば」、「起こせば」、一つの心が、従って、「動く」、「起こる」のである。

初めて、一つの心を起こせば、一つの空（くう）が、わずかに起こるのである。

未だ学ぶべき物が有る人や、学ぶべき物が絶えて無い人は、「発心」する時、初めて、一つの仏に成れる性質という種を撒（ま）く事ができ得るのである。

四大(元素)と「色受想行識」という「五蘊」を巡らして誠心誠意、修行すれば、仏道を会得する。

草木や牆壁を巡らして誠心誠意、修行すれば、仏道を会得する。

四大(元素)と「色受想行識」という「五蘊」は、草木や牆壁と、同じく参入しているからであるし、

同じ性質だからであるし、

同じ心や命だからであるし、

同じ身や機関だからである。

このため、仏祖の会の下では、多くの人が「草木心」をひねって仏道をわきまえている。

これが、「発菩提心」、「発心」の様子なのである。

三十二祖の弘忍は前世は「栽松道者」であった。
臨済義玄には、黄檗山で杉と松を植える鍛錬が有った。
後洞山師虔が松を植えていた時、劉翁がいた。
彼らは、「常緑樹の松と栢の様に操を変えない事」をひねって、仏祖の「眼睛」、「見る眼」を抉り出したのである。
活きている「眼睛」、「見る眼」を弄する力は、「眼睛」、「見る眼」を開き明らかにする事を形成して現しているのである。
仏像を造ったり、仏塔を造ったりする事などは、「眼睛」、「見る眼」を弄する事に成るのであるし、
発心される事に成るのであるし、
発心させる事に成るのである。
仏塔を造るなどの「眼睛」、「見る眼」を得ていないような人は、仏祖として仏道を成就する事は無いのである。
仏像を造る「眼睛」、「見る眼」を得た後で、仏祖に成るのである。

誤っている「仏塔などを造っても、終には、塵や土と化す。真実の功徳ではない。『無生の』、『生じる事を超越している』修練は堅牢である。塵や埃に汚染されない」という言葉は仏の言葉ではない。
もし「『塔婆』、『仏塔』は塵や土と化す」と言うならば、「無生」、「生じる事を超越しているもの」もまた塵や土と化すのである。
もし「無生」、「生じる事を超越しているもの」が塵や土と化さないのであれば、「塔婆」、「仏塔」もまた塵や土と化さない。

「この中には、どんなものが存在するのか？　『有為』、『人為的に作られているもの』、『生じたり滅んだりする変化する、この世のもの』と説いたり、『無為』、『自然のままであるもの』、『消滅しない不変の絶対の真理』と説いたりする」なのである。

経には、「菩薩は、生死において、最初に発心した時、ひたすらに『菩提』、『悟り』を求めて、堅固で、動かす事ができない。

彼(、菩薩)の一念の功徳は深さや広さが無限である。

如来が分別して説いて劫を極めても、(菩薩の一念の功徳を言い)尽くす事はできない」と記されている。

明らかに、知るべきである。

生死をひねって来て「発心」するとは、「ひたすらに『菩提』、『悟り』を求める」事なのである。

「菩薩の一念」は、一本の草や一本の木と同じなのである。一つの生や一つの死であるので。

けれども、「菩薩の一念の功徳」の「深さ」も「無限」なのであるし、「広さ」も「無限」なのである。

「劫を極めて」言葉にして、「如来が菩薩の一念の功徳を分別しても言い尽くす事ができない」。

「海は枯れてもなお底が残る」し、「人は死んでも心が残る」ので、「言い尽くす事ができない」のである。

「菩薩の一念の功徳は深さや広さが無限である」ように、一本の草や一本の木や、一つの石や一つの瓦（かわら）は、「深さや広さが無限である」。

もし一本の草や一つの石が「七尺、八尺」であれば、「菩薩の一念」も「七尺、八尺」であるし、「発心」もまた「七尺、八尺」である。

そのため、「奥深い山に入って仏道を思惟する事は簡単なのである。仏像を造ったり、仏塔を造ったりする事は難しいのである」。

共に、精進して怠らない事によって成就するが、心をひねって来る事と、心によってひねって来られる事は、遥かに異なるのである。

このような「発菩提心」、「発心」が積もり重なって、仏祖として形成されて現されるのである。

正法眼蔵　発無上心

その時、千二百四十四年、越州の吉田県の吉峰精舎にいて僧達に示した。

発菩提心

心は三種類、有る。

(一)質多心。中国などでは「慮知心」と言う。(「質多」はサンスクリット語で「心」を意味する。)

(二)汗栗駄心。中国などでは「草木心」と言う。(原文は「汗栗多心」。「汗栗駄」はサンスクリット語で「心臓」を意味する。)

(三)矣栗駄心。中国などでは「積聚精要心」と言う。(原文は「矣栗多心」。)

三種類の心の中で、「菩提心」を起こすには、必ず、慮知心を用いる。

「菩提」はインドのサンスクリット語の音写で、中国などでは「道」と言う。

「質多」はインドのサンスクリット語の音写で、中国などでは「慮知心」と言う。

慮知心でなければ、「菩提心」を起こす事ができない。

ただし、慮知心を「菩提心」にするわけではない。

慮知心によって「菩提心」を起こすのである。

「『菩提心』を起こす」とは、自己が仏土へ未だ渡っていない時に、「先に、一切の全ての生者を仏土へ渡そう」という願いを起こして営むのである。

「姿形」、「外見」が卑しくても、「菩提心」を起こせば、既に、一切の全ての生者の導師なのである。

「菩提心」は、本から有るわけではないし、
今、新たに不意に突然に起こるわけではないし、
唯一ではないし、
多数ではないし、
「自然」、「成り行きな物」ではないし、
「凝然」、「じっと動かない物」ではない。

私の身の中に「菩提心」が有るわけではない。

私の身は心の中に有るわけではない。

「菩提心」は、法界に遍在するわけではないし、
前に存在していたわけではないし、
後に存在するわけではないし、
無いわけではないし、
「自性」、「自体の本来の性質」ではないし、
「他性」、「他のものの性質」ではないし、

「共性」、「共通性」ではないし、
「無因性」、「原因が無い性質」ではない。

けれども、「感応道交する」、「通じ合う」所で、「発菩提心する」、
「発心する」のである。

諸々の仏や菩薩が授ける物ではなく、自分が可能な物ではなく、「感応道交する」、「通じ合う」と「発心する」ので、「自然」、「成り行きな物」ではないのである。

「発菩提心」、「発心」の多くは、「南閻浮提」、「この世」の人の身で「発心する」のである。
「発菩提心」は、「八難所」などでも少しは有るが、多くは無い。

「菩提心」を起こした後、「三阿僧祇劫」と「百大劫」、修行する。
(仏に成るには「三阿僧祇劫」と「百大劫」という長い年月がかかると言う場合が有る。)
または、無量の劫、行(おこな)って、仏に成る。
または、無量の劫、行(おこな)って、全ての生者を先に仏土へ渡して、自分は終(つい)に仏に成らない。
ただ全ての生者を仏土へ渡し、全ての生者に利益をもたらす者もいるのである。

菩薩の心、願いに従う。

「菩提心」とは、「どうにかして一切の全ての生者に『菩提心』、『悟りを求める心』を起こさせて、仏道に引き入れて導きたい」と絶え間無く「身業、口業、意業」の「三業」で営む物なのである。

いたずらに無駄に、世間の人々が欲望し願う物を与える事を「全ての生者に利益をもたらす」とするわけではない。

「発菩提心」、「発心」や、修行と証は、迷いと悟りの境地を超越しているし、

三界を超越しているし、

一切を超越しているし、

声聞や独覚の段階の人が及ぶ事ができる物ではない。

初祖の迦葉は、詩で釈迦牟尼仏をほめて、「発心と究極の境地の二つは全く異ならない。

このような二つの心を先に心で持つ事は難しい。

自分は未だ『得度しない』、『仏土へ渡らない』で、先に、他の者を仏土へ渡す。

このため、私、迦葉は、初めての発心を敬礼する。

(菩提心を)初めて起こした時に既に、人や天人の師と成れるのであるし、声聞や、『縁覚』(、『独覚』)を超越している。

このような発心は三界を超越している。

このため、『最無上(心)』と名づける事ができ得る」と言った。

「発心」とは、初めて「自分は未だ『得度しない』、『仏土へ渡らない』で、先に、他の者を仏土へ渡す」心を起こす事なのである。

初めて「自分は未だ『得度しない』、『仏土へ渡らない』で、先に、他の者を仏土へ渡す」心を起こす事を「初発菩提心」と言うのである。

「自分は未だ『得度しない』、『仏土へ渡らない』で、先に、他の者を仏土へ渡す」心を起こして以後、更に何人かの諸仏に出会い、捧げものを捧げて、仏法を見聞きし、更に「菩提心」を起こす事は、雪の上に霜（しも）を加えるような物なのである。

「究極の境地」とは、「仏という結果である悟り」なのである。

無上普遍正覚と「初発菩提心」は、量って比べれば、この世を焼き尽くす「劫火」と蛍の光のような物であるが、「自分は未だ『得度しない』、『仏土へ渡らない』で、先に、他の者を仏土へ渡す」心を起こせば、「二つは全く異ならない」のである。

「法華経」の「如来寿量品」で、釈迦牟尼仏は、「常に自ら、こう思う。『どの様にかして、全ての生者に、無上の道へ入る事を得させて、速（すみ）やかに仏の身を成就する事を得させたい』」と言った。

この思いが、如来、釈迦牟尼仏の(「この世」での)寿命の量と成るのである。

仏が、発心、修行、悟りという結果を証する事は皆、このようなのである。

「全ての生者に利益をもたらす」とは、全ての生者に「自分は未だ『得度しない』、『仏土へ渡らない』で、先に、他の者を仏土へ渡す」心を起こさせる事なのである。

「自分は未だ『得度しない』、『仏土へ渡らない』で、先に、他の者を仏土へ渡す心を起こしている力によって、私は、仏に成ろう」と思うべきではない。

たとえ仏に成る事ができる功徳が熟して円満していても、なお功徳を全ての生者に巡らして、全ての生者が、仏に成れるように、または、仏道を会得できるように、「回向する」、「自分の功徳を他の者に与える」のである。

発心は、自分だけの物ではないし、他の者の物ではないし、(外から)来たわけではないが、発心して以後、大地を挙げれば皆、黄金と成るし、大海をかけば、たちまち、甘露と成る。

発心して以後、土石や砂礫を取る事は、「菩提心」をひねって来る事に成るのであるし、水しぶきや泡や火を持って来る事は、「菩提心」を親しく担って来る事に成るのである。

そのため、国や、城や、妻子や、「七宝」、「七種類の宝」や、男女や、頭や目や髄や脳や、身や肉や手や足を施す事は皆、「菩提心」が、競争して騒がしいのであるし、魚の様に活発なのである。

「質多心」、「慮知心」は、近いわけではないし、遠いわけではないし、自分だけの物ではないし、他の者の物ではないが、「自分は未だ『得度しない』」、『仏土へ渡らない』で、先に、他の者を仏土へ渡す」道理で「質多心」、「慮知心」を巡らして不退転であれば、「発菩提心」、「発心」なのである。

そのため、今、一切の生者が「私の所有物である」と執着している草木や瓦礫や金銀や珍しい宝を「菩提心」で他の者に施す事もまた「発菩提心」、「発心」なのである！

心や、「諸法」、「全てのもの」は共に、「自、他、共、無因」、「自体の本来の物、他のものの物、共通の物、原因が無い物」ではないので、「菩提心」を「一刹那」、「一瞬」、起こしてからは、「万法」、「全てのもの」が皆、「増上縁」、「他のものを増上させる縁」と成る。

発心や、仏道の会得は皆、「刹那」、「一瞬の間」に生じて滅ぶ物による物なのである。

もし「刹那」に生じて滅びなければ、前の「刹那」の悪を去る事ができなく成ってしまうであろう。

前の「刹那」の悪を未だ去っていなければ、後の「刹那」の善は現在、生じて現れる事ができなく成ってしまうであろう。

発心や、仏道の会得や、善が生じる「刹那」の量は、如来、釈迦牟尼仏、独りだけが明らかに知らせてくれている。

「『一刹那』の心では、一つの言葉を起こす事ができる。『一刹那』の言葉では、一文字を説明できる」という言葉も如来、釈迦牟尼仏、独りだけの教えである。他の聖者には話す事ができない教えなのである。

壮年の男性が「一弾指」、「一回、指を弾く」間に、六十五の「刹那」が有って、「色受想行識」という「五蘊」が生じて滅びるが、凡人が、かつて覚知した事は無いのである。

「怛刹那」以上の量からは、凡人も知る事ができる。

（一つの「怛刹那」は百二十の「刹那」である。）

一つの昼夜を経る間に、六十四億九万九千九百八十の「刹那」が有って、「色受想行識」という「五蘊」も何回も生じて滅びるが、凡人が、かつて覚知した事は無いのである。

（「刹那」を)覚知できないので、(釈迦牟尼仏の「刹那」の話を聞いても、)「菩提心」を起こさない。

仏法を知らないし、仏法を信じない者は、「刹那」や「色受想行識」という「五蘊」が生じて滅ぶ道理を信じないのである。

如来、釈迦牟尼仏の「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼と寂滅した妙なる心」を明らめる者は、必ず、「刹那」や「色受想行識」という「五蘊」が生じて滅ぶ道理を信じるのである。

今、私達は、如来、釈迦牟尼仏が説いた教えに出会って、明らかに理解したように思われるが、わずかに「怛刹那」以上の量から「刹那」について知っているだけに過ぎないし、「『刹那』や『色受想行識』という『五蘊』が生じて滅ぶ道理は、釈迦牟尼仏の言う通りなのであろう」と信じて受け入れているだけに過ぎないのである。

釈迦牟尼仏が説いた一切の仏法を明らめる事ができないし、知らない事も、「刹那」の量を知らないのと同様である。

学者は、妄(みだ)りに傲(おご)り高ぶる事なかれ。

極小を知らないだけではなく、極大をもまた知らないのだから。

如来、釈迦牟尼仏の仏道による力による時は、全ての生者もまた三千界を見る事ができる。

現在の生である「本有」から、「中有」を経て、未来の生である「当有」へ至る。

皆、「一刹那」ごとに移り行くのである。

自分の心とは無関係に、業に引かれて生と死をくり返す事は、「一刹那」も停滞しないのである。

生と死をくり返す身心によって、急いで「自分は未だ『得度しない』、『仏土へ渡らない』で、先に、他の者を仏土へ渡す」、「菩提心」を起こすべきなのである。

「発菩提心」、「発心」の道に背(そむ)いて、たとえ身心を惜しんでも、生老病死して、終(つい)に、自分の所有物と成る事は有り得ないのである。

全ての生者の「寿行」、「寿命が活動して行く事」が生じ滅んで留まらないし、速(すみ)やかであるのは、次のようなのである。

釈迦牟尼仏が存命中の時に、ある男性の出家者がいて、釈迦牟尼仏の所へ来て、釈迦牟尼仏の足に頭をつけて礼拝し、体勢を戻して釈迦牟尼仏の前に留まり、釈迦牟尼仏に「全ての生者の『寿行』、『寿命が活動して行く事』は、どうして速(すみ)やかに生じ滅ぶのでしょうか?」と言った。

釈迦牟尼仏は、「私が説明できても、あなたは知る事ができない」と言った。

ある出家者は、「示す事ができる例えは無いでしょうか？」と言った。

釈迦牟尼仏は、「有ります。

今あなたの為(ため)に説きましょう。

例えば、四人のよい射手が、各々、弓矢を取り、相互に背を向けて集まって立ち、四方に矢を射ようとしていると、一人の(超常的に)足の速い男性が来て四人の射手に『あなた達、今、同時に矢を放ってください。私は全ての矢を取る事ができて全ての矢を地に落としません』と言うような物である。

どう思いますか？

この一人の(超常的に)足の速い男性は、速くないですか？」と言った。

ある出家者は、「非常に速いです。釈迦牟尼仏様」と言った。

釈迦牟尼仏は、「この一人の(超常的に)足の速い男性の速さは、『地行夜叉』が地を行く速さに及ばない。

『地行夜叉』が地を行く速さは、『空行夜叉』が空を行く速さに及ばない。

『空行夜叉』が空を行く速さは、『四天王天』の者の速さに及ばない。

『四天王天』の者の速さは、太陽や月の速さに及ばない。

太陽や月の速さは、『堅行天子』の速さに及ばない。

『堅行天子』は、太陽や月を導いて引いて行く者である。

これらの諸々の天人は、このような順序で比例して速い。

『寿行』、『寿命が活動して行く事』が生じて滅ぶのは、『堅行天子』よりも速いのである。

『刹那』で移り変わって行き、一時も停滞する事は無い」と言った。

私達の「寿行」、「寿命が活動して行く事」が生じて滅ぶのが速やかに「刹那」で移り変わって行くのは、このようなのである。
念と念の間で、修行者は、このような道理を忘れる事なかれ。

生じて滅ぶのが速やかに「刹那」で移り変わって行く事にいながら、もし「自分は未だ『得度しない』、『仏土へ渡らない』で、先に、他の者を仏土へ渡す」一念を起こす者には、長い寿命の量が、たちまち目の前に現れるのである。

過去、現在、未来の十方の諸仏、釈迦牟尼仏を含む過去七仏、二十八祖の達磨までの西のインドの二十八人の祖師達、二十八祖の達磨から三十三祖の大鑑禅師までの東の地の中国の六人の祖師達、釈迦牟尼仏の「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼と寂滅した妙なる心」を伝えている祖師達は皆、共に、「菩提心」を保持し任せられている。

「菩提心」を未だ起こしていない人は祖師ではないのである。
「禅苑清規」の第百二十問には、「『菩提心』を起こして悟っているか否か？」と記されている。

仏祖が仏道を学び修行する時は必ず、「菩提心」を起こして悟るのを優先する事を明らかに、知るべきである。

「菩提心」を優先する事が仏祖の常套手段なのである。

「起こして悟る」とは、明らかに理解する事なのである。

これは、「大覚」、「大いなる悟り」ではない。

たとえ「十地」を速やかに証して悟ってもなお、菩薩なのである。

二十八祖の達磨までの西のインドの二十八人の祖師達、二十八祖の達磨から三十三祖の大鑑禅師までの東の地の中国の六人の祖師達、諸々の大いなる祖師達は、菩薩なのであるし、仏ではないし、声聞や独覚などではない。

今の世にいる学に参入しようとしている輩の中には、「菩薩なのであるし、声聞ではない」事を明らめて知っている僧は一人もいない。

ただ妄りに「僧である」と自称して、「菩薩なのである」真実を知らないので、乱雑にしている。

末法の世に成り始めて祖師の仏道が衰退している事を憐れむべきである。

たとえ在家者でも、たとえ出家者でも、天上にいても、人の間にいても、苦しんでいても、楽しんでいても、早く「自分は未だ『得度しない』、『仏土へ渡らない』で、先に、他の者を仏土へ渡す」心を起こすべきである。

「衆生界」、「この世」は有限でも無限でもないが、「先に、一切の生者を仏土へ渡す」心を起こすのである。

「先に、一切の生者を仏土へ渡す」心が「菩提心」なのである。

「一生補処」、「この世に生まれるが、来世で仏に成れる」菩薩は、まさに「南閻浮提」、「この世」に降りようとする時、「兜率天」の諸々の天人のために、最後の教えを施して「『菩提心』は『法明門』、『法を明らかにする門』なのである。『仏、法、僧』という『三宝』を断たないので」と言う。

「三宝が断たれない」のは「菩提心」の力による物なのである事を明らかに知る事ができる。

「菩提心」を起こして以後、「菩提心」を堅く守護し、退転しないべきである。

釈迦牟尼仏は、「菩薩が守護する一大事とは、どういった物であるのか？(菩薩が守護する一大事とは、)『菩提心』なのである。
世の人々が一子を守護するように、
片目が見えない者が残りの唯一の目を護るように、

荒れ野を行く時に、導いてくれる者を守護するように、
菩薩摩訶薩は、この『菩提心』を守護する事に常に勤める。
このように、菩薩は、『菩提心』を守護するのである。
このように、『菩提心』を護るので、無上普遍正覚を得る。
無上普遍正覚を得るので、『常、楽、我、浄』、『常に不変、苦を離れた安楽、障害が無い自在、迷いが無い清浄』という『涅槃の四徳』を十分に備える。
『常、楽、我、浄』とは、無上の大いなる『般涅槃』、『完全な涅槃』、『完全な寂滅』なのである。
このため、菩薩は、(『菩提心』という)一つの『法』、『物』を守護するべきである」と言った。

このように、釈迦牟尼仏は「『菩提心』を守るべきである」と明らかに言っている。

「菩提心」を守護して退転させてはいけない。
なぜなら、世間の常套句で、「たとえ生じても熟し難い物が三種類、有る。
魚の卵、
菴羅(マンゴー)の果実、
発心した菩薩である」と言われているからである。

「菩提心」を忘れて失くし退転する者が多いので、自分も「菩提心」を忘れて失くし退転する事を事前に恐れるのである。

このため、「菩提心」を守護するのである。

菩薩が初心の時、「菩提心」を退転するのは、多くは、正しい師に出会わない事による。

正しい師に出会わなければ、正しい法を聞けないし、正しい法を聞けなければ、恐らくは、因果を否定し信じないし、

解脱を否定し信じないし、

「仏、法、僧」という「三宝」を否定し信じないし、

過去、現在、未来などの諸法を否定し信じない。

そして、いたずらに無駄に、現在の「五欲」を貪(むさぼ)って、未来の「菩提」、「覚」の功徳を失くしてしまう。

「天魔波旬」、「魔」、「仏敵」などは、修行者を妨(さまた)げるために、仏の姿形に化けたり、父や母や師匠や親族や諸々の天人などの姿形を出現させて、来て近づいて、菩薩に向かって虚偽の姿形をこしらえて、勧(すす)めて、「仏道は長く、長く諸々の苦しみを受ける。最も憂(うれ)うべき物なのである。先に、自分が生死を解脱して、後に、全ての生者を仏土へ渡すに越した事は無いであろう」と言う。

修行者は、この言葉を聞き入れて、「菩提心」を退いてしまうし、菩薩の修行を退いてしまう。

正に、知るべきである。

このような説は、「魔」、「仏敵」の説なのである。

菩薩は、知って、従う事なかれ。

ひたすら「自分は未だ『得度しない』、『仏土へ渡らない』で、先に、他の者を仏土へ渡す」行いと願いを退転させないべきである。

「自分は未だ『得度しない』、『仏土へ渡らない』で、先に、他の者を仏土へ渡す」行いと願いに背く（そむく）ような説は、「『魔』、『仏敵』の説である」と知るべきであるし、

「外道の説である」と知るべきであるし、

「悪友の説である」と知るべきである。

更に従う事なかれ。

「魔」、「仏敵」には四種類、有る。

(一)煩悩魔
(二)五衆魔
(三)死魔
(四)天子魔

「煩悩魔」とは、よく言われる、百八の煩悩などである。

分別すると、「八万四千」の諸々の煩悩である。

「五衆魔」とは、煩悩が和合する「因縁」、「原因や、繋(つな)がり」である。

この身は、四大(元素)や、四大(元素)が造っている「色」や、眼などの「色」によって得ているが、これを「色衆」と名づける。

百八の煩悩などの諸々の「受」が和合するのを「受衆」と名づける。

大小、無数に有る「想」が分別したり和合したりするのを「想衆」と名づける。

好(よ)い姿形を好み、醜い姿形を嫌う心を起こす事によって、貪欲と怒りなどの心を能(よ)く起こして、「相応」、「和合」したり「不相応」、「分別」したりする法を「行衆」と名づける。

「喜、怒、哀、楽、愛、悪」という「六情」と「色声香味触法」という「六塵」は和合するので「眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識」という「六識」を生じる。

この「六識」が分別したり和合したりする事による無数の無限の心を「識衆」と名づける。

「死魔」とは、無常の因縁のために、相続している「色受想行識」という「五衆」、「五蘊」の寿命が破れると、「識、熱、寿(命)」という三つの「法」、「物」を尽(ことごと)く離れてしまうので、「死魔」と名づける。

「天子魔」とは、欲界の主が、この世の楽しみに深く執着し所有するので、邪悪な見解を生じ、一切の賢者と聖者の「涅槃」、「寂滅」の道の法を憎み嫉（ねた）むのを「天子魔」と名づける。

「魔（マーラ）」とは、インドのサンスクリット語の音写で、中国では「能奪命者」と意訳する。

（「マーラ」はサンスクリット語で「殺すもの」を意味する。）

「死魔」は実に能（よ）く命を奪うが、他のものもまた能（よ）く命を奪う因縁をなし、また、智慧の命を奪う。

このため、「殺すもの」(を意味する「マーラ」、「魔」)と名づける。

Q.

一つの「五衆魔」が他の三種の魔を含んでいる。

なぜ分別して四種類と説くのか？

A.

実に、四種類の魔は唯一の魔なのである。

魔の意義を分別するので、四種類、有る。

前記は、十四祖の龍樹が施し設けた物である。

修行者は、知って、学ぶ事に勤めるべきである。

いたずらに無駄に「魔」に悩まされて、「菩提心」を退転する事なかれ。
これが、「『菩提心』を守護する事」なのである。

正法眼蔵　発菩提心

その時、千二百四十四年、越州の吉田県の吉峰精舎にいて僧達に示した。

如来全身

その時、釈迦牟尼仏は、王舎城の北東の霊山に住んでいて、薬王菩薩摩訶薩に「薬王菩薩よ、至る所に、説いたり、読んだり、唱えたり、書いたり、経典が有ったりする所、全てに、『七宝』、『七種類の宝』による塔を建てて、極めて高く広く荘厳に飾らせるべきである。
必ずしも『舎利』、『如来の遺骨』を置く必要は無い。
なぜなら、この(塔の)中に既に如来の全身が有るからである。
この塔に、一切の、華や、香や、『瓔珞』、『宝玉などを紐(ひも)で繋(つな)いだ首飾りや腕輪といった飾り』や、『繒蓋』、『絹の天蓋』や、『幢幡』という旗(はた)や、『妓楽』、『妓女の奏でる音楽』や、『歌頌』、『徳をほめたたえる歌』を捧げて、恭(うやうや)しく敬い、尊重し、ほめたたえるべきである。
もし人が、この塔を見る事ができ得て礼拝し捧げものを捧げれば、皆、『無上普遍正覚に近づけた』と知るべきである」と言った。

経典とは、「説いたり、読んだり、唱えたり、書いたりする物」なのである。
経典とは、実の相なのである。
「『七宝』、『七種類の宝』による塔を建てる」とは、実の相を「塔」と言っているのである。

「極めて高く広く飾らせるべきである」の「高く広く」の量とは、必ず、実の相の量なのである。

「この(塔の)中に既に如来の全身が有る」とは、「経典は如来の全身である」という事なのである。

そのため、「説いたり、読んだり、唱えたり、書いたりする事など」は、「如来の全身」なのである。

「一切の、華や、香や、『瓔珞』、『宝玉などを紐で繋いだ首飾りや腕輪といった飾り』や、絹の天蓋や、『幢幡』という旗や、妓女の奏でる音楽や、徳をほめたたえる歌を捧げて、恭しく敬い、尊重し、ほめたたえるべきである」

または、天の華や、天の香や、天の絹の天蓋などを捧げるべきである。

これらは皆、実の相なのである。

または、人の中で上等な華や、上等な香や、上等な衣服などを捧げるべきである。

これらは皆、実の相なのである。

「捧げものを捧げて、恭しく敬う」のは、実の相なのである。

「塔を建てる」べきである。

「必ずしも『舎利』、『如来の遺骨』を置く必要は無い」と言っているので、「経典は、如来の『舎利』、『遺骨』であるし、如来の全身である」と知る事ができる。

「経典は、如来の全身である」とは、正しく、仏の口から出た黄金の言葉なのである。

仏の口から出た黄金の言葉を見聞きするよりも優れた大いなる功徳は無いのである。

急いで功徳を積み重ねるべきである。

「もし人が、この塔を礼拝し捧げものを捧げれば、皆、『無上普遍正覚に近づけた』と知るべきである」

「この塔を見た」時、誠心誠意で「この塔を礼拝し捧げものを捧げる」べきである。

この塔を礼拝し捧げものを捧げれば、皆、無上普遍正覚に近づけるであろう。

「(無上普遍正覚に)近づく」とは、(無上普遍正覚が)来たり去ったりして近く成るわけではない。

「皆、無上普遍正覚に近づいた」と言っているのである。

今、私達が経典を受け取って保持したり、読んだり、唱えたり、解説したり、書き写したりするのを見るのは、「この塔を見る事ができ得た」事に成るのである。

喜ぶべきである。

「皆、無上普遍正覚に近づけた」のである。

そのため、経典は如来の全身なのである。

経典を礼拝するのは、如来を礼拝した事に成るのである。

経典に出会うのは、如来に見（まみ）えた事に成るのである。

経典は如来の「舎利」、「遺骨」なのである。

このため、「舎利」、「如来の遺骨」は経なのである。

たとえ「経典は『舎利』、『如来の遺骨』である」と知っていても、「『舎利』、『如来の遺骨』は経典である」と知らなければ、未だ仏道ではないのである。

今の「諸法実相」、「全てのものの実の相」は経典なのである。

人の間、天上、海中、虚空、この世、他の世界は皆、実の相なのであるし、経典なのであるし、「舎利」、「如来の遺骨」なのである。

「舎利」、「如来の遺骨」を受け取って保持したり、読んだり、唱えたり、解説したり、書き写したりして悟りを開くべきである。

これは、経典によって、悟りを開く事に成るのである。

古代の仏の「舎利」、「遺骨」が有るし、

今の仏の「舎利」、「遺骨」が有るし、

独覚の「舎利」、「遺骨」が有るし、
転輪聖王の「舎利」、「遺骨」が有るし、
獅子(ライオン)の「舎利」、「遺骨」が有るし、(仏を獅子に例える事が有る。)
木の仏像の「舎利」、「遺骨」が有るし、
絵の仏の「舎利」、「遺骨」が有るし、
人の「舎利」、「遺骨」が有る。

中国の諸代の仏祖の中には、生きている時に「舎利」、「遺骨」を出現させた仏祖もいるし、火葬の後で「舎利」、「遺骨」を生じた仏祖も多くいるが、これらの「舎利」、「仏祖の遺骨」は皆、経典なのである。

「法華経」の「如来寿量品」で、釈迦牟尼仏は、集まっている者達に、「我本行菩薩道、所成寿命、今猶未尽、復倍上数」、「私(、釈迦牟尼仏)は本(もと)より菩薩の道を行(おこな)っていて、成している所の寿命は、今なお未だ尽きないし、また前述の数の倍である」と言った。

八斛四斗の量の「舎利」、「釈迦牟尼仏の遺骨」はなお仏の寿命なのである。

「本行菩薩道」、「本(もと)より菩薩の道を行(おこな)っている」寿命は、三千大千世界だけではなく、多いであろう。

これが如来の全身なのであるし、経典なのである。

「法華経」の「提婆達多品」で、智積菩薩は、「私(、智積菩薩)が、釈迦如来(、釈迦牟尼仏)を見たら、(釈迦牟尼仏は、)無量の劫において、難行苦行して功徳を積み重ねて、菩薩の道を求めて未だかつて止めて休息しない。三千大千世界を観たら、菩薩が身の命を捨てた場所ではない場所は芥子(からし)の種ほども無い。
全ての生者の為(ため)なのである。
そうした後で、菩薩の道の成就を得たのである」と言った。

測り知る事ができる。
この三千大千世界は、一つの真心なのであるし、一つの虚空なのであるし、如来の全身なのである。

(如来、釈迦牟尼仏が身の命を、)捨てた、未だ捨てていない、に関わるべきではない。

「舎利」、「仏の遺骨」は、仏の前、仏の後、ではないし、仏と(同時に)並べる、ではない。

「無量の劫の、難行苦行」は、仏の腹(はら)の生活の様子なのであるし、仏の「皮肉骨髄」、「理解」なのである。

既に「未だかつて止めて休息しない」と言っている。

仏に至っても、ますます精進なのである。
大千世界を化して導いてもなお精進するのである。

如来の全身の生活の様子とは、このようなのである。

正法眼蔵　如来全身

その時、千二百四十四年、越州の吉田県の吉峰精舎にいて僧達に示した。

三昧王三昧

突然に尽界を超越して、仏祖の家の中で大いなる尊い貴(たっと)い物は、結跏趺坐なのである。

外道や「魔」、「仏敵」の仲間の頭を踏み飛ばして、仏祖の奥義の中の人に成る事は、結跏趺坐による物なのである。

仏祖の究極の究極を超越するのは、結跏趺坐という唯一の物だけなのである。

このため、仏祖は結跏趺坐を営んで、更に他の務めは無いのである。

正に、知るべきである。

坐禅による尽界と、他による尽界は、遥かに異なるのである。

この道理を明らめて、仏祖の「発心、修行、菩提、涅槃」、「悟りを求める事を思い立って心する事、修行、覚、寂滅」をわきまえ受け入れるのである。

坐禅している時は、尽界は縦であるのか？　横であるのか？　と参入して究めるべきである。

坐禅している時、坐禅は、どのようであるのか？

「翻筋斗(もんどり)を打(う)っているのか？」、「空中で一回転しているのか？」。

魚の様に活発であるのか？

思量であるのか？

「不思量であるのか？」、「今は思考できない思考であるのか？」。
「作であるのか？」、「何かしているのか？」、「何か生じているのか？」。
「無作であるのか？」、「何もしないのか？」、「何も生じないのか？」、
「自然なままであるのか？」、「ありのままであるのか？」。
坐禅の中で坐禅しているのか？
身心の中で坐禅しているのか？
坐禅の中、身心の中などを脱ぎ落として坐禅しているのか？
これらのような千、万の無数の手段で参入して究めるべきなのである。

身の結跏趺坐をするべきである。
心の結跏趺坐をするべきである。
(古い)身心を脱ぎ落とす結跏趺坐をするべきである。

道元の亡き師である、古代の仏と等しい、五十祖の如浄は、「禅に参入すると は(古い)身心を脱ぎ落とす事なのであり、ひたすらに打ち坐って初めて得られる。焼香、礼拝、念仏、懺悔(ざんげ)の修行、経を看(み)る事は不要である」と言った。

(如浄は、)明らかに仏祖の「眼睛」、「見る眼」を抉(えぐ)り出して来ている。
仏祖の「眼睛」、「見る眼」の中で打ち坐っている者は、七、八百年頃から今まで、如浄だけなのである。

中国で如浄に肩を並べる事ができる者は少ない。
打ち坐る事が仏法である事と、仏法とは打ち坐る事である事を明らめている者は稀(まれ)なのである。
たとえ「打ち坐る事が仏法である」と理解して自分の物にしても、打ち坐る事を(真の意味で)打ち坐る事として知っている者は未だいない。
まして、仏法を(真の意味で)仏法として保持し任せられている者はいない！
そのため、心で打ち坐る事が有り、身で打ち坐る事とは同じではないし、
身で打ち坐る事が有り、心で打ち坐る事とは同じではないし、
ある、身心を脱ぎ落として打ち坐る事が有り、他の、身心を脱ぎ落として打ち坐る事とは同じではない。
これらを既に会得した者は、仏祖の「修行と理解を結びつけた」のである。
仏祖の「修行と理解を結びつけた」、「念、想、観」、「記憶、想像、観察」を保持し任せられるべきであるし、
仏祖の「修行と理解を結びつけた」、「心、意、識」、「心、意識、理解」に参入して究めるべきである。

釈迦牟尼仏は、僧達に、「結跏趺坐すれば、身心は三昧を証する。
威厳と徳で人々は恭(うやうや)しく敬う。
太陽が世界を照らすような物なのである。
心を覆う眠気と怠惰を除く。
身が軽くて疲れない。
悟った心もまた軽くて素早い。

安らかに坐禅するのは、竜が、とぐろを巻くような物なのである。
結跏趺坐を描いた絵を見ると、魔王もまた驚き恐怖する。
まして、仏道を証して悟った人が安らかに坐禅して傾いたり動いたりしないのを見ると、魔王は驚き恐怖する！」と言った。

そのため、結跏趺坐を描いている絵を見聞きするのを、魔王ですらなお驚き、憂い、恐れるのである。
まして、真に結跏趺坐する功徳は測り知れないのである。
このため、普通に打ち坐る事による幸福と功徳は無限なのである。

釈迦牟尼仏は、僧達に、「このため、結跏趺坐するのである」と言った。

また、次に、如来、釈迦牟尼仏は、諸々の弟子に、「まさに、このように坐るべきである。
外道の輩は、常に、つま先で立って、道を求めたり、常に、立って、道を求めたり、足を肩の上に乗せて、道を求めたりする。
このような狂った頑固な心は邪悪という海に沈没するし、形が安らかで穏やかではない。
このため、仏は弟子に結跏趺坐で真っ直ぐな身で坐禅する事を教えるのである。
なぜなら、真っ直ぐな身では、心を正しくしやすいからである。

その身を真っ直ぐにして坐禅すれば、心は怠惰ではなく成る。
心が端正に成り、一つの物事への集中が目の前に存在するように成る。
もし心が急いだり乱れたり、身が傾いたり動いたりしたら、これを収拾して
正しい身心に帰らせる事ができる。
三昧を証したいと欲したり、三昧に入りたいと欲したりするならば、種々の
急ぐ思いと、種々の散乱する思いを皆、悉く収拾するべきである。
このように、習い身につければ、三昧の王の三昧を証したり入ったりする」
と教えた。

明らかに、知る事ができる。

結跏趺坐は、三昧の王の三昧に成るのであるし、三昧を証したり入ったり
するように成るのである。

一切の三昧は、この、王の三昧の眷属なのである。

結跏趺坐とは、真っ直ぐな身なのであるし、
真っ直ぐな心なのであるし、
真っ直ぐな身心なのであるし、
真っ直ぐな仏祖なのであるし、
真っ直ぐな修行と証なのであるし、
真っ直ぐな頂上なのであるし、
真っ直ぐな命なのである。

人間の「皮肉骨髄」、「理解」を結跏趺坐して、三昧の中の王の三昧を結跏趺坐するのである。

釈迦牟尼仏は、常に結跏趺坐を保持し任せられていたし、諸々の弟子にも結跏趺坐を正しく伝えたし、人や天人にも結跏趺坐を教えたのである。

過去七仏が正しく伝えている心の印とは、結跏趺坐なのである。

釈迦牟尼仏は菩提樹の下で結跏趺坐して、五十小劫を経歴し、六十劫を経歴し、無量の劫を経歴した。

または、二十一日、結跏趺坐した。
または、何時間か結跏趺坐した。
これが、「妙なる法輪を転じる事」、「妙なる法を説く事」なのである。
これが、釈迦牟尼仏の一代の化の導きなのであり、欠けていないのである。
(不足は無いのである。)
これが、経なのである。
仏が仏を見るのは、この時なのである。
これが、全ての生者が仏に成る時なのである。

二十八祖の達磨は、西のインドから中国へ来た最初から、嵩山の少室峰の少林寺で、壁に向かって結跏趺坐して坐禅している間に、九年を経歴した。

それから、「頂上」や、「眼睛」、「見る眼」は、現在にまで中国に遍（あまね）く広まっている。

二十八祖の達磨の「命」とは、結跏趺坐のみなのである。

二十八祖の達磨が西のインドから中国へ来る前は、東の地の中国の生者は未だかつて結跏趺坐を知らなかった。

「祖師西来」、「二十八祖の達磨が西のインドから中国へ来た」後、結跏趺坐を知ったのである。

そのため、一生、全ての生、尾をとらえ頭をとらえて、寺や林を離れず、昼夜、ひたすらに結跏趺坐して坐禅して、他の務めは無いのが、三昧の王の三昧なのである。

正法眼蔵　三昧王三昧

その時、千二百四十四年、越宇の吉峰精舎にいて僧達に示した。

三十七品菩提分法

古代の仏の「公案」、「修行者の手がかりとしての仏祖の言動」が有り、「三十七品菩提分法」という仏の教えに従って修行して証する事なのである。

昇り降りする段階により葛藤する事は、さらに葛藤による「公案」、「修行者の手がかりとしての言動」なのであるし、「諸仏」と呼んで諸仏と成すのであるし、「諸々の祖師」と呼んで諸々の祖師と成すのである。

「四念住」。「四念処」とも言う。

(一)身の不浄を観る。
(二)「受は苦しみである」と観る。
(三)心の無常を観る。
(四)「法」、「もの」の無我を観る。

「身の不浄を観る」とは、観ている身である一つの皮袋である人は尽十方界なのである。

尽十方界は真実の体であるので、活路に跳ねる「身の不浄を観る」事なのである。

活路に跳ねないのは、観る事ができ得ていないのであろう。
もし身が無ければ、行って理解して取る事ができ得ないであろうし、
説明して理解して取る事ができ得ないであろうし、
観て理解して取る事ができ得ないであろう。

既に観る事ができ得る事が形成されて現されている。
知るべきである。
跳ねる事ができ得るのである。

「観る事ができ得る」とは、毎日の生活、地や床の掃除なのである。

「第何番目の月か？」を挙げて地を掃除し、「正に第二の月である」のを
挙げて地や床を掃除するので、尽大地が、こうなのである。

「身を観る」とは、「身が観る」のである。
「身が観る」ので、他の物が観るわけではない。
「観る」とは、卓越しているのである。
「身が観る事」が形成されて現される時、「心が観る事」は全く未だ探り
当てられないのであるし、形成されて現されないのである。
そのため、「金剛定」、「不壊の定」なのであるし、
「首楞厳定」、「将軍が兵を率いるように、一切の定が従う定」、「転輪聖
王が敵をひれ伏せさせるように、『魔』、『仏敵』を降伏させる勇猛で堅固
な定」なのであるし、

共に、「身の不浄を観る事」なのである。

夜中に明けの明星を見る道理を「身の不浄を観る」と言うのである。
綺麗、汚い、を比べて論じているわけではないのである。

「有身是不浄」、「存在する身は不浄なのである」し、
「現身便不浄」、「現されている身は不浄なのである」。

このような学への参入では、魔が仏に成る時は、魔をひねって魔を降して
仏に成るのであるし、
仏が仏に成る時は、仏をひねって仏を意図して仏に成るのであるし、
人が仏に成る時は、人をひねって人を調教して仏に成るのである。
まさに、ひねると通路が有る道理に参入して究めるべきである。

例えば、衣を洗う法のような物なのである。
水は衣に汚染され、衣は水に侵される。
汚染された水を用いて洗う。
汚染された水を換えるが、なお水を用いるのであるし、なお衣を洗うのである。

一度洗い、二度洗いで清浄に見えなければ、止めて停滞を重ねる事なかれ。
水が尽きれば、更に水を用いるのである。
衣が清浄に成っていても、更に衣を洗うのである。
水は諸々の種類の水を共に用いても、衣を洗うのに善いのである。
水が濁って魚がいるのを知る道理に参入して究めるのである。

衣は諸々の種類の衣で共に洗う事が有る。

このように鍛錬して、衣を洗う「公案」、「修行者の手がかりとしての仏祖の言動」が形成されて現されるのである。

けれども、清浄、清潔を見て理解して取るのである。

この主旨は、必ずしも衣を水に浸すのを本来の期待としていないし、水が衣によって汚染されるのを本来の期待としていない。

汚染水を用いて衣を洗う事に、衣を洗う、本来、期待している事が有るのである。

更に、地水火風空を用いて衣を洗い、物を洗う法が有る。

地水火風空を用いて地水火風空を洗い清める法が有る。

「身の不浄を観る」主旨は、また、このようなのである。

このため、身を覆い、観る事を覆い、不浄を覆う、母が生じた袈裟なのである。

もし袈裟が母が生じた袈裟でなければ、仏祖は用いなかったであろう。

三祖の商那和修だけではない！

（「正法眼蔵」の「袈裟功徳」で三祖の商那和修は衣と共に生まれたと記されている。）

この道理をよくよく心に留めて学に参入して究め尽くすべきである。

「『受は苦しみである』と観る」とは、苦しみとは「受」なのである。

自分だけの「受」ではないし、

他のものの「受」ではないし、
(真実の)存在による「受」ではないし、
無による「受」ではない。

生きている身が「受」なのであるし、
生きている身が苦しみなのである。

「『受は苦しみである』と観る」とは、甘く熟した瓜(うり)を「苦い夕顔(ユウガオ)」、
「苦い葛藤」に換える事を言うのである。

葛藤は、「皮肉骨髄」、「理解」で苦いのであるし、
「有心」、「心」や、「無心」などで苦いのである。

葛藤は、「一つ上の『神通』、『理解』」なのであるし、修行と証なのである。

葛藤という「神通」、「理解」は、「『へた』まで徹(とお)して」からを超越するし、「根まで連綿と」からを超越する「神通」、「理解」なのである。

このため、「まさに『全ての生者は苦しんでいる』と言えるし、更に、苦しんでいる全ての生者がいる」のである。

生者は自分だけではないし、
生者は他の者ではない。

「更に、苦しんでいる全ての生者がいる」事は、終(つい)に、他の者をだます事ができ得ない。

「甘い瓜(うり)は『へた』まで徹(とお)して甘い」のであるし、「苦い瓜(うり)は根まで連綿と苦い」のであるが、苦しみは、簡単には、模索しても探り当てる事ができないのである。

苦しみとは、どういった物であるのか？　と自己に問うべきである。

「心の無常を観る」とは、曹谿山の、古代の仏と等しい、三十三祖の大鑑禅師は、「無常とは仏に成れる性質なのである」と言った。

そのため、諸々の類(たぐい)の者が理解している無常とは共に、仏に成れる性質なのである。

真覚大師と呼ばれる永嘉の玄覚は、「『諸行無常である』、『全てのものは変化する』し、一切は空(くう)であるのは、如来の大いなる『円覚』、『完全で円満な悟り』なのである」と言った。

「心の無常を観る」とは、「如来の大いなる『円覚』、『完全で円満な悟り』」なのであるし、
大いなる「円覚」、「完全で円満な悟り」による如来なのである。

もし心を見ないようにしても、他のものに従って去るので、もし心が有れば、観る事も有るのである。

無上普遍正覚に至り、無上普遍正覚が形成されて現される事は、「無常」、「変化」なのであるし、心を観る事なのである。

心は必ずしも常である物ではないし、「肯定、否定、肯定かつ否定、肯定でも否定でもない」という「四句分別」を離れる事なのであるし、「百非」を絶する事なので、牆壁や瓦礫や、大小の石は、心なのであるし、「無常」、「変化」なのであるし、観る事なのである。

「『法』、『もの』の無我を観る」とは、長いものは長い法身なのであるし、短いものは短い法身なのである。

形成されて現される生活の様子なので、無我なのである。

犬には仏の性質は無いのであるし、
犬には仏に成れる性質は有るのである。

一切の全ての生者には、仏の性質が無いのであるし、
一切の仏の性質には、全ての生者がいないのであるし、
一切の諸仏には、全ての生者がいないのであるし、
一切の諸仏には、諸仏がいないのであるし、
一切の仏に成れる性質には、仏の性質が無いのであるし、
一切の全ての生者には、全ての生者がいないのである。
このため、「一切の『法』、『もの』には、一切の『法』、『もの』が無い」のを「『法』、『もの』の無我を観る」として学に参入するのである。

知るべきである。
超越した渾身は葛藤である。

釈迦牟尼仏は、「一切の諸仏と菩薩は、長く、この法に安らいで、聖胎と為(な)すのである」と言った。

そのため、諸仏と菩薩は共に、この「四念住」、「四念処」を聖胎としている。
知るべきである。
等覚の聖胎なのであるし、妙覚の聖胎なのである。
既に「一切の諸仏と菩薩」と有り、妙覚ではない諸仏も、「四念住」、「四念処」を聖胎としている。

等覚より上に、妙覚より上に、超越している菩薩もまた、この「四念住」、「四念処」を聖胎とするのである。

実に、諸々の仏祖の「皮肉骨髄」、「理解」は、「四念住」、「四念処」だけなのである。

「四正断」。または「四正勤」と言う。

(一)未だ生じていない悪を生じさせない。
(二)既に生じている悪を滅ぼす。
(三)未だ生じていない善を生じさせる。
(四)既に生じている善を増上させる。

「未だ生じていない悪を生じさせない」とは、「悪」と呼ばれている物には必ずしも定まった形状は無い。
ただ地に従って、世界によって、「悪」と呼んで来ている。
けれども、「未だ生じていない悪を生じさせない」のを「仏法」と呼び、正しく伝えて来ている。

外道の誤解では「悪は『未萌我』、『未だ芽生えていない我』を根本としている」と言ってしまっている。

仏法では、そうではない。

悪が未だ生じない時、どこに存在するのか？　と一時、質問するべきである。

もし「悪は未来に存在する」と言ってしまえば、長く「断滅見」、「断見」、「死ぬと身体が断滅するので因果や善悪の言動の報いは無いという誤った邪見」の外道に成ってしまうであろう。

もし「未来が来て現在と成る」と言ってしまえば、仏法が話している真実ではないし、過去、現在、未来が混乱してしまうであろう。

過去、現在、未来が混乱してしまえば、「諸法」、「全てのもの」が混乱してしまうであろう。

「諸法」、「全てのもの」が混乱してしまえば、実の相が混乱してしまうであろう。

実の相が混乱してしまえば、「仏と仏だけが能く究め尽せる」事が混乱してしまうであろう。

このため、「未来は後に現在と成る」と言わないのである。

「未だ生じていない悪」とは、何の事を言っているのか？　誰が「未だ生じていない悪」を知ったり見たりして理解して取るのか？　と更に質問するべきである。

もし「未だ生じていない悪」を知ったり見たりして理解して取る事が有れば、悪が未だ生じていない時が有るであろうし、悪が未だ生じていないのではない時が有るであろう。

もし、そうであれば、「未だ生じていない物」と言うべきではなく、「既に滅んでいる物」と呼ぶべきである。

外道や、「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の声聞などに学ばないで、「未だ生じていない悪を生じさせない」学に参入するべきである。

天に満ちている積み蓄えられている悪を「未だ生じていない悪」と言い、「不生悪」、「生じるのではない悪」なのである。

「不生」、「生じるのではない」とは、「昨日は定法を説き、今日は不定法を説く」事なのである。

「既に生じている悪を滅ぼす」とは、「既に生じている」とは、尽(ことごと)くの生なのである。

「尽(ことごと)くの生なのである」とは、半生なのである。

「半生なのである」とは、この生なのである。

この生は、生に遮(さえぎ)られるのであるし、生の頂上を超越するのである。

この生で「滅ぼす」とは、提婆達多(デーヴァダッタ)は生身で地獄に入るのであるし、提婆達多(デーヴァダッタ)は生身で成仏を予言される「授記」を得るのである。

生身で驢馬(ロバ)の胎内に入るのであるし、生身で仏に成るのである。

この道理をひねって来て、「滅ぼす」主旨の学に参入するべきである。

「滅ぶ」とは、滅ぶのを超越し透過して脱ぎ落とす事を「滅ぶ」とする。

「未だ生じていない善を生じさせる」とは、父と母から生まれる前の「面目」、「有様（ありよう）」の十分な会得なのであるし、
前兆以前の明らかに挙げる事なのであるし、
威音王仏以前の理解して取る事なのである。

「既に生じている善を増上させる」とは、「『既に生じている善を生じさせる』と言わず、『増上させる』のである」と知るべきである。
自分が明けの明星を見るに至って、更に他の者に明けの明星を見る事を教えるのである。
「眼睛」、「見る眼」を明けの明星となすのである。
「胡乱後三十年、不曾闕塩醋」、「不確かなまま、以後、三十年だが、塩と酢をかつて欠かさなかった」のである。
例えば、増上するので、「既に生じている」のである。
このため、「谷が深いので、谷の川の水を汲む杓（しゃく）の柄（え）も長く成る様な物である」し、
「只為有所以来」、「ただ、存在するため、(二十八祖の達磨は西のインドから中国へ)来たのである」。

「四神足」（「四神足」とは、四つの基礎である。）
（一）「欲神足」
（二）「心神足」

(三)「進神足」（「進神足」とは、精進という基礎である。）

(四)「思惟神足」

「欲神足」とは、仏に成る事を意図する身心なのであるし、
快眠を意図する事なのであるし、
「そのため、私(、如浄)は、あなたを礼拝する」なのである。（「正法眼蔵」
の「家常」を参照してください。）

「欲神足」は、さらに身心の因縁ではないのであるし、
「空が果てしなく広く、鳥は(微かに見えるほど遠くを)飛んでいる」のであ
るし、
「水が(清らかなので)底まで透き通っていて、魚は(ゆっくりと)進んでい
る」のである。
（「正法眼蔵」の「坐禅箴」を参照してください。）

「心神足」は、牆壁や瓦礫なのであるし、
山や河や大地なのであるし、
個々の三界なのであるし、
明らかな椅子や、竹や木なのである。

尽く使う事ができ得るので、仏祖の心が有るし、
凡人や聖者の心が有るし、

「草木心」が有るし、
変化する心が有る。
　尽くの心は、「心神足」なのである。

　「進神足」は、「『百尺の竿の先』、『極致』に乗って一歩、進む」事なのである。
　どの場所が「百尺の竿の先」、「極致」であるのか？
(どの場所でも、)乗らない事はでき得ないのである。
(どの場所でも、乗っているのである。)
　「乗って一歩、進む」事は無いわけではないが、「ここが、どこだと思って、『進む』とか『後退する』とか説くのか？」。
　「進神足」の時、尽十方界へ「進神足」に従って到達するのであるし、尽十方界が「進神足」に従って到来するのである。

　「思惟神足」とは、一切の仏祖は、「業による理解が果てしないが、本より拠るべきではない」のである。

　身の思惟が有るし、
心の思惟が有るし、
「識」、「理解」の思惟が有るし、
履物の思惟が有るし、

創世前の無である長い時間である「空劫」以前の自己の思惟が有る。

「四神足」をまたは「四如意足」と言うが、ためらわないのである。

（「如意」は「思いのままに成る事」を意味する。）

釈迦牟尼仏は、「未だ(足を)運ばずに到来するのを『(四)如意足』と名づける」と言った。

そのため、鋭さは、錐の先端のようであるし、

角ばっているのは、鑿の刃のようである。

「五根」（「五根」とは、五つの能力である。）

(一)「信根」

(二)「精進根」

(三)「念根」

(四)「定根」

(五)「慧根」

「信根」は、知るべきである、自己だけの物ではないし、
他の者の物ではないし、
自己の強引な行いではないし、
自己が結成し構成する物ではないし、
他のものにより引かれているだけの物ではないし、
自立の規則ではないので、「東西密相付」、「東の地の中国へ、西のインドから、密かに付属した」のである。

渾身が信じるのに似ているのを「信じる」と呼んでいるのである。

必ず、修行の結果の仏の位として、他のものに従って去るし、自分に従って去る。

修行の結果の仏の位でなければ、信じる事は形成されて現されない。

このため、「仏法の大海は信じる事で入る事が可能であると為す」と言われているのである。
信じる事が形成されて現される場所は、仏祖が形成されて現される場所なのである。

「精進根」は、反省して、ひたすら打ち坐る事なのであるし、
「休也休不得」、「止める事ができない」のであるし、

「休得更休得」、「止める事ができたら、止める事ができる」のであるし、
「太区区生」、「大いに忙しい」のであるし、
「不区区者」、「忙しく(思わ)ない者」なのであるし、
「大いに忙しいのと忙しく(思わ)ない者は、第一の月と第二の月なのである」。

釈迦牟尼仏は、「私(、釈迦牟尼仏)は常に勤めて精進している。このため、私(、釈迦牟尼仏)は既に無上普遍正覚を成就する事ができ得ている」と言った。

「常に勤めて」とは、過去、現在、未来の尽(ことごと)くで「頭が正しいので尾も正しい」事なのである。

「私(、釈迦牟尼仏)は常に勤めて精進している」のを「私(、釈迦牟尼仏)は既に無上普遍正覚を成就する事ができ得ている」としている。
「私(、釈迦牟尼仏)は既に無上普遍正覚を成就する事ができ得ている」ので、「私(、釈迦牟尼仏)は常に勤めて精進している」のである。
「既に無上普遍正覚を成就する事ができ得て」いなければ、どうして「常に勤めて精進している」であろうか？
「常に勤めて精進して」いなければ、どうして「私(、釈迦牟尼仏)は既に無上普遍正覚を成就する事ができ得ている」であろうか？

経典の似非学者は、この主旨を見聞きできないし、まして、学に参入している者はいない！

「念根」は、「枯木」の「赤い肉の塊」、「肉体」なのである。
「赤い肉の塊」、「肉体」を「枯木」と言うのである。
「枯木」とは「念根」なのである。

模索して探り当てた自己が、「念」、「記憶」なのである。

身が存在する時の「念」、「記憶」が有るし、無心の時も「念」、「記憶」が有る。
心が存在する時の「念」、「記憶」が有るし、身が無くても「念」、「記憶」が有る。

尽大地の人の「命根」、「命の能力」を「念根」としている。

尽十方の仏の「命根」、「命の能力」は「念根」、「記憶能力」なのである。

一つの「念」、「記憶」には、多くの人がいるし、
一人には、多くの「念」、「記憶」が有る。
けれども、ある「念」、「記憶」が存在する人がいるし、

ある「念」、「記憶」が無い人がいる。

人には、必ずしも、ある「念」、「記憶」が有るわけではない。

「念」、「記憶」は、必ずしも、人にかかっているわけではない。(記憶は人次第ではない。)

けれども、「念根」には、よく保持して究め尽くす功徳が有る。

「定根」は、眉毛(まゆげ)を大事にする事なのであるし、「眉毛(まゆげ)を起こす」事なのである。

このため、「因果に暗くない」のであるし、「因果に落ちない」のである。

そのため、驢馬(ロバ)の胎内に入るし、馬の胎内に入るのである。

石が宝玉を包含しているような物である。「石の全てが宝玉なのである」と言う事はできない。

地が山を戴(いただ)くような物である。「地の尽(ことごと)くが山なのである」と言う事はできない。

けれども、頂上から飛び出すし、飛び込む。

「慧根」は、過去、現在、未来の諸仏は存在を知らないのであるし、野生の猫や牛は逆に存在を知っているのである。

「なぜ、このようであるのか？」と言うべきではないし、言う事ができないのである。

「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」には「消息」、「様子」が存在するのであるし、

「拳頭」、「拳」には指先が存在するのである。

驢馬(ロバ)は驢馬(ロバ)を保持し任せられるし、井戸の水は井戸の水に見(まみ)える。

「根が根を嗣(つ)ぐのである」、「能力が能力を嗣(つ)ぐのである」。

「五力」（「五力」とは、悟りに至らせる五つの力である。）

(一)「信力」

(二)「精進力」

(三)「念力」

(四)「定力」

(五)「慧力」

「信力」は、自ら、だまされて、回避する場所が無いのであるし、
他の者に呼ばれて必ず振り向くのであるし、
生まれてから老いに至るまで、ただ、これだけなのであるし、
七回も転倒して通過するのであるし、八回も転倒して、ひねって来るのである。

このため、信じる事は「水清珠」のような物なのである。
法と衣を伝える事を信じる事とする。仏祖を伝えるのである。

「精進力」は、「行い得ない奥底は、説明によって、理解して取る」事なのであるし、
「説明し得ない奥底は、行(おこな)って、理解して取る」事なのである。
そのため、わずかに説明し得たならば、わずかに説明し得た方(ほう)が良いのであるし、
一句を行い得たならば、一句を行い得た方(ほう)が良いのである。

力の中で力を得るのが、「精進力」なのである。

「念力」は、人の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」を引き寄せるのは、ひどい人なのである。

このため、「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」が人を引き寄せるのであるし、
宝玉を捨てれば、宝玉を引き寄せるのであるし、
瓦(かわら)を捨てれば、瓦(かわら)を引き寄せるのである。
さらに、未だ捨てない者は、三十回、棒で軽く叩くのである。

天下の人々が用いても、未だ摩耗しないのである。

「定力」は、子が母を得たような物なのであるし、
母が子を得たような物なのであるし、
子が子を得たような物なのであるし、
母が母を得たような物なのである。
けれども、頭で顔を換えるわけではないし、
黄金で黄金を買うわけではない。

唱えて、いよいよ高くなるのみなのである。

「慧力」は、「年代」、「年月」は、深く遠く長いのであるし、
船が(仏土への)渡りに出会うような物なのである。
このため、古代の「法華経」の「薬王菩薩本事品」で、「渡りに船」、
「(仏土への)渡りに船を得たような物なのである」と言われている。

「渡りに船」という言葉の主旨は、(仏土へ)渡るには必ず船によるのである。

(仏土へ)渡る事が(仏土へ)渡る事を妨(さまた)げないのを「船」と言っているのである。

「春氷自消氷」、「春に氷は自然に消える」のである。

「七等覚支」(「七等覚支」とは、普遍の悟りを七つに分けた物である。)

(一)「択法覚支」

(二)「精進覚支」

(三)「喜覚支」

(四)「除覚支」

(五)「捨覚支」

(六)「定覚支」

(七)「念覚支」

「択法覚支」は、わずかな違いが有れば、天と地ほど、かけ離れてしまうのである。

このため、「道」、「真理」に到達するのは難しいのでもないし簡単でもない。ただ、自ら選択する必要が有るのみなのである。

「精進覚支」は、相場で、かつて狡猾に奪った事は無いのである。

売ったり買ったりするのに共に、定価が有るし、価値を知っている。

自己を屈して他人を推すのに似ているが、「通身」、「全身」は叩いても砕けないのである。

心を一転させる言葉を売っている事を未だやめていないのに、心を一転させる心を買う客に出会う。

驢馬の事が未だ終わらないのに、馬の事が到来するのである。

「喜覚支」は、老婆心が切で血が点々と滴るのである。

「大悲菩薩」、「千手観音」の千の「眼が有る手」は、不本意ではあるが、とても多忙である。

冬の雪の中から梅の華が先に漏洩し、来春の様子は全体的に寒いのである。

けれども、魚の様に活発に「ハハ」と笑うのである。

「除覚支」は、自分の中では自分と群れないし、他人の中にいる時は他人と群れない。

私が得ると、あなたは得られないのである。

明らかに言い表すと、「異類中行」、「多様な種類の者達の中を行く事」、「多様な種類の者達を救うために仏が『この世』に身を投じる事」、「多様な種類の手段で導く事」なのである。

「捨覚支」は、「たとえ、もたらしても、他もまた受けない」のである。
中国人は裸足で中国風の歩き方を学ぶし、南の海のペルシャでは象牙を求めるのである。

「定覚支」は、「機先」、「物事が起こる前」に、機先を見る眼を保護するのであるし、
自分の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」は自分で穿(うが)って開くのであるし、
自分の縄(なわ)を取って自分で引くのである。
けれども、さらに、一頭の神の使いである牛、水牛を放し飼いにし得ているのである。

「念覚支」は、寺の円柱は空を歩行するのである。
このため、口(くち)は槌(つち)のようであるし、眼は眉毛(まゆげ)のようであるが、「梅檀林」とも呼ばれる「寺」の中では「梅檀」という香をたくし、獅子(ライオン)の穴の中では「獅子吼」、「獅子(ライオン)が吼(ほ)える」のである。
(「獅子吼」には「獅子が吼えるように法を説く」という意味が有る。)

「八正道支」。または「八聖道」とも呼ぶ。

(一)「正見道支」
(二)「正思惟道支」

（三）「正語道支」
（四）「正業道支」
（五）「正命道支」
（六）「正精進道支」
（七）「正念道支」
（八）「正定道支」

「正見道支」は、「眼睛」、「見る眼」の中に身を隠すのである。けれども、身より先に、身より先の「眼」、「見る眼」を備えるべきなのである。
（身より前から存在する「見る眼」を備えるべきなのである。）
向かって前に堂々と形成されて現されるが、「公案」、「修行者の手がかりとしての仏祖の言動」は形成されて現されるし、（仏祖に、）かつて親しく見（まみ）えているのである。
（見る）眼の中に身を隠さなければ、仏祖ではないのである。

「正思惟道支」は、「この思惟をなす時、十方の仏は皆、現れる」のである。
そのため、十方が現れたり、諸仏が現れたりするのは、「この思惟をなす時」なのである。
「この思惟をなす時」は、自己だけの物ではないし、他者を超越しているが、今も、この事を思惟し終わった者は、波羅奈（ヴァーラーナシー）に趣（おもむ）くのである。

（「波羅奈」、「ヴァーラーナシー」という国には、釈迦牟尼仏が初めて法を説いた「鹿野苑」、「サールナート」が有る。）
思惟が存在する場所は波羅奈(ヴァーラーナシー)なのである。

古代の仏と等しい三十六祖の薬山惟儼は、「かの不思量の奥底を思量している」、「今は思考できない思考を思考しようとしている」と言った。
「不思量の奥底なんて、どうしたら思考できるのですか？」、「思考できないものなんて、どうしたら思考できるのですか？」。
薬山惟儼は、「非思量」、「思考できるであろうか等と思考しないで、とにかく思考するのである」、「できるか心配せずに、とにかく行うのである」と言った。

これが「正思量」、「正しい思量」、「正思惟」、「正しい思惟」なのである。
(こつこつと坐禅して)座布団を破る事が、「正思惟」、「正しい思惟」なのである。

「正語道支」は、話す事ができない者は、自分では話す事ができる者なのである。
諸々の人々の中の、話す事ができない者は、「未道得」、「未だ言い得ない」のである。

話す事ができない者の世界の諸々の人々は、話す事ができない者ではない。
諸々の聖者を慕わないのであるし、自己の霊を重んじないのである。
「口が壁に掛かっている」事に参入して究めるのである。
「一切の口は一切の壁に掛かっている」のである。

「正業道支」は、出家して仏道を修行するのであるし、山に入って「証を取る」、「悟る」のである。

釈迦牟尼仏は、「三十七品(菩提分法)は、『僧業』、『僧の務め』なのである」と言った。

「僧業」、「僧の務め」は、大乗ではないし、「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」ではない。
僧には、仏の僧、菩薩の僧、声聞の僧などがいる。

未だ出家していない者が仏法の「正業」、「正しい行い」を嗣いでいる事は無いし、仏法の大いなる道を正しく伝えられている事は無い。
在家信者には、わずかに「近事男女」、「『近事男』と『近事女』」、「『仏、法、僧』という『三宝』に近づき仕える在家信者の男女」が仏道を

学び修行しているが、「達道」、「仏道の奥義に到達」した先人の行跡は無い。

「達道する」、「仏道の奥義に到達する」時、必ず、出家するのである。

出家に耐えられない輩が、どうして仏の位を嗣げるであろうか？　いいえ！

それなのに、九百年頃から千二百四十四年現在までの間、中国で「禅宗の僧」を自称する輩の多くは、誤って「在家信者が仏道を学び修行するのと、出家者が仏道を学び修行するのは、同一なのである」と言ってしまっている。

このように言う輩は、ただ、在家信者の排泄物という富を飲食物とするために「犬」、「動物的人間」と成った類なのである。

（「正法眼蔵」の「行持」には「仏祖は富を排泄物として見る」という主旨の言葉が記されている。）

または、国王や大臣に向かって、誤って「政治の心は仏祖の心なのであり、更に別の心は無い」と言ってしまう。

そう言われると、王や大臣は、未だ正しい説法をわきまえず、大喜びして、師の称号などを与えてしまう。

このような誤った言葉を言ってしまう諸々の似非僧侶は、(仏が近くで教えてあげたのに、裏切った邪悪な)提婆達多のような者なのである。

涙や鼻水や唾という富を食べるために、このような幼子のような狂った言葉を言うのである。

「泣き喚いている」と言える。

過去七仏の眷属ではなく、「魔」、「仏敵」の仲間や「畜生」、「動物的人間」なのである。

未だ、身心で仏道を学び修行する事を知らないし、学に参入しないし、身心の出家を知らない。

王や大臣の法や政治に暗く、仏祖の大いなる仏道を夢にも見た事が無いので、このような誤った事を言ってしまうのである。

在家者の修行者の維摩は、釈迦牟尼仏の「この世」への出現に出会ったが、未だ言い尽くす事もできない仏法は多かったであろうし、未だ学び至る事ができない仏法は少なくなかったであろう。

蘊公と呼ばれる龐居士は、三十五祖の石頭希遷と馬祖道一という二人の祖師達の会への参入を経歴したが、三十六祖の薬山惟儼のように奥義を許されなかったし、江西の馬祖道一に及ぶ事ができなかった。

蘊公と呼ばれる龐居士は、わずかに学への参入という名声を盗んだ形に成っただけで、学への参入の実績は無かったのである。

その他の李駙馬、楊文公と呼ばれる楊億などは各々、仏法を十分に会得したと思っていたが、乳餅(という知)を未だ食べていない。

まして、「絵に描いた餅」(という知)を食べていない!

まして、(仏祖の知という)仏祖の朝食や昼食を食べていない!

出家者の器が未だ無いのである。

人という皮袋の一生が、いたずらに無駄に成った事を憐れむべきである。

普遍に勧めると、尽十方の天人、人、竜、諸々の生者は、遥かな古代の如来の仏法を慕って、急いで出家して仏道を修行し、仏祖の位を嗣ぐべきである。

「禅師」を自称する者などの、仏道の奥義に未だ到達していない言葉を聞く事なかれ。

身を知らないし、心を知らないので、誤って「在家者の心と、出家者の心は、同一なのである」と言ってしまうのである。

または、全く生者を憐れむ心が無く、仏法を守る思いが無く、ただ一筋に在家信者の排泄物という富を食べようとして「悪い犬」と成っている「人面犬」、「人の皮をかぶった犬」、「動物的人間」が、誤って「在家者の心と、出家者の心は、同一なのである」と言ってしまうのである。

共に坐るべきではないし、

共に語るべきではないし、

共に「依止」、「力や徳が有る者に依存し頼る」べきではない。

似非僧侶は既に生きたまま生身で「畜生」、「動物的人間」に堕ちているのである。

もし出家者が排泄物という富に豊かであれば、「出家者は優れている」と言うであろう。

出家者の排泄物という富が、この「畜生」、「動物的人間」の富に及ばないので、誤って「在家者の心と、出家者の心は、同一なのである」と言ってしまうのである。

誤った「在家者の心と、出家者の心は、同一なのである」という言葉は、証拠といい、道理といい、五千巻余りの仏の経の文に記されていないし、二千年余りの仏教の歴史で行跡は無いし、五十人の仏祖達、四十人余りの祖師達が言った事は無い。

たとえ、戒を破った出家者や、戒を受けていない出家者と成って、仏道から外れているし智慧が無くても、智慧が有って戒を守って保持している在家者よりは優れているはずなのである。

「僧業」、「僧の務め」、「出家者という務め」は、智慧なのであるし、悟りなのであるし、仏道なのであるし、仏法なので。

在家者は、たとえ分相応の「善根」、「善の種と成る善行」や功徳が有っても、身心による「善根」、「善の種と成る善行」や功徳は疎(おろそ)かに成ってしまうのである。

釈迦牟尼仏の一代の化の導きで、在家者だが「得道した」、「悟った」者は全くいない。

在家者の家は仏道を学び修行する道場ではないからである。

妨(さまた)げが多いからである。

誤って「政治の心と、祖師の心は、同一なのである」と言ってしまう輩の身心を探ると、未だ仏法の身心ではないであろうし、仏祖の「皮肉骨髄」、「理解」は伝わっていないであろう。

仏の正しい法に出会いながら、「畜生」、「動物的人間」と成ってしまった事を憐れむべきである。

このため、曹谿山の、古代の仏と等しい、三十三祖の大鑑禅師は、たちまち母を(泣く泣く)置いて師をたずねたが、「正業」、「正しい行い」なのである。

大鑑禅師は、金剛経を聞いて発心していない時は木こりとして家にいて在家者であったが、金剛経を聞いて仏法の「薫力」、「感化力」が有る時は重い負担を(泣く泣く)放り下ろして出家した。

「身心に仏法が有る時は、在家者に留まる事はできない」と知るべきである。

諸々の仏祖は皆、このようであったのである。

誤って「出家するべきではない」と言ってしまう輩は、最も重い罪である五逆罪を犯すよりも重い罪を犯しているのであるし、(仏が近くで教えてあげたのに、裏切った邪悪な)提婆達多(デーヴァダッタ)よりも凶悪であると言えるのである。

誤って「出家するべきではない」と言ってしまう輩は、似非(えせ)僧侶の「六群比丘」、「六群尼」、「十八群比丘」などよりも罪が重い者であると知って、共に語るべきではない。

一生の寿命は、どれだけか分からない。

このような「魔の子」、「仏敵の子」や、「畜生」、「動物的人間」などと共に語っている時間は無い。

まして、この人の身は、前世に仏法を見聞きした種によって受けているのである。

人の身とは、僧の公共の日常の道具のような物なのである。

人の身を「魔」、「仏敵」の仲間となすべきではないし、「魔」、「仏敵」の仲間と共にいさせるべきではない。

仏祖の深い恩を忘れず、「母乳に例えられる師からの教え」による徳を保護して、「悪い犬」、「動物的人間」の声を聞く事なかれ。

「悪い犬」、「動物的人間」と共に坐ったり、共に食べたりする事なかれ。

嵩山の、古代の仏と等しい、二十八祖の達磨が、西のインドの仏教国を遥かに離れて、西のインドから僻地（へきち）の国の中国へ来た時に、仏祖の正しい法が目の当たりに伝わったのである。

達磨が出家して「得道して」、「悟って」いなければ、このようには成らなかったであろう。

「祖師西来」、「二十八祖の達磨が西のインドから中国へ来る」以前は、東の地の中国の人や天人といった生者は、未だかつて正しい仏法を見聞きしていなかったのである。

そのため、知るべきである。

正しい仏法を正しく伝えられるのは、出家の功徳だけなのである。

釈迦牟尼仏が、かたじけなくも父の王位を捨てて嗣（つ）がなかったのは、父の王位が高貴でなかったわけではなく、最も高貴な仏の位を嗣（つ）ぐためであったのである。

仏の位は、出家者の位なのであるし、

三界の人や天人といった全ての生者が共に頭を下げて恭（うやうや）しく敬う位なのである。

梵天や、帝釈天が共に坐る事ができる位ではないのである。
まして、下界の諸々の人の王や、諸々の龍王が共に坐る事ができる位ではない！

仏の位は、無上普遍正覚の位なのである。
仏の位の者は、法を説いて生者を仏土へ渡す事ができるし、光を放って吉兆を現す事ができる。
仏の位という出家者の位の諸々の「業」、「行い」は、「正業」、「正しい行い」なのであるし、過去七仏を含む諸仏の思いなのである。
「仏と仏だけが、究め尽くす事ができる」物なのである。
未だ出家していない仲間は、既に出家している仲間に、見えて給仕し、頭を下げて敬礼し、身の命を投げ捨てて捧げものを捧げるべきである。

釈迦牟尼仏は、「出家して戒を受ければ、仏の種のような者なのであるし、既に『得度した』、『仏土へ渡った』人なのである」と言った。

そのため、知るべきである。
「得度」、「仏土へ渡る」とは、出家なのである。
未だ出家していない者は、深く沈んでいる。
悲しむべきである。
釈迦牟尼仏が一代で説いた中で、出家の功徳をたたえた事は、数え切れない。
釈迦牟尼仏は真に法を説いているし、諸仏は証明している。

出家者は戒を破ってしまったり修行していなかったりしても「得道する」、「悟る」。
在家者が「得道した」、「悟った」事は未だ無い。
権力者が出家者を礼拝する時、出家者は応じて礼拝しない。
諸々の天人が出家者を礼拝しても、出家者は応じて礼拝する事は全くしない。
これらは、出家の功徳が優れているからなのである。
もし出家者に礼拝されたら、諸々の天人の宮殿、光明、果報などは、たちまち破壊されて堕ちてしまうので、このようにするのである。
仏法が東に広まってから現在まで、「得道した」、「悟った」出家者は、稲、麻、竹、葦（アシ）の様に多数いる。
在家者でありながら「得道した」、「悟った」者は、未だ一人もいない。
既に仏法が眼や耳に及んだ時は、急いで出家を営む物なのである。
測り知る事ができる。
在家者の家は仏法が存在する場所ではないのである。
それなのに、誤って「政治の身心は、仏祖の身心なのである」と言ってしまう輩は、未だかつて仏法を見聞きできていないのであるし、「黒闇獄」、「暗黒の地獄」の罪人なのである。
自分の言葉ですらなお見聞きできていない愚かな人なのであるし、国賊なのである。
誤って「政治の心は、仏祖の心と、同一である」と言ってしまうのは、結局は、仏法が優れているので、誤って「政治の心は、仏祖の心と、同一である」と言ってしまうと、権力者が喜ぶからである。
仏法は優れている、と知るべきである。

たとえ政治の心が自ずから仏祖の心と同じに成っても、仏祖の身心が自ずから政治の身心と成った時は、政治の身心ではなく成る。

誤って「政治の心と、仏祖の心は、同一なのである」と言ってしまう「禅師」を自称する者などの似非(えせ)僧侶は、心の行き方、様子を全く知らないのである。

まして、仏祖の心を夢にも見た事が無いのである！

梵天、帝釈天、人の王、龍王、鬼神王などは各々、三界の果報に執着する事なかれ。

早く出家して戒を受けて、諸々の仏祖の仏道を修行するべきである。

「曠大劫」、「広大な時間」の仏に成れる原因と成るであろう。

見なさい！

もし維摩が出家していたら、在家者の修行者の維摩よりも優れている出家者の維摩を見る事ができたであろう。

今日では、わずかに、須菩提(スブーティ)、舎利子(シャーリプトラ)、文殊菩薩、弥勒菩薩などを見られるだけであり、未だ半分も維摩は見られない。

まして、三、四、五の維摩は見られない！

もし三、四、五の維摩が見られないし、知られなければ、一人の維摩も未だ見られないし、知られないし、保持し任せられないのである。

一人の維摩も未だ保持し任せられなければ、仏の維摩も見られないし、仏の維摩を見られなければ、須菩提(スブーティ)の維摩、舎利子(シャーリプトラ)の維摩、文殊菩薩の維摩、弥勒菩薩の維摩なども未だいないのである。

まして、山や河や大地の維摩、草木や瓦礫の維摩、風や雨や水や火の維摩、過去と現在と未来の維摩などもいないのである！

維摩には未だ、これらの光明や功徳が見えないのは、出家しなかったからなのである。

もし維摩が出家していたら、これらの功徳が有ったのである。

唐の時代と、宋の時代の「禅師」を自称する者などの似非(えせ)僧侶は、これらの主旨に到達できず、妄(みだ)りに維摩を挙げて、誤って「維摩の所作は正しい」と思ってしまったり、誤って「維摩の言葉は正しい」と言ってしまったりする。

これらの輩は、憐れむべきである。釈迦牟尼仏の言葉による教えを知らないし、仏法に暗いのである。

また、あまつさえ、誤って「維摩の言葉と釈迦牟尼仏の言葉は同一である」と思ってしまったり言ってしまったりする輩が多い。

これらの輩もまた、未だ仏法を知らないし、「祖師の言葉」や「祖師の仏道」を知らないし、維摩をも知らないし測る事ができないのである。

彼らは、誤って「維摩は沈黙して無言で諸々の菩薩に示したが、如来、釈迦牟尼仏が無言で人々の為(ため)に教えたのと同一なのである」と言ってしまう。

このように誤って言ってしまう者は、大いに仏法を知らないし、仏道を学び修行する力量が無いと言える。

如来、釈迦牟尼仏の言葉による教えは、既に他の者と異なるし、無言による教えもまた他の諸々の類(たぐい)の者と異なる。

そのため、如来、釈迦牟尼仏の一つの沈黙による教えと、維摩の一つの沈黙による教えは、「似ている」と比べて論じる事すらできないのである。

誤って「維摩と釈迦牟尼仏の言葉で説いた教えは異なっていても、沈黙による教えは同一であろう」と推測して妄想してしまう輩の力量を探ると、「仏に近い人」とする事もできないのである。

悲しむべきである。

彼らには、未だ色形や音声による見聞きが無いのである。

まして、色形や音声を超越している光明も無いのである！

まして、「沈黙の中の(真の)沈黙を学ぶべきである」とすらも知らないし、「沈黙の中の(真の)沈黙が有る」とすらも聞く事ができないのである。

諸々の類(たぐい)の者同士の動静ですら異なる。

どうして、釈迦牟尼仏と、諸々の類(たぐい)の者は、同一である、同一ではない、と比べて論じる事ができるであろうか？　いいえ！

仏祖の奥義の学に参入できない輩は、このような誤った事を言ってしまうのである。

また、邪悪な人の多くは、誤って「言動は仮の『法』、『物』なのであり、沈黙や不動は真実なのである」と思ってしまう。

この言葉もまた仏法ではない。

梵天(ブラフマー)や自在天(シヴァ)などのバラモンの経典ヴェーダの教えを伝え聞いた輩が誤って思考した物なのである。

どうして、仏法が動静に関わるであろうか？　いいえ！

仏道には、動静が有るのか？　動静が無いのか？　仏法は動静と繋(つな)がっているのか？　動静によって繋(つな)がれているのか？　と明確に詳細に学に参入するべきである。

今の後進の者は怠る事なかれ。

千二百四十年現在の宋の時代の中国を見ると、仏祖の大いなる仏道の学に参入している仲間は、断絶しているようである。

二、三人もいない。

誤って「維摩は正しくて一つ沈黙した。今の、一つ沈黙しない者達は維摩よりも劣っている」と思ってしまっている輩しかいない。

さらに仏法の活路が無いのである。

また、誤って「維摩が一つ沈黙したのは、釈迦牟尼仏が一つ沈黙したのと、同一なのである」と思ってしまっている輩しかいない。

さらに分別の光明が無いのである。

これらを誤って思ってしまったり言ってしまったりする輩は全て、未だかつて仏法を見聞きできた事による学への参入が無いと言える。

誤って「大国の宋の時代の中国の人の言葉であるので、仏法なのであろう」と思う事なかれ。

その道理は明らめやすいであろう。

「正業」、「正しい行い」とは「僧業」、「僧の務め」なのである。

経典の似非(えせ)学者は知る事ができない。

「僧業」、「僧の務め」とは、「雲堂」、「僧堂」の中での鍛錬なのであるし、

仏殿の中での(仏への)礼拝なのであるし、

「後架」、「僧堂の後ろに架け渡して造られている洗面所」の中での洗面なのである。

合掌し低頭し安否を尋ね、焼香し、湯を沸かして手を洗浄するのが、「正業」、「正しい行い」なのである。

頭で尾を換えるだけではなく、頭で頭を換えるのであるし、心で心を換えるのであるし、仏で仏を換えるのであるし、「道」、「真理」、「言葉」で「道」、「真理」、「言葉」を換えるのである。

これらが、「正業道支」なのである。

誤って仏法を推測すると、眉毛(まゆげ)と髭(ひげ)が落ち、面目が破顔するのである。

「正命道支」とは、早朝に朝食を食べる事であるし、昼に昼食を食べる事である。

寺や林にいて精魂を弄(ろう)するのである。

曲木の椅子の座の上の仏祖が、(心を)直接的に指し示すのである。

「趙州真際大師の寺は、僧が、二十人に満たない」のは、「正命」、「正しい生き方」が形成されて現されているのである。

「薬山惟儼の寺は、僧が、十人に満たない」のは、「正命」、「正しい生き方」による命なのである。

「汾陽善昭の寺は、僧が、七、八人である」のは、「正命」、「正しい生き方」がかかっている場所なのである。
諸々の「邪命」、「邪悪な生き方」を離れているので。

釈迦牟尼仏は、「諸々の声聞の段階の人々は、『正命』、『正しい生き方』を未だ得ていない」と言った。

そのため、声聞の段階の人々が仏の教えに従って修行して証しているのは、未だ「正命」、「正しい生き方」ではないのである。

それなのに、千二百四十年頃の凡庸な人々は、誤って「声聞と菩薩を区別するべきではない。共通の身のこなし、戒律を用いるべきである」と言ってしまって、「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の声聞の法で、大乗の菩薩の法の身のこなし、振(ふ)る舞(ま)いを判断してしまう。

釈迦牟尼仏は、「声聞が戒を保持して守る事は、菩薩にとって戒を破ってしまう事に成ってしまう」と言った。

そのため、声聞が「戒を保持して守っている」と思っている事は、もし菩薩が「戒を保持して守っている」と思っている事に比べて見れば、声聞は戒を皆、破ってしまっている事に成ってしまうのである。
「戒」の他の、「定」と「慧」でもまた同様なのである。

たとえ「生きものを殺さない」などの「相」、「見え方」が、自然に、声聞と菩薩で似ていても、必ず声聞と菩薩では別なのである。
「天と地ほど、かけ離れている」という言葉でも言い表す事ができないのである。

まして、仏から仏へ、祖師から祖師へ、正しく伝えている主旨と、諸々の声聞の主旨は、異なる！

「正命」、「正しい生き方」だけではなく、「清浄命」が有る。

仏祖の学に参入する事だけが、「正命」、「正しい生き方」なのである。

経典の似非学者などの誤った見解を用いるべきではない。

「(諸々の声聞の段階の人々は、)『正命』、『正しい生き方』を未だ得ていない」ので、本来の務めの生き方ではないのである。

「正精進道支」とは、「通身」、「全身」を抉り出す旅なのであるし、

「通身」、「全身」を抉り出して、人の「面」を打つ事なのである。

転倒して仏殿に騎乗して一周、二周、三、四、五周するので、「九、掛ける、九」を数えると（「八十一」ではなく）「八十二」に成る。

くり返し重ねて、あなたに知らせれば、千万個なのである。

頭を換えるのは十字に縦横無尽なのであるし、

顔を換えるのは縦横無尽に十字なのである。

弟子は師の部屋に入室するのであるし、

師は堂に上るのである。

望州亭と烏石嶺で見えたのである。

僧堂の前と仏殿の中で見えたのである。

二つの鏡が相対して三枚の影が有る事を言うのである。

「正念道支」は、自ら、だまされる事が八、九割なのである。

「念から更に智慧が起こる」と学ぶ事は、父を捨てて逃げ去ってしまう事なのである。

「念の中で智慧が起こる」と学ぶ事は、とても縛られてしまっている事なのである。

誤って「念が無いのが『正念』、『正しい念』である」と言ってしまう者は、外道なのである。

また、地水火風の精霊を「念」とするべきではない。

「心、意、識」、「心、意識、理解」の転倒を「念」と呼ばない。

正に、「あなたは、私の『皮肉骨髄』、『理解』を会得した」のが、「正念道支」なのである。

「正定道支」とは、仏祖を脱ぎ落とす事なのであるし、

「正定」を脱ぎ落とす事なのである。

「他是能挙」、「他者は、これを挙げる事ができる」のであるし、

頭を裂いて「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」となすのであるし、

「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」の中で優曇華をひねるのであるし、

優曇華の中に、百、千枚の迦葉がいて「破顔微笑」するのであるし、

手段を長く用いて来て、破れた木の柄杓(ひしゃく)に成っているのである。

このため、六年、「落草して」、「山賊に成って」、一夜で華が花開いたのである。

（釈迦牟尼仏は六年、山に入って、苦行した。
「落草」は宋の時代の中国語で「山賊に成る」などを意味する。）

劫火が激しく燃えて、大千世界は諸共に壊れて、他のものに従って去るのである。

この三十七品菩提分法は、仏祖の「眼睛」、「見る眼」や、「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔（あな）」や、「皮肉骨髄」、「理解」や、手足や、「面目」、「有様（ありよう）」なのである。

仏祖という一枚を三十七品菩提分法として学に参入して来ている。

けれども、千三百六十九品の「公案」、「修行者の手がかりとしての仏祖の言動」が形成されて現されているのであるし、「菩提分法」、「悟りに到達するための物を分けた物」なのである。

(三十七、掛ける、三十七は、千三百六十九である。)

坐禅して煩悩を断つべきであるし、(古い身心を)脱ぎ落とすべきである。

正法眼蔵　三十七品菩提分法

その時、千二百四十四年、越宇の吉峰精舎にいて僧達に示した。

転法輪

道元の亡き師である、天童山の、古代の仏と等しい、五十祖の如浄は、堂に上って、「釈迦牟尼仏は、『一人が真を発して源に帰れば、十方の虚空は悉(ことごと)く皆、消滅する』と言った。

師である、四十九祖の智鑑は、ひねって、『既に、この言葉は釈迦牟尼仏の所説なのである。(釈迦牟尼仏が)尽(ことごと)く特に優れている考えをなされ(て言っ)た事は未だ免れる事ができない』と言った。

私、如浄は、そうは思わない。

一人が真を発して源に帰れば、乞食は食器を打ち破る」と挙げて言った。

五祖山の法演禅師は、「一人が真を発して源に帰れば、十方の虚空は『築著磕著』、『突き当たり、ぶつかり当たる』」と言った。

仏性法泰は、「一人が真を発して源に帰れば、十方の虚空は十方の虚空なのである」と言った。

夾山の圜悟克勤は、「一人が真を発して源に帰れば、十方の虚空は錦の上に華を添える」と言った。

(私、)大仏寺の道元は、「一人が真を発して源に帰れば、十方の虚空は真を発して源に帰る」と言う。

今、挙げた「一人が真を発して源に帰れば、十方の虚空は悉(ことごと)く皆、消滅する」とは、「(大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行)首楞厳経」の中の言葉なのである。

この言葉は、かつて数人の仏祖が同じく挙げて来ている。

今から、この言葉は、実に、仏祖の「骨髄」、「理解」なのであるし、仏祖の「眼睛」、「見る眼」なのである。

このように言う意図は、「(大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行)首楞厳経」全十巻を、「偽経である」と言ったり、「偽経ではない」と言ったりするからである。

両方の説が既に昔から今にまで至っている。

旧訳が有るし、新訳が有るが、(七百五年である)神龍元年からの訳を疑うのである。

けれども、今、既に、五祖山の法演禅師、仏性法泰、如浄が共に、この言葉を挙げて来ている。

そのため、この言葉は、既に、仏祖の「法輪」、「説いた法」によって転じられているし、仏祖の「法輪」、「説いた法」が転じているのである。

このため、この言葉は、既に、仏祖を転じているし、

この言葉は、既に、仏祖を説いている。

仏祖によって転じられているし、仏祖を転じるので、たとえ偽経であっても、もし仏祖が転じて挙げて来たら、真の仏祖の経なのであるし、親しい仏祖の「法輪」、「説いた法」なのである。

たとえ瓦礫であっても、たとえ黄色い落ち葉であっても、たとえ優曇華であっても、たとえ「金襴衣」、「金糸で模様を織り入れた法衣」であっても、仏祖が既にひねって来ていれば、仏の「法輪」、「説いた法」なのであるし、仏の「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」なのである。

知るべきである。

もし生者が超越して無上普遍正覚を成就すれば、仏祖に成るのであるし、仏祖の師弟に成るのであるし、仏祖の「皮肉骨髄」、「理解」を会得した者に成るのである。

さらに、従来の兄弟の生者を兄弟とせず、仏祖が兄弟に成るように、たとえ「(大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行)首楞厳経」全十巻の言葉が偽りであっても、今の言葉は超越している言葉なので、仏祖の言葉に成るのであるし、他の言葉と同じではないのである。

ただし、たとえ、この言葉は超越している言葉であっても、「(大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行)首楞厳経」全十巻の言葉や性質や相を仏祖の言葉とするべきではないし、学に参入するための「眼睛」、「見る眼」とするべきではない。

今の言葉を、諸々の言葉と比べて論じる事ができない道理は多いが、その中の一端を挙げて、ひねってみよう。

「法輪を転じる」、「法を説く」とは、仏祖の手本なのである。
仏祖が「法輪を転じない事」、「法を説かない事」は未だ無いのである。

「法輪を転じる」、「法を説く」様子は、音声や色形を挙げて、ひねって、
音声や色形を見えなくする(し、聞こえなくする)し、
音声や色形を超越して、「法輪を転じる」、「法を説く」し、
「眼睛」、「見る眼」を抉り出して、「法輪を転じる」、「法を説く」し、
「拳頭」、「拳」を立てて、「法輪を転じる」、「法を説く」し、
「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」を取ったり、虚空を取ったりすると、「法輪」、「法」が自然に転じるのである。

今の言葉を取る事は、今、明けの明星を取り、「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」を取り、桃の華を取り、虚空を取る事に成るのであるし、仏祖を取り、「法輪」、「法」を取る事に成るのである。

この主旨は、明らかに、「法輪を転じる」、「法を説く」事なのである。

「法輪を転じる」、「法を説く」とは、鍛錬して学に参入して「一生、寺や林を離れない(で坐禅する)事」なのであるし、「長連牀」、「坐禅する床」の上で(坐禅して)「請益し」、「重ねて教えを請い」仏道をわきまえる事を言うのである。

正法眼蔵　転法輪

時に、千二百四十四年、越宇の吉峰精舎にいて僧達に示した。

自証三昧

過去七仏を含む諸仏から、仏から仏へ、祖師から祖師へ、正しく伝えられている物は、「自証三昧」、「自己を証する三昧」なのである。

「自己を証する三昧」とは、善知識を持つ人々に従う事なのであるし、経典に従う事なのである。

「自己を証する三昧」とは、仏祖の「眼睛」、「見る眼」なのである。

このため、曹谿山の、古代の仏と等しい、三十三祖の大鑑禅師は、南嶽の懐譲に「また修行と証を借りるか否か？」と質問した。

南嶽の懐譲は、「修行と証が無いわけではないが、汚染するのは駄目である」と言った。

そのため、知るべきである。

汚染させない修行と証が、仏祖なのであるし、仏祖三昧の雷鳴と風と雷なのである。

善知識を持つ人々に従う時、半面と見(まみ)えたり、

半身と見(まみ)えたり、

全面と見(まみ)えたり、

全身と見えたりする。

善知識を持つ人々に従う時、半分の自己と見える事が有るし、半分の他者と見える事が有る。

善知識を持つ人々に従う時、天人の面々が、体が毛で覆われているのを証するし、
霊の面々が、角をつけているのを証する。

善知識を持つ人々に従う時、「異類(中)行」、「多様な種類の者達の中を行く」者が、他のものに従って来る事が有るし、
「同条生」、「同じ枝から生じている」者が、異なる者に変わって去る事が有る。

これらのような時に、法の為に身を捨てるのは、幾千万回か知らないし、
身の為に法を求めるのは、幾億百劫か知らない。

これらが、善知識を持つ人々に従う時の生活の様子なのであるし、
自己に参入して自己に従う様子なのである。

「(拈華)瞬目」に見える時、「破顔(微笑)」が有るし、
「得髄」、「髄の会得」を礼拝する時、「断臂する」、「腕を断つ」。
(釈迦牟尼仏が「拈華瞬目」すると初祖の迦葉が「破顔微笑」した。)
(「二十九祖の慧可は『断臂得髄』した」と言われている。)

過去七仏の前後で、三十三祖の大鑑禅師の左右で、自己と見(まみ)えた、善知識を持つ人々は、一人だけではないし、二人だけではないし、他者と見(まみ)えた、善知識を持つ人々は、昔いただけではないし、現在いるだけではない。

経典に従う時、自己の「皮肉骨髄」、「理解」に参入して究めて脱ぎ落とす時、桃の華を見る眼が自然に突然に出て来て見(まみ)える事ができるし、竹の音声を聞く耳が自然に雷鳴のように聞く事ができる。

経典に従って学ぶ時、実に、経典が出て来る。

経典とは、尽十方界なのであるし、
山や河や大地なのであるし、
草木なのであるし、
自己や他者なのであるし、
御飯を食べる事なのであるし、
衣を着る事なのであるし、
一時の振(ふ)る舞(ま)いなのである。

これらの一つ一つの経典に従って仏道を学び修行すると、さらに、未だかつて無かった経典が幾千万巻と無く目の前に出現するのである。

「である」という言葉の、真理の詩が有って、「宛然」、「そっくりそのまま」なのであるし、

「ではない」という言葉の、真理の詩が新たに、「歴然」、「明らか」なのである。

これらに会えて、身心をひねって学に参入すると、長い時間を使い切ったり、長い時間が経ったりしても、必ず、通じて利益を得る到達が有るし、身心を手放して学に参入すると、前兆を抉(えぐ)り出したり、前兆を超越したりしても、必ず、受け取って保持する功績を成すのである。

現在、西のインドのサンスクリット語の文書を、東の地の中国で仏法の本に訳した物は、わずか五千巻未満である。

この中に、三乗、五乗、九部(経または九分教)、十二部(経または十二分教)が有る。

これらは皆、従って学ぶべき経典なのである。

「従わない」と回避しようとしても回避でき得ないのである。

このため、「眼睛」、「見る眼」と成ったり、「私の髄」と成ったりして来ている。

「頭が正しいので尾も正しい」のである。

他の者から経典を受け取るし、経典を他の者へ授けるが、ただ「眼睛」、「見る眼」を活かして出しているのであるし、自己や他者を脱ぎ落とすのであるし、

ただ「私の髄」を付属するのであるし、自己や他者を透過して脱ぎ落とすのである。

「眼睛」、「見る眼」と「私の髄」は、自己だけの物ではないし、他者の物ではないので、仏祖は昔から昔へ正しく伝えて来たし、今から今へ付属するのである。

杖という経が有り、縦横に説くし、自然に空（くう）を破るし「有」、「存在」を破る。

害虫を払うための毛がついた棒である払子という経が有り、雪を払い除けるし、霜（しも）を払い除ける。

坐禅という経が一つの会の座、二つの会の座、有る。

袈裟という経が一巻、十巻、有る。

これらは、諸々の仏祖が護って保持する物なのである。

このような経典に従って、修行して証して、道を会得するのである。

天人の「面」、「有様（ありよう）」や、

人の「面」、「有様（ありよう）」や、

太陽の「面」、「有様（ありよう）」や、

月の「面」、「有様（ありよう）」を存在させて、経典に従う鍛錬が形成されて現されるのである。

たとえ善知識を持つ人に従っても、たとえ経典に従っても、自己に従っているのである。

善知識は、自然に、自己の善知識に成るのである。
経典は、自然に、自己の経典に成るのである。
善知識を遍く訪ねる事は、自己を遍く訪ねる事に成るのであるし、「百草万木」、「森羅万象」をひねる事は、自己をひねる事に成るのである。
「自己とは、必ず、このような鍛錬なのである」として学に参入するのである。
自己という学への参入によって、自己を脱ぎ落とすのであるし、自己を証に適わせるのである。

このため、仏祖の大いなる仏道には、「自証」、「自己を証する」や「自悟」、「自己を悟る」日常の道具が有り、正統な後継者である仏祖でなければ正しく伝えてもらえない。
「自己を証する」という正統に代々伝承する日常の道具が有り、仏祖の「骨髄」、「理解」が無ければ正しく伝えてもらえない。
このように学へ参入するので、人の為に伝授する時は、「あなたは私の髄を会得した」という付属の存在が有るのであるし、
「私(、釈迦牟尼仏)には『正法眼蔵』、『正しくものを見る眼』が有り、摩訶迦葉に付属する」のである。

人の為に説く事は、必ずしも自己や他者と無関係なのであるし、
他者の為の説明は、自己の為の説明に成るのである。

自己は自己と同じく参入して聞いたり説いたりするのである。

一つの耳は聞くし、一つの耳は説く。
一つの舌は説くし、一つの舌は聞く。

「眼耳鼻舌身意」という「六根」や、「眼(識)耳(識)鼻(識)舌(識)身(識)意識」という「六識」や、「色声香味触法」という「六塵」なども同様なのである。

さらに、一つの身と一つの心が有って、修行する事が有るし、証する事が有る。

耳は自然に聞いたり説いたりするのであるし、
舌は自然に聞いたり説いたりするのである。

「昨日は他者の為に不定法を説き、今日は自己の為に定法を説く」のである。

このような日々の「面」、「有様」が連なり、月々の「面」、「有様」が連なる。

他者の為に仏法を説いて修行する事は、(自己が)生から生へ仏法を聞いて明らめて証する事に成るのである。

今の生でも他者の為に仏法を説く誠心誠意が有れば、自己が仏法を会得する事は簡単なのである。

他者が仏法を聞く事を助けたり勧(すす)めたりすれば、自己が仏法を学ぶ良い手段を得られるのである。身の中で手段を得られるのであるし、心の中で手段を得られるのである。

他者が仏法を聞く事を妨害してしまえば、自己が仏法を聞く事を妨害されてしまうのである。

(自己が)生から生へ、身から身へ、仏法を説いたり聞いたりする事は、世から世へ仏法を聞ける事に成るのである。

前世までに自己が正しく伝えていた仏法を、さらに今世でも聞ける事に成るのである。仏法の中に生じ、仏法の中に滅ぶので。

(自己が)尽十方界の中で仏法を正しく伝えたのであれば、(自己が)生から生へ聞ける事に成るのであるし、身から身へ修行できる事に成るのである。

(そうすれば、)生から生を仏法に形成させて現させるし、身から身を仏法に成らせるので、一つの塵(ちり)も法界も共にひねって来て仏法を証させる事に成るのである。

そのため、東で経典を一句でも聞いて、西へ来て一人の為(ため)にでも説くべきである。

これは、一つの自己によって、聞いて明らめたり説明したりする事を唯一普遍に鍛錬する事に成るのであるし、

東の自己と西の自己を一斉に修行して証する事に成るのである。

なんとしても、仏祖の仏法、仏道を、自己の身心に近づけて、営む事を喜び、望み、志すべきである。

仏法を営む事を一時から一日へ、一年から一生へ保持して、一生の営みとするべきである。

仏法を精魂として、精魂を弄（ろう）するべきなのである。

このようにする事を「生から生へ虚（むな）しく過ごさない」とするのである。

それなのに、「仏法を未だ明らめていなければ、人の為（ため）に説くべきではない」と思う事なかれ。

仏法を明らめる事を待てば、無数の劫が経っても、かなわない。

たとえ人間の仏を明らめたとしても、さらに天の仏を明らめるべきである。

たとえ「山」の心を明らめたとしても、さらに「水」の心を明らめるべきである。

たとえ「因縁生法」、「因縁がものを生じる事」、「因縁が生じさせたもの」を明らめたとしても、さらに「非因縁生法」、「因縁が生じさせたのではないもの」を明らめるべきである。

たとえ仏祖の辺（ほとり）を明らめたとしても、さらに仏祖の向上を明らめるべきである。

これらを一生で明らめ終わった後に、他者の為（ため）に説こうとする者は、鍛錬が無いのであるし、一人前ではないのであるし、学への参入が無いのである。

仏祖の仏道を学び修行する事は、一つの物事の学に参入してから、他者の為（ため）という心意気を天を突くように盛んにさせるのである。

このため、自己や他者を脱ぎ落とす事に成るのである。

さらに、自己に参入し徹せば、以前から他者に参入し徹している事に成るのである。

よく他者に参入し徹せば、自己に参入し徹している事に成るのである。

この仏の事は、たとえ「生知でも」、「生まれながらにして知っていても」、師からの伝承がなければ体得して通達できない。

「生知」、「生まれながらにして知っている」人は、未だ師に出会えなければ、「不生知」、「生まれながらでは知る事ができない知」を知らないし、「不生不知」、「生を超越している知」を知らない。

たとえ「生知でも」、「生まれながらにして知っていても」、仏祖の大いなる仏道は知る事ができないし、学んで知る事ができるのである。

自己を体得して通達し、他者を体得して通達するのが、仏祖の大いなる仏道なのである。

自己の初心の時の学への参入に思いを巡らせて、他者の初心の時の学への参入に同じく参入するべきである。

初心の時から、自己が他者と共に同じく参入して行くと、究極に同じく参入して到達でき得るのである。

自己の鍛錬であるかのように、他者に鍛錬を勧めるべきである。

それなのに、「自証」や「自悟」などの言葉を聞いて、粗末な人は、誤って「師は伝授できない。自己だけで学ぶ事ができる」と思ってしまう。これは大きな誤りなのである。

「自解」、「師から教わらずに自己だけで(誤って)理解してしまう事」によって、思量分別を誤って巡らせて師からの伝承が無い者は、西のインドの「天然」、「自然(じねん)」、「原因が無く自然と物事は成るという誤った見解」の外道のような者なのである。

これをわきまえていない輩が、どうして仏道の人であろうか？　いいえ！仏道の人ではない！

まして、「自証」という言葉を聞いて、誤って「『積聚』、『積み重なって一つに成った物』である『色受想行識』という『五陰』、『五蘊』の事なのであろう」と思ってしまえば、「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の者の「自調」、「自己だけを調教して自己だけが悟ろうとする事」と同じであろう。

「大乗」と「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」をわきまえていない輩の多くが「仏祖の法の子孫である」と自称する。

けれども、明らかな見る眼を持つ人の誰が、だまされるであろうか？　いいえ！　だまされない！

中国の宋の紹興の時代に、径山に、大慧宗杲と言う僧がいた。
大慧宗杲は、元は、経典の学者であった。

大慧宗杲は、諸方を行脚した時に、宣州の紹理という僧に従って、雲門文偃の「公案」、「修行者への手がかりとしての言動」の批評と、雪竇重顕の「公案」、「修行者への手がかりとしての言動」の詩での説明と批評を学んだ。

大慧宗杲が、仏祖の所へ行って学ぶ事の初めである。

大慧宗杲は、雲門文偃の家風を会得できず、終（つい）に洞山道微の所へ行って学んだが、

洞山道微は、終（つい）に奥義を大慧宗杲に許さなかった。

洞山道微は、四十五祖の芙蓉道楷の法の子であり、いたずらな末席の人と並べるべきではない。

大慧宗杲は、やや久しく洞山道微の所へ行って学んだが、洞山道微の皮肉骨髄を探り当てる事ができず、まして、「『塵（ちり）』、『汚れ』の中の『眼睛』、『見る眼』が有る」とすらも知らなかった。

大慧宗杲は、ある時、「仏祖の仏道には『臂香して』、『腕を香で焼いて』、『嗣書する』、『師弟の系譜の書を嗣（つ）ぐ』作法が有る」とだけ聞いて、しきりに「嗣書する」、「師弟の系譜の書を嗣（つ）ぐ」事を洞山道微に請い願った。

けれども、洞山道微は、大慧宗杲に「嗣書する」、「師弟の系譜の書を嗣（つ）ぐ」事を許さなかった。

終（つい）には、洞山道微は、「あなた、大慧宗杲よ。『嗣書する』、『師弟の系譜の書を嗣（つ）ぐ』事を求めるならば、軽率である事なかれ。

すぐに、当然に必然的に、鍛錬して学ぶ事に勤めるべきである。
仏祖は、授ける時は、妄りに授けない。
私、洞山道微は、授ける事を惜しんでいるわけではない。
ただ、あなた(、大慧宗杲)は、未だ、見る眼を備えていない」と言った。
その時、大慧宗杲は、「(私、大慧宗杲は、)正しくものを見る眼を本から備えていて、『自証できる』、『自己だけで証する事ができる』し、『自悟できる』、『自己だけで悟る事ができる』。どうして、(私、大慧宗杲に)授けない事が有って良いであろうか？　いいえ！」と言った。
洞山道微は、笑って、話を止めた。

大慧宗杲は、後に、湛堂文準の所へ行った。

湛堂文準は、ある日、大慧宗杲に、「あなた(、大慧宗杲)の『(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔』は、なぜ、今日は半分、無いのか？」と質問した。
大慧宗杲は、「宝峰の湛堂文準の門下生だからです」と言った。
湛堂文準は、「(大慧宗杲は、)杜撰な僧である」と言った。

また、湛堂文準は、大慧宗杲が経を看ている時に、「どんな経を看ているのか？」と質問した。
大慧宗杲は、「金剛経です」と言った。
湛堂文準は、「法は平等で、(法には)高い、低いは無い。(それなのに、)なぜ、雲居山は高くて、宝峰山は低いのか？」と言った。
大慧宗杲は、「法は平等で、高い、低いは無いのです(。気にしないのです)」と言った。

湛堂文準は、「(その誤った答えでは、例えば、)あなた(、大慧宗杲)は、この寺の『座主』、『最高の僧』に成り得てしまう」と言った。

また、湛堂文準は、ある日、死者の裁判官である十王の像を(「幞頭」という「頭巾」などで)飾る所を見て、大慧宗杲に、「これらの裁判官達(、十王)の姓は何であるのか?」と質問した。

大慧宗杲は、「(十王の)姓は(湛堂文準の姓である)梁です」と言った。

湛堂文準は、手で自分の頭を撫でて、「(私、湛堂文準も、)姓が奥底まで梁であるのに、なぜ、あの『幞頭』という『頭巾』が無いのか?」と言った。

大慧宗杲は、「『幞頭』という『頭巾』が無くても、鼻の孔は似ていて髣髴(ほうふつ)とさせます」と言った。

湛堂文準は、「(大慧宗杲は、)杜撰(ずさん)な僧である」と言った。

また、湛堂文準は、ある日、大慧宗杲に、「大慧宗杲よ。

あなた(、大慧宗杲)は私の禅を『一時(いっとき)に』、『一度で』、『理解』、『会得』でき得る可能性が有る。

あなた(、大慧宗杲)に説かせれば、説く事ができ得る可能性が有る。

あなた(、大慧宗杲)に学へ参入させれば、学へ参入する事ができ得る可能性が有る。

あなた(、大慧宗杲)に『公案』、『修行者への手がかりとしての仏祖の言動』を詩で説明させたり批評させたり、説法させたり、重ねて教えを請わせたりすれば、でき得る可能性が有る。

あなた(、大慧宗杲)は、ただ、一つの事が未だでき得ないのである。

あなた(、大慧宗杲)は、わかっていますか?」と質問した。

大慧宗杲は、「(私、大慧宗杲は、)どんな事が未だでき得ないのでしょうか?」と言った。

湛堂文準は、「あなた(、大慧宗杲)は、ただ、ある理解を欠いている。

うん。

もし、この、ある理解を得ていなければ、私(、湛堂文準)が一丈四方の部屋で、あなた(、大慧宗杲)のために説いている時は禅が有るが、あなた(、大慧宗杲)が、わずかでも部屋を出たら禅は無く成ってしまう。

あなた(、大慧宗杲)が、意識を明確に保って思量している時は禅は有るが、わずかでも眠りにつけば禅は無く成ってしまう。

このようであれば、どうして生死に対応でき得るであろうか?　いいえ!

生死に対応できない!」と言った。

大慧宗杲は、「正に、これを大慧宗杲は疑っていた所です」と言った。

その後、何年か経って、湛堂文準は病気に成った。

大慧宗杲は、「和尚様、湛堂文準様の死後、大慧宗杲は、誰を頼れば、この大事を終わらせる事ができますか?」と質問した。

湛堂文準は、「巴州の圜悟克勤と言う人がいます。

私も圜悟克勤を良くは存じ上げていません。

ですが、あなた(、大慧宗杲)が、もし圜悟克勤に見(まみ)えれば、必ず、この事を成就できるでしょう。

あなた(、大慧宗杲)が、もし圜悟克勤に見(まみ)えたら、更に他の人の所へ行ってはいけません。

後に、禅の学への参入が出来るでしょう」と言った。

これらの話を点検して詳細に調べると、湛堂文準は、大慧宗杲をなお認めず、大慧宗杲をたびたび開発しようとしたが、終に大慧宗杲は一事を欠いたままだったのである。

大慧宗杲は、一事を欠いたまま補う事が無かったし、一事を脱ぎ落とす事も無かった。

洞山道微は、昔、大慧宗杲に「嗣書する」、「師弟の系譜の書を嗣ぐ」事を許さなかった。

洞山道微は、「あなた(、大慧宗杲)は未だ、見る眼を備えていない」と言って「鍛錬して学ぶ事に勤め励む事」を勧めた。

洞山道微の「機根」、「力量」を見る眼が明らかである事を信仰するべきである。

大慧宗杲は、「正に、これを大慧宗杲は疑っていた所である」事を究めて学へ参入しなかったし、脱ぎ落とさなかったし、打破しなかったし、大いに疑わなかったし、疑いに留められる事が無かった。

大慧宗杲は、昔、妄りに「嗣書する」、「師弟の系譜の書を嗣ぐ」事を請い願った。

大慧宗杲は、学への参入が軽率だったのであるし、
道心の無さの至りだったのであるし、
(仏道の)稽古の無さが、はなはだしかったのであるし、
(悪い意味で)遠慮が無かったと言えるし、

仏道の素質が無いと言えるし、学の疎かさの至りだったのである。

大慧宗杲は、名声や利益を貪り愛着して、仏祖の奥義を侵そうとしたのである。

大慧宗杲が、仏祖の言葉を知らない事を憐れむべきである。

大慧宗杲は、(仏道の)稽古とは、「自証」、「自己を証する事」である、と理解できなかったし、永遠を探究する事が、「自悟」、「自己を悟る事」である、と聞かなかったし、学ばなかったので、妄りに「嗣書する」、「師弟の系譜の書を嗣ぐ」事を請い願ったという正しくない事をしたし、自己を誤ったのである。

このため、大慧宗杲の門下生に、一人前や半人前の真に「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」をとらえた者はいないし、多くが「仮底」、「奥底まで仮の者」なのである。

(理解が可能である)仏法を理解せず、「(厳密には理解が不可能である)仏法を理解が不可能である」としない人は、大慧宗杲のように成ってしまうのである。

今の僧は、必ず、明確に詳細に学に参入するべきである。杜撰である事なかれ。

大慧宗杲は、湛堂文準の言葉に従って、湛堂文準の死後、京師の天寧寺の圜悟克勤の所へ行った。

圜悟克勤が、ある日、堂に上って仏法を説いたら、大慧宗杲は、「神がかった優れた悟りが有った」と言って、悟った事を圜悟克勤に告げて呈示した。

圜悟克勤は、「(大慧宗杲は、)未だ悟っていない。あなた(、大慧宗杲)は、悟っていると思っているが、大いなる仏法を未だ明らめていない」と言った。

また、圜悟克勤が、ある日、堂に上って、五祖山の法演禅師の「有句無句」という言葉を挙げた。

大慧宗杲は、聞いていて、「『有句無句』という言葉の下で、大いなる安楽の法を会得した」と言って、理解した事を圜悟克勤にまた呈示した。

圜悟克勤は、笑って、「(あなたの理解は誤っているが、)私は、あなたを欺(あざむ)いていないよ」と言った。

これが、大慧宗杲が、後に圜悟克勤の所へ行った時の話である。

大慧宗杲は、圜悟克勤の会で書記を任された。

けれども、その前後でも、新たに会得した事が有るようには未だ見受けられない。

大慧宗杲は、自ら、普遍に仏法を説いたり、堂に上って仏法を説いたりした時も、会得した事を挙げる事ができなかった。

知るべきである。

記録者は、「大慧宗杲が、神がかった優れた悟りを悟った」と言ったり、「大慧宗杲が、大いなる安楽の法を会得した」と言ったりしたが、大慧宗杲が悟ったり会得したりした事は無いのである。

大慧宗杲を重んじる事なかれ。

大慧宗杲は、学へ参入しようとした、ただの学者なのである。

圜悟克勤は、古代の仏と等しいのである。

圜悟克勤は、十方の中の無上に尊い者なのである。

黄檗希運より後に、圜悟克勤のような高徳の長老は未だいないのである。

圜悟克勤は、他の世界でも稀（まれ）である、古代の仏と等しい人なのである。

けれども、この事を知っている人や天人は稀（まれ）なのである。

憐れむべき「娑婆（しゃば）」、「苦しみを耐え忍ぶ場所」である「この世」という「国土」なのである。

古代の仏と等しい圜悟克勤の説法を挙げて、大慧宗杲を点検して詳細に調べると、大慧宗杲には、師に及ぶ事ができる知は未だ無いし、

師と等しい知も未だ無いし、

まして、師よりも優れている知も夢にも未だ見た事が無いようである。

そのため、知るべきである。

大慧宗杲の力は、師の「徳」、「力」の半分にも及ばない才能なのである。

大慧宗杲は、わずかに華厳経、楞厳経などの言葉を暗唱して伝えて説いただけなのである。

大慧宗杲には、仏祖の「骨髄」、「理解」は未だ無かったのである。

大慧宗杲は、誤って「大小の隠者が、わずかに草木についている精霊に引かれて保持し任せられる見解が仏法である」と思ってしまっている。

大慧宗杲が、このような代物を仏法であると誤解しているので、大慧宗杲は未だ仏祖の大いなる仏道に参入して究めていない、と測り知る事ができる。

大慧宗杲は、圜悟克勤の所へ行った後、更に他の人の所へ行脚せず、善知識を持つ人々を訪ねなかった。

大慧宗杲は、妄りに大きな寺の主として最高の僧に成ってしまった。

残っている大慧宗杲の言葉は、未だ大いなる仏法の近くにも及んでいない。

それなのに、無知な輩は、誤って「大慧宗杲は、昔にいても恥ずかしくない人である」と思ってしまっている。

大慧宗杲を見知っている者は、大慧宗杲は仏法を明らめていない、と確信している。

大慧宗杲は、終に大いなる仏法を明らめる事ができず、いたずらに無駄に「口吧吧地」、「バンバン話した」だけなのである。

そのため、洞山道微は、実に、後世の鑑のような人物として明らかに判断を誤らなかった、と知る事ができる。

大慧宗杲の学に参入した輩は、後々までも洞山道微を恨んで、千二百四十四年現在にまで恨みを絶やさないのである。

洞山道微は、大慧宗杲に「嗣書する」、「師弟の系譜の書を嗣ぐ」事を許さなかっただけである。

湛堂文準が大慧宗杲を認めなかったのは、洞山道微よりも激しい。
湛堂文準は、大慧宗杲と会うたびに、問いただして見破り叱った。
けれども、大慧宗杲は、湛堂文準を恨まなかった。

過去や今の、洞山道微や湛堂文準を恨む大慧宗杲の党派者の輩は、どれだけ恥ずかしい人である事か？！

宋の時代の中国には「仏祖の法の子孫である」と自称する人が多いが、真実の仏法を学んでいる人は少ないので、真実の仏法を教える人も少ない。
その事は、大慧宗杲の話によっても測り知る事ができる。
大慧宗杲の、中国の宋の紹興の時代の頃ですら、このような有様だったのである。

今は、その頃よりも劣っていて、例える事ができない。
今は、「仏祖の大いなる仏道が、どんな物であるのか？」すら知らない輩が僧の主人と成ってしまっている。
知るべきである。
仏から仏へ、祖師から祖師へ、西のインドから東の地の中国へ、「嗣書」、「師弟の系譜の書」を正しく伝えているのは、三十四祖の青原の行思の師弟の系譜なのである。
三十四祖の青原の行思より後、三十八祖の洞山良价が自然に正しく伝えられている。
他の十方の僧達は、かつて知らなかったが。
知っている者は皆、三十八祖の洞山良价の法の子孫なのであり、僧に「三十八祖の洞山良价の法の子孫である」という名声を授ける。
大慧宗杲は、生前、「自証」や「自悟」という言葉の正しい意味を知らなかった。
まして、大慧宗杲が、他の「公案」、「修行者の手がかりとしての仏祖の言動」に参入し徹しているであろうか？　いいえ！
まして、大慧宗杲よりも後進の者の誰が「自証」という言葉の正しい意味を知っているであろうか？　いいえ！
仏祖の言葉の「自(己)」という言葉や「他(者)」という言葉には、必ず、仏祖の身心が有るし、仏祖の「眼睛」、「見る眼」が有る。

「自証」は、仏祖の「骨髄」、「理解」であるので、凡庸な者が「皮」、「理解」を会得する事は無い。

正法眼蔵　自証三昧

その時、千二百四十四年、越宇の吉峰精舎にいて僧達に示した。

虚空

「ここが、どこだと思っているのか？」のために、仏道が形成されて現されて仏祖に成らせる。

仏祖の仏道が形成されて現されるのは自然に正統に代々形成されて現されるので、「皮肉骨髄」、「理解」が渾身する、虚空に掛かる事なのである。

虚空は、空(くう)を二十に分類した「二十空」等の仲間ではない。

空(くう)は「二十空」だけではない！　八万四千空が有るし、たくさん有る。

撫州の石鞏慧蔵は、西堂智蔵に、「あなたもまた虚空をとらえる事ができ得る事を理解していますか？」と質問した。

西堂智蔵は、「(虚空を)とらえる事ができ得る事を理解しています」と言った。

石鞏慧蔵は、「あなたは、どのように、とらえますか？」と言った。

西堂智蔵は、手で虚空をつかむ手振りをした。

石鞏慧蔵は、「あなたは虚空をとらえる事を理解していません」と言った。

西堂智蔵は、「兄弟子よ、どのように、とらえるのですか？」と言った。

石鞏慧蔵は、西堂智蔵の鼻の孔(あな)をつかんで引っ張った。

西堂智蔵は、痛みをこらえる声を出して、「ひどいです。人の鼻の孔(あな)を引っ張るなんて。(鼻が)取れてしまいそうです」と言った。

石鞏慧蔵は、「(虚空は、)このように、とらえて、初めて得られる」と言った。

石鞏慧蔵は、「あなたもまた虚空をとらえる事ができ得る事を理解しているか？」と言った。

「あなたもまた『通身』、『全身』が千手観音の『眼が有る手』であるのか？」と質問しているのである。

西堂智蔵は、「(虚空を)とらえる事ができ得る事を理解している」と言った。

虚空の一塊(ひとかたまり)は触れられて汚染されたのである。

汚染されてから今まで、虚空は地に落ちたまま来ているのである。

石鞏慧蔵は、「あなたは、どのように、とらえるのか？」と言った。

「如如」、「真如」、「真の、ありのまま」と呼んで為(な)しても、早くも変化し終わっているのである。

けれども、変化に従って、そのように去るのである。

西堂智蔵は、手で虚空をつかむ手振りをした。

虎の頭に騎乗する事だけを会得していて、虎の尾をつかむ事を未だ会得していないのである。

石鞏慧蔵は、「あなたは虚空をとらえる事を理解していない」と言った。

(虚空を)とらえる事を理解していないだけではなく、虚空を夢にも未だ見た事が無いのである。

けれども、年月が長いので、彼の為に挙げて示す事は欲しないのである。

西堂智蔵は、「兄弟子よ、どのように、とらえるのか？」と言った。

「和尚、あなたも半分は言ってください。全てを私に頼る事なかれ」なのである。

石鞏慧蔵は、西堂智蔵の鼻の孔をつかんで引っ張った。

しばらく学に参入するべきである。

西堂智蔵の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」に石鞏慧蔵は身を隠している。

または、「『(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔』が石鞏慧蔵を引き寄せている」という言葉が形成されて現される事が有る。

けれども、虚空は一塊なので、「磕著築著」、「ぶつかり当たり、突き当たる」のである。

西堂智蔵は、痛みをこらえる声を出して、「ひどい。人の鼻の孔を引っ張るとは。(鼻が)取れてしまいそうである」と言った。

従来は人に会うと思っていたが、たちまち自己に会う事を得たのである。

けれども、自己を汚染するのは駄目なのである。

「修己する」、「修行して自己を向上させる」べきである。

石鞏慧蔵は、「(虚空は、)このように、とらえて、初めて得られる」と言った。

「(虚空は、)このように、とらえて、初めて得られる」事が無いわけではないが、石鞏慧蔵は石鞏慧蔵と、共に一つの手を差し出して、(虚空を)とらえる事ができ得ていない。

虚空は虚空と、共に一つの手を差し出して、(虚空を)とらえる事ができ得ていないので、未だ自ら労苦していないのである。

尽界には虚空を許容する隙間(すきま)は無いが、石鞏慧蔵と西堂智蔵の話は久しく虚空の雷鳴を成している。

石鞏慧蔵と西堂智蔵の後、「『法眼宗、潙仰宗、曹洞宗、雲門宗、臨済宗』という『五家』の師匠」を自称する、学に参入している人は多いが、虚空を見聞きしたり推測したりできている人は稀(まれ)なのである。

石鞏慧蔵と西堂智蔵の前後で、虚空を弄(ろう)しようとする仲間の面々はいるが、着手できた人は少ない。

石鞏慧蔵は虚空をとらえた。

西堂智蔵は虚空を「見る事ができなかった」、「理解できなかった」。

大仏寺の道元は、正に、石鞏慧蔵の為(ため)に言おう。

石鞏慧蔵が昔、西堂智蔵の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」をつかんだ事が虚空をとらえた事に成るのであれば、石鞏慧蔵は自分の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」をつかむべきであった。

指先で指先をつかむ事も(虚空をとらえた事に成ると)理解して取るべきである。

けれども、石鞏慧蔵は、虚空をとらえる身のこなしを少し知っている。

たとえ虚空をとらえる良い手であっても、虚空の内外の学に参入するべきである。

虚空を殺したり活かしたりする学に参入するべきである。

虚空の軽重を知るべきである。

仏から仏へ、祖師から祖師への、鍛錬して仏道をわきまえる事や、心する事と、修行する事と証する事や、言って理解して取る事と質問して理解して取る事は、虚空をとらえる事に成ると保持して任せられるべきである。

道元の亡き師である、天童山の、古代の仏と等しい、五十祖の如浄は、「渾身は口に似ていて虚空にかかっている」と言った。

明らかに知る事ができる。

虚空の渾身は虚空にかかっている。

洪州の西山の亮座主は、ある時、馬祖道一の所へ行っていた。

馬祖道一は、「どんな経を説き明かすのか？」と質問した。

亮座主は、「(般若)心経です」と言った。

馬祖道一は、「何によって説き明かすのか？」と質問した。

亮座主は、「心によって説き明かします」と言った。

馬祖道一は、「心は主役のようなものであるし、思いは脇役のようなものである。
『眼(識)耳(識)鼻(識)舌(識)身(識)意識』という『六識』は伴侶なのである。
どうして経を説き明かす事ができ得ると理解できるであろうか？　いいえ！」と言った。

亮座主は、「心が(経を)説き明かす事ができ得ないのであれば、虚空が(経を)説き明かす事もでき得ないのでしょうか？」と言った。

馬祖道一は、「却(かえ)って、虚空こそが(経を)説き明かす事ができるであろう」と言った。

亮座主は、袖(そで)を払って退席した。

馬祖道一は、「亮座主」と呼んだ。

亮座主は、振り向いた。

馬祖道一は、「生まれてから老いに至るまで、ここ(、虚空)だけなのである」と言った。

亮座主は、馬祖道一の言葉によって反省した。

亮座主は、ついに(俗世から)西山へ隠れ住んで、その後の消息はわからない。

そのため、仏祖は経を説き明かす者なのである。
経を説き明かすとは、必ず、虚空に成る事なのである。
(経を説き明かすとは、必ず、無の普遍に成る事なのである。)
虚空でなければ、経を一つも説き明かす事ができ得ないのである。
心経を説き明かすにも、身経を説き明かすにも、共に、虚空によって説き明かすのである。

虚空によって、思量を形成して現しているし、
「不思量」、「今は思考できない思考」を形成して現している。

虚空によって、「有師智」、「師がいて得られる知」を成すし、
「無師智」、「師がいなくても得られる知」を成す。

「生知」、「生まれながらにして知っている知」を成したり、「学而知」、
「学んで知る知」を成したりするのは、共に、虚空による物なのである。

仏祖に成るのは、同様に、虚空による物なのである。

二十一祖の婆修盤頭は、「心は、虚空の世界と同じである。(心と、虚空の世界は、)同じく、虚空の法を示す。虚空を『証得した』、『悟った』時、正しいも無いし、『非法』、『法から外れる事』も無い」と言った。

壁に向かっている人が、人に向かっている壁と、出会って見える、牆壁の心や、枯木の心は、「虚空の世界」なのである。

「応に、この身によって『得度するべき』、『(仏土へ)渡すべき』者には、この身を現して、その者の為に法を説く」事は、「同じく、虚空の法を示す」事なのである。

「応に、他の身によって『得度するべき』、『(仏土へ)渡すべき』者には、他の身を現して、その者の為に法を説く」事は、「同じく、虚空の法を示す」事なのである。

「一日に使われる」時と、「一日を使う事ができ得る」時は、「虚空を『証得した』、『悟った』時」なのである。

「石は大きければ大きいし、石は小さければ小さい」事は、「正しいも無いし、『非法』、『法から外れる事』も無い」事なのである。

このような虚空をしばらく「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼と寂滅した妙なる心」として参入して究めるだけなのである。

正法眼蔵　虚空

その時、千二百四十五年、越宇の大仏寺にいて僧達に示した。

鉢盂

(「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼と寂滅した妙なる心」と、「袈裟」、「衣」と「鉢盂」、「器」で修行する事を、)過去七仏の向上から過去七仏へ正しく伝え、

過去七仏の中から過去七仏へ正しく伝え、

過去七仏から二十八代、正しく伝えて来ている。

揮(ふる)っている過去七仏から揮(ふる)っている過去七仏へ伝え、

二十八祖の達磨へ二十八祖の達磨は、自ら中国へ入国して、正宗普覚大師と呼ばれる二十九祖の慧可へ正しく伝え、二十八祖の達磨から三十三祖の大鑑禅師まで六代、伝えられて、曹谿山の三十三祖の大鑑禅師へ至る。

(釈迦牟尼仏から五十祖の如浄までの)西のインドと東の中国の全ての五十一人の仏祖が伝えている物は、「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼と寂滅した妙なる心」なのであるし、

「袈裟」、「衣」と「鉢盂」、「器」なのである。

共に、前の仏は自身が正しく伝えられた物を保持し任せられている。

このようにして、仏から仏へ、祖師から祖師へ、正しく伝えている。

それなのに、仏祖の学に参入する「皮肉骨髄」、「理解」と「拳頭」、「拳」と「眼睛」、「見る眼」の各々は、各々の言葉が有る。

「仏祖の器は仏祖の身心である」として学に参入する者がいるし、
「仏祖の器は仏祖の食器である」として学に参入する者がいるし、
「仏祖の器は仏祖の『眼睛』、『見る眼』である」として学に参入する者がいるし、
「仏祖の器は仏祖の光明である」として学に参入する者がいるし、
「仏祖の器は仏祖の真実の体である」として学に参入する者がいるし、
「仏祖の器は仏祖の『正法眼蔵涅槃妙心』、『正しくものを見る眼と寂滅した妙なる心』である」として学に参入する者がいるし、
「仏祖の器は仏祖の身を転じる所である」として学に参入する者がいるし、
「仏祖の器は仏祖の縁（ふち）と底（そこ）である」として学に参入する者がいる。

このような仲間が学に参入する主旨の各々は、各々が言い得ている分は有るが、さらに向上の、学への参入が有る。

道元の亡き師である、天童山の、古代の仏と等しい、五十祖の如浄は、千二百二十五年、天童山に住んでいた、ある日、堂に上って、次のように言った。

如浄が記憶し得ている所によると、ある僧が、百丈の懐海に、「特に優れている事とは、どういった事でしょうか？」と質問した。
百丈の懐海は、「(例えば、百丈の懐海が)『大雄峰』、『百丈山』に独りで坐っている事である」と言った。

人々も動かす事ができ得ない。

暫(しばら)く、この人(、百丈の懐海)を坐らせておく。

今日、突然、ある人が、「上座」の如浄に、「特に優れている事とは、どういった事でしょうか?」と質問したら、如浄は、彼に向かって、ただ「特に優れている事は無い!」と言うであろう。

最終的に、どうであろうか?

浄慈寺の器が天童山に移って(、如浄が、仏祖の知という)御飯を食べている。

(

如浄は浄慈寺の主であった。

如浄は浄慈寺から天童山へ移った。

)

知るべきである。

「特に優れている事」は、正に、「特に優れている」人のためにするべきである。

「特に優れている事」には、「特に優れている」日常の道具を用いるべきなのである。

これが、「特に優れている」時なのである。

そのため、「特に優れている事」が形成されて現される場所は、「特に優れている」器なのである。

「特に優れている」器を四天王に護らせて保持させるし、諸々の龍王に擁護させるのが、仏道の奥深い規範なのである。

このために、「特に優れている」器を、仏祖に捧げ、仏祖から付属される。

仏祖の奥義に参入していない輩は、誤って、「仏の衣は、絹である」とか「仏の衣は、布である」とか「仏の衣は、『化糸』、『化生させた糸』を織り成した物である」と言ってしまうし、「仏の器は、石である」とか「仏の器は、瓦（かわら）である」とか「仏の器は、鉄である」と言ってしまう。

このように誤って言ってしまうのは、学に参入する「見る眼」が未だ備わっていないからなのである。

仏の衣は、仏の衣なのである。

さらに、絹、布といった見解が有るべきではない。

絹、布などの見解は、古い見解なのである。

仏の器は、仏の器なのである。

さらに、石、瓦（かわら）などと言うべきではないし、鉄、木などと言うべきではない。

仏の器は、作った物ではないし、

生じたり滅んだりする物ではないし、

来たり去ったりする物ではないし、

得たり失ったりする物ではないし、

古い物や新しい物ではないし、
古今とは無関係である。

仏祖の衣と器は、たとえ雲と水を採集して形成させて現させても、雲と水による鳥かごではないし、
たとえ草木を採集して形成させて現させても、草木による鳥かごではない。

その主旨は、雲は、「衆法」、「複数の物」を合成して雲に成るのである。
水は、「衆法」、「複数の物」を合成して水に成るのである。
雲を合成して雲に成るのである。
水を合成して水に成るのである。

仏祖の器は、「衆法」、「複数の物」を合成して仏祖の器に成るのであるし、
仏祖の器を合成して「衆法」、「複数の物」に成るのであるし、
「渾心」、「全心」を合成して仏祖の器に成るのであるし、
虚空を合成して仏祖の器に成るのであるし、
仏祖の器を合成して仏祖の器に成るのである。

仏祖の器は、仏祖の器によって遮（さえぎ）られるし、仏祖の器によって汚染される。
僧が伝えられて保持している僧の器は、四天王が捧げている器なのである。
もし四天王が捧げなければ、僧の器は目の前に現れない。

今、諸方で、釈迦牟尼仏の「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を伝えている仏祖が、正しく伝えている器は、古今を奥底まで透過して脱ぎ落としている器なのである。

そのため、仏祖が正しく伝えている器は、「鉄の物である」という古い見解を見破るし、
「木の杭による物である」という推測に束縛されないし、
「瓦礫による物である」という色形と音声を超越しているし、
石や宝玉という手段を遮らないのである。

仏祖の器を、「『碌塼』、『瓦礫』による物である」と言う事なかれ。
「木の杭による物である」と言う事なかれ。

このように伝承して来ている。

正法眼蔵　鉢盂

その時、千二百四十五年、越宇の大仏精舎にいて僧達に示した。

他心通

「西京」、「長安」の光宅寺の南陽慧忠は、越州の諸暨の人である。

南陽慧忠の姓は「冉」である。

南陽慧忠は、心の印を受けてから、南陽の白崖山の党子谷に住んで四十年余り山を下りなかった。

南陽慧忠の仏道修行は、長安にまで聞こえた。

七百六十一年、唐の時代の中国の皇帝の粛宗は、宮中からの使者として孫朝進に命令して、命令書を持たせて、南陽慧忠に長安に来るよう求めた。

粛宗は、南陽慧忠を師として礼を持って待ち受けて、千福寺の西禅院に住まわせた。

(七百六十二年、)代宗が、皇帝に成ると、南陽慧忠を光宅寺に住まわせた。

南陽慧忠は、十六年、聞く人の素質に応じて、法を説いた。

(七百六十一年の、)ある時、西のインドの大耳三蔵という人が、長安に来て、「他心の慧眼」、「他心通」を会得していると言った。

粛宗は、南陽慧忠に大耳三蔵を試験してもらった。

大耳三蔵は、南陽慧忠に会うと、速(すみ)やかに、南陽慧忠を礼拝して右に立った。

南陽慧忠は、「あなたは他心通を会得していますか？　どうですか？」と質問した。

大耳三蔵は、「あえて言うまでも無く、他心通を会得している」と言った。

南陽慧忠は、「今、私(の心)が、どこに存在するのか、言ってください」と言った。

大耳三蔵は、「和尚様は一国の師であるのに、西川へ行って、競って渡っている船を見ている」と言った。

南陽慧忠は、少ししてから、「今、私(の心)が、どこに存在するのか、言ってください」と再び質問した。

大耳三蔵は、「和尚様は一国の師であるのに、天津橋の上へ行って、猿の芸を見ている」と言った。

南陽慧忠は、「今、私(の心)が、どこに存在するのか、言ってください」と再び質問した。

大耳三蔵は、少ししても、知る事ができず、何も見えなかった。

南陽慧忠は、「この『野狐の精霊』め、あなたの他心通は、どこに存在するのか？」と叱(しか)った。

大耳三蔵は、また、答える事ができなかった。

ある僧が、趙州真際大師に「大耳三蔵は、なぜ、三度目で、南陽慧忠(の心)が、どこに存在するのか見る事ができなかったのか？　一体、南陽慧忠(の心)は、どこに存在するのか？」と質問した。

趙州真際大師は、「南陽慧忠が大耳三蔵の鼻の孔(あな)の上にいたので、大耳三蔵は南陽慧忠(の心)を見る事ができなかった」と言った。

ある僧が、玄沙師備に「南陽慧忠が大耳三蔵の鼻の孔(あな)の上にいたのに、なぜ大耳三蔵は南陽慧忠(の心)を見る事ができなかったのか？」と質問した。

玄沙師備は、「近過ぎたからである」と言った。

ある僧が、仰山慧寂に「なぜ、大耳三蔵は、三度目は、少ししても、南陽慧忠(の心)が、どこに存在するのか見る事ができなかったのか？」と質問した。

仰山慧寂は、「大耳三蔵は、一度目と二度目は『渉境心』を見た。三度目は南陽慧忠(の心)が『自受用三昧』に入ったので見る事ができなかった」と言った。

海会寺の白雲守端は、「もし南陽慧忠が大耳三蔵の鼻の孔(あな)の上にいたならば、どうして見難い事が有るだろうか？　いいえ！　ただ、大耳三蔵は南陽慧忠(の心)が大耳三蔵の『見る眼』の中にいる事を知らなかったのである」と言った。

また、玄沙師備は、大耳三蔵を非難して、「大耳三蔵は、一度目と二度目も南陽慧忠(の心)を見る事ができていたのか？　いいえ！」と言った。

雪竇重顕は、「(大耳三蔵は、一度目も南陽慧忠に)敗(やぶ)れているし、(二度目も南陽慧忠に)敗(やぶ)れている」と言った。

大証国師と呼ばれる南陽慧忠が大耳三蔵を試験した話は、古くから、批評し言い表す、臭い拳である人が多いが、特に五人の老いた拳である長老がいる。

けれども、この五人の高徳の長老は、各々、「諦当甚諦当」、「当たっている事は甚だ当たっている」事は無いわけではないが、南陽慧忠の振る舞いが「見えていない」、「理解できていない」所が多い。

なぜなら、古今の諸々の人々は皆、誤って「一度目と二度目は、大耳三蔵は、誤らず、南陽慧忠(の心)が、どこに存在するのか知る事ができた」と思ってしまっている。

これは、古代の先人の大きな誤りであり、後進の者は知る必要が有る。

五人の高徳の長老への疑問は二種類、有る。

(一)南陽慧忠が大耳三蔵を試験した本当の意図を知らない。

(二)南陽慧忠の身心を知らない。

(一)南陽慧忠が大耳三蔵を試験した本当の意図を知らない。

一度目に、南陽慧忠が、「今、私(の心)が、どこに存在するのか、言ってください」と言った本当の意図は、「大耳三蔵は、仏法を見聞きする見る眼が有るのか?」と試しに質問しているのであるし、

「大耳三蔵は、仏法の他心通が有るのか?」と試しに質問しているのである。

当時、もし大耳三蔵に仏法が有れば、「今、私(、南陽慧忠の心)が、どこに存在するのか?」と示された時、身を出る道が有ったであろうし、親しむ機会を存在させる事ができたであろう。

南陽慧忠が「今、私(の心)が、どこに存在するのか?」と言ったのは、「私(の心)とは、どういった物であるのか?」と質問したような物なのである。

「今、私(の心)が、どこに存在するのか?」と言うのは、「今とは、どういった時であるのか?」と質問しているのである。

「どこに存在するのか?」と言うのは、「ここが、どこだと思っているのか?」と言い表しているのである。

「何ものを『私』と呼んで『私』と為すのか?」という道理も有る。

南陽慧忠は、必ずしも「私」ではない。

「私」は必ず拳なのである。

大耳三蔵は、遥か西のインドから来たが、南陽慧忠の本当の意図を知らなかったのは、仏道を学んでいない事による物なのであるし、いたずらに無駄に外道や「二つの乗り物」の段階の道だけを学んでいる事による物なのである。

二度目に、南陽慧忠は、「今、私(の心)が、どこに存在するのか、言ってください」と、くり返し質問した。

ここでも、大耳三蔵は、更に、いたずらな無駄な言葉を言った。

三度目に、南陽慧忠は、「今、私(の心)が、どこに存在するのか、言ってください」と、くり返し質問した。

その時、大耳三蔵は、少ししても、呆然として答える事ができなかった。

この時、南陽慧忠は、「この『野狐の精霊』め、あなたの他心通は、どこに存在するのか？」と大耳三蔵を叱った。

大耳三蔵は、このように叱られてもなお、何か言う事ができなかったし、答える事ができなかったし、どこかへ通じる道が無かった。

それなのに、古代の先人は皆、誤って「大耳三蔵が一度目と二度目は南陽慧忠の存在する場所を知る事ができたが、三度目だけは知る事ができなかったし、見る事ができなかったので、南陽慧忠は大耳三蔵を叱った」と思ってしまっている。

これは、大きな誤りなのである。

大耳三蔵が最初から仏法を夢にも未だ見ていないので、南陽慧忠は大耳三蔵を叱ったのである。

大耳三蔵が一度目と二度目は南陽慧忠の存在する場所を知る事ができたが、三度目は知る事ができなかったので、南陽慧忠は大耳三蔵を叱ったわけではないのである。

大耳三蔵が「他心通を会得している」と自称しながら他心通を知らないので、南陽慧忠は大耳三蔵を叱ったのである。

まず、南陽慧忠は、「仏法に他心通は有るのか？」という意図で質問して試験しているのである。

大耳三蔵は、「あえて言うまでも無く、他心通を会得している」と言ったので、「仏法に他心通は有る」と言っているように聞こえる。

そのため、南陽慧忠は、「たとえ『仏法に他心通は有る』と言えても、『他心通を仏法に存在させれば、何々である』と言えた上で理由を挙げる事ができなければ、仏法ではない」と思った(のであろう)。

たとえ大耳三蔵が三度目に何かを言ったとしても、一度目と二度目と同様であれば、何も言えていない事に成るので、南陽慧忠は大耳三蔵の三度の言葉を全て叱るべきなのである。

南陽慧忠は、「もしかしたら大耳三蔵は、南陽慧忠の質問を『聞く』、『理解する』事ができ得るかもしれない」と思い、くり返し三度も試しに質問したのである。

(二)南陽慧忠の身心を知らない。

南陽慧忠の身心を知っている古代の先人はいない。

南陽慧忠の身心は、経典の学者が「見る」、「理解する」のは困難であるし、知るのは困難であるし、

十聖三賢が及ぶ事はできないし、

(一生)補処、等覚が明らめる事はできない。

凡人の経典の学者は、南陽慧忠の渾身を知らない！

これらの道理を必ず確信するべきである。

「経典の学者は南陽慧忠の身心を知る事ができる。『見る』、『理解する』事ができる」と言う事は、仏法の悪口を言う事に成るのである。

「経典の学者は南陽慧忠と肩を並べる事ができる」と認める人は、(心が)転倒した、ひどい狂人なのである。

「(偽の)他心通を会得している輩は、南陽慧忠(の心)が存在する所を知る事ができる」と学ぶ事なかれ。

西のインドという土地の風俗として、(偽の)他心通を修得する輩が時々いる。

(偽の)他心通は、「発菩提心」、「発心」、「悟りを求める事を思い立って心する事」による物ではないし、大乗による「正しくものを見る眼」による物ではない。

(偽の)他心通を会得した輩が(偽の)他心通の力によって仏法を証し究めた行跡なんて未だかつて聞いた事が無い。

(偽の)他心通を修得した後も、更に、(他心通の力が無い)凡人のように、発心し修行すれば、自然に悟って仏道に入る事ができる。

(偽の)他心通の力だけで仏道を知見する事ができ得るならば、先人の聖者は皆、先に(偽の)他心通を修得してから、(偽の)他心通の力で「仏果」、「悟り」を知ったであろう。

しかし、千、万の無数の仏祖が「この世」に出現したが、(偽の)他心通の力で悟った人は未だいないのである。

(偽の)他心通では、仏祖の仏道を知る事ができないのでは、(偽の)他心通を得て、どうするのか？　どうしようもない！

(偽の)他心通は、仏道の役には立たない、と言える。

(偽の)他心通を得ている人も、他心通を得ていない凡人も、仏道では同等である、と言える。

(偽の)他心通を得ている人も、他心通を得ていない凡人も、仏に成れる性質を保持し任せられている事は同じなのである。

仏を学んでいる仲間は、「外道や『二つの乗り物』の段階の者の(偽の)五神通や(偽の)六神通は、凡人よりも優れている」と思う事なかれ。

道心だけが有り、仏法を学んでいる凡人は、外道や「二つの乗り物」の段階の者の(偽の)五神通や(偽の)六神通よりも優れている。
卵の殻の中にいる時から美しい声で鳴く迦陵頻伽の声は、他の鳥の声よりも優れているような物なのである。

まして、西のインドで「他心通」と呼ばれている代物は、「他念通」、「雑念を読む神通力」と呼ぶべきである。

(偽の)他心通を得ている人は、雑念が起こると少し繋(つな)がる事はできるが、雑念が未だ無い時は呆然と成ってしまうのである。笑うべきである。

まして、心は、必ずしも、思いではない。
思いは、必ずしも、心ではない。
心が思いに成る時を(偽の)他心通では知る事ができない。
思いが心に成る時を(偽の)他心通では知る事ができない。

そのため、西のインド人の「(偽の)五神通」や「(偽の)六神通」は、日本人が雑草を除去して田畑を正しい状態へ修復する事にも及ばない。
(正しい心が有れば、雑草を除去して田畑を正しい状態へ修復する行いから、雑念を除去して心を正しい心へ修復する事ができる。)
西のインド人の「(偽の)五神通」や「(偽の)六神通」は、全く無用なのである。

このため、中国以東では、先人の高徳の僧は皆、「(偽の)五神通」や「(偽の)六神通」を好んで修得しないのは、必要が無いからなのである。

一尺、三十センチの直径の宝石ですら必要が有るかもしれないが、「(偽の)五神通」や「(偽の)六神通」は不要なのである。
一尺、三十センチの直径の宝石ですら宝ではない。わずかな時間が「枢要」、「最重要」なのである。
わずかな時間を重んじる人は誰も「(偽の)五神通」や「(偽の)六神通」を習って修得しない！

「(偽の)他心通の力は、仏の知の境地に及ぶ事ができない」という道理をよくよく確信するべきである。

それなのに、五人の高徳の長老は共に、誤って「大耳三蔵は、一度目と二度目は、南陽慧忠(の心)が存在する所を知る事ができた」と思ってしまっているが、最大の誤りなのである。

南陽慧忠は、仏祖である。
大耳三蔵は、凡人である。
大耳三蔵は南陽慧忠の身心を「見る」、「理解する」事ができた、できない、と論じるまでも無い！ 大耳三蔵は南陽慧忠の身心を「見る」、「理解する」事ができるはずが無い！

まず、南陽慧忠は、「今、私(の心)が、どこに存在するのか、言ってください」と言った。
この質問は、隠された意味は無いし、現された意味が有る。

大耳三蔵が知る事ができなかったのは咎には成らないが、五人の高徳の長老が「見聞きできなかった」、「理解できなかった」のは誤りなのである。

南陽慧忠は、「今、私(の心)が、どこに存在するのか?」と言った。

さらに、南陽慧忠は、「(他心通によって、)今、私の心が、どこに存在するのか、言ってください」と言わなかったし、

「(他心通によって、)今、私の思いが、どこに存在するのか?(言ってください)」と言わなかった。

最も聞いて知るべき、見て注目するべき言葉なのである。

それなのに、南陽慧忠の言葉を知る事ができていないし、見聞きできていない。

このため、「南陽慧忠の身心を知らない」と成るのである。

言い得る人を「国師」、「国の師」としている。

言い得ない人は「国師」、「国の師」に成るべきではない。

南陽慧忠の身心は、「大小」、「優劣」ではないし、自分だけの物ではないし、他者の物ではない事は知る事ができない。

南陽慧忠は、「頂上」が有る事や、「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」が有る事を忘れている者のような者なのである。

南陽慧忠は、たとえ修行で暇が無くても、仏に成る事を意図しない!

このため、仏をひねって(南陽慧忠を)待ち構えるべきではない。

南陽慧忠は既に仏法の身心である。

(偽の)神通についての修行と証で南陽慧忠の身心を測るべきではない。

思慮を絶して縁を忘れる事を挙げて南陽慧忠の身心について考えるべきではない。

南陽慧忠の身心は、推測して、または、考えないで、当てる事ができる物ではない。

南陽慧忠の身心は、(仏であるので)仏に成れる性質が有るわけではないし、仏の性質が無いわけではないし、仏の「虚空身」ではない。

これらのような、南陽慧忠の身心は、全く知る事ができない物なのである。

曹谿山の、三十三祖の大鑑禅師の会では、三十四祖の青原の行思、三十四祖の南嶽の懐譲、南陽慧忠だけが仏祖なのである。

五人の高徳の長老を見破ろう。

趙州真際大師は、「南陽慧忠が大耳三蔵の鼻の孔の上にいたので、大耳三蔵は南陽慧忠(の心)を見る事ができなかった」と言った。

この言葉は根拠が無い。

南陽慧忠は、大耳三蔵の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」にいない！

大耳三蔵は未だ「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」が無いからである。

もし大耳三蔵に「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」が有れば、南陽慧忠を見る事ができたであろうし、逆に南陽慧忠も大耳三蔵を見る事ができたであろう。

ただし、たとえ南陽慧忠が大耳三蔵を見たとしても、「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」が「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」と相対しただけであり、さらに大耳三蔵が南陽慧忠を見る事はできなかったであろう。

玄沙師備は、「近過ぎたからである」と言った。
実に、たとえ「とても近く」ても、近くには未だ当たっていないのである。
「近過ぎた」、「とても近い」とは、どういった事であるのか？
思うに、玄沙師備は未だ「近過ぎた」、「とても近い」という事を知らないし、参入していない。
なぜなら、「近過ぎて見えない事が有る」としか知らず、「見える事は、とても近い事である」と知らない。
玄沙師備の言葉は、仏法では遠過ぎるのである、と言える。
もし三度目だけが「近過ぎた」と言うのであれば、一度目と二度目は「遠過ぎたが存在している」事に成ってしまうであろう。
次のように、暫(しばら)く玄沙師備に質問する。
「あなたは、何を『近過ぎた』と言っているのか？　何を『近過ぎた』としているのか？　『拳』を『近過ぎた』と言っているのか？　『眼睛』、『見る眼』を『近過ぎた』と言っているのか？」
今後、「近過ぎて見えない」と言う事なかれ。

仰山慧寂は、「大耳三蔵は、一度目と二度目は『渉境心』を見た。三度目は南陽慧忠(の心)が『自受用三昧』に入ったので見る事ができなかった」と言った。
仰山慧寂よ、あなたは、東の地の中国にいながら「小釈迦」という名誉な称号を西のインドにまで及ぼしているが、この言葉は大きな誤りである。
「渉境心」と「自受用三昧」は、異なるわけではない。
このため、「『渉境心』と『自受用三昧』は異なるので、見る事ができなかった」と言う事はできないのである。

そのため、「『渉境心』と『自受用三昧』は異なる」という理論を立てていても、仰山慧寂の言葉は未だ(正しく)言い得ていないのである。

「『自受用三昧』に入れば、他人は私を見る事ができない」と言ってしまえば、「自受用三昧」は更なる「自受用三昧」を証する事ができなく成ってしまうであろうし、修行と証が存在できなく成ってしまうであろう。

仰山慧寂よ、あなたは、誤って「大耳三蔵は、一度目と二度目は『渉境心』を見た。知った」と思ってしまったり、学んでしまったりしたのであれば、未だ仏を学んだ人ではない。

大耳三蔵は、三度目だけではなく、一度目も二度目も、南陽慧忠(の心)が存在する所を知る事ができなかったし、見る事ができなかった。

仰山慧寂の言葉からすると、大耳三蔵は南陽慧忠(の心)が存在する所を知る事ができなかっただけではなく、仰山慧寂も未だ南陽慧忠(の心)が存在する所を知る事ができなかった、と言える。

暫く、仰山慧寂に「今、南陽慧忠(の心)が、どこに存在するのか？」と質問する。

この時、もし仰山慧寂が口を開こうとしたら、一喝するべきである。

玄沙師備は、大耳三蔵を非難して、「大耳三蔵は、一度目と二度目も南陽慧忠(の心)を見る事ができていたのか？　いいえ！」と言った。

「大耳三蔵は、一度目と二度目も南陽慧忠(の心)を見る事ができていたのか？　いいえ！」という一言は、言うべき事を言っているように聞こえる。

玄沙師備は、自ら、自己の言葉を学ぶべきである。

この一言は、良いことは良い。

けれども、「見る事はできたが、見る事ができなかったような物なのである」と言っているようである。
そのため、正しくない。

玄沙師備の言葉を聞いて、雪竇重顕は、「(大耳三蔵は、一度目も南陽慧忠に)敗れているし、(二度目も南陽慧忠に)敗れている」と言った。
玄沙師備の言葉の意味を「一度目と二度目も見る事ができなかった」とする時は、こう言えるが、玄沙師備の言葉の意味を「一度目と二度目も見る事はできたが、見る事ができなかったような物なのである」とする時は、こう言うべきではない。

海会寺の白雲守端は、「もし南陽慧忠が大耳三蔵の鼻の孔の上にいたならば、どうして見難い事が有るだろうか？　いいえ！　ただ、大耳三蔵は南陽慧忠(の心)が大耳三蔵の『見る眼』の中にいる事を知らなかったのである」と言った。
この言葉もまた、「三度目だけ見る事ができなかった」と論じているのみなのである。
一度目と二度目も見る事ができていない事を叱るべきなのに叱っていない。
南陽慧忠は、大耳三蔵の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」の上や「見る眼」の中にいない！
もし、このように言ってしまうのであれば、南陽慧忠の言葉を未だ「聞く」、「理解する」事ができていない、と言える。
大耳三蔵には未だ「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」や「見る眼」は無い。

たとえ大耳三蔵が自分なりの「嗅ぎ分ける鼻の孔」や「見る眼」を保持し任せられていても、もし南陽慧忠が来て大耳三蔵の「嗅ぎ分ける鼻の孔」や「見る眼」の中に入ったならば、その時、大耳三蔵の「嗅ぎ分ける鼻の孔」と「見る眼」は共に破裂する。

破裂したら、南陽慧忠は入っている事ができない。

五人の高徳の長老は共に、南陽慧忠を知る事ができなかったのである。

南陽慧忠は、一代の、古代の仏と等しい人なのであるし、一世界の如来なのである。

南陽慧忠は、釈迦牟尼仏の「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を明らめて、正しく伝えている。

南陽慧忠は、(他人によって換えられた)「木槵子」の「見る眼」を確かに保持し任せられている。

南陽慧忠は、自分という仏へ正しく伝えているし、他の仏へ正しく伝えている。

南陽慧忠は、釈迦牟尼仏と同じく参入して来ているが、過去七仏と同時に参入して究めている、と同時に、過去、現在、未来の諸仏と同じく参入して来ている。

南陽慧忠は、空王仏の前に仏道を成就しているし、空王仏の後に仏道を成就しているし、空王仏と同時に同じく参入して仏道を成就している。

南陽慧忠は、本（もと）から「娑婆（しゃば）」、「苦しみを耐え忍ぶ場所」である「この世」を国土としているが、「この世」は必ずしも法界の中には無いし、尽十方界の中には無い。

釈迦牟尼仏が「この世」の「国王」、「主」である事は、南陽慧忠の国土を奪わないし、遮（さえぎ）らない。

例えば、前後の諸々の仏祖は各々、仏道の多数の成就が有るが、奪わないし、遮（さえぎ）らないような物なのである。

なぜなら、前後の諸々の仏祖の仏道の成就は共に、仏道の成就によって遮（さえぎ）られないからである。

大耳三蔵が南陽慧忠を知る事ができなかった事を証拠として、声聞や独覚の段階の人、「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の輩は仏祖の境地を知る事ができない、という道理を明らかに確信するべきである。

南陽慧忠が大耳三蔵を叱（しか）った主旨を明らめて学ぶべきである。

たとえ南陽慧忠が「国師」、「国の師」であっても、大耳三蔵が一度目と二度目は存在する所を知る事ができたのであれば、大耳三蔵が三度目は知る事ができなかった事を南陽慧忠が叱（しか）る根拠は無い。

三分の二を知る事ができたのであれば、全部を知る事ができるのである。

このようであれば、叱るべきではない。たとえ叱ったとしても、全部を知る事ができなかったわけではなく成ってしまう。大耳三蔵も、そう思うであろうし、南陽慧忠は恥ずかしい人に成ってしまうであろう。

大耳三蔵が三度目は知る事ができなかった事を南陽慧忠が叱ったら、誰も南陽慧忠を信頼しなく成ってしまうであろう！　それに、大耳三蔵は、一度目と二度目は知る事ができた力によって、南陽慧忠を叱る事ができてしまうであろう。

南陽慧忠が大耳三蔵を叱った主旨とは、大耳三蔵が三度も、最初から、全く、南陽慧忠が存在する所、南陽慧忠の思い、南陽慧忠の身心を知る事ができなかったので、南陽慧忠は叱ったのである。

かつて大耳三蔵が仏法を見聞きして習って学んでいなかった事を、南陽慧忠は叱ったのである。

この主旨のため、一度目から三度目まで、同じ言葉で質問しているのである。

一度目に、大耳三蔵は、「和尚様は一国の師であるのに、西川へ行って、競って渡っている船を見ている」と言った。

このように大耳三蔵が言ったが、南陽慧忠は、何も言わず、「実に私の存在する所を知る事ができた」と認めず、ただ、くり返して、二度目、三度目と、しきりに質問しただけだったのである。

この道理を知らないし、明らめていないのに、南陽慧忠の時代から数百年間、諸方の長老は妄りに批評して道理を説いているのである。

前述の長老の言葉は全て、南陽慧忠の本当の意図ではないし、仏法の主旨に適わない。

諸々の、錐の先が使い古されて丸く成る様に円熟した長老が、誤った事を憐れむべきである。

もし仏法の中に他心通が有ると言うならば、他身通も有るし、他拳通も有るし、「他眼睛通」、「他『見る眼』通」も有る。

このようであれば、自心通も有るし、自身通も有る。

そのようであれば、自己の心を自己でひねる事が自心通に成る。

このような言葉が形成されて現されれば、自心通とは、自然に、心自体への他心通に成る。

次のように、暫く質問しよう。

「他心通をひねるのは、正しいのか？　自心通をひねるのは、正しいのか？　速やかに言いなさい。速やかに言いなさい」

正しいかどうかは暫く置いておく。

「あなたは私の髄を会得した」とは他心通なのである。

正法眼蔵　他心通

その時、千二百四十五年、越宇の大仏寺にいて僧達に示した。

王索仙陀婆

「有句無句」は、(葛)藤のようであるし、樹のようであるし、驢馬(ロバ)を飼うし、馬を飼うし、水を透過するし、雲を透過する。

このため、大般涅槃経で、釈迦牟尼仏は、「例えば、大王が諸々の群臣に『仙陀婆を持って来なさい』と告げるような物である。『仙陀婆』という一つの言葉は、四つの実物を意味する。

(一)塩
(二)器
(三)水
(四)馬

これらの四つの物を共に同じ『仙陀婆』という一つの言葉は意味する。知が有る家臣は善く『仙陀婆』が意味する物を知る事ができる。
もし王が食べる時に『仙陀婆』を求めたら、塩を捧げる。
もし王が食べ終わって飲み物を飲みたい時に『仙陀婆』を求めたら、器を捧げる。
もし王が洗う時に『仙陀婆』を求めたら、水を捧げる。
もし王が出かけたい時に『仙陀婆』を求めたら、馬を捧げる。
このように、知が有る家臣は善く大王の四種類の『密語』、『意味が込められた言葉』を理解するのである」と言った。

この「王索仙陀婆」、「王が『仙陀婆』を求める事」と「臣奉仙陀婆」、「(知が有る)家臣が『仙陀婆』を捧げる事」は、久しく伝えられて来ているし、法衣と同じく伝えられて来ている。

釈迦牟尼仏が「仙陀婆」を免れる事ができずに挙げてひねったので、釈迦牟尼仏の法の子孫も「仙陀婆」を頻繁に挙げてひねっている。

思うに、釈迦牟尼仏と同じく参入して来ている者は「仙陀婆」と似ている事を踏襲(とうしゅう)して実践している。

釈迦牟尼仏と同じく参入していないならば、更に履物を買って行脚して、一歩を進んで、初めて会得できるであろう。

既に(仏教という)仏祖の家の中の「仙陀婆」は密(ひそ)かに漏洩(ろうえい)していて、大王の家の中にも「仙陀婆」が有ったのである。

宋の時代の中国の慶元府の天童山の、古代の仏と等しい宏智正覚は、堂に上って、僧達に示して、「仏祖の言動を挙げると、ある僧が、趙州真際大師に、『王が仙陀婆を求めたら、どうしますか?』と質問した。

趙州真際大師は、身をかがめて、両手を胸の前で重ねて立った。

雪竇重顕は、ひねって『塩を求めたら、馬を捧げた(ような物である)』と言った。

趙州真際大師は、百二十歳まで生きた、古代の仏と等しい人である。

雪竇重顕は、百年前の高徳の僧である。

もし趙州真際大師が正しければ、雪竇重顕は正しくないであろう。

もし雪竇重顕が正しければ、趙州真際大師は正しくないであろう。
暫く言いなさい。
最終的に、どうであろうか？
私、天童山の宏智正覚も、『注釈する』、『解説する』事を免れないであろう。
わずかな誤りでも最終的には大きな誤りに成ってしまう。
会得できても、草を打って蛇を驚かす事に成ってしまう。
会得できなくても、『冥銭』、『死者への捧げ物である貨幣』を焼いて霊を引き寄せてしまう。
耕されていない田畑かどうかを選ばず、老いた倶胝が立てる一本の指を、今、手に任せて、奥底まで、ひねって取って来るのである」と言った。
(説法で倶胝は一本の指を立てるだけであった。)

道元の亡き師である、古代の仏と等しい、五十祖の如浄は、堂に上って説法する時、普段から、「宏智正覚は古代の仏と等しい」と言っていた。

それなのに、「宏智正覚は古代の仏と等しい」と見抜いている者は、如浄、独りだけなのである。
宏智正覚の時代に、径山の大慧宗杲という僧がいた。
大慧宗杲は、南嶽の懐譲の法の遠い子孫である。

宋の時代の中国の人々は、誤って「大慧宗杲は宏智正覚と同等である」と思ってしまっている。

あまつさえ、誤って「大慧宗杲は宏智正覚よりも達道者である」と思ってしまっている。

この誤りは、宋の時代の中国国内の仏道者も俗人も共に、学が疎(おろそ)かで、道を見る眼が未だ明らかに成っておらず、人を知る明らめる力が無く、自己を知る力が無い事による物なのである。

宏智正覚が挙げた話には真の意味が有る。

古代の仏と等しい趙州真際大師が、身をかがめて、両手を胸の前で重ねて立った道理の学に参入するべきである。

この時、この行動は、「王索仙陀婆」、「王が『仙陀婆』を求める事」に成っているのかどうか？

「臣奉仙陀婆」、「(知が有る)家臣が『仙陀婆』を捧げる事」に成っているのかどうか？

雪竇重顕の「塩を求めたら、馬を捧げた(ような物である)」という言葉の主旨の学に参入するべきである。

「塩を求めたら、馬を捧げた」とは、王と家臣が共に求める事なのであるし、「王索仙陀婆」、「王が『仙陀婆』を求める事」なのであるし「臣索仙陀婆」、「(知が有る)家臣が『仙陀婆』を求める事」なのであるし、

釈迦牟尼仏が「仙陀婆」を求めたら、初祖の迦葉が「破顔微笑」した事なのであるし、
二十八祖の達磨が「仙陀婆」を求めたら、四人の弟子が塩、器、水、馬を捧げた事なのである。

塩、器、水、馬が「索仙陀婆」、「『仙陀婆』を求める事」に成る時、水を捧げたり、馬を捧げたりする「関棙」、「ぜんまい」、「からくり仕掛け」、「原動力」を学ぶべきである。

南泉普願は、ある日、隠峰が来るのを見て、水瓶を指して、「水瓶は知覚の対象です。水瓶の中に水が有ります。知覚の対象を動かさずに、私のために水を持って来てください」と言った。
隠峰は、水瓶を持って来て、南泉普願の目の前に向かって注いだ。
南泉普願は、話を止めた。

これは、南泉普願が水を求めたら底まで徹して海が枯れるし、隠峰が器を捧げたら水瓶の中の水たまりを傾けて水瓶から漏らす、なのである。
けれども、知覚の対象の中に水が有るし、水の中に知覚の対象が有る、学に参入するべきである。
水を動かしたのか否か？
知覚の対象を動かしたのか否か？

ある僧が、ある時、襲燈大師と呼ばれる香厳の智閑に、「『王索仙陀婆』、『王が仙陀婆を求める事』とは、どういった事なのでしょうか？」と質問した。

香厳の智閑は、「この辺(あた)りを過ぎて来なさい」と言った。

ある僧は(香厳の智閑の言葉を誤解して、居た辺りを過ぎて)来た。

香厳の智閑は、「(あなたは)鈍くて人を殺すような者である」と言った。

暫(しばら)く質問する。

香厳の智閑が奥底まで言った「この辺(あた)りを過ぎて来なさい」とは、「索仙陀婆」、「仙陀婆を求めた」のか？「奉仙陀婆」、「仙陀婆を捧げた」のか？

試しに言ってみなさい。

その時、ある僧は(香厳の智閑の言葉を誤解して、居た辺りを過ぎて)来たが、香厳の智閑が奥底まで求めた事であるのか？　奥底まで捧げた事であるのか？　本(もと)から期待していた事であるのか？

もし、本(もと)から期待していた事でなければ、「(あなたは)鈍くて人を殺すような者である」と言うべきではない。

もし、本(もと)から期待していた事であれば、「鈍くて人を殺すような者」ではない。

香厳の智閑は一生の力を尽くして奥底まで言ったが、身の命の喪失を未だ免れない。
例えば、敗れた将軍が更に武勇を語るような物なのである。
黄色と説く事や黒色と言う事、「頂上」や「眼睛」、「見る眼」は、自然に、「仙陀婆」を求める事や捧げる事に明確に詳細に成るのである。
「杖をひねる事や、害虫を払うための毛がついた棒である払子を挙げる事は、誰もが知っている！」と言える。
けれども、「膠柱調絃」、「琴柱を膠で固定してしまうと、琴の絃を調律できない」、「融通が利かない」輩には分不相応なのである。
「融通が利かない」輩は、「融通が利かない」事を知らないので、分不相応なのである。

釈迦牟尼仏は、ある日、座に上った。
文殊菩薩は、槌を打ち鳴らして、「法の王(である釈迦牟尼仏)の法を『諦観する』、『悟る』と、法の王(である釈迦牟尼仏)の法は、このようなのである」と言った。
釈迦牟尼仏は、座を下った。

明覚大師と呼ばれる雪竇重顕は、「集まっている聖者達の中で、力量が有る聖者だけが知る事ができる。

法の王(である釈迦牟尼仏)の法は、このような物ではないのである。

もし、集まっている聖者達の中に、『仙陀婆客』、『仙陀婆の達人』がいれば、文殊菩薩は必ずしも槌を打ち鳴らさなかったであろう」と言った。

そのため、雪竇重顕の言葉とは、「もし、文殊菩薩の槌の一打が、『渾身』、『全身』が完全無欠のような物であれば、文殊菩薩が槌を振り下ろしても、振り下ろさなくても、共に、完全無欠を脱ぎ落とすであろう」なのである。

もし、このようであれば、文殊菩薩の槌の一打は「仙陀婆」に成るのである。

もし、既に「達道者」、「達人」、「仙陀婆の達人」であれば、集まっている聖者達一同は「仙陀婆客」、「仙陀婆の客」、「仙陀婆を求める客」に成るのである。

このため、文殊菩薩は、「法の王(である釈迦牟尼仏)の法は、このようなのである」と言ったのである。

「一日を使う事ができ得る」とは、「索仙陀婆」、「仙陀婆を求める事」に成るのである。

「一日によって使われる」とは、「索仙陀婆」、「仙陀婆を求める事」に成るのである。

「拳」を求めたら、「拳」を捧げるべきである。
害虫を払うための毛がついた棒である払子を求めたら、払子を捧げるべきである。

けれども、千二百四十五年現在、宋の時代の中国の諸々の山にいる「長老」を自称(、詐称)する輩は、「仙陀婆」を全く夢にも未だ見た事が無いのである。

「苦々しい、苦々しい。祖師の仏道が廃れている」なのである。
(五十祖の如浄は、「祖師の仏道が廃れ」、「苦々しい、苦々しい」と言った。)

労苦して学ぶ事を怠る事なかれ。
正に仏祖の命を嗣ぐべきである。

例えば、「仏とは、どういった者であるのか？」と言うような者に、「即心是仏」、「正しい心が仏である」と言うが、
その主旨は、どうであろうか？　これは「仙陀婆」ではないか？　「即心是仏」、「正しい心が仏である」と言う者は誰であると言うのか？　と明確に詳細に参入して究めるべきである。

「仙陀婆」が「築著磕著」、「突き当たり、ぶつかり当たる」物である事を誰が知っているであろうか？

正法眼蔵　王索仙陀婆

その時、千二百四十五年、越州の大仏寺にいて僧達に示した。

出家

次のように、禅苑清規には記されている。

「過去、現在、未来の諸仏は皆、出家して仏道を成就した」と言われている。

(初祖から二十八祖までの)西のインドの二十八人の祖師達と(二十八祖から三十三祖までの)中国の六人の祖師達は、釈迦牟尼仏の心の印を伝えているが、尽く出家者である。

考えると、出家者の戒律を厳しく清浄に守って、能く三界の模範と成っている。

そのため、禅の学に参入して仏道を問うて探求するには、戒律を守る事を優先する。

過ちを離れて過ちを予防しなければ、仏祖に成れない！

出家者の戒律を受ける法では、「三衣」、「出家者の三種類の法衣」と器といった、新しい清浄な衣や物を準備する。

もし新しい衣が無いようであれば、(古い衣を)洗って清浄にする。

出家者の戒律を受ける場所に入って、出家者の戒律を受ける時に、衣と器を借りるのは駄目である。

(出家者の戒律を受ける時は、)一心に専念して注意して慎んで「異縁」、「意外な雑念に襲われる事」なかれ。

仏の姿を象って(模倣して)、仏の戒律を備えて、仏が「受用する事」、「受け入れてくれる事」を得る。これは一大事である！

「軽心」、「軽い気持ち」では駄目である！

もし衣と器を借りてしまったら、出家者の戒律を受ける場所に入って、出家者の戒律を受けても、戒律を受けた事には成らない！

もし出家者の戒律をかつて受けた事が無ければ、一生、出家者の戒律が無い人に成ってしまう。

(出家者の戒律を受けていない僧は、)濫(みだ)りに「空門(くうもん)」、「空(くう)の門」、「仏教」に混じって、虚しく信者からの布施を受ける事に成ってしまう。

初心者は、仏道に入った時は仏法と戒律を暗記できていないため、師匠が言わなければ、このような(出家者の戒律を受けていない)状態に陥(おちい)ってしまうかもしれない。

(そのため、)今、ここで、苦言を呈する。あえて望むと、心に銘じて忘れないべきである。

既に「声聞戒」を受けているのであれば、「菩薩戒」を受けるべきである。
出家者の戒律を受ける事は、仏法に入る最初の一歩なのである。

明らかに、知るべきである。

諸々の仏祖が仏道を成就できたのは、唯一、出家して出家者の戒律を受けた事による物なのである。

諸々の仏祖の命とは、出家して出家者の戒律を受ける事だけなのである。

未だかつて出家した事が無い者は、仏祖ではないのである。

「仏祖を見る」とは、出家して出家者の戒律を受ける事なのである。

(初祖の)摩訶迦葉は、釈迦牟尼仏に従って、出家を志して求めて、諸々の情が有る者を仏土へ渡す事を願った。

釈迦牟尼仏が「出家者よ、来なさい」と言うと、摩訶迦葉の髭(ひげ)と髪が自然に抜け落ち、(いつの間にか)摩訶迦葉の体は法衣に覆われていた。

これが、仏を学んで、諸々の情が有る者を解脱させる時は、皆、出家して出家者の戒律を受ける優れた行跡なのである。

次のように、「大般若波羅蜜多経」の第三に記されている。

次のように、釈迦牟尼仏は言った。

次のような事を、「菩薩摩訶薩」、「無上普遍正覚を求める大いなる修行者」は、思考するかもしれない。

私は、いつか、国王の位を捨てて、出家した日に無上普遍正覚を成就しよう。

また、この出家した日に「妙なる法輪を転じよう」、「妙なる法を説こう」。

無数の情の有る者を、「『塵(ちり)』や『垢(あか)』」、「汚れ」、「煩悩」から遠ざけさせて離れさせて、菩薩の「浄法眼」、「法眼」を生じさせよう。

また、無数の情の有る者に、諸々の「漏」、「煩悩」を永遠に無くし尽くさせて、心と智慧を解脱させよう。

また、無数の情の有る者を、無上普遍正覚に不退転にさせよう。

このような「菩薩摩訶薩」、「無上普遍正覚を求める大いなる修行者」が、このような事を成就したいと欲するならば、「般若波羅蜜」、「知の到達」を学ぶべきである。

無上普遍正覚は、出家して出家者の戒律を受けた時に満足に成就できるのである。

出家した日でなければ、無上普遍正覚を満足に成就できない。

(出家しなければ、無上普遍正覚を満足に成就できない。)

そのため、出家した日をひねって来て、無上普遍正覚を成就する日を形成して現している。

無上普遍正覚を成就する日をひねって出すのは、出家した日なのである。

出家が「翻筋斗（もんどり）を打（う）つ事」、「空中で一回転する事」が、「妙なる法輪を転じる事」、「妙なる法を説く事」なのである。

出家は、無数の情の有る者を、無上普遍正覚に不退転にさせるのである。

知るべきである。

「自利」、「自己の修行による利益を自己が受け取る事」と「利他」、「利益を他者にもたらす事」を満足に成就できるし、無上普遍正覚に不退転にさせる事ができるのは、出家と出家者の戒律を受ける事なのである。

無上普遍正覚の成就は、逆に、出家した日を無上普遍正覚と成すのである。

正に、知るべきである。

出家した日は、一つである、異なる、を超越しているのである。

出家した日のうちに、三阿僧祇劫の修行をして証するのである。

出家した日のうちに、無限の劫の海を行って、「妙なる法輪を転じる」、「妙なる法を説く」のである。

出家した日は、「謂如食頃」、「食事をするくらいの短い時間」ではないし、六十小劫ではないし、過去、現在、未来を超越しているし、「頂上」を脱ぎ落としている。

出家した日は、出家した日を超越しているのである。

けれども、鳥かごを打破すれば、出家した日は出家した日なのであるし、仏道を成就した日は仏道を成就した日なのである。

次のように、「大智度論」の第十三には記されている。

釈迦牟尼仏が祇園精舎にいた時、酔った、あるバラモンが、釈迦牟尼仏の所に来て、出家者に成りたいと欲（ほっ）した。

釈迦牟尼仏は、諸々の出家者達に命じて、あるバラモンの頭の髭と髪を剃って法衣を着させた。

あるバラモンは、酒の酔いから醒めると、自身が突然に出家者に変わっているのを見て驚き、逃げて走り去った。

諸々の出家者達は、釈迦牟尼仏に、「なぜ、酔った、あのバラモンの言葉を聞き入れて許して出家者にして、しかも、今、帰らせたのでしょうか？」と質問した。

釈迦牟尼仏は、「あのバラモンは、無数の劫の中で出家する心が無かったが、今、酔ったために、暫く、微かに『発心した』、『悟りを求める事を思い立って心した』のである。

この縁によって、後に、出家するはずである。

このように様々な因縁が有るのである。

出家者が戒律を破ってしまう事は、在家者が戒律を保持して守っている事よりも優れているのである。

在家者が戒律を保持して守っても解脱できないのである」と言った。

釈迦牟尼仏の言葉の主旨を明らかに知る事ができる。

釈迦牟尼仏の化の導きの根本は、出家なのである。

未だ出家しない事は、仏法ではないのである。

如来、釈迦牟尼仏が存命中、諸々の外道は、自らの邪道を捨てて仏法に帰依する時、必ず、まず、出家を請い願ったのである。

釈迦牟尼仏が「出家者よ、来なさい」という言葉を授けたり、釈迦牟尼仏が諸々の出家者達に命じて頭の髭(ひげ)と髪を剃(そ)って出家させて出家者の戒律を受けさせたりすると、たちまち、出家して出家者の戒律を受ける法が十分に備わった事に成ったのである。

知るべきである。

仏の化の導きを身心に被(こうむ)らせた時は、頭の髭(ひげ)と髪は自然に抜け落ち、（いつの間にか）体が法衣に覆われている物なのである。

もし諸仏が未だ許していない時には、頭の髭(ひげ)と髪は剃(そ)り除かれないのであるし、体が法衣に覆われないのであるし、仏の戒律を受ける事ができないのである。

そのため、出家して出家者の戒律を受ける事は、諸仏、如来が親しく「授記した」、「仏に成れるという予言を授けた」事に成るのである。

「法華経」の「如来寿量品」で、釈迦牟尼仏は、「諸々の善い男子よ。如来（である私、釈迦牟尼仏）は、諸々の全ての生者が矮小な法を願って徳が薄く『垢(あか)』、『汚れ』、『煩悩』が重いのを見て、この人々の為(ため)に『私（、釈迦牟尼仏）は若くして出家して無上普遍正覚を得た』と説いたのである。けれども、実は、私（、釈迦牟尼仏）は、仏に成ってから今まで、このように、とても長い時間を生きているのである。方便で、全ての生者を教化して仏道に入らせるために、このように説いたのである」と言った。

「実は、私(、釈迦牟尼仏)は、仏に成ってから今まで、このように、とても長い時間を生きている」のは、「私(、釈迦牟尼仏)は若くして出家した」事による物なのである。

「無上普遍正覚を得た」のは、「私(、釈迦牟尼仏)は若くして出家した」事による物なのである。

「私(、釈迦牟尼仏)は若くして出家した」事を挙げて、ひねると、「矮小な法を願って徳が薄く『垢(あか)』、『汚れ』、『煩悩』が重い全ての生者」と共に「私(、釈迦牟尼仏)は若くして出家した」事に成るのである。

「私(、釈迦牟尼仏)は若くして出家した」という説法を見聞きして学に参入すると、釈迦牟尼仏の無上普遍正覚を見る事に成るのである。

「矮小な法を願う全ての生者」を救って仏土へ渡す時、「この人々の為(ため)に『私(、釈迦牟尼仏)は若くして出家して無上普遍正覚を得た』と説く」のである。

最終的に質問しよう。

出家の功徳は、どのくらいに成るのであろうか?

質問者に向かって言おう。

「頂上」くらいに成るのである。

正法眼蔵　出家

その時、千二百四十六年、越宇の永平寺にいて僧達に示した。

八大人覚

諸仏は、大いなる人である。
大いなる人が覚知している物なので、「八大人覚」と言う。
「八大人覚」を覚知している事を「涅槃」、「寂滅」、「寂静」の源とする。
「八大人覚」は、釈迦牟尼仏が、(肉体が)死ぬ夜に、最後に説いた物である。

(一)少欲

未だ得ていない、「五欲」の対象である「色声香味触」の物の中で、広く追い求めない事を「少欲」と名づける。

釈迦牟尼仏は、「あなた達、出家者は、知るべきである。
欲が多い人は、多くの利益を求めてしまうため、苦悩もまた多く成ってしまう。
欲が少ない人は、求めないため、無欲なので、欲が多い人のような憂(うれ)いが無い。
少欲だけでも、習って修得するべきである。
まして、少欲は諸々の功徳を生じる事が可能である！

欲が少ない人は、媚び、へつらって、他人の同意を求める事が無いし、『眼耳鼻舌身意』という『六根』に引きずられない。
少欲を行っている者は、心が落ち着いているし、憂い恐れるものが無いし、『事に触れても』、『何か有っても』余裕が有るし、常に不足が無い。
少欲である者には、『涅槃』、『寂滅』、『寂静』が有る。
このようである事を『少欲』と名づける」と言った。

(二)知足

既に得ている物の中で、限度を守って受け取る事を「知足」、「満足する事を知っている」と言う。

釈迦牟尼仏は、「あなた達、出家者が、もし諸々の苦悩を解脱したいのであれば、『知足』、『満足する事を知っている事』を観察するべきである。
『満足する事を知っている事』という物は、富むし、安楽であるし、安穏である物なのである。
満足する事を知っている人は、たとえ地の上で横たわっている人でも、安楽なのである。
満足する事を知らない人は、たとえ極楽にいても、気に入らず不満なのである。
満足する事を知らない人は、たとえ富んでいても、貧しいのである。
満足する事を知っている人は、たとえ貧しくても、富んでいるのである。

満足する事を知らない人は、常に『色声香味触』への『五欲』に引きずられて、満足する事を知っている人に憐れまれる。
このようである事を『知足』と名づける」と言った。

(三)楽寂静

諸々の騒乱を離れて、静かな場所に独りでいる事を「楽寂静」、「寂静を楽しむ」と名づける。

釈迦牟尼仏は、「あなた達、出家者が、寂静な『無為な』、『自然な』安楽を求めるならば、騒乱を離れて世俗を離れて静かに独りでいるべきである。
静かな場所にいる人は、帝釈天といった諸々の天人が共に敬い重んじる者なのである。
このため、自己の諸々のものや他者の諸々のものを捨てて、静かな場所に独りでいて、苦しみを根本から滅(めっ)して断とうと思うべきである。
多くの人と一緒にいる事を楽しむ者は、多くの苦悩を受ける。
例えば、大きな樹でも、多くの鳥が集まれば、枯れたり折れたりする心配が有るような物なのである。
世間に縛られると、多くの苦悩に沈没する事に成る。
例えば、老いた象(ゾウ)が泥に溺れてしまい自力で脱出できなく成ってしまうような物なのである。
このようである事を『遠離』、『執着を遠く離れる』と名づける」と言った。

(四)勤精進

諸々の善い法の修得に絶え間無く勤める事を「精進」と言う。

純粋で念入りで、乱雑ではないし粗雑ではないし、進んで、不退転である。

釈迦牟尼仏は、「あなた達、出家者が、もし精進に勤めれば、難しい事は無く成る。

このため、あなた達は、精進に勤めるべきである。

例えば、少量の水でも、常に流れれば、石を穿（うが）つ事ができるような物なのである。

もし修行者の心が何度も怠（おこた）って精進を止めれば、例えば、火をつけようとしても、未だ熱く成っていないのに止めれば、火を得ようとしても得られないような物なのである。

このようである事を『精進』と名づける」と言った。

(五)不忘念

または、「守正念」と名づける。

正しい法を守る事を念頭に置いて忘れない、失（な）くさない事を「正念」と名づける。

または、「不忘念」と名づける。

釈迦牟尼仏は、「あなた達、出家者が、善知識を求め、善の加護の助けを求めるならば、『不忘念』、『正しい法を守る事を念頭に置いて忘れない』に越した事は無い。
もし『正しい法を守る事を念頭に置いて忘れない』ならば、諸々の煩悩という賊は(、あなたの心に)侵入できない。
このため、あなた達は、常に、(正しい法を守る事を)念頭に置いて心に存在させるべきである。
もし(正しい法を守る事を)念頭から失くしてしまえば、諸々の功徳を失くしてしまう事に成るであろう。
もし『正しい法を守る事を念頭に置いて忘れない』力が強固であれば、『色声香味触』への『五欲』という賊たちの中に入っても、害されない。
例えば、鎧を着て陣地に入れば、恐れる物が無いような物なのである。
このようである事を『不忘念』と名づける」と言った。

(六)修禅定

正しい法に住んで、(思考を)乱さない事を「禅定」と言う。
釈迦牟尼仏は、「あなた達、出家者が、もし心を正せば、心は『定』に存在できる。
心が『定』に存在すれば、この世の生じたり滅んだりする物の相を知る事ができる。

このため、あなた達は、常に精進して、諸々の『定』を習って修得するべきである。

もし『定』を得れば、心が『散漫に成らない』、『乱れない』。

例えば、水を大切にする人々が河の堤防を善く保守管理するような物なのである。

修行者もまた同様である。

修行者は、知という水の為に、善く『禅定』を修行して、(知という水を)漏らして失くさないようにする。

このようである事を『定』と名づける」と言った。

(七)修智慧

見聞きして思考して修行して証する事を「智慧」とする。

釈迦牟尼仏は、「あなた達、出家者は、もし智慧が有れば、貪欲に執着しないであろう。

常に自己を反省して考察して、智慧を失くさないようにしなさい。

そうすれば、仏法の中で解脱を会得する事ができる。

そうしなければ、仏道者、出家者でもないし、在家信者でもない。

(『俗物』以外に)名づけようが無い者である。

実に、智慧は、老病死という海を渡る事ができる堅牢な船なのである。

また、智慧は、『無明』という暗黒における、大いなる明かりなのであるし、一切の全ての病人への良薬なのであるし、煩悩という樹を切る鋭利な斧なのである。

このため、あなた達は、見聞きして思考して修行する智慧によって、自己を『増益』、『増上』、『成長』させるべきである。

もし人が智慧という光に照らされた者であれば、肉眼で見ていても、明らかな『見る眼』で見る人に成るのである。

このようである事を『智慧』と名づける」と言った。

(八)不戯論

(悟りを)証して、分別(ぶんべつ)(の議論)を離れる事を「不戯論」と名づける。

実の相を究め尽くす事が「不戯論」なのである。

釈迦牟尼仏は、「あなた達、出家者よ。

もし様々な議論に戯(たわむ)れたら、心が乱れてしまう。

そうすると、出家しても、解脱できない。

このため、出家者は、心を乱して議論に戯(たわむ)れる事を急いで離れて捨てるべきである。

あなた達が、もし寂滅という安楽を得たいのであれば、議論に戯(たわむ)れるという病気を善く滅(めっ)して無くすべきである。

このようである事を『不戯論』と名づける」と言った。

これらが、「八大人覚」なのである。

「八大人覚」の一つ一つ、各々が「八大人覚」を備えているので、六十四、有る。

(八、掛ける、八は、六十四である。)

「八大人覚」は、拡大すれば無限に成るが、簡略すると六十四に成るのである。

「八大人覚」は、釈迦牟尼仏が最後に説いた物である。

「八大人覚」は、大乗の教えである。

「八大人覚」は、釈迦牟尼仏の、二月十五日の夜中の、究極の教えである。

釈迦牟尼仏は、「八大人覚」を説いた後、さらに法を説かず、終に(肉体が)死んだ。

釈迦牟尼仏は、「あなた達、出家者よ。

常に一心に勤めて『出(離)道』、『迷いを離れるための真理』を求めなさい。

この世の一切の動くものも動かないものも皆、『敗壊』、『壊敗』、『壊れやぶれる』不安の相なのである。

あなた達、暫く、話を止めなさい。

話すなかれ。

時が過ぎようとしている。

私（、釈迦牟尼仏）は、（肉体が）死のうとしている。
『八大人覚』が、私（、釈迦牟尼仏）の最後の教えである」と言った。

このため、如来、釈迦牟尼仏の弟子は、必ず、「八大人覚」を習って学ぶのである。
「八大人覚」を習って修得せず、「八大人覚」を知らない者は、釈迦牟尼仏の弟子ではない。

「八大人覚」は、如来、釈迦牟尼仏の「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼を持ち寂滅した妙なる心を持つ事」なのである。

それなのに、今、「八大人覚」を知らない者が多く、見聞きした事が有る者が少ないのは、「魔」、「仏敵」の、かく乱によって知らないのである。
また、善の種を植える前世の善行が少ない者は、「八大人覚」を見聞きできない。
（悟る前までの今世の人生を「前世」と言う場合が有る。）
昔、正法と像法の時代の間は、釈迦牟尼仏の弟子は皆、「八大人覚」を知っていたし、習って修得していたし、学に参入していた。
今（、末法の時代で）は、千人の出家者の中に「八大人覚」を知っている者は一人もいない。
憐れむべきである。
末法の世による仏道や人心などの衰退は、例える物が無い。

如来、釈迦牟尼仏の正しい仏法は今、大千世界に広まっている。
仏法が未だ滅んでいない時に、急いで習って学ぶべきなのである。怠る事なかれ。

仏法に出会うのは、無限の劫でも難しいのである。
また、人の身を得るのも、難しいのである。
人の身を受けるならば、「三洲」の人の身が良い。
「三洲」の中で、「南瞻部洲」、「南閻浮提」、「この世」の人の身を受ける事が優れている。
なぜなら、仏法を見聞きできて、出家して「道」、「真理」を会得できるからである。

如来、釈迦牟尼仏の(肉体の)死より前に、死んだ仲間は「八大人覚」を見聞きできなかったし、習う事ができなかった。
今、私達が「八大人覚」を見聞きし、習って学べるのは、善の種を植える前世の善行の力による物なのである。

今、「八大人覚」を習って学んで、生から生へ「増上」、「成長」して、必ず無上普遍正覚に到達して、釈迦牟尼仏と同じ様に、全ての生者のために「八大人覚」を説こう。

正法眼蔵　八大人覚

千二百五十三年、永平寺で書いた。

三時業

十九祖の鳩摩羅多がインドの中央に至った時、後の二十祖の闍夜多という名前の修行者がいた。
後の二十祖の闍夜多は、十九祖の鳩摩羅多に、「私の家の父と母は、昔から、『仏、法、僧』という『三宝』を信じています。
しかし、昔から、病気にまとわりつかれ、営む事は皆、思い通りに成りません。
それなのに、隣の家の人は、長い間、悪業を犯しているが、体は常に元気で健康で、何をしても思い通りに成っています。
隣の家の人は、なぜ幸福なのでしょうか？
私達には、どんな罪が有るのでしょうか？」と質問した。
鳩摩羅多は、「疑う事は無い！
善悪の報いが訪れる時期には『三時』、『この生の時、第二の生の時、第三の生以降の時』という三つの時期が有る。
大体の人は、思いやり深い人が早死にし、乱暴者が長生きし、悪逆な人が幸運であり、正義の人が不運であるのを見て、因果を否定し信じない誤りを犯し、罪も報いも無いと誤って思ってしまう。
影響は人の後を完全についていく事を(大衆は)知らない。
また、(罪と罪の報いは)百、千、万の無数の劫を経ても磨滅する事は無い(のを大衆は知らない)」と言った。
闍夜多は、この時、この言葉を聞いて、すぐに疑いが解けた。

十九祖の鳩摩羅多は、如来、釈迦牟尼仏から十九代目の、仏法を付属された祖師である。

如来、釈迦牟尼仏は、目の前で、十九祖の鳩摩羅多の名前を(予言して)記していた。

鳩摩羅多は、釈迦牟尼仏、一人の仏法を明らめて正しく伝えているだけではなく、過去、現在、未来の諸仏の仏法も明らめて理解している。

闍夜多は、この質問をした後、十九祖の鳩摩羅多に従って、如来、釈迦牟尼仏の正しい法を習って修得し、終に二十祖と成った。

釈迦牟尼仏は、遥かな昔、「二十祖は闍夜多である」と(予言して)記していた。

仏法を判断するには、このように、祖師が判断したように、習って学ぶべきであるのが、最もなのである。

今の世で、因果を知らないし、善業や悪業の報いを明らめていないし、過去、現在、未来を知らないし、善悪をわきまえていない、邪悪な見解を抱いている輩の仲間に成るべきではない。

十九祖の鳩摩羅多は「善悪の報いが訪れる時期には『三時』、『この生の時、第二の生の時、第三の生以降の時』という三つの時期が有る」と言った。

(一)順現報受(現在の生で報いを受ける)
(二)順次生受(次の生で報いを受ける)
(三)順後次受(第三の生以降で報いを受ける)

これらを「三時」と言う。

仏祖の仏道を習って修得するには、最初に、「三時」という善業や悪業の報いの理を習って明らめるのである。
そうでなければ、多くの人は誤って邪悪な見解に堕ちてしまうのであるし、邪悪な見解に堕ちるだけではなく、地獄などの「三悪趣」、「三悪道」に堕ちて長い時、苦しみを受ける事に成ってしまうのである。
「続善根しない」、「善の種となる善行を続けない」間は、多くの功徳を失ってしまうし、「菩提」、「覚」への道に長い間、障害が有ってしまう。
惜しくはないか？　はい！　惜しい！

「三時」は、善業にも有るし、悪業にも有るのである。

(一)順現報受業(現在の生で報いを受ける業)

「善業や悪業をこの生で作ったり成長させたりして、この生で『異熟果』、『結果』、『報い』を受ける事を『順現報受業』(、『現在の生で報いを受ける業』)と名づける」。

人が善であれ悪であれ業(ごう)をこの生で作って、この生で業(ごう)の報いを受ける事を「順現報受業」(、「現在の生で報いを受ける業」)と言う。

次の話は、悪い業(ごう)を作って、この生で悪い報いを受けた例である。

昔、ある木こりが、山に入って降雪に遭遇して迷って道を見失ってしまった。

日暮れに成るし、雪は深いし、寒さで凍えるし、木こりは、もうすぐ死にそうであった。

木こりが、前に進んで、ある暗い木々が密集した林の中に入ると、一頭の羆(ヒグマ)に出会った。

羆(ヒグマ)は先に林の中にいたようである。

羆(ヒグマ)は、体の色が青みがかった黒であり、両眼は二つの燃える火のようであった。

木こりは、恐怖で死にそうに成った。

この羆(ヒグマ)は、実は、ある菩薩が羆(ヒグマ)の身を受けて「この世」に出現している者であった。

羆（ヒグマ）は、木こりが恐怖しているのを見て、すぐに、慰めて、さとして、「あなた。怖がる事はありません。父と母が子に他意が有っても、私は、あなたに悪意はありません」と言った。

羆（ヒグマ）は、前に進んで、木こりを捧げるように持って、穴の中に入り、木こりの身を温（あたた）め、木こりを蘇生させて息を吹き返させて、様々な食べられる根や果実を取って来て、木こりに勧（すす）めて食べさせた。

羆（ヒグマ）は、木こりが凍死する事を恐れて、木こりを抱いて寝てあげた。

このように、羆（ヒグマ）が木こりを大事に世話して養って、六日間が経過した。

七日目に成って、天候が晴れて、道が見えるように成った。

羆（ヒグマ）は、木こりが帰りたいと思っているのを知って、甘い果実を取って来て木こりに十分に食べさせて、木こりを林の外まで送ってあげて、木こりに礼儀正しく別れを告げた。

木こりは、ひざまずいて感謝して、「何によって恩に報いれば良いのでしょうか？」と言った。

羆（ヒグマ）は、「私は別に報いは求めません。ただ、何日間か私が、あなたの身を護ったように、願わくば、あなたも、私の命を同様に護ってください」と言った。

木こりは、恭（うやうや）しく引き受けて、下山した。

木こりは、二人の猟師に出会った。

猟師たちは、木こりに、「山中で何か獣を見なかったか？」と質問した。

木こりは、「羆（ヒグマ）しか見なかった」と答えた。

猟師たちは、「羆（ヒグマ）を見た場所を教えてくれませんか？」と頼んだ。

木こりは、「三分の二の分け前をくれるなら教えよう」と答えた。

猟師たちは、木こりへの分け前を認めた。

木こりは、猟師たちに同行して、羆を殺害し、羆の肉を三等分にした。
木こりが、両手で羆の肉を受け取ろうとすると、悪業の力によって、宝石の首飾りの紐が切れたように、蓮の茎と蓮根が切れるように、両方の腕が抜け落ちた。
猟師たちは、驚いて、(木こりに腕が抜け落ちた)理由を質問した。
木こりは、罪を恥じて、詳細を述べた。
猟師たちは、木こりを責めて、「あなたは、羆から大きな恩を受けたのに、なぜ、こんな悪逆な行いをできたのか？　あなたの身が崩れてしまわないのが不思議なくらいだ！」と言った。
猟師たちは、羆の肉を寺に捧げた。
寺の上座の僧は、この時、「妙願智」を得たので、すぐに「定」に入って、「この肉は、何者の肉であるのか？」と観ると、「利益と安楽を一切の全ての生者に与える、大いなる菩薩の肉である」と知った。
上座の僧は、「定」を出ると、知った事を僧達に言った。
僧達は、聞いて驚き、羆をほめたたえて、香木を薪として集めて、羆の肉を燃やして、燃え残った羆の骨を収めた塔を建てて礼拝して捧げものを捧げた。

このような悪業は、次の生を待つか、この生から次の生へ渡って、悪業の結果の報いを受ける。

このようであるのを「悪業の順現報受業」(、「悪業のうち現在の生で報いを受ける業」)と名づける。

恩を受けたら恩に報いる事を志すべきである。

他者に恩を与えても、報いを求める事なかれ。

今でも、恩が有る人に、恩を仇で返して危害を加えようとすれば、その悪業の報いを必ず受けるのである。

全ての生者よ、永遠に、この話の木こりのような心を持つ事なかれ。

木こりは、林の外で別れを告げる時には、どうやって恩に報いて感謝するべきかと言っていたが、山の麓で猟師たちに会った時には、三分の二の肉を貪ろうとした。

貪欲に魅かれて、大きな恩が有る者に危害を加えたのである。

在家者も出家者も、永遠に、このような恩知らずな心を持つ事なかれ。

悪業の力が切る時、刀剣が切るよりも速く、両手を切る。

次の話は、この生で善い業を作って、「順現報受に」、(「現在の生で」、)善い報いを得た例である。

昔、健陀羅(ガンダーラ)という国の迦膩色迦(カニシカ)(一世)という王の下に、ある、男性器に異常が有る男性がいた。

ある男性は、常に、城内の事を監督していた。

ある男性は、しばらく城外に出た時、五百頭くらいの牛の群れが城内に入れられるのを見た。

ある男性は、牛を追い込んでいる者に、「この牛たちをどうするのですか？」と質問した。

牛を追い込んでいる者は、「この牛たちの男性器を去勢します」と答えた。

ある男性は、この時、「私は前世の悪業によって男性器に異常が有る男性の身を受けてしまったのだろう。今、私の財産によって、この牛たちを去勢という災難から救ってあげよう(。今世で善業をしよう)」と自ら思考した。

ある男性は、償(つぐな)って、牛たちを悉(ことごと)く去勢から救ってあげた。

善業の力によって、ある男性は、男性器が正常な身に回復した。

ある男性は、深い喜びが生じ、すぐに城内に帰還して、王宮の門のそばに行って王への使者を頼んで、王宮に入って王に会いたいと頼んだ。

王は、ある男性を王宮に呼んで入れて、不思議に思い、会いたく成った理由を質問した。

ある男性は、先ほどの事を詳細に話した。

王は、聞いて驚き、喜び、ある男性に、珍しい財宝を手厚く与え、高い官位も与え、城外の事も監督させる事にした。

このような善業は、次の生を待つか、この生から次の生へ渡って、善業の結果の報いを受ける。

明らかに、知る事ができる。

牛といった家畜の身は(世俗的には)惜しむべきではなくても、救う人は善い結果を受ける。

まして、「父と母、師、年上の人々」という「恩田」を敬い、「仏、法、僧」という「(功)徳田」、「三宝」を敬い、諸々の善を修行する人は善い結果を受ける!

このようであるのを「善の順現報受業」(、「善の、現在の生で報いを受ける業」)と名づける。

善によって、また、悪によって、このような物事は多いが、挙げ尽くすには時間がいくつ有っても足りない。

(二)順次生受業(次の生で報いを受ける業)

「善業や悪業をこの生で作ったり成長させたりして、(次の生で、)第二の生で『異熟果』、『結果』、『報い』を受ける事を『順次生受業』(、『次の生で報いを受ける業』)と名づける」。

人が、この生で「五無間業」、「無間地獄に落ちる最も重い罪である五逆罪」を犯すと、必ず、次の生で無間地獄に落ちるのである。

「順次生受」の「順次生」とは、この生の、次の生である。

他の罪によって、次の生で地獄に落ちる場合も有る。

また、第三の生以降で引きずるべきであれば、次の生では地獄に落ちないが、第三の生以降で地獄に落ちる場合も有る。

「五無間業」、「無間地獄に落ちる最も重い罪である五逆罪」は、必ず、次の生で地獄に落ちるのである。

「順次生受」の「順次生」、「次の生」を「第二の生」とも言う。

「五無間業」、「無間地獄に落ちる最も重い罪である五逆罪」とは、

(一)父を殺す罪
(二)母を殺す罪
(三)阿羅漢を殺す罪
(四)仏の身から出血させる罪
(五)法輪と僧を破る罪。仏の法を破って僧団を破壊する罪。
である。

これらを「五無間業」、「五逆罪」と名づける。

父を殺す罪、母を殺す罪、阿羅漢を殺す罪は、殺人罪である。

仏の身から出血させる罪は、殺人未遂である。

如来、仏は、どのようにしても人に殺されないようにしてくれるので、仏の身から出血させるのを「五逆罪」とするのである。

早死にしない者は、(仏、)最後身の菩薩、兜率天の一生補処の菩薩、北倶盧洲の者、樹提伽のような者、「仏医」、「釈迦牟尼仏の医者」の耆婆のような者である。

仏の法を破って僧団を破壊する罪は、「虚誑語」、「人をたぶらかすための虚偽の言葉」を話す罪である。

「五逆罪」を犯す事は、必ず、「順次生受業」(、「次の生で報いを受ける業」)に成り、地獄に落ちるのである。

提婆達多(デーヴァダッタ)は、「五無間業」、「五逆罪」のうち三つを犯した。

提婆達多(デーヴァダッタ)は、蓮華色(ウッパラヴァンナー)比丘尼を殺した。

蓮華色(ウッパラヴァンナー)比丘尼は、大いなる阿羅漢であった。

蓮華色(ウッパラヴァンナー)比丘尼を殺した罪を「阿羅漢を殺す罪」とする。

提婆達多(デーヴァダッタ)は、大きな石を投げて、釈迦牟尼仏を殺そうとした。

その時、「山神」という霊が大きな石を遮(さえぎ)って砕いた。

大きな石は、砕けて飛び散って、如来、釈迦牟尼仏の足の指に当たり、足の指は破れて出血した。

これは、仏の身から出血させる罪である。

提婆達多（デーヴァダッタ）は、初心者の愚鈍な出家者、五百人をたぶらかして伽耶山の山頂へ行（い）って別の「羯磨」、「作法」(の異端)を作った。

これは、仏の法を破って僧団を破壊する罪である。

提婆達多（デーヴァダッタ）は、これらの「五逆罪」のうちの三つの罪によって、「阿鼻地獄」、「無間地獄」に落ちた。

今も、提婆達多（デーヴァダッタ）は、「無間の」、「絶え間無い」苦しみを受けている。

過去七仏のうち「拘留孫仏、拘那含牟尼仏、迦葉仏、釈迦牟尼仏」という「四仏」の提婆達多（デーヴァダッタ）に相当する裏切者と提婆達多（デーヴァダッタ）は、今もなお「阿鼻地獄」、「無間地獄」にいる。

倶伽離比丘は、舎利弗（シャーリプトラ）と目犍連（モッガラーナ）が無実であるのに、事実無根の、出家者なのに女性と性交する波羅夷罪を犯したという悪口を言いふらした。

釈迦牟尼仏が倶伽離比丘を諌（いさ）めたし、梵天も来て倶伽離比丘を制止したが、倶伽離比丘は、舎利弗（シャーリプトラ）と目犍連（モッガラーナ）の悪口を言いふらしたので、(次の生で、)地獄に落ちた。

四禅比丘は、命が終わる時に臨んで、仏の悪口を言ったので、「阿鼻地獄」、「無間地獄」に落ちた。

このようであるのを「順次生受業」(、「次の生で報いを受ける業」)と名づける。

(三)順後次受業(第三の生以降で報いを受ける業)

「善業や悪業をこの生で作ったり成長させたりして、第三の生で、または、第三の生以降で、百、千の無数の劫が過ぎても、『異熟果』、『結果』、『報い』を受け続ける事を『順後次受業』(、『第三の生以降で報いを受ける業』)と名づける」。

人が、この生で、善業であれ悪業であれ、業を作り終わっていても、第三の生で、または、第四の生で、または、第四の生以降で百、千の生の間でも、善業や悪業の報いを受けて感じるのを「順後次受業」(、「第三の生以降で報いを受ける業」)と名づける。

菩薩による仏に成るまでの「三阿僧祇劫」の修行の功徳の多くは、「順後次受業」(、「第三の生以降で報いを受ける業」)なのである。

(仏に成るには「三阿僧祇劫」と「百大劫」という長い年月がかかると言う場合が有る。)

この道理を知らない修行者の多くは、疑いを抱いてしまうのである。

二十祖の闍夜多が在家者の修行者であった時のように。

二十祖の闍夜多は、もし十九祖の鳩摩羅多に出会わなかったら、疑いを解き難かったであろう。

修行者は、思考が善(よ)ければ悪(い心)を滅(めっ)して無くせるし、悪い事を思考してしまえば善(い心)を速(すみ)やかに滅(めっ)して失(な)くしてしまうのである。

首都が「室羅筏(シュラーヴァスティー)」、「室羅伐(シュラーヴァスティー)」、「舎衛城(シュラーヴァスティー)」であるコーサラ国に、昔、二人の人がいた。

二人のうち、一人は常に善行を修行し、もう一人は常に悪行をなしていた。

善行を修行していた者は、「一身中に」、「一生で」、常に善行を修行し、未だかつて悪行をなさなかった。

悪行をなしていた者は、「一身中に」、「一生で」、常に悪行をなし、未だかつて善行を修行しなかった。

善行を修行していた者は、命が終わる時に臨んで、「順後次受の悪業の力によって」、「前々世の悪業の力によって」、地獄の「中有」が目の前に現れた。

「私は、『一身中に』、『一生で』、常に善行を修行し、未だかつて悪行をなさなかった。私は、天に生まれるべきである。どんな縁(えん)が有って、地獄の『中有』が目の前に現れたのか?」と思考したが、終(つい)に、「私には、きっと、『順後次受の悪業』、『前々世に悪業』が有って、今、成熟して(結果の報いと成って)、地獄の『中有』が目の前に現れたのであろう」と思考して言った。

「一身で」、「一生で」、今まで、善行を修行していた事を自ら思い出して、深い喜びが生じた。
優れた善い思考が目の前に現れたので、地獄の「中有」が掻き消されて、たちまち天の「中有」が目の前に現れた。
「中有」を経由してから命が終わり、天に生まれた。

この、常に善行を修行していた人は、「『順後次受に』、『前々世に』、きっと、報いを受けるべきである悪業が私の身には有ったのであろう」と思っただけではなく、更に進んで「『一身での』、『一生での』、善行の修行の報いもまた、きっと、後で受けるはずである」と思った。
「深い喜びが生じた」とは、この思考による物なのである。
この思考と、善行を修行した思い出は真実であるので、地獄の「中有」が掻き消されて、たちまち天の「中有」が目の前に現れて、命が終わったら、天に生まれた。

もし、この人が悪人であったら、命が終わる時に臨んで、地獄の「中有」が目の前に現れたら、「私の『一身での』、『一生での』、善行の修行は功徳が無い。善悪が有るならば、どうして私が地獄の『中有』を見るであろうか？　善悪など無い！」と思ってしまうであろう。
この時、因果を否定し信じない誤りを犯してしまうであろうし、「仏、法、僧」という「三宝」の悪口を言ってしまうであろう。
もし、このようであれば、命が終わったら、地獄に落ちてしまうであろう。
このようではなかったので、天に生まれたのである。

この道理を明らめて、知るべきである。

悪行をなしていた者は、命が終わる時に臨んで、「順後次受の善業の力によって」、「前々世の善業の力によって」、天の「中有」が目の前に現れた。「私は、『一身中に』、『一生で』、常に悪行をなし、未だかつて善行を修行しなかった。私は、地獄に生まれるはずである。どんな縁が有って、天の『中有』が目の前に現れたのか？」と思考した。

終に、邪悪な見解を立てて、因果と善悪の存在を否定し信じない誤りを犯した。

邪悪な見解の力によって、すぐに天の「中有」が掻き消されて、たちまち地獄の「中有」が目の前に現れた。

「中有」を経由してから命が終わり、地獄に生まれた。

この、悪行をなしていた人は、生きれば生きるほど、常に悪行をなした。

さらに、一つも善行を修行しなかっただけではなく、命が終わる時に臨んで、天の「中有」が目の前に現れるのを見たが、「順後次受の善業の力による物である」、「前々世の善業の力による物である」と知る事ができないで、「私は、一生の間、悪行をなしていたが、天に生まれようとしている。測り知る事ができる。善悪など存在しない」といった善悪の存在を否定し信じない邪悪な見解を立てた力によって、すぐに天の「中有」が掻き消されて、たちまち地獄の「中有」が目の前に現れ、「中有」を経由してから命が終わり、地獄に落ちて生まれた。

邪悪な見解を立てた力によって、天の「中有」が掻き消されたのである。

修行者は邪悪な見解を立てる事なかれ。
どういった物が邪悪な見解であるのか？　どういった物が「正しくものを見る事」であるのか？　と形に成り尽くすまで学習するべきである。

まず、因果を否定し信じない誤りを犯してから、「仏、法、僧」という「三宝」の悪口を言い、過去、現在、未来と解脱を否定し信じない誤りを犯す物であるが、全て、邪悪な見解なのである。

正に、知るべきである。
今の生の私の身は、唯一無二なのである。
いたずらに無駄に、邪悪な見解に堕ちて、虚しく悪業の報いを感じて得てしまうのは、惜しくないか？　はい！　惜しい！

悪行をなしながら、「私は悪人ではない」と思い込もうとしたり、「悪行の報いは無い」と邪悪な思考をしたりしても、悪行の報いを感じて得る事に成るのである！

「供奉」の皓月は、長沙景岑に、「古代の高徳の僧は、『(涅槃、寂滅に入り)終われば、悪業による障害は本来は空である。(涅槃、寂滅に入る事が)未だ終わっていなければ、前世の悪業を償うべきである』と言っています。

二十四祖の獅子や二十九祖の慧可のような(殺された)人は(自然死ではないので)、どうして、前世の悪業を償う事ができ得るでしょうか?」と質問した。

長沙景岑は、「あなたは、『本来は空である』事を理解していない」と言った。

皓月は、「『本来は空である』とは、どういった事なのでしょうか?」と言った。

長沙景岑は、「『悪業による障害』が『本来は空である』」と言った。

皓月は、「『悪業による障害』とは、どういった物なのでしょうか?」と質問した。

長沙景岑は、「悪業による障害とは、本来は空である」と言った。

皓月は、無言に成った。

長沙景岑は、詩で示して、「『仮有』、『仮の存在』、『この世の物』、『肉体』は、元は、『真の有』、『真の存在』ではない。

『仮の滅』、『肉体の死』もまた、元は、『真の無』、『真の空』ではない。

『涅槃』、『寂滅』も、前世の悪業を償う事も、意義は、同一の性質の物であるし、更に、異なる物ではない」と言った。

長沙景岑の答えは、答えに成っていない。

十九祖の鳩摩羅多が二十祖の闍夜多に示した道理が無い。

知るべきである。

長沙景岑は、悪業による障害の主旨を知らないのである。

仏祖の法の子孫は、修行して仏道をわきまえるには、まず、必ず、十九祖の鳩摩羅多のように、「三時の業」を明らめて知るべきである。既に、「三時の業」を明らめて知る事は、代々の祖師達の善業なのである。怠るべきではない。

「三時の業」の他に、「不定業」が有るし、八種類の業が有る。広く、「不定業」や八種類の業の学に参入するべきである。

善業や悪業の報いの道理を未だ明らめていない輩は、妄りに人や天人の導師と自称、詐称する事なかれ。

「三時」の悪業の報いは必ず得て感じる事に成るが、懺悔する者は、罪の重さを軽くしたり、罪を無くして清浄な者に成ったりできる。

「三時」の善業は、「随喜すれば」、「善い言動を見聞きして喜び、帰依すれば」、ますます「増上」、「成長」する。

善業や悪業が軽く成ったり重く成ったりするのは、全て、人が為した業の「白黒」、「善悪」に任されている。

釈迦牟尼仏は、「たとえ百の劫を経ても、為した業は無く成らない。
因縁が巡り合わせた時に、結果である報いが返還されて自然に受ける事に成る。

あなた達は、知るべきである。
真っ黒な悪業を為すと、真っ黒な悪い『異熟果』、『結果』、『報い』を得る事に成ってしまう。
純白の善業を為すと、純白の善い『異熟果』、『結果』、『報い』を得る事に成る。
白黒な善悪が混ざった業を為すと、善い物と悪い物が混ざった『異熟果』、『結果』、『報い』を得る事に成ってしまう。
このため、真っ黒な悪業と、白黒な善悪が混ざった業を離れて、純白の善業を学んで修行する事に勤めるべきである」と言った。

　この時、諸々の、集まっていた者達は、仏が説いた教えを聞き終わって、喜び、信じて受け入れた。

正法眼蔵　三時業

四馬

ある外道が、ある日、釈迦牟尼仏の所へ来て、「不問有言、不問無言」、「言葉を質問していませんし、無言を質問していません(。質問しています。言葉でも無言でもない答えをください)」と質問した。

釈迦牟尼仏は、じっと座に坐ったままであった。少し時間が経った。

ある外道は、釈迦牟尼仏を礼拝して、たたえて、「善(よ)きかな、釈迦牟尼仏は。(釈迦牟尼仏は、)大いなる慈悲で、私の迷いという雲を払い、私に(悟りへ)入る事を得させてくれた」と言って、釈迦牟尼仏に礼をして去った。

後の二祖の阿難陀は、ある外道が去ると、釈迦牟尼仏に、「あの外道は、何を会得して、『(悟りへ)入る事を得た』と言って、釈迦牟尼仏をたたえて去ったのですか?」と尋ねた。

釈迦牟尼仏は、「世間での良い馬が鞭(ムチ)の影を見ただけで(打たなくても)走って行くような物なのである」と言った。

「祖師西来から」、「達磨が西のインドから中国へ来てから」、今に至るまで、善知識を持つ人の多くが、この話を挙げて、学に参入しようとしている仲間に示しているが、学に参入しようとしている仲間には、年を重ねたり月日を重ねたりして、時々、知を開いて明らかにして、仏法に信じて入る者がいる。

この話を「外道問仏」と呼ぶ。

知るべきである。
釈迦牟尼仏には、「聖黙」、「神聖な沈黙で教える事」と「聖説」、「神聖な言葉で説いて教える事」という二種類の(教えを)施し設《もう》ける方法が有る。
「聖黙」や「聖説」で(悟りへ)入る事を得た者は皆、「世間での良い馬が鞭《ムチ》の影を見ただけで(打たなくても)走って行くような物なのである」。
「聖黙」や「聖説」ではない方法で(悟りへ)入る事を得た者も、「世間での良い馬が鞭《ムチ》の影を見ただけで(打たなくても)走って行くような物なのである」。

十四祖の龍樹は、「為人説句、如快馬見鞭影即入正路」、「人の為《ため》に真理の言葉を説くと、駿馬が鞭《ムチ》の影を見ただけで(打たなくても)正しい道へ入るように、人は正しい道へ入る物なのである」と言った。

あらゆる、きっかけで、生じるものの法や、生じる事を超越しているものの法を聞いたり、三乗、一乗の法を聞いたりする人は、何度も邪道に赴《おもむ》こうとしてしまっても、「鞭《ムチ》の影」をしきりに見るため、正しい道へ入るのである。
(正しい)師に従ったり、(善知識を持つ)人に会ったりする人は、「真理の言葉」を聞かない場所は無いのであるし、「鞭《ムチ》の影」を見ない時は無いのである。

すぐに「鞭の影」を見る者、「三阿僧祇劫」を経て「鞭の影」を見る者、無数の劫を経て「鞭の影」を見る者は、正しい道へ入る事ができ得るのである。

(仏に成るには「三阿僧祇劫」と「百大劫」という長い年月がかかると言う場合が有る。)

次のように、雑阿含経には記されている。

次のように、釈迦牟尼仏は、出家者達に告げた。

四種類の馬(に例えられる人)がいる。

(一)鞭の影を見ただけで(打たなくても)、驚き恐れて、御者(である仏)の意に従う。

(二)鞭が毛に触れると、驚き恐れて、御者(である仏)の意に従う。

(三)鞭が肉に触れると、驚く。

(四)鞭が骨まで達して、自覚する。

(一)の馬とは、他の集落の人の死を聞いて、この世を嫌って離れる厭離の心を生じる事ができる人である。

(二)の馬とは、自分の集落の人の死を聞いて、この世を嫌って離れる厭離の心を生じる事ができる人である。

㈢の馬とは、自分の親の死を聞いて、この世を嫌って離れる厭離の心を生じる事ができる人である。

㈣の馬とは、自身が病気で苦しんで、ようやく、この世を嫌って離れる厭離の心を生じる事ができる人である。

これらが、㈱阿含㈧の「四馬」である。

仏法の学に参入する時、必ず、「四馬」を学ぶのである。

真の善知識を持つ人として人の中や天上に出現して、仏の使いとして祖師に成る人は、必ず、「四馬」の学に参入して来て、学ぶ者のために伝授するのである。

「四馬」を知らない人は、人や天人のための、善知識を持つ人ではない。

もし学ぶ者が、善の種を植えるように善行を厚く積み重ねている生者で、仏道に近い者であれば、必ず、「四馬」を聞く事ができ得るのである。

仏道から遠い者は、「四馬」を聞く事ができないし、知る事ができない。

そのため、師匠は「四馬」を急いで説こうと思うべきであるし、弟子は「四馬」を急いで聞こうと請い願うべきである。

「この世を嫌って離れる厭離の心を生じる」と言うのは、「仏は、同一の言葉で法を演説するが、生者は種類に従って異なる理解を得る。ある者は恐

怖するし、ある者は喜ぶし、ある者は『この世』を嫌って離れる厭離の心を生じるし、ある者は疑いを断つ」なのである。

次のように、大般涅槃経には記されている。

次のように、釈迦牟尼仏は言った。

また、次に、善い男子よ。
馬を調教して御する者(の方法)には、四種類、有る。

(一)毛に触れる
(二)皮に触れる
(三)肉に触れる
(四)骨に触れる

触れる場所によって、馬を(調教して)御する者の意に適わせるのである。
如来、仏もまた同様なのである。
如来、仏は、四種類の方法で、生者を「調伏する」、「身心を調整して悪を降伏させる」。

(一)生者の為に生を説くと、仏の言葉を受け入れる者がいる。毛に触れると、(調教して)御する者の意に従う馬がいるような物なのである。

(二)(生者の為に)生老を説くと、仏の言葉を受け入れる者がいる。毛と皮に触れると、(調教して)御する者の意に従う馬がいるような物なのである。

(三)(生者の為に)生老病を説くと、仏の言葉を受け入れる者がいる。毛と皮と肉に触れると、(調教して)御する者の意に従う馬がいるような物なのである。

(四)(生者の為に)生老病死を説くと、仏の言葉を受け入れる者がいる。毛と皮と肉と骨に触れると、(調教して)御する者の意に従う馬がいるような物なのである。

善(よ)い男子よ。

馬を(調教して)御する者の、調教(して御)する方法は、常に一定ではないのである。

「如来」、「世尊」、「仏」は、生者を「調伏して」、「身心を調整して悪を降伏させて」、必ず虚しくない結果をもたらすのである。

このため、仏を「調御丈夫」という称号で呼ぶのである。

これらを(大般)涅槃経の「四馬」と名づける。

学ぶ者は必ず「四馬」を習うし、諸仏は必ず「四馬」を説く。

諸仏は、学ぶ者が仏に従うと「四馬」を聞く事、学ぶ者が仏に見(まみ)えたり捧げものを捧げたりするごとに必ず「四馬」を聞く事、仏法を伝授するごとに「四馬」を説く事を、長い時間が経過しても怠(おこた)っていない。

終(つい)に仏という結果に到達しても、初めて「発心した」、「悟りを求める事を思い立って心した」時のように、菩薩、声聞、人や天人の集まっている者達のために、「四馬」を説くのである。

このため、「仏、法、僧」という「三宝」という種は断絶しないのである。

そのため、諸仏の所説は、菩薩の所説とは遥かに異なるのである。

知るべきである。

調馬師の調馬方法には四種類、有る。

(一)毛に触れる
(二)皮に触れる
(三)肉に触れる
(四)骨に触れる

何物を毛に触れさせるか「大般涅槃経」には記されていないが、仏法を伝えている大いなる人達は鞭(ムチ)であると理解している。

けれども、調馬には、鞭(ムチ)を用いる方法も有るし、鞭(ムチ)を用いない方法も有る。

調馬方法は、必ずしも、鞭(ムチ)だけに限るわけではないのである。

立っている時の高さが八尺である馬を「龍馬」とする。

龍馬を調教できる人間は少ない。

また、「千里馬」と言われる馬がいる。
千里馬は一日のうちに千里を行く。
千里馬は、五百里を行く間に血の汗を流すが、五百里を超過すれば清らかで涼しく速い。
千里馬に乗る事ができる人は少ない。
千里馬の調教方法を知っている者も少ない。
千里馬は中国にはいない。千里馬は外国にいる。
千里馬にしきりに鞭（ムチ）を打つとは見聞きできない。

けれども、古代の高徳の僧は、「馬を調教するには必ず鞭（ムチ）で打つ。鞭（ムチ）でなければ馬を調教できない」と(例えで)言っている。

「鞭（ムチ）で打つ」のが、馬を調教する法なのである。

(一)毛に触れる
(二)皮に触れる
(三)肉に触れる
(四)骨に触れる
という四種類の法が有るが、毛を省略して皮や肉や骨に触れる事はできないし、
毛と皮を省略して肉や骨に触れる事はできない。

このため、知る事ができる。

「馬」は「鞭（ムチ）で打つ」べきなのである。

大般涅槃経で、「鞭（ムチ）で打つべきである事」を説いていないのは、言葉足らずなのであるが、諸々の経は言葉足らずな事が多い。

（読者に考えさせるためである。）

「如来」、「世尊」、「調御丈夫」、「仏」もまた調馬師と同様なのである。

仏は、四種類の法で、一切の全ての生者を「調伏して」、「身心を調整して悪を降伏させて」、必ず虚しくない結果をもたらすのである。

（一）生者の為（ため）に生を説くと、仏の言葉を受け入れる者がいる。

（二）生者の為（ため）に生老を説くと、仏の言葉を受け入れる者がいる。

（三）生者の為（ため）に生老病を説くと、仏の言葉を受け入れる者がいる。

（四）生者の為（ため）に生老病死を説くと、仏の言葉を受け入れる者がいる。

生老を聞いて受け入れる者、生老病を聞いて受け入れる者、生老病死を聞いて受け入れる者は、最初の、生を聞く事を離れるわけではない。

世間で調馬師が毛に触れないで皮や肉や骨に触れる事ができないように。

生者の為（ため）に生老病死を説くとは、「如来」、「世尊」、「仏」の生老病死を説くのである。

生者を生老病死から離れさせるためではないのである。

「生老病死が仏道である」とは説かない。

「生老病死が仏道である」と理解させるために生老病死を説いているわけではないのである。

生老病死を説いているのは、生老病死を説く事によって、一切の全ての生者に、無上普遍正覚への法を得させるためなのである。

このため、「『如来』、『世尊』、『仏』は、全ての生者を『調伏して』、『身心を調整して悪を降伏させて』、必ず虚しくない結果をもたらすのである。このため、仏を『調御丈夫』という称号で呼ぶのである」なのである。

正法眼蔵　四馬

出家功徳

次のように、十四祖の龍樹は言っている。

Q.

在家者の戒を守っても、天上に生まれる事ができ得るし、菩薩の道を行う事ができ得るし、「涅槃」、「寂滅」を得られる。

なぜ出家者の戒を受けて守る必要が有るのか？

A.

在家者の戒を守っても、出家者の戒を守っても、共に、仏土へ渡れるが、難易度が有る。

在家者は、生きるための仕事が有るし、様々な仕事が有る。

在家者は、仏道に専念すれば、仕事が駄目に成ってしまう。

在家者は、仕事に専念すれば、仏道が駄目に成ってしまう。

在家者は、仏道と仕事の、一方だけを取らず、両方を捨てず、仏道を修行する必要が有るが、「難しい」と言うのである。

出家者は、俗世から離れるので、色々と怒ったり心を乱されたりしないで済むし、仏道の修行に、ひたすら専念できるので、「簡単である」と言うのである。

また、次に、在家者は、(俗世が)騒がしいし乱れているし、仕事が多い。
在家者は、(俗世が、)「結使」、「煩悩」の根源であるし、多くの罪が集まる場所である。
このため、在家者は、(仏土へ渡るのが)「難しい」とする。

出家者は、例えば人が無人の野を行くように、一心に成れるし、無心に成れる。
心の内の心配が無く成るし、外部の物事も無く成る。
次のように、詩で説かれているように。
「林の樹々の間で静かに坐禅して、煩悩を寂滅させて諸々の悪を滅して断つ。
無欲で執着しないで心安らかで一心を得る。
出家者の安楽は天の安楽どころではない。
人は、富や高位といった利益、良い衣服、良い寝床を求める。
在家者の安楽は安らかで穏やかではない。
利益を求めると満足できないからである。
ぼろきれによる粗末な法衣を着て乞食を行えば、振る舞いも心も常に一定で乱れない。
自己の智慧という眼で『諸法』、『全てのもの』の実(の相)を観察して知る。
種々の法門の中に、唯一普遍に、観察して入る。
理解と智慧が有る心は、寂静であり、三界で及ぶ事ができる物は無いのである。
このため、知る事ができる。
出家して戒を守って仏道を学び修行する事を『簡単である』とするのである」

また、次に、出家して戒を守れば、無数の善(よ)い「誤りの予防」を得て一切、十分に備えて満たす。

このため、在家者は出家して出家者の戒を受けるべきである。

また、次に、仏法の中で、出家が第一に修行し難い。

(そのため、逆に、早く、出家するべきである。)

次の話のように。

バラモンの閻浮呿提梵志が、舎利弗(シャーリプトラ)に、「仏法の中で、何が最も難しいのか?」と質問した。

舎利弗(シャーリプトラ)は、「出家が難しい」と答えた。

閻浮呿提梵志は、「出家には、どんな難しい事が有るのか?」と質問した。

舎利弗(シャーリプトラ)は、「出家では、出家を内心で楽しむ事が難しい」と答えた。

閻浮呿提梵志は、「出家を内心で楽しむ事ができ得たら、次に、何が難しいのか?」と言った。

舎利弗(シャーリプトラ)は、「諸々の善(よ)い法を修行するのが難しい。このため、(逆に、)出家するべきである」と答えた。

また、次に、人が出家した時、魔王は、驚き愁(うれ)えて、「この出家した人は、『結使』、『煩悩』が薄く成って、必ず、『涅槃』、『寂滅』を会得して、『僧宝』、『僧』の数の中に入る」と言う。

また、次に、仏法の中の出家者は、戒を破る罪を犯しても、罪をつぐない終われば解脱を会得する。

次のように、「優鉢羅華比丘尼本生経」に記されているように。

釈迦牟尼仏が存命中の時に、蓮華色（ウッパラヴァンナー）比丘尼は、六神通と阿羅漢を会得した。

蓮華色（ウッパラヴァンナー）比丘尼は、貴族の家に入って、常に出家をたたえて、諸々の貴族の婦女に「姉妹よ、同胞よ、出家するべきです」と話していた。

諸々の貴族の婦女は、「私達は、若くて盛んで、容姿も美しいので、戒を守るのは難しいです。戒を受けても破ってしまうでしょう」と言った。

蓮華色（ウッパラヴァンナー）比丘尼は、「戒を破ってしまうならば破ってしまっても良いのです。出家するべきです」と言った。

諸々の貴族の婦女は、「戒を破ってしまったら地獄に堕ちてしまうでしょう？　どうして戒を破ってしまっても良いのですか？」と質問した。

蓮華色（ウッパラヴァンナー）比丘尼は、「地獄に堕ちてしまうならば堕ちてしまっても良いのです」と答えた。

諸々の貴族の婦女は、笑って、「地獄では罪の報いを受けてしまいます。どうして地獄に堕ちてしまっても良いのですか？」と言った。

次のように、蓮華色（ウッパラヴァンナー）比丘尼は言った。

(神通力で)私の前世の時を思い出すと、私は、遊女に成って、色々な衣服を着て古い名言を説きました。

ある時、女性の出家者の衣服を着て戯(たわむ)れて笑いました。

この因縁のおかげで、釈迦牟尼仏の前の迦葉仏の時代に、女性の出家者に成れました。

しかし、貴族であったためと、端正な容姿であったため、心に傲(おご)り高ぶり他人を見下す思いを生じてしまって戒を破ってしまいました。

戒を破ってしまった罪のせいで、地獄に堕ちて色々な罪の報いを受けてしまいました。

けれども、罪の報いを受け終わると、(今世で、)釈迦牟尼仏に出会えましたし、出家できましたし、六神通と阿羅漢の道を会得できました。

このため、知る事ができます。

出家して戒を受ければ、戒を破ってしまっても、戒を受けた因縁のおかげで、阿羅漢の道を会得できます。

もし戒を受けた因縁が無いのに悪行を行(おこな)ってしまえば、道を得る事はできません。

私は、昔は、生から生へ地獄に堕ちてしまっていました。

地獄から出ては悪人に成ってしまって、悪人として死んでは再び地獄に入ってしまって、全く何も得られませんでした。

このため、明らかに、知る事ができます。

出家して戒を受ければ、戒を破ってしまっても、戒を受けた因縁のおかげで、「道果」、「悟り」を得る事ができます。

また、次に、釈迦牟尼仏が祇園精舎にいた時、酔った、あるバラモンが、釈迦牟尼仏の所に来て、出家者に成りたいと欲(ほっ)した。

釈迦牟尼仏は、後の二祖の阿難陀に命じて、あるバラモンの頭の髭(ひげ)と髪を剃(そ)って法衣を着させた。

あるバラモンは、酒の酔いから醒(さ)めると、自身が突然に出家者に変わっているのを見て驚き、逃げて走り去った。

諸々の出家者達は、釈迦牟尼仏に、「なぜ、酔った、あのバラモンの言葉を聞き入れて許して出家者にしたのでしょうか？」と質問した。

釈迦牟尼仏は、「あのバラモンは、無数の劫の中で出家する心が無かったが、今、酔ったために、暫(しばら)く、微(かす)かに『発心した』、『悟りを求める事を思い立って心した』のである。

この因縁によって、後に、出家して道を会得するはずである。

このように様々な因縁が有るのである。

出家の功徳は量り知る事ができないのである。

このため、在家者が在家者の戒である『五戒』を守っても、出家者には及ばないのである」と言った。

釈迦牟尼仏は、酔った、あるバラモンが出家して戒を受ける事を聞き入れて許して、道を会得するための最初の種植えとさせた。

明らかに、知る事ができる。

昔から未だ出家の功徳が無い生者は永遠に仏という結果をもたらす悟りを得る事ができないのである。

このバラモンは、酒に酔ったため、暫く微かに「発心して」、「悟りを求める事を思い立って心して」、頭の髭と髪を剃られて戒を受けて出家者と成った。

酒の酔いから醒めていない時間はわずかであったが、出家の功徳を保護して道を会得するための善の種を成長させるべきである、という主旨は、釈迦牟尼仏の真実の黄金の言葉であるし、如来、釈迦牟尼仏の「この世」への出現の本懐なのである。

一切の全ての生者は、明らかに、過去、現在、未来の中で(出家の功徳を)信じて受け入れて行うべきである。

実に、発心して道を会得するが、必ず、刹那の一瞬の発心から始まる物なのである。

このバラモンの少しの間の出家の功徳ですら、このようなのである。

まして、人間の一生の寿命を巡らして出家して戒を受けていた功徳は、この酔ったバラモンよりも更に優れている！

転輪聖王は、人の寿命が八万歳以上の時代に出現して、「四洲」を統治するし、「七宝」を十分に備えている。

転輪聖王が統治する時、「四洲」は皆、浄土のように成る。

転輪聖王による快楽は、言葉を尽くしても言い表す事ができない。

または、「三千界を統治する転輪聖王もいる」と言われている。

転輪聖王には、鉄輪王、銅輪王、銀輪王、金輪王という四種類の分類が有って、鉄輪王は一洲、銅輪王は二洲、銀輪王は三洲、金輪王は四洲を統治する。

転輪聖王は、必ず、身で「殺生、不与取、邪淫、妄語、綺語、粗悪語、離間語、貪欲、瞋恚、邪見」という「十悪」を犯さない。

転輪聖王は、このように快楽が豊かであるが、頭に一本でも白髪が生えれば、王位を王子に譲って、自身は速やかに出家して、法衣を着て山の林に入って、修行して鍛錬して、命が終われば必ず、梵天が住んでいる「大梵天」に生まれる。

転輪聖王は、自身の頭の白髪を、銀の箱に入れて王宮に収めて、後の転輪聖王に伝える。

後の転輪聖王もまた、白髪が生えれば、前の転輪聖王と同様にする。

転輪聖王が、出家後の余命が長いのは、現在の人とは比べ物に成らないほどである。

「転輪聖王が出現する時代は人の寿命が八万歳以上である」と言われているし、転輪聖王は身に仏の「三十二相」を備えているので、現在の人は及ぶ事ができない。

けれども、白髪を見て「無常」、「死」を悟り、「白業」、「善業」を修行して功徳を成就するために、必ず、出家して仏道を修行するのである。

現在の諸々の王(、権力者)は、転輪聖王に及ぶ事ができない。

現在の諸々の王(、権力者)は、貪欲の中で、いたずらに無駄に時間を過ごして出家しなければ、来世で後悔するであろう。

まして、小国、辺境の僻地の王(、権力者)には、王者という名称が有っても王者の徳は無く、貪って留まる事を知らない。

出家して仏道を修行すれば、諸々の天人は喜び守るし、龍神は敬って保護するし、諸仏は仏眼で明らかに証明して喜ぶ。

蓮華色(ウッパラヴァンナー)比丘尼は、遊女であった昔の前々世の時は信心が無く、戯(たわむ)れに女性の出家者の衣服を着た。

蓮華色(ウッパラヴァンナー)比丘尼は、恐らくは、仏法を軽視する罪に成るが、身に女性の出家者の衣服を着た力によって、前世で仏法に出会えた。

「女性の出家者の衣服」とは、法衣である。

蓮華色(ウッパラヴァンナー)比丘尼は、戯(たわむ)れに法衣を着た力によって、前世の、釈迦牟尼仏の前の迦葉仏の時代に仏法に出会えて、出家して戒を受けて、女性の出家者に成れた。

蓮華色(ウッパラヴァンナー)比丘尼は、前世で戒を破った罪によって地獄に堕ちて罪の報いを受けたが、出家の功徳は朽(く)ちず、今世で、終(つい)に釈迦牟尼仏に出会えて、仏法を見聞きし、発心して仏法を習って修得して、永遠に三界を離れて、大いなる阿羅漢と成ったし、三明六通を十分に備えたし、無上の仏道を会得した。

そのため、最初から、ひたすら、無上普遍正覚のために、清浄な信心を凝(こ)らして法衣を信じて受け入れ(て出家し)たら、出家の功徳の「増上」、「成長」は、蓮華色(ウッパラヴァンナー)比丘尼の前々世の遊女の功徳よりも、速(すみ)やかであろう。

まして、無上普遍正覚のために、「発菩提心して」、「発心して」、出家して戒を受けたら、出家の功徳は量り知れないであろう。

人の身でなければ、出家の功徳を成就する事は稀(まれ)なのである。

西のインドから東の地の中国まで、出家者や在家者の修行者や、祖師は多いが、十四祖の龍樹に及ぶ事はできない。

十四祖の龍樹は、専(もっぱ)ら、酔ったバラモンの話や、蓮華色(ウッパラヴァンナー)比丘尼の前々世の遊女の話などを挙げて、全ての生者に出家して戒を受ける事を勧(すす)めているのである。

十四祖の龍樹は、釈迦牟尼仏の黄金の口(くち)が予言していた祖師なのである。

釈迦牟尼仏は、「『南贍部洲』、『南閻浮提』、『この世』が最も優れている物が四種類、有る。

(一)仏を見れる事

(二)仏法を聞ける事

(三)出家できる事

(四)仏道を会得できる事」と言った。

明らかに、知るべきである。

「南贍部洲」、「南閻浮提」、「この世」が最も優れている四種類の物は、北倶盧洲よりも優れているし、諸々の天よりも優れている。

今、私達は、善の種を植えた前世の善行の力に引き寄せられて最も優れている身(である人の身)を得ているのである。

喜んで出家して戒を受けるべきなのである。
最も優れている善い身(である人の身)を無駄にしてしまい露のように儚い命を「無常」、「変化」、「死」の風に任せてしまう事なかれ。
出家の生を重ねれば、功徳を積み重ねられるであろう。

釈迦牟尼仏は、「仏法の中でも、出家の果報は不可思議なのである。たとえ人が『七宝』、『七種類の宝』で塔を建てて、塔の高さが三十三天にまで至っても、得られる功徳は、出家の功徳に及ばないのである。なぜなら、『七宝』、『七種類の宝』による塔は、貪欲な悪人、愚かな人が破壊できてしまうからであるし、出家の功徳は破壊できないからである。このため、男女に教えたり、奴隷を解放したり、国民に許可したりして出家させて仏道に入らせれば、自身が出家して仏道に入れれば、功徳は量り知れないのである」と言った。

釈迦牟尼仏は、明らかに、功徳の量を知っていて、このように比較しているのである。

中国では「福増」と呼ばれる尸利苾提は、この釈迦牟尼仏の言葉を聞いて、百二十歳の老人であったが、強いて出家して戒を受けて、自身よりも若い出家者達よりも下位の者として出家者の末席に名を連ねて修行して鍛錬して、大いなる阿羅漢と成った。

知るべきである。

今の生の人の身は、四大(元素)と「色受想行識」という「五蘊」が原因と成り繋(つな)がり合成して、仮初(かりそめ)の物として形成されているのであるし、「八苦」が常に有る。

さらに、一刹那、一刹那に生じて滅んで留まる事が無い。

さらに、「一弾指」、「一回、指を弾く」間に、六十五の「刹那」が生じて滅ぶが、(人は)自身の知が暗いので未だ知る事ができないのである。

一つの昼夜が経つ間に、全部で、六十四億九万九千九百八十の「刹那」が有って、「色受想行識」という「五蘊」も何回も生じて滅びるが、(人は)知る事ができないのである。

自身が生じて滅んでも、自身は知る事ができないのを憐れむべきである。

「刹那」の生じて滅ぶ量は、釈迦牟尼仏と舎利弗(シャーリプトラ)だけが知る事ができた。

他の聖者は、多くても、一人も知る事ができなかったのである。

「刹那」の生じて滅ぶ道理によって、生者は善業や悪業を作る。

また、「刹那」の生じて滅ぶ道理によって、生者は発心して道を会得する。

「刹那」で生じて滅ぶのが、人の身なのであり、たとえ惜しんでも留める事ができない。

昔から、人の身を惜しんで留める事ができた人は未だ一人もいない。

このように、自分の物ではない人の身だが、巡らして出家して戒を受ければ、過去、現在、未来の諸仏が証している、金剛のように不壊である、仏という結果をもたらす無上普遍正覚を証する事ができるのである。

知が有る人は誰もが仏道を喜んで求める！

このため、過去、日月灯明仏の八人の子は皆、「四天下」、「四大洲」を統治する王位を捨てて出家した。

大通智勝仏の十六人の子は共に、出家した。

大通智勝仏の十六人の子は、大通智勝仏が「定」に入っている間、集まっている者達のために法華経を説いた。

大通智勝仏の十六人の子は、今は、十方の如来と成っている。

大通智勝仏の父の転輪聖王が率いていた人々の中の八万億人も、大通智勝仏の十六人の子の出家を見て、出家を求めて、大通智勝仏の父の転輪聖王は聞き入れて許した。

妙荘厳王の二人の子、妙荘厳王、妙荘厳王の夫人は皆、出家した。

知るべきである。

大いなる聖者が、この世に出現した時、必ず、出家するのを正しい法としているのは、明らかである。

「これらの仲間は、愚かで出家した」とは言えないのである。

「これらの仲間は、賢くて出家した」と知ったならば、「賢くて出家した、これらの仲間と、等しく成ろう」と思うべきである。

釈迦牟尼仏の時は、羅睺羅(ラーフラ)、後の二祖の阿難陀などの弟子は皆、出家した。

また、釈迦族の千人が出家した事が有るし、釈迦族の二万人が出家した事が有る。

「優れた行跡である」と言うべきである。

最初の「五比丘」が出家してから、最後の須跋陀羅(スバッダ)が出家するに至るまで、釈迦牟尼仏に帰依した仲間は出家した。

「出家の功徳は、量り知れない功徳なのである」と知るべきである。

そのため、もし世の人々が子孫を憐れむならば、急いで出家させるべきである。

もし世の人々が父や母を憐れむならば、出家を勧(すす)めるべきである。

このため、次のように、詩で言われている。

もし過去の世が無ければ、過去の仏は存在しないはずである。

もし過去の仏が存在しなければ、出家や戒を受ける事は存在しないはずである。

(出家や戒を受ける事は存在するので、過去の仏は存在するし、過去の世は存在する。)

この詩は、諸仏、如来の詩なのである。

外道が誤って「過去の世など存在しない」と言うのを論破しているのである。

そのため、知るべきである。

出家して戒を受けるのは、過去の諸仏の仏法なのである。

私達は、幸いにも、諸仏の妙なる法である、出家と戒を受ける事が可能な時代に出会いながら、虚しく出家しないし戒を受けない。

どんな罪による障害であるのか？　わからない。

最低である人の身を依り所として、最高の出家の功徳を成就したら、「南瞻部洲」、「南閻浮提」、「この世」や三界の中の最高の功徳に成るであろう。

「南瞻部洲」、「南閻浮提」、「この世」の、この人の身が未だ滅びないうちに必ず出家して戒を受けるべきである。

次のように、古代の聖者は言っている。

出家者は、戒を破ってしまっても、在家者が戒を守っているよりも優れている。

このため、経の説法では、ひとえに人に勧(すす)めて出家させるのである。

経が出家を勧(すす)めてくれた恩に報いるのは難しいほどである。

また、次に、出家を勧める事は、尊重するべき善業の修行を人に勧める事なのである。

出家を勧めて得られる果報は、閻魔大王、転輪聖王、帝釈天よりも優れている。

このため、経の説法では、ひとえに人に勧めて出家させるのである。

経が出家を勧めてくれた恩に報いるのは難しいほどである。

在家者のまま在家者の戒を守る事などを人に勧めても、人に勧めて出家させる時のような功徳は無いので、経は証しないのである。

知るべきである。

出家者は、戒を破ってしまっても、在家者が戒を守っているよりも優れている。

仏への帰依の中では、必ず、出家して戒を受ける事が優れているのである。

出家を勧めて得られる果報は、閻魔大王、転輪聖王、帝釈天よりも優れているのである。

たとえ王族や貴族であるクシャトリヤではなくても、出家すれば王族や貴族であるクシャトリヤよりも優れているのである。

出家すれば、閻魔大王、転輪聖王、帝釈天よりも優れているのである。

在家者が戒を守っても、そうではないので、出家するべきである。

釈迦牟尼仏が説いた仏法は、測り知れない物である、と知るべきである。

釈迦牟尼仏と五百羅漢の仏法を広く集めているのである。

仏法では道理が明らかである、と実に知る事ができる。

千二百年頃の「禅師」と自称する凡人は、一人の聖者の三明六通の智慧ですら測り知る事ができない。

まして、千二百年頃の「禅師」と自称する凡人は、五百羅漢という五百人の聖者の智慧を測り知る事ができない！

私、道元は、千二百年頃の「禅師」と自称する凡人たちが知る事ができない物を知っているし、見る事ができない物を見たし、究める事ができない物を究めたし、凡人たちが知る事ができた物も知っている。

そのため、千二百年頃の「禅師」と自称する凡人の暗黒のように暗い愚鈍な自説を、聖者の三明六通の言葉と比べる事なかれ。

「阿毘達磨大毘婆沙論」の第百二十には、「発心して出家した者ですら『聖者』と名づける。まして、『忍』、『忍辱して忍耐して心を動かさない』法を得た者は『聖者』と名づける！」と記されている。

知るべきである。

発心して出家すれば「聖者」と名づけるのである。

釈迦牟尼仏の五百大願の中の第百三十七願。

私が未来に無上普遍正覚を成就し終わったら、私の仏法の中で出家したい諸々の者には、願わくば、障害が有りませんように。

障害とは、心が弱く劣る事や、忘れやすく成る事や、狂気や、おごり高ぶる事や、畏敬の念が無く成る事や、愚かに成って智慧が無く成る事や、諸々の煩悩が多く成る事や、心が散乱する事である。

障害が無く成るまで、私は無上普遍正覚を成就しない。

第百三十八願。

私が未来に無上普遍正覚を成就し終わったら、私の仏法の中で出家して仏道を学び修行したい、出家者の戒を受けたい女の人がいたら、願わくば、成就させる事ができますように。

そう成るまで、私は無上普遍正覚を成就しない。

第三百十四願。

私が未来に無上普遍正覚を成就し終わったら、生者が、善行が少なくても、少ない善行の中で善行を愛好し楽しむ心が生じたら、その人を来世で仏法の中で出家させて仏道を学ばせ修行させるし、(その人を今世で)神聖な清浄な出家者見習いの十戒に安らかに留めて住まわせる。

そう成るまで、私は無上普遍正覚を成就しない。

知るべきである。

今、出家する善(よ)い男子や善(よ)い女の人は皆、釈迦牟尼仏の昔の大願の力に助けられて障害無く出家して戒を受ける事を得ているのである。

如来、釈迦牟尼仏は誓って願って出家させている。

出家の功徳は、最も尊い最上の大いなる功徳である、と明らかに知る事ができる。

釈迦牟尼仏は、「私(、釈迦牟尼仏)によって髭と髪を剃り除いたが、法衣を欠片だけ身につけている、戒を受けていない者に捧げものを捧げても、『無畏の城』、『城のように恐怖が無い境地』に入る事ができ得る。このため、このように、私(、釈迦牟尼仏)は説く」と言った。

明らかに知る事ができる。

髭と髪を剃り除いて法衣を着ているが、戒を受けていない者に捧げものを捧げても、「無畏の城」、「城のように恐怖が無い境地」に入るであろう。

釈迦牟尼仏は、「私(、釈迦牟尼仏)の為に出家した、髭と髪を剃り除いたが、法衣を欠片だけ身につけている、戒を受けていない者を、『仏法から外れている』と悩ます人は、過去、現在、未来の諸仏の法身と報身を破壊しようとする人なのである。地獄などの『三悪道』を満ちあふれさせようとする事に成るからである」と言った。

釈迦牟尼仏は、「生者達が、私（、釈迦牟尼仏）の為に出家して、髭と髪を剃り除いて、法衣を着たら、たとえ戒を守れなくても、彼らは悉く既に『涅槃』、『寂滅』の印を押されている者なのである。

また、出家したが、戒を守れない者を、『仏法から外れている』と悩ましたり、悪口を言って辱めたり、悪口を言って非難したり、手で杖を持って打ったり、手で刀を持って切ったり、法衣や器を奪ったり、種々の生活道具を奪ったりする人は、過去、現在、未来の諸仏の真実の報身を破壊しようとする人なのであるし、一切の人や天人の『眼目』、『要点』に敵対する人なのである。

諸仏が所有する正しい法や、『仏、法、僧』という『三宝』の種を滅ぼそうとする事に成るからである。

諸々の天人や人を、利益を得られないようにして、地獄に堕とさせる事に成るからである。

地獄などの『三悪道』を増長させて満ちあふれさせようとする事に成るからである」と言った。

知るべきである。

髭と髪を剃って、法衣を着れば、たとえ戒を守れなくても、無上の大いなる「涅槃」、「寂滅」の印を押されるのである。

たとえ戒を守れなくても、髭と髪を剃って法衣を着ている者を悩まして乱す人は、過去、現在、未来の諸仏の報身を破壊しようとする事に成るのである。

最も重い罪である五逆罪と同じ罪を犯す事に成るのである。

出家の功徳は、過去、現在、未来の諸仏に近い、と明らかに知る事ができる。

釈迦牟尼仏は、「出家者は、悪い心を起こす事なかれ。
悪い心を起こす者は、出家者ではない。
出家者は、言行一致させる必要が有る。
言行不一致の者は、出家者ではない。
私(、釈迦牟尼仏)は、父と母、兄弟、妻子、眷属、知人を捨てて出家して『道』、『真理』を学び修行したが、諸々の『善覚』を修行して集めた時であり、諸々の『不善覚』を修得して集めた時ではなかった。
『善覚』とは、赤子のように、一切の全ての生者を思いやる事である。
『不善覚』とは、『善覚』と違う事である」と言った。

出家の「自性」、「本来の性質」とは、「赤子のように、一切の全ての生者を思いやる事」なのである。

「赤子のように、一切の全ての生者を思いやる事」とは、「悪い心を起こさない事」なのであるし、「言行一致させる事」なのである。

身のこなしが出家者に相応(ふさわ)しく成ったら、出家の功徳は、前述のように成るのである。

釈迦牟尼仏は、「また、次に、舎利弗（シャーリプトラ）と『菩薩摩訶薩』、『無上普遍正覚を求める大いなる修行者』よ。

もし出家した日に、無上普遍正覚を成就したいのであれば、

もし出家した日に、『法輪を転じたい』、『法を説きたい』のであれば、

もし『法輪を転じた』、『法を説いた』時に、無数の生者を、『塵（ちり）や垢（あか）』、『汚れ』、『煩悩』から遠ざけさせて離れさせて、仏法の中で『浄法眼』、『法眼』を得させたいのであれば、

もし『法輪を転じた』、『法を説いた』時に、無数の生者に、『一切法不受』、『一切の全てのものに影響されない』ようにさせて、諸々の『漏』、『煩悩』からの心の解脱を得させたいのであれば、

もし『法輪を転じた』、『法を説いた』時に、無数の生者を、無上普遍正覚に不退転にさせたいのであれば、

『般若波羅蜜』、『知の到達』を学ぶべきである」と言った。

「般若」、「知」を学ぶ菩薩とは、祖師から祖師への祖師達なのである。

「般若波羅蜜」、「知の到達」を学ぶと、無上普遍正覚は、必ず、出家した日に成熟するのである。

けれども、「三阿僧祇劫」、修行して証しても、「無量阿僧祇劫」、「無数の時間」、修行して証しても、有限に、無限に、無上普遍正覚を汚染するわけではないのである。

(仏に成るには「三阿僧祇劫」と「百大劫」という長い年月がかかると言う場合が有る。)

仏道を学んでいる人は知るべきである。

次のように、釈迦牟尼仏は言った。

次のような事を、「菩薩摩訶薩」、「無上普遍正覚を求める大いなる修行者」は、思考するかもしれない。

私は、いつか、国王の位を捨てて、出家した日に無上普遍正覚を成就しよう。

また、この出家した日に「妙なる法輪を転じよう」、「妙なる法を説こう」。

無数の情の有る者を、「『塵（ちり）』や『垢（あか）』」、「汚れ」、「煩悩」から遠ざけさせて離れさせて、菩薩の「浄法眼」、「法眼」を生じさせよう。

また、無数の情の有る者に、諸々の「漏」、「煩悩」を永遠に無くし尽くさせて、心と智慧を解脱させよう。

また、無数の情の有る者を、無上普遍正覚に不退転にさせよう。

このような「菩薩摩訶薩」、「無上普遍正覚を求める大いなる修行者」が、このような事を成就したいと欲するならば、「般若波羅蜜」、「知の到達」を学ぶべきである。

これは、釈迦牟尼仏が、最後身の菩薩として、王宮に降臨して生まれて、国王の位を捨てて、無上普遍正覚を成就して、「法輪を転じて」、「法を説いて」、生者を仏土へ渡した功徳を説いているのである。

釈迦牟尼仏は、王子であった時に、車匿（チャンナ）から宝石などが飾られた荘厳な「七宝」、「七種類の宝」による柄（つか）の刀を受け取り、右手で刀を鞘（さや）から抜き出して、左手で紺青の青蓮華色の「螺髻」、「ほら貝の形の髪形」の髪を持って、右手に持っている鋭利な刀で自身の髪を切って、切った髪を右手で捧げて、切った髪を空中に投げた。

この時、帝釈天は、稀有な心、大いなる喜びが生じて、釈迦牟尼仏が切った髪を受け取って捧げて、地に落とさなかった。

帝釈天は、釈迦牟尼仏が切った髪を天の妙なる衣で受け取って、天へ持って行った。

その時、諸々の天人は、優れている上の天の、捧げるための道具で、釈迦牟尼仏が切った髪に、捧げものを捧げた。

釈迦如来、釈迦牟尼仏は、昔、王子であった時に、夜中に「出家踰城」して、日が高く成って山に至って、自ら頭の髪を切った。

その時、「浄居天」の天人が来て、釈迦牟尼仏の頭の髪を剃（そ）り除き、法衣を与えた。

「浄居天」の天人が来て、頭の髪を剃り除き、法衣を与える事が、如来が「この世」に出現した時に必ず起きる、めでたい徴なのであるし、諸仏の不変の法則なのである。

過去、現在、未来の十方の諸仏の中に、在家者の時に仏に成った者は一人もいない。

過去に仏がいたので、出家して戒を受ける功徳が存在するのである。

生者が「得道する」、「悟る」のは、必ず、出家して戒を受ける事による物なのである。

出家して戒を受ける功徳は、諸仏の不変の法則なので、出家の功徳は量り知れないのである。

仏教の中に在家者が仏に成る伝説が有るが正しい伝説ではないし、女性の身のまま仏に成る伝説が有るが正しい伝説ではない。

(男尊女卑ではない。)

仏祖が正しく伝えているのは、出家者が仏に成る伝説なのである。

長者の子である、後の五祖の提多迦が、四祖の優婆毱多の所へ来て敬礼して、出家させてくれるように求めた。

優婆毱多は、「あなたは、身の出家であるのか？　心の出家であるのか？」と言った。

提多迦は、「私が出家を求めるのは(自分の)身心の為ではない」と答えた。

優婆毱多は、「(自分の)身心の為でなければ、誰が出家するというのか？」と言った。

提多迦は、「出家には自分、自分の物といった思考は無いのです。

出家には自分、自分の物といった思考は無いので、出家では心が生じたり滅んだりしない。

出家では心が生じたり滅んだりしないので、出家は『常道』、『不変の真理』なのであるし、諸仏もまた不変なのである。

(この世の)心には形、相が無い(と言える)し、身体(、肉体)もまた形、相が無い(と言える)」と答えた。

優婆毱多は、「あなたは、大いに悟り、心に自ら通達しなさい。『仏、法、僧』という『三宝』によって、『聖種』、『聖者の種』、『仏種』、『仏の種』を受け継いで盛んにしなさい」と言って、提多迦を出家させて戒を受けさせた。

諸仏の仏法に出会って出家するのは、第一の最も優れている果報なのである。

出家の法は、自分のためではないのであるし、自分の物のためではないのであるし、(自分の)身心のためではないのであるし、(自分の)身心が出家するわけではないのである。

このようであるのが、「出家には自分、自分の物といった思考は無い」道理なのである。

「出家には自分、自分の物といった思考は無い」ので、諸仏の仏法なのであるし、諸仏の不変の法なのである。

諸仏の不変の法なので、「出家には自分、自分の物といった思考は無い」のであるし、「出家は(自分の)身心の為(ため)ではない」のである。

諸仏の不変の法は、三界のものが肩を並べる事ができない物なのである。

このため、出家は最上の法なのである。

出家は、速い、遅い、ではないし、
不変、変化、ではないし、
来る、去る、ではないし、
「住」、「立ち止まる」、「作」、「なす」、「行う」、ではないし、
広い、狭い、ではないし、
「大小」、「優劣」、ではないし、
「作」、「なす」、「行う」、「無作」、「行わない」、ではない。

仏法を単一に伝えている祖師は、必ず、出家して戒を受けている！
これが、後の五祖の提多迦が、四祖の優婆毱多に会って出家させてくれるように求めた道理なのである。

提多迦は、出家して戒を受けて、四祖の優婆毱多の学に参入して、終(つい)に五祖と成った。

十七祖の僧伽難提は、首都が「室羅伐（シュラーヴァスティー）」、「舎衛城（シュラーヴァスティー）」であるコーサラ国の宝荘厳王の子であった。

僧伽難提は、生まれてすぐに話す事ができて、常に仏の事をほめたたえた。

僧伽難提は、七歳で俗世の楽しみを嫌い、詩で、父と母に告げて、「大いに思いやり深い父へ、頭を地につけて礼拝する。

骨肉の母へ、目上の人への敬意を表して安否を尋ねながら深く首を垂れて礼拝する。

（しかし、）私は今『出家したい』と御願いします。

請い願わくば、大いなる慈悲で聞き入れてください」と言った。

父と母は、僧伽難提の出家を固く止めた。

僧伽難提は、ついに、一日中、食事を食べなく成った。

そのため、父と母は、在家者のまま出家の儀式を受ける事を許した。

僧伽難提は、この時、「僧伽難提」という戒名を名づけられた。

父と母は、出家者の禅利多に命じて僧伽難提の師にさせた。

僧伽難提は、十九年が経っても、未だかつて修行を怠（おこた）らなかった。

僧伽難提は、「身が王宮に在るのに、どうして出家であろうか？　いいえ！　出家ではない！」と常に自ら思い、言っていた。

ある日の夕方、天から光が降り注ぎ、僧伽難提は、平坦な一つの道を見た。

僧伽難提が、無自覚に、約十里くらい、ゆっくり道を行くと、大岩の前に至った。

岩窟が有った。

僧伽難提は、岩窟の中で静かに坐禅した。

父は、僧伽難提を失くして、禅利多を追放し、国を出て僧伽難提を探し歩いたが、僧伽難提の所在を知る事ができなかった。

十年が経ち、僧伽難提は、仏法を会得して、「授記が終わって」、「仏に成る予言をされ終わって」、教化するために巡り歩いて、摩提国に至った。

(十七祖の僧伽難提の仏法を嗣いだ、十八祖の伽耶舎多は摩提国の人である。)

「在家」と「出家」という呼称は、十七祖の僧伽難提の時から聞こえ始めた。

僧伽難提は、前世の善業の助けによって、天からの光の中で平坦な道を得たのである。

(悟る前までの今世の人生を「前世」と言う場合が有る。)

僧伽難提が、終(つい)に、家である王宮を出て岩窟に至ったのは、実に、優れた行跡なのである。

俗世の楽しみを嫌い、「俗塵」、「俗事」を憂う者は、聖者なのである。
「色声香味触」への「五欲」を慕い、「出離」、「解脱」を忘れる者は、愚かな凡人なのである。

唐の時代の中国の皇帝の粛宗と代宗は、しきりに仏教徒に近づいたが、なお王位を貪って投げ捨てる事ができなかった。

三十三祖の大鑑禅師が、親を(泣く泣く)捨てて、祖師と成ったのは、出家の功徳による物なのである。

在家者の修行者である、蘊公と呼ばれる龐居士が、宝を捨てたが、塵を捨てなかったのは、「最悪に愚かである」と言える。

三十三祖の大鑑禅師の仏道による力と、在家者の修行者である龐居士の稽古は、比べるまでもない。

知が明らかである者は必ず出家する。
知が暗い者は家で人生を終えてしまうが、在家は「黒業」、「悪業」の因縁と成ってしまうのである。

南嶽の懐譲は、ある日、ほめたたえて、「『無生法』、『生じる事を超越している法』の為に出家するのである。天上でも、人の間でも、出家は最も優れている！」と言った。

「無生法」、「生じる事を超越している法」とは、「如来の正しい法」、「仏法」なのである。

このため、天上でも、人の間でも、出家は最も優れている。

天上とは、欲界に六つの天、色界に十八の天、無色界に四つの天が有るが、共に、出家の道に及ばない。

盤山宝積は、「皆さん。

『この中で』、仏道を学び修行するとは、地が、山を持ち上げていても、山の高さを知らないような物なのであるし、石が、宝玉を包んでいても、宝玉の無傷の完璧さを知らないような物なのである。

このように仏道を学び修行する事を『出家』と言う」と言った。

仏祖の正しい仏法は、必ずしも、知る、知らない、に関わらない。

出家は仏祖の正しい仏法であるので、出家の功徳は明らかなのである。

鎮州の臨済院の、臨済義玄は、「出家者は、平常の真の正しい見解をわきまえて会得して、仏と『魔』、『仏敵』をわきまえるべきであるし、真偽をわきまえるべきであるし、凡人と聖者をわきまえるべきである。
このように、わきまえて会得していれば、『真の出家者である』と言える。
仏と『魔』、『仏敵』などをわきまえなければ、ある家から出たのに別の家へ入ってしまうような物なのであり、『(罪)業を造る在家者である』と言えるし、『真の正しい出家者である』とは言えない」と言った。

「平常の真の正しい見解」とは、因果を深く信じる事や、「仏、法、僧」という「三宝」を深く信じる事などである。
「仏をわきまえる」とは、仏の「因中」、「修行中」の功徳と「果上」、「悟り」の功徳を明らかに思う事なのであるし、
真偽を明らかに、わきまえて受け入れる事なのであるし、
凡人と聖者を明らかに、わきまえて受け入れる事なのである。

もし仏と「魔」、「仏敵」を明らめなければ、仏道を学び修行する事が阻害されてしまい破壊されてしまい退転してしまうのである。
「魔」、「仏敵」の事を覚知して従わなければ、仏道をわきまえる事に不退転に成るのである。
これを「真の正しい出家者の法」とする。

いたずらに無駄に、「魔」、「仏敵」の事を誤って「仏法である」と思う者が多いが、近頃の誤りなのである。

学徒は、早く、「魔」、「仏敵」を知り、仏を明らめて、修行して証するべきである。

如来、釈迦牟尼仏が(肉体が)死ぬ時、初祖の迦葉は、釈迦牟尼仏に、

「『世尊』、『如来』、『仏』は、諸々の素質を知る力を十分に備えています。

善星が必ず『断善根』、『一闡提』、『仏法を信じない者に成る事』を知っていたでしょう。

どんな『因縁』、『理由』で、善星の出家を聞き入れて許したのでしょうか?」と言った。

釈迦牟尼仏は、「善(よ)い男子よ。

私(、釈迦牟尼仏)が昔、初めて出家した時、異母弟の難陀、従弟の阿難陀と提婆達多(デーヴァダッタ)、息子の羅睺羅(ラーフラ)といった者達が皆、悉(ことごと)く、私(、釈迦牟尼仏)に従って出家して仏道を修行した。

もし私(、釈迦牟尼仏)が善星の出家を聞き入れて許さなかったら、善星は次の王として王位を継いで権力を自在に操って仏法を壊したであろう。

このような『因縁』、『理由』のために、私(、釈迦牟尼仏)は、善星の出家を聞き入れて許したのである。

善(よ)い男子よ。

もし善星が出家していなければ、やはり『断善根』、『一闡提』、『仏法を信じない者』に成ってしまい無数の生において全く利益を得られなかったであろう。

しかし、善星は出家したので、『断善根』、『一闡提』、『仏法を信じない者』に成ってしまったが、戒を守っていたし、老僧、高徳の長老、徳が有る僧に捧げものを捧げて恭しく敬っていたし、『禅定』の『初禅』から『四禅』までを習って修得していた。

これらを『善い原因』と名づける。

このような『善い原因』は、善い物事を能く生じる。

善い物事が生じれば、仏道を習って修得できる。

仏道を習って修得すれば、無上普遍正覚を得る事ができる。

このため、私（釈迦牟尼仏）は、善星の出家を聞き入れて許したのである。

善い男子よ。

もし私（釈迦牟尼仏）が善星の出家を聞き入れて許さなかったら、私（釈迦牟尼仏）は『如来の十力を十分に備えている』と言えない。

善い男子よ。

仏が全ての生者を観察すると、生者は善い物と悪い物を十分に備えている。

生者は、善い物と悪い物を備えているが、遠からず一切の善の種を断ってしまい、悪の種だけを備えてしまう。

なぜなら、生者は、『善友』、『善知識を持つ人々』に親しまないし、正しい法を聴かないし、善い思考を思考しないし、正しい法の通りに行わないからである。

このため、生者は、善の種を断ってしまい、悪の種だけを備えてしまう」と言った。

知るべきである。

如来、釈迦牟尼仏は、生者が「断善根」、「一闡提」、「仏法を信じない者」と成り得てしまう事を明らかに知っていても、「善い原因」を授けるために出家を聞き入れて許したのである。

「大いなる慈悲」、「大いなる思いやり」である。

「断善根」、「一闡提」、「仏法を信じない者」と成ってしまうのは、「善友」、「善知識を持つ人々」に近づかないし、正しい法を聴かないし、善い思考を思考しないし、正しい法の通りに行わない事による物なのである。

学徒は、必ず、「善友」、「善知識を持つ人々」に親近するべきである。

「善友」、「善知識を持つ人々」とは、「諸仏が存在する」と説く人々なのであるし、「罪の報いと、善行の報いである幸福が存在する」と教えてくれる人々なのである。

因果を否定し信じない誤りを犯さない人々を「善友」、「善知識を持つ人々」とする。

「善友」、「善知識を持つ人々」が説く物が、「正しい法」なのである。

正しい法の道理を思考する事が、「善い思考」なのである。

善い思考の通りに行う事が、「正しい法の通りに行う」事なのである。

そのため、生者は、親しい者にも、疎遠な者にも、選ばないで、出家して戒を受ける事を勧めるべきである。

出家後の退転、不退転を顧みる事なかれ。

出家後、修行する、修行しない、を恐れる事なかれ。

これが、釈迦牟尼仏の正しい法なのである。

釈迦牟尼仏は、出家者達に告げて、「知るべきである。

閻魔大王は、『私(、閻魔大王)は、いつの日か、(地獄の裁判官という、)この苦難を脱して、人の中に生まれて、人の身を得て、出家して、髭と髪を剃り除き、三種類の法衣を着て、仏道を学び修行したい』と思い、話している。

閻魔大王ですら、このように思っているのである。

まして、あなた達は、人の身を得て、出家者と成っている。

このため、諸々の出家者よ、身口意で善行を行って、欠点を無くそうと思うべきであるし、『五結』、『五種類の煩悩』を無くして、『信根、精進根、念根、定根、慧根』という『五根』を修行するべきである。

このようにして、諸々の出家者よ、仏道を学ぶべきである」と言った。

この時、諸々の出家者は、釈迦牟尼仏が説いた教えを聞いて喜んで従って行った。

明らかに知る事ができる。

このように、たとえ閻魔大王であっても、人の中に生まれる事を請い願うのである。

人の中に生まれている人は、急いで、髭と髪を剃り除き、三種類の法衣を着て、仏道を学び修行するべきである。

出家できる事は、他の「六道」よりも優れている人の中での功徳なのである。

それなのに、人の間に生まれながら、いたずらに無駄に役人の官位といった処世術を貪(むさぼ)り求め、虚しく国王や大臣の召使いとして、一生を夢幻に巡らして、来世は暗黒(の地獄)に赴(おもむ)き、頼みとするものが未だ無いのは最悪の愚かさである。

既に、受け難い人の身を受けているだけではなく、出会い難い仏法に出会っている。

急いで諸々の「縁(えん)」、「つながり」を捨てて、速(すみ)やかに出家して仏道を学び修行するべきである。

国王、大臣、妻子、眷属には、どこでも必ず出会えるが、仏法には優曇華のように出会い難い。

たちまち「無常」、「死」が来た時、国王、大臣、親しい人、従僕、妻子、珍しい宝が助けてくれる事は無い。

独りで「黄泉」、「冥界」に赴(おもむ)くのである。

自己に従うものは、善業や悪業などだけなのである。

人の身を失(な)くす時、人の身を惜しむ心は深いであろう。

人の身を保持している時に、早く出家するべきである。

これは、過去、現在、未来の諸仏の正しい法なのである。

「出家行法」には四種類、有る。
「四依」と言われている物である。

(一)姿形、寿命が尽きるまで、樹の下で坐る。
(二)姿形、寿命が尽きるまで、糞掃衣を着る。
(三)姿形、寿命が尽きるまで、乞食する。
(四)姿形、寿命が尽きるまで、病気が有る時は、「陳棄薬」を服用する。

「四依」という法を全て行えば、「出家である」と言えるし、「僧である」と言える。
「四依」という法を行わなければ、「僧である」とは言えない。
このため、「出家行法」と言う。

今、西のインドから東の地の中国まで、仏祖が正しく伝えている物は、「出家行法」なのである。
「一生、寺や林を離れない(で坐禅する)」のであれば、「四依」、「出家行法」が備わるのである。
これを「行四依」と言う。
これとは違う「五依」を打ち立てる事は、邪法を打ち立てる事に成るのである、と知るべきである。

信じて受け入れる事なかれ！
忍耐して聴く事なかれ！

仏祖が正しく伝えている物が、正しい法なのである。
仏祖が正しく伝えている、正しい法によって出家するのが、人の間での最上の最も尊い喜ぶべき幸福なのである。

このため、西のインドでは、釈迦牟尼仏の異母弟の難陀、釈迦牟尼仏の従弟の阿難陀、提婆達多（デーヴァダッタ）、阿那律、釈迦牟尼仏の親族の摩訶男、抜提は共に、釈迦牟尼仏の祖父の獅子頬王の孫であり、クシャトリヤのうち最も尊い貴い者達であったが、早く出家している。
後世のための優れた行跡である。
今、クシャトリヤではない仲間は、身を惜しむべきではない。
王子ではない仲間は、惜しむ物は何も無いではないか！
「南閻浮提」、「この世」の第一の最も尊い貴い社会的地位よりも、三界の(真の)第一の最も尊い高貴な仏に帰依する事が、出家なのである。
他の小国の王、諸々の離車（リッチャヴィ）族の人々は、いたずらに無駄に惜しむべきではない物を惜しみ、誇るべきではないものなのに誇り、留まるべきではないものに留まって、出家しなかった。
誰もが「愚かである」とする！
誰もが「最悪に愚かである」とする！

羅睺羅（ラーフラ）は、釈迦牟尼仏の息子であり、釈迦牟尼仏の父の浄飯王の孫である。

浄飯王は、帝位を羅睺羅（ラーフラ）に譲ろうとした。
けれども、釈迦牟尼仏は、羅睺羅（ラーフラ）を強引に出家させた。
出家が最も尊い法なのである、と知るべきである。
羅睺羅（ラーフラ）は、戒を厳密に守って修行した「密行第一」の釈迦牟尼仏の十大弟子」として、今に至っても未だ涅槃に入らず、全ての生者のために「福田」、「幸福を生じる源である田畑」として「この世」に現在も(目に見えないが)住んで存在している。

西のインドで釈迦牟尼仏の「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を伝えている祖師達の中に、出家した王子は多い。
二十八祖の達磨は、南インドの大国の香至王の第三王子である。
達磨は、王位を重んじないで、正しい仏法を保持して伝えている。
出家が最も尊い、と明らかに知る事ができる。

これらの人々に及ばない身分を持ちながら、出家するべきなのに、急いで出家しない人は、どのような明日を待っているのか?

呼吸する時間も待たないで、急いで出家する人は賢い。

また、知るべきである。
出家させてくれて戒を受けさせてくれた師の僧の恩は、父と母の恩と等しいのである。

次のように、「禅苑清規」の第一には記されている。
過去、現在、未来の諸仏は皆、出家して仏道を成就している、と言われている。
初祖から二十八祖までの西のインドの二十八人の祖師達、二十八祖から三十三祖までの中国の六人の祖師達、釈迦牟尼仏の心の印を伝えている者達は尽く、出家者である。
出家者は、戒律を厳密に清浄に守って、能く三界の模範と成っている。
そのため、禅の学に参入して仏道を問うて探求するには、戒律を守る事を優先する。
過ちを離れて予防しなければ、仏祖に成れない！

たとえ末法の世に成り始めて仏道が衰退している寺や林であってもなお、クチナシのような香りが良い華が花開く林なのである。
凡庸な、「草木」に例えられる「修行者」が及べる物ではないのである。
また、水と混ぜ合わせた乳のような物なのである。
乳を用いる時、水と混ぜ合わせた乳を用いるべきである。他の物を用いるべきではない。

「過去、現在、未来の諸仏は皆、出家して仏道を成就している、と言われている」と正しく伝えられている出家が、最も尊いのである。

さらに、出家していない過去、現在、未来の諸仏はいないのである。

出家が、仏から仏へ、祖師から祖師へ、正しく伝えている「正法眼蔵涅槃妙心」、「正しくものを見る眼と寂滅した妙なる心」なのであるし、無上普遍正覚なのである。

正法眼蔵　出家功徳

供養諸仏

仏は、「もし過去の世が無ければ、過去の仏は存在しないはずである。もし過去の仏が存在しなければ、出家や戒を受ける事は存在しないはずである」と言った。

(出家や戒を受ける事は存在するので、過去の仏は存在するし、過去の世は存在する。)

明らかに知るべきである。

過去、現在、未来に必ず諸仏が存在する。

過去の諸仏について、「『最初』の仏がいる」と言う事なかれ。「『最初』の仏はいない」と言う事なかれ。

「最初」の仏の有無や「最後」の仏の有無を誤って計る人は、仏法を習って学んでいない。

過去の諸仏に捧げものを捧げて、出家して、従う人は、必ず、仏に成るのである。

仏に捧げものを捧げた功徳によって、仏に成るのである。

未だかつて一人の仏にも捧げものを捧げていない生者は、仏に成る事は無い!

(供養や修行といった)原因が無いのに仏に成る事は無い。

「仏本行集経」の「第一供養品」で、次のように、釈迦牟尼仏は、目犍連に告げた。

私(、釈迦牟尼仏)は、昔(の前世)を思い出すと、無数の諸仏の下で、善の種を植えるように諸々の善行を行って無上普遍正覚を求めた。

目犍連よ。

私(、釈迦牟尼仏)は、昔(の前世)を思い出すと、転輪聖王に成って、三十億人の仏達に出会った。

(仏達は)皆、同一の称号、「釈迦(牟尼仏)」という称号で呼ばれていた。

(私、釈迦牟尼仏は、前世で、)仏達と、仏の声聞達を、尊重して、謹んで聴いて、恭しく敬い、捧げものを捧げて「四事」を十分に備えさせた。

「四事」とは、衣服、飲食物、寝具、薬である。

その時、その仏達は、私に、「あなたは無上普遍正覚を得て『世間解』、『天人師』、『仏世尊』として未来の世で無上普遍正覚を成就でき得る」という「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

目犍連よ。

私(、釈迦牟尼仏)は、昔(の前世)を思い出すと、転輪聖王に成って、八億人の仏達に出会った。

(仏達は)皆、同一の称号、「燃燈(仏)」という称号で呼ばれていた。

(私、釈迦牟尼仏は、前世で、)仏達と、仏の声聞達を、尊重して、恭しく敬い、「四事」などの捧げものを捧げた。

「『四事』などの捧げ物」とは、衣服、飲食物、寝具、薬と、幡蓋と、華と香である。

その時、その仏達は、私に、「あなたは無上普遍正覚を得て『世間解』、『天人師』、『仏世尊』に成る」という「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

目犍連(モッガラーナ)よ。

私(、釈迦牟尼仏)は、昔(の前世)を思い出すと、転輪聖王に成って、三億人の仏達に出会った。

(仏達は)皆、同一の称号、「弗沙(仏)」という称号で呼ばれていた。

(私、釈迦牟尼仏は、前世で、)仏達と、仏の声聞達に、「四事」を捧げて、皆に、悉(ことごと)く、十分に備えさせた。

その時、その仏達は、私に、「あなたは仏に成る」という「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

釈迦牟尼仏は、前世で、この他にも多数の仏達に捧げものを捧げた。

転輪聖王は、必ず「四天下」、「四大洲」を統治するので、仏達に捧げた捧げものは実に豊富であっただろう。

大いなる転輪聖王であれば、三千界を統治する。

大いなる転輪聖王の時の仏への捧げものは、今の凡人の思慮では測る事ができない。釈迦牟尼仏が説明しても了解でき難いであろう。

次のように、「仏蔵経」の浄見品第八で、釈迦牟尼仏は、舎利弗(シャーリプトラ)に告げた。

私(、釈迦牟尼仏)は、過去の前世を思い出すと、無上普遍正覚を求めて、三十億人の仏達に出会った。

(仏達は)皆、「釈迦牟尼(仏)」という称号で呼ばれていた。

私(、釈迦牟尼仏)は、それらの(前世の)時は全て、転輪聖王に成って、無上普遍正覚を求めて、姿形(、寿命)が尽きるまで、仏達と、仏の諸々の弟子に、衣服、飲食物、寝具、医薬品を捧げた。

しかし、仏達は、私に、「あなたは未来の世で仏に成る」と言って「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

なぜなら、(私、釈迦牟尼仏は、前世で、)自分と、自分の所有物に執着していたからである。

舎利弗(シャーリプトラ)よ。

私(、釈迦牟尼仏)は、過去の前世を思い出すと、八千人の仏達に出会った。

(仏達は)皆、「定光(仏)」という称号で呼ばれていた。

私(、釈迦牟尼仏)は、それらの(前世の)時は全て、転輪聖王に成って、無上普遍正覚を求めて、姿形(、寿命)が尽きるまで、仏達と、仏の諸々の弟子に、衣服、飲食物、寝具、医薬品を捧げた。

しかし、仏達は、私に、「あなたは未来の世で仏に成る」という「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

なぜなら、(私、釈迦牟尼仏は、前世で、)自分と、自分の所有物に執着していたからである。

舎利弗(シャーリプトラ)よ。

私(、釈迦牟尼仏)は、過去の前世を思い出すと、六万人の仏達に出会った。

(仏達は)皆、「光明(仏)」という称号で呼ばれていた。

私（、釈迦牟尼仏）は、それらの（前世の）時は全て、転輪聖王に成って、無上普遍正覚を求めて、姿形（、寿命）が尽きるまで、仏達と、仏の諸々の弟子に、衣服、飲食物、寝具、医薬品を捧げた。

しかし、仏達は、私に、「あなたは未来の世で仏に成る」という「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

なぜなら、（私、釈迦牟尼仏は、前世で、）自分と、自分の所有物に執着していたからである。

舎利弗（シャーリプトラ）よ。

私（、釈迦牟尼仏）は、過去の前世を思い出すと、三億人の仏達に出会った。

（仏達は）皆、「弗沙（仏）」という称号で呼ばれていた。

私（、釈迦牟尼仏）は、それらの（前世の）時は全て、転輪聖王に成って、（仏達と、仏の諸々の弟子に、）「衣服、飲食物、寝具、医薬品」という「四事」を捧げた。

（しかし、）仏達は皆、私に「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

（私、釈迦牟尼仏は、前世で、自分と、）自分の所有物に執着していたからである。

舎利弗（シャーリプトラ）よ。

私（、釈迦牟尼仏）は、過去の前世を思い出すと、一万八千人の仏達に出会った。

（仏達は）皆、「山王（仏）」という称号で呼ばれていた。

「山王仏」の時代は「上八」と名づけられていた。

私（、釈迦牟尼仏）は、それらの前世の時は全て、仏達の下で、髪を剃（そ）って法衣を着て、無上普遍正覚を習って修行した。

（しかし、）仏達は皆、私に「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

(私、釈迦牟尼仏は、前世で、自分と、)自分の所有物に執着していたからである。

舎利弗(シャーリプトラ)よ。

私(、釈迦牟尼仏)は、過去の前世を思い出すと、五百人の仏達に出会った。

(仏達は)皆、「華上(仏)」という称号で呼ばれていた。

私(、釈迦牟尼仏)は、それらの(前世の)時は全て、転輪聖王に成って、仏達と、仏の諸々の弟子に、一切の悉(ことごと)くを捧げた。

(しかし、)仏達は皆、私に「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

(私、釈迦牟尼仏は、前世で、自分と、)自分の所有物に執着していたからである。

舎利弗(シャーリプトラ)よ。

私(、釈迦牟尼仏)は、過去の前世を思い出すと、五百人の仏達に出会った。

(仏達は)皆、「威徳(仏)」という称号で呼ばれていた。

私(、釈迦牟尼仏)は、(それらの前世の時は全て、仏達と、仏の諸々の弟子に、)悉(ことごと)く、捧げものを捧げた。

(しかし、仏達は)皆、私に「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

(私、釈迦牟尼仏は、前世で、自分と、)自分の所有物に執着していたからである。

舎利弗(シャーリプトラ)よ。

私(、釈迦牟尼仏)は、過去の前世を思い出すと、二千人の仏達に出会った。

(仏達は)皆、「憍陳如(仏)」という称号で呼ばれていた。

私(、釈迦牟尼仏)は、それらの(前世の)時は全て、転輪聖王に成って、仏達(と、仏の諸々の弟子)に、一切の悉(ことごと)くの捧げものを捧げた。

(しかし、仏達は)皆、私に「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

(私、釈迦牟尼仏は、前世で、自分と、)自分の所有物に執着していたからである。

舎利弗よ。

私(、釈迦牟尼仏)は、過去の前世を思い出すと、九千人の仏達に出会った。

(仏達は)皆、「迦葉(仏)」という称号で呼ばれていた。

私(、釈迦牟尼仏)は、(それらの前世の時は全て、)仏達と、仏の諸々の弟子に、「衣服、飲食物、寝具、医薬品」という「四事」を捧げた。

(しかし、仏達は)皆、私に「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

(私、釈迦牟尼仏は、前世で、自分と、)自分の所有物に執着していたからである。

舎利弗よ。

私(、釈迦牟尼仏)は、過去の前世を思い出すと、一万劫の間、仏が「この世」へ出現しなかった。

その一万劫の間の、最初の五百劫の間に、九万人の独覚達がいた。

私(、釈迦牟尼仏)は、姿形、寿命が尽きるまで、(九万人の独覚達に、)悉く皆に、衣服、飲食物、寝具、医薬品を捧げて、尊重し、たたえた。

次の五百劫の間に、(私、釈迦牟尼仏は、)八万四千億人の独覚達に、「衣服、飲食物、寝具、医薬品」という「四事」を捧げて、尊重し、たたえた。

舎利弗よ。

この千劫が過ぎ終わると、(仏も)独覚も存在しなかった。

私(、釈迦牟尼仏)は、この時、「南閻浮提」、「この世」で死んで、「大梵天」の中に生まれて、大梵天王に成った。

このように転々として、五百劫の間、常に「大梵天」に生まれて、大梵天王に成って、「南閻浮提」、「この世」に生まれなかった。

この五百劫が過ぎ終わると、「南閻浮提」、「この世」に降下して生まれて、「南閻浮提」、「この世」を統治して化して導いて、命が終わると、「四天王天」に生まれた。

「四天王天」での命が終わると、「忉利天」、「三十三天」に生まれて、帝釈天に成った。

このように転々として、五百劫の後、「南閻浮提」、「この世」に生まれた。

五百劫の後、「大梵天」に生まれて、大梵天王に成った。

舎利弗(シャーリプトラ)よ。

私(、釈迦牟尼仏)は、九千劫の間、一回だけ「南閻浮提」、「この世」に生まれた以外は、天上にだけ生まれた。

劫が尽きて(劫火で)焼かれた時、「光音天」、「極光浄天」に生まれた。

世界が形成され終わると、「大梵天」に生まれた。

九千劫の間、全く人の中に生まれなかった。

舎利弗(シャーリプトラ)よ。

この九千劫の間、諸仏と独覚がいなかったため、多くの生者が地獄などの「三悪道」に堕ちてしまった。

舎利弗(シャーリプトラ)よ。

この一万劫が過ぎ終わると、仏が「この世」へ出現した。

(この仏は、)「普守(仏)」という称号で呼ばれた。

(普守仏は、)「如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏世尊」という仏の「十号」という称号で呼ばれた。

私(、釈迦牟尼仏)は、その時、「大梵天」での命が終わって「南閻浮提」、「この世」に生まれて、転輪聖王と成った。

(私、釈迦牟尼仏は、前世で、)「共天」という称号で呼ばれた。人の寿命は九万歳であった。

私(、釈迦牟尼仏)は、無上普遍正覚を求めて、九万歳の間、姿形、寿命が尽きるまで、普守仏と、九十億人の出家者達に、一切の「楽具」、「安楽にさせる物」を捧げた。

(しかし、)普守仏も、私に、「あなたは未来の世で仏に成る」と言って「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

なぜなら、私(、釈迦牟尼仏)は、その(前世の)時に、「諸法実相」、「全てのものの実の相」に通達できなかったため、自分と、自分の所有物に貪欲に執着していたからである。

舎利弗(シャーリプトラ)よ。

この(普守仏の)劫の間に、百人の仏達が「この世」へ出現した。

(仏達は、)各々異なる称号で呼ばれた。

私(、釈迦牟尼仏)は、それらの(前世の)時は全て、転輪聖王と成って、無上普遍正覚を求めて、姿形(、寿命)が尽きるまで、仏達と、仏の諸々の弟子に、捧げものを捧げた。

(しかし、)仏達も、私に、「あなたは未来の世で仏に成る」と言って「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

(私、釈迦牟尼仏は、前世で、自分と、)自分の所有物に執着していたからである。

舎利弗(シャーリプトラ)よ。

私(、釈迦牟尼仏)は、過去の前世を思い出すと、第七百阿僧祇劫の間に、千人の仏達に出会った。

(仏達は)皆、「閻浮檀(仏)」という称号で呼ばれていた。

私(、釈迦牟尼仏)は、(それらの前世の時は全て、)姿形、寿命が尽きるまで、(仏達と、仏の諸々の弟子に、)「衣服、飲食物、寝具、医薬品」という「四事」を捧げた。

(しかし、)仏達も、私に、「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

(私、釈迦牟尼仏は、前世で、自分と、)自分の所有物に執着していたからである。

舎利弗(シャーリプトラ)よ。

私(、釈迦牟尼仏)は、過去の前世を思い出すと、第七百阿僧祇劫の間に、六百二十万人の仏達に出会った。

(仏達は)皆、「一切儀(仏)」という称号で呼ばれていた。

私(、釈迦牟尼仏)は、それらの(前世の)時は全て、転輪聖王に成って、姿形(、寿命)が尽きるまで、仏達と、仏の諸々の弟子に、一切の「楽具」、「安楽にさせる物」を捧げた。

(しかし、)仏達も、私に、「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

(私、釈迦牟尼仏は、前世で、自分と、)自分の所有物に執着していたからである。

舎利弗(シャーリプトラ)よ。

私(、釈迦牟尼仏)は、過去の前世を思い出すと、第七百阿僧祇劫の間に、八十四人の仏達に出会った。

(仏達は)皆、「帝相(仏)」という称号で呼ばれていた。

私(、釈迦牟尼仏)は、それらの(前世の)時は全て、転輪聖王に成って、姿形(、寿命)が尽きるまで、仏達と、仏の諸々の弟子に、一切の「楽具」、「安楽にさせる物」を捧げた。

(しかし、)仏達も、私に、「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

（私、釈迦牟尼仏は、前世で、自分と、）自分の所有物に執着していたからである。

舎利弗（シャーリプトラ）よ。

私（、釈迦牟尼仏）は、過去の前世を思い出すと、第七百阿僧祇劫の間に、十五人の仏達に出会った。

（仏達は）皆、「日明（仏）」という称号で呼ばれていた。

私（、釈迦牟尼仏）は、それらの（前世の）時は全て、転輪聖王に成って、姿形（、寿命）が尽きるまで、仏達と、仏の諸々の弟子に、一切の「楽具」、「安楽にさせる物」を捧げた。

（しかし、）仏達も、私に、「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

（私、釈迦牟尼仏は、前世で、自分と、）自分の所有物に執着していたからである。

舎利弗（シャーリプトラ）よ。

私（、釈迦牟尼仏）は、過去の前世を思い出すと、第七百阿僧祇劫の間に、六十二人の仏達に出会った。

（仏達は）皆、「善寂（仏）」という称号で呼ばれていた。

私（、釈迦牟尼仏）は、それらの（前世の）時は全て、転輪聖王に成って、姿形（、寿命）が尽きるまで、仏達と、仏の諸々の弟子に、一切の「楽具」、「安楽にさせる物」を捧げた。

（しかし、）仏達も、私に、「授記」、「仏に成る予言」を授けなかった。

（私、釈迦牟尼仏は、前世で、自分と、）自分の所有物に執着していたからである。

このように転々として、「定光仏」（、「燃燈仏」）に見（まみ）えて、「無生法忍」、「生じる事を超越している真理の法の認知」を得た。

「定光仏」(、「燃燈仏」)は、私に、「あなたは未来の世で阿僧祇劫を過ぎて仏に成る。『釈迦牟尼(仏)』という称号で呼ばれる。『如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏世尊』という仏の『十号』という称号で呼ばれる」と言って「授記」、「仏に成る予言」を授けてくれた。

釈迦牟尼仏は、前世で、最初に三十億人の(同名の)釈迦牟尼仏に出会って姿形、寿命が尽きるまで捧げものを捧げてから、(最後に)「定光仏」(、「燃燈仏」)に出会うまで、(前世の時は)全て常に、転輪聖王に成って姿形、寿命が尽きるまで捧げものを捧げた。

転輪聖王の寿命は八万歳以上である。

例えば、ある転輪聖王の寿命は九万歳であった。

釈迦牟尼仏は、前世で、転輪聖王の八万歳以上の寿命の間、一切の「楽具」、「安楽にさせる物」を捧げたのである。

「定光仏」とは「燃燈仏」である。

釈迦牟尼仏が、前世で、三十億人の(同名の)釈迦牟尼仏に出会ったのは、「仏本行集経」と「仏蔵経」で同じである。

釈迦牟尼仏は、(前世で、)仏に成るまでの「三阿僧祇劫」のうち第一阿僧祇劫の間に、七万五千人の仏達に出会って仕えて捧げものを捧げたが、最初の仏の名称は(同名の)「釈迦牟尼(仏)」であり、最後の仏の名称は「宝髻(仏)」である。

（仏に成るには「三阿僧祇劫」と「百大劫」という長い年月がかかると言う場合が有る。）

（釈迦牟尼仏は、前世で、）仏に成るまでの「三阿僧祇劫」のうち第一阿僧祇劫の間に、七万六千人の仏達に出会って仕えて捧げものを捧げたが、最初の仏の名称は「宝髻（仏）」であり、最後の仏の名称は「燃燈（仏）」である。

（釈迦牟尼仏は、前世で、）仏に成るまでの「三阿僧祇劫」のうち第二阿僧祇劫の間に、七万七千人の仏達に出会って仕えて捧げものを捧げたが、最初の仏の名称は「燃燈（仏）」であり、最後の仏の名称は「勝観（仏）」である。

（釈迦牟尼仏は、前世で、）「相異熟業」を修行した九十一劫の間に、六人の仏達に出会って仕えて捧げものを捧げたが、最初の仏の名称は「勝観（仏）」であり、最後の仏の名称は「迦葉（仏）」である。

釈迦牟尼仏は、（前世で、）仏に成るまでの「三阿僧祇劫」の間、諸仏に捧げものを捧げたが、自身の身の命から国や城や妻子（による奉仕）や「七宝」、「七種類の宝」や（他人である）男女（による奉仕）などまで惜しまなかった。

釈迦牟尼仏による諸仏への捧げものは、凡人の思慮は及ぶ事ができない。

釈迦牟尼仏は、（前世で、）粟（あわ）のように黄金の粒を白銀の器に盛って満たしたり、粟（あわ）のように「七宝」、「七種類の宝」の粒を金銀の器に盛って満たしたりして仏に捧げた。

釈迦牟尼仏は、（前世で、）小豆や、水上や陸上の華や、「栴檀」という香や、沈香などを仏に捧げた。

釈迦牟尼仏は、（前世で、）五本の青蓮華を五百の金銀で買い取って燃燈仏に捧げた。

釈迦牟尼仏は、（前世で、）鹿の皮の衣を仏に捧げた。

仏への捧げものは、仏が重要とするものを捧げるわけではない（、と言える）。

急いで、自身の命が存在する時間を虚しく過ごさず、仏に捧げものを捧げるのである。

たとえ金銀を仏に捧げても、仏にとっては何の役にも立たない（、と言える）。

たとえ香や華を仏に捧げても、仏にとっては何の役にも立たない（、と言える）。

けれども、仏が捧げものを受け取ってくれるのは、生者の功徳を増上、成長させるためである、大いなる思いやりによる物なのである。

次のように、「大般涅槃経」の第二十二で、釈迦牟尼仏は言った。

善（よ）い男子よ。

私（、釈迦牟尼仏）は、無量無辺那由他劫の過去を思い出すと、その時の世界の名称は「娑婆」と言った。

（同名の）「釈迦牟尼仏」という称号の仏がいた。

(同名の釈迦牟尼仏は、)「如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏世尊」という仏の「十号」という称号で呼ばれていた。

(同名の釈迦牟尼仏は、)諸々の生者の為に、このような大般涅槃経を説いていた。

私(、釈迦牟尼仏)は、(前世で、)その時、「善友」、「善知識を持つ人」から、「(同名の)釈迦牟尼仏が生者の為に大いなる涅槃について説いている」と聞いて、心に喜びが生じて、捧げものを捧げたいと思った。

(しかし、私、釈迦牟尼仏は、前世で、)家が貧しくて無一物であったため、自身を売ろうとしたが、薄幸で売れなかったので、家に帰ろうとしたら、途中で一人の人に出会った。

(私、釈迦牟尼仏は、出会った人に、)「私は自身を売りたいのですが、あなたは買う事ができませんか?」と言った。

出会った人は、「私の家の仕事は耐えられる人がいませんが、もし、あなたが耐えられるならば、私が、あなたを買いましょう」と答えた。

(私、釈迦牟尼仏は、)「どういった作業で耐えられる人がいないのでしょうか?」と質問した。

出会った人は、「私は悪い病気で、名医から『薬として一日に三両の人肉を服用しなさい』と言われているのです。もし、あなたが身の肉、三両を日々くれるならば、あなたに五枚の金銭を与えましょう」と答えた。

(三両は約百グラムから約百二十グラム。)

私(、釈迦牟尼仏)は、その時、聞き終わって、心の中で喜んだ。

私(、釈迦牟尼仏)は、「あなた、私に金銭を与えてください。私に七日間の猶予を与えてください。私の用事が終わったら、仕事に就きます」と言った。

出会った病人は、「七日間は駄目です。(『用事が終わったら、仕事に就く』という、あなたの言葉が)真実ならば、一日間の猶予を与えましょう」と答えた。

善い男子よ。

私(、釈迦牟尼仏)は、(前世の、)その時、金銭を受け取って、(同名の)釈迦牟尼仏の所へ行って、頭を(同名の釈迦牟尼仏の)足につけて礼拝して、持っている金銭を尽く捧げた。

そうした後、誠心誠意、この大般涅槃経を聴いた。

私(、釈迦牟尼仏)は、(前世の、)その時、愚鈍で、大般涅槃経を聴いても、一つの詩しか受け取って保持できなかった。

「如来は、涅槃を証して、永遠に生死を断じている。もし誠心誠意、聴けば、常に無数の安楽を得る」

この詩を受け取って保持し終わると、出会った病人の家へ行った。

善い男子よ。

私(、釈迦牟尼仏)は、(前世の、)その時、日々三両の身の肉を与えたが、大般涅槃経の詩を思い出していたら痛くなかった。

日々、怠らず、満一か月が経った。

善い男子よ。

こうして、出会った病人の病気は癒えたし、私(、釈迦牟尼仏)の身も回復して傷跡が残らなかった。

私（、釈迦牟尼仏）は、（前世の、）その時、傷跡が残らなかったのを見て、発心した。

大般涅槃経のうち一つの詩の力ですら、このようなのである。

まして、大般涅槃経の全てを十分に備えて受け取って保持し読む力は、測り知れないのである。

私（、釈迦牟尼仏）は、この大般涅槃経に、このような利益が有るのを見て、ますます発心して、「未来に仏道を成就して『釈迦牟尼仏』という称号を得たい」と願った。

善い男子よ。

大般涅槃経の一つの詩の因縁の力によって、私（、釈迦牟尼仏）は、今日、集まっている者達の中で、諸々の天人や人の為に、大般涅槃経の全てを十分に備えて説いているのである。

善い男子よ。

このため、この大般涅槃経は不可思議であり、無数の無限の功徳を成就できる。

この大般涅槃経は、諸仏、如来の、とても深い秘密の蔵なのである。

過去の自身を売った修行者は、釈迦牟尼仏の前世の話である。

大般涅槃経と他の経を「会通する」、「共通の意味を発見する」と、釈迦牟尼仏が仏に成るまでの前世の「三阿僧祇劫」のうち第一阿僧祇劫で（同名の）古・釈迦牟尼仏に捧げものを捧げた時の話である。

（前世の、）この時、釈迦牟尼仏は瓦の職人であり、「大光明」という名前であった。

釈迦牟尼仏は、前世で、(同名の)古・釈迦牟尼仏と、仏の諸々の弟子に、草座といった座具、氷砂糖を溶かした水、ロウソクといった明かりという三種類の捧げ物を捧げた。

その時、釈迦牟尼仏は、(前世で、)「国土、称号、寿命、弟子が(同名の)釈迦牟尼仏と同様でありますように」と願い、言った。

(前世の、)この時の釈迦牟尼仏の願いは既に成就している。

そのため、仏に捧げものを捧げようとする時に、「自身は貧しい」と言う事なかれ。「私の家は貧しい」と言う事なかれ。

自身を売って諸仏に捧げものを捧げるのが、釈迦牟尼仏の正しい法なのである。

この善行を見聞きして誰もが喜ぶ!

この釈迦牟尼仏の前世の話の中で、釈迦牟尼仏は、日々三両の身の肉を裂いて取る買い主に出会った。

日々三両の身の肉を裂かれるのは、「善知識を持つ人々」でも、人は耐えられない。

けれども、仏に捧げものを捧げたい深い志に助けられて、この功徳が有ったのである。

今、私達が如来の正しい仏法を聞けるのは、釈迦牟尼仏の前世の身の肉を分けてもらっているからなのである。

今、聞ける、経の一つの詩は、五枚の金銭と交換して良い物ではないのである。

今、聞ける、経の一つの詩は、釈迦牟尼仏が、「三阿僧祇劫」と「百大劫」の間、生を受けてから捨てるまでの間も忘れる事無く、あちこちの諸仏の下で証明してきた物であり、実に不可思議な功徳が有る。

釈迦牟尼仏が伝えて残してくれた仏教の弟子は、仏教を頭を深く下げて頂戴して受け取って保持するべきである。

如来、釈迦牟尼仏は「大般涅槃経のうち一つの詩の力ですら、このようなのである」と説いているが、経、仏教の力は、最大で最深なのである。

次のように、「法華経」の「方便品」には記されている。

もし人が、華、香、幡蓋を、敬う心で、(仏の、)塔廟、宝像、画像に捧げれば、

他人に音楽を演奏させて、太鼓を打たせたり、角笛を吹かせたり、貝笛を吹かせたり、「簫」という笛、琴、「箜篌」という竪琴、琵琶、「鐃と銅鈸」というシンバルを演奏させたりして、このような色々な妙なる音の尽(ことごと)くを仏に捧げれば、

喜ぶ心で、歌って仏をたたえれば、わずかな音でも、皆、既に、仏道を成就している。

もし人が、散乱した心でも、一本の華を仏の画像に捧げれば、徐々に無数の仏を見る。

もし人が、礼拝したり、合掌だけしたり、片手をかかげたり、わずかに頭を下げたりして、仏の像に捧げものを捧げれば、徐々に無数の仏を見るし、自分で無上の仏道を成就して広く無数の生者を仏土へ渡す。

「法華経」の「方便品」の、これらが、過去、現在、未来の諸仏の「頂上」なのであるし、「眼睛」、「見る眼」なのである。

「賢者を見たら、等しくなりたいと思う事」により猛烈に激しく鋭利に精進するべきである。

いたずらに無駄に、時間を過ごす事なかれ。

無際大師と呼ばれる三十五祖の石頭希遷は、「時間を虚しく過ごす事なかれ」と言った。

「法華経」の「方便品」の、これらのような功徳を積んだ人は皆、仏に成る。

「法華経」の「方便品」の、これらのような功徳を積んだ人は皆、過去、現在、未来で同じく、仏に成る。

諸仏に捧げものを捧げた原因が、仏に成るという結果を形成するのは、唯一無二、無三なのである！

十四祖の龍樹は、「仏という結果を求める者は、一つの詩でも仏をたたえたり、一回でも『南無(帰依仏)』と言ったり、一つまみでも(仏に)焼香したり、一本でも華を(仏に)捧げたりするであろう。このような小さな行いでも、必ず、仏に成る事ができ得るであろう」と言った。

この言葉は、十四祖の龍樹、独りだけの所説であっても、身の命を投じて従うべきである。

まして、十四祖の龍樹は、釈迦牟尼仏の言葉を正しく伝えられていて、この言葉を挙げているのである！

私達は今、仏道という宝の山に上り、仏道という宝の海に入って、幸いにも、宝を獲得できたのである。

最も喜ぶべき事である。

釈迦牟尼仏などが、広大な長い年月、諸仏に捧げものを捧げた力による物なのである。

必ず仏に成れる事は、疑問の余地が無いのであるし、決定しているのである。

次のように、釈迦牟尼仏は説いている。

また、次に、小さな原因が大いなる結果をもたらす事が有るし、小さな「縁(えん)」、「つながり」が大いなる報いをもたらす事が有る。

仏道を探究する者は、一つの詩でも仏をたたえたり、一回でも「南無(帰依仏)」と言ったり、一つまみでも(仏に)焼香したりするが、必ず、仏に成る事ができ得るであろう。

まして、「諸法実相」、「全てのものの実の相」や「『不生不滅』、『不生不滅』」、「生じたり滅んだりする事を超越している真理」を聞いて知って、因縁の(善)業を修行する者は、仏に成る事を失わないのである。

このように、釈迦牟尼仏が明らかに説いている言葉を、十四祖の龍樹は親しく正しく伝えているのである。

真実の黄金の言葉は、正しく伝承されるのである。

たとえ十四祖の龍樹、独りだけの所説であっても、他の「師」を自称する凡人の所説とは比べ物に成らないのである。

十四祖の龍樹が正しく伝えて広めている、釈迦牟尼仏が示した言葉に出会えたのは、最も喜ぶべき事なのである。

これらの釈迦牟尼仏の教えを、妄(みだ)りに東の地の中国の「師」を自称する凡人の虚偽の説と比べる事なかれ。

次のように、十四祖の龍樹は言った。

また、次に、諸仏は、仏法を恭しく敬うので、仏法に捧げものを捧げて、仏法を師と為す。

なぜなら、過去、現在、未来の諸仏は皆、「諸法実相」、「全てのものの実の相」を師と為すからである。

Q.

どうして自身の中の仏法に捧げものを捧げず、他の仏法に捧げものを捧げるのか？

A.

世間の法に従うからである。

（社会という法に従うからである。）

もし出家者が「三宝」のうちの「法宝」、「仏法」に捧げものを捧げたいのであれば、自身の中の仏法に捧げものを捧げず、他の仏法を保持して知って理解している者に捧げものを捧げるべきである。

仏もまた同様なのである。

仏も自身の中に仏法は有るが、他の仏の仏法に捧げものを捧げるのである。

Q.

仏は功徳による幸福を求めない。

どうして仏は他の仏に捧げものを捧げるのか？

A.

仏は、無量の阿僧祇劫の昔から、諸々の功徳を修行しているし、諸々の善行を行っているが、報いを求めず、ただ功徳を敬っているので、他の仏に捧げものを捧げているのである。

釈迦牟尼仏が存命中の時に、ある盲目の出家者がいた。
(ある盲目の出家者は、)眼が見えなかったので、手(の感触)で衣服を縫っている時に、針の穴から糸が抜けてしまったので、「誰か、幸福をもたらす功徳を愛好して、私の為に、糸を針の穴に通してくれませんか？」と言った。
この時、釈迦牟尼仏は、そこに行って、ある盲目の出家者に、「私は幸福をもたらす功徳を愛する人である。あなたのために糸を針の穴に通しましょう」と言った。
ある盲目の出家者は、釈迦牟尼仏の声であると識別すると、素早く立って衣服を着て、釈迦牟尼仏の足に頭をつけて礼拝して、釈迦牟尼仏に「釈迦牟尼仏は功徳を既に満たしています。どうして『幸福をもたらす功徳を愛する』と言ったのでしょうか？」と言った。
釈迦牟尼仏は、知らせて、「私(、釈迦牟尼仏)は功徳を既に満たしているが、私(、釈迦牟尼仏)は、功徳の原因、功徳の果報、功徳の力を深く知っている。
今、私(、釈迦牟尼仏)が一切の全ての生者の中で最高の第一の位を得ているのは功徳による物なのである。
このため、私(、釈迦牟尼仏)は、功徳を愛するのである」と言った。
釈迦牟尼仏は、ある盲目の出家者の為に、功徳をたたえ終わると、次に随意に法を説いた。

そうしたら、ある盲目の出家者は、菩薩の「浄法眼」、「法眼」を得て、更に肉眼、眼も明らかに見えるように成った。

私、道元は、この話を、昔、亡き師である五十祖の如浄の部屋で夜話に聞き、後に、「大智度論」の文章に向かって調べた。

仏法を伝えている祖師である如浄が示してくれた教えは、明らかで、忘れて欠落した部分は無かった。

この話の文章は、「大智度論」の第十に存在する。

諸仏が、必ず、「諸法実相」、「全てのものの実の相」を師とする事は、明らかである。

釈迦牟尼仏もまた諸仏の不変の法則を証している。

「『諸法実相』、『全てのものの実の相』を師とする」とは、「仏、法、僧」という「三宝」に捧げものを捧げて恭しく敬う事なのである。

諸仏は、無量の阿僧祇劫の昔から、多数の功徳、善の種である善行を積み重ねて集めて、報いを求めず、ただ功徳を恭しく敬って捧げものを捧げているのである。

釈迦牟尼仏は、仏という結果をもたらす悟りの位に至ってもなお、小さな功徳を愛し、盲目の出家者のために糸を針の穴に通したのである。

仏という結果をもたらす功徳を明らめようと思うならば、この話は、正しく、功徳を明らめている時の様子なのである。

そのため、仏という結果をもたらす悟りの功徳や、「諸法実相」、「全てのものの実の相」という道理は、今の俗世の凡人が想像している通りではないのである。

今の凡人の想像では、誤って「悪業を造っても構わない事が『諸法実相』、『全てのものの実の相』なのであろう」と思ってしまっているし、誤って「(神通力などを)所有している事が『仏という結果をもたらす悟り』なのであろう」と思ってしまっている。

このような邪悪な見解は、たとえ八万劫を知っても、「過去についての外道の邪悪な見解である『本劫本見』と未来についての外道の邪悪な見解である『末劫末見』」、「外道の邪悪な見解を六十二種類に分類した『六十二見』」を未だ逃れられていないのである。

邪悪な見解を抱いている凡人は、「仏と仏だけが究め尽せる『諸法実相』、『全てのものの実の相』」を究め尽くせない！

なぜなら、「仏と仏だけが究め尽せる」物が(真の)「諸法実相」、「全てのものの実の相」であるので。

供養には十種類、有る。

(一)身供養(仏の肉体に捧げものを捧げる)

(二)支提供養(墓といった仏の施設で捧げものを捧げる)

(三)現前供養(目の前のものに捧げものを捧げる)

(四)不現前供養(目の前には無いものに捧げものを捧げる)

(五)自作供養(自身で捧げものを捧げる)

(六)他作供養(他者に捧げものを捧げさせる)

(七)財物供養(物を捧げる)

(八)勝供養(心からの優れた捧げ方)

(九)無染供養(汚れが無い捧げ方)

(十)至処道供養(至るべき所、至るべき境地である悟りへの道と成る、修行を捧げる)

(一)身供養

仏の「色身」、「肉体」に捧げものを捧げる事を「身供養」と名づける。

(二)支提供養

仏の霊廟に捧げものを捧げる事を「支提供養」と名づける。

次のように、「摩訶僧祇律」には記されている。

「舎利」、「仏の遺骨」が有る建物を「塔婆(ストゥーパ)」と名づける。

「舎利」、「仏の遺骨」が無い建物を「支提」と名づける。
または、「塔婆（ストゥーパ）」も「支提」も共通して「支提」と名づける。
また、中国では「塔婆」または「偸婆」と書くが、サンスクリット語では「ストゥーパ」と読む。
中国では、「方墳」または「霊廟」と訳す。
阿含経では、「支徴（シチャ）」と書く(が、「知荷反」、「シチャ」と読む)。

「支提」と呼んだり、「塔婆（ストゥーパ）」と呼んだりする。
「支提」と「塔婆（ストゥーパ）」は同じようであるが、「法華懺法」で、南嶽の慧思は、「十方世界の、舎利、尊像、支提、妙塔、多宝如来の全身の宝塔に一心に敬礼する」と言っているので、「支提」と「妙塔」、「塔婆（ストゥーパ）」は明らかに別である。
尊像と「舎利」、「仏の遺骨」が別であるように。

次のように、「摩訶僧祇律」の第三十三には記されている。

塔の法について。

釈迦牟尼仏が拘薩羅国（コーサラ）に住んでいて巡り歩いていた時、あるバラモンが地を耕していた。

あるバラモンは、釈迦牟尼仏が通り過ぎるのを見て、牛用の杖を地に突き立てて釈迦牟尼仏に敬礼した。

釈迦牟尼仏は、これを見て微笑(ほほえ)んだ。

諸々の出家者は、釈迦牟尼仏に、「どういった理由で微笑(ほほえ)んだのですか？願わくば、理由を聞かせてください」と言った。

釈迦牟尼仏は、諸々の出家者に告げて、「あのバラモンは、今、二人の仏に敬礼したからである」と言った。

諸々の出家者は、釈迦牟尼仏に、「二人の仏とは誰でしょうか？」と言った。

釈迦牟尼仏は、諸々の出家者に告げて、「私を敬礼したし、あの杖の下に迦葉仏の塔が有(り、迦葉仏も敬礼したのであ)る」と言った。

諸々の出家者は、釈迦牟尼仏に、「願わくば、迦葉仏の塔を見たいです」と言った。

釈迦牟尼仏は、諸々の出家者に告げて、「あなた達、あのバラモンから土の塊(かたまり)と、この地を求めなさい」と言った。

諸々の出家者は、土の塊(かたまり)と、この地をあるバラモンに求めた。

この時、あるバラモンは、これらを与えてくれた。

土の塊(かたまり)と、この地を得ると、その時、釈迦牟尼仏は、迦葉仏の「七宝」、「七種類の宝」による塔を出現させた。

迦葉仏の塔は、高さが一由延、広さが半由延であった。

あるバラモンは、迦葉仏の塔を見ると、釈迦牟尼仏に、「釈迦牟尼仏様、私の性は『迦葉』です。これは、私の先祖の迦葉の塔です」と言った。

その時、釈迦牟尼仏は、バラモンの迦葉の家に、迦葉仏の塔を作った。

諸々の出家者は、釈迦牟尼仏に、「釈迦牟尼仏様、私達も泥と土で迦葉仏の塔を作ってよろしいでしょうか？」と言った。

釈迦牟尼仏は、「作ってよろしい」と言った。

この時、釈迦牟尼仏は、詩で、「百、千の無数の純金を、担（かつ）いで、布施を行うのに用いる事は、一つの泥の塊（かたまり）で、仏を敬う心で、仏塔を作る事に及ばない」と説いた。

その時、釈迦牟尼仏は、自ら、迦葉仏の塔を建てた。

釈迦牟尼仏による迦葉仏の塔は、下の基礎が正方形に石垣で包囲されていて、円形の二重の塔で、角材が四つ出ていて、上には旗（はた）と天蓋を施してあり、尖塔で先端は長く「輪相」、「円を九つ重ねたような形」に成っていた。

釈迦牟尼仏は、「仏塔を作る法は、このようである」と言った。

釈迦牟尼仏は、仏塔を作り終わると、過去の仏を敬っているので、仏塔を礼拝した。

諸々の出家者は、釈迦牟尼仏に、「釈迦牟尼仏様、私達も仏塔を礼拝してよろしいでしょうか？」と言った。

釈迦牟尼仏は、「よろしい」と言った。

釈迦牟尼仏は、詩で、「人々が、百、千の無数の金を、布施を行うのに用いる事は、一つの善（よ）い心で、恭（うやうや）しく敬って、仏塔を礼拝する事に及ばない」と説いた。

この時、俗世の人々は、釈迦牟尼仏が仏塔を作ったと聞いて、華と香を持って来て釈迦牟尼仏に捧げた。

釈迦牟尼仏は、過去の仏を敬っているので、華と香を受け取ると仏塔に捧げた。

諸々の出家者は、釈迦牟尼仏に、「私達も仏塔に捧げものを捧げてよろしいでしょうか？」と言った。

釈迦牟尼仏は、「よろしい」と言った。

釈迦牟尼仏は、詩で、「車で百、千の無数台分の純金を、布施を行うのに用いる事は、一つの善（よ）い心で、華と香を仏塔に捧げる事に及ばない」と説いた。

その時、俗世の人々が雲のように集まった。

釈迦牟尼仏は、舎利弗（シャーリプトラ）に、「あなた、舎利弗（シャーリプトラ）よ、諸々の人々の為（ため）に法を説きなさい」と告げた。

釈迦牟尼仏は、詩で、「百、千の無数の世界大分の純金を施す事は、一つの仏法の教えを施して、仏法に従って修行させる事には及ばない」と説いた。

この時、一座の中に仏道を会得した者がいた。

釈迦牟尼仏は、詩で、「百、千の無数の世界大分の純金を施す事は、一つの仏法の教えを施して、仏法に従って修行して真理を見る事には及ばない」と説いた。

その時、バラモンの迦葉は、不壊の信心を会得して、仏塔の前で、仏と僧に食事を捧げた。

この時、波斯匿王（プラセーナジット）は、釈迦牟尼仏が迦葉仏の塔を作ったと聞いて、部下に命令して七百台の車に瓦（かわら）を載せて、釈迦牟尼仏の所に来て、頭を釈迦牟尼仏の足につけて礼拝して、釈迦牟尼仏に、「釈迦牟尼仏様、私(、波斯匿)は、仏塔を拡大して作りたいのですが、よろしいでしょうか？」と言った。

釈迦牟尼仏は、「よろしい」と言った。

釈迦牟尼仏は、波斯匿王(プラセーナジット)に、「過去の世の時、迦葉仏が『般涅槃した』、『肉体が死んだ』時、『吉利』という名前の王がいて、『七宝』、『七種類の宝』による迦葉仏の塔を作りたいと思った。

この時、ある家臣が、吉利王に、『未来の世には、非法な悪人が出現して、(仏塔を七種類の宝で作ってしまうと、宝を盗むために、)仏塔を破壊して、重罪を得るでしょう。

願わくば、吉利王様、瓦(かわら)で仏塔を作り、金銀で覆いましょう。

もし仏塔から金銀を盗んで取る者がいても、仏塔はなお完全に健在であるでしょう』と言った。

吉利王は、家臣の言葉通りに、瓦(かわら)で仏塔を作り、金銀で覆った。

仏塔は、高さが一由延であり、広さが半由延であった。

銅で仏塔の基礎の石垣を作った。

仏塔は、七年間と七か月間と七日間が経って完成した。

仏塔が完成し終わると、華と香を、迦葉仏と、迦葉仏の下にいた出家者に捧げた」と告げた。

波斯匿王(プラセーナジット)は、釈迦牟尼仏に、「吉利王は、功徳がもたらす幸福によって珍しい宝を多数、所有していました。私(、波斯匿)も仏塔を作りますが、吉利王の仏塔には及ばないでしょう」と言った。

波斯匿王(プラセーナジット)は、仏塔を作った。

仏塔は、七か月間と七日間が経って完成した。

波斯匿王(プラセーナジット)は、仏塔が完成し終わると、釈迦牟尼仏と、出家者に捧げものを捧げた。

塔を作る法について。

仏塔の下の基礎を正方形にし石垣で包囲し、円形の二重の塔にし、角材を四つ出し、上には旗(はた)と天蓋を施し、尖塔の先端は長くし「輪相」、「円を九つ重ねたような形」にする。

もし、「仏は貪欲、瞋恚、愚痴を既に除去しているのに、こんな(立派な)塔を用いる」と言ってしまったら、戒律を破ってしまった罪を得てしまい、戒律を破ってしまった悪業への報いは重いであろう。

これを「塔法」と名づける。

「塔事」について。

寺院を建てる時は、先に、あらかじめ、好い土地を計らって、仏塔を建てる場所とする。

仏塔は、寺院の南に在るのは駄目であるし、西に在るのも駄目である。東に在るか、北に在るべきである。

寺院の土地の土が仏塔の土地に侵入するのは駄目であるし、仏塔の土地の土が寺院の土地に侵入するのは駄目である。

仏塔が「死尸林」、「土葬の墓地」に近くて、犬が食べ残して持って来て仏塔の土地を汚すならば、仏塔の土地に垣根を作りなさい。

仏塔の西か南に僧房を作りなさい。

寺院の土地の水を仏塔の土地に流し入れるのは駄目である。

仏塔の土地の水を寺院の土地に流し入れるのはかまわない。

仏塔は高く明るい場所に在るべきであるし、作るべきである。

仏塔の垣根の中にいて、衣服を洗って日干ししたり、履物をはいたり、頭や肩を覆ったり、涙や鼻水や唾を地に落としたりするのは駄目である。

もし、「仏は貪欲、瞋恚、愚痴を既に除去しているのに、こんな(立派な)塔を用いる」と言ってしまったら、戒律を破ってしまった罪を得てしまい、戒律を破ってしまった悪業への報いは重いであろう。

これを「塔事」と名づける。

塔の、仏の物を収める「龕」、「厨子」について。

波斯匿王(プラセーナジット)は、ある時、釈迦牟尼仏の所へ行って、頭を釈迦牟尼仏の足につけて礼拝し、釈迦牟尼仏に、「釈迦牟尼仏様、私達は迦葉仏の為(ため)に塔を作りましたが、『龕』、『厨子』を作ってもよろしいでしょうか？」と言った。

釈迦牟尼仏は、「よろしい。過去の世の時、迦葉仏が『般涅槃した』、『肉体が死んだ』後、吉利王は、仏の為(ため)に塔を建てた。吉利王は、四面に『龕』、『厨子』を作った。『龕』、『厨子』の上に、獅子の像と、多様な色彩の絵を置いた。『龕』、『厨子』の前に、石垣を作り、華を置く所を用意した。『龕』、『厨子』の内側に、幡(はた)と天蓋を懸けた」と言った。

もし、「仏は貪欲、瞋恚、愚痴を既に除去しているのに、自ら荘厳して楽しみを享受する」と言ってしまったら、戒律を破ってしまった罪を得てしまい、戒律を破ってしまった悪業への報いは重いであろう。

これを「塔龕」と名づける。

明らかに知る事ができる。

仏は、仏という結果、悟りの上にいても、古代の仏のために塔を建てて、仏塔を礼拝し捧げものを捧げるのである。

これは、諸仏の不変の法則なのである。

このような事例は多いが、暫(しばら)く、前述の事例を挙げた。

仏法では「有部」が優れているが、その中で、「摩訶僧祇律」が最も根本なのである。

「摩訶僧祇律」は、法顕が、初めて、茨(イバラ)の道をかき分けて、西のインドに行き、霊山に上って、中国へ持って来た物なのである。

祖師から祖師へ正しく伝えられて来ている法は、「有部」の法と同じである。

(三)現前供養

仏の身や「支提」と対面して捧げものを捧げる。

(四)不現前供養

目の前にはいない仏や「支提」に広く捧げものを捧げる。

現前供養と不現前供養は共に、仏と「支提」と、目の前にはいない仏と
「支提」に捧げものを捧げている、と言える。（しかし、）
現前供養は大功徳を得るが、不現前供養は大大功徳を得る。対象が広いの
で。（ただし、）
現前供養と不現前供養は最大の大功徳を得る。

(五)自作供養

自身で仏や「支提」に捧げものを捧げる。

(六)他作供養

他者に仏や「支提」に捧げものを捧げさせる。
少しでも物が有れば、怠(おこた)らず、他者に捧げさせるのである。
自作供養と他作供養は同じである、と言える。
自作供養は大功徳を得るが、他作供養は大大功徳を得る。
(他作供養は、他者にも供養の功徳を積ませるので。)
自作供養と他作供養は最大の大功徳を得る。

(七)財物供養

物を仏や「支提」に捧げる。

財物供養には三種類、有る、と言える。

(一)資具供養。衣服や食事などである。

(二)敬具供養。華や香などである。

(三)厳具供養。他の一切の、宝や装飾などである。

(八)勝供養

勝供養には三種類、有る。

(一)種々の捧げものを捧げる事に専念する。

(二)清純な清浄な信心で、仏の徳の重さを信じれば、理が供養に適(かな)う。

(三)「回向心」、「ある相手に布施などの功徳を分け与える心」で、心中で仏に求めて、捧げものを捧げる。

(九)無染供養

無染供養には二種類、有る。

(一)心無染。(心について、)一切の過ちを離れる。

(二)財物無染。(物について、)法から外れる過ちを離れる。

(十)至処道供養

修行の結果を捧げる事を「至処道供養」と名づける。

「仏果」、「悟り」は至るべき所(、至るべき境地)なのである。

捧げものを捧げる行いは、悟りという所(、境地)に至る事ができるので、「至処道」と名づける。

「至処道供養」を「法供養」と名づけたり、「行供養」と名づけたりする。

至処道供養には三種類、有る。

(一)「財物供養」を「至処道供養」とする。

(二)「随喜供養」(、「善を喜んで捧げものを捧げる事」)を「至処道供養」とする。

(三)「修行供養」(、「修行を捧げる事」)を「至処道供養」とする。

仏への供養には、これら「十(種)供養」が有るが、法への供養でも、僧への供養でもまた同様である。

法への供養とは、仏が説いた理、教え、修行と、経典に捧げものを捧げるのである。

僧への供養とは、一切の三乗の聖者達、聖者の「支提」、聖者の姿形をかたどった絵や像など、聖者の塔廟と、聖者ではない凡人の僧に捧げものを捧げるのである。

次に、供養の心には六種類、有る。

(一)福田無上心(「仏、法、僧」という「三宝」は、「福田」、「幸福を生じる源である田畑」の中で無上であると思う心)

(「仏、法、僧」という「三宝」は、)「福田」、「幸福を生じる源である田畑」の中で最も優れている幸福を生じる(と思う心)。

(二)恩徳無上心(「仏、法、僧」という「三宝」の恩、徳は、無上であると思う心)

一切の全ての善と楽しみは、「仏、法、僧」という「三宝」によって生み出されている(と思う心)。

(三)生一切衆生最勝心(「仏、法、僧」という「三宝」は、一切の全ての生者に、最も優れている心を生じさせると思う心)

(四)如優曇鉢華難遇心(仏には、優曇華のように出会い難いと思う心)

(五)三千大千世界殊独一心(仏は、三千大千世界で特別であり単独であると思う心)

(六)一切世間出世間具足依義心(仏は、「世間の法」、「社会という法」と「出世間の法」、「世間を超越している法」を十分に備えていて、全ての生者のための依り所と成る事ができると思う心)

如来、仏は、「世間の法」(、「社会という法」)と「出世間の法」、「世間を超越している法」を十分に備えていて、全ての生者のための依り所と成る事ができる事を「具足依義」と名づける。

これらの六つの心で、少しの物でも、「仏、法、僧」という「三宝」に捧げれば、無数の功徳を獲得できる。

まして、多くの物を、これらの六つの心で、「仏、法、僧」という「三宝」に捧げれば、無数の功徳を獲得できる!

このように、必ず誠心誠意で、(諸仏などに)捧げものを捧げるべきである。

諸仏は、必ず、(諸仏などに)捧げものを捧げて来ているのである。

(諸仏などに)捧げものを捧げる理由は、遍(あまね)く、経や律で明らかであるが、なお、仏祖は目の当たりに正しく伝えて来ている。

師の僧のそばに仕えて修行して労に服した月日は、(諸仏などに)捧げものを捧げた時に成っているのである。

仏の姿形をかたどった絵や像や、「舎利」、「仏の遺骨」を安置して、捧げものを捧げて礼拝し、塔廟を建て、「支提」を建てる規則は、唯一、仏祖の家の中に正しく伝えられている。

仏祖の法の子孫でなければ正しく伝えてもらえない。

また、もし法の通りに正しく伝えてもらえなければ、規則を間違えてしまう。

規則を間違えてしまえば、供養は真実の供養ではなく成ってしまう。

供養が真実の供養ではなく成ってしまえば、功徳が疎(おろそ)かに成ってしまう。

必ず、法の通りの供養の法を習って正しく伝えるべきである。

三十三祖の大鑑禅師の弟子である令韜禅師は、曹谿山の三十三祖の大鑑禅師の塔の近くで仕えて年月を過ごしたし、三十三祖の大鑑禅師は、昼夜、休まず、米をついて僧達に捧げたが、皆、供養の法の通りなのである。

これらの例は、供養の例の少しに過ぎず、例を一通り挙げようとすると時間が足りなく成ってしまう。

このように、(諸仏などに)捧げものを捧げるべきである。

正法眼蔵　供養諸仏

帰依三宝(帰依仏法僧宝)

「禅苑清規」の「一百二十問」の「第一」には「仏、法、僧を敬うか否か?」と記されている。

明らかに知る事ができる。

西のインドから東の地の中国まで、仏祖が正しく伝えている物は、仏、法、僧を恭(うやうや)しく敬う事なのである。

仏、法、僧に帰依していなければ、仏、法、僧を恭(うやうや)しく敬わないし、仏、法、僧を恭(うやうや)しく敬っていなければ、仏、法、僧に帰依できていない。

仏、法、僧に帰依する功徳は、必ず、「感応道交する時」、「通じ合う時」、成就するのである。

たとえ天上でも、人の間でも、「地獄、餓鬼、畜生」という「三悪道」でも、「感応道交すれば」、「通じ合えば」、必ず、仏、法、僧に帰依するのである。

既に仏、法、僧に帰依している者は、生から生へ、世から世へ、至る所で、「増上」、「成長」して、必ず、功徳を積み重ねて、無上普遍正覚を成就するのである。

既に仏、法、僧に帰依している者は、自ら悪友に引きずられて、「魔」、「仏敵」からの障害に出会って、暫く「断善根に成っても」、「一闡提になっても」、「仏法を信じない者に成っても」、終には「続善根して」、「善の種となる善行を続けて」、仏、法、僧に帰依している功徳が「増上」、「成長」するのである。

「仏、法、僧」という「三宝」に帰依している功徳は、最終的に、不朽なのである。

「仏、法、僧」という「三宝」に帰依するとは、清浄な信心に専念して、如来、仏が存命中でも死後でも、合掌して頭を下げて、次のように、口で唱えて言う事である。

「私は、今の身から、仏の身に至るまで、仏に帰依します。
法に帰依します。
僧に帰依します。
『仏』、『両足尊』に帰依します。
『法』、『離欲尊』、『欲を離れられる尊い物』に帰依します。
『僧』、『衆中尊』、『生者の中の尊い者達』に帰依します。
『帰依仏竟』、『最後まで仏に帰依し徹します』。
『帰依法竟』、『最後まで法に帰依し徹します』。
『帰依僧竟』、『最後まで僧に帰依し徹します』」

遥かな「仏果」、「悟り」を志して、このように「僧那」、「誓い」を起こすのである。

そうすれば、身心は今も刹那、刹那に生じて滅んでいるが、法身は必ず成長して養われて、悟りを成就するのである。

「帰依」の「帰」は「帰投」(、「帰還する事」)であるし、「帰依」の「依」は「依伏」(、「頼る事」、「信頼する事」、「信じる事」)である。

このため、「帰依」と言うのである。

「帰投」の相とは、例えば、子が父の所へ帰るような物なのである。

「依伏」の相とは、例えば、国民が国王を頼るような物なのである。

「帰依」とは、救済の言葉なのである。

仏は、大いなる師であるので、帰依するのである。

法は、良い薬であるので、帰依するのである。

僧は、「勝友」、「優れた『善友』、『善知識を持つ人々』」であるので、帰依するのである。

「Q.

なぜ、ひとえに、仏、法、僧という三つのものだけに帰依するのか?

A.

仏、法、僧という三種類のものは、最終的に帰る場所であるし、能く全ての生者を生死という迷いから離れさせて解脱させて大いなる悟りを証させるので、帰依するのである」

「仏、法、僧という三種類のもの」は究極的に不可思議な功徳なのである。

仏は、西のインドのサンスクリット語では「仏陀耶」(、「仏陀」)、「ブッダ」と呼び、中国では「覚」(、「覚者」)と訳すが、「無上普遍正覚」(、「無上普遍正覚者」)なのである。

法は、西のインドのサンスクリット語では「達磨」、「曇無」、「ダルマ」と呼ぶが、中国での表記の違いはサンスクリット語の発音の違いによる物であり、中国では「法」と訳す。

「善法」、「善いもの」や「悪法」、「悪いもの」や「無記の法」、「善悪に分け難いもの」を全て共に「法」、「もの」と呼ぶ場合が有るが、帰依するものである「仏、法、僧」という「三宝」の中の「法」は規則の法なのである。

僧は、西のインドのサンスクリット語では「僧伽」、「サンガ」と呼び、中国では「和合衆」(、「衆」)と訳す。

次のように、仏、法、僧をたたえて来ている。

「住持三宝」、「保持できる三宝」。

「形像、塔廟、仏宝」、「仏の姿形をかたどった絵や像や、仏塔や仏の霊廟という仏」。

「黄紙朱軸、所伝、法宝」、「巻物、書物の経典や、伝えられている言葉という法」。

「剃髪、染衣、戒法儀相、僧宝」、「髪を剃り、法衣を着て、戒律を身につけている、僧」。

「化儀三宝」、「化の導きとしての三宝」。

「釈迦牟尼世尊、仏宝」、「釈迦牟尼仏という仏」。

「所転法輪、流布聖教、法宝」、「『転じられた法輪』、『説かれた法』や、流布している仏教という法」。

「阿若憍陳如等五人、僧宝」、「阿若憍陳如といった『五比丘』という僧」。

「理体三宝」、「理としての三宝」。

「五分法身」、「五つに分類できる法身」を「仏宝」、「仏」と名づける。

「滅諦無為」、「寂滅の真理である、消滅しない不変の絶対の真理」を「法宝」、「法」と名づける。

「学無学功徳」、「『無学』、『学ぶ必要が絶えて無く成った境地』を学ぶ功徳」を「僧宝」、「僧」と名づける。

「一体三宝」、「一体である三宝」。

「証理大覚」、「理を証して大いに悟った者」を「仏宝」、「仏」と名づける。

「清浄離染」、「清浄で、汚染を離れる事」を「法宝」、「法」と名づける。

「至理和合、無擁無滞」、「理に至って和合して、障害、停滞が無い者」を「僧宝」、「僧」と名づける。

このような「仏、法、僧」という「三宝」に帰依するのである。

幸福をもたらす功徳が少ない生者は、「仏、法、僧」、「三宝」という名前すら聞く事ができないのである。

まして、幸福をもたらす功徳が少ない生者は、「仏、法、僧」という「三宝」に帰依する事ができ得ないのである！

「法華経」の「如来寿量品」で、釈迦牟尼仏は、「是諸罪衆生、以悪業因縁、過阿僧祇劫、不聞三宝名」、「この諸々の罪の生者は、悪業の因縁によって、阿僧祇劫を過ぎても、『三宝』の名前を聞く事ができない」と言っている。

法華経は、諸仏、如来の一大事の話なのである。

大いなる師である釈迦牟尼仏が説いた諸々の経の中で、法華経は大いなる王なのであるし大いなる師なのである。

他の経、他の法は皆、法華経の臣民なのであるし眷属なのである。

法華経の中の所説は真実なのであるし、他の経の中の所説は皆、方便を帯びていて釈迦牟尼仏の本意ではないのである。

他の経の中の説を持って来て比べて法華経を考えるのは逆に成ってしまうのである。

法華の功徳の力を被(こうむ)らなければ他の経は存在できないのである。

他の経は皆、法華に「帰投」、「帰還」する事を待っているのである。

この法華経の中に「この諸々の罪の生者は、悪業の因縁によって、阿僧祇劫を過ぎても、『三宝』の名前を聞く事ができない」という説が存在するのである。

「仏、法、僧」という「三宝」の功徳は、正に、最も尊いのであるし、最上なのである、と知るべきである。

次のように、釈迦牟尼仏は言った。

人々は逼迫される事を怖れて、多くが、諸々の山、田畑、森林、一本だけの樹、「制多」、「礼拝対象」などに帰依する。（しかし、）

この帰依は優れていない。

この帰依は尊くない。

この帰依で多くの苦しみを解脱する事はできない。

諸仏に帰依し、法、僧に帰依する者は、

「苦集滅道」、「この世は苦であり、執着が苦を招き集めており、執着を滅する事ができ、執着を滅する道が有る事を知る事ができる」という「四聖諦」の中にいて、常に智慧によって観察して、「苦」を知って、「苦集」を知って、多くの苦しみを永遠に超越できる事を知って、「八支聖道」、「八聖道」を知って、安穏である「涅槃」、「寂滅」に趣く。

この帰依は最も優れている。

この帰依は最も尊い。

この帰依で必ず多くの苦しみを解脱できる。

釈迦牟尼仏は、明らかに、一切の全ての生者のために、示しているのである。

全ての生者は、いたずらに無駄に、逼迫される事を怖れて「山神」という霊や鬼神などに帰依したり外道の「制多」、「礼拝対象」に帰依したりする事なかれ。

外道が外道の「礼拝対象」への帰依によって多くの苦しみを解脱する事は無い。

外道の邪教に従って、「牛戒、鹿戒、羅刹戒、鬼戒、瘂戒、聾戒、狗戒、鶏戒、雉戒をしたり」、「牛、鹿、羅刹、鬼、話せない人、耳が聞こえない人、犬、鶏、雉(キジ)のふりをしたり」、

灰を身に塗(ぬ)ったり、

長髪にしたり、

羊で時間を祭ったり、

呪(まじな)いをしてから殺したり、

四月に(神として)火に仕えたり、

七月に(神として)風に仕えたり、

百千億の華を諸々の天人に捧げたりすると、諸々の願いは成就するとしている。（しかし、）

これらのような法を解脱の原因とできる理は無い。

知者がほめないような代物である。

虚しく苦しんで、善(よ)い報いは無い。

このため、いたずらに無駄に邪道に帰依しないように、明らかに、見分けて究めるべきである。

たとえ「牛戒、鹿戒、羅刹戒、鬼戒、瘂戒、聾戒、狗戒、鶏戒、雉戒」、「牛、鹿、羅刹、鬼、話せない人、耳が聞こえない人、犬、鶏、雉(キジ)のふりをする事」と異なる物であっても、その道理が、もし一本だけの樹といった「制多」、「礼拝対象」などの道理と符号するならば、帰依する事なかれ。

人の身を得る事は難しいのであるし、仏法に出会う事は稀(まれ)なのである。

いたずらに無駄に、鬼神の眷属として一生を過ごして、虚しく邪悪な見解の外道の仲間として多くの生を過ごすのは、悲しむべきである。
早く、「仏、法、僧」という「三宝」に帰依して、多くの苦しみを解脱するだけではなく、悟りを成就するべきである。

「希有経」には、「『四天下』、『四大洲』と『六欲天』を教化して皆に『四果』、『阿羅漢果』を得させても、一人の人に『三帰』、『仏、法、僧という三宝に帰依する事』を受け入れさせる功徳には及ばない」と記されている。

「四天下」とは、「東西南北洲」、「四大洲」である。
「四大洲」の中で北倶廬洲は、三乗の化の導きが至らない場所である。
北倶廬洲の一切の全ての生者を教化して阿羅漢と成らせる事は、実に、「とても希有である」とするべきである。
たとえ北倶廬洲の全ての生者を阿羅漢と成らせる利益が有っても、一人の人を教えて「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」を受け入れさせる功徳には及ばないのである。
また、「六欲天」は「道」、「真理」を会得する生者が稀(まれ)である場所である。
「六欲天」の全ての生者に「四果」、「阿羅漢果」を得させても、一人の人に「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」を受け入れさせる功徳の大きさ、深さに及ばないのである。

次のように、「増一阿含経」には記されている。

「忉利天」、「三十三天」の、ある天人は、「五衰」の相が現れて、猪（イノシシ）の中に生まれようとしていた。

ある天人の憂（うれ）いの声は、帝釈天にまで聞こえた。

帝釈天は、ある天人の憂（うれ）いの声を聞いて、ある天人を呼んで来させて、ある天人に、「あなた、『仏、法、僧』という『三宝』に帰依しなさい」と告げた。

ある天人は、即時、帝釈天の教えの通りにした。

すると、ある天人は、猪（イノシシ）として生まれる事を免れた。

次のように、仏は詩で説いている。

諸々の者は、仏に帰依すれば、地獄などの「三悪道」に落ちない。

「漏」、「煩悩」が尽きて、人の間や天にいて、「涅槃」、「寂滅」に至るであろう。

ある天人は、「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」を受け入れ終わると、長者の家に生まれて、出家する事ができ得て、「無学」、「学ぶ必要が絶えて無く成った境地」を成就した。

「仏、法、僧」という「三宝」に帰依する功徳は、量る事ができず、無量、無限なのである。

釈迦牟尼仏が存命中に、二十六億の飢えた竜が共に、釈迦牟尼仏の所に来て、皆、尽(ことごと)く、雨のように涙を降らして、釈迦牟尼仏に、「願わくば、憐れんで、私達を救済してください、大いなる思いやり深い釈迦牟尼仏様。私達は、過去の前世の時を思い出すと、仏法の中で出家でき得たが、色々な悪業を造ってしまいました。悪業のせいで、無数の身を経ても、地獄などの『三悪道』にいます。他の報いのため、竜の中に生まれていて、極大の苦しみを受けています」と言った。

釈迦牟尼仏は、諸々の竜に、「あなた達、今、尽(ことごと)く、『三帰』、『仏、法、僧という三宝に帰依する事』を受け入れて、一心に善を修行しなさい。この縁(えん)のおかげで、『賢劫』という『現在の大劫』の中で、『賢劫』の最後の仏、楼至(仏)に出会えるであろう。楼至仏の世で、罪を除去して滅ぼす事ができ得るであろう」と告げた。

その時、諸々の竜は、この釈迦牟尼仏の言葉を聞き終わると、皆、悉(ことごと)く、真心で、姿形、寿命が尽きるまで、各々、「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」を受け入れた。

釈迦牟尼仏が自ら、諸々の竜を救済する時に、他の法は無く、他の術(すべ)は無く、唯一、「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」だけを授けた。

諸々の竜は、過去の前世で出家した時に、かつて「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」を受け入れたが、悪業の報いで飢えた竜と成った時、他の法では救えなかったので、「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」を授けた。

「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」の功徳は最も尊いのであるし、最上なのであるし、とても深く不可思議なのである、と知るべきである。

釈迦牟尼仏は既に「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」の功徳を証明している。全ての生者は信じて受け入れるべきである。

釈迦牟尼仏は、十方の諸仏の名称を唱えさせず、唯一、「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」だけを授けた。

釈迦牟尼仏の意図が、とても深いのを誰も測り知る事ができない！

今の全ての生者は、いたずらに無駄に、仏の名称を唱えるよりは、速(すみ)やかに「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」を受け入れるべきである。

「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」の大いなる功徳を愚鈍なために虚しく無駄にする事なかれ。

その時、集まっている者達の中に、ある盲目の龍女がいた。

ある龍女は、口の中が腐乱して、諸々の種類の虫に満ちていて、状態が排泄物のようであったし、汚さが女性の器官の中の不浄な物のようですらあった。

生臭くて目を開けて見ているのが難しいほどであった。

色々な所が噛(か)まれて膿(うみ)と血が流出していた。
全身が常に蚊(カ)、虻(アブ)、諸々の悪い毒を持つ蝿(ハエ)に噛(か)まれていた。
身体の臭さは見聞きした事が無いほどであった。

　この時、釈迦牟尼仏は、大いなる思いやり深さで、ある龍女の、盲目と、このように苦しみ困っているのを見て、「あなたは、どんな縁(えん)のために、このような悪い身を得たのか？　過去の前世で、かつて、どんな悪業を為(な)したのか？」と質問した。

　ある龍女は、「釈迦牟尼仏様。
私の今の、この身は、多くの苦しみに逼迫(ひっぱく)されて一時も止む事が無いです。
言っても、よく説明できません。
私は、過去三十六億年を思い出すと、百千年は悪い龍の中で、このような苦しみを受けて、昼夜、刹那も止む事が無いです。
私は、過去九十一劫を思い出すと、毘婆尸仏の仏法の中で女性の出家者に成りましたが、欲望の事を思う事は酔った人よりも度が過ぎていました。
また、出家しても、仏法の通りにできませんでした。
伽藍の中に寝具の敷物(しきもの)を敷(し)いて数々の淫行を行(おこな)って欲望を満たして大いに楽しんでいました。
また、他人の物を貪(むさぼ)り求めて在家信者からの布施を多く受け取っていました。
このため、九十一劫の間、常に天人や人の身を受ける事ができ得ず、常に地獄などの『三悪道』で諸々の焼かれたり煮られたりするような苦しみを受けていました」と答えた。

　釈迦牟尼仏は、「もし、そのようであるならば、この劫が尽きたら、あなたは、どこに生まれるであろうか？」と、また質問した。

ある龍女は、「私は、過去の悪業の力が理由で、他の世界に生まれても、劫が尽きる時、悪業という風が吹いて、また、この世に生まれて来るでしょう」と答えた。

その時、ある龍女は、この言葉を言い終わると、「大いなる思いやり深い釈迦牟尼仏様、願わくば、私を救済してください。願わくば、私を救済してください」と言った。

この時、釈迦牟尼仏は、水を手で掬って、ある龍女に「この水を『瞋陀留脂薬和』と言う物とする。

私(、釈迦牟尼仏)は、今、誠実に言葉を発して、あなたに語っている。

私は、過去(の前世で)、鳩を救う為に、身の命を捨てたが、終に疑って惜しむ心を起こさなかった。

もし、この言葉が真実であれば、あなたの悪い病気は悉く皆、除去されて癒えるであろう」と告げた。

その時、釈迦牟尼仏が口で水を含み、ある盲目の龍女の身に注ぐと、一切の悪い病気は皆、癒えた。

ある龍女は、癒してもらうと、「私は、今、釈迦牟尼仏様から『三帰』、『仏、法、僧という三宝に帰依する事』を受け入れたい、と乞い願います」と言った。

この時、釈迦牟尼仏は、ある龍女の為に、「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」を授けた。

ある龍女は、昔、毘婆尸仏の仏法の中で女性の出家者と成っていた。

禁戒を破ってしまったが、仏法に通じている事と塞がっている事を見聞きできた。

今、目の当たりに釈迦牟尼仏に会って「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」を授かる事を乞い願って、釈迦牟尼仏から「三帰」を受けたのは、「善の種と成る善行を厚く植えた」と言える。

仏に見える事ができる功徳は、必ず、「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」による物なのである。

私達は盲目の龍ではないし人以外の身ではないが、如来を見る事ができていないし、仏に従って「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」を受ける事ができていないし、仏に見える事から遥か遠いのである。恥じるべきである。

釈迦牟尼仏は自ら「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」を授けた。

「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」の功徳は、とても深く無量である、と知るべきである。

帝釈天も野干を礼拝して「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」を受けたが、皆、「三帰」の功徳が、とても深いからなのである。

釈迦牟尼仏が迦毘羅衛の尼拘陀林にいた時、釈迦族の摩訶男が釈迦牟尼仏の所に来て、「どういった者を『在家信者』と呼ぶのですか？」と言った。

釈迦牟尼仏は、釈迦族の摩訶男の為に、「善い男子や善い女の人がいて、諸々の素質を完全に備えていて、『三帰依』、『仏、法、僧という三宝に帰依する事』を受け入れたら、『在家信者』と呼ぶ」と説いた。

釈迦族の摩訶男は、「釈迦牟尼仏様、どういった者を『一分の在家信者』と呼びますか？」と言った。
釈迦牟尼仏は、「摩訶男よ、もし『三帰』、『仏、法、僧という三宝に帰依する事』を受け入れて一つでも戒を受ければ、『一分の在家信者』と呼ぶ」と言った。

仏の弟子に成るには、必ず、「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」によるのである。
どの戒を受けるにも、必ず「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」を受け入れた後で諸々の戒を受けるのである。
そのため、「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」によって戒を得られるのである。

次のように、「法句経」には記されている。

昔、ある帝釈天は、命が終わると驢馬（ロバ）の中に生まれると知って、憂いが止まず、「苦しみを救える者は、唯一、仏だけである」と言った。
ある帝釈天は、仏の所へ行って、頭を地につけて敬礼して地にひれ伏して、仏に帰依した。
ある帝釈天は、起き上がる前に命が終わって驢馬（ロバ）の胎内に生まれた。
母の驢馬（ロバ）は鞚（くつわ）を断ち切って、陶工の家の器を破壊した。

器の作り主が母の驢馬を打ち、終に母の驢馬の胎を傷つけて、ある帝釈天はまた帝釈天の身の中に入った。

仏は、「命を落とす際、『仏、法、僧』という『三宝』に帰依したので、罪に対して既に終わったのである」と言った。

ある帝釈天は、この言葉を聞いて、初果を会得した。

世間の苦しみを救えるのは、仏だけである。

このため、ある帝釈天は急いで仏の所に行った。

ある帝釈天は、地にひれ伏している間に命が終わって、驢馬の胎内に生まれた。

仏に帰依した功徳によって、母の驢馬の鞚が破れて、母の驢馬は陶工の家の器を踏んで破壊した。

器の作り主は、母の驢馬を打ち、母の驢馬の身は痛んで、体内に宿していた子の驢馬が破壊された。

そして、ある帝釈天は、帝釈天の身に帰って入った。

仏の説法を聞いて初果を会得した。

「仏、法、僧」という「三宝」に帰依した功徳の力による物なのである。

そのため、世間の苦しみを速やかに離れて、無上普遍正覚を証して会得させるのは、必ず、「仏、法、僧」という「三宝」に帰依した力による物なのである。

「三帰」、「『仏、法、僧』という『三宝』に帰依する事」の力は、地獄などの「三悪道」を離れさせるだけではなく、帝釈天の身にまた入らせる。天上という果報を得るだけではなく、「須陀洹果」、「預流果」、「初果」の聖者と成った。

実に、「仏、法、僧」という「三宝」の功徳という海は、無量、無限なのである。

釈迦牟尼仏が存命中は、人や天人には、このような喜ぶべき幸福が有った。今、如来、釈迦牟尼仏の死後、「後五百歳」、「末法の世」の時、人や天人は、どうすれば善(よ)いのか？けれども、如来、釈迦牟尼仏の姿形をかたどった絵や像や、「舎利」、「釈迦牟尼仏の遺骨」などはなお、世間に現在も存在する。釈迦牟尼仏の絵や像や、「舎利」、「釈迦牟尼仏の遺骨」などに帰依すると、前述のような功徳を得られるのである。

次のように、「未曾有経」には記されている。

次のように、釈迦牟尼仏は言った。

過去の無数の劫を思い出すと、毘摩大国の徙陀山の中に、ある野干(ジャッカル)がいた。ある野干(ジャッカル)は、獅子(ライオン)に追われて食べられようとして、奔走して、井戸に落ちて、井戸から出る事ができなく成ってしまった。

三日間が経って、ある野干（ジャッカル）は、心を開いて、死を受け入れて、詩で、「不幸だな。
今日、苦しみに逼迫（ひっぱく）されて井戸で命を落とそうとしている。
一切の万物は皆、無常なのである。
残念なのは、獅子（ライオン）に自身を食べさせなかった事である。
『南無帰依十方仏』、『十方の諸仏に敬礼して帰依します』。私の心は清浄で利己心が無い事を知ってください」と言った。

その時、ある帝釈天は、「仏」という言葉を聞いて、厳粛な気持ちに成って、鳥肌が立って、古代の仏を思い出した。

ある帝釈天は、「私は孤独な露（つゆ）のように儚（はかな）くて導いてくれる師がいなくて、『色声香味触』への『五欲』に耽溺（たんでき）してしまっている」と反省した。

八万人の諸々の天人と共に、ある帝釈天は、飛んで、降下して、井戸に来て、質問したいと思った。

ある帝釈天は、井戸の底に、ある野干（ジャッカル）がいて、両手で土の壁をよじ登ろうとして出る事ができないのを見つけた。

ある帝釈天は、「『聖者には方法、術（すべ）が無い』と思うべきでしょうか？
いいえ！　私は、今、ある野干（ジャッカル）の姿形を見ていますが、きっと、『菩薩』、『修行者』で、非凡な器でしょう。あなたが説いた言葉は非凡な言葉です。
願わくば、諸々の天人の為（ため）に仏法の要を説いてください」と言った。

この時、ある野干（ジャッカル）は、上を見て、「あなたは、帝釈天として、教訓が無い。
仏法の師を下に置いて、自分は上にいて、全く敬意を払わずに、仏法の要を質問している。仏法という水は清浄で人を救済できる。どうして自身が高貴であると思えるのか？　いいえ！」と言った。

ある帝釈天は、ある野干（ジャッカル）の、この言葉を聞いて、大いに反省した。

仕えていた諸々の天人は、驚き、笑って「帝釈天は、降下しても、何の利益も得られなかった」と言った。

ある帝釈天は、すぐに、諸々の天人に、「慎んで、驚き、怖れる事なかれ。私は頑固で不徳だった。必ず、ある野干（ジャッカル）から仏法の要を聞くべきである」と告げた。

ある帝釈天は、天の宝の衣を井戸に垂らして、ある野干（ジャッカル）をつかまえて、ある野干（ジャッカル）を井戸の上に出した。

諸々の天人は、ある野干（ジャッカル）の為（ため）に、甘露による食事を用意した。

ある野干（ジャッカル）は、食事を得て元気に成った。

ある野干（ジャッカル）は、不幸の中で、このような思いもしなかった幸福を得た。

ある野干（ジャッカル）は、心が湧き踊り、感無量に喜んだ。

ある野干（ジャッカル）は、ある帝釈天と諸々の天人の為（ため）に広く仏法の要を説いた。

この話を、ある帝釈天が動物を礼拝して師とした話、と言う。

「仏」、「法」、「僧」という言葉を聞くのは難しい事を明らかに知る事ができる。

ある帝釈天が、ある野干（ジャッカル）を師としたのが、証拠なのである。

今、私達は、前世の善行の助けによって、如来、釈迦牟尼仏が遺（のこ）してくれた仏法に出会えて、昼夜に「仏、法、僧」、「三宝」という言葉を聞けて、時と共に衰退しない。これが仏法の要なのである。

「天魔波旬」、「魔」、「仏敵」ですら「仏、法、僧」という「三宝」に帰依して苦難を免れるのである。

まして、仏敵ではない者が、「仏、法、僧」という「三宝」の功徳の中に、功徳を積み重ねたら、測り知れないのである！

仏の子が、仏道を修行する時は、必ず、まず、十方の「仏、法、僧」という「三宝」に敬礼して、十方の「三宝」の来臨を請い願って、十方の「三宝」の前で焼香して華を降らせてから、諸々の修行を修行するのである。
これが、古代の先人の優れた行跡なのであるし、仏祖の古くからの作法なのである。

「仏、法、僧」という「三宝」に帰依する作法が未だかつて行われない物は、「外道の法である」と知るべきであるし、「『天魔』、『魔』、『仏敵』の法である」と知るべきである。

仏から仏へ、祖師から祖師への仏法では、必ず、最初に、「仏、法、僧」という「三宝」に帰依する規則が有るのである。

四禅比丘

次のように、十四祖の龍樹は言った。

釈迦牟尼仏の弟子の中の、ある「比丘」、「男性の出家者」は、「第四禅」を会得して「増上慢」、「悟っていないのに悟ったと増長して慢心する心」を生じて「四果」、「阿羅漢果」を会得したと思ってしまった。

ある比丘は、「初禅」を会得した時、「須陀洹果」を会得したと思ってしまった。

ある比丘は、「第二禅」を会得した時、「斯陀含果」を会得したと思ってしまった。

ある比丘は、「第三禅」を会得した時、「阿那含果」を会得したと思ってしまった。

ある比丘は、「第四禅」を会得した時、「阿羅漢果」を会得したと思ってしまった。

ある比丘は、「四禅」を頼りにして自ら高ぶり、精進を求めなかった。

ある比丘は、命が尽きようとする時、「四禅」の「中陰」、「中有」の相が存在していて来るのを見て、邪悪な見解を生じて「『涅槃』、『寂滅』など無い。仏は私をだました」と思ってしまった。

ある比丘は、悪い邪悪な見解のせいで、「四禅」の「中有」を失って、「阿鼻泥梨」、「阿鼻地獄」、「無間地獄」の「中有」の相を見て、命が終わると「無間地獄」の中に生まれた。

諸々の出家者は、釈迦牟尼仏に、「あの『阿蘭若の』、『人里離れた静かな場所にいた』比丘は、命が終わりましたが、どこに生まれたのでしょうか？」と質問した。
釈迦牟尼仏は、「あの人は『無間地獄』の中に生まれた」と言った。
諸々の出家者は、大いに驚いて、「坐禅しても、戒を保持して守っても、地獄へ行くのですか？！」と言った。
釈迦牟尼仏は、「それは皆、『増上慢』、『悟っていないのに悟ったと増長して慢心する事』による物である。
あの比丘は、『四禅』を会得した時、『四果』、『阿羅漢果』を会得したと思ってしまっていた。
あの比丘は、命が終わる時に臨んで、『四禅』の『中有』の相を見て、邪悪な見解を生じて『
涅槃、寂滅など無い。
私は阿羅漢である。
(それなのに、)今また生まれようとしている。
仏は、虚偽の言葉で、たぶらかしたのである』と思ってしまった。
この時、『無間地獄』の『中有』の相を見て、命が終わると『無間地獄』の中に生まれた」と、先のように、答えた。
その時、釈迦牟尼仏は、詩で、「多く見聞きして学んでも、戒を保持して守っても、坐禅しても、未だ『漏』、『煩悩』を無くし尽す法を会得できない。
これらの功徳は有るが、それを信じるのは難しい。
あの比丘が地獄に堕ちたのは、仏の悪口を言ったからである。
『第四禅』とは無関係である」と言った。

この比丘を「四禅比丘」または「無聞比丘」と言う。

「四禅」を会得したのを「四果」、「阿羅漢果」を会得したと誤ってしまった事を戒めているし、仏の悪口を言う邪悪な見解を戒めている。

釈迦牟尼仏の下に集まっていた人や天人は皆、知っている。

釈迦牟尼仏の存命時から今日に至るまで、西のインドでも東の地の中国でも共に、正しくないのに「正しい」と思い込もうとする事の戒めとして、「『四禅』を会得して『四果』、『阿羅漢果』と思うような物である」と笑う。

四禅比丘の正しくない所は、暫(しばら)く略して挙げると、三種類、有る。

第一には、「四禅」と「四果」、「阿羅漢果」を自分では分別できない「無聞の」、「学が無い」身なのに、いたずらに無駄に師を離れて、虚しく「阿蘭若」、「人里離れた静かな場所」に(孤立して)独りでいた。

幸いにも、四禅比丘の存命中は、如来、釈迦牟尼仏が存命中だったのであり、常に釈迦牟尼仏の所へ行って、常に仏法を見聞きして学べば、このような誤りは無かったはずである。

それなのに、「人里離れた静かな場所」に(孤立して)独りでいて、釈迦牟尼仏の所へ行かず、終(つい)に、仏法を見聞きして学ばなかったので、このように誤ったのである。

たとえ釈迦牟尼仏の所へ行かずとも、諸々の大いなる阿羅漢の所へ行って教えを受けるべきである。

いたずらに無駄に(孤立して)独りでいたのは、「悟っていないのに悟ったと増長して慢心した」事による誤りなのである。

第二には、「初禅」を会得して誤って「初果である」と思ってしまい、「二禅」を会得して誤って「第二果である」と思ってしまい、「三禅」を会得して誤って「第三果である」と思ってしまい、「四禅」を会得して誤って「第四果である」と思ってしまったのが、第二の誤りなのである。

「初禅」、「二禅」、「三禅」、「四禅」の相と、「初果」、「二果」、「三果」、「四果」の相は、比べる事ができないほどである。

「初禅」、「二禅」、「三禅」、「四禅」の相で、「初果」、「二果」、「三果」、「四果」の相を例える事はできない！

この誤りは、「無聞の」、「学が無い」咎による物なのである。

師に仕えず、知が暗かった咎による物なのである。

四祖の優婆毱多の弟子の中に、ある比丘がいた。

ある比丘は、信心を持って出家したが、「四禅」を獲得して誤って「四果」、「阿羅漢果」と思ってしまった。

四祖の優婆毱多は、方便で、ある比丘を他所へ行かせた。

優婆毱多は、道に、賊の群れ(の幻)を「化作」、「出現」させた。また、五百人の商人達(の幻)を「化作」、「出現」させた。

賊の群れ(の幻)は、商人達(の幻)を脅して殺害、狼藉した。
ある比丘は、これを見て恐怖を生じて、「(恐怖したので、)私は阿羅漢ではない。私は『第三果』(、『阿那含果』)である」と自ら思った。
商人達(の幻)が逃げた後、ある長者の娘(の幻)が、ある比丘に、「願わくば、僧侶様、私に同行してください」と言った。
ある比丘は、「仏は、僧が女性と同行する事(、僧が女性と二人きりに成る事)を(戒律として)許していない」と答えた。
ある長者の娘(の幻)は、「私は、僧侶様を見ながら後について行きます」と言った。
ある比丘は、ある長者の娘(の幻)を憐れんで、ある長者の娘(の幻)を見ながら進んでいると、優婆毱多は大河(の幻)を出現させた。
ある長者の娘(の幻)は、「僧侶様、私と共に渡ってください」と言った。
ある比丘は下流を、ある長者の娘(の幻)は上流を渡った。
ある長者の娘(の幻)は、河(の深み)に落ちて「僧侶様、私をお救いください」と言った。
その時、ある比丘は、ある長者の娘(の幻)の手をつかんで出してあげたが、ある長者の娘(の幻)の手が細く滑らかであるという想いを生じて、性欲を心に起こして、「(性欲をもよおしたので、)私は『第三果』、『阿那含果』ではない」と自ら知った。
ある比丘は、この時、ある長者の娘(の幻)に極めて大きい性欲を生じ、女性と二人きりに成るために道から外れて、(僧なのに)女性と性交しようとすると、ある長者の娘が幻で優婆毱多であったのを見て、大いに反省して、頭を下げて立った。

優婆毱多は、「あなたは、昔、『自分は阿羅漢である』と言ったが、どうして、このような悪事を為(な)そうと欲したのか？」と言った。

優婆毱多は、ある比丘を連れて僧達の所に戻って、ある比丘に懺悔(ざんげ)させると、ある比丘の為(ため)に仏法の要を説いて、阿羅漢に成らせた。

この、ある比丘は、最初は「(勝手に自説、)見解を生じた」誤りが有ったが、殺害の狼藉を見て恐れを生じた。

恐怖した時に、「私は阿羅漢ではない」と思ったが、なお「私は『第三果』(、『阿那含果』)である」と思ってしまった誤りが有った。

後に、ある比丘は、ある長者の娘(の幻)の手が細く滑らかであると想う事によって性欲を生じると「(性欲をもよおしたので、)私は『第三果』、『阿那含果』ではない」と知った。

さらに、仏への悪口を思わなかったし、法への悪口を思わなかったし、「聖教」、「仏教」に背(そむ)く思いが無かった。

そのため、ある比丘は四禅比丘とは違った。

この、ある比丘は、「聖教」、「仏教」を習って学んでいる力が有ったので、自ら「阿羅漢ではない」、「『第三果』、『阿那含果』ではない」と知ったのである。

今の「無聞の」、「学が無い」輩は、「阿羅漢は、どういった者である」とも知らないし、「仏は、どういった者である」とも知らないので、自ら「阿羅漢ではない」、「仏ではない」とも知らず、妄(みだ)りに「私は仏である」

と思ってしまったり言ってしまったりするのは、大きな誤りなのであるし、深い咎なのである。

学徒は、まず、当然、「仏とは、どういった者である」と習うべきなのである。

古代の高徳の僧は、「このため、『聖教』、『仏教』を習って知っている者は、大まかに順位を知っていれば、たとえ『逾濫』、『濫りに超えた思い』、『思い上がり』を生じても、また悟りやすい」と言った。

この古代の高徳の僧の言葉は、真実である。

たとえ「(勝手に自説、)見解を生じる」誤りが有っても、少しでも仏法を習って学んでいる仲間は、自身にも、だまされないであろうし、他人にも、だまされないであろう。

かつて聞いた話によると、ある人が誤って「私は仏に成った」と自ら思ってしまった。

ある人は、(釈迦牟尼仏は夜明けに悟ったので、)待っていたが、天は夜明けに成らなかったので、誤って「『魔』が妨害しているのであろう」と思ってしまった。

ある人は、（釈迦牟尼仏には「梵天勧請」、「梵天が説法を請い願った事」が有ったが、）夜明けが終わったが、「梵天勧請」、「梵天が説法を請い願う事」を見なかったので、「私は仏ではない」と自ら知ったが、誤って「私は阿羅漢である」と自ら思ってしまった。

また、他人に、これについて悪口を言われて、ある人は、心に異心を生じたので、「私は阿羅漢ではない」と自ら知ったが、誤って「私は、『第三果』、『阿那含果』である」と思ってしまった。

また、女の人を見て、ある人は性欲をもよおしたので、「私は聖者ではない」と知った。

この話の、ある人もまた、「教相」、「釈迦牟尼仏の教えの特徴」を良く知っていたので、このように反省できたのである。

仏法を知っている者は、このように、自らの誤りを覚知して、早く、その誤りを投げ捨てる。

仏法を知らない輩は、一生、虚しく、暗い愚かさの中にいる。

仏法を知らない輩は、生から生へ、生を受けてもまた、暗い愚かさの中にいる。

優婆毱多の弟子は、四禅を会得して誤って「『四果』、『阿羅漢果』である」と思ってしまったが、後に「自分は阿羅漢ではない」と自ら知る事ができる知が有った。

「四禅比丘」、「無聞比丘」も、命の終わりに臨んだ時、「四禅」の「中有」を見たら、「私は阿羅漢ではない」と知ったならば、仏の悪口を言う罪を犯さなかったであろう。

まして、四禅比丘は、「四禅」を会得してから長いのに、どうして「『四果』、『阿羅漢果』ではない」と反省して知る事ができなかったのか？

また、四禅比丘は、既に「『四果』、『阿羅漢果』ではない」と知ったならば、どうして改めなかったのか？

四禅比丘は、いたずらに無駄に、誤りに停滞して、虚しく邪悪な見解に沈んでいる。

第三には、四禅比丘は、命が終わる時、大きな誤りを犯した。

その咎(とが)が深くて、終(つい)に「無間地獄」に落ちたのである。

四禅比丘よ、たとえ、あなたが一生の間、「四禅」を「四果」、「阿羅漢果」と思ってしまって来ていても、命の終わりに臨んだ時に「四禅」の「中有」を見たならば、一生の誤りを懺悔(ざんげ)して「私は『四果』、『阿羅漢果』ではない」と思うべきである。

どうして、「仏は私をだまして、『涅槃』、『寂滅』が無いのに『涅槃は有る』と施し設(もう)けた」と思うべきであろうか？　いいえ！

これは、「無聞」、「学が無い事」による咎(とが)なのである。

この罪は既に仏への悪口なのである。

これによって、「無間地獄」の「中有」が現れて、命が終わって「無間地獄」に落ちた。

たとえ「四果」、「阿羅漢果」の聖者であっても、どうして「如来」、「仏」に及ぶ事ができるであろうか？　いいえ！　阿羅漢は仏に及ばない！
舍利弗(シャーリプトラ)は久しく「四果」、「阿羅漢果」の聖者であった。
三千大千世界に存在する知恵を集めて如来を除いた他を一つとし、三千大千世界に存在する知恵と、舍利弗(シャーリプトラ)の知恵の十六分の一を量ると、三千大千世界に存在する知恵は、舍利弗(シャーリプトラ)の知恵の十六分の一に及ばなかったのである。
けれども、如来、釈迦牟尼仏が、未だかつて説かなかった法(、法華経)を説いたのを聞いて、舍利弗(シャーリプトラ)は、「前後の仏の説が異なるので、仏は私をだました」と思わず、(「法華経」の「譬喩品」で)「波旬無此事」、「『波旬』、『魔』には、このような事は無い」とほめた。
如来、釈迦牟尼仏は、中国では「福増」と呼ばれる尸利苾提を仏土へ渡す事ができたが、舍利弗(シャーリプトラ)は尸利苾提を仏土へ渡す事ができなかった。
このように、「四果」、「阿羅漢果」と「仏果」は遥かに異なる。
(「法華経」の「方便品」での釈迦牟尼仏の言葉のように、)たとえ舍利弗(シャーリプトラ)と諸々の釈迦牟尼仏の弟子のように成った者が十方の世界に満ちて共に仏の知を量っても量る事はできないのである。

孔子や老子には、仏のような功徳は未だ無い。
仏法を習って学んだ者は、誰でも孔子や老子を量る事ができるであろう！
孔子や老子の教えを習って学んだ者が仏法を量る事ができた事は未だ無い。
宋の時代の中国の輩の多くは、孔子と老子の教えと仏道は一致するという道理を誤って立ててしまっている。
(「三教一致」は)最も誤りが深い誤った見解なのである。
後で広く説こう。

四禅比丘は、自分の誤った見解を真実としてしまって「如来、釈迦牟尼仏は私をだました」と思ってしまい、永遠に仏道に背いたのである。

四禅比丘の愚かさのはなはだしさは、「六師外道」などの外道に等しいであろう。

古代の高徳の僧は、「大いなる師である釈迦牟尼仏が存命中ですらなお、誤った見解を生じた人がいた。まして、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後、師がいなくて禅を会得していない者は、なおさら、誤った見解を生じるであろう」と言った。

大いなる師とは　釈迦牟尼仏である。

実に、釈迦牟尼仏の存命中、出家して戒を受けてもなお、「無聞では」、「学が無くては」、誤った見解を生じる誤りを逃れ難い。

まして、如来、釈迦牟尼仏の(肉体の)死後の、「後五百歳」、「末法の世」の辺境の僻地という時代と場所では、誤った見解を生じる誤りが有る！

このように、四禅比丘という、「四禅」を起こした者ですらなお、誤った見解を生じて誤ったのである。

まして、「四禅」を起こす事ができず、いたずらに無駄に、名声や利益を貪欲に愛着する事に沈んでいる者、役人の地位を求めて俗世を生きて行こうとする事を貪る輩は、言うまでも無い。

宋の時代の中国には学が無い愚鈍な輩が多い。
宋の時代の中国の、学が無い愚鈍な輩の多くは、誤って「仏法と、老子、孔子の法は一致していて異なる物ではない」と言ってしまう。

宋の時代の中国の「嘉泰四年」、「千二百四年」に、正受という僧がいて、「嘉泰普灯録三十巻」を選んで皇帝に捧げた。

次のように、正受は言った。

私が孤山智円の言葉を聞いた所によると、孤山智円は、「私の道は三脚の器のような物なのである。『儒教、道教、仏教』という『三教』は三脚の器の三脚のような物なのであり、一つでも無ければ転覆してしまう」と言った。
私(、正受)は、かつて、孤山智円を慕い、孤山智円の説を考えた。
次のように、正受は知った。
儒教の教えとは、その要は、誠意に在る。
道教の教えとは、その要は、虚心に在る。
仏教の教えとは、その要は、「見性」、「人の本性を見る事」に在る。
誠意、虚心、見性は名前は異なるが実体は同じである。

帰る所を究めると、行き先として、孤山智円の道(である「三教一致」)と合流するのである！

以下略

このように、誤った見解を生じる輩ばかりが多い。
(誤った見解を生じる輩は、)孤山智円と正受だけではない。
このような輩は、「四禅」を会得して誤って「四果」、「阿羅漢果」と思ってしまっている輩よりも、誤りは深い。

仏、法、僧の悪口を言っている事に成るのである。

解脱、過去と現在と未来、因果を否定し信じない誤りを犯している事に成るのである。

広々と禍(わざわい)を招く事に成るのは、疑問の余地が無い。

誤って「『仏、法、僧』という『三宝』、『苦集滅道』という『この世は苦であり、執着が苦を招き集めており、執着を滅する事ができ、執着を滅する道が有る事を知る事ができる』という『四諦』、『四果』は無い」と思ってしまう輩に等しい。

仏法の要は「見性」、「人の本性を見る事」ではない！

過去七仏、西のインドの二十八人の祖師達、いずれの所で「仏法とは『見性』、『人の本性を見る事』だけなのである」とあるのか？　いいえ！　無い！

六祖壇経に「見性」、「人の本性を見る事」という言葉が有るが、六祖壇経は偽書であるし、「法蔵」、「仏教」を付属された者による書物ではないし、曹谿山の三十三祖の大鑑禅師の言葉ではないし、仏祖の法の子孫が全く依り所としない書物である。

孤山智円と正受は、未だ仏法の一隅すら知らないので、「『儒教、道教、仏教』という『三教』は三脚の器の三脚のような物なのであり、一つでも無ければ転覆してしまう」という誤った考えを為した。

古代の高徳の僧は、「老子、荘子はなお未だ『小乗』、『矮小な乗り物』、『劣悪な段階』の『能著、所著、能破、所破』、『愛着する事、愛着するという事、愛着を破る事、愛着を破るという事』を理解できていない。
まして、老子、荘子は、『大乗』の『若著、若破』、『(敢えて)愛着する事や、(敢えて)愛着を破る事』を理解できていない。
このため、老子、荘子の教えは、仏法と少しも同じではない。

そのため、世間の愚者は『名相』、『言葉』に迷い、禅が濫り(みだり)な者は正しい理に迷い、誤って『老子(道徳経)、荘子の逍遥遊の言葉は、仏法の解脱の説法と同じであろう』と思ってしまうが、有り得ない！」と言った。

昔から「名相」、「言葉」に迷う者、正しい理を知らない輩は、誤って「仏法は、老子、荘子の教えと同じであろう」とするのである。

少しでも仏法の稽古が有る仲間は、昔から、老子、荘子を重んじる人は一人もいない。

清浄法行経には、「月光菩薩は、中国では(孔子の愛弟子の)顔回と呼ばれている。光浄菩薩は、中国では『仲尼』、『孔子』と呼ばれている。迦葉菩薩は、中国では老子と呼ばれている。以下略」と記されている。

昔から、清浄法行経の説を挙げて、誤って「孔子、老子なども菩薩なので、孔子、老子の説は密か(ひそか)に仏の説法と同じであろう」と言ったり、また、誤って「孔子、老子は仏の使いなので、孔子、老子の説は自然と仏の説法であろう」と言ったりするが、これらの説は皆、誤りなのである。

古代の高徳の僧は、「諸々の目録に従うと、皆、『清浄法行経』を疑偽経と為す。以下略」と言った。

この説によれば、ますます、仏法と、孔子と老子の教えは異なるはずである。

仮に、孔子と老子が、既に菩薩なのであれば、「仏果」、「仏」と等しくない。

「和光応迹」、「和光同塵」、「威光を和らげて俗世という塵に仮の姿を出現させる事」の功徳は、過去、現在、未来の諸仏、諸々の菩薩だけの法なのである。

「和光同塵」は、俗世という塵の中の凡人が可能な物ではない。

「実業の」、「身口意で善業や悪業を実際に行う」凡人が、どうして「応迹」、「仏や菩薩が生者を救うために他の姿で出現する事」が自由自在であろうか？　いいえ！

孔子、老子は未だ「応迹」、「仏や菩薩が生者を救うために他の姿で出現する事」を説いた事が無い。

まして、孔子、老子は「先因」、「前世の原因」を知らないし、「当果」、「未来の結果」を説いた事が無い。

孔子などは、わずかに今世の忠孝で君主に仕え、家を治める事を「宗（むね）としている」、「主要としている」。

孔子などは、さらに、後世について説いた事が無い。

孔子などは、「断見」、「肉体が死ぬと全て滅びるという誤った見解」の外道の仲間なのである。

老子、荘子を嫌って、「老子、荘子は『小乗』、『矮小な乗り物』、『劣悪な段階』の教えすらなお理解できていない。まして老子、荘子は、『大乗』の教えを理解できていない」と言う者は、古代の明らかな師なのである。

「三教一致」と言う者は、孤山智円と正受なのであるし、後世の末法の世の暗愚な凡人なのである。

孤山智円よ、正受よ、あなたは、どんな優れている所が有って、古代の先人の高徳の僧の所説を軽んじて、妄（みだ）りに誤って「孔子と老子の教えは、仏法と等しい」と言うのか?

あなた達の所見は全く、仏法の通じている所と塞（ふさ）がっている所を論じるに足りない。

遠くへ学びに出かけて、明らかな師の学に参入するべきである。

孤山智円よ、正受よ、あなた達は、「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の教えも、「大乗」の教えも、全く未だ知らないのである。

四禅を会得して誤って「『四果』、『阿羅漢果』である」と思ってしまうよりも知が暗い。

末法の世に成り始めて、このような「魔の子」、「仏敵の子」が多い事を悲しむべきである。

古代の高徳の僧は、「『孔丘』、『孔子』の言葉や、『姫旦』、『周公旦』の言葉や、三皇五帝の書は、孝で家を治め、忠で国を治め、国を助け、国民に利益をもたらすが、これは現在の今世の中だけであり、過去や未来にわたる物ではない。

(孔子の儒教は、)仏法が過去、現在、未来に利益をもたらすのとは等しくない。

どうして(『孔子の儒教と仏教は等しい』と)誤るであろうか？　いいえ！誤らない！」と言った。

古代の高徳の僧の言葉は真実である。

よく仏法の「至理」、「至上の正しい道理」に通達している。

世俗の道理に明らかである。

三皇五帝の言葉は、未だ転輪聖王の教えに及ばないし、梵天、帝釈天の説と並べて論ずる事ができない。

三皇五帝は、統治している範囲、得ている果報が遥かに劣っている。

その転輪聖王、梵天、帝釈天ですら、出家して戒を受けている出家者には及ばない。

まして、転輪聖王、梵天、帝釈天は如来、仏と等しくない！

「孔丘」、「孔子」の「論語」や、「姫旦」、「周公旦」の「周礼」、「儀礼」は、インドのバラモンの経典である「十八大経」に及ばないし、バラモンのヴェーダの四種類に並べ難い。

その西のインドのバラモンの教えですら、未だ仏教と等しくないのであるし、「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の声聞の教えと等しくない。

中国は、小国、辺境の僻地（へきち）で、「三教一致」という邪説が有る事を憐れむべきである。

十四祖の龍樹は、「大いなる阿羅漢、独覚は、八万大劫を知っている。諸々の大いなる菩薩、仏は、無量劫を知っている」と言った。

孔子、老子などは未だ今世の中の前後を知らないし、一生、二生の前世を知る「宿命通」が無い！

まして、孔子、老子などは、一劫を知らないし、百劫、千劫を知らないし、八万大劫を知らないし、無量劫を知らない！

「掌」、「手のひら」を見るよりも明らかに、無量劫を明らかに照らして知っている諸仏、諸々の菩薩を、孔子、老子などと比べて同一視する人は、「暗愚」と言っても足りないのである。

耳を覆って「三教一致」という言葉を聞く事なかれ。

「三教一致」は、邪説の中で、最も邪説なのである。

「荘子」には、誤って「貴賤や、苦楽や、『是非』、『善悪』や、『得失』、『損得』は皆、自然なのである」と記されてしまっている。

この「荘子」の見解は既に西のインドの「自然見(じねん)」、「原因が無く自然と物事は成るという誤った見解」の外道と同類なのである。

貴賤や、苦楽や、「是非」、「善悪」や、「得失」、「損得」は皆、善業や悪業により感じる物なのである。

荘子は、「満業」、「貧富や貴賤などを決定させる業(ごう)」と「引業」、「生まれる世界や生まれ方などを決定させる業(ごう)」を知らないし、過去の前世、未来の来世を明らめていないので、現在の今世に暗い。

荘子の教えは、仏法と等しくない！

ある人は、誤って「諸仏、諸々の如来は広く法界を証するので、微小な塵（ちり）も法界も皆、諸仏が証している物なのである。

そのため、身体が依り所とする環境としての報いである『この世』と過去の行いの正に報いである身心は共に如来の証している物に成るので、山や河や大地や、太陽と月と星々や、『四倒』や、『貪欲と怒りと愚かさ』という『三毒』は皆、如来が証している物なのである。

山や河を見る事は、如来を見る事に成るのである。

『四倒』や、『貪欲と怒りと愚かさ』という『三毒』は、仏法なのである！

微小な塵（ちり）を見る事は、法界を見る事と(全く)等しい。

『造次顛沛』、『わずかな時間』は皆、正覚なのである。

これを『大いなる解脱』と言う。

これを『単一に伝えられ直接的に指し示されてきた祖師の仏道』と名づける」と言ってしまう。

このような誤った言葉を言う輩は、宋の時代の中国に稲、麻、竹、葦（アシ）の様に多数いるし、官民に遍（あまね）く満ちている。

けれども、この輩は、どの仏祖の法の子孫か明らかではないし、仏祖の仏道を知らないのである。

たとえ諸仏が証している物であっても、山や河や大地が突然に凡人が見ている山や河や大地ではなく成るわけが無い。

なぜなら、凡人は、「山や河や大地は諸仏が証している物である」と成る道理を習わないし、聞かないのである。

あなたは誤って「微小な塵を見る事は、法界を見る事と(全く)等しい」と言ってしまっているが、「国民は国王と等しい」と言うような物である。

また、どうして、「法界を見る事は、微小な塵を見る事と(全く)等しい」と言わないのか？

もし、この輩の所見を仏祖の大いなる仏道としてしまえば、諸仏が「この世」へ出現する必要が無く成ってしまうし、祖師が「この世」へ出現する必要が無く成ってしまうし、全ての生者が仏道を会得する必要が無く成ってしまう。

たとえ「生即無生」、「生じるとは(実は)生じていない」と体得して通達しても、このような誤った道理ではないのである。

真諦三蔵は、「中国には二つの幸福が有る。

(一)『羅刹』という鬼がいない

(二)外道がいない」と言った。

この真諦三蔵の言葉は、実に、西のインドの外道のバラモンの言葉を伝えて来ているのである。

中国には、神通力を会得した外道はいなくても、外道の見解を起こす輩はいるのである！

中国には、「羅刹」という鬼は未だ見られないが、外道の仲間はいるのである！

中国は、小国、辺境の僻地なので、インドの中央と同様ではなく、仏法をわずかに習って修行しても、インドのように証を取れる者はいないのである。

古代の高徳の僧は、「今時は、還俗してしまう者が多くいるが、王からの労役を恐れ嫌い、外道の中に入ってしまう。

仏法の教義を盗んで密かに老子と荘子の教えを解釈して終には混ぜ合わせてしまって、初心者を『どれが正しいのか？　どれが邪であるのか？』と迷わせてしまう。

これを『バラモンのヴェーダの法を起こす見解』とする」と言った。

知るべきである。

「仏法と、老子と荘子の教えの、どちらが正しいのか？　どちらが邪であるのか？」を知らないで混ぜ合わせてしまうのは初心者の仲間を迷わせてしまうのである。

孤山智円と正受などは初心者の仲間を迷わせてしまう者なのである。

無知蒙昧さ愚かさがはなはだしいだけではなく、稽古の無さの至りの現れなのであるし、稽古の無さの至りが明らかなのである。

宋の時代の僧には、一人として、「孔子や老子の教えは仏法に及ばない」と知っている仲間はいない。

「仏祖の法の子孫」という名前を借りている輩は稲、麻、竹、葦（アシ）の様に多数いるし、中国全土の九つの州の山や野に満ちているが、「孔子、老子の教えではなく、仏法が優れている」と明らかに了解している一人前や半人前の僧はいない。

道元の亡き師である、古代の仏と等しい、天童山の、五十祖の如浄だけが、「仏法と、孔子と老子の教えは一つの物ではない」と明らかに了解していたし、昼夜に教えていた。

経典の学者や講者という称号は有っても、「仏法は、孔子と老子の境地を遥かに超越している」と明らかに了解している人はいない。

千百年頃から講者の多くが、禅の学に参入して仏道を学び修行している仲間の身のこなしを模倣し、その理解を盗もうとしているが、「最も誤っている」と言える。

孔子の「論語」には「生まれながらに知っている者」と記されているが、仏教には(孔子が言っている意味での)「生まれながらに知っている者」などいない。

仏法では「舎利」、「仏の遺骨」を説いているが、孔子と老子は「舎利」、「仏の遺骨」の有無すら知らない。

仏法と、孔子と老子の教えを一緒くたにして混ぜ合わせようと思っても、広く説かれている事の通じる事と塞(ふさ)がっている事を終(つい)に会得できないであろう。

孔子の「論語」には、「生まれながらに知っている者は、(最)上である。学んで知る者は、次である。苦しんで学ぶ者は、その次である。苦しんで学ばない者は、人々では、この人を下とする」と記されている。

もし(孔子が言っている意味での)「生知」、「生まれながらの知」が有るならば、原因が無い咎(とが)が有るが、仏法では原因が無い物など説いていないのである。

四禅比丘は、命の終わりに臨んだ時、たちまち仏の悪口を言う罪に堕ちたが、誤って「仏法は、孔子と老子の教えと等しい」と思ってしまう人は、一生のうちから仏の悪口を言っている罪に成るので、罪深い。

学徒は早く「仏法と、孔子と老子の教えは一致している」という誤解を投げ捨てるべきである。

「仏法と、孔子と老子の教えは一致している」という誤った見解を蓄えて捨てない人は、地獄といった「悪趣」、「悪道」に堕ちる。

学徒は、明らかに知るべきである。

孔子と老子は、過去、現在、未来の法を知らないし、
因果の道理を知らないし、
「この世」という一つの洲の「安立」、「安心立命」、「心が安らぎ不動である事」を知らないし、
まして、「四大洲」の「安立」、「安心立命」、「心が安らぎ不動である事」を知らないし、
「六欲天」の事すら知らないし、
まして、「三界九地」の法を知らないし、
小千界を知らないし、
中千界を知る事ができないし、
三千大千世界を見る事ができないし、知る事ができないし、

中国という一国ですら低位の役人であり皇帝の位に昇る事ができなかったので、三千大千世界の王である如来、仏と比べる事などできない。

如来、仏は、梵天、帝釈天、転輪聖王などが昼夜に恭（うやうや）しく敬ってそばに仕えて護衛して常に説法を請うのである。
孔子と老子には、このような徳は無い。
孔子と老子は、生死をくり返す凡人に過ぎないのである。
孔子と老子は、解脱の道を知らない。
孔子と老子は、如来、仏のように、「諸法実相」、「全てのものの実の相」を究め尽くす事は無かった！
孔子と老子は「諸法実相」、「全てのものの実の相」を未だ究め尽くしていないのに、なぜ「仏と等しい」とするのか？

孔子と老子には、「内徳」、「内心で積み重ねて外には隠す美徳」が無いし、「外用」、「仏と菩薩が生者の素質に応じて神通力などを外に現す事」が無いので、仏に及ばない。

孔子と老子は、「三教一致」という邪説を吐いていない！

孔子と老子は、世界の有限、無限を通達できないし、
広さを知らないし、見る事ができないし、
大きさを知らないし、見る事ができないし、
「極微色」、「極小、微小の色（しき）」を見る事ができないし、
「刹那」の量を知る事ができない。

釈迦牟尼仏は、明らかに「極微色」、「極小、微小の色(しき)」を見たし、「刹那」の量を知らせてくれた。

孔子と老子は、釈迦牟尼仏と等しくない！

孔子、老子、荘子、恵子などは、凡人に過ぎないし、
「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の「初果」、「須陀洹果」の聖者にすら及ばないし、
まして、「第二果」の聖者や、「第三果」の聖者や、「第四果」の阿羅漢に及ばない！

それなのに、似非(えせ)学者は、知が暗いので、孔子と老子などを諸仏と同一視するが、迷いの中でまた更に深く迷っているのである。

孔子と老子は、過去、現在、未来を知らないし、
多くの劫を知らないし、
「一念」、「一つの思い」を知る事ができないし、
一つの心を知る事ができない。

孔子と老子は、日天と月天と比べる事などできないし、
「四大王」、「四天王」や、諸々の天人に及ばないのである。

孔子と老子を、釈迦牟尼仏と等しくしようとする事は、俗世間の俗人と出家者に迷惑をかける事に成るのである。

次のように、「列仙伝」には記されている。

尹喜は、周の大夫と成った。
尹喜は、星占いをよくしていた。
尹喜は、ある時、特異な天の気配を見て、東へ行って、特異な天の気配の結果を迎えると、果たして、老子を得た。
尹喜が老子に教えを書くように請うと、老子は五千語の書物(、「老子道徳経」)を書いた。
尹喜もまた自ら「関令子」という名前の「老子化胡経」に準じた九篇の書物を書いた。
「老聃」、「老子」が関所を過ぎて西に行こうとすると、尹喜は「老聃」、「老子」に従って同行したいと求めた。
「老聃」、「老子」は、尹喜に「もし同行したいならば、父と母などの七人の首を持って来なさい。そうすれば同行してもよろしい」と言った。
尹喜が、老子の教えに従うと、父と母などの七人の首は皆、猪(イノシシ)の頭に変わった。

古代の高徳の僧は、「俗典によると、儒教に従う親孝行な者ですらなお父や母の木の像を尊重する。

『老聃』、『老子』は導いて、尹喜に父と母など(の幻)を殺害させた。如来、仏の仏教は大いなる思いやりを根本とする。(仏は、)老子のように父と母を殺すという五逆罪を、教化する原因、きっかけとはしない！」と言った。

昔は、「老聃」、「老子」を釈迦牟尼仏に等しくしようとする邪悪な党派がいた。

今は、誤って「孔子と老子は共に釈迦牟尼仏と等しい」と言ってしまう愚かな僧侶がいる。

憐れである！

孔子と老子は、転輪聖王が「十善で」、「十戒を守って」世間を化して導く事にすら及ばない。

三皇五帝は、「鉄輪王、銅輪王、銀輪王、金輪王」といった諸々の「転輪聖王」が「七宝」と千の無数の子を十分に備えて、「四天下」、「四大洲」を化して導いたり、三千界を統治したりする事に及ばない！

孔子は、転輪聖王と比べる事もできない。

過去、現在、未来の諸々の仏祖は共に、父と母、師の僧、「仏、法、僧」という「三宝」に孝行して従い、病人などに捧げものを捧げる事を、教化する原因、きっかけとしている。

仏が、老子のように父と母を殺害させる事を、教化する原因、きっかけとする事は、昔から未だかつて無いのである。

そのため、仏法と、「老聃」、「老子」の教えは一つの物ではない。

父や母を殺害する人は、必ず、「順次生受業」、「次の生で報いを受ける業(ごう)」によって地獄に堕ちる事は確実なのである。

たとえ「老聃」、「老子」が妄(みだ)りに虚無について話していても、父や母を殺害した人は、「順次生受業」、「次の生で報いを受ける業(ごう)」の報いを免れる事はできない！

次のように、「景徳伝燈録」には記されている。

二十九祖の慧可は常に嘆(なげ)いて「孔子と老子の教えは、礼の術や風習の規則なのである。

『荘子』と『易経』といった書物は、妙なる理を未だ尽くせていない。

近頃、聞く所によると、達磨という大いなる者が少林寺に滞在している。

達道者は、遠くにおらず、近くにいる。

奥深い境地に至るべきである」と言った。

今の仲間は、明らかに、信じるべきである。
仏法が中国に正しく伝えられたのは、ひとえに、二十九祖の慧可の、学に参入する力による物なのである。
たとえ二十八祖の達磨が西のインドから中国へ来ても、二十九祖の慧可を得なかったら、仏法を伝えられなかったであろう。
もし二十九祖の慧可が仏法を伝えなかったら、東の地の中国は今も仏法が無かったであろう。
二十九祖の慧可を、他の輩と並べるべきではない。

次のように、「景徳伝燈録」には記されている。
幼名が「神光」である二十九祖の慧可という僧は、広く通達している人であった。
慧可は、伊水と洛水の辺りに久しく居て、多くの書物を広く読んで、善く奥深い理を話す事ができた。

昔の二十九祖の慧可が多くの書物を広く読んだのと、今の人が書物を見るのは、遥かに異なるのである。
二十九祖の慧可は、仏法を会得して二十八祖の達磨から法衣を伝えられた後も、「昔、私が『孔子と老子の教えは、礼の術や風習の規則なのである』と思ったのは誤りであった」という言葉を示さなかった。

知るべきである。

二十九祖の慧可は、既に、「孔子と老子の教えは、仏法に及ばない」と通達していたのである。

今の、二十九祖の慧可の法の遠い子孫は、なぜ、法の祖父である二十九祖の慧可に背(そむ)いて、誤って「孔子と老子の教えは、仏法と一致している」と言ってしまうのか？

「三教一致」は邪説なのであると、正に、知るべきである。

二十九祖の慧可の法の遠い子孫であるならば、誰も、正受などの「三教一致」を採用しない！

二十九祖の慧可の法の遠い子孫であるならば、誤って「三教一致」と言う事なかれ。

如来、釈迦牟尼仏が存命時に、論力という名前の外道がいた。

論力は、「議論で自分に等しい者はいない。自分は議論の力が最大である」と自ら思ってしまっていた。

このため、論力は「論力」と名乗っていたのである。

論力は、五百人の梨昌(リッチャヴィ)族からの募金を受けて、五百の難問を選び、釈迦牟尼仏を非難するために来た。

論力は、釈迦牟尼仏の所へ来て、釈迦牟尼仏に「究極の道は一つでしょうか？　究極の道は多数でしょうか？」と質問した。

釈迦牟尼仏は、「究極の道は唯一である」と言った。

論力は、「私達の諸々の師は、各々、『究極の道が有る』と説いています。外道の中では、各々、『自分が正しい』と言って、他人の法を非難して、相互に批評し合っているので、(究極の)道は多数、有ります」と言った。

釈迦牟尼仏は、その時、鹿頭を既に教化して「無学果」、「阿羅漢果」を成就させていた。

鹿頭は、釈迦牟尼仏の近くにいて立っていた。

釈迦牟尼仏は、論力に「あなたは、多数の(究極の)道の中で、誰を第一としているのか?」と質問した。

論力は、「鹿頭が第一である」と言った。

釈迦牟尼仏は、「もし鹿頭の道が第一なのであれば、どうして、鹿頭は、第一の道を捨てて、私(、釈迦牟尼仏)の弟子と成って私(、釈迦牟尼仏)の仏道の中に入ったのか?」と言った。

論力は、鹿頭を見ると、反省して頭を下げて、釈迦牟尼仏に帰依して仏道に入った。

この時、次のように、釈迦牟尼仏は、義品経の詩を説いた。

各々、「究極である」と言って、各々、自分に愛着して、各々、「自分は正しい」として「他人は正しくない」とするが、これらは皆、究極ではない。

これらの人は、議論している人々の中に入って、「義理」、「道理」を弁明する時、各々、相互に批評し合って、勝負して憂いや苦しみを抱(いだ)いてしまう。

勝者は慢心という穴に堕ちてしまうし、敗者は憂いという地獄に堕ちてしまう。

このため、知が有る者は、この勝敗という物に堕ちないようにするのである。

論力よ、あなたは、知るべきである。

私(、釈迦牟尼仏)の諸々の弟子の仏法は、虚偽も無いし(隠された)真実もまた無いのである。

(論力よ、)あなたは、(虚偽と隠された真実のうち、)いずれを求めようと思うのか?

(論力よ、)あなたが、私(、釈迦牟尼仏)の論理を壊そうと思っても、終(つい)に、既に、破壊可能な道理は無いのである。

「一切知」、「一切の存在についての知」は明らめ難い。

(「一切知」、「一切の存在についての知」を明らめようとすると、)逆に、自身を破壊してしまう。

これが、釈迦牟尼仏の黄金の言葉なのである。

東の地の中国の暗愚な人々は、妄(みだ)りに仏教に背(そむ)いて、「仏道と等しい道が有る」と言う事なかれ。

仏と法の悪口を言う事に成るからである。

西のインドの鹿頭、論力、長爪梵志、先尼(セーニャ)梵志などは、博識の人であり、東の地の中国の古今に未だいないような人であり、孔子と老子が及ばない人なのである。

彼等は皆、自分の外道を捨てて仏道に帰依した。

誤って、孔子と老子という俗人の教えを仏法と並べてしまう人だけではなく、聞き入れてしまう者にも罪が有る。

まして、阿羅漢、独覚も皆、終（つい）には、菩薩と成るのである。

阿羅漢、独覚は、一人も、「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」で終わる者はいない。

どうして、仏道に未だ入ってすらいない孔子と老子を誤って「諸仏と等しい」と言ってしまうのか？

大いなる邪見なのである。

「釈迦牟尼仏は一切を遥かに超越している」と、諸仏、諸々の如来、諸々の大いなる菩薩、梵天、帝釈天は皆、共に、ほめているし、知っているのであるし、初祖から二十八祖までの西のインドの二十八人の祖師は共に、知っているのであるし、学に参入する力が有る者は皆、共に、知っているのである。

今、末法の世の生者は、宋の時代の中国の暗愚な輩の「三教一致」という戯言（たわごと）を用いるべきではない。

「三教一致」は学んでいない至りなのである。

唯仏与仏

仏法は、(仏ではない)人が知る事はできない。
このため、昔から、凡人として仏法を悟った人はいないし、「二つの乗り物」の段階の人として仏法を究めた人はいない。
仏法は、仏だけが悟る事ができるので、「法華経」で釈迦牟尼仏は「仏と仏だけが能く究め尽せる」と言っている。
仏法を究めて悟る時、自分の事では有るが、事前に「悟るとは、何々であろう」と思う事ができる事は無いのである。
たとえ「悟るとは、何々であろう」と思っても、思っていたのとは違うのが悟りなのである。
悟りは、思っていたようではないのである。
このため、事前に「悟るとは、何々であろう」と思うのは、役に立たないのである。
悟った時は、「今まで何々であったので、悟る事ができた」と思う事が無いのである。
そのため、悟る前に、あれこれ思った事は、悟りの役に立たない、と逆に、知るべきである。
悟る前に様々思った思いの延長線上に悟りが無いのは、思いが実に悪くて悟りを思う事ができる力が無いわけではないのである。
過去の思いも悟りに似ていたのを、その時は、逆に(悟りを思いに)しようとしたので、悟りを思う事ができる力が無かったとは思いもするのである。

(悟る前に思った事は悟りの)役に立たない、と思う事は、知る事ができる物が必ず有る。
「知る事ができる物」とは、「小さくは成らないように」と(良い意味で)恐れる事なのである。
もし悟る前の思いを力として悟りが出て来るならば、頼もしくない悟りであろう。
悟る前の思いを、力とせず、遥かに超越して、悟りが来るので、悟りとは、一途(いちず)に悟りの力にのみ助けられるのである。
悟りとは、迷いが無い物である、とも知るべきである。
迷いとは、悟りが無かった事である、とも知るべきである。

無上普遍正覚が人である時、これを「仏」と言う。
仏が無上普遍正覚である時、これを「無上普遍正覚」と言う。
このような仏道に存在する時の「面目」、「有様(ありよう)」を知らないのは愚かなのである。
このような仏道に存在する時の「面目」、「有様(ありよう)」とは、汚染されない心なのである。
汚染されない心とは、汚染されないようにと趣(おもむ)き意向せず取捨選択しないようにと強(し)いて営んで趣(おもむ)き意向しない所を装うのではないのである。
趣(おもむ)き意向させられず取捨選択させられない汚染されない心が確かに存在するのである。
例えば、人に会ったが「『面目』、『有様(ありよう)』が何々であった」と覚えていないし華にも月にも別の光や色を思い重ねておいて、春は春のままの心だけ

であるし秋もまた秋のままの美醜であるので逃れる事ができないのに、誤って「責任は自分には無い」としてしまう事は、自分の事でも、思い知るべきである。

春や秋の「声」、「響き」(、自分が受ける影響)は、誤って「責任は自分には無い」としてしまっても、責任は自分に無くても、反省するべきである。自分に積もるわけでもないし、今も自分に存在する思いでもないので。

この例の主旨とは、今の、四大(元素)と、「色受想行識」という「五蘊」は、各々、「自分の物である」とはできないし、「誰の物である」と辿る事ができない。

そのため、華や月が催す心の色もまた「自分の物である」とはできないのに「自分の物である」と思う。

自分の物ではない物を「自分の物である」と思うが、それならそれで仕方がない、「背く事ができる色にも、趣き意向できる色にも、汚染される事が無い」と照らして見る時、自然に仏道に存在する様子も、隠れていない本来の「面目」、「有様」なのである。

古代の人は、「尽大地は自己の法身であるが、法身によって遮られない。

もし法身によって遮られるならば、身を転じようとしても少しもできないはずである。

解脱の道が存在するのである。

(それでは、)人の解脱の道とは、どういった物であるのか?」と言った。

もし「解脱の道」を言う事ができない者は、法身の命も急に絶えて、苦しみという海に長く沈むであろう。

「人の解脱の道とは、どういった物であるのか？」と質問されたら、「どうしたら、法身を活かし、苦しみという海に沈まない事ができるのか？」と言うであろう！

「人の解脱の道とは、どういった物であるのか？」と質問された時、「尽大地は自己の法身である」と言いなさい。

もし「尽大地は自己の法身である」のが道理であれば、「尽大地は自己の法身である」時は、「尽大地は自己の法身である」と言う事ができない。また、「尽大地は自己の法身である」と言う事ができない時、「フツと(切れたように)言う事ができないのか？」と理解するべきである。

言う事ができない物を、次のように、古代の仏と等しい人は言い表した事が有る。

死の中で生きる事が有るし、生きる中で死んでいる事が有る。死んでいる者が常に死んでいる事が有るし、生きている者が常に生きている事が有る。

これは、人が強いて、そうさせているわけではない。法が、このようであるのである。

そのため、「法輪を転じる」、「法を説く」時、このような光が存在するし、声が存在する。

「現身度生」、「仏や菩薩が『この世』に身を出現させて生者を仏土へ渡す事」でも、このような光が存在するし、声が存在する、と知るべきである。

これを「無生の知見」、「生じる事を超越した知見」と言うのである。

「現身度生」、「仏や菩薩が『この世』に身を出現させて生者を仏土へ渡す」とは、「度生現身」、「生者を仏土へ渡すために、仏や菩薩が『この世』に身を出現させる」事なのである。

「度」、「仏土へ渡す事」に向かって「現」、「この世への出現」を辿るべきではないし、「現」、「この世への出現」を見て「度」、「仏土へ渡す事」を疑うべきではない。

「『度』、『仏土へ渡す事』について、仏法は、究め尽くしている」と理解するべきであるし、説くべきであるし、証するべきである。

「現」、「この世への出現」も「身」も「度」、「仏土へ渡す」ためなのであると聞くべきであるし、説くべきである。

これも、「現身度生」、「仏や菩薩が『この世』に身を出現させて生者を仏土へ渡す事」が、そうさせているのである。

この主旨を証しているので、仏は、「得道した」、「悟った」朝から、「涅槃する」、「肉体が死ぬ」夕方まで、一文字も説かなくても、(「現身度生」、「仏や菩薩が『この世』に身を出現させて生者を仏土へ渡す事」によって)説かれている言葉は自由自在なのである。

古代の仏と等しい人は、「尽大地は、真実の人の体なのである。
尽大地は、解脱の門なのである。
尽大地は、毘盧遮那如来の単眼なのである。
尽大地は、自己の法身なのである」と言った。

この言葉の意味は、真実とは、真実の身なのである。

尽大地とは、私達の仮ではない真実の身である、と知るべきである。

「日頃は、なぜ、知らないのか?」と質問する人がいれば、「『尽大地は、真実の人の体である』と言った言葉を私に返せ」と言いなさい。

また、「『尽大地は、真実の人の体である』と、そのようにして、(疑問によって、)知るのである」とも言いなさい。

また、「尽大地は、解脱の門である」とは、纏わりつかれて「拘わる」、「拘束される」事が全く無い事を「解脱の門」と名づけるのである。

「尽大地」という言葉は、時にも年月にも、心にも言葉にも、親しくて、隙間無く親密なのである。

限り無く、境が無い事を「尽大地」と言えるのである。

尽大地という解脱の門に入る事を求め、出る事を求めても、また、でき得ないのである。

なぜ、そうなのか?

発した質問を顧みるべきである。

存在しない事を尋ねたいと思っても、叶わない物なのである。

また、「尽大地は、毘盧遮那如来の一つの眼なのである」とは、「仏は、一つ目なのである」と言えるが、「人の眼のようであろう」と思うなかれ。

人にも目は二つ有るが、眼について言う時は、「人の眼」とばかり言って、「人の二つの眼」とも「人の三つの眼」とも言わないのである。

(仏の)教えを学ぶ者は、「『仏眼』と言う物や、菩薩の『法眼』と言う物や、『天眼』などと言う物も、(肉)眼のような物である」とは習わないのである。

誤って「仏眼、法眼、天眼は、(肉)眼のような物である」と知る者を「儚い(者)」と言うのである。

今は、ただ、「仏の眼は一つであり、尽大地である」と聞くべきである。

仏には、千の眼も、万の眼も、有るかもしれないが、まず、暫く、「尽大地は、仏の眼の一つである」のである。

多いかもしれない仏の眼の中で、「尽大地は、仏の眼の一つである」と言っても咎は無い。

また、「仏には『眼』が一つだけ有る」と知るのも誤りではない。

仏の「眼」は多様に有る。

仏の「眼」は、三つ有る場合も有るし、千の眼が有る場合も有るし、「八万四千有る」と言う事も有るが、仏の「眼」が、このように多いと聞いて、耳を驚かす事なかれ。

また、「尽大地は、自分の法身なのである」と聞くべきである。

自分を知る事を求めるのは、生きている者に必ず存在する心なのである。

けれども、真実の自分を見る者は稀なのである。

仏だけが真実の自分を知っている。

仏以外の外道などは、いたずらに無駄に、自分ではないものだけを誤って「自分である」と思ってしまうのである。

仏が言っている「自分」とは、尽大地なのである。

そのため、「自分である」と知っている者も知らない者も皆、共に、自分ではない尽大地は無いのである。

尽大地が自分である時の事についての説明は、昔の人に任せよう。

昔、ある僧が、古代の高徳の僧に、「百、千、万の多数の、知覚の対象が一時に来た時は、どうすればよいでしょうか？」と質問した。

古代の高徳の僧は、「それを気にかける事なかれ」と言った。

「それを気にかける事なかれ」という言葉の真意は、「来た事は仕方がない。ともかく動揺する事なかれ」という事なのである。

これは、仏法について話しているのである。

知覚の対象については話していないのである。

「それを気にかける事なかれ」という言葉は、「明確に戒めている」と理解するべきではない。

「それを気にかける事なかれ」という言葉は、「『諦実』、『真理の実体』である」と理解するべきである。

「何としても気にかけない！」とすると、(逆に、)気にかけてしまうのである。

古代の仏と等しい人は、「山河大地と諸々の人は同じく共に生まれ、過去、現在、未来の諸仏と諸々の人は同じく共に修行して来ている」と言った。

そのため、一人の人が生まれた時に、山河大地を見ると、この一人の人が生まれるより前に存在していた山河大地の上に、今、もう一つの山河大地を重ねて、山河大地が生まれて出でたとは見えないけれども、古代の言葉が虚偽であるわけではない。

どのように理解するべきなのか？

「理解できない」と言って置いておくべきではないので、必ず理解するべきである。

既に、古代の仏と等しい人が説いている言葉であるので、聞くべきであるし、聞いたら、理解するべきなのである。

この古代の仏と等しい人の言葉を理解する方法は、この生まれた一人の人が、生まれた時から今までの、この生を尋ねると、「この生とは、どういった物であるのか？」と初めから終わりまでを明らめている人は誰であるのか？

初めも終わりも知らないけれども、生まれて来ている。

山河大地の限界も知らないが、山河大地を見るし、山河大地を踏み歩くような物なのである。

「生のようではない山河大地よ」と恨む思いなかれ。

古代の仏と等しい人は、「山河大地は、私の生と等しいのである」と言っている、と明らめるべきである。

また、過去、現在、未来の諸仏は、既に、修行して、仏道を成就しているし、悟り終わっている。

「仏と私が等しい」とは、どのように理解するべきなのか？

まず、暫く、仏の修行を理解するべきである。

仏の修行は、尽大地と共に修行し、尽くの生者と共に修行する。

もし尽くの一切の全てのものと共に修行していなければ、未だ仏の修行ではないのである。

そのため、発心から悟りを得るに至るまで、必ず、尽大地と尽くの生者と共に、修行もするのであるし、悟りもするのである。

「『仏と諸々の人は同じく共に修行している』とは、どういう事なのか？」と疑う思いも有るであろう。

「『仏と諸々の人は同じく共に修行している』事について、知る事ができない」という思いも混じるであろう。

明らめようとしているので、「どういう事なのか？」や「知る事ができない」というような声が聞こえても、他人事とは思えないのである。

理解できるように教えると、過去、現在、未来の諸仏が発心したり修行したりする時は、必ず、私達の身心を漏らさない理が有るのである、と知るべきである。

これを疑う事は、過去、現在、未来の諸仏の悪口を言う事に成るのである。

静かに顧みれば、私達の身心は、実に、過去、現在、未来の諸仏と同じく共に修行している道理が有るであろうし、発心している道理も有るであろう、と見えるのである。

私達の身心の前後を顧みて照らせば、私達の身心の前後を尋ねるべき人は、私ではないし、人ではないのに、何に停滞して「過去、現在、未来とは隔絶している」と思うのか？

こう思っても、しかし、私の思いではないのである。

また、なぜ、過去、現在、未来の諸仏の本心の仏道修行の所である時間を「隔絶している」とするべきであるのか？　いいえ！

暫く、「仏道は、知っている、知っていない、ではない物である」と言える。

古代の人は、「落ちた物は他者の物ではない。
縦、横は議論するべきではないのである。
山河大地は、法の王である仏の身を全て現しているのである」と言った。

今の人も、昔の人の言葉に習うべきである。

山河大地は、法の王である仏の身なのである。
そのため、「落ちた物も仏の身と同じ物なのである」と理解していた法の王である仏がいたのである。

この言葉の意味は、「山が地の上に存在するような物なのであるし、地が山を乗せているような物なのである」なのである。

理解すると、理解していなかった時が来て、理解を妨げる事は無いのである。
また、理解が、理解していなかった時を破る事も無いのである。
しかも、理解している時と、理解していなかった時は、春の色と、秋の音声のように存在するのである。

「理解できなかった」とは、声を大きくして説いているが、説いている声が耳に入らず、耳が声の中で遊び歩いていたのである。

「理解できた」とは、声が耳に入って三昧が現れた時なのである。

ただし、誤って「理解できた時は声が小さく、理解できなかった時は声が大きかったのである」と思わないべきである。

私が思う事ができ得た物事ではないので、法の王である仏が思う事ができ得たのである、と知るべきである。

「法の王である仏の身」とは、「眼」も身のように存在するのであろうし、心も身と等しいのであろうし、

心と身が、わずかな隔ても無く、「全て現れている」のであろうし、

前述のように、光明も説法も、法の王である仏の身なのであろう、と理解できるのである。

昔から言われている言葉が有る。

「魚でなければ、魚の心を知る事ができないし、鳥でなければ、鳥の跡を訪ね難い」

この理も、よく知っている人は稀(まれ)なのである。

「人は魚の心を知らない」、「人は鳥の心を知らない」としか思わない人は、誤って知っているのである。

この理を知る方法とは、

魚と魚は、必ず、相互に心を知るのである。
「人のように知らない」という事は無くて、(登)龍門を遡(さかのぼ)ろうと思った時にも、魚達は皆、共に知り、同じく心を一つにするのである。(魚が「龍門」、「竜の門」を通ると竜に成れるという例え話が存在する。)
「九浙」を乗り越える心も、他の魚達に通じて、知られるのである。
これを、魚ではない者は知る事ができない。

また、鳥が空を飛んだのを、地を行く獣は、鳥の飛んだ跡を知り、鳥が空を飛んだ跡を見て訪ねる事は全く夢にも未だ思いつく事ができないのである。
鳥が空を飛んだ跡が存在すると知らないので、思いついた前例が無いのである。
それなのに、鳥は能(よ)く「小さい鳥が幾百、幾千と群がって過ぎた」、「この跡は、大きい鳥が幾列で南に去ったり北に飛んだりした跡である」と数々、見えるのである。
鳥が空を飛んだ跡は、車の跡が道に残るよりも、馬の跡が草に残って見えるよりも、隠れていないのである。
鳥は、鳥が空を飛んだ跡を見る事ができるのである。

このような理が、仏にも有るのである。
仏は、「仏が幾世々、修行して過ぎた」と思う事ができるし、小さい仏、大きい仏の数を漏らさず知っているのである。
仏ではない時は、全く知る事ができない事なのである。
「どうして知る事ができないのか?」と言う人もいるであろう。
仏の眼で仏の行跡を見る事ができるが、仏ではない者は仏の眼を備えていないのである。
仏の物は数える事ができる数なのである。
仏の物の数を知らないならば、仏の道の行跡を全て辿(たど)りなさい。
もし仏の行跡が眼に見えれば、「仏の行跡であるだろうか?」と、仏の足跡(そくせき)を比べなさい。
仏の行跡を比べていると、仏の行跡も知る事ができるし、
仏の行跡の長短も深浅も知る事ができるし、
仏の行跡を量る事によって、自分の行跡を明らめる事ができ得るように成るのである。
仏の行跡を会得する事を「仏法」と言うのである。

正法眼蔵　唯仏与仏

受戒

次のように、「禅苑清規」には記されている。

「過去、現在、未来の諸仏は皆、出家して仏道を成就した」と言われている。

(初祖から二十八祖までの)西のインドの二十八人の祖師達と(二十八祖から三十三祖までの)中国の六人の祖師達は、釈迦牟尼仏の心の印を伝えているが、尽く出家者である。

考えると、出家者の戒律を厳しく清浄に守って、能く三界の模範と成っている。

そのため、禅の学に参入して仏道を問うて探求するには、戒律を守る事を優先する。

過ちを離れて過ちを予防しなければ、仏祖に成れない！

出家者の戒律を受ける法では、「三衣」、「出家者の三種類の法衣」と器といった、新しい清浄な衣や物を準備する。

もし新しい衣が無いようであれば、(古い衣を)洗って清浄にする。

出家者の戒律を受ける場所に入って、出家者の戒律を受ける時に、衣と器を借りるのは駄目である。

(出家者の戒律を受ける時は、)一心に専念して注意して慎んで「異縁」、「意外な雑念に襲われる事」なかれ。

仏の姿を象って(模倣して)、仏の戒律を備えて、仏が「受用する事」、「受け入れてくれる事」を得る。これは一大事である！

「軽心」、「軽い気持ち」では駄目である！

もし衣と器を借りてしまったら、出家者の戒律を受ける場所に入って、出家者の戒律を受けても、戒律を受けた事には成らない！

もし出家者の戒律をかつて受けた事が無ければ、一生、出家者の戒律が無い人に成ってしまう。

(出家者の戒律を受けていない僧は、)濫(みだ)りに「空門(くうもん)」、「空(くう)の門」、「仏教」に混じって、虚しく信者からの布施を受ける事に成ってしまう。

初心者は、仏道に入った時は仏法と戒律を暗記できていないため、師匠が言わなければ、このような(出家者の戒律を受けていない)状態に陥(おちい)ってしまうかもしれない。

(そのため、)今、ここで、苦言を呈する。あえて望むと、心に銘じて忘れないべきである。

既に「声聞戒」を受けているのであれば、「菩薩戒」を受けるべきである。

出家者の戒律を受ける事は、仏法に入る最初の一歩なのである。

西のインドから東の地の中国まで、仏祖が伝えて来ている所では、必ず、仏法に入る時、最初に戒を受けるのである。

戒を受けなければ、未だ諸仏の弟子ではないし、祖師の法の子孫ではない。

「過ちを離れて過ちを予防する」事を「禅の学に参入して仏道を問うて探求する」事としているからである。

「戒律を守る事を優先する」という言葉は既に正しく「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」なのである。

仏祖に成るには必ず「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を伝えられて保持するので、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を正しく伝えている祖師は必ず仏の戒を受けて保持するのである。

仏の戒を受けて保持していない仏祖はいないのである。

如来、仏に従って仏の戒を受けて保持したり、仏の弟子に従って仏の戒を受けて保持したりするのは皆、命を受けているのである。

仏から仏へ、祖師から祖師へ正しく伝えている仏の戒は、二十八祖の達磨だけが中国に伝えて来て、中国で五人に伝えられて三十三祖の大鑑禅師に至っている。

三十四祖の青原の行思、南嶽の懐譲などが正しく伝えている仏の戒は、今に伝わっている。

しかし、杜撰（ずさん）な老人の僧などには仏の戒をかつて知らなかった者もいた。最も憐れむべきである。

「『菩薩戒』を受けるべきである。出家者の戒律を受ける事は、仏法に入る最初の一歩なのである」

これが、学に参入している者が知るべき物なのである。

長く仏祖の奥義の学に参入している者は「『菩薩戒』を受けるべきである事」を必ず正しく伝えている。

学が疎（おろそ）かな怠惰な輩には「菩薩戒」は得られない物なのである。

「菩薩戒」を受ける作法とは、必ず、祖師を焼香して礼拝して、「『菩薩戒』を受ける事」を請い求めるのである。

「菩薩戒」を許されると、身を洗浄して清浄にして、新しい清浄な衣を着るか、古い衣を洗って華を撒(ま)き散らし香をたき礼拝して恭(うやうや)しく敬って身につける。

遍(あまね)く仏の姿形をかたどった絵や像を礼拝し、
「仏、法、僧」という「三宝」を礼拝し、
高徳の長老の僧を礼拝し、
諸々の「障」、「煩悩」を除去し、身心が清浄に成る事を得なさい。

その作法は、長く仏祖の奥義として正しく伝えられている。

その後、道場で、「和尚」、「授戒師」と「阿闍梨」、「教授師」は、戒を受ける者に教えて、礼拝させ、両ひざを並べて地につけさせて上半身を直立させて敬礼させ、合掌させ、次のような言葉を唱えさせる。

「仏に帰依します。
法に帰依します。
僧に帰依します。
『仏陀』、『両足尊』に帰依します。
『達磨』、『法』、『離欲尊』、『欲を離れられる尊い物』に帰依します。
『僧伽』、『僧』、『衆中尊』、『生者の中の尊い者達』に帰依します。

『帰依仏竟』、『最後まで仏に帰依し徹します』。
『帰依法竟』、『最後まで法に帰依し徹します』。
『帰依僧竟』、『最後まで僧に帰依し徹します』。
如来、仏である真の無上普遍正覚は、私の大いなる師である。
私は今、仏に帰依します。
今後、更に、邪悪な魔、外道に帰依しません。
『慈愍故』、『仏は私を慈しみ愍れんでくれるので』。
『慈愍故』、『仏は私を慈しみ愍れんでくれるので』」

（
三回唱える。
第三回目には「慈愍故」を三回くり返す。
）

「善い男子よ。
既に邪を捨てて正しさに帰ったので、既に戒は『周円』、『遍く行き渡っている』。
『三聚清浄戒』を受けなさい。
第一、『摂律儀戒』、『戒を守って一切の悪を予防する』。あなたは、今の身から仏の身に至るまで、この戒を能く保持するか否か？」
戒を受ける者は、「能く保持します」と答える。
(三回、質問して、三回、答える。）
「第二、『摂善法戒』、『進んで善を行う』。あなたは、今の身から仏の身に至るまで、この戒を能く保持するか否か？」
戒を受ける者は、「能く保持します」と答える。
(三回、質問して、三回、答える。）

「第三、『饒益衆生戒』、『生者を教化して利益をもたらす』。あなたは、今の身から仏の身に至るまで、この戒を能く保持するか否か？」

　戒を受ける者は、「能く保持します」と答える。

（三回、質問して、三回、答える。）

「以上の『三聚清浄戒』の各々を犯す事なかれ。あなたは、今の身から仏の身に至るまで、能く保持するか否か？」

　戒を受ける者は、「能く保持します」と答える。

（三回、質問して、三回、答える。）

「これらの事をその通りに保持しなさい」

（戒を受ける者は、三回礼拝して、両ひざを並べて地につけて上半身を直立して敬礼して、合掌する。）

「善い男子よ。

あなたは『三聚清浄戒』を受けたので、十戒を受けなさい。

十戒は、諸仏、諸々の菩薩の清浄な大いなる戒である。

第一、『不殺生』、『生物を殺さない』。あなたは、今の身から仏の身に至るまで、この戒を能く保持するか否か？」

　戒を受ける者は、「能く保持します」と答える。

（三回、質問して、三回、答える。）

「第二、『不偸盗』、『盗まない』。あなたは、今の身から仏の身に至るまで、この戒を能く保持するか否か？」

　戒を受ける者は、「能く保持します」と答える。

（三回、質問して、三回、答える。）

「第三、『不婬欲』、『出家者は性交しない。在家者は不倫しない』。あなたは、今の身から仏の身に至るまで、この戒を能く保持するか否か？」

戒を受ける者は、「能く保持します」と答える。

（三回、質問して、三回、答える。）

「第四、『不妄語』、『嘘を言わない』。あなたは、今の身から仏の身に至るまで、この戒を能く保持するか否か？」

戒を受ける者は、「能く保持します」と答える。

（三回、質問して、三回、答える。）

「第五、『不酤酒』、『酒を売らない』、『酒を飲まない』。あなたは、今の身から仏の身に至るまで、この戒を能く保持するか否か？」

戒を受ける者は、「能く保持します」と答える。

（三回、質問して、三回、答える。）

「第六、『不説在家出家菩薩罪過』、『出家者の罪過を言わない』。あなたは、今の身から仏の身に至るまで、この戒を能く保持するか否か？」

戒を受ける者は、「能く保持します」と答える。

（三回、質問して、三回、答える。）

「第七、『不自讃毀他』、『自分をほめない。他人の悪口を言わない』。あなたは、今の身から仏の身に至るまで、この戒を能く保持するか否か？」

戒を受ける者は、「能く保持します」と答える。

（三回、質問して、三回、答える。）

「第八、『不慳法財』、『法や財産を惜しまない』。あなたは、今の身から仏の身に至るまで、この戒を能く保持するか否か？」

戒を受ける者は、「能く保持します」と答える。

（三回、質問して、三回、答える。）

「第九、『不瞋恚』、『怒らない』。あなたは、今の身から仏の身に至るまで、この戒を能く保持するか否か？」

戒を受ける者は、「能く保持します」と答える。
（三回、質問して、三回、答える。）
「第十、『不謗三宝』、『仏、法、僧の悪口を言わない』。あなたは、今の身から仏の身に至るまで、この戒を能く保持するか否か？」
戒を受ける者は、「能く保持します」と答える。
（三回、質問して、三回、答える。）
「以上の『十戒』の各々を犯す事なかれ。あなたは、今の身から仏の身に至るまで、能く保持するか否か？」
戒を受ける者は、「能く保持します」と答える。
（三回、質問して、三回、答える。）
「これらの事をその通りに保持しなさい」
戒を受ける者は、三回礼拝する。
「以上の『三帰』、『仏、法、僧という三宝に帰依する事』と、『三聚清浄戒』と、『十重禁戒』は、諸仏が受けて保持している物なのである。あなたは、今の身から仏の身に至るまで、これらの『十六支戒』を能く保持するか否か？」
戒を受ける者は、「能く保持します」と答える。
（三回、質問して、三回、答える。）
「これらの事をその通りに保持しなさい」
（戒を受ける者は、三回礼拝する。）
（次に、「処世界梵」という詩を唱えて、終わると、）「仏に帰依します。法に帰依します。僧に帰依します」と言う。
（次に、戒を受けた者は、道場を出る。）

仏祖は必ず、戒を受ける、この作法を正しく伝えている。

丹霞天然、薬山の高沙弥なども同じく受けて保持して来ている。

「比丘戒」を受けなかった祖師はいるが、仏祖が正しく伝えている、この「菩薩戒」を受けなかった祖師は未だいないのである。

仏祖は必ず「菩薩戒」を受けて保持するのである。

正法眼蔵　受戒

洗面

「法華経」の「安楽行品」には、「以油塗身、澡浴塵穢、著新浄衣、内外俱浄」、「香油を身に塗り、塵、汚れを洗浄し、新しい清浄な衣を着て、内外を共に清浄にして」と記されている。

この法は、如来、釈迦牟尼仏が、まさに法華経を説いた集まりで、四安楽行を行う人のために説いた言葉なのである。

このため、他の集まりでの言葉と同じではないし、他の経の言葉と同じではない。

そのため、身心を清浄にして香油を塗り、塵、汚れを除くのは、第一の仏法なのである。

新しい清浄な衣を着るのは、一つの清浄の法なのである。

塵、汚れを洗浄して、香油を身に塗ると、内外が共に清浄に成るのである。

内外が共に清浄な時、心と身が依り所とする環境としての報いである「この世」と、過去の行いの正に報いである心と身は、清浄なのである。

それなのに、仏法を聞かないし、仏道に参入しない愚かな人は、誤って「洗浄は、わずかに身の肌を洗浄できるだけで、身の内には五臓六腑が有る。五臓六腑を各々洗浄しなければ、清浄に成れない。そのため、身の表面を必ずしも洗浄しなくても良い」と言ってしまう。

このように誤った言葉を言ってしまう輩は、仏法を未だ知らないし、聞かないし、未だ正しい師に出会えていないし、仏祖の法の子孫に出会えていないのである。

暫(しばら)く、このような邪悪な見解の輩の言葉を投げ捨てて、仏祖の正しい法の学に参入するべきである。

(仏ではない人は、)「諸法」、「全てのもの」の境界を未だ決断できていないのであるし、四大(元素)といった「諸大」の内外もまた会得できていないのである。

このため、身心の内外もまた会得できていないのである。

けれども、最後身の菩薩が既に今、道場に坐り仏道を成就しようとする時は、まず、法衣を洗浄し、次に、身心を洗浄する。

これが、過去、現在、未来の十方の諸仏の身のこなしなのである。

最後身の菩薩と、他の種類の者は、諸々の事が皆、同じではない。

最後身の菩薩の功徳、知、身心、荘厳は皆、最も尊いのであるし、最上なのである。

法衣の洗浄と身心の洗浄の法もまた同様なのである。

まして、諸々の人の身心、身心の境地は、時に従って異なる事が有る。

「一度、坐禅した時、三千界は皆、『坐断される』、『煩悩を断たれる』」と言われている。

「一度、坐禅した時、三千界は皆、『坐断される』、『煩悩を断たれる』」が、自分も他者も量る事ができない、仏法による功徳なのである。

坐禅の身心の量もまた「五尺、六尺」ではない。

「五尺、六尺」は必ずしも「五尺、六尺」ではないからである。

存在する場所も、この世、他の世界、尽界、無尽界などの有限、無限ではない。

「ここが、どこだと思って、更に、『粗い』とか『細かい』とか説くのか？」なので。

心の量もまた、思量分別で知る事はできないし、思量分別しないで究める事はできない。

身心の量は量る事ができないので、洗浄の量もまた量る事ができないのである。

身心の量、洗浄の量をひねって会得して修行して証する事が、仏から仏へ、祖師から祖師へ、仏祖が念頭に置いて護っている事なのである。

「計我」、「自分に執着して自説で仏法などを判断する事」を優先する事なかれ。

「計我」、「自分に執着して自説で仏法などを判断する事」を真実とする事なかれ。

そのため、法衣を洗浄して身心を洗浄すると、身の量と心の量を究め尽くして清浄に成らせるのである。

たとえ四大(元素)であっても、たとえ「色受想行識」という「五蘊」であっても、たとえ不壊の性質のものであっても、洗浄すると、皆、清浄に成り得るのである。

洗浄について、「水を持って来て洗浄した後は清浄なのである」とだけ知るべきではない。

水は、本(もと)から清浄でもないし、本(もと)から不浄でもない。

「本(もと)から清浄なものは、来て付いたものを清浄に成らせる」と言わないし、「本(もと)から不浄なものは、来て付いたものを不浄に成らせる」と言わない。

仏祖の修行と証を保持し任せた時、「水を用いて衣を洗浄する」とか「水で身心を洗浄する」などの仏法が伝わっているだけなのである。

このため、修行して証すると、清浄を超越し、不浄を透過して脱ぎ落とし、「清浄ではない」とか「不浄ではない」という見解を脱ぎ落とすのである。

そのため、未だ汚染されていないが洗浄し、既に大いに清浄であっても洗浄する法は、仏祖の仏道だけが保持し任されている。

洗浄は、外道が知る事ができない事なのである。

もし「五臓六腑を洗浄しなければ、清浄に成れない」という愚かな人の言葉の通りであれば、五臓六腑を細かい塵にまで粉にして空のように成らせて、大いに海水を尽くして洗っても、塵の中を洗わなければ清浄には成らないであろうし、空の中を洗わなければ、内外の清浄を成就できないであろう！

しかし、愚かな人は空を洗浄する法を未だ知らない。

空をひねって来て空を洗浄し、空をひねって来て身心を洗浄する、洗浄を仏法の通りに信じて受け入れる者は、仏祖の修行と証を保持して任されるべきである。

仏から仏へ、祖師から祖師へ正統に代々正しく伝えている正しい法では、洗浄を用いると、身心の内外、五臓六腑、心と身が依り所とする環境としての報いである「この世」と過去の行いの正に報いである心と身、法界、虚空の内外と中間は、たちまち清浄に成るのであるし、

香と華を用いて清める時、過去、現在、未来、因縁、行った業は、たちまち清浄に成るのである。

釈迦牟尼仏は、「三回、身心を洗浄して、三回、香で身心を清めれば、身心は清浄に成る」と言った。

そのため、身を清め心を清める法は、必ず一回、身心を洗浄しては一回、香で身心を清めて、このようにして連続して三回、身心を洗浄して、三回、香で身心を清めて、仏を礼拝して、経を読んで、坐禅して、坐禅の合間に歩くのである。

「坐禅の合間に歩き終わって、更に、正しく坐禅しようとする時には、必ず足を洗う」と言われている。

足が汚物に触れなくても、仏祖の法では、足を洗うのである。

原文の「三沐三薫」の「一沐」とは、一回、身心を洗浄する事なのである。「通身」、「全身」を皆、洗浄するのである。

そうした後、常日頃のように衣を着た後、小さい香炉に名香をたいて、懐（ふところ）の内や法衣、坐禅する場所などを香で清めるのである。

そうした後、また、身心を洗浄して、また、香で身心を清める。

このように三回するのである。

これが、仏法の通りの作法なのである。

この時、「眼耳鼻舌身意」という「五感と意識」という「六根」や、「色声香味触法」という「六塵」が新たに来なくても、清浄の功徳は、有って、目の前に現れるのである。疑うべきではない。

「貪欲と怒りと愚かさ」という「三毒」と、「四倒」が未だ除去されていなくても、清浄の功徳がたちまち目の前に現れるのが、仏法なのである。

誰も凡人の思慮で量る事はできないし、何人も凡人の「見る眼」で見る事
はできない！

例えば、沈香を洗浄して清める時、欠片にまで折って洗う事なかれ。
塵にまで粉にして洗う事なかれ。
全体のまま洗浄して清浄を得る事ができるのである。

仏法では、必ず、洗浄の法が決められている。
　身を洗浄したり、
心を洗浄したり、
足を洗浄したり、
顔を洗浄したり、
目を洗浄したり、
口を洗浄したり、
排泄器官を洗浄したり、
手を洗浄したり、
器を洗浄したり、
法衣を洗浄したり、
頭を洗浄したりするが、皆、過去、現在、未来の諸仏と諸々の祖師の正しい
法なのである。

　「仏、法、僧」という「三宝」に捧げものを捧げる時には、諸々の香を
取って来て、
まず、自分の両手を洗浄して、

口(くち)をうがいして洗浄し、洗面して、
清浄な衣を着て、
清浄な水盤に清浄な水を入れて、香を洗浄して、(香をたいて、)
こうした後に、「仏、法、僧」という「三宝」という知覚の対象に捧げものを捧げるのである。

願わくば、「摩黎山」の栴檀香を、「阿耨達池」の「八功徳水」で洗浄して、「仏、法、僧」という「三宝」に捧げる事ができますように。

洗面は、西のインドから伝えられて、東の中国に流布している。
洗面の法は諸部の律で明らかではあるが、なお仏祖が伝えて保持している洗面の法が正統である。
洗面は、何百年、仏から仏へ、祖師から祖師へ行(おこな)って来ている、だけではなく、億千万劫前後、流通している。
洗面は、垢(あか)と皮脂といった汚れを除去するだけではなく、仏祖の命なのである。
「もし顔を洗わなければ、礼を受けるのも、礼をするのも、他者に礼をするのも、共に、罪が有る」と言われている。
(もし顔を洗わなければ、)自分に礼を受けるのも、他者に礼をするのも、礼をされるのも、礼をするのも、性質が「空寂」、「虚しく」成ってしまうのであるし、性質が「脱落」、「抜け落ちて」しまうのである。
このため、必ず洗面するべきである。

洗面する時は、「五更」、「午前三時から午前六時までの夜明けの頃」か、「昧旦」、「昧爽」、「夜明け途中の未だ暗い頃」である。
私、道元が、道元の亡き師である五十祖の如浄の天童山の景徳寺に住んでいた時は、「三更の三点」、「午前一時前後」を洗面の時間としていた。

「『裙』、『法衣の下衣』と、『褊衫』、『法衣の上衣』」、「法衣」を着て、または、「直綴」、「法衣」を着て、手拭きを携えて洗面所に赴く。
(昔は法衣は腰から上半分と下半分の二つに分かれていた。)

手拭きは、一尺の幅の布で、長さは一丈二尺である。
(一尺は約三十センチメートル。一丈は約三メートル。)
手拭きの色は白ではいけない。
白い手拭きは禁じる。

次のように、「大比丘三千威儀経」には記されている。

手拭きを用いるには五つの事が有る。
(一)手拭きの上下の端で拭くべきである。
(二)一方の端で手を拭き、他方の端で顔を拭くべきである。
(三)「鼻を拭くなかれ」(、「鼻の中と、鼻水を拭くなかれ」)。
(四)手拭きを用いて皮脂といった汚れを拭いたら、すぐに手拭きを洗浄するべきである。
(五)体を拭くなかれ。体の洗浄には体拭きが有る。

手拭きを保持するには、このように保持して護るべきである。

手拭きは、二つに折って、左の肘の辺りの上に掛ける。

手拭きは、一方の半分は顔を拭き、他方の半分は手を拭く。

「鼻を拭くなかれ」とは、「鼻の中と、鼻水を拭くなかれ」という意味である。

脇、背中、腹、へそ、腿、ふくらはぎを、手拭きで拭くなかれ。

垢や皮脂で汚れたら、洗浄するべきである。

手拭きが濡れて湿っていたら、火にあぶり、日干しして乾かすべきである。

手拭きを体を洗浄した時に用いるなかれ。

「雲堂」、「僧堂」の洗面所は、「後架」、「僧堂の後ろに架け渡して作った洗面所」である。

「後架」、「僧堂の後ろに架け渡して作った洗面所」は、「照堂」の西である。

その配置図は伝えられている。

洗面所は、庵(いおり)の中や、「単寮」では、都合の良い場所に構える。
寺の主の僧である「住持」は、「住持」が住む「方丈」で洗面する。
老人の僧が居る所には、都合の良い場所に洗面所を配置する。
もし「住持」が「雲堂」、「僧堂」に住んでいる時は、「後架」、「僧堂の後ろに架け渡して作った洗面所」で洗面するべきである。

洗面所に着いたら、手拭(てふ)きの中央を首のうなじに掛ける。
手拭(てふ)きの二つの端(はし)を(首と肩の上の)左右から(体の)前に引き出して、
左右の手で、左右の脇から、手拭(てふ)きの左右の端(はし)を(体の)後ろへ引き出して、
(体の)後ろで、引いて交差させて、左の端(はし)を右へ持って来て、右の端(はし)を左へ持って来て、
胸の前の辺りで結ぶのである。
このようにすれば、法衣の首は手拭(てふ)きに覆われ、法衣の両袖(りょうそで)は手拭(てふ)きに結び上げられて肘(ひじ)より上に上るのである。
肘(ひじ)から下の腕、手は現れる。
例えば、「たすきがけ」のように成る。

その後、もし「後架」、「僧堂の後ろに架け渡して作った洗面所」であれば、洗面桶(せんめんおけ)を取って、釜(かま)の近くに行って、一桶分の湯を取って帰って、洗面台の上に置く。
もし他の場所であれば、湯が入っている桶(おけ)の湯を洗面桶(せんめんおけ)に入れる。

次に、「楊枝(ようじ)」、「歯磨きのために噛(か)む木の枝」を使うべきである。

宋の時代の中国の諸々の山の寺では、歯磨きのために噛む木の枝を噛む法が廃れて久しく伝えられていないので、歯磨きのために噛む木の枝を噛む法が伝えられている場所は無いが、

私、道元は、日本の吉祥山の永平寺で、歯磨きのために噛む木の枝を噛む法を伝えている。

「今案」、「今、新しく考案した物」なのである。

これによれば、まず、歯磨きのために噛む木の枝を噛むべきである。

(歯磨きのために噛む木の枝を噛む前に、)歯磨きのために噛む木の枝を右手で取って、願いを唱えるべきである。

「華厳経」の「浄行品」には「手で『楊枝』、『歯磨きのために噛む木の枝』を取ったら、『全ての生者が、正しい法を『心得て』、『理解して』、自然に清浄に成りますように』と願うべきである」と記されている。

「全ての生者が、正しい法を『心得て』、『理解して』、自然に清浄に成りますように」と唱え終わって、更に、歯磨きのために噛む木の枝を噛む前に、願いを唱えるべきである。

「華厳経」の「浄行品」には「『楊枝』、『歯磨きのために噛む木の枝』を噛む時に、『全ての生者が、調伏の牙、身心を調和させて悪を降伏させる牙を得て、諸々の煩悩を噛みますように』と願うべきである」と記されている。

「全ての生者が、『調伏の』、『身心を調和させて悪を降伏させる』牙を得て、諸々の煩悩を噛みますように」と唱え終わってから、歯磨きのために噛む木の枝を噛むべきである。

歯磨きのために噛む木の枝の長さは、指が四本分か、八本分か、十二本分か、十六本分である。

「摩訶僧祇律」の第三十四には、「『歯木』、『歯磨きのために噛む木の枝』(の長さ)は、(噛む)量に応じて用いるべきである。最長は、指が十六本分である。最短は、指が四本分である」と記されている。

知るべきである。

歯磨きのために噛む木の枝の長さが、指が四本分よりも短くするべきではない。

歯磨きのために噛む木の枝の長さが、指が十六本分よりも長いのは噛む量に応じていない。(無駄遣いである。)

歯磨きのために噛む木の枝の太さは、手の小指の太さである。

けれども、小指より細くても、妨げは無い。

歯磨きのために噛む木の枝の形は、手の小指の形である。

一方の端は太くし、他方の端は細くする。

太い方の端を微細に成るまで噛むのである。

「大比丘三千威儀経」には、「歯磨きのために噛む木の枝の先端を噛むのが三分を過ぎるのは駄目である」と記されている。

歯磨きのために噛む木の枝を良く噛んで、「歯の上」、「歯の表面」を、特に歯の裏を磨いて洗浄するべきである。

度々、磨いて洗浄するべきである。

歯の根元の歯肉の上を良く磨いて洗浄するべきである。

歯の間を良く掻いて清浄に洗浄するべきである。

口を水でゆすぐ事は、度々すれば、洗浄されて清められる。

そうした後で、「舌をこそぐ」、「舌の表面に付着した物を除去する」べきである。

次のように、「大比丘三千威儀経」には記されている。

「舌をこそぐ」、「舌の表面に付着した物を除去する」には五つの事が有る。

(一)三回を過ぎる事なかれ。
(二)舌の上から血が出たら止めるべきである。
(三)大きく手を振って法衣や足を汚す事なかれ。
(四)「楊枝」、「舌をこそいだ木の枝」を人が通る道に捨てる事なかれ。
(五)人が通らない場所に捨てるべきである。

「三回、『舌をこそぐ』、『舌の表面に付着した物を除去する』」とは、水を口に含んで、「舌をこそぐ」、「舌の表面に付着した物を除去する」事を三回するのである。

「舌をこそぐ」、「舌の表面に付着した物を除去する」回数が三回というわけではないのである。

「血が出たら止めるべきである」というように理解するべきである。

よくよく「舌をこそぐ」、「舌の表面に付着した物を除去する」べきであるという事は「大比丘三千威儀経」には記されている。

「大比丘三千威儀経」には、「『口を清浄にする』とは、『楊枝を噛む事』、『歯磨きのために噛む木の枝を噛む事』と、口をうがいする事と、『舌をこそぐ事』、『舌の表面に付着した物を除去する事』である」と記されている。

そのため、歯磨きのために噛む木の枝は、仏祖と、仏祖の法の子孫が、保持して護って来ている物なのである。

釈迦牟尼仏が千二百五十人の出家者と共に王舎城の竹林精舎の中にいた時、十二月一日に、波斯匿王は、この日の食事を釈迦牟尼仏達に捧げた。

波斯匿王は、早朝に、自身の手で、釈迦牟尼仏に、歯磨きのために噛む木の枝を捧げた。

釈迦牟尼仏は、歯磨きのために噛む木の枝を受け取って、噛み終えると、残った木の枝を捨てた。

すると、釈迦牟尼仏が捨てた、残った木の枝が地につくと、木が生じた。

木が盛んに茂った。

根と茎が涌き出した。

木の高さが五百由旬に成った。

枝と葉が雲のように広がった。
周囲の木もまた同様に成った。
しばらくすると、華もまた生じた。
華の大きさは車輪のように成った。
ついに、果実もまた生じた。
果実の大きさは五斗の瓶(びん)のように成った。
根、茎、枝、葉が「七宝」、「七種類の宝」に成った。
いくつかの種類の色が映えて輝いて、優れて、麗しく、絶妙であった。
色に応じた色の光を発光して、太陽や月を覆い隠すほどであった。
その果実を食べると、果実は甘露のように美味であった。
良い香りの空気が四方に満ちた。
香りは、嗅いだ者の心情を悦(よろこ)ばせた。
良い香りの風が吹いて来て、香りが更に支え合ったり競い合ったりし、枝と葉が皆、「和雅の」、「仏の言い表せない素晴らしい」音を出して仏法の要を公演し、香りを嗅ぎ、音を聞いた者を飽(あ)きさせなかった。
一切の人々は、この木の不思議な変化を見て、仏を敬い信じる心を、ますます純粋にし厚くした。
すると、釈迦牟尼仏は仏法を説いたが、人々の意に応じ適(かな)い、人々の心を皆、「開解させた」、「悟らせた」。
仏を志して求める者は、天に生じる果報を得たが、とても多数であった。

仏や僧達に捧げものを捧げる法では、必ず早朝に、歯磨きのために噛(か)む木の枝を捧げるのである。

その後、色々な捧げものを捧げるのである。

釈迦牟尼仏に、歯磨きのために噛(か)む木の枝を捧げる事は多かったし、釈迦牟尼仏が、歯磨きのために噛(か)む木の枝を用いた事は多かったが、波斯匿王(プラセーナジット)が自身の手で歯磨きのために噛(か)む木の枝を釈迦牟尼仏に捧げた話と、この高い木が生えた話は、知るべきなので挙げたのである。

また、この日、「六師外道」は共に、釈迦牟尼仏に降伏させられて、驚き、恐れて、逃げて走り、終(つい)に、河に身を投げて死んだ。

「六師外道」の弟子達、九億人が皆、来て、釈迦牟尼仏が師に成る事を求めた。

釈迦牟尼仏が「出家者よ、来なさい」と言うと、「六師外道」の九億人の弟子達は、髭(ひげ)と髪が自然に抜け落ち、(いつの間にか)法衣が身に存在し、皆、出家者と成った。

釈迦牟尼仏は、「六師外道」の九億人の弟子達の為(ため)に説法して、仏法の要を示すと、「漏」、「煩悩」が尽きて、「結」、「輪廻転生に結びつけ束縛する煩悩」から解脱して、悉(ことごと)く阿羅漢と成った。

そのため、釈迦牟尼仏が既に、歯磨きのために噛(か)む木の枝を用いたので、人や天人は、歯磨きのために噛(か)む木の枝を捧げたのである。

歯磨きのために噛(か)む木の枝は、諸仏、諸々の菩薩、仏の弟子は必ず所持する物なのである、と明らかに知る事ができる。

もし歯磨きのために噛(か)む木の枝を用いなければ、歯磨きのために噛(か)む木の枝の法が権威を失墜してしまう。

悲しくないか？

次のように、「梵網菩薩戒経」には記されている。

あなた達、仏の子よ。

常に(春と秋という)二つの時に頭陀を行い、冬と夏に坐禅したり夏安居を結んだりしなさい。

常に、

(一)「楊枝(ようじ)」、「歯磨きのために噛(か)む木の枝」

(二)「澡豆」、「保湿したまま洗浄してくれる洗い粉」

(三)「三衣」、「三種類の法衣」

(四)「瓶」、「水の容器」

(五)「鉢」、「食べ物の器」

(六)坐具

(七)害獣避けの音が鳴る「錫杖(しゃくじょう)」

(八)香炉

(九)「漉水嚢」、「水中の虫を殺さないために水を漉(こ)す袋」

(十)「手巾」、「手拭(てふ)き」

（十一）「刀子」、「小刀」
（十二）「火燧」、「火打ち石」
（十三）「鑷子」、「ピンセット」、「鼻毛抜き」
（十四）「縄床」、「携帯用の寝具」
（十五）経
（十六）律
（十七）仏像
（十八）「菩薩の形像」、「菩薩の姿形をかたどった絵や像」を用いなさい。

そして、菩薩は、頭陀を行う時と、行脚（あんぎゃ）する時、百里、千里を行き来しても、この「十八種物」、「十八物」を常に、その身に、身につけなさい。

頭陀は、（旧暦の、）一月十五日から三月十五日までと、八月十五日から十月十五日までである。

この二つの時期の間、鳥の二つの翼のように、この「十八種物」を常に、その身に、身につけなさい。

この「十八種物」を一つも欠かしてはいけない。

もし欠かせば、鳥の一つの翼が抜け落ちたような物なのである。もう一つの翼が残っていても、飛行できない。「鳥道」（に例えられる「悟り」）の「機縁」、「縁（えん）」にいない事に成ってしまうであろう。

菩薩もまた同様である。

この「十八種物」という翼が備わっていなければ、菩薩の道を行う事ができない。

「十八種物」のうち「楊枝」、「歯磨きのために噛む木の枝」は既に第一にあり、最初に備えるべきなのである。

この歯磨きのために噛む木の枝の「用不」、「用い方」を明らめている仲間は、仏法を明らめている「菩提薩埵」、「菩薩」、「無上普遍正覚を求める修行者」なのである。

未だかつて歯磨きのために噛む木の枝を明らめていない者は、仏法を夢にも未だ見た事が無いであろう。

そのため、歯磨きのために噛む木の枝を見る事は、仏祖を見る事なのである。

もし、ある人が「歯磨きのために噛む木の枝の意味とは、どういった物であるのか？」と質問したら、「幸いにも、永平寺の老人である道元が、歯磨きのために噛む木の枝を噛むのに出会った」と言うであろう。

「梵網菩薩戒」は、過去、現在、未来の諸仏、諸々の菩薩は、必ず、過去、現在、未来に受けて保持して来ている。

そのため、歯磨きのために噛む木の枝もまた、過去、現在、未来の諸仏、諸々の菩薩は、過去、現在、未来に受けて保持して来ている。

次のように、「禅苑清規」には記されている。

大乗の「梵網経」の十重禁戒と四十八軽戒は、共に、読んで、通じて利益を得て、「持犯開遮」、「思いやりのために、戒律を保持して守る事を遮って犯す事を許す事」を善く知るべきである。

仏の黄金の口からの神聖な言葉にのみ依るべきである。

思うままに凡庸な輩に従う事なかれ。

まさに、知るべきである。
仏から仏へ、祖師から祖師へ、正しく伝えている主旨は、このような物なのである。
これを間違えるのは仏道ではないし、仏法ではないし、祖師の道ではない。

それなのに、宋の時代の中国で、歯磨きのために噛む木の枝は、絶えて見えない。

千二百二十三年の四月の間に、初めて宋の時代の中国の諸々の山の諸々の寺を見ると、歯磨きのために噛む木の枝を知っている僧侶はいなかったし、官民の貴賤の者も同じく歯磨きのために噛む木の枝を知らなかった。
僧は、歯磨きのために噛む木の枝を全く知らないので、歯磨きのために噛む木の枝の法を質問すると、色を失って顔が青く成り、度を失って慌てた。
「白法」、「清浄潔白な法」、「仏法」の権威が失墜している事を憐れむべきである。

わずかな、口を洗浄する輩は、馬の尾を一寸余りに切った物を、牛の角を大きさを三分くらいにして長方形に作った物の長さが六、七寸のうち二寸くらいの端に馬のたてがみのように植えて、(ブラシにして、)これを用いて歯を洗浄するだけであった。
(一寸は約三センチメートル。)

僧の器として用い難い人である。不浄な器の人である。仏法の器の人ではない。俗人のうち天人を祭る人でもなお嫌うであろう。

その(歯ブラシのような)器具をまた、俗人も僧も共に、靴の塵を払う器具に用いてしまうし、髪をすく時に用いてしまう。

少しの大小は有るが、これ(、歯ブラシのような物)一つなのである。

この(歯ブラシのような)器具を用いる人も一万人に一人なのである。

そのため、天下の出家者も在家者も共に、口の息がとても臭い。

二、三尺を隔てて物を言う時も、口臭が来てしまう。

(一尺は約三十センチメートル。)

口臭を嗅ぐ者は耐え難い。

「道に適った高徳の長老の僧」を自称したり「人や天人の導師」を自称する輩も、口を洗浄し、舌の表面に付着した物を除去し、歯磨きのために噛む木の枝を噛む法が、存在する事すらも知らなかった。

これから推測すると、仏祖の大いなる仏道が衰退しているのを見るであろう事は、どれほどか、わからないほどなのである。

今、私達は露のように儚い命を万里の青い(海の)波に惜しまず、外国の山や川を渡り超えて、仏道をたずねようとしても、仏道が衰退している運びを悲しむべきである。

どれだけの「白法」、「清浄潔白な法」、「仏法」が先立って姿を隠してしまったのであろうか?

惜しむべきである。惜しむべきである。

しかし、日本の官も民も、仏道者も俗人も、共に、歯磨きのために噛む木の枝を見聞きしているのは、仏の光明を見聞きしているのであろう。

けれども、歯磨きのために噛む木の枝の噛み方は仏法の通りではないし、舌の表面に付着した物を除去する法が伝えられておらず、中途半端なのである。

だが、宋の時代の中国人が歯磨きのために噛む木の枝を知らないのに比べれば、日本人が「歯磨きのために噛む木の枝を用いるべきである」と知っているのは、自然に「上人」、「高徳の僧」の法を知っているのである。

仙人の法でも歯磨きのために噛む木の枝を用いる。僧も仙人も皆、「俗世」という「塵」、「汚れ」を離れた器の人なのであるし、歯磨きのために噛む木の枝は清浄の日常の道具なのである、と知るべきである。

次のように、「大比丘三千威儀経」には記されている。

「楊枝」、「歯磨きのために噛む木の枝」を用いるには五つの事が有る。

(一)規則の通りに木の枝を切りなさい。

(二)法の通りに木の枝を破棄しなさい。

(三)先端を噛んで三分を過ぎる事なかれ。

(四)歯が抜けた場所には、中に当てて三回、噛みなさい。

(五)汁は目を洗浄するのに用いなさい。

千二百三十九年現在、歯磨きのために噛む木の枝を噛んで口を洗浄した水を、右手に受けて目を洗浄するのは、「大比丘三千威儀経」の説が源なのである。

千二百三十九年現在、日本の過去の家庭の教訓なのである。

舌の表面に付着した物を除去する法は、栄西が伝えた。

歯磨きのために噛む木の枝を使った後、捨てようとする時、両手で木の枝の噛んだ方から二つに裂く。

その裂け口の鋭利な方を横向きに舌の上に当てて、舌の表面に付着した物を除去する。

右手で水を受けて口に入れて口を洗浄し、舌の表面に付着した物を除去する。

水による口の洗浄、舌の表面に付着した物の除去を何度か(、くり返)し、裂いた木の枝の角で舌の表面に付着した物を除去して、出血しないようにする。

水で口を洗浄する時、「全ての生者が、清浄な法の門へ向かい、究極的に、解脱しますように」という言葉を密かに唱えるべきである。

華厳経には、「口と歯を洗浄する時には、『全ての生者が、清浄な法の門へ向かい、究極的に、解脱しますように』と願うべきである」と記されている。

何度か口（くち）を洗浄して、唇（くちびる）の内側と、舌の下と、顎（あご）に至るまで、右手の親指、人差し指、中指で、指の腹で、よくよく滑（なめ）らかになるほど洗浄して除去するべきである。

油っこい物を食べたのが近かった時には、石鹸（せっけん）の代わりと成る皀莢（サイカチ）を用いるべきである。

木の枝を使い終わったら、人が通らない場所に捨てるべきである。

木の枝を捨てた後、三回、指を弾（はじ）くべきである。

「後架」、「僧堂の後ろに架け渡して作った洗面所」では、捨てる木の枝を受ける物があるはずである。

他の場所では、人が通らない場所に捨てるべきである。

口（くち）を洗浄した水は、洗面桶（せんめんおけ）の外に吐き捨てるべきである。

次に、洗面する。

両手で洗面桶（せんめんおけ）の湯を掬（すく）って、額（ひたい）から、両眉毛（りょうまゆげ）、両目、鼻の孔（あな）、耳の中、頭、頬（ほほ）を遍（あまね）く洗浄する。

まず、よく湯を掬（すく）って、湯をかけて、そうした後、こすって洗浄するべきである。

涙、唾（つば）、鼻水を洗面桶（せんめんおけ）の湯に落として入れる事なかれ。

このように洗浄する時、湯を際限無く費やして、洗面桶（せんめんおけ）の外に漏らして落として散らして、早く失う事なかれ。

垢（あか）が落ち、皮脂が除去されるまで洗浄するのである。

耳の裏を洗浄するべきである。耳の中に水がつくといけないので。

眼の裏を洗浄するべきである。眼の中に砂がつくといけないので。
頭髪、頭までも洗浄するのが、「威儀」、「身のこなし」、「作法」なのである。

洗面が終わって、洗面桶(せんめんおけ)の湯を捨てた後も、三回、指を弾(はじ)くべきである。

次に、手拭(てふ)きで顔を拭く方(ほう)の端(はし)で拭(ふ)いて乾かすべきである。
そうした後、手拭(てふ)きを元のように脱いで取って二重にして左肘(ひだりひじ)にかける。

「雲堂」、「僧堂」の「後架」、「僧堂の後ろに架け渡して作った洗面所」には、公共用の手拭(てふ)きが有る。
「一疋布」、「疋布」を設(もう)けている。
手拭(てふ)きを火であぶって乾かす箱も有る。
皆が共に顔を拭(ふ)いても、手拭(てふ)きが不足する心配が無い。

公共用の手拭(てふ)きで頭と顔を拭(ふ)いても善(よ)い。
また、自分の手拭(てふ)きを用いても善(よ)い。
共に、作法なのである。

洗面の間、桶(おけ)と杓(しゃく)を打ち鳴らして音を出して騒がしくする事なかれ。

湯や水を乱暴に使って近辺を濡(ぬ)らす事なかれ。

次のように、密(ひそ)かに想像するべきである。

「後五百歳」、「末法の世」に生まれて、日本という、辺境の僻地（へきち）、遠く離れた島にいるが、前世の善行が朽（く）ちず、古代の仏の身のこなしを正しく伝えられて汚染せず修行して証する事ができる事を、喜ぶべきである。

「雲堂」、「僧堂」に帰る時は、足音を小さくし、声を小さくするべきである。

老人の僧の、草の屋根の庵（いおり）には必ず洗面所が有るべきである。

洗面しないのは、仏法に背（そむ）いている。

洗面の時、「面薬」、「顔の薬」を用いる法が有る。

歯磨きのために噛（か）む木の枝を噛（か）む事、洗面は、古代の仏の正しい法なのである。

道心が有って仏道をわきまえている仲間は、洗面などを修行して証するべきなのである。

湯を得られない時には水を用いるのは、前例なのであるし、古代の法なのである。

湯も水も全く得られない時は、早朝に、よくよく顔を拭(ふ)いて、香草や粉末状の香などを塗(ぬ)った後、仏を礼拝して経を読み、焼香して坐禅するべきである。

未だ洗面しない人が諸々の務めを行うのは共に無礼に成ってしまうのである。

正法眼蔵　洗面

千二百三十九年、雍州の観音導利興聖宝林寺にいて僧達に示した。

インド、中国は、国王、王子、大臣、諸々の役人、在家者、出家者、官民の男女、全ての人々は皆、洗面する。

家の日常の道具にも洗面桶(せんめんおけ)が有り、銀の洗面桶(せんめんおけ)や、「鑞」、「錫(すず)と鉛(なまり)の合金」の洗面桶(せんめんおけ)なのである。

天人の祠(ほこら)や霊廟にも、毎朝、洗面を捧げる。

仏祖の「塔頭」にも洗面を捧げる。

在家者も出家者も、洗面の後、衣を正して、天をも礼拝するし、天人をも礼拝するし、代々の祖師達をも礼拝するし、父と母をも礼拝するし、師匠を礼拝するし、「仏、法、僧」という「三宝」を礼拝するし、三界の全ての霊と十方の真の主宰者を礼拝する。

今は、農耕者、漁師、木こりまでも洗面を忘れる事が無い。

けれども、歯磨きのために噛む木の枝を噛む事が無い。

日本は、国王、大臣、老人、若者、官民、在家者、出家者は、貴賤を問わず共に、歯磨きのために噛む木の枝を噛む法、口を洗浄する法を忘れない。

けれども、洗面しない。

一長一短なのである。

今、洗面も、歯磨きのために噛む木の枝を噛む事も、共に、保持して護る事は、欠けた物を補う興隆なのであるし、仏祖が見守ってくれる事に成るのである。

千二百四十三年、越州の吉田県の吉峰寺にいて僧達に重ねて示した。

千二百五十年、越州の吉田郡の吉祥山の永平寺で僧達に示した。

安居

道元の亡き師である、天童山の、古代の仏と等しい、五十祖の如浄は、「結夏」、「夏安居を始める日」に、「小参」、「説法」して、「平地に骨の山を起こし、虚空に穴、鳥かごをえぐる。突き進んで二重の関を透過すると、黒い漆(うるし)の桶(おけ)をひねっている」と言った。

(

「夏安居」、「安居」とは、雨期の夏の間、草や虫といった生物を踏んで殺すのを予防するため、行脚を止めて一か所に定住し、歩く必要が有る時は足下を見ながら注意して歩く事である。

「漆の桶」は真っ黒で見分けられないので「無知な僧」を意味し、派生して、無知の原因である「煩悩」も意味する。

)

そのため、「この『巴鼻子』、『巴鼻』、『要』を会得し終わっても、(仏祖の知という)御飯を食べて脚を伸ばして睡眠する事を未だ免れずに、『この中』に三十年、存在する」のである。

このため、日常の道具を並べて、暇(ひま)を持て余さない。

(原文は「すてにかくのことくなるゆえに、打併調度、いとまゆるくせす」。)

日常の道具に「九夏安居」、「九十日間の夏安居」が有る。

安居は、仏から仏へ、祖師から祖師への、仏祖の、「頂上」と、「面目」、「有様（ありよう）」なのである。
仏祖は、安居という皮肉骨髄に、かつて親しんで来ている。
仏祖の「眼睛」、「見る眼」と、「頂上」をひねって来て、九十日間の夏安居の月日としている。
安居、一枚は「仏から仏へ、祖師から祖師へ」となす事ができる物なのである。
安居の頭から尾まで、仏祖なのである。
安居の他に更に、わずかな土地も無いのであるし、大地も無いのである。
夏安居という一つの杭（くい）は、新しいわけでもないし、古いわけでもないし、来るわけでもないし、去るわけでもない。
安居の量は、「拳」の量なのである。
安居の様子は、「巴鼻」、「要」の様子なのである。

けれども、「結夏のために」、「夏安居を始めるために」、夏安居が来ると、虚空に満ちあふれて破り、余っている十方は無く成る。
「解夏のために」、「夏安居を解くために」、夏安居が去ると、地を裂き破り、残っている、わずかな土地も無く成る。
このため、「結夏の」、「夏安居を始める」、「公案」、「修行者の手がかりとしての仏祖の言動」が形成されて現されると、夏安居が来るのに似ているのである。
「解夏の」、「夏安居を解く」鳥かごを打破すると、夏安居が去るのに似ているのである。

けれども、かつて親しくした事が有る面々は共に、「結夏」、「夏安居を始める事」と、「解夏」、「夏安居を解く事」を遮るのみなのである。

「万里に、わずかな草も無い」のである。

「九十日分の食事代を私に返しに来なさい」なのである。

黄龍の死心悟新は、「私は、三十年余り行脚したが、九十日間を一つの夏安居と為す。一日、増やす事もできないし、一日、減らす事もできない」と言った。

そのため、三十年余り行脚した「見る眼」で、わずかに見通した物は、「九十日間を一つの夏安居と為す」事だけなのである。

たとえ一日間、増やそうとしても、九十日間が帰って来て頭を競って来るし、

たとえ一日間、減らそうとしても、九十日間が帰って来て頭を競って来る物なのである。

さらに、九十日間という穴、鳥かごを跳んで離脱するべきではない。

九十日間という穴、鳥かごを跳んで離脱する事は、九十日間という穴、鳥かごを手足として跳んでいるだけなのである。

「九十日間を一つの夏安居と為す」のは、私の「この中」、「仏教」の日常の道具であるが、仏祖が自ら始めて成しているわけではないので、仏から仏へ、祖師から祖師へ、正統に代々正しく受け入れて今日にまで至っている。

そのため、夏安居に出会う事は、諸々の仏祖に出会う事なのである。

夏安居に出会う事は、仏祖を見る事なのである。

夏安居は長い間、仏祖に成っているのである。

「九十日間を一つの夏安居と為(な)す」事の、時の量は「頂上」の量であるが、一劫、十劫だけではないし、百、千、無量劫だけではないのである。

他の時は百、千、無量劫などの「劫波(カルパ)」、「劫」に使われる事ができ得るが、安居の九十日間は百、千、無量劫などの劫を使う事ができ得るので、たとえ無量劫が安居の九十日間に出会って仏を見ても、安居の九十日間は必ずしも劫に関係しない。

そのため、「九十日間を一つの夏安居と為(な)す」事は「眼睛」、「見る眼」の量であるだけなのである、という学に参入するべきである。

身心で安居する事もまた「眼睛」、「見る眼」の量であるだけなのである。

夏安居の、魚のような活発さを使う事ができ得るし、夏安居の、魚のような活発さを跳んで離脱しているのは、来た場所が有るし、「職由」、「主な原因」、「主な根拠」、「主な基礎」が有るが、他の方向や他の時から来たり移ったりしているわけではないし、この場所や、この時から起こるわけではない。

来た場所を把握すれば、夏安居の九十日間は突然に来るし、「職由」、「主な原因」、「主な根拠」、「主な基礎」を模索すれば、夏安居の九十日間は突然に来る。

凡人と聖者は、安居を住(す)み家(か)としているし、安居を命の根本としているが、安居は、凡人と聖者の境地を遥かに超越している。

安居は、思量の分別の及ぶ物ではないし、「不思量」、「今は思考できない思考」の分別の及ぶ物ではないし、「思量」と、「不思量」、「今は思考できない思考」が及ばないだけではないのである。

釈迦牟尼仏は、摩竭陀国にいて、集まっている者達の為(ため)に説法した。この時、夏安居する事を言おうとして、阿難陀に、「諸々の大いなる弟子や、人や、天人や、『男性の出家者、女性の出家者、男性の在家信者、女性の在家信者』という『四衆』は、私(、釈迦牟尼仏)が常に説法しても、敬い仰(あお)ぐ心を生じない。私(、釈迦牟尼仏)は、今、『因沙臼室』、『因陀羅窟』の中に入って、九十日間の夏安居で坐禅する。突然、人が来て仏法について質問した時は、あなた(、阿難陀)が、私(、釈迦牟尼仏)に代わって、『一切法不生。一切法不滅』、『一切の全てのものは生じる事を超越している。一切の全てのものは滅ぶ事を超越している』と説きなさい」と言った。

釈迦牟尼仏は、言い終わると、「因沙臼室」、「因陀羅窟」を閉ざして、坐禅した。

この時から千二百四十五年現在まで、二千百九十四年間なのである。

奥義に入っていない仏の法の子孫の多くは、「摩竭掩室」、「釈迦牟尼仏が摩竭陀国で『因沙臼室』、『因陀羅窟』を閉ざして無言でいた事」を釈迦牟尼仏が無言で説法した事が有る証拠としてしまっている。

邪悪な党派者は、誤って「『因沙臼室』、『因陀羅窟』を閉ざして夏安居で坐禅した釈迦牟尼仏の意図とは、言葉を用いるのは全く真実ではなく、『善巧方便』、『善に巧みに導くための仮の手段』なのである。『至理』、『至上の理』は、言葉では言い表せないし、『心行所滅』、『思考という心の働きでは把握できない境地』なのである。このため、無言と無心は『至上の理』に適うのであるし、有言と有心は理ではないのである。このため、釈迦牟尼仏は、『因沙臼室』、『因陀羅窟』を閉ざして九十日間の夏安居で坐禅した間、人跡を断絶しているのである」とばかり、思ってしまうのであるし、言ってしまうのである。

この輩が言う言葉は、釈迦牟尼仏の意図に大いに背いている。

もし「真理は、言葉では言い表せないし、思考という心の働きでは把握できない境地なのである」と論じるのであれば、一切の生活や労働も皆、言葉では言い表せないし、思考という心の働きでは把握できない境地に成ってしまうのである。

言葉では言い表せないものとは、一切の言葉で言い表せるものを言うのである。

思考という心の働きでは把握できない境地とは、一切の思考という心の働きを言うのである。

まして、「摩竭掩室」、「釈迦牟尼仏が摩竭陀国で『因沙臼室』、『因陀羅窟』を閉ざして無言でいた事」という話は、本から、無言を尊ぶためではないのである。

仏は、「通身」、「全身」で、ひとえに、「泥水」、「拕泥帯水」、「人を救うために泥水にまみれる」し、「入草して」、「人を救う為に『森羅万象』という『百草』に分け入って」、説法して人を仏土へ渡す事から未だ逃れないし、「転法拯物」、「法を説いて生物を救う事」から未だ逃れないだけなのである。

もし「仏の法の子孫」を自称する輩が、釈迦牟尼仏が九十日間の夏安居で坐禅した事を誤って「釈迦牟尼仏は無言で説法したのである」と言ってしまうならば、「釈迦牟尼仏が九十日間の夏安居で坐禅した事を、私に返しに来なさい」と言いなさい。

釈迦牟尼仏は、阿難陀に、「あなた(、阿難陀)が、私(、釈迦牟尼仏)に代わって、『一切法不生。一切法不滅』、『一切の全てのものは生じる事を超越している。一切の全てのものは滅ぶ事を超越している』と説きなさい」と命じて、代わりに説かせた。

この釈迦牟尼仏の話を、いたずらに無駄に、見過ごすべきではない。

釈迦牟尼仏が「因沙臼室」、「因陀羅窟」を閉ざして九十日間の夏安居で坐禅した時、無言ではなかった！

この時、阿難陀は、釈迦牟尼仏に、「『一切法不生。一切法不滅』、『一切の全てのものは生じる事を超越している。一切の全てのものは滅ぶ事を超越している』と、どのように説くのでしょうか？
たとえ『一切の全てのものは生じる事を超越している。一切の全てのものは滅ぶ事を超越している』と説くとしても、どのようにする必要が有るのでしょうか？」と言うべきであったし、このように言って、釈迦牟尼仏の言葉を聴いて理解して取るべきであった。

この釈迦牟尼仏の話は、説法の「第一義諦」、「第一の真理」、「無上の真理」なのであるし、「第一無諦」なのである。
さらに、釈迦牟尼仏が無言で説法した証拠とするべきではない。
もし誤って「釈迦牟尼仏が無言で説法した証拠である」としてしまったら、「三尺の『龍泉剣』が、いたずらに陶工の家の壁に掛けられた梭のようである事を憐れむべきである」と成ってしまうであろう。
そのため、九十日間の夏安居で坐禅する事は、古代に「転じられた法輪」、「説かれた法」なのであるし、古代の仏祖なのである。
この釈迦牟尼仏の話の中で「この時、夏安居する事を言おうとして」と有る。
知るべきである。
九十日間の夏安居で坐禅する事は、逃(のが)れず行われているのである。
九十日間の夏安居で坐禅する事から逃(のが)れる人は外道なのである。

釈迦牟尼仏が存命中には、「忉利天」、「三十三天」で九十日間の安居したり、五百人の出家者と共に「耆闍崛山」、「霊山」の静かな部屋の中で安居したりした。

釈迦牟尼仏によって、インドの東、西、南、北、中央の中で、場所を論じないで、時が来たら、夏安居する事が言われて、九十日間の夏安居が行われた。

千二百四十五年現在の仏祖によっても、最も一大事として、安居は行われる物なのである。

安居は、修行して証する無上の仏道なのである。

「梵網経」の中に「冬安居」という言葉は記されているが、冬安居の法は伝わっていない。

九十日間の夏安居の法だけが伝わっている。

九十日間の夏安居の法は、(釈迦牟尼仏から初祖を経由して五十祖まで)五十一代に渡って、目の当たりにされて正しく伝えられた。

「禅苑清規」には、「行脚(あんぎゃ)している人が、方々(の寺)で『結夏』、『夏安居を始める事』をしようとするならば、半月前から(寺に)滞在するべきであ

る。貴ぶのは、茶と湯による接待や、『人事』、『礼拝』が、慌ただしく成らない事である」と記されている。

「半月前」とは、旧暦の三月下旬を言う。
(旧暦の三月は、新暦の三月下旬から五月上旬である。)
そのため、旧暦の三月の内に行って寺に滞在するべきなのである。
旧暦の四月一日からは、出家者は出歩かない。諸方の(寺の)接待や、寺の「旦過」、「宿泊所」は皆、門を閉ざしている。
そのため、旧暦の四月一日から、行脚している僧は皆、寺院で安居しているし、「庵」、「大きい寺に有る小さい僧房」の中に滞在している。
または、「白衣舎」、「寺の在家者用の宿舎」に安居するのが、前例なのである。
これが、仏祖の作法なのである。
古代を慕い修行するべきである。
「拳」や「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔」を持つ僧は皆、各々、寺院に場所を得て、安居する場所に滞在している。

それなのに、「魔党」、「仏敵ども」、「悪党」は、誤って「大乗の見解は重要である。夏安居は、声聞の作法なのであり、必ずしも修行するべきではない」と言ってしまう。
このように誤った言葉を言ってしまう輩は、かつて仏法を見聞きしていないのである。

無上普遍正覚は、九十日間の夏安居で坐禅する事なのである。
たとえ大乗や小乗の至上の究極が有っても、九十日間の夏安居の枝、葉、華、果実なのである。

事前に旧暦の四月一日から、「戒臈」、「出家して戒を受けた後の年数」の一覧を把握する。

旧暦の四月三日の「粥罷」、「朝食後」から、夏安居を始めるが、堂司は、「看読寮」の前門の「下間」、「左」の窓の外に掛ける。
旧暦の四月三日の「粥罷」、「朝食後」に、「戒臈」、「出家して戒を受けた後の年数」の一覧の札を「衆寮」、「看読寮」の前に掛ける。「衆寮」、寮の窓は皆、「連子」、「格子窓」なのである。

「粥罷」、「朝食後」に「戒臈」、「出家して戒を受けた後の年数」の一覧の札を掛けて、「放参鐘」、「夜の坐禅の終了の鐘」の後に「戒臈」、「出家して戒を受けた後の年数」の一覧の札をしまう。
旧暦の四月三日から五日まで、「戒臈」、「出家して戒を受けた後の年数」の一覧の札を掛けるが、掛ける時と、しまう時は、同じである。

「戒臈」、「出家して戒を受けた後の年数」の一覧には、書式が有る。
知事や頭首などとは無関係に、「戒臈」、「出家して戒を受けた後の年数」のまとまりで書くのである。

諸方で知事を経た人は「監寺」と書くのであるし、諸方で頭首を経た人は「首座」と書くのである。

複数の役職を務めた人は複数の役職の中で重職を書くべきである。

かつて住持を経た人は「〇〇西堂」と書く。

しかし、小さい寺院の住持を務めたが、僧に知られていなければ、よく、それを隠して名乗らない。

また、もし師の会の中にいれば、西堂である人は、西堂と名乗らないのが作法である。

そのため、「〇〇上座」と書く例も有る。

師の会にいる西堂の人の多くは、「衣鉢侍者」の寮に寝泊まりするが、優れた行跡なのである。

さらに、師の会にいる西堂の人の多くは、師の「衣鉢侍者」を務めたり、師の「焼香侍者」を務めたりするのが、前例なのである。

まして、その他の役職の、どれでも、師の命令に従うのである。

他人の弟子が来たが、小さい寺院の住持を務めていても、大きい寺院では、首座、書記、都寺、監寺などの役職として招くのが、前例なのであるし、良い行跡なのである。

小さい寺院の閑職を務めたのを名乗るのを、仏教では笑うのである。

善(よ)い人は、小さい寺院の主の僧である「住持」を経ても、小さい寺院であるので隠して名乗らないのである。

「戒臈」、「出家して戒を受けた後の年数」の一覧は、次のように成る。

〇〇国〇〇州〇〇山〇〇寺、今年の夏の「結夏」、「夏安居を始める」、「海衆」、「僧達」の「戒臈」、「出家して戒を受けた後の年数」は、次のように成ります。

阿若憍陳如尊者(阿若憍陳如は釈迦牟尼仏の最初の弟子である。)

堂頭和尚(「堂頭」は寺の主の僧である。)

建保元戒(「建保元戒」は「建保元年、戒を受けた僧」、「千二百十三年、戒を受けた僧」を意味する。)

〇〇上座　〇〇蔵主　〇〇上座　〇〇上座

建保二戒

〇〇西堂　〇〇維那　〇〇首座　〇〇知客　〇〇上座　〇〇浴主

建暦元戒

〇〇直歳　〇〇侍者　〇〇首座　〇〇首座　〇〇化主　〇〇上座　〇〇

典座　〇〇堂主

建暦三戒

○○書記　○○上座　○○西堂　○○首座　○○上座　○○上座

前記を謹んで報告します。(原文を直訳すると「右記」ですが「前記」と意訳しました。）

もし誤りが有れば、各々、指摘してください。

謹んで書きました。

○○年四月三日　堂司、出家者○○　謹んで書きました。（「四月三日」は、旧暦の四月三日である。）

このように書く。

白い紙に書く。

楷書体で書く。草書体や隷書体などを用いない。

「戒臘」、「出家して戒を受けた後の年数」の一覧の札を掛けるには、太さが米粒二つ分くらいの「布線」を紙の一覧の先端に付けて、掛けるのである。

例えば、簾（すだれ）や額（がく）が真っ直ぐであるように、掛けるのである。

旧暦の四月五日の「放参鐘罷」、「夜の坐禅の終了の鐘の後」にしまい終わる。

旧暦の四月八日は、「仏生会」、「釈迦牟尼仏の誕生日に捧げものを捧げる集まり」である。

旧暦の四月十三日の「斎罷」、「昼食後」に、「衆寮」、「看読寮」の僧達は、「衆寮」、「看読寮」で、「煎点」、「点心」、「軽食」して、「諷経する」、「経を読む」。

寮主が事を行う。

寮主が、「点湯」、「砂糖を溶かした湯を捧げる事」や、焼香を皆、務める。

寮主は、「衆寮」、「看読寮」の奥に位置している。

寮首座は、「衆寮」、「看読寮」の「聖僧」、「中央に置かれている仏像」の左の辺りに位置している。

けれども、寮主は奥から出て焼香の行事をするのである。

首座、知事などは、「諷経」、「経を読む事」に赴(おもむ)かない。

「衆寮」、「看読寮」の僧達だけが行うのである。

旧暦の四月十五日の「粥罷」、「朝食後」に、維那は、事前に一枚の「戒臈」、「出家して戒を受けた後の年数」の一覧の札を修理して、僧堂の前の

東の壁に掛ける。坐禅する場所である「前架」の上の辺りに掛ける。正面の次の南の間である。

「禅苑清規」には、「堂司は、あらかじめ『戒臘』、『出家して戒を受けた後の年数』の一覧の札を設けて香と華を捧げるべきである(。僧堂の前に、これ、『戒臘』、『出家して戒を受けた後の年数』の一覧の札を設ける)」と記されている。

旧暦の四月十四日の「斎後」、「昼食後」に「念誦牌」を僧堂の前に掛ける。諸々の堂の前に、同じく、「念誦牌」を掛ける。

晩に、知事は、事前に「土地堂」、「土地の守護神を祭っている堂」に香と華を設ける。額の前に設けるのである。

集まっている者達は「念誦」する。

「念誦」の法は、僧達が集まった後、住持が、まず、焼香する。

次に、知事、頭首が、焼香する。

「浴仏」、「灌仏」、「仏像に香水を掛ける」時の焼香の法のようにである。

次に、維那が、定位置から正面へ出て、まず、住持に合掌し低頭し安否を尋ねて、次に「土地堂」、「土地の守護神を祭っている堂」に向かって合掌し低頭し安否を尋ねて、顔を北に向けて「土地堂」に向かって、次のように「念誦」する。

密かに思うと、「薫風」、「若葉の香りがする初夏の風」が野を吹き、「炎帝」、「夏を司る神」が四方を司っている。
法の王である釈迦牟尼仏が「禁足」、「外出を禁じる」時である。
釈迦牟尼仏の弟子が生物を護る日である。
自ら僧達を集めて、厳粛に、霊験あらたかな祠に行き、万の無数の徳を持つ大いなる名前を唱えて、「合堂」、「全ての堂」の真の主宰者に「回向する」、「布施などの功徳を分け与える相手について祈る」。
祈りを(神仏が)加護して、ついに、安居でき得ますように。
仰いで尊い者達を頼って念じます。

清浄法身毘盧遮那仏。(鐘を打つ。)
円満報身盧遮那仏。(鐘を打つ。)
千百億化身釈迦牟尼仏。(鐘を打つ。)
当来下生弥勒尊仏。(鐘を打つ。)(「当来下生」は「未来に、この世へ降下して生まれる」を意味する。)
十方三世一切諸仏。(鐘を打つ。)
大聖文殊師利菩薩。(鐘を打つ。)
大聖普賢菩薩。(鐘を打つ。)
大悲観世音菩薩。(鐘を打つ。)
諸尊菩薩摩訶薩。(鐘を打つ。)
摩訶般若波羅蜜。(鐘を打つ。)

前述の「念誦」の功徳は全て、正しい法を護って保持してくれている土地の龍神に「回向する」、「布施などの功徳を分け与える相手について祈る」。伏して、願わくば、神の光が協賛して、利益が有る功績を発揮できますように。

「梵楽」、「清浄な神聖な快楽」が起こって、「無私の」、「私欲が無い」喜びを与えてくれますように。

再び、尊い者達を頼って念じます。

十方三世一切諸仏。

諸尊菩薩摩訶薩。

摩訶般若波羅蜜。

この時、太鼓が鳴ると、僧達は、「雲堂」、「僧堂」の「点湯の」、「砂糖を溶かした湯を捧げる」座に赴く。

「点湯」、「砂糖を溶かした湯を捧げる事」は、庫司がわきまえる事なのである。

僧達は、僧堂に赴き、順に僧堂をまわって、位置について、正面に向かって坐る。

知事、一人だけが法事を行う。焼香などを務めるのである。

「禅苑清規」には、「本から監院が事を行うべきである。代える事が有るならば、維那が、この監院に代わるべきである」と記されている。

「念誦」の前に、札を書き写して首座に提出する。

知事が法衣を纏って坐具を携帯して首座に見える時、「両展三拝」、「坐具を二回展開してから、展開しない坐具に頭をつけて三回礼拝する事」をし終わったりしてから、札を首座に提出する。

首座は、答えて礼拝するが、知事の礼拝と同じであるべきである。

札は、箱に「袱紗」という布を敷いて、寺の雑務を行う在俗者である「行者」に持たせて行く。

首座は、知事を送迎する。

札の書式は、次のように成る。

庫司は今晩、「雲堂」、「僧堂」で「煎点」、「点心」、「軽食」を用意する。特に、首座と僧達のために。

少し「結制」、「夏安居を始める」作法を表す。

伏して、願わくば、諸々の慈悲を皆に同じく垂れてくれますように。

「光降」、「神仏が降臨してくれますように」。

千二百四十五年四月十四日　庫司、出家者〇〇などが謹んで申し上げます。（〇〇には知事の第一の名字を書くのである。）

札を首座に提出した後、寺の雑務を行う在俗者である「行者（あんじゃ）」に札を「雲堂」、「僧堂」の前に貼らせる。僧堂の前の「下間」、「左」に貼らせるのである。

前門の南側の外面に、札を貼る板が有る。

この板は塗装されている。

「殻漏子」、「封筒」が有る。

「殻漏子」、「封筒」を、札の先端に並べて、竹の釘で打ちつけている。

そのため、「殻漏子」、「封筒」も札の傍（かたわ）らに押して貼っている。

札は作法の通りに作っている。

五分くらいの大きさの文字で書く。大きく書かない。（五分は約一・五センチメートル。）

次のように、「殻漏子」、「封筒」の表書きを書く。

謹んで書きます。首座、僧達、庫司、出家者〇〇などが謹んで封します。

「煎点」、「点心」、「軽食」が終わったら、札をしまう。

旧暦の四月十五日の「粥前」、「朝食前」に、知事や、頭首や、「小師」、「戒を受けてから十年未満の者」や、「法眷」、「法の眷属」、「法の仲間」は、まず、住持が住んでいる「方丈」の中に入って「人事する」、「礼拝する」。

住持が「隔宿から」、「前夜から」、「免人事」していれば、「方丈」に行くべきではない。

「免人事」とは、旧暦の四月十四日から、住持が書いた真理の詩か「法語」、「真理の言葉」を「方丈」の扉の東側に貼ったり、「雲堂」、「僧堂」の前に貼ったりする事である。

住持は、旧暦の四月十五日、座に上った後、法座から下りて、階段の前に立つ。

「拝席」の北の先端を踏んで、南を向いて立つ。

知事は、前に進んで住持に近づいて、住持に「両展三拝する」、「坐具を二回展開してから、展開しない坐具に頭をつけて三回礼拝する」。

知事は、坐具を一回目に展開して、「今回、安居して『禁足』、『外出を禁じる事』をして、『巾瓶を捧げる事』、『弟子として仕える事』ができ得ました。和尚様が保持している『法力』、『仏法の功徳の力』の助けによって、願わくば、無事でありますように」と言う。

知事は、坐具を二回目に展開して、「時は、『孟夏』、『初夏』であり、漸く熱く成りました。法の王である釈迦牟尼仏が、『結制』、『夏安居を始めた』時です。伏して、思えば、堂頭の和尚様の法の様子は所作が、ありがたい物でした。『下情』、『私の感情』は、感激の至りに勝てません」と

言って、「寒暄を述べて」、「寒暖を述べて」、「時候の挨拶をして」、「触礼三拝する」、「展開しない坐具に頭をつけて三回礼拝する」。
「寒暄を述べる」、「寒暖を述べる」、「時候の挨拶をする」とは、坐具を二回展開してから、(展開しない坐具に頭をつけて)三回礼拝し終わってから、坐具を回収して、進んで、「時は、『孟夏』、『初夏』であり、漸く熱く成りました。法の王である釈迦牟尼仏が、『結制』、『夏安居を始めた』時です。伏して、思えば、堂頭の和尚様の法の様子は所作が、ありがたい物でした。『下情』、『私の感情』は、感激の至りに勝てません」と言う事である。
「寒暄を述べて」、「寒暖を述べて」、「時候の挨拶をして」、その次に、「触礼三拝する」、「展開しない坐具に頭をつけて三回礼拝する」。
住持は、無言で、全て、答えて礼拝する。
住持は、「幸いにも、同じく、安居ができ得る。また、願わくば、〇〇首座、〇〇監寺などが、『法力』、『仏法の功徳の力』の助けによって、無事でありますように」と念じる。
首座や僧達も、住持と同様に念じる。
この時、首座や僧達や知事などは皆、北を向いて礼拝するのである。
住持、独りだけが南を向いて、法座の階段の前に立っている。
住持の坐具は、「拝席」の上に展開しているのである。
次に、首座や僧達は、住持の前で、「両展三拝する」、「坐具を二回展開してから、展開しない坐具に頭をつけて三回礼拝する」。
この時、「小師」、「戒を受けてから十年未満の者」や、侍者や、「法眷」、「法の眷属」、「法の仲間」や、「沙弥」、「見習い僧」は、一辺に

いて立っている。未だ僧達と共に「人事する」、「礼拝する」事ができ得ないのである。

「一辺にいて立っている」とは、法堂の東の壁の傍(かたわ)らにいて立っている事なのである。

もし東の壁に施主が垂らしている「箔」、「簾(すだれ)」が有れば、「法鼓」という太鼓の近くに立つか、西の壁に立つべきなのである。

僧達が礼拝し終わると、知事は、まず、庫堂に帰って、主位に立つ。

次に、首座は、大衆を連れて、「庫司」、「庫堂」へ行って「人事する」、「礼拝する」。知事と「触礼三拝する」、「展開しない坐具に頭をつけて三回礼拝する」のである。

この時、「小師」、「戒を受けてから十年未満の者」や、侍者や、「法眷」、「法の眷属」、「法の仲間」などは、法堂にいて、住持を礼拝している。

「法眷」、「法の眷属」、「法の仲間」は、「両展三拝する」、「坐具を二回展開してから、展開しない坐具に頭をつけて三回礼拝する」べきである。住持が答えて礼拝してくれる。

「小師」、「戒を受けてから十年未満の者」や、侍者は、「九拝する」、「坐具を展開して九回礼拝する」。住持は答えて礼拝しない。

「沙弥」、「見習い僧」は、「九拝する」、「坐具を展開して九回礼拝する」か、「十二拝する」、「坐具を展開して十二回礼拝する」。住持は合掌して礼拝を受けるだけである。

次に、首座は、僧堂の前に行って、「上間」、「右」の知事が坐る床の南の端、僧堂の正面で、南を向いて僧達に向かって立つ。

僧達は、北を向いて、首座に「触礼三拝する」、「展開しない坐具に頭をつけて三回礼拝する」。

首座は、僧達を引き連れて、僧堂に入り、「戒臘」、「出家して戒を受けた後の年数」の順に並んで、堂をまわり、立ち止まる。

知事が、僧堂に入り、「聖僧」、「中央に置かれている仏像」の前で「大展礼三拝して」、「大展三拝して」、「坐具を折らないで大きく展開して三回礼拝して」、起きる。

次に、知事は、首座の前で、「触礼三拝する」、「展開しない坐具に頭をつけて三回礼拝する」。

僧達は、答えて礼拝する。

知事は、僧堂を一周して、僧堂を出て、位置について、両手を胸の前で重ねて立つ。

住持が、僧堂に入り、「聖僧」、「中央に置かれている仏像」の前で、焼香して、「大展三拝して」、「坐具を折らないで大きく展開して三回礼拝して」、起きる。

この時、「小師」、「戒を受けてから十年未満の者」は、「聖僧」、「中央に置かれている仏像」の後ろに避けて立つ。

「法眷」、「法の眷属」、「法の仲間」は、僧達に従って立つ。

次に、住持は、首座に「触礼三拝する」、「展開しない坐具に頭をつけて三回礼拝する」。住持は、位置について立ち、南を向いて「触礼三拝する」、「展開しない坐具に頭をつけて三回礼拝する」のである。

首座と、僧達は、先のように、答えて礼拝する。

住持は、僧堂をまわってから、僧堂を出る。

首座は、前門の南側から僧堂を出て、住持を送る。

住持が僧堂を出た後、首座以下の僧達は、相互に相対（あいたい）して坐具を展開して三回礼拝して、「今回、幸いにも、同じく、安居します。『三業』、『身口意で行う業』が善（よ）くないであろう事を恐れます。お慈悲を望みます」と言う。

この時の礼拝は、坐具を展開して三回礼拝するのである。

このようにしてから、首座、書記、蔵主などは、各々の寮に帰る。

「衆寮」、「看読寮」の僧は、寮主と寮首座以下、相互に相対（あいたい）して「触礼三拝して」、「展開しない坐具に頭をつけて三回礼拝して」、「今回、幸いにも、同じく、安居します。『三業』、『身口意で行う業』が善（よ）くないであろう事を恐れます。お慈悲を望みます」と言う。

話す言葉は、僧堂の中の作法と同じである。

この後、住持は、庫堂から始めて寮をまわる。

次第に、僧達は、住持に従って、住持が住んでいる「方丈」まで送り、僧達は帰る。

住持は、まず、庫堂へ行く。

住持が知事と「人事」、「礼拝」し終わって庫堂を出て寮をまわりに行くと、知事は住持の後ろを歩く。

知事の次に、東廊の近くにいる人が歩く。

この時、住持は、「延寿院」に入らない。

住持が東廊から西へ下りて山門を通って寮をまわると、山門の近くの寮にいる人は連なって歩く。

住持は、南から、西の廊下と諸々の寮をまわる。

この時、住持は、西を行く時は北へ向かう。

この時、安老、勤旧、前資、頤堂、単寮の仲間や、浄頭などは、連なって歩く。

維那、首座などが連なって歩いている次に、「衆寮」、「看読寮」の僧達は連なって歩く。

寮をまわるのは、寮の都合によって、歩みに加わる。

これを「大衆相随送」と言う。

このようにして、住持は、「方丈」の西の階段から上って、「方丈」の正面の母屋の、住持の位置について、南を向いて、両手を胸の前で重ねて立つ。

知事以下の僧達は皆、北を向いて、住持に合掌し低頭し安否を尋ねる。

この合掌と低頭は、特に深くするのである。

住持は、答えて、合掌し低頭し安否を尋ねる。

僧達は帰る。

道元の亡き師である、五十祖の如浄は、「方丈」へ僧達を引き連れず、法堂へ行って、法座の階段の前で南を向いて、両手を胸の前で重ねて立った。
僧達は、如浄に、合掌し低頭し安否を尋ねてから、帰った。
これが、古代の作法なのである。

こうした後、僧達は、各自、心に従って、「人事する」、「礼拝する」。

「人事」とは、「礼拝」し合う事なのである。

例えば、同じ故郷の間の仲の仲間が、照堂や廊下の都合の良い場所で、何十人も礼拝し合って、同じく安居する「理致」、「道理」を喜ぶ。
けれども、話す言葉は僧堂の中の作法に準じる。
ただし、人によっては「今案」、「今、新しく考案した物」である言葉を話す事も有る。

また、「本師」は「小師」、「戒を受けてから十年未満の者」を引き連れるが、「小師」は必ず「本師」を「九拝」、「坐具を展開して九回礼拝する事」を用いて、礼拝するべきである。

「法眷」、「法の仲間」は、住持を「両展三拝する」、「坐具を二回展開してから、展開しない坐具に頭をつけて三回礼拝する」か、「大展三拝する」、「坐具を折らないで大きく展開して三回礼拝する」。

僧達は、「法眷」、「法の仲間」と共にいる場合は、礼拝は同じであるべきである。

「師伯」、「師の兄弟子」や、「師叔」、「師の弟弟子」にも必ず礼拝する。

「隣単」、「僧堂での隣人の僧」や、「隣肩」、「肩を並べる僧」にも皆、礼拝する。

「相識」、「知人」や、「道旧」、「旧友や同期の僧」にも共に礼拝する。

寮や堂にいる仲間と、首座、書記、蔵主、知客、浴主などと、寮に到着したら、礼拝して、同じく安居する事を喜ぶべきである。

単寮にいる仲間と、都寺、監寺、維那、典座、直歳、西堂、尼師、道士などとも、寮に到着したら、位置について、礼拝して、同じく安居する事を喜ぶべきである。

寮に到着したら、人が多くて、寮の門に入る隙間(すきま)を得られなければ、札を書いて、寮の門に押して貼る。

札は、広さが一寸余り、長さが二寸くらいの白紙に書くのである。

（一寸は約三センチメートル。）

札の書式は、「

○○寮　○○

拝　賀

」か、「

巣雲　懐昭等

拝　賀

」か、「

○○

礼　賀

」か、「

○○

拝　賀

」か、「

○○

礼　拝

」である。

書式は多いが、大体の主旨は、このようなのである。

そのため、門の側には、この札が多数、見えるのである。

門の側では、左の辺りに押して貼らず、門の右に押して貼るのである。

この札は、「斎罷」、「昼食後」に、寮主がしまう。

当日は、大小の諸々の堂と諸々の寮は皆、門の簾（すだれ）を上げている。

堂頭、庫司、首座は、次第に、「煎点」、「点心」、「軽食」する事が有る。

けれども、遠く離れた島や奥深くの山間では省略するべきである。これは、「礼数」、「礼儀作法」に過ぎないからである。

「退院した」、「住持を退いた」長老の僧や、「立僧首座」が、各々の寮で、知事や頭首のために特に「煎点」、「点心」、「軽食」を提供する。

このように「結夏して」、「夏安居を始めて」、鍛錬して仏道をわきまえるのである。

諸々の修行をわきまえて受け入れても、未だ夏安居しない人は、仏祖の法の子孫ではないし、仏祖ではない。

「孤独園」、「給孤独園」、「祇園精舎」や、「霊鷲山」、「霊山」は皆、安居によって形成されて現されている。

安居の道場は、仏祖の心の印なのであるし、諸仏の「住世」、「この世に住んで存在している事」なのである。

「解夏」、「夏安居を解く日」は、旧暦の七月十三日であり、「衆寮」、「看読寮」で、「煎点」、「点心」、「軽食」して、「諷経する」、「経を読む」。

旧暦の七月の寮主が、「煎点」、「点心」、「軽食」して「諷経」、「経を読む事」を務める。

旧暦の七月十四日の晩、「念誦」する。

旧暦の七月十五日、住持が堂に上って説法する。

「人事」、「礼拝」や、寮をまわる事や、「煎点」、「点心」、「軽食」は全て、「結夏」、「夏安居を始める時」と同じである。

札の言葉だけが違うだけである。

次のように、庫司の湯についての札に記す。

庫司は今晩、「雲堂」、「僧堂」で「煎点」、「点心」、「軽食」を用意する。特に、首座と僧達のために。

少し「解制」、「夏安居を終わる」作法を表す。

伏して、願わくば、諸々の慈悲を皆に同じく垂れてくれますように。

「光降」、「神仏が降臨してくれますように」。

庫司、出家者〇〇が謹んで申し上げます。

「土地堂」、「土地の守護神を祭っている堂」への「念誦」の言葉は、次のように成る。

切に思うと、「金風」、「秋の風」が野を吹き、「白帝」、「秋を司る神」が四方を司っている。

「覚皇」、「覚王」、「釈迦牟尼仏」が「解制」、「夏安居を終えた」時である。

「法歳」、「夏安居を終えると一歳増える、出家して戒を受けた後の年数」が一周まわった日である。

九十日間の夏安居は無事であった。

僧達一同は皆、安らかであった。

諸仏の大いなる名前を唱えて保持して、仰いで「合堂」、「全ての堂」の真の主宰者に報告いたします。

仰いで集まっている者達を頼って念じます。

以下は、「結夏」、「夏安居を始める時」の「念誦」と同じ(なので、省略する)。

住持が堂に上って説法した後、知事などは、次のような、感謝の言葉を言う。

伏して、喜ぶのは、「法歳」、「夏安居を終えると一歳増える、出家して戒を受けた後の年数」が一周まわり、無事であった事です。

これは、和尚様の「法力」、「仏法の功徳の力」のおかげです。
「下情」、「私の感情」は、感激の至りに耐えられません。

住持は、次のような、感謝の言葉を言う。

ここに、「法歳」、「夏安居を終えると一歳増える、出家して戒を受けた後の年数」が一周まわった。
これは全て、〇〇首座、〇〇監寺などの「法力」、「仏法の功徳の力」の助けである事を感謝する。
感激の至りに耐えられない。

堂の中の場合は首座以下、寮の中の場合は寮主以下は、次のような、感謝の言葉を言う。

九十日間の夏安居を相互によって過ごしました。
「三業」、「身口意で行う業」が善（よ）くなくて他の僧達を悩ませたでしょう。
伏して、お慈悲を望みます。

知事、頭首は、「僧達の中の兄弟(、同胞)が行脚する場合は、茶湯後を待って、思い通りにしなさい(。もし緊急の事が有れば、この限りでは、ありません)」と言う。

安居の作法は、威音王仏、空王仏の前後の時からも「頂上」の量なのである。

仏祖が重んじるのは、安居だけなのである。

外道や、「天魔」、「魔」、「仏敵」が未だ乱せない物は、安居だけなのである。

「インド、中国、日本」という「三国」の中で、仏祖の法の子孫である者で、安居を行わない者は未だ一人もいない。

外道は、安居を未だ学ばない。

仏祖の一大事の本懐なので、「得道した」、「悟った」朝から「涅槃する」、「肉体が死ぬ」夕方まで、仏祖が開演する物は、安居の主旨だけなのである。

西のインドの五部の僧達は異なっていたが、同じく、九十日間の夏安居を護って保持して必ず修行して証した。

中国の九つの宗派の僧達は、一人も、夏安居を破らなかった。

生前に全く、九十日間の夏安居をしなかった人を、「仏の弟子」や「出家者」と呼ぶべきではない。

「因地」、「仏に成る前」、「修行中」にだけ安居を修行するのではない。「果位」、「仏に成った後」も安居を修行して証するのである。大いなる覚者である釈迦牟尼仏が既に一代の間、一夏も欠かす事無く、安居を修行して証している。

果の上の仏が安居を証するのである、と知るべきである。

それなのに、「九十日間の夏安居は修行して証しないが、私は仏祖の法の子孫なのである」と言う人を、笑うべきである。笑いを我慢できない愚かな者なのである。

このような誤った言葉を言ってしまう輩の言葉を聞くべきではないし、共に語るべきではないし、共に坐るべきではないし、共に道を歩むべきではない。

仏法では、「梵壇」、「どの僧も罪人と会話しないようにさせるなどの仏からの罰」などの法で悪人を治すので。

九十日間の夏安居は、仏祖なのである、と理解して取るべきであるし、保持して任されるべきである。

安居が正しく伝えられて来ているのは、過去七仏から初祖の摩訶迦葉へ及んでいるし、
西のインドの二十八人の祖師達は正統に代々正しく伝えているし、
二十八祖の達磨は自ら中国へ出て、正宗普覚大師と呼ばれる二十九祖の慧可に正しく伝えさせたし、
二十九祖の慧可から今まで正統に代々正しく伝えて、今に至るまで正しく伝えている。

私、道元は、中国に入って、目の当たりにして仏祖の会の下で九十日間の夏安居を正しく伝えられて、日本に正しく伝えている。
既に正しく伝えている会で、九十日間の夏安居に坐禅していて、既に夏安居の作法を正しく伝えているのである。

夏安居の作法を正しく伝えられている人と共に住んで安居するのが、真実の安居なのである。

釈迦牟尼仏の存命中の安居から、正統に代々「面授して来ている」、「言い表せないものを顔と顔を合わせて授(さず)かって来ている」ので、仏祖の面々は目の当たりにして安居を正しく伝えて来ている。

仏祖の身心は親しく証に適(かな)って来ている。

このため、「安居を見る事は、仏を見る事なのである。安居を証する事は、仏を証する事なのである。安居を修行する事は、仏を修行する事なのである。

安居を聞く事は、仏を聞く事なのである。安居を習う事は、仏を学ぶ事なのである」と言う。

九十日間の夏安居は、諸々の仏祖が未だ違反しない法なのである。

そのため、人の王、天人の王である帝釈天、梵天などは、出家者と成って、たとえ一夏でも、安居するべきである。

たとえ一夏でも安居すれば、仏を見る事に成るであろう。

人達や、人ではない、天人達や竜達は、出家者と成って、たとえ九十日間でも、安居するべきである。

たとえ九十日間でも安居すれば、仏を見る事に成るであろう。

仏祖の会に交わって九十日間の夏安居をして来ている人は、仏を見て来ているのである。

私達は、幸いにも、今、露（つゆ）のように儚（はかな）い命が落ちる前に、天上でも、または、人の間でも、既に一夏、夏安居したので、仏祖の「皮肉骨髄」、「理解」で、自分の「皮肉骨髄」、「理解」を換えたのである。

仏祖が来て私達を安居するので、人々の面々が安居を修行する事は、安居が人々の面々を修行する事に成るのである。

このため、安居した事が有る者を、千、万の無数の仏祖と言うだけなのである。

なぜなら、安居は、仏祖の「皮肉骨髄」、「理解」なのであるし、

仏祖の心識なのであるし、

仏祖の身体なのであるし、

仏祖の「頂上」なのであるし、

仏祖の「眼睛」、「見る眼」なのであるし、

仏祖の「拳」なのであるし、

仏祖の「(真理を嗅ぎ分ける)鼻の孔(あな)」なのであるし、

仏祖の「円相」、「一円相」、「悟りの象徴としての円」なのであるし、

仏祖の「仏の性質」なのであるし、

仏祖の、害虫を払うための毛がついた棒である払子なのであるし、

仏祖の杖なのであるし、

仏祖の、修行者を打って戒める竹の細長い板である竹箆(しっぺ)なのであるし、

仏祖の布団なのである。

安居は、新しいものを作り出すわけではないが、古いものを更に用いるわけではないのである。

次のように、釈迦牟尼仏は、円覚菩薩と、諸々の集まっている者達と、一切の全ての生者に言った。

もし「夏首」、「夏の初め」から三か月間の安居を経るならば、清浄な菩薩として滞在するべきである。

心を音声を聞く事から離して、人々を頼るなかれ。

次のように、安居の日が来たら、仏の前で言うべきである。

私、出家者〇〇(、または、在家信者〇〇)は、菩薩乗に腰を下ろして、寂滅を修行して、同じく、清浄な実の相に入って住んで保持します。

大いなる「円覚」、「円満な完全な悟り」を私の伽藍と為して、身心で安居します。

「平等性智」、「平等の性質についての知」や、涅槃の「自性」、「自体の本来の性質」は、「繫属して」、「他のものと関係して繫がって」いないので。

今、私は、畏敬して請い願います。

音声を聞く事によらず、十方の如来と大いなる菩薩と共に、三か月間、安居したいです。

菩薩の無上の妙覚の大いなる因縁を修行するために、人々と関わりません。

善い男子よ。

これを「菩薩が安居を『示現する』、『現す』」と名づける。

そのため、出家者や、在家信者などは、必ず、安居の三か月間が来るごとに、十方の如来と大いなる菩薩と共に、無上の妙覚の大いなる因縁を修行しているのである。

知るべきである。

在家信者も安居するべきなのである。

安居する場所は、大いなる「円覚」、「円満な完全な悟り」なのである。

そのため、「鷲峰山」、「霊鷲山」、「霊山」や、「孤独園」、「給孤独園」、「祇園精舎」は、同じく、如来の大いなる「円覚」、「円満な完全な悟り」という伽藍なのである。

「十方の如来と大いなる菩薩と共に、安居の三か月間の修行が有る」という釈迦牟尼仏の教えを聴いて受け入れるべきである。

釈迦牟尼仏は、ある場所で九十日間の安居をした。

「自恣」、「夏安居の最後の日に懺悔し合う」日に、文殊菩薩が急に来て会にいた。

迦葉は、文殊菩薩に、「今年の夏は、どこで安居したのですか？」と質問した。

文殊菩薩は、「今年の夏は、三つの場所にいて安居しました」と言った。

迦葉は、槌を打ち鳴らして僧達を集めて、文殊菩薩を排斥しようとした。

迦葉は、槌を少し上げた時、無数の「仏刹」、「寺」が現れて、(各寺に釈迦牟尼仏がいて、)各、釈迦牟尼仏の所に文殊菩薩と迦葉がいて、各、迦葉は槌を上げて文殊菩薩を排斥しようとしているのを見た。

釈迦牟尼仏は、迦葉に、「あなた(、迦葉)は、今、どの文殊菩薩を排斥しようとしているのか？」と言った。
(文殊菩薩は遍在している。)
この時、迦葉は、呆然とした。

圜悟克勤は、「拈古して」、「修行者の手がかりとしての古代の仏祖の言動を取り上げて批評して」、「鐘は打たなければ響かない。
太鼓は打たなければ鳴らない。
迦葉は、『要津』、『重要な物』を既に把握している。
文殊菩薩は、『十方を坐断している』、『十方という煩悩を断っている』。
当時は、好(よ)い一場面の仏事であった。
『放過一著』、『一手をゆるめた事』、『厳しい追及を一時、控えた事』を惜しむべきである。
釈迦牟尼仏様が『どの文殊菩薩を排斥しようとしているのか？』と言うのを待って、槌(つち)を一回、打ったら、(釈迦牟尼仏様が、)どのように『合殺する』、『終わらせる』のか、見る事ができたであろう」と言った。

圜悟克勤は、「頌古して」、「修行者の手がかりとしての古代の仏祖の言動の意味を詩にして」、「大きい象(ゾウ)は、兎(ウサギ)の経路を行かない。
『燕雀いずくんぞ鴻鵠の志を知らんや？』、『燕(ツバメ)や雀(スズメ)といった小鳥が、どうして、鴻(オオトリ)や鵠(クグイ)といった巨鳥の志を知るであろうか？　いいえ！』、『矮小な人が、どうして、大いなる人の志を知るであろうか？　いいえ！』。

(釈迦牟尼仏の)命令によって、あたかも風を成すようである。
的を射れば、全て、鏃(やじり)を噛むようである。
遍界は、文殊菩薩なのである。
遍界は、迦葉なのである。
(迦葉は、文殊菩薩と)相対(あいたい)して厳然なのである。
(迦葉は、)槌(つち)を上げて、どこ(の文殊菩薩)を罰するのか?
好(よ)い一刺(ひとさ)し。
『金色頭陀』、『迦葉』は、かつて、(槌を)落としている」と言った。

そのため、釈迦牟尼仏は一つの場所で安居し、文殊菩薩は三つの場所で安居したが、未だ安居しなかった事は無いのである。

安居しない者は、仏や菩薩ではない。

仏祖の法の子孫である者は安居する!
安居する者は仏祖の法の子孫である、と知るべきである。
安居する事は、仏祖の身心なのであるし、仏祖の「眼睛」、「見る眼」なのであるし、仏祖の命の根本なのである。
安居しない者は、仏祖の法の子孫ではないし、仏祖ではないのである。

今、泥や、木や、黄金や、「七宝」、「七種類の宝」の仏像、菩薩像は皆、共に、安居の三か月間の夏の坐禅を行う。

安居は、「仏、法、僧」という「三宝」に住んで保持する、古代からの作法なのであるし、仏の教訓なのである。

(仏教という)仏祖の家の中の人は、必ず、夏安居の三か月間の坐禅を務めるべきである。

正法眼蔵　安居

その時、千二百四十五年、夏安居、越宇の大仏寺にいて僧達に示した。

袈裟功徳

仏から仏へ、祖師から祖師へ、正しく伝えている法衣と仏法を、中国に正しく伝えたのは、二十八祖の達磨だけなのである。

二十八祖の達磨は、釈迦牟尼仏から第二十八代目の祖師である。
法衣と法は、西のインドで二十八人の祖師達に正統に代々伝わっている。
二十八祖の達磨は、親しく中国に入って、中国の初祖と成った。
法衣と仏法は、中国人の五人の祖師達に伝わって、曹谿山の三十三祖の大鑑禅師に至った。
三十三祖の大鑑禅師は、釈迦牟尼仏から第三十三代目の祖師であり、「中国の六祖」と呼ぶ。

三十三祖の大鑑禅師は、法衣と仏法を黄梅山で夜中に正しく伝えられて、一生、護って保持した。
法衣は、今なお曹谿山の宝林寺に安置されている。

諸代の皇帝は、あいついで、大鑑禅師の法衣を、皇居に招き入れて、捧げものを捧げて礼拝した。

神の者は、大鑑禅師の法衣を護って保持している。

唐の中宗と、粛宗と代宗は、しきりに、皇居に招き入れて供養した。

招き入れる時、送り返す時、特別に使者を派遣して、皇帝の言葉を授けた。

代宗は、ある時、仏の法衣を曹谿山に送り返す時に、言葉を授けて、「今、鎮国大将軍の劉崇景に(法衣を)頭の上に捧げ持たせて送り返させます。

私(、代宗)は、これ(、法衣)を国宝とします。

あなた(、劉崇景)は、本寺(、曹谿山の宝林寺)に作法の通りに安置して、僧達の親しい主旨を受けた者に厳重に守護を与えて、遺失、失墜させる事が無いようにさせなさい」と言った。

実に、無量恒河沙の三千大千世界を統治するよりも、仏の法衣が現に存在する小国の王として仏の法衣を見聞きし捧げものを捧げる事は、生死の中で、善い生、最も優れている生なのである。

仏の化の導きの及ぶ場所である三千界の、どこでも法衣は存在するであろう!

けれども、正統に代々「面授して」、「言い表せないものを顔と顔を合わせて授かって」、仏の法衣を正しく伝えている者は、二十八祖の達磨、独りだけなのである。

傍系の人は、仏の法衣を授けられていない。

二十七祖の傍系である跋陀婆羅菩薩の伝承は肇法師にまで及んでいるが、仏の法衣の伝承は無い。

三十一祖の道信は、牛頭山の法融禅師を仏土へ渡したが、仏の法衣を伝えなかった。

そのため、正統な伝承が無くても、如来の正しい法の功徳は虚しくは無く、「千古万古」、「古代から現在まで」、皆、利益が広大なのである。

しかし、正統に伝承される事は、伝承が無い事と同じではない。

そのため、もし人や天人が法衣を受けて保持したいのであれば、仏祖が正しく伝えている法衣を伝えられて受けるべきである。

インド、中国では、正法、像法の時は、在家信者ですら法衣を受けて保持していた。

今、遠方の辺境の僻地（へきち）では、末法の時では、髭（ひげ）と髪を剃（そ）り除いて「仏の弟子」を自称する人が、法衣を受けて保持していないし、「法衣を受けて保持するべきである」と未だ信じないし、知らないし、明らめていない。

悲しむべきである。

まして、法衣の「体、色、量」、「素材、色、量」を知らない！

まして、法衣を着て用いる時の法を知らない！

法衣を古くから「解脱服」と呼ぶ。

法衣で、「業障」、「悪業が原因である障害」や、「煩悩障」、「煩悩という形での障害」や、「報障」、「地獄などに堕ちるという形での悪業の報いである障害」などを皆、解脱できるのである。

竜は、もし法衣の「一縷（いちる）」、「一本の糸」、「わずか」でも得れば、「三熱」という竜や蛇への苦しみを免れる。

牛は、もし角で法衣に触れれば、罪が自然に消滅する。

諸仏は、仏道を成就する時、必ず、法衣を着る。

法衣という功徳は、最も尊い、最上の功徳なのである、と知るべきである。

実に、私達は、辺境の僻地（へきち）に生まれてしまっているし、末法の時代に出くわしてしまっているので、恨んでしまうであろうが、仏から仏へ正統に代々伝承している法衣と仏法に出会えた事をどれほどの喜びとしようか？

どの家門が、私が正しく伝えているように、釈迦牟尼仏の法衣と仏法を共に正しく伝えているのか？

釈迦牟尼仏の法衣と仏法に出会って、誰が恭（うやうや）しく敬い捧げものを捧げないであろうか？

たとえ一日に無量恒河沙の身の命を捨てても、釈迦牟尼仏の法衣と仏法に捧げものを捧げるべきである。

「生から生へ、世から世へ、釈迦牟尼仏の法衣と仏法に出会って、頂戴できて、捧げものを捧げる事ができて、恭（うやうや）しく敬う事ができますように」という願いを起こすべきである。

私達は、釈迦牟尼仏が生まれた国インドから十万里余り隔てている、間に山と海が有る、遥か遠くにいて、インドと交通し難いが、前世の善行が催（もよお）す

物によって、山と海に塞(ふさ)がれず、辺境の僻地(へきち)による暗愚さを嫌われる事無く、釈迦牟尼仏の法衣と仏法に出会えた。

釈迦牟尼仏の正しい仏法に出会って、徹底的に日夜に習って修行している。

釈迦牟尼仏の法衣を受けて保持して、常に、頭の上に捧げ持ってから着て、護って保持している。

法衣を着て仏法を修行する事は、一人や二人の仏の下で功徳を修行する事に成るだけではない！

法衣を着て仏法を修行する事は、恒河沙などの諸仏の下で諸々の功徳を習って修行する事に成るのである。

法衣を着て仏法を修行する人を、たとえ自己であっても、尊ぶべきであるし、喜ぶべきである。

祖師が仏法を伝えてくれた深い恩に真心で報いて感謝するべきである。

人以外の動物ですらなお恩に報いる。

人は恩を知っている！

もし恩知らずならば、人以外の動物よりも愚かである。

仏の法衣と仏法の功徳を、仏の正しい仏法を伝えている祖師ではない他の者は、未だ明らめていないし、知らない。

諸仏の跡、仏道を喜んで求めるのであれば、正に、仏の法衣と仏法を喜んで願うべきである。

たとえ百、千、万の無数の代の後も、仏の法衣と仏法を正しく伝える事を「正しく伝えている」とするべきである。

仏の法衣と仏法を正しく伝える事が仏法なのである。

証拠は正に新たに成るであろう。

水を乳に入れるのには似ていない。

皇太子が皇帝に即位するような物なのである。

水を合わせた乳であっても、乳を用いる時は、水を合わせた乳の他に更に乳が無い時には、水を合わせた乳を用いるべきである。

たとえ水を合わせていなくても、(水を合わせた乳の代わりに、)油を用いるべきではないし、漆(うるし)を用いるべきではないし、酒を用いるべきではない。

仏の法衣と仏法を正しく伝える事もまた同様なのである。

たとえ凡庸な師であっても、仏の法衣と仏法を正しく伝えられているならば、乳として用いて善(よ)いように、用いて善(よ)いのである。

まして、仏から仏へ、祖師から祖師へ、仏の法衣と仏法を正しく伝えている事は、皇太子が皇帝に即位するような物なのである。

俗ですらなお「先王の法服でなければ着ない」と言う。

仏の弟子は仏の法衣ではない衣服を着ない!

後漢の、諡号が孝明皇帝である明帝の時代の、六十七年以後、西のインドと東の地の中国を行き来する出家者や在家信者は、「踵(くびす)を接するように」、「人々が連続するように」、絶えないが、「西のインドで、仏から仏へ、祖師から祖師へ、正しく伝えられている祖師に出会った」と言う人はいないし、如来、釈迦牟尼仏から、「面授」、「言い表せないものを顔と顔を合わせて授(さず)かる事」によって伝承されている系譜の人はいない。

経典の学者に従って、サンスクリット語の本の経を伝えて来ているだけなのである。

「仏法を正統に嗣(つ)いだ祖師に出会った」と言う人はいないし、「仏の法衣を伝えている祖師がいた」と語る人はいない。

仏法の奥義に入っていない、と明らかに知る事ができる。

このような人は、仏祖が正しく伝えている主旨を明らめていないのである。

釈迦牟尼如来、釈迦牟尼仏は、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」と無上普遍正覚を初祖の摩訶迦葉に付属して授けた時に、迦葉仏から正しく伝えられた法衣も共に伝えて授けた。

仏法と迦葉仏からの法衣を、正統に代々伝承して、曹谿山の三十三祖の大鑑禅師に至った。

三十三祖の大鑑禅師は、釈迦牟尼仏から第三十三代目なのである。

法衣の「体、色、量」、「素材、色、量」を親しく伝えているのである。

その後、三十四祖の青原の行思と、南嶽の懐譲の法の子孫は、法衣の法と仏法を親しく伝えて来ているし、代々の祖師の法を法衣として纏(まと)い、代々の祖師の法を法衣として制作した。

法衣の洗浄の法と、法衣を受けて保持する法は、仏祖が正統に代々「面授している」、「言い表せないものを顔と顔を合わせて授(さず)かっている」仏法の奥義の学に参入しなければ、知らない物なのである。

「袈裟」、「法衣」には「三衣」、「三種類の法衣」が有る、と言われている。
(「三衣」とは、)五条衣と七条衣と、九条衣などの大衣である。

「上行」、「修行が優れている」僧は、この「三衣」、「三種類の法衣」、「五条衣と七条衣と、九条衣などの大衣」だけを受け取る。

他の衣を蓄えない。

「三衣」、「三種類の法衣」、「五条衣と七条衣と、九条衣などの大衣」だけを用いて身に役立てて事足りるのである。

掃除などの「作務」を営んだり、大小の行き来をするならば、五条衣を着る。

諸々の「善事」、「善行」を為(な)したり、僧達の中に入ったりするならば、七条衣を着る。

人や天人を教化して敬い信じさせるならば、九条衣などの大衣を着るべきである。

仕切りが存在する場所ならば、五条衣を着る。

僧達の中に入るならば、七条衣を着る。

王宮や集落に入るならば、九条衣などの大衣を着るべきである。

また、「煴燸」、「温熱」が調和している時は、五条衣を着る。

（

「煴」は「熱」を意味する。

「燸」は「温める」などを意味する。

）

寒冷の時は、五条衣に加えて、七条衣を着る。

寒苦が厳しく切である時は、五条衣と七条衣に加えて、九条衣などの大衣を着る。

昔、ある時、「正冬」、「旧暦の十一月」の夜に入って、天候が寒くて竹を裂くほどであった。

如来、釈迦牟尼仏は、その「初夜」、「午後八時前後」に、五条衣を着ていた。

夜、久しくして、うたた、ますます、寒く成ると、五条衣に加えて七条衣を着た。

夜明け前に、天候の寒さが、うたた、ますます、盛んに成ると、五条衣と七条衣に加えて、九条衣などの大衣を着た。
釈迦牟尼仏は、「未来の世の中でも、寒苦を忍耐できない時は、善い男子は、この『三衣』、『三種類の法衣』、『五条衣と七条衣と、九条衣などの大衣』を足して重ね着して身に纏えば、よろしい」と思った。

「袈裟」、「法衣」を纏う法

「偏袒右肩」、「右肩の片側だけ脱ぐ事」が、日常的な方法、作法なのである。

「通両肩搭」、「法衣を両肩に纏う」という作法も有る。
如来と老人の僧の作法である。
「両肩に纏う」と言っても、胸を出す時も有るし、胸を覆う時も有る。
「通両肩搭」、「法衣を両肩に纏う」のは、六十条衣以上の大きい法衣の時なのである。

法衣を纏う時は、両端共、左の肘と肩に重ねて掛けるのである。
法衣の右端を左端の上に掛けて肘の外に垂らす。
大きい法衣の時は、右端を左の肩の上を通して背後に出して垂らす。

この他、法衣を着る色々な作法が有る。長く参入して質問するべきである。

（二十八祖の達磨が伝えた仏法と法衣の法は、）梁、陳、隋、唐、宋と数百年間、伝えられて、小乗や大乗の学徒の多くは、「講経の」、「経の意味をとき明かす」業を投げ捨てて、「究極ではない」と知って、進んで、仏祖が正しく伝えている仏法を習って学ぼうとする時、必ず、従来の破れた衣を脱ぎ落として、仏祖が正しく伝えている法衣を受けて保持するのである。

これは、正しく、邪法を捨てて正しい仏法に帰る事なのである。

如来の正しい仏法は、西のインドが「法本」、「法の本」なのである。（仏教はインドが発祥の地なのである。）

古今の「人の師」、「徳が有る人」の多くが、凡人の「情量」、「情による思量」や「局量」、「とらわれた限られた思量」という「小見」、「矮小な見解」を断った。

仏の世界や生者の世界は有限でもないし、無限でもないので、小乗や大乗の「教、行、人、理」、「仏教、修行、人、真理」は今の凡人の「局量」、「とらわれた限られた思量」には無い。

それなのに、いたずらに無駄に、インドの仏法を本とせず、中国で新たに「局量」、「とらわれた限られた思量」の「小見」、「矮小な見解」を「今案」、「今、新しく考案した物」として仏法としているが、道理は、そうではない。

そのため、今、「発心した」、「悟りを求める事を思い立って心した」仲間は、法衣を受けて保持するならば、正しく伝えられている法衣を受けて保持するべきである。

「今案」、「今、新しく考案した物」による新しく作られた法衣を受けて保持するべきではない。

「正しく伝えられている法衣」とは、二十八祖の達磨から三十三祖の大鑑禅師へ正しく伝えられて来ている、如来からの正統に代々、伝承されている法衣である。一代も欠けていないのである。

二十八祖の達磨や三十三祖の大鑑禅師の法の子孫が着て来ている法衣が、正しく伝えられている法衣なのである。

中国で新しく作られた法衣は、正しく伝えられている法衣ではない。

古今、西のインドから来た僧が着ている法衣は皆、仏祖が正しく伝えている法衣のように法衣を着ている。

今、中国の経典の似非（えせ）学者の輩が新しく製作した法衣のような法衣を着た人は、西のインドから来た僧には一人もいない。

法衣に暗い輩は、経典の似非（えせ）学者の法衣を信じてしまう。

法衣に明らかな者は、経典の似非（えせ）学者の法衣を捨て去るのである。

仏から仏へ、祖師から祖師へ、伝えている「袈裟の功徳」、「法衣の功徳」は明らかなので、信じて受け入れやすい。

法衣の正しい伝承が、正しく、伝承されている。

法衣の「本様」、「基本の様式」が、目の当たりにされて、伝えられており、今も現に存在している。

法衣を受けて保持して仏法を嗣いで、今にまで至っている。

法衣を受けて保持している祖師は共に、証に適っている、仏法を伝えている師弟なのである。

そのため、仏祖が正しく伝えている法衣を作る法によって法衣を作るべきである。

法衣の法は、単一で正しく伝えられているので、凡人も聖者も、人も天人も、龍神も皆、長い間、明らかに知って来ている物なのである。

法衣の法の流布に生まれて出会って、一度でも法衣を身体に纏い、刹那でも一瞬でも受けて保持すれば、無上普遍正覚を必ず成就する護身の護符と成るであろう。

真理の一つの詩、一つの句を身心に染めれば、長い時間の光明の種と成って、終に、無上普遍正覚に至る。

一つの法、一つの善を身心に染めれば、また同様に、長い時間の光明の種と成って、終に、無上普遍正覚に至る。

心の思いも刹那に生じて滅び、留める事ができないし、身体も刹那に生じて滅び、留める事ができないが、修行した功徳は必ず熟して解脱できる時が来る。

法衣もまた、「作ではない」、「何かしているわけではない」し、「無作ではない」、「何もしないわけではない」し、留まるわけではないし、留まらないわけではないし、「仏と仏だけが究め尽くせる」物であるが、法衣を受けて保持する修行者が、法衣を所得している功徳は、必ず成就するのであるし、必ず究め尽くせるのである。

前世で善行をしていない者は、一生、二生、無数の生を経歴しても、法衣を見る事ができないし、法衣を着る事ができないし、法衣を信じて受け入れる事ができないし、法衣を明らめて知る事ができない。

中国、日本を見ると、法衣を一度でも身体に纏う事ができ得た者もいるし、でき得ない者もいるが、貴賤による物ではないし、賢愚による物ではない。

法衣を着る事ができるのは、前世の善行による物である、と測り知る事ができる。

そのため、法衣を受けて保持している人は、前世の善行を喜ぶべきであるし、功徳が積み重なる事は疑問の余地が無い。

法衣を未だ得ていない人は、法衣を得る事を願うべきであるし、今の生で急いで善行という種を植える事を始めるべきである。

障害が有って法衣を受けて保持する事ができ得ない者は、諸仏、諸々の如来と、「仏、法、僧」という「三宝」に、恥じ入って懺悔（ざんげ）するべきである。

他の国の生者は、「私の国も、中国のように、如来、釈迦牟尼仏の法衣と仏法が、正しく伝えられて、降臨しますように」と、どれほど願っているであろう。

法衣の法が、自分の国に正しく伝えられていないのは、深い恥であろうし、悲しみが有るであろう。

私達は、どんな幸いが有ったのか、如来、釈迦牟尼仏の法衣の法を正しく伝えている仏法に出会えた。

前世で植えた知の種の大いなる功徳の力による物なのである。

今の、末法の世、悪い時代では、人は、自分が正しく伝えてもらえない事を恥じず、他人が正しく伝えてもらえた事を嫉妬（しっと）するが、「魔の党派者であろう」、「仏敵の仲間であろう」と思われる。

自分が今、所有している物、住んでいる物は、前世の業に引かれているので、真実ではない。

正しく伝えられている仏法にだけ帰依して敬う事は、自分が仏法を学んで修行した事による実への帰還に成る。

知るべきである。
法衣は、諸仏が恭（うやうや）しく敬い帰依している物なのである。
法衣は、仏の身なのであるし、仏の心なのである。

法衣を、「解脱服」と呼ぶし、
「福田衣」（、「幸福を生じる源である田畑のような衣」）と呼ぶし、
「無相衣」（、「執着を超越する衣」）と呼ぶし、
「無上衣」と呼ぶし、
「忍辱衣」と呼ぶし、
「如来衣」と呼ぶし、
「大慈大悲衣」と呼ぶし、
「勝幡衣」（、「勝利の旗のような衣」）と呼ぶし、
「阿耨多羅三藐三菩提衣」（、「無上普遍正覚の衣」）と呼ぶ。
法衣を、正に、このように受けて保持し、頭の上に捧げ持つべきである。

このため、法衣を思うがままに改変するべきではないのである。

法衣の素材は、絹でも絹以外の布でも都合に合わせて用いる。

必ずしも「絹以外の布は清浄であり、絹は不浄である」という訳ではないし、絹以外の布を嫌って、絹を選び取る所見も無い。

これらの誤った見解は、笑うべきである。

諸仏の不変の法では、必ず、「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」を無上とする。

「糞掃」、「ぼろきれ」には十種類か四種類、有る。

「火焼、牛嚼、鼠噛、死人衣」などである。

インドの東、西、南、北、中央の人は、これらのような衣を小道や野に捨てる。

これらの衣は「糞掃」、「ぼろきれ」と同じなので、「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」と名づける。

修行者は、ぼろきれを選んで取って、洗浄して、縫い直して、用いて、身の役に立てる。

ぼろきれの中には、絹も有るし、絹以外も有る。

「絹か？　絹以外か？」という誤った見解を投げ捨てて、「糞掃」、「ぼろきれ」の学に参入するべきである。

「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」を、昔、「阿耨達池」で洗浄すると、龍王が、ほめたたえて、雨のように華を降らして礼拝したのである。

「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の教師は、「『化糸』、『霊的に生じさせた糸』を法衣の素材にするべきである」という誤った説を唱えるが、根拠が無い。大乗の人は笑うべきである。

どの素材も(神による)「化糸」、「霊的に生じさせた糸」である(と言える)！

あなたには、「化(生)」、「霊的に生じる事」を聞く耳が有ると信じる事ができても、「化(生)」を(正しく)見る目が有るかを疑う。

知るべきである。

「糞掃」、「ぼろきれ」を拾(ひろ)う中で、絹に似た物も有るし、絹以外の物に似ている絹も有る。

各土地の風習は千差万別で「造化」、「作り方」は測り知る事が困難であるし、肉眼で知る事はできない。

このような物を得たら、「絹か？　絹以外か？」と論じるべきではなく、「糞掃」、「ぼろきれ」と呼ぶべきである。

たとえ人や天人が「糞掃」、「ぼろきれ」を生じて成長させても、情の有るものではなく、「糞掃」、「ぼろきれ」なのである。

たとえ松や菊が「糞掃」、「ぼろきれ」を生じて成長させても、情の無いものではなく、「糞掃」、「ぼろきれ」なのである。

「糞掃」、「ぼろきれ」が絹や絹以外ではないし、金銀や宝石ではない道理を信じて受け入れる時、「糞掃」、「ぼろきれ」が形成されて現されるのである。

「絹か？　絹以外か？」という誤った見解を未だ脱ぎ落としていなければ、「糞掃」、「ぼろきれ」を夢にも未だ見た事が無いのである。

ある僧が、かつて、古代の仏と等しい人に、「黄梅山の三十二祖の弘忍が夜中に仏法と共に伝えた法衣の素材は、絹以外でしょうか？　絹でしょうか？　究極的に、どういった物でしょうか？」と質問した。

古代の仏と等しい人は、「絹以外ではないし、絹ではない(。『糞掃』、『ぼろきれ』である)」と言った。

知るべきである。

法衣の素材は、絹でもないし、絹以外でもない。

(「糞掃」、「ぼろきれ」である。)

これが仏道の奥深い教訓なのである。

三祖の商那和修は、第三番目に「法蔵」、「仏の教え」を付属された祖師である。

三祖の商那和修は、生まれた時に衣と共に生じて、生まれた時から衣と共に生きている。

商那和修の衣は、在家者の時は俗服であり、出家したら法衣と成った。

鮮白比丘尼は、願いを起こして、迦葉仏に布を布施した後、生から生へ、中有でも、必ず衣と共に生じた。

鮮白比丘尼が釈迦牟尼仏に会って出家すると、生まれながらに備えている俗衣は速（すみ）やかに変化して法衣と成った。

三祖の商那和修と、鮮白比丘尼は、同じく、生まれた時に衣と共に生じて、衣は出家したら法衣と成った。

法衣は、絹や、絹以外の物などではない、と明らかに知る事ができる。

まして、このように、仏法の功徳は身心といった「諸法」、「全てのもの」を変化できる。

私達が出家して戒を受ける時、身心が依り所とする環境としての報いである「この世」と過去の行いの正に報いである身心が、速やかに変化する道理は明らかであるが、暗愚で知らないだけなのである。

諸仏の不変の法が、三祖の商那和修と鮮白比丘尼だけに作用して、私達に作用しない事は無いのである。

出家して戒を受けた事に相応に成る利益を疑うべきではない。

このような道理を明らかに鍛錬して学に参入するべきである。

「善来得戒」、「釈迦牟尼仏が『出家者よ、来なさい』と言って戒を得た」人の体をいつの間にか覆う法衣は、必ずしも絹以外の物ではないし、絹ではない。

「仏化難思」、「釈迦牟尼仏の化の導きは思量し難い」のである。

「法華経」の「五百弟子受記品」の「親友(である釈迦牟尼仏)が衣の裏に掛けてくれた宝玉」を、砂を数える経典の似非学者は知る事ができないのである。

諸仏の法衣の「体、色、量」、「素材、色、量」の、量の有限、無限、「相」の有無を明らめて学に参入するべきである。

西のインドから東の地の中国までの古今の祖師は皆、学に参入して正しく伝えているのである。

祖師から祖師へ正しく伝えている事が明らかで疑問の余地が無い事を見聞きしながら、いたずらに無駄に、祖師が正しく伝えている物を受け取らない人は、心構えが許し難いであろうし、愚かさの至りであるし、不信心が理由であろう。

真実を捨てて空虚を求め、根本を捨てて些末を願う者に成ってしまうのである。

如来、釈迦牟尼仏を軽んじる事に成ってしまうのである。

「菩提心」、「悟りを求める心」を起こした仲間は、必ず、祖師が正しく伝えている物を受け取るべきである。

私達は、出会い難い仏法に出会えただけではなく、仏の法衣を正しく伝えている法の子孫として、法衣と仏法を見聞きし、学習し、受けて保持する事ができ得たのである。

法衣と仏法を見聞きする事は、如来、釈迦牟尼仏を見る事なのであるし、
釈迦牟尼仏の説法を聞く事なのであるし、
釈迦牟尼仏の光明に照らされる事なのであるし、
釈迦牟尼仏が受用したものを受用する事なのであるし、
釈迦牟尼仏の心を単一に伝えてもらえる事なのであるし、
釈迦牟尼仏の髄を得る事なのであるし、
目の当たりにして釈迦牟尼仏の法衣によって覆われる事なのであるし、
目の当たりにして釈迦牟尼仏が私に法衣を授ける事なのである。

釈迦牟尼仏に従ったので、法衣を受けたのである。

「袈裟」、「法衣」を洗浄する法

法衣をたたまず、洗い桶に入れて、香を入れた湯を煮て、法衣を浸して、
二時間くらい置く。

または、別の法は、清浄な「灰水」、「灰を水に浸けた上澄み液」を煮て、
法衣を浸して、(灰)湯が冷めるのを待つ。
今は、普通、「灰湯」、「煮た『灰水』」を用いる。
日本では「灰湯」を「灰汁の湯」と言う。
「灰湯」が冷めたら、清浄な澄んだ湯で、何度か法衣を洗浄する間、両手
を入れて揉み洗わないし、踏まない。
垢が除去されるまで、皮脂が除去されるまで法衣を洗浄する。
その後、沈香や梅檀香などを冷水に合わせて、法衣を洗浄する。
その後、清浄な竿に掛けて干す。
良く干した後、たたんで、高い場所に安置して、焼香して華を撒き散らし
て、右に数周して、礼拝する。
坐具を展開して三回か六回か九回礼拝して、右ひざを地につけて左ひざを
立てて合掌して、法衣を両手で捧げ持って、詩を口で唱えた後、立って、作
法の通りに法衣を着る。

次のように、釈迦牟尼仏は、集まっている者達に言った。

私(、釈迦牟尼仏)は、過去の前世で、宝蔵仏の所にいた時、大悲菩薩(摩訶
薩)であった。

次のように、大悲菩薩摩訶薩は、ある時、宝蔵仏の前で、願って言った。

宝蔵仏様、私(、大悲菩薩摩訶薩)が仏に成って、生者のうち、私の仏法の中に入って出家して「袈裟」、「法衣」を着た者や、重戒を犯してしまったり、邪悪な見解によって行動してしまったり、「仏、法、僧」という「三宝」を軽んじて悪口を言って信じなかったりして、諸々の重罪を積み重ねてしまった出家者や在家信者が、もし一念でも、恭しく敬う心を生じて大衣の法衣を尊重したり、恭しく敬う心を生じて「仏、法、僧」という「三宝」を尊重したりしたのに、宝蔵仏様、このような生者が一人でも三乗において「記別を受ける」、「授記」、「成仏の予言」を得られず退転したら、(私、大悲菩薩摩訶薩は、)十方世界の無数の、無限の、「阿僧祇」、「無数」などの、現に存在する諸仏をだました事に成ってしまいます。

(そうであるならば、私、大悲菩薩摩訶薩は、)決して無上普遍正覚を成就しません。

宝蔵仏様、私(、大悲菩薩摩訶薩)が仏に成って、諸々の、天人、龍(神)、鬼神といった、人と、人ではない者が、「袈裟」、「法衣」を着た者を恭しく敬って捧げものを捧げて尊重して、たたえたら、「袈裟」、「法衣」をわずかでも見る事ができ得たら、三乗の中で不退転と成る事が得られますように。

飢えや渇きで逼迫している生者や、貧窮している鬼神や、下賤な諸々の人や、餓鬼である生者が、「袈裟」、「法衣」をわずかでも四寸でも得たら、飲食物に満ち足りる事ができ得ますように。

（一寸は約三センチメートル。）

願いが速（すみ）やかに成就でき得ますように。

生者が、共に背を向け合って恨んで害する思いを起こして闘争していったり、諸々の、天人、龍（神）、鬼神、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽、鳩槃荼（クバンダ）、毘舎遮（ピシャーチャ）といった、人と、人ではない者が、共に闘争し合ったりした時、「袈裟」、「法衣」に念じれば、「袈裟」、「法衣」の力によって、すぐに、（慈）悲の心や、柔軟な心や、恨まない害しない心や、寂滅の心や、「調伏された善い心」、「身心を調整して悪を降伏させた善い心」を生じて、清浄に成る事ができ得ますように。

もし人が戦争、闘争、訴訟の中にいても、「袈裟」、「法衣」をわずかでも持って、このような（敵の）輩の中に入って、自身を護るために、（「袈裟」、「法衣」に）捧げものを捧げて恭（うやうや）しく敬って尊重すれば、このような（敵の）諸々の人達は、侵害できないし、乱せないし、辱める事ができないし、常に他者に勝つ事ができ得て、このような諸々の災難を乗り越える。

宝蔵仏様、もし私の「袈裟」、「法衣」が、このような五つの事、神聖な功徳を成就できなければ、（私、大悲菩薩摩訶薩は、）十方世界の無数の、無限の、「阿僧祇」、「無数」などの、現に存在する諸仏をだました事に成ってしまいます。

（そうであるならば、私、大悲菩薩摩訶薩は、）未来に無上普遍正覚を成就して仏の事を行いません。

(そうであるならば、私、大悲菩薩摩訶薩は、)善い法を失ってしまい、きっと、外道を破壊できないからです。

善い男子よ、その時、宝蔵如来、宝蔵仏は、黄金色の右腕を伸ばして、大悲菩薩(摩訶薩)の頭をなでて、たたえて、「善いかな、善いかな。立派な男子よ。あなたが言った言葉は、大いなる珍しい宝であるし、大いに賢明で善い。あなたは無上普遍正覚を成就して、この『袈裟』、『法衣』は、このような五つの神聖な功徳を成就できて、大いなる利益をもたらす」と言った。

善い男子よ、その時、大悲菩薩摩訶薩は、宝蔵仏がたたえてくれたのを聞き終わると、心に喜びが生じて、感無量で心が沸き踊った。

ちなみに、宝蔵仏が伸ばした黄金色の右腕は、長くて「合縵であった」、「膜が有った」。
宝蔵仏の手は柔軟で天の衣のようであった。
宝蔵仏は、大悲菩薩摩訶薩の頭をなで終わると、変身して、二十歳くらいに成った。

善い男子よ、宝蔵仏の会に集まっていた者達、諸々の、天人、龍神、乾闥婆といった、人と、人ではない者は、両手を胸の前で重ねて立って恭しく敬って、大悲菩薩(摩訶薩)に、色々な華を捧げたり、音楽を捧げたりして、また、色々とたたえ終わると、沈黙した。

如来、釈迦牟尼仏の存命中から今日に至るまで、菩薩や声聞の「経、律」という経典の中から法衣の功徳を選び、挙げる時、必ず、この法衣の五つの神聖な功徳を主とするのである。

実に、法衣は、過去、現在、未来の諸仏の、仏の衣なのである。

法衣の功徳は量り知れないが、釈迦牟尼仏の仏法の中で法衣を得る事は、他の仏の仏法の中で法衣を得るよりも優れている。

なぜなら、釈迦牟尼仏は、昔(の前世で)、「因地」、「修行中」の時、大悲菩薩摩訶薩として、宝蔵仏の前で「五百大願」を立てた時、特に法衣の功徳について、このような誓い、願いを起こしたからである。

釈迦牟尼仏による法衣の功徳は、更に、量り知れない、不可思議な物なのである。

そのため、釈迦牟尼仏の「皮肉骨髄」、「理解」を今にまで正しく伝える事とは、法衣を正しく伝える事なのである。

「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を正しく伝えている祖師は、必ず、法衣を正しく伝えている。

法衣を伝えられて保持し頭の上に捧げ持つ生者は、必ず、二、三生の間に「得道している」、「悟っている」。

たとえ戯(たわむ)れて笑うためや、利益のために身に法衣を着ても、必ず、「得道する」、「悟る」因縁と成るのである。

次のように、十四祖の龍樹は言っている。

また、次に、仏法の中の出家者は、戒を破る罪を犯しても、罪をつぐない終われば解脱を会得する。

次のように、「優鉢羅華比丘尼本生経」に記されているように。

釈迦牟尼仏が存命中の時に、蓮華色（ウッパラヴァンナー）比丘尼は、六神通と阿羅漢を会得した。

蓮華色（ウッパラヴァンナー）比丘尼は、貴族の家に入って、常に出家をたたえて、諸々の貴族の婦女に「姉妹よ、同胞よ、出家するべきです」と話していた。

諸々の貴族の婦女は、「私達は、若くて盛んで、容姿も美しいので、戒を守るのは難しいです。戒を受けても破ってしまうでしょう」と言った。

蓮華色（ウッパラヴァンナー）比丘尼は、「戒を破ってしまうならば破ってしまっても良いのです。出家するべきです」と言った。

諸々の貴族の婦女は、「戒を破ってしまったら地獄に堕ちてしまうでしょう？　どうして戒を破ってしまっても良いのですか？」と質問した。

蓮華色（ウッパラヴァンナー）比丘尼は、「地獄に堕ちてしまうならば堕ちてしまっても良いのです」と答えた。

諸々の貴族の婦女は、笑って、「地獄では罪の報いを受けてしまいます。どうして地獄に堕ちてしまっても良いのですか？」と言った。

次のように、蓮華色（ウッパラヴァンナー）比丘尼は言った。

(神通力で)私の前世の時を思い出すと、私は、遊女に成って、色々な衣服を着て古い名言を説きました。

ある時、女性の出家者の衣服を着て戯(たわむ)れて笑いました。

この因縁のおかげで、釈迦牟尼仏の前の迦葉仏の時代に、女性の出家者に成れました。

しかし、貴族であったためと、端正な容姿であったため、心に傲(おご)り高ぶり他人を見下す思いを生じてしまって戒を破ってしまいました。

戒を破ってしまった罪のせいで、地獄に堕ちて色々な罪の報いを受けてしまいました。

けれども、罪の報いを受け終わると、(今世で、)釈迦牟尼仏に出会えましたし、出家できましたし、六神通と阿羅漢の道を会得できました。

このため、知る事ができます。

出家して戒を受ければ、戒を破ってしまっても、戒を受けた因縁のおかげで、阿羅漢の道を会得できます。

もし戒を受けた因縁が無いのに悪行を行(おこな)ってしまえば、道を得る事はできません。

私は、昔は、生から生へ地獄に堕ちてしまっていました。

地獄から出ては悪人に成ってしまって、悪人として死んでは再び地獄に入ってしまって、全く何も得られませんでした。

このため、明らかに、知る事ができます。

出家して戒を受ければ、戒を破ってしまっても、戒を受けた因縁のおかげで、「道果」、「悟り」を得る事ができます。

蓮華色(ウッパラヴァンナー)比丘尼が阿羅漢として「得道した」、「悟った」最初の原因は、法衣以外の功徳による物ではない。

蓮華色(ウッパラヴァンナー)比丘尼は、(前世で)戯(たわむ)れて笑うために法衣をその身に着た功徳によって、今世で「得道した」、「悟った」。

蓮華色(ウッパラヴァンナー)比丘尼は、第二生目で迦葉仏の仏法に出会って女性の出家者と成り、第三生目で釈迦牟尼仏に出会って大いなる阿羅漢と成り三明六通を十分に備えた。

三明とは、自他の過去世を自由に知る「宿命明」と、煩悩を無くし尽くす「漏尽明」と、自他の来世を自由に知る「天眼明」である。

六通とは、「神境通」(または「神足通」)と、「他心通」と、「天眼通」と、「天耳通」と、「宿命通」と、「漏尽通」である。

実に、ただ悪を為(な)す人であった時は、虚しく死んで地獄に入るし、地獄から出て、また悪を為(な)す人と成る。

戒の因縁が有る時は、禁戒を破って地獄に堕ちても、終(つい)に「得道する」、「悟る」因縁に成るのである。

戯(たわむ)れて笑うために法衣を着てすら、第三生目に「得道する」、「悟る」のである。

まして、無上普遍正覚のために清浄な信心を起こして法衣を着たら、その功徳は成就する！

まして、一生の間、法衣を受けて保持して、頭の上に捧げ持った功徳は、正に広大で無量である。

「菩提心」、「悟りを求める心」を起こした人は、急いで、法衣を受けて保持して、頭の上に捧げ持つべきである。

好(よ)い世に出会って、仏に成れる種を植えないのは、悲しむべきである。

「南贍部洲」、「南閻浮提」、「この世」の人の身を受けて、釈迦牟尼仏の仏法に出会って、生まれて、仏法を正統に代々伝えている祖師に出会い、単一に伝えられ直接的に指し示されている法衣を受けるべきなのを、虚しく過ごすのは、悲しむべきである。

法衣を正しく伝えているのは、祖師が正しく伝えているのだけが正統なのであり、他の師は肩を並べる事ができない。

伝承が無い師に従って法衣を受けて保持してもなお功徳は、とても深いのである。

まして、正統に代々「面授して来ている」、「言い表せないものを顔と顔を合わせて授(さず)かって来ている」正しい師によって法衣を受けて保持する人は、正しく、如来、釈迦牟尼仏の法の子孫なのである。

正に、如来、釈迦牟尼仏の「皮肉骨髄」、「理解」を正しく伝えている人に成る。

法衣は、過去、現在、未来の十方の諸仏が正しく伝えて来ていて、未だ断絶していない。

過去、現在、未来の十方の諸々の、仏、菩薩、独覚、声聞は同じく、法衣を護って保持して来ているのである。

法衣を作るには、粗い布を本(もと)とする。

粗い布が無い場合は、細かい布を用いる。

粗い布も、細かい布も、共に無い場合は、白色の絹の布を用いる。

粗い布も、細かい布も、白色の絹の布も、共に無い場合は、模様が織られた絹の布などを用いる。如来、釈迦牟尼仏が許しているのである。

粗い布も、細かい布も、白色の絹の布も、模様が織られた絹の布などの類(たぐい)が全て無い場合は、如来、釈迦牟尼仏は皮の法衣を許している。

法衣を染めて青色か、黄色か、赤色か、黒色か、紫色にさせるべきである。

いずれも色の中の、汚く濁った色にさせる。

如来、釈迦牟尼仏は、常に、肉色の袈裟を着ていた。

これが法衣の色なのである。

初祖が伝えている仏の法衣は青黒い色であり、西のインドの「屈眴布」、「大細布」、「木綿の花心による布」であり、千二百四十年現在、曹谿山にある。

西のインドの二十八人の祖師達が伝え、中国の五人の祖師達が伝えている。曹谿山の、古代の仏と等しい、三十三祖の大鑑禅師の死後に残された弟子達は皆、仏の法衣の古代の法を伝えられて保持していて、他の僧は及ぶ事ができないのである。

法衣には三種類、有り、

(一)「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」
(二)「毳衣」、「毛による衣」
(三)「衲衣」、「捨てられた服による衣」

である。

「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」は、先に示した通りである。

「毳衣」、「毛による衣」は、鳥獣の細かい毛による衣で、これを「毳衣」と名づける。

もし修行者が「糞掃」、「ぼろきれ」を得られなければ、「毳衣」、「毛による衣」を選び取って法衣と為(な)す。

「衲衣」、「捨てられた服による衣」は、朽ちて破れた服を縫って修繕して身につけるのであり、世間で好まれる良い衣服を着ないのである。

釈迦牟尼仏の十大弟子の一人である、長老の僧の「鄔波離」、「優婆離」は、釈迦牟尼仏に、「釈迦牟尼仏様、『僧伽胝衣』、『大衣』の条数は、いくつ有るのでしょうか？」と教えを請うた。
釈迦牟尼仏は、「九つ有る。
十五条の九つである。
九条、十一条、十三条、十五条、十七条、十九条、二十一条、二十三条、二十五条、十七条、十九条の大衣は、三枚の長い布と一枚の短い布による物であ
る。この通りに保持しなさい。
十五条、十七条、十九条の大衣は、三枚の長い布と一枚の短い布による物である。
二十一条、二十三条、二十五条の大衣は、四枚の長い布と一枚の短い布による物である。
二十五条を超過する大衣は、法衣の法を破る事に成ってしまう」と言った。
優婆離は、釈迦牟尼仏に、「釈迦牟尼仏様、何種類の『僧伽胝衣』、『大衣』が有るのでしょうか？」と言った。
釈迦牟尼仏は、「三種類、有る。
上、中、下の三種類である。
上は、縦三肘、横五肘である。
下は、縦二肘半、横四肘半である。
上と下の間の物を『中』と名づける」と言った。

（一肘は約五十センチメートル。）

優婆離は、釈迦牟尼仏に、「釈迦牟尼仏様、『嗢咀羅僧伽衣』、『七条衣』の条数は、いくつ有るのでしょうか？」と言った。

釈迦牟尼仏は、「七条だけである。二枚の長い布と一枚の短い布による物である」と言った。

優婆離は、釈迦牟尼仏に、「釈迦牟尼仏様、何種類の『嗢咀羅僧伽衣』、『七条衣』が有るのでしょうか？」と言った。

釈迦牟尼仏は、「三種類、有る。

上、中、下の三種類である。

上は、縦三肘、横五肘である。

下は、縦二肘半、横四肘半である。

上と下の間の物を『中』と名づける」と言った。

優婆離は、釈迦牟尼仏に、「釈迦牟尼仏様、『安呾婆娑衣』、『五条衣』の条数は、いくつ有るのでしょうか？」と言った。

釈迦牟尼仏は、「五条である。一枚の長い布と一枚の短い布による物である」と言った。

優婆離は、釈迦牟尼仏に、「釈迦牟尼仏様、何種類の『安呾婆娑衣』、『五条衣』が有るのでしょうか？」と言った。

釈迦牟尼仏は、「三種類、有る。

上、中、下の三種類である。

上は、縦三肘、横五肘である。

中と下も上と同じである」と言った。

釈迦牟尼仏は、「『安呾婆娑衣』、『五条衣』にはまた二種類、有る。

(一)縦二肘、横五肘

(二)縦二肘、横四肘

『僧伽胝衣』、『大衣』は、『重複衣』と訳す。

『嗢咀羅僧伽衣』、『七条衣』は、『上衣』と訳す。

『安咀婆娑衣』、『五条衣』は、『下衣』と訳す。

『安咀婆娑衣』、『五条衣』はまた、『内衣』とも言う。

『僧伽胝衣』は、『大衣』である。

『僧伽胝衣』、『大衣』は、『入王宮衣』、『説法衣』とも言う。

『嗢咀羅僧伽衣』、『鬱多羅僧衣』は、『七条衣』である。

『嗢咀羅僧伽衣』、『鬱多羅僧衣』、『七条衣』は、『中衣』、『入衆衣』とも言う。

『安咀婆娑衣』、『安陀会』は、『五条衣』である。

『安咀婆娑衣』、『安陀会』、『五条衣』は、『小衣』、『行道衣』、『作務衣』とも言う」と言った。

「五条衣と七条衣と、九条衣などの大衣」という「三衣」を必ず護って保持するべきである。

また、「僧伽胝衣」、「大衣」には「六十条の袈裟」、「六十条衣」が有る。必ず受けて保持するべきである。

人の寿命が八万歳の時代から、人の寿命が百歳の時代に至るまで、寿命の増減に従って、身の量の長短が有る。

「人の寿命が八万歳の時代と、人の寿命が百歳の時代は、身長が異なる」という説が有るし、「人の寿命が八万歳の時代と、人の寿命が百歳の時代は、身長が同じである」という説が有るが、「人の寿命が八万歳の時代と、人の寿命が百歳の時代は、身長が同じである」という説を正しい伝承とする。

仏と人は、身の量が遥かに異なる。

人の身は測る事ができる。

仏の身は最終的には測り知る事ができない。

このため、迦葉仏の法衣を、釈迦牟尼仏は着たが、長くないし、広くない。釈迦牟尼仏の法衣を、弥勒如来、弥勒菩薩が着ても、短くないし、狭くないであろう。

仏の身は長短ではない道理を、明らかに見、決断し、明らかに悟り、注意して調べるべきなのである。

大梵天王は、高い色界にいるが、仏の頂上を見る事ができない。

目犍連（モッガラーナ）は、遥かな光明幡世界へ至ったが、仏の音声を究める事ができなかった。

仏の音声は、遠い者も近い者も同じく見聞きできるが、実に、不可思議な物なのである。

如来、仏の一切の功徳は皆、仏の音声のような物なのである。

仏の功徳を念じるべきである。

法衣を裁縫するには、割截衣、揲葉衣、摂葉衣、縵衣が有るが、共に、作法なのである。

得た素材に従って、受けて保持するべきである。

釈迦牟尼仏は、「過去、現在、未来の仏の法衣は、必ず、返し縫いである」と言っている。

法衣の素材を得る方法は、清浄な方法を「善である」とする。

「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」を「最上に清浄である」とする。

過去、現在、未来の諸仏は共に、「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」を「清浄である」とする。

その他、布施をする信心深い在家信者が布施した衣もまた清浄なのである。

また、「浄財」、「寄付された金銭」で市場で買った衣もまた清浄なのである。

法衣を作るには期限が有るが、末法の世なのであるし、日本は遠方の辺境の国なので、信心が催(もよお)したら、裁縫でき得たら、受けて保持するのに越した事は無いであろう。

在家信者の人や天人であっても、法衣を受けて保持する事は、大乗の最も究極の秘訣なのである。

今は、大梵天王と帝釈天は共に、法衣を受けて保持している。

欲界と色界の優れた行跡なのである。

人の間では、数え切れないほどの、在家信者の人々が、法衣を受けて保持している。

在家者の修行者は皆、共に、法衣を受けて保持している。

中国では、梁の武帝と、隋の煬帝は共に、法衣を受けて保持していた。

唐の粛宗と、代宗は共に、法衣を着て、僧の学に参入して、「菩薩戒」を受けて保持した。

その他、在家者の修行者、女性など、法衣を受けて、仏の戒を受けた仲間は、古今の優れた行跡なのである。

日本では、聖徳太子が、法衣を受けて保持し、法華経や勝鬘経などを読んだ時、天から雨のように宝華が降る、吉兆である不思議な現象が起きた。

この時から今まで、仏法は我が国、日本に広まっている。

聖徳太子は、摂政であったが、人や天人の導師なのである。

聖徳太子は、仏の使いであり、生者の父や母なのである。

今、私の国、日本は、法衣の「体、色、量」、「素材、色、量」を共に誤っているが、「袈裟」、「法衣」という名前を見聞きできるのは、聖徳太子の力による物なのである。

聖徳太子が、当時、邪法を打ち砕き、正しい仏法を打ち立てなければ、今日の日本は悲しむべき状況であったであろう。

後には、聖武天皇もまた法衣を受けて保持し、「菩薩戒」を受けた。

そのため、たとえ帝位であっても、臣下であっても、急いで法衣を受け保持し、「菩薩戒」を受けるべきである。

人の身の喜びは、これよりも優れている物は無いのである。

ある人は、「在家信者が受けて保持する法衣を、『単縫』、『俗服』と名づける。(在家信者が受けて保持する法衣は、)返し縫いで未だ縫っていないのである」と言った。

また、ある人は、「在家信者が道場に趣(おもむ)く時は、三種類の法衣と、歯磨きのために噛む木の枝と、洗浄するための水、食器、坐具を備えて、出家者のように『浄行』、『清浄な行い』を修行するべきである」と言った。

古代の高徳の僧の伝承は、このようなのである。

ただし、仏祖が単一に伝えて来ている法では、国王、大臣、在家者の修行者、国民に授ける法衣は皆、返し縫いなのである。
三十三祖の大鑑禅師は、寺の雑務を行う在俗者である「行者（あんじゃ）」の時に、仏の法衣を正しく伝えられたが、優れた行跡なのである。

法衣は、仏の弟子の印（しるし）なのである。

もし法衣を受けて保持し終わっているならば、毎日、法衣を頭の上に捧げ持つべきである。
法衣を頭より上の高い場所に安置して、合掌して、次のような詩を唱える。「大いなるかな、『解脱服』よ、『無相衣』よ、『福田衣』よ(、『法衣』よ)。如来、仏の教え(として法衣)を着れば、諸々の生者を広く仏土へ渡す」
こうしてから法衣を着るべきである。
法衣を「師である」と思うべきであるし、「仏塔である」と思うべきである。
法衣を洗って、頭の上に捧げ持つ時も、先の詩を唱えるのである。

釈迦牟尼仏は、「頭の髭（ひげ）と髪を剃（そ）って法衣を着れば、諸仏が加護する。一人で出家すれば、天人が捧げものを捧げる」と言った。

明らかに知る事ができる。

頭の髭と髪を剃って法衣を着てから、一切の諸仏が加護しているのである。諸仏の加護によって、無上普遍正覚の功徳が円満するのである。この人に天人達も人達も共に捧げものを捧げるのである。

次のように、釈迦牟尼仏は、智光という出家者に言った。

法衣で十の勝利を得られるのである。

(一)身を覆う事ができて羞恥を遠く離れる事ができるし、反省を十分に備えて善い法を修行できる。

(二)寒さや熱さと、蚊や、悪獣や、毒虫を遠く離れる事ができて安穏として仏道を修行できる。

(三)出家者の相貌を示して現す事ができて、見る者を喜ばせて邪悪な心から遠く離れさせる事ができる。

(四)「袈裟」、「法衣」は人や天人の「宝幢」、「法幢」、「旗」である「仏法」の相で、尊重して敬礼すれば、「大梵天」に生まれる事ができ得る。

(五)「袈裟」、「法衣」を着た時に、「『仏法』は『宝幢』、『法幢』、『旗』である」という想いを生じれば、多くの罪を滅ぼす事ができるし、諸々の幸福をもたらす功徳を生じる事ができる。

(六)本から「袈裟」、「法衣」の制作で、法衣を染めて汚く濁った色にさせて、「色声香味触」への「五欲」の想いから離れさせる事ができて、貪欲な愛着を生じさせない事ができる。

(七)「袈裟」、「法衣」は仏の清浄な衣である。永遠に煩悩を断つ事ができるし、良い「福田」、「幸福を生じる源である田畑」に成るからである。

(八)身に「袈裟」、「法衣」を着れば、罪の業を消して除去できるし、十善業道を念々「増上」、「成長」させる事ができる。

(九)「袈裟」、「法衣」は良い「福田」、「幸福を生じる源である田畑」のような物なのである。菩薩の道を善(よ)く「増上」、「成長」させる事ができるからである。

(十)「袈裟」、「法衣」は甲冑のような物なのである。煩悩という毒矢で害する事ができないからである。

智光よ、知るべきである。

このような「因縁」、「理由」によって、過去、現在、未来の諸仏や、「縁覚」、「独覚」や、声聞といった清浄な出家者は、身に「袈裟」、「法衣」を着て、「三聖」、「仏や菩薩、独覚、声聞」は同じく、解脱という宝の床で坐禅して、智慧という剣を取って、煩悩という「魔」、「仏敵」を破って、共に、「一味の」、「実体は唯一である」諸々の涅槃の世界に入る。

釈迦牟尼仏は、その時、次のような詩を言った。

出家者の智光よ、善(よ)く聴くべきである。
大いなる「福田衣」、「法衣」によって十の勝利が有る。
世間の衣服は欲による汚染を増やしてしまう。
如来の法服は、世間の衣服のように汚染を増やさない。
法服は世の羞恥を遮(さえぎ)る事ができる。
反省を円満にして「福田」、「幸福を生じる源である田畑」を生じる。
寒さや熱さと、毒虫を遠く離れる事ができる。

道心を堅固にして究極を得る事ができる。
出家者を示して現して、貪欲を離れる事ができる。
「五見」、「五つの邪悪な見解」を断って除去して、正しく修行できる。
「袈裟」、「法衣」の「宝幢」、「法幢」、「旗（はた）」である「仏法」の相を仰いで礼拝して、恭（うやうや）しく敬えば、大梵天王の幸福を生じる事ができる。
仏の弟子が法衣を着て「法衣は仏塔である」という想いを生じれば、幸福を生じる事ができるし、罪を滅ぼす事ができるし、人や天人に感化を与える事ができる。
心を慎んで容貌に敬意が現れれば、真の出家者である。
諸々の、俗世という「塵（ちり）」、「汚れ」に汚染されない。
諸仏は、(法衣を)たたえて、良い「福田」、「幸福を生じる源である田畑」と見なす。
利益と安楽を生者にもたらすには、法衣が最も優れていると見なす。
「袈裟」、「法衣」の「神力」、「不思議な力」は不思議なのである。
「菩提」、「悟り」のための修行の種を植えさせる事ができる。
春の苗のように、仏道の芽が「増上」、「成長」する。
「菩提」、「悟り」という妙なる果実は、秋の果実に似ている。
堅固さは真に金剛の甲冑のようで、煩悩という毒矢で害する事はできない。
私は、今、略して、法衣による十の勝利をたたえた。法衣について長い時間、広く説いても無限だからである。
もし、ある竜が身に「一縷（いちる）」、「一本の糸」、「わずか」でも法衣を着れば、金翅鳥の王に食べられる事から脱する事ができ得る。
もし人が海を渡る時に、法衣を保持すれば、「龍魚」や諸々の霊による災難を怖れない事ができる。

雷電が雷鳴して天が怒っても、「袈裟」、「法衣」を着ている者は恐れない事ができる。

もし在家者が(法衣を)親しく捧げ持てば、一切の悪霊は近づく事ができない。

もし発心して出家を求めて、世間を嫌って離れて仏道を修行すれば、十方の「魔」、「仏敵」の宮殿は皆、振動するし、この人は速(すみ)やかに法の王である仏の身を証する。

法衣による十の勝利は、広く仏道の諸々の功徳を十分に備えている。

経典に、行数が長い散文や、韻文で記されている、法衣のあらゆる功徳を明らかにして学に参入するべきである。

経典を開いて調べて見て、早々に置いておく事なかれ。
一句、一句に向かい、長い間、参入するべきである。

法衣による十の勝利は、法衣だけの功徳なのであり、修行者の激しい鋭利な常時の修行の力による物ではないのである。

釈迦牟尼仏は、「『袈裟』、『法衣』の『神力』、『不思議な力』は不思議なのである」と言った。

凡人や賢者や聖者は測り知る事ができないのである。

「速やかに法の王である仏の身を証する」時は、必ず、法衣を着ているのである。

法衣を着ていない者が「法の王である仏の身を証した」事は、昔から、未だかつて無いのである。

最も第一に清浄な法衣の素材は、「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」なのである。

「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」の功徳は、遍く、大乗や小乗の経典の中で明らかなのである。

広く学んで質問するべきである。

「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」以外の法衣の素材もまた、兼ね合わせて、明らめるべきである。

仏から仏へ、祖師から祖師へ、必ず、明らめて、正しく伝えている物なのであり、他のものは及ぶ事ができないのである。

次のように、中阿含経には記されている。

また、次に、皆さん、ある一人は、身では清浄な行いであるが、口と意では不浄な行いであり、もし知者が見て、怒りを生じたら、怒りを除去するべきである。

皆さん、ある一人は、身では不浄な行いであるが、口と意では清浄な行いであり、もし知者が見て、怒りを生じたら、怒りを除去するべきである。

どのように怒りを除去するべきであるのか？

皆さん、「阿練若の」、「阿蘭若の」、「人里離れた静かな場所にいる」出家者が「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」を拾うように怒りを除去するべきである。

「人里離れた静かな場所にいる」出家者は、「糞掃」、「ぼろきれ」の中の捨てられた破れた衣を見つける。

大便で汚れていたり、小便や涙や鼻水や唾で汚れていたり、他の不浄な物で汚染されていたりする。

「人里離れた静かな場所にいる」出家者は、汚染されている部分を見終わると、左手で破れた衣を取って、右手で伸ばして張って、大便や小便や涙や鼻水や唾や他の不浄な物で汚れていない部分で、穴が穿たれていない部分を、裂いて取る。

このように、皆さん、ある一人は、身では不浄な行いであるが、口と意では清浄な行いであれば、身での不浄な行いを思う事なかれ。

口と意での清浄な行いだけを思うべきである。

もし知者が見て、怒りを生じたら、怒りを除去するべきである。

これが、「阿練若の」、「阿蘭若の」、「人里離れた静かな場所にいる」出家者が「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」を拾(ひろ)うように怒りを除去する法なのである。

四種類の「糞掃」、「ぼろきれ」が有るし、十種類の「糞掃」、「ぼろきれ」が有る。

「糞掃」、「ぼろきれ」を拾(ひろ)う時は、まず、穴が穿(うが)たれていない部分を選び取る。

次に、大便や小便が長い間、染みて、染みが深くて洗浄できない部分は取るべきではない。

洗浄できる部分は取るべきなのである。

十種類の「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」

(一)牛嚼衣
(二)鼠噛衣
(三)火焼衣
(四)月水衣
(五)産婦衣
(六)神廟衣
(七)塚間衣

(八)求願衣

(九)王職衣

(十)往還衣

これらの十種類の「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」は、人が捨てた物であるし、人の間では用いない物である。

これらを拾(ひろ)って法衣の清浄な素材とするのである。

「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」は、過去、現在、未来の諸仏がたたえる物なのであるし、用いて来ている物なのである。

そのため、「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」は、人や天人や竜などが重んじて擁護する物なのである。

「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」を拾(ひろ)って法衣を作るべきである。

「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」は、最も第一に清浄な法衣の素材なのであるし、最も第一に清浄なのである。

今、日本には、このような「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」は無い。

たとえ求めようとしても出会えない。

日本が辺境の僻地(へきち)の小国である事を悲しむべきである。

布施をする在家信者が寄付した「浄財」、「寄付された金銭」だけを用いるべきである。

人や天人が寄付した「浄財」、「寄付された金銭」を用いるべきである。

または、清浄な生活によって得た物で市場で売買して(法衣の素材を買って)法衣の素材で法衣を作るべきである。

「糞掃」、「ぼろきれ」や、清浄な生活で得た法衣の素材は、絹でもないし、絹以外の物でもないし、金銀や宝石ではないし、模様が織られた絹の布や、錦(にしき)と刺繍(ししゅう)を施した布ではない。

「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」なのである。

「糞掃」、「ぼろきれ」は、衣が破れたための物ではないし、美しい服を作るための物ではない。

「糞掃」、「ぼろきれ」は、仏法のためだけの物なのである。

「糞掃」、「ぼろきれ」を用いて着る事は、過去、現在、未来の諸仏の「皮肉骨髄」、「理解」を正しく伝えている事なのであるし、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」を正しく伝えている事なのである。

法衣の功徳は、人や天人に質問するべきではない。

仏祖によって、法衣の功徳の学に参入するべきである。

正法眼蔵　袈裟功徳

私、道元が、宋の時代の中国にいた昔、床で坐禅して鍛錬していた時、肩を並べている隣人の僧を見ると、「開静の」、「坐禅を止めて床を離れる」時ごとに、法衣を捧げ持って頭より上の高い場所に安置して、合掌して 恭(うやうや)しく敬い、ある詩を暗唱していた。

その詩とは、「大いなるかな、『解脱服』よ、『無相衣』よ、『福田衣』よ(、『法衣』よ)。如来、仏の教え(として法衣)を着れば、諸々の生者を広く仏土へ渡す」であった。

私、道元は、その時、「未だかつて見た事が無い物を見る事ができた」という思いを生じて、喜びが身に余り、感激の涙が密(ひそ)かに落ちて法衣の襟(えり)を浸(ひた)した。

その主旨は、昔、阿含経を開いて調べて見た時、「法衣を頭の上に捧げ持つ」という文を見たが、作法を未だ明らめていなかったのである。

私、道元は、目の当たりにして見て喜び、次のように、密(ひそ)かに思った。

憐れむべきである。

郷土にいた時は、教えてくれる師匠もいなかったし、勧(すす)めてくれる「善友」、「善知識を持つ人々」もいなかった。

どれほど、いたずらに無駄に、過ぎる時間を惜しまなかったのか？

悲しくないか？

見聞きできた前世の善行を喜ぶべきである。

もし、いたずらに無駄に、郷土の中にいたら、仏の法衣を伝承されて着て用いている僧と肩を並べる事はでき得なかったであろう！

悲しみと喜びは尋常ではない。

感激の涙が千、万に無数に流れて行く。

私、道元は、その時、密（ひそ）かに願いを起こした。

どうにかして、私は「不肖である」、「師に似ず愚かである」が、仏法の正統な後継者と成り、正しい仏法を正しく伝えて、郷土の生者を憐れんで、仏祖が正しく伝えている法衣と仏法を見聞きさせよう。

この時の願いは虚偽には成らず、法衣を受けて保持している在家信者や出家者の修行者は多いので、喜んでいる。

法衣を受けて保持している仲間は、必ず、昼夜に、頭の上に捧げ持つべきである。

特に優れている、最も優れている功徳に成る。

真理の一つの詩、一つの句を見聞きする事は、経が樹や石に記された因縁も有るし、遍（あまね）く見聞きできて「九道」、「九有情居」に限られないのである。

法衣を正しく伝えられた功徳は、十方で出会い難いし、わずかに一昼夜であっても、最も優れている、最上の功徳なのである。

千二百二十三年か千二百二十四年に、高麗の僧が二人、中国の慶元府に来た。

一人は智玄と言い、もう一人は景雲と言う。

二人は、しきりに仏の経の意味を話していて、更に、文学者であった。

けれども、法衣は無いし、器も無いし、俗人のようであった。

憐れむべきである。

出家者の姿形であっても出家者の作法が無いのである。

辺境の僻地(へきち)の小国のせいであろう。

日本の出家者の姿形の仲間は、外国へ行ったら、智玄達と同様であろう。

釈迦牟尼仏は、十九歳から十二年間、法衣を頭の上に捧げ持って、差し置かなかった。

既に、釈迦牟尼仏の法の遠い子孫なのである。

法衣を頭の上に捧げ持つ事を学ぶべきである。

いたずらに無駄に、名声や利益のために、天を礼拝したり、天人を礼拝したり、王を礼拝したり、役人を礼拝したりしている頭を巡らして、仏の法衣を頭の上に捧げ持って礼拝して「回向したら」、「布施などの功徳を分け与える相手について祈ったら」、喜ぶべきなのである。

時に、千二百四十年、観音導利興聖宝林寺にいて僧達に示した。

伝衣

仏から仏へ正しく伝えている法衣と仏法を、中国に正しく伝えているのは、二十八祖の達磨だけなのである。

二十八祖の達磨は、釈迦牟尼仏から第二十八代目の祖師である。

法衣と仏法は、西のインドの二十八人の祖師達に正統に代々伝えられて、二十八祖から三十三祖まで中国の六人の祖師達は目の当たりにして正しく伝えている。

法衣と仏法は、西のインドから東の地の中国まで全てで三十三人の祖師達に伝えられている。

三十三祖の大鑑禅師は、法衣と仏法を黄梅山で夜中に正しく伝えられて、生前、護って保持して来ている。

法衣は、千二百四十年現在、曹谿山の宝林寺に安置されている。

諸代の皇帝は、あいついで、大鑑禅師の法衣を、皇居に招き入れて、捧げものを捧げた。

神の者は、大鑑禅師の法衣を護って保持している。

唐の中宗と、粛宗と代宗は、しきりに、皇居に招き入れて供養した。

招き入れる時、送り返す時、使者を派遣して、皇帝の言葉を授（さず）けた。

これは、法衣を重んじる作法なのである。

代宗は、ある時、仏の法衣を曹谿山に送り返す時に、言葉を授けて、「今、鎮国大将軍の劉崇景に(法衣を)頭の上に捧げ持たせて送り返させます。私(、代宗)は、これ(、法衣)を国宝とします。あなた(、劉崇景)は、本寺(、曹谿山の宝林寺)に(作法の通りに)安置して、僧達の親しい主旨を受けた者に厳重に守護を与えて、遺失、失墜させる事が無いようにさせなさい」と言った。

数代の皇帝は共に、大鑑禅師の法衣を重要な国宝としている。

実に、無量恒河沙の三千世界を統治するよりも、仏の法衣を国に保持する事は、特別に優れている大いなる宝と成るのである。

仏の法衣は、「和氏の璧」という宝石と同等に扱うべきではない物なのである。

たとえ「和氏の璧」が国の印として伝えられるように成っても、仏として伝えられる不思議な宝には成らない！

唐の時代から今まで、仏の法衣を仰いで敬礼する出家僧と在俗者は、必ず、仏法を信じる大いなる素質の人なのである。

前世の善行の助けによって、この身をもって目の当たりにして仏から仏へ正しく伝えている仏の法衣を仰いで礼拝できる！

信じて受け入れる事ができない人は、自分であっても、仏に成れる種ではない事を、恨むべきである。

俗ですら「人の手荷物を見る事は、人を見る事である」と言う。
仏の法衣を仰いで礼拝する事は、仏を見る事なのである。

百、千、万の無数の仏塔を建てて仏の法衣に捧げるべきである。

天上、海中でも、心が有る者は、仏の法衣を重んじるべきである。

人の間でも、転輪聖王などの真実を知っている人、優れている事を知っている人は、仏の法衣を重んじるべきである。

世で皇帝と成った輩が、自分の国、中国に重要な国宝が有る事を知らない事を憐れむべきである。
中国の皇帝には、道士の道教に惑わされて、仏法を廃する人が多い。
仏法を廃した時、中国の皇帝は、法衣を纏(まと)わずに、頭頂部に「葉巾」をかぶる。
仏法を廃した中国の皇帝が話すのは寿命を延ばす方法、長生きする方法である。
唐の時代にも仏法を廃した中国の皇帝はいたし、宋の時代にも仏法を廃した中国の皇帝はいた。
これらの類(たぐい)の人は、皇帝であっても、国民よりも卑しいのである。

「私の国、中国に仏の法衣が留まっていて現に存在している」と静かに観察するべきである。

「仏の法衣は仏の国土であろうか？」とも思考するべきである。

仏の法衣は、「舎利」、「仏の遺骨」などよりも優れている。

遺骨、骨は、転輪聖王にも有るし、獅子（ライオン）にも有るし、人にも有るし、独覚などにも有る。

けれども、転輪聖王には法衣が無いし、獅子（ライオン）には法衣が無いし、(仏ではない)人には法衣が無い。

諸仏だけに法衣が有る。深く信じて受け入れるべきである。

今の、愚かな人の多くは、「舎利」、「仏の遺骨」は重んじても、仏の法衣を知らないし、「(法衣を)護って保持するべきである」と知っている者は稀（まれ）なのである。

昔から法衣が重要である事を見聞きできる者は稀（まれ）なのである。

仏法の正しい伝承を未だ見聞きできないので、法衣を重んじないのである。

よくよく釈迦牟尼仏の存命時からの年数を思えば、わずかに二千年余りなのである。

国宝、神器も今にまで伝わっているが、二千年余りよりも過ぎている古い物も多い。

仏法と仏の法衣は、時間的に近く、新しい物なのである。

仏法は、田畑や人里を巡り、初祖から五十祖まで五十回も転々としているが、仏法の利益は絶妙なのである。

仏法の功徳は、あらたかなのである。

仏の法衣は、仏法と同様なのである。

仏法は正統な後継者が正しく伝えている物ではない場合も有るが、仏の法衣は正統な後継者が正しく伝えている物だけなのである。

知るべきである。

真理の一つの詩を聞いても「得道する」、「悟る」場合が有るし、真理の詩の一つの句を聞いても「得道する」、「悟る」場合が有る。

真理の一つの詩や、真理の詩の一つの句に、なぜ、このような効能が有るのか？

仏法だからである。

一頂の法衣である「九品衣」、「九条衣などの大衣」は、仏法によって正しく伝えられている。（「袈裟」、「法衣」を一頂と数える場合が有る。）

法衣は、真理の一つの詩よりも劣っていない。

法衣は、仏法の詩の一句のような効能が有る！

このため、二千年余り前から今まで、諸々の、仏法を信じて行う愚鈍な人と「仏法」、「真理」を知って行う利発な人といった、仏に従って学ぶ学徒は皆、法衣を護って保持して身心としている物なのである。

諸仏の正しい仏法に暗い類（たぐい）の人は、法衣を尊重しないのである。

今、帝釈天は在家信者の天人の王であるし、「阿那婆達多龍王（アナヴァタプタ）」、「阿耨達龍王（アナヴァタプタ）」は八大龍王であるが、帝釈天や「阿那婆達多龍王（アナヴァタプタ）」、「阿耨達龍王（アナヴァタプタ）」などは、法衣を護って保持している。

それなのに、頭の髭（ひげ）と髪を剃（そ）った仲間、「仏の弟子」を自称する仲間が、法衣については、「法衣は受けて保持するべき物である」と知らない。
まして、法衣の「体、色、量」、「素材、色、量」を知らない！
まして、法衣を着たり用いたりする法を知らない！
まして、法衣による身のこなしを夢にも未だ見た事が無いのである。

法衣を古くから「除熱悩服」と呼ぶし、「解脱服」と呼ぶ。

法衣の功徳は計り知れないのである。

竜といった鱗を持つ者は、「三熱」という竜や蛇への苦しみを、法衣の功徳によって解脱するのである。

諸仏は仏道を成就する時は、必ず、法衣を用いるのである。

実に、日本という辺境の僻地に生まれ、末法の世に出くわしても、伝承の有るものと、伝承が無いものを比べるならば、伝承が正統であるものを信じて受け入れて護って保持するべきである。

どの家門が、私、道元が正しく伝えているように、釈迦牟尼仏の法衣と仏法を共に正しく伝えているのか？

仏道だけに正しい正統な伝承が有るのである。

法衣と仏法に出会った時、誰が 恭しく敬い捧げものを捧げる事を緩めるのか？

たとえ一日に無量恒河沙の身の命を捨てても法衣と仏法に捧げものを捧げるべきである。

「生から生へ、世から世へ、法衣と仏法に出会えて頂戴できますように」という願いを起こすべきである。

私達、日本人は、釈迦牟尼仏が生まれた国インドと十万里余り隔てていて、インドの「山海」、「陸と海」の外に生まれて、日本という辺境の僻地の暗愚さが有るが、釈迦牟尼仏の正しい仏法を聞き、法衣を一昼夜でも受けて保持し、真理の一つの詩でも、真理の詩の一つの句でも学に参入して究めてい

るが、一人や二人の仏に捧げものを捧げている、幸福をもたらす功徳に成るだけではなく、百千億の無数の仏に捧げものを捧げて見(まみ)えている、幸福をもたらす功徳に成るのである。

たとえ自己であっても、尊ぶべきであるし、愛するべきであるし、重んじるべきである。

祖師が仏法を伝えてくれている大いなる恩に真心で報いて感謝するべきである。

人以外の動物ですらなお恩に報いる。

人は恩を知っている！

もし恩知らずであれば、人以外の動物よりも劣っているし、愚かである。

仏の法衣の功徳を、仏の正しい仏法を伝えている祖師ではない他の人は、夢にも未だ知らないのである。

まして、祖師ではない人は、法衣の「体、色、量」、「素材、色、量」を明らめる事ができない！

諸仏の跡を慕(した)うのであれば、法衣と仏法を慕(した)うべきである。

たとえ百、千、万代の後も、法衣と仏法の正しい伝承を正しく伝える事が、仏法なのである。

証拠は明らかなのである。

俗人ですら「先王の服でなければ着ないし、先王の法でなければ行わない」と言う。

仏道もまた同様なのである。

前の仏の法衣でなければ用いるべきではない。

もし前の仏の法衣でなければ、何を着て仏道を修行するのか？　何を着て諸仏に見（まみ）えるのか？

前の仏の法衣を着ない人は、仏の集まりに入り難いのである。

後漢の、諡号が孝明皇帝である明帝の時代の、五十八年頃から今まで、西のインドから東の地の中国へ来る僧侶は、「踵（くびす）を接するように」、「人々が連続するように」、絶えないし、中国からインドへ赴（おもむ）く僧侶の話が時々聞こえるが、「誰々に出会って仏法を『面授した』、『言い表せないものを顔と顔を合わせて授（さず）かった』」と言う人はいない。

いたずらに無駄に、経典の学者に習って学んでいる、名前と相にとらわれている人ばかりなのである。

インドと中国を行き来する僧の中で、仏法の正統な後継者に成った人の話を聞かない。

このため、「仏の法衣を正しく伝えるべきである」と言い伝える事もできない人であるし、「仏の法衣を正しく伝えている人に出会った」と言う人はいないし、「『伝衣』、『法衣を伝える』人を見聞きした」と語る人はいない。

(仏教という)仏の家の奥義に入っていない、と測り知る事ができる。

これらの類(たぐい)の僧侶は、法衣を衣服としか認識せず、「法衣は仏法が尊重する物である」と知らない。

実に、憐れむべきである。

仏の「法蔵」、「仏の教え」を伝えている正統な後継者に、仏の法衣も伝承するのである。

「法蔵」、「仏の教え」を正しく伝えている祖師が仏の法衣を見聞きしている主旨は、人の中でも、天上でも、遍(あまね)く知られている物なのである。

そのため、仏の法衣の「体、色、量」、「素材、色、量」を正しく伝えて来たり、正しく見聞きして来たり、仏の法衣の大いなる功徳を正しく伝えたり、仏の法衣の身心と骨髄を正しく伝えたりする事は、正しく伝えられている(仏教という仏の家の)家業だけに存在するのである。

諸々の「阿笈摩教」、「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の家風では、知る事ができない物なのである。

各々が「今案」、「今、新しく考案した物」として自立する事は、正しい伝承ではないし、正統な後継者ではない。

大いなる師である釈迦牟尼如来、釈迦牟尼仏は、「正法眼蔵」、「正しくものを見る眼」と無上普遍正覚を初祖の摩訶迦葉に付属して授ける時に、仏の法衣も共に伝えて付属してから、正統に代々伝承して、曹谿山の三十三祖

の大鑑禅師にまで至ったが、三十三祖の大鑑禅師は釈迦牟尼仏から第三十三代目の祖師なのである。

仏の法衣の「体、色、量」、「素材、色、量」を親しく見て伝えて、家門に長い間、伝えて、受けて保持している事は今でも明らかなのである。

「法眼宗、潙仰宗、曹洞宗、雲門宗、臨済宗」という「五宗」の開祖である高徳の僧達が各々、受けて保持している物は正しく伝えられている物なのである。

「法眼宗、潙仰宗、曹洞宗、雲門宗、臨済宗」という「五宗」が五十代余り、または、四十代余り、各々、師弟が乱れず、前の仏の法によって法衣を着て、前の仏の法によって法衣を製作している事は、「仏と仏だけ」が伝えて証に適(かな)って代々を経ている事と、同じく、明らかなのである。

正統に代々伝承している仏の教訓によると、九条衣は、三枚か四枚の長い布と一枚の短い布による物である。

十一条衣は、三枚か四枚の長い布と一枚の短い布による物である。

十三条衣は、三枚か四枚の長い布と一枚の短い布による物である。

十五条衣は、三枚の長い布と一枚の短い布による物である。

十七条衣は、三枚の長い布と一枚の短い布による物である。

十九条衣は、三枚の長い布と一枚の短い布による物である。

二十一条衣は、四枚の長い布と一枚の短い布による物である。

二十三条衣は、四枚の長い布と一枚の短い布による物である。

二十五条衣は、四枚の長い布と一枚の短い布による物である。
二百五十条衣は、四枚の長い布と一枚の短い布による物である。
八万四千条衣は、八枚の長い布と一枚の短い布による物である。

今、略して挙げている。

この他にも、色々な法衣が有るが、共に、大衣である。

在家信者でも法衣を受けて保持するし、出家者でも法衣を受けて保持する。
「法衣を受けて保持する」とは、法衣を着て用いる事なのである。
いたずらに無駄に、法衣をたたんで持っているわけではないのである。

たとえ髪と鬚（ひげ）を剃（そ）っても、法衣を受けて保持せず、法衣を憎み嫌い、法衣を恐れる人は、「天魔」、「魔」、「仏敵」や外道なのである。

大智禅師と呼ばれる百丈の懐海は、「前世で善の種を植えるように善行をした事が無い者は、法衣を恐れるし、法衣を嫌うし、正しい仏法を恐れ嫌う」と言った。

次のように、釈迦牟尼仏は言った。

もし、ある生者が、私の仏法の中に入ったが、重罪を犯してしまったり、邪悪な見解に堕ちてしまったりしても、一念でも、敬う心で大衣の法衣を尊重したら、諸仏と私(、釈迦牟尼仏)は、必ず、三乗において「授記」、「成仏の予言」を授ける。

この人は、仏に成る事ができ得る。

もし天人、竜、人、鬼が能く「袈裟」、「法衣」の一部の功徳を恭しく敬ったら、三乗に不退転に成る事ができ得る。

鬼神、諸々の生者が、能く四寸でも「袈裟」、「法衣」を得たら、飲食物に満ち足りる事ができる。

(一寸は約三センチメートル。)

生者が、共に背を向け合って、邪悪な見解に堕ちようとしても、「袈裟」、「法衣」の力に念じれば、「袈裟」、「法衣」の力によって、すぐに、(慈)悲の心を生じて、清浄に成る事ができ得る。

もし人が「兵の陣地」、「戦争の中」にいても、「袈裟」、「法衣」をわずかでも持って恭しく敬って尊重すれば、解放されて脱け出す事ができ得る。

そのため、知る事ができる。

法衣の功徳は無上に不可思議なのである。

法衣を信じて受け入れて護って保持すると、必ず、「授記」、「成仏の予言」を得られるし、不退転に成る事ができ得る。
釈迦牟尼仏だけではなく、一切の諸仏もまた、このように説いているのである。

知るべきである。
諸仏の「体相」、「有様（ありよう）」とは法衣なのである。

このため、釈迦牟尼仏は、「地獄などの『悪道』に堕ちる者は法衣の大衣を嫌い憎悪する」と言った。
そのため、法衣を見聞きすると、嫌い憎悪する思いが起こるならば、「自身は地獄などの『悪道』に堕ちる」と憐れみ悲しむ心を生じるべきなのであるし、恥じ入って懺悔（ざんげ）するべきなのである。

釈迦牟尼仏が初めて王宮を出て(出家して)山に入ろうとした時、樹神は、一枚の僧衣の大衣をかかげて、釈迦牟尼仏に「この衣を頭の上に捧げ持てば、諸々の『魔』、『仏敵』によって乱される事を免れる」と言った。
釈迦牟尼仏は、この時、法衣を受けて、頭の上に捧げ持って十二年間、修行して経て、しばらく差し置く事が無かった、と阿含経などの説では言われている。

法衣は、吉祥服なのである、と言われている。
法衣を着る者は、必ず、優れた境地に到達できる。

世界に法衣の大衣は常に目の前に現れているのである！

法衣が、一時、目の前に現れるとは、長い時間の中の事なのである。
長い時間の中の事とは、法衣が、一時、来る事なのである。

法衣を得る事は、仏の旗印を得る事なのである。
このため、諸仏、如来は、必ず、法衣を受けて保持している！
法衣を受けて保持している仲間は、必ず、仏に成るのである！

「袈裟」、「法衣」を纏う法

「偏袒右肩」、「右肩の片側だけ脱ぐ事」が、日常的な方法、作法なのである。
「通両肩搭」、「法衣を両肩に纏う」という作法も有る。

法衣を纏う時は、両端共、左の肘と肩に重ねて掛けて、法衣の右端を前面として左端と重ね、法衣の左端を背面として右端と重ねるが、釈迦牟尼仏は、このような身のこなしをされた事が一時、有る。

この釈迦牟尼仏の話は、諸々の声聞の段階の人達が見聞きして伝える事ができる話ではないし、諸々の「阿笈摩教」、「小乗」の経典で説き漏らした話ではない。

仏道では、法衣を纏う身のこなしは、目の前に現れている、正しい仏法を伝えている祖師が、必ず、受けて保持している物なのである。

法衣を纏う身のこなしを受けて保持したいのであれば、必ず、祖師から受けて保持する必要が有る。

仏祖が正しく伝えている法衣は、仏から仏へ正しく伝えていて妄りではない。

前の仏と後の仏の法衣なのである。

古代の仏と新しい仏の法衣なのである。

法衣は、仏道を化して導くし、仏を化して導く。

法衣は、過去、現在、未来を化して導いて、

法衣は、過去から現在へ正しく伝えられるし、

法衣は、現在から未来へ正しく伝えられるし、

法衣は、現在から過去へ正しく伝えられるし、

法衣は、過去から過去へ正しく伝えられるし、
法衣は、現在から現在へ正しく伝えられるし、
法衣は、未来から未来へ正しく伝えられるし、
法衣は、未来から現在へ正しく伝えられるし、
法衣は、未来から過去へ正しく伝えられて、仏と仏だけが、法衣を、正しく伝えているのである。

このため、「祖師西来から」、「二十八祖の達磨が西のインドから中国へ来てから」今までの、唐から宋までの数百年間、経典の講義の達人のうち、自分の業を見通した者は多いし、他の宗派、「律宗」などの者は、仏法に入る時、従来の古巣の破れた衣である法衣を捨てて、仏道が正しく伝えている法衣を正しく受けるのである。

このような話は、「景徳伝燈録」、「天聖広燈録」、「建中靖国続燈録」、「嘉泰普燈録」などに並んでいる。

「教律」、「他の宗派」の「局量」、「とらわれた限られた思量」の「小見」、「矮小な見解」を解脱して、仏祖が正しく伝えている大いなる仏道を尊ぶ者は皆、仏祖と成っている。(仏教の宗派を「禅、教、律」の三つに分類する見方をする人がいる。)

今の人も、昔の祖師を学ぶべきである。

法衣を受けて保持するのであれば、正しく伝えられている法衣を正しく伝えられるべきであるし、信じて受け入れるべきである。

偽作の法衣を受けて保持するべきではない。

正しく伝えられている法衣とは、二十八祖の達磨と三十三祖の大鑑禅師から正しく伝えられている法衣であり、如来、釈迦牟尼仏から正統に代々伝承されて、一代も欠けていない。

このため、仏道修行とは法衣を受ける事であるし、仏道修行は仏の法衣を親しく手に入れる事による物なのである。

仏道は仏道に正しく伝える。

仏道は、暇(ひま)な人が伝えてくれる可能性に一任しないのである。

俗のことわざでは、「千聞は一見にしかず(。千回、聞く事は、一回、見る事に及ばない)。千見は一経にしかず(。千回、見る事は、一つの経に及ばない)」と言う。

この、ことわざで顧(かえり)みれば、たとえ千回、万回の無数回の見聞きが有っても、一回、法衣を得るには及ばない。仏の法衣を正しく伝えられる事には及ばないのである。

正しい伝承の存在を疑うのであれば、正しい伝承を夢にも見た事が無い人は、ますます疑う。

仏の経を伝聞するより、仏の法衣を正しく伝えられる事は親しい。

千の経、万の法衣の獲得が有っても、一つの証には及ばない。

仏祖は証に適っているのである。

「教律」、「他の宗派」の凡人に習うべきではない。（仏教の宗派を「禅、教、律」の三つに分類する見方をする人がいる。）

祖師の門の法衣の功徳は、正しい伝承が伝承している。

法衣の「本様」、「基本の様式」が、目の当たりにして伝えられている。

法衣を受けて保持し、仏法を嗣いで、千二百四十年現在まで断絶していない。

法衣を正しく受けている人は皆、証に適っている、仏法を伝えている、祖師なのである。

祖師は、「十聖三賢」よりも優れている。

祖師に見えて恭しく敬い、法衣を礼拝して頭の上に捧げ持つべきである。

一度でも、仏の法衣が正しく伝えられている道理を身心で信じて受け入れる事は、仏に出会える前兆なのであるし、仏道を学び修行する道なのである。

「この法を受ける事に耐える事ができない」のは、悲しい。

一度でも法衣で身体を覆う事は、悟りを必ず成就する護身の護符に成る、と深く受け入れるべきである。

真理の一つの詩、真理の詩の一句を信心に染めれば、長い時間の光明と成って欠かす事が無い、と言われている。

一つの法を身心に染めれば、同様に、長い時間の光明と成って欠かす事が無い。

心の思いも、留める事ができないし、自分と、自分の所有物と無関係であるが、功徳は、長い時間の光明と成って欠かす事が無いのである。

身体も、留める事ができないが、功徳は、長い時間の光明と成って欠かす事が無いのである。

法衣は、来る場所も無いし、
去る場所も無いし、
自分と、自分の所有物ではないし、
他者と、他者の所有物ではないが、
所持している場所に現に住んで存在するし、
受けて保持している人に作用するし、
得られる功徳もまた、長い時間の光明と成って欠かす事が無いのである。

法衣を作る行為は、凡人や聖者などの行為ではないのである。

その主旨を、「十聖三賢」は究め尽くす事ができない。

前世で仏道の種を植えるように善行した事が無い者は、一生、二生、無数の生を経歴しても、法衣を見る事ができないし、法衣について聞く事ができないし、法衣について知る事ができない。

まして、法衣を受けて保持する事ができない！

一度でも法衣を身体で触れる功徳を、得る者もいるし、得られない者もいる。

既に得た者は喜ぶべきであるし、未だ得ていない者は願うべきであるし、得る事ができない者は悲しむべきである。

大千世界の内外で、仏祖の門下だけに仏の法衣が伝えられている事を、人も天人も共に見聞きして普遍に知っている。

仏の法衣の様子を明らめている事も、祖師の門だけなのである。

他の門では法衣について良く知らない。

法衣については良く知らない者が、自己を恨まなければ、愚かな人なのである。

たとえ八万四千の三昧と陀羅尼を知っていても、仏祖の法衣と仏法を正しく伝えてもらえず、法衣の正しい伝承を明らめていない人は、諸仏の正統な後継者ではない。

他の世界の生者は「中国で正しく伝えられているように、仏の法衣を正しく伝えてもらえますように」と、どれほど願うであろうか?

法衣と仏法を、自分の国に正しく伝えてもらえない事を、恥じる思いが有るであろうし、悲しむ心は深いであろう。

実に、如来、釈迦牟尼仏の法衣の法を正しく伝えている仏法に出会う事は、前世で植えた知の大いなる功徳の種による物なのである。

今の、末法の世、悪い時代では、自分が正しく伝えてもらえない事を恥じず、他者が正しく伝えてもらえる事を嫉妬(しっと)する「魔の党派者」、「仏敵の党派者」が多い。

自分が所有している物や、住んでいる場所は、(前世の業による物であるため、)真実に自分の物ではないのである。

正しい伝承だけを正しく伝えてもらう事は、仏道を学び修行する「直道」、「近道」なのである。

知るべきである。

法衣は仏の身なのであるし、仏の心なのである。

法衣を、「解脱服」と呼ぶし、

「福田衣」(、「幸福を生じる源である田畑のような衣」)と呼ぶし、

「忍辱衣」と呼ぶし、
「無相衣」（、「執着を超越する衣」）と呼ぶし、
「慈悲衣」と呼ぶし、
「如来衣」と呼ぶし、
「阿耨多羅三藐三菩提衣」（、「無上普遍正覚の衣」）と呼ぶ。
法衣を、正に、このように受けて保持するべきである。

宋の時代の中国の「律学の学者」を名乗る輩は、声聞という酒に酔って狂って、自分の家門に、知らない家の物を伝えて来る事を恥じないし、恨まないし、覚知できない。

西のインドから伝来している法衣が久しく漢の時代から唐の時代まで中国に伝わっていたのに、改変して、小量の法衣に従わせているが、「小見」、「矮小な見解」による物なのである。
「小見」、「矮小な見解」を恥ずべきである。
あなたは小量の法衣を用いるが、仏の身のこなしの多くが欠けているであろう。
仏の作法を学んで伝えてもらう事が不完全であるので、この様なのである。
如来、釈迦牟尼仏の身心は、祖師の門にだけ正しく伝えられていて、律学の学者の家業に流れていない事は明らかなのである。
もし万が一にも仏の作法を知っていれば、仏の法衣の法を破るはずが無い。
文書すらなお明らめていないし、主旨を未だ聞く事ができていないのである。

また、法衣の素材を粗い布だけに定めているが、深く仏法に背いている。

特に仏の法衣の法を破っている。

仏の弟子は着るべきではない。

なぜなら、「法衣の素材は、絹以外の布である」という誤った見解を挙げて、法衣の法を破っている。

「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の声聞の見解が曲がっている事を憐れむべきである。

「法衣の素材は、絹以外の布である」という誤った見解が破れた後に、仏の法衣が形成されて現されるのである。

絹の布を法衣に用いたのは、一人や二人の仏である、と言うわけではない。

諸仏の大いなる仏法として、「糞掃」、「ぼろきれ」を無上に清浄な法衣の素材としているのである。

暫く十種類の「糞掃」、「ぼろきれ」を連ねる中に、絹も有るし、絹以外も有るし、白色の絹以外も有る。

絹の「ぼろきれ」を取るべきではないのか？　もし、そうであるならば、仏道に違反している。

絹を嫌うのであれば、絹以外の物も嫌うべきである。

絹の布を嫌うべき理由が何か有るのか？

「絹の糸を取る時、蚕という生物を殺してしまう」と嫌うが、大いに笑うべきなのである。

絹以外は生物と「縁」、「繋がり」が無いのか？

情の有る者と、情の無い者の情と、凡人の情を未だ解脱できない人が、仏の法衣を知る事ができるわけが無い！

また、「『化糸』、『霊的に生じさせた糸』を法衣の素材にするべきである」という誤った説を出して仏道を乱す人がいる。笑うべきである。どの素材も(神による)「化糸」、「霊的に生じさせた糸」である(と言える)！

あなたには、「化(生)」、「霊的に生じる事」を聞く耳が有ると信じる事ができても、「化(生)」を(正しく)見る目が有るかを疑う。目に「聞く耳」が無く、耳に「見る目」が無いようなものである。「聞く耳」と「見る目」は、どこに存在するのか？

知るべきである。

「糞掃」、「ぼろきれ」を拾う中で、絹に似た物も有るし、絹以外の物に似ている絹も有る。

「糞掃」、「ぼろきれ」を素材として用いる時には、絹と呼ぶべきではなく、絹以外と呼ぶべきではなく、「糞掃」、「ぼろきれ」と呼ぶべきなのである。

「糞掃」、「ぼろきれ」であるので、絹ではないし、絹以外ではない。

たとえ人や天人が「糞掃」、「ぼろきれ」を生じて成長させても、情の有るものではなく、「糞掃」、「ぼろきれ」なのである。

たとえ松や菊が「糞掃」、「ぼろきれ」と成っても、情の無いものではなく、「糞掃」、「ぼろきれ」なのである。

「糞掃」、「ぼろきれ」が、絹ではないし、絹以外ではないし、真珠や宝石を超越している道理を知る時、「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」は形成されて現されるのであるし、「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」に生まれて出会うのである。

「絹か？　絹以外か？」という誤った見解が未だ無く成っていない人は、「糞掃」、「ぼろきれ」を未だ夢にも見た事が無いのである。

たとえ粗い布を法衣として一生、保持していても、「法衣の素材は、絹以外の布である」という誤った見解を思う人は、仏の法衣を正しく伝えてもらえていないのである。

いくつか種類が有る法衣の中には、絹以外の法衣も有るし、絹の法衣も有るし、皮の法衣も有るが、共に、諸仏が用いる法衣であるし、仏の法衣であるし、仏の功徳なのである。

正しく伝えられている法衣の素材の主旨が有り、未だ断絶していない。

それなのに、凡人の情を未だ解脱できない輩は、仏法を軽んじ、仏の言葉を信じず、凡人の情で、他のものに従って去ろうとするが、「仏法を付属された外道である」と言えるし、正しい仏法を壊す類(たぐい)の者なのである。

誤って「天人の教えによって仏の法衣を改変した」と言う。
それならば、天人の仏を願うべきである。
また、天人の仲間と成った(、とでも言う)のか？

釈迦牟尼仏の弟子は仏法を天人のために説いている。
仏道を天人に質問するべきではない。

憐れむべきである。
仏法を正しく伝えてもらえない人は、この様なのである。
天人達の見解と、仏の弟子の見解は、大小、遥かに異なるが、天人は、この世へ降下して仏法を仏の弟子にたずねる。
なぜなら、仏の見解と、天人の見解は、遥かに異なるからである。

「律宗」の声聞の「小見」、「矮小な見解」を捨てて学ぶ事なかれ。「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」なのである、と知るべきである。

釈迦牟尼仏は、「父殺しと、母殺しは懺悔(ざんげ)できる。仏法への悪口は懺悔(ざんげ)できない」と言った。

「小見」、「矮小な見解」の、狐(キツネ)のように疑う言葉は、仏の本意ではない。

仏法の大いなる仏道は、「小乗」、「矮小な乗り物」、「劣悪な段階」の人が及ぶ事ができない物なのである。

諸仏の大いなる戒を正しく伝えているのは、「法蔵」、「仏の教え」を付属された祖師の仏道の他には無いのである。

昔、黄梅山で夜中に、三十二祖の弘忍は、仏の法衣と仏法を三十三祖の大鑑禅師の頂上に正しく伝えた。

実に、仏法と法衣を伝える、正しい伝統なのである。

三十二祖の弘忍が人を知る事ができた事による物なのである。

四果三賢の輩、十聖などの類(たぐい)の人、他の宗派の経典の学者の類(たぐい)の人であれば、神秀に授けてしまったであろうし、大鑑禅師に正しく伝えなかったであろう。

仏祖が仏祖を選ぶのは、凡人や聖者の道を超越しているので、大鑑禅師は三十三祖と成ったのである。

知るべきである。

仏祖の正統な代々の人や自己を知る道理は、おろそかな心では、測り知る事ができない物なのである。

ある僧が、後に、三十三祖の大鑑禅師に、「黄梅山の三十二祖の弘忍が夜中に仏法と共に伝えた法衣の素材は、絹以外でしょうか？　絹でしょうか？白色の絹以外でしょうか？　究極的に、どういった物でしょうか？」と質問した。

三十三祖の大鑑禅師は、「絹以外ではないし、絹ではないし、白色の絹以外ではない(。『糞掃』、『ぼろきれ』である)」と言った。

三十三祖の大鑑禅師の言葉は、「(法衣の素材は、)絹以外ではないし、絹ではないし、白色の絹以外ではない(。『糞掃』、『ぼろきれ』である)」と知るべきである。

仏の法衣の素材は、絹ではないし、絹以外ではないし、「屈眴布」、「大細布」、「木綿の花心による布」ではないのである。

（「糞掃」、「ぼろきれ」である。）

それなのに、いたずらに無駄に、絹と認めたり、絹以外と認めたり、「屈眴布」、「大細布」、「木綿の花心による布」と認めたりする人は、仏法の悪口を言う類の人なのであり、仏の法衣を知る事ができないのである。

まして、「善来得戒」、「釈迦牟尼仏が『出家者よ、来なさい』と言って戒を得る」という「機縁」、「きっかけ」が有る。

釈迦牟尼仏が「出家者よ、来なさい」と言うと、いつの間にか法衣が体を覆っていたが、得られた法衣の素材が「絹か？　絹以外か？」という話ではない事は、仏道の仏の教訓なのである。

三祖の商那和修の衣は、在家者の時は俗服であり、出家すると法衣と成った。

この道理を静かに思量して鍛錬するべきである。

見聞きしていないかのように置いておくべきではない。

まして、仏から仏へ、祖師から祖師へ、正しく伝えている主旨が有る。

文字を数える類の人は、覚知できないし、測り知る事ができない。

実に、仏道が色々と変化させる事は、凡庸な人の境地ではない。

三昧が有るし、陀羅尼が有る。

砂を数える輩は、「法華経」の「五百弟子受記品」の「(親友である釈迦牟尼仏が)衣の裏に掛けてくれた宝玉」を見る事ができない。

仏祖が正しく伝えている法衣の「体、色、量」、「素材、色、量」を諸仏の法衣の「正本」、「原本」とするべきである。

その例は、西のインドから東の地の中国まで、昔から今まで、多数、有る。

善悪を分別した人は、「超証している」、「善悪などを超越して証している」。

祖師の仏道の他に、法衣を説く人がいても、「枝、葉である」と許す「本祖」、「祖師」はいない。

祖師の仏道以外で、善の種は芽生えない！
まして、祖師の仏道以外で、善の果実は無い！

私達は今、長い年月、出会えなかった仏法を見聞きしただけではなく、仏の法衣を見聞きして習って学び、受けて保持する事ができ得たのであるが、
仏を見たのであるし、
仏の音声を聞いたのであるし、
仏が光明を放ったのであるし、
仏が受用しているものを受用しているのであるし、
仏の心を単一に伝えているのであるし、
仏の髄を得たのである。

法衣を作る素材は、必ず、清浄な物を用いる。

清浄な法衣の素材は、布施をする、清浄な信心の在家信者が捧げた法衣の素材や、

（「浄財」、「寄付された金銭」で）市場で買って得た法衣の素材や、
天人達が捧げてくれた法衣の素材や、
龍神が布施してくれた法衣の素材や、
鬼神が布施してくれた法衣の素材や、
国王や大臣が布施してくれた法衣の素材や、
清浄な皮といった法衣の素材を用いるべきである。

また、十種類の「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」を「清浄である」とする。

十種類の「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」

(一)牛嚼衣
(二)鼠噛衣
(三)火焼衣
(四)月水衣
(五)産婦衣
(六)神廟衣
(七)塚間衣
(八)求願衣
(九)王職衣
(十)往還衣

十種類の「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」を「特に清浄な法衣の素材である」とするのである。

世俗では捨てるが、仏道では用いるのである。
世間の家業と、仏道の家業を測り知る事ができる。

そのため、清浄な法衣の素材を求める時は、十種類の「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」を求めるべきである。

十種類の「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」を得て、清浄を知るべきであるし、
不浄をわきまえて受け入れるべきであるし、
心を知るべきであるし、
身をわきまえて受け入れるべきである。

十種類の「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」を得て、たとえ絹であっても、たとえ絹以外であっても、「清浄か？　不浄か？」を思量するべきなのである。

「『糞掃衣』、『ぼろきれによる衣』を用いるのは、いたずらに無駄に、破れた衣で、やつれるためである」と学ぶのは、愚かさの至りである。

荘厳で綺麗であるために、仏道では「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」を用いて着て来ているのである。

仏道で、やつれた衣服と成るのは、錦(にしき)と刺繍(ししゅう)を施した衣服、模様が織られた絹の衣服、金銀や珍しい宝石の衣服などのうち、不浄な由来の衣服を「やつれた衣服」と言うのである。

この世や他の世界で、仏道で、清浄な綺麗な法衣の素材を用いるには、十種類の「糞掃衣」、「ぼろきれによる衣」を用いるのである。

「清浄か？　不浄か？」という境地を超越しているだけではないし、煩悩の有無の境地ではない。

「色(形)の物であるのか？　心の物であるのか？」を論じる事なかれ。

利益と損失とは無関係なのである。

正しく伝えられている法衣を受けて保持する者は、仏なのである。

仏である時、正しく伝えられている法衣を受けるので、仏として法衣を受けて保持する事は、身を現す、現さない、によらず、心を動かす、動かさない、によらず、正しく伝えられて行くのである。

日本では、僧が法衣を着ない事を悲しむべきである。

(そんな)今、法衣を受けて保持できる事を喜ぶべきである。

在家信者は、仏の戒を受けたのであれば、五条、七条、九条の法衣を着るべきである。

まして、出家者は法衣を着るべきである！

「大梵天王や六欲天の天人から、淫蕩な男女や奴隷に至るまで、仏の戒を受けるべきであるし、法衣を着るべきである」と言われている。

出家者は法衣を着るべきである！

「畜生も、仏の戒を受けるべきであるし、法衣を纏(まと)うべきである」と言われている。

仏の弟子は法衣を着るべきである！

そのため、仏の弟子と成った者は、天上や人の間や、国王や役人や、在家者や出家者や、奴隷や畜生を問わず、仏の戒を受けるべきであるし、法衣を正しく伝えてもらうべきである。

法衣を着る事は、仏の位に正しく入る「直道」、「近道」なのである。

私、道元が、宋の時代の中国にいた昔、床で坐禅して鍛錬していた時、肩を並べている隣人を見ると、毎日、夜明けに、「開静の」、「坐禅を止めて床を離れる」時に、法衣を捧げ持って頭より上の高い場所に安置して、合掌して恭しく敬い、ある詩を暗唱していた。

私、道元は、その時、「未だかつて見た事が無い物を見る事ができた」と思い、喜びが身に余り、感激の涙が密かに落ちて法衣の襟を潤した。

阿含経を開いて調べて見た時、「法衣を頭の上に捧げ持つ」という文を見たが、未だ明らめていなかったのである。

私、道元は、目の当たりにして見る事ができた。

私、道元は、喜び、次のように、思った。

憐れむべきである。

郷土にいた時は、教えてくれる師匠もいなかったし、教えてくれる「善友」、「善知識を持つ人々」にも出会えなかった。

どれほど、いたずらに無駄に、過ぎる時間を惜しまなかったのか？

悲しくないか？

見聞きできた前世の善行を喜ぶべきである。

もし、いたずらに無駄に、日本の諸々の寺で、日本の僧と肩を並べていたら、仏の法衣を着ている僧と肩を並べる事はでき得なかったであろう！

悲しみと喜びは尋常ではない。

感激の涙が千、万に無数に流れて行く。

私、道元は、その時、密かに願いを起こした。

どうにかして、私は「不肖である」、「師に似ず愚かである」が、仏法の正統な後継者と成り、郷土の生者を憐れんで、仏から仏へ正しく伝えている法衣と仏法を見聞きさせよう。

この時の願いは虚偽には成らず、法衣を受けて保持している在家信者や出家者の修行者は多いので、喜んでいる。

法衣を受けて保持している仲間は、必ず、昼夜に、頭の上に捧げ持つべきである。

特に優れている、最も優れている功徳に成る。

真理の一つの詩、一つの句を見聞きする事は、経が樹や石に記された因縁も有る。

法衣を正しく伝えられた功徳は、十方で出会い難いのである。

千二百二十三年か千二百二十四年に、「三韓」の僧が二人、中国の慶元府に来た。

一人は智玄と言い、もう一人は景雲と言う。

二人は、しきりに仏の経の意味を話していて、あまつさえ、文学者であった。

けれども、法衣は無いし、器も無いし、俗人のようであった。

憐れむべきである。

出家者の姿形であっても出家者の作法が無いのである。
辺境の僻地（へきち）の小国のせいであろう。
日本の出家者の姿形の仲間は、外国へ行ったら、智玄と景雲と同様であろう。
釈迦牟尼仏は、十九歳から十二年間、法衣を頭の上に捧げ持って、差し置かなかった。
既に、釈迦牟尼仏の法の遠い子孫なのである。
法衣を頭の上に捧げ持つ事を学ぶべきである。
いたずらに無駄に、名声や利益のために、天を礼拝したり、天人を礼拝したり、王を礼拝したり、役人を礼拝したりしている頭を、仏の法衣を頭の上に捧げ持つ事に「回向したら」、「布施などの功徳を分け与える相手について祈ったら」、喜ぶべきなのである。

正法眼蔵　伝衣

時に、千二百四十年、観音導利興聖宝林寺で記した。

宋の時代の中国に入り、仏法を伝えている沙門である道元

法衣を洗浄する時は、諸々の粉末状の香を水に合わせて用いる。
法衣を乾かした後、たたんで、高い場所に安置して、香と華を捧げる。
坐具を展開して三回礼拝した後、右ひざを地につけて左ひざを立てて合掌して、法衣を捧げ持って、合掌して深く信じながら、次の詩を唱える。
「大いなるかな、『解脱服』よ、『無相衣』よ、『福田衣』よ(、『法衣』よ)。如来、仏の教え(として法衣)を着れば、諸々の生者を広く仏土へ渡す」
詩を三回、唱えた後、立って、法衣を着る。